新選

近松秋江集

新選近松秋江集

新選
近松秋江集

新選近松秋江集目錄

舊痕　一頁
無明　一七頁
伊年の屛風　四九頁
小石川の家　六四頁
久世山情趣　七五頁
老若　八四頁
人の影　九五頁
初しぐれ　一〇六頁
食後　一一三頁
青草　一一九頁
津の國屋　一三四頁
流れ　一五二頁

冷熱　一六二頁
嫌はれた女　一七三頁
朝霧　一九三頁
はげ白粉　二〇一頁
墓城　二〇七頁
村火事　二二〇頁
男清姫　二三一頁
秘密　二五七頁
浮氣もの　二九八頁
舊戀　三〇五頁
舊戀（續篇）　三四一頁
葛城太夫　三六六頁
意氣なこと　四一二頁
女一人男二人　四二五頁
めぐりあひ　四三五頁

早春の溫泉場　四四七頁
銀河を仰いで　四五六頁
燐を嚥んで死んだ人　四七五頁
中禪寺湖物語　四九三頁
柴野と雪岡　五一二頁
小猫　五二三頁
子供　五三〇頁
兒病む　五四〇頁
遺言　五五八頁
私は生きて來た　五七六頁
頽廢時代を顧みて　六一九頁
農村行　六五一頁
仇なさけ　六九八頁
死んでいつた人々　七一六頁
うつろひ　七二七頁

舊痕

一

その頃――まだ明治三十六七年のころであつたから、今から二十二三年前のことである。――小石川小日向の、大日坂の、すぐ上のところに住んでゐたので、大日樣の御縁日のある晩毎に、よく、あの坂下の水道町の通りに植木屋の夜店をあさりにいつてゐた。私にはその頃のことが何となく懷しくてならぬ。

借家の庭は、あれで十四五坪くらゐあつたらうか。すぐ傍の家主が廣大な地面の一部に新築した貸家の一つで、門脇の芝生の土手の上には、五六本の小松が並んでゐたりするのが、庭の形を一層引立たした。私はその庭に、坂下の緣日から買つて來た萩、すゝき、桔梗、芙蓉、などを植ゑた。中にも萩は非常によく成育して、九月の初、初秋の風の立ちそめるころになると、月の明るい夜など雪かと見まがふやうな眞白い花をつけた。朝起きいでて見ると、美人の口紅のやうな芙蓉は一夜のうちに蕾を開いて、ぱつと、大きな花が咲きいでてゐた。

その頃鄕里から母が來て居て、朝早く、母に、芙蓉の咲いてゐることを告げられて、私は眼を覺ましさましゝた。その時分には又その時分で、私自身には、今よりもつと多くの、いろ〳〵の惱みや焦慮せねばならぬことがあつたかも知れぬが、今となつてみれば、そんな苦しい惱みは、いつしか忘れてしまつて、殘るは懷しい思ひ出のみとなつた。

市中の交通機關や電燈やその他日常生活の便利は、その頃に比べると二十餘年間に長足の進歩をして、從つて吾々の生活は、以前よりも今日の方が一層愉快でなければならぬ道理であるが、何故か昔の方が愉快であつたやうにおもふ。それは主觀的の變化であるかも知れぬ。卽ち私自身のみの變遷で、あの時分には、年も若かつたので、人生の前途に對して多くの空想を抱いてゐたからであつたかも知れぬ。けれどもその頃の東京の街や市外の武藏野の風趣の年々損減せられて行くことも事實である。

その時分には、小日向臺町あたりでは、まだ何處の家でも

電燈を用ゐてゐなかつた。みんな石油ランプを用ひてゐた。勿論その水も水道でなく掘り井の水をつるべで汲んでゐた。今の久世山の住宅地が原つぱのまゝであつて、夏時分には、草が蓬々と生え繁つてゐた。そこの崖の上に立つと、どんなに暑い晩でも、帽子を吹き飛ばされるやうな強い風が吹いてゐた。牛込の赤城の森、築土八幡の森が蓊欝として左方に見え、それからずつと右の方に、矢來から早稻田まで續く一帶の高低が遠く望まれた。すぐ脚下に見える音羽の通りの溪を隔てゝ、その向う、右手には、こんもり茂つた目白の高臺が護國寺の方までも續いてゐる。

小日向臺町の高臺など、その頃少しく奥まつたところへ行くと、まるでまだ田舍のやうであつた。今では何處もかしこも寸尺の空地さへもなく悉く切り開かれて家屋が櫛比してゐるが、私が三十六年の春はじめて家を持つた三丁目の奥の方など、畑の中の一軒家で、里芋や栗の花が植つてゐた。畑の端には竹籔があつて、私は少しく怠屈すると戸外に出て、その籔垣の根をよく歩いてゐた。垣越しに籔の向うで人の聲がするので、じつと、そちらを覗くと、そちらにも人家があつて、紙をこしらへてゐる家と思はれ、張れ板に白紙をはつた板が何枚となく立てかけてあるのが見える。まるで、そこが東京の中にあることを知らぬもののやうである。それから二十二三年も經つた今では、多分もうそんな籔など切り開かれて、なくなつたことであらう。そしてそのあとへ金持ちの殺風景な邸宅が出來たことであらうとおもふ。私は、そんな移り變りは止むを得ないことゝはいひながら、何となく自分達の生活が漸々に不愉快なものになつてゆくやうな氣がして耐えられない。今ではもう麻布や芝の方の高臺の奥に行つてもやつぱり同じ變化が行はれてゐることゝおもふ。

小日向臺町につゞいた、その裏の方に茗荷溪の低い窪地があつて、年老いた百姓が大根や茄子を作つてゐた。私はその頃同じ臺町に住んでゐた知人のアイ氏と一緒にその百姓のところへ胡瓜苗を買ひにいつたことがあつた。それは明治三十六年の初夏、例の、苗賣りの懷しい賣り聲の街に聞える頃でアイ氏はもう遠うからその邊に住んで、毎年野菜物を自分の家のまはりに作つてゐる人であつた。私はその年の三月の初から三丁目の奥の栗畑の中の一軒家にさゝやかな家を持つたのであつた。

二

その三十六年の三月の初に家を持つた時に私は、六七年同棲して、後に別れた女とはじめて同棲したのであつた。私は長い間無趣味で不自由な下宿屋生活に飽いてゐた。誰れでも自然の生活の進みがあるもので、まだ學校などへいつてゐる時分には下宿屋でも我慢が出來たが、既に三十歳にも近づき、生活もどうかかうか出來るようになると、それでは滿足が得られなくなり、又異性の同棲者といふものが欲しくなつて來る。私の場合もその一つの例に他ならなかつたのだ。

私は、ある處でその女と知るやうになり、その女は、大して價値のある婦人ではなかつた。いはゞ世話女房風の女であつたところから、他の世帶道具と同じやうに日常の生活には無くてはならぬ必要なものとなつた。

これまで下宿屋のまづい物に食べ飽きてゐた口には、丁度季節ものゝ京菜とか、龜井戸大根などの漬物の一種だけでも今まで覺えない食味を喫るのであつた。十年の下宿生活の間魚らしい魚といふやうな物を食べなかつたところへ、毎日威勢のいゝ掛聲をして盤臺を下ろす魚屋から買ふ新鮮な魚介にも

私は始めて人間らしい食べ物にあり付いたやうな氣がした。彼女はそんなものゝ煮たきにも小才が利いてゐた。彼女は、つい近處の牛込育ちであつたが、東京生れであつた。生れた家は小日向臺町から遠くない牛込の水道町で、江戸時代から存在してゐる古い饅屋の近くにあつた。元からの米屋でそこには裏の改代町通まで突き抜けた地處を持つてゐた、困らぬ家であつたが、彼女の父親が、彼女の生まれてまだ、やう〳〵三月とも立たぬ明治九年の九月の中旬、自分の家に使つてゐた越後產まれの米搗きに泥棒に忍び込まれて、寢ごみを、なげしに架けてあつた手槍で一と突きにされて横死を遂げた後、引きつゞいて、いろ〳〵の災難が降つてかゝり、たうとう長い間に家屋敷もなくなつてしまつた。しかしその頃まだ、こゝが私の生れた家だといふのが殘つてゐた。

そんなわけで、彼女は、その附近の、小石川と牛込との近寄つたあたりに、いろ〳〵な幼時代の思ひ出を持つてゐたので、私もこんな物語から何となく、かなり古い東京の生活に同化され、浸染まされて來たやうな氣がしてゐた。彼女はよく私の田舍言葉の癖を眞似ては笑つてゐた。私がはじめて東京に來から三十餘年になるが、その時はまだ十年にもならぬ時分であつたから、私の言葉にはまだまだ田舍訛りが殘つてゐた。今日でも生粹の東京言葉ではないが、それでも三十年の餘も東京に居れば、自然に直つてしまふ。そして彼女が意識的に笑つて直したり、又七年も八年も同棲してゐる間に自然に同化されて直つたりしたところも少くはなかつた。

畑の中に、世智辛い家主が古木を用ゐて立てた。トタン葺きの三室か四室の家であつた。家賃は七圓五十錢であつたかと思ふ。それでもその頃のことで土地は百五拾坪くらゐもあつたらうか、何しろこの間まで畑であつた處なので、春先きのことゝて荒い四つ目垣で取り廻はした庭の中は、腰まで屆くやうな雜草が蓬々と生えて、初のうちは、草を取り除くにも一寸手の出しやうもなかつたが、彼女は劾々しく尻を端折つてその雜草を片つぱしから拔き取つた。

茗荷溪の百姓家から買つて來た胡瓜苗を　私は、流し尻の溜めのところの空地に植ゑて、毎日朝晩に下水の水を灑いでやつてゐたところ、胡瓜は次第に成長して、後には毎日三四本づゝの胡瓜が採れるほどになつた。私はそれを漬けたり、胡瓜揉みにして食べた。

さういふ次第で、私と彼女との生活は、たとひ貧しい生活でありながらも樂しいところもなければならぬ筈であつたが、私はその樂みを樂むことが出來なかつたばかりか、從來嘗て經驗しないところの苦しい惱みを體驗せねばならなかつた。

その女とは、いつかは別れるのだと知りつゝも、たうとう七八年もずる〳〵に一緒に居つた。

初め、私の方——女の方でもあつたが——が熱烈に女に愛執を感じた頃には、その女の前生涯がひどく、彼女の肉體に對する惱みの種であつた。女に對する愛執が募ればつのるほど一層その惱みが增した。

「先のことが氣になつて、どうしてもいけない。」

初めの中は、彼は一日のうちに幾度となくそのことをいひ出しては失望したやうな顏をしてゐた。

こんなに、此の女が先に同棲してゐた男のことが氣にかゝるのでは、どうしても、その女と別れてしまはねば、この蛇の如く胸の中をのたくる惱みは絶滅しないと思はれた。

しかしながら、それほどに先の男のことが氣になつて氣になつて爲樣のないのは、やつぱりその女に對する愛執が强烈だからであつた。一寸した女の所作や、私の氣持をチャームする彼女の習癖のやうなものまでが、私の心を惹く度に必ず、その陰には先の男を聯想する深い疵痕のやうな惱みが伴つた。

「あなたくらゐおかしな人はない。わたしが本當に好ければ前のことは消える道理ぢやありませんか。」

彼女は、その惱みに屈托してゐる顏をつく〴〵見ながら、さういふのであつた。

「うむ、それはさうなんだが、お前が好ければ好いほど、やつぱりそのことが氣になるんだ。」

二人は殆ど毎日のやうに、そのことばかりを繰返しては懊惱してゐた。そして肉體の執着は、その爲に一層强く募つてゆくばかりであつた。或は、彼女に、自分より他に前の男がなかつたならば、私の愛執は、それほどのものでもなかつたかも知れぬが、先の男と四五年間の同棲を、今自分達でしてゐることからすら、いろ〳〵の聯想は、さながら肉體を責め苛み、或は火焰にかけて燃すごとく身と心とを焦がした。

その時分の私は、もう童貞ではなかつたけれど、そんな經驗は甚だ未熟であつた。女の爲ることは何にでも、その奧には、それについて初め彼女に手ほどきした者のあることを思はしめた。その惱みに一氣に搔き消さうとするために私は、一層、精神ばかりでなく肉體を疲勞せしめなければならなかつた。

それを考へれば、どうしても此の女と別れねばこの惱みは消える期はないのだと知りながら、却つて愛執は別れることを困難ならしめた。そんな矛盾から來る惱みを一刀兩斷に打ち切ることの出來ないのは愚かの至りであると知りつつも、それを爲し得ないのは、又その時分の私にしては止むを得ぬことでもあつたのだ。

そのうち烈しい炎暑が襲ふて來た。春以來惱みつゞけてゐた肉體は一層衰弱した。從つて神經はます〳〵昂奮するばかりであつたが、それをまぎらすものは、たゞ刹那的の肉樂あるばかりであつた。私は、いかにしたらば、彼女と自分との肉體上の關係を深刻にすることによつて、彼女と先の男との關係を塗抹することが出來るであらうかと思つた。しかしながら、それは極めて愚かなことで、彼女の再婚といふことは遂に拭ふことの出來ない事實であつた。その事實を知りながら、それを觀念的に搔き消したいとおもつたが、それは、彼女に對する愛着を思ひ斷たない限り消滅せぬのであつた。どうした因果で自分はかくまで此の女に執着しなければならないのであらう。こんなに苦しい惱みをしなければならないならば、何故彼女とそんな關係を結ぶ前に、もつと賢く思ひ切らなかつたであらうと悔んだが、それは今となつては、もはや、どうすることも出來ぬことであつた。

私はその惱みに、殆ど追ひ驅けられてゐるものゝやうに、烈しい炎暑の中を、よく街に出ていつて、そこら中、足を摺り古木のやうにして步き廻はつた。その家の中に居ると、常に苦しみの泥濘の中に躁いてゐるやうな心地がしてゐた、何處か、もつとも氣分を轉換さする處はないかと思つた。さうして、そんな處が牛込の方にありはせぬかといふ氣がして、探して步いた。結局何處にゐたとて、その苦しみはどこにでも附いて廻はるのであるが、來る前に長く下宿にゐた牛込の神樂坂寄りの方が、やつぱり街に懷しみがあるやうな心地がするので、八月の三十一日に牛込の南町の方へ引越していつた。

いよ〳〵翌日引越すといふ日に涼しい風雨が襲ふて來た。それはもう七月中ごろから都鄙の人間——草木までも——が長い間待ち焦れてゐた低氣壓であつた。午后から雨とゝもに風も强くなつて、何度點火してもラムプはすぐ吹き消されてしまつた。その風と雨との肌さはりには冴かにもう秋氣が動いてゐた。實は、一つは炎暑にも苦められて、トタン葺きでない。もつと涼しい、恰好の家が他にありはせぬかと思つたのであつたが、秋めいた冷涼の風雨が見舞ふて來たので、今年の春の初から居馴れた家を、いよ〳〵他へ移轉するとなると、それでも、さすがに愛惜が殘つて、去りがたい氣持ちが

するのであつた。まして昨日の晩から初秋めいた涼しい風雨が見舞ふて來たので急にその家が懷しくなつて來た。

「大變に涼しくなつて來たぢやないか。」

私は、座敷の風通しのいゝ處に胡座をかいて昨日の暴風雨に、思ひなしにか大分末枯れた色を見せて來た庭のまはりの草木の葉を眺めながらいつた。

「えゝ、もう暑いたつて大したことはありませんよ。明日から九月ですもの。」感の好い彼女は、もう私が、いよ〳〵引越すといふ今になつて、何となく此處を去り難く思つてゐるのを、のみ込んでゐるやうな顏をしていつた。

「いつそ牛込へ行くのを止めようか？」

私は自分で欺いてゐるやうな氣持ちがしてゐた。

「止めませうか。」彼女は思ひ切つたやうにいつた。

羽目板の脇に植ゑてゐた胡瓜の蔓も昨日の暴風雨にすつかり傷んでしまつた。もはや元氣を回復することは六ヶしさうに見えたが、そんな物を殘して行くのも　物質的には何でもないことだが、精神的に何だか無情なやうな氣もするのであつた。

しかし彼女が、こちらのぐら〳〵してゐる氣分を笑ひもせずに、さういつて素直に同意してくれると、却つて自分の決しかねてゐる心を恥づるやうな氣もするので、

「まあ、折角行くことにしてゐるのだから、思ひ切つて引越さう。」

「さうしませうか。」

そんなことをいひながら、わづかばかりの所帶道具のやうなものを、彼女は傷つかぬやうに丹念に一つづゝ新聞紙に包んだりして、荷物を取纏めるには夜遲くまでかゝつた。

その翌日、早く、賴んで置いた荷車がやつて來たので、私達はもと〳〵自分で仕出かしたことではあるが、さながら他人から促されたやうな氣持で、たうとう牛込の方へ移轉していつた。そこは南町でももう納戸町寄りの方で、家は先住居よりは本當の家らしかつたけれども、小日向臺町の奧よりはずつと、居まはりが立て込んでゐた。勿論庭なども鼻が支へさうであつた。

九月に入つても暑い日が幾日もつづいた。私達は初のうちはお互に口にはいひ出さなかつたけれど、二人とも心の中では先の家を懷しく思つてゐた。三日か四日するうちに遂に又、

「先の方の家がよかつたねえ。」と、私の方から口に出した。

「えゝ、居まはりが廣々としてゐたから……」

「まだ空いてゐるだらうか。」

實は二三日前にも、どうなつてゐるか一寸見にいつたのであつた。しかしそのことは彼女にも話さなかつた。

「一ついつて見て來ようか。」

「えゝ、見てゐらつしやい。そして空いてゐたら、又歸つたらいゝでせう」

「でもお可笑しいなあ。」

「お可笑しいことはお可笑しいけれど、そしたら、あの家主さんだつて喜ぶでせう。」

「そりや喜ぶ。此の間他へ引越す話をしにいつた時にひどく殘念がつてゐたくらいだから。」

それから私は勇んだやうな氣持になつて、先の家を見にいつたが、もう知らぬ人間が入つてゐた。私は又落膽してしまつた。そして、何處か他にそこらに手頃な家はありはせぬかと、足ついでに一とまはりして見た。すると、先の處から遠くない三丁目の、ある横丁に小さい空家を一軒見附けた。家主も良家らしく、家は狹いが割りに小綺麗なので早速そこを借りることにして、南町に越していつてから、一週間も立たぬうちに、又小日向臺町の奧に戻つて來た。私も彼女もいひ合はさなかつたが、まだ先に纏めた包みを解いてゐないものがあつた。

やがてそこの家で秋になつた。季節々々の風物の推移につれて、心の動き方にも自然の變化があるものか、それとも彼女のことを思ひ詰めてゐたことに倦んできたのか、或はもう諦めてしまつたのか、春から夏にかけて、病的に惱しく昂奮してゐた神經が、漸々鎭まつて來たことが自分にも意識された。私は彼女に向つて話しかけた。

「おい、先ほどお前の以前のことをいはなくなつたねえ。」

「えゝ、いはなくなつた。」

「どういふものだらう？」私には、その理由が明瞭に分つてゐるやうで、よく考へると、やつぱり解らなかつた。

「そりや、あなたが、先ほど私のことを思はなくなつたからだ。もう、どうでも可いと思つてゐるからだ。」彼女は分り切つてゐるやうにいつた。

それは、たしかに私の現在の心持を、ぴちつと、いひ當てたにちがひなかつたのであるが、さて、さうであるかと思つてみると、やつぱりそれでは物足りなかつた。彼女を、もうどうでもいゝと思ひ切つてしまふことは出來ないのであつた。彼女のことを思ふ心に新しい刺戟や興味の失せたことは事實であつたが、さうかといつて、彼女と離れることは、先の時分よりは一層困難になつて來たことが、思はれた。かうして、このまゝで月を重ね、日を經ていつたならば、愈々別れることが出來なくなるであらうと思ひながら、先の時分のやうな、生々しい惱みが一日々々と薄らいで來るとともに、そこにやゝ落着いた幸福な氣分が湧いて來た。

秋がだん〳〵深くなつて、健康も自然と回復して來るにつれて勉強する根氣も生じて來た。私は殆ど一日机の前に坐りつきりで、飜譯物の文章に刻苦することが出來た。渾身の精神がそれに集中することが出來た。

いつの間にか九月十月は過ぎて十一月が來た。家を出て高臺の崖の上に立つと、どちらを向いて見ても樹木に蔽はれた溪や岡が遠く近く望まれた。しばらく机の前に坐りつきりにしてゐた間にそれ等の木々は悉く色を増して來た。ことに音羽の溪に沿ふた岡の邊には楓が多かつた。黄褐色に色づいた櫟林の中に眼の覺めるやうな眞紅に燃えてゐる紅葉が到るところに點綴してゐた。身體は引締まり、腦の動搖は鎭まり、精神は統一して、何か知ら樂しい希望が達せられるやうな感じがして來た。私達は何時かは別れなければならぬのだといふことを知つてゐながら、そんなことは、なるたけ思つてゐまいとした。實際又その日その日の生活にいそしんでゐる間はそんなことを自然に忘れてゐた。偶にそのことを思ひ浮べるやうなことがあつても、その眞實に觸れるのが、何かゝう怖いものに觸るやうな氣がするので、なるべくそうつとして置きたかつた。本來そんな氣持ちに囚へられてゐるといふのも、畢竟私自身一人の心境の問題であつて、私が彼女と共に居ることについては如何なる故障もある譯はないのであるが、たゞ私の氣持ちの上で、彼女が處女でないといふことが、私にとりて償ふべからざる不幸を感ぜしめるのであつた。世界のあらゆる幸福を以てするも、自分の思つてゐる、その女が處女でない不幸の感情を償ふことは、どうしても出來ないと思つた。

三

そのうち冬が來て、やがて年が改まつた。それでも自分ではじめてさゝやかな一家を構えて彼女とゝもに年こしの氣分は何につけ樂しみであつた。十一月と十二月と打とほしに机にかじりついてやつと仕終へた飜譯物は百枚にも足らぬ紙數のものであつたが、それは、日頃引き立てゝもらつてゐる先生の博士の監修の下にしてゐる、ある叢書の一つであつたので、私はそれが出來上ると、早速その先生の許に携へていつてそれを金に換へることの口添えを頼んだ。そして書店から七拾何圓といふ金を受取つて歸つた。その頃自分は、その他にもある書肆の編纂物の仕事で一二年前から從事してゐた仕事があつたので、毎月貳參拾圓の定收入があつたので、凡ての物價が、二十幾年後の今日の物價に比べて、ざつと五分の一に相當するその當時にあつては、此の間まで下宿屋で不味い物ばかり食べてゐた新所帶の生活をするには、どうかゝうか遣繰りが附いた。それに、多年父兄から給與されてゐた僅少の月額によつて、簡單な學生々活の遣繰りすることにはもう習熟してゐた。彼女も二十過ぎて他へ嫁するまでは質屋といふものを知らないで通つて來たのであつたが、ふとしたことからあんまり堅氣でない處へ嫁いて四五年居る間に苦しい遣繰り算段をすることには上手になつてゐた。それでも彼女はまだ自分で質屋の暖簾をくゞることは知らずにゐた。

それで、年末に諸拂ひを綺麗に濟ましてしまふと百圓ばかりの金がすつかり無くなつて、たつた貳圓か參圓しか殘らなかつたけれど、餅や數の子に不自由もしなかつたし、その頃はまだ三十前であつたから、金の殘らぬことなど一向苦にもならなかつた。私達は大晦日の晩飯を快く濟ますと、牛込の方にぶら〳〵出ていつて、神樂坂から肴町の方の明るい賑はひを見て歩いた。

それは恰ど日露戰爭の始まりさうになつてゐた時分であつた。それと私一己の生活とは直接には少しの關係もなかつたが、一月の末になつて、ふと、ある人からの紹介で、ある雜誌の編輯に携はることになつた。――その雜誌は後に、私が一年足らずして止めたあとで段々發展して都下唯一の有力なる雜誌になつた。――それで私の月收は又以前よりは幾らか豐かになつた。

そして二ケ月三ケ月とやつてゐる間に、本當に彼女と別れるなら、なるべく今のうちにしたいと思つた。自分の方から離してしまふのだと思ふと、彼女が哀れであつた。いくらでもいゝから、少し纏つた金を遣りたいと思つてゐたのであつたが、今を逸してはそんな金の出來る機會がないと思つたので、月末に受取る金の半分を諸拂ひに拂つてしまふと、殘つた半分はそつくり惜氣もなく彼女の前に、

「さあ、とつて置け。これをお前にやつておくから。」

といつて、投げ出した。それは三十圓か四十圓くらゐのものであつたが、今の金に換算すると、百圓にも貳百圓にも相當するかも知れなかつた。

すると彼女は、前に散かつた金より先きに私の顏をぢつと見直した。綺麗に、金を取つて置けといふこちらの心持ちが彼女には大なる失望であつた。無論私にも、彼女のその氣持はよく解つてゐた。そして、その解つてゐる自分の心持ちに自分で蓋をしてゐたいとおもつた。彼女が容易に金を仕舞はうとしないのを見ると、

「おい、とつておけといふに、どうして取らないんだ。」

「いりませんよ。」彼女は急に血の氣の失せたやうな表情をしていつた。

「そんなことは今考へなくつてもいゝんだ。……とにかく藏つておけば、私の入る時にも役に立つ。」

結局金はその時だけ仕舞つておくが、すぐ何か知ら入ることがあつて、又次の月末までには無くなつてしまつた。ここに何百圓と纏まつた金さへあれば、さまで憐憫の情に自分の胸を傷めずに、彼女と離れてしまふのだと思ひながらも、その金はいつになつても出來さうになかつた。

常にそんな心持ちに戰きながらも、やつぱりその日〳〵は睦まじく二人の仲に立つていつた。三十七年の四月の八日で

あつたことを確に記憶してゐる。その日はその春中では後にも前にも最も美しい佳い日であつた。私は、ある一と仕事ををはつたところで、彼女と、その日一日郊外の方へ野遊びに出掛けた。ちやうど日曜日でもあつた。

「どこかへいつてみようか。」といつてゐるところへ、中學校へいつてゐる甥も遊びに來たので、それと一緒に出掛けた。勿論その時分は、まだ電車などは一線もなかつた。

「どこへ行きます。」

「さあ、どこにしよう。」と、あつちこつち考へた結果、大きな河があつて、白帆が見えたり、菜の花が咲いてゐたりするやうな處にいつて見たい氣がした。それにはどこが好いだらうと、東京近郊の河のある地方を撰定してみると、隅田川の上流か、市川の鴻の臺の方か、或は多摩川べりであつた。私は鴻の臺の方へ頻りにいつてみたいやうな氣がして來た。少年の頃八犬傳を讀んで、里見氏が北條に滅亡された懷古の感もあつたし、その前の年の夏であつた、ある病的な戀の惱みからひどく健康を害してもゐたりしたことから、感冒に罹つたあとが何時までも良くならなかつたので、醫者の勸めに從つて房州の方へ海水浴に出掛けたことがあつた。その時はじめて兩國驛からあちらの方の汽車に乘つてみた。その時汽車の窓から、江戸川の鐵橋を渡りながら、上流の方を眺めた時の風景がひどく好かつた。その時は、川の水も、めづらしく深碧を湛へて、右岸に臨んだ鴻の臺の森が蓊鬱としてゐて、いかにも古城の跡らしく、私の興味をそゝつた。そのことを思ひ出して、その方へいつてみたくなつた。

「行きたいところがある〳〵。市川の鴻の臺へいつてみよう。」

それから小石川の奥の家を出て、私達はどう歩いたか、とにかく兩國驛から汽車に乘つたやうに思ふ。市川で下車して停車場の掲示に出てゐる、眞間の手兒奈の舊跡のある神社の方へ歩いていつてみた。桃はいくらか盛り過ぎたが、櫻は丁度今が滿開で、一帶の丘陵のつゞいた、そこの高みから眺めると、下總の平野は遠く春靄を罩めて、ところ〴〵に菜の花の咲いてゐるのが見えた。赤い毛布を敷いた境内の掛け茶屋で休んで、きぬかつぎを摘んだり、うで卵を剥いて食べたりして、そこから又國府臺の方へ歩いた。古い總寧寺の境内に入つて、櫻花の下に里見氏の墓地をさまよひなどして、脚下に江戸川を見おろす見晴し臺に出ぬけると、川の向うは江東の平野が一眸の中におさまつた。遠く煙霞の彼方には淺草の凌雲閣が幽かに望まれた。漫々として青い流れには白帆を張つた川船が、さながら廣重の繪にあるやうに、醬油の空樽を綺麗に積み重ねて水を溯つてゆくのがあつた。塘にも田圃にもゝう青い草木が一面に彩どつてゐた。私達は到るところでいろんな物を摘んだで空腹は覺えなかつたが、なんだか歩き

疲れて、がつかりしやうな氣持ちになつて來た。それでもその日は思ふ存分に春を眺めたやうな氣がした。かなり長く國府臺の見晴し茶屋で休んだあとで、茶店の主に捷徑を敎へてもらつて、そこから木立の中を江戸川縁の方へ下りて來た。渡しがわたつてみたかつたのだ。台の下で、江戸川の水が、少しくの字なりに屈曲してゐるところに、流れを前にして人家が少許りあつて、渡しもその下から出た。そこらを歩いてゐると、春草の萠える匂ひが懷しく鼻にかよふた。長い春の日が西に傾きかけて、廣い水の面には薄ら寒い風が立つてきた。渡船を上つてから、近いところ停車場まで歩くつもりで百姓家の間を道を問ひ〳〵歩いて來ると、小岩までは隨分遠かつた。停車場ではもうとつぷり日が暮れてしまつた。

兩國の停車場から淺草の方を鐵道馬車で迂回して、上野の廣小路の方に出て、そこから湯島の切通を上つて、本鄕の三丁目から小石川の砲兵工廠の裏に上つて來る坂道の方に出て戻つた。あそこの急な坂の名を、ちよつと、今ど忘れしたが小石川の方の造兵裏の坂は昔の水戸屋敷がまだ儼として遺つてゐた時分のことを思ひ起さしめるやうな、要害を目的にした曲りくねつた險しい坂であつた。本鄕の方の坂もそのとほりで、途中で一つ折まがつてゐた。まだ電車のない時分私どもは　牛込の方から上野に行くには、必ずその坂を上り下りしたものであつた。不便は不便であつたが何となく都市に寂びがあつて昔の江戸城の時代が偲ばれるやうな氣がした。四邊も寂しいほど閑靜で落着いてゐた。

私は廣小路で鐵道馬車を下りると俄に足の疲れを覺えて何度も俥に乘らうかと思つたが、もうこゝまで戻ると直きだといつてたうどう家まで歩いた。とても二十三年後の今日では出來ないことであつた。その時眞砂町の方から、暗い道を、急な坂の中程の折れ曲らうとするところまで私達が下りて來ると、後から、えッつい〳〵と、急しく聲を掛けながら、驅け下りて來た一臺の人力車があつた。それが私達を追ひ越した時分には、もう急勾配のはづみを食つて、車夫の脚の力では車輪の速力を制することが出來なかつたやうであつたが、坂く間に私達達を追ひ越していつたと思ふ間もなく、眞暗い阪の中途で、いきなり、がたぴしといふ消魂しい物音をさせて車が坂の正面にある、どこかの門の戸に衝突してしまつた。

彼女は、逸早く、

「あらッ大變！」と聲を發した。

見ると、今まで光つてゐた車屋の提燈の火は消えて、暗い坂の途中が一層眞暗くなつてゐる。

「だから。私は危いなと思つたんだ。」私は小言をいふやうにつぶやいた。

私の甥は甥で、

「僕も、これは危いなと思つてゐたら、たうとうやつた。」

そんなことを口々にいひながら、私達はいそいで俥の顚覆したところまで驅け下りて見ると、暗の中で、それでも車夫は、大したこともなかつたと思はれて「どうも濟みませんすみません。」と詫ごとをいつてゐる。乘客はと見ると、遠くの方から、來る火光で突當つた門の閾の上にへたばつたまゝ此方を向いて、

「だからおれは降りようおりようといつたんだ。」と、泣言のやうにいつてゐる。その顏をよく見ると、でつぷり肥つた、重さうな體格で四五十くらゐの男と思はれた。圓い大きな額から赤い血がたら〳〵と流れてゐる。

「あらッ、血が流れてゐる。」彼女は又それを早くも認めて、怖えながら、道脇の下水の中に橫倒しになつてゐる俥の傍に寄つていつて、車夫に手を貸して、車を起さうとした。私はさういふところにもすぐ樣、彼女の平素の深切に富む、氣轉の利いた美質を認めたが、消魂ましい物音と、額から流れてゐる生血の慘憺たる光景に極度に怖えた私は、彼女以上にヒステリーのやうになつてゐた。そしてその結果、私の内に密む非常に殘忍な、薄情な、主我的な氣持に支配されてゐた。それで舌打ちするやうに、

「おいッ、止せ。」と、彼女を極めつけた。

「こんなところを乘つたまゝ降りて來るのが間違つてゐる。車夫も車夫だ。」私は小言をいふやうにいひながら、さつさつと坂を下りて來たが、薄明りにちらと見た、肥つた男の、圓い額から、たら〳〵流れてゐた生血の色が、今日遠道を歩いて疲勞した神經にいつまでも膠着いて離れなかつた。私は、その不氣味さを頭から放つ拂はうとするやうに、小石川の道を歩いて戻りながら、

「あんな處を乘る者も乘るもの、又、乘せたまゝ挽いて降りるものも、おりる者だ。私なんぞは、よく用事であそこを車に乘つて通るが、必ず車を降りる。又車夫も、どうぞ降りて下さいといふ。……橫着をきめて、大事を取らないから、あんな目に遭んだ。」何度も同じことを、小言をいふやうな調子で繰返した。

その後又一度、一週間ほど立つてから、今度は荒川堤の方へ彼女と二人で野を歩きにいつた。わづかに一週間ぐらゐか違はなかつたが、もう先の時の初春の柔かさが大分闌けて、中春の薄暑を覺えた。その日は、この前の時が、あんまり愉快だつたのに味をしめて、俄に思ひ立つたので、家を出たのは、もう十時を過ぎてゐた。すぐ近くの鼠坂を下りて音羽の通りから護國寺の前に出て、大塚坂下町を左に折れて、近道をしながら今の大塚線の電車の通つてゐる道を行くと、ところ〳〵に人家が立つてゐるほかは、一面の田圃で、今の大塚停車場につゞく繁華な町のところなど、黃白の菜の花が眞盛りでそれに丁度菜の花の色を保護色とする同じ色の黃白の蝶

蝶が私達と前後にむつつれながら、どこまでも翅つてゐた。

私達は何度もその菜畑の中の往來に立ち止まつて、闌な春を眺めた。そこから飛鳥山の方にいつてみるつもりであつたが道が分らないで走つてゐると　そこへ十三四才の少年が小包みを背負つて來かゝつたので、その子供に道を訊くと、少年は、私も王子の方へ行くんですから一緒にいきませうといつて、少年は先に立つて歩いた。巢鴨から板橋街道を橫切つて行くと、道はいつても〳〵田圃に沿ふた野溝の緣か、林の中をいくのであつた。道脇の孟宗藪の中にすく〳〵と筍が出てゐるのを、彼女は聲を出して珍しがつたりした。用水に沿ふた長い畷の土中には、若草から蒸熱れが騰つてゐた。黃色い蒲公英の花が夏の夜の星のやうに咲きこぼれてゐた。それにも蝶々がむれてゐた。私達は羽織を脫いで腕にかけ、何度も額の汗を拭いた。やがて飛鳥山の手前で少年は別れを告げて他の道をいつた。

護國寺脇からそこまで來る沿道には偶に樺や樫の林の中に、古い藁屋根の百姓家が隱れてゐるのを見るほかに、殆ど人家といふものを見なかつた。たゞ春の草木と、野川の水と、蝶々のむれて飛んでゐるばかりであつた。

私達はそれから飛鳥山に上つていつたが、もうすつかり葉櫻になつてゐて、草原には食ひちらした折箱の破片が雨に褪せて散亂してゐるばかりであつた。清々しい新樹に青嵐が立つてゐた。涼しい葉かげに憩ふてゐると、遠い道を歩いて來た汗がひとりでに退いた。私達はまだ歩き足りなかつた。隅田川の見えるところまでいつてみたかつた。で、そこから王子の方に下りて、野道をつたひ、田圃の畦草を分けて、尾久の渡しの方まで歩いた。無論その間にも人家は殆どなかつた。暑い春の日に照らされて、だん〳〵野道に歩き疲れてくると早く大川の水の見えるところまで行きたかつた。一寸した人家の群れがあつて、こんもり新樹の茂つたところに來ると、そのすぐ先に隅田川の深碧を湛へた水があつた。兩岸に新樹の根元を涵しながら、滔々として流れる川の上下には帆を張つた川舟が滑るやうに動いてゐた。私達は又その川を向うに渡つてみたかつた。そこらは水の深さうなわりには川幅は狹かつた。そして向うの土手に上ると、そこからが、荒川堤で遲咲きの五色櫻がちやうど滿開であつた。私達はそこの茶店に疲れた足を休めた。衣かつぎや、むき卵で腹をこしらへた。

「どうだ、この邊からもう引返へさうか。」といつて、私は日蔭を仰いだが、まだ十二時を少し過ぎたくらゐのものであつた。

「さあ　どうでも。あなたのいゝやうに。」

「私はまださう疲れてもゐないなあ。こゝで休んだので、又元氣がついた。」

「ぢや、もつと、いつてみますか。」

それから、又茶店で訊いて、西新井の大師の方へ歩いて行くことにして、茶店を出た。そこから荒川堤を大分いつて、土手を右に、田圃の方に折れてゆくと、そこらの田圃はもう田を植ゑる支度に、黒い土が掘返へされて、野川の水が仕掛けられてゐた。農夫は牛に萬鍬を挽かせて隴圃を耕してゐた。それは、劇しい勞役であつたが、春の野の景物として、たゞ見てゆくには、それにも豐かな詩味があつた。私はさういふ野趣滿幅の中を行くにつけても、彼女が、もつと、私の理想に叶つた女であつたならば、どんなに幸福であつたらうかと思つて、やつぱり物足りなかつた。その頃の私には、彼女が處女でなかつたことが、何よりも不滿であつたのだが、尙ほそればかりでなく、彼女が、私の審美的要求にも叶つてゐないことも不滿の一つであつた。しかしながら、もし彼女が事實あつたよりも、一層美人であつたならば、愛着と反感との矛盾が一層深刻であつたかも知れなかつた。私と同年である彼女はまだそんなに、女として容色の衰へるほどの年ではなかつたから決して美人でないにしても、どこかしらに、私の魅惑を引くものがあつた。或は笑ふ時の口元とか、ちよつとした物をいふ時の語詞とか、或は咽頸のまはりの肉の括れとかいつたやうな、センシユアースな部分について愛着を感ずれば感ずるほどその點が一層堪へ難い憎しみの的であつたのだ。それにもかゝはらず、彼女を一と思ひにおもひ切るには私の内に忍びられない感情があつた。時としては、私はどうしてもつと薄情にならないのだらうかと、自分を悔むことがあつた。

西新井の大師には、門前にずらりと軒を並べた茶屋があつて、私達が石だゝみの上を歩いてゆくと、兩側から茶屋の姐さんが、參詣者の容姿をじろ〳〵眺めながら、

「お休みなすつてゐらつしやいまし、ちよつと休みなすつてまあお掛けなすつて。」

と、白いものを着けた若い女や、まめな婆さんが降るやうに呼びかけた。

彼女は、背をむづ〳〵させるやうに顏を赤くして歩いたがその間の道はなか〳〵あつた。

私達はたうとう、そこへは入らずに素通りして詣つて出て來た。私自身にも、また彼女自身にも、何だか、私達が二人で歩いてゐるのが、めうにそぐはないものゝやうに他人の眼に映つてゐるらしいのが、此方の氣持ちの上に反射的に映じてゐた。それが彼女にも私にも何だか眩しかつたのだ。そこから東武鐵道の大師の停車場までは拾町ばかりであつたが、もう私はすつかり歩き疲れてゐたので二人とも車に乘つた。

そんなにして春の野に出で遊び歩いてゐる間にも、心の底の方には、かうして二人で樂んでゐるのは、いつか、そのうち別れねばならぬことのある、その別れを惜んでゐるのであ

るといふ意識が潜んでゐた。が、私は、自から欺くやうになるたけそれについて考へまいとしてゐた。いや、考へまいとするどころではなかつた。そんな意識が一寸でも心の表に顏を出すのを、恐いものにでも觸れるやうに避けてゐた。がその實、自分はどうしても別れねばならぬのだといふことが、私にとつては何事よりも最も重大な問題であつたのだ。そのことを解決しないで、かうして春の野に出て遊び歩いてゐることは、何だか一寸假りにさうしてゐるものゝやうな氣がしてならなかつた。私達は、心の底から本當に樂んでゐられないのを、たゞ誤間かして樂んでゐるのであつた。

四

そのうち又、少しばかりの小金が出來たところで、私はこの機會を逸しては、ふたゝび好い機會はあるまいとおもつて私自身にしては非常な心の努力で愛情を斷ち切らうとした。それを仰山にいへば、所謂勵聲叱咤して、弱い心に斧を打ち下ろさうとした。ある時など夜間ふつと眼が覺めると、何だかひどく胸が苦しく、氣持ちが惡くなつてゐた。そして彼女——向う側にすや〳〵寢息を立てゝ眠つてゐる彼女に對して、忍びざることを斷行するやうな不快に襲はれた。けれども、そんなことではいけない。自分は飽くまでも薄情にならなければならない。どうして自分はかうも薄情になることが出來ないのであらう。もつと易々と薄情になれることが出來たら、どんなに樂だらうと思つた。そんなことが、夜寢てゐる間に度々あつた。深くそのことが胸の奧底に喰ひ入つてゐて、神經衰弱に罹つてゐたのである。晝間はそれでも、いくらか神經の平靜を保つことが出來て、理性に眼覺めてゐた。が、彼女に對して忍びざることをするのだといふ哀憐の感情は、恰も間渇泉の如く、時をきつて、強い力で胸底に噴湧して來るのであつた。

「おい、お前と別れるのも何だか氣が進まないねえ。」私は、どつちにも付かぬやうなことをいつて話しかけることがあつた。

すると彼女は、私の複雜な氣持ちを、明瞭に見分けるやうな眼を向けて、私の顏を見ながら、

「あんた、何も斯も自分で考へ出しては迷つてゐる。誰れもかうしろといふ者はないんですもの。」

「……それはさうだけれど……」私は少時沈默してゐた。誰れも私にあゝしろ、かうしろといふものは一人もないだけに私は一層自分で、自分のことを考へ且つ處理しなければならぬと思つた。

やがて又彼女はいつた。

「その代りにあなたにいつておきます。私が、あなたにさう氣に入らなくもないことは、それはよく分つてゐます。ただ

私が一度嫁づいてゐたことがあるといふので、私がどうしても可けないといふんですから、今度もし、又初めてゞない者を貰ふやうなことがあつたら、私は承知しませんから。」
「うむ、それは。」私自身でも心にうなづいてゐた。
その後二十年を經る間に私自身の處女性も、またすつかり汚されて、そして爛されてしまつたのである。

（大正十五年七月作、中央公論掲載）

無明

一

その春の初の頃、鄕里の方に居るすぐ上の兄から、今度思ひ立つて、アメリカに行く氣でゐる。神戸から乘船してもいいが、或は東京見物かたぐ〳〵横濱から乘船することにするかも知れぬといふ簡單な音信に接した。

その兄とは格別用事もないので、一年に一度か二度互に葉書の音信を交はすくらゐのものであつた。彼は中野よりも六年々長であつた。十年ほど前に實家から十里ばかり距つたオ―市のある家へ養子にいつたのであつた。中野は、兄のその音信を見た時、いつものとほり極めて簡單な葉書の文面にはそんなことには何等言及してゐなかつたけれど、しかし中野は、種々な想像を兄の上に加へてみた。アメリカに行くといつたところで、金を持つて漫遊に出掛けるわけではない。無論あの地方から年々多數渡航する出稼ぎに行くのであらうが、まだ、たしか七つか八つを頭に三人の子供を持つてゐながら、そんな決心をしたについては、何か知ら、養家に居りたくない事情があるに相違なかつた。無論まだ三十五の壯齡であるから、たとひ子供が三人あらうとも、今日の時節に海外に出掛けるくらゐ何でもないことであるが、それも境遇や出立點の如何による話で、兄の場合にあつては、先づ、家内に何か特別の事情のないかぎり、そんなことを思ひ立つ筈はないのであつた。中野は、今の自分の惱みはなやみとして、兄の境地に同情を禁ずることが出來なかつた。もとより委しい事情は分らなかつたし、又强ひてそれを知らうともしなかつたが、いづれにしても、養子にいつて、三人の子の親になつた上は、それで父爺になつて一生を無爲にして過せばいゝ譯であるのに、さうして居られないといふのは、止むに止まれぬ次第であらう。とにかくそれだけの決心をするまでにはいろんな苦衷を經た結果であらうとおもふと、中野は、兄の渡米を傷はり、慰め、勵ます爲にぜひとも横濱から乘船することを勸めて、東京に呼び迎へたかつた。

そして、兄が東京の方に立寄るなら、それと一所に、中野が多年の宿望である母をも呼び寄せたいとおもつた。彼は、

まだ郷里から學資を仰いでゐた時分からの希望で、どうにか自活してゆけるやうになつたら、母を東京に呼び迎へて、二人で、小女一人くらゐを使つて親子水入らずの生活をしたいのが一つの樂みであり理想でもあつたのだ。中野が十九の年の九月に初めて東京に出て來て、たつた三月ばかり居るかゐないかで父親が死んだので歸國したきり、一寸二年近く郷里に引込んでゐたが、その間に彼の東京に行きたいといふ熱望は倍々募るばかりであつた。愛は解するといふが、中野の切なる希望を、蔭になり日向になり達成するやうに、一家の内で梶をとつてくれたのは、父の亡くなつた後の母であつたのだ。それゆゑ、學校を卒業して、自活の道がどうにか立つやうになつたら、何より先きに母を呼び迎へて宿年の希望を滿足したいのであつた。ところが、親に對しては、子といふものは殊に我儘で勝手なもので、その自活の道が立ちさうになると、母を迎へる代りに女をこしらへてしまつた。

「家内が出來てから、先のやうに、もう私に、東京にこい〳〵といふてくれんやうになりました。」と、母が述懐を洩したといふことが郷里の、他の方から中野の耳に入つたこともあつた。

去年の春の初から一年餘り同棲した女と、どうしても別れることになつてから、彼女は、「あなた、わたしが、こゝを出ていつたら、國からお母さんをお呼びなさい。さうすると、家の中が綺麗でいゝ。女房とも何ともつかない者を家に置いとくのは、あなたの出世の妨げだ。」といつてゐた。それは彼女自身の境地をも客觀的に思つて見てさういふのであつた。そして、そんなことをいはなければならぬ自分の生涯を、彼女は悲しく諦めてゐるとゝもに、屈辱に對する、抑へ切れぬ憤懣もあつた。中野は、彼女の、その心根を思ふと爲すに忍びざることを行ふやうな感があつた。自分の病的な愛慾に原因してゐる自我を沒却しさへすれば、大きくいへば一人の婦人の生涯を救ふて、好運に導くこともできるのであつたかも知れぬ。

時とすると、彼は、彼女に對する自分の氣持ちを思ひ浮べて、一年以上も同棲してゐる間に、はじめ三四ヶ月の間、大海の荒れすさぶごとくあれほど心を悩ましてゐた、彼女に先の男のあつたことが、いつしか、自身の胸の中に消え和んでゐることに氣がついた。貧しいながらも、その日〳〵の生活に、何かしらいそしんで動いてゐる彼女のまめまめしい容姿を見ると、自分達の一生はこの調子で無事に過ぎて行くのであらうかとおもはれた。

「いつそその方が心の平和が亂れなくつていゝかも知れぬ。」と、思つてみることもあつた。さうしてゐるとまた、強い自我の念がむら〳〵と頭を擡げた。それで諦めてしまへば、あまりに自分が不幸である。どうしてもこの女とは別れてしま

はなければならぬ。自分にはもつと好い女が何處かに居なければならぬ。

彼女が、わたしが出ていつた後、國からお母さんをお呼びなさいといつたのは、自分が綺麗に身を退けば、そのうち何時か、中野の空想してゐるやうな女が幸福をもたらして來るであらうと思ふからであつた。彼女はそれくらゐに諦めてゐた。彼女が中野の家から出て行くのは、もう一所になつた時から始つて今日まで繼續してゐた宿題であつたのだから、何でもなくそれが斷行出來さうであつたが、中野にはやつぱり忍び難い感があつた。彼は、國から母や兄を呼び迎へるのを彼女を離別することの自分に對する言譯に利用しようとした。

二

長い間宙にぐらついてゐた中野の決心が具形的に固まつて來たところで、それでもまだ心に迷つてゐるやうに、

「どうしようかね。」と沈吟してゐると、彼女は、「置いて下さいよ。人をひとり救けるやうなものだ。」彼女は絶望的な氣持ちで靜かにさういふのであつた。

「…………」

中野の胸には、それが突刺すやうに悲痛に響いた。全く自分の自我さへ殺してしまへば堪へられぬこともないのだと思つた。彼はたゞ息を吐いてゐた。

「その代り貴郎の爲には、どんなことでもしますよ。」彼女は唇の色を變へて眞心からいつた。

中野は堪へられなくなつて、ひとりでに眼頭が熱くなつた。そして鼻聲になりながら、「それは、今までだつて、お前がよく仕てくれることは分つてゐる。」

それから四五日過ぎて、中野の郷里の家から封書が屆いた。それには、横濱から乘船することにして母と同道で五月の十日頃上京すると書いてあつた。そのほかに、中野が彼女と同棲してゐることに異存のあるやうなことを強い言葉で簡單に書いてあつた。その實それは、中野が先頃自分の方から郷里の上の兄に手紙を遣つて、そんな文意を書いて越してくれるやうに頼んでやつたのであつた。彼女は、中野の郷里からそんなことを言はせねば、中野の傍を去らないといふやうな強請がましいところは少しもなかつたけれど、たゞ中野自身の氣休めにそんなことにでもしなければ、彼女を出て行かす最後の決心がつかなかつたのである。彼は、そんなことをする自分の愚かしさや、郷里の者に餘計なことを聞かす面伏さを承知しつゝも敢えてそれをしたのであつた。

中野の郷里から手紙が來ると、彼女はよく惜えたやうな表情を浮べてゐた。わざ〳〵自分で仕組んだ筋でありながら、中野は厭なものを見るやうな氣持ちで、ざつとその手紙に眼

を通してそのまゝ又封に入れてしまつた。そして半日ほど過ぎて、自分の氣を落着けてから、

「來月の十日頃にいよ〱來るさうだ。……それからこんなことを書いてあつた。」といつて、書中の一部分を讀んで聽かせながら、自分も失望したやうな顔をした。しかし、それは彼にも虚僞の表情ではなかつたのだ。彼女は又彼女で、それを聞くと、唇の色まで忽ち蒼白になつて、やゝ痙攣狀態に顔面神經を戰かせながら、全身から力の拔けたやうに、少時口も利けなかつた。

中野はその瞬間の重苦しい氣持ちを散らかすやうに、

「十日といへば、今日が二十六日だから、まだ半月間がある」

「わたし今月中で歸ります。……もう居ないものときまつてゐるのに、居たつて詰らない。」彼女は、はね返すやうにいつた。

そして、それから四五日の間に、嵩張つた目ぼしい物を風呂敷に包んで、日が暮れてからぼつり〱、小石川の小日向臺からはあまり遠くない處に住んでゐる彼女の母親のところへ持つて歸つた。

母親は、江戸川の石切橋を渡つて牛込の方にいつた赤城の森の下の方に住んでゐた。

去年の三月の初に、二人で始めて微かな新世帶を持つた時一所に臺處道具などを買ひに歩いて、彼女が、

「簞笥と長火鉢はどうします？」と、新世帶には何より無くてはならぬものと、傳統的に確信してゐるらしい口調で訊いた時、中野は、もとよりそんな餘分の金を持つてゐなかつたし、そんな形式を整へるほど、彼女との同棲に心が彈んでゐなかつた。勿論彼女と同棲する時にも、ひとゝほり體裁のいいことをいつて、鄕里の方から多少の送金を仰いだのであつたが、それまで三四ヶ月ばかりの間戀愛關係のやうな狀態で苦しい思ひをしながら逢つてゐた時分には、毎日顏を見てゐたかつたが、さていよ〱思ひを遂げて、一所にならうとする段になると、永い行末のことを考へてみて、此の女を一生涯の妻としていゝか惡いかといふことを、もつと深く思つてみなければならなかつた。

彼は鄕里から受取つた金を懷中にして、その晩早速彼女に呼び出しをかけて、人通りの少い夜の街をぶら〱歩きながら話した。鄕里から無心を聽いてくれて金を送つて來たらすぐ世帶を持たうと約束して、自分も樂み、女をも樂ませてゐたのであつたが、その金を手にして、切なる望みが叶ふことになると、中野の心は妙に躊躇して來た。彼はその金を懷中にして、女に逢ひに行く道々、「いつそ此の金をそつくりこのまま與れてやつて、約束を違へた言譯けにして、ここで綺麗に手を切つてしまはうか。」といふ心もして來た。彼女を妻にするといふ自分の心が果して何時まで持續するであらうかと考へてみると、それには殆ど自信がなかつた。今切れてしまふ方が賢いといふことは中野にも明瞭に分つてゐた。それにもかゝはらず、彼は、毎日彼女の顔を見てゐたかつた。一日傍に引着けて彼女の愉快さうな聲を聽き、笑ふ口元や女らしい匂のする襟頸のまはりを見てゐたかつた。そして、この金があれば、それが自分の思ひのまゝに、明日から實現できるのだとおもふと、今まで三月四月の間逢つてゐながら、少しも念頭になかつた、彼女の肉體によつて自分以前に、三年も四年もの長い間享樂した男のあつたといふことが、俄に降つて湧いたやうに、彼の心頭に暗鬱な雲を卷き起して來た。彼は何ともいへない厭嫉の感に胸が詰つたかと思ふほどな失望を覺えた。

「金は、いつてやつたとほり送つてくれた。」

彼は進まぬ足どりで暗い裏町を歩きながらいつた。

女は、小足に追掛けるやうに歩いて來ながら、

「好かつたですねえ。お國でも御承知なんですね。」

「まあさうなんだ……」彼は、餘程、今途中で考へてゐたことを言ひ出さうかと思案したが、少し言葉を曖昧にして、

「僕は何だか先の人間のことが氣になり出したんだ。」

すると、彼女は、夜目にも絶望の色が分るやうな息づかひであつたが、

「だつて、それはもう二年も三年も前に綺麗に話のついたことなんですもの。」

「いや、それは分つてゐる。」

「ぢや、どういふんですよ。」

「そんなことぢやないんだ。たゞ先のことが何だか氣になつて邪魔になるんだ。」

「それは、わたしが、まだ手附かずのむくの身體でないのはあなたにお氣の毒だと思つてますさ。」

「……さうかといつて、どんな女でも可いから初めての者でありさへすればいゝとも思へないし……」

彼は半分獨りごとのやうにつぶやいた。そんなことをいひながら、明日までも待てないやうに、その足で、行きつけのある家へいつて泊つてしまつた。

そんな次第で、家財道具といふほどのものも持たなかつたが、一年あまりの間には、彼女が時々風呂敷に入れて持つて來たりしたものがいゝ加減の嵩になつてゐた。

「簞笥が一つなくつちや。……押入れの中が形付かなくつて。……わたしのを持つて來てもいゝでせう。」

彼女はそんなことをいつてゐたこともあつた。その簞笥は彼女が初めて京橋の方へ嫁した時に兄から買つてもらつたものであつた。それは、彼女の話で、いつか聞いてゐた。しか

し彼は、その簞笥を自分の處へ持つて來ることを拒んだ。一度、たしかに、彼女が先に嫁してゐた先で使つてゐたらしいそこの家の姓を書き記した小風呂敷を所持してゐるのを認めて、彼は胸を突上げるやうな反撥の惡感を覺えたことがあつた。それをいふと、それつきり彼女は風呂敷を隱してしまつたことがあつた。

三

そのうち四月も盡きた。が、彼女は歸るともいはなかつた。彼も歸れともいはなかつた。互にそのことは口に出すことを欲しなかつた。今までのとほり一日々々と、惜しい日が經つていくばかりであつた。しかし、もうそこまで來ると、のこりの十日の日は瞬く間に過ぎてしまつた。やがて母と兄と郷里を出立したといふ手紙と電報とがつゞけさまに到達した。それから一日置いて明日は午頃の汽車で東京に着くことになつた。彼女は、まだ少しばかり、こま〳〵したもので持つて歸るものが殘つてゐた。

「わたし今晩自家へ行きます。」彼女は夕飯をすましながら、さういつた。

すると中野は、彼女の顏色を讀まうとするやうに、臆病な顏をして、

「……歸るの?」

「どうせもう居ないんですから。同じ歸るんなら夜の中がいい。」

中野は今にも泣き出しさうな顏をして、

「お前が去つてしまつたら寂しいよ。」

訴へるやうにいつた。彼女は、ちよつと笑ひながら、

「ほゝ……寂しいたつて、それは爲樣がありませんよ。今晩一晩だけですよ。明日はお母さんや兄さんが來るし、賴んである女中も今晩か明日の朝來てくれることになつてゐるんでせう。」

「うゝ、それはさうだけれど。……お前が去つてしまふと寂しくつて、今晩寢られやしない。明日歸つたらいゝぢやないか。今晩は持つて行くものだけ持つてゐておいて。」

「あなた、自分の都合のいゝことばかりいつて。今更らそんなことをいつたつて爲樣がないぢやありませんか。それで此處に居る人はいゝでせうけれど、明日晝日中歸つて行かれやしない。」

「それは、さうだけれど、明日だつて、人が見てゐるわけぢやないし、歸るのやら、行くのやら分りやしない。たゞ、これから夜になるのに俺一人では寂しいよ。」

「ほゝゝ」彼女は又笑つた。

「ぢや、とにかく持つて行くものだけ持つていつて置いて、又戻つて來ます。」

彼女も强ゐて行かうとはいはなかつた。中野は、それで、いくらか元氣づいたやうになつたが、やつぱり寂しかつた。どうして自分は、この女を、彼女がまだどこへも嫁さない時分に知らなかつたのだらうと、そんな愚かしいことまで又思つてみたりした。

彼女はそれから薄暗いランプの灯を背にして茶の室の押入れからこそ〳〵何か取出して風呂敷にまとめてゐたが、やがて羽織を着て、中野が一人ぼんやり机に向つて坐つてゐる奧の三疊の室に入つて來て、

「そんなら、わたし一寸行つて來ます。」といつた。

「あゝ、……歸つて來るんだらう。」彼はわざと氣輕な調子でいつた。

「…………」

彼女は返事をしなかつた。

「ねえ、今晩はこゝへ戻つてくるだらう。」

彼は、對手が默つてゐるのでさういひながら、彼女の方を振向いた。と、彼女は、彼の方を背にして、壁の方を向きながら、

「これから自家に歸つて、一生下らなく暮すんだ。」身にかゝつた聲で、つぶやくやうにいつた。

中野は、その一と言で、はつと胸を突かれたやうな氣がした。それが自分の責任であるやうな苦痛と悲哀を感じた。慰めの言葉を口にしようとしても、それが餘りに出鱈目のやうで、やゝ少時の間默つてゐたが、

「そんなことはないよ。……又どうかなるよ。」彼は、何を意味してゐるのか、自分にも、はつきりしないことをいつた。

尙ほしばらくの間、彼女は壁の方を向いたまゝ無言でそこに突立つてゐたが、やゝあつて、濕つた聲で、

「そんなら、ちよつと行つて來ます。」

といつて、小脇に風呂敷包みを抱へて出ていつた。

中野は、彼女の出ていつたあとで、獨り、つまらなさうに先つきからのまゝ、机の前に、つくねんと坐つたきりで居つた。彼女が今先き啣ちた言葉がまだ耳に膠り着いて、胸の中に暗い悲しい時雨雲をつけてゐた。「これから自家にかへつて、一生下らなく暮すんだ。」中野自身にも、まだ三十までには一年間のある年齡であつたが、今まで步んで來た道々十年餘の間、幾度か、そんな運命の巷に立つて行路難を啣ちたか知れなかつた。しかし、自身には、何か知ら、少くとも彼女よりはまだ幾らかの幸運が行く手に待つてゐるやうな心地がするのであるが、明日から自分の家を出ていつた彼女には、物質的にも何にも、明るい幸運が待ち受けてゐる希望は殆ど無かつた。後半生不幸の連續であつた彼女の母親の老いた姿と、零落のどん底に沈淪してゐる彼女の兄とが、二人でしがない同居暮しをしてゐる、悒せき裏屋住居の、醜い現實の姿

が彼の眼にまざ〳〵と浮んで來た。この間から、話の樣子では先の赤城下から、山吹町の裏の方に引越して來たといふことであつたが、山吹町といへば、つい三四年前までまだ殆ど早稻田つゞきの田圃であつたものだ。そこの濕地へ。一軒建ち二軒たちしてゐる間に、いつの間にか、そこが新開地の街になつてしまつた。生活の溢れものが、忽ちのうちにそこへ群り寄つた。

中野は、そこの裏長屋に住む者の生活を思つてゐると、人生が灰色に見えて來た。しかし、人の心は勝手なもので彼は彼女の、これから歸へつて行く家のことを思つてゐると、人間生活の慘めさが胸を傷めるのであつたが、今、この離れがたい心の絆を截斷つてしまへば、自分の前途には、どんな好きな女でも意のまゝに選ばれるのだといふ氣がして、あんまり感傷的になつてゐるのが愚かなことのやうに思はれた。そんなことを、とつおいつ、考へ直しては打消しゝて、何度となく一つことを頭の中で繰返してゐるところへ、がらりと表の入口の開く音がして、彼女が歸つて來た。

それでも先刻出ていつた時とは、いくらか氣分が變つたと思はれて、外見だけは平常のとほりになつてゐた。中野はその顏を見ると、自ら欺いてゐるやうな氣持でゐながら、やつぱり、いくらか心が落着いた。

しかし、もう、二人ともあんまりそのことに觸れぬやうにしてゐた。それは晩秋の宵で、疊數の十二三疊しか敷からない悒せき小家であつた。方々を鎖してしまふと、家の中が暖氣にこもつてゐた。

二人は、その頃習慣で互に足と足と向け合つて寢床をもうけてゐた。中野はそのまゝ默つて眠つてしまふのが何となく氣に濟まなかつた。それは自分の慾情からでなく、彼女に對して忍びぬやうな氣持からであつた。

…………

「今更そんなことを、爲樣がないぢやありませんか。」彼女は勃然として跳ねつけた。

中野自身にも、そんなことは、彼女に對して出來ないことだと承知してゐるだけにさういはれてみると、今までの彼女とは大分異つたものに對するやうな氣持がして、一寸恥辱を感じた。そしてその恥辱をまぎらさうとする、照れ隱しに、わざとづう〳〵しい態度になつた。

「あなた人を馬鹿にしてゐる。」彼女は強くいつた。

四

その翌日になつた。昨日のとほり麗かな初夏の日は朝から輝いてゐた。母と兄とは昨夜は靜岡に一泊して、その日は丁度正午すぎに東京に着くことになつてゐた。

彼女の歸つて行く時間は刻々に迫まつて來た。出されてゆく家なんだもの、もう何も爲なくつてもいゝんだと、遠から彼女は何度そんなことを思つたか知れなかつたが、長い間の習慣で、やつぱりそこに居る間は、さうも出來ないのが彼女の性質であつた。

毎日のとほり十時頃には魚屋が荷を擔いで來た。この頃の季節で、海から上つてくるものには、眼を迷はすやうに、數々の品があつた。彼女は中野に相談して小鯛と夕方の刺身などをあつらへた。

それから、

「魚ばかりでもいけないでせう。」といつて、朝から野菜の甘煮などをこしらへてゐた。

そんなことをしがらも、彼女は心は落着いてゐられなかつた。

「もう、あなたステーションにお迎へにいかなけやならんでせう。」

「なに、一時頃着く筈だから、まだ大分間がある。」

「でも、もう十時半だ。」彼女はさういひながら、食べる物の支度が一とほり形付いたところで、あとの洗ひものなどは、その朝來た女中に頼んでおいて、自分は手を拭いた。それから一寸身づくろひをなほして、羽織を着て火鉢の前に改まつて坐つて、ゆつくり二三服吹つてゐた。

中野は、平氣でこれを見てゐていゝか、わるいかわからないやうな氣がしてゐた。一旦別れた以上は、これつかぎりもう生涯會はないのだと思ふと、男と女との關係くらゐ親疎の極端なものはないのであつた。彼等が別れるの別れないのと、二人の間で、いひ暮してゐた時分に、彼女はこんなことをいつたことがあつた。

「わたし、先の時にも兩方でさういつて別れて來たのです。いくら廣い東京に居たつて、又、いつ何處で不意に出會はないとも限らない。そんな時に、じつと顏を見てゐながら默つてゐるのは厭な氣がするにちがひないからそれと氣がついたら、互には一寸頭を下げるくらゐのことはしようといつて、出て戻りました。」

それを中野は今思ひ浮べてゐた。

「ぢや、もう、これで、わたし、いよ〳〵歸ります。……あなたもゝうステーションに行かなけりやならんでせう。」彼女はもう、何も斯も一切のことを押包んで、しまつてゐるやうに、微笑を浮べながらいつた。

「あゝ、もうぼつ〳〵私も出掛けていゝ時分だ。」

「それでは、わたし一足先きにゆきます。」

それを機會に彼女はついと立ち上つて、針仕事の小道具などを入れた小さい包を袖で抱へるやうにして、靜に出ていつた。昨日までとちがつて、女中の手前もあるので二人とももう餘計な口を利かなかつた。中野はその後から無言のまま入

口のところまで立つて出たが、彼女は向うをむいたまゝ、下駄を穿いて、そのまま外に出た。

　中野はそれから一旦座敷の方に引返へしたが、心の中でたうとう行つてしまつたと思ふと、堪らない哀愁を感じて、そのまま靜としてゐられなかつた。ものゝ二分とも立たないうちに、女中に遠慮のない戸外でもう一遍彼女に口をきかうと思つて、そうつと急ぎ足に、型ばかりの門の外まで追掛けて出て見たが、五六間先で道が廻り角になつてゐるので、勿論もうそこには姿は見えなかつた。又廻り角まで行くと、女の足でも早いもので、もう後から、いゝ加減な聲を掛けても屆かないくらゐ遠くの方へ歩いていくのが見えた。膝の下に敷く針道具と二尺の物尺が肩のところに二つ窺いてゐるのが遠くから眼に入つた。

　中野はすぐ引返して家の中に入つたが、ステーションに行く時間も迫つて來たし、それに、強ゐて氣持ちを轉換させようとして出掛けた。

　改札口のところに立つて、長いプラットフォームをぞろぞろ歩いて來る群衆を見張つてゐると、母と兄とをその中に發見した。二人とも二三年見なかつた間に格別變つてもゐなかつたが、母は長い旅をして來たせいか何だかひどく日に熱けたやうな顏をしてゐた。母は今から十二三年前に、亡くなつた父と東京見物に來たことがあるので、東京はこれで二度めであつた。ステーションからすぐ俥に乘つて小石川小日向の家に戻つて來た。女中がひとり留守をしてゐた。

　母は家に入つて、そこに坐りながら、ほつとしたやうに、

「やれ、まあ〳〵。たうどう來ました。」といつて、そこらをじろ〳〵見廻はしてから、

「それで、今のはどうした。」穩かな調子で訊ねた。

「もう歸つた。」

「あゝもう歸つたか。それで機嫌よう？」

「えゝ、機嫌よう……つい先程まで居つたのだ。」

「さうか。……」

　母は靜かな言葉でさういつて、やゝ失望したやうな色を浮べた。彼女の考では、たとひ中野からそんなことをいつて越しても、自分が東京について本人にも會つて、みたうへで、好ささうな者であつたなら、なるべく居つてもらふやうに話をしようと思つて出て來たのであつた。

　で、その時は來早々のことで、その話は一時それきりにしたが、一と落着きしてから、母は又そのことをいひ出した。

といふのは、中野の甥で、母には孫にあたる、中野の姉の息子が東京のある中學校に來てゐて、それが去年半年ばかり、中野がその女と同棲したところへ來て同居してゐたことがあつた。彼女はその時中野の甥に對しても深切に世話をした。甥が暑中休暇で歸郷して、東京のおばさんは好い人だと自分

の母親に向つて賞讚したところから、そのことは中野の姉からすぐ中野の母の耳にも傳はつた。中野はその姉との間に三人の兄弟があつて、今度アメリカに行くのは、すぐ上の兄であつた。五人の姉弟で、一番年長の姉から見てゐると、弟達の嫁は平素からどれも氣に入らなかつた。そこへ、自分の長男が東京から歸つて來てそんな話したので、彼女はすつかり伜のいふことを信用したのであつた。實際、今までそんな遠くへ子供を手放して出したことのない親の身にしては、毎日家に居つて見てゐる子よりも見てゐない子のことの方が案じられるのは道理であつた。その子が家庭に居る時のやうに温い待遇をせられてゐるといふことは、どんなに親の心を喜ばしたか知れなかつた。

　そして中野の母はいふのであつた。

「この間中十日ばかりお姉さんの處へいつて居るに、其話をしたら、お母さんそれでは、今度そのことで東京へ行くんですかといふから、いや、さうばかりでもないが、そのことがまあ主な用ぢやといふと、そんな憎まれ役を止めた方がいゝ厚吉の話にも、えらい好い者ぢやといふから、それよりもなるたけ居つてもらふやうに話をする方がえゝでせうといふとつた。お姉さんのいふのでは、お前の方が好うないんぢややうといふて居つた。……お前は何にでもぢき飽き性ぢやから困る。」

　中野は、母や姉の噂してゐることが本當にちがひないとおもつたがそれよりもつと深い性理上のことについては説明することが出來なかつた。又そんなことをいひ出すことは好まなかつた。

五

　それから一週間ばかりは、中野は、何かと母や兄との間に取交はされる水入らずの情話で氣をまぎらされてゐた。何處かへ一所に行つてみようといつても、母は、何處へも行きたくない。たゞ家にじつとしてゐるのが一番氣樂でいゝといつて外へはあんまり出たがらなかつた。兄も出航までには、まだ、ざつと一と月近くの餘日があるので、ゆつくりしてゐた。彼等は三人のほかに聞いてゐないので遠慮なし鄕里の方の噂話に、長い日を、毎日のやうにいひ暮してゐた。それでも彼等には倦かぬ興味があつた。

　そのうち渡航の手續や船のことなどで兄は一日横濱に出掛けた。

　中野はもうこの間から、彼女がその後どうしてゐるか、そつと様子を見に行きたいと思つてゐるのであつたが、何だか、自分の理性に對して恥かしいやうな氣がするので、出來るだけ感情を抑制してゐた。でも、遠くといふのでなく、小日向の臺町を下りて江戸川橋を渡つて山吹町の道を少し行くのだ

と聞いてゐたから、いつてみるにはわけはなかつた。彼は午餐の散歩かた〴〵、聞いてゐたとほりに探ねていつた。野川の溝渠に架つた宗傳寺橋を少しいつて右側の自轉車屋と鹽煎餅屋との間に、なるほど狹い露路があつた。それを入つて行くとまるで貧民窟のやうな濕々した處に、見るから味氣ないやうな雜普請の陋屋が並んでゐた。それを、ずつと奧まで入つていくと、地尻に共用井戸があつて、すぐそこの流しに向いた水口の處で、派手な唐棧の筒袖袢纏を着た彼女が、ちやうど鮪の刺身を料理つてゐるところであつた。まだ朝から頭髮も梳かないと見えて、寠れ放題に亂してゐる。向うでもすぐ中野を見付けて、

「あら。」と、飛び立つやうな笑ひ顏を見せて喜んだが、すぐその後から、はら〳〵と涙を流して眞赤に顏を染めながら、

「こんな汚いところへよく來て下すつたねえ、よく來て下すつたねえ。」と、奧の淺い家の中に氣をかねたやうに、低い優しい聲でいつた。そして濡れた手を前掛けで拭きながら、それで又眼を拭いた。涙のあとは又笑顏になつて、

「どうしました。お母さんは別にお疲れも出ませんか。」

「え〻、何事もない。」

「さうですか。それは好うござんすねえ。……………よく來て下すつた。隨分汚い處でせう。」さういひながら、又留め度なく湧き出る涙を拭いた。

「こんな汚い處ですけれど、まあお上んなさい。あちらから。」

「え〻、でも。」中野は躊躇してゐた。

「なに構はないです。あなたさへ汚くつて厭でなかつたら。」

「でも居るんだらう。」

「え〻、お母さんも兄さんもゐますけれど、構ひませんよ。あちらの入口の方から。」

中野はさういはれるま〻に井戸の脇から入口の格子戸の方に廻つた。彼女は早速そちらへ出て來て中野を座に通した。上つてみると、なるほど悒せき家であるが、茶の室の方とは上り口の二疊ですつかり境をされてゐた。彼の通つたのは三疊であつたが、その向うにも〻う一室あつて、どれも小間だが四室くらゐあるらしかつた。

彼女はお茶など持つて來て、

「あなたもう午飯はおすみになつて、内ではこれから。」

「私は今濟んで散歩に出たところなの。」

「さう、ぢや、ゆつくりしてもい〻でせう。」彼女は、や〻聲をひそめながら、懷しさに堪へられないやうに、嫣笑嫣笑しながらいふのであつた。

「でも、可けないだらう。……何だか變ぢやないか。」中野も低聲でいつた。

彼女は頭振りをふつて見せながら、

「うむ、なに、い〻んですよ。」と、ひとりで呑込んだやうにいつて、

「一寸午飯を濟ましますから、待つて〻下さい。」と又涙ぐんだ眼に熱情をこめて優しくいつた。

中野はやつぱり彼女を思ひ斷ちがたく思つた。質の惡い猫毛の頭髮を手束ねにして振り亂してゐるのであるが、決して縹致の好い女ではなかつたけれど、何といつてもまだ二十八か九である。それに眉毛のはつきりしたのと、口元が小く引締つて、それに相當した齒並の小く揃つてゐるのが、彼女を思ひ染めのそも〳〵から中野の愛慾をそ〻つたのであつた。中野と同棲する以前、彼等が相知つたのは、牛込の盛り場に近い、ある割烹店に彼女が女中をしてゐた時であつた。彼女は、その一年ほど前に、四年ばかり下町の方に嫁いてゐた夫が道樂者であつたところから、たうどう夫婦別れをして家に出戻つてゐた。親元——といつても父親は彼女が生れて二た月もた〻ぬに强盜の爲に不慮の横死をして亡い人であつたが——へ歸つてくると、長い間、亭主を持つて散々苦勞をしたその氣疲れが一度に切つて出て、彼女はそれから殆ど一年ばかりの間、ふら〳〵病のやうになつて寢たり起きたりしてゐた。割烹店の主人は、彼女の家がまだ今のやうに零落しない時分から懇意であつたので、そんなにしてゐては身體の爲にも良くないから、氣晴しと思つて少し手傳つてもらひたいといふやうなことから、彼女は、秋口からそこへ手傳ひに來てゐた。中野が彼女を見たのはそれから間もなくであつた。

女の方でもおほかたさうかも知れぬが、男には、たれでも好きな女の型があるものだ。中野は、五六年前まだ、學生であつた時分、鄕里の代議士を、芝濱のある、旅館に訪問した時、料理屋を兼ねてゐた、その家の江戸前の女中の一人を見て、まだ、さういふことにあんまり眼の開けてゐなかつた彼は、その女のすつきりとした容姿風俗にひどく魅惑を感じたことがあつた。その頃芝濱にあつたそれ等の旅館は一と頃の紅葉館などと同じやうに美しい女中を置いて、代議士などを顧客に隨分風俗を紊してゐたのかも知れなかつた。學生の中野は、その時あ〻、自分も他日志を得たならばあんな好い女に思つたり思はれたりしたいものだと、そんなことを思つて自己の勉强心を鞭撻したことがあつた。それは、頭髮を銀杏返しに結つて、黑繻子の半襟のか〻つた薄い藍色の粋な唐棧の袷衣を着て、色の白い、目鼻立ちから口元の引締つた、二十三四の、あまり大柄でない女であつた。中野は、代議士の座敷にゐた間、その女を恍惚として見てゐた。……

すると、彼女をその割烹店で初めて見た時、彼は、何よりも先きに五六年前芝濱の旅館で見たあの女中を聯想した。性來耽美的氣分の多い彼は、それが高尙な趣味であつたかどうかは別として、薄い藍色の唐棧を着た江戸前の女が、どうしてか、馬鹿に好きであつた。……

彼女は、暫くそこに手傳て居つた時分から常に着古してゐた派手な唐棧の袢纏を着て、井戸端の流しで鮪の刺身をこしらへてゐた。さすがに中野の家に居つた間は殆どそんな風俗はしなかつたが、親元に戻つて來ると、露路裏相當に身裝を窶して働いてゐるのであつた。

彼は一人そこにじつと坐りながら、あゝして母親と獨り者の兄と三人貧しいながらも魚を料理つて水入らずの食事をしてゐるのを見ると、露路の内の居まはりが汚いことなど少しも邪魔にならないで、以前のとほり彼女が手器用に拵へてくれる食膳がどんなに食味を唆るかも知れないと思つた。

そんなことを思つて、ぼんやりしてゐると、

「お待たせしました。えへゝゝゝ。」と低い聲でいつて、笑顏をしながら彼女が入つて來た。

「どうしてゐます。女中さんよく働いてゐますか。」

「あゝ、まあ何か斯かやつてゐる。……五目飯をこしらへることが上手でねえ、それに私も好き、母や兄もそれは好いといつて、よくこしらへてゐる。」

「さうですか、この頃は筍が安いから……」

「さうだ。……しかし、もう歸らう。」彼は遠慮するやうにいつた。

「まあ、もうちよつと待つてらつしやい。自家に御用はないんでせう。」

「うゝ、別に用もないけれど、可けないだらう。」

襖の方を眼で指しながらいつた。

「お母さんは今出て行きますよ。」

母親は、弟息子が少し先きの方で商賣をしてゐるのと、他にやつぱり同じ區内で姉娘の嫁いでゐる處とへ毎日通つていつてゐた。

「だつて兄さんがゐるだらう。」

「ゐたつて大丈夫ですよ。」

「でも可けないよ。」中野は、顏を合はすのが濟まないやうでもあり、又面伏せなやうでもあつた。

「こちらへ來る氣づかひありませんよ。自分の方でも厭ですもの。午飯が濟んだあとは毎時も晝寢をすることにきまつてゐるんですから。」

彼等の父親は三十年も前にそんな横死をしても、土地家屋のあつた相當な老舖であつたので、この兄の代になつても、古川に水絶えずの譬で、まだ何がしかの財産も殘つてゐたが代々家業の商買の道には明るい癖に酒飲み道樂の爲に到頭身上を呑み潰してしまつて、二度も三度も持つた女房には死なれたり、去られたりして、四十の聲をきいてももう女房を持つ力もなく、又その氣もなく酒一つを命の慰めに、今は古、い知邊の世話で、さる局の郵便配達をして身を過してゐるのであつた。

中野はそれから暫く二人で差向ひでゐた。十日ばかり離れたと思つてゐた彼等には又火が燃え附いたのである。

六

一度道がついてから中野は、それが又足癖になつて、兄や母の話し對手をするか、職業の方の用事をしてゐる時のほか家に落着いて居られないで暇さへあれば一寸々々彼女の處へ出掛けていつた。毎日のやうにつゞけて行くこともあつた。

「一度こゝで御飯の御馳走になりたいなあ。」彼は、そこで彼女が手料理のものを食べたかつた。

「え、こんな處で不味くなかつたら、どうぞ食べて下さい。」

彼女は、いそ〳〵して支度をするのであつた。それからは、そこで時々食事をしてゐた。

彼女は、中野の處から歸つてくると、すぐ翌日から輸出物の羽二重のハンカチーフの縁をかゞる内職をしてゐた。問屋から原料を持つて廻はつて來た。同じ露地の中にもそれをしてゐる家が段々あつた。茶の室の肱掛け窓を開けると、少しの空地を隔てゝすぐ見通しになつてゐる向うの隣の家では四十恰好の肥つたお神が二三人の娘等と家内中で一日それを本職にしてやつてゐた。

「あのお神さん、面白い女だ。酒が好きらしい。朝から晩まで醉ぱらひのやうな大きな聲で歌をうたつてゐる。」彼女はそんなことをいつてゐたが少しく考へ深さうに聲を沈めて、

「あなたが來て下さるのは好いけれど、昨日だつたかあの神さんの聲で、わたしなんか幾ら困つても妾なんかにはなりたくないといつて話してゐるのが聞えてゐました。それは、ただ何かの話にいつたのでせうが、何だかわたしがこんな手内職をして、あなたが始終井戸端を通つて入つて來るのを見て知つてゐますから、そんなことでもしてゐると思つてやしないか、そこはお可笑なもので、こちらの僻見で當て擦られてゐるやうにも聞きとれる。」

彼女は少しは愚痴も交つてさういふのであつた。中野はそれを聞いて、尤もだと思つた。自分の方から彼女を出して置いて、又此處へやつて來ることは、世間體からいつても、今彼女がいつてゐるやうな境地に彼女を置くことになるのだ。それをさうでなくするには、彼女を元のとほりに自分の方へ呼び戻すか、さもなければ、綺麗さつぱりと關係を絶つてしまふべきである。彼もやゝ悄然として、

「うゝ、それは尤だ。やつぱり來ない方がいゝんだよ。」と、自分を責めるやうにいつた。

「なに、來て下すつてもいゝんだけど、あのお神さん地聲が大きいもんだから、何でもなくいつたのでせうけれど、わたしがやつぱりこんなことをしてゐると、氣が僻むんですよ。」

彼女はさういひながら、少しの間も手を休めるのが惜しい

といふやうに、仕事臺に張つた白羽二重の縁にせつせと針を運んでゐた。朝から一日白い物を見つめてゐると眼が痛くなるといつて眼鏡をかけて、枠臺と首つ引きをしてゐた。

中野は、生活することが、いかに苦痛であるかといふことを、面りに見るやうで、ひどく感傷的な氣持ちになつてゐた。以前よく愛讀してゐた一葉の「にごり江」といふ作の中にある、銘酒屋の女と無理心中をする蒲團屋の源七の女房が悒せき裏店住ひをして下駄の緒かなんかを綃ける内職をしてゐるところが、息詰まるやうな生活苦を、さながらに描いてゐると思つてゐたが、彼はそれを思ひ出した。彼女をこんな慘めな境遇に置いたのは自分が全部の責任者でないまでも、少しは何とかしなければならぬ責任があつた。それをどこまでも思つてゐると、彼は堪へられない人間苦を感ずるのであつた。勿論彼女は、中野と同棲する前から既に今のやうな境遇に置かれてゐたのであつたから、それが一年餘の間偶々中野と一所に生活してゐる間だけ、どうかかうか手内職をしないで居られたのであつた。それを考へると、今の彼女の生活は彼女にとつて、ありうべきことなのであるが、中野は今までの行きがかり上無關心に觀過することが出來ないやうな氣がするのであつた。しかし、それも畢竟中野の感傷的氣分に過ぎないのであつて、現實的に彼女の生活をよりよくすることについては、どうすることも出來なかつた。

中野はそれから我慢して四五日も露地の中を訪づれなかつた。そしてその次行くと、彼女の方でも待ち焦れてゐたやうに、嬉しさを顏に浮べて、

「おや、いらつしやい。あれから、どうしてゐらしつて、仕事の方がいそがしかつたのですか。」といつたやうな調子であつた。

七

中野の兄は二十日ばかり滯在してゐて、五月の末に到頭横濱から出航渡米した。母も横濱まで見送つてもいゝと思つたが、又、そのために却つて強い離愁を感ずるやうでは母にも兄にも思ひ切りがよくないと思つたので、中野は、つい、大川を一つ向う岸に越すぐらゐに手輕にいつて二人に、それとなく氣勢を附けた。……すると、これは、その時から四年めの秋であつた。兄はシヤアトルの客舍で敢えなく急死してしまつた。

二十日ばかり東京に居る間にも格別見物にも出なかつた。一度中野と二人で淺草の方を見て歩いて、中野もその時はじめて十二階の頂上まで登つてみた。

「五六年働いて金が出來たら、歸りにゆつくり見物する。」といつて、殆ど家にばかりゐて休息してゐた。

兄を立たしておいてから一と月ばかりして同じ臺町の近い

處に移轉した。彼は、母と二人に女中を一人使つて、これから理想的な生活をしたいと思つてゐたのであつた。それで、もつと家らしい家を心がけてゐたところ、ちやうど新築の家が大日坂のすぐ上のところに出來てゐたのでそこを借りて引越した。それは中野も一寸知つた資産家で今度三戸ばかり新築した、貸家の一つであつた。廣い宅地内の茶園畑の一隅に建てたもので、高い芝生の土手を取り廻はして、それに小松が並んでゐたりした。庭も小びろく、湯室が附いて四室ばかりの家であつたが、木の香の新しいそこに移り住んでみると中野は、どうか、せめてこれくらゐの家に永續して住むことの出來るだけの生活をしたいと思つた。家賃は一ヶ月十四圓五拾錢であつたが、それでも前の家よりは七圓高くなつた。女中は一と月ばかり居た先のがいけなくつて歸してしまひ、今度は出入商人の妹で十五六の小女を、向うから頼まれて置くことにしたが、母は、年寄りのやうな女の子だといふくらゐ、おとなしく、よく働いた。

兄からは四十日ばかりして無事に上陸したといふだけの端書が屆いた。やがて、すが〳〵しい夏が來た。中野は、出來るだけ一日々々の生活が樂しいものにするやうにつとめようとしたけれど、何となく生存上の不安に襲はれてゐた。それは經濟的に生活の基礎が不安定であることが重なる原因であつたが、その基礎を築き上げるのは、結局文筆の人としての自分の價値を高めることであると思ふのであつたが、それは何處まで行つても容易に到達せられさうになかつた。彼は幾度となく深い失望に沈んだり、懷疑に陷つたりした。そして徒らに年ばかり取つてゆくやうな寂しさを感じた。自分の生活はこれから先どうなつて行くものとも分らなかつた。勿論そんな不安や失望が發作的に襲ふて來ることもあつたが、まだこれでも三十には來年まで間のある年であることを思ふとそんなに悲觀ばかりしてゐる譯でもなかつた。今に、何か、自分には大きな仕事が出來るものゝやうに考へられたり、また、何か知らん非常に幸福なことが自分を見舞ふて來るやうにも思はれたりしてゐた。けれども文筆の人としてまだ一家を成してゐるといふわけでもないので、專ら筆のみに依つて生活をすることは不可能であつた。それは、彼自身の技藝が未熟であるといふばかりでなく、その時代の社會狀態や文化の關係などから、人間生活に直接に用のないものを世間がある程度以上には要求しなかつたのであつた。

それは、日露戰爭の始まつた年であつた。その爲の不況からといふわけではなかつたが、その前から二年ばかり續けて從事してゐた、ある書肆の仕事も終了したところで、彼はその夏からは全く定收入の途が絕えてしまつた。そんなことを中野は母には話さなかつたが、この後いつまでも母を自分の處に置いておくことは出來ないとおもつた。鄕里では、田舍

のことだから、東京にゐるやうな面白さはなかつたが、生活の安定といふ點からいふと、中野の實家では、そんな不自由な生活をしてゐるわけでもなかつた。それとゝもに、わづかに五六ケ月ばかり東京に來てゐたのでは、話し對手になる馴染の出來ることもなかつた。どちらを向いても知らぬ者ばかりのところに年老いた母を孤獨にして置くことは、あまりに察しのないことであることが中野には分つて來た。生活の費に離れた彼は、これからは今までよりも一層苦しいやり繰りをしなければならぬことになつた。自分は爲方のないことゝしても母にそんな慘めな生活を見せることは堪へられないことであつた。九月の末に、鄕里から、伜を東京の學校に寄越してゐる中野の義兄が見物かた〴〵迎へに來て、たうとう連れて歸つた。

いよ〳〵歸ると定るまでは、歸心矢の如くであつた彼女も自分が歸つたあとの中野一人のことを思ふと、親心には、やつぱり氣がゝりであつたが、それも結局どうすることも出來なかつた。

八

明日は母と義兄とが歸國するといふ前日の午後であつた。ある知つた者の世話で來ることに賴んでおいた女中が來てくれた。それまで一と月ばかりの間、あんまり年の若い少女は寂しがつたりして、居着かないので、女中なしにやつてゐたのであつた。世話をしてくれた者の話では、今まで女中などにいつたことはなく、一度か二度嫁いだけれど、緣運が惡くつて家に戾つてゐる。極く堅い家だけれど、こちらのお人柄も分つてゐるので、向うへもそのことをよく話して來てもらふやうに賴んだといふのであつた。

で、その日の四時頃世話をした者と一所に來たところをみると、なるほど、そんなに身柄のわるい者でもなかつた。その時中野は一寸出てゐたが、歸つて來た時にはもう臺所で用事をしてゐた。大柄の背の高い女で、氣のさすやうな大丸髷に結つてゐた。

中野は、それを一と眼見ると、心の中で、これは困つたなと思つたけれど、默つてゐた。その晩義兄などと皆で夕食の時に、母は彼女の容姿をしげ〳〵打ちまもりながら、名をたづねたり、身の上のことなども二三言訊いてゐた。

「わたくしは明日立つて歸りますから、どうぞ何分よろしくお賴み申します。」と、改つていつてゐた。

中野の母は、惡い血統とか甚く素性の惡い者でないかぎりどんな者でもいゝから彼に早く妻を持たせたいと思つてゐるのであつたが、どこにもそんな心當りはなかつた。そして、いよ〳〵歸國するとなると、後髮を引かれるやうに心殘りであつた。

中野は、停車場まで見送つていつて、歸つて來たのは午過ぎであつた。五月の初から五ケ月も居る間に母に安心を與へたり、樂ませたりするやうなことは碌にしなかつた悔いが、母の立つて去つた後の家に戾つてみると、新しく胸に迫つて來た。しかし、それも自分の業が未完成で、從つて生活の基礎が不安定な爲であると思ふと、爲方のないことであつた。もし、その生活の不安定な自分が全責任をもつて、東京のやうな荒海の中に漾ひながら母を扶養しなければならぬのであるとしたら、どんなに、自分達親子は慘めなものであつたかも知れぬと思つてみたりしたが、その點は、幸に母は鄕里に歸りさへすれば安全なのであつた。中野はそんなことの意識から、自分はどんな生活の冒險をしても顧慮するところはないのだと考へることがあつた。

折しも十月の初め頃によくある濕つぽい天氣模樣で、母の歸つたあとの家の中は殊更に、すうつとしたやうにうすら寂しかつたが、昨日來た女中は、留守の間に座敷を淸々するやうに綺麗に形付けてゐた。そして彼の歸つて來たのを氣輕な調子で出迎へた。彼女は、自分では三十二といつてゐたが、名をお半といつて、變に意氣に聞える名であつた。一日二日居る間に性質は善良な者であることは分つたが大きな丸髷に結つてゐるのが、彼には厭に氣になつて爲方がなかつた。そして口元のあたりがお婆さん口で、全體の相好が頓狂面であつた。こんな者が丸髷頭で家に居られては、第一出入りの商人などの思惑もちよつと變であると思つたが、それでゐながら、その女が家にゐるのが何となく樂みのやうでもあつた。もし、うつかりしたことをして、後に退引ならぬことになつては困るといふ臆病な心がわづかに中野の行狀を抑制してゐるばかりであつた。そして又、それくらゐの年頃の男と女とが二人きりで一つ家の中に起臥してゐて、どうもないのが不自然のやうでもあつた。夕食の後など二人の間に互の身の上ばなしが交換されたりした。

「お半さんもまさか、今まで一人で居たわけでもあるまい。どうして家にゐたのだい。」

「ずつと家に居たんですよ。ほゝゝ」

「だれもそんなことを本當にするものはない。」

「でも本當なのですもの。」

「いや、それを强ひて訊かうとも思はない。」

お半は笑ひながら、

「本當はね、わたし東京には十何年も居なかつたのです。」

彼女の家は本鄕の湯島あたりと、最初世話をする者から聞いてゐた。そこに母親と、まだ祖母なども一所に居るといふことであつた。

「そんなに長い間東京に居なかつた。何處に嫁いでゐたのだい。」

「嫁いてゐたのぢやないのです。」

中野は冷笑するやうに、

「そんな言譯をしなくてもいゝ。どこにいつてゐたの。」

「足利。」

「織物の盛な處だな。」

彼女の話では、そこに父親と一緒にいつて何か商買をしてゐたが、父親が死んでからも自分一人でしばらく繼續してゐたが最後にいけなくつて去年東京に戻つて來たといふのであるが、はつきりしたことは分らなかつた。中野もそれを、もつと突留めて訊かうとする興味も持てなかつた。

「あなた、どうして先の奥さんとお別れになつたんです。大變取り廻はしのいゝ、賢い人だつたといふぢやありませんか。」

「うゝ、さうでないこともないが……」

中野は、彼女を知つた者の中に、そんな噂をしてゐるものがあると思ふと、やつぱり悪い氣はしなかつた。そして、その許が當つてゐると思つた。

「……もつと若くつて好い女が欲しいんだ。」

お半は苦い笑ひやうをした。そんな會話の交換は、二人をして、一週間も經たない間に、ある夜、彼等の寢室である八疊と六疊との境界の襖を越えしめた。中野にしては、勿論それは唯本能的の戯れに過ぎなかつた。秋の夜のうそ寒い衾の肌觸りが、そんな欲望を唆つたのであた。

「いけないわよ、いけないわよ。わたし、そんなことをしたら、先の奥さんのやうに素直に歸らないわよ。」

中野はそんな場合を豫想して、此の間から躊躇してゐたのであつたが、それは何でもないことであつた。そして一ト月ばかりさうしてゐる間に、何につけて、彼女の情味が段々深くなつて來るのが彼には氣づかひであつた。ほんの着替えだけ持つて來てゐたので、だん／＼寒くなるから裕衣を取つて來るといつて、一度自家へ歸つた時母親と一所に戻つて來た。

「娘がいろ／＼御厄介になります。」

といつて、母親は禮を述べた。まだ五十をちよつと出たくらゐで、小肥りのした上品な婦人であつた。母親に比べると娘のお半の方が餘程生まれ落ちてゐた。

だん／＼日を經るにつれてお半が腹の無い、氣立の好い者であることも分つたし、祖先が德川の士族であつたりすることもわかつたが、彼女とまた曖昧な同棲生活をする氣にはなれなかつた。それに、この先、中野の生活はいよゝ切迫して來ることになつてゐた。それをお半に知らしたくなかつた。しかし、彼女に知られては困るから知らしたくないのでなくお半とはまだ世帶の遣り繰りを語り合ふほどに親密になつてゐたわけでもなかつた。中野は、そのことを思ふと、やつぱり先の女の方が張り合ひもあるし、又目先きも利いてゐて、相談効ひがあるとおもつた。

お半に淡い興味を持つてから、山吹町の露地を訪れるのもいくらか間が遠くなつてゐたが、この先、とても、今の處では持つていけさうにない世帶を仕舞ふについては先の女よりほかに話してみるところがなかつた。

「どうも今居る女が變な女なんだよ。なに、別に質のわるい者でもないが、このまゝ二人きりで長く居つたら、第一世間體もよくないし。それに私も定つた收入が、どこからも全く入らなくなつたから、爲方ない、當分又、元の下宿屋へでも轉がろうと思ふ。」

「そんなこともないでせう。一旦持つた所帶を仕舞ふ方が餘程世間體がわるい。あなたさへ堅くしてゐれば、そんな人が居つたつて一向差支へないぢやありませんか。よく働いてくれゝばよござんすよ。」

「えゝ、それは、氣さくによく仕事はしてくれるけれど。何だか大きな丸髷をてら／＼さしてゐるんだ……」

「ほゝゝ、何かお妾でもしてゐた人でせう。足利へいつて西洋料理屋をしてゐたといふんでは。」

「うゝ、どうもさうらしい。なに、それだつて構はないけれど。」

お半は黒縮緬の大ぶ疲れた羽織を着て來た。

「わたし、一ぺんあなたの家へ行つてみませうか。どんな家かいつてみたい。」

「あゝ、來て見てもらひたい。あの家にも長く居られないかも知れぬ。」

中野は、本當なら、母が居る時分に彼女を伴れて來て會せていゝのだと何度思つてみたか知れなかつた。けれども、自分には、彼女よりももつと優れた女が、奇しき縁の糸に操られて何處か未知の處に存在してゐるやうな氣がしてならぬのであつた。

その晩夕飯後に彼は出直して彼女を迎へに來た。そして家へ連れていつた。

「お半さん、今晩はお客樣をつれて來た。」彼は、わざと朗かな調子でいつた。

「よく來たわねえ。」といつた。

彼女は座敷の端に行儀よく坐つて輕い挨拶をした。お半は妙に顔の神經を硬ばらせながら、腹のない蓮つ葉な調子で、

「へえ、なか／＼好い家ですねえ。」彼女は、坐つたまゝ押入れや天井など見廻はしてゐた。

「まあ、こつちい來て見て頂戴。好い家でせう。」

「えゝ、ありがとうございます。……こゝを仕舞ふのは惜しい家ですねえ。」

「さうなんだけれど……爲方がない。」

中野は、お半にも、もう此の間から、今月中で、こゝの家は都合によつて疊んでしまふことだけは話して置いた。

山吹町の女は、それから直ぐに歸つてしまつた。中野のこぢれた本能的な欲望は、二人の女を見ると、無價値なお半一人だけを見てゐる時よりも、いくらか、ちがつた刺戟からお半に對する興味を唆られた。

九

お半を出して歸すについては、山吹町の女が相談に乘つた。

「お半さん、あんたにも長く居てもらひたいんだが、私もこれから先、家を持つて食つていけるか、どうかさへ分らない場合なんで、まあ暫くこゝを仕舞つて又下宿屋へでもゆかうかと思ふ。二た月ばかりの間大變よく氣を附けて働いてもらつて、有難かつた。」といつて、中野はその月の給料のほかに尙ほなにがしかの金を包んでお半の前に置いた。

そのことは、お半も、もう此の間から、なしくづしに聞かされてゐたので、別に驚きもしなかつたし、中野も、先の女に別ればなしを持ち出す時ほど心臟に喰入つた問題でもなかつたので、事もなくさういつて退けた。

「さうですか、こんなに戴いては、どうも濟みません。」

「なに、もつと、どうかしたいんだが、今の私では思ふとほりにならない。」

「ほんなら戴きます。どうも有難うございます。」

お半は、それでもさすがに腹の中には、いろ〳〵に怨みがあつた。その夜寢てからであつた。彼女に襖ごしに

「わたしは餘程馬鹿です。」といつにない荒い調子でさういふのであつた。

「どうして？」中野は襖のこちらから訊いた。

「本當にわたしは馬鹿だとおもふ。」

中野はなるたけそつとして置く方がいゝとおもつたが、それでもやつぱり氣になるので、默つてゐられなかつた。

「なぜ。」

「なぜつて馬鹿です。……自分の身のほども考へないで、あなたに思ひかけたりなんかして。」

中野は、どの女に對しても濟まないやうな氣がした。

「そんなことはないさ。私だつて困らなかつたらお半さんに長く居つてもらひたいのが山々なんだもの。まあ諦めてもらふさ……。」

彼は寢床の中で身體を海老のやうにして、

「あゝ寒い……お半さん……お半さん、一寸こつちへおいでよ。」

お半は暫く默つて答へなかつた。

それでも翌日になると、三十過ぎた女だけにわりに捌けたもので、お半は例の黑縮緬の羽織を着て改つた別れを告げて歸つていつた。

「あなた下宿屋にいつたら葉書で敎へて頂戴。お邪魔に行きますから。」

「あゝ、知らせる。遊びに來てくれたまへ。」

中野は、彼女が、執拗に附き纏ふやうな質の惡い女ではないことは分つてゐたが、でもこんな女にいつまでも馴々しくされると困るとおもつたが、憎む氣は少しもなかつた。

お半が歸つてしまふと、それでも家の中が急にがらんと寂しくなつた。中野は耐え性もなく、女ッ氣の絕えてしまつた家に一人でゐる心もしなかつた。そしてその晚早速先の女の處をおとづれた。彼女は二三日前から先の山吹町から音羽の九丁目の母や兄と一所に家を引越して居た。

そこへいつて、お半が無事に歸つたことを話すと、彼女は心が輕くなつたやうな顏をして、

「がら〳〵した人の好い女のやうだつた。」といつてゐた。

それから家の中では思ふやうに話が出來ないので二人は連れ立つて外に出て步いた。彼等は互にどちらが口に出すともなく、又一所になるよりほかなかつた。

中野は、灯影の暗いところへ來た時に、何となく腹に寢かしておくことが出來ないやうな氣がして、ふら〳〵とお半とのことを口に出してしまつた。と、彼女は步いてゐた足を思はず停めて、

「ぢや、やつぱりさうだつた。厭になつてしまふ。わたし、きつとそんなことぢやないかと思つてゐたんだ。……もうわたし、あなたの傍に居る氣もしない。」

彼女はすつかり氣のなくなつたやうにいふのであつた。中野は、飛んだことを饒舌つてしまつたとおもつた。

「だつて、いゝぢやないか。もう去つてしまつたんだもの。」

「去つてしまつて、これからだつて、あなたのことだから會ふと思へば、どうでも出來る。」

「又會ふくらゐなら、何も別れて歸しはしないぢやないか。」

彼女は、忽ち湧いて來た胸の不快に、他のいふことは碌に耳にも入らぬやうに、

「わたし、もうあなたとかうして步くのも厭になつてしまつた。……あなたもう自分の家へお歸んなさい。わたしももう自家に歸りますから。そしてもう、あなたとは、これつきり逢はないことにしませう。……わたしがやつぱり自分でいけないんだ。」

彼女はもう思ひ定めたやうに述懷した。

「そんなことをいつたつて爲樣がないぢやないか。お半を返したのは、やつぱりお前の方が好かつたからぢやないか。はゝゝゝ。」

「厭ですよ、もう。わたし、あんな女と比べてもらひたくない。……あんたよく來たわねえ」……と、彼女は、此の間の晚、中野の家に來て　はじめてお半を見た時、お半のいつた

ことを、憎々しく口眞似しながら吐き出すやうにいつた。お半は下口唇が變な形に突出てゐたので、そんな口つきをして見せた。

「あなたもう、こゝからお歸んなさい。そしてもうあなたも明日から、わたしの處へなんか來ないで下さい。」彼女は頑强に言つた。

そこの坂の上にすぐ中野の家はあつた。中野はその晩足ついでに彼女を引張つてともかくも自家へ伴れて來るつもりであつた。彼女もそんな心であつた。

「ぢや俺は、そんなことをいふのではなかつた。」

彼はだいぶ悄氣てゐた。

「いはないたつて同じこつてす。」

「でも、いはなけりや、お前は知らないでゐるもの。」

「一體、どのくらゐそんな關係をしてゐたんです。」

「うゝ、どのくらゐつて、……たつた五度ばかしだ。」

「五度も！」彼女は本當に驚いたやうにいつた。

「だつて、お前が先に嫁いてゐた時には四年も五年も居つたぢやないか。」

「それは、ちやんとして嫁いでいつたのですもの。あなたのとはちがひます。」

「いやちがはない。やつぱり同じことだ。」

「それごらんなさい。あなたゞつて好い氣持ちはしないでせう。そして、その爲めに、わたしが、どうあつてもいけないといつて、わたしを歸したでせう。とにかくもう長う短ういはないで、これでお互に別れた方がいゝんですよ。……わたしも折角かうなるのもお互に盡きぬ緣があるのだから、親や兄姉にも一應相談して、又一所になるものなら一所になつてもいゝと思つてゐたところだけれど、お半とそんなことをしたと聞いて、もうあなたに愛想が盡きた……又どうしてそんなことをする氣になつたんでせう。」

「それを今更いつたつて爲方がないよ。」

「あなたが、お半とそんなことをしてくれなければよかつたんだがなあ。」

「だからもうしないよ。」

「もう、しないつて、もう駄目です。」

「おい、そんなことをいつまでも夜道に立つて、いつてゐないで、これから、自家へ行かうよ。」

「厭ですつたら、わたしもう、あなたといふ人を見るのも厭です。わたし自家へ歸りますから、あなたも一人で自家へおかへんなさい。」

彼女は氣づよくいひ放つて、暗い方へ、すた〳〵歩いていつた。

「おい〳〵。ねえおい！」と、彼は力をこめた聲で四邊を憚りながら、背後から呼んでゐた。（をはり）

（大正十五年十二月作、中央公論掲載）

雪の日

あまり暖いので、翌日は雨かと思つて寢たが、朝になつて見ると、珍らしくも一面の銀世界である。鵞鳥の羽毛を千切つて落すかと思ふやうなのが靜かに音をも立てず落ちてゐる。私は斯ういふ日には心が何時になく落着く。さうして勤めの無い者も仕合せだなと思ふことがある。私達は門を閉めて今日は打寛いで、置炬燵に差向かつた。さうして斯ういふ話をした。

「お前は何かね、私と斯うして一所になる前に、本當に自分の方から思つてゐたといふやうな男があつたかね。」

「えゝそれは無いことはありませんでした。本當に私がお嫁に行くんなら、あんな人の處に行きたいと思つたのが一人ありました。それが屢々小說なんかに言つてある初戀といふんでせう。それは一人ありましたよ。あつたと言つてどうもしやしない。それこそ唯腹の中で思つてゐたゞけですが、あんな罪も無く思つてたやうなことは、あれつきりありませんね。丁度あの、それ一葉女史の書いた「十三夜」といふ小說の中に、お關といふ女が錄之助といふ車夫になつてゐる、幼馴染みの煙草屋の息子と出會す處があるでせう、些とあれ見たやうなものです。

「私の家、その時分はまだ米屋をしてゐた頃です、ですから最早十年にもなります、すると問屋から二十ばかりの手代が三日置きくらゐに廻つて來るんです。それがいかにもシャンとした、普通な口數しか聞かない、温順しい男で、私は「あお嫁にゆくなら斯ういふ人の處に行つて一所に稼ぎたい」と思つて――その時分は、米屋の娘だから矢張し米屋か酒屋へ嫁に行くものと唯、普通のことしか思つてゐなかつたのです。何でもあの時分が大事なんですねえ。

「そりや緣不緣といふこともあり、運不運といふこともありますが、矢張しそれ相應な處へ、好い加減な時分に、サッサと嫁いて了はねば飛んだことになつてしまふ。何うしたつて私とあなたとは相應な緣ぢやないんですものねえ。――さうして私、その手代が三日置きに廻つて來るやうな氣がしましたよ。すると、米搗きの男なんかゞ、もう私の心持を知つてゐて、その男が來ると、姉さん來ましたよと言つて戲弄ふん

です。戯弄はれても此方は何だか嬉しいやうな氣がしました。」

「フウ。それから何うなつたの。」

「別に何うもなりやしません。唯それだけのことで、——さうしてゐる内に兄さんにあの嫁が來て、それから、私は自家を飛出すやうになつたのが失敗の初りになつたんです。

それから先の連合に嫁いで散々苦勞もするし、そりや面白いことも最初の内はありましたさ。けれど罪もなく、何うしようなんといふ、そんなは端無い考へもなく、「あんな人が好い」と、本當に私が思つたのは、其時ばかりです、先の連合に嫁いたのだつて、傍の者や、向ふがヤイ〱言つてくるし、其處へもつて來て、自分は、もう、あんな女房を取ると直ぐ女房に卷れて、妹を袖にするやうな、あんな兄の世話には一生ならぬ。自分は自分で早く身を固めようと思つてゐた矢先だつたから、それほどにいふものならと、つい彼樣な處へ嫁くやうになつたんです。けれどもその時は、何も此方から思つたんぢやない。私の思つたのは其の手代きりです。——何うしましたか、私は自家を飛出してから妙な方に外れて了つたから、唯それだけのことです。」

「フウ、……さうだらう、お前にはそんなだらしのないこともなかつたらう。他人の腹の中は割つて見なければ何とも言へないといふけれど、——そりやさうだらう。お前が本當に男の肌を知つてゐるのは、私と先の亭主とだけだらう。斯うして長くゐれば大抵察しられるものだよ。……私には男だけに大分あるよ。」

「あゝ、さう〱それから斯樣なことがまだありました。」

女は段々往昔の追憶が起つて來るといふやうに、自分の心の底に想ひ沈んでゐるといふやうであつたが、自分の話に興を感ずるといつたやうに斯う言つた。

「私は別に標致と言つては、そりや好くないけれど、十七八から二十頃までは皮膚の細かい——お湯などに行つて鏡の處に行つて自分でも何うして斯ふ色が白いだらうと、鏡に向いて自分でも嬉しいやうで、ツト振返つてお湯に來てゐる人を見廻すと、皆な自分より色は黑い。さう思ふと——若い女といふものは可笑しなものですねえ。——さう思ふと自惚れるんです。その時分は、私はそりやお洒落でしたから。——皆な屢々スマちやんくらゐお洒落はないと言ひ〱したくらゐです。

「すると、——あれは何時でしたか、何でもお母さんと私と神樂坂の傍の輕子坂の處に隱居してゐた時分です。

「あれは丁度私が二十歳の時分でした。春の宵の口に、私獨りでお湯から歸つて來ると、街の角の處で、何處の男か、若い男が突立つてゐる。此方は誰か知らないのに、先は私の名を知つてゝ「おスマさん〱」と言つて呼び留める。

私はギヨツとして、此樣な時、生中逃げたり走つたりするのは好くないと思つたから、靜と立ち止つて、「何か御用ですか」つて落着いて、さう言つた。落着いてゐるやうでも、此方はもう一生懸命で、足がブル〱して動悸がして、何を言つたか自分の聲が分らない。……そりや私、幼い時分から一寸したことにも吃驚する性質でしたから。……一遍十六七の時分に、お勝手をしてゐたら、内庭の米俵の蔭に、大きな蛙がゐるのを知らずに踏み蹴つて、私その時くらゐ吃驚したことはなかつた。「キヤツ」と言つて飛び上つて、胸がドキ〱して何時までも止まない、私あんまり吃驚させられて悔しかつたから、いぢいぢして大きな火箸を持つて行つて、遠くの方から火箸の尖で打つて遣つた。散々ぱら打つたら漸くの事で俵の奧の方に、ノソ〱逃げて入つた。さうすると、夜になつてあんなに非道く蛙を打つた。怨んで出やしないだらうか、火箸で燒傷をして困つてゐやしないだらうか、枕の所にあの何とも言へない色をした蛙が來てゐるやうで、私蒲團を頭からすつぽり被つて明朝は早く起きて、米搗きの男を賴んで、積み俵を取り除けて貰つて見よう。さうしようと思つて、一晩寢られなかつたことがありました。」

私は「ウム〱」と言つて聞きながら、十年も經つてから、十六七の時分に蛙を火箸で打つたことをよく覺えてゐたり、それよりも蛙を踏み蹴つたくらゐを、さも大事のやうに思つたり、それを火箸で打つたのを、夜中苦に病んだりする性情を靜と默つて解釋しながら、氣樂な、落着いた淡い興味を感じて そんな女の性質が氣に入つた。さうして、

「それからその男の話は何うした」と前の話の續きを促した。

「別に何うと言ふことはない。それだけの話ですが、『何か御用ですか』と言ふと、男の方でも何でだか極りの惡るさうに先方だつて聲が顫へてゐました。

『あなたは私を知らないでせうけれど、私は能くあなたを知つてゐます。どうぞ私の言ふことを聞いてくれないでせうか』つて言ふんです。私は『さうですか、何ういふ御用か知りませんが、御用があるなら、私にはお母さんがあるから、お母さんにさう言つて下さい』つて、さう言つて遣つたんです。さうすると、男は何とも言ひ得ませんでした。

「けれども私は何うなるかと思つて恐かつた。さうしてゐる處へ丁度都合よく道を通る者が來合はしたから、私はそれから逸散に驅けて戻りました。」

「フウ、そんなことがあつたのか」

私は斯う簡單に言つた。

私が女と一所になつたのは、言ふまでもなく、普通の手續きで斯うなつたのではない。妙な仲から今のやうになつたのである。女は其の時、最早散々苦勞を仕拔いて所帶崩しであつた。私と斯うなつたに就ても、それから一所になつてから

も、四年越の今日になるまでには、一口にも二口にも言ふことの出來ない――つまり主として私の性格境遇から由來した種種雜多な悲しい思ひ、味氣ない思ひもした。固より面白い思ひもした。また不思議な嫉妬もした。それが爲めには私は身體が痩せるまでに悲み悶えた。併しながら、それが何ういふことであつたか、此處ではそれを言ふまい。――或は一生言はない方が好いかも知れない。いや、言ふべきことでないかも知れぬ。斷じて〳〵言ふべきことでない。何となれば自己の私生涯を衆人環視の前に暴露して、それで飯を食ふといふことが、何うして堪へられよう！

私は、まだ此の口を糊するが爲めに貴重なる自己を賣り物にせねばならぬまでに淺ましく成り果てたとは、自分でも信じられない。

此の創痍多き胸は、それを想ふてだに堪へられない。此の燒け爛れた感情は、微かに指先を觸れたゞけでも飛び上るやうに痛ましい。

で、私は前以て言つたやうに唯「フム、そんなことがあつたのか」と言つた。

斯う言つて、私は、其の自分の言葉を不圖想つて見た。私は、女が、淡い、無邪氣な戀をしたこともあつたかと思つたが、私は、それを嫉ましいとは想へなかつた。

私は、女と一所になつてから今では何でもない先の夫との仲をひどく嫉んだ。現在不義せられてゐるもの〻如く嫉んだ。私はそれが爲に嫉妬の焔に全身を燃した。それが爲に絶えず喧嘩をした、さうして喧嘩をしながらも熱く愛してゐた。愛しながら喧嘩をした、反感と熱愛と互に相表裏して長くつゞいた。その時分、女は屢々斯ういふことを言つた。「あなた位可笑しな人は無い。自分で出戻りだつて構はない、と言つて一所になつてゐながら、一所になれば、出戻りは厭だといふんですもの。之れが仲に立つ人でもあつて一所になつたのならば話の持つて行き場もあるが、二人で勝手に一所になつてゐて、あなたにそんなことを言はれて、私は――立つ瀬がない。」

私はこの道理に無理はないと思つた。さう思つたけれども一所になる前には邪魔にならなかつた先の夫の幻影が、今は盛に私をして嫉妬の焔に悶えしめたのであつた。

「フム、そんなことがあつたか。」

と言ふ私の言葉は、何うしても最早、大した感興から發せられたものとは聽へなかつた。さうして私は女に向つて斯う言つた。

「お前とは屢く喧嘩をしたり、嫉妬を燒いたりしたもんだなア。あれつきり段々あんなことは無くなつたねえ。」

「え〻、あの頃は、あなたが先の連合と私との事に就てよく種々な事をほじつて聞いた、前の事を氣味惡がり〳〵聞いた」

「ウム。いろんな事を執固く聞いては、それを燒き〳〵したねえ。それでもあの年三月家を持つて、半歳ばかりさうであつた、が秋になつて、蒲生さんの借家に行つた時分から止んだねえ。」

「え〻、あの時分は貴下が最早何うせ、私とは分れるものと思つて、前のことなんぞは何うでもい〻と諦めて了つたから」

「だつて、また斯うして一所になつてゐるぢやないか。」

「…………」女は不思議のやうに、また此の先き何うなるのであらう？と思つてゐるもの〻やうに暫時默つてゐた。

するとそんなことは考へて居たくないといふやうに、

「私、あの時分のやうに、もう一遍あなたの泣くのが見たい」

「俺はよく泣いたねえ。一度お前を横抱きにして、お前の顔の上にハラ〳〵涙を落して泣いたことがあつたねえ、別れなければならない、と思つたから……」

「え〻。」

斯う言つて、二人は幾許か其の時分のことの追憶の興に促されたやうに、凝と互に顏を見合はした。

「俺は最早、あんなに泣けないよ。」

「さうですとも、もう私を何うでもい〻と思つてゐるから」

「さうぢやない。最早何もそんなに強ひて泣く必要がなくなつたからぢやないか」

と、言つたが、私は女の言ふ通りに、果して女に對して熱愛が薄くなつた爲めに、二人の此れから先の關係に就いて泣けさうになくなつたのか、それとも歳月を經てゐる間に知らず識らず二人の仲がもう何うしても離すことの出來ない、例へばランプとか飯茶碗とか言つたやうな日常必須の所帶道具のやうに馴れつこになつて了つたのかも知れぬ。私はそれが何れとも分らなかつた。

「お前先の人と別れた時には泣いたと言つたねえ」

「え〻、それや泣きましたさ」

「私と若し別れたつて泣いてはくれまい」

「そりやさうですとも。貴下と私とは若しそんなことがあればあなたが私を棄てるんだもの。……私はもう大した慾はありません。一生何うか斯うかその日に困らぬやうになりさへすれば好い。貴下も本當に、早くも少し氣樂にならなけりやいけません。仕事を精出して下さいよ。」

「まあ、そんな事は、今言はなくつたつて可い。……先の別れる時に泣いた。……お前一旦戻つてからも、後になつて、お前が思つてゐるのを聞いたとかいつて、見舞に來て、今までの通りになつてくれつて、向ふでまたさう言つて頼んだんだらう。」

私はこれまでにもう何度も聞き古したことを聞いた。

「えゝ、さう言つて、たつて頼みましたけれど、私どうしても聞かなかつた。そりやあなたと違つて親切にやあつた。畢竟親切に引かれて辛抱したやうなものゝ、最初嫁いで行き早早『あゝこれは好くない處へ來た』と自分で思つたくらゐだから、何と言つたつて、もう歸りやしません。」

「私も、最早何時かのやうに、お前の先の連合のことを、私とお前とが篤るやうに『あゝもしたらう、斯うもしたらう』と思ひ沈んで嫉くやうなことはしない、……けれどもお前だつて少しは思ひ出すこともあるだらう。」

「不斷は、そりや忘れてゐますさ。けれども斯樣な話をすると、思ひ出さないことはないけれど、七年にも八年にもなることだから忘れて了つた。もうそんなおさらひ話を廢しにしませう。」

「まあ〳〵。好いぢやないか。して聞かしてくれ。……偶には、それでも會つてみたいといふ好奇心は起らないものかねえ。」

女は默つて靜と考へてゐたが、少し感興を生じたやうな顏をして、

「あゝ、さう〳〵、一度斯ういふことがありました。あれは何でも貴下が函根に行つてゐた時分か、それとも國に行つてらしつた時分か、確か去年の春だつたらうと思ふ。私、買ひ物に×町の通りに行つて、姉と一所に歩いてたんです。

さうして呉服屋であつたか、八百屋であつたかの店前に、街の方を背にして立つてゐると、傍に立つてゐた姉が、『あれあれ』つて不意に私の横腹の處を突くから私、何かと思つて『えッ、何ッ』つて背後を向くと、姉が其方ぢやない。彼方彼方つてまだ一間か一間半ばかしも行つてゐない方を顋で指し『間抜けだねえ。お前、あれが分らないか』と言ふんです、それが先の連合なの。――ですから姉が初め私の横腹を突いた時分に、丁度背後のところを通つてゐたくらゐでせう。それでもまだ先方の横顏だけは見えました。――それが自分の兄さんの嫁と二人連れなの。――私より兄さんの嫁は遲く來て私が戻つてくる時分には　以前は商賣人であつたとか言つて病身でひどく瘦れてゐたが顏立ちは好い女だから、病氣も直つたと見えて、私の知つてゐる時分より若くなつて綺麗になつてゐるの。お召かなんかの好い着物を着て、私の連合の方は矢張し結城かなんか澁いものを着てゐました。さうして二人連れ立つて行くんでせう。――牛込の奧に菩提寺があるんですから、屹度お寺詣りにでも行つたんでせうが、變なものですねえ。さうして二人並んで歩いて行くのを見ると、最早、緣もゆかりもないんだが、あゝして二人で一所に歩いたりなんかするやうでは何うかなつてゐるのぢやないかと思はれてそれが何だか腹が立つやうな、斯う憎いやうな氣がしましたよ」

別れて戻る時だつて、『私は牛込には先祖の寺があるから時時寺詣りには行く。其他何處で出會はぬとも言はぬ。會つたら惡い顏をしないで、普通に挨拶くらゐは互にしよう。けれどお前が今度持つ夫と一所であつたら、會つてもその人に氣の毒だから見ても見ぬ振りをして居らう。私の方でもし此度何時か持つ家内と一所であつても、その積りでゐてくれ』と言つてゐたんでせう。それが、あゝして兄さんの神さんと一所に私の直ぐ傍を通りながら默つて行くなんてことがあるものか。人を三年も四年も苦勞をさして置きながら、……と思つて、姉に何うだつた？　私を見たやうであつた？と聞くと、『姉は、あゝ知つてゐたやうであつたよ。二人でお前の方を見い〳〵何か密々話しながら行つたから』と言ふし、私は悔しくつて〳〵凝乎と向の方に行くのを何時までも見送つてゐる。と、餘程行つてから二人で私の方を振返つて見てゐました。

「私はそれから氣分が變になつて、直ぐ近處の姉の家に寄つて――姉が餅菓子か何か買つて行つて茶を入れたりなどしたけれど――私は茶も菓子も欲しくない。少し心持が惡いからと言ふと、姉もそれを察して、『ぢや少し横になつて休んだらいゝだらう』と言つて枕を出したりなどしてくれました。」

「フム、それから何うした？」私も何だか古い燒疵を觸られるやうな心持がして、少し呼吸が詰るやうになつた。

「ナニ、それから何うといふことはない。少し休んでゐると段々落着いて來たから『も少し休んで行つたら好いだらう』と姉が言ふのを、ナニもう好いよと言つて自家に戻つて來たけれど、私その日、一日貴下は留守だし、お母さんに、私今日少し心持が惡いから寢るよと言つて寢ました。……私、此の事は決して貴下には言ふまいと思つてゐたけれど、まあ斯う言ふ種々な話が出たからと言ふんです。それは變な何とも言へない氣分になりましたよ」

女は斯う言つて、罪深いやうな、私に濟まないといふやうな顏をして私の顏を見た。

私も、それを聞いて幾許か身體が固く縛られたやうな感じがして來た。さうして

「何日の事だえ？　それは」と聞いてもつまらないことを聞き直した。

「ですからさ、去年ですよ。――去年の春ですよ。――それから之れはその後でしたが、貴下が國から歸つて來てから、一度姉の處に行くと、姉の處の新さんが『何うです、おスマさん。雪岡さん今度國に歸つて、おスマさんの話しでも定めて來たのですか』つて聞いたから、『否そんな話は少しもなかつたやうでした』つて言ふと、新さんの事だから『雪岡といふ人は恐ろしい薄情の人だ。あんな薄情な人はない。私はまたおスマさんと一所になつて、始めて國に行つたんだから其

様な話でもあつたかと思つてゐた。どうですおスマさん、寧ろまた初めの人に戻つては何うです。あの人の方が雪岡さんより幾許親切だつたか知れやしない』つて、新さんも、姉から、先達つて其の先の連合が通つた時の私の様子を後で聞いてゐたもんだから、……それに引き更へてあなたが何時までも、他人の娘を蛇の生殺しのやうにしてゐるといふ腹で、ついさう言つて見たんでせう。新さんだつて本當にそんなことが出來るものぢやないと知つてゐますが」

私は、女が、情に脆いが、堅い確乎した氣質だといふことを信じてゐる。さうして斯う言つて見た。

「姦通なんて出來るものかね？」

「さう〳〵、それから一遍斯ういふことがありました。先の時分に、もう何うしても花髀の道樂が止まないから、いよいよ出て戻らうか何うしようかと散々思ひあぐんで、頭髪も何も脫けて了つて、私は自家で肩で呼吸をしてゐる。それでも五日も十日も自家へ寄りつかない。それを知つてゐるある男があつて、私が一人で裁縫をしてゐる處へ入つて來て、『私は前から貴女のことは思つてゐる。何うしてお宅ではあんなに何時までも道樂が止まないんでせう。貴女がお氣の毒だ』といふやうなこと言つて甘く持ち掛けて來るから、『私は幾許道樂をしても何をしても亭主があるのですから、たつてさうおつ仰れば、宿にも話しませう』とさう言つてやつたら、其の男は、それつきり顏を見せませんでしたよ」

私は、女の所謂、氣味を惡がり〳〵ほじつては嫉いてゐた時分に、聞き洩らしたことやまた自分と一所になつてからの女の心持の――其の一部分を斯うして聞いた。けれども私は最早以前のやうに胸のわく〳〵することはなかつた。それは何ういふ理由であらう？　愛が薄くなつたのであらうか。それともまた愛の爲めに其様なやくざな思ひがいつしか二人の仲に融けて流れて了つたのでもあらうか。分らない。

戸外の雪は、まだハタ〳〵と靜かに降つて、積つてゐた。

「やあ、大分種々な話を聞いたね。」

と、言つて一つの大きな欠伸をした。さうして、

「今日は一つ饂でも食はうか。」

「えゝ、食べませう」

「ぢや私がさう言つて來るよ」と、私は出て行つた。

（明治四十三年二月作、趣味掲載）

伊年の屛風

一

京太郎は、毎時の様に落着かない擧動で急々玄關から上つて來乍ら、

「おい、まだ來なかつたかえ？」

と、言つて奥の六疊で何か古切れの補綴物をしてゐる妻君の方へ行つて、向側にどかりと尻を落して兩足を投出して後の簞笥に背を寄かけて、

「あゝ〳〵！疲びれた！」と、一つ大きな生欠伸をした。

細君は先刻から京太郎の云ふ事には返事をしないで默つて口唇を小さく引結んでゐたが、糸を嚙み切るために初めて口を開いた。その序に京太郎の方は見ようともせず、

「貴下、そんな當のない事ばかり待つてゐないで、少し落着いて、その日の用事をなさいな。先刻も家主と車屋とが來ましたよ……」

京太郎が急々して疲びれて戻つて來たのは、何もこれといふ用事があつて出て行つたのではなかつた。唯、家内に居て机の前に坐つてゐても何だか色々なる事に追ひ卷くられてゐる様な心持ちがするので、理由もなくその邊をブラリと一廻りして來たのだつた。彼は自分で堅忍不抜にしようと思ふ事をやり徹す事が出來ないで、獨りで悶々してゐる上に、細君がその弱點をも十分に知つてゐる事をも知つてゐるから、氣輕に訊ねた事には答へられないで、そこに坐るが早いか、頭から鋭くきめ付けられたのに脆くも浮いた氣勢を折られて、悄氣てしまつた。

「うゝ！」と云つたまゝ、稍々しばらく氣を兼ねた様にして細君の顏を熟々見守つてゐた。さういふ時の京太郎の顏は、氣のいゝ犬が、自分を愛育してくれる主人に、「くうゝ」と低い唸る様な聲を出して纏ひかゝる様に、何もかも投げ出して細君に依頼ると云つた様に見えるのである。

京太郎よりも尚ほ以上に神經質な細君は、重ねて何か恐るべき事を警告するものゝ様な弛緩の無い語調で、

「屛風々々つて、明けても暮れても同じ事ばかり云ひ暮してゐたつて、貴下自分で云つてゐる様に、まだ來て見なけりや

何様物だかわからないぢやありませんか。…野島さんの方だつて、あゝして一と月近くも貴下の云ふ様に月給を貰つて暇を貰つて、伊香保へ行つて思ふ様に遊んで來たぢやありませんか。…先月の借錢がまだ片付いてゐないのに、呆然してゐる間に貴下また雜誌の仕事に追はれますよ。」

最初に、軟かい氣分でゐる處を突然手酷しくたしなめられたので、暫く順直にだまつて聞いてゐた京太郎も、疊みかけてツケ〳〵云はれるので、

「あゝ、もう可いよ〳〵。」と痛い處に觸らうとするのを、押しのける様な調子で云ひ消しつゝ、立ち上つて隣の六疊に出て行き乍ら境の襖をガタビシ閉め切つた。さうして端然と行儀よく机の前に坐つた。さうして、唯題目を記したばかりのや、二三行書きかけてそのまゝにしたのや、幾枚と數の知れぬ原稿紙の書き潰しの重ねたのを机の上から取上げて、コトン〳〵と音をさして端整に揃へて、その上に新しい用紙を重ねた。さうして稍としばらく考へ込んでゐる様であつたが、ものゝ十分間もすると、兩方の臂を机の上に載せてその兩手の人指ゆびを兩方の顳顬に持つて行つて、強く押し廻す様に動かした。が、それも長くはさうしてゐなかつた。今度は「ああッ」と、一つ大きな太息を吐いて、仰向に後方に倒れた。するとさうしてまじ〳〵と、たゞ煤けた天井を眺めてゐた。すると京太郎は襲はれる様に、急に自分の身が悲しくなつた。さうしてあれつきりだまつて、ゐるのかゐないのか解らぬ様に静かにしてゐる襖の彼方にゐる細君が、此の依頼ない自分をたよりにして今日を生きてゐる者かと思ふと、それが世にも哀れなものゝ様に思はれて、何うしてゐるか、傷はしいものを見ないではゐられない様な心地になつて俄かに跳ね起きて、また襖を明けてその方へ行つた。

細君は依然として沈默を守つてゐるが、襖を隔てゝゐても京太郎が何うして〳〵ゐるかといふ事をば、長い平常の觀察から、チヤンと目撃してゐる様に承知してゐるのである。「ああッ！ どうも頭が痛いッ。」と云ひ分けする様に照れ隱しを言ひ乍ら、また元の處に趺坐をかいた。

「でも最早來さうなもんだがなあ。…途中で若し間違ひでも出來ると大變だぞ！」

彼は對手が强ひて聞きたさうにもしてゐないのに、また自分でもそれを知つてゐるのに、心の雲霧を拂ひ除けようとする様な氣で、わざと快濶らしく聲を大きくして云つた。が、さう云ふと何だか、自分でフト戯談に云つた事が本當の様に思はれて來て、途中で汽車がどうかなつて大事な貨物が鐵橋から大きな河の中にでも落ちて不明らなくなつて了はねば好いがと云ふ懸念が起つた。

二

先達中京太郎が伊香保の温泉に行つてゐた時の事であつた。彼はその夏非常に夏まけした體を恢復しようと思つて力めて心を閑散にして、夏は雜沓してゐた客が退散した後の寂とした九月の温泉宿の二階に夜も午もなく、精神の髓まで湯に煮つた身體を縱に寢轉ばしたり、氣骨の折れない幾種かの新聞の記事を何度も繰返して目を通したり、さうかと思ふと突然起上つて、高い廊下に立つて遠くまで開展した吾妻の大きな谿谷を眺めたり、でなければ强い生樹の匂のする小暗い谿間の棧道を散步したりして、色々な空想にばかり耽つてゐた。彼はそれらの空想に暖められて、時には長い時間快い心地になつてゐる事があるけれども、それが餘り長く續くと、後には思ひ覺めに覺めてしまつて、今まで我知らず醉つてゐた頭は、丁度惡い酒の醉が覺めた時の様に、心が疲れて、獨り手に生欠伸が續いて、眼からは味のない涙が冷たく頰に流れ落ちるのである。さうして漸く現實の我に返ると、「かうして氣樂にしてゐられるのももう暫くの間だ。何時迄遊んでゐられる體ではない。近い內にはまたあの埃の立つ東京へ歸つて恐ろしい現實に接觸せねばならぬ。あゝ厭だ！〳〵。何うかして自分は人間を避け、世間を隱れ、凡ての競爭の環外に立つて生活したい。が、さうするには靜と遊んで居ても食ふに困らぬだけの資力がなければならぬ、どうかして金が欲しいな。西洋には、よく、餘りに深い因緣もない處から降つて湧いた様に遺産を貰ふ事がある。バイロンなどはその最も好い例である。イプセンは生活の戰場で惡戰苦鬪した勇士であつたさうだけれども、イプセンの作つたリツトル・アイヨルフの、何とか云つた男主人公は、もと貧困な學者であつた。がその細君が靑々と繁茂した森林などを澤山持つて嫁に來たので、俄に氣樂な境遇になり、爲たいと思ふ著述も思ふ様に出來、耽りたいと思ふ空想にも思ふ存分耽る事が出來、何でも何處かの高い山の頂點に上つて頻りに空想に耽つたさうである。あゝ！ 自分にも何處からか持參金をウンと持つて細君に來てくれる者はないかなあ。と云つた處で自分には古ぼけた女房が一人ある。あゝ〳〵何かに金がないかなあ。」京太郎は本當にこんな事を思つて日を消してゐた。

「親父がも少し何うかして金を蓄めておいてくれたなら自分は、さぞ氣樂に遊んでゐられるだらうに…、斯うと、故郷の自家には、何か金になる様な物はないか知らん。」

こんな事をも時々想ひ起して見た。

さうしてゐると、フト頭の隅の方に仕舞ひ込まれて、長い間忘れられてゐた古い記憶を想ひ起した。京太郎は獨り山の中をぶらつき乍ら覺えず「あッ！ 家には大變な物がある。あれがある〳〵！ あんな素晴しい物があるのに、今までそれを忘れてゐたとは、自分は何といふ馬鹿であつたらう。錢が欲しい〳〵と絕えず貧乏の苦勞をしてゐながら、あんな金の

蔓があるのに、何故自分は氣がつかなかつたらう。

彼はかう思つて、人氣の絶えた樹影で覺えず、小躍りをして悦んだ。

それは京太郎がまだ子供の時分の事であつた。――二十年も昔の春の事である。亡くなつた父が、座敷に古い六枚折りの大きな金屏風を一双立て並べて、之は伊年といふ大變に偉い畫家が描いた物で、これが果して本當の伊年に違ひないとすれば非常な寶物である。と、云つて見てゐたのを、彼も傍に居て見た事がある。それは子供心にも目のさめる様な華美な顏料を用ひて椿の花だの、菫だの水仙だの色んな草花を以つて全幅を埋めてあつた。彼は今端なくも父がその屏風を開いて立つて見てゐた時の事を歷々と記憶から呼び起した。さうすると、續いてかういふ考が京太郎の頭の中に起つた。

餘り豐でない自分の家には資産として自分の讓つて貰ふべきものは何もない。父が亡くなつてから、殆ど長兄の手一つで、自分が東京に三年在學の間の學資を給してくれたのを恩とせねばならぬ。そればかりではない。兎も角卒業するまで續けて行つてゐた學校に居たのは僅かに三年であつたけれど東京にゐて學資を仰いだのは、三年や四年ではなかつた。胃腸が惡いと云つて二三ヶ月も入院してゐたり、高價な本を買ふといつては金を取り寄せたり、試みにそれを總計に積つて更に普通の學資に換算して見たら月二十圓と見て、優に七八年間の學資に達するであらう。思へば父の亡い後もそれだけの費用を貰つてゐる身ではないし、矢張り實家の姓を何處までも名乘つてゐる私だ。これまでは、まあ不精々々ながらも云ふがまゝに金をくれてゐる。が、幾許、强請すればまだ幾分かは送つてくれる分とも、もう此の上に無心は云へないが、あれなら私にくれとは云へないまでも、どうかしてその利益の幾分かを分けまへする事は出來る。……十分に强請する事が出來る。親父の殘した僅ばかりの山林田畑に就いては、何とも云ふ事が出來ないけれど、あの屏風だけは自分もその利益の幾分に與る事が出來る。……が、まあそれにしても、自家には飛んでもない豪儀な寶物があつたものだ。親父も兄も美術の鑑賞眼などはない人間だが、伊年の草花の屏風とは何と思つても素晴らしい品である。

専門家でない人には或は光琳は知つてゐても、伊年は知らない人があるかも知れぬ。伊年は光琳の先驅者であり、また琳派の開祖でもある。琳派の繪畫は光琳に至つて渾成し圓熟したけれども、凡ての藝術が一つの新らしい傾向を分化せんとする場合に見る純朴で生氣に富んだ潑剌たる風趣はむしろ光琳よりも伊年が優れてゐるとさへ云はれてゐる。彼は又俵

屋宗達とも云つて、もと加賀の人であつたが、後に京都に出て大家の名を成した。それだけの事は、近年伊年の事を忘れてゐた京太郎も何かの序に美術史か畫人傳かで調べて見た事があつた。さうして上野の博物館の特別展覽會だとか、美術學校の記念日だとかに、帝室の御物として觀覽を許されたり、松平家だとか津輕家だとかの所藏として公衆の展覽に供せられたりする際、光琳とか伊年とかの屏風には彼は特別の注意を拂つて見てゐた。

尤も强ちそれは、亡父が伊年を所藏してゐたからばかりではなかつた。彼は一體日本在來の繪畫では、雪舟の流れを汲んだ墨繪よりも彩色の富麗な繪畫を好むのである。さうしてその中でも四條派とか狩野とか歌麿の浮世繪とか云つた様な色々な繪風もあるが、特に琳派の繪を最も好んでゐる。彼は伊年や光琳や抱一の華麗人目を眩する様な派手模様の色彩を好いてゐるのである。

かういふ心持が繪畫に對して始終京太郎の頭に纏綿してゐたから、彼が何か博物館や美術學校で見たり、または「國華」の複製などで見たりした、この美しい幻影は直ちに京太郎の故郷の家に藏してある筈の、小供の時分に見て美しいと思つた派手な伊年の屏風をも同じやうに美しいものと思つた。

さう思つて來ると、金色燦然たる六枚折りの屏風一双に以つて行つて、氣儘に顏料を吝まず描いてある草花が眼に見る様に思ひ浮んで來た。

「佳矣！　自分は僅かばかりの山林田畑は欲しくもない。自家に、あの、何々伯爵家だとか、何某氏所藏だとか、富豪の名を記して「國華」に複製せられて貴重せられ、或は博物館や美術學校で鄭重に取扱はれてゐる、あの宗達の屏風が一双あれば、他には何物をも欲しくはない。……自分の家に伊年の屏風がある！」

と、京太郎は幾度か心の内で歡喜の叫びを發しながら、一人で其處等の山路をはしやぎ廻つて珍らしく威勢よく浴舍の二階に戻り、その晩は、非常に興奮した氣分で長い〱手紙を故鄕の兄の處に書いた。

自家には、確か伊年の屏風があつた筈だ。あれは、もしそれが眞個の物だとすれば非常に貴重な品であつて、從つて頗る高價な物である。私は今から二十年ばかりも前、父上がそれを座敷に擴げて珍重してゐられたのを記憶してゐる。それから確か兄上が御婚禮の時にも座敷に立て聯らねてあつたのも記憶してゐる。私は東京で博物館などでも矢張り伊年の描いた物を見た事があるが、帝室の御物さへある位であるから、大變な立派なものである、に違ひない。さういふ品であるから、眞個の物を所持してゐる以上は、今別に金に困つてゐるといふのでないから賣らなくつても宜しいが、もし賣却するとすれば、少くとも五六千圓、高ければ一萬圓にも賣れる事

は受合ひである。私は自家に伊年の屛風があるといふ事をフト想ひ起して嬉しくつて堪へられぬ。これから、直ぐ歸國してあの屛風を取出して熟々と眺めたいくらゐに思つてゐるが大きな荷になつて厄介だけれど、鄭重な荷造りをして通運で東京に送つて見てはどうだらう？　此方にはまた眼の利いた人も多勢ゐるから、其等の人に見て貰つてもよろしい。

といふやうな事を、足許から鳥の翅つ様な口調で云つてやつた。夜が更けてから、石段で出來た伊香保の町を暗い足許を探る様にして歩いて、自分でわざ〳〵局までそれを出しに行つた。長い間ボショ〳〵音を立てゝ騷いでゐた女中までが、もう疾に上つて行つた。流しの板が乾いて了つて、濛々と、一坪の浴槽の見えぬまでに湯氣の立ち昇つてゐる寂然とした湯殿へ獨り下りて、冴えた頭がトロ〳〵と眠くなるまで五體を湯に浸けて尚ほも金屛風を思つてゐた。その晩京太郎は稀らしく幸福な氣分でグッスリ寢入つた。

三

それから三四日居て京太郎は東京へ歸つた。妻にも旨さうにその話を裾分けして聞かせた。故鄕からは早速返事を越したが、それは端書に、簡單に、成程自宅には其様な物があつたが、今急にと云つては忙しくつて運びをする暇がない。まあ其の内序があつたら兎に角土藏から一度出して見よう。色色な道具の一番奧の方に仕舞つてあつて面倒だから。と、云ふ様な至つて氣の無い文面であつた。

京太郎は、それを見ると躍起になつて、舌打ちをし乍らすぐさま此度は更に語勢を強めて、宛がら兄に向つて美術史の講義をする様な調子で伊年といふ畫家の說明をしたり、鑑定をして貰ふには至つて都合の好い、博物館で多年重要な處にゐる信用すべき懇意な知人があるからといふ様な事を書いたり、果ては此の廣い東京にすら大名華族か何かでなければ、珍藏してゐない様なそんな天下の至寶が私共の家にあるといふのは夢に夢を見る様な幸福ではあるまいか、それを何ぞや序があつたら土藏から取り出して見ようなどゝ、長閑になつてゐるのは、馬鹿だ。と、言はないばかりに罵つた手紙を書いた。

二度目に來た端書には、さういふ事なら近い内に送る様にしようと、矢張り餘り乘氣のしない調子で書いてあつた。それから京太郎も辛抱して一週間ばかり温順く待つてゐたが、また催促の手紙を出した　さうすると今度は向ふからも長い手紙で、大切な物品を遠方へ送るのだから、先達から大工に新しい丈夫な箱を拵へさせようと思つてやかましく云つて急がしてゐるけれども、大工も暇がないのでまだ出來ない。昨日もまた他の仕事を休んでも早く拵へる様に催促をしに遣つたら、ぢや、さうしませうと受合つてゐたから、箱が出來次第に

送る。此の間も土藏から取出して、奧の座敷に立てゝ大橋氏や下村々長など大勢來て貰つてよく見たが、成程お前が云ふ様に立派な物に相違ない。一同感心してゐた、と、云つてよこした。大橋氏といふのは村一番の金滿家で、書畫骨董を弄つて遊んでゐる人間である。京太郎はその手紙を讀んで喜んだ。が、向ふの方でも今度は本當に乘氣になつて來たらしいのを見て、彼は丁度潮がさして來る様に段々樂しみに滿ちると同時に、何處か胸の底の方で自分が伊香保の山の中で夢みた夢を强ひて事實にせり上げたもの丶様に思はれて、何となく心元ない責任を感じ初めた。それと共にまた樂しい物を焦れて待つ場合、喰られる様な淡い杞憂を感ぜずにはゐられなかつた。

いよ〳〵箱が出來たから、早速多勢の手の掛つた荷造りをして、下男に車力で、此の手紙と一緒に停車場の運送屋に持つてゆかした。といふ通知が來てから、今日は既に五日になるのである。

細君は、相變らず、先刻から、彼が何と云つても堅く默り込んで、頸を折り曲げた様にして仕事をしてゐたが、縫はうと思つてゐたゞけをたして了つたのか、漸く顏を上げた。「ホッ」と一とつ太息をして、片手で仕事を押遣り乍ら向ふの方にころがつた煙管を二尺指で引き寄せ、煙草を摘み〳〵初めて京太郎の顏をまじ〳〵打ち見守つて、眼だけ呆れた様に笑ひ乍ら、

「貴下といふ人は本當に妙な人だ。此度山から歸つて來て屛風の事を云ひ出したが最後、もう何にも他の事は手がつかないんだもの。……もう早く來てくれなければ困る。出してかう今日で幾日になるんです？」

「だから五日になるつて云つてるぢあないか。」

「ぢやもう來ますさ。」

最初彼が山から戻つて來て屛風の話をすると、細君は一向親しみのない事なので、唯「さうですか。」と、冷淡に聞き流してゐたが、彼が明けても暮れてもその事ばかりを歌に唄つて、もう袋の中の物を取出すばかりの様な氣分になつてゐるので、此の頃では、細君も故鄕の兄と同じ様に、口では彼をだしなめ乍らも心の中では大いに乘氣になつてゐるのである。細君は二三服立て續けに煙草を吹かしては、京太郎の顏を見乍ら、

「眞個にいゝ物であつたら、……貴方何うします？」と、云つて微笑つた。京太郎は先刻から興もない顏をしてゐた細君の氣持が漸く和いで屛風のことに意が向いて來たのを見て、自分も、また今更に眞個らしく思へた。で嬉しさうに言葉を強めて、

「さうだつたら旨いもんさ！お前が欲しいといふ着物を拵へてやる。……五千圓や六千圓には誰でも買ふ。假りに今此處

で一萬圓出すつたつてゝんで賣り手がないんだもの。今に來るから見て見な。あれが眞個であつたら、そりや大變だ。」

京太郎は、段々、自分で云つてゐること、想つてゐる事でそれが全く眞實である事を確證せられたかの様に、虚實の意識が茫つとなつて了つた。さうして獨りでに膝を躍らす様になつて來た。

「俺も一萬圓に賣れたら半分は兄貴から取るよ。唯、何でもなく持つてゐるものが不意にそれだけの大金になるんだもの……半分は取るよ。屹度請求するよ。さうしたら己、何より先に好きな土地を買ふよ。先づ五千圓あれば……、さうだな……段々電車の便の利く郊外の閑靜な處を見付けて買つておくよ。矢張大塚か目白の方が可い……。さうだ彼方が可い。何時かそれ、お前と櫻花の盛んに散る時分に大塚から王子の方へ歩いて行つた事があつた。あの方がいゝよ。」

「えゝ。」と、細君も、一昨年の春の末、京太郎と二人で大塚から菜種の花の咲き盛つた田圃道を歩いて飛鳥山、荒川堤と何處までゝも歩ける處まで歩いて行つた時の、好い天氣であつた事を思ひ浮べて、から合槌を打つた。

「俺、旨う行く様だつたら、早速兄貴を東京に呼んで、序に兄にも土地を買はせよう。全體一昨日日露戰爭の最中に、借金をしてゞも構はぬから東京郊外に土地を買つておいてはどうだ。と云つて、くれ〴〵も勸めて遣つたのだが、その時はうんともすんとも云つてよこさなかつた。本當に田舍の人間は馬鹿だ。今度は買はすよ。あの邊は今買つておくと好い値になる。まださうはしまいが假りに坪五圓として百坪で五百圓……五百坪で二千五百圓か。五千圓で千坪買はう。五百坪は兄貴の分で、俺も一所に世話をする。さうして小さい四間ぐらゐの家で可いから六七百圓かけて家を造らう。空た處は皆庭にして、其處へ草花を植ゑるよ。十二金をかけて庭を造らなくつても可い。己が自分で鍬を持つて土掘りをする。萩は萩、山茶花は山茶花、芙蓉は芙蓉、木犀は木犀と云ふ様に、自分で植ゑるんだ。おゝそれから何時かの様に、また茄子や胡瓜を作らうよ。此度は胡瓜を澤山作つて方々へ遣らう……。」

「さうしたら、私も好きな豆を作るわ！」

「あゝ豆も作らう……。」

「さうしたら貴下の、その頭の痛いのも治つて了ふ。」

「それや治るさ。」

京太郎は小さい生々した顏の、目をパチクリさして、自分の顏を見い〳〵樂しさうに話を聞いてゐる細君と、火鉢を挾んでそんな話をしてゐると、倍々色々な空想がそれからそれへと際限もなく彩絲を繰出す様に續いた。東京の郊外の、遠く武藏野の眺望を恣にした、こんもりと小高くなつた丘の上に、南方に緩い勾配の傾斜を見下した、小廣いかなめの生

垣などを繞らした、世間から物忘れをしたといふ風に見える小舍がある。その傾斜の地面には、まだ青々とした大根の葉が威勢よく秋の靜かな明るい光線を浴びて輝いてゐる。その畑の中を五六尺ばかり切り開いて生垣の入口まで道が附いて、それを、眞赤に熟した唐辛子が縁を取つて植つてゐる。その道を下りて大根畑を出ると、更に幅の廣い道路があつて其處には大分車轍の跡が出來てゐて、それをまだ先へ行くと郊外電車が見える。自分は今その小舍の庭園で秋の日を浴び乍ら逍遙したり、兩手を土塗れにして草花の土鉢を弄つたりしてゐた。

「オイ！」と先刻から少しだまつてゐた京太郎は、突然に細君に呼び掛けた。

「五千圓ぢや足りないねえ。本當だつたら二萬圓にだつて賣れるよ。……併しさうなつたら俺はこんなに今の様に甘味もそつけもない貧乏な暮しをしてゐても構はない。もうそれだけの物品があれば土地を持つてゐるのも同じ道理だ。土地の價が高くなる様な時節になれば屏風だつて矢張値が出るに違ひない。さうしてお前、庭に草花を植ゑなくつても、その屏風に一杯、綺麗な草花を描いてあるんだからその方が好いよ。賣らないで持つてゐるよ。兄貴にさう云つて、あの屏風だけは亡父の遺品として俺の物にしておいてくれと、さういはうよ。」

京太郎はさう思ふと、またしても、沈んだ少し黑味を帶びた、微塵も俗惡の氣のない、品位のある金地に以つていつて目のさめる様な鮮かさではあるが、燻んだ豐かな朱の玉を瓔つた南天の實や、豪放な調子で描いた大きな瓣の椿の花だのを想像に浮べた。

「俺は、あの屏風が來たら、あすこの机の處に立てゝおくよ。さうしたらお前に急々云はれなくても、心に樂しみがあるからさつさと仕事が出來るよ。誰か俺の處に訪ねて來るだらうさうするとこんな穢い家にゐても、二萬圓の伊年の金屏風に取卷れてゐれば豪氣ぢやないか、俺の周圍は光つてゐるよ。」

「でも故郷の兄さんだつて慾がありますよ。そんな物と知つたら、とても貴下に呉れやしませんよ。矢張價よく賣つて、その内のお金をいくらでも貰つた方が可うござんすよ。」

細君はそれから晩の支度が晩くなつたと云つて、絲屑を丸めて座を立つた。

四

その翌日であつた、京太郎が午後の散歩から歸つて來て、ガラッと門を明けると、

「貴下來ましたよ。」と、細君がうちから晴やかな聲で呼んだ。

「さうかい。」と彼は庭からすぐ回り縁の方へ行つた。身體の小さい細君は、今全身に力を籠めて自分の帶の處まで高さのある縁の上の大きな白木の箱をズラす樣におして見たり引いて見たりし乍ら、

「貴下が歸つて來る一寸前に來たばかり、ほんの今運送屋が一と休みして歸つた處です。こんな大きな箱ですよ。」

「さうかい……愈〻來たかなあ。どれ〳〵……そのまゝ來たのぢやなからう。」

「えゝ、さうですとも、まだ此の上を荒い板の箱で全然釘着けにして、その間に一面藁を入れてあつたんです。縁の下にあるでせう。御らんなさい。今お婆さんと二人で、そんな大きな物を何處へおいていゝか、おき場所がないから、貴下が居ないでも、それは縁の下にでも入れておいたつて構はないだらう云つて、何れ急にはいらないんだから、まあ暫時そこへ仕舞つておいたんです。」

「うむ。成程大きな荷造りだなあ。」京太郎は縁の下を覗いて釘を放した粗木のまゝの不細工な箱を念入りに檢査した。

彼はもう斯うして來た以上は、それを明けて見るまでが樂しい樣でもあり、又心元ない樣な氣もするので、少しでもその心元ない樂しみをゆつくり樂しまうとするのであつた、尙ほも縁の下を覗き乍ら、

「成程之れぢや故郷でも、出す時に騷動だつたらう。」

「運送屋が呆れてゐた『中にあるのは一體何ですか大きな物ですね』と、言つて聞くから、田舍から屛風を送つて來たんです。と、云つたら、『へえ屛風ですか、大變に重いものですねえ』と、云つて呆れてゐた。運送屋も一人でけ門の外から此處まで重くつて持つて來られないと云ふから、私とお婆さんと三人がゝりで此處まで漸と持上げた處です。今に貴下が戻るからと思つて、そのまゝにしておいたんですけれど、おそいから又お婆さんと二人で、あの箱のまゝでは早速今晩から戸の開閉をするのにも邪魔になつて仕樣がないからと云つて、釘を外して漸とこさ之までにした處……また馬鹿に大きな箱なんですもの。田舍の人が荷作りしたんだから運送屋も、笑つてゐました。」細君は呼吸をはずませて立て續けに、荷物の到着した時の模樣を、おちなく京太郎に話し乍ら、矢張り白木の箱から手を離さずに、何方かへずらす樣に力を入れてゐる。京太郎は「さうだらう、大きな荷物だ。」と繰返し乍らにこ〳〵して「どれ……これも大きな箱だな」と、云つて、そのまゝ縁側から上つた。勿論六枚折りを一双入れてあるのだから、長さは一間の餘なくてはならぬ。横もその半分。幅も一尺は入る。眞新らしい樅の白木を使つて、懸子にして被せ蓋にしてゐる。京太郎は今度はその箱を繁々と見守り乍ら、自分の手紙で故郷の者をかうまで手數をかけさしたのだから、厭でも應でも最早箱の中の物が好くなくつてくれねば

困る。と念じた。

「貴下、こんな大きな物を、これからまあ何處へ仕舞つておきます？ 今、お婆さんと二人でさう云つてゐたんだ。何處へおいたらいゝだらうつて。……貴方の方の六疊ぢや彼處の隅へやると半分餘るから押入れの邪魔になるし、奧の間ぢや簞笥をおいてゐるから外におく處はないし、さうかと云つてこんなものだからあんな明けッ放しの玄關にや心配でおいとけませんよ。もしおいたつて、立てればうちが暗くなるでせう。」

「あゝさうか、さあ何處へおいたら可いだらう。」京太郎にはさういふおき場の事まで今から考へてゐられなかつた。さういふ事は頓と氣が着かなかつた。が、細君はその餘りに馬鹿大きかつたのに面喰つたのと、故郷からそんな大切なものを預けられたのとに一方ならぬ負擔を感じて、もう置き場にヤキモキ氣を使つてゐた。

「まあ何處かへおけるだらう。」

「ぢや、おそいから明日の事にしてもいゝけれど、まあ一寸明けて見ませうよ。」細君は莞爾として

「あゝ、明けて見よう……さあ、お前其方を持ちな。」二人で蓋を取り除けて、先づ下においた。「まあ！古い物ですねえ。」細君は子供の樣に呆れて叫聲を發した。「うむ。」と、云つて京太郎は熟々と箱の中を見渡し乍ら、成程角々の傷まぬ樣に繼切れを當てゝ、丁寧にやつてゐるな。……待て〳〵オイ！さあ、此の中が己の一生の浮き沈みの瀨戸際だよ。さう思ふと、親爺から傳つた此の屛風が生きてゐるものゝ樣に思へてならぬ。」かう云つたまゝ彼は何時までも古い屛風の折り重なつた縁の處を見續けてゐる。角には赤銅の錺を附けてあるのが古くなつて黑ずんでゐる。

「さあ貴下、そんな事を云つてゐないで早く。」

二人は重い〳〵と云ひ乍ら、四つの手の先に力を入れて深い箱からぎこちなさゝうにして漸とこさ引張り上げた。それを座敷に舁いて行つて押し立てた。彼は「可矣々々」と一人で受取つて片手で倒れない樣に支へ乍ら、右手の端を取つて、颯と一枚開いた。其處にあつた梅の枝が彼の目に映るや否や彼は忽ち電氣にでもかけられた樣に全身に痲痺を感じた。粗雜に畫きなぐつた梅には、一點一劃も名人らしい落著いた筆は認められなかつた。彼は、もうそれだけで樂しい夢の覺め際の失望を意識した。屛風を支へた腕が萎えた樣になつて默つて了つた。

「貴下、何してゐるんです。も少し披いて御覽なさい。」

「うむ……だけど此奴は駄目だぞ。」唸る樣に云つた。さういひ乍ら次を披いた。菫が出た。水仙が出た。例の椿が出た。萩もあつた。が、豫て空想に見てゐた物とは似ても附かぬものばかりであつた。落款を見ると、落款は成る程大きな茶碗

の底か何かで押した様に、ときれ〲に丸い朱の輪廓があつて、その中に伊年と行書で誌してある。「うむ、此の落款だけは好いが……」と云ひ乍ら京太郎は、その前にドカリと趺坐をかいて兩手を背後につッかひ、「おい、此奴は駄目だよ……」と、細君に縋る様に泣く様な聲で云つた。

「何うして？ 何處が駄目なんです？」そのわけの解らない細君は突立つたまゝ云つた。

「何うして？ といふ理由はない。唯此の屛風はいけないよ。」

京太郎は心の中で、あんな騒ぎをして遠方に迄つて越さした故郷に何と云つて遣つて可いか。一目見て不可と思ふと直ぐ何よりもその事を考へずにはゐられなかつた。これでは博物館の紀さんに見て貰ふまでもない。自分が見てさへ駄目である。子供の幻影といふものはあゝも人を欺くものであつたか。とKは今更に自分の豫想の餘りに大きかつたのに興醒めると共に、自分の鑑賞眼が何時とはなしに進んでゐたのを内心驚いたのである。さうして其れは單に子供の時に比べて年齢を取つたからばかりではない、自分が東京に住つてゐるといふ事が自然に發達せしめたのである。何も斯も前途を想つて樂しかつた子供の空想が此の屛風と一緒に凡て破れて了つた様な氣になつた。

「まあ貴下、そんなことを云つてゐないで彼方の方をも披いて御らんなさいな。」

「あゝ。……併しもう披いて見たつて駄目だよ。」

京太郎は轉りと、今度は横になつたまゝ殘つた半雙を披いて見ようとする元氣もない。

「ねえあなた、そんなに駄目だ〱と云つてゐないで、もう一つの方を早く見て御らんなさい。」妻君は、彼があれ程永い間屛風々々と云ひ暮してゐたのに、漸と今待ち焦れたそれが届いて、披いて見い早々「だめだ〱」と云つてゐるのが、一向道理がわからないで、此度は自分の方から京太郎を引立てる様に、

「ぢや私が披いて見よう。」と云つて、一つに手をかけた。彼は、それを靜と見てゐたが、起上つて手傳はうとはしなかつた。此度披いたのを見ても何れも同じ様に、調子の低い、唯淺はかに琳派の筆法を模してゐるに過ぎない。狹い六疊の室は、夫婦を取卷いて十二折の屛風で一杯になつた。

「貴下、そんなにだめだ〱つて何處が惡いんです？ 此の椿だの萩だの、能くかけてゐるぢやありませんか。」

「あゝ、でもだめだよ。」彼は何度も同じ事を繰返すより他、言ふ事がなかつた。

「さうですか。何處がそんなに惡いのか、私なんかにはわからないけれど、私はいゝと思ふがなあ。ぢやまあ今日はこの儘仕舞つておいて、あなたその紀さんに一度見てお貰ひなさい。」「うむ、紀君にも此の間この話をして、來たら一遍見て

下さい。と云つておいたんだが、何ぼ何でもこれぢや恥かしくつて見て貰へない。」彼は口先で唯氣の無い返事をし乍ら、腹の中では、これは困つた事になつた。が、原はと云へば、皆自分が白晝夢を見たからである。故郷へ何と云つて遣つて可いか。それを思ひ返しては當惑するばかりであつた。

五

それから四五日たつて、紀氏には、早稲田大學に、日本美術史の講義に行つた歸りに寄つて觀て貰つた。「一寸見せて貰ひませうか。」と、云つて上つて來た。その結果は、京太郎の思つた通りであつた。此の豫想の方は違はなかつた。氏の説に、伊年には草花を描いたものはなか〱多くある。併しそれは最初の伊年でないのが多いさうである。けれどもそれが巧く描けてゐて伊年の落款さへあれば伊年で通るのだが、それもかういふのよりか、もつと巧い。と、いくら劣いからと云つて、無暗に他家の物をケナさぬといふ様な批評をした。此の四五日毎日の様に「私、あの屛風には落膽して了つた。」と正直に云つてゐた細君も、茶を運んだ序に、襖の入口に坐つてその話を聞いてゐた。それでいくらか思ひ諦めたらしかつたが、その後、何時であつたか、榎町の親類に寄つた時その話をして來たと思はれて、「あなた、あの屛風をどうするつもりです？ 榎町でさう云つてゐた。改代町に、そんな事のよく解る道具屋があるさうですから、其處へ行つて話して見て貰つたらどうです。あゝして大騒ぎをして遠方から取りよせて、自分で一寸見たゞけで、駄目だ〱と云つて仕舞ひ込んでゐたつて仕様がないぢやありませんか。國の兄さんの方へも、たゞ屛風がついたといふ端書を出したばかりでせう……ですもの、故郷だつて、何うなつたかと思つて此方から好い手紙の行くのを待つてゐますさ。」

「うむ、そりや待つてゐるだらうけれど、好くないんだから何うも何と云つてやつて好いか、云ひ様がない。それに俺ばかり見たのぢやない、紀さんにも見て貰つたのだから。」「そりやさうですけれど、あゝいふものは、一人だけに見て貰つたんぢや解りませんよ。紀さんなどの様に、學問の上からばかり見る人よりも、矢張本當の商賣人の方がようござんすよ。商賣人なら少々好からうが惡からうが、そこは又何とでも云へるから……さう貴下や紀さんの様に、正直に繪の善惡ばかり云つてゐたつて仕方がない。紀さんも善くないと云つたんだから、私などにはわからないけれども、そりや善くないのが本當でせうけれど、善くないのだから尚の事道具屋に見せた方が可いんですよ。……貴下が云ふ様に五千圓の一萬圓のつて、そんな夢見る様な事を云つてゐたつて仕方がない。唯の三百圓でも五百圓でも賣れさへすればいゝぢやありません

か。」

「いや！とても三百圓も六ケ敷よ。紀君も八拾圓ぐらゐと云つてゐたぢやないか。」京太郎も自分で毛を吹いて創を求めたとはいひ乍ら、實は斯ういふ愛想のつきた代物を伊年で候のと行つて、ベタ／＼落款を押して鑑賞眼の低い田舍者を騙した昔の旅繪師が熟々憎くもなつて來た。また父親は何處から手に入れたのか知らないが、何の鑑識もなく、斯ういふものを唯傳習的に伊年と思つてゐる田舍の者が氣の毒で堪らぬ様な氣もして來た。で細君にも諭す様に、

「うむ、そりやさうだけれどな、いくら道具屋に見せたつて却つて道具屋の方が紀さんなどより商賣根性でもつと踏みつけた事を云ふに定つてゐるよ。どうも兄貴に對して俺が濟まぬけれど、此方へ送らしたのが惡かつたのだ、もし眞物でないまでもまさかこれ程とは思はなかつた。」

「そりや貴方の物だから貴方が思ふ様にすりやいゝけれど、私や道具屋に見せた方が可いと思ふ。唯見せたら可いぢやありませんか。」

けれども最早好くないと堅く信じた彼は遂に應じなかつた。でも時々殘念さうに披いて見てゐたが、「でも古い物にや相違ない。斯うして立てゝ見てゐると何となく氣が落ついて懷しい好い心弛がする。折角國から取り寄せたんだ。父親の供養にこれを立てゝ法事の眞似事をしようか。」「あゝ、さうしてもいゝ。お婆さんにさう言つて私達のお祖父さんの法事もしませう。榎町の子供を呼んで來ておこはは蒸かしませう」

「あゝ、それが好い／＼。」

一日お婆さんと、孫が三人と、その母親が二人、京太郎と妻とは屛風の蔭で蓮や慈姑の羹を添へておこはを食べた。その日殆ど一人で世話を燒いてゐたお婆さんはフト感に迫つたか、おこはを食べ乍ら、「お祖父さんの因縁が惡いんだ。」と涙聲で突然にそんな事を云つた。娘達は「ハヽヽヽ、お婆さんが古い事を想ひ出して」と淺果敢に笑つた。暗い屛風の蔭には蠟燭の火が搖々と燃えて、線香の香が薫つた。

果して田舍からは「何うだ／＼」と度々催促をして來た。自分が種を蒔いておいて今更素氣なく好くないとも云ひ切れないので、その度毎京太郎は返事に窮した。すると後には、お寺の坊さんにも、その話をしたら、あの屛風なら何時か法事の時に見た事がある。あれは伊年だ。立派なものだ。と云つてゐた。東京で可けなければ田舍者にだつて五百圓位の買手はいくらもある。と、お前が好い物を都合で、何うも好くない好くないと嘘を云つてゐるのだらうと云はぬばかりに迫つて來た。

さう云ひかけられても京太郎の方からは強い事は云へなかつた。で、それでは送り返さうと云つて遣つたが、荷造りをするのが臆劫なのでその内に／＼と延して遂々三年越し押入

れの奥に仕舞込んでゐた。

その三年目の年末に迫つて、京太郎は自分の都合し得る限りの金策に窮した苦しまぎれにフト忘れてゐた屛風の事を思ひ浮べた。せめて三百圓に行けば、何とか云つて田舍を納得させよう。さうして自分は今の場合唯の五拾圓でも欲しいと思案をして、窮餘の窮策に、あの時細君の頻りに勸めた改代町の古道具屋を細君には内密に訪れた。

紺地に赤く古道具刀劍書畫骨董賣買と散らして染抜た暖簾で全然間口を掩うた店前に、大きな眞鍮の火鉢を抱へて悠然と坐つてゐた六十を大分越したらしい主人は、京太郎の漂然と入つて來たのを見て、銹びた聲だが、年に似合はぬ威勢の好い調子で、「入らつしやい。」と抑へるやうに云つた。

その店前は、古くから往來して京太郎には眼馴みの猩々緋の毛氈の樣なものを折り掛けたり、大きな長持の樣な何とも名の知れぬ古道具類を積み重ねたり、所々に軸物を掛け連ねたりして、內福さうに店を飾つてゐる。他に云ひ樣がないから、

「一つ屛風を賣つてもいゝんですが、見て貰へませんか。」老主人は云ふ事だけ鄭重に、

「難有うごす。拜見いたしませう。……誰ですか？」「伊年ですが……」と思ひ切つて云つたが、自信がないのだから冷りとした。

「あゝ、伊年ですか、大層結構な物をお持ちです。……あゝ伊年の物を。もうあんな物は大抵持つてゐる方は定つてゐますな。あれや大名のお屋敷に定つた物です。松平樣とか。南部樣とか。……結構な物をお持ちです、もう拜見さして戴いたも同じでげすから……難有うごす……／＼。」道具屋は自分一人で敎へろ樣な口吻で、威勢よく立續けて喋べつて京太郎には何にも云はせない。さうして云つて了つて平然として外の方を眺めてゐた。

京太郎は無據笑ひを含み乍ら、

「どうも見て貰はなけりや、まだ解らないんです。」と、何とも附かぬ事を云つた。

「いやもう拜見さして戴いたも同じでげす。……どうもありがたうごす。また何か御用が……」遠く江戸時代の昔から此の商賣に腕を錬へ、此の商賣で上を仕上げて來たといふ樣な落着き拂つた態度で何處までも商人らしい鄭重な口を利いてゐながら、少し氣の狂つた樣な客を追ひ出す樣に云つた。

京太郎は、俺も年の暮で少し馬鹿になつてゐるんだ。と、思ひ乍らブラ／＼自家に戻つた。

その晩、細君に道具屋に行つて見た事を話すと、細君は

「あなた、此の年末で皆な忙がしがつてゐる時分に　まだそんな屛風の事など思つてゐるんですか。」

（明治四十五年四月五日作、太陽掲載）

小石川の家

私は今度東京に歸つたら小石川の方に家を持たうと思つてゐる。なるべくならば長くゐ馴れた牛込の方にゐたいと思ふのだが、京都の遠距離にゐて東京に借家を探すのに、そんな勝手なことをいつてゐてはとてもありはせぬ。幸知つた人が小石川の奥の方に今住んでゐて、四五月になつたら、そこが空くことになつてゐるので、その跡へ入らうと思つてゐる。

私が二十幾年の長い東京生活の六七分までは牛込で過されたが、あと三四分は殆ど小石川で送られたのである。それゆゑ小石川もなか〱古い馴染の土地である。そして私の精神生活に織り込まれた心の波の最も泡湧した時代はむしろ牛込時代よりも小石川時代の方に多かつた。小石川の丘や谷、林や人家や街筋は私の過去の心の生活の種々なる場合に常に芝居の背景や大道具の如き舞臺の裝飾となつてゐた。私の心に土用波の如き山なす波濤が崩れかゝつて來たり、陰鬱な空の下を、恰も白馬の奔騰する如く凄じい心の波の立ち騷いだ時も、或はまたその反對に絶えざる不安定の生活の間にも、やや心の小康を得てゐた若い日も、多くは小石川の高臺の上で過されたのであつた。私は、過去の胸の創痍を振顧つて思ひ見るに堪へない。私の過去は悉く不滿足である。少しも樂しく過されなかつた。いつも不安と焦燥に充ちてゐた。多くの人はさうではなからう。何故自分がさうであるのか自分でも解らない。もし、之から先もその通りであつたならば、最早自分はそんな苦惱に充ちた生活を續けてゆきたいとは思はない。自分はどうかしてさういふ本體の分らない苦惱から少しも早く解脱したいと思ふ。

さういふ不安と焦燥に惱まされ苛まされた私の過去は殆ど小石川の丘の上で過されたのであつたことを思ふと、今度またその小石川の奥に居を卜しようとするにつけても、過ぎ去つた色々のことが自ら新しく回想されて來る。今度の小石川の住居はさういふ意味で特に選定したのではない。偶然にさうなつたので、今東京を離れた京都にかうしてゐても、牛込ならば何となく故郷に歸るやうな氣がするが、小石川はそんなに思へない。むしろ過去の心の創痍を、われと觸つて見るやうな氣持がするのである。それにもかゝはらず小石川のあの丘や溪や草野原などは、私の二十代のをはりから三十代の終まで、人間の最も精神力旺盛であつた時代の精神生活から取り除くことの出來ないまでに、私の過去の心の歴史の中に血液となつて染み込まれてあるかの如き心地がするのである。

それは、私が二十八になつた年の春もまだ寒い頃であつた。私はその時はじめて、長い間の下宿生活から離れて小さい一軒の家を持つたのである。そこは小石川の小日向臺町の奥まつたところで、廣い畑の中に、たつた一軒きり建てられた家であつた。私は其處へ、今はもう別れた妻と些かなる同棲生活をはじめたのである。その時からまた溯つて十有餘年前郷關を出て以來殆ど下宿屋の飯ばかり食つてきた私は、そこで始て食べ物らしい食物を食べることが出來たやうな氣がしたことを記憶してゐる。その頃はまだ電燈を用ひないでランプを使つてゐた。そのあたりにはまだ水道もなかつた。廣い空地の庭先に井戸があつた。それは、家主が二百坪ばかりの借地をして古木を使つて其の借家を新築すると同時に井戸は新築の家に必ず附屬するものとして畑の中に掘つたものである。三月の始だからお正月の頃のお菜漬が終りになつて、大きな莖の京菜が漬けられる時分であつた。口に合ふ漬物が膳に上ることに先づ從來味はれなかつた家庭味を味はふことが出來た。新しい生活の珍らしさに心を奪はれてゐる間に日は流れるやうに過ぎた。さうなくてさへ草深い畑の跡に拓かれた庭先には春雨の降る毎に緑の雜草が到る處に蔓つた。初々しい彼女は裾を端折つて、蛇でも棲みはしないかと思はれるやうな、膝まで沒するその雜草の中に入つて行つて、草を片端から拔きとつた。そして拔いてもぬいても雜草は伸びた。それでも段々荑げてゐる間に、いくらか庭が綺麗になつた。荒い竹垣を取り廻はして庭は家の建坪よりも三四倍も廣かつた。竹垣の外の空地には家主が蠶豆を植ゑてゐた。裏の方の地主の畑には蒔いたのか自然に生えたのか菜の花が咲きかけてゐた。何時までも底冷い春の雨がびしよ〱と降る中に窓から眺めると黄色い菜の花が霧のやうな雨飛沫の中に微ふるえてゐた。私達は火鉢を擁して早く寒さのとれるのを待つた。

そこは大塚の火藥庫の裏門に近い處で、その傍には牛込の方からでも遠く目標になる、樹齢數百年と聳ゆる銀杏の巨木が大きな枝を翳してゐた。家のまはりの畑の空地は、一方火藥庫の土手のところに盡きて、一方は竹藪に仕切られてゐた。そつちの方に行くと畑の果てには茶の木などがあつた。藪は向うの方に緩い勾配になつてゐるらしく、此方に立つてゐると藪の彼方で人の話聲などが聞えた。そつちにも人家があつて、紙の製造でもしてゐるか、白い紙を板に張つて乾かしてゐるのが見える。これが、日本

楯のやうな繁華な市街と同じ東京の中とは到底信じられぬくらゐ、奥まつてひつそりとした處であつた。

芭蕉と野坡と二人で讀んだ俳句には私の好きなのがある。

梅が香にのつと日の出る山路かな　芭蕉
處々に雉子の啼きたつ　野坡
家普請を春の手すきにとりつきて　野坡
上のたよりにあがる米の値　芭蕉
宵の内はら〳〵とせし月の雲　芭蕉
藪越しはなす秋のさびしき　野坡

藪の向うで人が話してゐるのは何を話してゐるのか分らないが、これが東京の市中とは思へぬほど閑靜に小隱れた處であつた。丁度梅の咲く頃で、藥屋の庭に白い花を開いてゐるのが藪越しに見えてゐる。

私は家の中に靜としてゐるのに倦んでくるとよく畑に出てそのまはりを歩いてゐた。今から十七八年の昔であるから、その邊もひどく變つてしまつたらうと思ふ。私がそこを退いてから間もなく家主は空地を遊ばして置くのが惜しくつて空地の畑に、此度は先のより大きな家を立てたし、地主も畑一面に瞬く間に借家を建ててしまつた。

今から十七年前、即明治三十六年の三月は五代目菊五郎の死んだ時であつた。その年の秋にはまた團十郎がつゞいて歿した。菊五郎の死はいかに滿都の好劇家をして哀悼追惜せしめたか知れぬ。すぐ四月には六代目の襲名披露をかねた五代目の追善興行が歌舞伎座で催された。九月にはもう自分も亡き數に入ると神ならぬ身の知るよしもなく、その時團十郎は對面曾我の工藤祐經に扮し、六代目と梅幸とが五郎と十郎を演じた。その時團十郎のこの役は、毒饅頭の加藤清正であつた。太閤の遺孤秀頼を擁して、清正が雄々しい涙に咽びながら踊るところ、淀川堤で加藤清正の勇氣凛然たる姿が十七年の歳月の幕を隔てながら今も尚眼に見るやうに私の記憶に殘つてゐる。その後五月には團十郎はもう舞臺に立つたか、立たぬか私も抽には覺えて居らぬ。とにかく私が芝居を心から強い興味を以て見なくなつたのは、それからであつた演劇がさまで私の精神生活に重要なる要素となつてゐるとは考へられないが、團菊兩名優が尙ほ共存して常に歌舞伎座に出演してゐた時分は演劇に表はされてゐるやうなローマンチックな生活が現實の一部として常に私の精神生活にも存在してゐた。しかしその兩名優が現實世界から去つてしまふ時分から漸く私の心の眼にはローマンチックなものが見えなくなつて來つゝあつたのだ。

三月はぢきに四月になり五月になつた。裏の畑の菜の花が段々末になつて、物憂いやうな五月の日光とゝもに前の畑の蠶豆の莖は眼に立つほどに伸びて可愛い花をつけた。日々に

まわつて來る八百屋の車にはその頃の季を表象するやうな筍や夏蜜柑がいつも積まれてあつた。今はもう其處も一面人家が立てられたであらうが、その頃茗荷谷の崖下の低地に廣い畑があつて、畑の中の一軒家に老いた百姓が住んでくさ〳〵の野菜を作つてゐた。私は近い處に住んでゐた同窓の先輩アイ氏に連れられて其處へ大根や胡瓜を買ひに行き、歸りに大根の束を二人で差し棒にして持つて歸つたことを覺えてゐる。アイ氏は夙に平和な半農生活を實行してゐる人で、自分の空地に茄子や胡瓜の菜園を拵へて、上手に野菜を作つてゐた。私もそれに習つて庭の隅に一疊敷ぐらゐの土を掘り返へして畝をつくり、それに胡瓜を植ゑた。アイ氏は去年は胡瓜を植ゑて成功したが、胡瓜は容易くつて面白くないといつて今年は茄子を丹精して、それにも成功してゐたのであつた。私には、入り易い胡瓜から試みるのがよからうといつて、胡瓜を植ゑることをすゝめた。下肥は汚いので水口の脇の下水を汲んで時々苗に灌いでゐた。晩春から初夏の晩夕飯を濟ましてもまだ夕明りの長く殘つてゐるやうな暖い夕方など私達は、其頃私の家に寄寓して中學校に通つてゐた田舍の甥と三人で、よく庭にたつて食後の時間を過してゐた。ぽつ〳〵梅雨が始まらうとする頃の物憂い〳〵眞晝間遠くの方から苗賣りの聲が聞えて、近くの横丁を通つてゆく、何だかもどかしいやうな氣怠いやうな、氣候はその苗賣りの歌ふやうな聲とゝもに梅雨を呼んで來た。そこら中の木々が鬱蒼として重苦しいやうな綠を滴してゐる。薄墨を流した如く天の一方に澱んだ雲から雨がぽらぽらと降つて來た。

胡瓜の苗は梅雨の間にみる〳〵成長した。手を立てゝやると、刻々にも伸るかと思ふやうな纖細な蔓はすぐそれに卷き付いた。やがて花を付けたかと思ふと、その花の根もとが次第に膨んで、それが實になつて行つた。私達はその胡瓜をとつて清新な漬物にして食べたり、爽かな胡瓜もみにしたりした。

さういふ生活はしてゐながらも私の焦燥する氣分は決して鎭靜する機とてなかつた。私は常に何だか物に追掛けられてゐるやうな心持ちで日々を過してゐた。その家は六疊と八疊と三疊と板の間との他に廻り緣などがあつて疊數のわりに廣い家であつたが、その内燃へるやうな眞夏の苦しさに襲はれるやうになると、私の病的に惱ましい頭は倍々靜に落着いてゐられなくなつてどうかしてそこから變つた處へ移轉したらもつと心の落ち着く處があるやうに想像せられた。そこで私は暑い〳〵日中を汗水流しながら足を塵埃だらけにして、牛込、小石川又は麴町の方まで借家を探して歩いた。そこに來る前は牛込の肴町の近くの下宿屋に長くゐたので、長い間居馴んだそつちの方に歸りたいと思つて北町、仲町、南町のあたりを探して遂に南町のとある家を探しあてゝ、そこへ移る

ことにした。

それは七月の末土用の眞最中であつた。明日はいよ／＼引越をするといふ前日は劇しい風雨で、長い間雨を見なかつた照りつゞけの暑氣を一掃してしまふかと思はれるやうな風雨が凄じい勢で晩から夜に入るとゝもに倍々募つて來た。劇しい暑氣に虐げられて殆ど氣息奄々としてゐた私は暗い夜を吹き捲くる涼しい雨飛沫にあたりながら緣側の運動椅子に疲れきつた體を托して心地よい風雨の音を聞いてゐた。便所の脇の廻り緣の突き當りの開き戸が劇しい風力に煽られて、何度締めても直ぐ開いて、かたん／＼とけたゝましい音を立てゝゐた。後には諦めてしまつて風の煽るまゝに棄てゝ置いた。そこが開くとゝもに南北が吹き通しになるので、風は一層强い力で緣側を吹きぬけた。土用半ばに秋風ぞ吹くといふが、そのとほりである。今宵一夜の暴風雨でもう夏が去つてしまつたかと思ふほどの涼氣が緣側から軒端に襲ひ寄せた。庭の梧桐や百日紅が時々巨人の吐く太息のやうに發作的に吹き募つてくる强風にしたゝか梢頭を吹き撓められるとゝもに、パラ／＼と音をたてゝ雨滴が吹き拂はれた。まだ秋にもあはぬ綠の葉が風に吹き千切られて緣側の上にまで吹き込んで來た。

妻は明日の引越の荷車を、三月に此處に來た時に賴んだ荷車挽きが荷物を深切に取扱つてくれていゝといつて、自分の母の處へも明日の手傳に來てくれるやうに賴みに行つたついでにそつちへも廻るといつて出ていつたのは、まだこんなに風雨の劇しくならぬ前だつたが、少し小降りになるのを母の處で待つてゐると思はれて、まだ戻つて來ない。いよ／＼斯うしようといふ最期になつて却て取捨に迷ふ癖のあつた自分は、こんなにもう秋のやうな涼しい夜が來たと思ふと、このまゝ此處にゐて明日の引越はもう中止しようかといふ考が浮んで來た。連日の暑氣に運動椅子に凭つたまゝ冷い風雨に吹き曝されながらそこを動くのさへ臆劫になつた身體が、さうしてゐると、やゝ蘇生したやうになつて來た。家の中のランプは二つとも、とつくに風のために吹き消されてゐた。まだ暗くならぬ時分に胡瓜がさぞ傷められてゐるだらうと見にゆくと、家の軒までも手を伸ばした蔓や葉が風のために揉みにもまれ、雨には打ちたゝかれてゐる。黄色い花は地べたに散り落ちてゐる。明日は引越といふので、もう昨日のうちに食べられる實はちぎり取つて置いたのだ。折角丹精したあの胡瓜にも後髪を引かれるやうで、さらば明日他へゆくのだとなつてみると、もうこんなに涼しい秋が來たのに何ももう移る必要はない。どうしよう？　妻が戻つたら妻に此の變心を打ち明けて云はうかと思ひ迷ひながら、私は何時までも緣側の運動椅子に身體を投げかけたまゝ、やつぱり庭樹に風雨の騷めく音を聽いてゐた。夜が更けるとゝもに、涼味は段々冷氣に變つて來た。そのうち雨はいくらか小降りになつて風だけはまだ緣側の突きあたりの開き戸をがたん／＼とけたゝましく煽つてゐた。そこへ妻は甲斐々々しく裾を端折つて傘を翳して戻つて來た。

「あなた眞暗な處にゐるの。」

「うむ、何度點しても消えてしまうんだ。」

妻は三疊の間の方へ行つてマッチを擦つて火をともした。そのうち風も次第に弱くなるし、方々の雨戸を閉めた。昨日までは夜遲くまでも雨戸を閉めては蒸し暑くつて堪へられなかつたのが、今宵は閉めきつても堪へられなくない。ランプの燈までが、初秋の夜のやうに澄んで見える、私はもうこれで夏は去つてしまつたやうに落着いた氣分になつた。

「いゝ鹽梅だなあ。私はもう此家をほかへゆきたくなくなつた。」

妻に向つてまともにそれを云ふには何だか、あまりに自分の決心がぐらついてゐるやうで流石にいひかねたので半ば沈吟したやうにさういつた。

すると物解りのいゝ苦勞人の彼女は、すぐ私の心持をのみ込んだやうな眼をしながら、

「それは私だつて、あなたが變らないといへば、別段こゝを變りたくはありませんよ。」

自分も思案するやうにいふ。

「また雨が晴れたら暑くはなるだらうが、こんなに涼しいと此家にゐたい。胡瓜もあのまゝに殘してゆくのは何だか心のこりだ。」

もはや實の生る、ならぬよりも梅雨の頃からこの地に、そんなものゝ愛着に因つてゞも親みを持つやうになつたのを、生木を割くやうに棄てゝ行くのが惜まれた。

「どうします？　止めますか。もう荷車を賴んで明日の朝涼しい内に來てくれるやうにいつて置いたのですが、止めるなら、今晩のうちに又さう云つてゆかないと先方に氣の毒です。」といつて、矢つ張り考へてゐる。

妻は私が半月ばかりの間あれほど一寸もぢつと落着かないで、物にでも憑かれたやうにそは／＼して一刻も此の家にゐるのが堪へられぬようにいつてゐたのに、いよ／＼となつて又氣分の變つて來たのを敢て笑ひも咎めもしなかつた。

「さうさ。……しかし此處にゐるとするとエムが厭なことは厭だなあ。」

「えゝ、私もさうなの。」妻は聲に應じてさう云つた。

エムといふのは、前にいつたアイ氏などと同じころに矢張り吾々の學校にゐたことのある人間であつた。エムは眞面目な文學者になりそこなつた人間で、使ひ道によつては隨分役にも立つが、その行狀に信用がなかつた。後には文士俳優にならうとして——今日でも現に

某一座に加はつてゐるらしいが――それにもあまり成功しさうになかつた。そのエムが近い處にゐるがために何だか私達の日常生活の平靜がいつも脅かされがちであつた。

「やつぱり變りませうよ。」妻は、私の決しかねてゐた心に、さういつて遂に最後の決心を與へた。

　雨は夜の中に止んで、暴風も靜まり、翌朝は冷しく明るい夏の朝になつてゐた。荷車は早くからやつて來た。妻はもう此の間から手廻しよく形付けてゐた荷物を運び出して荷車に積ました。母親も早くから來て手傳つた。

　今でも私の忘れることの出來ぬのは其の頃文鳥を飼つてゐたことである。その時分小日向臺町の服部坂の下に小鳥屋があつて、私はそこを通るたびに佇立つてよく小鳥を見ながら老いた鳥屋の主人と話してゐた。そして無聊を慰める一つの方法としてある夏の朝文鳥の番を買つて來た。文鳥は緣側の軒端で囀りながらよく生きてゐた。引越の時に籠の上から風呂敷に包んで荷車の下にくゝり附けて持つていつた。

　南町へ引越していつて、其處にゐたのはたつた八月一と月であつた。初めは、小石川の方へ行く前に牛込の南町に近い處に長く下宿してゐたので其處が懷しかつたが、一旦小石川の方にいつて此處もと居た方へ戻つて來てみると、今度は却てやつぱり小石川の方が懷しく思はれた。それに、あちらの方が土地にゆとりが多いのが何より好ましい。私は南町に來てからも、またちつとも家に落着いて居らず毎日もつと居心地のよい處はないかと探して歩いた。あてどもない一種の憧れである。そして先にゐた小石川の家の傍を何度も通つてみた。家は殆ど八月一ぱい借り手がなかつたやうである。

「先の家にかへるなら、まだ空いてゐるが。」

　と思つてみたり、口に出して妻に話してみたりしたが、やつぱりエムが近處にゐるので每時決心が鈍つた。そして何處か少し離れた處でやつぱり其方の方に歸りたいと思つてゐるところへ八月の末になつて、今度は小日向臺町の三丁目の、とある小さい家が空いてゐたので遂にそこへ戻つて來た。前の時のやうに文鳥もやつぱり風呂敷に包んで、連れて來たそこへ歸つて來たのは八月の末で、月を越してからも殘暑はまだ大分つゞいたが、それでも九月の五日だつたか一日眞夏にもなかつたやうな蒸暑い日があつて、夜も暑くつて、とても靜と寢てゐられないほど苦しかつたと思ふと、私はその夜嘔吐を催した。翌朝近い處の醫者に車でいつて診察を受けると暑氣中りの急性胃カタルであつた。暫時服藥して食物の養生をしてゐる間に氣候も追々涼しくなつて、健康もそれにつれて回復した。――それは前にも一度いつたとほり私が二十八の時で、今の四十五歲とは大に違ふ。本來體質の虛弱な自分でも、その時分は元氣旺盛であつた。秋涼が加はるとゝもに私は夏の間怠けてゐた讀書や執筆の精力を集中することが出

來るやうになつた。私は朝から夜まで打ち通しに机の傍に坐つてゐることが出來るくらゐ神經の元氣が回復して來た。――あゝ、十七年後の今日の自分の健康と比べて殆ど別人との相違がある。私は十七年の長い間徒に風塵に追ひ捲くられてゐる間にかうして空しく老いて來たのであらうか？

　その家は、家主の住宅の裏の狹い空地に建てられた鼻を突くやうな家で、四疊半二間、三疊と二疊と、たつたそれだけの疊數であつたが、私は奥の二疊の間に机を置いてゐた。そこで私はゴルギイやツルゲネーフなどの飜譯をしたりしたことは記憶してゐる。秋闌けて十月十一月となるに從ひ精神も肉體も倍々健康狀態になつて、とり留めのない希望が雲霧のごとく湧いて來るのを覺えた。私は遠くへ散步しない時は、その三丁目の正方形な一廓に東西に幾條か通じてゐる樹木の多い閑靜な小路を歩いてよく鼠坂の上の空地に立つた。そこから音羽の溪、關口から高田の方が見渡された。護國寺の大きな甍も見えてゐる。秋が深くなるにつれて附近一帶の雜木林が黄ばんで、處々に櫨や楓の雜つてゐるのが霜に染められて燃えるほど赤くなつて見える。その時分は未だ目白の岡の方にあまり人家が建たなかつた頃であるから雜木の岡がその處女美を汚されずに居た。狹霧の罩めた寒い霜の朝などその高臺に立つて向につゞく雜木林の丘陵を眺めてゐると氣分が凜として、自分は何か大きな抱負に向つて勇進してゐるかのやうな想ひが湧然として起つて來るのであつた。――しかし十七年の後の今となつて見れば、何もかも大半夢であつたやうである。私は最早さういふ夢を見ることは到底出來ない。私の成し遂げたいといふ目的や理想は、其時分から比べると遙に範圍が狹められたとゝもにまだ遙に具體的のものとなつて來てゐる。その今の目的や理想も亦た過ぎ去つてみれば賴みがたい一場の夢の如きものにほかならないかもしれぬが、私はもう人間の力に限りあることを知つた。殊に自分の力は最も限られてゐる。私は夢幻の如くすぎた十七年の間に無價値なやうであつて、自分で躰驗しなければ、とても味ひ知ることの出來ない尊い經驗を得た。

　やがて正月が來た。私達が些かな家を構へて初ての正月である。自分の生活の過去現在、將來を見廻はすと一時腰掛けに凭れてゐるかの樣な氣持がしたが、そして、其は僞りのない眞實の腰掛けであつたが、そんな生活にも亦絶ち難い愛着のあるのも僞らざる事實で、それをどうすることも出來なかつた。

　やがて去年の三月から一周年になつて、また春が循ぐつてきたけれど、私の生活は樂しみを以て迎へられなかつた。私は妻と別れることになつた。その前後の私達の氣分や經緯については、今こゝではいひたくない。

　それは、たしか四月の廿日頃であつたと記憶してゐるが、私達はもう近いうちに別れようとしてゐながら、その半面には離れて行くのを惜むやうな心持に強く支配されてゐた。でその四月の末私は先月から忙しかつたある雜誌の編輯事務を濟ましてしまうと、心が解放されたやうに樂になつて例の鼠坂の上から遠くの方の雜木山の春霞に煙つてゐるのをみると何處かへ春を趁ふて浮かれて出たくなつた。つい此の間四月の八日だつたかにも今年になつてないくらゐの暖な天氣だつたので、私達は一日鴻の臺から市川の方をぶら〳〵歩いて來た。その時の豫期しなかつた興趣が長く殘つてゐて、ぜひもう一度どこかへ行つて見たかつたのだ。その日はどこかそこらへ一寸出て見るつもりで二人で鼠坂を下りて音羽の護國寺の方へ歩いて行つたが、その頃はまだ今のやうに大塚の方が市街にならなかつた。護國寺前の廣い通りを大塚の通りへ上つて行つて、少し先へゆくと、もうその邊は一帶の畑で、丁度菜の花の眞盛り。いかに長閑な小石川の奥の方に住んでゐるとは云ひ乍ら、やつぱり市中にゐては廣い野の趣などは不斷味はふことは出來ない。久し振りで私達はその伸々とした野趣を味はふことが出來た。妻はとりわけ子供のやうに嬉々として悦んだ。今は人家に埋もれてその後形も見わけが付かなくなつたらうが、大塚のステーションに向つて左手の方は緩い勾配の丘で、圓味を持つた一帶の畑には黄白の菜の花が宛がら春の精とでも云ひたいやうに麗かな日光の下に咲き溢れ、造化が保護色として授けたものが、特に其の花の色とまぎらはしい黄色の蝶々が花から花へと浮かれて飛んでゐる。物憂い、春の暖かさにつれて、むつと鼻を打つやうな甘酸ばい匂が襲ふて來る。何の聲とも聞きわけられない蜜蜂などの唸るやうな蒸すやうな一種の靜かな物音が野邊に立ち澱んでゐる。どんな、人生の苦味を嘗めさせられた皮肉家でもこの長閑な、柔かいありとあらゆる自然を包むやうな春景色の中へ放たれては、何人も心の底から造化の惠みに感謝をせずにはゐられないであらう。

　私達は、はじめはたゞ此の邊まで來てみるつもりであつたのだが、あまりの美しい自然の色に、つい蝶々のごとく浮かれてしまつて、も少し遠い處へ、どこまでゞも春を趁ふて行つて見たくなつた。向うの方の雜木林は黄綠色の新芽を吹いて、まるでターナーの繪畫の如く春霞を罩め、うつとりと遠く立つてゐる。私はその造化の神祕めいた雜木林の間を分けていつてみたくなつた。私達は隅田川のほとりまで遠つ走りがしてみたくなつた。

「いつてみようか。」

「行きませうか。」

　さう一決して大塚ステーションの下の小い鐵橋をくゞつて飛鳥山の方へ行く田圃道を辿つた。そのあたりは、それ以來

殆ど歩いてみぬが、十七八年後の今は大方人家で埋まつてゐることであらふと思ふ。菜の花の黄白と麥の綠とのほか何物も眼を遮るものゝない野道を、私達は群れ飛ぶ蝶々と後になり先になりしてぶら〳〵と歩いた。私達の外には道をゆく人間が殆ど一人もなかつたので、私達の氣を散らさないでよかつた。たつた一人十四五の子供が歩いて行くのと一緒になりそれに道を敎へられつゝ行つた。道端には孟宗竹の藪があつて威勢のよい筍がのぞいてゐたりした。淸い水の流れる深い溝の緣に蒲公英や蓮華草が咲きこぼれてゐた。道はひとりでに飛鳥山に出た。今と違ひ電車はもとより通じてゐず、そのあたりが一帶に俗化しないで野趣が深かつた。飛鳥山で一と休みすると、山を向うに越して王子から田圃の畦を傳ひ水と白帆の影を慕ふて隅田川べりを志して歩いた。道を問ひ〳〵して遂に尾久の渡しに來て、大川の水を前にして立つた時には私は聲を揚げて悦んだ。のんびりとした大川の水を眺め、白帆のいくつともなく群れて上下するのを見ると、私はまた渡をわたつて向岸に行つてみたくなつた。荒川堤の櫻の好いことが先日から頻りに新聞に書かれてゐたからである。そして向岸に上ると、その荒川堤を向うへ〳〵どこまでも歩いて行つた。遂に西新井のお大師さまゝで行つた。そしてさしもの長い春の日が、遠い武藏野の彼方に傾きそめて、靑磁色に澄んだ靜かな蒼空に何處ともなく冷い晩方の風が動いて來たのに氣がついて、私達はもう歩く足に疲を覺え、俥で大師さまから、田圃の中にある東武線の西新井のステーションに走らした。そこから淺草驛まで歸つて、吾妻橋を渡つて戻つたことを記憶してゐる。

　その晩春の郊外あるきをして間もなくであつた。私と妻とは別れることになつた。その二三日前、どうした時であつたか、奥の一と間で向うをむきながら、妻は、

「歸つて、一生をつまらなく暮すんだ。」

　といつた。その言葉が何ともいへない強い力で私の胸を刺した。その言葉は十七年後の今までも私の耳の底に尙ほ殘つてゐるかのやうに思はれてゐる。

　二三日過ぎて彼女がいよ〳〵私の家から出ていつたのは、國の方から私の母と、横濱から乘船してアメリカへ渡航する兄とが上京して來たその前日であつた。彼女は出て行く時まで、自分が出て行つた後私の家の始末をして置いた。明日の午過ぎには母と兄とが新橋へ着くことになつてゐるので、差しあたり晝の食べ物の副食物の準備などもして置いた。尤も彼女が歸つてゆく十日ばかり前から小女を一人雇つて置いた。

　一年の間に少しづゝ、彼女の母の處から運んで來た種々な小道具のやうなものが一度に持つてゆかうとすると、それでも大分あつた。それは前日までに、餘り遠くない母と兄と同

居してゐる彼女の此度歸つてゆく家へ持つて歸つた。私はそんなものを荷物で運んで行くのを、何とも云へない厭な侘しい氣持で凝乎と見てゐた。それにも拘らず、その厭な心持を取り拂ふべく別れようとする自分の心をとり戻すことは私は敢てしなかつた。

いよ〳〵歸つて行く日になつても朝から晝に、晝から夕刻に時を移しつゝ彼女はじつと心を落着けおちつけ火鉢の傍に坐つて煙草などを吸つてゐた。

「そんなら私もう行きますよ。」

といつて彼女はやうやく起ち上つて、荷物の都合で殘してあつた物尺や針仕事の道具のやうなものを少しばかり風呂敷に包んだのを腕に載せて抱へるやうにして外に出ていつた。

彼女が二三歩いつた後から私は座を起つて急いで外に出て行く彼女の後影を追ふた。もうすぐそばの曲り角に形は見えなくなつてゐた。その曲り角まで行くと早や十四五間も先に彼女の歩いて行くのが見えてゐる。遂に去つてしまつた。：：永久に去つてしまつた。

（大正九年三月五日作、早稻田文學掲載）

久世山情趣

小石川小日向臺町の西端に突出してゐる通稱久世山は、今では、當世風のハイカラな新住宅地に整理分讓されて立派な邸宅が軒を接してゐるが、あそこが、まだ、ほんとうの久世山の原つぱであつた時分――今から二十年くらゐ昔のことが、私には懷しく偲ばれるのである。

思つてみるのに、私の三十前後から七八年の間の生活圖は殆どあの久世山の周邊をとり卷いて展開してゐたやうに思はれる。日露戰爭の時分――今から二十一二年前には、あの小日向臺も大ぶん開けたといつても、まだ今のやうではなかつた。勿論電燈や水道や瓦斯燈を使つてゐた家は殆どなかつた。私があの久世山のすぐ近處に住んでゐた時分にも掘り井をつるべ繩で水を汲んでゐたし、燈火もラムプを用ひてゐた。

私は夏の夕方など、家から近い、その久世山の原頭に、夏草を踏みわけて出て行き、斷崖の端に立つてゐた大きな欅の木の下で涼しい夜風に吹かれてゐたりした。それからは、左の方に牛込と小石川との區界を流れる江戸川の低地に櫛比する瓦の波、そのすぐ向ふに赤城八幡、築土八幡の高臺の森が綠黒く點景して、それから、ずつと右の方に牛込の矢來につゞく緩い傾斜の地勢が遠く早稻田の方につゞいて、それから奧の方の遠望を押し隱すやうに久世山の端からみるとすぐ右手に、音羽の深い谷を隔てゝ谷の向ふに突出してゐる目白の丘の老樹の繁み。新綠のころには欅の若葉が、まるでターナーの風景畫そのまゝの如き淡蒼き煙靄を吐き晩秋の季節には銀杏の黃葉があちらにも此方にも、朗かに晴れた秋空に淸く秀でて立つてゐた。目白の丘つゞきの森にはまた楓葉の紅が多かつた。それらの色とり〴〵にこきまぜた自然の眺めは都ぞ秋の錦繡なりけりといふてもよかつた。

思ひなしにか、どうも大正時代の半ば時分から、東京の人口がひどく增加して一たいに、世間がうるさくなつて來たやうに思はれる。だから、私のいふ、そのころは、あの邊が、今の、電車の便を借つて、三里も五里も市中から遠く隔つた郊外の方に出ていつたよりもまだ何となく落着いて閑靜であつた。そこで閑靜ではあつたが、音羽の谷底の街裏や久世山の裾の居まはりには、世を住み侘びたやうな、長屋暮し裏家

住居の世帶の數々が空地もなきまでに澱んでゐた。
　その音羽の何丁目かの廂合ひになつた狹い橫露地、表の方には小さい時計屋だの古道具屋などがあつて、その間をずつと入ると、おや、こんな處にも、こんなに人が住んでゐるかと思ふやうに、古い長屋が兩側につゞいてゐて、中には火鉢などの指物師も住んでゐたりするが、小石川の造兵廠まではあんまり遠くもないところから、主人は大抵そんな處にでも勸めてゐるのか、晝間は内儀さんが、内職に狀袋を張つたりしてゐるのが見えた。それでも潛り戶のやうになつた古ぼけた入り口の格子戶のまはりが小綺麗に拭いてあつたりするのが、見る眼には忙しい中にも何となく安らかな氣持を抱かしめた。何戶でも兼用するらしい吹き拔き井戶が中央にあつてそれから、透きとほるやうな淸水が滾々と湧き出でゝゐた。
　その井戶の傍を通つて、猫の額ほどの露地奧を突當ると、また、おや、ここに、こんな小綺麗な家があるがと思ふやうな、磨いた格子戶の玄關があつた。そこは知らぬ者には殆ど氣のつかぬ小さい旅館であつた。音羽の谷底の街には源は護國寺の豐島ケ岡からでも流れてくるか二た條の小さい小川があつて、それが小日向臺の側の麓と、その反對の目白臺の方の裾とを流れて音羽一丁目で江戶川に落ちるのであるが、まだその邊が今のやうに開けぬ時分には淸く澄んだ、里の小溝の趣があつたらうと思はれる、だが、今日では、もうまるで汚い泥溝になつてしまつた。
　で、音羽何丁目かの露地奧の袋地に世を隱れたやうにあるさゝやかな旅宿の裏の二階座敷の窓を開けると、眼の前には久世山の草原の崖が、おつかぶさるやうに峙つてゐた。それが、ちやうど箱根の堂ケ島溫泉あたりから明星ケ岳の夏山を仰いでゐるやうに高く思はれた。そして、崖の下と、こちらの家の根太との間を一間あまりの小溝が、可愛い、せゝらぎの音を立てゝ流れてゐる。二階座敷に寢てゐると、枕に通ふ瀨音がまるで京都の木屋町の離れ座敷の下を流れ落ちてゆく加茂川の瀨音のやうにも聞きなされるのであつた。
「何だか、こゝにゐると、箱根かどこかの溫泉にでも行つてゐるやうですねえ。」
　と、女がいつてゐた。
　も一つ嬉しいことには、その久世山の崖の下から淸水が湧いてゐた。どんな夏の日照りにも、降雨の少い冬季でも、滅多にその水は涸れなかつた。その旅館では、筧を渡して、その山淸水を風呂場に引いたり、臺所にも使つてゐた。小溝の緣と崖との間には、それでも、どうかかうか、人の步けるくらゐの空地があつて、そこへ菊だのコスモスなどを培ゑてゐたりした。私は場末とはいひながら、東京の市中で、山淸水を引いて風呂を沸かしたりしてゐるのが、何ともいへず嬉しいのであつた。――いふまでもなく、その久世山が分讓地に整

理されてからは、まだいくらか野趣の殘つてゐた小溝もコンクリーで固められた石垣づくりの泥溝となり茫々たる草原であつた自然の崖は削り取られて、見上げるやうな丈餘の石垣になつてしまつたから、淸水ももう引かれなくなつたらう

―――　・

　そこに、そんな隱れた、さゝやかな旅宿のあることを、はじめて知つたのは、もう隨分古いことであつた。私はある年の冬の始めからそこに宿泊して窮迫のどん底に居つた。その年の年暮はたうとうそこで年越をした。
　考へてみると、私の前半生――といひたいが、殆ど全世涯の三分の二まで――は失戀と窮迫とに附纏はれてゐたのであつた。それを今更後悔してみたところで爲方もないことだがそしてその窮迫と失戀との時代の私の住家がいつも久世山下の陋巷に過ごされてゐたのも何かの因緣ではあるまいかと思はれる。それから二十年も十五年も遠ざかつた今日から見ると、そこらの街辻や露地裏などが餘處々々しく思はれるのだが、私にとつて最も不快な時代に過ごされた土地でありながら、何となく、懷しくつて忘れられない氣もするのである。
　その時よりもまだ七八年も前に、私は、久世山の奧の小日向臺町に始めて、先の別れた女と一緒に家を持つて、二三年住んでゐた。そして、生活が經濟的に極度に行き詰つたところで、高臺の屋敷街から、高臺の崖下に恰も人間生活の滓のやうに澱んでゐる、陋巷の裏長屋に零落れて來た。その時から又六七年經過しても、やつぱり私の生活は舊態依然たる落魄の生活であつた。長い間同棲してゐて、そして別れた女のことから、惱ましい心の痛みを癒さうとして、八月のもう終りのころから一と月ばかりの豫定で、東北の方の山の中の溫泉地へ行つたのが、浮世離れのしたその土地が氣に入つたのと一つは、もう再び惱みの多い東京へ戾つて來るのが厭になつたところから、そのまゝ、又ずつと居續けて、到頭十月一ぱいをその地で過ごし、東京へ歸つて來たのは、十一月の始め深い山の中の溪底の村では、凄じい木枯らしが、山谷の鳴動するほど吹き荒んでゐた。
　私は東京へ歸つて來ても、何處へ心を落着ける處もないやうな心地で歸つて來た。しかし、私は今から、その時のことを顧つてみるのに、やつぱりそんなことまでが懷しく思ひ出されるのである。
　ともかくも私は前にいつた、そこの旅宿に一時假泊することにした。落着きのない不如意な生活の行きづまりから、放棄的な氣分になつてゐたところから、神經衰弱症の睡眠癖に罹つて眠ることだけはよく眠れた。何をするといふのでもなく、何處へ話に出掛けたといふのでもなく、夜と晝とを、たゞ空しく過ごすのであつたが、大抵眼の覺めるのは十二時か午の一時であつた。あまりに眠り過ぎた結果は、頭の中がまる

で熟んだやうに怠るくなつて何をするにも手が出なかつた。

そんなことで日を立てゝゐる間に、短い十一月、十二月の日は走るやうに消えてしまつた。悒せき宿屋の四疊の二階座敷から久世山を見上げると、山を蔽ふた草原は、日に日に褐色にうら枯れて來た。私は何處に、人の世の生きる慰樂があるとも思はれなかつた。

と、ある晩、もう宿では夕飯の膳を形づける時分であつた。宿の小女が襖を開けて

「宮城さんといふ人がお目にかゝりたいといつてゐます。」といふ。

「なに宮城?……誰だらう。そんな人は知らないな。」私は審かしさうに頸を傾けた。

「女の人です。」

「女の人……宮城……」私は少時の間どうしても思ひ出せなかつたが、やつと判斷がついた。

「名は何といつた?」

「名は伺ひませんでした。」

まるで久世山の枯草原のやうに荒寥とした氣持ちで居るところへ思ひがけしもない女が訪ねて來たといふことはどんなに私の枯れ果てた胸の中に一脈の生氣を蘇らせたか知れなかつた。宮城といふ姓は聞いたやうにも思はなかつたが、きつとその女だらうと思つたので。

「こつちい、お上んなさいといつてくれ。」

やがて、ぎし〳〵と雜普請の階段を上つて來た女は、果してその女であつた。

東北の方の温泉場で知つたその女であつた。浴客の少くなつた宿では、夜の用事がすむと、彼女達は、よく、寢る前の湯に入りに來た。その女は私の座敷を受持つてゐた。宇都宮の者であつた。二三ケ月も話してゐる間に、彼女が、普通の温泉場を渡り歩いてゐる女でないことだけは分つた。それは氣質からも、素性からもさうであつた。一度中學校の敎師を夫に持つて七八年も暮したが、それに死別れて、子供もないところから、故鄕には親や兄弟もあつたが、もう今のところさしあたり再緣する心もなかつた。それよりも獨りで氣樂にして夏場の温泉地で、も一と働きしたら氣が晴れてよからうといふのであつた。字も一寸書けた。

彼女は顏はまずかつたが、ほかの者と一所に浴槽に漬かつてゐるところを見ると、脊の高い、四肢が伸び〳〵として、締つた肉附きが白くて滑かであつた。

一度給仕に來た時

「おみねさん、どうだ東京に來ないか。」

十月の紅葉の客も段々に末枯れて、さしもに夏は盛つてゐた土地も今は滿目蕭條として來た。いくら歸りたくないといつても、やつぱり東京へ歸つてゆくよりほかはなかつたので

私も遠からず歸り心地でゐた。

「これからは、こゝも、もう駄目ですねえ。」

「もう駄目さ。君はずつと來年までゐるつもり。」

「さあ、考へてゐるんです。こゝの内ではぜひをつてくれといつてゐるんですけれど、寒いしねえ、それに用事もないんですから。」

「東京へいつてみようぢやないか。」

「知らん處は心細いから。」

「それはさうだ。私が知つた人ぢやないか。」

「はゝ、それはさうですけれど。わたし自分の家へ歸らうと思つてゐます。」

「宇都宮へ。」

「えゝ。やつぱし自分の家が一番いゝわねえ。」

「それはさうだ。しかし、一生兄さんの處に厄介になつてもゐられまい。」

「それはさうですけれど、母もまだゐるし、兄が、私の不仕合せを可哀さうだといつていたはつてくれますから。」

「さうか。それはいゝねえ。……そんなことを聞くと、なほ君を東京に呼んでみたいやうな氣がする。君は東京は知つてゐるだらう。」

「えゝ、一寸知つてゐます。あんまりよく知りません。」

「ぢや、おいでよ。わたしも、これから東京に歸つたところで、誰が待つてゐてくれるといふ者もないし、君、私の處に來て、世帶のことをやつてくれないか。」

「あなたお一人?」

「さうだよ。」

「噓。」

「噓ぢやないよ。」

「始めから……?」

「私も君と同じやうなものさ。」

「お死になつたのですか。」

「死んだのでもないがね……」

「お一人ぢや詰りませんわねえ。」

「御同然さ。だから東京へおいでなさいといつてゐるぢやないか。」

そんなことを二三度話し交はしてゐる間に

「お臺所の御用ぐらゐはして上げますわ。」

などゝいつてゐた。

それで、今入つて來たのを見ると、おみねは丸髷に結つてゐる。

「君は、あんなにいつてゐても、つい來ないだらうと思つてゐたのに、よく來たねえ。」

「えゝ、どうしやうかと思つて、餘ほど考へて見たけれど、家にゐても飽きるしねえ。」

「よく來たねえ。」さういひながら、私は又、ぢろ〳〵と、彼女の頭髮や顔を眺めた。溫泉場で女中を働いてゐた時よりもさうして容姿をつくると、柄が大きいだけに、ずつと引立つて見えた。

「あちらの方はもう隨分寒いだらう。君は何時家へかへつた？」

「えゝ、あなたがお歸りになつてから、三四日すると、すぐ歸りました。」

「さうか、とにかくよく來たねえ。寒いから、もつと火鉢の方にお寄んなさい。」

私は、彼女の手さきを、ぢつと握つた。

「自家で、なか〳〵東京に來ることを承知しないもんですから。」

「お母さんや兄さんが。」

「えゝ。」

「まさか溫泉地で知つた客の處へ行くともいへまいからねえ。」

「そんなことはいひませんが……わたし翌日一寸芝の方へ知つた人を探づねて行かうと思つてゐるんです。」

「おや、私のところへ來てくれたのぢやないのか。」

「あなたのところへ來たの。ほゝゝゝなに、それは、何處か堅い好いお屋敷に奉公するやうなところはないかと思つて、その芝の人、國の方の人で古くから知つてゐる人ですから。もう老人夫婦なんです。」

私は自分の身のまはりのことを考へて見た。さしづめ今の窮乏した境地から、脚を洗つて、小さい家でも一軒借りてみようとする勇氣はやつぱりなかつた。といつて、このおみねが、もつと好い女ならば、インスピレーションを喚起してくれたであらうが、それもなかつた。

「私もねえ、君に臺所をやつてもらつて一軒小さい家を持つといゝんだがなあ。」

實は、その東北の方の溫泉場に行く前に、小日向臺町の二丁目に、閑靜な手頃の家が一軒あつたので、それを借りる約束をして、少しばかりの手付を拂つて、九月の中ごろ戻つて來てから入るといつておいたのであつたが、家主は家を空けて十月中待つてゐてくれたのであつた。それを不義理にそのままにしてしまつた。

さういふと、女は

「あなたが、こんな宿屋にゐないんですと、わたしあなたの處に置いて使つていただくといゝですけれど。……あなた、家はなか〳〵持たないでせう。この方が氣樂ですもの。」

「それはまあ、そんなものだが……」

「家を持つものも隨分うるさいものですよ。私も先の夫を持つてゐたこともあつたが宿屋住居の方が多かつた。それに金

が餘計に入つて、家を持つと。」

「なに、宿屋にゐる方が金は掛るさ。」

「かゝるけれども、毎日入らないでせう。」

「はゝゝ、それはさうだ。」

「あなたは、まあ、こゝにかうしておいでなさいよ。わたし時々訪ねて來ますわ。」

「うゝ、それでもいゝ。そして、そのうち家を持つたら、來てもらふか。」

「さう、それがいゝわ。それまで私、どこかで働いてゐますから。」

そんな話をしながら、彼女はその晩そこに泊つた。そして翌日芝の方に一寸行つて來るといつて出ていつて、夕方には又歸つて來た。二三晩彼女はそこに泊つてから、芝の方に、始めのつもりとは大分違つてゐるが、一ヶ所勤め口が見附かつたといつて、そちらの方へいつた。そして手紙をやると、彼女は時々都合をして出向いて來てゐた。

しかし、そのころ私には、先に別れた女のことで、胸の創がまだ生々しい痛みを殘してゐた時分のことであつたから、私はその女のことを、さまで心にとめてもゐなかつた。つまり、その女では、私の惱みが癒やされなかつたのであつた。その間に又先の女のことで新しい問題が持ち上つたりして、その女のことは、いつかそのまゝになつてしまつた。

話が前後したが、私はその旅宿に燻つてゐる間に、やがて十一月も過ぎてしまひ、靜かな冬の日は照つてゐるやうでも何となくあはたゞしい師走の氣持ちが迫つて來た。

その間には天氣のよい日ばかりはなかつた。霜けたやうな濕つぽい冬空の日の方が多かつた。戸外の久世山の崖下の原つぱには少しく小廣い處があつて、そこで染物屋の職人が毎日染物などを乾してゐた。上方訛の職人が、一日つまらない歌をうたつてゐるのが耳についてゐた。「いろを持つなら紺屋を持ちな深くなるほど愛がある。」

そんな、つまらない歌を唄ひながら彼等は今に正月が來るのを樂しむらしく見えた。

「あゝもうぢき正月やなあ。」といつて毎日單調な仕事をして、布を引張つたり、しんしをはづしたりしてゐた。さうしてゐるところへ、ちら〳〵粉雪を散らして來た。西北の透いた久世山の突端に身を刺すやうな朔風が吹きつけて來た。染物屋の職人は、あはてゝ染物を取りはづして引揚げていつた。

そんなことは私の生活とは何の交渉もないことでありながら、私にはそれが、何となく、私の窮迫のどん底に沈んでゐる、荒寥とした生活の單調と憂鬱とを唄ふ自然の詩のやうに思はれるのであつた。

魄は、正月といふ名ばかりの正月をそこで迎へて、一月の末にはまた、そこにもゐられなくなつて、寒いさむい冬の最

中に、そこから、つい近所のある路地裏に越していつた。燈火の少い露地裏を歩いてゐると、私は自分の眼が見えなくなつたのではないかと疑ふやうなことがあつた。實際視力がひどく衰へてゐることが分つた。私の果敢ない精神的生涯はもうこれきりに終るのであらうかとも考へた。が、それほどに心を破りながらも、私はまだ全く絶望するほどにはならなかつた。何かしら、もう少しくらゐはよいことがあるやうに思はれ、そして、そんな生活がどういふものか、今から回顧してみると、何となく懷しくなるのである。それは、今の生活がその時に比べて多少落着いて、幸福であるから、さう思はれるといふのではない。私には、なにゆゑか落魄といふことにある詩趣を感ずるのであらうと思ふ。

それから十年の歳月が瞬く間に過ぎてしまつた。前にいひかけた女と逢ふために、ふと思ひ出したのか、そこの家であつた。

その後の女との關係も、やがて一年ばかりつゞいてからのことであつた。

「わたし、今日は、あなたに、よく訊いておきたいことがあるんですの。」としんみりしたやうにいふ。

私はさういはれると、何かしら、重い責任を脊負はされるやうな氣がするので、心に進まなかつたが、

「何のこと?」といふと、

「わたし、このごろ縁談があるんです。」

「縁談があるなら、仕合せぢやないか。」

「あなたは、それでいゝんですか。」彼女は私の顏を見た。

「だつて、私と、かうして、譯も分らずにゐるより、その方が、君にとつてどんなに幸福だか知れやしない。」

「わたし厭ですわ。」彼女は、そうつと眼を拭いた。

「厭だつたら、やつぱりかうしてゐるさ。」

「そんなたよりないことをいはないで下さい。」

「なんにも頼りなくはないさ。どんな縁談か知れぬが、それが厭なら、やつぱり、このまゝでゐたらいゝぢやないか。」

「わたし、いつまでも他の家へ奉公などしてゐたくないわ。」

彼女はしきりに眼を拭ふた。

「奉公つて、あの家にゐるのは、まるで女主人のやうなものぢやないか。皆なから大事がられて。いゝぢやないか。」

「見かけはよさそうに見えても、やつぱり奉公となると、さういかないところがありますよ。」

「それはさうだらうさ。しかし、私が今、君と一緒に家を持つといふわけにもゆかない。そんなことは世間體が悪いといふよりも、わたしは一體、君とかうして世間を忍んで逢つてゐることに興味があるので、さうでなかつたら私の君に對する氣持ちも大分ちがつて來る。女とは表向きに逢ふものぢやない。私の本來の考へをいへば、だから夫婦だの、結婚だの婚禮の披露などといふことが面白くないのだよ。女は忍んで逢つてゐるから樂しいので、さうでなくなかつたら、女と逢ふ樂しみは半分以上無くなつてしまふさ。だから君とかうして逢つてゐる間は、大丈夫私はあんたを捨てはしないよ。」

「ほんとに……?」

「噓をいふものか。」

彼女にも、そんなことをいつて男に泣いて口說いてゐる間が樂しみであつた。それは大抵の女が樂しい瞬間ほど涙に濡れるものであつた。

(をはり)

老若

祖母の三十三年、父の二十七年、次兄の二十三年を延期したり繰り上げたりして此處で一度に弔ふといふ案内があつたので、私は暫くぶりで四月の末に京都から鄕里の方に歸省した。もう二十幾年といふもの私ひとり鄕里とは遠く懸けはなれた東京の方に暮して居るので、可なり親戚なども多く大抵近いところに生活して居るので、平常の往來なども頻繁で、親戚相互、身内の者の噂や、生死、嫁娶其の他人の身の上につゞいて起つて來るいろいろな出來事などが彼等の間には一つの世界を成り立たしてゐるのであるが、私ひとりはさういふ世界から自然遠ざかつて居た。けれども私に最も肉緣の深い其等の過去の人達の年忌には、平生、段々遠くへ過ぎてゆく歲月とともに忘れがちになつて居る其等の人々の記憶をせめてさういふ機會に思ひいでゝ追憶にふけつて見たいのが私の志であつた。それ故東京にゐても、近年はさういふ年忌の際には成るべく歸省するやうにしてゐるのである。それに一つは、母が八十に近い老齡なので時々行つて見たいといふやうな都合から京都に居ると、遙々東京から出掛けてゆくよりも時間が十二時間位は短縮されてゐるわけである。

私は長閑な春の播磨路の野山を五時間ばかり汽車に搖られて、午過にはもう播磨と備前との國境の船坂山のトンネルを向うに通過してゐた。そしてトンネルを出はづれると近年煉瓦製造の工業地として繁昌してゐる三石驛で、三石の一部落に姉の家があつて、高い鐵道の下に其の家が見えてゐる。私は毎時汽車の窓からその姉の家の裏側を見下して往來するのである。その日も此處の家からも誰れかが法事に行くであらうと思ひながら見てゐたが、誰の影も見えなかつた。姉とは二十日ばかり前娘と婿の夫婦と一緒に京阪から伊勢路の方を見物し、其の歸途に京都の宿に泊つてゐる時に私は會つた。昨年の春も丁度その頃やつぱり曾祖父の五十年忌があつて東京から歸つていつた時には姉も來てゐて會つてからまる二年ぶりで會つたのであつた。京都ではその時三人づれで私の宿に訪ねて來てくれたのだが、生憎私がそこらへ出て留守だつたので、其の夜私は姪の夫が紙切れに書置きをしておいたのをたよりに七條の停車場近くの旅人宿に訪ねて行つて三人に

面會した。女連は丁度夕飯の箸をおいたところで、酒の好きな姪の夫がまだ膳の上の物をつゝきながら酒盃を離さずにゐる處であつた。私がまだ夕飯前だつたので姪の夫は女中を呼んで客膳を命じて序に酒の熱いのを持つて來させたりして好い機嫌になつてゐた。彼はもう私と同じくらゐの年輩で相當に敎養のある氣の好い男であつたが、肥料の卸しなどを近頃かなり手びろくやつてゐるらしかつた。

「エスさん此の頃大變儲かるといふぢやないか。」私は盃を返しながら戲談のやうにいつた。

「えゝ、儲かりもしませんが、商賣もこれでなか〳〵面白いもんです。」といひながら、彼は好い氣嫌で手酌をしてひとりで飮んでゐた。

「かうして二人で方々遊んで步くところを見ると、私には何にも分らんけれど、おほかた儲かるのぢやらうと思はれる。」

姉は傍からさういつてゐた。姪の身體の虛弱なせいか、彼等には子供がなかつた。

話は此度見物して步いた處の事から、それからそれへと擴がつていつた。大阪にゐるエスの從弟の處を訪ねて一緒に浪花座を觀たこと、其日返へりに從弟達夫婦多勢で有馬にいつて溫泉に入つたこと、大阪に二た晚泊つて、翌日電車で奈良にいつてそれからすぐ伊勢參宮をして昨夜は大津に泊つて三井寺や石山寺を見てまはつて今日京都に來たのであつた。

「それよりワイが死んでなあ。」

と姉がふつと私に話しかけた。

「あゝ、さう。ワイが死んだ。」私もすぐ姉の心を察して、同情のある聲を發した。

ひとりワイばかりではない、姉の家では近年度々死ぬ者がつゞいてゐた。その時も姉は十年の間に八人とか九人とか死んだといふはなしをしてゐた。舅姑の祖父母の順序であつたが長男の嫁、次男の嫁、長男の子が一人、次男の子が二人、自身の連合が四五年前に五十六で死に、去年の二月にはまた三男のワイが二十九で亡くなつた。その中で長男の嫁と姉の夫と三男のワイとはいづれも明かに肺結核であつた。血統からいつてもさういふ病氣は出來さうもないやうに思はれてゐたが、いつとなく忌むべき病魔に姉の一家は襲はれてゐた。

とり分け三男のワイは中學校時分から、なか〳〵秀才で、どこか性質に野太いところもあつたが學校はよく出來る方であつた。中學校を卒業してから東京に出て外國語學校のマレイ語科を修めた。私は彼の學問の傾向から判斷して大學の法科をでもやることを勸めたのであつたが自分で志を立てゝゐて南洋にゆくのだといつて、その方をやつたのだ。しばらく私の家にもゐたことがあつたが、後には外へ下宿して、學校を卒業してから神戸の方のある汽船會社に勸めて濠洲の方へ三度ばかり航海したといつてゐた。尤も私は今のやうに、そ

の頃も一年ばかり京阪の方へ滞在してゐたので、彼が外國語學校を卒業する時分から毎時かけ違つて會はなかつた。死ぬまで會はなかつた。が噂だけは偶に郷里へ歸つた時に聞いてゐた。どういふ事情であつたか南洋へは二度航海したきりで會社の方は止めて主に大阪あたりにゐたらしかつた。其頃まだ生きてゐた彼の父親や兄などが心配して折角學校を卒業して校長の周旋で就職した地位を自ら棄てゝ大阪あたりに轉々としてゐるのをやかましくいつてゐるらしいことも私は耳にしてゐた。學生々活からつゞいてさういふ俸給生活に入つていつた經驗などのない田舍の父親などの考ばかりでは分らないから私も都合よく會へる機會があつたら一度會つて事情を訊いてみたいと思つてゐるうちに父親はさういふ病で死んだ。其頃ワイ自身からも彼の兄からも手紙を寄越して何か良い就職口はないだらうかといつて、私のところに頼んでよこしたりしたこともあつたりして、會つて詳しい事情を訊いてみねば分らないが、南洋は面白かつたぢやないか、最初から自分で志を立てゝその通りにいつた。それを止すやうぢや私の方からどういふことを希望に抱いてゐるのだか判斷しかねる。支那へでも朝鮮でもアメリカへでもゆく處はあるぢやないかといふやうな返事をやつておいた。

それから又二年ばかりたつて一昨年の春歸省した時にワイはやつぱり大阪にゐるが身體がよくない。そしてそれは彼の父の病氣を傳へてゐるらしいやうな樣子であつた。それを聞いた時ワイがそんな病になつてゐるかと思つて私は驚いたが彼の父も身體は本來虚弱な方ではなかつたのだが、醫者は晩年殊に放縱になつてゐた深酒の爲に健康を害したのが原因であるといつてゐた。ワイも體格などは兄弟中で最も屈强に出來てゐた。南洋の方に行つたが事志と相違して、さうして失意の感を抱いて父兄の意に背き大阪あたりにゐて下宿屋に不如意な生活を送つてゐるワイが遂に父の病を承繼いでそんな貧乏くじを引いたのも、何だかそこに惡い運命のまはり合せがあるやうに、私には思はれぬでもなかつた。その時私の歸省を聞いて私を訪ねて話しに來たワイの小學校時代の友達である隣村のある豪農の息子は、丁度ワイが東京の私の家にゐる時分にその息子は早稻田の文學部に入つてゐて、やつぱり彼の家に寄寓してゐたが、丁度ワイが私の家を出て行く時分にその息子は家の事情で學校を止めて歸省した。其の時私を訪ねて來た息子はワイの話をして、

「ワイ君が南洋の航海を止められた事情も成る程僕にお話しになつたので見ると、よく解るのです。ワイ君のお家では皆さんが、隨分誤解といつてはどうかと思ひますが——よくワイ君の心持がお分りにならんから、一圖にワイ君がいけないやうに思つてお出になるらしいのですが、僕に語られたところによると、全く舟乘りなどには仕方のない、云はゞ破落漢

のやうな者が多いんですからな。きいて見ると、ワイ君などのやうに修養といふやうな人生問題などを考へてゐる人にはそんな仲間入りは出來ませんよ。」

その息子はそんなことを私に向つて話した。さういへばワイはやつぱり文學などが好きであつた處をみると、南洋などに出かけて男性的な企業などに從來するには適はしくなく出來てゐたのであつたかも知れぬ。大阪から一度寄越した手紙には大阪にゐて、そして(叔父)私のやうに文學がやりたいといつてセンチメンタルな事を書いてゐた。私はさういふ事をいふ親戚の青年(或は他人の子弟でも)の文學志望に對しては何時も反對してゐた。それは生活の危險を思つたからでもあつた。けれどもワイはやつぱり文學——廣い意味でいふ——にゆく人間であつたかも知れなかつた。彼は自分の心で自分の身體を食つた傾があるらしい。

すると、去月の二月の初私は箱根にいつてゐる間に郷里から來た手紙にワイがたうとう須磨の病院で死んだ。二十九歳であつたといふことを書いてあつた。その時可哀想なことをした、近いうち歸省するつもりであるから、しばらくゆかぬ姉の家をたづねて、度々の不幸の見舞をいはうと思つてゐたのだが、歸省するのが段々遲れて、歸つたのは夏の初の六月であつた。その時は遂に會はず京都まで戻つてしまつたからずつと姉には會はなかつたのである。多勢の死んだ者の中でワイは彼女にとつて最も忘れられない悲しい記憶となつてゐるのである。それは無理のないことであつた。彼女はワイが死んだ時のことをいひ出して、私に話してきかせた。長男に二度めに貰つた嫁などに氣がねがあるので、家ではいくらいひたくつても堪えてゐるワイの追懷を彼女はそこで遠慮をせずに繰返へすことが出來た。彼女は、長男に二度目の嫁を貰ふ時に三男のワイが頻りに懷しい家庭に歸つてみたかつたことや、臨終の場に肉身の者が誰も傍に附いてゐてやらなかつたといふやうなセンチメンタルな話を繰返へしてゐた。

長男の婚禮の時に歸つてみたいが、どうしようかといふ手紙を寄越した時に彼女は、歸りたがつてゐる病身の息子を現在の自分の家に歸つてくるなとも云へず、歸つて來させたさは腹一ぱいであるが、長男の心の内を量りかねて何といつてよいか分らなかつた。そして長男の心まかせに委せた。長男も弟の心や母親の心の内を思つて無下に歸りたい心を拒むことも出來なかつた。殊に先の嫁が同じ病氣で死んだ後なので二度目に迎へる嫁については特にさういふ忌はしい聯想や不愉快な危惧から、すつかり別な新しい世界に入りたいのが母親やその子達の希望であつた。誰の心も此度の再婚を回轉期として一家が幸福を招徠する新紀元を開かねばならぬといふことに存してゐた。長男の心もさうであつた。彼の母親の心もさうであつた。母子(おやこ)はワイの心に任せて歸郷を快諾するか

どうかといふ點について胸を痛めて相談した。

「私は、ワイが歸りたうてかへりたうてならぬのも知つてゐるし、さうかといつてエー（長男の名）が私やワイに對して、歸すことはならぬとも思ひ切つてよういはず、その心の內を知つて見れば、歸さしてやつてくれとも私はよう云はず、ほんとに腹を痛めた。」

姉はそんなことをいつて、センチメンタルな話をつゞけた。

私は默つて聞きながら、なるほどと思つてゐた。

「そして遂にかへらなかつたのか。」

「それで私はエイに、私はどちらでも好い。お前が歸るならいつてやつても、お前を怨まず、また歸れといつてやつて、かへつて來ても何とも云はぬ。そこはお前のかうと思ふやうに計らつておくれ、といつてエイの考にまかしてしまふた。エイも餘程その時はつらかつたらしいが思案に餘つて居つたらしいが、委しい手紙を書いてやつたやうであつた。……たうとうそれで戻らなんだ。」姉はさういつた。

「さうか、可哀さうだが止むを得ぬ。どうもあの病氣に罹つたが最後當人の運の惡いのだと思つて遠慮をするよりほかにない。」私は定まれる家もなくして長い間旅の空に漂浪してゐる自分の身の事を考へ、そして私よりも十五六年も年若くして夭逝したワイの運命をも考へて見た。

「それにしては、この私は案外長命をしてゐるねえ、幼い時から、とても遠くへ出掛けて不自由な暮しをして活きてゆかれる人間ぢやないと思つてゐたのだが。」

「叔父さんの身體とワイの體とは違ふてをつた。」

酒で好い機嫌になつてゐるエヌは傍から口を入れた。エヌはそんなことをいつたがワイは私などよりは遙に强壯な體格の持主であつた。

「その代りエイも、ワイに手紙でさう書いてやるし、ずつと惡うなつて私と二人で須磨の病院へ見舞にいつた時にも、金はなんぼ入つても構はんから、そのことは少しも心配せんやうにして養生をせねばならぬといふて、エイも金は何時も不足の無いやうに送つてくれた。」

姉は傍に聞いてゐる者に話すよりも、今まで何度も人にも話し又自分でも繰返へして思ひ浮べたことを、またおさらひして、じつと思つて見る爲に語るといふやうな調子でいつた。けれども私は、それを何度人に語らうとも當分の間はさういふ心持ちから全然忘れてしまふことの出來ぬのも無理もないことだと思つて默つて訊いてゐた。

「須磨の病院へ入るのが、自分では嫌で爲樣がなかつたのを騙すやうに賺かして入らしたのぢやさうぢや。」

大阪にゐる間は、東京の母校の校長の周旋で其地のある大きな商會に附屬してゐる外國語學校の教師をして小遣ひとりをしてゐたのだが、それも病氣が重くなつてから、自分の健

康にも障るし生徒の爲にもよくないといふので、その方は休職になつてゐたが南洋語を教へてゐたある金滿家の息子がひどく同情して肉身の者も及ばぬ心配をしてゐた。遂々病院に入らしたのも其の人間が切に勸めて入らしたのであつた。

「まだ大阪にゐる時分に此の冬は鹿兒島の櫻島にゆくつもりだといふから、何處でもお前の好きな處へゆくがいゝといつて、エイも金はいくらでも送るからといつてやつて、いよいよ行く時にはさういふから、その時金を送つてもらうとワイから云うて來てゐたのに、何時までたつても、ねつから金を送つてくれと云うて來ぬと思つてゐると、須磨の病院へ入つてゐるのぢやつた。」

須磨の病院へ入つてからは次第に病勢は募る一方であつた。その時母親は兄と伴つてワイを見にいつた。けれども病人はまだなか／＼自分では死ぬものとは思つてゐなかつた。それでも病氣のことはよく知つてゐて、兄にも母親にも自分から制してあまり傍に寄りつかせなかつた。母親は病氣を恐ろしいとは思はなかつたけれど伜達のいふとほりに病人の體や衣類にさはつたりすることを避けてゐた。彼女にはそれが何時までも追憶の種になつてゐた。宿に一晩泊つて翌日また見舞ふて、いよ／＼歸るといふ時に「そんならもう歸る。大事にしなさい、惡かつたらまた直き來る。何も欲しいものはないか。」といつて、病室を出る時に最後の別れをいふと、病人は何もほしいものはないといつてゐたが、いよ／＼病室を立ち去らうとして振顧つてみるとワイは寢臺の上に這ひ伏つて聲を忍ばせて泣いてゐた。

彼女はそれが今でもあり／＼と眼の底に膠着いてゐるのであつた。そして十日ばかりして急に惡くなつたといふ電報が來て、此度行つた時にはもう死んでゐた。若い親切な看護婦は臨終の模樣を委しく話してきかせながら「このとほり靜に眼を瞑つておいでなさいます。」

といひつゝ顔に被ふた白い布をとり除けてみせた。

「それでも私、どなたも御肉身の方がひとりもお出でになりませんので、ほんとに御病人がたよりなさゝうで傍についてゐてお氣の毒でございました。」

看護婦はさういつて、親や兄弟のあまりに思ひ分けのいゝのを薄情がるやうにも感心するやうにもいつた。家に健康でゐる他の伜達の後々のことなどを思つて、死ぬる者には可哀さうだと思ひながら、なるべく病人に接近せぬやうにしてゐた彼女の心では、その看護婦と、ワイが南洋語を教へてゐた金持の息子とで肉身に代るほどの親切を盡してくれたことが忘れられなかつた。

いよ／＼息が切れる時にワイは仰けに寢ながら、看護婦に「僕はもう眼が見えなくなつた。」と、いつたさうである。それから間もなく死んだ。

私はもう此の上姉の、ワイの臨終の模様や、東京にゐて外國語學校に通つてゐた時分の風貌などを、明歴と私に思ひ起さしめるやうなセンチメンタルな繰りごとを言はせたくなかつた

「そして明日は京都を一日見物する豫定なのか。」

新聞の夕刊を女中に持つて來させて相場表などを見て歸國を急ぐやうな口調でゐたエヌに向つて、私は話頭を轉じた。

「えゝ、歸れたら明日の午後の汽車で歸へらうと思つてゐます。」

「ぢや、おねえさんだけ、どうだ。私のところへ來て泊つて一人殘つて、もつとゆつくり京都を見物しては。去年からの約束じやないか。」去年も手紙の往復では京都から大阪奈良の方を案内したり、してもらつたりするやうな約束だけをしてゐて、遂に果たさなかつた。けれどももう歸途の二等切符まで買つてゐるのを無駄にするのがつまらないといつて、明日の豫定は相談が纏らないまゝで私はそれから暫く話して自分の宿に戻つた。翌日立ち寄るかと思つてゐたけれども寄らなかつたと思はれて、それつきり訪ねて來なかつた。

汽車はそれからもう一つ中間にあるステーションを通り越して私の村の中を突切り、その次の私の降りるステーションの少し手前まで來ると汽車の窓から長閑な春光の一面に漲り渡つてゐる田圃の道を三人づれの女が歩いてゆくのが遠くに見えてゐた。眞赤な長襦袢の裾を端折つてゐるのが人どほりの少い田舍道に浮き立つて眼についた。いかにも春闌の野景色である。と、思つて私は見てゐた。

やがてステーションに着いて、その近くに門屋の店を出してゐるエヌの家に立ち寄ると、先日京都で會つた姪がひとりゐて、

「あ、おかへんさい。今すぐ一足先へオー市の連中が叔母さんとケイさんやエムさんの嫁さんをつれてエフへいつたばかりのところです。」

「あゝ、さうか。ぢや三人づれで此の先きの田圃を歩いたのがさうか。」

「えゝ、それ〳〵。」

「ぢや、それに追ひつく處まで俥で急がう。」さういつて、私は店前に待たして置いた俥に飛び乘つた。そこからエフといふ私の村までは一里ばかりの道であつた。

オー市の連中といふのは、十二三年前にアメリカにいつてゐて急死して果てた私の兄の遺族であつた。その時十二を頭に三人あつた男ばかりの子が今は成人して總領は去年の秋妻を娶り、次男はそれから一と月おくれて、親類つゞきの家へ養子にもらはれた。その若い息子の嫁達をつれて姑の母親がエフの村へゆくのであつた。私は先刻汽車の窓から見た春光の

下をゆく華美な日傘を翳した赤い長襦袢の連中が私の甥達の若い妻であつたことを思つてゐると聯想は必然に十二年前の秋三十八歳を一期としてアメリカの果てゞ客死した兄のことに及ばざるを得なかつた。冷かな運命の手はまるで暗討を食はすやうに人の親、人の夫は一夜の內、一時間の內に死の世界に强奪してゆくが、その半面に於て、自然はまた無意識の力を以て若い者を育てゝ行く。十二年は過ぎた後から振顧つてみると思つたより早く經つた。先刻汽車の窓から見えた眞赤な長襦袢が十二年前にアメリカで、人の知らぬ間に急死して見出された父親の遺兒達の若い嫁であるといふのが私には夢のやうに思はれた。そして私は車夫に命じて春光の漲つた野道を彼等に追ひ着くべく驅けさせた。私は車の上に腰かけて軟かい春の風に吹かれながら、何となく胸の迫るやうな氣持がして熱い涙が流れて來た。それは早く死んだ者に對する氣の毒の感情であつた。それは淸い涙であつた。やがてステーションにつゞく村落を通り越して、十町ばかりいつた時分に向ふの村はづれを行く其等の女づれに追ひついた。

「おうい!」と聲を掛けて呼びとめた。

赤い長襦袢と白縮緬の長襦袢の三人づれの女は後を振顧つて車から降りる私を認めて立ち止まつた。白縮緬の長襦袢は死んだ兄の未亡人で、私と同年輩であることを私は思ひ出してゐた。三人の中では彼女だけが私を知つてゐるので、遠くから笑ひながら何かいつてゐる。彼女はもう二人の嫁の姑母らしい小型の丸髷に結つて、いかにも中年を疾に過ぎた年老いた婦人らしい樣子につくつてゐた。男と女の相違こそあれ私も彼女位の初老の域に入つてゐるのである。田舍にゐる七十八の老母は、

「四十暮れといふことをいふが、お前はまだ何ともないか。」

といつて訊くことがある。

「さうだなあ、眼はまだ何ともないが、今にも老人の眼鏡が要るやうになるかも知れない。併し齒は惡くなつた。頭髮も大分白髮が出來た。」

「うむ、大分白髮はある。」老母はいつだつたか、さういつて私の額のまはりを眺めたことがあつた。

私には白髮は案外に早く生えて來た。

丁度三十二になつた春の時分であつた。ふと左の額の上に私は五六本の白髮をはじめて認めて、老いといふことをはつと意識して哀愁の胸に迫るのを覺えたことがあつた。それは恰も洛陽少年惜顏色往逢落花長歎息といつたやうな氣持であつた。その時私はこれから、まる五年ほど歸らない鄕里に久し振りに歸鄕しようとしていよ〳〵出で立つ間際になつて立ちながら一寸鏡を見ると、今の白髮をはじめて自分の前額の邊に發見したのであつた。――世間の私に關する噂には私がいつも鏡ばかり見てゐるかのやうに傳へられてゐるが、私は

平常鏡をあまり見ない方である。私は着物は、他人に見せようとてゞなく、自分で着てゐた氣持がよいから着るのだが、めかす爲に顔を鏡に映すやうなことは滅多にない。そんなにしなくつても親はさう醜い顔に私を生みつけてゐなかつた。髯などは殆ど自分で剃らない。人は大抵自分で剃刀などを用意してゐるが、私は母に「四十暮れ」といはれる此の歳になつてもまだ剃刀を備へておいて時々顔にあてるなどゝいつたやうなおめかしをした覺えさへない。

六年前、學生々活を終つて、また間のない時分に歸鄕して以來、その春の歸鄕までに私は可なりに生涯の苦難を嘗めてゐた。白髪はおほかたその爲であつたらうと思はれた。田舍の家の緣側に寢轉んで暖い春の日を浴びながら、母は私の頭を撫でまはして、

「まだ白髪の生える時分ぢやない、これは若白髪ぢや。」

といつて、眼鏡をかけて私の額から數莖の白髪を拔きとつてくれた。――それも今からもう十二三年前の昔の春となつてしまつた。母が若白髪といつた私の額の白髪は、そのまゝ歳月とゝもにふえるばかりで、若白髪はもう若白髪でなくなつてしまつた。

私は元來體の强壯ならぬ割りに不思議に眼はいゝ。若い生意氣ざかりに、眼鏡をかけてみたいなどゝ思つたこともあつたが、今日までその必要はなかつた。そしてまだ老眼鏡を用ゐねばならぬこともないが、母の所謂「四十暮」が今にも襲ひかゝつて來はせぬかと思つて、時々それが意識の表に浮び上つて一種の氣味惡い脅迫となつてゐるのである。

「えらい早かつたぢやないか。」

彼女は岡山言葉で遠くの方から聲をかけた。そこへ私は俥から降りて追ひ着いた。

「どこから。東京から?」

「いゝえ、京都から。」

ステーションまで迎ひに來た作男が手荷物を擔いで附いてゐる。私もそれに荷物をくゝりつけて多勢で話しながら春の野道を歩いた。街道に沿ふた小川の水も暖かさうに春の日を浴びて土手の青草が蒸息れるやうに萠えてゐる若い嫁達の赤い長襦袢も燃えたつやうに野邊を彩どつてゐる。私はまた、胸が迫つて涙がにじんできた。アメリカに行つて煙のごとく死んでしまつた兄のことが聯想せられるのである。それは考へてみると、もう十五六年の昔となつてゐる。

「まあ御挨拶はどうでもいゝ。どちらが何方のお嫁さんですか?」

私は春の野道を笑ひながら、さういつて振顧つて未亡人に訊ねた。一同笑ひながら遲々とした歩みを更にゆるめた。

「これがケイの方です。こつちがエヌの方。」

といつて、姑母は笑ひながら敎へた。ケイの方はもう先刻から、白い刺繡のある黑い蝙蝠傘を翳して顔をかくしてゐた。

「これそんなに隱れんかていゝぢやないか。」

よく仰山に笑ひながら物をいふ癖のある姑母は賑やかにさういつて、道の眞中でさゞめいた。

さういはれても頑强に黑い傘で胸から上の方をかくしたケイの方は友禪の縮緬の長襦袢を着けてゐる。エヌの方はまだまるで人見知りせぬ子供のやうに靑に白い蝶々を刺繡した傘をかざしたまゝ物がいへないほど笑つて俯向いてゐる。眞赤な緋縮緬の長襦袢はこの方であつた。

若い者があんまり恥しさうにしてゐるので、私はあまりじろ／＼振顧つて見ないやうに遠慮をしてゐたので、どちらがケイの嫁どちがエヌの嫁と、はつきり記憶するまでには、春の野道をもう大分歩いてゐた。途には淸水のせゝらぎつゝ流れてゆく小溝に沿ふた繩手があつたり、村と村との境に流れる川の堰の上を渡つていつたりした。ぐるりの山も遠くに潤けて麥の圃も白く霞を罩めて夢みるとごとく長閑に煙つてゐる。

私は姑母と會話を交えながらも、時々蝙蝠傘の蔭に顔を隱してゐる若い嫁達にも言葉をかけた。するとはじめ頑强に顔を隱したケイの方が返辭はエヌの方よりはテキパキしたそして最初は傘の蔭で口をきいてゐたが間もなく後には顔をみせてきた。物をいふ聲もその方がいくらかませてゐる。

「いくつです?」

「どちらも十八。」姑母がいふ。

「同じ歳!? しかし二つくらゐは違つてゐさうだなあ。ケイの方が兄さんの嫁さんだけに年を取つてみえる。」

「だれでもさういふ。」ケイの嫁がいふ。

「同じ年のわりに二つくらゐも古く見えて不服かね。さう見えて丁度いゝんだ。」

「さうでございます。それで丁度いゝんです。」姑母がいふ。

道はそんな會話の中に涼しい藪蔭を歩いて小村の中を通つて、また麥圃の中を歩いてゆく。段々私達のゆく家に近くなつて來た。向ふの青い麥の波の上に小い寺の屋根が見えて、白い塀の中から銀杏の樹が青く繁つてゐる。私達はその麥圃の中の小徑を傳ふて歩いた。

「こんなに東から西からゆくと家でもびつくりするだらう」

「またいゝ具合に一緒になりました。」

「先日ステーションのエヌが野谷の姉と京都の方へ來た時に藤野の叔父さんは、もうお婆さんが親類まはりができんから今の櫻花見には自家で嫁品評會をする。いふて居られた。といつてゐたが、此度はその嫁の品評會だ。」

「ほんとうに、お婆さんは多勢孫の嫁が見られる。」

「こんなに甥達の若いお嫁さんを見ると、私も嫁さんがほし

くなつた。」

と、いつて笑ひながら振顧ると、若い嫁達はすぐまた蝙蝠傘で顔をかくしてしまつた。小徑の兩側には菫、蒲公英、蓮華草などが黃や紅や紫の花を咲きこぼしてゐる。黃白の蝶々が道をゆく人とあとになり先になり飛びむれてゐる。

と、見ると向うの田圃の畦に私達の兄が四つになる初孫を抱へて出て迎へてゐるのが眼に入つた。

「ほう、あそこに出てゐる、でてゐる。」

「おうい？」

と兩方から聲をかけた。

春の日は廣い野面に滿ちてゐた。

（大正八年十二月七日作早稻田文學掲載）

人の影

それは唯平常の晩でした。十月十九日の午後六時過ぎ、私は例のやうに夕飯を濟まして、火鉢に寄つて居りますと郵便配達が一通の書狀を投込んで行きました。國元の兄からです。

而かも表面に「大至急」と添え書きがしてあります。何事かと思ひながら中を讀んで見ますと、

拜啓時下追々秋冷相加はり申候處御變りなく御壯健に御座候哉。御伺ひ申上候。次に當方皆々無事に候へども爰に一つ存外の事出來し一同大いに驚愕落膽いたし候。それは米國に在りし利九治事去る九月二十八日の夜卒中にて死亡の旨彼の地にて利九治の友人なる緒方、安田と申す者より小山重藏氏（利九治の養家の義兄です）に當てゝ、九月三十日に認めたる書面十月十九日に到着いたし、岡山よりは直ちに自宅に通知あり。又御承知の如く近頃當時村より難波宗太郎氏が利九治を賴りて渡米いたし居り、漸く死亡する十日前に利九治に面會なし、今後兄弟の樣にして共に辛抱をせんと約束してから僅に十日ぶりに此くの如き有樣に相成りし趣宗太郎氏より、九月二十九日の夜認めたる書面が十月十六日の朝德永道太郎氏（宗太郎の親戚）に當てゝ參り、同氏は直に其の書面を自宅に持ち來り一同始めて驚き入り申候。前申したる岡山の方に當てゝ參りたる通知とよく符合する處を見れば別に疑はしき事も無之、全く死亡いたしたるものに相違なく候。誠に〳〵可哀きことといたし、落膽の至りに堪へず候。尙ほ右の難波宗太郎氏より道太郎氏へ越したる手紙は必要の箇所のみ書抜きて左に記載いたし候。

「前文御免被下度候。陳者、過日小山君に面會いたし、色色御厄介に相成、國元の話も致し、大に御安心に相成候就てわ之からは兄弟同樣にして働かうと申合ひ居り、尤も小山君には一二ケ月ほどさる田舍の方に遊びに行つて來る故、何分辛抱して居れと仰せあり、私も父兄と賴みして何卒早く御歸りあれと申せし折から、二十八日の夜十月一日出帆の信濃丸にて歸國する大田君と申す人の送別會の催しあり、小山君もそれに出席いたされ、同夜十二時頃、宿所たる演藝會事務所に歸宿せられ候由。そ

れより二時間ばかし遲れて、同じく事務所に宿泊の人が歸りしに、小山君が寢床の上に大の字形に寢て居られるのを見て「オイ」小山君風邪を引くな　と言ひながら、ゆり起せしに、何の返事もなき故よく〳〵見れば、どうも狀態が常ならざるに氣着き、旣に寢たる者を呼び起すやら、始めて大騷ぎとなり、直樣さま醫師を馳せ迎へたれども、最早縡切れたる後に私如何とも致すこと能はず、其のまゝ逝去被遊候由。小生の許へ通知しくれしは漸く四時半にて、跳ね起きさま足の踏む處も覺えず驅つけしに旣に右の有樣にて、泣くにも泣かれず、たゞ餘りの事に愕然たるばかりにて淚も出でかね候ひし、遙々賴り來て數年振に面會いたし、海山遠き故鄕の物語に、互に旅情をも慰められつ慰めつして、僅かに十日を出でざるに斯くの如き有樣、如何なる因緣にやと、天を恨み申候。

小山君より早く寢た人の話しを聞くに、「歸つて寢て居たが二度水を呑みに出て、それから高鼾で寢て居たやうであつたが、自分も寢入つたから、呼起されるまでわ後の樣子を知らなかつた。」との事に候。寢て居られた所を見ますに、少し吐いて居られた位のことにて、別に何等の變つたことも無く、全く一二時間中の出來事に候。それより引續演藝會を初め生前の友人等と相談いたし、十月一日に火葬に付し、遺骨を國元に御送付申すことに決定いたし、又生命保險の方も有る故診斷書及領事の證明書等も合せて御送附いたすやう、其の件は演藝會の方に依賴いたし居り候。小生も及ぶ限りは盡力いたし居り候へ共、何分にも日は淺く、知人は無し、土地の樣子わ分らず、驚愕落膽の餘り、徒に手を拱るばかりに候。尙又金員衣服を初め、重要なる所持品に就いてわ、後程判明致し申すべく、更めて可申進候。何卒右の次第益田樣へ御傳言被成下度、何としても、唯今の處小生より直接に手紙を出す事わ氣の毒にて忍びかね候。

草々

九月二十九日夜一時三十分認む

難波宗太郎

又岡山の方へ參りたる手紙も數度繰返へして讀み候へども右宗太郎氏の文面と大同小異なれば、其の方は此處に記載せず、中に所持品は明日歸朝の人に托送すとあり、卽宗太郎氏の文中に在る、大田と申す仁のことならん、果して然らば、今二三日中にわ歸着する日都合故、其の仁に面會せば委きこと分り可申、其の節更めて可申上候

以上

十月十八日認む

「在米の兄が死んだ？　あの壯健な兄が死んだ！　誤報だ誤報でわあるまいか？　何うも誤報らしい。」と、容易に信じられなかつたが、かう書いてある所を見れば、實際壯健で働いて居ることゝのみ思つて居た兄は最早二十日も以前に死んで此世にわ亡くなつたのです。唯々私共今の今まで夢にも其樣なことのあらうとわ思ひもそめなかつたもの、頭に彼は二十日間生延たばかりです。

併しながら私をして兄が死んだといふ事實を認めさせようとするものは、僅かに右に示した百行にも足らぬ書面のみです。書面を見たのみで兄の死は私の腦中にわ容易に事實らしい印象を與へないのです。兄の肉體は旣に四年の久しい間、五千里外の遠くに私の眼界から離れて居つたのです。それ故に生より死に變ずと云ふ一大事實わ此の場合私にわ極めて薄弱な認識を與へたのみです。愚かなものわ人間の情です。私は此の手紙を繰返し繰返し見て、まだ其の中に何處か死の事實を否定すべき缺陷はないかと心の中で探しました。その手紙一片の中に何うかして兄を蘇生せしめようとしたのです。推測するに、壞れた甁の破片を取上げて之れを故の形に合せて見たものわ、一人私のみでわありますまい。一日千秋の懷で彼れが歸來する日を、指を折つて待つ老母や妻子も定めしさうしたに相違ありませぬ。否現場に居つて死の事實を目擊した難波宗太郎を初め、兄が生前の知人、つい一時間前まで一所にビールを飮んで騷いだ連中も死して床上に橫はれる利九治が形骸を見出した瞬間にわさう思つたでありませう。況して僅々數百の文字に依つて死を信じようとするのです。必然の勢ひとして此際私の腦底に先づ顯はれて來る兄は死んだ兄ではなくして生きた兄です。生きた兄の面影が漠然として浮んで來また。何にしても此の四ヶ年と云ふものわ兄の肉體を見ないのです。折に觸れて彼が面影を思ひ浮べることがあつても、それは最近三四年間の兄ではなくして、三四年以前の彼です。彼方に行つてから私の所へ寄せた寫眞が二枚ございますが、此方に居た時よりも肥つて餘程變つて居ります。それ故に私は其の寫眞に依つては兄といふ感じを呼び起すことが出來難いのです。私の腦底に先づ出現する兄は日本に居た時の彼であつて併かも愈渡航出帆の當日、橫濱の英吉利波戶場の棧橋にベタ付けになつて居つた六千何百噸の大汽船の三等船客の甲板の上で會ふた其の時の面影です。それが私に取つてわ彼が最近の面影で、しかも今でわ最後の見收めとなつてしまつたのです。

三十七年の六月七日兄が出稼の爲に米國シヤトルに渡航せんとて便乘した神奈川丸は其の日の正午拔錨といふことでした。兄は固より三等船客のことでわあり消毒やら、身體檢やら、乘船の準備萬端の爲に、五日の朝、私が其の時分の住居であつた小石川小日向臺町の家を出て橫濱の乘船宿に泊つて居たのです。でいよ〳〵七日にわ見送りといふことで、私わ八時頃から出掛けて行きました。橫濱停車場前の橋を渡つた

直ぐ右手の旅館がそれです。私が尋ねて行きますと、帳場に居合せた番頭が

「エヽ、小山さん、其の方なら最早お乘込みになりましたから、直ぐ船に入らしつて、手前共の若い者が多勢彼方に行つて居りますからそれに御聞きになると直ぐお分りになります。」

「此方の若い衆といふのは何うしたら分るかね」

「若手前共の印袢纏を着て居りますから直ぐ分ります。」と申しますから其處から俥に乘つて棧橋に驅けつけました。

其の時私は俥の上で熟々思ひました。まあ何といふ心細い出立であらう。之が世に名高い人の歐米漫遊の出立とでもいふなら勿論の事、一寸した名のある人の出立でも見送り人は相應にある。然るに僅かに郷黨の誰れ彼れにのみ知られた自分の兄が、三百里外の此の地から渡航するのであつて見れば固より見送る人のないのも當然である。其樣な意味の虚榮心のない兄自らでもいよ〳〵、これで幾年の間は故國の見收めであると思へば無意識の間にも、不景氣な出立に淋しい〳〵哀別の情を感ずるであらう。彼れには虚榮心の無い如く青年の空想もない。併しながら彼にわ養ふべき親もあり、妻もあり、三人の兒もある。一家の働ぎ人といふ眞面目な重い責任を擔ふて微塵も浮氣でない勞働に出て行くのである。ナニ眞面目な事わ淋しく行はれるものであると考へながら、私わ的所もなく、兄の爲にむら〳〵と復讐の情を感じました。さうしてじつと涙の眼を瞑つて彼れ相當の成功を禱りました。

長い棧橋を渡つて、神奈川丸の傍に行きますと、船の上も橋の上も隨分な混雜です。甲板に上つて行つて、雜沓を分け其の旅館の印袢纏を着た若い衆は居らぬかと探しましたが、漸くのことに一人見付て、これ〳〵の人は知らないかと尋ねますと、心は彼方に口だけ此方といふ風な氣のない返事で、唯一言

「彼方の三等の甲板の方にも自家の者が居りますから聞いて下さい」と早口に言つて向へ行つて仕舞ひました。

私が洋行の人を此の棧橋に見送つたのわ此度でたつた二度です。それでも最初の時はある名譽ある留學生を送つたのです。見送人も大勢ありました。其の時は唯航海の愉快を想像するのみでした。所が兄の場合でわさうでありません。旅費とひへば乘船賃を拂つて後わ僅か百圓ばかしで所謂「見せ金」といふのを用意して居るばかり、其の他に心の依賴とすべきは二三通の紹介狀を持つて居るのみです。假令何百通あつたとて、他人から他人を紹介するのです、それが何になりませう。女郎の仇文と同じ事です。要するに彼わ眇たる自己の體力を自信する以外にわ全然運命を矢に任したのです。

汽車に乘るにも餘裕の金がなくつても一二等車に乘込んで自分の權利だけの場所を占領せねば氣がすまぬ。それでなければ汽車を打ち潰して遣りたいほどに思ふ私ですけれど、其の時は半被を着た若い衆に少し不親切な口を聞かれたので、もう心がオド〳〵して、「嗚呼弱き旅人！　孤獨なる兄は何處に居るであらう？」と思ひながら、悄然他を探しました。

早い夏の日の、十一時頃の空わ、蒼々と名殘もなく晴れ渡つて、太陽は何處までも〳〵眩しいばかりに輝き、日路の際涯わ遠く〳〵煙つたやうに霞み、灣内の水は濃綠に漣さへも立てず、ノタリ〳〵と漾うた水中に浮動する細い塵埃さへも透けて見えるやうでした。遙に瞰下すと、向ふの方の、强い日光を受けてキラキラと白刄の如く光つて居る海面にわ大きな樽のやうな赤色の浮標が靜に浮んで居ります。棧橋の反對の側にわ、何れ佛蘭西か獨逸あたりの郵船といふのでせう。近い頃入港したものと見えて、彼方でも此方でも、幾萬里の長途の海波に疲れた損所を修繕の鐵槌の音がカン〳〵と、耳を打貫くやうに巨大な船體を響かせて居ります。眞向の甲板にわ、水淺黃色の安つぽい洋服を着た黑ん坊が五六人、此方を向いて欄干に凭れ、指差しゝながら、白い齒を露出して鄙しさうに笑つて、何か喋つて居ります。

その活動の光景、空氣の色までが、流石に、歷々と、直ちに海外に交通する開港の趣きを忍ばせて、東京でも、多く山の手ばかりに住み馴れた者にわ、もう此處まで來ると、何となく日本より外國に近くなつたやうで、自然に宗鄕の念さへ湧かしめるのです。

それは夏の初めの季候にしてわ少し晴過ぎるくらゐな、航海日和とでもいふべき日でした。私は照りつける日光を天幕の蔭に避け、恐ろしい谷底のやうな蒸熱れ息い機關室の椽を渡り、生魚や豚脂の焦げ着く臭に胸を衝くやうな厨房の脇を通越して、も一つ向ふの下甲板に尋ねて行きました。其處にわ疊んだ帆やら、卷いた帆綱やら、船の知識に乏しい私にわ、唯力の入つたやうな船具とばかりに思はれる雜多な大道具が今盛に積み揚げられつゝある貨物と一所に處狹きばかりに置き並べてあつて、容易に足の踏込む處もございません。私は唯其處をウロ〳〵して居りますと、直ぐ鼻先に在る天窓見たやうな處から兄が帽子も冠らず、ヒヨックリ出て參りました。思はず

二人一所に

「あゝ」

と言ひながら、傍に寄りました。初めてチラッと眼に映つた時に、顏が少し窶れたやうに思はれました。二日見ぬ間に頰がまた幾何か削けた所爲です。色も好くわありませんでした。大抵の人は、後に回復する分とも、此樣な場合には、底に心配がありますから一時面瘦がするものです。私は默つて熟視りながら、腹の中で「無理わない」と思ひました。私の家に逗留中、東京で調製へた黑地に薄い白の立縞のある時候服

を着て、裾を端折り素足に赤い鼻緒の麻裏草履を穿いて居りました。

「其處か」と聞きますと、

「ウム、一寸來て見い」と申しまして先に立つて、僅かに一人の體を入るゝに定る其の天窓の中に叉下りて行きます。私も後から續きますと、口の所が荒削りの極々粗末な五六段もある梯子になつて居て、それを降りると可なり廣い、陰氣な船艙です。胸の高さに一面棚があつて、其の上と下とに三等船客が身動きのならぬほど一杯塡つて居ります。天井の高さはやゝ四尺もありましたらうか、自由に背を伸ばすことは出來ません。兄は上段の眞中よりは少し船壁に寄つた處に、幅二尺縦五尺ほどの間に好い加減古くなつた白い毛布を敷いて場を取り、其の隅に小さな柳行李を二つとブリキの金盥とを置いて居ました。荷物といのはそればかりでした。其處へ上つて行つて、兄は極めて浮かぬ調子で、

「此處で半月ばかし暮らすんだ。あれから海が見える。」

と言つて、向ふの小さい窓を顎で指し、また

「これ、本も斯うしてある、退屈したらこれでも讀まう。」

と薄笑をして淨瑠璃の五行本を四五冊重ねて置いてあつたのを取上げて見せました。が、笑つても其の笑がちつとも表に發しませんでした。

兄は何よりも義太夫と酒が好きで、生命もそれに取られたらしいのです。それですから慣れぬ航海中の欝悶も義太夫を唸つてゞも散じやうとしたのです。それは私もよく承知して居ります。さうして承知して居ることを兄もまた好く知つて居る筈です。それに五行本を取つて見せたりなにかするのはそれと明かに見せませんが、離愁の感に滿ちて、覺えず知らず意味の少いことをもして見せたのです。人は腦が重く閉ぢた時、聲を出すのが怠儀な爲に僅かに動作で意を示すことがあるものです。

「何か夏密柑でも買つて來やうと思つたが、遲くなつたと思つて急いだから……尤も入れば船でも賣るであらう」私は初めから兄をして成るべく、亞米利加なぞは近いものだといふ感を持たしめようとして表面には何處までも平氣を裝つたのでした。

兄も稚い頃には可なり四方の志があつた方でしたけれど、私とはまた一時代前の人です。從つて外國といふ觀念が私などとは變つて、一層前途が暗く感ぜられるだらうと、此方で思ひ遣つたのです。

「夏密柑ももう買ふた、これ。」と、ハンカチーフに包んであつた大きなのを二つ、わざ〳〵解いて見せ、それから紗草縄で絡めた瓶を二本取り上げて

「飲む物も此處にかうして用意してある。旅館で之れが大變船に乘る時に好い云ふから持つて來た……最早支度は全然出

來た。これで船が出さへすれば好い。」

と、自分でも強ひて安心しよう、氣を休めようと力める風が私には分明に見えました。私は唯、

「ウム〳〵」と返事をするばかり。今となつては能く憶えても居ません、また氣に留めて委しく觀もしませんでしたが、何方を向いても餘り服裝も映えない人たちばかり、あてもなき長途の旅を想ひわびて、人知れず哀愁の涙に咽ぶか、身を横にして彼方に向つて居るもあれば、不安の面をそつと垂れて趺座して居る者もありました。私は兄に對してばかりではありません、何れは海外渡航の三等船客の身の上であるべき運命の便りなさを想ふて一圖に悲慘の感がいたしました。で永く其處に入つて居るのが窮窟で呼吸苦いやうで、一寸兄の席を見屆けたばかりで早速甲板に出ました。兄もつゞいて出ました。

と、また飽くまでも廣々とした海原から、初夏の風が微々と若い健康に充ちたやうな香を送つて、悲觀の胸を吹拂ふやうです。

直ぐ眼前の中等船客の運動場では、二十七八とも思はれる雪を欺くパナマを少し前のめりに冠り、鼻下に美髯を蓄えた風采態度凡てハイカラ仕立ての好男子が、赤い鼻緒の上穿で緩く運動しながら、快濶さうに見送人らしいのと話して居ます。何心なく耳に入るのを聞きますと、

「で何時頃お歸りですか。」

「多分此の秋になりましよ。」

と言つて、吸ひ殘しの煙草をポット海に投げました。其の屈托のなささうな面持ち、笑ひながら物を言ふ時に微に溢れる金歯、左手に輝いた金の指環、歳に合はして自分で自分の運を開拓したらしい人とは何うしても受取れませんでしたが私は凝乎と其の人の態度を眺め入つて、腹の中で「此の秋」とことを繰返し、當ある旅人と、當なき旅人の上を想合せました。

兄も其處に立つて居りましたが、精神は何處にあるのだか分らぬやうに見えました。

一體兄も私も口數は相應に多い方ですが、兄弟差向になつた時には、眞面目な用談でもあれば兎も角、唯ベチヤ〳〵喋るのが、甘たれたやうな擽つたいやうな氣がして――向ふでもさうでしたらう――無口になるのです。

それに話すだけの事は話して仕舞たし、今は何かいふのも怠儀なやうで、双方默つたまゝ、其處をブラ〳〵通越して中央の甲板の方に上つて行きました。其處には清潔に掃除の行屆いた幾室かの船室が戸を開放されたまゝ一様に連なつて、涼しい風を自由に吹入れて居ります。天幕の蔭に置き並べた藤椅子の邊には、外國とは何度も往復したらしい、身綺麗に時世粧をした若い紳士が幾組も其處此處に立つて話をして居

ます。其を潜り抜けるやうにして、十三四ばかしの、外國人の女の兒が、純白の小倉服をキチンと着付けたボーイを對手に、活潑に跳返つて居ました。吾々は其の甲板をグルリと一周りして、稍人離れのした物陰に來て、默然欄干に凭つて稍稍暫く遠くの海を眺めて居りました。

すると、何處からともなく、靜かにではありますが、バタバタと急な足音がしましたので思はず其方を振向きますと、五十の上騒て五つ六つも越したらしい、小さい丸髷の老婦が逃げる樣に身體を崩して人眼のない處に寄つて來ました。

と、思ふ間もなく、十三四の小娘と、十一二の男の兒がまた續いて驅け寄つて、三人手と手を取合ふて、聲を立てず、絞るやうに泣きました。娘だけはそれでも双子か何かの衣服を着て居ましたが、老婦も小供も田舍染た木綿着物で、男の兒も女の兒も、圓く小高くなつた肩揚げの處に浪を打たせた樣に泣いて居ました。さうして居ると、後から五十格向の背の詰つた色の淺黑い、羽織と單衣と對の銘仙を着た、職人なら一寸親方らしい男が遣つて來て、老婦に向ひ、

「お前からして左樣じや、小供までが仕方がないぢやないか。見つともない、止めなさい止めなさい。」

と抑へるやうに言ひました。

私共はハッとなりましたが直ぐ又脇を向き、知らぬ風で何處かへ行きました。それが夫婦であつたやら、孫であつたやら、何方が見送る人で、何方が見送らるゝ人であつたやら。それとも皆遠くに行く人であつたやら、無論私には分らう筈はございません。私は唯其の光景を觀て人事とは思はなかつたばかりです。それも忘れ果てゝ居ましたが、兄の事を思ふにつけフト想ひ起しました。

さうかうして居ります内に、一應、三等船客の人調べがあるといふことで、兄も列に入りました。私も其處に行つて兄の傍に立つて暫く待ちましたが、一二人不足だとか何とかで容易に調べが果てさうでもございません。私は永く甲板の日に照りつけられて頭が重くなつたやうではあり、固より兄も私も「若い者だから、壯健だから」といふ自信がありますから、

「何時まで居つても同じ事だから、もう歸らう。」

と、申しますと、

「さうか」と言つて立ちあぐんだ列を離れました。

群衆を押分けて、私は威勢よくサッ〱と架橋の方に歩いて參りますと兄も其處まで付いて來ました。架橋の中途で振返りましたら兄は欄干に凭て此方を見て居りました。棧橋に降り五六間も來て、又振返り、遠眼で探しましたら、其の時は上甲板に戻つて行つて、多勢欄に立ち並んだ中から、帽子を冠らぬ兄が遙かに私の後姿を追ふて眺めて居るのが漸と眼に着きました。それつきり私は兄を見ないのです。

要するに、兄は社會の前面に立つて働いて居た人間ではありません。一家の私事に過ぎない私が兄の死を以つて、他人に其の悲みを強いようとは思ひません。

此方で氣遣つたほどのこともなく、彼地に行つてからは、彼れにしては幾分か其の志を伸ばすことを得て、出稼の唯一の目的たる金をも相當に仕送つたのです。それですから、曩の横濱埠頭の離愁の感も、間もなく薄らいで、消えてしまつたのです。それが、今寢耳に水のやうに、死んで亡くなつたといふことを聞いて、再び悲しい追想の情となつて胸に浮んだのです。

私は今の處、一度死んだ者が、未來永劫の生命を保つといふ信仰も持ちません。また子孫の繁榮を圖つて死者の冥福を祈るといふやうな、極めて冷めた道理に依つて、死者に對する當座の愛惜の情、離別の感を慰めることも出來ません。雲の果て水の底といへども生きて居ればこそ何とも思ひませんが、永久に歸つて來ぬ人となつて仕舞つたかと思へば、彼れが生前、嬉しいにつけ、悲しいにつけ、時に依つて變つたその面差し、性癖、境遇、嗜好、乃至其れより發生する平常の生活や、極めて些々やかなことまでが、凡て暗い、哀れなそれは〱痛はしい色を帶びて繰出す樣に何處までも想ひ起されるのです。私はそれを想ふて〱、胸の痛くなるほど想ふて遣つたならば、幽明境を異にする彼れと私と、靈魂が何處かで相會ふのではあるまいかと思はれます。

彼は東京を去ること約二百里、山陽道の片田舍の、さる中資産家の三男に生れ、明治十年代から二十年代にかけて、其の少年時代を過したのです。

我が國の文物の變遷は頗る急激です。二三十年以前の片田舍は、敎育思想も低ければ、生活に對する希望も低かつたのです。彼れは唯普通の小供として育ち、父祖の家業たる農商に從事して、普通の人となつたのです。さうして二十五歳の夏他家に養子になりました。さうして其の秋實の父を失ひ、續いて翌年の夏また養父を失ひました。彼が眞面目に生存の悲哀を感じ初めたのは、それからであつたらうと思はれます。平凡な生活狀態の底に通例人の悲劇を包んで居つたのです。彼は十年の間に三人の子の親となり、自らそれと深く覺らずして、境遇、舊慣の奴隷となり、常に些々やかなる家庭の葛藤の犧牲となりました。さうして御飯の喉に通らぬ思ひをしたことも度々であつたらうと思はれます。私の家に逗留中其の事を話しました。

私は兄が過半世の經歷を想ふにつけて、多少二三十年前に成長つた人間の時代相を偲ぶ心地がせられるのです。彼は一つは明かに其の壓迫を脱せんがために、一つは家計の困難を救はんがために、三十五歳の春、再び獨身の昔に復り、青年時代の勇氣を奮勵し、少時閑谷の漢學熟で習ひ覺えた「人間

到處有青山」を低誦して、天涯の孤客となつたのです。

それは三十七年の春の初め頃でした。職業を異にし且遠く離れて居る親戚の間には有り勝ちに、暫く音信の絶えて居た兄から突然手紙を越し、此度思ひ起つて亞米利加に渡航する積りである。それに就いて、横濱から乘船する筈だから、お前の處にも行くと書いて居ました。私は兎に角賛成し奮勵の意を籠めた返事をいたしました。で、兼ねて東京にも一度來たいと言つて居た母を扶けながら、五月十五日の午前十一時頃新橋に到着しました。

それから約二十日ばかりの間、老母を眞中に、兄と私と其の兩側に寢て晩い春の宵、寢物語に夜の更けるのも忘れました。其の時の感は、二十餘年前吾々が矢張母の兩側に寢て、冬の朝など暖くなつた寢床を離れるに痛く、蒲團の中にもぐりながら、其の頃田舍に用ゐた、枕頭に置いてある、大きな丸行燈の、銅製の皿の中で、堆積くなつたマッチの餘燼を掻き集めて、それを家のやうに組立てゝわ、火を點けて燃やして徒戲をして居つた頃のことが何時か見た夢の樣に想ひ浮べられたのでした。

彼れは天成の美音で、暈もあれば艶もある聲を持つて居ました。また私の父母兄弟に比べては珍しく酒好きでした。さうして私共と違ひ、飲み且つ歌へば、其の時は、凡ての憂苦を忘れ果ることの出來る人間でした。

兄は淨瑠璃が好きで、また上手でした。シヤトルに着いてからも、在留日本人の演劇や、其の他の催しのある時にそれを語つたといふことです。後には商館の番頭よりも、義太夫語りの方が本職のやうになり、遠く異鄉にあつて遙かに鄉音を偲ぶ邦人に取つては、手離し難い藝人であつたのです。死ぬる十日前に宗太郎に會つて、種々と故鄉の近狀をも聞くことを得て、ずツと安心をし、日頃好きな酒と演藝であるから、其の晩も打ち寛いで飲んだり、歌つたり踊つたりしたことであらうと思はれます。

淨瑠璃の中でも、取分けて、あの寺岡平右衞門が山科の閑居に由良之助父子の位牌を持つて歸つて來る「忠臣藏二度目淸書寺岡切腹の段」が好でもあり、お箱でゞもありました。酒は飲まぬが、彼の家族は凡て演藝が好きです。中にも母は淨瑠璃を聞いて泣く人です。

「……力彌もお前と諸共に、年に似合ぬ健氣者、海山越えてはる〴〵の東の果で死んだもの侍ぢやとて、武士ぢやとて、母が戀しうあるまいか、わしも子ぢやもの親ぢやもの、かはゆうなうて何とせう……。」

「海山越えてはる〴〵の、東の果で死んだもの、かはゆうなうてなんとせう。」母は此處を口ずさんでは、兄の事を想ひ出し、遠く〳〵雲の果てを眺めて、ホロリ〳〵として居ることでございませう。さういへば位牌ではない、白骨が最

早追付け來る時分です。

一體彼れは二十日生き伸びたのが、四年生き伸びたのか、それとも三十八年生き伸びたのか、私には分りません。影です、影です、人間は影です。

（明治四十年作、新潮掲載）

初しぐれ

秋冷追々相加はり候處御全家愈々御健勝賀上げ候。小生の歸京、度々御勸說下され難有奉深謝候。當夏、叡山三ケ月の山居も、追々迫る秋雨の侘しさに堪へかね、先月十九日に下山。大津よりすれば直ちにその夜の汽車に投じて翌日早朝は早や沼津、江尻の朝の富士の姿に曉の夢を破り、國府津、大磯の浦々に寄する波の光に心は早速東國の氣分に立反り申すべしとは思ひ候も、尙ほ暫くは京畿の秋の色見殘しがたく、再び逢坂山の此方に立ち歸り申候。永々の宿屋暮しにも飽きはてしこと故、此の度は、幸ひ東山の畔なる高臺寺の裏門の近くに、去年の春、當地に罷越し候て以來懇意に相成り候さる金滿家の御隱居有之、その所有なる隣家、爰元東京と同じく貸家拂底の折柄數多の借家望みてある中に、私兼ての懇望にて、未だ明かぬ中より賴みて借り受け、そこを暫しの隱れ家と定め申候。顧れば東西にさすらひの月を眺めつゝ、宿屋住ひの生活を、ざつと十年が程にて又々男所帶の獨り暮し、これも他にせん術なさの物好きと、强ひて、獨り笑ひに消して諦め居り候。東京には十六七年前初めて所帶と云ふものを持ち、初めて眞似の樣な事を致せし時分からの鍋釜から茶碗皿鉢の類まで米櫃や飯鉢の中に仕舞ひて餘處の藏に托しあれば、假住ひの京都にて餘計の品も無用と存じ、ほんの手で食べぬだけの事にて埒あけんと存ぜしに、隣家の隱居の祖母樣誠に情ある人にて、私旅の空にて獨り所帶の不自由を思ひやり、東京へ持つて歸れぬ物に入らぬお錢を、なるたけ使はぬ樣になされとて、差當り當座の用を缺かぬ品々、私の未だ叡山を下らぬ先より、お年寄の氣の早く、竹細工の茶棚に手廻しよく取り揃へて置き、是だけが貴方にお貸し申す物どすとて貸し與へられ申し候。御隱居今年七十三になり給へどいと健全にて、若い時後家にて夜も碌々寢ずに、數十萬の身代を働かれたる果報は、老後の今の安樂。四條通りの目拔に角店を飾りて年中の繁昌。一人息子に多勢の孫、曾孫ありて、これぞ福壽圓滿の好き例と知れる程の人の羨みて噂し合へる程なるに、御隱居はその分限になりても身に榮華の望みさら〱なく、今の處に、下女をも置かず、他人を使ふよりは自分を使ふが氣樂なりとて朝夕を自ら炊き侍女も無く、唯獨り隱居

せられけるが、自身の物語りせらるゝところによれば、初めは、神佛の篤信家なりしが、數年、この方、基督の敎に歸依し給ひ、この上の願は、たゞ死して後、再び天國に生れる事のみ、箸をとる間も忘れず只管祈禱三昧に不足を知らぬ月日を送りて人に施すを樂しみとせられ候。金滿家の貸家とは云ひ乍ら、前の借家人によりて永年住み荒らされて立ち退きしあとの淺茅が宿、御隱居自ら、私の歸り來ぬ先より、度々掃除して疊まで拭いて賜りし忝けなさ、世間に鬼ばかり無之と存じ申候。かくて叡山を下りて京に入りし夜は、一晩御隱居の許に泊めてもらひ、翌日隣へ移り住み申候。夜具褥は夏前鄕里なる田舍より、木綿物なれど新しく垢の付かぬを一とそろへ取り寄せおきたるを、留守中隱宅の押入れに預けおきたれば、寢るには當座の事を缺き不申候。その外柳行李一つ、瀨戶燒の大なる火鉢一個それだけの家財道具にて埒明き申候。さりとは氣輕の身上に御座候。

私其等の小荷物を隣りへ持ち運び候間に御隱居はまた自ら用の序に、自宅にて取り付けの出入りの商人の處へ立寄り、米、炭、醬油などを屆けさす樣誂へてたまはり候。

米はお國からおとりやすのでも今日明日の間には合ひまへんやろと思ふて五升持つて來る樣にいふときました。炭も一俵小いのと、炭團を十五持つて來る樣にいふときました。炭團をよう埋けときやすと、一日火が消えずにおすさかい。この婆樣、私を、まだ生れて初めて家を持つ未熟者と思し召し孫兒の樣なる御待遇。馴染の少き京にゐる樣な心は致さず候まだ飯を炊く道具調はざれば、その日は御隱居炊き立ての御飯を一日では食べ殘るほど分けて下され、これだけあれば今日だけはおすやろ、冷飯でよろしかつたら、まだ何ぼでもおすせ。それに山科茄子の漬けものを入れて糠味噌までとり分け、錦小路の親類の砂糖屋より砂糖の小桶を、それも婆さま自分で取つて來て　漬物桶まで拵らへて下され候。何處も家賃高騰の折柄なれど、當家主はこれまでの拾武圓を武圓を上げて拾四圓にしたのみにて他並にしては殊のほか格安といふ云ひ譯にて疊は十何年か踏み汚して黑ずみ、ところ〲破れたれども疊は取り換へてくれ不申候。私が八九年前牛込の矢來にて世帶を持ち居り候頃自分持ちにてとりかへたる時分には、並の品表と手間を六拾錢づゝにて壹圓貳拾錢にて調ひ候が今日では一枚三圓は決して上等の品にては無之、いつ東京に歸るとも知れぬ假の住居に無用のついえと存じ、誰の踏みつけたか知れぬ古疊の上に起臥飲食致し居り候。慣れゝば何事も辛抱出來申し候。自分の住家と定まれば澁茶色の疊も敢果なき夢を結ぶたよりと相成り申し候。

永年の宿屋暮し。米の高いと云ふ事は、唯世上の噂に聞くばかりにて眞實に米の價を知らずに八九年も過し候が、成程

十七八年前には二人口にて月に四五圓は上等米の方なりしが只今は一升に付き五拾六錢。私一人にて一日三四合。一ヶ月に五圓六拾錢の勘定に相成り候。尤も米は郷里の田舍より取寄せ候へば、米代は入り不申。京都の米屋より取つた米もなか〳〵の上等米にて炊いた後の水の退きもよく味も好味なりしが、備前米は又格別、田舍の事故都會の米屋の手を經ざれば、籾殼交りて洗ふに手數を要し候へども、炊いてからの好味は申すに及ばず、米粒槍の如く立ちて、色は象牙の如く透き通り居り候。たとひ米價壹圓に五合の時來り候とも我等一人口にては斯の如き上々白の內地米に尙此の先の露命だけは繫ぎ申さるべく、此の儀のみは安心いたし居り候。食慾の進む好季になりて東京のたべ物一入なつかしく思ひ起され候。東京に居れば三度の食事の中一度は必ず壽司を缺かした事なき私なれどもそればかりは　せんすべ無之候。爰元は御承知の切りずしとて東京の付けたての握りを食べる意氣は無之候へども鯖のすしは風味なか〳〵上々にて、まんざら棄てたものには無之候。當地は昔より北陸筋殊に若狹より持來る魚介多く、鯛、甘鯛、鯖若狹のもの多く有之候。初秋の香高かりし栗、松茸が追々八百屋の店先に目馴れ、北山時雨はら〳〵と夕暮を急ぐ窓の障子を訪れ候頃になれば、若狹鯖の肉味いよ〳〵加はり、壽司屋は何れも彼方から來る一と鹽のものを一寸鹽出しゝて、それを用ひ申し候。それにて丁度いゝ加減の味に相成り申し候。その鯖のすしにて東京のすしの渇を醫し申し候。鱧は上方の人の好物、丁度東京の鮪の如く年中有之候へども、私はそんなに好み申さず候。先日中久し振りに自炊を初め、自分で食味の調理をする面白さに東京には珍らしい鱧の皮を飽きる程食べ申し候。もはや食べて見たいとも思ひ不申候、東京と違ひ流石に田舍なりと思はしめ申し候は、東京ならば如何なる場末の果にても、日々御用聞の水口に聲をかけぬ日とてはなきに爰元諸商人の商賈に不勉強なる事、呆れ申し候。東京ならば、天秤棒の撓ふ程に桶を積み重ねた魚屋が、お勝手口から、今日は、と意勢よく聲をかけるなど、さも磯臭い魚類の生を示してゐる樣に存ぜられ候に、當所にては長方形の箱に入れたる魚を、魚屋が肩に擔いで一日置きに廻り申し候、鯛、鱧、鰆は大抵缺かさず持ち居り申し候。先日は珍らしく、鮪の切りみを持ち居り申候ひし故、これは珍味何でも食べざるべからずと存じ、一片二拾五錢にて序でに刺身に致させ申し候、その外、鯵の煮侵も東京の惣菜を風味せしめるものゝ一つ、是非所望致し候處、魚屋その後度々鯵を持ち來り候故、餘り大きな品は一人暮にては無用の費へにてもあり、第一食べ飽き候故、一尾三拾錢の品を片身は刺身におろさせ骨附きの方を、打つ切りにして、名古屋大根と煮合せ申し候。大根の大きなるは一つ拾錢から、十五錢以上も致し候。そんなのは一人暮しにては、もて餘し候故

精々小さく一ヶ五錢から七八錢のとこを選んで、近所の八百屋より取つて參り申し候。何がさて浮世の見えを厭はぬ市隱の身なれば構はぬ事とは申し乍ら、眞晝間八百屋より大根下げて來る事の、餘りに貧乏臭く候故、大抵夜分に買ひに參り申し候。東京に比べて、御用聞の來る事少く、不便此の上なき事に御座候。五錢の大根にても一人にてはなか〳〵に食べあまし申し候、半分を二度に煮て、殘りは漬けて食べ申し候尙其の外にも葉の所をも無用には致さずこれも漬物に用ひ候へば、私一人にて二三日の漬物の食ひ料にはありあまり申し候。ロシヤ、ドイツなどには食料缺乏して、餓孚途に橫はり盜賊四方に跳梁す。我等何の幸か、此の國土に生を享け、物價騰貴の聲高しと云へども、一ヶ五錢の名古屋大根にて　さばかりの副食物工夫致し候て、泰かに日々の露命を繫ぎ候事を思へば、冥利と云ふ事勿體なく、大根の切り端にても、ゆめ〳〵仇おろそかには致されずと存じ、始末といふ事を何より先に考へて日夜を送り申し候。此の分にて世を渡り候へば物價は何程騰貴致し候とも私一人の生計を脅かし候氣遣ひ當分の間は無之候。世間兎角物價騰貴に苦しむ聲の聞え申し候は何れも人の物慾の深き故と笑止の至に存じ申し候。人間一人口過ごすに何程の事か候はん。然るに巷に生活困難の聲の絕えざるは、是皆人間の物慾の深き故なり。

物慾とは何ぞ、妻子眷屬を以てその第一とす。我等つとに一人過ぎを以て覺悟し、妻子眷屬を飼ふの榮耀を思ひ絕ち候以上は、如何なる物價騰貴の脅迫押し寄せ參り候とても、驚く事にはあらず候。左は申すものゝ私は長い間東京を不在に致し、東京なつかしく存じ、當冬は必ず一度歸京致し、そのまゝに致し居り候書籍調度の類、さぞ塵埃まみれになりて、主人の歸へるを待ち居る事と存じ候へば、それらの始末をも致したく存じ居り候。御地は如何。當地は連日の美晴にて、氣象溫和、溫暖春の如く、世界の果までも旅して見たき心地致し申し候。それを思へば毎日風塵激しき東京の地はいとはしく相成り候。松茸の季節は稍々すぎたれども、四圍の山野追々時雨の色を增さんとす。私の二階よりは、北窓の机に凭りて東山と愛宕とを一時に眺められ申し候。窓に凭りて少し背伸びをすれば、北山の靉靆もまた双眸に入り候。二階は前陳の如く座敷煤けて、頗る汚れたれども、八疊、六疊二間にて、八疊の間には一間に三尺の床、一間に三尺の入り床には違ひ棚、袋棚の設型の如くありて、南向の六疊の室には、清水の山の端を出でたる太陽、建仁寺の樹林の彼方なる西山に沒する迄、終日麗かに輝きわたりて、室を溫ため申し候。此の分ならば、冬季も存外溫暖なるべく、今より冬ごもりを樂み居り候。音羽山、清水の二重の塔、殊に八阪の塔、秋晴の空に、畫圖の如く浮き出で居り候。朝夕獨坐の眺め飽かず、少しも外出の念無之、人を訪ふ事を欲せず、又人の訪ひ來る事

をも欲せず、外界と絶ちて日を送り候へば、身は都會にあるも、恰も山野に隱れたるに異ならず候。さばかり人を遁れ候へども人間の聲は終日耳に絶えず、何處までもついて來り申し候。爰元祇園、圓山の名所に近く候へども、横丁の通りに面したる表通りなる露地の入口には兩側の二階長屋に各三組づゝの世帶を致して居り候。借屋主は一人は金網細工を渡世にして朝から晩まで一日針金を叩いて階下の二間といふも名ばかりの處に商賣用の針金を女房の鏡臺と一つ處に取り散らかし、渡りかねたる針金を地道にたゝいて細き世渡りいたし居り候。その二階には一日亭主の顏を見たる事なければ、私の起きぬ間に出てゆくかと存ぜられ候、二人の年若き女房一間づゝ別々に住んで居られるが、私の三坪ばかりの庭に茂りて立てる木蓮の葉越しに見え申し候。露路の入口の右側には米屋が住居致し候が、聞けば主人は夏の頃より長々の痔疾の由にて最早半歳近くも商賣を休み、その二階にも二た組の夫婦共一間づゝに住居せる樣子なれども、これまた、私には亭主の顏見せたる事無之、何れも日々出稼ぎの世渡り候事と存ぜられ候。

露路の内は二階建四軒の棟割に長屋にて　私の住居はその入つた突き當りの西の隅、その右隣りの突當りが家主の御隱居の住居、御隱居は奢侈の勿體ない事を常から口に絶やさぬ程の始末よき方にて、それ程の身分にてあり乍ら、本宅より附けようと云はれる下婢をも使はず、しかし一人にては、これまで一人住居をして度々盜難に遭ひ、衣類衣物をすつかり持つてゆかれた事のあるのに懲りて、二階に同居人を置き自分は階下に住まはれ候。

その二階の同居者はさる町醫者のお圍ひ女にて、私の部屋とはほんの薄き壁を一重隔てたるばかりの隣合せに御座候。蓼食ふ虫も好き〲とやら、女にすたりは無いもの、さる處の鳥屋の仲居なりしを、旦那の世話になりて、米の値を知らずに住む氣樂な境涯。家主の御隱居はもう十數年の昔に後家になりたまひて、朝夕神に祈禱を捧げる事を仕事として居られる樣な世捨て人なるに、その二階には左樣な婦人住ひて、壁一重彼方に日夜艶めかしき笑聲絶えず候。私も女を見る事を好み申さぬにはあらざれども、その女はあまり人目を惹く程の女にては無之候。加之性行野卑にしてさも〳〵安物らしい妾の相場を發揮いたし候には家主の御隱居も常に蔭乍ら顏を顰め居られ候。つい此の間の晩も旦那は一週間ばかりの他行にて顏を見せぬ留守の間に、折柄御隱居も一日不在、女は近邊に住む二三の朋輩を誘ひ來りて三味線を彈くやら、立つて踊るやら叡山までも響く樣な聲を立てゝ二階座敷の搖れるまで大騷ぎして狂ひ興じてゐる有樣、實に苦々しく存じ候。前述の如く露路の中にはあまり結構なる身分の人間も住んで居らぬらしく候へども、何れも堅氣に世智辛き世渡り候中に

自分は何も爲る事がないと見えて、その女は朝つぱらから三味線を彈いて一日遊び暮し居り候。それも段物の稽古にてもする事か、まるで寄席か酒の座にても聽く樣な流行唄。朝からそんな三味線を彈いての空騷ぎ、待合や貸座敷の二階にてもない事なり。世間に咎める者が無いから、どんな事をするも勝手自由とは云ひ乍ら、己の品性の野卑なる事を曝露して省みざるは寧ろ憫笑に値いたし候。妾といふ中にもそんな女ばかりはないもの、然るにさういふ女を何處がいゝのか好いて圍ひ者にしておく旦那の醫者の、女といふものに對する趣味も、低劣と申さゞるべからず候。まだ〳〵その外に面白きは、その妾何時も月末にハイカラ頭髮に正裝して患家へ藥禮の受取り催足に出掛け申し候。廣い東京にも近頃さういふのが出來申候哉。私、東京にゐる間は、二十五年住み候へども、一度も聞かぬ事に御座候。兎角金錢には外見も體裁も繕はぬが京阪の風習とて、見え透いた僞善を行ふよりは、此の方が寧ろ宜敷くは存ぜず候へども、妾といふからにはもつと風情あるをこそ好ましく存じ候。

御隱居は基督教を信仰せられる故にや、如何なる人に對しても上下貧富の區別を付けずして一視同仁に交はらるゝは結構の事に候へども、蔭にて屢顏を顰めらるゝ程ならば、左樣な人柄の好からぬ婦人に二階など貸したまはざるが良しからんと存じ候。旦那の醫者も醫者、出入りの際隣家の事なれば時々人體見受け申し候が、先日も、まるで女の着る樣な好みの小豆色のお召の格子縞などべろ〳〵と着て居り候。京都大阪の男のにやけた好みとなつたら、實に鼻持ちならず候。當節は昔と異り、醫者なども背廣の洋服でも着て事務家らしく活潑なるが厭味がなくて良しく候。それ程臭い風俗をしてゐる程の旦那なればにや、圍ひ者をおく程ならば、一軒借りをすれば氣散じにてよいと思ふに、二階借りをして下女を使ひ、二階にて炊事などを致させ居り候。

まことに世間はどんなにしても暮されるものと存じ候。その長屋の一軒置いた先の一番隅には、友禪染の下繪を商賣にしてゐる者住ひ居り候。內證は夫婦に十二三歲ばかりの女の兒一人なれども弟子職人十人の餘もゐるらしく、毎朝共用の水道口に繪の具皿を洗ふ子供やら顏を洗ふ年長の弟子共にて立て込み汚き事に御座候。女房は宮津あたりの者とかにて、露路の噂にては娼妓上りと申す事なれども、さうでもあるまじきか、併し子供は貰ひ子にて、三十五六の鼻の低い女なれども、頭髮はいつ見ても丸髷を崩した事なく、隨分やつし居り候物腰、娼妓でない分が田舍茶屋の仲居の果くらゐと存じ候。その女が壁隣りの醫者の妾と八々の對手にてお妾は旦那の泊つてゆかぬ夜は下繪屋にて、翌日の二時頃まで兩人差しにて遊び耽り候事珍らしからず、拾圓から貳拾圓位の出入にて取つたり取られたりしてゐる樣子。それも御隱居左樣な賭

け事は大嫌ひの由にて、苦り切つての話に御座候。亭主の下繪屋小柄にて、あまり風采よき男にては無之に、一かどの繪師氣取りにて、これまたにやけたる端役者の着る樣な紺せるのとんびなどを着て出入りするを見受申し候。淨瑠璃の稽古をすると思はれて、時々午後過ぎに大きな聲にて語るのが露路の中に響き申し候。いやはやいづれを見ても蟲の好かぬ京阪臭き人間ばかりに御座候。

左樣の次第故、其等の連中も、私の事を、定めし何とか噂致し居り候事と存じ候へども此方は一向構ひなし。自ら水を汲み、炭火をついでの獨り居、東京は知人多くして心も散り申し候へども爰元却つて氣樂に存じ候。机の窓より東山を眺め申し候に、この程よりの時雨に四方の梢も少しづゝ色づき初め申し候。

これより暫くは古都の風物一年の中にて最も好ましき折柄に御座候へば尙當分爰元滯在の上年末に相成り候はば、相州の海濱あたりに冬籠りの避寒いたしたく、その準備をするまでに年内には久しぶりにて歸京の存念に有之候。先づは京都住居の近況御洩し申上げ候。　草々。

十月二十七日　　　京都　朝霜より

東京
松露樣

（大正八年十一月作、文藝世界揭載）

食後

午後一時頃書餐の箸を投げて今二階に上つたまゝの二人の男が六疊の間に同じやうに有合ふ書籍を二三册重ねて枕代りにし丁字形に寢轉んで居る。

此の人達は最早人間の味をば鹽鮭か鹿尾菜かぐらゐに思つて居ないほどに惡戲をして來て居る。一人は小說家に成りかけである。一人は辯護士に成りかけである。「小說家に成りかけ」の男は流石に戀といひゝ肉慾といふ字に多少詩的の味を覺えるが辯護士に成りかけの男は天から戀といひ肉慾といふ面倒臭い文字の必要を感じた場合が無い。

「吉本、君も隨分女性が好きな方だが、今まで關係したのを數へたら大分あるだらうねえ。」と小說家は何を思ひ出したか種々なことを考へると見えて、出し拔けに妙なことを聞く。

「あゝ隨分あるねえ。」と、未來の辯護士先生は頗る平氣なものだ。

「幾人くらゐある？。」

「さうだねえ……」と、默つて指を折りながら、獨り口の中で、

「あれとあれと、あーれーと」と、約十分間も數へて居つたが、

「まだ何だか落ちて居るに相違ないが、今數へて見ただけでも百八人ほどあるねえ。百八煩惱とは能く言つたものさハ、、、、」

「フウム君にしては其れくらゐ敢て驚くほどの數でもないが、素人をさう澤山弄ばされても物騷だが、まさかさうぢやあるまい。」

「それはさうさ、素人を滅多にそんなことが出來るものか。勿論素人が好いには相違ないが、僕はそんな交涉をする――口說き落すなんといふ、そんな洒落た氣の永いことは到底も出來ぬ。殆んど皆苦勞人だ女郎か藝妓かさうでなければ準苦勞人だ。尤も其の中一割くらゐは素人がある。」

「フウム一割位なものかねえ。いくら無いと言つたつて、君のことだからも少しあると思つた。例のそれ、彼れ是れ十年

近くにもなるだらう。君と下宿屋に居た時分に、嫁いでから學校に宛て、

「あなたのたねをやどし、それをうたがはれます」つて、端書を越したのは何うした?。」

「何うしたつて、あれきりさ、もう可い加減な嬶になつて居るだらう。」

「あれが其の一割の一人だ。それから其の他は何様なのだ。」

「何様なつて、一々話せぬが、一人、僕より十歳も古い、其の時四十くらゐな他人の妻君があつた。有夫姦さ。」

「へえ。それは好かつたねえ。何うしてさういふ具合になつたんだ。」

「何うしたつてまあそう詳しいことは言へないが、つまり淫亂なのだ。向ふから仕向けたから別に拒むにも及ばない此方でも承知したまでさ。」

「或る時期になると、自分より年長のが好くなる時があるそうだが、初めての時も年長の者が手ほどきをしてくれるのが多いさうだが、君の場合は何うだつた?、」

「全くいふ通りだねえ。僕もそも〳〵の知り始めは年長の女性だつた數が多くつてもさういふやうなのは忘れないものだね……それだつて最早十八年も昔の事だからハッキリとは覺えて居らぬが。

と、言ぶやうに吉本が話しだした。

「それわ僕が十四の歳の春ももう末頃であつたと思ふ。中學のまだ一年の時分だ。其の時宿といふのが、本當の下宿屋ではなかつたが全くの素人下宿でもなかつた。つまり曖昧然とした宿屋であつた。家の者といふのは確かもう六十を越して居つたと思ふ婆さんと、孫だか貰ひつ娘だか二十歳ばかしの娘と二人つきりであつた。其の頃二十歳といつても或はそれより一つ二つはまだ若かつたかも知れん。吾々のやうに斯う三十を越すやうになつては男も女もさうではないが、男が二十歳以下十四五の時分には同じくらゐな歳恰好の女に向つても自分よりは何だか歳上のやうに思はれる。だがそれが三つ四つも違へば、大變に向ふが歳上のやうに思はれて、却つて何となしに心の置けないやうな、隔てのないやうな向から一寸したことでも世話を燒いてくれゝば、それが無精に嬉しくつて、仕なり放題言ひなり放題に、なんでも「ア、〳〵」と聞く氣になる。向でもまたさう順直に仕向けられると弟ででもあるやうに可愛くなる、但し僕の場合が確かにさうであつたか、何うか何うであつたか、それこそ殆んど二昔後の今日では明瞭に記憶を呼び起すことは出來ぬが。假令君等が好んで口にする戀ではないまでも――僕は戀ではなかつたと、それだけは斷言する――今言ふくらゐな極く普通の心安い關係になつて居つたには相違ない。

其家の二階の六疊に、僕と、も一人之れも中學に行く男とが

一所に居つたのだが、其男は自分の村で小學校の先生か、なんかをして居つて後に中學校に入つたのだから僕よりは四つも五つも歳上で最も級は一級上であつたが非常に僕に親切で色々な世話をしてくれて居つた。自家には最早妻君があつて餘り遠くもない處であつたから土曜日毎に歸家つて居つた。

「其日も日曜か何かであつたらうと思ふ。其の男は留守だし僕は毎時ものやうに晩飯後二階の卓に凭つて何か書籍を披げて居つたが、君等と違つて僕等のやうに文學的感情の乏しい者でも氣候の變化と肉體の關係から自然に起る生慾の力といふものには勝てないものだね――之れは今君に話す場合に一つ君等の口吻を眞似て、そんな解釋をして見るのだけれど、幾何マセて居つてもまだ十四で中學校の一年だ。固より其樣な六ケ敷い意識はなかつたが、櫻も散り、山吹も散り、躑躅も萎れて藤が盛といふ頃であつた。市中に筍賣の聲が喧騷く聞えるやうになると、丁度冷い水と温い油と一所にして、十分に混合せぬやうな、表面は暖かでも底の寒かつた春も段々更けてもう水ならば水の底まで、肉體ならば肉體の心まで温味が徹つて寒さに凍えた處は、肉體中何處を探しても針で衝いたほどもない精神も肉も一樣に伸びたけ伸びたやうだ。がさてさうなつても若い者の癖として何處といふことなしに人懷かしいやうな何ともいふにいへない堪へ難い氣の落着かない淋しい懷ひがする。

「春も、もう遅い夕暮れであつた夕飯は濟んだが、火を點すにはまだ暫く間がある。僕は書籍を披いたまま氣を入れて見やうともせず椅子に腰を掛けて暮れかゝる室の内に寂然として居ると、トン〳〵と蓮葉な調子に階段を踏む音がして。

「吉本さんお獨りで淋しいでせう。」と、お樂が上つて來た。さうだお樂と言つた。

「僕は別段氣にも留めず、僕が其の女に對する毎例の通り「アヽ」と言ふと、お樂はホッと若い女の臭ひをさせながら、僕の卓に添ふて立つた。靜かな晩で、呼吸の音まで明かに聞える。お樂はそれから何か喋つたゞらうが、僕は確に何をも言はなかつたじつと女の香を吸うともなしに吸うて居ると小供らしい、臆病な、ムラ〳〵とする氣が起つた。

「アアア」と言ひさま、兩手で頭の後を抱へて椅子に凭れかかつた。

お樂は微笑として「ホ、何うしたんです?」と言つたらしかつたが、僕は相變らず無言のまゝ唯焦れて居た。お樂は相變らず微笑りして立つて居た。

「僕は靜として居られなくなつて、また「アアア」と言ひ言ひ立つて中窓の所に行き表の通りを當もなく見たお樂もまた其處に來て僕に寄添ふて立つた全體が着痩せのする肉付きの好い肉體ほどあつて、小色の白い丈夫〳〵した女であつたが一方ならぬ暑がり性で、早くから薄着をする癖があつた。其

の時何樣ものを著て居つたか無論僕に氣が著かう害はないが唯ダラリとした薄い衣服を著て居たと思ふ。一寸側に寄られると直ぐ肉體の曖昧が襲うて來る。

「何時の間にか夕暮れの空を糠のやうな春雨が音をも立てず、しと〳〵と降つて居る。

「お欒は戸外を見て何か言つたやうであつたが、僕は何樣な者が通つて居るのやら女が何を言つたのやら少しも耳に入らぬ。唯習慣になつた「ア、〳〵」を意味も無く繰返すばかりだ戸外はまだ明るいが室内は暗くなつた急くやうな氣がする。

「表を見ながら寄添て立つた背後の方から、ソーッと餘所事のやうに手を廻してお欒の腰を輕く抱くやうにした。その時僕は頭がグラ〳〵ッとして、眼が暗くなつたやうであつたお欒はと氣が著くとそ知らぬ風で靜つとして居る。僕はそれは幾何か心が落著いたやうになつて、慄ふ手首を慄はせまいと力を入れて居ると掌から指先の方が汗ばんで來る。

「お欒は平氣か、それとも平氣を裝ふのか、依然として知らぬ風である。」

僕はます〳〵心が落着く。無論手は放さない。

「軈て小三十分もさうしたまゝ戸外の暮れるのを眺めて居つた。」するとお欒が

「斯うして居つても何だか詰りませんねえ何か買つて來て食べませうか。」

と、言つた。

「僕はやはり「ア、」とばかり言ひながら、其の手を離した。が何か取逃がすやうな氣がした快活なお欒は、そう言ひながら、直ぐ下りて行つた。

僕はその後で耳が遠くなつたやうになつて、獨り心を動悸つかせて戸外を見て居ると最早お欒は、藍色がゝつた派手な立縞の半纒を引掛けて大きな行書を三文字ばかり書き流した油の能く枯れた傘を傾げ、紅い振口を此方に向けて小走に出て行つた。それが何とも言へずなまめかしい。

「其の時そのなまめかしいのでフト想ひ起した。何時であつた、矢張り其の夕方の樣に小雨の降つて居る晩であつた。何處へ行つた歸りか、年頃の若い男とお欒が相々傘で一寸と裾を端折りながら、兩側の店から照らす火影にパッと派手な姿を浮き出したやうにして戻つて來たことがあつた。

「それが今も眼の前に浮ぶ。それを想ふと、「僕だつて」と、言ふやうな氣がして心がまた落著く。

「僕はマッチを搜してラムプを燈し、いそ〳〵して待つて居ると、間もなくお欒は茶を入れて餅菓子と一所に盆に載せて上つて來た。

詳しいことは覺えて居らぬが、それから二人ラムプの傍に寄つて、菓子を食つてはお茶を飲み、罪もない、同宿の男の噂から、知つた人間の上などを話して居つたと思ふ。

「さまで降つて居るではないが戸外は春雨の筧の音が段々高くなつて閉め切つた室の内がしつとりとする。お欒が笑ふて肉體か搖ぶる度に頭髮の香が妙に鼻を衝く。僕は譯もなく唯急くやうな氣がして「アア」を頻りに繰返へすと。お欒は、

「貴下其樣にお忩屈?ぢやア床を敷いて上げませうか。」

「ア、」無論僕等平生自分で床を敷て居るのだ。

お欒は直ぐ起つて行つて床を敷いてくれた。僕は無雜作に寢卷に著更て其の中にモグッリ込んだ。餓へたものゝやうにガッ〳〵齒たゝきがして肉體に震へを感ずる。無中に心を勵まして。

「此處で菓子を食べやうか」と言つた。お欒は平氣で無言のまゝ肯いた。

翌朝になつて、僕は言ふにいへない氣味が惡くなつた。何と言ふことなしに恐ろしいやうな氣もする、自分ながら自分が嫌な氣もする。誰か其處らで自分を見て居る者はないかと獨り顏を赫くして周圍を見る氣になる、で、お欒はと見るとお欒は何時もの通り平氣な顏をして居る。それでも僕の恐怖は止まない。唯だ無精にお欒の家に居るのが氣痛い、一刻も早く其處を拔け出したくなつた。

「が出るにしてからが困つたことが、二つある。一つはお欒と、今一つは同宿の友人だ。お欒の方こそ何うともなるだらう。が、友人に對しては何と言譯けしたらよからう。僕がまだ中學に入學せぬ當時から殆ど一年の間僕とは兄弟のやうにして、萬事深切に氣も著けてくれて居る。其の友人に何と言つたら好いだらう。僕もまだ十四だ。幾何兄弟のやうにして居るとはいひながらまさかそればかりは實狀を打ち明すほどの勇氣はない。その勇氣がない位ゐだから譯もなくお欒の家が拔け出したい氣にもなつたのだ。

「友人は例の如く、月曜日の朝は自家から直ぐ學校に行つて、午後になつて下宿に歸つた、「僕は何うしやうかと思つて、そつと其の顏を見ると、勿論友人は何時もの通りの顏をして居る。僕には相變らず深切に口を開く。

僕は困り切つて、丁度一週間の間、學校に行く暇に其の事ばかりを思ひ續けた。次の土曜日にはまた例の如く、友人は學校から直ぐ自家へ歸つた。その翌日であつた。僕簡單に、唯少し事情があつて、俄かに叔母の處に引移るから、といふ意味の手紙を認めた、心で斷りながら、それを友人の書籍箱の間に挾んで置き僅かばかりの荷物を寂然と取纏めてお欒の動靜を窺つて居た。するとお午過になつてお欒はやゝ離れた處にある井傍に洗濯に出て行つた。其の留守の間に姿さんまで急に都合があつて、親類の方に引移るからと、迫り立てるやうに勘定もそこ〳〵にして、遂々其處を拔け出した。

「其の翌日からであつた。友人は始めて僕が無斷で留守の間に移轉したことを知つて、ひどく腹を立てたらしかつた、

其の後すれ違ふても、なか〳〵口をも聞なくなつた。最も其の內日が經つに從つて、また元の如く會へば一寸した談話ぐらゐはするやうになつたが、其處に何だか隔てが出來たやうで、十分打解けられなかつた。

「其の後二年ばかし經つて、ある人通りの少い淋しい街でフトお欒に會つた。今の自分であつたら何とか言つたらうが、其の時はまだ何となく面を合はすのが、氣恥しいやうで、唯ハッとなつた。向では此方の顏を覺えて居たか、何うだか、きつとまだ覺えて居たかも知れぬが、少しの間にひどく世帶やつれがして、古ぼけて居つた。唯普通に通過ごしたが其の癖僕は直ぐ前の曲り角まで行つて、立止つてじつと、振返つて見た。

「お欒は翌朝になつて、前の晩食べたお菜が何であつたか、それを一々考へて見るやうな人間ではなかつたのだ。

「友人はその後一年ばかしゝて中途で退學した。僕には絶えず「濟まぬ〳〵といふ心が十分あつたが、さらばと言つて思切つて實狀を明す勇氣は無論まだない。さう思ひながらも、友人の姿が學校に見えなくなつたので、俄に氣が寛いだやうであつた。

「其の後十七八年の今日まで、友人には遂に一度も會はぬ。無斷で移轉した理由は誤解のまゝ忘られて居るであらう。が此樣な馬鹿な事をすると何時か會ふ時があつたら、其の時こそ誤解を解かうといふ心が今も尚僕の胸の底の方に一部分を占領して居るやうに思はれる。」

小說家は默つて聞いて居た。辯護士も默つた。二人とも物の二十分間も默つて居つたが、胃も段々輕くなつたと思はれて、言ひ合はしたやうに起き上つて銘々の机に凭つた。辯護士は伏せて居つた大部な刑法論を起した。小說家はトルストイのクレーツエロウソナタの讀みさしをまた讀み始めた。

（明治四十年九月作早稻田文學）

青草

一

大阪の春は瞬く間に押寄せて瞬く間に行つてしまつた。東京の櫻花のやうに橫汐吹に降る春雨に無殘な散り際も見せず、廣い住吉公園の老松の樹蔭を彩取つた櫻花も、しばらくは精あるものゝ如く靜かに咲き誇つてゐたが、それも七日と壽命を保たないで夕暮の風にほろ〳〵散つて、洗つたやうな砂地の松の落葉の上に白く雪を敷いてゐた。

淺海は宿樓の欄干に凭れながら風もないのに庭園の櫻花の散つて行くのを凝乎と眺めてゐた。せめて今しばしの春を惜む者にはまだ八重のあるといふことが、どんなに遣る瀨のない心に賴母しい感じを懷かしめるであらう。散り際の潔くないその八重も大方盛りを過ぎたけれど蜜蜂は殘る限りの花の精を吸はうとてか壯な唸り聲を立てつゝ花心に姿を隱してはまたほかの花にと移つていつた。蜜蜂の體が花を搖るたびに淺海の鼻に花の匂が漂うて來るかと思はれた。青く澱んだ池の緣には山吹が黃色く水に影を翳して、蛙が時々音を立てゝ池の中へ飛んだ。名も知れぬ其處らの草木が見てゐる間にも鮮やかな色に芽を吹くかと思はれた。

紅の芽を付けた庭園の扇骨木垣の外を褪紅楮の日傘を翳した阿娜めいた年增が向うの鹽湯に入つて行つた。

淺海の宿樓の大廣間の欄間には、明治十七年に書いた鹽湯の効能を說いた大きな額が掲げてあつた。その時向うの鹽湯も此處の家も同時に新築せられて、初めに一軒の家で營業してゐたのが、汽車が出來たり、電車が通じたりして大濱や濱寺が賑やかになるに連れて此處は何代かの持主に讓り代られて、今では湯屋と料理屋とが別々になつたらしい。

淺海は今、紺の暖簾を潛つて入つたその年增を何處かで見た女のやうに思つて考へてゐた。するとそれは直ぐ此の先の郵便切手を賣つてゐる家の主婦であつたことを思ひ起した。誰かゞ、あれは大阪の、方々に支店を持つてゐる牛屋の妾だと敎へたことをも思ひ出した。

湯屋の大なき二階の欄によくけば〳〵しい色彩や、大柄の衣類が掛け擴げてあつた。障子の中で一日大きな話聲がした

り、廊下へ大きな丸髷の鬘を着けた女形や陸軍將校の軍服を着けた男が出て立つたりしてゐるかと思ふと、やがて家扶らしい扮裝をした羽織袴の男や印半纏を引掛けた職人などゝ一處に其家を出てぞろ〳〵高燈籠の石段の處に行つて芝居染みた眞似をした。それを向うの方から寫眞を撮つてゐた。

浅海もそれに誘はれたやうに二階を下りて散歩に出て行つた。自分の宿樓の外は何れも出來てまだ幾年にもならぬやうな別莊風の家などが多かつた。其處を本宅に、主人は毎日便利な電車に乗つて大阪に通ふらしい家族もあつた。大きな鼠壁の土藏の建つた屋敷もあつた。

五六十年前までは此處等あたりまで海であつたらしい、浅い小溝を一つ越すと、其處からは公園の地内になつてゐて、その中に建つてゐる家はいづれも洒落れた貸席や料理茶屋風な家ばかりであつた。浅海はその溝に沿うて歩いた。溝の縁には足の踏み場もないまでに盛に青草が萠えてゐた。その小徑について行くと自然に公園の外を流れてゐる小川の岸に出た。花道を滑つてゆく「野崎」のお染の乗つたくらゐの大きさの、田舟が土を積んだ後から〳〵緩い水の上を滑つて遠く潤けた野の方へと下つて行く。果しもない廣い麥畑も、向うの方の大きな堤も水彩畫の繪具で唯一色に塗つたやうな鮮かな青い色が眼に滿ちた。それでも處々にまだ黄色いのや白いのや栄の花が咲き殘つてゐた。その中に小く見えても大きさうな赤い煉瓦の工場の煙突が靜かに麗かな空に煙を吐いてゐる。

浅海はさういふ物に眼を樂しませながら、敷島を口に啣へたまゝ小川の岸に沿うて稍しばらく歩いてゐたが、危つかしい朽木の橋のあつたのを幸に公園の地内に入つた。其處にはまだ浅海の一度も足を踏み入れたことのない庭園の擴がりがあつた。東京の堀切の菖蒲畑よりもまだ古い池の水の中に青い杜若が盛に莖を伸ばしてゐる。處處にもう白いのや赤いのや、蕾の綻びかけて躑躅の繁つたその池の縁に沿うて行くと池は曲つても〳〵まだ擴がつてゐた。その大きな躑躅の繁みに隱れて、其處にも此處にも世を忍んだやうに瀟洒とした茶席がゝつた家が靜に建つてゐた。太い藤の葛が柱のやうに二本突立つて、軒先に廣い棚を造つたその一軒のお茶屋の廻緣に行つて浅海は腰を下した。雅邦の繪に見るやうな白と薄紫の藤の花が長いのは地から二三尺の處までも垂れてゐた。

浅海は柱に背を凭せながら、小女の酌んで出した茶をすゝつてしばらく足を休めてゐると、何となく疲れたやうな心持がして來た。春は、今强い自然の力を以つて行くのが眼に見える。彼は默然として自分を思つた。

二

「あゝ、遊女に精神を奪はれてゐる間にとう〳〵折角の畿內

の春をもしみ〳〵見ずに過してしまつた。」

嵐山や吉野の花信は早くから紅い繒びらになつて電車線路の驛々や大阪の街の辻々などに揭げられて、浅海の情を急き立てたのであつたが、彼には今の場合、淡い無情の花よりもどうしても矢張り人間の方が好かつた。さうして嵐山や吉野に花を探ねるよりも、人も老いては共に再び戯れることの難い有情の春を趁ふに心急がれた。

彼は手にするほどの金は何時も氣に染んだ遊女の處に持つて行つて、僅かに最後の電車賃を殘すまでに使ひ果してしまはねば歸つて來なかつた。勿論彼はそれを決して悔いなかつた。悔ゆるどころではない、愛する遊女に存分の錢を蕩盡し得ぬことのみを唯り悲しんでゐた

時としては、斯う自分のやうに愛人を思ひつめては苦しくつて遣り場がないと、思ひ返して見ることもないではなかつたが、さればといつて自分の今の生活から想つてゐる遊女を取り去つて了へばその後には只空洞な形骸が殘るに過ぎないのが眼に見えてゐる。

人は、紅葉山人の小說が肉體に基礎を置かない泡沫の人情を徒に寫してゐるに過ぎない、生理學的心理學と調を揃へてゐる近代の深い生命の泉から奔り出た藝術に比べて、大きな自然を背景にした永遠の運命といふやうなものを微めかしてゐないといつて非難をするが、可矣、それは首肯するとしてそれなら現在の日本の小說家に一人の能く「金色夜叉」の間貫一や「多情多恨」の鷲見柳之助などの如く、切ない悲戀に身を慨き人を怨んでゐる人間を描き示した作家があるかと思つて浅海は前後を回想して見たが、せめて一人も紅葉山人くらゐな眞率な熱情を籠めて作品を公にしてゐるものは無かつた。浅海は獨り斷乎としてさう思つた。單にそればかりではない近頃藝術の自然を說く者の作に柳之助が理由もなく唯嫌つた友人の妻お種を只管懷しがるに到る、如何にも自然な前後の情景を宛がらに描いてゐるものも無かつた。

彼も常に筆を執つて机に寄つてゐる人間ではあつたが、無論自分にもさういふ物はまだ書けなかつた。けれども彼の心持だけでは紅葉の書いた人物の悲しい境涯だけは能く解するのであつた。さうして誰よりも自分は最もそれを能く解してゐるとさへ信じてゐた。

小說の中に議論を挾むことは、この作者も極力排斥する方であるが、一つは、この作者にまだ渾成した創作を以て凡ての讀者を首肯せしむるに足るほどの作が無いのと、一つは、多少それを表現してゐてもさういふ情緒と理解とを天性有ち得ない讀者がそれを理解することが出來ないのを殘念に思つて語るのであるが「金色夜叉」「多情多恨」を通して見ても、故人の作者が人生の姿をも本質をも大半戀と愛との繫縛と觀じてゐたのが略ぼ察せらる。宮に背かれた貫一の悲憤の恨み

と愛妻お類に死なれた柳之助の愚痴の恨みも、形こそ違へ皆なその奥底の戀と愛とその變形とを以て、人間の生命として人生の姿としてゐる點は同じであつた。さうして此の人情と道理とは、眞個に能くモンナ・ヷンナ讀みを得る者、「僧房の夢」を讀み得る者、アンナ・カレニナを讀み得る者、マダム・ボヷリイを讀み得る者、はた近松西鶴を讀み得る者にはこの作者の今更らしい冗説を待たないで夙に解つてゐる筈なのである。唯泡沫の人情とや、その泡沫がやがてこの世の姿ではないか。少くとも貫一と柳之助との感情の眞率なる點に於て、紅葉は決して通俗作家ではなかつた。讀者の多いといふことは通俗作家といふ反證にはならない。

暗黒な未來の暗を辿りながら相擁して情死を遂げる者の心理には白熱した相愛の信仰があるからである。彼等の抱擁した瞬間には何物をも恐れず、何物をも放棄して意に介しない強い安心があるのだらう。心なき人よ、それを迷妄と斷ずる勿れ、凡ての物象、及び物象と物象との關係も亦た迷妄ではないか。

三

淺海はこの間中、江口と共に遊び明した夜々の面白さに引換へて、持つ物を持たないでは逢ふことの叶はぬ昨日今日の悲しさ寂しさに、遣る瀬なく、過ぎ去つたことを思ひ佗びてゐた。

一體自分は、何時から遊女は江口でなければならなかつたであらう。……それは二月の十九日に一處に文樂座を覯に行つた時からであつた。

尤もその時からばかりではない。――彼がかうして大阪の土地に豫期したよりも永く滯留することになつたには種々な原因があつた。彼は今獨身である。五年前に七年の間同棲した妻に死別れたのだ。その妻は淺海に取つては實に第二の生命ともいふべき戀女房であつた。その妻に亡くなられた彼の歎き悲しみは傍の見る眼にも無殘でもあり、また可笑しいくらゐでもあつた。さうして五年の永い間、彼は亡くなつた愛妻のことを思ひ惱んで、佗しい月日を經て來た。小說に書けば、「多情多恨」の中の柳之助には、葉山誠哉のやうな深切と興味とに富んだ友達もあるのだが、――また文學者以外の、もつと廣い世間には穩かな常識に富んだ人間もあるのだが、生憎淺海には其樣な友達は一人もなかつた。偶々古くから知つてゐる人間にはさういふ性情とは最も相違した人間が多かつた。彼は人と人との交友など〻いふ事に就いて表面は兎に角、内心信用をも依賴をも置いてゐなかつた。

五年前その妻、遺骨を故鄉の土に葬つて以來絕えて墓參もしなかつたので、彼には最早現世で唯一つの懸換のない親しい大切な者になつてゐる老母をも久し振りに見舞つたし、一つは險しい文學者仲間の、うるさい蔭言の世界から遠退きたかつた爲に歸省を兼ねて京阪に漫遊を志したのであつた。京阪は淺海の鄉里とは餘り距つてないのみならず東京と往復の途中になつてゐたが、二十年來屢その間を往復しながら毎時京阪を素通りばかりしてゐたのであつた。

彼は、その五年の間獨りで欝屈してゐた心の寂しみを自から傷はらんとて旅行に出たのであるが、それには畿内の土地々々を見步いて、かねて自分の私淑して日本の二大文豪の作中に大きな背景となつて表はれてゐる都會や田舍の風土人情の變遷を觀察したり、もし心の餘裕が許すならば、奈良あたりの寺院に隱れて、頹廢した古い時代の建築繪畫等を研究していくらか古典的な氣分を養うて、永い間に段々酷く破壞されてゐる感作を整へよう、さうしてその古い整つた建築美術などが與へる安らかな感覺の世界に中世紀の僧侶などが努めて試みたやうな隱退した生活がして見たかつたのだ。

けれどもさういふ禁慾的な生活は凡俗の身には、どうしても年齡といふ自然の力を待たなければ行ひ難いのであつた。淺海の肉體にはまだ〳〵若い血が流れてゐた。一夕ふと知り合つた遊女は最初から五年の間寸刻の間も絕えず彼の心の奥の何處かに姿を留めてゐる亡くなつた妻の亡き影を斥けて、その後に强い鮮かな形を印してしまつた。彼はそれを殆ど自分にも不思議に思つて考へて見たが、永い間萎びてゐた自分の心が、刻々に希望のある歡びに潤うて來るのが、丁度穩かな春の夕暮れに波打際に立つてゐて、夕潮の次第に高まつて來る時のやうに感じられた。

「あゝ、自分にはまだ戀の出來る力が殘つてゐた。」

と淺海は一人で後めたくさへ思つたのであつた。幸に旅の空でのことであるし、人には包んで彼はそれを獨りの心の奥深く樂しく祕めてゐた。

四

その間には喧嘩をしてお茶屋の主婦が仲に入つて取りなしたこともあつた。

その仲直りの晩であつた、しん〳〵と更ける寒い冬の夜、平常は客を通さぬ奥の間の主婦の部屋に二臺の燭臺を燈して男は淺海が一人、仲居など〻火鉢の傍に寄り集うて濕かに酒を酌み交したこともあつた。

「もう喧嘩するんぢやありませんよ。」

主婦はわざと二人を叱るやうに東京口調で言つた。江口も東國育ちである。

「旦那はん。あなた方あんまり仲が好すぎるからやおまへんかいな。」仲居は酒をつぎながらいつた。

「ナニ、仲が好すぎる處かそんなことをいふとこの遊女が厭がるよ。私なんぞとは違つた好い人がちやんとついてゐるん

やもん。」淺海は言葉尻を大阪言葉でいつた。

「あなたが自家の大事な〳〵娘を啣へて餘處に行た罰が當つたのや。自家やつたらもうこれからあなたに默つて挨拶に遣りやしめへん。さういふやうな時にはまたさういうてやることにします。」主婦は締めくゝるやうにいつた。

「お母ちやん、あの晩逐々この人何といつても寢ないの。」江口は子供のやうな鼻の詰つた聲でいつた。

「へえ？」主婦は呆れた眼で淺海の顏を見た。

大阪や京都の女は皮肉の味を解しないほど生な點があつた。

「お母ちやん、そりや皮肉よ、私呆れましたの。」

「なに、皮肉なわけでもないがね、一月に文樂座で南部太夫の夕霧を聽いて、炬燵の場の人形が面白かつたから私も一つ伊左衛門の眞似をして、この夕霧にすねて見たのよ。」

「はゝア。まあよかつた！」

主婦と仲居は聲を揃へて手を打つた。

「夕霧樣、さあ一つお酌。」笑ひ止めると隙さず仲居は德利を取り上げた。

「伊左衛門樣、さあ一つお酌。」

も一人の仲居も後れず德利を取り上げた。

「喧嘩した後は、一層好くなるといふのは眞實ねえ。」

二人だけになつた時江口は淺海の肩に手を卷きながらいつた。

五

籠の鳥なる江口とは喧嘩をするにも資本がかゝつた。

「此度何時來て？」

二階の關所で膝詰めの談判をせられて、

「若旦那、もうおかへり。……この次ぎ。何日。」

またもや階下の火鉢の關所でもう確定した事でも訊くやうな主婦の力籠つた言葉を、

「必ず近日々々。」

と、芝居ぜりふで輕く受け流して歸つてから、心は矢竹に逸りながらも漸く二十日も過ぎてから淺海は行くことが出來た。

「もし若旦那、若旦那の近日は二十日だすかいな。えらう遠い近日がおまんな。」

主婦も仲居もとん〳〵二階の淺海の傍に寄つて來て、聲を揃へての總攻撃に淺海は防ぎかねてゐる處へ江口も小走りに上つて來て、

「隨分長いわねえ、ねえお母ちやん？」

ひたと淺海に寄り添うてべたりと坐つた。

「もう解つたよ。……だから今日はそのお詫びに文樂に行く

よ。」

仲居の附いて行きたがるのを、主婦が忙しいからとて遣らないのを、二人は結句仕合せと、囁き合ひつゝ、車の來るのを待ちかねて文樂座へと急がせた。

その時の狂言は前が義經千本櫻で、中に中將姫を挾んだ。

淺海は湯屋に行つて毎時明いてさへゐれば同じ棚に衣類を入れるやうな心持ちで、毎時買ひつけた南側の棧敷に通つた。彼は其の高い處から下に並んでゐる大阪の婦女をば、毎時旅人の珍らしい心持ちで見るのであつた。その日は江口と膝を並べて坐つてそこで食べるのを樂しみにして來た辨當を早速馴染の出方に命じた。小蔭で欲しくない物を取換へながら小い辨當箱に入つた鮮麗な鯛のおつくりなどを食べつゝ、越路太夫の鮓屋を聽いた。

惟盛卿の彌助の人形は綺麗で、青い萠黄がかつた着物に、紅い繻袢の襟を覗かしたお里は可愛かつた。

「あれ御覽なさい。可愛いお里？」江口は可愛い顏をして笑つた。

「……私は、お里と申して、此家の娘徒者、憎い奴と思召れん申分。過つる春の頃、色珍らしい草中へ、繪に在る樣な殿御が御出、惟盛樣とは露知らず、女の淺い心から、可愛らしい、いとほしらしいと思ひ初めたが戀の元。……縱令焦思れて死ぬればとて雲井に近い御方へ、鮨屋の娘が惚れられうか。……」

「あれ、お里が燒き餅を燒いてゐるのよ、可愛いお里が。はゝゝゝ。」

江口は興がつた。

淺海は唯、遊女をつれて文樂座の棧敷に來て、快い太夫の聲音や美しい情緒を奏でる太い三味線の音をわけもなく耳にしてゐればよかつた。さうして思ふまゝに、弛んだ心を音樂の音に連れて散亂せしめた。强ひて舞臺を見ようとも思はぬ。强ひて淨瑠璃の筋を辿らうと努めもせぬ。見るから昔を忍ばしめるやうな古く黴びた、天井の低い小い芝居小屋の中に響いてゐる音樂は夢のやうな懷かしい心を唆つた。

幸ひ其處等に客がゐなかつたので、淺海は横さまに少し行儀を崩しながら、江口はと見ると、遊女は自分とは相違して殊勝にも熱心に舞臺の方を見入つてゐる。その横顏を盗み見てゐると、江口の小高い鼻筋の中程の處が線では描けないくらゐ心持ち高くなつてゐる。それは何代かの美しい男女の遺傳を證する顏に屢見ることの出來る鼻であつた。その下にはさも柔かさうな唇が蕾のやうに結ばれてゐた。

「この女は夜の燈の下で美しいばかりぢやない、晝間見ても好い。」

淺海はさう思ひながら尚ほ見廻してゐると、多い髮が割れたやうになつて分れてゐる下から頭の後の方に白い剃げが見

えるやうに思へた。「おやッ」と思ひながらよく眼を留めて見ると、剝げ處かそれは白い頸筋であつた。頸筋が頭と思ひ誤られるくらゐ多い髱が拔き衣紋に着た襟の上に被ひかぶさつてゐたのであつた

　淺海はさういふ物を見てます／＼心に美しい滿足を覺えた。

　舞臺の上で狂言は進んで行つた。淺海は「中將姬」を好まなかつた。江口はそれをも飽かず見入つてゐた。

「あれは、浮船が惡いんだわ：：だけど本當に惡いんぢやないのよ。」

　さうして降り積る雪の上に割れ竹を以て岩根御前の爲に斷え入るまでに打ち据ゑられてゐる中將姬を、興奮したやうな顏をして凝乎と見詰めた江口の眼に露が宿つた。淺海は殘酷な狂言を見てゐるよりもそれを見て女らしい同情をしてゐる自分の遊女を見てゐる方がよかつた。

「おい、蜜柑をくれ。」

　江口は默つたまゝ薄皮まで綺麗に取つては一袋づつ淺海の手に渡した。さうして時々自分も口の中に入れた。そんなことをしながらも矢張り舞臺に氣を取られてゐた。

　やがてその殘酷な一場が終る。最後は南部太夫や源太夫が五人、それに三味線が六挺のつれ彈きで吉野山の靜別れの一幕が明いた。舞臺は一面爛漫たる櫻花の吉野山、遠見には青草の崩えたつ山をあらはし、東京や大阪の役者でも行ることの出來ぬ可愛い美しい人形の靜が額一面眩いばかりの花簪を挿し、兩頰に長く黑い頭髮を切り下げて、賢さうな黑い瞳で舞臺の中程にゐる。そこにはこれも眼の覺めるやうな緋縅に金色燦然たる黃金の胴の鎧を着た忠信が從いてゐて、靜は金扇を翳しながら、忠信とからんでいろ／＼な心持を表した身振りがある。調子の張つた三味線と、五人の太夫の合奏とで小い文樂座が暫く鳴り動搖めいた。美しい引脫ぎが脫いでも／＼あつた。

　二人は夢のやうな美しさと微妙な音樂の音とに一と仕切り耳と目を奪はれてゐた。

「もう歸らうか。」

「歸りませうか。」

「歸らう。」

　出方が持つて來て置いた新聞包みの中から、銘々に穿き物を取つて外に出ると、二人はほつとなつた。

「靜は好かつたわね。：：早く歸りませう。」これから先を樂んでゐるやうに、遊女は淺海に身を寄り添ひながらいつた。

六

　その夜、春になつたら一處に東京に行く話が二人の間に初めて持上つた。

「私、半分持つわ。」

　その言葉が何樣なに淺海の心を動かしたらう。

　さうして春々といつてゐる間に、その春は思つたよりも急に來た。三月になつてから淺海は、もう江口を自分の獨占にしたといふまでに思ひ募つて來た。この邊で奈良の水取りまでといひ習はしてゐるその三月の中旬を過ぎると、遠く南の空を劃つた葛城山金剛山から和泉の方の山々も今までの險しい黑い色とは見違へるやうに溫味をもつた淡い春靄を罩めて來た。大阪の郊外を南に走る電車の窓からは廣い麥の野が眼の醒めるほど青い色に變つてゐた。微溫湯のやうな春雨が、しと／＼とその野や野の單色を亂した森を濡してゐた。

　さうして四月に入ると、どうかするともう物憂いやうな强い日が照つた。難波から心齋橋筋にゆく賑やかな通りの軒頭に花傘を翳した紅提燈がずらりと揭げられた。不斷でさへ明るい難波新地の入口と出口の頭の上に高く紅い花行燈が點されて、大勢の人間はその下をぞろ／＼往來した。蘆邊踊や浪花踊が始まつた。

　淺海は江口を連れてさういふ處を步き廻つた。つい此の間まで炬燵を入れて寢てゐたのに、二人は蒸々して堪へられぬやうな夜を明した。

「また汗を搔きませう。」

　江口は、淺海の心持を段々深く知つて來た。淺海は、江口でなければ夜も日も明けないやうになつた。

　青草を蒸すやうな强い日が照つた。感情の疲れた淺海は、焦々する心地で思ひに任せぬ日を消してゐた。

七

　淺海は默つて暫く休んでゐた腰を漸く緣側から持上げて、宿樓の方に步みを運んだ。

　歸るとすぐ晝飯になつた。筍と莢豌豆と鯛の甘煮、鯛の汁に澤山な蕁菜、これだけは每日のやうに變化がなかつた。それが單調な强い、物憂い春の日のやうに淺海の食慾を鈍らすのであつた。

　すると午後になつて電話が掛つて來た。その主は思ひ掛けもなく江口であつた。

「私、今晚なあの處に遊びに行くわ。今日癪に障つたことがあるから：：七時と八時との間。」

　意外の電話に生き返つた淺海は、夕飯を濟して、やがて遊女の來る時刻を待ちかねてゐたが、心がそは／＼して家の中に靜としてはゐられなかつた。さうして早くから公園の中の電車の停留場に出掛けて行つた。七時と八時との間といふに、まだ停留場の時計は七時にもなつてゐなかつた。彼はどうかして行き違ひになりはせぬかと、それを氣にしつゝも一刻も早く其時間の來るのをもどかしがつて、堪へ難い僅かの

數十分を思ひまぎらす爲に暗の公園を獨りぶら〳〵歩いた。

　大阪から、行く春に遊び遅れた多勢の男や女が尚ほ幾組も隊を組んで押掛けて、松の樹の間の料理茶屋で飲みつ歌ひつ花見手拭を頸に卷いて馬鹿騷ぎをしてゐた晝間の賑かな人の聲、物の音は黄昏と共に寂しく靜まつて、宛がら山の中の一軒家のやうに離れて立つた家々は、何れも早くに戸締を急いで處々に突立つた電燈の明りの蔭は、暗の中に散り後れた櫻花が幽かに白く見えてゐた。

　陰晴の定まらないこの頃の時候の常として、つい先刻まで星の見えてゐた空が何時の間にか一面の夕立模樣の不穩な黑雲を以つて蔽はれた。

　淺海は、どうかして少しも早く遊女をわが物とする身受の金を造るに、效なき心を焦してばかりゐるこの日頃の屈託を、せめても今宵の逢瀬に慰めようとして、毎時の貸座敷で逢ふのとは異つた歡樂に松原の暗黑の中で彼自身でも驚かるるばかり今更に心の稚なびた胸を躍らしてゐた。

　停車場に戻つて來ると難波を出發した南海電車は勢ひよく走つて來て四五人の乘客を降すと、少しの猶豫もなく忽ち車掌の鳴す笛の音と一處に堺の方に向つて駛せ去つた。彼は不安な期待に惱みながら二三の電車を空しく遣り過した。

　四つ目の電車が待つ間もなく走つて來て留つた。此度こそはと、胸の躍つた豫感は果して違はなかつた。停留場の構外に立つて、遠くの夜目に頸を伸して眺めてゐる淺海の眼に、ボギイ車の中央の乘降口の處から、狹い踏み段を恐れるやうに用心しい〳〵、足許の方を俯向いたやうな姿勢をして降りて來る。纖細い一線に前髮の高い銀杏返しの横顏を暗の光に描き出した華奢な婦人は確かに江口に違ひない。

「此度は來た！」と、淺海は心の中でいつた。

　續いて降りた男と並んで歩きながら小いプラットホームを此方に向いて來る女は、先方でも早くも此方を認めたものか、輕い驚きと喜びとに身を搖るやうにして笑ひながら、

「あゝ彼處に來てゐる、來てゐる!!!」

と、女が覺えず高い聲を出したのが淺海の耳まで達いたのであつた。

　連れの男は顏を上げて此方を探した。

「あれ、彼處に！」女は、此方を指で敎へた。

　改札口を出て來ると、江口は急いで淺海の側に身を寄添へて、

「この人、自家の男衆をしてゐた人。今途中で會つたから丁度私一人で寂しかつた、處だつたから、此處まで送つて來て貰つたの。……どうも御苦勞さま。もう歸つて下さい。ぢや切符だけ私貰つて置く。」

　女は掌を出して切符を男衆から受取つた。

「どうも御苦勞さま。ぢや大丈夫だからね。大金の掛つたこの遊女、確かに私が預つたよ。」

　男衆を歸して、二人は電車の線路を向に渡り、睦じさうに樹下暗に肩を並べながら、砂の多い踏み心地の好い公園の坦道を眞直に花崗石の大鳥居の方に歩いて行つた。

「あの男、どうしたの！」

「この間まで自家の男衆をしてゐたのだけれど、餘り道樂が過ぎるもんだから暇を出されたのよ。……それで困るからツて、私に親方に謝罪つてくれと賴んでゐるのよ。」

「お前と何うかしてゐるんぢやないかえ。」

「憚りながらそんな江口さんと違ひますから御安心なさい。……私、も少し前に自家を出掛けたんだけれど、何だか暗くなつて寂しかつたから來るのを止さうかと思つて一旦引返したの。さうすると丁度あの男が私に賴んでゐた事はどうなりましたらうつて訊きに來たから、今から住吉に行く處だから送つてくれつて、此處まで送らして遣つた。意氣地のない奴なのよ、私なんかにもへいこら〳〵してゐるわ。」

　遊女は、靜かに惡毒氣ない言葉でいつた。

「……また、ひどく暗くなつたわねえ。」さうして黑い空を仰いで見ながら、「私、恐いわ！　あなた私歸る時にも其處まで送つて頂戴。」

「あゝ、送つて遣るよ。だが、大阪の箱廻しや遊女の男衆は東京なんかと違つて馬鹿に丁寧で素直だなア。」

「さうよ、皆な温順しいのよ。男の癖に女に頭を下げてばかしゐるんだもの、あの奴等。……あゝ曇つた、雨が降つて來たわ！」

　遊女は、淺海の掌を自分の掌で握つたまゝ佇立まつてまた黑い空を見上げた。

「降りやしないよ。」淺海も、さういひながら空を見上げたが、「降つて來るかも知れないが、まだ降りやしないよ。さあ早く私の宿樓に行かうよ。」

「さう。降つてやしない？　でも今冷いものが顏にかゝつたよ。」

「ナニ、雨ぢやないよ。それは。」

「ぢや何だらう？」

「松か櫻花の露が落ちたんだらう。」

「さう、雨ぢやないの。雨が降ると困る。」わざと泣くやうな聲を出して甘垂れた。

「雨が降つたつて構はないぢやないか、傘もあるよ。でもお前の身體は紙で拵らへてあるの？」

「でも、今日は好い着物を着て出て來たんだもの、濡れると困るわ。」女は、また甘えるやうな聲でいつて、頸を曲げて乳のまはりを見た。

　彼女は、絣のよく揃つたはつきりした大島紬の小袖の上に匂ふやうな深い色の、紫紺の綟り織の縮緬の羽織を、よくあ

れで滑つて落ちないと思はれるやうに輕く掖つてゐた。
「本當に降らない？　降つてるわ！」
「降つてやしないよ。降つたら車でもあるぢやないか。」
「歸る時に、あなた復たステーションまで送つて頂戴よ。」
「あゝ〳〵送つてやるよ、男衆になつてもお前の傍についてゐたいんだから。先刻、お前よく私が居るのが眼に着いたねえ。」
「えゝ、直ぐ分つたわ！……あゝ、彼處に來てゐるナ。と、思つた。」
「俺にも、お前が電車を降りやうとする時、その細い顔の形で直ぐ、あゝ來たナ。と、分つたよ。」
「嬉しかつたわ。遠くから、あなたが立つてゐるのを見た時丁度活動寫眞見たやうだつた。……これから二人で大阪へ行つて活動寫眞を見やうか。」
「そんなことをしてゐられないぢやないか。早く行かう。……もつとぴたりと寄り添へよ。」
浅海はさう言つて握つてゐた掌で女を堅く引き寄せた。女は、はゝと笑ひながら、男の爲すまゝに從順に體を附着けて歩いた。
「あなたの處に何か甘いものがあつて？」
「あゝ、あるよ。お前もう夕飯は食べたんだらう。」
「えゝ。」

「甘い誘しが出來るの。それを拵へさすよ。」
二人は緩く歩いた。
「あら犬が吠えてゐるわ。寂しいのねえ。誰も通つてゐないわ。あれは何？　白く見えるのは。」
「櫻花さ。」
向うから暗の中を、酒機嫌の人聲が近寄つて來た。
「此方へお廻りよ。」さういつて、浅海は江口を自身の左側に纏らして、四五人の群れを遣り過した。
「あら、これが石の鳥居ねえ。私一遍來たことがあるわ。」
「お客と？」
「違ふわ！　自家のお母ちやんなどゝ一同で一日遊んで行つたわ。」
大鳥居の處に、小溝の水が五六間の間道の上に溢れてゐた。
「あゝ、一寸お待ち、其處のところは水が流れてゐて歩き難いんだ。その下駄ぢや駄目だ。……私負つて遣らうか。」
「あゝ、負つて頂戴。」
「誰も見てゐるものはないだらうナ。」浅海は前後を見廻はした。誰も通つてゐる者はなかつた。
「さあ、手を掛けた。」浅海は蹲みながらいつた。
江口は默つて、しなふやうな兩腕を靜ッと背後から男の頤の下まで深く卷き着けた。浅海は柔かい温かい女の體温を背

に感じた。頸筋の處に女の鬢の毛が非常な魅力を以つて微かに觸れた。
「おゝ、重い。小いと思つて負つて見ると隨分重い。……確り捉へておゐで、大きなお尻だから手が掛けられやしない。」
「嘘！　大きいもんですか。」
「いや、大きいよ。これ、かうして私の手が巧く掛らないくらゐだもの。」
「大きかアなくつてよ。」
「いや、大きい〳〵……そら！」
「はゝあ！　擽つたい。」
女は、浅海の背の上で身悶えした。
「もう厭や！」
「そら、もう降りるんだ。」
浅海は背を低く屈めて、女の足を地に着けた。
其處まで來ると片側に立ち並んだ鄙びた茶店から覺束ない火影が泥濘んだ道を照らして、客もないのに、まだ表の一疊臺の上に色の褪めた赤い毛布が掛けて、パン菓子などを入れた硝子の蓋の傍に蜜柑や林檎が電燈を浴びて艶かに光つてゐた。臙の塗れ附いたうで卵の鉢も並んでゐる。西洋御料理と白く抜いた長い紅提燈の軒先に吊された店にはうどんの看板や親子どんぶりの立て看板なども立てかけてあつた。
「あなたの宿樓まだ先き！」

「も少し行つて、彼處の處を左に曲ると直ぐだ。」
茶店の前を通り越すとまた道が少し暗くなつた。左側には別莊にでもするらしい屋敷に大きな花崗石で地形だけが仕放しにしてあつた。右手の廣い草原の彼方に遠く紡績工場かなんかの大きな煉瓦の建物が見えて、けたゝましい機械の響が夜の寂寞を破つてゐる。幾つも並んだ窓から潤味のない明りが射してゐた。
「あの高いのは何？」
「あれが住吉の高燈籠さ。」
「あゝ、さう〳〵。私何時か上つてよ。」
燈籠の火袋の中には大きな電燈が光つてゐた。

八

二人は、その高燈籠の少し手前の大きな硝子の箱の中に乾涸ぴたやうな鯛の切身を張り付けた角い大阪壽しを二つ三つ並べてゐる家の角を左に折れて、塀の外を廣く花崗石で疊んだ家の前を踏んで行つた。
櫻花の稚木のきざきに植ゑられた庭園に來ると、向うに見える薄暗い玄關を指して、
「あすこさ。」
浅海は、旅の空の侘しく狹苦しい宿屋住居に堪へられない

悲しさ寂しさを感ずるのであるけれど、江口ゆゑにはその旅の空の不自由や不便をも辛抱してゐるのである。

「あなた、此の室にゐて獨りで毎日何をしてゐますの？」

「心細い事をいつて訊くぢやないか。俺は此處で物を書く仕事をしてゐるのぢやないか。さうして毎日々々お前の事ばかしく／＼思つてゐるんだよ。……一處になるといつてながら、お前にはまだ私の商賣が本當に飲込めないんだね？」

「そりや解つてゐるわ。小説を書くんでせう。」

「さうさ！」

「毎日々々お前の事ばかし、く／＼思つてゐるツて。あはゝゝゝ。」

彼女は男のいつた通りの事を繰り返して、嬉しいのか、どうしたのか、にた／＼笑ひながら、笑み溢れるやうな黒味の勝つた眼でまじ／＼と淺海の顔を見守つた。小さく整然と坐つて、首を据ゑたやうな恰好をして此方を向いてゐる顔が分らぬやうに微かに振れてゐる。淺海が死別れたその妻にも何うかすると首を据ゑて顔を振る癖があつたことを今ふと思ひ出した。

思ふやうなおいしいお菜が出來上つて、それが幾種も餉臺の上に並べられて、煮き立ての白い御飯を茶碗に盛つて、いざ箸を取らうとする時に亡くなつた妻は、ちよいとその茶碗を額の處まで持ち上げて頂く眞似をしてそれから箸を着けたその時餉臺の向側に坐つてゐる淺海と視線が行き合ふと、彼の妻は唯眼に物をいはせながら心持ち顔を振つた。

「これは、私の癇の所爲ですよ。」妻はいつてゐた。

そこへ誂へて置いた。三つ葉の入つた壽しが出來て來た。

「おいしいのね。あはゝゝゝ。」

「澤山お食べ。」

「えゝ。……」

「何を笑つてゐる？」

「……本當に一處になりませうね。あはゝゝ。」

伽藍とした家に滯在の客は淺海一人であつた。家は氣味のわるいほど森としてゐた。

小い部屋の中で電燈の光を浴びてゐる彼女の匂やかな白粉の顔が微かに振れてゐた。

九

「もう歸るわ。」

「ぢや電車まで送らう。」

先刻の廣い草原まで出ると、

「ちよつと待つて頂戴。わたい、此處に小用するわ。」

「ぢや、今自家でして來ればよかつたのに。」

「でもいゝわ、階下で屹度さう思ふもの。」

さういひつゝ、早くも闇の中に白い脛を捲くるのが見えてゐた。

翌朝淺海は、また其處を散歩すると、昨夕遊女が小用をした跡には輝く春の日の下に青草が伸々と萠えてゐた。

（大正三年三月作ほとゝぎす掲載）

津の國屋

一

昨夜から靜かに降つてゐた初雪が薄く地に敷いてゐた。

千草は、昨夜の晩遲く東京から到着した爲替を每時の郵便局で幾枚かの五圓紙幣に換へて懷にすると、少し行つてから下駄屋に入つて、崩し初めに足駄を買つた。千草は乏しくなつてゐた懷中へ新らしく幾許かの纒つた錢が入つて來ると、眞先に新らしい履物と足袋とを買ふ癖があつた。

その新らしい樫齒で輕く白い雪に鮮かに二の字を刻みながら戎橋の通りを難波新地の方に步いた。低く空を鎖してゐた灰色の雲が何時の間にか散らけて靑磁色に光つた靑空から暖かい日が照つて來た。大阪は雪が少い。

木理の眼立つまでに洗ひ磨かれた千本格子の軒並に華奢な注連飾りが張られて　しつとりと落着いた難波中筋の粹な古い街筋は茶屋の男、女の忙しい往復に踏まれて、泡雪が大方泥濘んでゐる。その軒下の雪の上に竈や臼を据ゑて、餅屋が急がしさうに餅を搗いて廻つてゐる。形の好い鳶を着た千草は、細く疊んだ蝙蝠傘を杖のやうに下げながら「夕霧阿波鳴渡」の「年の內に春は來にけり一臼に、餅花開く餅搗きの、賑々はしや九軒町、嘉例の日取り吉田屋の、庭の竈は難波津の、歌の心よ井籠の、湯氣の大杵……」といふ情景を聯想しながら、東京と違つた大阪の歲の暮を珍らしさうに見て步いた。

二

晝間でも薄暗い津の國屋の三和土の上に靜つと立つて、千草は、

「今日は」と、小い聲を掛けた。

家の中が閑寂としてゐるので、

「今日は」と、今度は少し大きい聲を出した。すると、長火鉢に寄りながら開閉の出來るやうになつてゐる、上り框の二疊のも一つ奧の間から、庭に向いた小い切り窓の小障子を內側から細目に明けて、

「どなた？」と、いつて顏を見せた。

「あゝ、若旦那、お出でやす。暫らくだしたな。さアお上りやす」

津の國屋の主婦は、客脚の絕えた午後に、シヤン〳〵湯氣の立つ鐵瓶のかゝつた火鉢の向に丹前を被つて、橫になつて微睡してゐた眼を覺ましながら、

「ようこそ。……今日もあんたのお噂をしてゐましたんや。昨日か一昨日小夜衣はん、自家の前を通つたついでに、ちよつと寄つて、若旦那から手紙を貰ひました。今度あなたがお出になつたら、もしお花に行てゐても、都合をして來ますからぜひ待つてゐて耳入れして貰ふやうにいふてはりました。今時分だすから、大抵家にゐやはりまへう」。主婦は時計を見上げて

「すぐに返事を出して見ます。……どうぞお二階にお上りやす」

千草は黑光りのするほど拭込だ箱段を踏んで二階の八疊の間に通つた。濃い群靑を塗つた土佐繪風の二枚折りの金屛風が壁の隅に立てゝあつて、違ひ棚には赤い締め紐の眼に立つ太鼓や舞ひの扇子などが置いてある。

主婦は後から直ぐ茶と火とを運んで來て、「外はお寒うおましつしやらう。……今ちよつと皆な出てゐまして、……すぐ返事をして見ますよつて、少し待つてゐておくれやす」

さういひながら床の上の脇側を取つて千早の脇に置いて降りた。

二十日ばかり前の晚、宵のぞめきにこの家の前を漂々と通りすがつて、つひ呼び込められて一晚で逢ひ初めてから、これで三度めで千草は小夜衣に逢ふのである。東京から大阪に來てゐて、藝者を遊ばないでこどもを呼ぶといふのが、千草の獨りの心に何となく自尊心を傷けるやうな心持ちもするし、大阪の女を遊びたいと思つてゐながら、東京者といふのが物足りなくもあるのだが、逢ひそめから種々の點に男性の情を引着ける處があつて、千草にはあてもなく探してゐた物を、偶然探しあてたやうな力強い興樂に身をそゝられてゐるのである。さうして今まで永い間萎びてゐた心を十分にその興樂に醮したいやうな氣分に促されてゐた。

十日ばかり前、二度めの時にも懷中の用意が乏しかつたり遊ぶ勝手がよく分つてゐなかつたりして、後髮を惹かれるやうな悲しい思ひに胸をとぢられながら、十二時までゝ歸つた。

遊女は、寒い夜更に、華麗な友禪模樣の長襦袢の上に黑い縮緬の羽織を被つて二度までも、はばかりに行くやうにして長火鉢の處に降りて行つて、仲居や主婦と何か話して來たらしい。濃い房々とした銀杏返しの頭髮に埋れたやうに、蒼いほど白い小さい顏を仰向きに枕の上に載せて、ちよつと思案してゐる樣子を傍から見ると、曲線の纖細い顳顬の處に心

持ち靑い靜脈が浮いてゐるのが、幽暗い行燈の光の中にも見えて長く薄のやうに切れた活々とした黑い瞳で何處かを凝乎と見てゐる。

「おい、何をそんなに考へてゐるの？」

千草は自分の今思つてゐる通りのことを、遊女も思つてゐるのだと考へながら、脅かすやうに云つた。

「何も考へてゐやしない」、遊女は一時澄んだやうに靜かであつた姿態を初めて崩しながらいつた。

「ぢや、あなた、今日は十二時までゝお歸んなさい」自分も諦めて、男を賺すやうに優しくいつた。

「私が、どうかしても可いんだけど、最初からそんなことをすると階下でお母ちやんなど變に思ふから、……十二時まで歸した方が可いといふの」

「あゝ、歸るよ。けれど雨が降つて來たのに、これから歸つて行くのは辛いなア。……電車が無くなりやしないか知ら。……これだけで何うかなりやしないかなア」

「あなたまだ持つてゐるの。……あるんなら朝迄にして下さいな……私もこれからまた他へ行くのは、それは辛いわ」

「もう持つてやしない。此處にこの通り、あるだけさ」

「ぢや、とにかくお歸んなさい。そして近い內に是非來て下さい。でも、もし電車がなかつたら歸つておいでなさい。直ぐだつたら、私まだ此家にゐますから。……その代り此次は來て見て、私がゐないからと云つて、寄席なんぞへ行くんぢやありませんよ。今晚も此室に靜と寢て待つてゐればよかつたのに……あんまりお錢を使はないやうになさい」。

優しくいたはるやうにいひつゝ起き上つて、跳ね返した夜具に背をよせかけるやうに、小高く重ねるやうにした長襦袢の膝頭の上に懷中鏡を取り出して鬢のほつれを直してゐた。

さうして、まだこれから他へお花に行くつらさをくど〳〵と繰返しながらも、手早く長襦袢を脫いで着物に着更へながらそれをめりんす友禪の小風呂敷に包んでゐた。

千草はその夜十二時を過ぎてから、びしよ〳〵と降る雨の中を、わびしく歸つて行つたのだ。

主婦が降りて行つてから、千草は紙卷煙草を啣へたまゝ手枕をして橫に脚を伸どしながら、もそつとのことで淚の流れ出さうであつたその夜の情けなかつたことを種々に追懷してそこへ小夜衣の顏の見えるのを今かと待つてゐた。

壁一重隣の家で、娘が淨瑠璃のお浚ひをする調子の高い撥音に連れて、六ケしい曲節を嚴重に語らうとする、まだどこやら稚氣の脫けきれぬ生な嗄れた肉聲が耳元へ近く響いて來る。それを好い心地に聽いてゐると千草は、大阪でなければ味はうことの出來ないやうな古い淨瑠璃の情調と自然に心が融合つたやうになつて、今語つてゐる「柳」と彼れとは何の關係もないのであるが、「……縋り歎けば父親は、淚に聲も枯

柳、枝に流るゝ血汐の淚」といふ音調が、小夜衣は賤しい遊女でも自分は構はぬ、苦界の女だから倘ほのこと可愛さうだといふ事に胸をそゝられた。

三

少許しておかみは上つて來た。

「若旦那、あの小夜衣さんを訊きにやりましたらな、今日はどないしても外すことの出來んお座敷で行けまへんいふのだすが、今日は私が美いのを見立てますよつて、どうぞ他のんで辛抱しておくれやすな」

故鄕の九州の方で長い間藝者をしてゐて、それから七八年前に大阪に來て南地からも出てゐたといふおかみは、千草の仰向いて臥てゐる胸の上に覗きかゝつて、人を外らさぬやうに笑顏を作りながら、大阪とも九州とも東京ともつかぬ辯で云つた。

千草は、それを聞いて失望を感じたが、まだ遊ぶ勝手もよく分らず、殊に深い馴染でもないお茶屋なので、いくらか氣を兼ねながらも、

「どうかして貰つて來られないの。僕は彼女が氣に入つたんだから、」千草は失望の色を和げるやうにつとめながら、野暮を微笑に隱して子供のやうに、淡泊に主婦に縋るやうに云つた。

「えゝ、それやもう貰へさへすれば、仰しやるまでもない貰うて來ますが、それが貰へんから、今日はどうぞ他のにしておくれやす。あの女が若旦那の氣に入つてるのは、それは分つてゐます。私がちやんとあなたには、あの遊女と思うて見立てたのだすもの。さうだすから、もうあなたにはあの女と定めて置いて今日だけは私に免じて他なのにしておくれやす。その代りこの次からは必ず彼女を呼びますさかい」

主婦はそこに手を突いて拜む眞似をしたり、輕く掌で襦袢の襟の處を打つやうにしたりして哀願した。

千草は折角の思ひで今日こそはと樂んで來たのに、他の女には鐚一枚も惜しいと思つたけれど、それは胸の底に藏ひながらかういふ時に强ひて我意を外に表はさぬものと諦めて、「ぢや兎に角もう一遍貰うやうに話して見て、それでもいけなかつたら仕方がないから他のにするとして」千草は、矢張り仰向いたまゝ表面にはさまで小夜衣に心がないかのやうに輕く云つた。あんまり初手から獨りの遊女に愛着してゐる心の底を、斯ういふ眼先きの利くらしい主婦に見破られるのが耻しいやうな氣がした。

「それぢやもう一遍貰うて見て、それで行けなんだ時は他のにするとして、それで、他のは何樣なのにしまへう。若いのにしますか、少し年を取つたのにしまへうか。どんなのでも若旦那のお好きなのを私が見立てます」撫で廻すやうに御意

を伺つた。

「あんまり若いのはよくない……」

「やつぱり少し年を取つたのが面白いでせう。……彼女くらゐなのを。よろしい私が受合ひました。……あゝ、今、お茶持つて參じます」

おかみにはあゝ云つたけれど、千草はどうしても小夜衣でなければならなかつた。女に段々数多く接して來るにつれて彼の頽癈的興味はます／＼病的に鋭敏になつてゐた。女の皮膚の色や手脚の形によつて、男性の享受する快樂の種類を考へて見たり「心中よし、意氣方よし、床よしの小春どの」といふ近松の淨瑠璃に今待つ遊女を比べて見たりしてゐた。發汗したやうな、感情の疲勞したやうな一殺那、血液の循環が止つたかと思はれるまでに蒼白く亢奮した弱々しい小い顔が房々とした黒い頭髮に埋れてゐる有樣が強く彼の眼の底に膠着いてゐた。薄くて小い上唇が丁度早蕨を上に向けて卷いたやうに、心持ち伸びてゐる眞中の處が、ちよいと小高くなつて、ゐてそこの處の何とも云へない柔かさが種々なことを聯想せしめた。彼は横になつたまゝそんなことを想ひ浮べて、卷煙草の吸口をきゆつと強く吸つた。

主婦はまた上つて來た。

「お嬉びなさい。小夜衣さんが今來ます」

晴やかにいひながら、千草の横に座つた。

千草は嬉しさに覺えず顔を崩して、矢張り寢たまゝわざと不機嫌さうにいつた。

「他の者では分らんから私が今自分で行て、座敷に出てゐるのを、ちよつと蔭に呼んで貰うて、これ／＼で若旦那が、ぜひ小夜衣さんに來てもらひたいといふ話しをしましたら、小夜衣さんも、あの人なら行くから、というて、今すぐ來ます」

「もう來るの？」

「もう直き來ます。その代り今日はちよつとだすせ。挨拶というて隠れて來て貰ひましたのやから あなたも直ぐ階下に來ておくれやす。階下にお寢間を取らせますよつて」

おかみは急いだ。

千草は何のことやら少しもわけが解らぬながら、促さるゝまゝに箱段を降りて行つた。

降りながら、箱段の上り口の處を見ると、小夜衣が白い駱駝の襟卷を手に持つて、此方を見上げて默つたまゝ顔中で笑つてゐる。

おかみは、茶室のも一つ奥の八疊に急がしく綿のよささうな大きな蒲團を自分で運びながら

「さあ、あなた方は此方へ。……今やから云ひますが、自家のお客さんが昨日から小夜衣さんを呼んでゐて、今朝からまた他の貸座敷へこの女を連れて遊びに行てをるのを、今私が

行て小夜衣さんに逢うて來てもらひましたんや。……自家の古いお客だすけど、お茶屋祭が癖で、長うなると、もう二軒でも三軒でも歩いて廻る人やから。あんまり遅うなると今に此方へ歸つて來ますから……さあ／＼此方へお越し」

暮れ近くなると茶の間の長火鉢の前には、定客らしいのが二人三人集つてゐた。

「どうしてゐて。さあ、彼方に行かう」

「小夜衣は、甘つたれるやうにいつまでも笑ひつゞけながら千草の袖引いて主婦の延べてゐる寢床の上を渡つて、硝子越しに隣家の大きな土藏に仕切られた猫の額ほどの小庭の見える障子の際に行つて、ぺつたりと座つた。

「まあこゝへお座んなさい。あれからどうしてゐて」

小夜衣は座りながら、千草の兩方の袂を下から引つ張つて

千草は左甚五郎の爲るまゝになる京人形を見たやうに、小夜衣に魂を奪られてゐでもするやうに引張られるまゝに、きちんと腰を折つて、小夜衣の膝の上に自分の膝を突いた。

「あなたが來たと云つて、此家のお母ちやんが自分で呼びに來たから、お客にお菓子を買つて來るといつて欺まして脱けて來てやつた。その代り長くゐられないの。……これ、今日は此樣な風をして可笑しいでせう」と云つて、遊女は肱を上げるやうにして、寢卷のまゝの襦袢の袖口をこちらへ向けて見せた。

また雪空にでも變つたのか、急に暗くなつて、しん／＼と底冷えがして來た。

「おゝ寒い！ 彼方い行かう」

千草は羽織の兩袖をだらりと懐手をしたまゝ、今、主婦の延べて行つた蒲團の方に眼配した。

「あゝ、あつちい行かう！」

その袖の端を捉つたまゝでゐた小夜衣は甘えるやうにいつた。

二人は厚い柔かい敷蒲團の上に行つて座つた。

「好きな人とお樂しみの處を、私が來て邪魔をして濟まないナ」

「そんなことありますか。そんなことありますか」

小夜衣は小い歯を噛み合すやうにして、懐手のまゝでゐる千草の襟先を兩手に捉んで、ぐい／＼押した。

「あゝ、もう可い！ もう可い！」

と笑ひながら、手足の自由を奪はれた千草は後にはねた掛蒲團の上に倒れかゝつた。

四

新春になつて初めて行つた時には、都合よく出來て、小夜衣は早く來た。

茶の間の主婦の座る頭の上には、壁のそこら中に南地五花

街事務所の規定を木版にした藝娼妓の花代の細表が貼つてあつたり、新に披露目をした藝娼妓の名前を大きく誌した紙札が幾枚となく、後から〱と重ねて貼つてあつた。

主婦は新しい茶を入れて長火鉢の向に座つた千草に出しながら、彼がます〱小夜衣に想ひ着くやうな噂をいろ〱してゐた。

「今日はまあ、丁度小夜衣さんが店にゐてよかつた。よく賣れる妓だすよつて、なか〱こんなことおまへんのやで。あの通り別看板だすからナ」と、おかみの眼指した柱の上には「別座祝ひ」と特別に大く書いた大きな紙が貼つてあつた。

「私もこの商賣をしてゐますから、自家でも隨分多勢の藝者や雛妓を手にかけますが、小夜衣さんのやうな女は、もうこの難波新地切つておまへんのや。「別座」と云へば、花の賣上高によつて、一等二等から十までいろ〱ある、その一等よりも未だずつと上で、別座に追ひ越す者はないのだす。あの女のことを皆な小どもの神様々々というてゐます。上品で賢うて、厭味がなうて　それで氣に張りがあつて、人情があつて、私はまだこの今の商賣をせん時分から、度々小夜衣さんとは一座をして、あの女の心はよう知つてゐます。あなたが初めて此家へお越しになつてた時、私、もう一と目ちらと容子を見て、このお客さんには小夜衣さんと、私もう自分で定めたんや」主婦は千草の顔を見ると、屢くそれを繰返へした。

なるほどさういはれて見ると、千草にも小夜衣の上品で、賢さうな處は解る。さう思ふと、彼の心には小夜衣が次第に好くなつて來た。

「今日は朝迄にしても可いんでせう」

「あゝ」

「あゝ、嬉しい」

「おれも嬉しい。初めて泊ることが出來て。この前は一寸だし、その前の時は雨の中を歸るし。あんな痛かつたことはない」

「あたいも嬉しいわ」

夜の更けるにつれて隣座敷にも二た組ばかりの客があがつて、三味線に大鼓を入れた騷々しい散財が初まつた。遠くの方からも、同じ物の音が、建て込んだ家々に反響を返すやうに、はつきりと聞えて來た。枕の直ぐ下の街では、新内や淨瑠璃の流しが幾群となく通つて行つた。戀のつじ占、身の上判斷が古い想ひ出のある聲を揚げて呼び歩いた。一時が鳴つても二時が鳴つても、夜更しをする茶屋の男衆女衆などが食べるやうな物を賣る呼び聲が絶えなかつた。

まだ宵の中から小座敷に忍んだやうにして寢疲れてゐた二人は、遲くから連れ立つて湯に行つた。

「大丈夫よ。遊廓の湯は夜の三時まではあるから」遊女はさ

ういつて向へ行つた。

「貴郞先に行つてゐらつしやい。私ちよつと自家に行つて、お湯の道具を取つて來るから」

置き屋の店には今時分まだ晝のやうな灯影が輝いて、急がしさうに立ち働いてゐる入れ方が、色彩の強い友禪めりんすの寢卷の小包を持ち廻つてゐるのが、艶めかしかつた。湯屋の近くは濕つた暗の中に、白い霧がほの〲と立騰つてゐるのが、そこの火光に映つて家根の空をほうつと赤く彩取つてゐる。殊に女湯は立て込んでゐるらしく、しどけなく伊達巻きをした上に、縮緬の羽織を被つて小走りの下駄の音を立てて驅込んで來るのがある。櫛巻に解いた頭髮に毛筋立を挿込んで襟頸を眞白に塗つた顏をてら〱さして暖簾を潛つて出て行く者もあつた。

千草には、强ひて見ようとしないのに、いろんな色つぽい粧ひをした女が着物を脫いだり着たりするのがよく見えた。温かい、甘酸ぱいやうな更けた湯の匂ひが柔かに彼の鼻を襲うた。東京の洗湯と違つて、大阪のは番臺の處に開きがなかつた。あつても平常開放してあつた。

浴槽の奧の仕切りの板に、何の用に供するのか、女湯と男湯とに出這り出來るほどの口が切つてあつて、恍惚となつて湯に漬つてゐる千草に、其處の朦朧と湯氣の立つた中から

「あなた、石鹼をお使ひなさい」

と云つて遊女が手を差出した。

やつと三時を聞いてから、帳場でも一同寢床に入つたらしい。

「私、あなた好き……あなたの、その頼りないやうな處が好き」

小夜衣は、小供らしい口調で好くいふことを、またいつて深々と千草の目元を見詰めた。千草もまた小夜衣の黑い、能く働く瞳を食て了ひたいやうな心地で凝乎と見入つた。しなふやうに、白い腕で男の頸に卷きついた。白粉臭い浴後の匂ひがぷんと鼻を刺戟した。

「あなたの眼は好い眼ねえ」

「お前の眼の方が俺は好きだ。長く切れてゐて、鼻だつて細工が細い。……それより此處の黑子が私には一番好い」

さう云ひながら千草は、遊女の白粉の色鮮やかな頰の上を指の尖でちよいとついた。

二人は曉方になつてやつと睡つた。

五

まだ深い夢に入りながら、ぐつすりと寢込んでゐる貸座敷々々の大戶を、情容赦もなくどん〱叩いて、花街の遠くの方から朝迎へに來る茶屋男や茶屋女の呼び聲が、霜に凍つた空氣に冴えて、温く寢てゐた千草の甘い曙夢を破つた。

「河半さん！　河半さん！　小式部さん！　小式部さん！……。小式部さん、朝迎へ」

「伊丹仲さん！　伊丹仲さん！　々々。……勝山さんに東雲さん　朝迎へ。どうしまへう？　……あゝ左様かア」

それが女衆の呼び聲だと「あゝ、左様かア」と、喚く言葉尻がある調子を帶びてゐて宛ながら、翌朝の別れを悲しむ歌ででもあるかのやうに、靜かに眠つてゐる朝の街に流れて行つた。

初めてそれを聞く千草の耳には、その聲が何とも名狀し難い懷かしい情思をそゝるのであつた。芝居の好きな人には、幕明きの柝の音、笛の音が、どんなに懷かしく聞えるであらう。相撲の好きな者には氣負うたやうな呼び出し奴の聲が、どんなに嬉しく響くであらう。

けれども千草がかういふ旅の空で、疲れた骸軀を淺間しい一現茶屋の寢床の上に横たへて、果敢ない一夜妻の情にその爛れた悲しい心を委ねるのは、もつと頼りないことを頼みとするからであつた。ある年若い盲人は、その不具な盲目のために、人間として享有すべき種々な樂しみを享樂することが出來なかつた。さうして段々成長して物情がついて來るに従つて倍々己れの身の不具を悲しんで精神が沈鬱になり、果ては氣が變になつて、火事の時に打つ半鐘の音に聞き入ることを好んで、後には祕に自分で放火をして置いて、警鐘の鳴るのを物蔭で聞き惚れてゐたといふことである。

恰度その朝迎への呼び聲が、若き日の多くの仇なる希望に失樂して、些の生效もなく彷徨へる今の千草には、その盲人に半鐘の音が與へる如く、官能に不健全な快感を與へた。

「津の國屋さん！　々々。津の國屋さん！　々々。……小夜衣さん朝迎へ」

といふ呼び聲は、其の家に寢てゐる者の中では誰れより一番早く千草の神經に傳つた。

やつと寢呆けた聲を出して戸外に返辭をした仲居は、みしり〳〵箱段を踏んで襖の外から、

「小夜衣さん、朝迎へ。どういたしませう」と、いつて訊くのだが、後日には毎時も朝迎へは、もう後三本にして大抵朝後にした。さうして朝後はつひ晝までになり、晝まではまた晝後になり、暮れまでになり、夜半までになつて、流連けることもあつた。

六

その日千草は當分錢の入るあてもなく、暫らくは小夜衣の顏を見ることは叶はぬと、味氣ない宿に閉ぢ籠つて凝乎と諦めてゐたのに、午後になつて、ふと思ひもそめぬ東京のある處から僅かばかりの爲替が舞ひ込んで來た。千草はその書留の朱肉の印の捺された狀袋が机の上に載つてゐるのを見ると

ほと〳〵嬉し涙が滲んで、これだけあれば悠然今晩一と晩小夜衣に逢へる。と、東京の方に向いて手を合して拜んだ。彼は忽ちにして生き效を感じて來た。さうしてまたもや大阪の街にさまよひ出たのである。

丁ど暮れちよつと前まで、時刻を移す爲にいろ〳〵なことを思ひ耽りながら貸し間をする家でもありはせぬかと、鰻谷町の方から疊屋町、笠屋町を經て、久し振りに心齋橋筋の美しい狹い通りの飾り窓などを窺いて歩いた。

桐壷や鶴飼の入口に、此家等ばかりは、まだ昔しの面影をとゞめた古風の行燈に覺束ない火影のさしそめた芝居うらを忍び〳〵歩いてゐる千草は、わけもなく四邊の情調に誘はれて小夜衣が首尾よく店にゐてくれゝばいゝがなアと、うはの空に思ひ詰めて、夕ぐれの寒さに、ぞつと戀ひ風の身に染む心地を覺えつゝ、早く他から口のかゝらぬ間にと、急ぎ足になりながら、有り合はした小店で鼻紙と手拭を買ひ、小さく疊んで懷に入れた。それから二つばかり角を曲つたり、露路を通りぬけたりして少し行くと丁ど小夜衣の店の筋向の本茶屋めいた店つきの家へ小聲に呼ばれるまゝに上つて行つた。

「あゝ、小夜衣はん、お馴染だつか」

と、いつて、聞きに行つた仲居が直ぐ歸つて來て、

「小夜衣はん、暮れまでになつてゐますよつて、もう三十分ほどしたら明きますさうです。そしたらおこしますと申しました。どうぞ暫らく待つておくれやす」

待つ間もなく小夜衣は仲居に連れられて階段を上つて來て入り口の處で仲居が襖を明けて、身を横によける傍から、靜つと座敷の中を窺いて見て、

「御存じ？」

と、仲居のいふのを餘處に聞いて、

「えゝ。……貴郎だつたのか」

いくらか浮かぬ面持になりながら、千草の火鉢の向に來て座つた。仲居が行つてから、

「どうして、あなた、此様な處に來たの。津の國屋に何故行かないの」

夕化粧の際立つ白い顏を、ぽつと赤く亢奮したやうにして詰問した。

「どうしてつて、俺は、津の國屋に行くのは何だか厭だから」

「何だか厭だつて、何が厭なの。あなた厭でも、私がそれぢや困る」

「お前、何うして困る。おれは客だ。何處からお前を呼ばうと勝手だ」

「そりやあなたは何處から呼ばうと勝手でも、東京ぢやさうだけれど、大阪ぢやさう行かないんだもの。あなたが私を初めて津の國屋から呼んだら、それからはどうしても津の國屋から呼ばなければいけないの。さうしないと私が警察に呼び

つけられて、拘留せられるんだもの」

小夜衣は關東女の幾許か荒つぽい言葉で言つた。

「さうかい。そんなことをするとお前が警察に引張られるの。そんな酷いことをするの。ぢや、どうしよう？」

千草はわざと呆れたやうに仰山に云つた。

「どうもしなくつても可いの。唯、男衆に、津の國屋に答へさしてさへ置けば」

その代り、他の家から呼ぶと津の國屋へはその度毎に屆けなければならなかつた。もしそれを無斷でゐて、津の國屋に知れて、五花街事務所に屆け出されると、遊女は警察に出なければならぬ規定であつた。千草は、大阪の斯かる商賣にも組合仲間の規定の恐ろしく嚴重なのに獨りで感心した。

「さうか」それならそれと早く理由を話して聞かすれば可いのに。最初ッから折角白粉を塗つて來た顏を赤くして、お前怒るから、俺は吃驚した」

と千草は何處までも浮戲けたやうに眞面目に云つた。

「どうも濟みません」

小夜衣は急に平常の人懷しい調子に直つて、火鉢の向から千草の兩掌を握つた。

「未だ早いから、これから活動を見に行きませうか」

甘えるやうに云つた。

千草は、東京でも大阪でも女が活動寫眞を見るのを好いてゐるのを、恰も女がお薩を好いてゐるのに何處も變りのないと同じやうに感じてゐるので、これまで顏さへ見れば、活動へ行きませうか、お錢が掛らなくて面白いからと、强請むのを、法善寺裏の寄席に落語を聞きに連れて行つたり、東吳や柴藤へ鰻を食べに連れて行つたりして誤魔化して逃れてゐたのだが、その晩は娘子供に父親からお供をするやうに、寛慈な心持ちになつて道頓堀の活動寫眞に行つた。

ユーゴオの何かを更にローマンチックに、センチメンタルに脚色した泰西劇だの、大阪式の新派劇だのを、千草は耐忍しい〳〵他の事を默想しながら見てゐた。眼に涙を滲ませて熱心に見てゐる小夜衣は、新派劇の幕毎に映る「親の愛」とか「戀の惱み」とか云つたやうな文字を小聲で讀んだ。

「お前は學者だねえ」

千草は小夜衣の耳に口を當てゝ、暗中に囁いた。

彼は、多勢の處に斯うしてゐるよりも、早く二人ばかりの處へ行きたかつた。下足場で散々群衆にもまれて、土間へ足袋裸足のまゝ突き落されたりしながら、千草は漸との思ひで自分のと一緒に遊女の下駄を取つてやつた。

七

軒を並べた芝居と活動寫眞とが一時に閉會た道頓堀の通りは、群衆が押返すやうに蠢動いてゐた。一月末の冷たい夜風が

襟先や腋の下のあたりから肌を刺すやうに浸みた。

「おゝ寒い〳〵！」

小夜衣は、がた〳〵身慄ひをしながら芝居の反對の側の店先の人影の疎らな處を選つて急いだ。

「お前は、また馬鹿に薄着をしてゐるんだもの」

千草は、澁い壁色のお召の外套を着て、白い駱駝の襟卷をしてゐる小夜衣の貧弱な姿を哀れみに充ちた眼で横から見守つて。懷手をしてゐる肩のまわりが小供のやうに小さくつて外套の袖が下垂れを着たやうに垂れてゐた。明けて二十三になる小夜衣は、まだ十五六の小娘位の身體をしてゐた。

「渡良瀬川の上流から、この遠國の大阪まで流れて來て、何といふ淺間しい身の上であらう」

と思はれて、千草は名狀し難い哀傷に沈みながら步いていつた。

「勤めは痛い！」

寢てゐる時など、どうかするとそんなことをいつて、ほつと太息を洩らすことなどあつても、身體が二つあつても三つあつても引き足らぬほどよく賣れて、親方からは、衣裝から何から、他の多勢の抱妓とは、一人だけ別に大切に取扱はれてゐた。

温順い女のわりに氣がさら〳〵してゐて、格別商賣を苦にもしてゐなかつた。

絣の好く揃つた大島紬の着物は、寢卷の長襦袢を着更へながら、幅のつまつた水色繻子の丸帶をきゆつと背後で男結びに締めて、その上をぽんと一つ叩きながら、

「好いでせう。奴の小萬見たやうで。……自家で私くらゐ何でも構はない人間はないの。その代り信用があるわ。誰れでも小夜衣さんは男のやうだつて。洒然してゐて。」

それは小夜衣が自身でいふ通りであつた。藝者上りらしい厚皮しい處もなければ、女郎臭い卑しい根性など微塵もなかつた。千草には何處よりも一番そこを蟲が好いたらしい。

下野の山の中に生れたにしては驚くばかり骨細で華奢であつた。容貌に何處か貴族的な遺傳があつた。

「斯樣な好い女性を運命は何うして斯樣な淺間しい境遇に陷らしめたのであらう」

千草はまたも云うて歸らぬことを思ひながら、群衆を分けて步いた。二三間先にも一人眼につく銀杏返しの好い女が、斜に反對に向つて行くのが見えた。それは併し背が大きかつた。小夜衣が獨り小さかつた。千草の眼には覗きからくりの繪のやうに、いろ〳〵な美しい女が映つて行つた。

「おい、何か食べに行かう？」

「何でも、あなたが好きな物を」

「ぢや、鳥？　それとも蠣船？　……俺は東京にゐる時から長い間、大阪の蠣船を樂しみにしてゐた。蠣船と文樂座との

爲に大阪へ來たと云つても可いのだけれど、鰻飯は案外不味ねえ」
「さうねえ。あれで御飯がも少し味が付いてゐると可いんだけど。……お〻寒い〳〵。早く何處かへ入りませう」
二人は、戎橋を渡つて行く者と、九郎右衞門町の方へ眞直に行く者と、難波の方へ折れて歸る群衆とを、立ちながら見るともなく眺めてゐた。
「あゝ、彼處に好さゝうな鳥料理があつたのを知つてゐる」
千草はさういつて、九郎右衞門町の通りをずん〳〵先に立つて歩いた。さうして道頓堀の河岸の側の鳥辰と行燈にしるした洒落れた入口の、撒水した花崗石を踏んで行つた。
老舗らしい古い木造りの、清楚とした二階に通ると、好い鹽梅に客が隙いてゐた。
「大變靜かだわねえ。もう大分遲いのよ。これから早く食べて歸つて直ぐ寢ませうよ。」
「あゝ、さうしよう」
仲居が、ぼり〳〵青い火焰の燃え上つてゐる火をどつさり入れて持つて來た。
「お〻、溫かい。寒かつたわ！」
小夜衣は身を慄はして見せた。
「戸外はお寒おまつしやろ」
「寒ござんすねえ　姐ちやん、……今夜お酒を少し飲みませうか」
「あゝ。飮まう。ぢや姐さんお酒を」
小夜衣は眞白い胸當てを膝の上に擴げて、鍋の中に種々な物を取入れながら、
「あなた、その燒鳥を上つて御覽なさい。おいしいから」
「あゝ。……成程此奴は旨い。何時か其處の明陽軒に行つた時ねえ。女中に任して置いたら、折角の牛肉の味を不味くしてしまつた。この家は、落着いた好い家だナ」
千草は其處らを見廻しながら、心の中で東京の鳥料理の家などを思ひ比べてゐた。
一本の酒がまだ半分も減らぬ間に二人の顏は、もう火照つて來た。
「お前もすぐ顏が赤くなるねえ」
「それに今日は寒かつた處へ急に飮んだから……目がちらちらするわ」
「お前、その手をやると、手の切れさうな眼尻の長く切れてゐるのが、何とも云へず好い」
千草はまたそれをいつて、灰汁拔けのした小夜衣の顏をじろじろと見てゐた。折角かうして逢ひながら、多勢の中に交つてゐるのを千草は物足りなく思つてゐたのが、やつと二人ばかりになつて差向ひで飮食してゐるのが何とも云へず歡ばしかつた。

男でも女でも物を食べる時に下品なそゝつかしい食べ方をする者がよくあるが、賤しい商賣の小夜衣は小さい口でいつも靜かな食べ方をした。
「お前の箸で取つておくれ」
男は、女が箸で挾んで差出すのを食べながら
「おい、もつと、此方へお寄り」
「誰れか來ますよ」
丁ど其處へ男女の客が大阪臭い言葉をあたり構はず高聲に話しながら上つて來た。
「あゝ、あんな奴がやつて來た。早く歸らう。大阪の奴はよく隣の襖を明けて見るよ」
厚皮しい年增藝者などのキャッ〳〵云ふ聲がしたかと思ふとさつと向の襖を一尺ばかり明けて此方を覗いた。
「失禮だわ！」
小夜衣は屹度なつた聲で云つた。
夜はいたく更けた。二人は九郎右衞門町の通りを芝居裏の方に曲つて行つた。
「二人で斯うして歩いてゐる處を津の國屋のお母ちやんにでも見られたら大變だ。あなた、その鳶の襟をよく立てゝ！……もつと〳〵。その鳥打ちの緣も下げて」
小夜衣は、津の國屋の主婦に目付るのを大變なことのやうに恐れた。すると暗い横町を忍び〳〵歩いて行く處を、誰れかゞ擦れ違つて行きながら
「小夜衣さん！」
と聲を掛けた。
「あゝ、お母ちやん！」
小夜衣は、直ぐ聲の主が分つたと見えて、後戻りしかけた。
「まあえゝわ〳〵。また此次」
さう云ひ棄てゝ津の國屋の主婦は定客らしい二三人連れと向へ行つて了つた。
「そら御覽なさい！　私の言つた通りだ」
「津の國屋の主婦か。誰れかと思つた」
「狹いんだもの。直ぐ見付つてしまふ」
「見付つたつて構はないぢやないか。お前は大變に氣にするねえ」
「それや、あなたには何でもなからうけれど。私は今日明日此の土地にゐなくなる者ならどうだつて構はないけれど、まだ此の土地に長くゐなければならない身體だもの」
「向へ屆けて置いたと云つたから構はないぢやないか」
「いくら屆けておいたつて、あゝして二人歩いてゐる處を甘く見付かつたら惡いぢやありませんか」
「さうかい。そんなに喧しいのかい。大阪ぢや女郎買ひも、なか〳〵六ケしいね」
「あなた、もう私の處に來てくれなくつてもいゝから、津の

國屋の外から私を呼ぶのは止して下さい」

「さうか。來てくれなくつても可ければ、俺も是非來なければならぬ事はない。……ぢやこれから直ぐ歸らう」

「えゝお歸んなさい」

千草は一人で先にさつ〳〵と歩いて行つた。一處に歸つて行くと、仲居は待ちかねてゐて、

「お歸りやす。えらう遲うおましたな。……どうぞ此方へ」

仲居は、先に立つて三階の奧まつた小間に案内した。そこにはもう柔かい友禪の蒲團に炬燵を入れてあつた。

仲居は行き掛けながら蔭から、

「小夜衣はん、ちよつと」

と呼んだ。

「店から男衆がもう先刻から何度も來て仕舞には自家で待つてゐましたんや」

小夜衣は直ぐ入つて來て、

「おゝ寒い〳〵。まあ此處で少しあたりませう。あなたも其處へお入んなさい」

さういつて夜具をはねて炬燵に入つた。

千草は何事でもなさゝうな津の國屋のことがまだ十分に得心出來ぬので、先刻の小夜衣の膠もない物の云ひ振りが胸に納りかねてゐた。さうして懷手をしてそこに突立つたまゝ

「店から何の用？ 挨拶だらう」

「いえッ、違ふ。まあ、おあたんなさい」

小夜衣は何事もなささうに頭振を振つた。

「貰ひか、挨拶だらう。それに違ない」

千草は、今時分から挨拶になど遊女を出してやることを好まなかつた。

「津の國屋も津の國屋ねえ。お客が自分の處へ來なければ、お客の氣嫌を惡くしたのは分つてゐるんだもの。仲居でも謝罪によこすが當然だ。」

「小夜衣はん、ちよつと」

また仲居が、室の外から聲をかけた。

千草は、一人で面白くなかつた。

「あなたねえ、これから今一寸此處で、寢て、今晩私は自家へ歸つて寢るから、あなただけ一人此處へ泊つて、あすの朝津の國屋から私を呼んで下さい。今男衆にさういつてやつたから、後で津の國屋から姐ちやんが屹度此處へ謝罪に來るから。さうしたら、さうして下さい。……あすの朝私いくら早くても行くから。さうしないと、津の國屋に面が濟まぬ」

千草は、小夜衣のいふことを聞いてゐて、腹の中で（甘いことを云やがるな）と思つた。他のお客が貰ひを掛けてゐるに違ひない。それを、津の國屋の事にかこつけて誤魔化さうとするのが憎らしい。

「ナニ、俺は朝寢坊だから、朝早いのは眞平だ」

「さうねえ。あんまり早いのもいけないわねえ」

「挨拶に行つて、間男をしてお出で！」

千草は、少しづゝ神經的の皮肉を用ゐ始めた。

「挨拶に行つて來てもよくつて？」

小夜衣は炬燵に寄りかゝりながら、ちらりと横に向いて、千草の顏を盜み見た。

その、女の眼尻に、千草は一寸物凄い眼の働きを認めた。

「好きな男が宵から來て待つてゐるんだ、……お氣の毒だ。大阪には、ピカ〳〵する指環を三つも四つも嵌めた色男が多いよ。……行つて逢つて來ると可い」

「本當に行つてもよくつて？」

冷かに云つた。

「…………」

「行かないと、又男衆に、事件を五十錢遣らなけりやならないよ。詰らないぢやなくつて」

「五十錢惜しいと、何時いつた？ それを惜む位ならば、まだ明い内から面白くもない活動寫眞のお供をして、苦しい目をしてお前の下足番なんかしやしない」

「どうも濟みません」

口の先で云つた。

「寒いからと云つて鳥料理屋に入つて、これから早く歸つて寢ようと云つたぢやないか。……今日はお前に御奉公をしたのだ。……挨拶に行かうと思へば行つてお出で」

「ですからもう行きやしなくつてよ。……それよりお湯に入つて來ようか」

「あゝ、湯に行かう」

二人は湯に出て行つた。

「もう十一時だ。」

千草は、通りの時計を窺いて見て行つた。

「十一時どころですか。もう二時だ」

小夜衣は小走りに走りながら

「私、一寸自家に行つて道具を取つて來るから、あなた先へ行つていらつしやい。寒いからよく暖まつて入らつしやい」

さう云ひ棄てゝ店の方に去つた。

千草は悠然湯に漬つて、歸つて來ても小夜衣は容易に戻つて來なかつた。彼は、段々心が面白くなくつて來た。靜と獨りで床の中に横つてゐられなくなつた。急性に手を拍つて仲居を呼んだ。

「女は如何した」

「どうも相濟みません。えらうお湯が長うおますな」

「湯ぢやないんだよ。畜生め、人を馬鹿にしたゐやがる」

「お湯と違ひまつか」

「違ふよ。挨拶に行きやがつたんだよ」

「まあ、さうだすか。私、また旦那はんと一處にお湯に行つ

たこと、思うてましたのや、さうだすか。それやどうも相濟みません　一遍店に見にやります」

仲居は降りて行つた。

　暫らくすると、仲居はまた上つて來た。

「御免やす。……やつぱりお湯に行てはります。今直ぐ參りますから、どうぞ少しの間辛抱しとくれやす。……茶熱いのをお上りやす」

　今まで待つたよりも、また倍も待つたけれど小夜衣はまだ歸つて來なかつた。

　仲居は幾度となく三階まで上つたり下りたりした。

「……小夜衣はん、本當にどないしなはつたんやろ。もう三時過ぎてまんがな。自家でも表締めて寢んなりまへんがな。もうほんとに旦那はんに申譯おまへん。もう一度行つて、急いで參りますよつて、どうぞもう暫らく待つとくれやす」

　仲居はしとやかに宥めて置いて降りて行つた。その後から千草は堪へずまたパチ〳〵手を拍つて

「俺はもう歸るからな。畜生、人を馬鹿にしてゐやあがる」

千草は憤然として寢床から起き上つて、仲居は嗾いて狼狽て、其處に膝を突きつゝ、着物を着ようとしてゐる千草の兩の袂を執るやうにしながら

「もうちよつと待つとくれやす。今また他の者を迎へにやりましたから。旦那はんにそんなことしられますと私達後で帳場で叱られます。どうぞお願ひだす。ちよつと待つとくれやす。……挨拶と知つたら女を出して遣るんやおまへんなんだに」

仲居は悲しげに千草を引留めた。

「いや、お前方には濟まないがなあ。あの女が悪いんだよ。……へン人を馬鹿にするないッ。贅六の啄きッ枯した女郎なんか此方で厭だ」

千草は語りひを云もながら、仲居の留めるのも聞かず、颯々と着物を着て鳶を被つて歸る用意をした。

　今時分、好きな男の處へ行つて、あゝもしてゐる、斯うもしてゐると想像すると、忌々しさに胸が引掻かれるやうだ。寢ながら今か今かと待つてゐると、ゐても立つてもゐられない心地がするけれど、斯うして潔よく起き上つて歸る決心をして見ると、いくらか胸が透いたやうだ。あんな一晩の中にさへ幾人と數知れぬ男に肌を觸れる遊女が何處が好いんだ。どうしてあんな女に思ひ染んだのだらう。丁度今宵をいゝ機會に、きつぱりと思ひ斷る。さうすれば心が樂だ。俺は歸るんだ。歸つた後へ小夜衣が戻つて來て、俺が居なかつたら何と思ふか、その時自分がかうして歸つて行く、せめてもの效がある。小夜衣に何とか思はしさへすれば、いくらか腹が治まる。

彼は三階の奧から降りた。

「いますぐ參ります。もう店まで締つてゐますから」

　さういつて仲居が二人がゝりで引留めたけれど、千草は颯々と通りに歩いて出ねば腹の蟲が抑へきれなかつた。さうして一人の仲居は小女の行つてゐる後からまた店へ走つて行つた一人は千草の袖を捉へながら中筋の通りを何處までも追うて來た。夜更しをする煮賣屋さへ影を隱した表の通りは、もう何處のお茶屋も潛戸を締めて寢てゐた。

「おれはもう婦るんだから、其處を放してくれッ」

少しく邪見に云ひ切つて、すた〳〵道を急いだ。十七八日頃の冬の月は、人足絶えた街を蒼白く照してゐる。千草は振り返つて見ると、仲居が月光を浴びながら空しく突立つて此方を見てゐるのが見えた。それを見るとまたすた〳〵歩いた。少し行つては此度振り返ると　仲居はもう見えなかつた。さうすると千草は俄にまた遊女が腹立しくなつて來た。難波の通りに出ると夜働きの俥が二三人、街角に寒く固つてゐた。それを認めると千草は初て電車も疾になくなつたことに氣が着いた。

　小夜衣奴をどうしくれようと焦れながら、復た〳〵先刻のお茶屋の方へ引返して來た。

「お、、旦那はんお歸りやす。小夜衣はん今直き參ります」

戸口に立つてゐた仲居が傍に寄つて來た。

「ナニ遊女なんかもう來なくたつて可い。……併しもう電車もなくなつたから私は泊めてもらはう」

「どうぞさうしておくれやす。小夜衣はんは此家にゐました私逢うて來ました」

　暫らく店先で仲居どもと話してから、千草は元の小座敷に戻つて暖々と寢轉んだ。

　さうしてゐる所へ、ばた〳〵と足音を立てゝ小夜衣が梯段を駈け上つて來た。

「千いさん何うしてゐて？」

息をはづませてゐる。

「待つたでせう。……もう何處へも行かないわ！」

「今から行かないのは當然だ。馬鹿にするないッ！」

千草はくるりと背を向けた。

小夜衣は急いで着物を長襦袢に着更へながら

「千いさん怒つちや厭。怒つちや厭。千いさん」

と云ひながら兩手で男の頭を抱えて無理に自分の方へ捻ぢ向けた。

「寢る邪魔するな、總嫁め！」

千草はまたくるりと向へ轉つた。

流れ

「旦那はん、大阪から田川さんといふ方から電話がかゝつてゐます。」

本店の子守が、枕頭に來て、息をはずませながらいつたので眞島は目を覺した。

大阪から電話。田川といふ名前の電話。といふ報知を聽いて、毎朝不快な氣持ちで眼を覺ます習癖になつてゐる眞島は今朝は譬へやうのない嬉しい心持ちで目を覺ましたのである。

「あゝ、さう！」といひながら、急いで跳起きて、帶を締めるのももどかしさうに本店に驅け出した。

眞島の泊つてゐるのは、別莊になつてゐて、本店は、二丁ばかりも離れた家込みの方にあつた。其處の宿では電話は本店の方に一つ架設してあるばかりであるから、遠距離から電話が掛つて來る時には、本店から別莊まで知らして來て、それからまた驅け出して行くのだから、まご〱する間に一通話の時間は空しく經過して了ふのであつた。

彼れは急々として電話室に籠つた。

「あゝ、もし〱私、眞島。」

「もし〱あなた眞島さんですか、私、大阪ですが、只今千代奴さんが出られますから。」いつもの虎どんの聲である。

「もし〱、もし〱、あなた眞島さん、私、田川。」お夏の少し嗄れた緩い口調である。千代奴の本名はお夏といつてゐた。眞島は殊更にその本名を呼んでゐた。眞島は、この地に來てから、その聲をせめて電話で聽くのを樂しみにしてゐるのであつた。

「…先日はお手紙をありがたう。お金も確かに受取りました。私、今日行きませうか。あなたの御都合は何う？」

「來たら好いさ。私の方では何時だつて差支へないのだが、お前の方であんまり遲くなつては寒くなつてつまらないから同じ來るなら早い方が好いと思つたから、あゝいつてやつたのだ。」

「でも今日行つたら、二十八日の朝は早く歸らなきやならなくつてよ。お約束があるから。」

「そんなら二十七日の晩に歸つたつていゝぢやないか。今晩と明日と二た晩泊つて。」

「それでもあなた好くつて？」

「仕様がないぢやないか。」

「ぢや、今日行きます。…のりまきを買つて行きませうか。」

「何を？」眞島にはよく聽き取れなかつた。

「のりまきを買つて行きませうか。といふんですよ。」少し大きな聲を出した。

「あゝ、買つておいで。」

「あなた、隨分つんぼねえ。…ぢや行きますから、待つて頂戴！」

それで電話は切れた。

眞島は、この秋季から東京のさる新聞に小說を書かねばならぬことになつてゐた。長い間文學などに携はつてゐても、之れまで捗々しい創作をしてゐないので、此度その話しが定ると、彼れはその好機を逸しないで、熱心に筆を執つて見たかつた。

で、その事を氣にしながらも、九月の初旬にこの有馬に來ると直ぐお夏に手紙を出して、少しも早く遊びに來るやうに勸めてやつた。

「夏季は身體が弱るから何處かへ連れて行つて頂戴！　私半分持つから…」

と、七月頃から、さういつてゐたのであるが、全抱への、自由の利かぬ身體である上に、眞島の方でも何時も餘裕のない生活をしてゐた。眞島はあくせく思ひながら、暑い二た月の間は遂々何處へも行かずに大阪の郊外でつまらなく夏を過して了つた。九月になると、東京の方の仕事の期日が段々切迫して來たので逃げるやうにして有馬に來た。夏の客の退散した後の有馬は閑靜で、始終あわたゞしい氣分でゐる眞島も流石に其處では氣が落着けさうでもあるし、九月になつたら多少東京の方から入る當ての金もあるので、お夏にさういつてやつたのであつた。

眞島が東京の生活に飽いて京阪に放浪の旅に出掛けてからもう一年になる。相當な年配になつてゐても、妻子があるのでもなく、また日々出勤せねばならぬ定職を持つてゐるのでもない彼れは、何處にゐても差支へないのであるが、京阪にも大分見飽いてゐた。その見飽いた京阪にまだ滯在してゐるのは、去年の秋の末頃からつい馴染みになつたお夏を忘れかねてゐるからであつた。

そのお夏とも八月の末に逢つたきり丁度一と月逢はないのである。

で、電話が掛つてから、眞島は、靜としてゐられないほど嬉しくつてそはそはしてゐた。

何時の汽車で來るだらう？　これまで、手紙でも來る時に

は、遲くつて十二時四十分の大阪發でなければ、その次の三時五分になると、此方のステーションに來て四時五十四分だから、其處から三里の緩い勾配の道路を俥にゆられて上つて來るのでは、有馬に着く時分には、もう暗くなつてしまふ。自動車で來れば、俥で三時間近くもかゝる處を唯三十分で來られる。けれども自動車は初めて乘る女には、もし眩暈でもするやうなことがあつてはいけない。でも乘つても大丈夫のやうであつたら自動車の方が早くつていゝ。さういふことを、細かに嚙んでくゝめるやうに書いてやつてあるのであつた。先刻も電話でまたその事を繰返して置いた。

それから三時間ばかり眞島は耐へ性もなく手繰り寄せたいやうな心持で時間のたつのを待つた。やがてもうそろ〳〵着く時分だらうと思ふと彼は樂しみに胸をそゝられながら自動車の停留する場處の方に出て行つた。

山地の秋はもう更けて、眼に入る物の色にも、肌に觸る空氣の感じにも、眞島が此處に來た當座の、漸う夏季を過ぎたばかりの初秋に見るやうな清新な氣分にはなり得られなかつた。彼れは、も少し早くその美しい初秋の山にお夏と時を過すことの出來なかつたのを殘念に思つた。で、何となく物足りない寂しい心持ちを感じながら、長く延びた街道に添うて自動車の來る方に歩いて行つた。

平坦な一筋道を自動車は砂塵を卷きあげて遠くから疾走して來た。近寄つて來る車上の乘客を、眞島は眼を皿のやうにして見張つたが、待つ人の姿はなかつた。

眞島は耐らなくなつた。ぢや俥で來るのかも知れぬ。併し俥で來るとすればまだ二時間を空しく待たねばならぬ。彼れはその間の時間の經過するのをもどかしがつた。さうして理由もなく其處らを彷徨して無駄に時を立てやうと焦つた。三田驛に通ふ街道を一里ばかり下の村まで歩いて行つた。さうしてお夏の姿を俥の上に想像に描きながら、小山の鼻の曲り角になつてゐる處で認めようとした。

けれども寂れた街道には俥一臺も來なかつた。彼れはたゞうら悲しい心持ちになつて空しく引返へして來た。もう日は暮れて山の上の家々には燈が瞬き始めた。

今日晩には一緒に夕飯が食べられると思つてゐたのに、遲い汽車で來て、あと俥で來るとして見ても、もう今まで來ないのでは、今日はいよ〳〵來ないのだ。さう定つてしまふと、眞島は耐へられない失望の感じにがつかりして、旅館に戻ると、廊下にゐた女中に

「夕飯の支度が出來てゐるなら、持つて來ておくれ！」と命じた。

さうして何か溜つてゐる胸に飯を自暴に詰め込んだ。氣がむら〳〵して來た。何か當りつける處があるなら、當りつけるのだが、その當りつける處のないのが、彼れにはいひやう

のない空虛の感じを與へた。

さうして箸を置いた處へ次の間にこそ〳〵と人の氣配がして、やがて靜かに襖を明けて、今日は、本店の方の番になつてゐる女中のお竹が恭しさうに小包みを高く持つて先きに立ちながら、

「此方でございます。」と、誰れかを案內するやうな口をきいた。さうして眞島の方に向つて「お出でになりました。」と愛相笑ひをしながらいつた。

お竹の背後に姿を忍ばすものゝやうに人影が動いて、

「ほゝ」と笑つた。

お竹も愼しげに笑つた。眞島はそれと氣が附くとわざと澄した顏をしてゐた。

焦れ〳〵する心持ちを、澄ました顏に押包むのが彼れにはその時勢一杯であつた。それでも嬉しくつて耐らないので、

「來たの？ 今御飯を食べてしまつた處だ。あんまり遲いから、もう來ないかと思つてゐた。」

その間に、女は入つて火鉢の向側に坐つた。

「どうして其樣なに遲くなつたの。だから彼樣なによくいつて置いたぢやないか。自動車に何故乘つて來なかつたの。俥で來たからそんなに遲くなつたんだらう」眞島は疊み掛けて叱り始めた。

お夏は女衆の手前を恥しさうに、

「まあ、そんなに來い早々怒るもんぢやないわ。」笑ふ口元を小さくつぼめながら、眞島を制した。

お竹は笑ひながら、手荷物を其處に置き、火鉢の火を直して、退りながら、襖の處に行つて畏まつて、

「お夕飯は、どういたしませう？」

「……さあ、私は濟んだんだが、何が好いかな……鷄がよからう、鷄にして下さい。」眞島は、それを命じて置いて、また女の來やうの遲いのを責めた。

「まあ、來い早々其樣なことをいふのはお止しなさい。……おゝ寒かつた。ああ好い物がある。それを下さい。……お腹がすいた。」

男の背後にはバナヽが散かつてゐた。男は默つてそれを取上げて皮を剝いて女の口元に差出してやつた。

「寒いわけさ。お腹もすくさ。だから早く來るやうに電話でも、さういつたぢやないか。」

女は男の手に持つたバナヽを一と口食つて、

「あれから電話を掛けてから、お湯に行つて頭髮を洗つて、結つたりしてゐる內に十二時四十分の間に合なくなつたの。」

「ぢや此方のステーションから自動車で來ればよかつた。私は如何なに心配したかしれやしない。俥ぢや此樣なに遲くなるから、お前が心細いだらうと思つて……寒かつたらう。」

「えゝ、寒かつたわ。おゝ寒い。」

「寒いさ……これからお湯に行かう。いゝお湯だよ。」
眞島は、有馬に來た始めから、少しも早く女を呼んで、好い溫泉に入れて、喜ぶ女を見たかつたのである。彼れは肉慾の爲め、戀愛の爲に女を愛するといふよりも、唯女が可憐で堪らないのである。彼れは、此の可憐なる者を强ひて求め得て、その力によつて、自分の生活に飽いた心を引立てやうとさへ思つてゐるのである。
さういつて溫泉に行くことを急いだ。
「まあお待ちなさい。もう幾許遲くなつたつて構はない。煙草を一つ吸つてから。」
眞島は待遠しさうに、女の顏形を見守りながら、
「お前どうして彼方の袷の方の羽織を着て來なかつたの。その單衣羽織はもう汚れてゐるぢやないか、もう有馬ぢや袷を着てゐるよ。」
「さうあなたのやうにいつたつて、大阪ぢやまだ來月にならにや袷を着やしない。それに自家ぢや離れた處の土藏に仕舞つてあるから、一寸出して貰ふといふ譯に行きやしない。」
眞島は、女が着て來た衣類のことまで氣にしてゐた。それは彼れが女を愛するの餘りで恰ど母親が娘の着物のことに世話を燒くのと同じ心であつた。
「兎に角湯に行つて溫まらう。」またしても湯を急いで立つた。

やがて二人は、石段ばかりで出來てゐる細い路地のやうな道を足で探りながら降りて行つた。眞島は先きに立つて、
「氣を附けないと危ないよ。……手をお出し。」手を取つて降りて行つた。
「逐々奧さんを連れて來たよ。」眞島は湯番をしてゐる顏馴染のおかみさんに笑談をいつた。眞島が屢々一人で高等溫泉に來るのでいつも、
「あなた、奧さんと二人でないとつまりまんわ。」と、おかみさんはいつた。眞島も入れ込みの溫泉と違つて、毎時も浴槽の緣を波々と流れ落ちてゐる湯の中に一人きりの體を氣樂に浸しながら、一人で入つてゐるのを勿體ないやうにもまた物足らなくも思ふのであつた。
おかみさんは、それを見て、上り湯に新しく炭をついでくれたり、其處らを雜巾で拭いたりして、「ごゆつくり。」といつて扉を閉めて出て行つた。
眞島は、急いで着物を脫いで、湯殿に下りるが早いか浴槽の中にづぶ〳〵と身を沈めた。
「おゝ好い湯だ!!! 早くお入り。」
女も湯殿に下りて來た。
「眞個だ。あゝ、好いわねえ!!!」お夏は顏中に笑ひを表はした。
「好いだらう。だから、あんなに遠からお出で〳〵といつてゐたんぢやないか。お前と斯うして一緒に入りたかつたんだよ。……途中で寒かつたらう。もつともつとずうつと頸まで沈めてよく暖まらないといけない。」眞島は、兩手で女の肩先を押へて湯の中に深く沈めた。

「誰も來やしなくつて?」
「誰も來やしないよ。買ひ切りになつてゐるんだもの。錠を下さうと思へば下されるやうになつてゐるんだ。……」
「よく暖まつて行きませうねえ。」
「あゝ、長く入つて行かう。もう落着いたものだ。眞個に今日は待ち勞れたよ。」
眞島は、長い間の待ち遠しさやら寂しさやらを、この一時に取返したやうに、體中が生活の歡びに充滿たやうに感じた。
「今夜こそお互に按摩のもみつこをしませうねえ。」
「あゝ。それよりお前を流してやらう。」
「あゝ、流して頂戴。わたしも、あなたを流して上げるわ。……今晩此處で長く遊んで行きませう。」
「溫泉だから何度も上つては入ると好いんだよ。」
湯に暖められた女の白い肌が薄く紅を潮して來た。多い頭髮が黑く濡れて襟脚の肩の上に恰度烏蛇を見たやうに幾筋となく這ひ亂れた。
「さあ、それに腰をおかけ。流すから。」眞島は女の背後に廻つて、石鹼を手に塗り取つて、それをぬる〳〵と女の肌に一面に塗つた。さうして手拭を絞つて擦つた。頭髮を搔き上げて頸筋から乳の邊まで念を入れて磨いた。手拭を疊んで肩に載せて、三助がするやうに、叩いて、その後へ溫い湯を、どつさり流し掛けた。
「おゝ、好い心持ちだ。どうも有難う。さあ、こんだアあなたのを流して上げませう。」
「あゝ、まあ一遍入つて溫まつてから。」男は湯に漬りながら仰向きに脚を伸して、浴槽の緣に頭を載せた。さうして心地よさゝうに女のすることを見てゐる。
女は、小さく疊んだ手拭に白い泡が垂れるほど石鹼を塗つて、一心不亂に顏から襟頸のあたりを磨いてゐる。
「お前は湯が長いんだつたねえ。」
「えゝ、毎時も二時間かゝるの。お湯屋で屢く、「千代奴はんお辨當持つて來ませうか。」といふわ。」
「今晩こそいくら長く入つてゐても構はない。」
女は自分で暫らく氣の濟むやうに磨き終ると、
「さあ、一つ入つて……」といひながら湯に漬つた。
磨き立てた顏が湯氣の中に、電燈の光を浴びて艶々と薄紅に輝いてゐる。眞島にはこの女の露邪氣な心のないのが何よりも氣に入つてゐるのである。女は惡毒氣のなさゝうな口を緩く開いて、深く湯の中に沈みながら、手拭で湯をしやくつ

ては、顔に流しかけてゐる。さも〳〵活き効のある、名狀し難い刹那の快感に五體を委ねてゐるものゝやうである。
「寒かつたのが暖まつたらう。」
「暖まつてよ。ほんとに好いわねえ。」
男も流して貰つて、二人はゆつくり溫泉から出て戻つた。九月の末の溫泉町の夜は寂し過ぎるほど靜かである。其處らに立ち並んだ湯宿の大きな別莊にもうあまり浴客はないと思はれて、靜寂とした二階三階の部室々々には電燈の光が空しく冴えて見えるばかりである。男女は、その寂しい夜を却つて自分達獨りの世界のやうに思ひ做しながら險しい石段の道を、また手を引いて探り〳〵歩いた。
歸つて來ると、もう鳥を煮る支度がすつかり出來てゐて、炭火がぽつ〳〵青い火焰をあげて熾つてゐる。松茸の新鮮な香氣が、そことなく部屋の中に漂うてゐる。
眞島は、女から濡れ手拭を受取つて自分のと一緒に例の處に始末して置いて、火鉢の傍に寛坐ぎながら、
「どうだ？ 酒をいはうか。」二人とも酒はあまり飮けないのである。
「えゝ、いつても可いわねえ。だけど一寸手を拍くのを待つて頂戴。私、一寸顏を造るから。」
女は、先刻湯に立つて行く時に、男から鏡臺も此處にあるよ。」と敎へられたその鏡臺を違ひ棚から取り下して、何よりも先きに顏の粉飾に掛つた。羽二重の小さい化粧袋を取り出して、鏡の表を睨むやうな眼附をしながら手早く眉黛をはいて、薄つすり白粉を彩つた。
「さあ、もうこれで好いの。」
道具を形附けて火鉢の向側に寄つて、
「わたい煮るわ。」といつて鳥を煮かゝつたが、「あゝ、忘れてゐた海苔卷きを持つて來たのを。」といつて小包みの中からそれを取出した。
「あなた、お上んなさい。今日虎どんに買つて來て貰つたの。」
二人とも海苔卷きが好きであつた。
「あなた、木の葉が好きだから、木の葉を持つて來ようと思つたけれど、木の葉は持つて來られなかつた。」
溫順しい女だけれど、時々罪のない笑談をよくいつた。
「木の葉は持つて來られやしない。」
落着いた長い夕飯が漸く濟むと、
「あなた、手紙を書いて頂戴。津の國屋のおかあちやんと虎どんとに手紙を遣つて置かないといけない。」
二人は、お茶屋の主婦に、よく、千代奴を一人で寄越してくれたの、無事に着いて、今夜は他から貰ひの掛つて來るうるさいこともなく、今二人一緒に湯に入つて來た處だの。今夜こそは二人きり夫婦らしく寢るだの。といふやうな笑談まじりに、三晩泊つて行く、二十八日は、朝早く歸る。花の事

は千代奴が歸つてから委細話しをするといふやうな用事を相談しい〳〵書いた。そこへ
「もうお床をのべませうか。若い女衆が襖を明けてしとやかに伺つた。
「あゝ、のべて貰ひませう。」
翌朝は、二人とも七時頃に一度目を覺ましたけれど、小用に行つて來てまた寢た。
「斯樣な時に安心してよく寢な！ 私はお前を休ます爲に呼んだんだよ。」
「嬉しいわ！ あなたの深切は忘れないわ。」
それから本當に起きたのは、十時を少し過ぎてゐた。朝飯を濟ましてからもそのまゝ其處に根が生えたやうに向ひ合つて飽きもせず話し耽けつてゐた。先達つて中續けて瑠璃色に晴れ渡つてゐた空が今日は濕つぽく曇つた。
「散歩に出たいのだが、曇つてゝ厭だなあ。」
眞島は退屈して立つて障子を明けた。泉水を取卷いた十坪ばかりの庭樹の彼方には枝振りの面白い松の老樹の密生した形の好い山が、每時見ても眼を覺ますやうに聳つてゐる。
「散歩に出なくつても好いわ。此處にかうしてゐてもいゝ。」
と、いつてゐたが、また、
「出て見ませうか。」と女が調子づいたので起ち上つた。
「私、このまゝで行くわ。」女は派手な貸浴衣の上に被つてゐた宿の褞袍を脫いで、その上に絽縮緬の黑羽織を着ようとした。
「そんな風をして歩くのはよしてくれ。矢張り着物を着て行け。」
「帶をするのが大變なんだもの。あなた締めるのを手傳つてくれて。」
「手傳つてやるさ。」
「さう。ちやさうする。」
「やがて折角出掛けたと思ふと、すぐ雨が降つて來た。
「こりやいけない。もう引返へさう。さうして自家で栗を煮て食べようよ。」
「あゝ、さうしませう。それがいゝわ。」
八百屋から栗を取つて來さして、自分達で煮た。女は話しながら、それを剝いては男の口に持つて行つてやつた。男は女の望み通りに『博多小女郎浪枕』を讀んで、六ケ敷い處を說いて聽かした。
「三月に延次郎の毛剃を見たわ。……よかつたわ。……宗七が死んで小女郎はどうするの！ もう一生何處へも嫁に行かないの？」
「さあ、どうするか。小女郎はさうするんだらう。お前、この後私と一緒になつて、もし私が早く死んだらどうする？」
「私、もう一生に定つた夫は一人で澤山だわ。」

「私が生きてゐる間だけさうなのだらう。」

「それより、あなた、あの單衣をどうして？」

「あのまゝさ。」

「今此處に持つて來てゐるの？」

眞島が、この夏東京に歸つた時、自分のと女のを二反買つて來た縮の浴衣を大阪に着いた晩にあなたのも私持つて行つて置いて暇の自分に縫つて置いて上げませうといつたのを、いゝからといつて自分のだけは、反のまゝ彼れの體と一緒に方々持つて廻つてゐたのである。

「出してお見せなさい。」

眞島は押し入れの荷物の中から、それを取出した。

「いゝ柄だわねえ。私此處にゐる間に縫つて置きませうか。」

「こゝの綴ぢ糸だけ切つてもよくつて。」

女は、反を長く解いて自分の腕に掛けて首を傾けて見廻したりしてゐた。

「此處ぢや縫ふ間はないよ。どうせ裁縫の達者な人だから。……お前と東京に歸るまでそのまゝにして置かう。いくら遲くなつても來年の夏の間には六百圓を拵へるよ。」

「本當にさうして頂戴。私も精を出して働ぐわ。その時分には私の方のが四百圓ぐらゐにはなるから。」

千代奴の身の代金は千圓であつた。

十疊だの十二疊だの、その他小間を入れて七間も八間もある。廣揚な建築の別館には、二階の六疊に一人滯在の客がゐるきりで、他に客はなかつた。眞島の部室は、階下のずつと奧まつた八疊であつた。雨はざん／＼音を立てゝ降り續いてゐる。坐つたまゝ障子を一枚押すと、高く軒端まで達いた向の山の綠を背景にして雨が降つてゐるのが美しく眼に入る。銀灰色の空から何處ともなく落ちて來る雨がその山の頂點まで達くと、始めて白い細絲を長く引いてゐるのが見分けられる。

「あれ、あの雨を御覽。綺麗だなあ。山の靑い處へ降つてゐるから白く見える。」

眞島は一心に雨の色に見惚れた。

「いゝわねえ。かうしてゐて雨の音を聽いてゐると、安心な心持ちになつて來てよ。」

晩食は牛肉を誂へて置いて、相合傘を翳して溫泉に行つた。眞島は昨夜の寢不足やら運動不足の上に過度の飲食で終日氣怠い食もたれの心持ちがしてゐたのが、溫泉に漬つて來ると倦み疲れてゐた頭腦が、全然入れ換へたやうに輕くなつて、元氣づいた。

味の良い神戶の牛肉の夕飯も濟んだ。

「お腹がくちくなつた。何か聲を出して唄つて見よう。」

眞島は、さういつて坐り直つて、聞き覺えの唄の節やら淨

瑠璃の眞似をした。旅館に三味線があるのだけれど、わざと三味線などを彈かなかつた。

「私、一つ踊つて見ようか。」女はさういつて立ち上つて「夕ぐれ」と「秋の夜」とを祕密のやうにして踊つた。

「私、「時雨西行」が好きだ。お前の昨夕の身の上話しを聽いて一層それが懷しくなつた。ねえ「アラうらやまし、わが身のうへ。ちゝはゝさへもしらなみの。よするきしべのかはふねを。とめてあふせの浪枕。世にもはかなき流れの身……」

眞島は、文句は覺えてゐるばかり、習つた節ではないのでそれが長唄の眞似にならうとも淨瑠璃の調子が混じらうとも構はなかつた。唯、自分で、その文章の前後に就いて感ずる心持ちに氣を入るやうな聲音に出して物悲しさうな調子で唄つた。

「ねえ。お前にもお母さんやお父さんがあつても、無いも同然なんだらう。私はそのお前の「父母さへも白波の、世にもはかなき流れの身」が可哀相だ。東京から遠く大阪へ流れて來て矢張り遊女になつてゐるのだ。」さう言つては、同じ處を幾度も繰返へした。

「私はまた西行法師が好きだ。「ゆくへさだめぬ雲水の／＼、月もろともに西へゆく。さいぎやう法師は家を出て、一所不住の法の身に、吉野の花や、さらしなの月もこゝろのまに／＼三十一字の歌修行」……」

眞島は、とう／＼立つて行つて、荷物の中から旅にも忘れず携へて來てゐる長唄の稽古本を取り出した。さうして處々を意の赴くまゝに聲を上げて唄つた。

女は、その物悲しげな聲色に眼を潤まして聽いてゐた。

冷熱

朝湯から戻つてくると、その女は突如に來てゐた。突如と云つてもう此間から來ることにはなつてゐたのだが、電報くらひは打つて置いて來るだらうと思つてゐたものだから、ちよいとおどろかされた。

私が湯から石鹼と手拭とをさげて入口から入つて來ると、宿の老爺は通り庭に向ひ薄暗い茶の間の長火鉢の向側からふいと聲を掛けて、

「來やはりましたで。」

といふ。もう此の間から、ひよつとしたら東京から女客が來るかも知れぬと云つてゐたので宿でも女が來ると、これだなと思つて湯から歸るまで火鉢の傍に待たして置いたものである。宿の主人にさういはれて見ると、火鉢の此方側に向いて坐つてゐる女の形が暗い處に見えてゐる。

女がかうして東京から遙々京都三界まで百三十里の道を一と夜の汽車に搖られて私の處にやつて來たについては少し前に溯つて話さねばならぬ。

それはたしか三月の初頃。私がもうその前の年からやがて一年ばかり京都に漂泊してある一人の女の事に執着して朝から晩まで憂鬱に閉されて日を送つてゐる眞中であつた。ふと一封の手紙が舞込んで來た。それは筆蹟見にくからぬた。たしかに女の手紙で、東京は神田區××町何の×子と名を誌されてゐる。消印も明かに東京神田の文字が讀まれた。可なり長い手紙で、先づ書き出しはだれでも始めて未見の人に送る詫びの文句が述べてあつて、段々進んでゆくに從つて手紙の意味はかねて私の物を愛讀し、そして私をどんなにか深く思つてゐてくれるといふやうなことを云つてゐる。

それで、私は、先はどんな人間か分らぬが一とゝほり惡い心持ちでは決してその手紙を讀まなかつたが、いづれかういふやうな手紙を越す女にこれまで餘り好い女のあつた例のないのを長い間の經驗で知つてゐるので、私はそんな手紙を見ても初心らしう心の飛び立つやうな嬉しさを感じなかつた。それよりも私には今氣が狂つたやうになつて顏を見ることさへ叶はぬ京都の女の方にどれだけ深い愛着があつたか知れない。そのために私はその手紙もたゞ冷淡に披いて見たので、しかし默つて置くのも何だか氣の毒のやうに思はれたから街へ散歩に出たついでに一枚繪葉書を買つて來て簡單な、誰が讀んでも差支へないやうな文句を書いて送つた。

それつきり一と月近くも、彼方からも此方から手紙も葉書も交換しなかつた。すると、ふと又一と月ほどしてその女は房州の方から繪葉書をよこして、自分は今少し身體が惡くつて此方に來てゐると簡單に書いて來た。そして、けれども近いうちに東京に歸るから、もしお手紙など下さるならばやつぱり東京の方にあてゝ越していただきたいと書きそへてゐた。

私には、それでも格別の興味は呼び覺まされなかつたが一方京都の女の話が段々惡くこぢれて、いひやうのないほど胸がくさ〳〵してゐた最中でもあり、祇園町のほとりに住んでゐて、朝夕に化粧の女を見てゐながら、もう少しもそつちの方には興味もなくなつてゐたし、繪葉書か手紙くらゐで顏を見ぬ女と話しをするのも亦一興と思つて、それから時々手紙や繪葉書を送つてゐた。手紙の交換の度重なるごとに女も私も興味が可なり高潮して來た。手紙では、迂闊信じられないが、なか〳〵巧いことを云つてゐる。小學校の時から三崎町の佛英和學校に學んでゐた。父親が數年前に亡くなり、母親もつゞいて死くなつたので、事情があつて今は母方の祖父母と一緒に暮してゐる。生まれた家は日本橋のある木綿問屋であつたが、父はその失敗の爲にそれが原因で病が重くなつた。腹ちがひの兄は商人の家に似ず自分が好きで軍人になつて今大尉である。自分と同じ腹の弟は慶應大學にいつてゐる。といふやうなことを書いてゐる。筆蹟もいふ事もなか〳〵はき〳〵してゐるので、その手紙だけを讀んでゐると、どんな好い女かと思はれるくらゐである。

それで貴女は年は幾つか、寫眞を一枚送つてくれないかと云つてやると、年は二十六になる。寫眞は嫌ひで撮らぬから今手許にないと云つて來た。それから段々手紙でいろんなことを云つてゐる間に、女は柳橋に少しの間藝者をしてゐたことがあるといふことを洩して來た。柳橋で藝者をしてゐたのか。それでは今まで手紙で想像してゐたのとは此方の見當が大分違つて來る。併し柳橋で藝者をしてゐたと云へば、たゞの素人よりも一層好いやうに思はれる。藝者をしてゐた者に此のくらゐ達者に文字の書ける女はあまり見たことがない。藝者美があつて、しかも此のくらゐの教育があつて、それで年が二十六で勿論三味線が好きで且つ彈けて、いつも日本髷に結つて半襟のかゝつた着物を着てゐるといふのは、此方の趣味が大方さうであらうと、調子を合はして來てゐるのであらうと思はれるが、これで云ふことにもし嘘がなかつたならば、顏さへ好かつたら、あとはどうでも可い。寫眞がぜひ見

たいと重ねて云つてやつても自分は寫眞うつりが悪いから、寫眞で判斷せられることを好まないと云つて、どうしても寫眞は越さない。

そのうち四月が來て京都の街は美しい柳や櫻に彩取られ、圓山や四條通りや京極の夜歩きの樂しい頃になつた　夏が東京の夜の街を歩くのに好ければ、春は京の夜の街を歩くのに好い。私は「どうです？　京都に遊びに來ませんか。」と、その女に云つてやつた。すると女は遊びに行つてもよいが、色々委しい事情を話しゝなければ分らないけれど、實は半歳ばかり病氣をしてゐてその時に持つてゐた頭の物や身に着ける物をすつかり無くしてしまひ、着てゆく着物がないので、ゆかれないと云つて來た。

「着物なんかどうでもいゝぢやないですか。それは、私もそんな物には趣味のある方だから、まして女が初めて見る人のところへ、よくない身裝をして會ひにゆくのに氣の進まぬのはよく分つてゐますが、しかし着物などはまた出來る時がある　ぜひおいでなさい。何と云つても春は京都がよいのです。」

と云つてやつた。すると女も氣が彈んだものと思はれて、ほゞ一週間の後にお伺ひすると、日まで云つて來た。

「何か召上る物が東京に御入用の品がおありになるなら御遠慮なく仰有つて下さい。あれを持つてまゐりませうか。」

と云つて、私が平素好んでゐる食物をよく知つてゐると思はれて、そんな物のことをも書いてゐた。

それから一週間ばかりの間早く日の經つのを待ちながらその女の容貌や姿をいろ／＼に想像に描いてゐた。拔けるほどの美人でないまでも柳橋から出てゐたことがあるといふのだから、どんなに安く積つてもまんざら棄てた女でもあるまい。いくら悪い女でも多少は磨かれた藝者美を持つてゐるに違ひない。顏は平顏だらうか、中高であらうか背恰好はどうであらうか、肉付きはどんなだらう。頭髪はどうだらう？　手紙の模樣では病氣といふのがどうも呼吸器に關係を持つてゐるらしいところを見ると、これは屹度肺に異狀のある女だな。しかも肺病ぢやどんな好い女であつても引下らなければならぬ。しかも肺がいけなくつて縹緻の拔群の女はよくあるから或はそんな女かも知れない。假ひそんな病氣があつてもよい、たゞ會つて話してみるだけならば縹緻がいゝと云ふだけで、それだけの興味はある。

どんな女が來るだらう？

一週間は待つほどもなく過ぎた。女が此の次の木曜日に立つと云つて來た日は昨日である。多分夜の汽車に乘つたとすれば昨日乘つたにちがひない。それならば、昨夜遲くか、今朝あたりもう電報くらゐ着かねばならぬ筈だが電報も來ない。もし電報を打たぬにしてももう自分が京都に來着く時間

である。東京を夜發車する汽車は幾列車もあるから、そのどれかに乘つたとすれば朝から午後零時頃までの間には必ず京都に着くわけである。さう思つて私はその日は朝から時間の經過するのを待ちわびてゐた。が午後の一時が來ても二時が來ても到頭電報も來ねば、女の姿も見えなかつた。そして漸くその翌日の四月の二十二日になつて手紙が來た。

昨日立たうと思つてその前日から買物などを調べて、夕方風呂に入つて歸りにまた一寸買ひ物をするため廻道をしたゝめにその夜から又少し風邪氣で三十八度ばかりの熱が出て、今あるに效なき自分の身を喞ちながら物憂く氣怠い氣分で徒らに焦燥して寢床に横はつてゐる。東京はもう幾日もつゞいてひどい嵐で南風に煽られて、かたん／＼と音をたてゝゐる庭の木戸の音がうるさく病に惱む神經を刺戟してゐます。私の京都ゆきは實行不可能となるかも知れぬ。といふやうなことを書いてゐる。

その頃自分も一寸山陰道の方に旅行して來る豫定であつたから女が來られなくなつたのは　それでもよいと思つてゐた。しかし何となく寂しく物足りなかつた。四月に入つてからずつと續いてゐた長閑な好晴が、昨夜からたうとう雨になつて、陽氣がまた冬にあと戻りでもしたやうに寒くなつた。

東山の夜櫻はもうとうのむかしに散つてしまひ、嵐山の花の噂も京の人の口に絕えて、春はいつしか忘れたやうに過ぎてしまつた。暫く遠ざけてゐた火鉢を擁しながら座敷の中から閉め切つた障子の硝子越しに庭の外を眺めてゐると、しとしとと降りそゝいでゐる春雨は淀み流るゝ疏水の水を白く罩め、向うの岸に立ちつゞいた柳と櫻の若葉が雨に搖れそぼちてゐる。その彼方には鴨川の河原の芝生が眞青に春雨に濡れて先斗町の妓樓は濛々たる雨の脚に煙つてゐる。春雨は一日小休みもなくしと／＼と降りつゞいてゐる。油を流したやうな疏水の水は春雨のために黄濁に變じて渦を卷いて流れてゆく。櫻の花片が漂ひ流れてゆくのが見える。私はぢつと火鉢の緣に肱を突いて靜かに降り罩めてゐる雨の日を座敷の中に一日靜としてゐた。先日から慵いやうに照り付けてゐた陽氣が俄に春雨のために冷氣になつて、氣怠い頭が蘇つたやうに頭の心まで澄み透つて來た。何となくしんみりとした女の話し對手がほしいやうな日である。

私はそんなことを書いてその女の處に手紙を出した。

四五日山陰の方の旅から戻つて來ると、留守の間に女から手紙が來てゐた。それは絕望したやうな手紙で京都ゆきは殘念ながら中止することにした。その代りに來月になつたら神戸から藝者に出ることにして、東京の方の紹介者の方へ話を進めやうとしてゐる。今は京都に行かれないけれども神戸に行つたら何時でも思ふまゝにお目にかゝることが出來る。といふやうなことを書いてゐる。

その手紙をみると、私は、今までそれほどに思はなかつたその女が俄に惜しくなつて來た。今自由な身體で居れば、もしその女が自分の好きな女であつた場合に、向うからあんなに云つて來てゐるのだからどうにでも出來るが、一旦身體に大金を掛けて再び藝者になつてしまつたが最後もうどうすることも出來ない。どんな女か藝者に出る前にともかくも是非とも一度會つてみたくなつた。それでその手紙を見ると急いで手紙を遣つた。

藝者に出るのは一寸待つてくれ。ともかくも一遍會ひたい。それとも自前で出て、止さうと思ふ時にすぐ止されるやうな條件で出るならばよいが、前借をして出るやうだつたら、暫く待つてもらひたい。さう云つてやると　向うから又行き違ひに手紙が來て、いよ〳〵神戸から出ることにした、と云つて來た。

その手紙をみると、私はもう靜としてゐられなくなつて、此度は早速電報を打つた。

ゲイシヤニナルナライゴブンツウヤメル

と劇しいことを書いてやつた。

すると、その日のうちに返電を越して、

ヤメニスルフミニクワシ

と、いつて來た。そして後から委しい手紙を越して、縷々と目下の自分の悲境を述べて來た。神戸から出るとすれば無論千や千五百の前借をしなければならぬ。長い間の病氣で今は不斷着のほかに身に着ける物とては一枚もなくしてゐる。そんな見窄らしい身裝をして戀人に逢ふのは、自分は死ぬよりもつらい。神戸の話さへきまれば一とゝほりの着る物も出來るから、さうした上でお目にかゝりませうと思つたからいつそまた藝者にでもならうかと思つたのですが、貴方が、藝者になるのは厭だと仰有れば、もうこれきり再びならうとは申しません。私はもう貴方のものです。貴方のお好きなやうにしますから、どうぞ文通をしないなぞと仰有らないで今までどほりに手紙を下さいまし。

と云つてゐる。これが此方も好きで堪らない——譬へば京都の女のやうな女からそんなことをいはれたのだとすると、もう生命までも擲げ出すことを敢て厭はぬのであるが、それが、どんな女か見も知らぬ女からそんなことを云はれるのだから、何と感じてよいやら一向分らない。嬉しいと思つていゝのやら、嬉しく思つては不可ないのやら、私は擽ぐられるやうな妙な矛盾を感じないわけにいかない。

「それで、着て來る着物がないために藝者に身を賣らうとする貴女の心のうちはよく解つてゐるが、それはつまらないことだ。たゞそれだけの爲に神戸に來やうとしたのならば思ひ止まんなさい。それにあなたは長い病氣といふぢやないか、で、甚だ失禮ながら若し此方に來る旅費などについて入用で

あつたら、汽車賃くらゐは心配するから遠慮なくさういつてお越しなさい。

さういつて遣ると、それでもまだ着物がどうだの、見つともないのといつて逡巡してゐる樣子であつたが、さうなると此方はます〳〵女が見たくなつた。女は尙ほ來ることを決しかねてゐながら手紙はいつも委しいことを書いて、自分の目下の境遇だの、日々どうして日を暮してゐるといふやうなことを細かに書いてゐる。どうかすると一日の中に手紙が二本も來ることがある。それによつてみると、家には母方の祖父母と自分と弟と少女とで、祖父は盆栽が好きで中には何十年といふ丹精をしてゐる鉢などもある。彼女は身體の良い時には祖父の手傳をして盆栽に水を灌いだり、それから弟と仲間で高い金を出して買つた何とか種といふ小狗がゐる。それを可愛がつてゐるのが何より樂しみだ。弟と自分とは大の仲好しで、父親のない二人は、どうかすると、親の事をいひ出して二人で泣いてゐる。此の間も弟が絹の羽織を買つて來て、姉さん明日から着るんだから今夜中に仕立てゝくれ、僕も一緒に起きてゐるからといつて、傍に付いてゐて離れないのでたうとう夜の頃二時まで二人で話をしながら縫ひ上げてしまつた。弟は此の頃自分が貴方と手紙を交換してゐることを知つてゐて、

「姉さん、君は××××といふ人を知つてゐるのかい。」と、いつて訊きますから、

「そんな人は知らないわ。」といふと、

「でも、その人から此の頃よく手紙が來るぢやないか。」

「手紙は來るけれど、その人は知らない。」

といひますと。

「姉さんも隨分お轉婆だな。知らない人に手紙を遣つたりなぞして、」

と冷かすやうにいつたので、私は縫ひ物をしながら、自分でぽつと頰の赤くなつたのを知つて、默つて俛首いたまゝ針を動かしてゐましたら、弟は私が氣の毒になつたと思はれて、とり做すやうに、

「でも姉さんはえらい。」といひます。

「何がえらいの。」といひますと、

「小說家なんかと手紙を交換したりなどして。」

「小說家と手紙を交換するのがえらいの。」

「でも、姉さん君は馬鹿だから、とても小說家の奧さんにはなれないよ。」と、いひます。

「私、なにも小說家の奧さんになるつもりでゐやしないわ。」

「さう、そんならいゝけれど。」

弟はそんなことを申してゐるくらゐですから私が貴方と手紙の交換をしてゐるのをよく知つてゐても決して不快には思つてゐません。けれども、もうさう知れてしまつた以上は、

弟の手前、京都に行くといへば、必ず貴方に會ひにゆくことにきまつてゐますから、極りが惡くつて、とても京都に行くとは申されません。それで私は近いうちに又大磯か鎌倉あたりへ轉地しようと思つてゐますから、そこへ行くことにして家を出掛けます。そして一晩轉宅先きへ泊つてその翌日直ぐ立つてそちらにまゐります。そして誠に厚皮しうございますけれど、お言葉に甘えて旅費をお送り下さいますなら有難うぞんじます。ほんとにお恥しうございます。私の窮境はいづれお目にかゝつた上で委しく聞いていたゞきます。

それから尙ほ二三度も兩方で手紙を往復した上で私は電報爲替で金を參拾圓送つてやつた。……自分はよく、有りもしない金を女にやる男だなと思ひながら。

それが一昨日の午だつたから　おそくも今朝あたりは何とか云つて電報を寄越すだらうと思ひながら實はもう昨日から心待ちにしてゐたのであつた。

どんな女が來るであらう？

それを幾度となく繰返へして想像してゐた。美人であつたら、全く掘り出し物だが、そんな美人でなくつてもよい。せめて感じの惡くさへない女であれば、時にとつての慰めになる。藝者にも隨分醜い女があるけれど、まさか神樂坂や富士見町と違つて、女のいふことが眞實ならば假りにも柳橋から出てゐた者に、さうまづい女はない筈だ。さう思つて、自分の慾目から、きつと相當な女であるに違ひないと思つてゐた。そして來たらば、連れて東山も歩いてみよう。四條通りや祇園町を歩いてみよう……と、いろ〳〵に空想して樂しんでゐた。

宿の老爺に「來やはりましたで。」と云はれて、はつと氣が付いてみると、長火鉢の方を向いて、こちらに背を向けてゐる女がそれである。此の場合、自分の二ケ月ばかりの夢が正夢であつたか、逆さまの夢であつたか、ただ女が此方をちらつと顏を振向けたが最後卽座に自分の運命は決するのである。

「あゝさうですか。」私がいふと、老爺は女に、

「かへらはりました。」と顏で敎へた。と、その機會に女は身體は坐つたまゝ顏だけ半分此方に振向けた。私はそれを一瞥するや否や忽ち言ひやうのない失望の念が、舌打ちをするやうな忌々しさとゝもに胸に込上げて來て、好い心地の朝湯の後の空腹加減が、胃の腑の中へまづい物を一杯詰め込んだかと思ふやうな嘔吐をさへ感じた　それはたつた一秒時の感覺であつたが、もうその感覺の事實を取消すことは出來ない。

それで私は、たゞ、さり氣なく言葉を發した。

「あゝさうですか。どうぞ此方へ。」

といひ殘してそのまゝ、細長い暗い通り庭を傳うて、中庭からまだずつと奧の、疏水の流れに面した自分の座敷の方に歸つて來た。それが、若し一見して好い印象を感じた女であつたならば茶の間でまだ何とか云ふべき言葉があつたであらうが、空想と事實とは常に懸隔のあることを何斯につけて飽きるほど經驗してゐる自分の事だから、最初から餘り好い期待を持つてゐなかつたのだが、これはまた誰かゞ故意に私を弄んでゐるのではないかと思ふほど、空想を裏切るも裏切るも、あまりに酷い裏切りやうである。これが若し人格と意思とを備へた人間のしたことであるならば、私はどんな徒戲者に向つて憤怒したかも知れぬが、誰の所爲でもない、やつぱり自分の空想がしたのであるから、何處へ尻の持つて行きやうもない。さう思ふと、尙ほ更ら自分の空想の爲めに甘々と欺かれてゐたことが返すがへすも腹が立つた。そしてそんな空想を產む自分の愚かしさが、いやといふほど張り飛ばしてやりたいくらゐ憎くなつた。けれども餘りと云へば自然の人を愚弄するのもちと酷過ぎる。初から大した期待を置いてゐたわけぢやないのだから、假ひ美人でないまでも、少しは蟲の好く女ででもあることか、此方を振り向いたところを一と目見たゞけで十分に分つてゐる。

先達つての手紙にも、自分は背が五尺もあると云つてゐたが、背の高いにも色々あつて、姿がよくつて高いのならば立派だが、不恰好に高い、のつぽうぢや堪らないと思つてゐると、その惡い方の想像は正しく的中してゐた。丸髷に結つて、顏は肋膜炎を患つてゐたせいか血氣も脂氣もなく瘦せてゐる。額が廣く拔け上つて、どこに一つ甘味の點が見付からない。

私がさつ〳〵と通り庭を入つて來たので、宿の老爺に、ずつと庭を奧に行くやうに敎へられて　女は後からやつて來たが、私は一足先に部屋に戾つて手拭と石鹼とをいつもの所に置くと、机を背にして此方向きに坐つて行儀を正して女を待つてゐた。出來ることなら、もう此の上改めて顏を見る必要もないから、卽座に東京に追ひ歸したいと思つてゐると、女はひよろ高い背恰好をして私の座敷に上つて來た。手紙では隨分打融けて馴々しい口を利き合つてゐたから、これが若しせめて豫想の範圍の最下點くらゐの處であつたならば、もう何も斯も手紙で二人の話は成就してゐるわけなのだが、こゝで手紙に通はしてゐるやうな氣分を迂濶に見せては飛んでもないことになる。

女はそこへ上つて來て向うに坐りながら嬌羞を帶びたといふよりも儀容の整はない態度で崩折れるやうに俯向いて簡單に一と口挨拶らしいことを云つた。

「あゝ、さうですか。遠方の處をよくやつて來ましたねえ。」と、私は云つてゐたが、見ると手荷物らしいものは化粧袋一つも持ち添へてゐないし、着物はもういい加減色の褪めた薄

い物の羽織にくすんだセルの單衣を着てゐるが、身體のどこを探しても女らしい艶を持つたところがない。身體が不恰好に大きくつて手が長いせいか、その中古の羽織の裄が馬鹿に短く見える。
「あなたは、何にも荷物はないんですか。」
「え、、それを汽車の中で取り替へられたのです。」
女のいふことによると、京都に來るので一昨日新しいバスケットを一つ買つて　その中に着更へを二三枚と、土産物だの化粧袋や常に服用してゐる藥などを入れてあつたのを昨夜寢臺に乘る時にボーイが後からそれを持つて來て傍に置いて行つてくれたのを、用がなかつたのでそのまゝにして置いて、今朝になつて眼を覺まして顏を洗はうと思つて開けてみると何時の間にかバスケットが違つてゐた。中には何一つ入つてゐない、ただ古新聞と夏蜜柑の食べさしがあるばかりであつた。それで京都驛で下りて驛りの係員に掛合つて見たがよく調べて見ますと云つてゐたけれど、故意に取り替へたものらしいから到底戻りつこはないだらうと、女は諦めたやうにいつて悄然としてゐる。
「それは飛んだ災難です。」と、いつたが、私は、女の無神經なのか、放膽なのか、少し野放圖なのに呆れてゐた。病身でもあるのだから寢臺に乘るのを敢て贅澤といふわけではないが、女の一人旅ならもつと、女氣の細心に手荷物や身のまはりの持ち物のことなどに必要以上の氣を使つてこそ、女らしいのに、自分が寢臺に入つたあとからボーイが持つた來たバスケットをよく調べても見ずそのまゝ翌朝までぐつすり眠りこけてゐたといふのが、もう私の、女性に要求した趣味に反いてゐる。
「しかしそれは貴女の不注意でもある。」
私は重々事が豫期と反して來たので何か當り付けるものがあるならば、八ツ當りにあたりつけたいくらゐに癇癪が起つて仕樣がないのを、凝と堪へながら、さういつた。
「え、、私がいけなかつたのです。一度バスケットを調べて見ればよかつたの。」
「調べてみればよかつたたつて。私なぞは寢臺に寢てゐても枕頭か足の處へ「バスケット」位の物なら上げて置いて寢る。それにしてもよくも貴女は寢過しに寢られたものだなあ。」
私は腹の中では女を嘲るやうにいつた。
「いゝえ、それでよくは眠れなかつたの。」
「眠れなければ尙ほ更ら所在なさに夜中にバスケットくらゐ開けてみるくらゐの事はしさうなものだがなあ。」隨分間の拔けた女だなあと思ふと、もう片時も傍に置いてその女を見てゐるのさへ苦痛になつて來た。丁度そんな手荷物を紛失したのを好い口實にしてなるべく卽座に東京へ追ひ返へしてやらうと思つて、

「男だつてそんな事があつては不便で困るのに、況して女が手まはりの物を失くしては困るでせう。折角來たのだから、そんな事がなければ五六日京都で遊んで行つたら好いと思つてお招きしたのですけれど、今日これから直ぐと云つては疲れてゐるでせうから、今晩か明日の朝の急行で一應東京へ引返へしたら、どうです。」
「え、歸ります。」
それから、女はともかく一寸お湯に入つて來るからといつて錢湯へいつた。それでも湯に入つて來ると、幾許か顏に艶を帶びて來た。
「湯に入るのからして女は色々小道具があるものですから、そんな物を失くしてすぐ何斯に差支へます。」
「さうでせうとも。ほんとに飛んだ事だ。」
「私、これから一寸停車場へ行つてもう一度訊いて來ます。」
「とても駄目でせうと思ふけれど。」
さういつて女は出ていつた。そして間もなくまた悄然として歸つて來た。
東京の人間には珍らしい川魚や精進料理のやうな物を取つて一緒に飯を食べてゐると、女は少しづゝ自分の來歴を語り出した。飯が濟んだら何處かへ歩いてみようかと、實は一緒に歩きたくはなかつたがお世辭にさういふと、
「私、京都はよく知つてゐるの。」と、いふ。
積々訊いてみると、去年の秋頃にも二た月ばかり一人で京都に來て宿屋暮しをしてゐたのである。それにも私は案外であつた。
彼女の云ふところによると、柳橋に出てゐたのは、十年ばかり前ほんの一と月にもならぬ間で、死んだ母親といふのは生母ではなかつた。生母といふのはやつぱり藝者で——その事は手紙でも云つてゐたが、——自分は生れて間もなく父親の本妻の方に引取られて、それを實の母親のやうに馴染んで育てられたのであつたが、父親もその育ての母親も亡くなつてからは祖父が彼女等を父親の家に置くことは好まないので月々何がしかの手當を給與して外に出してしまつた。生みの母は今でも柳橋にゐて母の妹と二人で金の掛らぬ藝者を一人二人抱へて暮してゐるがそことはあまり交通もしない。柳橋から出て間もなく馴染になつたのが茨城縣の資産家の息子で工學士であつた、その男に落籍されて五六年も根岸の方に住んでゐた。その旦那は溫順しい優しい立派な男であつたが、女が夜更かしをして骨牌遊びをする癖がいくら云つても止まぬのに終に愛想を盡して切れてしまつた。
「それは私が惡かつたの。」
さう云つて、女も自分のよくなかつたことを認めてゐる。それから此度關係した男は藏前を出たやつぱり若い工業家で、それには妻君も子供もあつたが、凄いほどの女たらしで、

その男には女も大分入れ上げたらしい口振りである。初は先の旦那から手切れ金を取る話の仲に入つてくれたのがさうなる原因で、先の旦那から貰つた根岸の家も數千と纏つた手切れの金も全部後の男の爲に無くしてしまつた。その男は今でも東京にゐるが、やつぱり思はしい職業がなくつて困つてゐる。京都へはまだ金の有る頃その男と一緒に來たこともあるし、去年の秋はその男に捨てられた失戀の惱みを忘れるために獨りで長い間京都に來てゐたのであつた。

女は、私がその頃思ひつめてゐた氣の狂つてゐる京都の女に比べて何處から見てもとても比べものにならぬ卑しい口元で行儀惡く、そんな身の上ばなしを何時までも饒舌つてゐた。私はその話を一つひとつ聞くごとにまだ見ない間に空想してゐた幻影が、それは又極端に破れてゆくばかりであつた。飯を食べる恰好からして、もうとても我慢が出來ないくらゐに厭になつて來た。

「さうですか。あなたは私の想像してゐたと全く反對してゐた。貴女の何處を探しても女らしさといふやうなところを發見しない。」

私はつけ〳〵云つてやつた。そしてこんな女に家や金をくれてやつたり、妻や子のあるのにこんな女と五六年も愛執に絡まれてゐたりした男の心が分らないやうに思はれた。それにも係らず、私自身有りもせぬ金を參拾圓送つてやつてわざわざ京都まで招き寄せたのが、假令顏を見ないでしたこと〻はいひながら其等の男達の愚を嗤へないと思つてひとり腹の中で自分を嘲つてゐた。女の誘惑にか〻るよりもまだ他の惡魔の誘惑にか〻る方がどのくらゐよいか知れぬと思つた。

そして仕舞には餘り無情に面と向つて私が女の批評をするので、女は涙ぐみながら、

「なにも貴方に、私そんなことを云はれなくつても好いぢやありませんか。私歸りますよ。先刻ステーションに行つた時に、よつぽどあのま〻直ぐ歸らうかと思つたけれど、それでは折角來たのに、貴方に濟まないと思つて……。」

「え〻、それは貴女にどんなことがあつても、私がそれを兎角云ふ道理はないんだが、あなたの話の樣子では少し放縦なやうだから、それで云つてみたまでだ。」

飯が濟んでから散歩に出やうかと腹にもないことを云つてみたが、女は疲れてゐるから外に出るより此處にゐて横にならしてもらうといふので放つて置いて、私は一人でいつものとほり東山の方を一とまはりして來た。その夜寢る時になつて、年取つた宿のお神が私のゐる離室にやつて來て、

「××さん、あの蒲團は別に持つて來ましようか、どないしまよう。」と、わざ〳〵訊ねた。

「え〻、別に一人分持つて來て下さい。」

と、いつて、狹い四疊半に二つ寢床を並べて寢た。

（大正九年七月作早稲田文學掲載）

嫌はれた女

その日佐野は、それまで四月から二ケ月ばかり住んでゐた處から移轉して來たので、一日働いたうへに東京まで用足しに往つたりして疲れてゐたので、昨日から手傳ひに來た若い者を夕飯を濟まして歸さすと、まだ何を取散かしてゐる座敷をざつと形付けて早速蚊帳の中に這入つた。佐野はもう何年となく長い間浮草のやうな宿屋生活をしてゐたので、夏の夜の物なども使ひ古した物は何處にどうしたか自然に無くしてしまつてゐたので、その日東京に往つたついでに三越に寄つて涼しさうな水色の裾模樣の蚊帳だの、輕い淺黄模樣の麻のふとんなどを買つて來た。毎年夏になると彼は早くから蚊帳の入らぬやうな、何處かの涼しい山の上に避暑するので、そんな夏の物などあまり必要を感じなかつたのであるが、さうして珍しく新調の夜の物に寢てみるのも惡い心持ちではなかつた。

そして、少しうと〳〵とまどろみかけてゐると、不意に、先刻閉めたばかりの表の口をどん〳〵叩くやうな音がするので又眼を覺まして、耳を立てると、それはまぎれもない自分の處の表の口を叩く音にちがひなかつた。

佐野は、

「はて不思議だ、今日越して來たばかりで、まだ表札さへも出してゐないのに。きつと家を間違へたのであらう。」と思つて、蚊帳の裾をはねて起き出でながら、

「何方ですか。」と内から聲をかけた。

すると戸外では何かいふ聲がして、

「佐野です、佐野です。」と又續けざまに仰山にいつて、ことこと戸を叩いた。

佐野といふのは自分の姓であるが、自分と同じ姓の佐野と名乘つて、初夏とはいひながら、か〻る深夜に、しかも市中を遠く離れた郊外へ自分を訪問するものがあるのは心得ぬ。しかも自分の處では、今日越して來たばかりなのである。

尤も自分の親しい友人に佐野といふのがあるが、無論その佐野が此處を知つて居らう筈はない。又鄕里の佐野も偶には東京へ來ぬこともないが、越して來た今日、まだ通知さへ出さぬのに、二百里の遠方から此處を探しあて〻訪ねてくる道

理もない。……が、いづれにしても佐野といふ音はひとつは親しき友人、ひとつは自分の姓で懐かしいところから、前にいつた道理を超越して不思議にその何方かが訪ねて來たかのやうに思はれた。それで、

「あゝ佐野。佐野は何處の佐野ですか。」と内から訊き返した。

その時佐野と一つ蚊帳の中の遠くに離れて寢てゐたお勢以は。

「そらお辰さんが來た。」と、半分戯談に脅かすやうに云つた。

その時戸外でも返事がして、

「××の佐野です。」と、男の聲がはつきり聞えた。

××は佐野の郷里である。郷里には今、もう明日をも知れぬ頽齢の老母が病臥してゐるので何時すぐ來いといふ電報を打つか知れなかつた。佐野は、それゆゑ××の佐野から來る郵便では毎時脅かされるやうな心持ちでゐた。

そして今、家の外にゐるのは××の佐野だといふ。なるほど一處不定の佐野でも、これまで何處に往くといつても、少し逗留する處だと、往つた先々から、今日此處に來たといふ繪葉書か何かの通知状を、向うに着いたその日に出さずに置いたことはない。今次此處へ移るについても二三日前そのよしを前以つて報知して置いた。して見れば、事實××の佐野の家から誰かゞ上京したものかも知れぬ。しかし、偶にしか東京に來ぬ、不案内の斯様な郊外の家へ、まだ表札も打つてゐない處を能く探して來たものだ。眞實の佐野の家の者か知らん。と、咄嗟の間に判斷に迷ひながら、佐野は兎も角も靴脱ぎに下り立つて硝子の嵌つた格子戸を開け、少し身をかはすやうにしても一つ戸を開けると、探ねあぐんだらしい車夫の聲が先きにして、

「おほ、こゝでした。」と、ほつとするやうに云ふ。

そして入口の前には幽かに照らす軒燈の光の中に、先つきお勢以が直覺して云つたとほりに丸髷姿のお辰が立つてゐて内から戸を開けて顯はれた佐野を見ると、いきなり、

「おほ先生。あゝ逢へてよかつた。」と、切なさうに息をはづませていつた。

佐野はお辰のその姿を見ると、どきつと、厭あな氣持ちがして、胸がつかへたやうであつた。無論佐野は、お辰に對しても、何人に對しても此處にかうしてゐるのが少しも悪いことゝは思はなかつたが、お辰がこんな深夜にこゝへ顔を顯はしたのが甚だ面倒臭いと思つたからであつた。佐野はそれで、迷惑な様子をも、又お辰が此處に現はれたとて少しもひるむ氣色を顔に出さないやうに、つとめて平氣を装ひながら、

「こんなに夜遲く、よく此處が分つたですなあ。」餘處々々しくいつた。

お辰はやつぱり息を切らしながら、

「先生、わたし、どんなに苦心して先生の居處を探したか知つてゐますか。」と、入口の三和土の上に立つて佐野を怨むやうに見上げながらいふのであつた。

佐野はしかし、お辰に對して自分の居處を知らさなければならぬ義理も必要も感じてゐなかつたのである。けれどもお辰の心になつてみればさう思ふのも無理もないことかも知れぬと察するのみであつた。佐野はわざと、から〳〵と笑つて、

「何にも私の處を探すのにそんなに苦心しなくつても可いぢやありませんか。」

お辰はさういはれると一層怨むやうな眼をして佐野の顔を見上げながら、

「先生、あなたはそんなお考へで可いのですか？」

佐野は今日はじめて越して來た家の入口で、もう夜も十一時を過ぎてゐようといふのに、そんなことの口をきき合つてゐるのが外聞が悪いので、――傍には車夫が膝掛けを疊みながら立つて聞いてゐる。内ではお勢以が蚊帳の中で身體中を神經にして耳を澄ましてゐるのも分つてゐる。

「こゝでそんなことを云はないで、まあ内に入つたら可いぢやないですか。」佐野は何處までも他人行儀な調子で、抑へるやうな言葉でいつた。

お辰はそれで、車夫の方を振返つて二三歩外に歩いて出ながら、

「車夫さん、あなたには本當に骨を折らしました。」と、腹から感謝するやうに力の籠つた聲で禮をいつて、帶の間から銀貨入れを取出しながら、「それで幾等上げませうか。」

老實さうな車夫は、それに答へて、

「え……それでもまあお分りになつてようございました。左様です一圓七十錢ほど戴きたうございます。」

「ぢやこれを。」と、お辰はいくらか餘分に車夫に與へたらしく、車夫は禮をいひつゝ、俥を挽いて歸つていつた。

佐野は蚊帳をつつてある奥の寢室との堺の襖を閉めながら、

「さあ、まあ此方へお入んなさい。」といつて餉臺や火鉢などを置いてある四疊半の茶の間へ案内した。

お辰はそこへ入ると、いきなり涙聲になつて、襦袢の袖口で眼を拭ひながら、

「やつぱり私の想像してゐたとほり、少しも違はなかつた。かうなら斯うと、何故私にはつきり事情を打開けて話さなかつたのです。」

と、怨みをいつて彼女はそこの疊の上に突伏した。

佐野はもうお辰がそれぐらゐのことをいふであらうと察してゐたのであつたが、彼自身としては少しもそんなことをい

はれなければならぬ道理はないと思つてゐるので、やゝ暫くたゞ黙つて白々しくお辰の姿態を眺めてゐるばかりであつた。そこで此の上お辰がどんなことをするであらうかと思つてそれを考へてゐた。

お辰は、こゝを探しあてゝ來るまでに樣子を知らぬ郊外の夜道を新宿から俥に乘つて、佐野の今日までゐた先の家をやつとの思ひで探ねあてゝ來てみると、そこは、もう越した後の空家になつてゐて、まだ取りはづしてゐない軒の電燈が空しくともつてゐるばかり、門には移轉を知らす紙さへ貼つてなかつたのを、女の一心にそこらの隣家を訊ひ合はして丁度今日こちらへ移つたいふことを知つたが、隣家でも何處の何番地といふことが分らなかつた。たゞ此の上の方の高臺で、たしか、新築の家といふことのみをたよりにして、暗闇の田圃道を俥からおりて歩き〳〵探ねて來た。

「暗い道の水溜りに踏み込んで足袋も何も泥まみれにするやら、大抵の思ひで探ねあてたのぢやありませんわ。

……いくら先生が隱してゐたつて、何處までも探ねずには置きませんから。」

お辰はやがて又起き上つて強い執着の色を眼顏に表してさういつた。佐野はそれを聞きながら、心の中でお辰は、そんなこと云つたり、かうして深夜に佐野の隱棲の場處を騷がしたりするだけ、彼自身の胸に一層劇しい嫌惡の感情を釀さしめるだけであると思つた。そして彼は事もなげに笑つて見せながら

「何も私は、あんたに限つて私の居る處を隱してゐる譯ぢやない。自分の居る處を隱さなければならぬやうな惡いことは私は少しもしてゐないつもりだ。私が何處にどうしてゐようとも、又その居場處を人に知らさうとも、知らすまいともそれは私の勝手だもの。あんたにそんな怨みなどいはれる道理がない。私が何をしようとも、唯にも自由を妨げられない。」

佐野がさういふと、お辰はそれに對して、さうでないとはいへなかつた。けれども彼女にとつては、佐野に會つたら、あゝもいつて怨みをいはう、斯うも云つて怨みをいはうと、胸の中は張り裂けるばかりであつた。

彼女はきつと佐野の方を見ながら、

「此の間行李を私の處から持つて來る時に、私の處の荷物札を使はなかつたでせう。あの時もう變だと思つてゐました。私の處で荷物札をなぜ書かなかつたのです？」

お辰はそれを好い怨言の根據にしようとするのであつたが、佐野にとつてはそれは何でもなかつた。そしてかういつた。

「あれは、あなたの處の荷物札にはあなたの主人の商店の姓名番地が商標まで入れてちやんと刷り物にしてあるぢやないか。成るほどその札をお使ひなさいと私に出してくれたあなたのゆき屆いた深切はよく解つてゐるが、東京驛まで荷物を持つて出れば驛でそんな札などはいくらも貰つてゐるのですもの。」

「え、それは、その時さう仰有つた。そんなら、何故あの時この荷物は牛込の方へ持つていつて預けるんだと私に嘘を仰有つた？」

佐野は實際その時お辰に對して嘘をいつたので、荷物は無論お勢以の處に持つて來たのである。けれどもお勢以の處に持つて來ることは、お辰がそれを知つたら氣持ちを惡くすることは分つてゐても、佐野にはそれが何等の不都合でも不義理でもなかつた。獨り者の佐野はひとりお辰の處ばかりでなく衣服調度の類から蒲團のやうな物まで四ケ處にも五ケ處にも預けて置いた。お辰の處に佐野が荷物の一部分を預けたのはつい最近のことで、それは他の何處にあづけて置くよりも、最も一時的のつもりであつた。何となればお辰は餘處に奉公の身で、彼女が奉公してゐる家へ佐野は荷物の假ひ一部分でも長く預けて置くのは、ひどく心苦しかつたけれども、そこは東京驛に近い處なので、佐野は旅行の往き返りなどに最も便利を感ずるところから、ついお辰の處を足場にするのであつた。そして、その內何處かに小さい家を借りたならば、佐野は方々に預けてある物を取つて來るつもりで、ほんの一時あづけてあつた。佐野はお辰に答へていつた。

「それは嘘をいつたさ。私がお勢以さんの處に荷物を預けたり、又そこへ時々往つたりすることは誰にだつて今まで二た月の間話してゐなかつたのだもの。人間が、何處にゐようとも、別に惡いことをしてゐない以上、自分はこれ〳〵の處に居りますと、一々通告せねばならぬ理由はない。」

お辰はさういはれると、やつぱりそれについて爭ふ言葉もなかつた。

お辰が佐野の處へ闖入してそんなことをいふといふのは一體どんな譯であるかといふに、それはかうであつた。

佐野がお辰をはじめて知つたのはもう六七年も前からであつた。その頃お辰はまだ先の夫とある處で小さい商賣を營んでゐた。その頃お辰はその夫と別れたいことを始終口にしてゐた。佐野は格別お辰等夫婦の身の上に就いて興味も持たなければ、又お辰をそんな好きな女とも何とも思つてゐなかつた。どうかといふと、どこか浮氣つぽい、そして淫蕩らしい血色をした、お饒舌で、語音なぞも何だか舌つたるい口のきき樣で、關西育ちの上方訛の變に殘つてゐるといつたやうな處があつた。けれども時々話してみるうちに彼女の性質は決して惡い人間ではない、どちらかといふと寧ろ普遍の女性として甘い、輕卒な人間であることが分つた。佐野は折々戲談などをいつてゐたが、本氣で彼女をどうしようなどゝ思つたこともなかつた。しかし輕卒なお辰の方では佐野のいふ戲談

を悉く戯談とは思つてゐなかつたかも知れぬ。

なぜなれば佐野は丁度その頃、ほかの女には振り向いて見る氣もないくらゐ京都の方に深く思つてゐる女があつた。そして彼は到頭後には京都の方に往つたきり三年ばかり東京には歸つて來なかつた。その間無論佐野はお辰のことなどどうなつたか、思ひ出してみる暇もなかつたが、佐野も長く居つた京都から一度久しく歸らぬ東京へかへつてみようと思つてゐる矢先きへ丁度めづらしくお辰からの手紙を受取つた。

お辰は佐野の知らぬ三年ばかりの間に、あれから又夫と散々生活の爲めに足掻いた末たうとうその夫と別れて、今は日本橋の方のある大きな商店へ家政婦となつて住込んでゐる。あなたはもう東京にはお歸りないのか。私もいつまでも斯うして他人の家へ奉公してゐる氣もないつまりは歸國したいと思つてゐる。一度東京であなたにお目にかゝりたいと思つてゐる。もし、あなたが近いうちに東京にお歸りになるなら、おかへりを待つてゐます。といふやうな意味のことをその手紙に書いてゐた。

佐野はそれに對して早速返事を書いて、近いうち必ず東京に往くつもりであるからお目にかゝる。といつてやつた。無論佐野の心持ちは簡單にそれだけのものであつた。

しかしお辰の方ではもうそれだけの書信の往復によつて手紙の文面に書かれた以上のことを夙に期待してゐたのである。

佐野が三年ぶりに東京に歸りつくと、二三日してお辰は訪ねて來た。人の好い、お饒舌のお辰は問はず語りに、佐野が東京にゐない間に彼女と別れて歸國した夫との上に起つた變遷について委しく話してゐた。それから十日ばかり經つて二度目にお辰が佐野を訪ねた時に彼等は、何處かへ往つてみようといつて、東京から少し出はづれた田舍の方へ遊びにいつた。お辰はその時も殆ど語り止めず、別れた夫と別れるまでに成り至つた經緯についてうるさいほど聞かせてゐた。そして遠くの郷里へ歸つたその先の夫から、つい此間まで何とか斯とか用事を託けて手紙を越したり食べる物を送つてくれなどゝいつてきてゐたことまで話してゐた。佐野もよく知つてゐたその夫は、お辰とは三十近くも年が上であつたが、さうして病の爲に、離れたくない女の傍を諦めて國に歸つてからも彼は、やつぱり未練があると思はれて、

「お前は粧り樣によつては年よりも三つや四つは若く見える方だから、俺と別れて一人でゐれば、その内ハイカラの男の處へ嫁づくこともできる。お前の爲になるやうな好い縁談でもあるといふなら、俺とはもう綺麗になつてゐるのだから少しも異存はないといふ保證をしてもいい。」

そんなことを先の夫はお辰の處に書いてよこした。

佐野はお辰からそのことを聞かされた時、七十に近くなつて棺の中へ片脚突込んでゐてもまだ娘のやうな女に執着を殘さねばならぬその夫の心が悲しかつた。そして強い同情を感じたのであつたが、お辰の立場を考へてみれば、まだこれから先のある身で末の見込みのない、そんな老人にいつまでも附着いてゐることも出來なかつた。彼等は今に別れるわかれるといひながら十年餘りも生活に引摺られて來た。それでもその夫は若い時國に殘して置いた伜や娘が多勢あつて、長男はもうお辰よりも年が上であつた。國へ歸れば老後の憂ひは少しもないのであつた。お辰はさうはいかなかつた。親も兄弟もない彼女は自分ひとりでこれから後の運命を定めなければならなかつた。そんな老夫の手足まとひがあることは彼女の將來の好運の障害であつた。

佐野はお辰のいふことを一應聞きをはつてから、

「あんたも國へ一緒に行けばよかつたぢやないか。」

「えゝ、それは息子が迎へに來た時に、私にも、一緒に來て下さいとは自分の方からは申されにくいが、もし親父と一緒に來て下されば、それに越したことはございません。親父が死んだ後でも決してあなたの一生御不自由な目はおさせ申しませんといつてくれたのですけれど、私それはきつぱり斷りました。私もうあの人には盡されるだけ盡したのですから少しも怨まれるところはありませんし、あんな遠くへ行つて一生を過すのは厭です。」

佐野は笑ひながら、

「それは、あんたにしても無理のない所だが、しかし、それだから合はせものは離れものだといふがそのとほりだな。十年も十五年も一緒にゐて、後でそんな厭な離愁を味はゝなければならぬのに、私などはもう懲々してゐるから、かうして獨りでゐるのだ。……あんたもまさかあの人と初からの夫婦であつたらそんな譯にも往くまいがね。」

お辰も笑ひながら、

「それはさうです。あの人はもうこれまで一番初めに持つた子供のお母さんのほかに、私との間に幾人女房を持ち更へたか知れないんですもの。」

さういふお辰も、今話してゐる老夫と一緒になるまでには、やつぱり二人も三人もの夫に見えてゐたのである。それは一つは運といふものがあつたかも知れぬが、彼女の性格がどうしてもはじめて持つた一人の夫の處へ生涯落着けさうな女でなかつたのである。

「わたし今ひとつ話が持ち上つてゐるんです。」

三十九の春になつて久し振に樂々とした獨り者になつた彼女は、自分の自由に委かされた自己の運命の選擇を喜んでゐるらしくさういふのであつた。

佐野は眞面目な顔で、

「はあ、それはどういふ話です？」
「店の人の懇意な人で、神戸の方のことです。本人はもう七十に近い人です。息子は鈴木組か何處かの重役をしてゐて、お父さんは疾から隱居してゐるんですが、深切に世話をする者を方々探してゐるんですけれど好い者がないから心當りがあつたら世話をしてくれと、その息子から店の人が頼まれてゐたんださうです。それを此間から私にあなた何うですといつて頻りに勸めてゐるんです。」
「それは好いぢやあないですか。」
お辰は笑つて、
「店の人も向うもどちらも氣が早い。碌に私の考へを訊きもしないうちからもう手紙でいろんなことを相談してゐる。息子の方から兎に角私に會ひたいから、私を神戸へ寄越してくれといつて來てゐるんださうです。店の人は、をばさんどうです、行つたらいゝぢやありませんかと此間から勸めてゐるんです。」
「店の人がそんなにいふなら、悪い處ぢやあるまいから、それは往つて息子に會つてみるんだな。」
「妾に來てもらふんぢやない。あちらが幾ら年取つてゐても後妻といふ名義にはきつとするといつてゐるさうです。」
「それぢや好いぢやないか。行く可し、ゆくべし。」
佐野は輕い調子でいつた。

お辰は氣のはずまぬやうに、
「いくら名義は後妻だといつても、さうなりやあもう單に金を目當てに往くんです。けども私、やつと年寄りのあのお爺さんに別れたと思つてゐるのに、また今度は先のよりも餘計老けた人の處に往けば一生年寄りの守ばかりしてゐるやうなものですもの。私、厭です。」といつて嘲けるやうに笑つた。
佐野もはゝと笑つて、
「ほんとにさうだ。あんたもよく〳〵老人に見込まれたものだなあ。はゝゝゝ。」と調ふやうにいつた。
「厭ですよ。……」お辰は甘えるやうな調子でいつた。「それについて私、あなたが東京にお歸りになるのを待つてゐたのです。あなたはもう東京にお歸りにならないのかと思つてゐました。あなたがもう東京にお歸りにならなければ、私も何時までも餘處の家へ奉公してゐたつて詰らないから、國の方へ歸らうかとも思つてゐました。」
佐野はお辰の語裏の意味を解してゐながら、わざとそれには氣の附かぬやうな風を裝つて、
「私は東京に歸らないことはないさ。尤も私の事だから東京に歸つたつて、又何處に往くかわかりやしないけれど。」
「何處に往くんです、京都？」
「京都へも往くし、何處にでも往く。」
「でも當分は東京におゐでゝせう。」

「無論ゐるさ。」
そんなことを汽車の中で話してゐるうちに、やがて目的地に着いたのでステーションを出てぶら〳〵歩きながら彼等は少し行つて、とある松林の中の閑靜な料理屋へと入つた。
お辰はそこに落着いてからも性來のお饒舌をつゞけて、今ゐる店の店員達のことから、別れた夫と二人で夫婦者に來てもらひたいといふ向うの要求に應じてそこへ住込んだ前後の自分達の困つてゐた狀態、そして奉公に住込むと間もなく老夫にそこで病み附かれて自分ひとりで難儀したことやら、併し夫のその病氣がお辰自身にとつてはもつけの幸ひとなつて、遂に多年望んでゐた夫婦別れをする動機になつたことやら、佐野は耳がうるさくなるまで、べちや〳〵饒舌つて聞かした。無論それは佐野にも、丁度秋聲物の小說を讀むやうな興味のないことでもなかつた。
清鮮な海魚の料理でひととほり食べる物を食べをはつた頃ぼつと頭の上に電燈がともつた。
お辰はやがてやゝ眞劍な調子になつて、佐野の方を見ながら、
「それで私どうしませう。一度あなたのお考へをよく聽いた上で確かな返事をしようと思つてゐるのです。」
佐野は、妙に理由もなく言ひ懸りを附けようとするやうなお辰の物のいひ振りに少からず厭氣と逡巡とを感じながら、わざと飮込めぬ風で、
「私の考へを聽いてから確かな返事をするとは何の事？」
「神戸の方の返事です。」
佐野は又はゝと大きく笑つて、
「神戸の方の返事つて。そんなあなたの一身上の大問題に私が最後の斷案を下すといふやうなことは出來ない。」
「でも貴方はどうお思ひになつて？」
「どうお思ひになつてつて。……私には何ともいへない。私の關係したことぢやないですもの。しかしあなたは先刻自分でもう老人のお守は厭だといつてゐたぢやあないですか。」
「神戸へなんか往くものですか。……あなたがこれからずつと東京においでになるなら、私も東京にゐて何處へも往かないつもりです。」
佐野は心に迷惑を感じた。自分は腹から此の女を少しも好いてゐるのではない。さうかといつて少しも憎むところもない。自分はこの女と何等の關係はないのである。けれども對手の心の中は明かに分つてゐる。先の老夫がそれほど執着を殘してゐるのを振り切つて、今自由な獨り身になり、佐野に向つてそんな心中を打明けて來てゐるものである。けれども佐野は自分の好いてゐない女と複雜な關係を生ずることを好まなかつた。そしてかういつた。
「私は、あんたと堅く將來の事を約束するやうなことは出來

ない。けれどもあんたも今は一人者であるし、私もこのとほり獨り者だ。双方とも何處から苦情の出る所もないのだから、唯單に淡い拘泥はりのない交際ならばしてもいゝのだ。あんたの方でそのうち好い緣談でもあつて嫁づくやうな場合があつても私の方は決して異存も苦情もない。その代りに私の方でどんなことがあつてもやつぱり同じ事だ。それでよかつたら、あんたも奉公をしてゐる身だから無暗に出歩くわけにも往くまいから、月に一度くらゐはかうして何處かへ遊びに往つたつていゝでせう。」

佐野がはつきりさういふと、お辰も肯いて、

「そんなら私神戸の方の話を斷ります。」

それから二年ばかり經つ間にお辰は時々自分の身の上のことをいひ出して緣談をすゝめる者のあることなどを話してゐた。神田の方の一寸した本屋で妻君に死なれて困つてゐる處へ嫁かないかといふ者があるといふ話をして、

「私どうしようかと思つてゐるのです。あなたの決心を訊いてから私の心を極めようと思つてゐます。どうしませう？」

佐野は、いつもお辰のいふことだと思ひながら、

「どうしませうつて、私は初からいつてゐるとほり、あなたが緣に付かうとも、どうしようとも少しも異存はいはないのだから、あんたの好きなやうにしたらいゝでせう。」佐野のいふことは、いつも同じであつた。

「私もう今更見知らぬ人の處へ緣に付いて又氣心の知れぬ人の機嫌氣褄をとるのは厭です。お金なんぞはちつとも欲しいとは思やしない。それより束縛されないで獨りで自由にしてゐるのがどんなにいゝか知れない。」

お辰は自分の述懷を語るのであつたが、佐野はそれを無理でないことゝ思つて聽いてゐた。それに彼女の奉公してゐる家は普通の使用人以上に彼女を好遇してゐるらしかつた。そして好色の女であるにもかゝはらず根が正直で、氣の輕いお辰は骨身を惜まず主家の爲にはよく働いてゐたから主家では彼女を必要缺くべからざる者として重用してゐた。彼女は又金錢上の事にも安心して凡てを任かして置くことの出來る女であつた。佐野は、お辰からそんな話を聞かされるたびに何時でも云つてゐた。

「そんな好い家は滅多にあるものぢやあない。あそこの家を後生大事に勤めてゐるのが君の爲に最も安心だよ。」

佐野がさういふと、

「私に一生餘處の家へ奉公せよといふのですか。」

お辰は絡むやうな氣分でいつた。

佐野はしかしそんなことをお辰からいはれる筋は少しもなかつた。佐野はお辰の進退については何等の障害となるやうな態度に出なかつたのである、又お辰の一生の事を考へる責

任を押被される理由もなかつた。それに拘はらず、お辰が戯談にもそんなことをいふと、悚然とするほど厭な氣がした。

佐野は勃然としたやうに、

「そんなことは私の知つたことぢやない。奉公するのが厭なら君が勝手に止めて、そして折角深切に世話しようといふ人がある時に嫁づいたらいゝでせう。」

佐野はいつでもさういつてゐた。お辰が佐野を、自分一人の物としようとするのは彼女の自惚れか、さもなければ餘り勝手であつた。人間の定命に達するまで――殆ど一生涯の間好きな女に出會はさない爲に、偶に出會つてもそれが都合よくいかぬ爲にずつと獨りでゐるほどの佐野が初めから餘り好んでもゐないお辰のために自由を妨げられるやうなことを深入りしてする筈はなかつた。佐野の考へでは、シユニツツレールのある小說の中の人物のやうに、たゞ單に自由な、淡い欲望を適度に滿足さしてゐればそれで可いので、それ以上に何の目的もなかつた。そこで佐野は、お辰とのさういふ關係が互に飽くまで彼等以外の者に對して祕密を守らなければならぬことを條件としてゐた。それはいろ〳〵の理由からしてさうであつた。彼等はもう最も思慮分別のあるべき年配であるのだから、たとひ何處から故障をいふ者がないにしても、もし、人に知られて決して人聞きの好いことでもなかつたし、お辰の主人達にもしそれが知れると平常立派な顏をして始終お辰の處へ立寄つてゐる佐野の顏がすつかり潰れてしまふのであつた。お辰自身よりも佐野の方がひどくそれを愼んでゐたのである。尤も佐野も段々に年は取るばかりだし、それに近年ひどく健康を害してゐたので、給銀によつて、主人からいひ付けられたゞけの用を辨ずる奉公人でなくもつと深切に身のまはりの面倒を見てくれる者があつてもよいとは思つてゐたので、お辰を獨立さして幾らかの生活の扶助をしながら自分もそこを東京にゐる時の隱れ家にしようかなどゝ思つてみたこともないではなかつた。が、佐野はいよ〳〵それを實行する決心は付かなかつた。お辰はそれを何よりも希望してゐるのであつた。といふのは一と口にいへば佐野はどうしてもお辰がそれほど好きでなかつたからである。人間も正直だし深切でもあつたが、その餘りに女が四十になつても氣の若過ぎるやうなところも厭味であつたし、何處か京阪の女によく見るやうなべた〳〵しやうな氣風なども佐野は好きでなかつた。佐野は好きでないといふその京都の女に、一生後にも前にもないといふくらゐ好きな女が一人あつたが、佐野がそれくらゐ氣に入つた女は不思議に京阪の女に似ず氣質のさつぱりした女であつたのだ。厭味な色つぽさなどは少しもなかつた。

「まあ、あんたは今の家を大事に勤めてさへゐれば悪いことはないよ。……それに私が綺麗な顏をしてあんたの家へ出

入りしてゐながら、こんな事がもし彼處の家の人達に知れたら好い年をして、あんたにしたつて、申譯が立つまい。」

佐野は何時も同じことを繰返へしてゐた。それに佐野は格別構ふ譯はないとは思ひながらも、お辰の勤めてゐる家へ、そこの主人筋との交際でなくお辰とのそんな關係から度々出入りするのがひどく厭で堪らなかつた。……

お辰はやがて、やう〳〵起き上がつて襦袢の袖で涙を拭きながら、自分と心に元氣を付けて、

「わたしお勢以さんに先生を戻してもらふつもりで來ました。……達者でゐたら二つになる兒もあるぢやありませんか……」といひさして、後は又涙に掻き消えてしまふ。

佐野はそれを聽いてゐて實に何ともいへない悚然とするやうな厭らしさを感じた。彼はもとからお辰を決して惡い性質の女と思つてゐなかつたけれど少しも好いてはゐなかつた。又お辰に向つてそんなことを口にしたこともなかつた。そして時々お辰自身から、縁談のことや、ほかの男から折々いろんなことをいひかけられたりするといふやうな、用もない話をべちや〳〵いつて聽かされるやうなことがある時に、彼はたゞふむ〳〵といつてきいてゐながら、心の中で、四十の聲をきいてゐても、まだお辰の氣の若いのに呆れるのであつたそれでもお辰は男から時々そんなことをいはれるのが馬鹿にされたやうにも厭なことにも思はれなかつたのである。それに彼女には、十六の時はじめて嫁づいた先で生まれた娘があつて、それとは暫く音信不通になつてゐるが、その娘にもう五つか六つになる孫さへあつた。佐野は後になつてどう成らうといふ氣の少しもない自分などに、先の當てもなく關り合つてゐるよりも、折角深切に勸めてくれる者のある時に相應の處があつたら縁に付いたらよささうなものだ。それともお辰が自分でよく云つてゐるやうに、もう今更嫁づくのが厭だといふなら、その娘の居所を尋ねて母子の往來をして、老い先きの慰めにして置いたら、よささうなものである。……

佐野は餘程、

「お勢以さんに先生を戻してくれつて、なにも私は初からあんたの物ぢやない。」と云はうとしたが、それはそのまゝ、ぢつと咽喉から奥へ嚥込んでしまつた。こんな夜更けて、しかも今日はじめて引越して來た處でもしヒステリイな女の高い聲など出されては外聞が惡いと思つたので、佐野はなるたけ、そつとして置かうとしたのである。そして、先に口まで出かゝつた荒立つた氣分の言葉を、もう一遍腹の中で和げて、今度はかういつた。

「お勢以さんに先生を戻してもらひたいつて、私は何にもあんたの物でなければ、又お勢以ちやんの物でもない。お勢以ちやんは、あんたも知つてゐるとほりの醫者の藥も效かな

かつた私の身體を癒してくれた人だから私にとつては傍から離すことが出來ない人です。」

佐野はさういふと、一層お辰の心を慘めなものにするといふことを知つて、殊更にさういつた。實際佐野にとつて此の場合最も迷惑に感ずることはお辰が深夜に坐わり込んだことよりもすぐ襖の彼方にゐるお勢以に、それまで知られてゐなかつた、お辰と自分との關係が、すつかり暴露してしまつたことであつた。今に後でお勢以がどんなにいつて怒つて掛るであらうとおもふと　その方が遙に厄介であつた。そしてお辰のために心から慨いた。自分は最初からどうでもいゝのだがお辰自身がこれから先きも佐野との關係を繼續したいと思ふならば、そんなに取り亂して押し掛けて來たりしない方が、どんなに上手か知れないと思つた。それに、かうして來たのでは、口を利かなくつてもゝう、たゞ來ただけで、はつきりとお辰と佐野との間のことはお勢以には察しが付くわけである、それもまだ二十代の女ならば思ひ詰めるといふこともあるが、四十の聲を聞いて、現在自分の傍に置いて自分の手鹽に掛けぬとはいひながら、娘や孫のある身で、男の後を追駈け廻はしたりするといふのは、たゞそれだけの行ひがそれまでも餘り好いてもゐなかつた佐野の心に厭氣を起さしめるに十分であつた。佐野は思つた。

これまで幾人もの男を持つて好色の道にかけては隨分いろんな智恵の發達してゐる筈のお辰にしては可笑しいほどの甘さである。佐野は、その晩まで自分の方からは、いくら好いてゐない女であつても、お辰との關係を綺麗に斷つてしまはねばならぬ必要には少しも迫られてゐなかつたのである。お辰との間の祕密は飽くまでも、神のほかには彼等二人きりの祕密として續けてゐる分には何處から苦情の出る處もなかつた。しかし、かうしてお勢以の前にそれをお辰自身が暴露した以上は、佐野は此の上お辰とそんな關係を續けることはどうあつても厭であつた。それは單にお勢以を憚るとか、お勢以に對して濟まぬからといふのではない。既に一人でも自分達二人以外の者にそれが知られてから尚ほそれを續ける心にはどうしてもなれなかつた。お辰は、殊に女として最も愼まなければならぬ自分の祕事を自分から他人の前に暴露したのである。さういふ年效もない取亂した女を、佐野は眼の前に見てゐるのも、ふる〳〵厭になつた。

佐野は、お辰が、よく縁に付くことをすゝめる者があるといふ話をして、

これまでも「どうしませう。」といつて、相談を持ちかけられるたびに、いつも、自分の方では後退りをするやうな氣持ちで、そんな相談をせられる筋さへないと思つてゐた。何故なれば、佐野は、お辰が何處へどう身の振り方を付けようとも、佐野の方では關係したことではないのであつた。彼はそ

こまで深く踏込んでお辰と交渉あるものと思つてゐなかつたし、又さういふ交渉になることを初めから、常に避けてばかりゐるのであつた。自分の方でそのつもりであつたから、勿論お辰の方でも佐野がどんなことをしても、それに苦情など持出す理由は少しもないのであつた。二人の祕密は、二人だけで綺麗に口を拭いて、ことりともいはせないで事を濟ます筈であつた。お辰にはそれが出來なかつた。女の愼みによつてか、或は經驗によつて腹が出來てゐるか、どちらからかして、それくらゐに確りしてゐる女でなかつたのが佐野には不滿であつた。佐野はやがて又

「はゝゝ」と笑つてから言葉をつゞけて、「達者でゐたら二つになる兒がある」と、お辰が今いつたとほりのことを繰返していつてみながら、又心の中で思つてみた。お辰は十六の年に嫁づいてその翌年に一人の娘を産んだきり、それから後二三人の逢つた夫の處へ嫁して、どこでも十年くらゐづゝ居つて一度もそんなことがなかつたのである。そして二十年も經つた四十になつてから、そんなことがあつたといふのは 世間にあんまり例のないことであつた。しかし佐野はお辰にそれをいはれた時、頭から噓だといふやうなことはいはなかつた。

「わたし何だか身體の樣子が變です。まさかそんなことはないと思ふんですが。」

「今になつてまさかそんなこともなからうけれど、 もしさうであつたら、あんたのゐる家へ知れたら見ともないから、その時は脚を出さぬやうに暇をとつて靜かにしてゐるんだ。」

そんなことをいつてゐたが、それから間もなく佐野が京都の方にいつてゐて東京に留守の間にお辰は身體が快復したといつてゐたが、それがどうした譯であつたか佐野はあんまりその話を聽くことを欲しなかつた。

お辰は今それをいひ出したのである。佐野は、妙に因緣をつけようとするお辰が一層厭になつた。

「子供が出來たのが本當なら大事にして大きくしたらよかつたぢないですか。私は子供なんぞ欲しいとは少しも思はないが、まさか出來たものを、責任を遁がれようとはせぬ、その時は又それだけの準備をすると、あの時いつたぢやないか。それが、そのとほりにならなかつたのは爲方がない。」

佐野がさういふと、お辰は何も返へす言葉がなかつた。佐野は薄暗い電燈の下に坐わつて悄れてゐるお辰の姿をよく見ると薄い藍色のお召の縱縞の單衣に絽錦紗の黑の羽織を被て、藤紫の手絡をかけた若い丸髷に結つてゐる。誰に見せようとて、そんな容姿をつくつて、一と月ばかりの間、極度のヒステリーになるまで自分の居處を探してゐたのかと思ふと、佐野は固より心の中でお辰を氣の毒とも思つたのであるが 何度もいふとほりに佐野自身が、もう、女とそんな惡毒い關係を生ずることを、心から厭うてゐるのであつた。お勢以に同居

してもらつてゐるのも色戀の沙汰ではなかつた。彼はもう老後の世話をしてもらふつもりでお勢以に附いてゐてもらつてゐるのであつた。

お辰は思つてゐること、いひ度いことは山ほどもあるのを、佐野に面と向つてゐては、その百分の一もいひ得ないのでどうしたらいゝかと思ひ亂れながら、

「わたしもお勢以ちやんのやうに按摩になつてゐたらよかつた……」といつて、又泣き聲になつた。「まさか先生が、按摩さんとそんなことをする筈はないと思つてゐたら、やつぱりさうであつた。」

お辰は、襖の 彼方に寢てゐる お勢以に 聽えるやうにいつた。

佐野はさういふお辰の心がよく解つてゐるので、それを默つて笑ひながら聽いてゐた。お辰がそんなことを云へばいふほど彼女自身の負けになるばかりであつた。好きな女ならば祇園の太夫にだつて裸體になることを厭はぬほどそんなことに男氣のある佐野に向つてそんなあてこすりをいふのは、石に風が吹きあてるほどでもなかつた。それにお勢以の厭味のない性格も佐野には氣に入つてゐた。佐野は、そんなことをいふお辰自身がどんなにお勢以よりも優れてゐる人間と思つてゐるのであらうと思ふと、彼女の爲に悲しかつた。男でも女でも嫌はれた場合ほど慘めなものはないといふことも彼には新しく考へられた。

お辰は、佐野が、お勢以のことをさういはれても默つてゐるので、圖に乘つたやうに、

「小石川の佐野さんもさういつておいでになつた……此處でお勢以さんのことを惡くいつてもどうぞ腹を立てないで下さい……」と、これからいはうとすることを豫め詫びて置くやうにいふのであつた。

小石川の佐野といふのは、同じ佐野で、懇意な間柄であつた。その言葉の端から察するところ、お辰は先達つて中から佐野の居處を探す爲めに方々、心當りを訊ねて、小石川の佐野の處をも訪ねたものと思はれた。そして自然にお勢以の話が出たものと思はれる。

佐野は微笑しながら、

「えゝえゝ何をいたつて怒りやしないよ。」といつたが、お辰が其處で、お勢以に聞かすやうに、いろんなことをいふのは、いよ〳〵以てお辰と自分との關係をお辰自身から打ち壞はすやうなものであると思つたが、佐野が、今此處でそんなことをいつては可けないといへば、お辰はおたつで、又お勢以はおせいでそれ〳〵自分達の立場から異つた邪推をするであらうと思つたので、

「何でもいゝよ。」と佐野は、小石川の佐野がいつたといふ事が訊いてみたくなつた。そして、お辰の慌て者が、これまで

一度も往つたこともどうしたこともない小石川の佐野の處に往つた。といふのは、お辰にしては、佐野の居場處を探し出さうとする熱心の餘りに、平常懇意な仲の佐野同志だからきつと小石川の佐野の處へ往けば分ると思つて訪問したのであらうが、さういふことをすれば、たゞ向うへ往つたゞけで、別に何もいはなくつても、こいつは、てつきりお辰と佐野との間は普通でないくらゐはすぐ感付かれるのである。それを思つても、佐野は、お辰が小石川の佐野の處へ、自分の居場處を訊ねて往つたことをひどく好まなかつた。あそこでそんなことが暴露したら、一日の中に國際通信の電報の如く方々に傳はることは必定である。無論知れゝば知れたつて構ふことではないけれど、そんなことはなるたけ知れぬ方がよい。前にも度々いつたとほり佐野は、お辰との事が、彼等二人きりの祕密である間だけ、それを繼續してもよいと思つてゐたのであつた。祕密は、それが祕密であるだけ樂しみであつた。どんなにその爲めに佐野が大事を取つたかといふことはお辰も知つてゐる筈であつた。それに、お辰は、佐野と自分とさういふ關係のあることは少しは光榮と思とふいふやうな點もないではなかつた。佐野にはそれも可笑しかつた。

「それで、小石川の佐野は何といつたの？」佐野は重ねて訊かうとした。

お辰は少しく笑ひ顏を和げながら、

「どうぞ、こんなことをいつても怒らないやうにしてください。」と繰返へして詫びて置いて、「小石川の佐野さんさういつておいでになりました。——お勢以といふ女は、おとなしいといふ評判だけれど、ちつともおとなしかない。隣の座敷に居つて聞いてゐると、療治に來てゐるといつて何をしに來てゐるか分つたものぢやない。いつも二人できやつ〳〵いつてゐた。——そんなことをいつてゐらつしやいました。」

お辰の心持ちでは、さういつて小石川の佐野の見るところと自分の考とを合せて、佐野に好意の苦言を呈するつもりであつたのである。

佐野は、わざとそれを事も無げに笑つて見せた。

「ふむ、そんなことを小石川の佐野がいつてゐたか。」といつて、彼は暫く沈默してゐた。そして佐野は、自分の見るところの確乎してゐることをもう一遍心のうちで確めなほすやうに唾を呑込みながら

「傍ではまあ何といはうとも構はないさ……」といつて、……迷惑をすれば自分だけですることだから、といはうとしたが、此處ではもうなるたけお辰はそつとして置く方が無事だと思つたのでそのまゝ後を默つてしまつた。そして、それよりもお辰がそんなことをいつたので襖の向うで聽いてゐるお勢以の方のことが心配になつた。お辰はそれでお勢以に見替へられた鬱憤を晴らすつもりでもあつたらうが、お勢以

は、佐野とお辰との事などその晩まで少しも知らなかつたのである。それゆゑお辰はお勢以を怨む道理は少しもないのである。それにもかゝはらず、お辰の口から、たとひ小石川の佐野がいつたといふことであるにしても、そんな侮辱されるやうなことを、襖一枚のところからいはれてみると、それでも胸が平かである譯にはいかなかつた。

さうかといつて、そこで佐野はあまりにお勢以の身の上のことを辯明するのは好まなかつた。

「なにお勢以ちやんにはそんなことがあつたか無かつたか、それはどうでもいゝことなのだ。たゞ私の身體があの人の熱心なるマッサージのおかげで良くなつたことは、四年前から癈人になるかと思つてゐたのが、めつきりと效驗があつたのでわかつてゐる。大抵一週間おき、劇しくなると五日めぐらゐに起つてゐた頭痛と嘔吐との發作が、お勢以ちやんに療治してもらふやうになつて、もう丁度今日で六ケ月それがない。あんたの知つてゐるとほり醫者は半歳か一年の間發作が起らなかつたら略ぼ全治したのだ、しかし、それが一と月二た月なくなつても、又一度でも起れば元のとほりになるといつてゐた。その時分は、一と月二た月は愚か、十日と無事の日が續いたことはなかつた。あの時分私は五日おき七日おきにひどい嘔吐や頭痛に苦しみ拔いてゐながら、せめて一と月何事も無くて居りたいと思つてゐた。とも三月四月の無事は望まれさうもなかつたのが、もう半歳何の事もないといふのは全くお勢以ちやんの手柄だよ。」

佐野は、さういへば一層お辰の心を慘めなものにすると知りつゝ敢てさういふところもあつた。それは、今お辰がお勢以のことをいつたのに對する婉曲なる辯護でもあつた。佐野はさういつて、襖の彼方に聽いてゐるお勢以の憤怒を緩和しようと思つたのである。佐野は又言葉をついで、

「私の國の者もそれを聞いたら、さぞ悅ぶだらう。」

するとお辰はちよつと佐野の顏を見詰めて、

「お勢以さんと御夫婦になつたことを？」と下らない問ひを發した。

佐野は今度はわざと大仰に笑つてみせた。そして、「うゝむ。そんな事ぢやない。私の身體が良くなつたことをさ。」といつたが、お辰をしてそんな問ひを發するまでに彼女の心を惱ましめようとしたのは、佐野の思ふ壺であつた。前にもいつたやうに彼はお辰の、自分に對する純な深切を心から認めてゐたし、又男が一人でゐるやうな場合常に起るいろんなつまらない面倒なことで彼女の世話になつてゐることをも知つてゐるのであつたが、お辰が先つき戶の外から聲を掛けた時、「××の佐野です。」といつて、彼の鄕里から來た佐野であるかのやうな調子で物をいつのが、もうその時から佐野の心に少からぬ反感を抱かしめたのであつた。お辰の考へでは、さ

うい へば直ぐ佐野が内から戸を開けて顔を出すであらうと思つたからでもあつたらうが、取り様によつては、いかにもお辰が佐野の故郷とよく知つてゐる間柄であるかのやうに、その勢ひでお勢以などを呑んで掛らうとしてゐるかのやうに見えた。佐野は、たとひお辰の心理を承認するにしても、そこで佐野の郷里の者に假託するやうなことを甚く好まなかつた。佐野がたとひ出先きの東京でどんなことをして居らうとも、少くとも自分の郷里の生家だけは彼の自身の氣持ちの上だけでも神聖なものにして置きたかつたのである。

お辰はまだ〳〵何かいはうとするやうにしてゐたが、

「大變な評判ですよ。」

「なにが大變な評判だ。」佐野はわざととぼけたやうにして訊いた。

「あなたがかうしておいでになることが。」

「大變な評判だつて、ちつとも人に迷惑を掛けないから差支へない。」

佐野はさういつたが、心の中では、大變な評判といふのは、お辰が自己を中心として耳で聞くからであつて、その實お辰が今晩かうして探しあてゝ來てから後、お辰の口から發して多少そんなことが知人の間に披露まるぐらゐのものであると思つた。佐野の行動などが文學雑誌の六號活字の欄を賑す時代はもう遠くの昔に過ぎてしまつたことを思ふと心が安かつた。それでもお勢以のことは少し此のついでにいひたいと思つたので、佐野が何かいひかけようとした。

すると初から今まで一言もいはなかつた、襖の向から突如お勢以の聲がして、

「私のことは何もいはないやうにして下さい。私の關係したことぢやないんですから。……どんな商賣をして居らうとも他樣には迷惑にならぬ商賣がちやんとあるんですから、淫賣なぞしなくつても私は御飯は食べられるんですから……」といつた。

佐野もそれで、それつきり言葉を呑んでしまつた。お辰は又何か知らお勢以と穩かな調子で口を利いてみたいといふ樣子であつたが、佐野はそれを制するやうにした。お辰はそれで、

「おとなしい人と聞いてゐましたが、なか〳〵氣のきつい人ですねえ。」と佐野の顔を見ていつた。

「まあ、そんなことはどうでもいゝ……それよりあんたはこれからどうするのです。もう電車もなくなつたし、そんなに夜遲く出歩いたりしてはあなたの主人の家に對して申譯がないぢやないかな。」

佐野は、ちよつとでも早くお辰を歸したかつた。それは追ひ返すといふ意味よりも、今はさうする方が誰にも都合がいいと思つたからであつた。

するとお辰は何處までも絡み付くやうに、

「遲くなつたらこゝへ泊めて下さい。あなたの家ぢやありませんか。」といつた。

佐野はそんなにお辰が云へばいふほど何ともいへない厭になつたが、なるたけ逆はぬやうにして置くのが無事だと思つたので、

「そりや泊まつていつたつて私の方では差支へないが、外泊などしない方がいゝ。あなたは今まで一度も店へ無斷でそんなことをしたことはないのでうせ。何處より店の信用が大事だよ。」

「店なんか私もうどうでもいゝんです。彼處はもう暇を取るつもりです。」

そんなことをいつて、一時が過ぎて二時が打つてもお辰はぢつとそこに坐つたまゝ動く氣色はなかつた。佐野はもう昨日から引越しの支度にかゝつて、今日一日働いて身體は綿のやうに疲れてゐたが、いつまでもお辰の對手をして坐つてゐるのが苦痛であつた。そしてそんな苦痛や難題に困惑すればするほどお辰を見てゐるのさへ耐へられないほど嫌惡を感じた。

お辰はいつまでも默つて廣い帶の上に手をあてゝゐたが、

「わたし、もう、あなたの居處が分らなくなつてから、この一と月ほど四日め五日めに癪に苦んでゐます。……又あゝ痛い。」と消えるやうにいひながらがつくり丸髷の頭を垂れて頤を襟に埋めるやうな容をして、ぢつと胸を抑さへてゐる。

黑の錦紗絽の羽織に淡い藍色の意氣な縦縞のお召の單衣を着て、新しい、金目のかゝつた半襟を掛けて精一ぱい粧してゐるの見ると、佐野は彼女が、先の夫と一緒にゐた時分、殆ど着のみ着のまゝであつた頃から氣樂な獨り身になつて又一枚づゝふやしてゐる、若返つた生活氣分を察することが出來た。そこでお辰がそれを佐野の關係によつて滿たされやうとしてゐるのだと思ふと、佐野にとつては迷惑でもあり又氣の毒でもあつた。

「ひどく痛いの。」

佐野は手持ち不沙汰さうに訊いた。

お辰は消え入るやうにしく〳〵しながら、「えゝ。」といつたきりやつぱり胸を押へてゐる。

佐野はそんな場合でもお辰の怨みを恐れるよりも襖の向うに默つてゐるお勢以の憤怒を想像して、その方に餘計困惑してゐた。

すると襖のあちらから、お勢以は聲を掛けた。

「ひどく痛むやう でしたら、利くか きかないか知れませんが、撫でゝ見て上げませうか。」

佐野はそれに調子づいたやうに、

「うむ、それがいゝ、撫でゝもらつてみたらいゝでせう。」

お勢以がさういたのでお辰は、
「え、いや……すこし快くなりましたから、もう、それには及びません。」と謝するやうにいふ。
「御遠慮は入りませんから。」
お勢以は蚊帳の中に起き上つてゐるらしく、堅苦しい物馴れない調子で又いつた。佐野も勸めたが、お辰はたうとう遠慮してしまつた。そしてお勢以が暫くたつてから、
「ぢやこちらへ來てお休みになつたらいゝでせう。」といつて蚊帳の中の中に寢處の支度をしはじめた。
お勢以が、
「これは汚れてはゐませんから。」といつて出した自分の浴衣の洗つたのも遠慮して用ゐないで、お辰は羽織と、帶だけを取つて蚊帳の端の方に入つて横になつた。佐野は二人の女の間に寢た。もう夏の夜は三時近かつた。三人皆な別の感じで横になつてゐた。佐野は、これからどうしようといふ豫定がもうちやんと定まつてゐるので、心は何處までも平かであつた。そこで、そんなことが何でもなかつた。お勢以はひどく昂奮してゐてどうも眠れなかつた。佐野はお辰とばかり靜かな調子で當り障りのない會話を暫くつゞけてゐたが、右脇に寢てゐるお勢以と手だけ握り合つてゐた。……その時はじめて佐野とお勢以は手を握つたのである。お辰の深夜の闖入が彼等をしてさうせしめたやうなものであつた。そして彼等はいつまでも眠れないでゐたが、お辰は佐野との會話が次第に間遠になつてくるにつれて、ぐう〳〵鼾を立てゝ眠りに落ちていつた。
お勢以は、低い聲で、
「氣の毒ですねえ。」と囁いた。
「うむ、疲れてゐるんだらう。」と佐野は答へた。

（大正十一年九月作、女性掲載）

朝霧

暫く鼾を立てながら、昏睡してゐたお歌は、やがてひよつくり枕から頭を擡げて、憑き物でもしたやうに、きよろ〳〵そこらを見まはしながら、
「もう何時々分でせう。」と、蚊帳の中に並んで寢てる岡部に訊ねた。
岡部は昨夕あれから殆ど、とろりともしなかつた。お歌がもし、夜中に寢込みに何か危險なことでもしはせぬかといふ不安があつたといふよりも、さすがに彼は、出し拔けにお歌が訪ねて來たことによつて神經が昂奮してゐるのであつた。
そして、一と時切り眠つてゐたお歌が眼を覺まして、さういつたのに答へて、
「さあ、もう四時は過ぎてゐるだらうな。」彼は先程家の外で何處かの時計がたしかに四時を打つたのを聞いたやうにおもふ。
「さうですか。あゝ、知らぬ間にちよつと眠つた。」
お歌は、さういひながら、今度は、昨夕、帶を解いたゞけの轉寢の身體を、牀から上むつくり起き上つた。
岡部はそれとなく心に油斷せぬやうに、ぢつと彼女の爲ることを見守りながら、
「まあ、も少しの間寢たらいゝぢやないか。まだ起きろには早い。」
「えゝ、でも、もう歸りませう。」
といつて、お歌は氣の落着かぬやうに、こそこそ寢床の上で、寢亂れた着物の前など掻き合はせてゐた。縮緬の長襦袢もお召の單衣もくた〳〵になつてゐた。失望と疲勞とに喪然とした彼女はまるで魂の拔けたやうに呆然としながら、やがて蚊帳の裾を捲つて外に這ひ出した。そして、昨夜遲く座敷の隅に解いて置いた帶だの、それに附屬した腰のまはりの物などを取つて着物を着直した。
初夏の短夜は、もう外は大分明るくなつたと思はれて、戸の隙間から射込む薄明りに電燈は消えてゐても室の中は明るかつた。彼女は單衣のうへに絽縮緬の黒の紋付の羽織を引掛けて、衣紋を繕ひながら、胸は千々に亂れてゐても、女の嗜みだけは忘れず、次の四疊半の間の隅に置いてある鏡臺の前に

いつて膝を突きながら、懐中の櫛を取り出して、丸髷の前髪や鬢の崩れたのを直した。

岡部は、先刻から、

「まあ、もつと休んでいつたらいゝぢやないか。」

と、二度も三度も留めるやうにいつたが、お歌は、

「えゝ、でも、もう往きませう。」何處かに魂を置き忘れたやうな返事をしてゐた。

實際、昨夜からの、お歌の取亂した樣子では、これから出て往つて、眞直に自分の居る處に歸つて往かずに、何處かへ往つて、どんなことをするか分らぬとも氣遣はれぬでもなかつたが、岡部はもう、そんなことなど小膽に氣遣ふほど初心ではなかつた。

「歸るんなら、そこまで送つていつて上げよう。」岡部はさういつて、自分で入口の戸を開けて、一緒に外に出た。外はもう白々と明け放れてゐた。六月半ばであるが、好い鹽梅な天氣がつゞいて、今日もどうやら好晴と思はれ、蒼白く晴れた曉の空には一面に白い朝霧が罩めてゐた。停車場に近い郊外の家つゞきには、もう早い家では起きて、しつとり露に濕つた表の往來を掃いてゐる處などもあつた。

そこから電車のステーションまでは、四五町くらゐしかなかつた。

お歌は、極度の失望に、たど〳〵しい足を運ばせながら、

「あなた、どうぞ、私の氣の濟むやうに、本當のことを遠慮なく云つて下さい。あなた本當に私を棄てないんですか。」

彼女は口では、もうすつかり覺悟を定めてゐるやうな立派なことをいつてゐても、やつぱり、男から、棄てられるのだと宣告されるのは死ねといはれるよりも、もつと辛かつた。

すると岡部は、どこまでも、はつきりした口調で、

「棄てはしないよ、大丈夫だよ。」

「ほんたうに？」お歌はさういつて、ちよつと横を向いて男の方を見た。

「本當だとも。」

「それに違ひありませんか。」お歌は何處までも念を押すやうに重ねていつた。

「ちがひないよ。」

岡部は口の先に力を籠めて、この場合なるべくお歌を失望させぬやうにいつた。勿論、岡部は、お歌を全く棄てゝしまふ氣はなかつたのである。これまでも彼は、お歌と逢ふたびに、彼女が屢々これから先きのことをいひ出す時によくいつてゐた。

「僕はかうして、何時までも一人でゐるやうだけれど、その內に相當な對手があつたら、一人でなくなる時があるかも知れないが、それは、それとして君とは一生親しい間柄で居らうぢやないか。」

と、さういつてゐた。岡部のその氣持ちには少しの詐りもなかつたのである。

「本當にさうして下されば、わたし嬉しいけれど、……何時か、あなたに棄てられる時が來るでせう。」

お歌は、寢床のうへに腹這ひに起き直つて、卷煙草に火を附けながらいふのであつた。

「そんなことはないよ。併し今から正直にいつて置くが、僕は君と晴れて同棲することは好まない。僕には、君よりもつと適當な女が見附かるかも知れない。或は一生見附からないかも知れない。もし見附かつて、その女と同棲する時が來ても、君の方がそれを諦めてさへゐれば、僕は一層君を氣の毒に思つて、妻君は妻君として置いて、君は君で必ず可愛がるよ。男にとつては、世間晴れて一緒になつてゐる女よりも祕密に逢つてゐる女の方がどんなに樂みか知れないものだ。君とは、その隱れて樂む方をしたいのだ。」

「それは私も覺悟してゐます。」

「そんなら、私の方でも一生君との關係をつゞける。」

岡部は必ずしも、女に氣が多いといふのでもなかつたが、一度親しい關係を結んだ女と耐忍の出來ないほど厭な事情の生じない限り、互に緣を切つてそのまゝ終生の他人となつてしまふことに、何ともいひやうのない寂しさを感じた。

お歌の場合でも、彼女は實際岡部に對しては忠實でもあり岡部の方からは、それほどでなくつても、お歌の方からは、岡部に見替へる男は、廣い世界中に他にないほど、眞底惚れてゐるのであつた。岡部にはお歌のその氣持ちは十分に解つてゐた。それゆゑ彼は、お歌を妻にする氣などは初から少しもなかつたが、たゞ情婦としてならば、一生涯彼女との樂みを繼續してもいゝと思つてゐたのであつた。

お歌ももう三十代を半ば通り越した、いゝ年をしてゐるのであるから、時々話のある緣口をどれか定めて、生涯の落着き場處を今のうちにこしらへて置く方が好さゝうに思はれるのであつたが、もう二度も三度も緣運の惡かつたうへに、亭主持ちの氣苦勞と樂しさの味をどん底まで嘗め知つた彼女にしては、これから又人妻になつて、氣心の知れぬ男の機嫌氣褄をとつたり、世帶の事にかまけて、煤けた一生を送るのがいつそ厭で堪らなかつた。三つ四つあつた緣談の中には、小金のある老人の後妻といふ口もあつたが、それは後妻といひながら體のいゝ妾であつた。勿論お歌は妾であることは、さほど厭とも思はなかつた。どうせ若い時から夫運の好くなかつた自分が、もう今の年になつて、妾は厭だと思つてゐなかつた。それどころではない、妻と定つて一家の責任を持つよりも、妾で氣樂な月日を過すのが、どんなに好いか知れないと思つてゐた。妾は厭ではないが、老人の妾になるのが厭であつた。それからいふと、岡部は、たとひ自分を妻にはして

くれないにしても、又とても、自分の一生を引受けて養つてくれる見込みはなくつても、年からいつても何からいつてもお歌には不足はなかつた。

「わたし、あなたにそんなに御迷惑をかけるつもりはありませんよ。女一人くらゐ仕立物をしたつて食べてゆけます。早く家だけ持たして下さい。小さい家でいゝんですから。」

岡部はそれに對して、いつも唯、

「うむ、そのうち僕の都合が附いたら、何とかしてもいゝ。」

と、要領を得ない返事をして置いた。

お歌が今後の一生、もう人の妻は厭だ、妾にならなつてもいゝといふ心持ちと同じやうに、岡部も一生、定つた女房を持つことは、何だか自分の身體や境遇を束縛するやうで、あんまり氣が進まなかつた。それよりも妾で濟ます方がどんなに身輕だか知れないと思つた。第一ちよつと考へたゞけでも、妻帶してゐるといへば、何處かぢゞむさくつて、野暮らしく思はれるに反し、妻子は持たぬが、妾を置いて濟ましてゐるといへば、洒落てゐるやうに思はれた。

いつそ、お歌が、顏を見るたびに、あんなにいつてせがむのだから、早く何處かへ小さい家でも持たさうかと思つたが、さうすると又、自分に惚れぬいてゐるお歌のことだから、一層好い氣になつて、今までよりもゝつと絡はつて來さうなのが、うるさく考へられた。岡部の方では、お歌をそれほどまでにしなければならぬ大事な女とも思はなかつた。たゞ彼女が何處までも身を顧みて、謙遜な態度でゐれば、岡部の方でも何處までもお歌に對する關係を絕つ必要はなかつたのである。これまで屢々そんな情事に經驗のある彼は、昔からいふとほりの甚だ平凡な言葉であるが、「細く長く」といふ眞理をよく辨へてゐた。

すると、お歌との、そんなやうな關係が二三年續いた時分になつて、岡部は偶然又ほかの女をこしらへた。その女との關係は、ばた〳〵と進行した。そして、お歌が毎時もいひつづけてゐた、小さい家を一軒借りて持たすことをその女にしてやつた。その女も、岡部にとつては、理想どほりの女ではなかつたが、お歌との優劣や好惡を格別比較するまでもなく何となしに、お歌には、向うから屢々口說かれてゐても、心の進まなかつたことを、その女には進んでしてやる氣になつたゞけでも、少くともお歌よりはその女の方が何處か彼の氣に入つてゐたのであつた。

お歌は、はじめは少しも氣が附かなかつたが、この一二ケ月何處となく岡部の、自分に對する素振りに、何か知ら袖にするところがあるのが變に思はれてゐた。そのうち岡部はこれまで長くゐた居處に居なくなつてしまつた。主人を持つて奉公をしてゐるで身あつてみれば、お歌はさう〳〵身體の自由がなかつた。彼女は、岡部が自分の眼界から姿を消してし

まふと、まるで狂氣のやうになつて、彼の後を探ねて廻はつた。無論岡部の方では彼女を放棄する考など少しもなかつたのであるが、ほかに女の出來たことだけは話さなかつた。それをいふ必要もないと考へたからである。けれどもお歌の方では、それでは濟まされなかつた。それからといふものは、彼女は、主人の仕事も何も打遣つておいて、恥も見えも構はず心當りといふ心當りを岡部の居處を探ねて歩いた。そして、いろ〳〵彼女の智慧を絞つた揚句たうとう昨日の晩になつて岡部の居る處が分つたのであつた。

それから、地理に暗い郊外の住宅地を探ね〳〵、やつとの思ひで岡部の家を探しあてゝ來た時には、もう夜も十時を過ぎてゐた。そして、寢てゐる岡部を叩き起した。お歌が、それでもと、萬一の望みを繋いでゐた頼みの綱は切れて、何も斯もが、みんな、お歌が、惡い方へ、いろ〳〵と想像してゐたとほりであつた。自分があれほどに疾うから岡部に、さうして欲しいと頼んでゐた筋書のまゝに、それが、自分ならぬ他の女の爲に實現されてゐるのを面りに見た時には、彼女は失心の餘り、殆どそこへ氣絕して倒れさうであつた。

お歌はそこで、岡部を前に置いて、いろ〳〵怨みをいつた。けれども岡部は、お歌が自分達の祕密を何處までも祕密とせず、他の女の前に、それを彼女自身から暴露したことが、ひどく不快であつた。勿論さういふ男女の情事の入譯に關しては深い經驗のある岡部は、そんな場合、お歌の行動は萬々止むを得ないことであることは察してゐたが、それにしても、十七八の小娘とちがつて、相應に思慮分別の長けてゐるべき筈のお歌が、さうした愼みの足りない行動に出たことが、岡部にとつては、お歌に對する同情と興味とを殆ど減退さしてしまつたのである。

しかし、今の場合、餘りに強い絕望を抱かしめるのは、此の事を圓滑に收めるに不利であると思つたので、なるべくお歌の心を慰めるやうなことをいつてゐた。本當は、お歌が、岡部が彼女に知らしてゐない處へ押掛けて來たといふ一事が既にお歌の運命に致命的であつたのである。お歌さへ何處までも愼みを守つて、温順にさへしてゐれば、岡部は何時までもお歌の樂みとなつてゐられるのであつたが、もう今となつては、何も斯もお歌の行動によつて打壞されたのである。岡部はたとひ、片方の女に對する義理や遠慮はなかつたにしても、お歌のそんな端ない、年效もなく取り亂した行動が彼の趣味に合はなかつた。それゆゑお歌に對して、實はお前はもう厭になつたと、明らさまに口に出していつても十分な道理は立つのであつたが、今絕望の底に沈んでゐる彼女を、この上苦める必要もなかつた。

「あんた、そんなことをしては好くないよ。第一今まで一度

も他泊したことのないものが、理由もいはずに勝手に他泊したりなどして、主人に申譯がないぢやないか。又私にしてももし、こんな事が君の方の主人に知れることは甚だ好まない。」
岡部は凜とした調子でいつた。
「わたしもう、彼處の家を出たのです。」
お歌は丸髷の頭をがつくり俯向けて道の方を見ながらいつた。
「戲談いふものぢやないよ。彼處の家を出てとうするんだ。あんな、君にとつて結構な主人はないぢやないか。」
「いくら好くつても、そんなことは私にとつては何でもありません。」
お歌は實際岡部に戀し、主人の眼を忍んで偶に岡部との逢ふ瀨を、この二三年間、生命として生きて來たのであつた。
「それは、君が私をそんなに思つてゐてくれるのは誠に有難いと思ふが、しかし、その爲にお互に、もう餘り取り亂した見つともないことをしたくないんだ。あんたが、私の爲に、大事な主人の方をしくじるといふことは可くないことだ。」
「わたし、今そんなことは考へてゐないんです。」
「いや、それは可くないんだ。お互にもう、こんなことは第二の問題であつて、それよりも生活の方が大事だよ。」
實際岡部は岡部で、丁度お歌とは反對に、もう今となつては、戀だの、惚れたの腫れたのといふことが、思つてみるだけでも厭で〳〵堪らないのであつた。
「えゝんです。わたしは、貴方に棄てられたら、これから何處かへ行つて死ぬつもりです。」
岡部はそれを聽いて、わざと仰山に笑つた。
「はゝゝ、そのくらゐのことで死んぢや詰らんぢやないか。……だから僕は君を棄てないといつてゐるぢやないか。まあ、そんな十七八の小娘のいふやうなことをいはずに、こなから素直に主人の方へ歸つて、おとなしくしてゐる方が好いんですよ。」
「ぢや何時逢つてくれるんです。わたし、もつとよく貴方に訊ねてみたいんです。」
「うむ、それは何時だつて逢つてもいゝ。けれどもそんな取り亂しては可けない。」
「それは當然ぢやありませんか。あなたが、あゝいふ人と一緒にゐるなら、ゐても、それを私が何ともいふことが出來ないんですけれど、それなら、それで一と言わたしにさういつて置いてさうして下すつたら、なにも私はいはないんです。」
「いや、それは、一應君に明かした方がよかつたかも知れないが、しかし別段君にお斷わりしてしなければならぬことでもないんだもの。何をしたつてお互に差支へない。」
「それはさうですけれど……」

お歌は何といつても、みんな岡部からいひ被されしまつた。しかし、今の場合、それは道理や言葉で彼女の胸の苦痛は少しも治らなかつた。岡部に、自分のほかに增す花が出來て、それと一緒に住んでゐるところを、まざ〳〵見せられたのが、彼女には、もう何ともすることの出來ぬ絕望の思ひであつた。それゆえ此の際、彼女の湧き立つ胸を鎭める方法はほかにはなかつた。たゞ、岡部にとつて、彼女と彼女の競爭者の、どちらが優勝者であるかといふことが分りさへすればよいのであつた。お歌は何とかして、それを岡部から訊いて滿足しようと思つた。彼女の考では、男といふ者は氣の多い者であるから、今一度の浮氣から、あんな女と一緒に住んでゐるけれど、自分とは昨日今日の關係ではないのだ。今に岡部の目が覺めたら、やつぱりもとの自分の方に心の撚りが戾つて來るにちがひない、あんな女に生命よりも大事な男を取られては堪らないといふ腹があつた。けれどもそれはお歌の果敢ないうぬぼれであつた。
お歌は、なるたけ足を前に出さないやうに步いてゐたが、それでも四五町の道は盡きて、やがて省線のステーションまで來た。
電車はもう直に四時何分かの初發が來る時分と思はれて、驛員が眠さうな氣のない顏をして改札口に立つてゐた。まだ乘客も來てゐなかつた。
お歌はすぐ乘車劵を買つてプラットホームに出ようとせずに道を反對の方に橫に曲つて、
「あなた、それで私のことを何うして下さるんです。」と岡部に絡はるやうにいつた。
岡部は心の中で、それを持てあましながら、そんな顏も見せず、
「どうしてくれるつて、私はあんたの一身を引受けてゐる譯ぢやないんだもの。そんなことをいはれたつて、どうも出來ない。お互に獨立して、それぞれ都合の好い生活をしながら、そのうへでお互に樂しまうといふのが、私のそも〳〵からいつて來たことなんだ。」
岡部はそれ以上は口に出さなかつたが、お歌は、何處までも因緣を附けて凭れ掛らうとすれば、するほど彼は、刻々にもお歌に厭氣が差してくるのが、丁度水でも退いてゆく後を見てゐるやうに分つた。勿論お歌が、昨夜からいつてゐるやうに、鎌倉へ行つて死なうとも、銚子へ行つて海に入らうとも、それは彼自身の關係したことではないと思つてゐた。實際さう思つてゐた。何となれば、たとひお歌が、口でいふとほりに死ぬとしても、それは、岡部に棄てられて死んだとはいはれないのである。岡部は決してお歌を棄てる氣は昨日までなかつたのである。ほかに新しい女が出來ても、お歌はお歌で、そうッとして置いて樂むつもりであつたのだが、お歌

が自分でぢたばたしたゝめに、俄に岡部の心に厭氣が差したまでである。

「さあ、もう、何時までもそんなことをいつてゐないで、少しも早く日本橋の主人の方へ歸つた方がいゝんだよ。」

岡部はあまりくどくはいはなかつたが、お歌が、彼のいふとほりに素直にしてゐれば、やつぱりお歌に時々逢つてやつてもいゝと思つた。

「わたし、これから何處へ往くか分りません。もうこれきりお目にかゝらないかも知れません。」

お歌はまだ心が中ぶらに迷つてゐるらしく云ふのであつた。

「それは何處へ往つたつて、君の御都合次第ぢやないか。わたしが、どんな事をしようとも、何處へ往かうとも君にことわる必要のないとほりに、君も勝手な行動を取ることを、私は決して何ともいはない。」それでも言葉だけは優しくいつた。

「わたし、これから鎌倉へ往かうと思ひます。」半分獨言のやうにいつた。

「それは何處へでも。」

そのうちに最初の電車が來た。一人二人工廠へでも行くらしい男が乘つたきり、お歌はそれには乘らなかつた。少しゝて二度目の電車が來る前になつてやつと彼女は、切符を買つて改札口に進んだ。だん／＼東の方が明るくなつて、太陽がまだすつかり眼の覺めぬやうな顔をして朝曇りの中から淡い輪廓だけを見せて來た。乘客も三人五人づゝふえて來た。

（大正十四年作改造掲載）

はげ白粉

お歌が、この前夜遲く出拔けに岡部の處を襲うて來た時には、今にも死にたいやうなことをいつてゐたが、あれから死にもしなかつたと思はれて、一と月ばかり經つた、もう土用もそろ／＼明けようといふ、朝から、じりじり燬き付けるやうな暑い日であつた。岡部の處では、これから朝の御飯にしようといふところへ、お歌は出拔けにやつて來た。

三室しかない狹い家であるうへに、夏の最中とて、横丁からすぐ入口になつてゐる玄關の三疊とその奧の茶の室との障子をはづして表から臺所の方まで見通しになつてゐるので、岡部は、四月から同居してゐるお照と餉臺を挾んで箸を取りかけてゐるところへ、誰か表の入口の前にちらりと姿を見せて通り過ぎた女があつたと思つたら、その足音は遠くへ行かずして、すぐ羽目板の外の、お勝手口の方へ廻る露地に響いて來た。その奧に岡部の處と一つ井戸の水を汲んでゐるもう一軒の小さい家があつて、家主の弟が夫婦で住んでゐた。そこへも時々人の出入りがあつた。

と、箸を手に取り上げてゐたお照は、輕く直覺的に悟えたやうな眼をして、

「お歌さんのやうな人間だつた。丸髷に結つてゐた。」と厳談のやうにいつてゐるところへ、件の足音は、すぐ茶の室の肱掛け窓の下に聞えて、そこにかけた簾垂れの外に映つた影はまぎれもないお歌であつた。彼女は、わざと玄關の方から訪はずして、いきなり臺處口に姿を顯はしたのであつた。しかし、さうなると、出來るだけ、事を荒立てまいとする岡部にも、すぐ、腹の中で強い依怙地が頭を持ち上げた。

が、そんな樣子は顔にも出さず、事も無げなる調子で、氣輕に、

「やあ、おいでなさい。この暑さによく早くから。……そんな處から來ずに表から入ればよいのに。」といつた。

するとお歌の方でも、洒あ／＼した調子で、

「あたし、此處の家へ來るんですもの、何處から入つたつて構はないわ。」と、笑ひながら馴々しくいつた、

そんなことをいふのも、お歌にしては、實に遣る瀬のない照れ隱しであつた。といふのは、彼女はもう、今からまる二年も前から、自分が丁度お照のやうな地位に居りたい考であつたのだ。つい一と月ばかり前までは、岡部の氣持ちさへ風向きが好い方に向いて來れば、自分の思ふとほりの寸法になつて來るかも知れぬといふ、自惚もあれば、空頼みもあつたのである。すると、それまでは、始終のやうにお歌に顏を見せてゐた岡部が、何時の間にか、彼女には告げずして何處かへ居處を轉じてしまつたことが分つた。そして、さう氣の附いた時には、お歌が長い間空想に描いて樂しんでゐた筋書がお照といふ知らぬ女の爲に書かれてゐたのであつたことを思ひ當つた。お歌は始めてそれと感付いた時には全く瞋恚の焔に身を燒くばかりに、絕望と憤りとに懊惱したのであつた。彼女は一と月ばかりの間、まるで氣が狂はしくなつたやうになつて東京中といふ東京中を、岡部の後を追驅けて探し廻つたが容易に彼の居處を突留めることが出來なかつた。東京ばかりでなく何處へでも身輕に行ける岡部のことであるから、もしかしたら京都か大阪の方へでも行つてゐるのではないかとも考へたが、さう思ふと、倍々雲を摑むやうな遣る瀬のない、たよりなさに胸が痛んだ。しかし、もう四十の峠を越してゐるお歌は、岡部より前に二人も三人もの男との間に經驗した、色情の經驗から、必死の智惠を搾つて、死にもの狂ひにやつと一と月ぶりで、岡部の居處を突留めた時には、彼女が恐るおそる想像してゐたとほりに岡部は、自分ならぬお照と新しく家を構へて一緒に住んでゐた。お歌は、大抵さうであらうと覺悟はしてゐたもの〻、面りにその有樣を見ると、岡部に面當てにその場で一と思ひに死んでしまはうかと思つた。

「わたし、お照さんに、岡部さんを戾してもらひに來たんです。」と、その時お歌は、襖の向うにもう寢てゐたお照に聞えるやうに、岡部に向つて厭味の有りつたけをいつた。そしてその晚、東京の方へ歸つて行くにはもう夙に電車もなくなつてゐたし、お歌は、何處まで押強く惡垂れて出て、

「わたし、もう歸つて行く處はないんです。此處へ泊めて下さい。此處は貴方の家ぢやありませんか。」と、いつて、たうとう、お歌はお照と二人で、岡部を中央にして一つ蚊帳の中に横はつて短い夜の明けるのを待つた。

その時岡部は、お歌の心中を察して、哀れに思はないこともなかつたが、そして又、彼女の强請がましい、取亂した態度に出て來たことにも全然理由のないこと〻も思はなかつたけれども、岡部にしては、なにも、お歌に對して、そんなことをしてならないといふ義理もなければ、せぬといふ約束もしてゐなかつた。そしてお歌が、年效もなく、岡部がまだ自分の居處をお歌に打明けぬ前から、そんな取亂した態度で押掛けて來たといふことが、直ちに、一夜にして岡部に嫌厭の

情を萠さゝしめたのであつた。

とにかくお歌は、その翌曉早く起き出でゝ、岡部の心の奧底に、懸念の中にも、尙ほ幾分かの果敢ない希望を繫ぎながら、悄然として歸つていつたのであつた。——その時お歌の取つた態度が、たゞそれだけのことならば或は岡部の胸の奧には、お歌の悲しい戀の運命が尙ほ持續せられたかも知れなかつた。すると、破れた戀に千々の心の亂れたお歌は、自分だけの淺はかな考から思案の末、岡部が平常から目上の友人として親しくしてゐる繁野の處へ飛込んでいつて岡部と自分とのこれまでの關係を、すつかり打明けたうへに、自分といふものを棄てゝ置いて、岡部がお照といふ他の者と一緒に新しく家を持つて納まり返つてゐる不人情な仕打ちの有體を聽いてもらつた。お歌の考では、繁野は、岡部が平常から目上の友人として交際してゐる人間であることを聞いて知つてゐるので、繁野さんに聽いてもらつたら、此の場合岡部に反省を促すに最も有力な、そして賢い方法であらうと思つたのであつた。

お歌からの話を聽いた繁野は、果して、お歌に同情を寄せた。お歌はその時、穩かな應答をしながら始終を聽いてゐた繁野に向つて聽く方が同情をするのに附け上つて、生命にかけても何とかしさうな調子のことをいつて繁野を嚇かした。正直な大事取りの繁野は、當の對手である岡部の事も心配だが、あまりにお歌の權幕が凄いので、友達の自分までがその傍杖を喰はされはせぬかといふやうな臆病な恐怖を感じた。繁野は、

「私が惡いやうには計らひませんから、まあ二三日待つて下さい。」と、お歌を宥めて置いて、一方岡部の方にそうとその事を傳へて、此の際岡部の取るべき措置について、彼の意向も糺し、又繁野自身の意向として注意もしたのであつた。

すると岡部は、今までお歌と自身とより他に何人にも知らさない自分達の祕密が、さうしてお歌の口から繁野に洩らされたといふことを、ひどく不快に思つた。友人としての繁野の好意と配慮とは有難いと思はぬことはないが、お歌が自分達の祕密を——むしろ自分が岡部と關係のあることを多少得意になつて繁野に明かしたりしたといふことが有力なる原因になつて岡部はもうすつかりお歌が厭になつてしまつたのであつた。岡部はよく、お歌に向つても、いろんな世間話しの中に、繁野のことなども話してゐた。それは大抵毎時も繁野に敬意を持つてゐるやうなことであつた。そんなことから考への單純な思慮の淺い彼女は、繁野から話せば、岡部に對して威壓の利くゝらゐに思つたのであつた。しかし、岡部が結局お歌よりも、後から知つたお照を選んだのは、その邊に少しは有意の選擇がない譯でもなかつたのである。それゆゑ假ひ繁野の話があつたにしても、最早お歌に對する縒を元へ戾す

ことは出來なかつた。

　岡部は、お歌がそんな調子で、自分の家へでも入つて來たやうに、又押掛けてやつて來たことから、すぐ心の中で、これは、てつきり繁野から調子のいゝことをいはれたゝめに、四十を越した年にしては考への淺果なお歌が、すぐ又その氣になつて、岡部の心底に自分の脉がまだ十分打つてゐるものと自惚れてゐるのだといふことを察したのであつた。

　それならばそれで、お歌は、お照の居る岡部の家へ公びらにやつて來ない方が、どんな悧巧であるか知れないのに、そんなにして來れば來るほど、自分で自分の願つてゐる幸福を打ち壞すやうなものであつた。それが彼女には解らないほど彼女は、淺果な女であつた。そして、その淺果さが表面的なものになつてくれば來るほど、岡部には一層お歌が厭はしくなつてくる。

　岡部は一寸むづかしい顏をして、

「そんな處から入つて來ずとも、あちらの玄關の方から來ればいゝぢやないか。別に逃げも隱れもしないよ。」

「えゝ、こちらの方が上りよくつてえゝですもの。」そんなことをいひながら、お歌はもう臺所の板の間を踏んで茶の室の方に上つて來た。

　お照も爲方なく口を出して、

「あちらの座敷の方にいつたらいゝでせう。」と、岡部にいつた。

　お歌はてら／＼するやうな丸髷に結つた顏にこつてり白粉を刷いてゐるのがじり／＼するやうな暑さに汗で流れてゐた。額の生え際の薄い、白粉燒けのしたやうな顏は、ちよつと垢汁拔けがしてゐたが、何となく淫婦型の女であつた。

　彼女は八疊の座敷の方に來て坐りながら、

「隨分暑いんですのねえ。」と、蓮つ葉な調子でいつて、手巾で襟頸の汗を拭いた。

「暑い。こんな暑いのによく出掛けて來たものだなあ。」岡部は爲方なく、餘處々々しい風でありながら、又そんな風でもないといつたやうな親しみの口調でいつた。

「今日は一日わたしの公休日ですから……」

「それにしても、よくこの暑さに出歩く元氣があるねえ。私なんか、とても外へなど出掛ける勇氣はないよ。」

　岡部はどこまでも水をかけるやうな冷いことを婉曲な調子でいつた。

　お歌は、それには答へず、

「濟みませんが、わたし、あつちへいつて身體を拭かしてもらひたいんです。」といつて立つて臺所の方へいきさうにした。

　お歌は妬ましいやうな、照れ隱しのやうな妙な氣持ちから

何だかお照の居る處にいつてみたかつた。お照は、岡部とお歌とが八疊の方にいつてゐる間に、自分は其處の流し元の方にいつて、何かしてゐた

　岡部は、お歌がそんな調子に絡んで出るのが一層厭はしかつた。

「いゝよ。水は此方に汲んで持つて來るよ。」

　さういつて岡部は自分で金だらひに水を汲んで座敷の緣側に運んだ。お歌はそで兩肌を脫いで、身體の汗を拭き取つた。この頃流行の市松縮みの薄い木綿ものゝ單衣を着てゐるのが、年よりもずつと派手であつた。

　やがてお歌は肌を入れて又そこに坐りながら、十七八の若い藝者でも持つやうな緋の入つた鹿の子絞りの女煙草入れを取り出して、細い煙管を吸ひはじめた。

　岡部は、その樣子を微笑を含みながら見守つてゐたが、此の間の晩來た時には、今にも死にさうなことをいつてゐたが――もとより岡部はそれを眞劍に受取つた譯でもなかつたが――そんなに容易く死なれるものではないと高を括つてゐたら、果してそのとほりだつた。

　お歌は、二三度煙草を吸つたあと、

「あなた、御用があるんですか……井の頭へいきませんか。」といつた。

「井の頭へ！」と、岡部は、その氣もなさゝうにいつた。そして腹の中で思つてゐた。お歌が此の間の晩のやうなことがあつて、今日又ふとやつて來て、そんなことをいふのは、これは、きつと繁野に氣休めなことをいはれて、浮かうかと岡部を誘ひ出す氣になつたものであらう。

「岡部君は決して腹からあなたを棄てる氣はないんだ。」とでも、きつと繁野は體の好いことをいつたにちがひない。それをお歌が正直に聽いたのであらう。

　岡部は暑さうに顏を顰めながら、

「井の頭へ往く！……とても此の暑さに、私はそんな男氣はないよ。」と、遁げを張つた。

　岡部はお照に遠慮したいといふよりも繁野に氣休めなことをいはれたくらゐで、すぐふら／＼と誘ひ出しに來たりするお歌の淺果な態度が、共に大事な祕密を守ることの不可能であることを知つて、ます／＼お歌を思ひ放す氣になつたのであつた。それで、心からお歌を輕んずるやうな氣持ちになつた。

「あんた此の間の晩來た時には直ぐにも死ぬやうなことをいつてゐたが、まだ死なゝいのか？」と輕く笑つて見せた。

「えゝ、死なうと思へば何時でも死ねますから……」お歌も爲方なさうな表情をして、照れたやうな笑ひ方をした。

「死なゝい方がいゝさ。私なども丁度あんなやうな事で死ぬほど怨みに思つたこと度々があつたが、決して死なうとは思

はなかつた。自分で死ぬより、何とかして此の怨みを晴らさうと思つた。」

「わたしが今丁度それと同じことぢやありませんか。」お歌は突掛るやうにいつた。

「うむ、それはさうかも知れないが、しかし死ぬことは六ケしいことだよ。そんな死んだりするなどするよりも、生きて又新しみを求める方が賢いんだよ。」

岡部はさういつて、口の先きの言ひ廻はしで問題を、だん／＼第三者の噂ばなしのやうにしてしまつた。そして、呆けた顔になつて、

「あんたまだ獨り？」と、その口裏にはお歌に未練があつてそんなことをするといけないなぞと思つてゐるやうな意味を示した。

「そんな者はありませんよ。」お歌も笑ひながらいつた。

「さうか。……それは感心だなあ。あなたのことだから、もう新色でもこしらへてゐるだらうと思つてゐた。」

するとお歌は一寸眞面目な顔になつて、

「わたしは眞面目なんですもの。」

「あゝ、それはよく分つてゐますよ。……まあ何しろ暑さではねえ　とても何處へ行くといふわけにはゆかない。今にもつと涼しくなつたら一遍何處かへお伴しますよ。」といつて、岡部は又暑さうな顔をして軒端の方に動いてゐる風を眺めた。

お歌は少時してから、爲方なさゝうに、

「ぢやわたし一人で井の頭へでもいつてみようかなあ。」

と、いつて又悄然として炎天の下を歸つていつた。岡部はそれを氣の毒と思はないでもなかつたが、お歌が自分で祕密を暴露したのであると思へば、それも爲方のないことであつた。

（大正十四年七月作、改造掲載）

墓域

あなたは、グレーの墓地の歌を讀んだことがありますか。英文のグレーの歌でなく塩田藤之助氏の譯した漢文づくしの一種の調子を帶びた悲哀の歌のことです。

私は學生時代あの譯文のグレーの墓地の歌くらゐ好きな歌はありませんでした。

「この村の先人永へに此處に眠る。」

あの歌を諷誦するごとに、未だ嘗て私の聯想は私の郷里の片山里の墓域に飛んでゆかないことはありません。たまに郷里にかへつて村代々の人の骨を埋めてある墓域に入つていつて苔蒸した石碑の前に立つたとき、私はまたグレーの墓地の歌を想起せずにゐられません。

「この村の先人永へにこゝに眠る。」

私はグレーの歌を低聲で口に誦しながら樫や櫟の木蔭に掩はれた墓域の中を歩いて、今は地下に瞑つてゐる私の少年時代に見知つた人の世にありしころの容貌、性癖、言語などを追想しながら墓標を探して名狀し難い傷はしい心地に浸るのです。

私が少年時代に見馴染んが顔は大方みな冷たい地の下に埋つてしまひました。それゆゑ私は、たまに產れた村に歸つても、その土地に對する感情が以前ほど懷かしくなりました。生きてゐる人間よりも冷たい石碑となつてゐる人達の方により深い懷かしみを感じます。

私の家の墓域の隣地には、すぐ隣家の墓があつた。私がその中に入つていつて目についたのは白井文藏行年五十二とした小やかな花崗石の石碑であつた。

「文やん」と村の人は呼び馴れてゐた、温順しい好人物であつた。私はその「文やん」についてもまたいろ／＼な記憶を持つてゐる。

二十年の長い間郷里にゐない私は、「文やん」の死んだ場合を知らない。二日か三日か腹が痛むといつて寢てゐたのが、どうも捗々しくなつかた。私の家と毎晩かはる／＼風呂を立ててゐた兩家の間は目として顔を合はさないことはなかつた。「文やん」がどうも良くないといつてゐた。その二三日めの朝早く裏の隣家で「ああッ」と女達の泣く聲が聞えた。私の家

の者が急いで駈けつけると、「文やん」は既に現世の人ではなかつた。

「文やん」は川漁が巧者であつた。私の村には海がありません。その代り川には香魚の美味が捕れます。それは私がいくつの頃か明かに記憶してゐません。十五六の時分であつたかと思ひます。

「文やんが魚を捕りにゆくといふから、行かんか。」私のすぐ上の兄がいひました。

私は雀躍して悦びました。

やがて「文やん」と兄と私との三人は、私達の村の田に水を灌漑する三里山奥の大きな池から流れて來る川を傳うて半道ばかり上つてゆきました。その川には細い水が絕え〴〵に磧の間を流れてゐるにすぎませんが、處々にかなり深い淵を湛へてゐました。私達はその淵の一つに香魚がついてゐさうなのを見て、そこに網を入れて魚を寄せました。やがて私の脛の漬るくらゐの淺い方に網を狹めてゆきました。段々磧の水のところまで追ひつめて寄せ來ると、

「四五十はをりさうぢや。」と、文やんは、網に圍まれた水の上を見渡しながらいひました。

すると淺い磧の水際に立つて靜と見てゐた私は、その網の中を、ツ、ツと眼にもとまらぬ疾さで逃げようとしてゐる黑い大きな魚を認めました。それは鯉でした。私は、突如、

「あゝ鯉がをる」と叫びました。

「文やん」と兄とは聲を上げた私の方を顧みました。「文やん」は默つて嫣然としました。

兄は本當かといひました。

「うむ、をる〳〵。」と、「文やん」は自分でも鯉の正體を認めて、さういひました。

さうしてなほ段々網を狹め〳〵投網で香魚を捕つてゆくと、鯉は二尾網の中に圍まれてゐることが分りました。そしてとゞその二尾の鯉を生捕りました。

「文やん」はやゝ弱つた一尾の鯉と幾十尾の香魚とを分つて私達にくれました。私達はそれを携へて家に歸り、父を初め家中の者のその晩の食膳に上しました。

「これは思ひがけもない御馳走ぢや。」といつて、父は悦びました。

その網の中に鯉を發見した時くらゐ、嬉しいことはありませんでした。二十四五年後の今日になつても、私はその磧のこと、鯉の色、「文やん」のにこりとした顏を忘れることが出來ません。けれども鯉の食膳を悦んだ父も、その兄も、「文やん」も皆な今はもう現世にはゐません。父の他は、二人ともまだ生きてゐても不思議のない年配です。然るにその人達はいづれも死んでいつてしまひました。

「文やん」の傍には「文やん」のお母さんが眠つてゐます。この婆さんについては私は忘られない追憶を持つてゐます。婆さんは何時死んだのか、たしか「文やん」の死よりは何年か前でせう。「文やん」の母親らしい好い婆さんでした。私の記憶するかぎり初からもういゝ加減な老婆でした。皺はあるが色の白い眞白髮の婆さんでした。

私が學生時代に、東京から暑中休暇で歸つてゆくと、「今年もまだ生きてゐますぞ。」と、いひ〳〵した私の上から二番目の兄が二十九歲で肺炎で死んだ時に婆さんは私の母に向つて「代れるものなら、代つて上げましたい。」と、いつたと言つて、私の母はそのことを繰返して話してることがあります。

「私は、もう現世に飽きました。」と、婆さんが私の母に話したこともきいてゐた。

「裏の姥さんくらゐ生きてをつたら、この世に飽きもせうぞい。」と、母はいつてゐました。

私の兄の死は非常に母の心を傷りました。裏の姥さんは、私の母などに比べて遙に長い間悲しい經驗を經て來てゐました。

「おばさん、子供に死なれてつらいのも三年辛抱なさい、三年經てば大分薄らいで來ます。」と、裏の姥さんは母を慰めていつた。

母は、また、三年經てば、いかなる悲みも多少稀薄になるものだといふ、老婆の經驗談を自分の心に省みて、裏の姥さんのいふとほりぢやといつて、屢々繰返してゐました。

私は、西洋人の簡易な碑文の文句が好きです。今もし西洋の碑文にあるやうな言葉でこの老婆の生涯をいひ盡さうとしたら、どういつたら好いでせうか。

彼女は、幾多の悲みに耐へつゝ、平和なりし長い生涯を卒つて今や安樂なる天の國に永久の眠に就いてゐる。と、でも申しませうか。

その婆さんが、何年前の夏の終でありましたらうか、暑中休暇が果てゝ、私が再び東京へ歸つて來ようとする間際であつた。

「また遠方へお出んさるか、もう行かれねばよろしいに……來年の夏でなければ、またお目にかゝれませんなあ。その時生きてゐてお目にかゝれますやら、もうわかりません。」と、いつてゐたが、私がこれから家を出ようとする時に、婆さんは、村の駄菓子屋から、一握りの金平糖を買つて來て、半紙に包んだまゝ「少しぢやけど、これを退屈した時に、汽車の中でお上んなさい。もう私も此次はあなたによう會ひませんわ。」

と、いつて、婆さんは杖にすがりながら、私の降りようとしてゐる上り框に腰を掛けて休息してゐました。

婆さんの歸つた後で、私達家の者は、裏の婆さんが、私の

出立に際して、一握の金平糖をくれたことを、寂しい微笑を以つて批評しました。

「どうしたんだらう。今までこんなことはなかつたが。」私はいひました。

「お前が手紙を自宅へよこす時に、よう裏の姥さんはまだ達者かとたづねて來ることを姥さんに話すもんぢやから、姥さんはそれを悦んで、毎度たづねて戴いて有難うございます。と、お禮をいうてをつたんぢや。またお前が歸つて來ても、姥さんに優しういうて上げるから、此の間もその話をして、いつもお前に深切にいうてもらうというて、喜んどつてぢや。それで、大方くれたんぢやらう。」

と、いつて、母は、二十をもう三つ四つも過ぎた私に一握の金平糖を紙に包んでくれた裏の姥さんの心を愛惜みました。さうして一同で寂しく笑ひました。

「もう此次は會へません。」と、杖に縋つて太息を吐た時、長命した婆さんも流石に衰へが見えてゐた。

その翌年の夏は私は學校を卒業して、暑中休暇には國に歸りませんでした。學校を出ると自活せねばならぬ私は、自分の生活や仕事に追はれて田舍の方のことを思つて見る心の餘裕がなくなりました。それのみならず、私は間もなく獨身でなくなつたので、一層心が近い自身の居周にばかり引寄せられて、さういふ純潔な愛惜の情に耽けることが出來なくなりました。

その後引續いてまる五年の間私は田舍にかへりませんでした。婆さんは次の夏にはまだ生きてゐたといふことだが、とにかく五六年田舍に行かなかつた間に、いつかもう亡き數に入つてゐたのでした。

私は、それにつけても自分が獨身でゐなかつたことを憾みます。私は長い間女といふもの丶恐るべき力に、若しさうでなかつたならば清かるべき心を毒されたことを悲むのです。此處に男女があつて夫婦となり、それに子供が出來て夫婦親子の關係は一層離るべからざるものとなり、それがために人間の心は一層偏愛的になります。往々にして邪惡になり、罪深くなります。

「お前が金平糖をもらうた時が最後ぢやつた。裏の姥さんもたうとう死んでぢや。」と、母が語つて聞かせたのは、私が五六年ぶりに故鄕に歸つたときに、いろ／＼村の出來ごとについてきかされた、その雜話の一つであつた。

「さうか、あの姥さんもたうとう死んだのか。」と、私は淡い追憶に入つたが、どういふものか、さういふことが、以前ほど純眞に私の胸に淸い潤みをもつて想ひ起されませんでした。

私は、そんなことを思ひながら、行年八十六歲とある婆さんの石碑の前から二三歩動くと、そこには行年二十九歲なか

と刻んだ信女の小やかな花崗石の石碑が眼にとまつた。なか？二十九？はて誰のことであつたらう？と私はしばし古い過去を默想してゐました。明治十八年死亡と誌してある。今から三十年も前のことである。

すると、段々私の頭の中に、朧げな記憶が浮んで出て來ました。二十九歲で三十年前に亡くなつたなかといふ信女は「文やん」の前の妻であつたことを思ひ起しました。

二十四年前であつた。「文やん」と兄と香魚を捕りにいつた川にたつた一夜の豪雨で、此の村の古老でさへ六十年來嘗て覺えぬといふ洪水が氾濫して、村の中を大きな材木が流れたことがあつた。

その時河原に沿うた墓地が流失して、その「文やん」のおかみさんの墓も洪水のために崩れて流れてしまつた。五六日經つて空が晴れて、溪流のやうな川の水が間もなく減つてしまふと、そのおなかさんの朽ちた棺は川の下の方に流れかゝつてゐた。それをまた元へ拾つて來て埋めたのだつた。

そのおなかさんは、私にいろ／＼な記憶を想ひ浮べさした。おなかさんは三十年の前に信女になつてしまつたのだ。二十九で死んだのかなあ。と、私は思つて石碑の前に突立つてゐた。

私が裏の茶園の柿の木にのぼつて蟬を捕つてゐると、高い樹の上から、築地塀を越して明け放した「文やん」の家の中がまる見えに見えてゐた。おなかさんは座敷の眞中に死病を患つて寢てゐたのだ。瘦せた腕が私の眼に見えてゐた。

おなかさんは三十年前に信女になつてしまつたが、生身でゐるころは、子供の私の耳にもいろんな噂が入つた。

無口な結構人の「文やん」が、此度といふ此度は勘忍ならぬ、どうでも離緣すると、やかましく言つたのを傍の人が仲に入つて無事に收めた。

「文やんも、此度は勘忍袋の緒が切れた。無理はない。」

さういつて私の母が內でだれかと話してゐたのが沈痛に、子供の私の耳に入つたことを覺えてゐる。

「姥さんが、田圃からかへつて、『具合は、どうかのう』といつて、嫁さんの寢てゐる納戶を覗くと、蒲團のかさが高うなつてをるので、よう見ると、嫁さんは、姥さんがさういうてたづねても、默つて寢入つた風をして橫を向いてをるのに、蒲團がもく／＼中で動くので、姥さん不思議に思うて、納戶に入つていつて蒲團を捲つて見ると、榮十さんの頭が見えたので、知らねばとにかく、それを見ては、平生何にもいはぬ人の好い姥さんも默つてをられなんだのぢや。」

私は、母が切齒しながら、たれかと話してゐるのを聞いてゐた。

おなかさんは、多淫な、そして我儘者であつた。田舍では忙しい收穫期に、その日自分は病氣だといつて野良に出ない

で、夫や姑を出しておいて一人家に寝轉んでゐた。横着病をやかましくいつて野良に追ひ出すやうな夫や姑ではなかつた。

事件は姥さんが榮十さんの頭を發見してから六ケしくなつた。しかしおなかさんにさういふ行ひのあるのは、その時に初つたのでもなければ、その時初めて見付つたのでもなかつた。よくない噂は村中に知れわたつてゐた。

大柄な肥り肉のおなかさんが、痩せ細つた腕を重さうに蒲團の上に投げて死病の床に横つてゐるのを私は柿の木の上から見たことをまた考へた。

私の記憶にない時分から三里ばかり西北にあたる山の中から此の村に嫁して來て、さういふ話の種を殘しておなかさんは二十九で信女の數に入つたのである。

私は、おなかさんのことを思ひ出したので、此度は、またすぐそのとなりにつゞいてゐる榮十さんの墓地に入つていつた。榮十爺さんの家は此の村は申すに及ばず近郷にも知られた舊家であつた。そこの家の話は母にたび／＼聞かされてゐた。

大きな長屋門に茶碗を伏せたやうな大きな飾り鋲を一面に打つた厳めしい觀音びらきが付いてゐた。そして狐色した大きな犬がいつでも門の中の廣い庭をうろついてゐて、人が入つて來ると、凝乎とそちらを見詰めた。穢多といふものが國の法律の面から拭はれた後でも、川向に大きな部落をしてゐる×××が榮十さんの家に來たときばかりは中庭に面した玄關に土下座をしく口をきいてゐるのを私はたび／＼見た。

しかし私の覺えてからも、さしもに誇つてゐた榮十さんの家も遂に逼塞してしまつた。母の話では榮十さんの兄さんの重左衞門といふ人は、近郷に重望を負うた人であつたが、私の二番目の兄が生まれた時に二十九歳で亡くなつた。その私の兄はまた二十年前の正月數へ年二十九になつた五日めに敢なくなつたのであるから、重左衞門さんの死んだのは、もう五十年も昔のことだ。

その重左衞門さんの墓碑も私の前に立つてゐる。大村重左衞門重之の墓と上品な石塔の表に刻んであるのがそれであらう。

重左衞門さんは備前の黑住敎の開祖黑住宗忠の篤信家で、蒙昧な村の者どもを自分の家に集めて說敎をしてきかしてゐたといふことだ。その人が亡くなつてから大村の家はいよいよ傾きかゝつた。

娘を迎へた婿養子が、今の取引所がまだ米濱といつてゐたころ始終のやうに岡山に出て相場に負け、果ては中島の妓といふものに（女郎）迷ひ込んで多くの金を持ち出して行くへをくらました。村中の知音近づきは八方に手を分けて、播州から備中の方まで探しに出た。

さういふ古い話を母から聞かされてゐた私は、その養子の名から甚四郎屋敷と村の者が呼んでゐた、大村の先祖からつゞいてゐる、旦那寺の方丈の他には比べるものゝない薄暗い大きな茅葺きの家が本屋だけ取殘されて、附屬の建物をそつくり叩き崩して、餘處の村へ買うてかへつたその時、凄まじい土烟りを騰げて槌で壁などを叩き壞してゐる有樣を、私は子供心に恐怖に滿ちた眼で見てゐたことを覺えてゐる。

化物屋敷のやうに見る影もなく荒廢したその本屋は何年の間かそのまゝ雨風に曝されて立ち腐れてゐました。後にはそれが私の家の酒倉にも用ゐられてゐたこともあつた。そのうち買手がついて、明日から人が壞しに掛つて、餘處の村へ持つてかへるといふ晩であつた。その以前から、その中にあつた酒造に使ふ桶や樽の類などをすつかり持ち運んでおいたその空家から火が起つて、瞬く間に燒け失せてしまつた。放火人はその翌朝すぐ捕つた。それはその伽藍洞のやうな家の半分を仕切つて、裏側に住んでゐた瀧兵衞の仕業であつた。瀧兵衞も親代々から此の村の住人であつた。百姓をするよりは才覺が利いてゐるので薄資本の商ひなどをしてゐる者であつた。前から米濱にかよふといふ噂があつたが、ある朝のことその家の裏手の柿の木にいつて首を縊りかゝつたところを發見されて意見をされて助けられた。

「瀧兵衞が首を縊りかけたといの。」

といふ噂がつたへられて、村の者の笑ひ話にせられた。それから間もなく放火したのだ。瀧兵衞はその翌日すぐ郡の警察署に引いてゆかれたが、放火犯として重罪に處せられた。

それも三十年も前のことだ。その後牢死したとも傳へられ或は放免後そのまゝ村に戻らぬのだともいはれたが、今日となつては、瀧兵衞のことなどを想ひ起して見る者は、私のやうな暇な人間の他にはありますまい。

その火事の晩のことを、私はいまだに忘れることが出來ぬ。

村の眞中に立つてゐる半鐘は、寂しい冬の夜半に、どんなに、靜な眠に落ちてゐる村の者共の安らかな夢を驚かしたことであらう。氣立たましい半鐘を搗る音は、暗い夜の底に靜まつてゐる村の屋根の上に響き渡つた。その時分長い病に臥つてゐた父は、老母に扶けられて起き出で見てゐた。

甚四郎の本屋は、私のうちの酒倉に接近してゐた。もし不幸にして酒倉が類燒したならば、私の家は殆ど家産を一夜の間に烏有に歸してしまはねばならなかつた。

墓地に立つた私の頭の中には、いろ／＼な聯想が次から次へと湧き起つて來る。

丁度、その出火のある一週間ばかり前平和な此の村に凶事があつて人が一人不意死をした。それはこの村の三里山奧に

ある大きな池の築堤工事の土掘り場で、土が崩れかゝつて村の者が生埋めにせられた。それを土の中から掘り出したときには息は通つてゐたが、無慘にも鶴はしの柄が下腹に入つてゐた。それを三里の山奥から戸板に乘せて舁いで戻りは戻つたけれど、その翌曉のひき明けに負傷人は死んだ。

その時の物凄い村中のさわぎが、どんなに私の小さい胸を恐怖せしめたであらう。彼には、一人の老母があつた。

老母は、自分の息子が凶事で死んでからのち、その火事の夜更けて便所に起き出でた。そして氷のやうに凍てた寒い暗い天を劃つて、魔の如く黑く聳えた甚四郎屋敷の家の棟を、青い火焰がチラ〳〵、チラ〳〵と見えつ隱れつ這つてゐるのを見て、老母は寒い緣側の戶の間から、それを眺めて、あれは息子の幽靈が夜を忍んで、母の眼に現れて來たのだらうと思つて稍々しばらく佇んで見てゐた。

それから內に入つて間もなく半鐘の音が鳴り出した。

村中での大屋敷であつた甚四郎の後もそんなにして廢滅してしまつた。大村の家は、そのほかに大きな屋敷があつて、家族でその頃そつちに住んでゐた。榮十さんは昔は戶長まで勤めた、重左衞門の息子で當主にある大村光太郎といふのが郡の役所に勤めてゐるのが、その頃の私に今の大臣よりも畏かつた。樂隱居の榮十さんは自分で設計して新築した裏の二階座敷に茶の湯や俳諧をして日を暮してゐた。田舍まはりのその道の師匠のやうなものが年中入浸つてゐた。そこの家の生活は一軒だけ村の者と異つてゐた。氣位の高い光太郎さんが、渡り者の請負師に煽てられてそのころ工事の始つた山陽鐵道の土木工事の一部を請負ひ、郡の役所を辭して仕馴れぬ工事の監督に廻つてゐた。

「大村さんの家では、今に大變なお金が儲かるんぢやさうな。」と、村の者の噂になつてゐた。

すると、それが全く反對な結果を生じて、甚四郎のために半分までなくされてゐた身上が、またそのために先祖からの山林田畑を殆どあるつたけ賣拂つてもまだ引き足らぬほどの損失となつた。

「阿呆玉め！　女が解らんことをいふので困る。」

親類づきあひといつた格で毎日破産の整理に立ち會つて通つてゐる私の父が、御飯を食べに戾つて來て、そんなことをいつてゐた。

「婆さんが思ひ切りが惡いので困る。光太や榮十は男だけに思ひきりが好え。山も田圃もみんな賣つてしまふといふと、婆さんが藪だけは筍も取れんやうになつては心細いから、それだけは賣らずにおきたいとか、いやあの田も昔からある田ぢやから賣らずにおいてくれとか、それぢや借金が拂へんというて、漸う納得させるのに骨が折れる。」

父はそんなことを話してゐた。

婆さんといふのは、光太郎さんの母であつた。毎日々々大村の家では泣くやら怒るやら大騷動が持ち上つてゐるといふのが、私には何だか恐ろしいことを聞くやうに思はれてゐた。

鐵道工事に光太郎さんの下監督をしてゐた隣家の松次郎は村中での口の巧者な男であつたが、それが大村とは何代か昔に緣組みをしたことのあるのを矜にしてゐたが、大村で破產をするに引換へ、自分は莫大に懷を肥したといふ評判が立つた。

「松次郎には一生溫湯も飮ぬ樣にしてやる。」と、いひ死につて、大村の婆さんは、間もなく死んだ。

松次郎はその後何代か前から住んでゐた家を立派な新築に建てかへた。

「大村さんでは、立派な新家が出來たさうです。」といふ皮肉な噂が、隣村の方から聞えて來た。

光太郎さんは、そのあと小さい街になつてゐる隣村の村長に就職して、自分の村の者とは殆ど交際を絕つたやうにしてゐたが、さういふ失敗の結果段々酒癖が嵩じて、到頭縣會議員にもなれず、十五六年前に四十二の厄年に糖尿病で、これも死んだ。

榮十さんに女房衆のあつたのは、私は覺えぬ。いつからあんなに獨身でゐたのか、私が覺えてから、くる〳〵坊主に剃つたお爺さんであつたが、隣近所の噂とよくない噂が年中絕えなかつた。

光太郎さんが破產をする前から、自分の持つてゐるだけの隱居の田地は大方なくしてしまつて、殘つた分を金に換へ、それを持つて岡山の市に出ていつて、若い妻君をもつて、小意氣な煙草店などを出さして、自分は時々米相場に手を出したりしてゐた。

丁度そのころ私は岡山に出て中學校に入つた。そして同じ村から學校にいつてゐる友達三人づれで大村のをぢさんの懇望で、そこの煙草店の二階に宿泊することになつた。私は入學試驗の準備の間二た月ばかりそこにゐた。そして暑中休暇が終つて、此度出て來たころには、大村のをぢさんは煙草店が持ち切れなくなつて、市の表通りからずつと引込んで昔の家中屋敷の小さい家に引越してゐた。そこは、をぢさんの若い妻君の家だつた。そこには切髮の七十ばかりのお母さんがゐた。

「をぢさんが、嫁さんと蚊帳の中に寢てゐる傍を通つて便所にゆくのが厭ぢや。」

と、煙草店の時分二年上の級の私の友達はいつてゐた。

そこに引越してから、友達二人は他へ移つて、私一人が殘つてゐた。私の父は岡山に出て來ると必ずをぢさんの家に泊

つて廣い座敷に私と枕を並べて寢た。

秋の時候の好い時分に、學校からお腹を減して晝飯に戻つて來ると、大根とざこ海老の煮びたしが、咽喉が鳴るやうに旨かつたのを、私は今にも忘れぬ。私はそこの家から學校に通ふのが樂しかつた。

やがて正月の休暇になつて、此度出て行つたころは大村のをぢさんは、また其處にゐなかつた。若い嫁さんの家を出て何處かへ行つてしまつたのだつた。

「昔の家中ほどあつて、それや人愛相のえゝ上品な女ぢや。」

父が家にかへつて母などに大村のをぢさんの若い嫁さんの話をしてきかしてゐた。私は、その若い細面の色の淺黑い、調子のいゝ、話好きの嫁さんの家からまた他へ宿をかはらなければならなかつた。

その後大村のをぢさんは、どうしたか學校に通つてゐるころの私はそんなことに心をとめなかつた。けれども今から考へて見ると、隱居の田地を賣つて持つていつた金は、岡山で二年ばかりいろんなことをしてゐる間になくしてしまつて、また村に舞ひ戻つたものらしい。その後くる／＼坊主のおぢいさんの頭がまた村に見え出した。そして一年ばかりゐる間に川向の××の家にいつて賭博をしてゐるところを大村の分家の主人が聞きつけて、押へにゆき、十五六も年上のおぢいさんに强意見をした。

榮十爺さんは、また村にもをりたくなくなつて、岡山に出ていつた。けれども此度は以前のやうに金がなかつたので毎日取引所に顏を出して、一枚か二枚の相場を張つてごろ／＼してゐた。

「おぢいさんは歸つて家に靜とさへしてをつてもらへばえゝのぢやから、戻つてもらひたい。」と、いつて光太郎さんの妻君や、甥孫達はかへつて來るのを希望したが、おぢいさんは戻らなかつた。私が考へて見ると、そのころの榮十さんは餘程老人のやうに思はれてゐたが、まだ五十を三つ四つ出たばかりであつたらう。妻も子もない身であつては、面白くない田舍に靜としてゐられなかつたのも少しも無理はない。私はそのゝち四五年の間のことを聞かない。

そのうち光太郎さんの病が重くなつて、爺さんは到頭戻つて來た。

「光太郎が死んだから俺と夫婦にならう。」というて、お爺さんがお文さんの蚊帳の中に這入つてゐたんぢやとい。」といふ口さがない噂が、また村の者の間に傳つた。

それは眞か噓か、とにかく光太郎さんが亡くなつて半歳もたゝぬに、もう岡山の中學校に行つてゐる長男の傍へお文さんは末の娘の子をつれていつて、其地で所帶を持つた。お爺さんは一人大きな家に居殘つて、小學校にいつてゐる次男の甥孫の守をしながら寂しく暮してゐた。それも中學校に行くやうになつてしまふと、お爺さんは全く一人きりになつてしまつた。

二十年も村に居つゞけない私は、くはしいことは知らぬが今から十一年ばかり前のことである。

そのころ私の母は、半歳ばかり東京の私の家に來てゐた。ある日國の兄から、母と私とにあてゝ長文の手紙で意外の出來事を報知して來た。

それは大村の隱居さんが、紙幣を贋造してゐたのが發覺して警察署へ引致されたといふのである。私はその手紙の冒頭を讀みかけて、驚きの聲を立てた。

「あツ！　それぢや到頭知れたか！」母は痛ましい聲を出した。「いつか知れずにはをらんと思ふとつた。」

「そんなことをしてゐたのか、はたでは分つてをつたのか。」

田舍の方の事情に遠ざかつてゐる私は、さういつて不思議に思つて訊いた。母はその春の末から私の方へ來てゐたのであつた。が、まだ田舍にゐる時分、私の家へも始終話に來てゐた大村の隱居が、いつのころからか、ふつつり顏を見せなくなつた。母などは、この頃大村のお爺さんは、どうしたのぢやらう、ちつとも顏をお見せなさらん。といふと、兄は「お爺さんの來ぬのは、來ぬわけがあるんぢや。わし等は知つてゐるけれど、知らん顏をしてゐるんぢや。もしそんなことを口にして此方が後で繋累になつては困るから：：。惡いことをしてゐるんぢや、贋札をこしらへてゐるんぢや。」

「私は、それを聞いて慄然しただよう。まあ大村のお爺さんは、何といふ大逆れたことをする人であらう。大村の家は昔から、さういふ縄付きを出すやうな者は一人もない舊い家柄なのに、そんなことをしてをつて、それがお上に知れたらどうする氣ぢやらう。他の者は知らん顏をして居る方がえゝといふけれど、私は、お爺さんに會つて止めるやうによつぽど話さうかと思うた。」

私の母の產れた家はやつぱり大村の古分家の一つであつた。それ故大村の昔を子供のころから見て來てゐる母には、今の大村の家の零落が他人事のやうに思へなかつた。

「いつか知れずにはをらんと思うた。それは惡いことには違ひないが、お爺さんがあの年をして氣の毒な。若い時から大家に我儘に育つて、何一つつらいといふことを知らん人ぢやから、年を取つて段々困る一方ぢやつた。お前等も、よう心掛けて置くこつちや。若い時にあんまり苦勞といふことを知らぬとあゝいふことになる。お上に對して惡いことをしたのぢやから牢に入れられても仕方がないが、あの人の身を思へばほんとに氣の毒ぢや。あんまり人が好えから仕舞がそんなことになつた。」

母は自分も若かつた頃の事を、色々追憶するやうな口調で繰返して大村の隱居の生涯を悲んでゐた。

「もつと委しいことを書いて寄越すやうに、さういつておくれ。」

母が、尚ほ委しく田舍のことを聞きたがるので、私は訊いてやつた。二度目の手紙によると、

嘗てそんな忌はしい記錄のない大村の家へ警官がやつて來た日、兄は村會があつて村役場にいつてゐると、村の口きゝが宙を飛んで駈けつけて、外に呼びだし今大變が起つた。大村の隱居さんが紙幣を贋造してゐたのが發覺して警察から引致に來た。すぐ戻つてくれといつて來た。兄はそのことを薄薄知つてゐたので、いよ〳〵やられたかと思ひながら呼びに來た男と一緒に歸つて早速大村の家にゆくと、お爺さんは、丁度警官に連れられて例の嚴めしい長屋門を出て來るところで、兄の顏を見ると、老人はさも面目なささうに、蒼くなつた顏を俯向けがちに、

「竹田さん、どうも面目ないことで。」と、それだけいつたゞけであつた。穗崎の淸吉に欺されました。穗崎といふ處の金持ちに嫁いでゐた。その家も近頃いろんな事業の失敗からばた〳〵になつて、婿の淸吉といふのが日露戰爭の最中であつたから朝鮮の紙幣を贋造することを思ひついて手先の器用な大村の爺さんを甘く說いたのであつた。警察の手は最初穗崎の方へまはつたのだが、その時淸吉は風を喰つて居處を晦ましてゐた。それで一生懸命札を僞造してゐた大村の爺さんがいゝ鹽梅に押へられたのである。

兄の手紙によると、大村の家の奥の座敷の押入れを取繕げて、その押入れの中に印刷機などを据ゑて細工をしてゐたらしい。機械類は一切證據物件としてそのまゝ押收せられていつたが、爺さんが引致されていつたあと、家の中に入つて見て、それが分つたと書いてあつた。

「まあ〳〵何といふ氣の毒なことぢやらう。」

母は二度目の手紙を讀んできかすと、さういつて隱居を可惜んだ。

それから四年目の春、私は、六年も行かなかつた田舍に歸省したとき、大村の家にも顏を出した。

「大村のお爺さんのところへも、ちよつと顏を出しなさい。お爺さん一人で家にゐるんぢや。」

私が外に出掛けやうとする時母はさういつて、注意した。

「あゝ、寄るとも。」

私は、何家を措いてもそこにいつてお爺さんの老後を見て優しい言葉の一つもかけたかつた。

古い昔は知らぬこと、光太郎さんが存命のころは、破產した後も人の出入が多かつたが、長屋門から玄關につゞく廣い庭に靑草が時を得顏に伸びて、靜かな春の日の照つてゐる外から家の中に入つてゆくと、濕つぽく薄暗いお勝手の間で、爺さんは胡坐をして經木眞田を編んでゐたが、大きな老眼鏡をかけた顏をあげて、庭の中に入つてゐた私の方を不思議さうに眺めた。

「私です……。」と、名をいふと、やつと氣が付いたやうに、

「これは珍らしい。いつお歸んなさつた?」と、私に座を勸めつゝ、經木を編む手を休め、煙草を吹かしながら「東京へも一度は、いて見たいと思うてをつたが、いや最う行けません。隅田川といふ處は名所と思はれますなあ。」

若い時から俳諧や茶の湯をして、遠くの名所の名を知つてゐたお爺さんは、そんなことをいつて、私に諸方のことを訊いてゐた。

「いや、人間の一生くらゐ分らぬものはない。」といつて、歎息を洩した。

間もなく辭して家の中から出て來ると、外は眩しい春の日が寂しい庭園に輝いてゐた。

お爺さんは、たしかその翌年くらゐに死んだのであらう。まだ石碑も立つてゐない。私が子供の頃からいろ〳〵なことを聞いたり、見たりして來た人々はすべて過去になつてしまひました。

（大正三年新潮揭載）

村火事

八月の十九日の朝、まだ朝食も攝らぬ前、ふと、東京朝日新聞の三面記事を眼に留めて吃驚させられた。それには特別見出しの二號活字で、

「岡山縣の大火事」としてある。それで本文の冒頭に眼を移すと、括弧の中に、「和氣特電」とある。和氣といへば、私の郷里の郡であるので、私の注意はだん〳〵眞劍になつた。そして、次の本文に一層氣を附けてみてゆくと、驚くまいことか、「十八日午後三時、岡山縣和氣郡藤野村字阪本部落より出火、折からの東の烈風に煽られ、百三十戸の同部落は、わづかに十四五戸を殘すのみにて瞬くまに全燒。川を隔てたる對岸の隣部落高原に延燒し、又四五十戸を燒拂ひ、午後七時半に至るも火勢猛烈にして尙鎭火せず」とある。隣部落高原と書いてあるのは田ケ原の文字の誤りであるが、その田ケ原といふのは、私の產まれた小字の名である。そこには私の老母も尙住んでゐれば、實家の兄の一家族が先祖代々の地に住んでゐるのである。そして、田ケ原の部落は昔から六十戸を殆ど上下したことなしに、戸數は減りもせず、又多くなりもせぬ。農業を專らにして生業(なりはひ)を立てゝゐる土地であつた。六十戸の部落が四五十戸も燒失したといふ新聞の電報にして、誤りがなければ、無論私の產まれた家も燒けてゐるにちがひない。しかも三時から四時間半燒けて、七時半に至つて尙ほ鎭火せずといふのであるから、その四五十戸といふのが、多少正確のことを誤報してゐたとしても、まだ其後になつて燒けてゐるであらう。とにかく十中の九分までは類燒疑ひない。

で、その、草田舍に稀有の出來事である大火事について私は、自然にいろ〳〵なことを聯想せずにはゐられなかつた。

失火の火元であるところの坂本部落といふのは、例の、昔から×××と稱せらるゝ處のものであつた。私が幼少の頃尙ほ郷里に居つた時分から、竊盜だの、祕密の屠牛だのといふ種々な犯罪者なども此の部落から出るのが多かつた。がどちらかといふと、大概溫和な農民が多いのであつた。

百三十戸の中十四五戸しか燒け殘らなかつたといふから多分、これも燒かれたらうと思ふが、今、内務省の社會局に囑託となつて出仕してゐる三好平治氏は此の部落の豪農で、且

私共の村一番の金持であつた。その三好伊平治氏は私と小學校時代の級友で、私より三年ばかり上級であつた。そしてその伊平治君から「同胞諧和の道」といふ著書を、一昨年の秋だつたか、寄贈せられたことがあつた。その著書の中に坂本部落の祖先は關ケ原の戰の時、西軍の首領石田三成の配下に屬して敗戰の後、中國筋をそこまで落ち延びて來て土着したものであるといふやうなことを書いてゐる。事實果してさうか、どうかは分らぬ。それにしても古くから土着してゐるものであることは想像されるのである。そんな村一番の金持があるにも係はらず他の部落よりは貧窮者が多く、輕微な犯罪人を出すことも多いのであつたが、私の幼少の頃の記憶によれば、彼等は約ね自卑從順の住民であつた。

その部落から火を失したことはたしか數年前にもあつて、いづれも悒き小家であるが七八戸も燒けて二人死傷したとも聞いた。それが數年の後にまで語り傳へられたほどであるから、今度の出來事はこの部落開闢以來の大珍事で、もし此率を云ふ時は、無論昨年の東京市の大震火災よりも尙大きい割合になる。

その事を新聞で見る十日斗り前、月の初めに一週間ばかり郷里から甥が私の家に來てゐて、そこへ兄が郷里の近況を書いて越した書面に、今年は梅雨の頃にも殆んど雨らしい雨が降らなかつた上に、この二ケ月ばかりの旱魃で田は悉く龜裂を生じて干上り稻は全部枯死しかけてゐる。たとひ今多量の降雨があつたとしても、米は取れないであらう。まして今後十日もこの炎天が續いたならば、一粒の米も穫れない。地主も小作人も餓えねばならぬ。そして井戸の水がみんな涸れて、田ケ原六十戸ばかりの小字が、わづかに三つ四つの古い井戸しか水が出なくなつたので、多勢でそれを汲んでゐるといふやうなことを書いてゐた。その手紙には井戸の在る處も書いてゐたが、私には、產まれて十七八歲まで住んでゐた郷里のその古い井戸のことが、新に偲ばれた。井戸は人間の生存にとりて、舊約聖書などにも屢々記されてゐるとほり、いろんな寓話や口碑のよつて起るところである。

故郷は古き井戸まで身を救ける。と、いふことを、私は不斷から時に思ひ起す。いつの頃からかあるのか、暦にも知らぬ古い時代から、この村に存する井戸と思はれて、大きな石を四方に置いた古井には雪の下といふ草が一杯生ひかぶさつて、淸潔なる水は汲めども盡きなかつた。堅い花崗岩質の踏み石は、此村の代々の先人の草履の足に踏まれて、圓く窪んでゐた。八藏が處の西の屋敷にある古井は、もと磯松が家のあつた跡であるが、その井戸は、昔から所一番の深さがあるといつて、眞直に掘下げた細味の井戸を、私ども子供ごゝろに上から覗いてみるのさへ恐ろしいやうであつた。磯松の家が死絶え、一人殘つた磯松の娘は、五つ六つの子供のころの

ことは私の記憶にも殘つてゐるが、今は三十を遠く過ぎてゐるであらう。十七八歳の時から神戸の方とかへ出て行つて村には歸らない。そして家は毀たれ、土藏も賣られ、屋敷跡には空しく桑と桐とが植ゑられて、以前のやうに、その井戸に水を汲む者もなかつたのであるが、今年の旱魃にて、村人に清水を供してゐることであらう。

　旱魃についても、私は、いろ〳〵思ひ出すことゞもが多い。村はその天然の地勢から、灌漑用水の不自由な處である。昔から、藤野村へは娘を嫁にやるな、旱魃の多い土地であると云ひ傳へられてゐるほどであつて、小さい山山の間に開けた土地には、水源の淺い小川が、そこから三里ばかりの山の奥から流れてゐる他には川といふものはなかつた。それゆゑ舊藩政の頃、その三里の峽に施工して大きな貯水池を築造したりして種々灌漑用水に苦心をしたものらしい。それは萬能池といつて、凄いほど深い碧水を湛えた池であつた。私が幼少の頃にも、その池の水量を、もつと多くせんがために從前の築堤に何年かの繼續工事で大がゝりの改築を施したことを記憶してゐる。その池には種々な兇變な傳說が傳はつてゐた。藩政の頃その池の工事に携はつてゐた普請奉行の代官とその手代とが意見の杆格から、奉行は腰の刀を拔いて手代を斬つた。手代は手負ひのまゝ遁げて、山腹の、とある橫穴の中に這込んで匿れた。そいつを代官は追驅けていつて引摺り出して殺してしまつた。その橫穴は今も尙ほ殘つてゐた。

「こゝに手代が遁げ込んだのだ」と、その橫穴を覗いてみた。

　私の幼少の頃增築工事をしてゐる時分であつた。夏日炎天の頃每年灌漑の用水に不足をすることは、實にその村の死活問題であつたところから、その池水の恩澤に浴する地域に水田を持つてる村民といふ村民一統は男女を擧げて三里も山奥の築堤工事に驅け加はつた。尤もそこで働けば、それだけの日當が給せられるので、工事は農閑期を利用して進められた。村民の人氣は、その爲め一時その池普請に集中せられたことを私は小學兒童の頃に記憶してゐる。

　村の重立つた者は悉く、ずつと向ふへ行き切りであつたがその頃多年に亘りて、村の世話役を引受けてゐた私の父は病弱であつたところから、工事の現場には往かず、自宅に居て工事に關する經營萬端のことを管掌してゐた。それゆゑ萬能普請といふことが私の子供心の頭に深く彫り付けられてゐた。

　ある日、――それは、秋晴れの十月頃であつたらうか、學校から歸つて來ると、私の家には多勢村の者が出つ入りつして、いづれもたゞならぬ緊張した顏で、騷いでゐるところであつた。

　母は私に話してきかせた。今日、萬能池の土取り場で村の者が三人、粘土の爲に埋められて、死傷した。急使は三里の山奥から飛んで戻つた。村はそれを聞いて大騷ぎとなつた。戶長――その頃は村長といはなかつた――は、早馬に乘つて用掛りと醫者を伴ひ三人で早速現場に急行した。詳報を齎らす急使は後から次いで來た。私は子供心に、たゞ譯もなく悔悔としながら、其等の現場から驅付けて歸つて來た者共が父をはじめ、そこに集まつて來た者に語つて聞かすことを聞いてゐると、三人の中一人は、壓倒して來た土が淺かつた爲に早速掘出して無事であつたが、一人は腰から下を大分打撲されて起つことが出來ぬ。あとの一人は最も重傷で、それは私の家のすぐ近所の人間で新吉といふ者であつたが、一間立方もある土塊が身を交はす間もなく、落ちかゝつて來たゝめにその土塊に埋められ、手にしてゐた鶴嘴の柄に下腹を刺され非常な重傷である。

　私はその話を此方の室にゐて聞いてゐると、自分の下腹が痛くなつたやうな恐怖に襲はれた。歸つて來て、その瞬間の現狀を手に取る如く詳に說明してゐる者の中には、彼等も同じやうに働いてゐたが、運よく土塊の墜落する間際に身を以て遁れた者もあつた。平和な村はその爲に上を下へと騷動した。

「戶板に載せて、新ちやんを連れて戾るんぢやとい」母は物におのゝいてゐるやうな言葉でいつて聞かせた。

　私は子供心に唯おど〳〵してゐた。間もなく日暮に近づいて、

「もう、井出の邊まで戾つて來とる」といふ話聲が村の道傍で聞えてゐた。井出と云ふのは、村の用水を調節する堰のある處で、十二三町の川上にあつた。

　私達子供はがち〳〵齒叩きするやうな慴えた痙攣を身に感じながら戶板に載せた負傷人を擔いて戾つて來る方へと出て見た。と、幾張りとなく提燈を振り翳した多勢が、つゞいて犇めくやうな聲をひそめながら、戶板を取卷いて、緩い步みで村の北口から入つて來るところであつた。

　……ひどい重傷であつた新吉は終にその夜の引明けとゝもに息は絕えた。新吉は此の村に代々住む百姓で三人兄弟の中の總領であつたが生涯女房をも持たずに死んだ。百姓であつたが筆算の道も一とほり心得てゐた。私には、その薄あばたのあつた顏が子供心の記憶にまだ殘つてゐる。

　昔からいろんな因緣の附いてゐるその池は三里の山の奥にあるので、その池の水が村まで流れて來るまでには、勢ひ川上にある他の村の地域を通らなければならなかつた。他の村から流れて來るためにはその代償としてその川水の幾分かを他村の灌漑に提供せねばならなかつた。その爲に昔から川の上下で常に用水爭ひが絕えなかつた。そして舊藩の時分から上の捌きを乞ふたことも度々であつたが、私の子供の時分にも訴訟沙汰になつたことがあつたのを記憶してゐる。

村には、その他にも尚ほ三つの溜池があつたが、その内二つまでは、やつぱり川上の他村の域にあつた。それは私の生れた村はあまりに山が淺く、自然の池形を利用して貯水池を造ることが不可能であつたのだ。さうしてその一つの池は三里山奥の萬能池よりも尚ほ大きいくらゐのものであつたが、それは、まだ五六年前に竣工したばかりの池であつた。その池を造るには、田地一反に對して何十圓といふ重い賦割が課せられねばならなかつた。

しかし、今年の梅雨期に雨が乏しかつたにもかゝはらず、どうか斯うか田を植ゑつけることが出來たのは、五六年前に濮大な經費を掛けて造つたその貯水池があつたからである。そして、植ゑ付けだけ無事に濟んだ稲田は、それからずつと夏中打ち續いた炎天に全く枯渇してしまつたのである。

その旱魃の頃、村の雨乞ひについても私はいろ〳〵な幼い記憶を思ひ起す。雨乞ひは和歌や俳句にも取り入れられて直接利害のない他人の眼から見ると、何か風流でもあるかのやうに思ひ做される傾きがあるが、粒々これ辛苦の農夫にとりては實に必死の憂慮である。私が幼少の頃には、ひとり運命を天候に待つところの農民が、いかに旱天に雨を待ち焦れて杞憂したか、それは慘憺たるものであつた。ちやうど醫者に見放された瀕死の病人の爲に最後の手段として神佛に縋り祈禱占ひに賴ると同じであつた。それは今から思ふと、愚かにして笑ふべきことをも、農民はさま〴〵にして手を盡した。

一度など、隣村に、不思議に天に禱つて雨を降らすことの上手な信心家が來てゐるといふので、それを迎へて來た。彼は以前相撲取りを本業とし、巨大な體をしてゐて、名も錦山と呼んでゐた。私の父が村の世話などをしてゐたゝめに、錦山は私の家に迎へられて、やつて來た。村中の者は、今日錦山が雨を降らすのだといつて、多勢血眼になつて集つて來た。錦山は布片を以て巧みに蛇の形を造り、それを小卓の上に載せ、村の川上にある堰の桶の口なる淵に臨んだ岩の上に神壇をしつらへ、それに卓上の蛇を祭つて一心に祈願を籠めた。勿論村中の者も總出になつて錦山の後方に居並んで共に天に祈つた。錦山は呪文を唱へる事稍多事、そして祈願をおはつて、その布片をもつて作つた蛇を淵の水に放すと、不思議や蛇は生きいでてする〳〵と水を渡つていつた。さうしてゐるところへ先程より川の向ふの北の方にあたる山の頂邊に低く薄墨色の雲を附けてゐると思つてゐたが、その雲は丁度錦山の祈禱の果てる頃より忽ち天の一半を蔽うて南へ〳〵と擴がつた。そして冷かな一陣の風がそちらの山から颯と吹き颪して來たと思ふ間もなく白雨が沛然として襲うて來た。恐ろしい雨の音は轟々たる響をたてゝ暫く四邊を雨の脚に鎖してしまつた。村の者共は、

「そら來た！」と、各々錦山の不思議の法力に感じ入つて雨にびつしより濡れになるのをも喜んで急いで吾が家へ驅け戻り、家々の神棚に畫燈明を上げて喜雨を謝した。錦山は、いくらか謝恩の封金をもらつて歸つた。

それを、私の、村の雨乞ひの記憶の初めとして、その後も旱魃は殆ど年毎につづいた。毎年夏季になると、家の中で父の口にしてゐることは、全く雨の不況を喞つ聲であつた。私は子供心に金よりも雨の方が遙に大切なものであるかのやうに思はれてゐた。

そして又しても旱魃騷ぎの始まるたびに、私は錦山の不思議な雨を思ひ出して、父に向ひ、

「錦山を呼んでくるといゝ、あの者はもう來てくれないの」

と訊ふたが、

「さアどうしてゐるか」と、それきりいはなかつた。

何處か遠くの方にある瀧に行つて、そこの祭神に祈り、その瀧の水を汲んで歸り、それを灌漑用水の源の堰に流すと、忽ち雨が降るといふのでそんなこともしてみた。瀧の宮の祭神には永劫不滅の神火がともつてゐるので、それを火繩に移して持ち歸り、その火を家々の神壇にうつして祈れば雨が惠まれるといふので、そんなことをもしてみた。が雨は容易に降らなかつた。又千貫焚きといふことをした。それは、高い山の頂に千貫の薪を堆積して火を焚き、龍王に祈るのである。村中の者が家々に薪木を山の上に携へていつて、夜にかけて盛に火を焚いてゐるのが火焔天を焦して物凄いばかりであつた。私は子供心に、こればかりは多少雨を呼ぶために物理的效果がありはせぬかと思つたが降らぬ時には容易に降らなかつた。鎭守の神樣の拜殿では每日々々太鼓を叩いて雨乞ひの祈禱をする音が聞えてゐた。

こんなことは私の幼少の時に常にあつた記憶であるが、いつも村民が旱天に雲霓を望んでゐたにもかゝはらず、稲は水草であるとゝもに、强烈なる日光に依つて成熟する植物であるので、一ト夏中焦燥してゐた割合に秋穫の時が來てみると案外實入りのあつたことが多かつた。

それにもかゝはらず、今年は、手紙の模樣によると稲は殆ど全部枯死してしまつてゐるといふのであるから殆んど古今未曾有の旱魃であるらしい。

そこへ以つて來て失火したのであるから、災害の慘狀は想像するに餘りあることである。私は朝飯を濟ますと、すぐ出て行つて通信料支拂の至急電報を打つて樣子を訊ふてやつた。私の村は電報配達區域外になつてゐるので別に配達料を前拂ひしなければ、翌日になつて、一日一回配達の普通郵便とゝもに電報を配達して來るやうな不便の土地であつた。その癖幹線鐵道は村の中央を縱貫してゐるのであつた。

私は電達を打つて置いてから、きつと燒けたに相違ない自分の産れた家のことなどが又いろ〳〵と思ひ浮んで來た。その家は、よく田舍の舊家などにあるやうな大家ではなかつたが、想像するに、少くとも百年以上は經つてゐる家らしかつた。私ども曾祖父の父親にあたる人がすぐ裏隣にあつた本家から分家したもので、曾祖父が明治元年の頃に行年七十八歳で死んでゐるところを見ると、七十八年に明治年間の四十五年と、大正の十三年とも合算すると、それだけでも百三十五年になる。その曾祖父の父が分家したのであるから、少くとも百五十年ぐらゐ前に建てた家と見てよい。天井の低い、古く煤けた家で、ところによつては梁などがまるで墨か煤のやうに眞黑であつた。初はわづかに四室か五室ぐらゐしかなかつたものを、多分私どもの父親の代になつてからであらう。それにいろ〳〵な模樣變へをして、新に別な座敷を附け足したり、やつぱり父が建てた土藏を座敷にして、それへ舊い母家から別な小座敷で續けたりして間數は殆ど、先から見ると、倍にもなつてゐた。田舍のことであるから、粗末なものであつたにしても、私の父も、かなり普請は好きであつたものと思はれ、子供心に覺えてゐるだけでもその新しい座敷をはじめとして、年々小量の酒造業もしてゐたので、酒の釀造場を建てたり、私の子供の頃には殆ど年中大工や佐官が入つてゐた。兄の世になつて自宅で造る酒造業は一時止めて、母家を幾倍かにした大きさの釀造場は毀つて賣つてしまつたが、その後又新しい土藏などを建てゝゐた。父の代にはたゞ一寸した平庭であつた庭を兄が二十年ほど前から段々に小さい泉池などを造つて、長い間に好い植木などを集めてゐたのであつたが、きつとそんな物は火災の爲に敢なく焦土と化してしまつてゐるであらう。私は去年の東京の震災の燒跡を直ちに聯想して、あの古樹鬱蒼としてゐた駿河臺の赭土色に化した無慘な有樣をまざ〳〵と私の郷里の生れた家の燒跡に想像してみた。

門の入口の土塀に沿ふて、その白壁の隅に明治二十七年植ゐると、小さく墨で誌した松が一本立つてゐた。二十七年といへば丁度父の死んだ年である。私はその二十七年の九月に初めて東京に出て來た。そして十一月にはもう父が死んだので一時歸郷した。その松は初の間は格別見どころのない貧弱な枝ぶりであつたが、丁度その頃から私は段々自分の生家に離れるやうになつたので松の成長も殆ど氣に留めずにゐたが、近年になつてその松の枝振りがひどく好くなつて來たことに氣が附いた。私は歸郷の度にその枝振りを眺めて、土塀の壁の隅に誌した三十年前の墨痕と見比べて、その度毎に二十七年の十一月二十四日に亡き人となつた父の、在世のことなどを追憶してゐた。枝は小さい門の上を四方に向つて長く伸びてゐた。いづれも三四間以上に達してゐた。東方に向つて伸びた枝は門前の村道の上に長く翳してゐるので、村の者が薪木だの稻束などを天秤棒で擔いで通る時高い荷物が枝に障つて通行の妨げになるといふ苦情があつたので四五間延びた長い枝を幹に近い處から惜しや、ばつさり切つてしまつた。それは、わが家にとつては甚だ遺憾のことであつたが爲方のないことであつた。ある年行つてみると、その東方に伸びた枝がなくなつてゐるので、不思議に思つてその譯を訊くと、さういふ次第であつた。私は父の死を嘆くより以上に殘念な心持で、

「切つてしまはなくても何とかなつたものだらうが」と、述懷すると、

「村の人達が困るといはれるものなら爲方がないから、切らうといふて切つてしまうた。」と、私の老母はいつた。

そんなところにも近年年々に惡化してゆく小作爭議などに表れるやうな厭な感情が共通してゐるのであつた。

私は將來自分の最後の息を引取る處ではないにしても、人間の壽命よりも遙に長かるべき松の生木の枝を切り落したことに、淨瑠璃の「柳の由來」にある柳の生命を絕つたと同じやうな殺生を感じた。その松の樹も燒けてしまつたらう。

裏の井戸の端に拓榴の木が一本立つてゐた。それは私が十一二歳の頃、十二三丁離れた處にあつた戸長役場に用掛りをしてゐた。長兄の 處へ晝の 辨當を持つて使ひにいつた歸りに、そこのある家から一尺四五寸の若木を貰つて歸つて植ゑて置いたものであつた。それが年々に成長して、約四十年にも垂んとする間には幹の根元が二三尺廻りになるほどの老樹になつた。後には刺のある枝を翳してあんまり繁茂するので、次第に持てあまして度々枝を透してゐた。老母は、私がその木を植ゑたことを、いつまでも記憶してゐて、拓榴の成長するのを恰も私の成長するのと一つことにして考へてゐた。拓榴が年々成長し、繁茂してゐる間は、たとひ遠くに離れてゐても、私の身體に恙ないものと思ひ做してゐた。從つてその樹がもし枯死するやうな時が來たならば私は死ぬかも知れぬと思つた。春先き新芽を茂らす時分になると、刺ばかりではない、毛蟲が附いて井戸端の汲み水の中に落ちたりすることが始終であつた。

そこで拓榴が井戸端の邪魔であるやうに、いつまでも生業の成立たない私は、私の家の厄介者であつた。丁度その頃、邪魔になつて爲方がないから拓榴を伐つてしまうと、兄がいひ出した時に、私の母はひどく反對をした。そして枝を伐り透かすだけに止めてをいた。勢ひのいゝ木を伐つても伐つてもすぐに新しい枝を生やして繁茂した。爲方がないから根から掘り返さうといふことになつた時、私の母は又ひどく不機嫌な顏をして極力反對した。それで、その時も亦根元から、すつぱり幹を挽き伐つたゞけに止めた。老母が、

「あれが私が生きてゐる間だけは、どうぞ、せめて根だけでも生かしてをいておくれ、あれが死んだ後では、伐るなり、掘り返すなり、好きにしてもえゝから」と、いつたので池の禪尼の爲に生命を乞はれた頼朝のやうに、拓榴は生命だけ取留められて根のみ殘つてゐた。その拓榴は古い株のみ殘つて年々新芽を出しては伐られてゐたから或は却つて燒けなかつたかも知れぬ。

そんなことをいろ〳〵取り留めもなく聯想してゐてその日一日暮してしまひ、夜の十一時過ぎ蚊帳の中に入つてゐるところへ、果して返電が來た。それを見ると、

サカモト九四、タガハラ十五ヤク、ウチヤケヌ

とある。私の生れた家は幸にして燒けなかつた。と、まづそれには一ト安心したが、比率にすると、去年の東京の大震火以上の大火であるうへに、火事は江戸の花ともいはれ、今日の東京でも三百や五百の火事はめづらしいことではない。平常無事な片田舍で、そんな大火があつたにしては騷動は想像に餘りあることである。

それから二日置いて三日めに兄から奇越した委しい書面によると、私の生れた家にも一旦飛び火がして屋根に燃えついたのを甥が屋根に乘つてゐて、早速消しとめたのである。連日の炎天に、搗てゝ加へて田舍は藁葺き屋根が多いのである。そこへ東南の强風が吹いたので、坂本××は丁度風上にあたつてゐる。

都會地と異り、消防夫といふ專業の者もなく、村民互に隣保救助の古來の習慣であるので、川一つ向ふの坂本××で火を發すると、此方の者も働ける男はみんなそちらへ驅付けて消防に努めた。坂本××には百數十軒の家がありながら井戸は數へるほどもなかつた。二ケ月程降雨のないところへ、東南の强風に煽られたので火の子は川一つ隔てた西岸に飛んで土手に沿ふて少しの藪があつた。その藪に眞先に燃えついた。川は三里山奧の池を水源として流れてゐるのであるが、半月も雨が降らないと、すぐ白磧に乾いてしまふやうな川であつた。藪は火事の前から旱魃の爲に枯れてゐた。それへ火が附いたのであるから堪らない。火の子は田ケ原の××の空を蔽ふて雨霰と降つて來た。みる〳〵うちにそつちにも此方にも藁葺きの屋根に燃えついた。田ケ原の者は各自の家が大事になつて來たので坂本の消防を打つちやつてをいて、皆自分の處に驅け戻つて來て、屋根の上にあがつて盛に降り注ぐ火の子を消しとめた。しかし藪に最も近かつた藁屋の久兵衞の家は瞬く間にしてもう手の下し樣もなくなつてしまつた。久兵衞の家を一嘗めにしてしまつた火焰はいよ〳〵猛威を逞しうしてすぐ又隣の杉造の家に燃え移つた、銀次郎の古家、勘八の草屋、常藏の處、百太郎、善次郎、八三郎、萬太郎など六十戸の××の中で西北寄りの風下になつた家々十五戸は

遂に全燒してしまつた。

私の生まれた家は、その手紙によつてみると、丁度火の海の緣の處に立つてゐた。屋敷の土藏の裏の空地には野菜などを作つておく三四十坪にも足らぬ畑の隅に作男の陋屋があつたが、それも燒けた。どうせ類燒を免かれないものと諦めていろんな家財諸道具などを外に持ち出したゝめに紛失したものもあり、破損したものも少なからず、殆ど類燒したと同樣の慘狀であつた。

そして、村を燒き拂つた魔神の荒れ狂ふ如き火勢は餘つて旱魃のために黃色く枯死してゐる田の稻に燃え移り、所謂燎原の火の勢ひで延燒した。呪はれたる村はかくして水火の苛責に遭つた。

王侯貴人の家にあらざるこの××の伏屋は、そも〳〵いつの頃から此の處に居を定めたものであるか、歷史のない靑草人のことは口碑も傳說も遺つてゐないほど微かなる民草の存續に過ぎないのであるが、其等の燒失したる家々は私の記憶には隨分古い家ばかりであつた。百五十年に近い、私の產まれた家よりもまだ遙に古い家が多かつた。中でも勘八の家は此の村でも最も古く傳つてゐる處の一つであつた。年中薄暗い家の中は、掃除をせぬので何時も塵埃だらけであつた。子供の頃、用などいひつけられて、偶々そこの家に入つてゆくと、皆野良にでも出てゐるのか、背戸の小溝で洗ひ物でもしてゐるのか、家の中には人の氣もなく、たゞ鷄ばかりが人の代りに座敷へ上つて步いてゐた。八三郎の家は以前八三郎の數代前の祖先が分れて出た本家の主じの祖先代々住んでゐた家であつたが、その主じが破產して死んだ後八三郎が買ひ受けて移り住んでゐた。その家は、門の構へから武者窓めいたものを附けた位のありさうな屋敷づくりであつたが、そんな家は八三郎には再び建て直すことは不可能なことであらう。百太郎の家は以前の古家を毀ちて新に藁葺きの小家に建て換へたものであつたが、以前の家の壁際に五六百年にも近いと思はれる古い榎が高く立つてゐた。家はその榎よりも後に建てたものとすれば窮屈な處に家を建てたものである。樹は家よりも後に生えたものか。しかし五六百年の家は容易に保存せられるべくもないことを考へると、家は樹のある處へ立てものか、私は子供の頃、その樹の根元に近寄つてみて離れて見る以上に、幹の太いのに驚いたことがあつた。少くとも五六百年には下らないその榎の立つてゐたところから考へると、此の××の民は隨分算ふべからざる古へより此處に居を定めたものであるらしい。その榎は冬の夕暮れなど葉の落ちつくした後の枝を高く寒空に曝して西北の風に物凄い音を立てゝ吹き鳴らしてゐたものである。その音を聽くのが幼い私の胸に何ともいへない寂しい悲しみを唆るのであつたが、それとともにそんな老樹の高く天を摩してゐるのが、名もなき此の

村の歴史を語つてゐるかの如く思はれて、懐しい感じもした。その木はもう數十年前に神戸の方から買ひに來た人間に賣約して間もなく伐り倒されてしまつた。それは神戸で世界的の名あるマッチの棒に製造するのであつた。その樹にしてもし靈あらば、村の歴史を知るものはその老榎のほかになかつたのである。榎の老樹はまだ〳〵そのほかにも多く立つてゐたが、いづれも同じやうに何時の頃からか伐り倒されて薪木にせられた。そして古い榎の幹の根元には必ず苔の蒸した石の龕のやうなものが祭つてあつた。村にその榎の古樹が見られなくなつて、その村の生活には寂びた色が見られなくなつた。もし緣起を擔いでいふなら、此の村開闢以來の失火はその老榎の祟りといはれるかも知れぬ。蒼古な村の昔時を思へば、ひとりでに涙する思ひが湧く。

男清姫

一

七月の初めのある暑い日であつた。加茂は、日光ゆきの車室の窓枠に肱を凭せて涼しい風に面を吹かせながら、青々とした田圃の過ぎて行くのを眺めてゐた。

避暑は、まだこれから始まらうとするので、二等室にはたんと客が乘つてゐなかつた。赤帽が席を取つてくれたまゝに新型の旅行鞄と大きな信玄袋とが塀をしたやうに、擴げて敷いた腰掛けの兩端に置いてあつた。

今年は梅雨に雨が少くつて、例年よりも早く夏が襲うて來た。ひどい夏劣けをする彼は、六月の末時分から急に酷しくなつた暑さに驚いて、斯うして狼狽てゝ都會を逃げだしたのである。

北へ行く汽車には、彼は何年か振りで乘つたのであつた。加茂はそんなことを考へながら、かうして自由に旅をすることの出來るのを淡い心持で愉快に感じないでもなかつた。

彼は、汽車の中に腰を掛けてゐながら、遠くの方の山を見たり、大きな鐵橋を渡るのを子供のやうな心持ちで悦んだ。

宇都宮までは、烈しい太陽が正面に窓に射し込んでゐたが其處を出て日光線に分岐すると汽車は段々深林に分けて行つた。嵐氣が肌に觸れて來た。霧のやうな細い雨が窓から吹込んで冷々と顏を濡した。

やがて日光の停車場に着くと、單衣では寒さを覺えるくらゐであつた。到頭雨が本當に降つて來た。加茂は又赤帽を呼んで、窓から二個の手荷物を受取らして、それを直に馬返し行の電車に運ばした。

電車は、神橋の處で、握り皮にブラ下るほど乘つてゐた滿員の客を大方降して了ふと、倍々降つて來た雨の中を緩い勾配の道を辿りつゝ山を深く〳〵上つて行つた。大谷川に沿うた兩岸の山々には濃い霧が濛々と立ち罩めてゐた。

加茂は、長い間寂寞には馴らされてゐるが、斯うして刺戟の多い繁華な都會を遁れて深く山の中に入つて行く自分を顧みて淋しさを感ぜずにはゐられなかつた。七月の初といふに山の上の僅かばかりの平地に切り開かれた畠にはまだ青麥が

枯れたやうになつて立つてゐたり、豌豆が實つてゐたりした。

　馬返しで電車が無くなると、其處の休み茶屋に入つて遅い晝支度をして、泥鰌のお菜で硬い飯を旨く食つた。其處から手荷物を一臺の車に積んで、自分は二人挽に搖られて葛折りの二里の急阪を登つて行つた。

　車夫は時々梶棒を停めて向の溪に懸つてゐる瀧の名を說いたり、華嚴の瀧の投身者の噂をしたりした。馬返しで一時止んでゐた雨が、またひどい勢で、深く生ひ繁つた林に音を立てて降つて來た。薄暗い山の中が倍々暗くなつて、寒さが肌に沁みた。暮れ方になつて中禪寺湖の畔に登り着いた。

二

　加茂が、この夏中を此の山の中で暮すつもりでやつて來たのには、單に避暑を目的ばかりでなく、他に考へがあつた。彼は、出來るものならば、どうかして女といふ者を全く斷つて了ひたいと思つた。あらゆる愛欲の絶滅、若しそれが成就出來たならば、どんなに自分の心が輕くなるであらうかと思つた。彼はこれまで隨分女に惱まされて來た。長い間の過ぎ去つたことを思へば始終女といふ者にばかり囚へられて生きて來たやうに思はれる。彼は、甘じてその誘惑に自分を委ねて安心してゐた時もあつたが、よく考へて見れば見るほど男は何時も女の爲にのみ心を勞してゐるやうに思はれた。女が彼の胸にその姿を宿す時、初は美しい形が後には皆妖魔に變化した。丁度戸隱山の鬼女が、次第に本性を顯はして來るやうなものであつた。それで、どうかして女といふ惡魔を頭の中から追拂つて了つたならば、さぞ氣が樂になるだらうと思つた。

　が、都會にゐては知ると、知らぬとに係らず、凡ての女はそのあらゆる方法を用ゐて常に自分を誘惑してゐるやうに見える。道を歩いても、女は屢々神經を攪亂した。

　それ故斯うして山の奥に逃げて來たのであつた。

けれども、それは矢張り彼自身を欺いてゐるに過ぎなかつたのだ。成程彼は既に長い間女の肉體からは遠ざかつてゐるが、頭の中には常に女の姿が宿つてゐた。彼は何樣な女でも女を思はないではゐられなかつた。もし思ふべき女を持つてゐないと寂しくつてゐられないばかりではない、思ふべき女を持たない時には世の中の觀る物聽く物に何等の感興がなかつた。

三

　彼は實に女といふものに渴してゐるのである。けれどもそれほど女に渴してゐながら、彼は、新に現實の女を求めて、それに接近することを好まなかつた。女といふものに疲勞し

てゐる彼は、現實の女よりも空想の女を好んだ。彼が嘗て關係した女の事を想ひ浮べて過去の緊張した興味を追想することに於て女に對する渴を醫する方が現實の女に關係するよりも遙かに自由で容易であつた。

　今年の春、街頭の柳が青く芽吹いて、時々表を花電車の通る時分、十五六人の知人と銀座邊のあるカフエーで一寸した晩飯の會食をした崩れに、彼はその中の二三人と最後まで附合つて、途中から雷門ゆきの電車に乘り換へた。

　その夜多勢で戲談を言ひながら、何れでも可いと思つて見立てた遊女が、後に別室に入つてから横になりながら見ると案外に派手な顏をしてゐた。彼等によくある血の枯れた寧ろ氣味の惡い容貌と違つて、頰の豐かな頭髮の房々した、色の白い皮膚の滑かな女であつた。

　赤い太い房の附いた紐で吊した大きな衣掛けに擴げて打掛けた華美な友禪縮緬の長襦袢の模樣が、電燈の朦朧とした火影に浮いて見えた。

　赤い裏の夜着が女の白粉の薫や香油の匂と融け合つて、異樣な、男を誘惑するやうな匂ひを漂はせてゐた。それは伽羅を焚いて薫じた匂ひであつた。

「さうして靜と寢ていらつしやい。一寸行つて來るから。」

　と、いつて遊女が出て行つた後、彼は、强かその異香をかぎながら、柔い蒲團をすつぽり頭から被つて長い廊下の足音や、遠くの座敷でする騷ぎの三味線や太鼓の音を、靡爛した頭に聞くともなく聞いてゐた。さうしてもう遊女は歸つて來なくつても可いと思つてゐた。このまゝ翌朝まで何物にも妨げられずに熟睡したいと思つた。さうしてゐても矢張寢附かれぬ頭に、外を流して行く夜更の新内や淨瑠璃の三味線の音色が人を情けながらすやうに、もどかしがらすやうに響いた。何事をも運に任せてこのまゝ斯うしてゐても好いといふやうな氣にならした。

　彼は堪へられなくなつて、むく／＼と蒲團の中から起き上つて、三階の廊下に出て下の方を眺めた。十二時過ぎの表の通りは、流石に森として、ぞめきの人脚も絶えた中を、何者の粹の果てか、夜更の寒さに三味を鳴して行く。加茂は五拾錢の銀貨を取出して、それを高い處から投げようとしてゐると、背後から、

「貴方何爲るの？」

　遊女が部屋に戻つて來たのであつた。

「お止しなさい。ね、最う遲いから。」

　翌朝目を覺して、面を洗つてから、煙草を吹かしながら、またよく見ると、遊女は、色の白い處に濃い柔い鬘のやうな眉毛をして、大きな島田に太い／＼樺色の手絡をかけてゐた。

　彼は昨夜此の女を買つたかと思つたら、新に自分の生活の

内容が一つ增したやうに思はれた。
　やがて其處を出て麗かな春の朝日を浴しながら淺草公園の方に出て戻る途中、とある牛屋に入つて淸淨な朝湯に身體を洗つて朋友と話しながら、牛で酒を飲んだら食慾が稀しく進んだ。
　それから五六日立つて、冷い春雨の降る宵であつた。櫻花が咲き盛つてゐるのに春雨がしと〳〵降つてゐた。加茂は、その日一日何處にも出ないで、朝起きてから、また床を延べて安臥してゐた。晩になつて家にゐるのにも倦屈したので、八時頃から先達て行つた遊女の處に一人で出掛けた。おばさんを對手に酒を飲んで冷くなつた身體を暖めようとしたが、どうしても暖くならなかつた。先達ての夜と違ひ家具が冷くつて、翌朝まで身體が暖まらなかつた。
　彼は、それきり其處へは足を向けなかつたが、斯うして一人で山の中に來てゐると、矢張りさういふ處の華やかな夜の巷が思ひ出される。
　それに就ても思ひ出されるのは、矢張りそれと同じ種類の女であつた。一體加茂は以前は、さういふ種類の女は餘り好まなかつた。それ故さういふ處へは自分から進んで行かなかつたが、どうかすると氣分の機會で四谷の先の方には出掛けたことがあつた。
　それは今からもう十二三年も昔になる。小さい家で三四度知つた遊女があつた。その後一度行くとそれが病氣だと言つて他の遊女が代つて出た。すると先の女よりも此度の女の方が好かつた。先の女は顏の青膨れた、氣の重い、それでゐて狡猾い女であつたが、後のは血色の冴えた、身體の肉の引締つた氣持ちの洒然とした女であつた。けれどもそれは其の時一度ぎりで、自分は間もなく何處かへ旅行してその夏中東京にゐなかつたので、そのまゝになつてしまつた。大分古い事だ。今頃は何うしてゐるだらう。
　四谷の先にはその他にもまだ知つた女が二人ばかりあつた。それも皆古いことだ。さういふ女がどうなつて行つたか。何だか彼等に對しては罪惡を犯してゐるやうな氣がする。：遠く過ぎ去つたことがまた想ひ起された。
　今年の五月瀬戸内海の方のある溫泉場に行つた時、其處で遊んだ藝者は、白い柔い肉體をしてゐた。そこでは藝者でも二枚鑑札を持つてゐた。口元が變であつたけれど、目元のぱつちりした眉の柔かく濃い女であつた。その時東京に歸つたら何か送つてやると言つたが、そのまゝになつてしまつた。

四

　それから彼はまた、矢張り今年の春關西に旅行した時、奈良に一晩泊つた時のことを想ひ出してゐた。
　加茂は、關西線に乘つて汽車の窓から伊勢路から鈴鹿山の

溪谷、伊賀國の平野、木津川の溪流などを眺めるのが好きであつた。その時はもう春の末であつたが、尾張伊勢の平野には菜の花が見渡す限り咲いてゐた。處々に暖い日が照つてゐるのに、薄曇りのした空から、しと〳〵と微溫湯のやうな春雨が降つてゐた。綺麗に揃つて濃く生ひ茂つた杉林の間々に切り開かれた山畠に微かな日影が射してゐるのに向の方に群り聳えた鈴鹿山脈の峯々には白い霧が鎖してゐた。
　「阪は照る〳〵鈴鹿は曇る。あひの土山雨が降る」といふ唄は此處の古い街道の實景を謠つたものである。此處ら邊の自然くらゐ古めかしい懷しい情緒に富んだ處は稀れであつた。加茂は斯ういふ處を眺めながら奈良や大阪に行くのでなければ興味が十分に加はらなかつたのだ。
　加之昨夜の東海道の乘客と違つて、此の線路の乘客には、多忙な用事の爲に、東の大都會から、關西の大きな都會々々に旅行するといつたやうな人間は少なかつた。人の好さゝうな田舍の物持ちの夫婦づれだとか、大阪あたりの女達が伊勢參宮をした歸途だといつたやうな長閑な連中であつた。
　彼は、昨夜東京を立つ時、ある若い友達が窓の外から贈つてくれた榮太樓の甘納豆を、漸つと落着いた氣分になつて取出した。龜山驛で買つて伊勢路の番茶を啜りながら、それを少しづつ口に入れながら大阪の新聞を買つて讀んだ。四面を遠い山に取卷かれた伊賀の上野の平野には、暖い春雨が降つて、大きく伸びた黃白の菜の花がもう春雨に凋れかゝつてゐた。
　加茂は昨夜の睡眠不足の上に暖かな陽氣に心地よい眠を催されて、廣々とした車席に橫になつて空氣枕の上にぐつすり寢入つて了つた。
　轟といふ響に漸つと眼を覺されて氣が附くと、汽車はもう伊賀と山城の國境の隧道を通過してゐる處であつた。それを拔けて出ると、汽車は忽ち人家の背後の岨道を直走りに走つてゐた。向の突兀たる山と山とを分けて木津川の淸瀨が高い水音を立てゝ流れてゐた。大河原の驛を過ぎると鐵道は木津の溪の南岸に沿うた嶮岨な棧道に架つてゐた。奇怪な形をして岩石に塞がれた急湍深潭が、直ぐ眼の下を西に流れてゐた。加茂は北側の車窓に凭れて、其等の溪山を飽かず眺めた。その大きな岩の轉つた上を這つて帆網を引張つて溯つて行く川舟があつた。その川舟には蛇の目の傘を翳した男が、乘つて立つてゐた。春雨が西の方から細い糸を下げたやうに橫さまに降り濺いでゐた。春雨に西の空から明い日が照つて、白く光つてゐた。
　笠置驛を通過すると、溪流は次第に開けて、山と山との平地に麥の綠が烟つてゐた。やがて加茂と木津との二つの驛を過ぎると汽車はもう奈良に向つて行くのである。
　加茂は名古屋で乘換へて、寬いで取り散かしてゐた荷物を

この時漸く形附けたり、帶を締め直したりした。

西の空を高く劃つて懷かしい生駒山が春の末の强い西陽に眩しいほど黑く烟つてゐた。「あゝあの彼方には大阪があるのだ。」東の窓からはもう春日神社の濃い森や大佛殿の高い屋根などが見えて來た。彼はわけもなく胸の動悸が仕出した。

奈良の停車場の車夫は旅客を扱ひ馴れてゐた。彼は長途の汽車に乘り疲れた身體を車上に搖られて奈良の街を眞直に奈良公園の方に走つて行た。

猿澤の池の畔には、もう四月の末といふのに、淡白な山櫻が夕暮れの風に散りもせず、靜に薄暗の中に咲いてゐた。彼はそれをば恰も古い都の精のやうに思做しつゝ車の上から眺めた。折から南圓堂の方で御詠歌の鉦の音が滅入るやうに聞えてゐた。

車が、ある大きな門の內に入つて行くと、玄關の脇に寂しい、顏の色の稍蒼白い二十一二の仲居が膝を突いて待つてゐる。

「お越しやす。」

彼は久し振りに柔かな京阪の女の言葉を耳にしたのである。

仲居は、自分で持てさうな輕い蝙蝠傘と膝掛けを手に取つて、

「どうぞこちらへ。」と、いひつゝ長い廊下を立つて奥の方の廣間に客を案內した。

疊が古びて、ひどく荒れた座敷であつたが、廣い廻り緣などが附いてゐた。何百年の風霜を凌いで來たやうな大きな松の樹を取り入れた低い土塀を取卷いた庭があつて、斑入りの椿などが柴草の上に咲いてゐた。表の方の二階座敷で盛に三味線が鳴つてゐた。

「姐さん、好いねえ、あの音は。違ふねえ京阪の三味の音は。」

「さうおすか。」

「さうおすかッて、好いよ。東京のとは違ふ。」

「そりやさうだんな。此方の調子が緩うおますよつて。」

「さうさ、どうしてもあの音を聽いてゐると京阪に違ひないね。」

彼は、染々京阪に來たと思つた。もう慾も得もない、斯うして旅をして遊んでゐたい。さうして旅に死にたいと思ふ氣にさへなつた。

まだ少し早かつたから彼は直ぐ外に出て靜かな公園道を大佛殿から二月堂の方に歩いて行つた。嫩い色をした若葉の蔭にはまだ處々山櫻が淡白く咲き殘つて、薄暗の中にほろ〳〵と淋しく散つてゐた。二月堂の廊下に立つて西の方に遠く潤けた昔の皇居のあつた跡などを眺めた。さうしてゐるとまた春雨がザアと若葉を叩いて落ちて來た。見る間に遠くに黑く

聳えてゐた生駒山の輪郭が白くぼやけた。近くに眼を壓するばかりに茂つた若葉から白い潮吹が立つた。

加茂は春雨に濡れつゝ清淨な砂混りの道を歩いて戻つて來た。

風呂に入つてから、夕飯の膳に向つた。鯛の刺身、蟹の具足煮、白い蟹の身の上に大きな山椒の芽が匂うてゐた。

「姐さん酒を一の持つて來て貰はうかねえ。」

加茂は酒を飮む氣になつた。

「姐さんは美しいねえ。藝者してゐたの？」

「まあ！……私のやうな者にそんな氣の利いたこと。出來しまへん。」

物をいふ拍子につッと後に反つたやうにして笑つた

「さうぢやない。全く藝者のやうだ。」

「よう云はゝる」

「姐さん、もう一旦嫁に行つたの？」

「まだ行きしまへん。」

「でも、もう行く時分だらう。」

「私達貧乏やさかい。こんな商賣してゐすと、目が高うばかりなつて、嫁に行けしまへん。」

彼は、いろ〳〵な話を續けて一本の酒を長く飮んだ。

さうして强か醉心地になつて繪葉書などを書いた。春雨は强い音を立てゝ降つてゐた。その中を彼は傘を翳して運動かたぐ〳〵郵便局まで入れに行つた。その歸途にネーブルを袂に入れて戻つた。

「姐さん、ナイフを貸しておくれ。」

仲居は盆にナイフを載せて持つて來て、それを輪に切つて皮を剝いて一つづゝ差出した。

「姐さん一つお食べ。」

酒の後の渴いた口に滴るネーブルをくゝみながら、彼は言つた。

「えゝ。」と、言つたが食べはしなかつた。矢張り輪に切つては皮を剝いて差出した。

「姐さん、名は何といふの？」

「お菊」

その夜、加茂が床に入つてからも、お菊は脫いだ物など疊みながら、其處で話してゐた。

翌日出立の支度をしながら、

「姐さん、どうだ。東京に行かうぢやないか？」

と、いふと、

「私、東京に行きたうて行きたうて仕樣がおまへんのや。」飛び立つやうに微笑して言つた。

「東京は好いよ。」

「さうだしやろ。東京の人は皆好い、いゝまん。京阪の者は皆そりや不人情やけど。……私三十になるまでにはどないに

しても一遍東京に行かんなりません。」力を込めて、無邪氣に言つた。

「三十になるまでには心細いぢやないか。今行かうよ。……僕これから大阪の方に行つて歸途また寄るから其の時一緒に行かう。」

「え、どうぞ。」

出立の用意は出來た。

「姐さん、此處の家から生駒山がよく見えるか。」

「えゝ、よう見えません……あつちの三階から向ほよう見えまん。あつちお越しやして。」

さう言つてお菊は、西南に向つた高い三階の廊下へ案内した。

其處から郡山の方の田圃が遠く春霞に烟つて見えてゐた。

「彼方の遠い處に赤い煉瓦の大きな工場見たいな處が見えますやろ、彼處が郡山だす。」

お菊は指しゝて敎へながら、自分も遠くの方を恍惚として眺めてゐた。白い耳の處に銀杏返の鬢のほつれ毛が、明けた硝子戸の間から微々と吹いて來る春の風に搖れてゐた、加茂が、それを、横から靜と竊見するのも知らずにお菊は何時までも眺めてゐた。女は何といふ人を魅する生物だらう。

五

それから間もく加茂は、湊町ゆきの汽車の窓に凭れて舊跡に富んだ西の京の田圃を眺めてゐた。春の草に埋れた野川の岸には名の知れぬ黃色の花や紫の花が咲き溢れてゐた。昔の大極殿のあつた跡のあたりの田舍の村々にはもう強過ぎる程の春の日が高く伸びた靑麥の野に照り渡つてゐた。目高を掬ふ里の子供が、小さいお尻を捲つて田の畔を驅けてゐた。それが汽車の來たのを見て「わあア！」と言つて笊を持つた手を擧げた。

加茂は微眠くなつて、車席に横になつた。彼は目を瞑りながらこれから湊町に降りることを考へて空虛な感に襲はれてゐた。湊町の停車場から難波新地は直ぐ一と跨ぎの處にあつた。彼は今斯うして丁度半年ぶりで大阪の地を踏むのである。去年の十月の末難波新地の女とは、半月ばかりのつもりで東京に歸る時別れたのがそのまゝに永い別れとなつてしまつたのであつた。

堅く末を約束してゐたその女は、加茂が東京に歸つてゐる間に身を落籍て何處ともなく姿を隱して了つたのである。それを、彼が毎時も行き附けの大阪のお茶屋の主婦からの報知で知つた時には、どんなに失望と悲憤と寂寞とに身を苦しめたであらう。女は東京から遠くない處の山國の産れであつたがいろ〳〵な土地を流れ〳〵て到頭大阪迄行つて身を賣つてゐたのである。卑しい勤めの女であつたが、加茂にはひどく

その女の性質が氣に入つてゐた。縹緻もさう惡くはなかつた。目鼻立ちのはつきりした色の蒼白い寂しい女であつた。

暫くと思つて遊びに行つてゐたのが、その女に引掛つてから、一年の間大阪の土地に足を止めてゐた。けれどもその女が大阪にゐなくなつてからは、彼は東京に歸つたきり、また急いで大阪に戻つて來る氣はそれきりなくなつたのだ。

一と月餘り經つてから、女は男と一緒に臺灣に行つてゐることが、その女の姉の處に來た手紙で分つた。姉は、その不幸な妹の爲に、わざ〳〵田舍から東京に出て來て加茂の處を訪ねて、女の行末を賴んだのであつた。その事があつてから間もなく女が大阪にゐなくなつたといふことが加茂の處に知れたのである。加茂はその報知に接すると自分で田舍の姉を訪ねた。姉は妹の爲に、加茂は愛してゐた女の爲に額を突合せて、行つた先きを想像して見たのであつた。

それが臺灣までも行つてゐると分つた。姉の處に手紙を寄越してから後、加茂の處にも時々手紙をよこした。それには加茂との約束に背いたことを詫びたり、今の男とは、ほんの金の義理に迫られて來てゐるのだから、長く臺灣などにゐるつもりはないと言つたり、其處は不自由な土地だから樂しみがない、少しも早く東京に歸りたい。と、言つたり種々自分の身の不仕合せなことを溢して來てゐた。

加茂は、さういふ手紙の來る毎に、新らしい妬みや憎しみの湧き上るのを覺えた。さうしてその裏面には新らしい情夫や未練や愛着の情が簇り起つた。

「……主人の寢てゐる間に認めました。」

といふやうなことが手紙の中に書いてあつた。すると、寢るといふ文字が電氣の如き銳さと迅さとで加茂の胸に忌々しい聯想を呼び起さした。

さうして男が寢入つてゐる間、女が夜遲く起きて手紙を書いてゐる有樣が眼に浮んだ。男は歡しい期待を以つて、最後に女を獨占したといふ意識の中に安らかに寢床に横つてゐるであらう。手紙を書き了つた女は、やがて靜に寢仕度をして枕頭の燈を細めながら、その傍に祕と身體を橫へるであらう。加茂は、それを明歷と想像に描き、幻影を見詰めて、强ひて求めて厭な感覺に苛責まれてゐた。忌々しい刺戟によつて胸を衝き詰めては、不健全な快感に耽つてゐた。

女から、「貴郎の深きお情けは永く忘れはいたさず候。」といふやうなことを手紙に書いて來ると、

「いくら俺のことを忘れないと言つたつて、現在お前の身體が、そちらに行つて他の男の自由になつてゐる以上は、おれは少しも嬉しくはない。」といふやうなことを書いて送つた。

それでも女からは、毎時も素直な手紙を寄越してゐた。

加茂は、「お前のやうな女は、俺がもし無敎育な人間であつたら屹度殺される女だ。」とも書いてやつた。彼は、實際女を

殺すことを考へて見た。女を殺してゐると、その間だけは胸が清々した。

　獨り寢の夜半に眼が覺めてどうしても寢附かれないときなど、彼は寢ながら消したり點したりすることの出來るやうにしてゐる直ぐ頭の上の電燈を捻つて、手近の祕密函の中に收めてある女の手紙を取出して何度も讀み返すことがあつた。さうしながら、遠く方のに自分を騙して默つて行つてしまつた女が、今時分、男と二人でどうしてゐるだらうといろ／＼な場合を暗黑な中に描き出しては瞋恚の炎に胸を焦してゐた。

　さうして彼は女のことを想はうとすると、何よりもその多い黑い房々とした頭髮が眞先に眼に浮んだ。暫時の間なりとも自分の花にして眺めて遊んでゐた時、自分はどんなにかこの黑い髮を愛してゐるのだらうと、胸の中で思つて見てゐた。やがて全く自分の獨占にしてしまつたらその時は尙ほのこと此の髮が好くなるだらうと思つてゐたのであつた。自分の所持してゐる何物よりも此の髮を大事にかけて愛撫しなければならぬと思つてゐた。あの頭髮は、自分を現世に繫ぐ生命の綱であつたものを。それが今他の男の寢床の上に縱に亂れてゐる。さう思ふと、彼は眞夜中に居ても起つてもゐられないやうに神經が昂奮して來て、翌日になつたら、どんなにしても工夫して臺灣まで出掛けて行く計劃をしよう。さうして向ふに行つてあの頭髮を根元から斷ち切つて持つて戻つてやらう。せめてあの頭髮を切取つて來て、それを每日見てゐたら好い心持になるだらう。どんな犧牲を拂つても屹度さうしよう。

　そんなことを次から次へ夢想しながら寢床の中に眼を覺してゐることが稀しくなかつた。けれども一旦夜が明けると眞夜中の妄想は明るい晝の光の中に消え失せてしまふのである。

　けれども女のことを少しも思はずにはゐられなかつた。深く胸の底に絡り附いた女を、去る者は日に疎し。といふ世間並の人情に委せて忘れ果てゝしまひたくなかつた。忘れてしまふことの出來るほどならば、何も一年の間あの女の爲にあんな苦しい思ひを辛抱するのではなかつた。忘れてしまふには惜いほど愛着してゐた女であつた。

　それに女は、薄情なことを仕向けたつて、追驅けて來ることの出來ぬ遠方に行つてしまへばいくら男の方でやき／＼焦れたつて、どうすることも出來はしない。その內月日の立つ間には忘れてしまふ。斯う思つて多寡を括つてゐるのだらう。

　さう考へると、意地になつても何時までも新しい心持で女を憎んでゐてやらう。斯んなことを思ひ返されてゐた。

　加茂はその女の爲に方々に不義理を重ねたり、自分にも馬鹿らしいほど不自由な目をして一年の間大阪を去ることが

出來なかつた、そんなことまで女には解つてゐなかつた、それだけの埋め合せをしなければ、どうしても腹の蟲が收まらない。

　手紙によると、女は一年か半年ゐたら歸る、自分とて臺灣のやうな處に永くゐる氣は少しもないと、言つてゐる。どうかして呼び戾すか、それとも自分が出掛けて行つて、怨みのたけをいふか、兎に角その女の事に拘つてゐるのが、差當つて、自分の生きてゐる理由である。假ひ怨むにもせよ、慕ふにもせよ、自分は今好きな女の事を思ひ詰めてゐる。思ひつめてゐればこそ、其處に自分が生きてゐる證據である。それを除いて世界の何物を持つて來ても一切自分とは無關係である。

　大阪に行つたつて、もうその女はゐないのだ。けれどもその女の居た土地は懷しい。燈火の明かな美しい化粧をした女の往來ふ花街に行つて、せめて女と遊んでゐた時分の緊張した心持に浸つて見たい。餘處の座敷に行つてゐるのを貰ひをかけて此方に橫取つたり、夜更けを待つても待つても來ないので不安に驅られながら待ち疲れてゐると、漸つとのことで十二時過ぎになつてから來た時の嬉しさ、馬鹿らしい苦勞をする代りにはその苦勞を忍んで餘るほどの歡樂があつた。

　いつぞや夏の夜更けのことであつた。宵から返事を出して待つてゐても、今行つてゐる座敷が十二時までになつてゐると言つて、遲くまで來なかつた。彼は待ちあぐねて、何度も外に出て花街を步いて見た。綺麗に整つた軒並の貸座敷に明るい燈が點つて狹い通に向き合つた二階座敷の簾に涼しい風が流れてゐた。大阪の難波新地の夏の夜ほど華かな處はない。派手な長襦袢の裾を端折つた藝者や遊女は皆表に出て扇子でパタ／＼胸のまはりを煽ぎながら、お座敷のかゝつて來るのを待つてゐた。

　加茂は、二階の緣側から簾をあげて、いつまで人通りの絕えない街を眺めてゐた。餘處のお茶屋に送られて行く女は幾人も其處を通つて行つた。段々人足が薄くなつて、やう／＼花街が靜になる時分になつてから、彼が下の通りを見てゐると、女は、いつもの男衆と肩を並べて此方に步いて來てゐた。女は步きながら、懷紙を取出して口元を拭いてゐた。彼はそれを見て「ああ來た」と思つて、すぐ引込んだその時の女の姿も眼に殘つてゐる。さういふ高潮した心持には再びなれないのだ。その他、いろ／＼な場合があつた。

　身を引く時には、彼が常に呼びつけてゐたお茶屋へも顏出しもしないで行つてしまつたといふことだ。そこの主婦は彼等の爲に屢々どんなにか心を盡したであらう。彼は、せめてその主婦に會つて、去つて行つた女のことを話しもし、聽きもしたかつた。さう思ふと少しも早く湊町驛に行きたかつた。彼は汽車の中に橫りながら、強く記憶に殘つてゐる甘い

思出を繰返へしてゐた。

六

半歳ぶりで河半の入口に立つた時には、加茂は流石に胸の躍るのを覺えた。

「まあ〳〵若旦那が來やはりましたで。お久しおます。」お芳がゐて、奥に聲をかけた。

主婦は晝寢をしてゐた奥の間から起きて來た。

「まあおめづらしいこと。あれからずッと東京だつか。」

「去年の秋歸つたきり、一昨日の夜、東京を立つて來たのさ。」

「さやうか。まあ若旦那には申譯けのないお氣の毒なことで。勝山はんが落籍いた時、私どう手紙を書いてえゝか。書けんいうたら主人で、どうもありのまゝを書いてやるより他にどうも仕方がない。というて、あゝ書いてやりましたが、自家でも若旦那があの手紙をお見やしたら、どないにびつくりしやはるやろいうて、いろ〳〵噂してゐましたんや。」

「いや仕方がない。彼奴に騙されたのが私の修業がまだ足らぬのさ。」

「騙したといふわけもおますまいがな。私の處でも他に人があつて、自前になつてゐるといふことちつとも知りまへんもんやから。」

「兎に角彼奴悧巧な奴だ、よくも騙しやがつた。そんな奴だから尙ほ自分の物にして置いて見たかつたんだが仕方がない。」

「なんでもその人といふのは、始終船に乘つて貿易とかをする人やさうだす。それで今一緒に臺灣に行つてゐるさうだす。」

「うむ、それは僕の處にも手紙を寄越すから知つてゐる。」

「それも、なか〳〵何處へ行てゐるか分らなんだのを、いろいろ虎どんをせめたら、分りましたのや。あの虎どんの奴が憎らしい。あれほど若旦那に氣を附けて貰ろて居りながら、少しもさういふことを話さんから。」

「もう幾許言つたつて駄目だ。が、彼奴に本を預けて置いた筈だが、なかつたかねえ。」

「それは自家に取つておきました。」と、いつて主婦は奥に行つて一冊の洋書を取つて來た。

「さう〳〵えゝ物が入つてゐますで。」と、言つて主婦が渡した本の間に女は寫眞を一枚入れてゐた。

加茂は、その寫眞を見ると、ぼやけかけてゐた記憶が再び明に浮んで來た。さうして旅をするにも毎時其寫眞を鞄の底に祕めてゐた。旅寢の寂寞に耐へかねて其寫眞を取出して飽かず眺めてゐた。

中禪寺の湖水の畔に遠く都會の喧騷を避けてゐても、深く彼の胸に喰入つたその女に對する執着と怨恨とは、どうして

も拂ひ去ることが出來なかつた。記憶は記憶を追うて、強く甘い愛着の情に心を惱ました種んな場合が、今となつては懷かしく想ひ回された。

もう一度あゝいふことがあつて見れば好いと思ふことさへ多かつた。まだ去年の九月、その女に心惹かれて東京に歸ることが出來ないで、攝津の有馬に逗留してゐる時分のことであつた。

九月中ばのある日朝起きて見ると、この間中二三日濕り勝ちであつた天氣が、拭うたやうにカラリと晴れて、青く透き通るやうに澄んだ大空には、千切つたやうな眞白い雲が靜に浮いてゐた。その空にも、空を劃つて直ぐ眼の前に聳えてゐる、枝振りの面白い松の生ひ茂つた山にも、麗かな太陽が美しい光を浴せてゐた。

彼は楊枝を使ひながら、緣側に立つて稍々暫くその秋らしい空の色に見惚れてゐた。つひ二三日前までは空氣の肌觸りにも、まだ何となく夏らしい心持が殘つてゐたのだが、僅に二三日の雨を通り越すと、もう何も彼もが秋の色に充ちたやうに思はれて來た。貸し浴衣の寢衣一枚では寒くつて耐忍が出來ないくらゐであつた。

そんな快い天氣になつて見ると、彼は、靜としてはゐられなかつた。それに最早半月ばかりも溫泉宿に籠居してゐるので、近くの散歩する處は見て了つたし、今に來るか〳〵と待つてゐる女は來ないし、山の上の方の高い美しい秋の空を見るにつけて、彼はわけもなく唆られてふらふらッと、その山の彼方の大阪に行きたくなつた。大阪の女の處に此方から出掛けて行きたくなつた。一旦さう思ひ染めるともうその氣になつて了つた。

さうして朝飯を濟すと、直ぐに支度をして大阪まで出掛けた。彼は女とお茶屋の主婦とへの土產に女中に急いで取つて來さした炭酸煎餅を提げてゐた。別莊の庭にはもう木犀の花が、濕つた土の香に交つて薰やかに匂うてゐた。彼は、その一枝を取つて嗅ぎながら、帽子の鉢卷に挿した。

有馬から大阪に出る六甲山の山道は眺望が好かつた。雨上りの松林に臭い強い土の熱蒸がしてゐた。爽やかな空氣の肌觸りを覺えながら彼は樹蔭の道を俥を走らせた。

裏道から見た六甲山の背面は、赭土色をした山の地膚が、痛ましい傷痕のやうに生々しく露はれてゐた。雨水に洗ひ削られた赤土の岩が巨人の鋒のやうに幾つとなく聳立つてゐた。その下には深い谷が抉つたやうに掘れてゐた。阪道はその大きな溪谷に添うて下つてゐた。

彼は好い心地で身體を俥が運んで行くのに任せながら、凝乎と眼を瞑つて、これから女に逢ひに行く樂しみに伴ふ種々の心元ない空想に囚へられてゐた。

「かうして有馬の山の上から、わざ〳〵大阪まで出て行つて

好い鹽梅に女は家にゐるだらうか。」かういふ心配があつた。
　女はよく賣れる妓であつた。二三日前に電話を掛けて、來るのか來ないのか訊ねた時に、そんなに來なければ此方から出て行かうかといつたら、「待つていらつしやい。私行くから。」と言つた。今日來るとは思つてゐないだらう。來るといふから、抱への妓が三四日他處行きの出來るだけの錢を送つて遣つたのに、病氣をしてゐたとか、癒つたけれど、家で遠出を許さないから樂花で馴染の客の處へ遊びかた〴〵行つてゐるとか言つてゐた。そんなに樂花の座敷が勤まるくらゐなら、錢まで送つてやつてあるのだから、保養かた〴〵出られぬわけはない筈だ。そんなにして稼業を休んでゐるのに出るほどの馴染の客といふのは、どんな客であらう。そんな客に出るほどなのに、自分の處へ來ぬといふのは、どう考へても解らない。
　さう思つて來ると　彼は一刻も早く大阪に行つて、今日直ぐ、自分の言ふことを承知さして、晩の汽車で、いくら遲くなつても有馬に連れて歸らう。――空想と不安とが躍る胸の中に果てしもなく往來した。
　さうして漸つと大阪行きの停車場まで山を下りて來ると、急いで電報を難波新地のお茶屋にあてゝ打つた。
　有馬ではもう秋が來たと思つてゐたのに、大阪に來ると、まだ夏らしい乾燥いだ光が疲れたやうな街區を照してゐた。

　午後のお茶屋は靜寂としてゐた。彼は「御免なさい。」と聲を掛けながら上つて行つた。長火鉢の傍には誰れもゐない。奥の主婦の居間に主婦の妹お芳さんが一人晝寢をしてゐた。彼は突立つて柱時計を見た。急いで來たほどあつて、まだ二時を少し過ぎたばかりであつた。
「早かつた。これなら屹度何處にもゆかないで居るに違ひない。」と、思つて安心しながら、「お芳さん〳〵！」お芳の枕許に寄つて行つてお芳を呼び起した。
　お芳は漸く寢呆けたやうな顔を擡げて大きな欠伸を一つした。
「お越しやす。」
「お芳さん、電報を打つたが、來たか。」彼はお芳の落着いてゐるのに、そろ〳〵焦れながら何より先に訊いた。
「えゝ、まゐりました。」
「何時頃着いたかね？……さうして最早あちらへさう言つてあるの？」彼は疊掛けて訊ねた。
「えゝ、もう一時間ほど前だしたな。すぐ店の方へさう言つて置きました。五時までになつてゐますよつて、明き次第送りますいうてゐました。……今日有馬からだすか、若旦那。」
　お芳は、漸つと長火鉢の處に起きて來て、長煙管を吸ひ附けた。
「今日、おかみさんは、どうして？」彼は薄暗い家の中を見

廻しながら訊ねた。今時分ならば、屹度直ぐ出來ると思つた女が、晝間から他へ花に行つてゐるので、喪失したやうになつて、毎時のやうに主婦がちやんと長火鉢の向に坐つてゐて、さういふ時に何とか斯とかお世辭よく氣安めを言つてくれないのが一層物足りなかつた。さうしてこの間中病氣をして休んでゐるとか、樂花に行つてゐるばかりだとか言つてゐたのだが、今時分花に行つてゐるとすれば、屹度その馴染の客の處に行つてゐるに違ひない。
　さう思ふと、一刻も早く、自分が遠くの有馬からわざ〳〵出て來たことを行先の女に耳入れして、向の座敷を外させたかつた。
「姉さんは、今日宅の方に行つてゐます。もうやがて三時だす。もう二時間と一寸だす。お二階に上つて少しお休みやすな。」
　お芳は、時計を見上げながら言つた。
　彼は、いはれるまゝに二階に上つて行つて、後からお芳が入れて來た茶を飮んだ。
「暮までになつてゐますさうやけど、もう一遍電話をかけて見ませう。」
　お芳は降りて電話を鳴らしてゐた。彼は酒卓に肱を突いて階下の話に耳を立てゝゐたが、よく聽き取れないので、階段の降り口の處まで行つて上から覗いた。

「……暮までになつてゐるのやな。暮までゞ屹度此方へ貰うておくれやす。屹度だつせ。……ようおます言うて、本人に耳入れしてくれたんだすか。耳入れ、まだしえへんのやろ。これから直ぐ本人に耳入れしておくれやす。……有馬から若旦那がお越しや言うて頼んますで。」
　お芳は、くどく念を押して置いて、電話を切つた。彼は降りて行つてお芳の背後から電話の話を聞いてゐた。
「まだ今まで耳入れしてゐなかつたんだな。私が出て來てゐるといふことを、本人に知らすやうに、よくさう言つてくれたでせう、店で直ぐその通り知らしてくれるだらうねえ。……一體今日は早くから何處へ行つてゐるんだらう。」彼は後を獨言にいつた。
　さうしてまたしても種々な不安と疑惑とに襲はれた。
　錢まで送つてやつて、受取つたことをも電話で話してゐながら、有馬へ來ぬのからして不都合だ。夏から、あんなに連れて行つてくれと言つて置きながら、今に悅んで來るだらう。來たら二人で顔を見合はしてどんなに嬉しがるだらうと、そんなことばかり考へて待つてゐたのに先達て中のやうに、そんなら進んで行かうとも言はなかつたのが不思議だ。病氣で座敷を斷つてゐて、馴染の處へだけ遊びながら樂花で行つてゐるほどだから、丁度有馬に來れば好いわけだ。それにも係らず來ないのが氣に懸る。今に來たら、その理由を糺

してうんと脂を搾つてやらねば濟まぬ。」……

　こんなことを考へながら、彼はまた二階に上つて來て、兩手を枕にして仰けに横になつた。仕方がないので五時までは待つてゐなければならなかつた。

　その內に主婦も歸つて來たと思はれて、階下で聲がし出した。夕方近くなつて花街に人の出入が繁くなつたらしい。

　彼は暫くしてまた長火鉢の傍に降りて行つた。やがて暮近くなつたので、此度は主婦が直ぐ頭の上の電話口に立つて暮までの駄目を押した。

　彼は二時から待ちあぐんで、漸つと五時近くなつた時計と主婦の電話口の交涉の有樣とを交る交る見詰めてゐた。

「それえなことを言うたかて、今日既う一時からさう言うたあるのやないか。暮までになつたるといふことやつたから、そんなら暮には屹度貰うとくれやすとくれ〴〵も賴んで置いたんやないか。……六時には屹度貰ふとくれやす。」

　主婦は強く言つて、電話を切つた。

「六時まで……もちつとの間や。辛抱おしやす。」

　その一時間が、彼には待遠しかつた。

　外は十五夜でぞろ〴〵とぞめき足音が續いた。花街には最う軒々に明るい灯が入つて、美しい夕化粧を凝した藝者や遊女が男衆と肩を並べて送られて行つた。涼しい風が單衣を着た肌にもう冷たかつた。

　河半の店にもそろ〴〵客があつた。電話の鈴が忙しさうに鳴つた。柔かい調子の藝者が「今晩は」と明るい長火鉢の前で主婦に一寸挨拶をして直ぐ二階に上つて行つた。お芳や仲居は黑光りのする箱段を急しく上つたり下りたりした。間もなく三味線や太皷が鳴り始めた。

　主婦は、彼がさも〴〵待遠しさうにしてゐるのを見かねて暮後の催促をした。電話の返辭は、また延びた。

「餘程大事なお座敷だすのやらう。」とお芳は考へたやうに言つた。

　それが、今心細くなつてゐる加茂の胸に響いて一層心元なからした。

「大事なお座敷つて、一體どんな客なんだらう。」彼は獨言のやうにいつて首を傾げた。

　長火鉢の傍は忙がしかつた。主婦は向側に坐つて德利を銅壺に漬けてゐた。仲居は燗の出來たのに鯛煎餅の炙つたのなどを持ち添へて上つて行つた。後から來た客の註文はどんどん出來た。送られて來た藝者はパッと媚びるやうに匂ひをさせながら加茂の鼻の先を通つて二階に上つた。

「今日は一時から、さう言うてあるのに、今になつても貰へんいふのは、これは何かわけがあるに違ひない。」主婦は德利を漬けながら加茂の顏を見ていつた。

「向のお茶屋に行つて、本人に耳入れをしてゐないんだらう

と思ふ。勝山に私が來てゐることが知れゝば、何とかして貰つて來ないわけがない筈だ。」

　勝山に錢を送つたことは、河半の主婦には內證であつた。河半からでなく、勝山の自分花にして有馬に來る約束が加茂との間にしてあつた。それは二人とも河半には言はぬことにしてあつた。

　それを全然話してしまつた。

「さういふこともあるのだから、私が有馬から出て來たことが勝山に知れゝば、何とかして貰つて來なければならぬのだ。」

「左樣か。まあ貴郞方二人の仲にどんなことがあるか、私知らんけど。」

七

　その內八時が來た。主婦はまた電話口に出て催促をした。虎どんが起きて來たから、今虎どんが向のお茶屋に勝山を迎へに行つてゐる。歸つて來たら直ぐ送らす。といふ返辭である

「もう來ませう。」主婦が言つた。

　加茂は樂しい不安に襲はれてゐた。

　八時を過ぎて三十分も待つたが、それでもまだ來ない。

「どうしたんだらう？」加茂は時計を見ながら呟いた。

「本間にどうしたんやろなア」主婦も呟いてまた電話の鈴を鳴した。

　今歸つた處だから、これから其方へ行くといふ返辭である。

　暫く待つてゐる處へ虎どんが、遣つて來たが、勝山は見えない。

「まあ虎どん、勝山はん、どうしてくれるんや。」主婦もお芳も口を揃へて、いきなり極めつけた。

「私ももう困つてしまひました。」

　虎どんは、苦しさうに太息を吐きながら言つた。

「勝山はん、何處にもゐやはりやへんのだす。」呼吸が急いて虎どんは言葉も切々である。

　今まで好い加減落膽してゐた加茂は、それだけ聞いて、ワクワク動悸が打ち出した。

「何處にも居らんいうたかて、そんな事あるもんか。今日晝から、もう何度電話を掛けてある。あんた居らんから知るまいが、耳入れをしたかいへば、したいふし。今にも貰つて來るやうなことをいふといて、どうしてくれるのや。若旦那今日、有馬からわざ〴〵出て來てゐるのやないか。」暫時呆れて默つてゐた主婦は、斯う言つた。

「あゝ、お越しやす。」虎どんは、初めて氣が着いて加茂の方に頭を下げた。「いやもう、それは何といはれましても仕樣が

おまへん。私、今日寢番だしたよつて自家に行てゝちつとも晝の事知りませんもんやから。漸つと少し前店に來て河半から勝山さん事で、これ〳〵やと他の者に聞きましたから、心當りを探しても、何處にもゐやはりへんのだす。」虎どんは、汗ばんだ顏をして只管謝つた。

「あんた、そりや晝の事は知らんのは無理はないやろけど、店の人が不都合やないか、今にも出來るやうなことを言うて晝から客に待たして置いて、九時になつて今更本人の行つて居る處が分らんいうて、私の處で客に濟まんやないか。」

「御尤もだす。そやから今晩の處は私に免じて勘辨して頂きます、へえ。」虎どんは、頻に主婦の前に頭を下げた。

男衆の言ふことには問ひ詰めてゐると、どうしても辻褄の合はぬ處があるけれども、兎に角勝山は午前からブラリと一人で店を出たきり、まだ歸つて來ぬといふのであつた。

それで二時から今まで店から電話で返辭をしてゐたことはまるきり嘘であつたことだけは分つてしまつた。加茂も主婦も疑惑に鎖ざゝれて顏を凝乎と見交はしたが、さうかといつてどうすることも出來なかつた。本人が居なくつて、加茂の來てゐることを、てんで知らないのであつて見れば、勝山を責めることも出來ない。けれども疑へば疑へないこともなかつた。加茂は惚れ抜いてゐる女の來ぬのに、いはうやうもない失望を感じたけれど、何も彼も虛僞でばかり表面を繕つて居る此の社會の、その嘘が何處まで達いてゐるかを探つて見たいやうな興味が起つて來たのであつた。

「午前から一人で出たつて、それにしても今時分まで何處にウロ〳〵してゐるんだらう。第一店でも大切な抱妓を放つて置くわけがないな。」

「それとも活動寫眞でも見て居られますか。」虎どんが言つた。

「阿呆らしい。何ぼ活動寫眞が好きやかて、午前から夜の九時も十時までも見てゐられますかいな。虎どん本當の事を聞かしとくれやす。何處に行つてるのや。」主婦は賺かすやうに言葉を靜にして訊ねた。

「本當に知れまへんのや。それが知れてるくらゐなら、斯樣なに困りやしまへん。」言葉に力を入れて斷言した。

すると、店から虎どんが行つてはゐませんか、他に用が出來たから直ぐ歸るやうに言つてくれと電話が掛つて來た。

「まあも少し探して見ます。：：私も他にも用がありますさかいな。：勝山はん。ほんとに何處に行つたんやろ。私一人難儀や。」

獨小言を言ひながら、急がしさうに歸つて行つた。

九時が過ぎ十時も過ぎたけれど、そのまゝ虎どんは顏を出さなかつた。加茂は頻りに焦れつたがつた。暫くしてお芳は電話で何度めかの催促をしてゐたが、氣の無い顏をして、

「まあ、姉はん、店ではなあ、勝山はんは、先刻虎どんが、あなたの處に斷りに行つた筈やがいうてるんだつせ。今晩は勝山はんはお斷りしますいうて、何が何やら、ちつとも分りやへん。」

「斷りに？：：それでは先刻虎どんが來たのが斷りに來たのやつた。それを、あの男、人が好いもんやさかい斷るいふことを、よう言はんのや。」

主婦はさう言つて加茂の顏を疑はしさうに見た。

「こりや矢張り勝山はん何處へも行つてへん。何處か其處らのお茶屋にゐるんや。今晩は斷るといふのは本人のいふことや。何か此には譯があるに違ひない。」

加茂は氣が急けて來た。

「さうだらうか。：：しかし本人がゐるとすれば、さういふわけは無い筈だがなあ。そりや此方が騙されてゐるのかも知れないけれど、今も言つたやうに金も大分渡してゐるし、まさか本人がゐて、さういふんぢやなからう。」

加茂の胸は千々に搔き亂れた。

「さやうか。そりや貴下方二人の間にどんな事があるか、私の方ではよう知らんけれど。：：あなたまたどうして遊女に金を渡したりしたんや。」

「まあ可い。その代り、本人から斷るといふのだつたら、もう彼奴とはこれきりの緣だ。」

「まあもつと待つて見て、まだ十時やさかい、あの女に限つたことはない、あれがどうしても來なんだら今日は他のを呼べやえゝ。えゝのが、なんぼでもあるさかい。」

「いや、もし來なかつたら、今晩は一人で泊めて貰ふ。その代り後で仇を取つて遣るんだから」

加茂は、勝山と自分とを主婦が譯もなく言つてゐるやうに、唯普通の仲と思ひたくなかつた。

「そやけど本人が留守で知らんやつたら、本人に罪はないもの。」

「虎どん、どうしたんやなあ。勝山はんは。」表で外を通る客を呼んでゐたお芳が呼び掛けた。

男衆の虎どんがまたやつて來た。

「私困つて了ひました。何處を探ねてもどだいゐやはりしまへんのや。」大息を吐いて言つた。今が一番忙しい時刻と思はれて、汗で顏が光つてゐる。

「矢張りお客に連れられて行つてゐるんだらう。」

加茂は、晝前から今時分までゆつくり外で遊んでゐる客はどんなお客だらうと、種々と想像して胸を焦してゐた。一人ぢやない、客と一緒に違ひないとも思つた。そのお客と何樣なにして遊んでゐるだらう。さう思つて自分と女との場合から今何處でどうしてゐるか明歷と幻影を描いて、それを心の中で凝乎と見詰めてゐた。有馬に來られないと言つた口の下

で、さうして他の客と出歩いたりしてゐる。
「勝山はんが、よう行かれるお茶屋に行つて見ましたけど、ゐやはりやしまへんのだす。何うでも餘り私がきつう言ふもんやさかい、そんなら上つて見てくれ言ひますから、上つて一々座敷を見ましたけど、ゐやはりしまへんのだす。」
「さうやろ。矢張りお客に連れられて行つたんやろ。それで行く先は何處や。」主婦は、問ひつめた。
「えゝ、漸とお茶屋だけ分りましてえ。さあ何處へそれから行かはつたやら、分りまへんのだす。」
「ぢや他所ゆきだらう。」加茂は、傍から口を出した。
「いえ、他所ゆきなら、他所ゆきと屆けてゆきますから、他所ゆきやおまへん。」
そんなことを言つて何時まで男衆を責めてゐても際限がないので、兎に角歸つたら屹度貰つて來るやうに根押しをして主婦は虎どんを歸した。さうして
「どうも可笑い。前と今と言ふことが違ふ。なあさうだつしやろ、前來た時には、晝前一人で店を出たいふかと思ふと、此度は、矢張りお客と一緒やいふし。」と言つて、不思議がつた。
けれども他處行きならば、掟として取締へ屆けて行かねばならぬものが、屆を出してゐないから、他所行きでないことだけが分つた。さうすれば幾許遲くなつても歸つて來るに違ひない。さう思ふと加茂はまた安心したやうな心持になつた。さうして少し氣晴しに外に出て見た。
夜が更けるにつれて仲秋の滿月は大空高く潤んだやうに澄んでゐた。何處の屋根の上の涼み臺にも夜霧が降りてゐるのがキラ〱光つてゐる。明るい藝者屋の門先には長い床几を出して、それに出の着物を着飾つた藝者が、赤いのや友禪模樣のや長襦袢の裾を高く捲つて腰を掛けて、口の掛つて來るのを待つ間を笑ひさゞめいてゐた。涼しい夜風が意氣な街筋を流れて、櫛の跡の美しい鬢の毛を吹いた。何時までもぞろぞろ人足が絶えなかつた。
加茂はさういふ通を歩いたり、瀟洒な露地を拔けたりして一と廻りして戾つた。
その內段々晝間からの疲れが出て、もう遊女も何も入らぬ、早く橫になつて寢たくなつた。さうしてお芳に毎時の三疊に床をのべさした。
宵から騷いでゐた客も騷ぎ疲れたと思はれて靜になつた。表も大分寂しくなつた。
加茂は、着物を脫いで蒲團の上に橫はると、何時の間にか微睡としてゐた。すると
「まあ、勝山はんどうして、待つてゐましたで。」
門口にゐたお芳が大きな聲で呼ぶのが二階まで聞えた。それと同時に

「どうも濟みません。遲くなりまして。姐ちやん。」
頭に膠着いて忘れやうとて忘れられない、少し嗄れた勝山の聲がした。
あゝ來た。と思ふと加茂は急いで夜着を頭から、すつぽり被つた。畜生！ どうしてくれよう。心は嬉々しながら、何處までも寢入つた風をして居らうと決心した。
「若旦那、勝山はん來やはりましたで。」
お芳が聲を掛けながら入つて來た。
お芳が入つて來たので、寢た風を裝うて居らうと思つたのがさう出來なかつた。
何故、女は早く上つて來ないのだらう、もし一寸挨拶だけにでも來たのぢやないかと、またそれを氣遣ひながら、
「女はどうしたの？」もう女なんかどうでも可いといふやうに訊ねた。
「今、階下で一寸話してゐやはります。」
さういひながらお芳は、加茂の橫になつてゐる枕許に坐つて、
「勝山はん、到頭來やはりましたさかい、どうぞもう何にも言はんと置いておくれやす。」
詫びるやうに頭を下げて見せた。
「何も言やしない。どうでもいゝ。」
其處へ勝山が入つて來た。
「待つたでせう。」
と、言ひながら加茂の頭の處に來て蒲團の上にペタリと坐つた。
「隨分緩りお樂しみだつたな。お氣の毒さまだ。」加茂は、欠伸をかみ殺しつゝ言つた。
「そらまた出た。」
女は、冷かすやうに笑つた。
「どうぞ、もう何も言はんといておくれやす。」
「姐ちやん、どうもお氣の毒さま、遲くなつて濟みません。今日多勢でお客に連れられて神戸に行つてゐましたの。歸つて來て直ぐ來たわ。」
「あゝ、さよか、……若旦那が、急きやはりますさかいな。よう歸つて來ておくれやした。どうぞ御緩り。」お芳は降りた。二人ばかりになると、
「うンどうして、待つたでせう。え。」
賺すやうに言ひながら、女はぴつたりと膝を男の體に押付けて、仰けに寢てゐる顏の上に覗きかゝるやうにして、兩手を靜と男の胸の上に置いた。
多い鬢のほつれ毛が撫でるやうに男の顏に輕く觸つてゐる。女の襟頸や、きちんと搔き合せた小さい胸のあたりから鬱陶しいやうな化粧の薰りがする。男は兩手を差伸ばして女の脊を大きくかゝへた。縮緬の單衣羽織を被つた女の體が撓

ふやうに柔かい。

　誰れにも他の男には手を着けさせたくない。自分獨りで此の女を何時までも斯うして我が物にしたい。と思ふ情が、新しい勢で男の胸に湧き上つて來た。

　男は女の脣を輕く銜いた。それは幼兒が慈母の胸を披いて「乳」を探る時のやうな心持であつた。女の口の色は鮮かな淡紅色をしてゐた。小さくて柔かであつた。男は優しい涙が潤むのを覺えた。

「今晩これから夜中遊びませう。」

　女は機むやうに言つた。

「神戸に行つてゐた。どうした客だい？　よく來る客かい？」

「うむ、臺灣の方に行つてた人間‥‥」

　女は事もなげに言つた。

「よく來る客かえ！」

「まあよく來る方だねえ。」

「神戸には多勢で、どんな連中と。料理屋へ行つて遊んでゐたの？」

「えゝさう。他は皆藝者。私には初めての人ばかり。」

「そのお客一人で？」

「えゝ一人。」

「ぢや金持の、遊び好きだな。」

「さうだねえ、金は持つてゐるらしいねえ。‥‥あの奴。」

「何時頃から來てゐるの？」

「七月時分から。」

「月に何度くらゐ來る？」

「さうねえ、大抵五日めくらゐには來るわ。」

「その客好い男かい？」

「否！　好かない。色の黑い奴。」

「酒でも好きな客かい？」

「大好き。幾許でも飲んで、腰が立ちやしないの。」

「でもこんな遲く神戸に泊らないで、よく戻つて來たねえ。」

「私一人で竊と脱けて戻つたのよ。」

「だつて、お前は藝者と違つて、寢る時分になつて用があるんぢやないか。」

「そんなことが出來るもんですか。醉つてゝ身體が動けないのだもの。」

「後になつてお前がゐないことが分つたら、怒るだらう。」

「さうかも知れない。ですから歸してくれと言つては歸してくれないでせう。それで竊と脱けて來てやつた。また丁度好い具合に私、虎どんに電話を掛けたの。虎どん私もう歸りたいわつて。さうすると、虎どんが、「勝山さんあなたは今何處にゐるんです。」と聞くから神戸から電話を掛けてゐるの、と言つたら、虎どん呆れて、「身體が惡いのにまあそんな遠方にどうして行つたんです。此方ぢや何處に行つたかと思つて斯で大騷ぎです。直ぐ歸つて來て下さい、私が一人で困つてゐます。」と、いつたからそれで尙ほ急いで戻つたの。初め虎どんに迎へに來てくれと言つたけれど、忙しくつて、そんな遠方まで迎へに行けないからつて、梅田まで迎へに來てくれた。」

　勝山はおぼこ娘のやうなあどけない聲で話した。昔も今も變りない、全盛の妓は抱主には大切にされ、男衆には下僕のやうに侍かれてゐた。

　加茂は、勝山のいふことに辻褄の合はぬ處があるのに氣の附かぬこともなかつたが、強ひて疑はうともしなかつた。それよりも甘い歡みに耽るのに心が急けた。

「あゝ可愛い‥‥」

　女は緊めつけるやうに肉體から出る言葉を發して、痛くないほどギザギザと男の上脣を嚙んだ。そして黑いよく動く瞳で男の顏を見詰めた。

　男もさういつた女の顏を凝乎と見詰めた。不確なやうな甘い愛情の疑問が男の胸を通つて行つた。男は女からさういふ愛情の表はれた言葉を疾から求めてゐたのだ。

　男の瞳に輕い疑問の表はれたのを、速に見て取つた女は、

「‥‥顏をしてゐるわねえ、矢張り。怒つた時には恐い顏をするけれど。」

　前の言葉を言ひ譯するやうに云ひ足して、男の頰を痛くないほど抓つた。

　血の循環が止つたかと思はれるやうに發作的に疲れて蒼くなつた顏が、男の感能を一層刺戟した。

　翌日は晝過ぎまでも寢てゐた。

八

　臺灣まで一緒に行つた男は。その神戸に連れて行つた客であつた。

「今晩は斷る。‥‥どうも可怪い。本人が言ふことぢやな。何かこれは勝山さんにわけがあるに違ひない。」

と、言つて、あの晚河半の主婦が小首を傾けたのは流石にその道で食べてゐる主婦の推察の通りであつた。

　加茂は「さうだらうか、まさか。」と思つて、幾度となく胸に忌な疑ひの雲を漲らして、女を飽くまでも不信な者にして見ようとしたけれど、自分と可愛い女との間に、どうしても興褪る他の男の姿を認めることが出來なかつた。

「‥‥今に素人になつたら、斯樣なに何時まで寢てばかりゐられないわねえ。」

　前夜から翌日までも寢通してゐる時など、女はそんなことを言つてゐた。

「私の古いのでお召の褞袍をこしらへてあげるわ。‥‥不斷は木綿物でも好いわ。」

「それでも、さうばかりも行かない。お前に好い物を着せて見るのが己の樂しみなのだから。」

主婦は小猫をよく可愛がつてゐた。

「あなた猫嫌ひ？」

「嫌ぢやない。」

「階下に好い猫の兒がゐるのよ。連れて來よう。」

遊女はよく友禪縮緬の長襦袢の袖に小猫を包んで來て寢ながら戯れてゐた。

「お前も好きだなあ。飼ふと可愛くなるものだ。」

「東京に歸つて家を持つたら、猫を飼はうか。」

「えゝ飼ひませう。」

加茂はお召の半纏を被つて終日小猫を玩弄にしてゐる婀娜たる遊女を長火鉢の向に置いて描いてゐた。

「お前、眞個に俺の處に來る氣かい。」

「眞個ですとも、あんな約束までして。」

「でも千圓近い大金は、私にはとても出來ない。斯うしてゐる間に他の客で千圓出して身請けをしようといふ者があつたら、その時お前はどうする？ 俺の方は急には出來ない。一方は早く出來る。それでもお前は私の方に來られるまで待つてゐるか。」

「それは、いくら遲くなつてもあなたの處に行くまで待つてゐますさ。」

「いくら遲くなつても？」

「いくら遲くなつても、あなたの方で出してくれさへすれば待つてゐるわ。」

かういふ話がよく二人の間に言ひ交されたのは、まだその年の春の頃であつた。春雨の濕々降る時分加茂は毎日のやうにその土地に入り浸つてゐた。

その實、女は丁度その頃、長く通うて來てゐる客に身請けをされて自前で稼いでゐたのであつた。

九

加茂は、またしても女の寫眞を取出して見詰めながら、今言つたやうな事を現在のやうに樂しく思ひ耽つた。ハウプトマンの『僧房夢』の騎士は、最後の妻に裏切られた胸の苦みに耐へかねて、わが此の苦みは、高い梯子に登つてゐる者のやうだ。一旦登つた者は必ず降りねばならぬ。降りねばならぬほどならば、寧そ登らなかつた昔の方が安らかであつた。と言つてゐる。一旦執着した女は、深く心に絡み着いてなかなかに忘られるものでない。

先達て、この地に來てから間もなく、女の姉は手紙を寄越して妹が近い内に内地に歸ると言つて來たから、歸つたならば早速お知らせすると言つて來た。加茂は、それから日々女の歸つて來たといふ音信のあるのを待つて日を消してゐた。

ある晩は毎時のやうに獨りボートに乘つて湖の沖に漕いで出た。夕暮れかゝつた男體山は湖水の岸を離れて、遠く水の上に出れば出るほど、その雄々しい姿が沈欝な色を增して強く人間を威壓してゐるやうに見えた。幾日も雨が降らぬので湖の水は、物凄いほど紺碧に澄んでゐた。それが夜の色の近づくとゝもに、倍々暗黒に變つて來た。黒く暮れた周圍の山の峽には白い雲が棚曳いてゐた。冷たい風が遠くの水の上に浮んでゐる彼の白衣の姿を吹いてゐた。鷺鳥のやうに湖水の上を幾つとなく彼方此方滑走してゐたセーリング・ボートの白い帆も、大分前に見えなくなつてしまつた。湖岸の大き木立の間に立つてゐる外國の大使館の別莊に火影が見えて來た。其處から暗い水を渡つてピアノの響きが靜かな湖上に傳つて來た。

彼は一艘の舟も見えなくなつた廣い水の上に、暫くオールの手を止めて、靜かな波の搖するまゝに舟を流し放しにしながら、强か夜の風に吹かれてゐた。

さうしてゐると、暗い〳〵闇の中から、また遠くに行つてゐる女の姿が明歴と浮んで來た。白い顏、刮と見開いた時の派手な黒い瞳、毒々しいほど房々と多い頭髮、媚びるやうな襦袢の襟の色、さういふものが病的に明に彼の頭に蘇生つて來た。自制力の無くなつた頭には、さういふ妄念ばかりが安安と浮び上るのであつた。晝間さへ妄想に耽り勝ちの頭は、さういふ眞暗い湖水の上に獨りで浮んでゐると、恰も夜の夢と同じやうな魔夢が現はれた。彼は段々遠くへ舟の流れて行くのも忘れて現の夢に見入つてゐた。女の姿がつい其處に立つてゐるやうにも見えて來た。彼は覺えず手を擧げ、女を打たうとして空を拂つた。

「畜生！ 彼女が戻つて來るといふ、戻つたら殺してやる。」

彼は、これまでも何度となく恨みのある女を殺すことを考へた。女を殺してゐる處を現の夢に描いて見て僅に積る胸の惱みを晴してゐた。殺すにしては、今の女くらゐ都合のいゝ女はない。常に親兄弟と遠く離れて殆ど行先不明になつてゐる。さうして美しい。十年苦海に身を沈めてゐるのを見殺しにしてゐるやうな親や姉が何時とは知れず此の世から姿を消したとて彼女の跡を探す氣遣ひはない。あの華奢な優しい身體をした女、今まで何千人と數知れぬ男の肌を觸れた女のあの肉體を、不意に絞殺して、あの肉を啖つてやらう『雨月物語』の中に愛欲の迷ひから、無明の業火の爲に遂に鬼と化した僧が稚兒の死肉を啖うたことを書いてある。あれこそ愛欲の眞だ。自分はあの女の肉を啖はねば滿足出來ぬほどあの女を愛してゐるのだ。自分には最早普通の手段では女に對する情欲を滿足せしめることは出來ない。

彼がそんな空想に耽つてゐる間に、ボートは自然に沖へ沖へと流れて行つた。フト頭を上げて、星の明りを頼りに暗

い水の上を見渡すと、舟は一里の水の上を流れて殆ど對岸の寺ケ崎といふ處まで來てゐた。

中宮祠から湖水の岸に立つて、遠く對岸を見渡すと、欝蒼と樹木の茂つた島のやうな處が見える。それは島ではなくして寺ケ崎と呼ぶ延長八丁餘の出島である。中宮祠の部落に近寄つた處から歌ケ濱の觀音の邊までは湖畔の森林の間々に貸別莊などが建つてゐて、外國人が家族を連れて夏中を其處に過してゐるので、其等の洋館に食料などを賣込む御用きゝの小僧どもが始終往來してゐるからそんなに寂しくはない。

寺ケ崎は、其處からは遠く離れてゐた。歌ケ濱から先は、僅に湖水の岸に沿うて足尾峠につづく小徑が、白樺や山毛欅などの高山植物の大木が繁茂した間に通じてゐるばかりであつた。そんな人跡の稀れな處であるが、中禪寺の湖畔で其處ぐらゐ眺望の好い、地形の優れた處はない、半丁ばかしの廣さで細長く突出た半島の根は、丁度大きな鎖のやうに奇怪な形をした岩が亂雜に續いてゐて、濃い紺碧の水がヒタ〳〵と、樹木の掩ひ被つた其等の岩を蘸してゐる。栂や黑檜や落葉松の間には躑躅や八汐の老木が繁茂してゐた。その寺ケ崎の突鼻に一字の藥師堂が立つてゐた。

加茂は、夜目にその藥師堂を見ると、思ひ附いやうに、「ああ、此處に連れて來て女を殺してやらう。さうぢや〳〵。」と獨りうなづいた。

すると、何時の間にか、湖水の上が、明くなつたのに氣が附いて東の方を見上げると、十七日ばかりの月が赤く彼方の峯の上に覗いてゐた。月光の爲に近くの水の上に却つて凄いばかりの隈が出來て來た。彼は覺えず四邊に一人でゐるのが恐しくなつた。さうして自分の考へてゐることも恐しくなつた。自分の心が鬼に化けて居るやうに思はれた。

（大正三年十月作、中央公論掲載）

祕密

三重は昨夜はいつまでも心地よく眠れなかつたので、曉方まで床のなかで身體を持ちあつかひながら、いつものやうに取留めもない雜念に冴えた頭を搔き惱まされてゐたが、それでも神經の疲れで四時が打つのを聞いてから漸つと少許微睡としたかと思ふと、二時間ばかりしてふつと眼が覺めた。熱は下つたとおもはれて、たつたそれだけ眠つたゞけでも頭は重荷でもおろしたあとのやうに輕くなつた。昨日から冷しどうしに額のうへに吊してゐた氷嚢はいつか水になつてしまつて、頰の横にうるさくぶら下つてゐるのを、彼女は白く細つた手を伸して、そつと脇へ遣りながら、

「しげ……しげ！」

と太息と一緒に女中の名を呼んだ。すると、臺所の方にゐたおしげは、その聲をきいて、茶の間と仕切つた襖を靜かに開けながら、彼女の寢室に顏を出して、

「あ、お眼ざめになりましたか。」といつて、はひつてきた。

「はあ、やつと少し眠つた。……しげ、頭の方を明けておくれ。」

「えゝ、あけませう。」といつて、女中は寢室に竝んだ八疊の座敷の緣側から一枚々々雨戸を繰つてきたそれとゝもに海に近い磯の香を含んだ爽かな朝の風が、すうッと部屋一ぱいに流れこんで、初秋の天地に漲つた旭の光は明々と彼女の寢てゐる枕頭まで射しかゝつてきた。三重は、それにやゝ元氣をつけられたやうな氣持になつて、薄い搔卷を跳ねながら、中形の寢衣のまゝ寢床のうへに起直つて枕のまへに坐りながら海の方を見晴した。つい此の間まで燬きつけるやうな太陽の光に蒸し返されてゐた海はもういつの間にか見違へるほど秋寂びた色に變つて、眞碧に澄んだ水の上には白帆が遠く、あちらにも此方にも流れてゐた。小坪の鼻から逗子、葉山、三浦半島につゞく津々浦々が今朝は手にとるやうに近く眺められ、つい眼のさきの水のうへに盆栽かなんぞのやうに浮いて見える江の島の彼方には髣髴とした伊豆の山々が煙波の中に朝光を眞正面に浴びてゐる。見馴れた景色ながら、三重は今朝はめづらしさうに寢ざめの眼にやゝ暫らく見惚れてゐたが、そこへ金盥や嗽ひ茶碗などをもつて來させて、ざつと、

口をそゝぐと壁際に置いた鏡臺を蒲團のそばへずらさせて、睡眠不足と氣疲れとで面窶れのした顔をぢつと鏡に映してみた。彼女の顔はその心と同じやうによく變る顔であつた、それを自分でも知つてゐる三重は今鏡に映る顔の眼の下に薄黒い厭な隈が出來て、いつも氣にして白粉で塗り隱すやうにしてゐる額から眼尻へかけての小皺が、つくろはぬ生地のさまをまざ〱とみせて、一夜のうちに三つ四つも年を取つたかと思ふほど顔が醜く老けてゐた。熱のあとの脣の色も乾涸びたやうに褪めてゐる。

寢亂れた頭髮が氷嚢で壓潰されてゐるので、尙のこと此樣に窶れて見えるのであらうと思ひながら束髮を解きほぐしてしまつて、ざつと櫛の目をとほして、手器用にまた束ねあげた、そして濡れた手拭ひで一遍顔を拭きとつたあと、水白粉を掌にとつて、それを兩掌に揉みひろげつゝ頰から額、顎から襟頸のまはりを擦つてゐると、黄色く弛んだやうな顔の地肌が次第に生色を帶びて眼にも平常のとほり媚びをもつた潤ひを生じてきた、頭の内もそんなにしてゐるうちに幾らか清清して、體にも稍元氣が回復してくるのを覺えた。

昨日は家に歸りつくとから殆ど夢中で、口を利くのさへ大儀でうん〱と唸つてゐたくらゐであつたから、何を云つて詰問されても、たゞ默つて返事もしなかつたが、今日もまた今に午後からやつてきてうるさいことをいふに違ひない、さうしたら何と云はうかと三重は鏡に向ひながら、胸の中でその時云ふべきことを思案してゐた。この前のときは東京へいつたついでに久し振りに深川の實兄のところを訪ねたと云つて好い加減に誤魔化して置いたが、その時にも「深川へ？」と云つて疑り深い眼をして「妙なところへ何を思ひ出していつたのだ。何ぞ用があつたのか、どんな用事があつたのだ。」と疊みかけて訊かうとするのを、

「だつて、私だつて兄のところですもの、別にこれといふ用事がなくつても、東京へいつたついでに不斷無沙汰をしてゐるのですから、偶には訪ねてゆくぐらゐのことはしますさ。」と逆に嵩にかゝつて事もなげに云ひぬけたのであつたが、今日は何といはう、また深川へとも云はれまい。さうかといつてどうも他に一夜を明けてまで泊つてくるやうな處のない事はよく分つてゐた。東京の麴町には生みの母親が一番上の姉の養子夫婦と住んでゐるのだけれど、そこは自分が生まれ落るとから今の養父母達のところへ貰はれてくる時に、一生音信不通といふ契約にしてあるので、他人同然の疎遠な關係になつてゐる事は旦那の博士もよく知つてゐるのであつた。この間からまだ十日もたゝぬに二度までも一と晩家を明けたといふ事は、三重は我れながら今更自分の行爲の大膽不信とを淺猿しいとも、また無分別とも思はずにはゐられなかつた。

博士の世話を受けるやうになつてからもう足掛四年この方といふもの唯の一度だつて、博士にそれと告げないで東京へ芝居見にさへいつたことがないのに、よく思ひ切つてあんなことが出來たと思ふと、それがまるで恐ろしい夢にでも襲はれてゐたかのやうに、まざ〱と思ひ返されるのであつた。併し、それは彼女にとつては昨日今日思ひ立つた空想ではなかつた。彼女がまだ先の旦那の世話になつて日本橋の方で藝者屋を營んでゐた時分、その頃好きで讀んでゐた新聞によく面白い續き物を書いてゐる小說家があつた。御飯よりも小說を讀むことの好きであつた彼女はその小說家に人知れず胸を焦がしてゐたのであつた。

その小說家の書いたものを見る度に、どうして女の心持ちがかうも巧く書けるものであらう、まるで自分達の腹の中に入つてきたことでもあるかと思はれるほど、それが三重の不斷思つたり考へたりしたりしてゐることとぴたり合つてゐた。そして素人の細君や娘、或は商賣人などの女を書いてもそれ等の人物がそれ〱の運命と境遇に從つて氣使つたり、喜んだり、さま〲の苦勞をしてゐる心の中を裁ち割つて見せたやうにまざ〱と書けてゐて、ちよつとした頭髮の結びやう、衣服の好みから對話のしやうなどにも何とも云へない氣のきいた筆づかひがしてあつた。子供の時から小說の好きな三重にはさういふことまでよく讀みわけて味ふことが出來るのであつた。その頃自分があんまりその小說家に悶惚れして大騷ぎするものだから、よく内の抱妓などに、

「御覽なさい、姐さんの情人が今日また面白いことを書いてゐますよ。」などゝ云つて戲弄つたりしてゐた。

その時分から三重は一度どんな人間かその小說家に逢つて見たくつて堪らなかつた、けれども商賣してゐる時分なら、何とか好い分別も出ようしまたどういふ機會で偶然會へまいものでもないが、もうかう素人になつて定まつた旦那のある今の身では、假令後暗い心などはないにしても、何だか厚顔ましいやうで進んで斷行するにはさすがに憚かられた。ある製藥會社に關係してゐたその旦那が事業の失敗から彼女に經營さしてゐる商賣の方にまで凭かゝるやうになつてから、仕舞にはその藝者屋も到頭立ちゆかなくなつて、旦那とは苦々しい喧嘩別れをしてしまふし、養父母を養はねばならぬ責任のある彼女は、これから先きをどうしよう、もう一遍他の土地か、いつそ田舍へでもいつて藝者になつて出ようかと思つてみたが止めてから七八年にもなる今となつてはまた再び左褄をとつて座敷を勸めてみようといふ勇氣も出なかつた。途方に暮れてゐるその頃、抱妓なども座敷で知つてゐるほかに始終かゝり付けてゐた見知りごしのある病院の院長から人を仲に立てゝ話しがあつたので、その人の世話になることにな

つたのが今の旦那であつた。三重もその博士は嫌ひではなかつた。年はまだ四十をちよつと出たばかりなのに、頭の半分まで禿げた色の淺黒い、男振りなどはあんまり好くない方であつたが、町の開業醫などによくある樣に厭味なところなど少しもなくて、邊幅を飾らない、獨逸には四年も留學した博士であつても極めて書生肌のはき／＼したのが何處よりも一番三重には好きであつた。以前抱妓などからも今日お座敷で先生にお眼にかゝつた。先生から姐さんに宜敷くつてなどゝ云つて、抱妓を通じて兩方で噂をしあふやうなことがよくあつた。病院にいつて診察を受けてゐる時なども、患者に接して優しい深切と、尊敬の念が生ずるくらゐ熱心が籠つてゐながら、それでゐてすこしも氣取らない平易な口のきゝやうをするのが博士の美點であつた。

先の男との手を切るためには藝者屋をしてゐる時分の世帶道具から鏡臺まで賣り拂つて錢に換へるほどの苦しい工面をしてゐたところへ厭でない博士といふ確乎した後立てが出來て苦境を救つてくれたのであるから最初は博士の方からいひ出した關係であつても後には彼女の方から餘計焦れてかゝるほどに三重の心はいつしか博士の捕虜となつてしまつたのであつた。一體彼女は浮氣といふのではなかつたが好きな男に對しては慕つぽい方の質であつた。それだけ彼女の性情が眞實で何斯につけて感受性に富んでゐたのでもあつた。

博士は鎌倉に分院を持つてゐたので一週の中火、木、土の三日は必ずその方に來ることになつてゐて土曜日から日曜にかけては、そちらで過すことが多かつた。それで三重は博士の命に從つて鎌倉に住まはせられることになつたのであつた。夏季は博士も殆ど鎌倉の方にゐることが多かつた。

さうして今日までまる三年の月日がともかくも經つてきたのであるが、長い間には遠慮がなくなればなくなるほど、互に兩方で我儘も募るし、それに深く知れば知るほど三重には博士の性格に最初思つてゐたとは案外に厭なところのあるのが追々について來た。以前關係のない他人として知つてゐた時分には、唯さつぱりした書生肌の人とのみ思つてゐたのが實際はひどく愚癡つぽくつて、妙に嫉妬深いうへに、惡くみみツちいところがあつた、博士自身の話にも若い時から今の地位にまで成功するには決して傍で見てゐるやうな順境をばかり經て來たのではなかつた。四圍の難關を通り拔けてこゝまで漕ぎ付けるには隨分人知れず男子相應の苦心があつた。

「なに、俺などはまだ成功の何のと云へる地位ぢやない、これから大いにやらなけりやならん。」

何斯につけてはそんな話をして自分が前途に尙大きな成功を望んで努力してゐるのにお前などが男が單に、終日の活動に疲れた精神と肉體とを慰める爲の道樂に過ぎない愛情に紐

つて生活してゐるに滿足して動ともすればその愛に甘えようとするのは善くないことだと云つて、金錢などに關してすこし必要以外のことに無心がましいことでもいふと、博士はすぐ榮螺が蓋をして殼の奧に堅く身を縮めるやうに小さく自己を守つて、成るべくさういふ問題には觸れたくないといふやうな風を裝ふのであつた。

「お前などは錢なんかひとりでに出來るものゝやうに思つてゐるからいけない、過去が過去だからよつぽど注意して、そんな考へを改める氣にならんと何時までもさういふ料簡でゐては仕方がない」

といつも同じやうなことをお浚へして聞かした。博士の考へでは何のことはない彼女をまるで二人目の奧さんにでもしたつもりで、藝者稼業をしてきたのをさも／＼惡いことでもしたものゝやうに云ひ卑すんで何かと云へば堅いお說敎をするのが癖であつた。

博士は自分を可愛いと思つてくれゝばこそさうして意見などもしてくれるのであると思へば、三重はそれを賴母しいとも難有いとも思はぬではなかつた。博士の積りではさうして自分の一生を末まで見てくれる考へなのであらうが、眞實それ程迄に自分を愛してくれるのならば、もつと心や體の自由を許してくれてもよささうなものであるのに、まるで小禽かなんぞを飼つてゞもゐるやうに、彼女は晴れて夫のある身よりも尙ほ此處へ出るにも體の自由が許されなかつた。もう今となつては苦々しい記憶ばかりを殘してゐる先の男を懷かしいとも、逢つてみたいとも思ふ考など露ほどもないけれど、其頃はどこへ行くたつて自由で、多勢の抱奴などに「姐さん、ねえさん。」と呼ばれて自分の腕一つで其等に采配を揮つて、一軒の藝者屋を切りまはしてゐると思へば、心に威勢が付いて氣も彈んでゐた。それに引換へ、今の人は職掌柄も前よりは高等で、人物も眞面目であるがそれだけに野暮で妙に堅苦しくつて、家では三味線を出して置くことさへ禁物なのであつた。毎月晦日前になると、洋服の內隱しから出して渡す金は少くはなかつたが、その代り彼女に記さして置く雜用の帳面を一々自分で眼を通して、今月の殘額は何ほどゝ、すこしでも餘計な出費のない時は機嫌がよくて、

「さあ、月の代らぬ今月のうちに早く銀行へ持つてゆけ、もつてゆけ、」と、銀行の預金帳まで時々披いてみて、自分の物が多くなるやうに彼女の貯金がふえて行くのを樂むのであつた。

「人間は、いつ何んな災難が降つて湧いてこぬとも限らぬ。その不時の用意といふことを平常から考へておかねばならぬ。お前などはさういふ考へを少しも持たぬから、いけないのだ。先の時分にも入れば入るだけの其の日暮しをしてゐたから、仕舞にはどうにもならぬやうなことになつたのだ。長

い間さういふ社會に育つてきた思慮を矯正するにも貯金といふことは好ましいことだ。」
そんなことも度々聞かされてゐた。博士はまた分院を改築した材木などの殘りを使つて、そのうち三重のために一軒家を建てるなど、云つてゐるのであつたが、彼女はさうして博士の恩義に浴してゐる内に漸次今の境遇がどうすることも出來ないまでに現在のまゝに定着してゆかなければならぬやうになるのを恐れてゐた。斯うしてゐればそれはその日の生活に唯不自由のないと云ふばかり、まるで氣樂な座敷牢にでも入れられてゐるやうな自分の意氣地のない境涯がつく〴〵と考へられた。
「家を建てゝ頂くのも結構ですけれど、それだけのお金を私に下さいナ。」
博士がそのことを云ひ出して、見積りなどしてゐた時に一度戯談らしくさういふと、旦那はすぐ三重の心の中を探るやうな眼をして、
「それで、お前がどうしようといふのだ。」と云つて、博士は不機嫌さうにそのまゝ口をつぐんでしまつた。
三重はしかし千圓でも二千圓でも可いから家を建てゝもらうよりか金でもらひたかつた。斯うして尙あと二三年辛抱してゐる間に少し纒つた金が出來ると、何とかして暇をとり一度經驗のある藝妓屋をして見たいのが、何よりの希望なのであつた。今のやうな氣詰まりの生活をこれから一生續けてゆかなければならぬと思ふと、自分は何を樂しみに活きてゐるのか分らないとさへ思はれるのであつた。
變つた男に逢つて見ようといふやうな氣まぐれな考へを起したのも、さういふ絶望から來た慰藉を求める悲痛な手段でもあつた。そして博士に對して濟まぬといふ心の半面には、自分にこんな不信な行爲をさするも、その人の心柄であるといふやうな都合のいゝ是認の理由だけは胸の中に用意してゐるのであつた。
文學記事などの多い新聞でいつも餘處ながら動靜に注意を拂つてゐるその男は、その夏の初めから日光にいつてゐることを三重は知つてゐた。そしてその土地がその男の婦人に關する過去の生活に痛ましい記憶を結びつけてゐることをも彼の書いた物を通して彼女はよく知つてゐた。それとゝもにその地はまた三重自身にとつても懷しい思ひ出に富んだ處なのであつた。三重は時々今までに自分の見えてきた男について考へて見ることがあつた。先の男のも一つ前の男は自分がまだ日本橋からお酌で出てゐた時分、やつと一本になりたての頃、初めて肉體の經驗に接したその男であつた。それはある田舍の方の金滿家の息子で東京に遊學に出てゐた學生であつた。三重がまだ十四五の時分からいつも彼女を呼んで愛して

ゐた。そして關係が出來ると間もなく落籍して一緒に住んでゐた。その若い夫に連れられてある夏日光へもいつたことがあつた。藍を溶かしたやうな清い水の流れる大きな溪流や、眉に落ちかゝつてきさうな高い雲の空に犇々と聳え立つてゐる美しい夏の山の姿、一日冷い嵐氣のかゝつてゐる山のさまなどが三年ほども同棲してゐて、亡くなつたその男を追憶する度ごとに、いつも想ひ起されるのであつた。その人さへ生きてゐてくれたら、自分は一生その男の他に身を任さずともすんだのである。
博士に對する我儘な不足や自分の境遇について毎時飽き足りなさを感ずる不平やら、單調な生活の無聊に苦しめられていつも自分で自分の身體を病人のやうに持崩してゐる爲に此の二月ばかり劇しい神經衰弱から極度の不眠に惱まされてゐる彼女の病的な空想は、長い間の胸の奧底に祕密に育まれてゐた夢のやうな思ひを實現さして見ようといふ決心をしたのであつた。
半月ばかりの間、殆んど隔日に手紙を往復したあと、男は到頭日光から東京まで歸つてきて、彼女は鎌倉からそこまで出掛けていつたのであつた。
一昨日はほんの少時といふつもりで、出る時には出掛けていつたのであつたが、逢つてみると、やつぱり直ぐには歸られなくなつて、到頭また泊つてしまつた。昨日は起きぬけに自動車で東京驛まで驅け付けたほど急いだのであつたが、鎌倉まで歸り着いた時分にはもう燬くやうな殘暑の日の光が砂の多い海邊の街道にちら〳〵照り輝いてゐた。三重はその上を、睡眠不足と複雜な感情の興奮とでぐつたりと疲勞した體を俥に揺られながら、どうかすると眩暈のする頭をぢつと堪へこらへ、漸と長谷まで戻つてきたのであつた。そして家に歸り着くと頭が割れるやうに痛んできて嘔吐をも催してゐた。それが今朝になつてみると頭の內はやゝ輕くなつたが、長い間食欲のない胃には、一昨日から殆ど何も入れてないのに何かしら胸に溜つてゐるやうで、さつぱりした物が欲しいやうな渴を覺えてゐた。それで不味さうに牛の乳を少し許り飲むと、女中に長谷の街まで葡萄を取りにやつて、それを啜つてゐた。でも午後に博士が顏を見せた時分には、丁度幸そこへ近處に住んでゐる養母が容體を見にきてゐたので、その日は博士も昨日のことを繰返して聞かなかつた。三重はやつとその場だけは免れたので、心の中でほつとしてゐた。
男とは手紙の交際はつゞけてゐたが、二三日するとまた山の方に歸つていつたので、それつきり逢はなかつたが、いつたと思ふと、すぐまた引返してきて、此度はまた箱根の方へ來たといつて、そこから手紙を越してゐた。箱根ならば鎌倉からさう遠くないので、彼女も一度そちらへいつて逢ひたい

と思つて、そんなことを書いてやつたりしてゐたが、引きつづいて妙に頭が重かつたり、四肢が絶えず氣怠かつたりするので、今に心持が快くなつたならばと思ひ〳〵日は經つていつた。併しそれは十日たつても、二十日經つても少しも變らない許りでなく、夏の初めから長く惡くしてゐる胃の所爲とばかり單に思つてゐたのが、後にはその爲ばかりでないやうな徵候が體の各部の容體に露はれてきた。毎月は定つて月末にある不淨のものさへ見ないのも不思議に思へた。

博士は六人といふ多數の子持ちであつたが、三重には博士の世話になつてから足掛け四年、その前の男とも七八年の關係であつたが、ついぞ其樣なことはなかつた。尤も彼女の身體はまつたくの不產婦ではなかつた。ずつと最初の男に死に別れたときには、まだ十八であつたから、そんなことゝは少しも氣が付かなかつたが、その時はもう三ヶ月の身であることが後になつて分つた。それから十三年もそんなことは一度もないのであつた。

その内九月もだん〳〵末に近くなつた。涼しくはなつたとはいつてもまだ日中などはどうかすると眞夏のやうな暑さの殘つてゐた氣候もこの三四日降りつゞく秋雨に海に近い丘のうへなどはセルのうへに羽織が欲しいくらゐの涼味を覺えた。閉め切つた硝子障子を透かして見える空は陰鬱な雨雲に掻曇つて松林の間から見える海の表は灰色に鎖されて雨脚の中に白く荒れ狂うてゐた。三重は濕つぽい陽氣を厭ひながら蒲團の上に寢たり、起きたりしてゐた。博士は自分のみでは十分に分らぬといつて東京からわざ〳〵婦人科の專門醫を呼んで診察を受けさした。併し博士が三重を鎌倉に隱して置くことは、飽くまでも祕密にしてあるのでその醫者が來た時には無論博士はその座にゐなかつた。

診察の結果はそれに違ひなかつた。さうと確定すると三重は眞實に思ひがけもない出來事に吃驚してしまつた。旦那のこと、その男とのことなどいろ〳〵繰返して考へ出して見たりした。博士は每日のやうに顏は見せても近頃泊つてゆくやうなことは滅多になかつた。一度や二度でそんなことがないとも云へないが、不思議といへば餘りに不思議であつた。三重はまざ〳〵と今は罪惡の萌芽を自分の體の中で育てゝゐるやうで、それを思つて見るさへ堪へられなかつたが、さうかと思ふとまた考へやうによつてはどちらにしてもそれは自分の兒であるに違ひない。自分にはもう子供などはないものと思つて、欲しいとさへ思つてみたこともなかつたのに、ふとしたことから天の授けたものであるとおもへば、大切にせねばならぬもの〻やうでもあつて、わけもなく樂しくもあり、またそれが爲に自分の今後の運命がほゞ確定されたやうにも考へられた。三重は博士の來るのを待つていろんなことを話

したかつた。博士はその晩にまた顏を見せた。

「やつぱりさうです。」

三重は呆れた樣な眼を見張つて、ぢつと博士の顏を見た。博士は彼女から專門醫のいつたことを聽いたあとで、

「どうも變だなあ、すこし可怪しいよ。」といひながら頻りに小頸を傾げてゐた。

「お前先月深川の兄貴のところへいつて泊つたといつたのは、あれは何處へいつたのだ。俺はあの時のことが未だ疑問になつてゐる。」

二度目に外泊した時にも三重は外に好い口術がなかつたので、やつぱり深川といつて濟まして置かうとしたのを、博士は彼女に隱してわざ〳〵深川へ手紙を出して實否を問ひ糺したのであつた。その時博士の方へは兄の都合のいゝやうに返辭をしてくれたのであつたが、滅多に訪ねて來ぬ兄はそのために鎌倉までやつてきて、ひどく三重に意見をしていつた。

產れ落ちるとから今の親のところへ貰はれた彼女とその兄とはつい三年ばかり前初めて名乘り合つたばかりであつた。その後兄は博士とも會つてゐたが、彼も三重の今の境遇をあまり好ましくは思つてゐなかつた。

「お前、厭なのなら厭なので、そんなら、それをさつぱり話をつけたらいゝぢやないか、そんな訊ねられて返答のできないやうな、不明な行爲をするのは止めてくれなければ俺達から大越さんに對して濟まない。」

兄はその時そんなことをいつて歸つたのであつたが、今でもどうかすると、博士は二度外泊した時のことをお浚へして疑問にしてゐた。で博士がさういふと、彼女は、

「そら、また初まつた。」といつて、博士がいつまでも、そんな男らしくもないことを氣にしてゐるので嘲けるやうにいつて笑談にしてしまはうとした。

「その子は俺の子ぢやないよ。」博士も戲談のやうにいつた。

「ぢや誰の子でせう。」三重も笑ひながら云つた。そんなことはいひながらも、三重が好くつてよくつてならぬ博士は、その爲に、これまでどうかして言ひあひでもすると、直ぐ、ぢや、お暇を下さいと口癖のやうにいつてゐた彼女の心が、自分の方へ確と引附けられたことを思ふと滿足を感ずるのであつた。

箱根の方へはそんなことを書いてやらなかつたが、三重はその男に逢つて一度そのことが語りたいとおもつてゐた。いつも行くやうにいつては、その時になつて身體の惡い容體などをいつてやるので、そんな鹽梅ぢや博士の情でお目出度いことでもあるのでせう、などゝ戲談を云つてきたりした。その皮肉が當つたのであつた。九月の末になつて東京へ歸つたといふ手紙が來たので彼はそのうち都合して鎌倉の家まで來

てくれるやうに云つてやつた。

約束の日にその男は訪ねて來た。三重はネルの寢卷のまゝ肩で息をしながら、

「御免なさい。こんな身裝で。」といつて、襖をあけて八疊の方へ出た。「よくいらしッて、私はまだ不可ないんです。」

さういふ彼女の顏は八月の暑い最中よりも面窶れがして、眼のまはりが落ちくぼんでゐた。

「いけませんな。こんなに涼しくなつたのに、何故でせう。ドクトルは何といつてゐるんです。」

「あの人にはよく分らないといつてゐるんです……あなたはこの前お目にかゝつた時より大變お肥りになつた。」

そんなことをいひながら三重は自分で茶を淹れたり、菓子をとつて出したりした。男は珍らしさうに坐つたまゝ餘念なく遠くの海の上を眺めながな頻りに景色の好いことなどを賞めてゐた。

「こんなところに何の生活の心配もなく遊んでゐられゝば幸福ぢやありませんか。」

それには女は答へなかつた。がやがて凝乎と男の顏を凝視るやうにしながら、

「私はやつぱり、あなたが仰有るとほりです。」

「何がです。仰有るとほりとは。」

「先日のお手紙にお書きになつたこと。」

「先日の手紙に書いたこと。お目出度いこと?」

「えゝ、さう。」

男はそれを聽くと、今までその女に對して感じてゐなかつた輕い嫉妬のやうな感じを胸に覺えた。そして何となく固くなりさうな口に強ひて苦笑を浮べながら

「それは結構ぢやありませんか。博士がお悅びでせう。」

「ほんとに案外。惡いことは出來ないもんですね。」三重はしみじみ呆れたやうな眼に微笑を浮べながら低聲で話をつゞけた。

「惡いことつて?」

「でも、私どう考へても家でそんなことのある筈がないんですもの。」

「ぢや。私?」男は不氣味さうな眼をしていつた。

「えゝ、私さう思ひます。」

さういはれると、彼は苟めの戲れに思はず永久自分といふものを忘れることの出來ぬ強い記憶の保證を與へたやうで一種の優勝に似たものを感じたが、同時にそれが自分と彼女の關係の結果であるとも、それは二人のみ知つてゐる——或はその二人すらも知らない自然のみが知つてゐる——祕密であつて、表面はどこまでも博士の子である以上、そのために三重が空想してゐるやうな將來獨立して藝者屋を營む希望は斷念しなければならなくなつたことになる。

「とにかくあなたの將來の地位がそのために確定せられることになるのですから、お目出たいわけです」

男は少し厭味を交ぜたやうにいつた。

「私厭なの、とんだことになつてしまつた。」

そこへ女中が茶の間の襖をあけて食べる物を運びはじめた。

「東京と違つて此方には何にもあなたのお口に合ふやうな物がないのですよ。海の傍だから、ありさうでゐながらないの。お料理の仕方からまづいのですから。」

三重はさういひながら、圓い欅の餉臺の上に女中が載せるくさぐさの鉢や椀などの置場を變へたりしながら、

「さあ、召し上つて下さい。おいしくはありませんけれど。」

「えゝ、頂きます……。併しすこし大膽のやうですが、まだ好いのですか。」

「うむ、三時までは來やしません。」

彼は飲けない酒は二三杯でやめてあとは燒松茸や蒲燒で、ゆつくりかゝつて御飯を濟ました。

まだ時間は大丈夫といふので、彼は緣側に起つて海の方を眺めたりした。三重も傍にきて彼に寄添うて立ちながら遠くの景色を指ざし示した。海のうへには金色に漲つた靜かな日が照り輝いて、拭うたやうに碧く晴れた大空のところどころには眞白い羊雲が漾うてゐた。水平線の上にはいくつも白帆がかゝつてゐた。

「兄さん!」

と、いきなり三重は男の背に手をやつて絡みつくやうにしながら、また「兄さん!!」と甘えるやうに低い聲を出した。

「いけませんよ。」と男は愼みぶかさうに、ふいと體を横に開きながら、「女中が見てゐますよ。」

「大丈夫よ、この子兄さんのよ。」

「そんなことが分るものですか。」彼は氣味惡さうにまた身を退きながら笑つてゐた。

彼は緣側の方から彼女の寢室になつてゐる六疊の方を覗いてみると、そこにはちやんとして厚いめれんすの寢床が設けてあつて、傍の茶簞笥のうへに立てた。寫眞挿みには洋裝した半身の寫眞が飾つてあつた。

「あれよ隨分不男でせう。」と三重は後から入つてきて、笑ひながらいつた。

「あゝ、この方ですか。なにが不男なものですか。立派な方ぢやありませんか。」

「その寫眞は古いの。眞物はそれよりずつと肥つてゐますけれど、色の黑い、それは不男なの。」彼女はそれでもそんなに嫌つてはゐないらしいやうに云ふ。

「あなたも隨分罰當りだ。こんな立派な人に可愛がられて

ゐながら、何が不足で、こんな浮氣をする氣になつたのです。」
「いや。そんなことを云つちや厭。」
「厭ぢやありませんよ。不心得な人だなあ。」
「この子死んでくれると可い。」
「噓を云つてらあ。その爲にあなたの一生の運命が確定するんですもの、喜んでいゝわけだ。」
「どんな子供が出來るでせう。」
「あの寫眞によく似てゐる子が出來ますさ。」
「厭。またそんなことを云つて、あの人に似る筈はないの。それは私にちやんと分つてゐる。きつとあなたに似てゐます。」彼女はさういひながらぢつと男の顔を見た。
「斑の兒が出來るよ。」彼は戯弄ふやうに笑つた。
「おゝ厭。」女は顔を顰めるやうにして手で腹のところを抑へる眞似をした。
「とにかく何らにしてもあなたの地位は安全さ。」男はまたしてもそれを繰返した。假にそれが自分との仲に出來たのであるとしても、結果はやつぱり女と博士との關係を今までよりか遙に密接なものにするのが、彼には物足りなかつた。
「さあ、もうそろ／＼歸りませう。」といつて、やがて男は歸り支度をした。
「さう。ぢやまたそのうち御都合のいゝ時に。」

身體は醫者のいつたとほり、それから一と月ばかりするうちに通例の經過のあつたあとは胸の方も漸次落着いてきて、時候の好くなるに從つて衰へてゐた頰や腕頸のまはりに觸つてみても幾許の肉が附いてきたのが自分でも分るくらゐになつた。

八月から此のかたずつと家にばかり閉籠つてゐて、もう三月近くも遠くに出ぬので、三重は此の頃の小春日の長閑さに久振りに東京の方へもいつてみたくなつた。一度手紙で相談をして東京に近いある連れ込み屋のやうな料理屋に泊つてきたことがあつた。その時も出る時には今日こそはどうしても夜までには歸るつもりで出ていつたが、やつぱり逢つてみるとさうもゆかないで泊つてしまつた。翌朝は起きぬけに戻つてくると、一と晩一人で留守をさせられた女中が心配さうな顔をして、
「昨夜は旦那さまが大變お待ちになつてゐました。」といつて昨夜は遲くまで博士が彼女の歸るのを待ちわびてゐたことを話した。
「あゝさう。ほかに何か云つてゐて？」
「別にほかに何も仰有りはしませんでしたけれども、お歸りが遲いおそいと仰有つて火鉢のそばで待つていらつしやいました。」
「何時頃まで。」

「奥さんのかへるまでお前起きてゐろと仰有つて、お歸りになつたのは十二時過ぎてゐました。」
「さう、そんな時分までも。厭な人ねえ。」
三重はさういつてゐたが、そんなに自分に執着されてゐると思ふと、細君や多勢の子供に取卷かれてゐる身でありながら年效もなく、といふ氣になつて、男といふものゝ心が淺ましく、さういふ男女關係を綺麗に斷つてしまつて、何物にも囚はれない自由な眞實の獨居生活がしてゐたいと、つく／＼思はれたりした。

博士は午後になるといつものやうに靴下に半ぐつを引かけてやつてきた。そして茶の間の長火鉢の傍に坐つてゐる三重の顔を見ると、いきなり
「おい、お前昨夜はどこへいつて泊つてきたのだ。」と嚴かな口調で詰問をはじめた。
三重は飽くまで平氣を裝ひながら、
「あんまり天氣が好うございましたから、久振りに東京へいつてみる氣になつて昨日のお午から出てゆきましたついでに、先に私の家で抱へてゐた、女が今堅氣になつて世帶を持つてゐるのが赤坂の方にゐるので、始終手紙をよこして、私に一度東京へ來たついでにぜひ寄つてくれ／＼といつてゐたのです。そこへ寄ると姉さんお久振りです。どこかへ是非私がお伴をしますと云つて何と云つても聞きませんの。それで日本橋の末廣へ案内してくれました。――」

博士は、三重の辯解しようとするのを皆まで聽いてゐないで
「そんなところへ寄るのが好くない。」
博士は彼女が以前の經歷を何かにつけては云ひ出して忌まはしく思つてゐるので、自分が三重には三人目の男であると云ふことをどうしても信じないのであつた。十四の年で半玉で出て十八九までにその社會にゐたものが、二人や三人の男で濟むものかと云つて、自分からさう定めてしまつて、われと我が氣を腐らすのであつた。さうして
「お前は流れ／＼て俺のところに來たのだなあ。」と仕方なく諦めるやうにいつてゐた。
三重は、博士のいつものその氣心を飲込んでゐるので、以前のことを想ひ起させるやうなことをいふのは好くないとは思つたが、ほかにいゝ言ひやうもないので、ついさういつてしまつた。そして心の中では、どんなことをしても博士が打ちも毆きもしないのを百も承知してゐるので、いくら怒つても高はくゝつてゐた。
「假令寄るにしても夜歸つて來られないことはないぢやないか。それは矢つ張りお前にこれまでの癖が脫けないからだ。女が無斷で外泊するといふことがあるものか。」

三重は何と云はれても、たゞ默つてゐた。

「その女は今亭主があるのか。」

博士は彼女の言葉を信ずるらしく、そんなことを訊いた。

「えゝ。」

「とにかく外泊してくるといふ法はない。普通の體と違ふぢやないか。以後愼まないといけない。」

「私だつて歸らなければならないと思つたのですけれど、家に五六年もゐた者に三四年ぶりに會ひましたものですから、つい引留められて、活動寫眞を見ました。ほゝゝ、」

「馬鹿。」

「でも面白いんですよ。日本のは駄目ですけれど、西洋の物が、それは面白いの。鎌倉ぢや、あんなのは見られやしません。」

「あゝ、さう〳〵。廿日に此度ウインナ會で帝劇を觀るんだが一緒にゆかないか。俺達は一緒だけれどお前はほかの席で觀ればいゝ。行けば別に切符を取らして置くから。」

ウインナ會といふのはウインナへ行つてゐたことのある連中によつて成つてゐる親睦の會合で隔月に開かれるのである。

「えゝ、觀にまゐつてもようございます。」

そんな話のうちに博士はいつの間にか機嫌をなほして歸つていつた。

あとで三重は考へた。折角東京へゆくなら、どうかしてあの人に逢ひたい。此度はこの間のやうなところへ行かないでも、一緒に芝居を見たいものだ。博士は彼女の請求を容れて偶に養母をつれて歌舞伎や新富に行かしてくれることがあつても自分は一緒にいつたことは滅多になかつた。どうかして後からやつてきても一つ處へは來ないで、彼女が芝居へ來てゐるかどうかを確かめて、そのまゝひとりで歸つてゆくのである。三重はそんなところへ必ずしも一緒に行きたいとは思はぬが、そんなにまでして蔭のものに扱はれてゐる自分の境涯がさうされゝばされるほど厭なものに思ひ返されるのである。少しぐらゐは浮氣でもしなければうめ合はせが付かないやうな遣る瀬ない心地にもなるのであつた。

それで早速手紙を書いて帝劇の觀物を誘うてやつた。すると男からはともかくも毎時の處で會ふ旨を返辭してきた。

その日は三重も公然の外出なので新調の大島の重ねに、紺色錦紗お召にところ〳〵笹の葉の散し模樣の、金絲の繡のあるコートを着て約束の時を違へぬやうに、いつもそこで待ち合はすことになつてゐる東京驛に着いて婦人待合室に入つていつた。待つほどもなく男も約束の時間にやつてきた。

「ほう、今日は博士と御一緒なので大變な盛裝ですね。」

男は微笑を湛へてそんなことをいひながら傍に寄つてきた。四邊には人もゐなかつた。

「私、厭」三重はよくいふ癖の意味のなささうなことをいつてゐた。

「なにが厭なんです。」

「何つて、たゞ厭。」

「そんなわけはないでせう。今日はドクトルと一緒に帝劇へゆくんぢやありませんか。」

「それが厭なの。」

「噓でせう。私なんぞがお目にかゝる時と違つてその身裝に訊いて見たらいゝでせう。」

「これ、不斷のまゝよ、」三重はちよつと自分の身のまはりを見た。

「ねえ一緒にいつて頂戴。」

「芝居へ。」

「えゝ。」

「まさか。……それに私今日は忙しいから。」

「さう。お忙しくつては不可いのねえ。でも、ちよつとくらゐいゝでせう。少し早くお歸りになればいゝでせう。ねえ、いつて下さい。」

それぢや併しドクトルに濟まない。」

「ぢや。これからどこか他へゆきませうか。」彼女はつひと顏を上げていふ。

「そんなことが出來るものか。好い加減なことをいふのはお止しなさい。」

「だつて分りやしないんですもの。あれは階下で多勢一緒でせう。私二階で一人觀てゐたつてつまらないんですもの。たゞ幕の時に別になつてゐれば氣がつきやしません。あの人だつて多勢友達がきてゐるから、私と一緒のところを見られたくないから、滅多に傍に上つて來る氣づかひはありませんよ。」

「はゝ。成程向うの弱點を利用しようといふのですね。あなたはいけない人ですねえ。まあ兎に角あつちの方を歩いて見ませう。」

さういつて彼等はステーションを出て廣い通りをぶら〳〵宏壯な煉瓦の建物の立ち竝んだ方へと歩いていつた。靜かな秋の日影が塵埃のたゝぬ道路に落着いた金色の光線を漲ぎらしてゐた。劇場の前まで來ると三階へ入る田舍者らしい多勢が早や入口の前に群つてゐた。穩かに澱んだお堀の水や古い石垣のまはりにぼかしたやうな薄い靄がかゝつてゐた。

二人は正面の入口の前に立つて繪看板をながめなどしてゐた。

「梅幸の累はちよつと觀てもいゝなあ。」

「ねえ、一緒に觀て頂戴。」女がさういつてせがむので、男も

遂にその氣になつて、
「ぢやその切符を返して、二つ竝んで席が取れたら這入りませう。」といひながら、這入つていつて訊いてみると丁度二階に席があつたので、切符を買ひ換へておいて、まだ時間が早いので、しばらく其處に立つて考へてゐたが、女は時計を出してみて、
「でももうそろ〳〵やつて來る時分よ。」と云つて油斷のならぬ顏付でそこらを見廻した。
「あゝ、さうですか。ぢや早く行きませう。公園は？」
「そこは不可ません。時々そこに入つた話をきいてゐますから。」
「ぢや、何方？」といつて見廻はしたが、生憎そこは四方から見放される處なので、二人は急いであり合ふ鹽瀬のしるこ屋へ駈込んだ。
　そして三重は時々二階から起ち上つて外の方をあつち此方見てゐた。
　そこを出てからもまた幕の明くまでには大分時間があるので、二人は道の兩側を離れ〴〵に歩きながら數寄屋橋を渡つて尾張町の方へ出ていつた。そして銀座の飾窓を覗いて歩いた。
「大丈夫ですか。こんなにして歩いてゐるところを見られたら大變だ。」
「えゝ。大丈夫よ。見られたら見られたで、その時は何とかなります。見付けて私に暇をくれるといゝんだけれど、とてもそんなことは出來やしない。」
　そんなことをいひながら、ぐるりと一と廻りして有樂橋を渡つて芝居の方へ戻つてきた。
　芝居は序幕が明いてゐるところであつた。彼等は廊下や階段に動いてゐる人々にまぎれて二階のずつと前の席に這入つていつた。舞臺では幸四郎の景淸が大立廻りになつてゐるところであつた。が三重はそつちの方へはまだ少しも興味が湧かぬやうに薄暗の席から時々體を伸して階下の方を覗いてゐた。
「來てゐますか。」
　三重は頭振りを振つて見せた。
　間もなくそれが幕になつて、觀客席がぱつと明くなると彼女は席を離れて正面の大廊下の方に出ていつた。彼もつゞいて暫く席を離れた。そして廊下をぶら〳〵したり二三本煙草を吹かしてゐる間にすぐ開幕の鈴が鳴つた。階下の方を探してゐた三重も戻つてきて這入つた。
「來てゐて？」
「うむ、見えないの。何か用事でも出來たのでせう。」
　舞臺では新作物の宗十郎の小西行長と歌右衛門の細川忠興の妻とが、恭謙な態度で信仰上の對話を交してゐるところであつた。

「ちつとも面白くない。」
　三重はまた舞臺から眼を離して階下の方を見廻してゐた。
「あゝ、來てる、きてる。」
「へえ、どこに。」彼も階上から覗いた。
「私達のすぐ眞下にゐる。ずつと覗かないと見えない。ずうツと左の方よ。洋服を着て、頭の皆禿げたのがゐるでせう。」
「あゝ、なるほど。あれですか。立派な人ですねえ。」
「色の眞黒な男でせう。」三重も覗きながら「あ、爪を噛んでゐる。また初まつた。あれがあの人の癖。」
　次の幕を待ちかねて三重は階段の方に出ていつた。と、博士も同じやうに彼女を探し顏に階下から上つて來るのとぼつたり出會つた。兩方でうなづきながら三重は傍に近寄つていつて、
「すこし遲くいらしつてねえ。何か御用事でも出來たのかと思つてゐました。私のところ、あなたの直ぐ眞上です。」
「そんなわけでもなかつた。お前もう飯を食つたか。」
「いゝえ、まだ。あなたは。」
「俺達は此がもう一と幕濟んでからだ。」
「あなた方はどこで召食るの。」
「さあ、東洋軒だらう。お前も何處かで好きな物を食べるさ。」
「えゝ。」
　三重とドクトルと階段の上り口のところでそんなことを話してゐる傍を彼は知らぬ振をして通つて見た。かういふ場處とか或は銀座などの繁華な處でもし行き合つても、彼女は、彼の注意を惹くほどの女ではなかつた。道を歩きながら一寸見たゞけでも、斯ういふ女が好いと、ふいと男の浮氣を唆るやうな好きな女によく出會はすものだが、三重は彼にとつては、初めからそんな女ではなかつた。けれども今眼の前に現在旦那と立つて話してゐるところを見ると、これまで彼女に對して覺えなかつたやうな快い病的な興味を感じないわけにはゆかなかつた。彼女は小柄ではあつたが、どこよりも一番人の眼に着くのは、男の官覺をそゝるやうな艶かしい形をした濃い束髮の頭髮であつた。粉の吹いたやうに厚く化粧つた顏の長く切れた黑眼と、ぱらつとした眉毛とが明るい電燈の光にいつもより派手に見えてゐた。
　また開幕のベルの音が急がしさうに觀客に着席を促した。
　三重はあとから入つてきた。
「博士がやつてきやしませんか。」
「來やしない。來たつて私一人でゐると思つてゐるから。」
「あゝ、さうか。」
「あの人達この次の幕間で會食でせう。」
「私達も何か食べませうか。」

「えゝ、しばらく待つてゝ次の廿四孝が明いてからにしませう。さうすると見てゐるから、來やしない。きつと熱心に觀てゐるわ。綺麗な男やお姫樣が出てゐると思つて。子供のやうに感心して見てゐる。」彼女は博士のさういふ芝居などを見る眼の幼い無邪氣さを笑ふやうにいつた。

その幕が明くと彼等は三階の花月の食堂に上つていつた。二番目の幕があいてから漸次舞臺の方に注意をとられていつた。累が無理に鏡を見せつけられて、それを機會に凄味になつてくるところなどは、どうしても梅幸でなければ見られぬ技藝であつた。

大切りは殘して二人とも廊下の方へ出てきたが、男はそこで別れて歸つた。三重は階段のところで暫く博士を待ち合して終列車で一緒に鎌倉に戻つた。

それから暫くは男の方も忙しいし、三重も大事をとつて逢ふ機會もなくして過ぎた。年が改まつて月の中頃男は一寸關西の方にいつて、今その歸途だといつて、あまりの暖さに三重はひとりぶら〳〵と海邊の方を散歩して戻つてみると、座敷に上つて待つてゐた。

「大變お待たせしたでせう。あなたがお出でになるとは知らないものだから、つい戸外が好い心持ちでしたから、うかうか散歩してゐました。少し歩き過ぎた。」三重は水息を吐き吐きさういつてゐた。

「私もあんまり暖かい好い天氣だつたし、まだ時間が早かつたから、ゆつくりお目にかゝれるとおもつて寄つて見る氣になりました。あなた大變苦しさうですねえ。」

「えゝ、もう六月ですもの。もう動くのが分るの。」三重は盜むやうな眼付きをしながら「これこんなに大きくつて見つともないでせう。」といつて帶のまはりを觸つて見せた。

それからあんまり天氣が好いので、男の誘ふまゝに三重も久し振りに東京へいつてみる氣になつて、いそいで顏を洗つたり、束髮をなほしたりして着物を更めて出ていつた。東京驛から吳服橋の方をぶら〳〵歩いて、末廣に入つた。

やがてそこを出てくると、もう短い冬の日は暗くなつて、晝間の陽氣に引換へ頬を切るやうな冷い風が乾燥しきつた巷の塵埃を捲いてゐた。松飾りがとれたあとの正月半ばの街路は消え入るやうに寂れてゐた。

「これからどうします。」三重は電車通りまで出てきた時立ちどまつてさういつた。

「さあ、どうしませう。」

「夏いつたやうなところは厭ねえ。」三重は去年の八月に初めて逢つた向島の方の泊つた家のことを思ひ浮べてゐた。

「あゝ、あんな處へ此の寒さに出掛けて行く男氣はない。」

「ぢや、これからもう一度鎌倉へ歸りませうか。」

「なるほどそれもさうだなあ。あなたはどうせ歸らなければならんのだし、私が無駄足をするだけだ。」

それからまた停車場へ俥を走らせて、二人は鎌倉まで戻つてきた。女中に風呂をたてさせたりして寢たのは二時を過ぎてゐた。

一度三重が甘い顏を見せて、彼女の家に泊ることを覺えてから、男は夜遲くからでもわざ〳〵東京から鎌倉まで祕とやつてきた。長い間不自由な宿屋暮しをしてゐる男には、かなり整つた生活をしてゐる女の内に平安な一夜を明すのが久しく家庭的の情味から遠かつてゐる彼の身内に溫柔な生活氣分を漲らした。軟な羽毛の枕に頭を垂めて男がまだぐつすり熟睡してゐる眼を覺まさないやうに女はそうつとその傍をぬけ出でゝ、朝漱のあとの朝の化粧をすますと男の枕頭に膝をついて呼び覺ました。

相模灘一ぱいに漲つた茜色の新鮮な冬の朝光が緣側の硝子障子に火の燃えてゐるやうな金色の光を浴びせてゐる。朝の海は模糊として水蒸氣に白く霞んで見えた。

三重は暖い茶の間の火鉢の向うに男を坐らせて、自分で海苔を燒いたり、茶筐筒の中に藏つてある珍しい食べ物などを取出して餉臺のうへに竝べたりした。

朝飯を濟ますと男は養母などの來ぬ間に急いで歸つていつた。

「あなた、もうあんまり夜なんかお出でになつては厭。」

女は、立つて羽織の紐を結びなほしてゐる男に後から外套をとつて着せかけながら、云つた。そして兩手で背後から抱へるやうにした。

「えゝ、どうも度々御迷惑さま。」

「またそんなことを仰有る。……」

彼女はさういひながら、此度は前の方に廻つて小猫が物をねだるやうに男の胸に顏を擦りつけた。

もう幾月になるんです。」

「もう七月よ。八月からですもの、早いものねえ。」

さう云はれて氣がつけば、大島の被布に包まれた身體の樣子に、もうそれが眼に立つた。

男はいきなり外套の袖で女をかこひながら、

「ほんとに私の子？　あなた確にさう思ふの。」

「だつてそれに違ひないんですもの。」

「それにしても私はつまらないね。」

「あなたのやうにさう先からさきから。私だつていろ〳〵考へてゐますわ。……母は此の間もきて、今からもう着せる物のことなんか云つてゐました。ほゝゝ。」

「女は氣が早いなあ。」

三重の身體は一日々々と凡て順調に經過していつた。博士は秋期に暫く暇であつた鎌倉の方が嚴冬に入つてからまた急

に多忙になつてきたので、三重のところへも毎日のやうに顔を見せてゐた。その爲に暫くやつて來なかつた男が半月ばかりしてある晩夜更けて門の戸を叩いたのは、博士が急しい間を繰合して、亡父の法要で關西の方に旅立つていつたそれと丁度引違へのところであつた。

その晩博士は遲い汽車に乘るのでゆつくり二階に上つて宵寢をして立つていつた。三重は博士を玄關に送り出して、快く疲れたあとぐつすり一と寐入りしかけたところをまた眼を覺まされた。

三重は女中の手前もあるので、門を叩く音に氣がつくと寢卷のうへに褞袍を被つたまゝ自分で起き出て門を開いて男を内に入れた。

「いけないのよ。あなた夜お出でになるのは。此の間もよくさういつたぢやありませんか。それに女中が先のと違つてゐるんですから、これから少し氣をつけないと。」

三重が自分達の祕密をよく云ひ含めておいた今までの女中は田舍の父親が病氣といふ電報が來たので、二三日前急に暇を貰つてかへつていつた。三重がその男と關係する少し前から置いたその婢は、彼女と旦那とがよく云ひ爭つてゐるところなどを見せられて、彼等の間がとかく圓滿を缺いてゐるのを知つてゐた。

男が初めてきた時にも三重は自分達の關係の普通ならぬことをいつて、

「お前よく知つてゐるとほり、私と旦那とはあの通り犬と猫のやうに始終喧嘩ばかりしてゐて何時私は身を退くか分らないんだから、私も餘程の決心があつてしてゐることだからお前もそのつもりで心得てゐてもらはなければならない。私の身に變動があれば從つてお前にもそれが及ぼすのだから。」

三重は嚴かな口調で云ひ含めたのであつた。

何にも知らぬその女中は、そんな危い首尾をして無理な媾曳をするほどの深い仲でゐて、併も今の旦那よりも前からの關係であるのに、妻のないその人と彼女に何故晴れて一緒にならないのであらうと不思議に思つてゐた。そして三重がちよいちよい苦しい思ひをして家を明けるのに同情して「家へお泊りになつたら好うございますのに。」などといつてゐた。

三重は男を二階に上げて、重苦しい體で自分に火鉢の火を運んできたりしながら、

「もう遲いから、すぐこゝに床をこしらへますからあなたお一人でお休みなさい。私階下へいつて寢ますから。」

「どうして。」

「どうしてつて。今度の女中にまたいろんなことを知らすのは厭ぢやありませんか。」

「だつて、かうして夜遲くきて泊つてゆけばどうせ變に思ふ

にはきまつてゐる。」

「でも、そこはあんな素人のことですから私があちらへゆきさへすれば何とも思やしません。」

三重はつい先刻まで其處で博士に侍いてゐた直ぐあと、少しでも長くまたそこにさうしてゐるのを女中に對して憚つてゐた。

「大越、あなたのいらつしやる一寸前に大阪に立つところですの。」

「あゝ、さう。それで分つた。それであなたそんなことをいふのでせう。」

彼は、三重が重い體を動かして奥の間に設けたシートの上に仰向けに寢そべりながら、さういつた。

「だつて、あなたは今日附が悪いんですもの。」

三重は枕頭に坐つて夜着の襟をなほしながら笑つてゐた。

「そりや博士と私とは別ですから致方ありません。」

「厭……そんなことを云はないで、ねえ早くお休みなさい。明日はまた母が朝から來るかも知れませんから。」

彼女はさういつて立つて襖をしめて降りていつた。

三重の體が漸次月が重くなつてくるにつれて、養母は若い馴れない女中を一人附けて置くのを心許ながつて自分で時々來て泊つていつた。

魚河岸の問屋であつた三重の實父が、彼女がまだ實母の體内にゐるころ死んだりしたうへに、その以前からもう不可なくなつてゐる商賣の方がばた〳〵になつたので、そのとき男一人のほかに三人目の女であつた彼女は孤のうへからその頃出入りの大工であつた今の養父母に懇望されて貰はれたのであつたが、生の親と同じやうに可愛がられたその養母の氣質を三重は好まなかつた。顔ほどでもなかつたけれど、見るから芝居の鴇婆にあるやうに容貌からして、彼女がだん〳〵物心がつくにつれて妙に親子の間に隔てを置かした。女房より亭主の方が七八つも年下であつたりするので、まだ氣の若い養父と養母との間にまたしても年效もない嫉妬喧嘩が絶えなかつた。その度ごとに養母は三重のところに驅けつけてありつたけの愚癡を竝べた。いつもその聽き對手になる三重は色消しの年寄の嫉妬喧嘩にはうんざりさせられるのであるが、年の若い父親がほかに好い女をこしらへたといつて母親に泣訴せられてみると、三重は年取つたその母親が可哀さうでもあつた。そんなこともあつたりするので母親だけは、彼女が鎌倉に住むやうになつてから間もなく近處に小いところを借りて來てゐるのであつた。ある晩母親がきて泊つてゐる夜更にとん〳〵門を叩いて、また男がやつてきた。三重は夙から寢床の中で氣がついてゐたが、そのまゝにして置いた。すると何時までも叩く音がするので階下で母親が眼を覺まして女

中に何か云つてゐるやうであつたが、仕舞に女中が起きて出ていつた様子だと思つてゐると　やがて彼女はみし〱階段を踏んで三重の枕頭にきて、男が門のところにきてゐることを告げた。

「すぐ歸るから、門でちよつと奥さんに出てきて頂きたいと仰有つていらつしやいます。何だかその積りで來なかつたから、こんなに遲くから東京へは歸られないし、どこかの宿へ泊らなければならぬから、奥さんにさういつて五圓ほど錢を持つて出てきてもらひたいといつていらつしやいます。」

女中は男のいつたとほりを取次いだ。

男はそれまでにも時々錢の無心をいひ出して、二度三度にかれこれ百圓ばかしの小使を三重は强請られてゐた。彼女はそれが度重ると餘り好い顏はしなかつたが、偶に云はれる、ちつとばかりのことなら、それくらゐは聽いても男には逢ひたいと思つてゐた。芝居の好きな彼女は役者の中にも好きなのがあつた。大阪の福助が好きだといつて、一寸その噂をしたくらゐで博士はすぐそれを不快に思ふくらゐの嫉妬家であつたが、しかし彼女にも可成な自尊心があるので、いくら芝居は好きでも役者買ひなどをして見ようなど〻思つたことはなかつた。それに比べると今の祕密の快樂のために少々の錢くらゐは出してもい〻と思つてゐた。

「そんなことをいつてゐるの。困つちまふね。」

と女中の手前獨語のやうにいつたが、

「私ゆくからい〻よ。」と女中を退けて置いて彼女は用簞笥の小抽斗から銀貨入れをとつて中から五圓札の小さく疊んだのを一枚出してそつと降りていつた。そして門のところに立つてゐる男の傍に出て行つて、

「困つちまふわ、あなた。」

「どうもお氣の毒樣。お母さんが泊つてゐるんだつて、不可なかつたね。」

「え〻。不可なくたつて仕樣がない、もうどうせ知つてゐますよ。それよりあなた女中にあんなことをいはなけりや好いのに、厭ね。たゞ私を呼出せばい〻のに。」といひつゝ三重は五圓札を男の手に渡した。

「どうも濟みません。」

「もう夜來るのは、あなた、厭よ。」

男はそのま〻歸つていつたが、三重に祕密のあるのは、去年の秋時分一度晝間男が座敷に來てゐるところへふと母親が茶の間に入つてきた時にも、彼女はすぐ男を玄關まで送出して、母には、

「病院の人。」

といつておいたが、その時母親は別に何にもいはなかつたけれど、どうかすると何かにつけてそのことを諷してゐた。

「お前が大越さんを嫌つてるのはよく分つてゐるけれど、かうしてゐる間は氣をつけてもらはないと私達になにか云はれたときに云ひやうがない。」

そのために三重は、母親から餘計な小使の請求をせられても仕方がなかつた。そして云ふことを聽いてゐさへすれば、母親は彼女の祕密については何も口に出さなかつた。

三重は少しも知らなかつたけれど、その晩謠曲の會があつて、この頃すこしづつそれを初めてゐる博士は夜更けてその會の歸途にふと彼女の家の傍を遶つて見たくなつて、丁度彼女が男と門のところに立つて、話してゐる時、隣家の垣根の曲り角まで來て、それを見ると、博士はそつと身を退いて物蔭から樣子を窺つてゐたのであつた。

大分間があつたので話してゐる事も聞えず、顏などもよく分らなかつたが、男が歸つてゆくと、三重はすぐ玄關の門を閉ぢてしまつたので博士もそのま〻家の方へ歸つてしまつた。

翌日、博士はいつものやうにやつてきて、昨夜目擊した事實を擧げて三重を詰つた。

「おい、昨夜遲くお前のところへ誰が來た。」

三重は突然にそれを言はれて、はつと思つた。そしてちよつと博士の顏色を見た。けれども、その時博士の顏よりも彼女自身の顏の方により多く複雜な表情が動いてゐた。

彼女の顏は鼻筋などの通らない丈の詰つた顏であつたが、黑瞳がちの、長く切れた眼とその長く刷いた濃い眉毛とあたりに常に細かい變化が表はれてゐた。

「あ〻、あれ深川の兄が鎌倉に用事があつて來たついでだと云つて、一寸寄りましたの。まあ、あなたあの時分御存じ？」

「兄？　可怪いなあ。大變遲かつたぢやないか。そんなら何故お前上げて泊めなかつたんだ。」

「遲いからお泊んなさいと申したんですけれど明日の朝用事があるから今晩ぜひ歸つてゐなければならぬといつて歸つてゆきました。」

博士はその上あまり追究しようとはしなかつたが、三重の心の奥底にはやつぱり十分の信用を持つてはゐなかつた。

そして彼女の心を全然自分の所有にしてゐないといふ不滿足や、不安の感情は博士をして三重の肉體に對する愛着を倍倍不健全なものにした。彼女がそんな體になつてゐてもまだ博士はとき〲三重のところに宵寢をしていつた。

ある日の午後も博士はやつてきてゆつくり話込んだ擧句、たうとう彼女のところで一緒に夕飯の膳に向つて歸つていつたのは十一時を過ぎてゐた。

その晩まだ日の暮れぬ時分に、暫く伊豆の方へゆくつもりで遲く東京を立つた男が、ひよいと三重の家の玄關に顏を見せた。彼は一と晩彼女の家へ泊つて翌日早くそこを出てゆく

つもりであつた。十日ばかり田舍にいつてゐるうちに父親の病氣が良くなつて戻つてゐた先の女中は玄關に顏を出して、男が立つてゐるのを見ると默つて入口まで降りて來ながら、

「今、旦那さまが來ていらつしやいますから、も少しゝていらして下さいまし。直お歸りになります。」と低聲に囁いた。

玄關の石の上には靴が脫いたまゝまだ揃へずにあつて、すぐ玄關につゞいた茶の間では陽氣な笑聲などが洩たれゐた。男は急いでそこから出てきて近くのとある小料理屋について暫く時の經つのを待つてゐた。やがて戸外がすつかり暗くなるのを待つてまた出掛けていつた。そして石段を上つていつて玄關の格子戸の外から覗いて見ると靴はこちらへ向けて揃へてあつたが、それで見ると博士はまだ歸つてゆかぬらしい。彼はそのまゝ默つてまた戻つてきた。そして寂しく暮れ果てた田舍の町辻を用もなくぶら〳〵歩いて見たり、腰掛け茶屋のやうなところへ入つて時間を消したりして二三度も玄關の前に舞ひ戻つて見たが、やつぱり靴はそのまゝであつた。最後に待ちあぐねて九時頃になつていつてみると、門の扉は半分片寄せて家の中はひつそりとして、戸外から見える二階の障子が、まだ戸を閉め殘してあるところだけ電燈の火影が明るく映つてゐるのが見えた。

「あゝ、二階に上つてるのだナ。」と思ひながら、彼はそつと玄關に立つて音なふと、やがて先刻の女中がまた顏を出して降りて來た。

「旦那はまだゐるの？」

「今二階に休んでいらつしやいます。」と困つたやうな顏をしていふ。

「奥さんは？」

「奥さんも御一緒に二階にいつていらつしやいます。」

「ぢや旦那は今夜は歸らないの？」

「さあ、今晩はどうなすつたんですか。こんなにお長くお在になるのはめづらしいんです。何だか歸るのが大儀になつたから泊つてゆかうなんて云つていらつしやいましたからお泊りになるのかも知れません。」

「君、私が來たことを奥さんに云はなかつたの。」

「それは申しません。そんなことを申すと奥さんに後で大變叱られますから。」

男は苦笑しながら、

「いや、さうぢやないよ。旦那のゐないところで、ちよつとそれを云はなかつたの。」

「えゝ、それはまだ申しませんでした。」

「仕樣がないなあ。」彼は舌打ちをするやうに云つて、そのままづか〳〵玄關を出てきた。

そしてもう一度二階の方を見上げると、忌々しさうに靜かな火影ばかり明々と障子に映つてゐて、內では何をしてゐるか話聲さへ洩れてこぬ。

初めからその女に對してさまで愛着を感じなかつた彼はその晚身を苛むやうな慾情に喫られてゐた。そして每時ならば、今時分漸く東京からやつて來る時間であつたが、堪へ難い反感から皮肉な祕密の勝利を思ひ浮べながら、もうそのうへ玄關を覗いてみることを斷念して明日は早く立つて伊豆の方にゆく積りで停車場近くの旅館に寢苦しい一夜を明した。

彼はあとで旅行先きからその晚のことを厭味まじりに手紙に認めて女を嘲つて寄越したが、半月ばかりして東京に歸つてきてからも時々手紙をよこすだけでそれつきり暫くやつて來なかつた。

そのうちまた春が來た。長い間緣側の硝子戸に鳴りはためいてゐた寒い二月の風も和いで穩かに蒼み渡つた海の上には麗かな春の日が煌々と照返して眩しいやうに漲つてゐた。

三重は男が顏を見せないとすると、また見たくもなつて博士が來ない間の午前のうちに、男を呼び寄せて御飯を食べさしたりしてゐた。

「あなた、私もう直きよ。」

「何？　子供が出來るのが。」と男は冷淡に云つたが、それには彼は初めから興味を持たなかつた。

土地でも產科の醫者に見てもらつてゐたが博士は東京の專門の病院で出產するのが安全だと云つて、彼女は一度母親が附添つて東京まで出掛けてその病院の診察を受けてゐた。入院する時の病室などもそのついでに見ておいた。それはその方で有名な病院であつたが、どの部屋も汚い部屋ばかりであるうへに次の間がないのが三重には厭であつたが、博士は自分が時々產婦を見に來るために顏の差さないところを選んでそこに定めたのであつた。

「部屋が汚いッて病院に入るのをお前はまるで遊びにでもゆく考へでゐる。」

三重があまり厭がるのを博士はさういつて小言を云つてゐた。

でも一日々々とその日が近づいてくるのを、彼女は指を折つて數へながら恐ろしいことを待つてゐるやうな氣で少しも早くその大厄から免がれて身輕になりたいと思つてゐた。けれどもその恐れには未だいろ〳〵な希望や想像が伴つてゐた。どんな兒が生れるであらう。男であらうか、女であらうか、どちらによく肖てゐるであらう？……ふいとそのことに考へ及ぶと、三重は何とも云へない厭な心地がして自分の身の淺猿しさに戰慄を感ずるのであつたが、彼女の胸の中ではどうしてもやつぱり博士の種ではなさゝうに思はれた。

「私が病院にいつたら、あなた時々きて下さい。」

「そんなことが出來るものですか。お母さんも附いていつてゐるし、ドクトルも時々やつて來るでせう。」
「なに、始終來てゐやしません。こちらの留守もあるし、いつも附いてゐるのは、もうほかに附添婦が定つてゐるのです。」
「併し病院に入るなら、もう今から行つてゐないと駄目ぢやありませんか、臨月の體で汽車や俥に乘ると流産してしまふ。」
男は、いつも博士がやつて來る時間にはまだ間があるので三重の酌ですこしばかり飮んだ酒のために息苦しさうに肱を突いて餉臺の向うに横になりながら對手の顔をじろ〳〵眺めてゐた。
「厭！」
彼女は甘えるやうにいつて、頭振りをふつて見せた。攝生の注意がとゞいてゐるせゐか、去年の夏時分、受胎當時から比べると遙に顔の血色などのよくなつた黒瞳がちの眼許が潤んだやうな光澤をもつて、いつも脂粉の嗜みを怠らない身綺麗にした身のまはりが、もう來月が臨月の體とは思へないくらゐどこか姿態に艶が出來てゐた。
「何だ！　此門の夜遲く二階に電燈がついて、醫者のやうでもない、少しお愼みなさい。」
三重もそれは包み切れなくつて、仕方なく笑つてゐた。

「ぢや暫くの間私が手紙を差上げるまで、あなたの方からはお越しにならないで。」
三重は歸つてゆく男を玄關に送り出しながらいつてゐた。
「東京の病院へ行くといつても、私が明日の日にでももし寢ないとも分らないから、來て他の者のてにでも入ると不可ませんから。」
「ぢや、どうか安産のやうに祈つてゐませう。」
「えゝ、どうぞ。私のは重い方ですから、難産で死んだらこれつきりお眼にかゝれませんわねえ。」
そのうち慌しいやうに咲いたとおもつた櫻花が夢のやうに散つてしまふと、丘の上の樹々は日に〳〵青い葉を芽吹いてきた。三重は開放した座敷の緣側に坐つてゐると海の方から吹いて來る清々しい風が軟かに頰を撫でた。
女中もその頃一人手をふやして、母親は毎日のやうに來つきりで、いざといふ時の支度に忙しくしてゐた。博士も大抵一日おきくらゐには顔を見せてゐたが、三重の體には愛着はあつても胎兒に對してはそれほどに思つてゐなかつた。
三重には博士のその心がよく分つてゐた。兩方の男が二人とも子供を欲しがらない心のうちを思ふと流石に彼女はこれから産れようとする子供の可憐しい運命などをそれからそれへと考へて男の薄情を怨んで獨りで涙に頰を濡らしてゐるやうなこともあつたが、さうかと思ふとまた博士に對して犯し

てゐる自分の罪惡のことを、ふつと思ひ返したりすると父親はありながら無いも同然な胎兒の行く末は自分一人の身にふりかゝる責任のやうに思はれて、自分達母子ばかりのたよりない生涯のことなどが寂しく考へられた。そして本人の自分よりも餘計に子供の産れるのを樂しんでゐる養母が女の兒を欲しがつてゐる心を思つて見て、三重は厭な氣持ちがしてゐた。
「どんな子供が生れようともあの兩親達の手では育てさせやしない。」
といふやうなことを思つて見たりした。
およそ十日頃の豫想で、五月の月に入つたらすぐ東京の病院に出掛けるつもりで用意をして置いたのが、その間を待たないで思つてゐたより一週間ばかりも早く産期が來た。その日三重は急に腹部ににが〳〵する痛みを感じてきたので、二階に上つて安臥してゐたが、夜に入つてからも痛みは時をきつて襲つてきたが、出産にはなか〳〵ならなかつた。その夜はいざといふ支度のまゝ産婆や看護婦に附添はれながら苦しみと不安との中に一夜を明したが、翌日の晝になつても容易に産れさうになかつた。
昨夜遲く歸つていつた醫者はまた朝からやつて來て傍に附いてゐたが容體がそのまゝにして置けないと看てとると産婆と何か眼顔で合圖をしながら手術の支度にとり掛るらしい氣配がしてゐた。
徹宵夢うつゝの境に彷徨しながらも意識の割にはつきりしてゐる三重は兩手を看護婦の手に縋りながら出すまいとしてもつい立てずにはゐられなくて、微に唸り聲をたてゝゐた。そして白い瀬戸の金盥で消毒されてゐる助産器がちらッと彼女の眼に入ると三重は思はず氣の遠くなるやうな心地になつた。
「葡萄酒！」
といふ醫者の聲がして、助手の手で口許へあてがはれたコップを一と口飮むと、それからまた力づいてきて、最後に噛むやうな劇しい痛みを感じたとおもふと用意した機械を用ゐるまでに至らないで、
「さあ、もう一と息ですよ。」
といふ産婆の彈んだ聲が耳に響いて、やがて赤子の泣く聲が聞えた。悉皆體の始末をされてから、三重は疲れのあとの安らかな心地になつてうと〳〵と輕い眠におちた。
産婆は赤子の汚い體を洗つて、着物を着せると、そつとそれを抱いて産婦の傍にもつていつて、
「さあ、御覽なさいまし、男のお子ですよ。」
といつた。
三重は重い瞼をぱちつと開いて怖さうに赤子の顔を凝乎と

見てゐた。

　彼女はそんな場合にも胸の奥に深く祕してゐる疑ひの謎を解かうとする心を失はなかつた。

　赤い額にいくつも小い皺を寄せた顏はそれが人間の子とも思へないほど淺猿しいものに見えたが、見えない眼をときどきぱちつと開いてゐるのが彼女にはつきり祕密の罪の結果を聯想せしめた。

　産婆はやがてそれを産婦の傍にしかれた小い寢床のなかへ横へた。

　あと産が早くなかつたりして産婦の肥立ちはとかく良好でなかつた。動もすれば産褥熱を惹起しさうな兆候が見えたりした。一週間ばかり産婆は不安な狀態で繼續してゐた。

　博士は毎日やつて來たが、醫者や産婆に顏を會せないやうに大抵茶の間に引込んでゐることが多かつた。

　母親がそんな工合であつたから赤子は産婦のそばから離されて乳母の手にまかせつきりにしてミルクで養はれた。

　養母は生れた子よりも三重の體の方が大切であつた。三重は熱などもあつて赤子にはさまで愛着を持つてはゐなかつた。博士が下つた氣分の快い時には乳母に抱かれて子供を寢床のそばに連れて來させてまじ〳〵眺めてゐた。

　博士の意見で均といふ名前が子供につけられたが、産婦には少しも知らさなかつたけれど、出産屆の籍のことについて階下の茶の間では博士と養母との間に劇しい云ひ爭ひが始まつた。

　博士は自分の名前を公の戸籍面に曝して、庶子たることを認定することを飽くまで拒んだ。

「どういふ理由でさう仰有るのです。それではあなたは彼女の身持ちについて何か不服なことでもおあんなさるのですか。」

　向つ腹立ちの養母はさういつて開き直つて博士に喰つてかかつた。

「それについても申したいことはないでもないが、戸籍に私の名を出すといふことは私は甚だ迷惑するです。それに女の子ならばまだそんなに思はれんが男の子に庶子といふ肩書をつけるのは、一生涯それを云はれて子供のために可哀さうぢやありませんか。」

　なるほどさういふ博士にも道理があると思つたが、自分の子供として承認することを欲しない博士の心の中には、そればかりでない他の理由が潜んでゐることを疑へばうたがはれないでもなかつた。養母はそれを一途に普通の男子の薄情と無責任とに解釋した。

「それは仰有るとほりですが、それではあなたはどうなさらうといふお考へなのです。庶子とするのが厭でもそれは事實

それに違ひないのですから、あなたの子といふことを認めて下さらなければ彼女が父なし兒を産んだことになります。その方が母子とも一層可哀さうです。またあのとほりに體が良くならないので心配してゐる場合にこんなことを彼女に聞かせたくはないし、折角生れた子も不運ですし彼女が第一可哀さうです。……」

　涙つ早い母親は襦袢の袖で眼を拭いた。

　博士は、さういつて母親に泣き口說かれて當惑しきつた顏をして暫く口を緘んでゐたが、今更に子供などを産んだことを腹の中で悔んで見たが、それは自分が三重といふ者を寵愛した自然の結果であるとすれば、其處へ持つてゆくところもなかつた。

「とにかく彼女の考へが定らないうちは……」

　博士はさう云つて言葉尻を濁した。

「あれの考がつて、ぢや矢張りあなたは彼女に何か暗いことでもあると思つておいでになるんです。さういふお積りで出來た子をあなたの子として認めないと仰有るんなら尙更のこと、あの子を私生兒にして置くことは出來ません。あなたはどんな證據があつてあれを御自分の子でないと仰有るんです。」

　無智で正直者の養母はさういつて血相を變へて博士に爭つた。

「まあ、そんなに云はなくても話は出來ます。あの子を私の子でないとは申さない。けれども何度もいふやうに今私の子として戸籍にそれを誌すことは私にとつても又子供の將來を考へても共に好くないことゝ思ふのです。」

「それ御覽なさい、そんなことを仰有るあなたの御料簡がどうしても私には分らないんです。あなたといふ明かなお父さんがありながら自分の子といふことを認めて下さらないのは、三重に對してもあなたのお心に眞實がないのが、よくそれで分ります。それぢやあなたは蔭に隱れてゐて自分の御都合はいゝでせうが、三重母子の者は私生兒を生んだことになつて、いゝ恥さらしです。そんならそれで子供のことは今後一切私達にお任せ下さいますか。親父とも相談しまして此方で好いやうに取計らひますから。」

「いや、それは不可ません、子供の將來はどこまでも私の責任です。」

　博士の心では、此處で子供を戸籍の上ばかりでなく、事實上全く手離すことにすると三重との關係についても自然今までのとほりに自分の思ふことを徹せなくなつて來ることが想はれた。

「そこで餘りあなたが勝手でせう、假令庶子にもせよ、立派に御自分の子として認めて下さらないものをあなたにお任せすることは出來ない道理ぢやありませんか。」

「ですから私の子ではないといひはしません。私の子です私の子に相違ないけれど、今すぐ認めなくとも大きくなつて學校へでもゆくやうになつたら、その時改めて公然に私の子とする方法もあります。それも三重の今後の心次第一つです。」

さういつて博士は漸と養母の一徹な言ひ分を得心さした。そして子供はどこまでも自分の子であることを口約で承認することにして戸籍面は養父母達の子にして兎も角も出産屆をすました。

「六十にもなつて私達こそほんとに好い恥曝しだけれど、あの人が何と云つても自分の名前を表面に出すことを嫌ふものだから。」

養母は後で三重の枕頭にきてそんなことをいつてゐたが、これまで長い間に何だ斯だといつて少なからぬ金品が博士の手許から親達の方まで支給されてゐることを思へば、やつぱり博士の言ひなりになつてゐるより他はなかつた。

「これからは餘程お前もそのつもりで確乎してゐないといけないよ。何かいふ文句があるとは、それも彼女の心掛け一つですと、そのことばかり云つてゐたよ。」

三重の氣分が漸次快くなつてゆくにつれてそんなことも母親は話してきかせた。

三重は母親からそんな話を聞かされるたびに博士が自分や此度の子供に關してどんな心でゐるかといふことなどを考へて見ながら、母親からつけ／＼云はれた博士に濟まないといふ氣にもなつたがむつちり白い肉の附いた體を抱いて三重が風呂桶へ入れてやつたりしてゐるときに子供は鼻筋のとほつた大きな眼をぱちッと明けて見せたりするのが何とも云へず可愛いかつた。欲しいと思はなかつた子供もさうして出來て見ると彼女は漸次母親らしい愛執が湧いてきて樂しいものに思はれた。

さうして無事に半月ばかりも經つてゆくうちに嘗めたいほど綺麗な肌をしてゐた頰や額のまはりにぽつ／＼小さい水疹のやうな吹出物がして、それが後には顏中に擴がつて、小い體が千切れるやうな聲で泣き立てるのがやう／＼産褥を離れたばかりの三重の衰へた耳に突き刺すやうにひゞいた。

博士は相變らず時々顏を見せてゐたが、子供は手にとつて見ようともしなかつた

「可怪しいなあ、をかしいなあ。」

出來ものゝした子供の顏を、そつと指頭でさはつて見ながら、さういつて博士はまた頻りに小頸を傾げてゐた。博士には男女六人もある子供が一人もさういふ病氣を患つたことはなかつた。

かゝりつけの小兒科の醫者も來ては云はなかつたが、抱いて診察にいつた乳母までにはそれが劇しい胎毒であることを告げた。

そのことから養母はまた腹を立てゝ博士と云ひ合ひを初めるやうなことがあつた。

「だれが診ても明かに胎毒さ。胎毒といふのは親のよくない病氣が遺傳してさうなるに定つた者だ。」

博士はさういつて卑むやうな眼で養母の手から三重の手に抱きとられる子供を見てゐた。

「親のよくない病氣つて、此娘はそんな體なんかしてはゐません。子供の時から私が傍について育てゝゐて、そりや藝者こそしたけれども、そんな病氣なんか患つたことは一度だつてありやしません。」

「これにその病氣をしたことがないとすれば尙ほ可怪しい。」

博士は老母の云ふことなどは氣にもしない風で半ば戯談のやうにまだ同じことを繰返してゐた。三重は、男が「もしさうだつたら、その子は屹度重い胎毒を持つてゐるに相違ない。」と云つてゐたことが始終頭にあつた。それが益々心の中に思ひ當つた。

「胎毒といふものは斯んなに生れて直ぐ出るものぢやない、大抵三つか四つになつてから出るものだ。」

無智な母親は博士よりもよく知つたやうなことを云つてゐた。

「まあ多くはさうなんだが、こんなになるのはよつぽど劇しいんだ。不思議だよ。」博士はさういひながら自分の體のこと、三重の體のことなどを考へてゐた。

「だから、やつぱり胎毒ぢやないんだよ。あの醫者が何を云つてゐるか分りやしない。そんなことを云ふならお前自身いつてよく體を檢査して診てもらつたら、どうだ。」

母親はそんなことをも云つてひとりで腹を立てゝゐた。

「さうぢやないんですよ。先達て中私が寢てゐた間長く人まかせにして此の方を誰れも構つてゐなかつたから、それで病氣が出たんですよ。」

三重は二人を取りなすやうに口を挿んだ。子供の病因について考へて見るだけでも彼女は厭でたまらなかつた。

「おゝ可愛い〳〵。」三重は胸を開いて乳房を含ませながら硼散水で濕したガーゼで一面に出來物のしてゐる顏や手をそつと拭いてやつた。

子供のことからそんな云爭ひまでしても母親も博士と同じやうに肥立ちの惡さうな赤ン坊には大した望みを置いてはゐなかつた。毎日母子を見には來ても、後には

「今日はどうだい。」

といふくらゐで歸つていつた。

三重はその内東京の方へ委しい手紙を書いて出したいと思ひながら、やつぱり子供のそんな病氣をしてゐるところを見

せるのが厭さにすつかり癒えるのを待つてと思つて一日々々と延ばしてゐた。何だ斯んだといつてゐる間にもう一と月經つてしまつて、六月の初に男はふいと訪ねてきた。

三重は待ちかねてゐたやうに二階に通して委しい話をした。

「あんまり手紙が來ぬから、もし産後でも惡くつて死んでゐるんぢやないかと思つて心配してゐた。」

男は若し女が死んでゐるか、それともまだ體が惡くつて寢てゞもゐるやうだつたら、子供が出來てゐるかゐないか、赤子の泣く聲がするか、或は家のまはりに小さい着物か襁褓でも乾してある筈だと思ひながら、そつと生垣の外から覗くと果して着物が緣側に見えたので、それで入つてきたといつて笑ひながら話した。

「やつぱり罪の子だからでせうよ。今醫者につれていつてゐます。もう歸つて來る時分です。」

「それでもあなたは思つてゐたほど衰へてもゐない。」

三重は眼尻のまはりに薄いしみの稍々眼立つて來たかと思はれる顏にうすい白粉をしてゐるので濃い眉のあたりが産前よりも一層際立つたやうに見えた。

そこへ乳母が赤ン坊を抱いて上つてきた。三重はそれを手にとりながら、

「こんなになつてゐるんですよ。これでも此間內から見ると餘程よくなつた方なんです。」

男は見たくないものを見せられるやうな風で厭々さうにそれを見てゐたが、それが自分の病毒の遺傳であるとすれば、自分の體內の血を汚してゐるその病毒はどんなに恐しく忌はしいものであるかをまざ〳〵と思はしめるやうな醜い血の色と無慙な相貌をしてゐた。瘦せて眼球のところだけが高くなつた眼は形よく長く切れてゐたが、たゞれた瞼や鼻吼から血が滲み出してゐた。

男は一眼見たゞけで、あんまり見ようとはしなかつた。

「いくら胎毒だつて、こんなに酷いわけはない。」

「ねえ、そればかりぢやない、やつぱり私が惡かつたから、その間こちらの方は放棄つて置いたからですよ。私もあなたにこんなのを見せるのが厭なの、誰れも皆私の體が大事なもんですから。」

三重はさう云つて意味ありさうな眼をした。

三重はやがて女中を呼んで子供を渡して襟先を掻き合せながら、

「もう子供なんか産むものぢやないと思ひました。厭ねえお産といふものは。」

「どうもお氣の毒さま。」

「私まだ體がどうも本當にならないんですよ。」

尙暫く話して男は歸つていつた。その晚刻になつて子供はすや〳〵寢入つてゐるかと思ふと時々勢のない泣き聲を出して眼を覺してゐたが、どうも樣子が變なので、三重は自分で抱き上げて藥をあてがつて見たり智慧のついた者に口をきくやうにいろんな獨言をいひながら子供を扱ひつけぬ彼女は頻りに子供の注意を呼び覺ますやうにしてゐたが、子供は次第に性がなくなつたやうにぐつたり萎びてしまつた。急いで呼びにやつた醫者が駈付けた時にはもうすつかり生命は絕えてゐたのであるが彼女はそんなことゝは知らずやつぱり眠つてゐることゝ思つてゐた。

醫者は三重が抱いたまゝ小さい胸のまはりや心臟のところに聽診器をあてゝみたり兩手の脈を觸つて見てゐたが

「これはもう不可ないやうです。」

「注射をして頂いても效果がございませんでせうか。」それまでにも一時惡かつた時生れて半月ばかりの體にもう三本も注射をしてゐたのである。

「注射をしても駄目でせう。もうすつかり心臟の働きが止つてしまつてゐるのですから。」

子供は全然死んでしまつてゐるのであるが、それでも醫者は流石に彼女の心を察して初めはそれを明言しかねたのであつた。三重はそれに氣が付かなかつた。

「もう、どうしても不可せんのですか。」

「えゝ、この樣子ではもう私の來る大分前から脈搏は止まつてゐたらしいです。」

醫者が歸つてから、知らしてやつた母親などもやつてきた。その夜は生れて漸く一月にしかならぬ赤ン坊にしては大人でも弔ふやうに鄭重にして一夜を通夜に明かし、翌日東京から父親が家の者を二三人連れてくるのを待つてその晚鎌倉の火葬場に送つた。

三重は逆上げてくる淚が頰に傳はるのを時々思ひ出したやうに着物の袖で拭きながら、心の內では昨日の晝間男が、ふいと訪ねて來てくれたのは、あれは屹度蟲が知らして別れに來たのであらう。父子の緣といふものは爭はれないものだ。三十日の間生きてゐたのに、昨日までは來ずして、死ぬる日の昨日になつて、こちらから來てくれとも何とも云はないのに偶然訪ねて來たことから思つてみてやつぱりあの人が死んだ子の父親であつたに違ひないなどと、そんなことがいろいろ胸に浮んだ

博士も死んだ翌日顏を見せたが格別それを悲しむ風は見えなかつたが、出産から患うて死ぬるまで三重母子の體にかゝつた四百圓近い金は無論博士も惜まず出したのであつた。

遺骨はその翌日東京まで持つて來て麻布の方の菩提寺にある墓地に葬つた。形ばかりの土饅頭がそのうへに盛られて、小い白木の杭に何々童子といふ戒名が黑く誌された。初めか

ら肥立ちの惡さうな子で產れる前まではそんなに欲いとも思はなかつたのであつても、あんな人間の形を具へた體でゐながら僅か一と月ばかり此世の日の眼を仰いだか仰がぬで忽ち無常の風にさそはれて消えたかと思ふと、三重は墓の前に跪きながらいつまでも淚が出て仕方がなかつた。

男のところへも死ぬと早速知らしてやつたが、可哀さうなことをしたといつてきたばかりでそれつきり暫く訪ねて來なかつた。

日はなすこともなくまた一日々々と經つていつたが、三重は時々子供のことを思ひ出してひとりで淚を拭いたり、母親や博士に思ひ出ばなしをして、心をまぎらしてゐた。博士は彼女があまり子供のことを話すと、

「またその話をする。」

といつてその話を繰返へすのを嫌つてゐた。

梅雨が明けてまた暑い夏が來た。鎌倉へは避暑の客が入り込む季節になつた。產後二た月ばかりすると三重の體もまたもとの體に恢復した。博士は相變らず每日顏を見せてゐたが三重は流產したり、產れてすぐ死んだりしたあとはまた直ぐ姙娠するものだといふことを思つてそれが心配であつた。博士はそれを避ける藥を調劑して與へた。

その時分になつて男もまた時々やつて來た。七月のある涼しい晚三重はもう二階の蚊帳の中に入らうとしてゐると、夜遲く久しぶりに門の戶を叩く音がして男が訪ねて來た。彼女は浴衣の寢衣のまゝ自分で起きていつて男を上げた。

「氣まぐれやさんだから今晚あたりひよつとしたらあなたがお出になりやしないだらうかと丁度今思つてゐたところ。」

女は嬉々としながら、

「暑いでせう。少しそこを明けませう。」といつて、二階の雨戶をところどころ透かした。

「もう寢てゐたのですか。」

「いゝえ、まだ。これから寢ようかと思つてゐたところなの。私はお產をしてからどうもまだ體が本當にならないんですよ。これ、こんなに手に吹出物がして仕方がないんです。お產の結果からなんですつて。そして今藥をつけてゐたところです。」

さういつて女は白い繃帶を卷いた纖細な手先を出して見せた。

「何だ、仰山な、これや吹出物ぢやない。蚊にでも喰れたんだ。」といつて男は笑つた。

死んだ子供の話が暫く二人の間に交された。

「あの時あなたがお歸りになると直きよ、惡くなつたのは。」

さういつて女はその時の模樣をまた思ひ出しながら、委しく話して聞かせた。

「あなたどう思つて。あなたゞつて矢張りあの子が生きてゐ

た方がいゝでせう。」女は派手な中形の袖で眼を拭いた。

美しい夏の夜は次第に更けて、細目に明けた雨戶の隙間から磯臭い濕氣を含んだ潮風が冷く肌に觸つた。暗い海の方にはたゞ遠くの波の寄せては返す音がするばかりで、ところどころに夢のやうな漁火が見えたり隱れたりしてゐる。

「もう遲い。あなたお眠いでせう、あの中にお入んなさい。」

女は氣の濟むまで死んだ子供の話を繰返したあとで鼻を詰らせながらさういつた。

次の八疊には青い蚊帳が外から流れ込む涼しい夜風に靜に搖れてゐた。青い被ひをかぶせた電燈の火影が一と間の中をまるで深い水の底にでもゐるやうに幽かに照してゐる。

男は女が押入れの中から取出したばさ／＼した浴衣の寢卷に、着てゐた衣服を脫ぎ更へて蚊帳の中に入つた。

「私ちよつと髮を結はう。」

女はひとり言のやうにいひながら次の間の鏡臺の前に坐つて、晝間洗つてそのまゝ下げておいた頭髮をいつもの束髮に束ねあげた。

「すぐ行きますよ。」

三重は蚊帳の中にゐる男の方に聲をかけながら薰の高い化粧水で薄く顏をつくつた。

それから暑い間二た月ばかり男はまた東京を留守にして鎌倉へもやつてこなかつた。

博士も八月の中頃來たとき持病の脊髓がいけないなどゝ云つてゐたが、それきり月末には必ず來ることになつてゐるのが、それもやつて來なかつた。自分が醫者であるだけに方々惡いところのあるのをよく知つてゐて、三重も常にそれを聞かされてゐた。多分その病氣がいけないのであらうとは思つてゐたが、九月の月がかはつて十月になつても何の沙汰もなかつた。そんなことは今までにないことなので三重はいろいろに氣を揉んだ。初め世話になる時兩方の中に立つて口を利いた人間が日本橋の方にゐるので、その男を賴んで東京の本宅の方を訪ねてもらつたが、病氣の爲に誰にも面會謝絕をしてゐるとばかりで會ふわけにはゆかなかつた。勿論鎌倉の分院にも夏以來ずつと出て來ないし、東京の病院で聞いてみても博士はもう長い間出勤しないといふことであつた。

はじめは三重も自分の祕密がどうかして博士に覺られたのではあるまいかと思つたが、どちらの病院にも出て來ないところをみると病氣は本當であるらしい。それは重いのか輕いのか容體は一向知るよしもないので彼女はそれからそれへといろ／＼に思ひ惱んで日を立てゝゐるよりほかはなかつた。

そしてもし博士が死ぬやうなことがあつたら自分はどうしようかといふやうなことが考へられて、そのために三重はまた

一晩中まんぢりともしないやうな夜がつゞいた。

「あの人死ぬだらう。死ぬにちがひない、屹度死ぬ。死んだら死んだで仕方がない。」

と今からもう諦めたやうな氣になつて、その博士に死なれた場合の自分の立ち場を考へてみると、體は地の中に滅入り込んでゆくやうなたよりない果敢なさが犇々胸に迫つてくる。そして

「お前をそのまゝにして俺は死んでゆけない、」と平常いつてゐたことを思ひ起して、その情の籠つた言葉を夜具の中で胸に掻き抱くやうにまざ〳〵と念じながら、「あの人がやつぱり一番まじめだ。」と思つた。

（大正七年二月書了、讀賣新聞掲載）

浮氣もの

私は××の富葉に一ぺん會つてみたいと思つてゐる。

無論、指を折つて考へてみると、私と、たしか六つ違つてゐたから彼女はもう四十の上を六つも越してゐるのである。四十六といへば、いいお婆さん藝者である。そのお婆さん藝者の富葉が何で又お婆さんで藝者になつたものか、いはれを訊けば、そこにいろ〳〵の因縁があるのであらうが、私は彼女が又、以前の藝者になつてゐると、ふとしたことから聞いて、ちよつと吃驚したのである。

世間といふものは實に、廣いやうで狹いものである。今年の一月頃であつた。年暮の急がしさに臨時に雇入れた派出婦のケイといふ女は世間擦れのしてゐるほどあつて、一寸小賢い女であつたが、折柄冬の最中で、家内や子供は女中を附けて、ずつと熱海の方に遣つてゐるし、留守は自分とその派出婦と二人きりで、決してその留守の間に惡いことをするといふ譯ではないが、

「今はこのとほり頑固爺兒のこつ〳〵だが、俺だつて昔は少しは發婦かしたこともあるよ。」

「それはさうでございませうさ、旦那さまは。」

「いやに高く買ふねえ。」

「でもさうですもの。」

「さうかねえ、半衿くらゐは奢らう。」

「半衿くらゐぢや不足ですわ。」

「だつてお前にそんなに奢る道理がないもの。だが、同じ奢らねばならぬなら、少し舊いお惚けでも聞かさうか。」

「えゝ、どうぞ。」

「いや、そんなに眞面目にいはれても困るが。」

そこで私は一寸心の底に暗い蔭がさしたやうな氣がしながら、

「きつと地震で死んでゐるかも知れん、あの女は。」私は獨り言のやうに沈吟した。

「多分地震で死んでゐるにちがひない……」

私は繰返してゐた。

「それがどうしました？」

「うゝ、それはねえ、横濱に居た女なんだ。あの地震だからきつとやられてゐるにちがひないと思ふんだ。假ひ關係のなくなつた女でも、以前譯のあつた女であつてみると、それが死んでゐると思ふと、何ともいへず厭な氣持ちのするものだよ。」

「そりや、さうでございませう。その女がどうしました。」

「死んでゐるか、それとも無事でまだ生きてゐるか、一度探ねていつて見たいと思つてゐるんだけれど地震の前にも一ぺん手紙を遣つてみたことがあつたけれど、附箋をして戻つて來たんだ。會はなくなつてからも丁度十年になる。どうしてゐるかなあ。」

「もう、それつきり……もつといはなけりや分りませんわ。」

「うゝ、まだいふよ。その女と俺と關係があつたのだよ。そして、その女が死んだと思つてゐるんだ。」

「そして旦那さま、悲んでゐらつしやるんでせう。」

「うゝ、それは死んでゐれば悲んでゐるさ。」

「もつといつて聞かして下さらないと分らない。その人横濱に居ましたの。」

「うゝ、横濱にゐたんだ。」

「横濱に居て、何をしてゐたのです。どんな方です。」

「横濱に居て、人の妾をしてゐたんだ。」

「えゝ……それから……どんな人の妾?」

「醫者の妾をしてゐた。」

「何といふ醫者?」

「それは一寸いはれない。」

「隱さないでいつて御覧なさい。」ケイ女は少しく微笑を含みながらいつた。

「別に隱すわけもないが、とにかく大きな病院の院長さ。」

「あゝ、知つてゐる、知つてゐる。」

「何を知つてゐる。この病院は横濱のステーションから近い處にある病院だつたが、大きな煉瓦の建築だつたから、きつと一と溜りもなく地震でやられたらうと思ふ。女もそこから餘り遠くない處に圍はれてゐた。」

「えゝ知つてゐます。」彼女は薄氣味わるく笑つた。

「お前がそんなことを知つてゐる筈がない。」私は不思議な顏をしてケイの顏を見た。

「知つてゐる筈がなくつても、知つてゐます。院長の名をいつてご覧なさい。」

「うゝ、名は……堀江賓といつた。博士だよ。」

「えゝ、すつかり分りました。はゝゝゝゝ。旦那さまも隨分ですねえ。」

「何が隨分だい。お前どうしてそんなことを知つてゐる?」

「どうしてつて、知つてゐます。皆な知つてゐます。」

「どうも不思議だねえ。」私は又ケイの顏を見た。

「はゝゝ、わたし、その女の人から聞きました。その人死んでゐません、まだ生きてぴん／＼してゐる。」

私は倍々不思議に堪へなくなつた。

「地震でも死なゝかつた?……生きてゐる!……お前何處で、どうしてその女に會つた。」

「ある處で。……その人もう横濱には居りません。きつと、地震の前からもう横濱にゐなかつたんでせうと思ひます。」

「さうかねえ……地震で死ななかつたのは可いが、しかしあの女が横濱に居ない筈はないがなあ。」

「でも、もう居ません。」

「居ませんといつたつて、あの旦那が放す氣づかひないもの。とても惚れてゐたんだから。」

「いくら惚れてゐても、もうその旦那とは別れてしまひました。」

「別れてしまつた!?」

私はケイ女のいふことが、何が何やら一向合點がゆかなかつた。私は眼を圓くして又暫く對手の顏を見詰めた。

「だつて、子供まであつたぜ。」

「子供はあつても別れてしまつた。」

「どうしてお前、そんなことを知つてゐる。不思議だなあ。」

さういつても、ケイは意味ありさうに、たゞ狡く笑つてゐた。

實際、その女と旦那との交渉を、ある處まで深く知つてゐた私にはもう一生別れるのどうするのといふことは天地が覆つても、あるものではないとおもつてゐたからである。

その女と自分とのことは、ずつと前――十年も前に私は二三篇の小説にも書いたが、私とはわづかに一年くらゐで絶えてしまつた。その時彼女はその旦那との仲がいくらか不和になつてゐる時だつたので、いはゞ、彼女に私といふ魔がさしたのであつた。無論私の小説にも書いたやうに、最初から彼女の方で手紙で私を口説いてかゝつたのが始まりであつた。しかし私は、その一年ほど前から京都の方に思つてゐる女があつたので、私としては、たゞ一時の戯れにほかならなかつた。又彼女の方でもそんなもので、いふとほりの一時の浮氣であつたのだ。

しかし私は、彼女をすつかり忘れてしまふことは出來なかつた。ひとり彼女ばかりでない、私は、以前關係のあつた女のことを、とき／＼思ひ出してみることがある。それは、私の生活の寂しさを、昔關係のあつた女のことを偲ぶことによつて、いくらか慰めることが出來るからである。戀であれば尚ほさらのこと、若い時分には、一人でも多く女と親しい交際をして置くものだ。だん／＼老境に入つて、過ぎ越し來た跡を振顧つてみることによつて、人は、自分の過去の生活内

容の豐富であつたことに滿足するであらう。もし、吾々が、過去に於て、一度も戀をせずに通つて來たものと假定して見たまへ、いかに吾々は生効ひのない生活をして來たか。といふ憾みがあるか知れない。昔關係のあつた女のことを偲ぶのは、少年の頃愛讀した小說の中の男や女を思ひ出すに類したものだ。

私は、その女との仲が絕えてから半歲ばかり經つて、京都の方にいつたきり、二三年歸つて來なかつた。彼女と絕えたからとて、別に眞劍に、京都の方に思つてゐる女があつたのだから、少しも失望もしなかつた。そして二三年の後、京都の方で私が、その京都の女のことで絕望を抱いて東京に舞ひ戾つて來た時分のことであつた。私は京都の女に失望した心を、ふと、その横濱の女に向けてみた。その時分私は京都から五月の末に歸つて來ると、半月ばかりして箱根の方にいつて。夏中を過してゐたが、その間に時々東京に出て來た。その往復の途中私は、ふと横濱に下車してみる氣になつて、土用の最眞中であつた。かねて往きつけて案內知つてゐた彼女の住居を訪ねてみた。ちよつと滿三年ばかりになるので、彼女はもうそこにゐないかも知れないとおもひながら、戶部の方に寄つた、ある高臺の裏にあたる、閑靜な一廓に入つていつた。

すると花崗石の門柱の立つた、可なり大きい同じ二階づくりの家が三軒並んでゐる、その一番手前の家の入口に、三年前から覺えのある、いばらぎと平假名で表札を掲げたのがそのまゝである。私は、絕えた女であつても、さすがに微かに胸が躍つた。

女中が出て來たので、取次ぎを賴むと、早速二階に通されたが、その時、三年前に何度も踏み馴れた階段を上つていきながら、ふと、そこから右手の階下の座敷の方を見ると、そこに三歲ばかりの女の兒が遊んでゐるのが眼に入つた。

やがて彼女も二階に上がつて來て、久し振りに挨拶を交はした。彼女は、滿三年前に見た時よりもそれだけ年を取つてゐる筈だが、その癖身體に肉が附いたせいか、先の時分よりは一體に大きくなつたやうに見える。そして、どことなく貫目が出來て、奧さんらしく位が附いて見える。その時年は三十七か八であつた筈だ。

「子供が出來たんですか。」私は訊いてみた。

「えゝ、出來ました。」

「一寸今、こちらへ上りながら見たのですが、もう大きいやうぢやないですか。いくつですか。」

「三つになります。」

「ほう、ぢや一昨年生まれたんですな。」

「えゝ、さうです。」

私はそんな會話の中にも、心の中で月日を繰つてみてゐた。先に彼女が出產したのは、その前の年の五月か六月の初であつた。そして、それは、多分、彼女の旦那との間に出來た子供ではなかつた。彼女の心證からいつても、それは否認されるのであつた。丁度その前の年の夏に私が彼女を知つてから間もなく彼女は姙娠したのであつた。そして翌年の五月か六月に生まれた子は男兒であつたが、生後わづかに一ケ月にして死んでしまつた。その時私は產後にはじめて彼女を訪ねていつて、その子供を一度見たことがあつたが、私が訪ねて行つてから、すぐ間もなく息を引取つたといふことを、彼女から後に手紙で知らして來た。彼女は、蟲が知らして會ひに來て下すつたのですと、感傷的なことを書いて來てゐた。彼女の話によると、生まれて二十日ばかりは、とても綺麗な赤ン坊であつたが、それから俗にいふ胎毒で身體中に厭な腫物が出來た。それで結局病死してしまつたのであつた。

そこへ女中が茶と菓子を運んで來た。

「孃ちやんゐて?」彼女は女中に訊いた。

「えゝ、ゐらつしやいます。」

「ちよつと連れて來て。餘處のおぢちやまに、色の黑いのを見ていたゞかう。」彼女はさういつて笑つた。

女中は、すぐ階下から女の兒を抱いて來た。

彼女はそれを自分の膝に抱き取りながら、

「さあ、色の黑いのを見て下さいましつて　ほゝゝゝ」

「おう、これは大變に丈夫さうですなあ。」といひながら、私はその顏を見ると、まるで、彼女の旦那であるお父さんにそつくりであつた。それを見るにつけても、私はひとりでは、その子供の前に生まれた子供の顏を思ひ浮べてゐた。それは旦那には少しも似てゐなかつた。

「このお子さん、一昨年のいつ生まれたんです。」私はもつと精しく訊いてみた。

「さうですねえ……何時でしたか……たしか一昨年の六月か七月でした。」

「ほう、さうすると……」いひさして、私は又胸の中で子供の生まれた前後の月日を繰つてみてゐた。一昨年の六月から七月に生まれたとすれば、それはその前年の九月か十月に受胎したものでなければならぬ。さうすると、その時分は、丁度彼女と自分との間が、關係の絕える絕えないで、互に揉め合つてゐた時分であつた。彼女はその二三ケ月前の六月に先に生んだ子供を亡くした。子供を亡くした彼女は不斷の我儘癖が一層昂じてヒステリイのやうな感傷的になつてゐたが、その時分何とか斯とかいひながらも、私とも二三度會つた。そして、九月の末だか、十月の初頃に會つた時分など、旦那が、もう四十日も顏を見せないといつて、ひどく悲觀してゐた。腎臟の持病があるので、きつと患つてゐるのか知れぬ。居る處は、ものゝ二三丁とも離れない眼と鼻との距離なのだが、

旦那に、隠し女があるといふことは飽くまでも嚴秘してあるので、こちらは不用意に手紙を遣ることも出來ない。もしこのまゝ逢ふことも出來ず死に別れるやうなことにでもなつたら、どんな思ひがするであらうと、そんなことをかれこれ思案してゐるとそれが今にも現實になつて來るやうな氣がして、終には居ても起つてもゐられないほど神經が昂つてくるのであつた。それを考へると、天下晴れて夫婦と名乘ることの出來ない日蔭者の境涯くらゐ、果敢ない遣る瀬ないものはないと思はれた。あれほど毎日顔を見せ、どうすると、身體に暇さへあれば、一日の中に二度でも三度でも一寸々々やつて來てゐたのに、今度の旦那の世話になつてからもう五年ほどになるが、今度のやうに四十日も來てくれないといふことは、ついぞ例のないことなのだ。もしかしたら他に埼す花が出來たのではあるまいか。……

私は一度、ちやうどそんなところに打突かていつて、ひどく彼女が怒つたことがあつた。それつきり互に相會はなかつたのだ。それでゐながら、今から思つてみると、それから間もなくか、或はその前かに旦那と會つてゐなければ、まぎれもない、まるで旦那と生寫しの今の子供は生れない筈である。

あの時分に比べて、ずつと肉が附いて、品の好い奥様らしく重味が出來て、少しく眼尻に小皺の寄つた、白粉の吹いた顔を見てゐると、旦那に生寫しの子供を生んで、すつかり落着いてゐるのが、妬ましく癪に障つた。先に一度、私が京都の女に思ひ詰めてゐた最中、

「あなたの腹は眞實にどうなんです？　あなたの御量見次第でわたしにも決心がありますから。」

といつたから、私は一笑に附するやうに、

「戯談をいふのはお止しなさい。……あんたのやうな我儘で金のかゝる女が、どうして私のやうな貧乏な小説家のとろになど來られるもんですかッ。」と笑つた。

すると、彼女も笑つて、それつきりであつた。その時、私は、別に深く思つてゐる女があつたから、强ちさういつたのでもなかつた。實際私には持て剰しものと思つたのであつた。しかし京都の方の女も結局ダメになり、彼女は彼女でそのとほり奥様らしく落着いてゐるのを見ると、一入私は、私自身の萬年孤獨を佗しがらずにはゐられなかつた。實のところ、箱根から東京への往復の途中わざ〳〵横濱に下車してみたのは、萬一彼女が元のまゝでゐるならばといふ野心――といへば語弊があるが、今度は此方も眞面目に一つ話を切り出してみようかといふ腹もあつたのだ。それが、旦那に生き寫しの子供がもう三つになつてゐるのでは、もうどうしようもない。生後一ケ月で死んだ先の子供はたしかに鼻の形からいつても眼尻の切れからいつてもあの旦那の子ではなかつた。あの子供がもし生存へてゐるなら、たとひ旦那との間は蜜のやうにあらうとも、膠のやうにあらうとも、いよ〳〵となれば尻を捲つてこちから割込んで芝居を打つて出る寸法もあらうといふものだが、もう斯うなつては手の出しやうもない！……私は二十分間ばかりゐて、早速出て戻つた。そして、これからそろ〳〵浴客も退けやうといふ八月の末又箱根の山へ歸つて行く汽車の中で何ともいへず寂しかつたことを覺えてゐる。

「おい、ケイちやん、どうして子供があるのに、旦那と別れたんだい？　話して聞かしてくれ。お前が又、どうしてそれを知つてゐる？」

「その女今藝者をしてゐます。」

「なに、藝者をしてゐる?!」私は又眼を圓くした。「どこで？」

「神樂坂で。」

「なに、神樂坂で、神樂坂といへば、すぐぢやないか。」

「えゝ、すぐです。」

私は頻りに頭を傾けながら、

「しかし、それは變だなあ。あんなに子供があつて……もう今は無事でゐたら、九つか十くらゐになつてゐるだらうが……旦那と別れて藝者になるとは　一體どうしたといふんだらう？……人違ひだらう。」

私は又ケイのいふことを疑つてみた。

「いや、人ちがひぢやない。たしかにその女です。」

「かうッと、もう、それ四十五か六になるよ。」

「えゝ、もう、そのくらゐになるでせう。わたくしの知つてゐる時分が二三年前で、もう私も四十になつたといつてゐましたから。」

「大分年を隠してゐるな。……そして、お前どうして、あの女と知つたんだ。」

「あの女が自分でさういひましたもの。」

「あの女が自分で、私のことを？……君は派出で藝者屋に働きにいつてゐたのかい。」

「いえ、さうぢやありません。ほかの處に居る時分でした。」

「どうもお前のいふことは、まだよく合點がゆかないなあ。」

が、話はかうであつた。ケイ女が、別に奉公といふ譯でもなく、ある懇意先からの依頼で、暫らく手傳ひといふやうな名目で身を寄せてゐた家の主人は、元海軍の中佐あたりまでいつた軍人であつたが、フランスに留學して飛行機を研究してゐたところから、自分から退職して、飛行機に用いる機械を製作する工場を起して相當盛大にやつてゐた。その主人が神樂坂で捕虜にしたのか、自分の方でせられたのか、とにかく客いろになつた仲がその寵愛であつた。主人はその頃、二三

年前に四十七八の、いかにも元海軍々人らしい、さつぱりした氣象の愉快な人で、初めつから奥さんを持たなかつた。勿論金廻りもいゝところから、よく遊びにはいつてゐた。しかし家には奥さんが居ないかはりに女中や書生なども多勢ゐたが、主人が始終藝者遊びをして夜一時二時になつて歸つて來るのをよく知つてゐるので、そんな時には、あゝ今時分又かといつたやうな調子で、格別起き出でゝ門まで出迎へたり、玄關を開いたりするのでもなかつた。そしてケイ女の香織がどんなに寒い冬の夜でも、又雨の夜でもいつも寢床を出ていつて、門を開けて迎へた。主人は夜遲く自動車で歸つて來るのであつたが、その時いつも主人と一所に同乘して送つて來るのが、後に懇意になつた富葉であつた。

「香織さん、こんなに遲く、寒いのに、毎度濟みませんねえ。」

「いえ、どうしまして。」

「君、この香織は全く感心だよ。」

主人は富葉の口について香織をほめた。

そんなことから、香織と富葉とは女同志で、すぐ親しくなつた。そして毎月廿四五日頃になると、主人の內證の使者になつて、富葉のところへ金を届けていつたりした。そして、行くと長く遊んでゐた。

「香織さん、あんた藝者におなんなさいよ。ねえ、あんたならきつとなれてよ。」

など、いつてよく勸めた。

「ほゝゝ、わたしなどのやうな、田圃から掘り出して來た八つ頭のやうな者が、藝者だといつて出たら、客の方で吃驚して逃げ出すでせうねえ、ほゝゝゝゝあゝお可笑しい。」

香織がさういつて、自分から轉げるやうに笑ふと、富葉も一所に笑ひながら、

「ほゝ、そんなものでもないのよ。標緻のことをいつたら、わたしだつて隨分氣耻しくなるわ。いくら藝者だつて、標緻ばかりで此の商賣に出る者ばかりはありませんもの。あんたのその氣風だつたら、きつと面白い人になれてよ。ねえ、おなんなさい、わたし仕込んで上げるわ。」

富葉はさういつて、眞面目に勸めるのであつた。

富葉の家には看板かりだの、分けだけ、まる抱えだの四五人も居つた。彼女は土地では無論新しい顏であつたが、座持ちとしては、なか〱頭が働くので、まる三年も經たないうちに、すつかり年寄り藝者で顏を賣つてしまつた。しかし、一體が神樂坂も、御多分にもれず、若い綺麗なので賣る處なので、富葉は、

「わたし、つまりは吉原に行きたいと思つてゐるのよ。あそこなら、お婆さん藝者も相應に持てるから。何といつても此處は田舍ですよ。」

そんなことをいつてゐたから、或はもう何處かへ住み替へて神樂坂にはゐないかも知れないが、その富葉は、香織が主人の召使ひで行つたり、又は自分で氣の向いた時に遊びにゆくと、ほかの者は皆なお座敷に出拂つてゐても、自分だけ一人で家にゐて、まあいゝでせうといつまでも、引留めて、いろんな、自分の身の上ばなしなどをして聞かせた。

「わたし、今までには隨分いろんなことがあつたのよ。」といつて、ずつと最初日本橋から半玉で出てゐた時分、信州の方の金滿家の息子に落籍されて、正式の奥さんに供はり、一年足らず田舍に行つて住んでゐるうちに、その若い主人に死別れたことやら、その時もう姙娠して七月から八月であつたことの悲哀。それから又東京に取戻されて、やう〱身二つになつたところで、産後たつた半歳ばかりして又元の土地から藝者に出たが、その時、ぽた〱滴の垂れるほど張つてゐる乳にガーゼの繃帶をしてお座敷に出たといふやうなことを感傷的な心持ちになつて話して聞かせたりした。

「それを振り出しに、その後いろんな人に會つた。隨分男道樂もしてよ。ほゝゝ。」富葉は四十婆さんの耻かしいことを知らぬといつたやうな調子で、やつと二十そこ〱の素人娘の香織を捉へてそんな話をするのであつた。

「一度など小說家を情人にしたこともありましたし、あの人今どうしてゐるか知ら？ 前にはわたしも小說が好きでよく讀んでゐましたけれど、もうこの頃はすつかり讀まなくなつたら、どんな人がどうなつてゐるか少しも知らない。その人の書く小說でない、一寸したもの私が大好きだつたの。」彼女は、過ぎ去つた戀を戀するやうにしんみりしていつた。

今、香織は、私ののろけ話しから二三年前に富葉から聞いてゐた彼女の惚けばなしを記憶して、その間に聯絡をつけてみたのであつた。一體香織といふ女は、妙にそんなことに頭のよく働く女であつた。小說家を情人に持つた藝者や妾は少しもめづらしくない譯であるが、彼女の頭は不思議にそこにある聯絡を直覺したのであつた。私はやつと少し諒解めたやうに、

「しかし不思議だねえ。私の名はいはなかつたかい。」

「そんなことはいひません。けれども、何だか、今旦那さんの話で、さうぢやないかと思つたのです。その女も横濱で堀江といふ病院の院長の世話になつてゐたといふやうなことをいつてゐましたから。」

「ぢや、ちがはない。それにしても、あの堀江博士は隨分あの女に惚れてゐたんだがなあ。どうして別れたんだらう。子供が出來て、四十に近くなつて別れるといふのは解らない。堀江さん死んだかな。」

香織は強く頭振りをふつた。

「うゝ。博士も地震では死なゝかつたでせう。わたし、その

ことは、よく知らないけれど。……別れたのは、その爲ぢやない。」

「ぢや、どうしたんだ。」

「富葉といふ藝者は隨分浮氣者ですねえ。」

「うゝ、隨分浮氣の方だ。それがどうした。」

「旦那があるのに、他に男をこしらへたんです。」

「それは俺のことかい？」

「えゝ、旦那さんもさうでせうけれど。また別の男を。」

「いろんなことを知つてゐるねえ、香織ちやんは。」

「それは、隨分ひどいんです。私もそのことは富葉から聽いたのぢやない、ほかから聞いたのですけれど。」

といつて、又香織の話すところに依ると、

富葉――その頃は素人の時分であつたから無論本名をいつてゐたが、彼女は旦那と一所に修善寺だつたか、伊香保だつたか、ある年の九月の初に温泉場に五六日行つてゐた。その時、隣室に滯在してゐる客といつしか親しく話し交はすやうになつた。その客といふ男はまだ三十を一寸出たばかりくらゐで、彼女よりは十も若かつた。下町の商人で、江戸前の氣の利いた男つぷりであつた。四十の聲を聞いても根が浮氣者の彼女は、一度隣の座敷の客を垣間見たゞけで、もう初つから、ちよつと慕れがしてゐたのであつた。そして、二三日居る間に廊下つゞきのところから、互に親しく口を聞くやうになつた。近くの山や溪を旦那の博士を誘ふて、その男と三人で散歩したりすることもあつた。彼女は一所に歩きながら、旦那とその男とを心の中で比べてみると、どうせ女と生まれて男を持つなら、內の旦那のやうな縱から見ても横から見ても野暮で固まつてゐる人に生涯の身體を委かすよりも、こんな見るから好いたらしい人と一苦勞をしてみたいと、浮氣の蟲が身內をぞく〳〵かぶつて來た。

來て四五日して、温泉場は終日びしよ〳〵雨に降りこめられてゐた。その日の午後であつた。散歩も出來ないところから、朝から二度も三度も湯に漬つて腹を消なしてゐた。

旦那は彼女を入浴にさそふた。わたしは止しますから、あなたお一人でいつてゐらつしやいといつて拒んだ。彼女は旦那が手拭を下げて階段を下りていつた後、何となく隣座敷の客に旦那の居ない間に、二人きりで口を利いてみたくつて堪らなかつたので、廊下から言葉を掛けてみた。

「關根さん、お一人？」わかり切つたことをいつて訊いてみた。

「えゝ……温泉で雨降りは厭ですねえ。」

「ほんとにねえ。飽き〳〵してしまひますわ。」彼女は隣室の閾際まで歩み寄つた。

「まあ、お入んなさいまし。」關根は呆やけたやうな言葉を發した。

「おや、お休みのところ。……これはとんだ失禮を。」

彼女は慌てたやうな素振りをした。

關根は、すゝきに月を染め拔いた淺黃絽の薄い、蒲團を胸から下の方へ掛けたまゝ、仰向きになつて、キングか何か見てゐたが、一寸顏を横向けて、障子の處に佇んでゐる彼女の方を見た。

「構ひませんよ。まあお入んなさいまし。」

「さう。……わたし隨分失禮な女とお思ひになるでせう……」といひながら、彼女はちよつと、廊下の方を振顧つてみて、そこらに誰れも人のゐないのを見て、つつと關根の座敷に入つていつた。そして關根の床の脇に寄り添ふて坐つた。

その時もう二人の眼の色は異樣な暗示に輝いてゐた。さうして、どうしたのか、彼女はそこに坐つたまゝ、黑繻子の衿のかゝつた大島の袷の袖口を以つて、眼を拭きながら、しくしく泣き出した。

關根は、はつと思つたが、大抵それは察してゐた。

「どうしたのですか。」と彼は不思議に思つた。

「わたし、どうしてかうなんでせう。自分でも分らないんです。」彼女は少しく鼻をつまらせたやうな聲を出していつた。

關根は腕を伸ばして彼女の手頸を優しく握つて引つぱるやうにした。彼女は、關根に、さうせられるまゝに、すなほに身をまかせてゐた。

一旦浴室へ下りていつたとおもつた旦那は、便所へでもいつてゐたのか、又引返して戻つて來た。そして彼女がゐないのと、隣室で二人の男女の話聲がするのとで、耳を澄ますと、それは、彼女と隣室の客とであつた。……。旦那は、いきなり、障子を開いて、その室に飛込んでいつた。二人はどうすることも出來なかつた。旦那は、二人をその場で殺してしまふと一圖に憤つた。

到頭館旅の主人が仲裁に入つて、旦那に佗びたり宥めたりして、それでも流石は身分のある人だから始末が好い、結局旦那の方から旅館の主人を介して相當の金額の手切れを與へることにして、彼女は旦那からその場で綺麗に見放されてしまつた。温泉に行く時には旦那であつたが歸りはその男と一所に戻つて來た。

「へえ、そんなことがあつたのか。まるで、その男の役まはりは、一と頃の私の二の舞だな。なるほど浮氣な女だ。」

私はそれを思ひ、あれを考へして、そんなことなら、一度箱根と東京との往復のついでに樣子を見に立寄つた時の、自分の氣持ちを強く押していつてもよかつたのだと思つたが、しかし又考へ直してみるとそれは結局續かないのが落であつた。

「それで、藝者屋のおやぢがその年の若い色男なのか？」

「うゝん、その男とは二た月か三月ですぐ別れてしまつた。」

香織は又頭振りをふつた。

「おや！　たつた二た月で別れたの。」

「その後何でもすぐ大阪とかへ暫くいつてゐたでせう。その時又藝者になつたとかいふはなしらしかつた。ですから震災は大阪にゐる間のことです。大阪でも二人か三人男が變つて東京に歸つて來て神樂坂で藝者屋を始めたのは、その大阪の客から金を出さしたのでせう。そんなことを聞きました。」

「さうかねえ。」といひながら、私は心の中で、彼女の持ち變へた男の數を算へてみた。

（昭和二年五月六日作、改造掲載）

舊戀

戀に窶れた笠原は、その日も戀する女の行方を探ねて京都の街から街をさまよひ歩いてゐた。

長い間隨分の金も貢いでゐることとなり、堅い約束を交はしてゐるうへに、籠の鳥の、借金を背負つた廓勤めの女のことであるから、まさか自分に默つて身を退くやうなことは、かけてもするまいと堅く女の心を信じてゐたのに、ふつと消えるやうに廓から形を隱してしまつた。

その女と段々深い關係になつてから五六年間、どうかすると彼は、「もし自分の知らぬ間に女が彼處に居なくなるやうなことがあつたら、その時はどんな氣持ちがするであらう？」といふやうな不安の念に驅られて女の心を疑つてみることが時々あつた。そしてそんな疑念に脅かされながら「縁起でもない！」と、ひとりで頭振りをふつて、彼は强ひて不愉快な氣持を追ひ拂ふやうにしてゐたのであつた。ところがそれが今度到頭現實になつてしまつたのだ。笠原は初めてそれと知つた時は、實に何ともいひやうのない、遣る瀬のない戀の果敢なさを感じた。

それは丁度、わけても冬は凌ぎ難いといはれる京の街に日に日に時雨がおとづれて、身に泌む寒さが夜ごとに募つてゆく十一月の末の夜であつた。笠原は、女の勤めてゐた家で、そこの花車のやうなことをしてゐる婆さんから、女が病氣で身を退くやうになつた一伍一什のはなしを訊いて其家から外へ出て來ると、いつもは、ぞろ〳〵人通りのして繁華を誇る花見小路の花街も思ひなしにか火の消えたやうに寂しくて、笠原は、俄に盲目にでもなつたかと思ふやうに其處らが眞暗闇になつてみえた。花車の婆さんのいつたことは、何れだけが眞實で、どれだけが噓やら信用は出來なかつたが、とにかく本人は叔父さんといふ人間が來て連れて歸つたといふ。その叔父といふのは何處にゐるかといつて訊いても、さあ何處やら、わたし、よう委しいことは聞いてゐまへんもんどすさかいといふ。尤ももう一人叔父さんがあつて、それは何でも油小路あたりで悉皆屋をしてゐやはるとか聞いてゐますけど、一向くはしいことは知りまへんと、その以上に訊ねる術はない。

笠原はそこの家を出て、足の踏み度も分らぬやうに、どこを何う歩いたか、うか〳〵と魂の抜けたやうになつて、その夜は宿に歸つて寢に就いたが、徹宵たゞ、うつら〳〵としてばかりゐて偶々少し寢入りかけたと思ふと、何だか高い高い處から幾千丈と底の知れぬ深い溪のやうなところへ押し落されるやうな夢想にばかり襲はれて幾度となく彼方に向いたりこちらへ向いたり寢返りばかりして夜を明した。

たゞ油小路で悉皆屋と聞いたゞけでは、まるで雲を捉むやうな話であるが、それでも笠原には、何となく戀する女の懷しい姿が、つい何處かそこらにゐるやうな心地がするので、覺めた頭で考へれば、そんな愚かなことで、とても分る道理はないと知りつゝ、ぢつと家の中に垂れ籠めてゐるよりも、せめてさうして歩き廻はつてゐるのが、氣のまぎらかしになるのであつた。

さうして苦しい寢られぬ一夜を明かすと、彼は早くから起きいでゝ朝飯の箸を置くとそのまゝ三木本の方の宿から油小路の方へ出掛けていつた。

夜こそ寒いといつても、その頃の京都の冬の暖かさと靜けさとは格別で、笠原は消え入るばかりの絶望と身を煎るやうな焦燥とを感じながらも、さうした靜かな和やかな冬の日を浴びて、古めかしい京都の街筋を探ね歩いてゐると、唯單に讀書をしたり風光明媚な土地を旅行して歩いたり、又演劇を觀たり音樂を聽いたりしたくらゐでは得られさうもない、一生懸命の目的に向つて躍動してゐるやうな、強いつよい生命の力が體内に漲つて來るのを感じた。

油小路では何でも三條あたりといふやうに聞いてゐると、昨夜花車の婆さんがいつてゐたのを、たゞ一つの手頼りにして笠原はその油小路三條を起點にしてそこから上の方へと、注意深い眼を見張りながら、兩側の家々店々を覗くやうにして歩いていつた。油小路といへば、烏丸の大通りから又西へ幾筋か寄つた、もう堀川通りに近い方で、日本の他の大都市と同じやうに近年段々市區改正の爲に舊形を破壞されてゆく此の舊い美しい都會の中でもまだやゝ昔ながらの古風の面影がそのまゝ取殘されてゐるやうな通り筋であつた。殊にその街筋は昔から糊屋や悉皆屋へ染物屋などの多く軒を竝べた處で、黒染んだ紅殼塗りの格子のはまつた、軒の低い、つゝましやかな店先の暖簾の蔭で、野暮らしい物堅さうな町の女房や娘が立ち働いてる白い顏がちらついてゐた。廣いといつても、たかゞ此の一筋の街を上下へ歩いてゐる分には大して骨の折れることでもない。一軒一軒落ちなく兩側の家を覗いて歩いてゐるうちには、どんな幸運で彼女の姿が目にかゝらぬとも限らぬ。それとも女の母親の姿を見留めたゞけでもよい。さう思つて笠原は、油小路を上は一條の方まで、下は四條通りの電車線路を越して五條あたりまでも下つて見たりして、

上下三回も往つたり來たりしたが、たゞ兩側に軒を竝べた店ばかりでなく、到る處に又兩側の家と家との間に深く入込んだ路地があつて、その路地を入つてゆけば行くほど奧へ折れ曲つたり、縱に竝行してゐるのもあれば、十字形に切れてゐるのがあつたり。さすがに東京の淺草あたりの路地とちがつて、整然と敷石で疊んだ、小綺麗な路地にはなつてゐるが、それを一々這入つて探ねてゐたのでは、とても二日や三日掛つても窮極しさうになかつた。そして其等の路地の中の家は大抵しもた家になつてゐて、中にはそれでもやつぱり表通りと同じやうな、悉皆屋や絲屋などの店をしてゐる家もあつた。

思ひ詰めた笠原は、物の三四時間もそこら中をうろ〳〵してゐたが、終にはたうとう歩き疲れて探ねあぐんでしまひ、冬の日中ぐつしより體中を汗にして一とまづ宿へ引返した。そして宿の座敷で火鉢に凭りかゝつて憩ひながら、凝乎とこの後とるべき手段について考へてみたが、とてもそんな雲を捉むやうな智慧のないことをしてゐたのでは、たゞ徒らに精神を消耗するばかりである。何うしたらよいかと全く途方に暮れてしまつた。そして足掛六年の長い間、他の事には全く脇目も振らずしてその事ばかり一途に思ひ詰め、あらゆる努力を傾け盡して來たが、丁度かの忠臣藏の勘平が切腹しながら天を怨んで悔み慨くのと同じ樣に、まるで鵙の嘴の如く食ひ違つたといふことが、考へれば考へるほど泣くにも泣かれぬ辛さであつた。笠原は、それを思ふと、これほど此方で思つてゐる失望と悲しみの心を知るや知らずや女は今時分何處にどうしてゐるのか、一刻も早く居處を尋ね出して、自分の此の煮えくり返つてゐるやうな悶々の氣持を捉み出して女に浴せかけたいやうな堪へられない焦立ちに身を苛まれた。彼は古い言葉ではあるが、實に天道是か非かといふやうな、何處へ持つて行つて訴へ場のない、憤りやら怨みやら悲しみやらに殆ど聲を揚げて慟哭しようとしたのであつたが、しかし昨夜の話の樣子では、女は自分で自分の判別の付かない、半狂亂のやうになつて身を退くに至つたのだといふから、叔父なり親なりの他の者の爲すまゝになつてゐるのであらう。さう思ふと、又、十年苦界に勤めた面窶れのした、たゞさえ色の白い彼女の蒼白い顏がそこに見えてゐるやうな氣がして來る。紙屋治兵衞が河庄方の格子の窓から戀に焦るゝ小春の姿を覗いて見て、「可愛や小春が燈火に背けた顏のあの痩せたことわい。」といふ切ない心を、つい思ひ起したりしながら戀しい女の姿形などを明歷と想像に浮べ出して、せめて、それで心を慰めてゐた。

……それは背のすらりとした優雅な物腰姿をしてゐたが、苦勞人とは思へぬおとなしい風俗であつた。靜かな、ど

ちらかといふと沈んだ顔で、尋常に引締つた口許を、少しく笑ふとそれが何ともいへない柔和な表情になつた。笠原はいくらか自分も氣が變になつたやうな眼をして、誰もゐない座敷の中を、ぢつと見据ゑたまゝ、いろ〲の場合の記憶を辿つて、その女の姿や表情や口のきゝやう聲の調子までも思ひ描いてゐた。それはちやうど、麥管の尖から空中に吹き上げる五彩のシャボン玉のやうに取り留めもなく果敢なくも美しい幻であつた。

そこは加茂川ぞひでも最うずつと上の方の、丸太町を少し上つた處であつたが、も一つ上の出町橋の方から加茂川の水を堰き分けた清い小流が幽かにつぶやくやうな音を立てゝ、すぐ座敷の下を流れ落ちてゐた。その川の上に架け出して建てゝある四疊半の茶室めいた小座敷はもう大ぶ古びてゐるのが却つて氣分を落ち着かせた。笠原はやがて屈託した顔を上げて、つゝと立つて障子を開け、思ひ疲れた頭を休めようとして、あてもなく河原の方に眼を遊ばした。短い初冬の日はもう西に傾きかけたと思はれて、明るい茜色の夕映えを向岸の家々に浴せてゐるのが、硝子窓や金屬製の物に反射して眩しく金光に輝いてゐる。家並の彼方には比叡の高嶺が、これも夕陽を全山に浴びて山肌から谷の襞まで手に取る如く鮮かに見えてゐる。それにつゞいて如意嶽から南禪寺の山々が正面に見えて、少し下にさがつて知恩院の大きな甍が東山の中腹に見えてゐるあたりから洛東の人家が遠く廣がつてゐる方は模糊とした晩霞が、まるで墨繪の繪畫をぼかしたやうに横に棚曳いてゐるのが何ともいへない靜かな氣持ちをさそふのである。笠原は其等の物の象や色彩にぢつと見入りながら、「こんなに好い眺めであるのだが」と思つたが、又「こんな好い眺望をほしいまゝにしてゐながら、心の内はまるで魂を何處かに置き忘れたかのやうに物足りない」と思ひながら、尚もぢつと向うの山の方の色を眺め入つてゐると、一層いひやうもなく遣る瀬のない哀れさと、悲しさに涙が咽に詰まるやうな心地がした。冬枯れた河原の向うでは百姓が淺瀬の水に脚を浸しながら、せつせと白い大根を洗つてゐる。美しい京の女の脛の樣な眞白い大根の白さが、次第にたそがれの近づく川の畔に一入際立つて見えてゐる。

冷い夕風が川の上を渡つて北の方から音もなく吹いて來た。笠原は障子を閉めて座敷の中へ這入つた。

その晩も又うと〲としながら一夜を明して、翌日は一日引籠つて只管途方に暮れてゐたが女が、女が母親と二人でその夏まで二階借りをしてゐた安井の琴比羅の方の路地の中の住居の跡が何となく懷かしいやうな氣がしてならぬので、彼は、もう夕方近くなつてから散歩かた〲そつちの方へ出向いてみた。

女のことを思ひ起して懷しい追憶に耽るには、そつちの方に往つて見るのが一番よかつた。今急に女を訪ね出さうと、いくら焦つたところが仕方がない。せめてもと女の棲んでゐたあたりをさまようてみるのが多少の心遣りであつた。その女の二階借りをしてゐた處へは、彼も一と月ばかり女とゝもに寢起してゐた。商賣でお茶屋の座敷で會ふのとはまるで違つて、女の打解けた起居振舞ひに親しむことが出來た。そんなことを、あれこれと、いろ〲思ひ出してみるさへ堪へられない。……

で、安井の路地の中に入つていつて、もしやこの邊をうろうろしてゐたならば、又何かの手掛りになるやうなことを聞込みはせぬか、その方がまだ昨日のやうに當てもない油小路の街筋を探してみるよりも望があると思つてゐると、案の定ふとしたことからその近所の店屋の女房から敎へられて、女とその母親は、つい十日ばかり前に同じ安井の琴比羅の南門の方に引越していつたことが分つた。それからそこを探しあてゝ往くと、表札には女の姓とは違つた、名前を誌した、まだ白々しい木札を出してゐたが、戸外から訪ふ聲に、母親がぴたりと中から錠を下した潜り戸を開けて、胡散臭さうな顔をして出て來て、戸外に立つたまゝいきなり泣き言をいひながら、

「あの娘はそんな病氣どすさかい遠いとこの親類の農家へ預けて置いて、わたしは此處のうち、金持ちの婆さんが一人で隱居してゐやすとこへ手傳に賴まれて來てますのどす。」とばかりいつて、そこが本當の自分達のゐる處で、病氣してゐる娘も一緒にそこにゐるといふ實は明かさなかつた。先刻、もと居た處の路地の出口の女房がいつたのでは、此處へ引越したといふ。そして、その女房が附け足していつたのに母親が越して往く時、「今度は今までの同居とちがつて一人借りで氣兼ねがないから、どうぞ遊びに來ておくれやす。」とまで、いひ置いていつたといふ。

笠原は怪訝に思つて、その事を母親にいふと、彼女は、

「阿房らしい。あそこの米屋のおかみさん、なんいうてやすのやろ。」

と、一言の下に吐き出すやうにいつて、てんでそれを眞實とは思はせなかつた。女のことにかけては、彼女達母子のいふことを信じ易くなつてゐる笠原は、それもさうかと思つてそれ以上に疑はうとはしなかつた。それで彼は、やつぱり母親のいふとほり遠くの方の在所の親類へ預けられて、女はそこで靜かに保養してゐるのかとのみ思ひ込んだのであつた。そして、なるほど母親のいふとほり、女は神經の病氣であつてみれば、服藥の必要など餘りないので、たゞ閑靜な處にゐて、安靜してゐるのであらう、在所の親類とは何處の田舍であらう？

「どこです？ 在所とは。」いつて、母親に問うてみたが、彼女は何處だか口ごもりながら、

「ずつと遠いとこです」。とばかりで、それ以上にいはうとしない。かねて伊賀の上野には親類があると知つてゐたので、笠原は、

「伊賀ですか？」と訊くと、

「いや、違ひます。まだずつと他の遠いとこです。」

彼は、女の靜養してゐる處がたとへ百里あらうと、二百里あらうと或は千里萬里の外にあらうと、何處までゞも探ねていつて病み窶れてゐる彼女の容體を自分で行つて見て來なければとても此のまゝには氣が濟まなかつた。さうして哀傷的の感情に堪りかねた顏を向けて物をいふ笠原の顏色を見ては、さすがに母親もいくらか心を動かされたと思はれて、

「お醫者さんが誰れにも會はしてはならん。今大事なとこやさかいおいひやすので、友達が氣の毒がつて見舞うてやらうといふとくれやすのさへ、みんなお斷りいうてるやうな次第どすさかい、あんたはんにも、これまであの娘が深切にお世話になつたことは私もよう知つてますよつて、もし一寸病氣が良うなつたら會はせます。どうぞそれまでお待ちやしとくれ。」

母親がさういふので、笠原はます〳〵彼女のいふことを本眞(ほんま)と思ひ、やゝ心を落ち着けながら、

「ぢやどうぞさういふやうにして下さい。私も是非一度見舞ひに行きたいものです。……しかし、もつとゆつくりあなたとお話しゝたいと思ふのですが、お母さん一遍都合して私の居る宿まで來てくれませんか。」

さういふと、母親は、

「さうですなあ。そのうち一遍あんたはんのお宿へわたしいきます。」といふ。

笠原は、もう一刻の間も待てぬやうに氣は焦せりながら、

「ぢや、いつ來てくれます。私も少しも早く委しい樣子が聽きたいのですから。聽いたうへで、お母はん、病人はきつと私が引受けて癒しますよ。あんた、そんな、自分の大事な大事な一人娘がそんな情けない病氣になつてゐるのに、それを介抱をすることもならず、他人の病人の附添ひをしてゐるなんてことがあるものですか。ぜひ早く來て委しい譯を話して聽かして下さいよ。」

と、母親としての慈愛の足らぬのを小言をいふやうな、又世にも不仕合せなる彼等母子の者の境涯を悲み憫むやうな、そして又彼れ自身死よりも強く戀ひするその病める女に是非とも會はしてくれと哀願するやうな調子でいふのであつた。

すると母親は一寸考へるやうにして、

「ほんなら、明日は主人の御隱居さんの用事があつて、いけまへんけど、明後日かその次の日にあんたはんのお宿へ訪ねていきますよつて、どうぞ何處へも行かんと家にゐて待つとくれやす。」

母親が堅く約束するやうに、さういふので笠原は心の中で大いに勇みながら、母親が自分の宿に來てくれて、しんみりと話をすれば、きつと納得させて女にも會はせるやうにさせ自分の手に引取つて病氣をも癒してやる。たとひ精神に異狀を來してゐる者であらうとも、狂女であらうとも厭ふところではない。あの容姿(やうす)のすらりとした、色の蒼いほど白い、銀杏返へしに結つた鬢の毛の兩頰を隱すばかりに被ひかぶさつた。しつとりと打ち沈んだ物腰風俗、靜かな言葉のきゝやうそれは、どうしても電車や自動車が、加茂川の岸を走る今の世の女とは思はれなかつた。西鶴か近松の書いたものゝ中に出會はす昔の遊女をそのまゝの古風な京の女であつた。

笠原は、かねてから自分の求むる女は必ず賢母良妻でなければならぬとは思つてゐなかつた。自分が藝術三昧に深徹した生活をしようとする人間である以上は、殊更衒(てら)つてさうするのではなくとも、これは好きと心から打ち込んだ女であれば、その爲にどんな苦勞をするのも敢て辭するところではなかつた。彼は功利的打算から女を、たゞ調法な世帶道具として家の中へ備へ付けて置かうとは思はなかつた。

十年憂き苦界に勸めた遊女の成れの果て、狂女となつた女であつても可い、未だその方が幾人も〳〵子供を產みひろげる醜さよりも、どんなに好ましいか知れなかつた。

「えゝ、私どこへも行きやしません。宿にゐて待つてゐますから、ちがへずに來て下さい。」

母親は家の方が氣になるのか、笠原との立ち話しをいゝ加減に切り上げて早くいかうとするのを、彼は容易に立ち去りかねたやうに尙、

「お母はん、あんたえらい顏の色が惡い。あんたがまた此の上に患ふやうなことがあつては、それこそどうすることも出來ませんからよく氣をお付けなさい。」

笠原は慰めるやうにいふと、母親も、

「ほんなら、私もう急ぎますによつて、その話は又今度にします。あんたはんも寒いから之から早う去(い)んでお休みやす。」

もう三四日で十二月にとりかゝらうとする初冬の夕暮れ時、惡性な流行感冒をさそふやうな薄ら寒い風が冷々と路地の外を吹いてゐた。

笠原は母親と別れて、そこから東山線の電車通りの方に出て來たが、昨日一昨日まで雲を捉むやうな頼りない思ひをして京都の市中をさまよひ步いたのに比べれば、とにかく母親に行き會ふことが出來たので暗黑な失望の淵から明るいところへ甦つたやうな氣持ちになつたが、今の母親の、先の頃の自分に對する調子と打つて變り、何となく餘處々々しい素振りといひ。肝心の本人の居處も隱すやうにいひ明かさねば、

病氣の容體も委しい話をして聞かさない。そこに何か知ら鬱な雲が掩ひ被さつてゐるやうでいろ〱に氣を廻はして考へれば考へるほど不安で氣づかひで堪らない。それでも、まあ母親が二三日の中にゆつくり話しに來るといふから、何も斯もその時のことゝして、彼は希望の綱に取り付いたやうにほつとなつて、上の方の宿に戻つて來た。

その晩はそれでやゝ安心して眠ることが出來た。彼は寢ながらいろ〱なことを空想してみた。今に母親に會つて十分此方の心持ちを向うへ通じ、そして本人にも會ひ、行々自分の手で何なことをしても元の健康な體に本復さしてやりたいものだ自分の生命といへば取りも直さず彼女のほかにない。たゞ彼女を思つてゐることだけでも彼れには、それがどんなに樂しいものであつたか。彼は、女が今何處にどういふやうにして靜かに病を養うてゐるかといふやうなことをぢつと眼を瞑りながら樣々に空想を描いてみた。

その翌日はさういふ譯でいくらか安心もしたので、終日なるべくほかの事に氣をまぎらすやうにして過し、中一日置いた翌々日になつて、今日はまだ母親が訪ねて來ないだらうか、それとも或はやつて來るかも知れぬ。今日來るやうであれば向うでも此方に對して幾らか期待するところがあるからだ。さうなればこちらの心は母親に通じてゐる。何となく餘處餘處しくしてゐた彼女の胸奥を、こちらを向いて腹藏なく披瀝せしめることもできよう。しかし、今日もまた訪ねて來ぬやうであつてみれば病女の背後には何者かゞ潜んでゐるかも知れぬ。

笠原は、宿の四疊半の小座敷に、ぢつと火鉢に凭りかゝつて、あれこれと思ひ耽けつてゐると、何處にも出ないでさうしてゐるのが戶外に出るよりも苦しくつて、果てはさうしてゐるのが耐へられなくなつて來た。さうかと云つて、一昨日母親が「どこにも行かんと待つてとくれやす。」といつてゐたことを考へると、もし自分がうか〱外へ出歩いてゐる留守のところへ訪ねて來て、折角望みのある話しを持つて來た場合に、それを外づしてしまふやうなことがあつてもいけない。と、いろ〱思案の果て、宿へ一寸いひ置いて笠原は外に出た。そして、外へ出さへすれば、ちやうど忠兵衞が、淡路町の自分の內から閾を外に跨ぐが最後「出馴れし足の癖になり、心は北へゆく〱と思ひながらも身は南」の文句のとほり、笠原は東三本木から丸太町の大通りに出ると、しばらくそこに突立つて、母親らしい者の姿が見えはせぬかと電車から降りる客に眼を留めてゐたが、たうとう自分もその次の電車に乘つて、又、行き馴れた安井北門の方へ行つてみた。

すると、一昨日はじめて訪ねて來た時には、入口の上に飯田と書いて出してゐた標札を、いつの間にかもう取りはづし

てしまひ、いくら潜戶を引張つてみても內から堅く錠をおろしてゐると思はれて開かない。聲を掛けても返辭もない。入口の左の出窓に取り付いて、そつと家の中を覗くやうにして見たが人の氣配もせぬ。

さうしてゐるとすぐその左隣の若いおかみが顏を出して來て、

「あの、此處の家もう誰れもゐやはりやしまへんのどつせ。留守どす。」といふ。

そこは三軒建ち平家づくりの棟割り長屋になつてゐるが、小綺麗な石疊みにした路地の中で、祇園町に近い一廓を成してゐるだけに、東京で云つたならば便利の點から云つても何から云つても一寸濱町か築地とでもいふべき意氣な場處であつた。

笠原は、餘處の家をさうして覗いて見てゐるところを、不意に橫から出て來て聲を掛けられたので吃驚しながら、二三步入口から後に退り、

「あゝ、さうですか。ぢや此の間まで此處に手傳ひに來てゐると申してゐました婆さんは、もう居りませんでせうか？」

「えゝ、あのお婆さんは、こゝの御主人が病院へ入らはりましたよつて、手があいたさかい暇を取つて何處や知らん遠い處へ行くたら云うてはりました。」

笠原は品の好いトンビ姿で、そこに突立つて頻りに小頸を傾けながら、

「あゝさうですか。遠くとは何處へ行つたらう。」と獨言をいつて、

「そのほか何か委しい事をあなたはご存じでございませんか。」と若いおかみに訊くと、

「えゝ別に委しいことて知りまへんけど、あんたはん笠原さんいふお方はんとちがひますか。」

「えゝ、私が、その笠原と申す者ですが、何かあの婆さんがいひ置きはしませんでしたか。」

「えゝ、いうてはりました。笠原さんいふお人が見えたら、もう自分は此處に居らんさかい、委しい話は三條大宮南入る處に川田といふお菓子屋さんがあるよつて、そこが親類やさかい、そこにいてるよつて、どうぞあんたはんにも其處へ來てくれるやうに、ちうてはりました。」

「あゝさうですか。」と、笠原は心の中で思ふやう。ぢや、幾ら待つてゐても來なかつたのだ。しかし一昨日一旦あゝいつて往くといつて約束をして置きながら、今來てみるともう此處に居なくなつてゐるといつたり、どうも、拔け〱と、取留めのないことをいふところによつてみると、どうも母親の誠意のほどが疑はしい。

「では之から早速いつてみます。……三條大宮南入つた處に在る川田といふお菓子屋ですね？。」

ともう一度念を押して確めた。すると若いおかみは、

「え〻そない云うてはりました」

笠原はそれから、すぐその足で又電車に乘り三條大宮へ駈け付けていつた。

四條の大宮で電車を降りて、そこから場末の、薄暗い寂しい大宮の通りを三條通りの方へ上つて行きながら兩側の軒燈を見い〳〵お菓子屋を氣を付けて行つたが、道が三條通りのや〻明るい處まで出て來てもそれと思ふ菓子屋らしい家は見付からない。たゞ一軒間口の廣い大きな米穀問屋に川田といふのがあつたが、川田といふだけは同じでも、そこではないらしい。笠原は脚の疲れるのも厭はず、心を空にして、もしや先刻のあの若いおかみの聞きちがへではあるまいかと思つて、三條通大宮南へ入るといつたのを、北へ往つて見たり、西へいつたり、東へ出たり、十字街を四方に往きつ戻りつして川田といふお菓屋を探してみたが更にそれらしい菓子屋はない。菓子屋は二三軒あるにはあつたが皆な姓が違つてゐる。とある一軒の菓子屋に入つて、隣家のおかみに先つき聞いたとほりのことをいつて訊ねたが、そんな菓子屋は此の邊に知らぬといふ。笠原は、折角一昨日母親の居る處を突き留めてやつと少し手が〻りが付いたと思つてゐたのに又もとの五里霧中に返つてしまつたので、そんなに駈け歩いて體の疲れよりも先づ失望の爲に氣落ちがして、胸はおろ〳〵しながら、最寄りの交番にいつて二三ヶ處も訊ねて見たが、何處の交番でも、分らぬといふ。笠原はそれで又、御苦勞さまにも〻う一度四條大宮から電車に乘つて東山線安井北門へ引返して路地の中に入つてゆき、隣家のおかみに、先刻聞いたのでは、いくら探しても分らない。間違へではあるまいかといつて訊き直すと、おかみはあれから後になつて自分でもいひ違へであつたことに氣が付いてゐたと思はれて、

「あッ、えらい濟まんことどした。川田やおへなんだ。川瀨どした。三條大宮西へ入る川瀨といふ、あんも屋はんどす。」と、氣の毒さうに笑ひながら、詫びていふ。

笠原は躍氣になつてゐる際とて、腹が立つたが、怒られもせず、

「あッ、あんも屋——ぢや餅屋ですか。ぢや餅屋ですか。そして、あなたは先つき三條大宮南へ入るといつて敎へて下すつたので、私は幾ら菓子を探しても分りませんでした。」

おかみは、いよ〳〵笑止がり、

「あッ、南へ入るといひましたかいなあ。えらい濟まんこつとした。三條大宮西へ入る、川瀨さんちう餅屋さんがあのお婆さんの弟さんかいな、……御親類やさうにおす。」

笠原は、それで又勇み出し、

「え〻〳〵餅菓子屋の兄弟が大宮の方にあるといふことは、かねてから聞いて知つてゐますから、そこでせう。どうも度

度お世話樣でした今度は分りませう。」

「ほんまに、えらいお氣の毒さんどした。」隣家のおかみの繰返していつて氣の毒がるのを背後に聞きながら、その足で直ぐ引返へして三條大宮西へ入つた處の餅菓子屋を探ねていつた。三條大宮といふから先つきの四つ辻を少し西に入つたばかりの處かと思つて、たづねていくと、暫く場末の盛り場らしい店屋のつゞいた處があつて、それから西へ行くほど町筋はだん〳〵火の消えたやうに寂れてゐる。兩側にある店屋といふ店屋はどれを見ても、往來の塵埃を浴びたやうな、電燈の影さへ薄暗い見すぼらしい小家ばかりであつたが、大宮通りといつても、もうすこしで千本通りへ出ようとする處の北に一軒低い軒の下に大福餅などを燒いて賣つてゐる、餅屋といへば、いはれるやうな薄穢い小さな家であつた。

笠原は、ぎよつとしたやうに往來の中央に立ち止まり、「これが、かねてうす〳〵聞いてゐる母親の弟といふのがやつてゐる餅菓子屋であるか。」と、一時はあまりにその店の見すぼらしいのに、いさ〻か驚いたが、しかしそれは彼の考へちがひであつた。たとひ異腹の姉弟にしても、現在の姉の娘がさういふ卑しい境涯に身を沈めるのを見てゐて、どうともすることの出來ないやうな親戚が、とても豐かな生計を立て〻ゐる道理はないのであつた。笠原は、どう思つても、もう此處よりほかにそれらしい家は見付からぬので、往來の中央からついとその大福餅屋の薄暗い軒前を覗いていつて、それとなく標札を見ると、果して川瀨猪之吉と書いてある。

「いよ〳〵此處だ。」と思ひながら、入口の處から、

「今晩は。」と聲を掛けて、土間に入つた。

土間はがらんとしてゐて、荒土のま〻を自然に人の足で踏み固めた庭の中がでこぼこしてゐた。入口の左手の店頭に汚いガラス蓋の菓子箱が少許並べてあつて、その中に色粉で染めた青だの赤だの、不味さうな色をした餅菓子が並べてある。土間の奥の突當りの壁際に添うて一間ほどの處に一尺幅ほどの框が出來てゐて、それに疊を取付け、中ほどに火鉢を一つ置いて、通りすがりの客が入つてきてそこに腰を掛けて大福餅の燒いたのや、しる粉を食べるやうになつてゐる。

土間の正面は座敷一杯に添うて一間半ばかりの長さに三尺幅ほどの板敷になつてゐて、そこへも大きな火鉢を置いてゐる。その火鉢を挾んで板敷に腰を掛けてゐた四十五六の餅菓子屋の主人夫婦は、黑いトンビを着流した、瘦ぎすな、色の蒼白い、何處やら風采の卑からぬ人間が、「今晩は。」といつて、胡亂さうに眼をきよろつかせながら這入つて來たので、ふつとそつちを見返りながら、丁寧に、

「おいでやす。」と、いつもの客にいふとほりに聲を掛けたが、一寸見たその様子がどうも餅菓子を食べに這入つて來た

お客とは思はれなかつた。それで、主人の川瀨猪之吉は、まじまじと眼をさせて、何か樣子ありげな客の方を見守つてゐると、笠原は土間に突立つたまゝ何か、ちよつといひにくさうにしてゐたが、やがて、その外見には似ぬ、極めて慇懃な調子の東京言葉で、

「あの、一寸物をお訊ね申しますが、此方が川瀨猪之吉さんと仰有るお宅ですか。」といふ。

主人夫婦は、ぢつと、客の顏から眼を放さずに何をいひ出すのであらうかと思つてゐると、さういつたので、彼等は一度に聲をそろへて、

「へえ、手前どもが川瀨猪之吉でござりますが、何か……」といひさして、笠原がいはうとすることを氣がゝりさうに訊ねた。

笠原は又、やゝ暫く口の内で、いひにくさうに澱んでゐたが、やがて先と同じやうに丁寧な口の利きやうで、

「突然にこちらへお伺ひして甚だお邪魔を致しますが……。」

「へゝ、いや。」

「あの、私は笠原と申す者でございますが、つい先頃まで祇園町に居りました園田といふのは此方のお宅と御親類のやうに聞いてゐましたが、そのとほりでございますか。」

さういふと主人は、變に顏を曇らして、

「へえ、あの人は一寸知つて居りますが……」と、さう近い仲でもないやうにいふ。

「園田の母親とあなたとは御兄弟のやうに聞いて居りますが……」

「へえ、まあそんなものでござりますが、あの人は私共とは腹が異うて居ります。」

主人は、園田の話になつてからやゝ冷淡な調子で、そんな人間に親類といはれるのをさも厭うてゐるやうである。笠原はその樣子を見て取ると、急に氣を變へたやうに、

「いや、どういふ御關係か、それを强ひておたづね申す譯でもありませんが、私はあの園田の娘が祇園町で商賣をしてゐた時分からの馴染みでございまして……こんな事をお話しするのも、えらい面目もない譯ですが……」

さういふと、主人夫婦は、又丁寧な言葉で二人とも〴〵、

「あゝ左樣でござりますか。いえ、どう仕りまして。――いろいろお世話さまになりましたことでござりませう。」と、頭を下げながら挨拶をする。

「それで、あの娘が此度病氣になつて、商賣を廢めましたさうでした、そのことに就いて一寸お訊き申したいと思つて、わざ〳〵上つたのですが、母親と一昨日一寸會つた時に又二三日の中にゆつくり私の宿へ訪ねて來てもらつて委しい樣子を聞かしてもらふ約束をして置いたのですが、今日つい先刻あのお母さんが、何でも何處かの金持の御隱居さんの病氣の附添ひとかに雇はれてゐるといふ家へ訪ねていきますと、もう其處には居ない。それで三條大宮の川瀨猪之吉さんといふ餅菓子屋さんが親類だから、そこに身を寄せてもらつてゐる。だからそちらへ話しに來てもらひたいと、その隱居さんとかのゐるといふ、すぐ隣家のおかみさんに、私が訪ねて來たら、さう傳言をしてくれといひ置いてお母さんは何處かへ行つたといふのです。それで私は、それを聞くとすぐその足で此方へ伺つたのですが、そのお母さんはまだ、こちらへは見えませんか。」

笠原が、よく話の筋道の解るやうに、はつきりした言葉でさういふと、主人は、何か知ら眉根に小皺を寄せて仕舞まで聽いてゐたが、

「又何いふてんのや！」と、つぶやくやうに獨言をいつて、笠原に向つては、

「左樣でごはりますか、おほけに御苦勞さんでごはります。」といつて、今度は夫婦で、顏を見合せて、

「どないしたんやろ。隱居さんの附添ひて。聽かんなあ。」と、何か云つてゐたが、更に又笠原の方を向いて、

「まだ此方へは一向來まへんどすが……」

「さうですか。あなたの方へ行つて待つてゐるから來てくれと、隣家へいひ置いたのださうですが……」

笠原はさういひながら、そこに尙突立つて一寸途法に暮れたやうにしてゐると、餅菓子屋の女房は亭主に向つて、

「こゝへ來やはるといひ置いたんなら、來やはるつもりかも知れん。暫く待つてゝもろてみたら、どうやろ。」

「うむ、それでもえゝ。」小心者らしい主人は據處（よんどこ）なさゝうにいつた。

「ほんなら、まあ、どうぞお上りやす。えらい、もうむさくるしい處でござりまけど。」といつて、女房は板の間を立つて障子の奥に案內した。主人も、

「どうぞ、さうおしやして。まあお上りやす。」といつて、上に通るやうに薦める。

笠原は、母親の來るのを待つのも待つであるが、此の叔父にも此の間から是非會つて話したいと思つてゐた處である。丁度好い幸いと、

「ぢや、暫くの間お邪魔になります。」と、笠原は上にあがつた。そこは店の間を障子で仕切つた三疊ばかりの、座敷の次の間で、そこへ女房は火鉢に火を入れたり坐蒲團をとつて敷いたりした。主人も土間から上つて來て火鉢の前に坐つた。笠原はあまりじろ〳〵そこらを見廻はすのはいけないと思つて、そつと氣の付かぬ振りでなほよく見ると、古く煤けた家の樣子といひ、汚れた疊といひ、子供達はもう寐てゐるか何處か外へ出てゐるのか、三四人の子供はあるらしく、一家五六人の家族が微かな活計を立てゝゐる家と思はれた。土間か

ら折れ曲がつてずつと奥の方へとつゞいてゐる薄暗い中庭の方には餅をつく大きな石臼や杵などが置いてある。笠原は、「お俊傳兵衞」の芝居で見るお俊の親元のことをふつと思ひくらべてみたが、やつぱり芝居の舞臺で見る貧しい佗住居の方が心地よかつた。

女房は、店のガラス箱の中から不味さうな餅菓子をガラスの菓子器に取つて來て笠原に勸めながら、

「こんなもん、お上りやすかどや知りまへんけど、どうぞ宜しおしたらお摘みやしとくれやす。もう、わたしとこはこない、お見やすとほりの貧乏暮しどすよつて、えらいお恥かしいこつとす。：：河東の義姉さん（加茂川の東部意氣筋の者の多く住む處）達のやうな氣には、こちら田舍者はようなれまへんよつて。あんたはんも、こんなとこお呆れやしたやろ。」

彼女は、廓氣質の園田母子の者にあて擦するやうに、さういふのであつたが、四十恰好と見える彼女は成程堅氣な小商人の女房らしく、效々しい黑飛白の筒袖の上つ張りを着てゐる。

笠原は、女房が卑下するのを打消すやうに、

「いや、飛んでもない。貧乏といへば、私共とて御同樣です。いづれも貧乏でない者の娘があんな處へ身を沈める道理もないのですから。：：どうかして、此方も固より有り餘る金を積んでゐる譯でもないが、いろ〲委しい事情を聽いてみると、まことに氣の毒な境遇と思つたものですから、及ばずながら助力して上げたいと思つて隨分長い間骨を折つたのですが、私も今申す貧乏の爲に捗々しく埒の明かないうちに、たうとうそんな病氣になつてしまつて。：：私にしても今となつては一向世話効ひのなかつたのが實に殘念なのです。」

笠原は、今にも泣き出しさうな苦笑をしながら云つた。

主人は、始終眞面目に顏を曇らせながら聽いてゐたが、誠意の籠つた調子で、

「あゝ左樣でござりますか。今もこれが申しますとほり、あの人達のすることは、手前どもとは全く性が合ひまへんので、もう成るだけ往來はせんことにして居りますくらゐで、いづれ、あんたはんにも御迷惑を掛けたやらう思うてゐます。それは私からも改めてお禮を申します。」と、實直さうな主人は幾たびとなく頭を下げた。

「いや、そんな改まつたお禮には少しも及びませんが、そんな譯で、私が、あの母子の人達に出來るだけに助力をしたのは無論氣の毒な人達だと思つたところもありますが、：：まあ、貴下がたの前ですが、あけすけに申せば、もと〲私に園田の娘が氣に入つたからで：：」

笠原がさういつて話しつゞける要處々々で、自分も火鉢の處に來て坐つた女房もともに亭主と聲を合はしながら、

「へえ〲、もうそれは何方樣かて、たゞ何ともないでお金

を貢ぐ人もおまへんによつて：：へえへえ御尤もでごはります。」と、いひながら彼の長い話を聽いてゐた。

笠原は又言葉をつゞけ、

「それでゞす。いづれ、あゝいふ商賣をしてゐた者ですから幾ら此方で自分ひとりだけが對手に好かれてゐるつもりでゐても、私のほかにも、いろんな男もあるし、多勢のお客もあつたことでありますから、私一人が今日何だ斯だといつて、此方までこんな話を持つて來るのは、まあ、普通世間の人の眼から見たならば阿房とも馬鹿ともいはれませうが、しかし私自身にして見ますれば、固より厭と思ふ女に何も溝川へ棄てるやうに有り餘りもせぬ金を仕送る筈もなく、本人と堅い約束のうへで、行々は其方へ身を寄せよう、私の方でも又母子の者を引受け一生困らせまいといふことで金も貢いでゐたわけなので：：。それで今度病氣について廢業をしたことも、私が一と月ばかり京都に居らなかつた間に出來たことでそれもつい四五日前にはじめてそれと氣付いたやうな次第で：：」

餅菓子屋の主人は、へえ〲と默つて聽いてゐたが、その邊で、どこの菓子屋にもよくある前齒の拔けた口許を、ぱつと開けて笠原の一生懸命の話に腰の折れるやうな笑ひやうをしながら、

「あんたはんも狐と堅い約束をおしやした。あんなもん狐みたいなものどす。あんたはん、それを本眞におしやしたら、あきません。」といつて、齒のない口を開けて又笑つた。

しかし、笠原は笑ひどころではなかつた。それどころではない、眞氣になつて、よく聽いてもらはうと思つて話してゐる半ばを、そんなことをいつたので、腹の中でひどく勃然となつたが、それをぢつと押へながら、彼は又語をつゞけた。

「それで、先逹つて病氣について廢める時には貴方が花見小路の屋形へ話しを付けにおいでになつたのださうですが、向うで、叔父さんが來て連れて歸つたといつてゐました。」彼はさういひながら主人の顏をぢつと見た。

すると主人は、その生まれ付色の淺黑い陰氣な顏を一層暗くして、

「えゝ、それは話を付ける爲にいたのでもおまへんけど：：もう話はあちらで定めた後やつたのどす。二人とも女ばかりでは話に重味が付かんよつて、私：：がまあ親類なら親類といはれても、それは構ひまへんけど：：わたしに一寸來てもらひたいと向うの井河の家の女主人がいふもんですよつて、顏を出すには出しましたけど、私共ではあの母子の事では之れまでも度々そんなことで迷惑を掛けられて、困まつてゐるのどす。」

主人がさも〲もうあの母子の事についての、さういふ込入つた話は聞きたくもない、係り合ひたくもない、といふやうにいふと、傍に聽いてゐた女房もともに口を添へて、

「ほんまどつせ。もう、あの園田の姉さん達には私とこでも散々手焼いてゐますのどす。あんたはんはわたし共とちごてお金のたんとお有りやすお方でござりますやろけど、あの人達のやうにお金の難有いこと知らん人におかゝりやしたらもう仕様がござりまへん。」

　笠原はさういはれて今度は女房の方の顔を見ながら、

「はあ!……それでは何ですか、お母さんは金づかひなどの荒い方ですか。」

　笠原は、四五年前から知つてゐる彼女の母親は、娘を祇園町に身を沈めさせてゐても見たところ根からの廓者でもなく、貧しい生活をこそして居れ、堅氣な、たしかな人間とばかり思込んでゐたのである彼がその娘に打ち込んで長い間金を貢いでゐたのも、無論笠原一流の審美的要求からその女の容姿に愛着したからではあるが、一つは彼等母子の性質が飽くまでも、さういふ泥水稼業に身を落してゐるに似ず物堅い人間と認めたからであつた。

「そりやあ、あのお母さん、よう知らん人さんが一寸見やしたんでは、風からしてあんな、ちよつとも粧らん方どすさかい、堅氣の人のやうどすけれど、そりや鄙根性の強い人どつせ。私ら、内でもよう云うてゐますのどす。洛東の人は畏うて、よう附合ひせんいうてんのどす。」

　笠原は、案外のやうに眼を見張りながら、なるほど、さういへば、今年の五月頃女母子が祇園町の片ほとりに間借り住居をしてゐる時分、笠原は、そこに暫く泊まつてゐる間に、女から一寸、母親のさういふ氣質をほのめかされたことを記憶してゐる。

「へえ、なるほどあのお母さんは一寸欲に轉びさうなんですが、娘はあんな商賣こそしてゐたが、そんな卑しい氣質の女とも思ひませんが。」

「それはさうでつせうけど、お柳さんかて、やつぱり金づかひは荒い方どす。」

　暫く口を緘んでゐた亭主も、女房のさういふ方を目で示して、

「これが　いつも、それで私に不足をいうてゐるのどす。私もこれに對して氣の毒で耐りまへんのどす。」

　女房は更に言葉をつゞけて、

「お柳さんが、あんな處へ入つたのかて、はじめ私のとこでは一寸も知らしまへなんだ。わたしとこは、此のとほり、もう貧乏暮しで、やう〳〵、その日の露命を繋いでゐるやうな次第どすけど、あんな、こと根つから性に合ひませんので、三年か四年往來もせん間にお柳さんと姉さんとの二人の考だけでおしやしたとゞす。」といふ。亭主もそれにつれて、「ちよつとも私達知りまへなんだ。一昨年やつたか、そのも一つ前やつたかいな、お柳の次ぎにも一人弟がございまして、それが病氣で死んだ時に洛東から知らして來たので、何や、今度は東の方が手紙が來たというて、三年か四年ぶりに此方から向うへ往つて、はじめてお柳があんなことをしてるのもその時知つたのどす。」

　亭主の話すところによると、お柳は祇園町に身を沈める前にも、上京の方のある織物問屋の旦那の世話になつてゐたこともあつた。――それは笠原も女母子の者から機にふれて聞いたこともあつたが――そして、お柳にはまだ姉が一人あつた。それは五六年前に死んだがそれも初は養女といふことで何處か小金のある家へ遣つてゐたのであるが、その實あんまり香ばしくないことをしてゐたらしい口吻である。そして、母親がたび〳〵向うの家へ無心にゆくので終には向うでも愛想を盡かしてたうとう母親と言ひ合ひをした擧句娘を連れて戻り、娘はそれから間もなく病氣をして死んでしまつたのである。

「それで、一方そんなことをしてゐながら、たとへば今までのところで五圓もろつてゐても、まだほかゝら拾圓でも遣ろといふ者があると、――今度はそつちへ傾かうかちうやうなものどす。……私もう、あんた方のやうな人と附合ひせんというて何遍あの母親といひ合ひしたか知れまへん。三四年往來せなんだのも、やつぱりそんなことが原因どした。お柳の弟が死んだ時知らさなんだら往きやしまへん。あんたはんも、あの母子狐に騙されやした。」

　亭主はさういつて、齒の抜けた口を大きく開けて馬鹿にしたやうに笑つた。

「誰かて、あんたはん、皆な自分の今日に追はれて氣が許されしまへんがな。わたし處かて四人も五人も多勢の子供はごはりますし、家内のことでも、えゝ加減困つてゐますのに、今までにかて、もうどのくらゐ洛東の姉さん達のお蔭で災難被てるか知れまへん。」

　女房と亭主とは代る〳〵お柳母子についての愚癡やら非難やらをいふのであつた。亭主は、

「私もこれに時々それをいひ出されると、實に頭があがりまへんのどす。」といつて、又ちよつと氣を變へたやうに、「實は、あんたはんの事も、私知らんこともおへん。此の間お柳の身の上の事について一寸耳に入れて置いてもらひたいことがあるさかい、來てくれいふて、花見小路のもとの主人の處から迎へに來た時にも、これが洛東の姉の事で難儀が掛るのかいなあいうて、愚癡いひますけど、私も狐がいふて來たんやつたら往くつもりはおへなんだけど、もとの主人のいうて來やはつたことゞしたよつて、たび〳〵えゝ親類の交際で困るけど、一度は世話になつたお禮もいうとかにやならんし思うていて來ました。その時あちらの女主人がいろ〳〵話をして聞かしました。まだこんな手紙も來てるいうて向うはお

柳の處へ持つていつてやつてくれいふことやつたか知れまへんが、私もその時一寸主人に胸糞の惡いことがごはしたよつて、すぐそこで引裂いて火鉢にくべて燒いてしまひました。何でも四通か五通あつたやうに思ひます。その中にあんたはんに今お目にかゝつて思ひ出しました。たしか笠原さんいふ名があつたのを覺えてゐます。しかし、あんたはんも、かうして一寸お見受け申しましたところ、身分のおへん方でもござりまへんやろ。もうあんな狐に構はんと置きやす。とてもあんなもんにお係りやしたら、あきまへんで。」

「ほんまにさうどつせ。えらい御災難や。」

女房もともに夫婦は、心から笠原の迷ひを覺ますやうに忠告するのであつたが、彼の女に對する愛執はそれ位で容易に諦められなかつた。が、しかし、彼がその女をはじめて知つて以來四五年に亙る長い歳月の間ずつと幻影に描いて、美しく眺めてゐた女の當對はその一と晩の叔父夫婦との會話によつて、大半幻影を破壞されたやうな氣がしたことは事實であつた。叔父といふ男は、特に笠原に對して深切氣もなかつたかも知れぬが、それとゝもに格別惡意を持つてゐる筈も無論なかつた。宵から二時間あまりも笠原がそこに打坐つて綿々と話し込んでゐる間に感じたところでは、彼はたゞ、お上手もいはなければ嘘も吐かぬ正直一途の人間であつた。そのいふことは確かに悉く眞實であつたにちがひない。笠原に對して格別に深切氣もないくらゐであつたから、お柳母子の者を事實以上に有る事無いこと誇張して惡口をいひ、笠原の覺醒もしないし、又その反對に茶屋者の口吻まねて、仲を取り做し笠原の心を和ぐやうに母子の者を決して善くいはうともしない。亭主のいふことは悉く信じてよいと彼は思つた。そしてそれを信じてよいとすればお柳といひ又その母親はお柳以上に貪らんで、無智で、良心といふものゝ微塵もない勝手者であつた。さういふ貧民階級の徒に多く見る不良性の母親であるといふことが、ひどく笠原の胸に嫌厭を目覺ましたことゝもに、尙ほいろ〳〵の話の末十年ばかり前に亡くなつたお柳の父親の素性なども今まで笠原が幻影に描いて美しく眺めてゐた女に對する愛着に苦々しい毒汁を注いだやうな幻滅を感じさせたのであつた。

叔父は、その口振りによつて察しても、少しの飾り氣もなく又隱すところもなく話した。

「わたしも、ずつと古い時分のことは、此方が、まだ子供どしたよつて委しいことは、よう知りまへんけど、あの人は母親が早う死んだもんどすよつて、南山城の方へ何か少しの手づるがあつて、里子に遣られたものらしうおす。そして、田舍の百姓の處で成人して、お柳の父親とは出來合ひで夫婦になつたものどす。はゝゝ、えらい古いこつて、つまらん話どすけど、」といつて、餅菓子屋の主人は、又齒の拔けた口を大き

く開いて人を馬鹿にしたやうに笑つた。

「ほして、若い時分には田舍で宮相撲を取つて居つたのどす。」

それを聽いて、笠原は、心の中で、「あの、どこから見てもちよつと昔の西鶴の草紙などにあるやうな美しい、京育ちの女が、さういふ父親の子に產まれたのかと思ふと、それをはじめて聽くだけに、輕い驚きとゝもに不思議の感に打たれたのであつた。

醜い裏面の事を洗ひ浚ひ曝け出したやうな叔父達の話を聽いて、笠原は、今まで美しい幻に描いて樂しく眺めてゐた夢の破れたやうな失望とも何とも名狀し難い索然たる心持がしたが、それでも此のまゝには、どうしても思ひ斷つことが出來なかつた。

やがて女房は思ひ出したやうに、

「洛東の義姉さん、來やはりまへんなあ。」といふと、主人は又人を小馬鹿にしたやうに齒のない口を開けて、笑ひながら、

「狐が、また人を騙しよつたはゝゝゝ。今頃又何處か、うろつきよるやろ。」

笠原はもう先刻から、長く話込んで邪魔をしてゐることは自分でも氣が付いてゐる風をしてゐたが、「隨分もう遲いでせう。」と、いひつゝ帶の間から時計を出して見て、「やあ、もう九時半になる。」と獨り言のやうに言つた。六時過ぎからものゝ三時間も打坐つてゐたが、母親は遂にやつて來さうになかつた。

「それで、一體今何處に居るのでせう?」と、笠原は一寸改まつたやうに訊ねたが、夫婦は實際母子が現在の居處を、何處にゐるのか知らぬらしく、女房は、

「さあ、何處に居やはるのかなあ、此間一寸來やはつた時には近いうち處を變へるやうにいうてはつたよつて、もうお變りやしたかなあ。」と獨言のやうにいつてゐた。それが、二三日前に笠原のはじめて探しあてゝ行つた、そして先刻も二度も往つたり來たりした、その路地の中の家へ移つたことゝ、すつかり話が合ふのであつたが、そこまで母親に巧く一杯も二杯も喰はされてゐても正直な笠原は、向うから云つたことを、もう信じ切つてゐるので、今餅菓子屋の女房がさういつたことゝ、思ひ合はしてみるといふことに少しも氣が付かなかつた。勿論其家の夫婦でも彼等母子には、觸らぬ神に祟りなしで、なるたけ自分の方から近寄らぬやうにしてゐるので、今度變つた處をまだ知つてゐないといふのが眞實であつた。

笠原はそれで、もう自分から心に定めてしまつて、此の間母親の云つたとほりに、どんな遠い處へ病女は行つて靜養してゐるであらうかと、その遠い處の有樣を空想に思ひ描いて

頻りに考へ耽つてゐたすると、亭主は又ほつと思ひ出したやうに、

「この間來よつた時には、そんな田舍の百姓家へ預けるちうやうなことはいひまへなんだが、やつぱり此の腦が惡いものどすさかい祈禱者に伴れられて方々の高い山にお籠りをして行をするちうやうなことはいうてゐました。」

笠原は、母子の者の迷信に呆れたやうな顏をして、

「はあ！　祈禱者に伴れられて行をする。」

尙ほ叔父の話するところによると、母子の者は金光樣の熱心なる信者で、その金光樣の敎師に伴れられて、同じやうな頭の惡かつたり心に心配のある連中が打ち連れて一緖に京都近郊の行場々々をあちらに七日、此方に五日といふやうに參籠して祈禱をして山から山へ渡り步くのであるといふ。そして、その行場といふのは、山科の先の笠取山の續きである牛の尾山、南禪寺の駒ヶ嶽、鞍馬の奧などにさういふ處があつた。

笠原は、これから段々氣候が嚴冬に向はうとする十一月の末、しかも流行の惡性感冒が原因でこんな精神に故障を來してゐる纎弱い病女をそんな鞍馬の奧だの笠取山などに伴れて行つてどうするといふのだらうと、ほと〳〵手の附けやうのない迷信の恐ろしさ厭はしさと、又そんな迷信の虜囚となつてゐる女母子の者の無智蒙昧とを憫み傷む心持に耐へられなかつた。それで、

「へえ、そんな病人を。實に呆れた迷信だなあ」。と繰返し獨り言のやうにいつてゐると、主人は又人を嘲つたやうな薄笑ひを口に浮べながら、それでも神樣のことであるから幾らか憚るやうに、

「金光樣にどんな難有いことがありますか、……そりやまあ、私どもにはよう分りまへんけれど、信心してればお陰もおすやろけど、あの金光樣に信心するのもなか〳〵お金が掛りますよつて、ひや……」と皮肉な高笑ひをした。

笠原も仕方なく、それに連れて苦笑しながら、

「えゝ、あのおつ母さんは隨分金光樣に凝り固まつてゐるやうですな。」

といひながら、今年の五月から六月彼が、一と月餘り女の家に居た時分、母親が、傍から一寸見たところでは、之れも精神に異狀でもある者でなければせぬやうな、まるで憑き物でもしてゐるかと思はれる態度で、床の間に御簾を垂れて祀つてある金光樣の前に跪いて、何やら祈を上げてゐるのを、彼は妙なことをすると思つて見てゐたのであつた。笠原の一と〻ほりならぬ、理性や趣味の上の嚴肅な潔癖からは、たつた一事、そんなことをする母親のあるだけでも、大抵、どんなに好いてゐる女であつても愛想が盡きるのであるが、それでも、その女だけは、それくらゐのことでは戀が冷めなかつ

た。

「しかし、娘はあれほどでもありますまい。」といふと、

「そりや母親ほどではないか知りまへんけど、お柳かてなかなか信心屋の方です。」

「さうですかなあ。」と笠原はいつてゐた。

「それぢやちと可笑しい病氣といふのも本當だか何だか知れやしませんな。」

さういふと、女房はそれをば否定して、

「いや、それは本眞です。お柳さん何日でも內來やはつた時には、姉さん每度えらいお世話になりますいうて、わたし等にでも丁寧に挨拶おしやすのに、この間來やはつた時には、何や知らん狐でも憑いたかちうやうに、かう、つうんと、頸を眞直に突き立つたやうにして、お母はんとその祈禱者に伴れられて來やはつたきり、自分では一と口も口をおきゝやしまへんなんだ。：　あの時眼もえらい怖いこはい眼えしてゐやした」

笠原は、その話をぢつと聽いてゐて、

「はゝあ、ぢや。それがやつぱり信心の凝り固まりからも一層そんな工合になつたのだな。」

さういふと、亭主も、

「病氣かて、本當の病はそんな仰山にいふほど惡いのでもないのどすなあ。」

それから笠原も、いつまで其處に待つてゐても母親はやつて來さうにないので

「これは、どうも、初めてこんな話を持つて伺ひまして、大變にお邪魔をいたしました。いろ〳〵御深切な御注意も承つて難有うぞんじますが、つまり今まで私の方から貢いだ金のことを、どうの、かうのと申す譯ぢやありませんが、それだけの金を仕送るには此方でも、なか〳〵一と通りや二通りの苦心でなかつた、それだけの苦心をしたといふのは、やつぱり本人が欲しいからのことですから、どうぞ、その邊をよく御承知下さつて、一つ貴方がたお二人の方から、いづれそのうち母親なり本人なりにお會ひになりませうから、母子の者が納得のゆくやうに御相談をねがひます。」

笠原がさういふと、亭主は仕方なさゝうに、

「えゝ、まあ。：：私はもう、あんなもんおやめやした方がえゝやうに思ひますけど、あんたはんの御志だけは十分傳へておきます。」と、淺黑い、燻んだ顏を眞面目にして、「さうですけど、狐が一向やつて來よりまへんよつて。私の方から、もう、こんな話に出て往くちうやうなことは、之はあんたはんに對してゞはおへんけど、それはようしまへんさかい。どうぞ、それだけ承知しといておくれやしたら、その內會ふやうなことがおしたら、それは必ず傳へるだけは傳へて置きます。…さういうても、これきり又二年立つて會ふやら、三

年後に會ふやら、わからしまへん。」亭主は皮肉なことをいふ。

笠原は又仕方なく苦笑して、

「えゝ、まあ、そんなこともありますまいが、何分宜敷くお頼み申します。」といつて、それから「私は今、かういふ處に居りますから。」と、宿の處を名刺に書いて出した。

女房も傍から口を添へて、

「ほんまに、あのお母はん、又すぐにも來やはるやうにいふといやして、それきり半歳も一年も來やはらんやうなこと、今までにもようおすのどすさかい。私んとこのいふこと、えらい頼み甲斐のないことといふやうどすけど、どうぞ惡うにおとりやさんとおいとくれやす。」と、笠原に取做すやうにいつて、

「何處にゐやはるんやろなあ。……もう先の處にゐやはらせんのやろか。」と、獨り言のやうにいつて、亭主の方を見てゐる。

「どこにゐよるか。」亭主は又つぶやいて棄てるやうにいつて、「こちら銘々の稼業に急がしい。あんなもんの後探ねてゐられへん。」

やがて笠原が餅菓子屋を出たのは十一時を過ぎてゐた。

彼は何となく蹌踉とした足どりで寒い夜の風に吹かれながら又薄暗い場末の街を歩いて來ると、もう自分の前途には光明といふものが永久に消滅してしまつたやうで、確り足を踏み占めてゐないと今にも冷い地の底に滅入り込みはしないかといふやうな氣持ちに襲はれた。それで成るべく急ぐやうにして段々燈火の明るい方へと出て戻つた。

さうかといつて、電車に乘つて多勢の見たくもない人の顏を見るのもうるさい、聲を聽くのも厭はしい、たゞ獨り、ぢつと思ひに沈みながら道を歩いてゐたい。胸の中には何物もない、たゞ失望と悲みとで涙が洪水のごとく波を打つて溢れてゐるのが、自分でも眼に見えるやうに思はれる。

そして、又しても女の病に窶れた姿を心に思ひ描いて見た。……今叔父の話の樣子では、金光教の祈禱者に伴れられて、方々の山から山へ、籠り堂に行をして渡り歩いてゐるといふことであつた。あと、もう二三日ですぐ十二月になり健康者でさへ堪へ難い嚴寒の季節に向はうとするのに、あの病弱な身體で、どうしてそんなに劇しい難行に耐へられよう。それが果して事實とすれば何處までも後を追うて往つて女を說得して溫暖な健康地である熱海か修善寺へでも連れて飛んでゆくのに……紙屋治兵衞は河庄の格子先から小春の窶れた姿を覗いて見て、連れて飛ぶなら梅田か北野と、先心中の場所を考へてゐるが、自分はそんなことはせぬ。何故母子の者は、自分の處に身を託したら幸福であるといふことが分らないのであらう……

叔父の話にいつた山科の先の牛尾山といふは何でも逢坂山から笠取山の峰つゞきになつてゐる處であるらしい。このきびしい寒さに鞍馬の深い雪が耐へられようか。いつそ明日にでも決心してその牛尾山から始めて方々の行場々々を巡歷して探してみようか……そんなことを、あれこれと思つてゐると彼女の神佛に向つて信心してゐる容姿が明歷と眼に浮んで來る。

まだ女と馴染みはじめの、そも〳〵の時分であつた。よく外を歩いて、そこらの宮や寺へ參りにいつた。心から神佛の信仰といふことをあまりせぬ笠原も、愛する女に導かれて邪氣のない興味からお堂の前に立つて鰐口の鈴を鳴してみたり賽錢箱に銅貨を投げ入れたりしたことがあつた。女はそんな時に、

「信心せんといけまへん。信心おしやす。」

といつて信心をすることを勸めてゐた。それで、その信心はとにかくそんな古風な女が彼には棄て難い愛執を感ぜしめたのであつた。

しかし、まだ愈々確かに何の山へ參籠して修行してゐると分らないのに慌てゝ出掛けるのも愚かの至りである。さう思つて笠原は自分の身を傷はりつゝ寒い夜氣の中を兎も角宿へ戻つて來て、冷かな眠りに就いた。

その翌日になつても笠原は内にぢつと落着いてゐられないので、又、留守に母親が訪ねて來たら座敷に通して待たして置いてもらうやうにいひおいて外に出た。そして、無駄とは思ひながらどうしても行つてみなければ氣が濟まぬので、丸太橋から東山廻りの電車に乘つて安井の路地の中に入つて見たが何事もない。それからそこを出て昨日のとほり、又電車で四條大宮まで往つて、昨夜の餅菓子屋へ、昨夜あれから母親が來はせぬか、今日若し丁度來合はせて居りはせぬかと思つて、昨夜邪魔をした禮をいひかた〴〵立寄つてみたが、一向來ないといふ。

そして、京都の市中を一巡ぐるりと一と廻りして宿へ戻つて來ると、宿の主婦は、

「おかへりでござりますか」と、急いで笠原を玄關に出迎へて、「あの、年取つたお婆さんの人があんたはんがお出やすとすぐ後から訪ねておいでになりまして、これ〳〵やいうて、待つてゝおくれやすやうにいひましたら、ほんなら又直き出なほして來ますさかいいはゝりまして、お歸りになりました。」といふ。

「あゝ、さうですか、それは殘念でしたが、どうも難有う。またやつて來るでせう。」

といつて、笠原は疲れた身體を休息してゐるところへ、主婦は又ばた〳〵長い廊下を歩いて來て、

「あの、先刻のお婆さんの方がおいでになりました。」と案内した。

笠原は席を直して悦んで待つてゐると、入つて來たのは母親一人きりと思ひのほか、嘗て見も知らぬ極めて人相の惡い五十餘りの脊のぬうつと高い、顔にあばたのある、色の蒼白い男を連れて來た。

笠原は心の中に「變な男を伴れて來たな」と思つてはつとした。それは、そんな人相の好くない男が附いて來たのを驚いたのではなく、こんな得體の知れない男を伴れて來るくらゐであるから、母親は、自分と差し向ひにしんみりとした懇談を遂げようといふのではなく、手を切らさうとしてこんな人間を引張つて來たのだな。と、すぐ見て取つたので、その爲にやゝ落膽したのであつた。

それで、笠原は疼む樣子を見せまいと思つて、氣を張り詰め、きつとなつて、態度を構へて待つてゐると、母親とその男とは一應の挨拶を濟ましたあとで彼は懷中から早速名刺を取出して、

「私はかういふ者です。」といつて、それを笠原の方へ突出した。

「はあ。」といつて、笠原はそれを受け取つて讀んでみると、高倉通竹屋町通り東入何々法律事務所事務員何某と記してゐる。

「はあ、さうですか。」

と笠原はも一度云つて、今度はその男の方を凝乎と見てゐた。そして、心の中で、これでは先刻の直覺がいよ〳〵的中してゐた。こんな者を伴れて來るやうでは、もう到底母親の脈は上がつてしまつてゐる。女を此方に取り返へすことはもう全く絕望であると思つてゐた。

すると　その男は、突込んで來るやうな調子で、

「僕は此の園田の親類に賴まれて話しに來たんぢやが、園田の娘が今度病氣になつたのは、君が甚う脅迫したのが原因で精神に異狀を來たしたといふぢやないか」

と、頭からまるで、向うの方からあべこべにいひ掛りを付けようとするやうなことをいふ。

笠原はそれを聽くと、昨日今日、この四五日來の自分の心中に對照して實に意表に出た向うの言ひ分に、先づ呆れてしまつて、何といつてそれに應ずべきか、殆ど開いた口が塞がらなかつた。そして、心の中で、これではいよ〳〵腹を締めて掛らねばならぬと思ひ、

「はあ、私が園田の娘を脅迫したゝめに今度の病氣になつたといふのですか？」

と、少しとぼけたやうな調子で念を押して訊き返した。

すると、その男は、初めよりはやゝ碎けた顔をして、

「うむ、君が何でも警察へ訴へるといふて、ひどく脅迫したといふぢやないか。」

それで、笠原はわざと仰山に笑つてみせた。

「はゝゝゝ。私が脅迫したもないもんだ。」

すると、先刻から自分は默つてゐた母親が不穩な顔をして、

「あんたはんが脅かしたんやおへんか、警察へ引つ張つてゆくいうて、あんたはんが脅かしやしたやおへんか。」と、詰るやうにいふ。

件の男も又それに言葉を添へて、

「うむ、さうやちうやないか。」と、じろりと笠原の顔を見た。

笠原は、もう、此の間安井の路地の中に探ねて往つたら時から、どうも母親の樣子が、それまでと變つてゐるとは思つてゐたが、かうまで、まるで手の裏を返すやうに變つてゐるとは夢にも思はなかつた。それにも係はらず、あれから今日まで、今日は話しに來るかくると待つてゐた此方の優しい心持を、知つてゐるか知らずしてか、蹂躙するやうなことをしやあがる！

笠原は思つた。女に惚れてゐればこそ、飽くまでも猫のやうに溫順してゐるが、そのおとなしくしてゐるのに附け上がつて、何處まで人を馬鹿にしようとするのだ。……彼は、今から十年も前に別れた女のことで、太股を貫通した凄慘な刀痕のある體に、入墨だらけの破落戶の家に幾日も泊り込んで、手を切るの切らぬのと捫着してゐた時のことなど思ひ浮べながら、自分は此の十何年の間、殆ど人間の一生で一番大事な三十から四十までを棒に振つて、何一つ纏つた事業も硏究もせずに仇に過して來たその代りに女の事に掛つたら、可なり修業が積んでゐるつもりだ。生意氣な、厭に法律口調を使ふこの三百代言など十人束になつて來たつて、びくともするのぢやない。と、さう思つたが、しかし惡く事を荒立てては肝心の焦れた女を此方に漕ぎ戾すことができぬ。何事も今は、彼女一人のために、假令母親の唾液を嘗めてもぢつと隱忍してゐなければならぬ。と、又さう思ひ直して、

「別に脅した譯でもないんです。」笠原がその男の方を向いておとなしくさういふと、母親は又嵩にかかつたやうに、

「脅かしたんやおへんか。あんたんが、自分のいふことを聽かにや松原警察へ突出すいうて、酷い手紙をあの子にあてゝ何本もお越しやしたのが原因で、今度の病を呼び起したのどすがな。」彼女はいきるやうにさういつて、今度は伴れの男の方を振り向いて、

「わたしは明盲どすよつて自分で讀んだのやおまへんけど、讀んで私に話して聽かした人の話に、非道いこと、たんと書いてあつたさうにおす。」するとその男は調子を合はせて、

「うむ、それが可かん。それが原因ぢや。」

彼等は二人で、自分達にばかり都合の好いやうに定めて、笠原一人を惡人にしてしまはうとしてゐるのだ。

笠原はそれで考へた。なるほどさういへば、去年の春時分のこと、それまでに三年も四年もずつと絶やさず金ばかり仕送つてゐても女の身體の方の話が一向埒の明く樣子が見えぬので、流石の辛抱づよい笠原も後には腹を立てゝ焦り出し隨分酷しいことをいつて、女の決心を促し、多額の金の費途について明瞭な返事を迫つた手數を數度にわたつて出したことはあつた。しかし、それをやかましく云つて越すのは、誰れに聽かしたつて眞相が分れば笠原のいふことに少しも無理はなかつたのである。幾ら藝者娼妓を商賣にしてゐる者だといつても、これは小使錢に使ひ果たせよといつて、二百三百と纏つた金を送つたものではなく、況して笠原自身では、その間にたゞ金ばかり仕送つてゐても身體は一年と半歳ぐらゐも東京に居つて、京都に來ないこともあつたのである。

その事を考へると、一昨日の晩三條大宮の餅菓子屋の主人夫婦が口を揃へて、女母子の不德義を鳴らしてゐたことが當然だともいへる。

笠原はそれで、母親の聽いてゐる前で、伴れの男に向つて長い間の一伍一什の經緯を、三四年からの前に溯つて滔々と二時間ばかり委細說明して聽かした。

すると、その男は、笠原の、商賣をしてゐる女に對してしたことの、餘りに、お人好しといはうか、愚かといはうか、馬鹿といふでもない阿房らしさに、頭から笑つてばかりゐて、殆ど正氣の人間のいふことゝして彼の云ふことを聽いてゐなかつた。

「うつふゝゝ、君は下手ぢや。さういふ時には、君、かうするものぢや。えゝか、金を五百でも六百圓でも持つて自分で來て、さあ、これだけ金があるが、退いて自分の方に來るか來ぬかと、向うの決心をよう確かめたうへで、自分の方に來るか、よしそんなら金を渡さうといふに話をせんと、君の樣に何度にも少しづゝの金を送つたのぢや、何にも用に立ちやせん。皆なその時消えてしまふ。それぢや可かんうつふゝふゝゝ。」

彼は止め度く失笑して笠原が何をいはうとしても可笑しさに堪へられないやうに笑つてしまつた。

傍に聽いてゐる母親は、さすがに、自分の娘が、假令賤しい商賣をしてゐたといひながら、金錢の事にそんな締め括りのない不始末をしたことを、たゞ一圖に笑はれて見ると、一寸まづい顏をしてゐたが、何處までも鼻つ端の強い彼女はすぐ又その男の言葉尻に乘つて、

「さうどす。纏まつたお金やつたら、滅多そないに無いやうにするといふこともおへんけど、少しづゝ送つてもろたのやさかい、ちよつとも身に着かしまへんがな」

「うむ、そら、身に着かへん。」

二人は、金を粗末にして、元も子もなく消費してしまつた者よりも、まるで、笠原の金の送り樣が惡い爲にそんなことになつてしまつたのかのやうにいふのである。

彼はしかし、その男がさういつて笑へば笑ふほど一層向きになつて憤りを洩らすやうにいつた。

「いや、自分だつて、そのくらゐの事は百も承知してゐるけれども、何處までも本人を信じてゐるから、限つて、そんな、金を粗末に使ひ棄てるなどゝいふことは無いものと思つてゐた。それは本人の心に問へばよく分ることで、私の方では、今貴方がいふとほりの事を云つて、纏まるまで待ちなさい、纏つてから送るといつたのを、本人の方から、それは自分の手許で貯蓄して置く、決して無駄にはせぬと再三再四の請求であつたから、それならばといふやうな譯で送つたものである。それにも拘はらず、現在金を渡した本人と引合はさないで、此方に對して尻でも喰へといふやうな挨拶では、どうあつても私の方では此儘に默つて引込む譯にはいかない。」

さういふと、その男も母親も暫く何ともいひかねて默つてゐたが、母親は突掛るやうな口調で、

「會はさういうたかて、本人が病氣やつたら仕樣がおへんがな。」

「なに、病氣だつて、そんな、長くの間金を仕送つた此の私に會ふことの出來ぬほどの病氣でないといふことは大抵分つてゐる。」

すると連れの男は口を入れて、

「そやから、病氣が癒つたら僕が何とかして會はす。」

「何時會はしてくれるです。」

「……………」

「病氣ならば病氣で、私の方で何とか手を盡してやるつもりです。」

すると母親と連れの男とは、口を揃へて、

「いや、それはもうちやんと親類の人に賴んどす。」

笠原にはその親類の者といふのが何うしても飲込めなかつた。長い間に、折に觸れて、彼女達母子の者から聞かされてゐたのでは、此の間往つた叔父達の他にそんな者はなかつた筈である。伊賀の上野には死んだ父親の義理の弟とかゞあると聞いてゐたが、それが今になつて急に扶助を與へてくれるといふことも受取りがたい。今になつてさうしてくれるほどならば七年も八年も賴りのない女母子の者がさういふ慘めな境涯に沈淪してゐるのを、ぢつと見て默つてゐる道理がない。母親に向つてその親類かと訊いてみても母親はそれではないと云ふ。

連れの男が最初に名刺を差出した時に、自分は、園田の親

戚の者で、園田何某に頼まれたと、澱みなくいつたがよく訊ねると、その園田何某といふのは、南山城の大河原といふ處の字童仙房といふ處の人間であるといふ。そして、自分はその人間に直接に會つた譯ではないが、自分の出勤してゐる法律事務所の懇意先きで、これまで一二度訴訟事件を依頼されたことがあつて、事務所の主人の辯護士とは知合である。今度も自分はその事務所の方からお前にその話を頼むといつて依頼を受けたのであるといふ。それでその親戚の園田何某が、今までは遠方のことでもあり、此方の事情がよく解らなかつたが、死亡した父親とは從兄弟の仲で、向うは山林や田畑を相應に持つてゐて村でも裕福な方で指折りである。それで今度こちらの園田母子の者がひどく不仕合な身の上に陷つてゐることを委しく話して縋つたところさういふ事があつたなら、何故もつと早く、そんな處に身を沈めぬ先きに遠慮なく譯を話してくれなかつたかと、腹を立てるといふやうな次第で、早速まだ抱へ主の方に殘つてゐた五百何拾圓といふ借金を綺麗に拂つてくれて、籍を退いてくれたのである。

つれの男と母親とは交る〴〵それだけのことを掻い摘んで笠原に話して聞かせた。そして母親は笠原に向つていつた。

「あんたはんに今直ぐそれだけの金は出來まへんやろ。」

正直な笠原は、さういはれて早速の返答に困つたが、しかし此の間千本大宮の餅菓子屋の叔父の話でも、抱へ主の方にはもうそんなに大した借金はなかつたやうに聞いてゐる。確かなことは分らぬが、どうもそれが本當のやうである。

「今に今五百圓というては間に合はぬにしても、本人の身を此方に越すなら、何とか分別せぬこともない。……しかし、そんなにもう借金はなかつた筈だ。一昨日だつた。大宮の叔父さんもそんなことを云つてゐた。」

さういふと、母親は鼻の先で、

「なん云うてんのや、あの人何も知らへん。あんたはんも、ようお知りいしまへんけど、まだ、たんと借金がおしたがな。あの子もそれでえらい苦勞をしてゐましたのどす。」母親は、言葉に力を入れて泣言をいふやうにいつて、つれの男に話し掛けた。

「うむ、さうやろ。」

笠原は、どうも、そんなにまだ借金が殘つてゐたとは思へないが、母親が仰山さうに、まだそれだけあつたといへば、それもさうかと思つた。そして、どうもまだその園田何某といふ親戚のことが十分信じられないので、

「しかし、いくら、此方の事情を打明けて縋つたから聽いてくれたといふにしても、何年にも交通のなかつた遠縁の者が直ぐそれを承諾したとは一寸受取りにくい話だな。」

さういふと、母親は又突掛るやうに、

「そやから、わたしあの子の名で證文を書いてもろて判を捺いて、それだけの金を借りましたのどすがな。本人は何んにも知らしまへんで。本人が知らんのに、そない病氣してる本人の名を書いて、そんな大金を借るやうなことにせにやならんか思ふと、私この胸が痛うなつて來るのどす。あの子が病氣が良うなつて、そのことを知つたら又どない辛らがりますやろ。」

母親は彼女の癖で、泣くやうな聲をしてさういふのであつた。

それを聞くと、正直な笠原はすぐ又それに引込まれるやうになつて、

「その金は私が何とかしてやつてもいゝ。」

「それがあんたはんに出來ますかな。」

「出來ないことはない。本人に會つたうへで何とでも話は出來る。」

それを聽いてゐた、つれの男は、

「いや出來ん〳〵。もう話はこれで分つた。私も一寸他に用事あるよつて。」と何時まで經つても果てしない話を、いゝ加減にして打切るやうにいふ。

母親は頻りに氣の毒がるやうに、

「あんたはんもえらいお忙しいとこを、ほんまにお氣の毒さんどす。」といつて、今度は笠原の方を見ながら、

「このお方はん御用の多いとこを頼んで來てもろたのです。」

と、何か恩にでも着せるやうにいふ。笠原は心に空嘯いてゐた此方で頼みはすまいし、勝手に自分の方で連れて來ておいて。」と思ひながら

「あゝさうですか。しかし私の方の話はこれだけでは濟まされない。貴方は御多用のところをさぞ御迷惑でせうが。」といつて、笠原は母親の方に向ひ、

「それで、本人は何時會はしてくれるのですか。私はとにかく本人に金を渡してあるのです、から、凡て本人に直接會はなければ、どんな話も仕やうがない。」屹度なつて云つた。

「それから病氣がようなつたら、あんたはんに會はせます。」

「それまでは……」

「その病氣が何時になつたら人に面會出來るやうになるか、どんな容體ですかな。」

すると傍の男は氣が急くやうに、

「それは私が引受けて、病氣さへようなつたらきつと君に會はすやうにする。」

笠原は、二人のいふことを甚だ心許なく聽いてゐたが先刻から隨分長い間話してゐたし、今日すぐ話の結着がつく譯でもないで、

「私にはまだ一向話が滿足出來ませんが貴方が引受けて屹度會はすといはれるなら、暫時待つてゐませうが、大抵もうどのくらゐしたら、病人が人に面會出來るやうになるのです

か。それをほゞ聞いて置かないと、私も唯々べん〳〵待つてゐる譯にはゆかない。

「まあ十日くらゐ待つてもらはんならん。」その男は、口から出まかせか何かさういつた。

「さうですか。よろしい。ぢや十日くらゐなら私も待つてゐませう。」

しまひはさういふ工合で、その日は、日も暮れたので二人は急いで歸つて去つた。

笠原はそれから一週間ばかりは、此の間母親と一緒に來た男の口約もあるので、なるたけ女のことは忘れて居るやうにして、もう長い間手に着かなかつた、書く方の仕事もせねばならず、今ゐる宿は陰氣でいけないので、もつと陽氣な、色彩の豐かな處に行つて、すつかり氣を變へたいと思つて、舊くから馴染みの深い宇治の花屋敷にいつて暫時滯在してゐたりした。

そして、待ちかねてゐた十日目が來ると、彼は此の間來た男の處を訪ねていつた。そこは川端仁王門下つた處にあつた。主人は辯護士の手先きになつて、仲裁とか口利きを職業にしてゐる人間で、丁度家に居合はせたが、笠原は、

「先日のあなたのお話では、十日くらゐもしたら會へるやうになるだらうといふお話しでしたが、今日が丁度十日目になるんですけれど、私が自分でこれから、病人の保養してゐる處へ訪ねていつてみようと思ふんです。何處ですか、本人の出養生をしてゐる處は？」

といつて訊くと、

「イヤ君が一人でいたのではわからん。」といつて却々敎へて呉れない。

「なに、よく訊いて、たづね〳〵行けば分らないことはありますまい。どういふ風に往くのです。」

男はやつぱり頭振りをふつて、

「いや、とても分らん。僕も此の間一寸母親に連れられていつたから往けたんぢや。まあ、さう急かさずに待つて居れば病氣がようなつたら、その内連れて往く。」といつて、取り合はない。

笠原はそれでも是非とも向うの處を訊かしてくれといふと、彼は暫く思案した末に、そこは、京津電車で毘沙門前といふ停留場を降りて、そこから南へ十町ばかり行くと、小山といふ處があるから、その邊の農家だといひさして、

「いや、とても分らんわからん。」といつてしまつた。

それは、分らんといふのが本當で、事實そんな處はないのであつた。また、女を山科の農家へ出養生さしてゐるといふのも初から眞赤な噓をいつて、母親がうまく欺いてゐるのであつた。けれども笠原はさうと思はない。母親のいふとほり

女は山科の農家に預けられて、そこで靜養してゐるものとばかり信じてゐた。それで、その男が、一圖に分りにくい處だといつて、はつきりと敎へてくれないのを見ると一層それが知りたくなつた。

「はあ、毘沙門前で降りて十町ばかりいつて小山といふ處。それでそこの家の姓は何といふのです？」

「さあ、姓は何といつたか、よう見なんだ。」といふ。

笠原はそれを聞いて、どうも心許ないと思つたが、電車から僅かに十町ばかり行つた處といふのだから、よく訊ねたら知れぬこともあるまいと思つて、彼はやがてそこの家を出て、わざ〳〵祇園の石段下まで往つて水菓子屋でネーブルだのバナ、などを買ひ、それから又いづ宇にいつて名題の鯖壽司を壹圓ばかり買ひとゝのへ、それだけの物を手に提げると可なりの重みがあつたが、東山三條から京津電車に乘つた。それは十二月の九日か十日で寒い乾いた風に雪花さへちらちら交つて、電車の窓から比叡の方を仰ぐと、その空には雪模様の雲がたゞずんでゐる。

笠原はそれから、毘沙門前といふ停留場を氣を着けてゐると、そこは、大津街道の山科道を、追分を少し往つて藪の蔭を向うに通り越すとすぐの處にあつた。これは、思つたよりも近い處であつたと心に勇みながら停留場に降りて、そこに踏切り番をしてゐる女に訊くと、分らなさうな顏をして、

「さうどすなあ、小山というたら、彼方の山の際に見えてるのがさうどすけど、あこまではまだ一里一寸くらゐあります。」

と、向うの山を指しながらいふ。それは逢坂山につゞく笠取山脈の牛の尾山といふのがそつちの方であつた。

笠原はひどく失望したが、それでも心當りを探してみるつもりで、そこら中の街道に沿うた街つゞきの表通りはいふに及ばず裏家といふ裏家を一つ殘さず覗いて見たり、田圃の畦を傳うて離れた處に在る農家の群がる村里をあちら此方、雪花の散つてゐる中を體中だく〳〵汗みづくになつて、脚が棒になるほど駈け廻つて見たが、一向それらしい心當りはなかつた。

笠取山脈の麓に見えてゐた小山といふ字までも探ねて往つて見たがそこに手掛りはなかつた。それもその筈で、女は初から祇園町とはすぐ目と鼻の安井南門の路地の中に靜つとして何處へも動いてゐるのではなかつた。

笠原はやう〳〵日が暮れかけてから、とても一日の事にならぬと諦めて、わざ〳〵重いのを辛抱して提げていつた水菓子といづ宇の壽司とを荷物にして又持つて歸つた。

それから又二三日して此の間仲裁の人間の處に往つて、その事を話すと、

「そら分らん、君一人でいたのでは分らん。」といつてゐたが、丁度今日君が來てよかつた。一昨日やつたかいな、あの

婆さんが來て、明日又話しをしに來ることになつてる。君の處へ一寸知らさう思うてたとこやつた。」

「あゝさうですか、それでは明日又來ませう。」といつて、笠原はすぐ出て戻つた。

そして、その翌日又往つて、暫く待つてゐると母親はそこへやつて來た。そこでも此の間笠原の宿へ訪ねて來た時に話したことゝ同じことを、やつぱり双方でいひ合つて繰返すに過ぎなかつたが、それまでは興奮のあまり、いくらか突掛るやうな物のいひ樣をすると思つてゐたのが、なるべく話は穩かに穩かにと思つてゐる笠原の意表に出て母親は、理詰めの談に行きつまつてくると、自暴糞になつてさも憎らしい面をして、

「知りまへん。」と、外つぽうを向いてしまつた。

「知りまへん？……」笠原は呆れて、その顏をぢッと見守つてゐたが、

「知りまへんとは何をいふ。だからあんたとはもう話をしたつて駄目だから、話さないといつてゐるんぢやないか。本人に會つたら分る。」

「わたしの娘をあんたはんのやうなもんに會はすことようなりまへん。」

笠原はそれを聞くと、勃然として拳固で一つ、その惡婆面の横すつ頰を毆りつけてやらうかと思つたが、こんな奴に此方から先きに手出しをしては、却つて弱味になると思つて、ぢつと蟲を抑へながら、

「何だ！　取れるだけ金を取つておいて、金を渡した本人に會はせぬ。それで道理が立つか。」

「なん吐かす。金々て、こつちは金取つた覺えない。貴樣の勝手にせい。」

母親のいふことが次第に聞きづらくなつて來たので傍にゐたそこの主人は、それを制して、

「まあ〳〵、どつちもそんなことといはん方がえゝ。」といつたので二人とも暫く口がむづ〳〵するのを堪へてゐたが、笠原のはさすがに、あまり大きな聲を出してはそこの內に對して濟まぬと思つて控へてゐると、母親は主人に向つて、

「いろ〳〵あんたはんにも御心配掛けましたが、もう病人は遠い處の親類が來て、私に任せ、受合うて癒してやるいうてくれますさかい、それに賴んで此の間遠い處に遣りました。」

といつてゐる。

「ふむ、さうか。それがえゝ。」

ちよつと見たところ、まるで田舍の百姓の婢のやうな質撲で、うとい樣子に見えてゐるが、その實掏摸か騙りというてもないくらゐに狡猾な母親は、主人に向つて眞實らしくさういつてゐるのもその實傍に聞いてゐる笠原に聽かさうとする腹でさういつたのであつた。

笠原は、それを又母親のいふとほりに解して、

「遠い處て何處に往つた。」

「そやから此の間話した遠い處の親類やおへんか。」

「ぢや南山城の方の？」

「さうどす。」

「さうか。それぢや私が南山城のその園田といふ人の家へ訪ねていつてみる。」

「あんたはん何ぼいたかて會はせやへん」

「會はすも會はさぬもない。約束のうへで金を渡してあるのだから、金を騙り取られて默つて引込んぢやゐられない。」

「金々て、そんな惜しい金を何で渡した。」

「何だ。この罰當りめ。人から金を散々ぱら騙し取つておいて、禮をいふことを忘れて惡態を吐くとは何だ。あんた方は金光樣を信心してゐるといふが、人を騙るのが金光樣の本心か。私の此の怨み一つで病人を生かさうと殺さうと自由だ。」

笠原がさういふと、母親は負けては居らず躍起になつて、

「何を吐かす、金神樣で貴樣を取り殺してやる。」

二人が又してもそんなつまらぬ言葉爭ひをするのを主人は笑つて、

「まあ〳〵そんな詰らんことをいうたて、あかん。」

〻そんな譯で、その時も何を話すために母親がやつて來たのか、その日も遂に要領を得ずに喧嘩別れになつて笠原は出て歸つた。

そして、もう此の上母親と會つて話をするのは双方互に氣を惡くするばかりで詰らないと思つたので笠原は、遠くの親類へ預けてしまつたといふのが果して事實とするなら、その南山城の大河原といふ處へ一遍往つてみようと思つて、十二月の年末の暮れに押迫まつた寒い日に途中まで出掛けていつたが、話に聞いたその童仙房といふ處は何方から入つて往つても五六里の山道を往かねばならぬ深い山の奧にあるといふので、一時中止して、もつと暖くなつた春まで時機を待つことにして引返へした。

その時大河原の村役場に就いて、訊くと、村役場で村吏のいふのでは、童仙房といふ處には園田何某といふ人間はゐなかつた。それでは、此の間から彼奴等が本當らしくいつたのは皆な嘘であつたかと思つたが、そのついでに、かねて母親から度々聞かされて知つてゐる、女の親達がまだ此方にゐた時分の戶籍や、その頃相應に所有してゐたといふ山林田畑のことについても訊いてみたが、現在此の土地に園田といふ者で山林田畑を所有してゐる者は存在しないといつて、戶籍の臺帳を取出して貸してくれた。それを繰つて見ると、なるほど明治の極く初年に園田某といふ者が京都市の大佛辰巳町から移住して來てゐる。大佛辰巳町といふのは七條上つた處にある大佛の附近で京都でも知られた貧民街の一つである。そ

れは文化年間の生まれで、その子の何某といふのが女の父親であることは、かねて聞いてゐる名前で分つた。それは嘉永六年生まれである。そして、父親の母親は但馬國平民の何某の娘としてある。その頃はまだ戸籍の上では父親は獨身になつてゐる。祖父は死亡して父親が戸主になり、明治廿五年の二月の十三日の屆出で父親が京都市上京區中筋通淨福寺東入る菱屋町廿四番地に轉住したとして、それから後の事は無論記されてない。笠原はそれで思つた。明治廿五年といへば、女が今年二十七になるから丁度生まれた年に京都へ轉住した事になつてゐる。その前にも姉が二人か三人あつたけれども皆な早く死んだと聞いてゐるが、さうすると母親はその頃隨分長い間入籍してゐなかつたものらしい。何分祖父の代に大佛辰巳町から移住して來て、約二十二三年振りに又父の代に京都へ復歸してゐるが、——後に聞いたところによつて推量してみるのに、丁度明治の初年のその頃京都府知事の清棲某氏といふがあつて、南山城の相樂郡の山中に在る廣い荒蕪地の開拓を計畫し、京都市及び府下の貧民を奬勵してそちらに移住せしめ保護を與へて開拓した事がある。それこれ思ひ合はすと、どうも女の祖父が移住していつたものらしい。母親が屢々南山城の大河原には田が一町八反、山林が何町歩とか有つたが、父親が京都に出て來た後で、人に賴んで置いたら皆な無くしてしまつたといつてゐたのは、多分、何町歩かの地所を割當てゝ給與されて開拓したものであつたのだらう。

南山城に母親と三百屋の云つたやうな人間はてんで影も形も實存してゐないといふことが、確められると笠原はその方を探すことは斷念したが、明治二十五年に西陣の方に移住して來てから、その後どういふやうな處に居つて、どんな生活をしてゐたか、それを知つてみたい興味と、女に會へなければ、せめて彼女の生ひ立ちの跡でも探つてみたいといふ懷かしさに驅られて、笠原は年が明けてから區役所の仕事始めになるのを待つてゐて、先づ最初に轉住して來た上京區中筋通淨福寺に往つてみた。菱屋町二十四番といふ家はなるほど今でも現存してゐて、そのあたりに見る織屋づくりの、軒の低い舊い家であるから、今から二十六七年前にもその家であつたのだらう。こゝにおる時分はかなりな生活をしてゐたものと見える。笠原は、その日はそこだけ行つて見て戻つて來た。

區役所で調べたところによると、西陣にはさう長くは居なかつたらしい。その次に移つていつたのは油小路竹屋町とあるので、二三日置いて暖い日に散歩かた〴〵そこへ住つてみると、その番地には人間の住みうる、碌な家らしい家といふほどのものもない、まるで場末の空家を見たやうな小家ばかりである。笠原はひとりで思つた。

はゝあ、これでは南山城から京都へ轉住して來て、家らしい西陣の家に住んでゐたのは、僅か一年に足るか足らないでもう悒せき場處へ零落して來たものと思はれる。さう思つてみると、その頃やつと呱々の聲を揚げた彼女が生ひ育つて二十年の後に人間生活のどん底に淪落して行く運命をたとひ當人達は知らずにゐたとしても豫言されてゐたのであつた。

笠原は、彼女がまだ襁褓の內から、既にこんな貧窶な生活を通つて成人して來たことを考へると、人生といふものがひどく暗澹とした物に思はれて來た、彼女に對する戀情からの故でなく、いかに泥濘の如き貧困に陷つた人間生活に苦惱があるかといふことを、ユーゴーやトルストイが書いたやうな憐憫の心を以つて一つの哀史を書いてみたいといふ心が萌して來た。

彼は暗い心持ちにその日も又そこだけ一箇處見たゞけで戻つて來た。

手帳には、その次に續つて住んでゐるのが猪熊通り椹木町下つた處になつてゐる。又數日置いて此度はそこへ往つてみた。そこもまた東京なら本所あたりの貧民街の一部を見るやうに世の敗殘者が生存の綱に取り縋つてやう〳〵雨露を凌いでゐるといふやうな處であつた。前に探ねていつた竹屋町よりも尙ひどい處であつた。しかしも彼女の親達は一番長くそのあたりに住んでゐたらしく、それから先き他へ移つたことは區役所の戸籍籍に記載されてゐない。

猪熊通りといふのは、ずつと上に寄つた方はさうでもないが、下がつて二條のお城に近い椹木町下るあたりになると、まるで人間の塵埃溜めかと思はれる處であつた。表の通りには、それでもまだ處々に車力のやうなものを製造修繕したり染絲工場のやうな所があつたりするが、狹い路地を一つ裏に入るといづれも軒の傾きかゝつた九尺二間の長屋でその端に五六軒で使用する共同便所が附いてゐた。笠原はこのあたりに彼女の一家が長い間住んでゐたのかと思ふと、胸がつぶれるやうな氣がした。さうして、ある深刻なる興味を感じた。どうしても彼女の一族は日本民族の中の昔からある明るい種族ではなかつたやうに考へられたのであつた。後で他から聽いたところによると、そのあたりは城下といつて、極めて人氣の好くない貧乏人の多く住む土地といふことであつた。

彼女のまだ生れぬ先きから兩親や祖父が略ぼどういふやうな生活をして來たかそこまで突き詰めて糺してみると、笠原には探れば探るほど益々彼女に對する美しい幻影が覺めて來るわけであるが、一面容赦のない現實に面接しながらも、又半面には、それが爲に一入彼女に對して美しい哀憐の情の彌增しに加はつて來るのも爭ふべからざる事實であつた。

さうかといつて、又考へてみるに、あんな塵埃溜めの中に

生ひ育ちながら、性質には少しも貧民らしいところがなく、筆蹟などを見ても全く無教育の者とも思へなかつた。それにしても今何處に居るかと笠原は毎日雲を捉むやうなあてのないことに惱まされてばかりゐた。

そして在所を探す手懸りも殆ど盡きて、全く絶望狀態となつてゐたところ、最初にたづねていつた場處の近くで母親の姿を認め、それから十日ばかり經つてふとしたことから、それが手がゝりとなつて、女の居處も自然にわかつた。

今の笠原には、もう戀のイリユウジョンといふものが少しもなくなつた。從つて希望もなければ失望の苦しみもない。しかし失望も希望もない生活くらゐ、つまらぬものはない。今になつて、その頃のことを振顧つてみると、たとひ如何なる胸を碎く思ひをしても、まだ、戀に竊れて京都の街をまひ歩いてゐた時の方が緊張した生活の興味を感じてゐたのであつた。

もう、今後は彼も、殘存した生涯を戀の苦患なくして過しうるであらうが、戀の苦患と、それに伴ふ高潮した生活興味を持たないくらゐ、寂しく物足りない生活はない。それを思ふと、あの頃は今よりも遙かに生效ひがあつた。

（大正十二年三月書了、新小說掲載）

舊戀（續篇）

その女の背後に附いてゐる人間が、大凡そどんな種類の人間であるかと云ふことにほゞ見當がついてゐるのであるが、田原は、自分では見たこともなければ、住處も姓名も知ることが出來ぬ。一體何處の誰であらう？

初め田原は、その背後に、たれか他の男が附いてゐるといふことを、容易に信ずることを欲しなかつた。それは、彼の自惚も手傳つてゐるのであるが、さう信ずることが何ともいへない無念で堪らなかつた。彼女の旦那といふべき者がもしありとすれば、それは自分のほかにはない筈だと彼は深く信じてゐるのである。然るに今彼女を我が物顏をして世話をしてゐる者が、附いてゐると分つては、彼は心外千萬とも何ともいひやうがなかつた。自分がその爲に多年盡して來た苦勞をその男は知つてゐるか、どうか。切られ與三の白ではないが死んだと思つてゐたお富が生きてゐて、それが他の男の世話になつて湯上りの水化粧で樂さうな日を送つてゐると知つては、ひとり、芝居の與三郎ばかりではない、どんな、世間の男でも瞋恚の焔を燃さずにはゐられない。

「どんな奴か、その男に必ず一度會つてみたい。そして向うの出ようによつて、此方にも決心がある」

戀愛を生命として生きてゐるかのやうな場合に置かれてゐる田原は、假令先きが何者であらうとも、それに打突かつてゆくことに少しもひるむのではないが、その男の處も知る術のないのに手の施しやうがなかつた肝心の女の心が不確かなものであることが分るに從つて、一層最後の手段は、その男に打突かつて行くより他に仕方がないと思つたが、いくら焦慮してもその男の本體は分らなかつた。金を出して家を持たしてゐるのであるから、始終女に入り浸つてゐる筈だが、その男は滅多に女の處には出て來ぬといふのが眞相らしい。

「そんなことがおすもんか、始終來たはりますがな。」

女の事について、田原の爲に屢々女の處へ口說きにいつてくれた家主のお婆さんは、焦れつたさうにさういふのであつた。そのお婆さんと二階を借りて、女は、病氣で去年の秋稼業を廢するまで長く同居をしてゐたのであつた。それでその婆さんは、女の旦那といふ男とは互によく知つてゐた。

彼女の話によれば、此の間中女の處へいく度に向うの男は來てゐたといふのである。
「はて、先繰り〳〵好い着物や帶をお重さんにこしらへて上げはるらしうおす。この間も、あれは小濱いふのどしたかいな、黑に派手な裾模樣のある着物を下着をそろへて、これを此度旦那はんにこしらへてもらひましたいうて、お母はんが出して見せはりました。これを着て、今まで贔屓にしてもろて出入してたお茶屋さんへお禮に廻はるやうにいうて拵へてくりやはつたさうにおす。そら眼の覺めるやうな美しいのどした。」
彼女はたゞ無心に有りのまゝを語つて聽かすのであるが、田原にとつては、そんなことを聽かされると、胸の火を焚き付けられるやうであつた。その男が呉服問屋であるといふことだけは疾うから知れてゐた。
田原は、それにつけても憐れなる自分の態を振返らずにはゐられなかつた。彼はもう幾年もの長い間女に貢ぐために自分はまる裸體になつてしまつてゐるのではないか。人に着せてやるどころではない、自分が今寒中に顫へてゐるばかりであつた。
彼は名狀し難い苦惱を顏色に浮べながら、
「どうかしてその男に一遍會つて、直々は話したいと思つてゐるんですが、何とかして分る術はないものですかなあ。」彼は太息とともに唸るやうに獨語をいつた。
「こんなことになるんやつたら、此處へ來てはつた時分に、ちよつと訊いとけばよかつた。：：今になつて、あんたはんのお處は何處どす。名前は何とおいひやすいうて訊くのも氣がさすよつて。――わたし、此の間もお重さんの處で會うた時に餘程口まで出かゝつたけど、年寄りがそんなことを訊いて入らんことや思うて、それきりいひまへなんだ。」
お婆さんは、田原に同情するやうな、殘念がるやうな調子で呟いた。
「いや、それは今になつて、訊くほど却つていひませんよ。」
「さうどすやろなあ。：：あんたはそん一遍のお人、お見やしたことおつせ。」
「えッ?!」
「さう、氣が附かなんだやろなあ。：：：そりや氣の附く道理おへんわ。氣が附かんのが本眞どすもの。」
彼女は獨りで肯くやうにいつた。
田原はそんなことを初めて聽くので、訝かしさうな顏をして、
「わたしが見たことがある。何時、何處、でゞす?」
「此處でどうした。あんたはんが今腰を掛けておゐやすとこに、丁度そのお方もそのとほりた腰を掛けておゐやした。その時あんたはんが見やはつたのどす。」

田原は、そんなことを聽かされて益々不審さうな顏をしてお婆さんの顏を見守つた。
「こゝへ、その人間が腰を掛けてゐる時に私が見た。：：：へえ、どうも自分には考へ出されませんなあ。」
「そら、あんたはんには氣が附きまへんなんだやろ。：：：わたし、その時、これは惡いことやなあ思うて獨りで胸がはらはらしてゐました。あのお母さんは、好うないことをする人や思ひました。」
家主のお婆さんが、それについて話すところはかうであつた。
去年の五月頃田原が、此處の二階に住んで居る女の處に東京から來て暫く滯在してゐた時分のことであつた。一方その頃、二月時分から始終女の處に來てゐる男があつた。それがその呉服問屋といふ人間で、女の母親が家主の婆さんに話してきかすところによれば、大變に女を贔屓にしてくれる旦那といふことであつた。その時分からよく着物など女に拵へてくれたりしてゐた。その男は、女の處に來るたびに、階下の茶の室の長火鉢の處に坐つてゐる家主のお婆さんの前を通つて二階に上つてゆかなければならぬので、毎時も出入りに丁寧にお辭儀をしてゐた。それで顏だけはよく知つてゐた。すると五月になつて、田原が來た。その時も女の母親は、家主のお婆さんに、娘が長い間大變に世話になつてゐる深切な旦那であると、譯をいつて、ある晩遲く外から案內して伴れて來たのであつた。お婆さんは、
「あゝ、さうですか。」といつて、知らん顏をしてゐた。
さうしてゐるところへ、田原が來てから四五日もして、例の呉服問屋の旦那といふ人間がたづねて來た。お婆さんは自分に關係のないことゝはいひながら、心の中で、はつと思つたが、その旦那は、
「今そこでお母さんに遇ひました。直き返つて來るさかい。いて一寸待つてゝおくれやすいはゝりましたさかい、歸らはりしますまで此處で待たしていたゞきます。」
といつて、茶の室の隅の上り框のところに腰を掛けて暫く待つてゐた母親は先刻そこまで使ひに出ていつて、二階には田原と女とゐるだけであつた。呉服問屋は暫く待つてゐたが待つてゐるためか母親がなか〳〵戻つて來ないので、出好きのお婆さんは自分も用があるので外に出掛けやうと思ひながらも賴まれた譯でもないので、迷惑な關所守りのやうなこととなつて、ひとり心の中で、何でお母はんは早う戻つて來ないんだらうと、やきもき氣を揉んでゐた。
すると呉服屋も待ちあぐねて、
「お母はん、えらい歸りが遲うおす。ちつと上がらしてもらひます。ご免やして。」
といつて、彼は上りさうにした。それを見た家主の婆さん

は、柔和な中にも威厳の具はつた顔であつたが、當惑さうな愛想を浮べるやうにして、

「えらいお氣の毒さんどすけど、お母はんの お歸りやすまで、どうぞ其處でお待ちやすとくれやす。」

言葉數も餘計にいはずに、凛としてさういつたので彼の男はそのまゝ又腰を落着けてゐるより仕方がなかつた。さうしてゐるところへ、そんなことゝは夢にも知らぬ田原がとんと段梯子を下りて來て、婆さんに輕く最釋をしながら、

「毎度お邪魔をいたします。ちよつと出てまゐります。」といつて、下に待つてゐる男の足許に脱いであつた下駄を穿いて出ていつた。

そして田原が出てゆくと、彼の男はもう家主の婆さんに遠慮もせず、すぐさま、長火鉢の前を通つて二階へ上つていつた。お婆さんも、もう構はずにゐた。すると、毎時もは來ると暫く居つてゆくのに、今日は直ぐ下りて來て、浮かぬ顔をしてお婆さんに挨拶もそこ〳〵に歸つて去つた。階上で女に何か非道くいはれたのであると察しられた。それから間もなく母親も戻つて來た。

「そんなことがあつてから、お重さん久しい間、そのお人の行かはるお茶屋から迎へに來ても斷つておいきしまへなんだ。お重さんその時、斷りなしに人の家へ上つて來たいうてえらい立腹おしやした。」

田原は始終の話を初めて聽いて呆れもし、今更に深く考込んだ。そして、去年のその時分の記憶を凝つと思ひ浮べようとしてゐた。なるほどさういはれてみれば、一度、散歩に行くと行つて二階から下りて來た時に、そこの上り框の處に腰を掛けて腕組みをしてゐる人間が居つたことを微かに思ひ出す。それは、質素な木綿の茶つぽい羽織を著て、紺の前掛けを締めた、三十六七の色の淺黑い、一見土地の呉服屋か何か地味な商人風の男であつたやうに思はれる。田原はその時、格別氣にも留めず、家主の隱居さんの處へ出入りの悉皆屋でも用事で來てゐるのであらうくらゐに思つたゞけで、今それを言ひ出されるまで忘れてゐた。

「あゝさう仰有れば、あの時此處にそんな人間が腰を掛けてゐたことを思ひ起します。」

「あれがお重さんの旦那はんどす。」

田原は實に臍を嚙むといへども及ばぬ悔しさを感じた。そして、

「何だ、あんな奴が旦那といはれてゐるのか。」と思ふと、彼は益々自分の器量が下つたやうな侮辱を感じた。

「つまらない、手代か何かのやうな風をしてゐたでせう。」

「さうどす。何時も堅い風をしてはります。京都では好い商人ほど皆な地味な風をしやはります。」

田原は映畫に表はれる西洋の探偵が、心を靜めて味の好い

葉卷の煙をぼかり〳〵と吹かしながら、全身のイマジネーションを一點に集中して、六ケしい謎を解かうとする時のやうに、隱居のお婆さんのいふ言葉を頼りに、自分の去年の記憶をもう一度明瞭に腦裏に浮べ出さうと努めた。しかし氣に留めて見たのでない、その顔はたゞ茫乎と霞を隔てゝ物を見るやうに思ひ出されるだけであつた。

なるほど、中京あたりの堅い商人は、京都特産の美術呉服物などを取扱ふ商賣をして居りながら、自分には、商賣冥利で木綿物を身に着けてゐるやうな人間がめづらしくない。隱居のお婆さんの話の樣子では、何でも處は中京あたりに違ひない。店には相當多勢の手代や丁稚も使つてゐるらしい。

内がひどくやかましいので、遊びに來てゐる時分から、決して身裝など作つてゐることはなかつた。毎時もたゞ、ちよつと其處まで用足しに出たといふやうな風であつたといふ話からほゞ想像することが出來る。田原は、中京あたりでよく見受ける呉服屋の店頭をいろ〳〵に想像を描いてみた。そして、その時見た顔の記憶は薄れてしまつてゐるが、もし、そこらを歩いてゐて偶然その人間に行き會つた場合に、以前の記憶を呼び起さぬとも限らぬ。彼はさう思つて中京の街をあちら此方歩いてみた。

失戀の憤恨と孤獨の寂寞とに苦められて氣の狂ほしくなつた田原は、夜など寢床の中で眠られないでゐると、荒れ馬の狂ふ如く神經が無暗に興奮して來て、想像は飛ぶやうに〳〵湧いて起るのであつた。中京あたりの問屋の店構へが瞑つてゐる眼にまざ〳〵と見えた。四間々口五間々口の半ばは太い紅殼格子になつてゐて、入口には白い文字を染め拔いた、黒か澁染めの暖簾が掛つてあり、廣い店の間には卷いた物があちらにも此方にも山ほど積み重ねられて、手代や丁稚が急しさうに荷づくりをしたり、卓上電話で取引の商談をしたりしてゐる。廣い土間の奥にはも一つ入口があつて、そこにも暖簾が掛つて居り、中庭の方に通うてゐる。

そんな商家の主人が、家内には飽くまで祕密を守つて外に女を隱してゐる。その女には遠うから馴染みを重ねてゐる人間があつて、その男は、女の爲めに裸體になるまで貢いでゐた。そして最後に女はやつぱり、土地に居附きの堅い商人を信頼して、今その世話になつてゐる。何でも聞くところによると向うは養子であるといふことだ。養子の分際で、恐る〳〵女を圍つてゐるところが、田原には、せめての無念晴らしである。今に見てゐろ、何時かは姓名を突留めて、番頭や手代の多數居竝ぶ店先にいつて、尻を捲つてやるんだ。さう思ふと、彼れ自身が恰も芝居の中の人間のやうに思はれて、頻りに氣が逸つた。しかし、自分は何にも好んで芝居の眞似をしようとするのではないのだ。自分はどうあつても、是非とも

女を取り戻さなければならぬのだ。その爲には、たとひ如何なる恥辱を忍んでも厭ひはせぬ。あの女が自分の物にならなければ自分の生存の興味も理由もなくなるのだ。あの、氣に入つた女を人手に奪られて、空しく生きてゐるといふことは、まるで中途半端な生存である。そんな、いゝ加減なところで折合を付けたやうな、不徹底な生活をして何の樂み、何の滿足があらう。さう思ふと田原は、自身の肉體を砲彈の如くに向うの男の本陣に向つて打突かつて行きたかつた。

しかし待て、目的は、たゞその女を自分の所有にしさへすればいゝのだから、下手に事を荒立てゝ虻蜂取らずに了つては可けない。さうするには何處までも一應は穩かに出て、此方に最後の成功をさめることが肝要である。そんなことをそれからそれへ、と取留めもない空想に驅られてゐると、今にもその男の家が分つて、自分がそこへ乘込んでいつてゐる光景が又しても眼に見えて來るのであるが、ほつと我れに返つて氣がつくと、それは何處の誰れであるのか、まるで雲を捉むやうな當てのないことなので、彼は極度に神經の疲勞を身に感じつゝ、獨りで手にじつとり汗を握つてゐた。

田原は、あの時そんなことがあつたと知つて、それについて尙思ひ起すことがある。彼が久し振りに東京から來て暫く女の處に居つた時、彼女はぼつり〳〵思ひ出したやうに、長い間慘苦を嘗めて來たことを話して聞かすのであつたが、それは、今の境遇が以前に比べて大分氣樂になつたところから辛かつた過去を振返つてみるといふ風であつた。

「長いこと御心配かけましたお蔭で、わたしもこの頃やつと少しは樂になりました。もうそんな長いこともありません。」

といつてゐた。それにつけて彼女は、ある客で、殘りの借金を拂つて商賣を廢めさせてやらうといふ人間があるけれど、それは斷然ことわつてゐると話してゐた。彼女が二月時分一ケ月ばかり病氣で寢てゐる時、茶屋に招ばれてゆくほか、自分の居處など知らしてゐなかつた筈であるのに、日頃ゆきつけのお茶屋の女衆を案内にして出し拔けに彼女の寢てゐるところへその男は菓子など持つて見舞ひに來た。知らさない自分の住居へ不意にやつて來られたのが、ひどく彼女の機嫌に障つたが、そんな顏も見せずにゐると、彼の男は母親にもいろ〳〵な深切な口を利いていつた。そして日を更めて、そのお茶屋を通じて商賣を廢めてはどうかといふ話を進めて來たのであつた。その人間には女房もあり子供も二三人あることを知つてゐた。

「御深切なお言葉は難有うおすけど、ちよつと私一人の考へにいけまへんよつて、その話は暫時お斷りしておきます。」といつてゐた。

彼女はそんなことを嘗て田原に語つてきかせたことがあつた。彼はその話を女から聞かされた時に、はじめて報いられたやうな、愉快な滿足を覺えたのであつた。長い間辛苦を重ねて女に仕送つてやつた一念が屆いてその效ひがあつたと思つた。女の心が堅くその男の勸誘を拒んでゐるか、どうか、田原は自分の何につけて不如意な今の乏しい境地を振顧つてみると、自信の勇氣は根こそぎ挫けてしまつてゐるかのやうで何だかまだ十分女に心の許せないやうな氣がするのであつたが、それについて、もつと委しく突込んで彼女の意中を訊ひ糺してみるのが憚られた。

「その時引かすといつたのに對して、あんた何といつたの、」

「さうどすさかい、あんたはんに相談せんと、わし一人の考へにしては惡い思ひましたから、お斷りしました。」

「あんたが、何處までもその決心でゐてくれるなら、私の方の力の入れ效ひもあるといふものだ。どうかもう暫くその氣持を變へずにゐてもらひたい。」

「安心してとくれやす。噓はいひまへんよつて。」

「あゝ、さうか〳〵。」田原は、それですつかり悅に入つてゐた。

それを後になつて今から考へてみるのに、話の樣子がどうも同じ人間に相違ない。

家主の隱居さんの話を思ひ合すと、女はその時あんなことを云つてゐながらも、その男は絕えず入り込んでゐたのであつた。

一度かういふこともあつた。田原が女の處に足を逗めてゐる時分、中を十日ばかり旅に暮して又京都に歸つて來た。もう梅雨の半で、鬱陶しい雨はその日も朝からじと〳〵降り罩めてゐた。田原はステーションから車で彼女の住家へ來着いてゐると、じめ〳〵として薄汚い路地の中はいとゞ暗くて悒かつた。俥を返して庭へ入つて訪ふと、階下の隱居さんも留守と思はれて返事もない。內庭の中仕切の潛戶に手をあて、引張つてみたが開かない。はては二階にも皆な留守かと思ひながら續けて高い聲で、「ごめんなさい。」と呼んで暫く薄暗い內庭に突立つてゐると、とん〳〵と段梯子を踏む音がして、誰れか降りて來た樣子である。やがて中仕切りの潛戶を開けて、

「どなたはんどす?」

と低聲にいつて、用心したやうに顏を差覗けたのは女の母親であつた。そして、そこに田原の顏を發見すると、彼女はちよつと當惑したらしくさつと顏を曇したが、田原が優しい調子で、

「只今戻つて來ました。」といつたので、彼女も幾らか笑顏をつくつて、漸つと「おかへりやす。」と間の拔けた言ひ方をした。それから、

「ちよつとお待ちやしとくれやす。」といつて、そのまゝ彼女

は急いで二階へ戻つていつたが、やがてすぐ又降りて來て、

「ほんなら、どうぞ一寸こちらへおあがりやして〻おくれやす。今ちよつとお客さんどすさかい。すぐ歸らしますよつて、」と云つて、田原を、階下の家主の使つてゐる六疊の座敷の方へ案內した。

「えらい濟みまへんけど、こゝで暫くお待ちやして、」といつて、母親は襖をぴたと閉めて又すぐ二階の方へいつたが、間もなく今度は娘が降りて來て、笑顏で田原を迎へながら、いきなり彼の傍に來て、べたりと坐つた。

「おかへりやす。えらい早うおしたなあ。」

「もつと居るつもりであつたが先達て中此處に暫く居つ見てると、こゝにゐるのが何處よりも好い。」

「今ちよつとお客どすさかい。あんたはんお顏差すといけまへんやろ思うて、すぐ去んでもらひます。」

そんなことをいつてゐるところへ、二階から誰れか人が降りて來て茶の室の方から歸つて行く樣子であつたが、それを送つていつて來た母親は、客を送り歸しておいてから閉切つてあつた襖を開けて、

「さあ、どうぞ二階にお上がりやしとくれやせす。」といつた。

「大變早く。」と、田原は口の中でいつたが、その時、先刻からの母親の顏の樣子といひ、何かしら胸に疑念が浮んだので、彼はすぐ二階に上つてゆくところを、緣側の方の障子を開けて、梅雨の降りそゝいでゐる狹い前栽の方に何となく眼をやつた。と女が傍に立つてゐるので、彼は端なく疑ぐり深い樣子をするのが氣が咎められたが、それでも、庭から門の方に出てゆくところと、狹い前栽とを仕切つた低い板塀の方をそれとなく見てゐると、そちらに今丁度歸つて行く客の下駄の跫音と〻もに、新しい麥藁帽子と鼠色のセルの夏外套のかげがちらつと眼に映つた。田原は何だか胸苦しいやうな疑惑が矢の知く走り過ぎたのを覺えたが、それを口には出さなかつた。

それから二階にあがつてくると、二階の八疊の方の火鉢の脇に座蒲團が二つ向ひ合つて置いてあつて火鉢の中には敷島の吹殼が何本となく灰に立つてゐた。田原はそんな物が本能的に何より先きに眼に映じた。そして一寸息を吞み殺しながら、何氣なくふつと女の方を見ると、不思議に彼女の眼と視線ががち合つた。彼はすぐ眼を外らしてしまつた。

女はそれから間もなく支度をして店の方に出ていつた。

今になつてみると、そんなことゝ知つたら、あの時何で、もう一といき疑念を突込んでみなかつたか。殘念で堪らない。女の氣持ちに、うつかり此方の心をゆるしてしまつたのが、返す〴〵も不覺であつた。それは、しかし最早千遍悔んでも仕方がない。白い麥藁帽子と鼠色の夏外套の色は今も眼に見

ゐやうにのこつてゐるが、たゞそれだけでは何の手がゝりにもならない。

それで、家主の隱居さんは、自分の處に女が居つた時分からの推測と、此の間中二三度も行くたびにその男に出會したことから、今もなほ始終女の處に來てゐるに相違ないといふのであるが、近頃又田原との間に立つて女の方に口を利いてゐる、彼女とすぐ壁隣に入口を竝べた家の人間の話すところによると、そんな男の來る樣子はつひに見掛けぬ。夜遲くでも忍んで來れば分らないが、晝間そんな人間を見たことがない。尤も最う一と月ばかり前であつた。隣家の人間が此の事に仲に入つた當初、一度午前中ある男が女の家に入つて來たことがあつた。その時隣家の人間は路地の內で、彼の男の歸つてゆくところを聲を掛けて自分の家に呼び入れ、それとなく樣子を訊いてみたことがあつた。その時彼の男のいふところによれば、なるほど田原といふ人のことも一寸聞いてゐる。自分はかうして女母子の境遇に同情して、世話はしてゐても、始終此處へ入り浸つてゐる譯でもなく、無論自分に妻子のある身である。それゆゑ、かうしてゐる間にも、女二人を引取つて一生養つてくれる深切な人間があるなら、自分は悅んで仲に入つて口を利く料簡である。その田原といふ人は、どうです、結構二人を見てくれるほどの力のある人ですかどうですと向うの方から訊き返した。その時隣家の人間にしては、田原を知つてゐるといつても、つい二三日前から初めて口を利き合つたくらゐのことであつたから、田原について委しいことは知つて居るはずもなく、それを保證するやうなことは何ともいひ樣がなかつた。すると彼の男は、

「親子の者も、あんたはんには深いお世話になつた御恩報ぢや思うて、暫くかうさせて貰うてゐますといふて居ります。」

と、自分の方の器量の好いことをいつておいて歸つた。しかし、それきりその男は殆どやつて來ない。そして尙ほ隣家の人間は、

「さうどすけど、あの旦那とはどうしても思へまへんなあ。身裝（みなり）かて、そら汚いなりをしてゐます。」

といつて顏を顰めるやうにした。

「へえ、汚いつて、どんな身裝をしてゐます。」

「どんなて、ちよつと申されまへんけど、ぢゝむさい風どす。內でもさういうてました。あれがもし旦那といふのが本當でしたら姉さんが可哀さうどす。」

隣家の人間は心から女に同情するやうにいつた。すると傍にゐたそこの若い女房も同情に堪へぬといつたやうに、

「本間にさうどすせ、えらい、こんなことというて、あんたはんに失禮どすけど、そら、とてもあんたはんと比べられしまへん。一體お重さんどんな氣どすのやろ、內でもいうてゐま

す。」

「そら、人ちうもんは見掛けばかりでいへまへんけど、あんなんどしたら、此の間お重さんのおいひやしたのが本心に違ひおへんやろ。」

亭主は又言葉をつゞけた。

そんなことを聞くと田原は、せめて幾らか慰むるところがあつたが、その男のいつたといふことが癪に障る。人を馬鹿にしてゐやあがる。田原といふ人は女母子の者を未始終見て行けるだけの腕のある人間かどうかは隨分見縊つた言ひ分である。定めし、舟を自分の岸に繫いでゐるので、そんな勝ち誇つた口を利いてゐるのであらう。可矣々々今に店先に乘込んでいつて趺坐をかいて尻を捲つてやるんだ。田原はそんなことを聞かされると、又、一刻片時も辛抱して待つてゐられないやうに氣が逸つて仕方がないのであるが、對手が誰れといふことが皆目分らないので、たゞ徒らに神經を疲勞さするばかりであつた。

女の處で度々その男に出會つたことのある、家主の隱居さんは、旦那らしい人間はそれつきり姿を見せぬといふ隣家の者の說を否定して、むしろそのいふことに深い疑ひを挾んでゐるのであつた。

「何云うてはるのやろ、來んちうことが、おすもんか毎日々々來てはりますがな。……お重さんは又思ひ切つた遣ひ物をしやはるよつて。」

彼女は、隣家の人間が、女と田原と兩天秤にかけて、うまいことをしてゐるやうにいふのである。田原もそれには、どちらを信じて可いか甚だ迷つた。人柄や身分からいつたら女の隣家の人間は家主の隱居さんとは、まるで違つてゐた。けれども、あれきり男が來ぬといふのも、どうも空つきし噓とも思へなかつた。田原は、やつぱり、人のいふことばかりは安心して信じてゐられないので、身を斬るやうな庭の寒氣に身を曝しながら根氣よく毎晩のやうに、そうつと女の家の路地の入口のまはりを徘徊して、それらしい人間の出入りを見張つてゐた。が、つひぞそんな男に出會はなかつた。

さうしてゐるうちにも日の經つのは存外早くつて、寒い一月二月はいつしか過ぎて、ぢきに三月になり四月が來た。去年の冬の初紅葉の散る頃から丁度京都の冬空の色と同じやうに、陰氣に鬱結してゐた田原も、その頃になると東京から知つた者がやつて來たりして、少しはそのために氣まぎれたりすることもあつたが、深い失望と無念に傷けられた、生々しい胸の創痍は春が來ても花が咲いても癒すべくもなかつた。そして昔しの仇討ちを志願してゐる者が年中仇敵にめぐり會ふ機會を待つてゐるやうな苦しい緊張した心持ちを續けて、さま〴〵に肝膽を碎いてたが一向手がゝりもなかつた。

やがて京都の春も老いて初夏になつた。ある日田原は宿に命じて按摩を呼ばした。按摩はまだ三十ばかりの男であつたが、話の樣子では、その顧客先きは主に祇園の廓にあるらしかつた。田原は何氣なく按摩を對手に祇園の妓女の話などをしてゐると、彼は田原の關係のある女のことをもよく知つてゐた。

「あの人もう疾うに引かはつた。先の金山さんですやろ、よう知つてます。今度又その後の金山さんが出來ましたけど、……えゝ大夫さんどした。やさしい、えゝ人どすせ。」

「あゝさうかねえ。」と、田原は輕く返辭をしたが、さうなるともう自分の方からその上餘計な口を利かうとせずに、對手の口を探つてみた。彼は彼女の抱へられてゐた家へは一と頃始終出入りしてゐたのである。

「この頃は行かないのか。」

「えゝ、近頃ちよつと往きまへん。やつぱりその時の番どすさかい。」

田原はそれまで、いろ〳〵に迷つてとても效果はないと知りながらも、ある手蔓で、始終遊廓に出入りしてゐる松原警察の刑事に賴んだり、又大阪の方には本部のある私立探偵社などの手で探らしたりしてみたが、駄目であつた。それでその日は餘分に療治代を遣つて、明日も又來てくれる約束をして歸した。

翌日療治がすんだ後で、田原はやゝ改つて、

「時に、あんたに一つお願ひしたいことがあるんだがねえ。」

「何でごはりますか、私で叶ひますことやつたら。」

按摩は脫ぎ棄てた羽織を取つて引掛けながらいつた。「實はねえ、その金山といふ妓と自分とは大分入組んだ關係があるんだ。ところが、あの女の旦那といふのが誰れだか分らないんだ。それをぜひ知りたいと思つて隨分苦心して訊ねてゐるんだが、どうしても分らないのだ。それで君におねがひといふのはその旦那が何處の何といふ人間かうまく訊き合はしてもらひたいと思ふんだ。」

すると、山科の在所產れであるといふ小膽らしい按摩は、臆病さうな顏になつて、

「へえ、そら何とかして訊いてみたら、分らんこともおへんやろが、その爲に又向うに迷惑をかけて私の商賣の妨害になるやうなことでもおしたら、ちよつと此方が困りますよつて。」

「大丈夫だよ。君、そんなことのある害はない。それとなく氣に掛けておいて、噂ばなしの中に自然に訊かうとするのでなければうまくいかない。私もいろ〳〵な方法で探つてみたが昨日から氣がついてみると、これは君に賴むのが何より好い考だと思つたんだ。ぜひやつてくれたまへ。確かなことが分つたら、お禮は十分にするよ。」

「よろしい、一つ訊いてみまへう。」
「うむ、頼みますよ。」
田原はさういつて又餘分な療治代をやつた。
「こりや、ちと多うおす。」
「なに、少しばかりだ。取つといておくんなさい。」
「さうどすか、えらい濟んまへんなあ。」

田原はそれから間もなく、次第に近づいてくる京都の暑氣を避けて叡山に上つた。叡山で不自由な僧房生活をして、夏中三ケ月をそこで過した。無聊な僧院の質素な生活に全く興味のないこともなかつたが、幾日もつゞく貧弱な食物には流石に辛抱しきれなくなつて、東京に居る時に毎夏行き馴れてゐた箱根や日光などの繁華で便利な避暑地のことなどを遠く想ひ浮べて、懷しくなつて堪らなくなることがあつた。そしてそれにも係らず奮然憤りを發して京都を立ち去つてしまふことの出來ない、自分の囚はれたる心を不甲斐なく思ふのであつたが、またその反對に、どうしても京都に殘る無念をすつかり晴らしてしまはなければ、死んでも他へは往かれないといふ氣持ちをどうすることも出來なかつた。

彼は僧院の貧しい食物がつく〴〵果敢なくなつてくると、半月に一度くらゐ山の上から下りて來て、四條あたりの繁華な夜の街を散歩して、幾日も肉食に餓ゑた胃の腑を存分に充たすのであつた。それには、かねて事を頼んである按摩に會つて結果を訊かうとする用事もあつた。摩按は祇園町のちよつと横町に入つたところに、多勢同業者のゐる店があつて、電話が掛つてくると、そこから方々に派出するやうになつてゐるのであつた。田原はそつと彼を呼び出して近所の洋食屋の屋根上に出て涼みながら、その後の様子を訊いてみるが、どうもまだ好い機會がないといふのであつた。

そんなことを何度も繰返してゐるうちに、やがて長いと思つた夏も過ぎて山の上には連日の秋霖が濛濛と一山を罩めて降りつゞいた。一時土用の最中には七八十人も集うてゐた僧院の避暑客もその雨とゝもに山を下りてしまつた。田原は一番遲れて下りて來た。いつまでも殘つてゐた殘暑もその雨を境にして、名ごりなく拭ひとられ、爽かな初秋の氣分が靜かな町に漲つた。

田原はその秋から、以前女の住んでゐた家のすぐ壁隣りの二階建の古い長屋を借りて獨りで自炊生活をしてゐた。按摩に會つて様子を訊いてみるが、相變らず手掛りもなかつた。

女はやつぱり同じ路地の中に住んでゐたが隣家の人間に訊いてみても別に變つたこともなかつた。田原もその頃は女の家を覗いて見ることは以前のやうにあまりしなくなつた。そして旦那といふ人間を探り出すことに專ら心を密めてゐた。しかし偶然の機會の來るのを待つてゐたのであるから、何時そんな機會が、來るといふ當てはなかつた。その間に田原は段々落着いた生活氣分になつて來た。今までの宿屋暮しとちがひ、たとひ不自由な男ひとりの自炊生活であつても、自分で一軒家を持つて暮してみると、當てないその土地に根を下ろしたやうな落着いた氣持ちになつてくるのであつた。簡易な生活にもなければ不自由を感ずるやうな、細々した茶道具のやうなものや火鉢などを、街を探して買ひ求めて來たりするにも興味が生じて來た。さうして悠然氣長に好い機會の來るのを待つてゐた。

すると、その年ももう十二月に入つてから間もなくであつた。田原は二階にゐて机に凭つてゐると、門のところから、
「おいでやすか。」
と、聲を掛けた者があるので、障子を開けると按摩が立つて此方を見上げてゐた。
「やあ、どうぞ。」
田原は心の中で、はゝあ、好い話を持つて來たなと直覺した。これまでは毎時も、こちらから、催促するやうに訊いてゐたのであつたが、向うからわざ〳〵やつて來たのは、何か變つたことがあるにちがひないと、さう思ひながら、彼は早速階下に下りていつて按摩を二階に通した。
「どうしたです。」
按摩はのつそり其處に坐りながら、
「分りました。」と微笑んだ。
「ふむ、分つたか。どうして分つた。」田原は火鉢の方に乘り出した。
「何といふ人間だ。」つゞけさまに問ひかけた。
按摩は落着いた調子で、
「それは今いひますが、……えらいこれやて。」
と拇指と小指とを喰附ける形をしてみせた。
「えらいこれやて、どういふんだ？」
「えらい熱々やて。」
「あゝ、さうか。それで女もその男に惚れてゐるといふのか？」田原はそれを氣にするやうに訊いた。
「さあ、それは、どや、知りまへんけど、これがえらい熱心やて。」と拇指を示した。
按摩が巧く探つて來た筋路はかうであつた。つい一昨日の晩彼はある行きつけのお茶屋に呼ばれて仕事にいつた。いつてみると、それは以前から時々療治に呼ばれたことのあるお客であつた。その客の伴れの客が金山の馴染みで二人は毎時も一緒に來て遊んでゐた。その客の馴染は一馬といふ妓であつた。それで按摩はその晩、その客の座敷に通されると、心の中で背いて、
「あ、この人に一遍様子を訊いてみたら分るかも知れん。」と

思つた。

そしてやんわり肩のまはりを揉みながら、

「旦那はん、えらいお久しおす。もう、てんと祇園にお見かぎりどすなあ。」と遠まはしに話しかけた。

「見限るちうこともないけど、長いこと來なんだ。」

「本間にさうどすなあ。あの、あんたはんとよう一緒に來てはりました、も一人の旦那はんは、此の頃どないしてはります。相變らず御機嫌よろしうおすか。」

「金山の旦那か。」

「おう、さうどしたなあ、太夫さんは金山さんどしたなあ。」

按摩はわざとそのことは疎いやうにいつた。

「あの男も來やへん。」

「何でどす？」

「金山を引かして圍うてるよつて、もう獨り占めや。」

「あ、さうどすか。」

と按摩は口の先で何の事なくいつたが、心の中では、暗い夜道を歩いて來て急に明るみに出會はしたやうな思ひをした。こゝまで分ればもう占めたものだと雀躍りするやうな氣持ちで、それでも尙ほ確かなところを聞かうと思つて、

「さうどすか、……それ本間どすかいなあ。嘘とちがひますやろなあ。」彼はわざと戲談のやうに呆れた物の言ひやうをした。

「嘘いうたかて、あかんがな。えらい熱々や。」

客は仰山にいつて笑つてゐた。

「さうどすか、そらまあ、結構なことゞすなあ。」

「うむ、あんまり結構なこともないやろ。」

「なんでどす。」

「内のこれが喧しいよつてな。大將きつう祕密にしてよる。養子やさかいこれに頭上らんのや。」

客は又拇指を出してみせた。……「それに又あの女子に東京の小說家が附いてるちう話や。」

「あゝ、さうどすか。」

按摩はそれだけ聞くと、もう胸の中で舌を出すやうな氣持で、占めたと思つた。そしてわざと暫く間を置いて、

「あの旦那はんお名前何とかおいひやしたなあ。先度よう呼んでもろてお處も名前も聞かしてもろてゐましたけど、もう暫くになりますよつて、てんと忘れてしもた。」

その實、名も處も聞いたことはなかつた。

「名は吉田友次郎、處は三條小路衣の棚や、俺とは丹後縮緬問屋に奉公してゐた時分からの長い友達や、もう二十年からの交際しとる。」

客はべら〳〵話して聞かした。

「おう、さうどしたなあ。吉田友次郎さんいははりましたなあ。處は衣の棚どすかいなあ。」

そのうち療治がをはつたので、按摩は、

「吉田さんの旦那はんにおあひやした節にはどうぞよろしいうて賴みます。」といゝ加減なことをいつて歸つた。

一伍一什を聽いて田原は會心の笑みを湛へて、

「それは難有う。大變なお骨折りであつた。探してから丁度今でまる一年になる。もつと早く君のやうな人に賴むことに氣がつけば餘計な手數を掛けずに濟んだのに。難有う〳〵。」

田原は幾度も繰返して心から禮をいつた。そして早速懷中物の中から、なけなしの拾圓札を惜げもなく取り出して、

「これは、ほんの少々だけれどお骨折りのお禮のしるしだ。」

といつて差出した。

「すると、小心な按摩はすこし意外の金にすぐに手に取ることを躊躇しながら、

「こんなん入らんことどす。」

「いや、私のつもりではまだ少いのだけれど、度々君にも聞いてもらつたとほり、長い間その事で此のとほり微祿してゐるやうな有樣で。」

「ほんまにお氣の毒さんです。……ほんなら遠慮せんと貰ろときます。」

按摩は金を懷中に藏ひながら、

「私も、あんたはんにあゝいうて賴まれてゐましたさかい、これで、ちよつと長い間氣い使ひました。」彼もほつとするやうな顏をしていつた。

「さうだらうとも。幾らその商賣の人間でも、氣轉が利かないと巧くゆかない。」

按摩が歸つた後で、田原は又一人きりになると、恰も多年の艱難辛苦の結果探ねあぐんだ仇敵にめぐり會つたやうな天にも昇る勇んだ心持になつた。「おのれ畜生、去年の暮からまる一年の間といふもの、實に口にもいふことの出來ない辛苦と屈辱を嘗めて來たことを思ふと……。」

彼は拳を握りしめてひとり言をいつてゐると、言葉は咽喉に詰つて玉のやうな熱い淚がほろ〳〵と兩方の頰を流れ落ちた。そして百策盡きて按摩を手先に使つて安々と奇功を奏したことを思ふと、自分ながら、窮すれば窮して、うまい智慧の出るものだと、思はず獨り笑ひをしたいやうな心地にもなつた。

「よし、これからすぐ今日にも向うへ押掛けて行きたいのだが、今晩はまあ、じつくり心を落着けて十分熟睡し、明日は早速乘込んでやる。」

彼はやつと一年振りに、胸の溜飲が下つたやうな氣持になつて、その晩は足も輕く祇園町から四條通りの方をぶら〳〵歩いて來た。

翌日はいつにない早く起きいでて、朝飯もそこ／＼に濟ますと、早速行李の中に藏つて置く一張羅の着物を取り出して着た。彼はそんなに尾羽打ち枯して女のことに憂き身を窶してゐても、まさかの時に身すぼらしくないだけの一とほりの着物は用意して置くのであつた。それは恰も仇討ちを志してゐる者が晴れの勝負の時に用ゐる白裝束だけは、どんなに困窮しても用意は忘れないのと似たものであつた。もう長年の間女のことで眞裸になつてゐても、それだけは手放さずにゐる古くから所持の藍色くづし縞の結城の綿入れに茶格子の結城縮の羽織を來て、無地紺博多の細仕立ての帶をきつゆと締めて、その上から一つぽんと腹を叩くと、ひとりでに武者ぶるひをするやうな滿身の元氣が湧いて來るのを感じた。しかし彼は芝居じみた餘裕のある氣持などは少しもなかつた。何處までも仇討ちに出掛ける者のやうな緊張した氣持であつた。

外に出ると陰氣に濕つた薄暗い空から粉雪のやうなものが、ちら／＼顏に散りかゝつた。田原はそのために一層身體が引締まるやうな心地になつて、三條姉小路衣の棚を探ねていつた。

どんなに小さくつても五間々口の紅殼格子に、暖簾の掛つた老舖構への店頭につゝと入つて行くのだと思ふと、彼は電車に乗つたり道を歩いたりしてゐても胸は早鐘を撞くやうに躍つた。

烏丸三條で電車を降りて少し入つてゆくと、なるほど衣の棚と記標の出てゐる町はすぐ見付かつたがそこらは同じ中京でも大店や老舖を竝べた目抜きの場所とは大分邊鄙になつてゐると思はれて田原がかねて想像に描いてゐたやうな店構への家はそこらの四辻を何遍彼方にいつたり、こちらに戻つたりして見ても、ねつから見付からない。そして昨日按摩から聞いた番地と吉田友次郎といふ表札を探ねて歩いたが、番地は見付かつたけれどその名前はどうしても見付からない。同じ處を何度となく往つたり來たりしながら、さては又誰れかに騙られたのであるまいかと疑惑の念に騙られて、そこらを軒竝に覗いて行くと、吉田つると女名前の表札の出てゐる家を一軒發見した。番地も聞いたとほりであるが煤けた入口に狹い格子戸の嵌つた。仕舞た屋づくりで話に聞いた盛に商賣をやつてゐる家とはどうしても受取れない。田原はそれで一旦引返して、もう一度按摩に念を押したうへのことにしようと思つて、その前を立ち去らうとしてふと氣が附くと、吉田つるといふ女名前の表札よりはずつと小型の表札が、それと離れたところに別に打着けてあつて、それに吉田友次郎と書いてある。けれども、そこらの軒下の壁の色や木柱の色が名札と同じ色に黑く煤けてゐるので、ちよつと見て歩いたくらゐでは容易に氣が附かない。

「はゝあ、ぢや、やつぱり此の家だな。」

と、田原は心の中で肯いたが、何だか、ひどく拍子抜けのしたやうな心持ちがした。そして、あれほど意氣込んでやつて來たのが詰らなかつたやうに思はれた。彼はそれでも折角來たのだから入つていつてみようか、どうしよかと、人通りの少い家の前に立つて暫く躊躇してゐたが、思ひ切つて格子戸の外から、

「ご免なさい。」と聲を掛けた。

その家の子供であらう。穢い子供が二三人羽目の外の廂合ひのやうな處に蓆を敷いて遊んでゐたが、大人はゐないのか家の中から返事も聞えない。少し間をおいて、二度ばかりご免なさいとつゞけていつてゐると、やがて奥から鈍い女の聲が洩れて來たので、彼はそれを聞いてから格子戸を明けて入つた。狹い庭の中に立つてみると、かねて想像に描いてゐた光景はます／＼裏切られた。古く住み荒した疊の上に貧乏臭い蓆を敷いて、見たところ、盛に商賣をしてゐるらしい様子などはない。

そこへ出て來たのは、細君であらう、年の頃もう三十七八の古女房で、無論、類型的に、他の土地の者がよく想像してゐるやうな京都風の女とは、まるで違つた、普通の在所の女である。

「おいでやす。どなたさんでござりますか。」

と女房は丁寧な言葉で上框の處に來て膝をついた。

「はあ、私は一寸遠方の者ですが、只今御主人は御在宅ですか。」

「あ、さいでございますか、今朝は一寸外に用事がござりまして、早うに出やはりまして、只今は生憎と留守でござりますが……何か御用で？」

田原は、決して芝居をするつもりではない、それどころか血の涙の滲むやうな生命がけの問題にかかつてゐるのであるが、それでも、長い間いろ／＼に想像して、ひとりで興奮してゐた演劇的光景が、あまりに彈力のない現實であつたので、一寸、狐に撮まれてゐた者が正氣に返つたやうな、張りのない空虚を感じた。

田原は、亭主が留守であるのを幸ひに、此處で何も斯も一切のことを素つぱ抜いてやらうかと思つたがいや、まて。そんな氣の逸つた打ち壞しなことをしてしまつて、對手に向ッ腹を立てさせては後の話が盡も實もなくなる。堪忍のうへにも堪忍をして、最後に女を此方の物にするまでは何處までも我慢の蟲を耐へてゐなければならぬ。咄嗟に又さう思案を仕直して、

「あ、さうですか。それでは又更めてお伺ひいたしませう。」

と、田原は少し考へるやうにしてゐると、

「さいでござりますか。えらい生憎でござりました。何どしたら、わたくし御用向をお聽きいたして置きませうか。」

「いや、又出直してまゐりませう。」
といつたが、田原は、女房が亭主の外の祕密を知つてゐるかどうか一寸探りを入れてみるつもりで、
「あの……御主人は近頃も相變らず安井の方へ毎度お出掛けになりますか。」
と、輕く謎のやうな問ひをかけてみた。果して女房には飽くまで祕密にして女を隱してゐるものか、それとも又薄々知つて默認してゐるものか、世間にはその關係に色々のがある。もし家の細君が亭主の女道樂を大目に看過してゐるやうなのだと、親爺と談判する時に弱い尻を捉へて嚇かすことが利かない。又かねて聞いてゐるとほりに養子などであつて內儀さんにひどく氣兼ねをしてゐるのだと、談をするのには極めて此方に都合がよい。
で、さういふと、女房は、何のことか十分了解めぬやうな顔をして、
「安井？」と小頸を傾げながら、「安井……あんまり聞きまへんどすなあ。」と、矢張りおとなしい物のいひやうをする。
田原もやさしい調子で、
「あの、安井の金比羅の境內にお知り人があるでせう……」
と、やゝ委くいつてみた。
「へえ〳〵安井の金比羅、よう存じて居ります。」
「あそこに此方の御主人の御懇意な方がありますのでせう。」
田原は笑顔をして、重ねてさういつてみた。
「安井の金比羅に、內の懇意の方で……ちよつと聞いて居りまへんですなあ。」
女房は、やつぱり飲込めぬ風である。
「それでは又いづれ。」可矣々々と心にうなづきながらさういつて田原はその家を出て來た。
對手の家がもつと堂々たる店構への家であると思つてゐたのが、すつかり想像とちがつたので、田原は何だかひどく張合ひぬけがしたが、とにかく亭主に打突かつていかねば腹の蟲が承知しないので、翌日又例にない早くから目を覺して、朝の起きぬけに時々行きつけてゐる圓山公園の茶店にいつて、パンと牛乳とで輕い朝飯をとりながらそこの電話を借りて、吉田の家へ電話を掛けてみた。
「どなたさんでござります？」と、初は女の聲がしたが、
「私は昨日一寸お邪魔をいたした田原と申す者ですが、今日は御主人は御在宅でせうか。」といふと、
「へえ〳〵今日はまだ早うござりますよつて宅に居ります。」
といつて、暫くしてから今度は變つて男の聲で、
「御用件は何でござりますか。」と向うから訊いた。
「あなたが吉田さんですか、あゝさうですか、私は田原と申す者ですが、田原と申せば、多分、お目にはまだ懸らなくつても私の事は御存じだらうと思ふのですが、その用件は今

此處では申しにくいですから、これから直ぐお宅の方へまゐります。どうぞ御多用でせうが、暫く待つていたゞきたいのです。」さういふと、
「へえ〳〵、それでは、えらい御足勞お掛け申してすみまへんどすが、お出でになるまで待つて居ります。」
「すぐにまゐりますから、どうぞお待ち下さい。」
田原は念を押しておいて、茶店を出た。先刻から大分雪花が散つてゐたが、さうしてゐるうちに段々本降りになつて、公園の樹木や遠山の姿が白く隱れてしまつた。田原はその中を祇園の石段下から電車に乘つて、三條衣の棚の吉田の處へいつた。
格子戶を明けて庭の中に立つて訪ふと、早速主人が立ち出でゝ、上框のところにちよこつと膝を突いて、
「おいでやす。何の御用でごはりますか。」
といふ調子は、腰の低い、穩かな物の言ひ振りである。色の淺黑い、小づくりの、見榮えのしない男で、何日か安井の家主の隱居さんの處で見た記憶は殆ど殘つてゐなかつた。が一見して吳服商らしい、無地の羽織に、前掛けをしてゐる。田原が意氣込んでゐたやうに、尻を捲つて啖呵を切る對手にはひどく物足りないやうな氣がした。それで彼も穩かな調子で、
「その用事といふのは、大抵貴下にはお察しがあると思ふのですが、此方でおはなしするのも何うかと思ひますが。」
といつた。すると吉田は格別驚きもせぬ顔色で、
「さあ、どんな御用事でござりますか、私には一寸考へられまへんどすが。」
と、頸を傾けるやうにして、京言葉の滑々したことをいふ。田原は腹の中で、
「白々しい。此奴め、なか〳〵喰へない奴だな。」と思つたので、少し白い齒を出して笑ひながら、
「いや、貴下にお察しの附かない道理はないんです。此方でお話しても私は一向構ひませんがな。……けれどもそれでは貴下に御迷惑ではあるまいかと思つて。何處かそこらまで御一緒に出ていたゞけませんか。」
「あゝ、さうですか。手前も貴下さんの御都合のえゝやうに、どちらでもよろしうござります。」と、柳に風のやうなことをいふ。
「いや、私こそ何方でも構はないのです。ぢや、お邪魔でも此方でお話しませうか。」
「ほんなら、一寸そこまで御一緒にまゐりませう。」
といつて、吉田はすぐ奥に入つてトンビを着て出て來た。
外に出ると、一としきり物の隱れるほど降つてゐた雪は小休みになつて、空の處々から日が射してゐた。
彼等はそれから烏丸通の電車道の方へ歩いて出ながら、田

原の方から先づ口を切つた。

「かねて貴下に一度お目にかゝつて委しいお話をしたいと思つてゐた、あの前田じうの事ですか。……よく貴下は彼等二人の者の世話をしてやりますなあ。」と、蟠りのない調子でいつた。

すると吉田の方でも、わざと何氣ない風を裝ふのか、

「いゝえ、世話といふほどのこともよう出來まへんけど、あの人達の境遇に、同情しましたものどすさかい。」

「なるほど……」

「よう聞いてますと、あんな處にいかんでよかつたどすなあ。」

吉田は妙に、話の中心から脇へ外れたやうなことをいふのであつた。そして、その言ふことによつて、あの娘と母親とが自分達に近づいて來る男には誰れにでもいふとほりのことを、いつてゐるのだなと、田原は腹の中で思つてゐた。

「えゝ、あの母子の者がいふところを聞けば一應さうですけれど。……私もそれに同情したのが始まりで。」

そんなことをいつてゐるところへ電車が來たので、二人はそれに乗つた。そして四條烏丸の乗換へ場の處に來ると、吉田は、

「これからどちらへお越しになりますおつもりで。」と訊いた。

「さあ、兎も角もまあ、洛東の方へ。」

そして祇園で電車を降りると、田原は、雪解けに濡れた道の上に突立つて、

「何處かそこらへいつて、何か食べながら話してもいゝんですが、私の處はすぐこの裏の方です。貴下知つておいでゝせう。菊水の家を。」

さういふと、吉田は商人口調で氣輕に、

「いえもう、何にも結構どす。さうどしたら、えらい御迷惑どすけど、あんたはんのお宅へお邪魔さしてもらひませう。入らんお金使はん方がよろしい。」

それから田原は吉田を伴れて自分の家へ歸つて來た。自分の家といつても、他に誰もゐないので彼は自分で火鉢に炭をついだり、新しく茶を入れたりしながら、

「あの女については、今改めて委しいお話をせずとも大抵御存じのことでせうと思ふんですが、私も長い間出來ぬ中から精一杯助力をしてゐるので、昨年來のことはどうも一寸私にしては納得しかねるのですが。」

田原は穩かな調子でさういつた。すると吉田の方も同じ調子で、

「いえ、格別委しい話も聞きませんけど、田原さんといふ方のことは、ずつと前から聞いて居りました。」

吉田は故意にか、どうだか、なるたけ自分の方からは話に

深入りせぬやうにしてゐた。

「それで貴下は、今後引續いて彼等の世話をなさらうといふお考ですか。」

「いや世話といふほどのこともようしまへんのどすけど、去年病氣の時に、あの人達の不幸にえらい同情しましたものですよつて。……近頃もう長いこと前田さんにお目にかゝりまへんが、いかゞでござります。格別お變りありまんどすか。」

吉田は何處までも正直さうに、そんな白々しいことをいふのであつた。長いこと前田さんにお目に掛らないといふのを掛引でいふのだとすれば、餘にり子供騙しである。さうかといつて、近頃前田の家へやつて來ないといふのもまるつきり噓とも思へないふしもある。

田原は又そこで、白々しいことをいふなといふ顏をして笑つて見せながら、

「さあ、私もしみ〴〵會つた譯ではありませんから、一向近頃の樣子は知りませんが。……それで貴下の御意向をお訊ねしたいといふのは、これから先き長く女を圍うて置くおつもりですか。」

田原は早く話の要領を得ようとして突込んで訊いた。すると吉田は意外といふやうな顏をして、目を刮目きながら、

「いや、圍うて置くなんて、ちよつともそんなことはおへん。」

「いや、さうでもありますまい。世間の者がさういつてゐるのですから。」

「世間の者が……誰がそんなことをいうて居ります。私そんなことは今日初めて聞きます。」

「いや、さうでもありますまい。皆がさういつてゐるのです。……此の事については貴下とお目にかゝるのは今日が初めてゞすが、去年の丁度今時分から一年の間私は隨分いろいろな人と會つて掛合つてみたのですが、誰でも、私に向つて、あんた今時分になつて、そんなことをいうたからて、もう、ちやんと金山さんにはえゝ旦那さんが附いてゐるやおへんか。人の圍うてゐるものを、そんなこというたかて明かへんがないといつて、笑つて對手にしないのです。それは笑つたつて構ひませんがな。しかし、いくら人を騙す商賣でも、さうは往きますまいと思ふのです。散々私から、引いたらお世話になります、あなたの方へまゐりますといつて、その爲に金を受取つておいて、そしてその擧句に他の男に寢返りを打つたのでは、そのまゝ、へえ、さうですかと默つて引込んでゐられない。」

「それは御尤。」

「それで、一度ぜひあなたにお目にかゝりたいと思つてゐたのです。」

「そやけど、私が圍うて居るといふはの自分には初めて聞く

ことゞす。一向自分に覺えないことゞす。」

「いや、しかし、こんなことを押問答したつて仕方のないことですが、貴下が世話をしてやらなければ、あゝして女が二人で遊んで食つて居られる道理がないぢやありませんか。」

「そりやさうどす。」

「さうでせう。」

「ほんなら誰れか他に金を出してゐる者があるんぢやありまへんか。」

「いや他にはない。兎に角それはどうでもいゝのです。私の方でも貴下が世話をして居られると認めてゐるのです。――尤も貴下が彼等の爲に世話をしようとせられまいと御自由ですが、私にしてはどうも去年來のまゝで濟ましてゐるといふ譯にはいかないのです。」

「それで、貴下さんのお考は、どういふおつもりでございます。」

「どういふつもりと申して、つまり女を私の方に引取ればいいのです。それは不承知だと向うではいふでせうが、そんなら前からの約束をどうするのだといふところです。」

すると吉田は氣輕さうに、

「そんなら、丁度都合がよろしいやおへんか。私一遍前田さんにお目にかゝつて母親によう話してみまへう。」

田原はそれを聞いて、腹の中で何をいつてゐるかと思つたが、吉田がそんなことをいふなら、一應向うの口に乘つてみるのもよからう。破壞は何時でも爲たい時に出來ることだ、急ぐには及ばぬと思案をきめて、

「貴下が話してみようといふお考へがあるなら、さうして下すつてもよろしい。」

「二三日中に一遍會うて、よう話してみます。その上で御返事をいたします。」

吉田はそんなことをいつて置いて歸つた。

その結果はどんなであらうとも、長い間知れなかつた人間を突留めて、それが女の方にどう反響するかを考へると、田原には興味があつた。

これから吉田の出樣によつて、仕事は何うにでも出來る。次第によつては女房に亭主の祕密を素つぱ抜いてやるのが一番痛快であると思ふが、それは最後に執るべき手段として控へておいて、吉田から女の母親に、此の結果がどう響いてゆくであらうかと心待ちにしてゐると、果して、その翌日であつた。絶えて人の訪れる者もない田原の侘び住居のところへ、がら〳〵と多勢女の下駄の跫音をさして、路地の門を明けて入つて來た者があつた。田原は立つていつてみると、それは思ひけもない女の母親の婆あを先に立てゝ、女が商賣をしてゐる時の抱主であつた女將と、その家でやりてのやうなことをしてゐる婆あと三人づれであつた。何處までも女に未練のある田原は　それを見ると、心の中で、

「はゝあ、吉田の話が母親の方に通じて、これは、ひよつとしたら、好い話を持つて來たのかも知れない。」と、早合點をしながら、

「どうぞお上んなさい。」と二階に案内した。

すると、田原と火鉢を挾んで向側に三人ずらり居竝んだ婆達三人の中で、一番上座に坐つた主人のおかみはきつとした顏をして、

「あたし、あんたはんに今日ちよつとお訊ねすることがあつて來ました。」と切り出した。

彼女はもう五十を大分過ぎてゐるといふことであつたが、今からまだ十五六年ばかり前までは揚卷といつて祇園で全盛を唄はれた太夫であつた。その頃當時の顯官や大盡にも多くの馴染みがあつて、何人といふ數知れぬ人を喰つて來た果ての女である。

田原はその顏を凝視りながら

「はあ、どんなことです?」

「あんたはん、お重さんの旦那はんのことを私の處で聽いたおいひやしたさうどすなあ。」

と、出し拔けに妙なことをいふ。

田原は笑ひながら、

「飛んでもない。私はそんなことをいつた覺えはありません。」

「ほんなら、誰にお聞きやした。」

「誰に聞いたつて、そりや云はれない。」

「聞いた人があるんなら云はれんことないやろ。」と、嵩にかかつて來た。

「それはあるが、全く別な方から訊いたのです。」

田原は、腹の中で、こんな奴等に丁寧な口を利くんぢやないが、何處までも女が欲しい一心から四方八方惡い感情を起させたくないと思ふので、飽くまでも短氣の蟲を抑制してゐた。

「だれからお訊きやした。今朝私、お母はんに不足をいうて來られてえらい困つてゐるとこどす。」

「もう一年も經つた今になつて、こんな古臭いこと、ほじり出して來て、人を困らせよる。」と、母親も傍から汚い口を入れた。

田原は、それを聞いて、わざと高い聲で、から〳〵と痛快さうに笑つた。人を困らせるといふのは、一體どちらが人を困らせてゐると思ふと、どい奴もこいつも勝手な奴等ばかりの揃つてゐるのに呆れた。あの病人じみた女が――いつも病人じみて嫋々として衣にも堪へかねる容姿をしてゐるところがひどく心に染んでゐるかも知れぬが――欲しいばかりに、

底の知れぬ馬鹿になつて、こんな奴等と辻褄の合はないことをいひ合つてゐなければならぬかと思つてゐた。
「さあ、誰れから聞いた。お母はんは、あんたはんが、お重さんの旦那のことを、私から訊いたおいひやしたいうて散々不服をいうて來てるのどす。あんたはんが聞いた人を明かしてもらはんと私が困ります。」
「それはいへない。しかし、おかみさん。あんたから訊いた覺えはない。」
「あんたはん、私から訊いたとおいひやしたらう。」
「そんなことは、いはなかつてば。」
「ほんなら誰れや、いうたのは。」母親が又傍から口を挾んだ。
「だれでもいゝ。そんなことは私の方の勝手だ。」
田原は、さういひながら、腹の中で、按摩の手で吉田を突留めた影響が大分向う側で波瀾を起してゐるのを見ると、せめて、それだけのことでも、彼には多少胸の透く思ひがするのであつた。しかし、長い間の死ぬほどの苦しみと惱みを思ふと、炭を喰ひ、面に漆を塗つて復讎を謀つた豫讓にも劣らぬ痛恨は容易に醫すべくもなかつた。
「何吐かす。さあ、いへ。」
揚卷の婆は俄に大きな聲を出した。
そんな場合になると、田原は却つて妙に氣が落着くのであつた。そして少時ぢつと對手の顏を見守つた。
「あんたの方で、ぜひともそれを訊ねる權利はないぢやありませんか。」わざと優しくいつた。
「權利があるがな。いへ。」
母親は又口を出して、橫から田原を小突くやうにした。
「何、しやがる。」田原は、半分身體を、そちらに捻ぢ向けた。
「この破落戸め、さつ〳〵と東京へ歸つて失せい。」
田原は、その言葉裏に母親の迷惑してゐる心の中を讀むと一層いゝ氣持ちであつた。
「はゝゝゝ。まだなか〳〵東京には歸らないよ。」
といつて笑つた。
すると、今まで默つてゐたおよしといふ遣り手の婆さんは、
「まあ〳〵皆な、そんなことをいはんと。」靜に仰へるやうにいつた。「田原さんも此方からは聞かんおいやすのやよつて、それが本間どすやろ。しかし何處からお訊きやした。いうてよろしいやろ。」彼女は穩に田原に向つていつた。
「うむ、それはいつても構はんが、全くあんた方に關係のない處から、ふと聞込んだんです。しかし旦那が誰と分つたつて差支へないぢやないか。」
「えゝ、それは構やしまへんけど、……お母はんがえらい今朝噎しういうて自宅へ來やはつたので、何處から訊きやしたか、一遍あんたはんにおたづねしてみよう思うて。」

「あゝさうですか。」と、田原は口の先きでいつたが、腹の中では、好い氣味だ。昨日吉田に會つて、もう、今日此のとほり母親が我鳴つて步くところをみると、吉田の奴め、昨日あれからすぐ母親に會つて、話をしたのだ。自分では、もう長い間彼等に會はぬなど、空々しいことをいつてゐたが、やつぱり始終會つてゐるにちがひない。自分が行くと、何時もぴつたり戶を閉めて入らせないやうにして置きながら、吉田に對しては自由に出入りさせてゐるのだ。
さう思ふと、田原は、近頃大分平靜になりかけてゐた瞋恚の焰がまた忽ち むら〳〵と胸の內に燃え上つて來た。
「畜生、この思ひを存分に晴してやるんだ。」
と、意志に鞭つて。
三人の婆達は、間もなく歸つていつた。

（大正十四年作、中央公論揭載）

葛城太夫

一

しと〳〵といつまでも降りつゞいてゐた春雨がやんで薄墨色の雲が散らけてゆくと眞蒼に洗ひ出された空から瑠璃のやうに艶やかな日の光が嫩い芽の萌え栽でた前の木々を蒸すやうに照らして黒く濡れた土地から湯氣のやうないきれが濃く立ち騰つてゐる。

陰氣に濕つてゐた部屋のうちが俄に明るくなつて來たのに氣がついて、今まで一生懸命に針の手を運ばしてゐた姉のおそのは、がくりと折れまがつたやうになつてゐた首をふつともたげてこの女のよくする癖の、白い額に恰悧さうに描かれた眉根のあたりに深い皺を刻むやうな眼をして明るい日光の映る障子の方を眺めた。

「あゝお天氣になりまつせ。一ぺんあこ明けまへうか、あんた寒いことおへんやろ。」

彼女はさういつて傍の病床に横つてゐる弟の方を見た。

また少し熱が出てきたやうで、さつきから頭を枕にうづめて微睡してゐた弟の梅雄はさういはれたので大きな二重瞼をぱちと見開いて姉の方を見た。長い間患らうてゐるにもかゝはらず不斷から色白の顔は透きとほるやうに白くなつて熱のせゐか兩方の頬の眞中だけがぼうッと薄紅を潮してゐる。

弟が自分の方を見たので姉はもう一ぺん、

「あこ明けまへうか、あんた寒いことないやろ。」

と、いつてきくと、

「あけとくれやす。」

梅雄は弱い聲で返辭をした。

お園は立つていつて緣側の障子をさつと開いた。

「はあ、鬱陶しい。かうしたらえゝ心持やろ。」

と、いひながら彼女は胸をひらくやうに太息をついてうるさく這ひさがる鬢のほつれ毛を纎細い指先で撫であげながらそこに立つて碧く晴れてゆく蒼空の方にその黒瞳がちの眼を放つた。

そこからは向の家の屋根ごしに智恩院の森も見えてゐた。低い築地塀に取圍まれた狹い庭には今しも一本の櫻花が春雨

のあとの花いきれを立てながら眞盛りに咲きほこつてゐる。

「ちよつとこの花を見とみやす。そこから見えますか。ようよう咲いてますやろ。」

姉はさういつて少し身をひらきながら病床の上の弟の方を振顧つた。

梅雄は熱に上氣したやうな顔をもの憂さうに枕の上に横向きにして、姉の言葉につれて庭の方を眺めた。熱臭い部屋の内に暖い日光とゝもに花の匂を含んだ新鮮な空氣が流れるやうに入つてきた。

長い間冬の寒さにいぢけてゐたものを何もかも一時に蘇らすやうな麗かな春光は今靜に天地に漲つてゐるのである。

「姉さんもう去んとお化粧がおそならへんか。」

病のせゐで神經が過敏になつてゐる梅雄はさういつて姉の歸るのが遲くなりはせぬかと氣にした。

「まだちよつとくらゐかまへん。お母はんが歸らはるまでにこれだけして仕舞ひまへう。」

お園は緣側から入つて來てもとの座にすわつた。そしてぼうッと汗ばんだ顔をして、

「おう暑。」

と、いひながら黑縮緬の不常羽織をぬいで傍におしやり、も少しになつてゐるめれんす友禪の蒲團の絎け殘しを取上げた。

「これ着たら、あんた身體が輕うなりまつせ。」

さういひつゝお園はせつ〳〵と針の手先をいそがした。すんなりとした身體に映りのいゝ高尙な黑地に白い立縞のあるお召の綿入れを着て針を動かしてゐる肩先が細つて纎細さうに見えてゐる。

「はやう良うなつてたら、私も姉さんの太夫さんの姿が見られたんやがなあ。」

姉の針を運ぶ手先を見るともなく寢ながら見まもつてゐた梅雄は長い自分の病氣をかこち聲にいつた。

「そんなもん見んかてよろしいから、どうぞ精だしてはやう良うなつとくれやす。」

姉は元氣をつけるやうに口ではさういつたが梅雄の病氣は遂に見込みはなかつた。

今年十八になる梅雄は小學校を卒業すると間もなく好い手づるがあつてさる電氣會社の給仕を勤めてゐたのであつたが温順しいうへに何より學問が好きなので月々もらふ僅かばかしの月給を持つてかへつてくるといつもそのまゝ一度は母親の手に渡して、その中から自分の小使にと分けてもらつた錢で英語や數學の本を買つては獨りで勉强をしてゐた。小學校を卒業したばかりで中學校にゆくことの出來ぬのが何よりも悲しかつた。十三の歳に父親に死別れてから、あとには母親と自分には四つ年長の姉のお園と三人きりの、はかないわが

家の生計に年老いた母や若い姉が苦んでゐるさまを子供ながらにもよく知つてゐるので同じやうに小學校にいつてゐた良い家の子供達が今はみな制服姿で中學校に通つてゐるのに、自分は朝會社へのゆき道に、時々以前の友達に行きあふことがあるのが何ともいへない恥しく羨ましいのを、思ふまゝにならぬのが今の自分の境遇とあきらめて、世間の子供が遠足だの活動寫眞だのと遊ぶことに心を奪はれてゐるのに梅雄は無駄つかひ一つしようともせず中學校にゆくかはり晩に會社から退けて歸つて來るとあとは家の内に引籠つて獨學自修に餘念もないのであつた。

　去年の暮にふと風邪をひいて十日ばかり會社の方を休んでから、それは間もなく癒つてまた今までのとほり毎日出勤してはみたけれど、どうかすると身體に熱のさしひきがあつて段々出勤も怠りがちになつてゐたが正月になつてからどつと寢ついて、そのまゝ枕が上らず醫者は遂に結核といふ無慘な宣告をさへ下してしまつたのである。

　それでも自分ではそんな病とは知らぬから、いつかは快くなるおりが來るものとばかり思つてゐるのが傍にゐる母や姉の心にはいつそいぢらしかつた。

「あゝ僕こんどようなつたらどないしてゞも東京にいきたい。東京にいてどんなことしても勉強して出世して、早うお母はんや姉さんを樂にしてあげんならん。姉さんがいつまでもそんなことしてゐてはどもならん。」

　梅雄は昂奮したやうな顔をしてまたしてもよくいふことを繰返した。

「早うようなつとくれやすや。ほしてお母はんや私に安心さしとくれやす。」

　お園は針の手先をいそがしながらつとめて病人の機嫌に逆らはぬやうに弟の對手になつてゐても、そのことをいひだされるのが何よりもつらかつた。

　お園は今葛城太夫といつて祇園で賣れ妓の太夫であつた。

　それまでは西陣の邊で古くからかなりに手廣く友禪屋を營んでゐた人の好い父親が、退かれぬ義理から他人のために招かぬ損をきせられたのが家運の傾くはじまりで、ひきつゞいて焦燥ればあせるほど思ふとほりにゆかぬ商賣の失敗から氣落ちがしてそれが病みつきになり、長い間わづらうて死んでいつたあとは、もう自分達の住んでゐる地所つきの家さへ借金の抵當に人手にわたるばかりになつてゐて、子供を對手の女手には、それをどうする術もなかつた。それでもまだ二三年が間はどうにかして親子三人のものがその日その日のことには貧しいながらも困らぬだけのことはできたのを、手をつかねて居食ひをしてゐるのも勿體ないとよしない女の考へからお園が勝氣な氣性にまかせて仕馴れぬ小商賣をはじめたのがよくなくつて、それがために一年とたゝぬうちに、またも

や女には脊負ひきれぬほどの新しい借金をさへこしらへてしまつた。

「お母はん、わたしがしばらく身を沈めればえゝさかい。」

　母子して散々思案をしつくした揚句のはてお園は到頭一家の不運を、その纖弱い女の身一つに脊負つて今から二年ばかりまへ櫻花ならば今からが盛りといふ二十の年の十月に町家そだちの堅氣の身を可惜祇園の遊廓に沈めてしまつたのである。

　けれどもお園の考へは間違つてゐた。さらば良い家の娘といふほどではなかつたが、親讓りの鷹揚な性質は幼い時から世間の荒い風波にも當てられず、これまで苦勞といふことも知らずにたゞぬうつと育てられたので、親兄弟のためにうら若い女が自分の身を苦界に沈めるといふことはそんなに惡いこととも卑しいこととも思へなかつた。さう思はぬばかりではない、芝居や淨瑠璃で見てもさういふところにゐて卑しい憂き勤めに人知れぬ悲慘の涙に泣きくれてゐるやうな女はみな美しく哀れであつた。おかるの身賣りを見ても宮城野しのぶを見てもさうであつた。お園は遊廓に身を沈めることが好いことのやうにさへ思はれた。

　愚鈍なくらゐ堅氣一方なお園母子は勤め奉公といへば昔から人の卑む、つらい稼業であるとは知つてゐても一旦そこへ身を沈めたが最後容易に脱け出ることの出來ぬ恐ろしい地獄であるといふやうなことは深くも思ひ及ばなかつた。さういふ場合に相談對手になつてくれるやうな近しい身寄りといつてもなかつたので二人はほんの一寸の間のつもりで女衒の手にかゝつたのである。

「まあ規則は規則どすさかい、こして四年の年期にはなつててもそないに長いこと勤めんかて二年もたゝんまに借金は拂へます。またそのうちにはえゝお客さんが附きますさかい、ほしたら半歳か長うて一年も辛抱してゐやはつたら仕合にしてもらへまつさ。いはゞ出世の近道見たいなもんどす。」

　判人は身の代金と引換へに仕切りの書附を收めながらそんなことをいつた。それが實際に廓の内部に入つて見ると、素人かんがへに聞いてゐたとは大變な相違で、前借の返濟はおろか、浮華を競ふ遊里には義理とか外見とかいろんな遊里の習慣があつて出錢ばかり多く、厭でも應でも屋形から新しい借金でもせねば、どうしても立ちゆかぬやうな仕組みになつてゐるのであつた。そこへまた思はぬ弟の難病でおそのはどちらを向いて見ても錢の入ることのみで、だん〱借金の深味に陷つてゆくよりほかはなかつた。

「今もうそんなことはいはんとおいとくれやす。あんた病氣やさかい、そんなこと考へんと氣張つて早うようなつとくれやす。」

　お園はそんな考へには、そつと蓋でもしておきたいやうに

目を瞑つて顔を慄はすやうにした。

「僕の病氣で姉さんにばかり責任がかゝつて仕樣あらへん。もちよつと辛抱して待つてとくれやす。僕が癒つたら、どないにしても姉さんを救けるよつて。」

梅雄は今にも自分の病氣が本腹するやうな心持ちになつてさういつた。

「どうぞはやう救けておくれやす。」

お園はさういひながらも一心に針の手をいそがした。

互にいたはりながら姉弟がしめやかに物語る間にも、そよそよと外から流れこむ爽かな白晝の風には庭に咲きこぼれた櫻の花や山吹の甘い匂ひがそこはかとなくたゞようてゐる。

「そやけど姉さん、僕の病氣はとても癒らへんえ。」

しばらく默つて天井の方を凝視めてゐた梅雄はじれたやうな鼻聲になつてさういつた。

「なんでどす。」

「なんでちうこともあらへんけど、何やしら私そんな氣がする。私昨夜恐いこはい夢を見た。」

「どんな夢どした。」

「私、どこや知らんなんでも河原の上の方見たいなところで會社の友達と遊んでゐるところへ死なはつたお父はんが、どこからかふつと出て來やはつて、お前そんなところにゐたらあかへんさかい、お父はんのゆくところへ一緒につれていてやる。こつち來い、こつち來い、いはゝつて暗いくらい大きな樹の生えた山の中を通つて大文字さんの山を越して遠いところへ連れていかはりますから、私しんどうてしんどうてよう歩かれしまへんやろ。ほで私ぢつと道ばたへ立ちどまつてゐると、さあ早うはやういうて手をとつて引いていかはりますから、わてえあんまりしんどうてふつと目がさめると、體中汗でづく〳〵になつてた。」

お園はそれをきいて氣にかゝつたけれどさあらぬ風に、

「さうどすか。そやけどそら夢どすもの。そんなん夢くらゐ氣にしてたらあかへん。そなこと氣にかけんとおきやす。」

さういつて慰めてゐるうちた蒲團の 絎けがやつとをはつた。今着て寢てゐる蒲團は重いからといつて、お園が自分で苧姆をつれて友禪の皮と綿とを買つて來て、お花にゆく暇々を見てはやつて來て自分で仕立てたのである。

「さあ、やう〳〵出來ました。」

お園は絎けをはつた蒲團をそこへ擴げて、ところ〴〵針のあとを摘んで見たり絲屑を拾ひとつたりして着てゐる先の蒲團をとつて新しいのと取換へた。

「へえ、おうきに。えらい輕うなりました。」

梅雄は床の中で身動きをしながら新しい蒲團の柔か味を病み疲れた身體に感ずるやうにいつた。

お園はそこらに取り散らかしたものを一つひとつ片附けて襟先きを掻きあはせ、脱いでおいた羽織をきて、細かい金細工の紐をかけ、たつぷりと半襟まで這ひかゝつた銀杏返しの多い頭髮をちよつと撫でつけるまねをして、そこに坐りなほした。そして細い煙管に輕くつめながら二三服たてつゞけに吸つた。

「お母はんどないしやはつたんやろ。えらい遲いえなあ。」

「もう去なんなりまへんやろ。どないしやはつたんやろ。藥もらひだけとちがひますか。」

「ほかに何ぞ用たししてゐやはるやろ。もうかへらはるやろ。」

さういてゐるところへ、

「ごめんやす葛城さん、ゐやはりますか。うちでもうかへつてお北粧せんと遲なるいうてはりまつせ。」

さういひながら屋形の女衆が上つて來た。

そして寢てゐる病人の方を向きながら、

「梅雄さんどうどす。今日ちつとはお氣分よろしおすか。」まだ十八九にしかならぬ女衆は丸髷に結つたひしやげたやうな惡毒氣ない顏をにこ〳〵さして葛城のそばに坐つた。

「もう去ぬとこやけど、お母はんがお藥もらひにいかはつてまだかへつてきやはらへんさかえ。今やつと蒲團がでけたとこやの。」

「あ、ほんに。ようでけました。えゝ色氣どすなあ。梅雄さんえゝ具合どつしやろ。」

「うちの妓もう皆お風呂にいて。」

「えゝ、みないかはりました。墨染さんも今私出てくるときいかはりました。外は花見でぞらえらい人どつせ。」

「ほんなら私ちよつと先いぬさかい、あんたお母はんがかへらはるまでこゝにゐてとくれやす。もうぢきかへらはるやろ。」さういつてお園は梅雄の方を見ながら「ほんなら私お清どんにゐてもろて、ちよつといてきまつせ。外に何か用ないか。」

お園は母のかへるまで弟のそばに女衆をつけておいて、一人母の家を出て來た。

二

お園は今日都踊の點茶の出番にあたつてゐるので、それに間にあふやうにお化粧をしなければならなかつた。自分の體でゐながら自分の自由にまかせぬ囚はれの身の悲しさは平常はお茶屋に送られるほかは、めつたに一人で外出あるきさへも叶はぬのであるが、今日この頃弟の病氣が俄に重くなつてからはここ半月ばかり屋形の方でも日頃の勤めぶりに免じて大目に見てくれて體のあいてゐる時でさへあれば、午前だけは、かうして勝手にわが家にかへることを得さしてくれてゐるのである。

わが家とはいひながら、お園が郭へ勤めるやうになつてから、それまで永く住み馴れてゐた西陣の方は引拂つて、母親は弟をつれてこの祇園近くの露地裏にさゝやかな借家住居をして娘からわづかばかりの仕送りではかないその日その日を暮してゐるので、弟がどつと寢ついてから、じめ〳〵した露地裏の住居は病氣のためによくないからといつて幸ひ屋形のお寺になつてゐる智恩院の末寺に二三年前に死なれた先住が長い間患らうて寢てゐた離室がまだそのまゝになつて空いてゐたので、そこを借りてこの間から母親をつけて出養生をさしてゐるのである。

　麗かな春の日影を眞正面に浴びた築地塀について松林の中の小徑を曲りながらおそのは薄色の傘に顏を隱して、どんなことがあつても急がぬ靜かな步調で、小堀の御門の方まで出て戻りかゝつたが、ふつと今日は朝來しなに急いだために、毎日弟を見舞ふたびに序におまゐりすることになつてゐる山の辨天さまに詣るのをすつかり忘れてゐたことを思ひ出した。

　お化粧をいそぐけれどもそれはもうこの間中から何度も着つけまでしてお稽古をしてあるので、これからかへつて風呂に入つて頭髮をあげさへすればそれでいゝ。さう思つて彼女はまた引返して人通りの少い櫻の馬場を智恩院の方へと上つていつた。圓山公園の方へ通ふ往來にはぞろ〳〵花見づれが動いてゐるのを避けて、山門の横から曲つて女坂を上つてゆくと綺麗に掃き淨められた花崗石の石礎には松の落葉とゝもに薄紅の花片がさそふ風もないのにはら〳〵と散つてきた。そこを上りきるとお園は多勢の男女が階段を上つたり下りたりしてゐる智恩院の御本堂の方を向いてちよつと頭を下げてそのまゝ高い木魚の音の冴えわたつてゐる廣い境内を素通りして鐘樓の方から山道を通りぬけてやう〳〵公園の見晴し臺まで出てきた。此頃では毎日一度は辨天さままでは上つて來るのではあるが、此方の山道はいつ通つたか、しばらく步いたことがないので、それに雨後の陽氣が俄に暖くなつたので、おそのは心持ちの惡いほど汗ばんだ體をそこの置石に腰をかけて、どこからとなく花の匂ひを送つてくる爽かな微風に吹かれてゐた。

　向の方を眺めるとこの間の春雨で急に淡蒼く色づいた祇園の森の彼方には四條の大通りから黒い甍の立ち並らんだ下京にかけて蜿蜒として愛宕つゞきの山のはてに鳥羽野の方の片田舍までが一樣に淡紫の春霞の底に穩かに眠つてゐるやうに展けて見える。お園はすぐ眼の下の南座から東西兩本願寺、七條の停車場と、中で目に立つ高い建物に見るともなく目を留めてゆくと、ずつと先の方に東寺さんの塔が糢糊として夢のやうに立つてゐるのを認めた。それを見ると彼女はふつと薄ら悲しい感じが胸に迫つてきた。

―自分なぞの知らぬずつと以前にもうそこの家は死に絶えて、今ではお母はんの腹違ひの兄弟が一人殘つてゐるばかりやけれど、何でもお母はんの話しにきいてゐるのでは、お母はんの生れた家といふのはあの東寺の果てに見える田舍の大きな農家であつたといふことや。こゝからは智恩院の森にかくれて見えぬけれど、遠くに霞んで見える西山の方を見るにつけても思ひ出されるのは西陣の方のことである。今では電車が便利になつて、京極や四條あたりへ出て來るのはわけはないけれど、自分がまだ子供の時分には西陣といへば京の中に、も一つ京があるやうに一郭別になつてゐて、春は嵯峨や御室の野遊びにも、秋は夜長のつれ〴〵にその頃まだ生きてゐた姉さんと一緒にお母はんにつれられてよく見にいつた見せ物や小芝居抔にまで懷しい思ひ出が殘つてゐるのであつた。

　その美しかつた姉さんは、お父はんより一年前に方々いゝところから嫁入りの話があつたのを仇に聞きながら丁度今時分春雨にさそはれて花びらのちるやうに三十一で敢へなくなつた。そのころから一家は急な落目になつた。以前はまだ家も困らず兩親が堅氣であつたから幼い時から三味線は糸道がついてゐるくらゐで藝事などもあまり仕込んではゐなかつたし、それに藝妓といつては此方で望むやうな纏つた金を貸してもくれなかつたので、つい仲に立つ者の口車に乘つて、同じ勤め奉公とはいひながら、昔はとにかく今では藝妓といふよりは人聞のわるい太夫に身を落したのであつた。

　けれども今更それを悔んだとて仕方がない。どうせ自分はこんな薄命な身に生れ合したのやからそれはもう諦めてゐるけれど、氣にかゝるのは弟の病氣である。お醫者さんのいはれるのでは、とても救かることはむづかしい。もしもそんなことになつた場合には自分は不具同樣な體やし、遠い先祖からつゞいてゐる松野の家の血統はこゝで斷絶してしまはねばならん。どうかしてかけ換へのない弟の一命を取留めることが出來るなら、どんな情けない憂目を見ても厭ひはせぬ、たとひ自分の體をないものにしてゞももとの壯健な體にしてやりたい。さう思うてこの頃ではもう日夜そのことばかりに心を碎いてゐる效もなく、とてもふたゝび本復する見込みはないらしい。

　いそがねばならぬのもうち忘れて、お園は四邊の景色が陽氣であればあるほど、その麗かな春の眺めの底にどこからともなく湧いてくるうら悲しい賴りなげな春愁に胸をとざゝれてついうつとりと思ひわびてゐた。

　すると不意と誰か背後から來て默つて肩のところを抑へたものがあるので、お園はびつくりして振顧ると、それは笠原春雪といつて、この春まだ寒い頃東京から來て京都の地に足をとゞめてゐる畫家であつた。

「ほ、あんたはん、散歩どすか。」お園は蒼白く沈んでゐた顔に急に元氣づいたやうな微笑を浮べながらいつた。

「あ、あんまり好い天氣になつたもんだからぶら〳〵歩いてきた。」春とんびを脱いで左の手に掛けた笠原はさういひながらそこに突立つて額の汗を拭きふき

「そして病氣はどうだね。あんた一人でどこへいつたの。」

「へ、おうきに。やつぱり同じことゞす。私今お母はんのとこから出てきて、これからそこの辨天さまにおまゐりしてすぐ屋形かへるとこどす。」

「さうか、やつぱりあの病氣ではねえ。今日もこれから都合がよかつたらちよつと寄つて見ようかと思つてゐたんだが、今うちにおかあはんがゐるだけかね？」

「さうどつか。何時もいつもあんたはんには深切に見舞うてもろて、ほんまに内でも喜んでます。そやけど今はいかんとおいとくれやす。お母はん今藥とりにいかはりまして留守どすさかい、屋形の女衆にちよつとゐてもろうてるとこどすから。」

お園は四邊に氣をおくやうに低聲でいつた。

まだ知つてからやう〳〵一月あまりにしかならぬのであるが、どこか氣に染んだところがあると思はれてその客はひどく自分を深切にいうてくれて初めて逢ひそめたときから親や兄弟はあるかとか、どういふ理由でこんな境遇に身を沈めたかとか、何處の生れで年はいくつになるかとかいろ〳〵身の上を聞かれて、それからは五日め七日めぐらゐにはきつと知らしてくれて寄せてもらひさへすればいつでも二日も三日も花を附けて遊ばしてくれて、晝間は顔がさすから一緒に出歩くことはせぬけれど、一人でゆくなら何處へでも好きなところへゆけ、自分はこゝにゐて繪を描いてゐるからといはれるまゝに、

「ほんならえらい勝手どすけど晩までお母はんのところへ遊びにやらしてもらひます。」

といつて、わが家へかへつて來て母親や弟のそばで何時もいつもゆつくり骨のばしをするのであつた。弟が患ひついてからはまた格別に氣をつけて、槊花を附けて自宅へやらしてくれたり偶には餘分な小遣などを心配してくれて、此度出養生をさすのにも内々力を添へてくれたのであつた。それからは自分でも時々弟の好くやうなものなどを買つて見舞ひに來てくれることもある。けれども古い郭の習慣を重んずる土地柄とてお客が抱妓の親元へたづねて來たりするのは殊のほかやかましいうへに、多勢の抱妓の手前を加減しい〳〵日頃自分を可愛がつて、親のところへも勝手に出入りさしてくれてゐる屋形の姐さんの思惑も考へねばならぬので、滅多にやつてこられて、もしもそれが屋形に知られるやうなことがあつては困るのであつた。

「さうか、ぢや今日は止さう。」

「どうぞさうしとおくれやすな。えらい勝手いうて濟みまへんけど。それに私今日點茶の出番どすさかい、これからお參詣してすぐ往んでお化粧せんなりまへんよつて。あんたはんこれからどこへもおいきやしまへんのやつたらそこまで一緒にいきまへう。」

「あゝ、さう、今日だつたな。」

「さうどす。今晩どす。あんたはん私を描いとくれやすのやつたらどうぞ見に來とくれやすな。」

笠原は繪でも日本畫の方なので、祇園の郭には今はもう絶えて見られなくなつたが四條の大通りがまだ今のやうに傷々しく破壞されぬ前までは微暗い格子先の巷路を素足に絡はる緋縮緬の蹴出しを踏みわけみつあしで練りながら茶屋入りをした華麗な古めかしい太夫姿をこの葛城に見立てゝ心ゆくばかりの繪に描き活かして見たいと、かねていつてゐたのである。

「さうだ。ぜひ拜見にゆくよ。」

笠原は葛城の太夫姿を繪にして見ようと思つたのももともと半ば繪師がする粹興の筆すさびに思ひついたのではあるが、一つには彼がこれまで繪行脚をして到るところの土地土地で常に見ることを怠らなかつた數ある女に比べて單にその標緻姿態の嫋々としてさながらに古い浮世繪にでもありさうな、見るから賴りなげな風情のこぼれてゐるばかりでなく、その起居振舞から氣質や物の言ひぶりなどにも、媚を賣る女でありながら不思議に卑しくない、名ばかりは太夫と呼び慣れてゐてもその實骨荒く人ずれのした今樣の女の中にはめづらしい浮世ばなれがして、今尙ほ狹斜の巷にありし世の香ばしい名をとゞめ粹を解する者の口にいつまでも語り草となつてゐる島原の吉野とか夕霧とかいつたやうな古名妓が名殘りの面影がどこかに忍ばれるやうな心持ちがしたからである。

「どうぞ來とくれやす。ほんならそこまで一緒にいきまへう。」

「ぢや私もこれから公園の中を一廻りして宿へかへらう。」

「さうおしやすな。」

二人はそんなことをいひ交しながら、そこを立つて眞青な雜草の萠えでた原つぱの中に開かれた細徑をひろうて辨才天を祭つた小さい祠のある崖下の方へとだら〳〵おりていつた。

「私おまゐりしますよつてちよつと待つてとくれやす。こゝ何でもよう賴むことときいてくれはりまつせ。」

お園はさういひながら辨天さまの社前に進んで帶の間から小さい銀貨入れをとり出して、お蠟燭をあげたりお賽錢を投げこんだりして、合掌した二本の白い人さし指を額のところにつけてやゝしばらく祈願をこめてゐたが、それがすむと帶

の上に掌をくみ合したまゝ小さい御堂の廻りを三遍ほどぐるぐるまはつて出てきた。

　そこから二人はまた連れだつて、手入れのとゞいた樹蔭の散歩道を迂曲しつゝ、ぞろ／＼上つたり下りたりしてゆく花見づれの間を縫うて平野屋の前までおりてくると、笠原はつと道の片蔭に身をよけながら立ちどまつて、

「あんたはこれからずつと屋形へかへるのやらう。」

「さうどす。」

「ぢや私はこれからも少し眞葛ヶ原の方を散歩しながらかへるから、點茶の席が濟んだらきつと來ておくれ。」

「へえ、おほきに。」と、いつだがお園はふとその晩は大阪のお客さんにもぜひにといはれて、薄々約束してあるのを思ひ出して、

「わたしあんたはんのところへ寄せてもらう思うてんのどすけど、もうせんどから都踊の時には寄せてもらふことになつて大阪のお客さんにお約束しておすさかい。」と、思案しかねたやうにぽうつと顏を染めながらいつた。

　すると笠原は急に不安な面を曇らせながら、

「そりやいけないなあ。だつて今日は君がめづらしい昔の太夫姿に粧して點茶に出るのだから、私はそれをよく見ておいてあとで美しい繪に描うと思つてゐるんだもの。」と、ねだるやうな媚るやうな調子でいふ。

「そやけど……。」と、お園は當惑して少しの間默つてゐたが、

「點茶だけどすせ、あんなお化粧して出るのは。あんたはんあこお見やしたゞけではあんじよう描けまへんか。」

「たよりないことをいふねえ。そりやお花にくるにはそのままでは來られないだらうけれど、折角美しい姿に粧うて、その晩君がほかのお客さんのところへお花にいつてしまつたのでは繪を描かうたつて感興が失せてしまつてとても繪なんか描いてゐられやしないぢやないか。都踊を見にゆくにも氣がなくなる。」

　春雪が四邊に心を配りながら、ずばり／＼江戸辯でさういふのが彼女の耳に京や大阪のお客のいふ言葉とはちがつたそそるやうな強い響きを與へた。そして、

「そらさうどつしやろ。」と、どつちつかずの決しかねたやうな返答をしながらちよつと考へてゐたが、

「ほんなら私晩に寄せてもらひます。そのかはりほんまに見にきとくれやす。」

「そりやあのちに君がきてくれさへすれば、私の方でも見にゆくよ。」

「わたし必ず寄せてもらひます。」

「ぢやきておくれ。そしたら都合がよかつたら、おかあはんのところまで一緒にいてもいゝから。……こゝであんまりながく話しをしてゐるといけない。はやく行かう。」

「ほんならさうします私もいそぎます。あんたはんもう何處へも寄らんと眞直ぐに下河原におかへりやすな。」

　お園はさういひながら公園の散歩道を歩いて池のある方へおりかけた。すると、

「ほんとに來るか、またいつかのやうに、すぐにも來るといふやうな返事をしておいて、遲くなつてから急に斷るやうなことがあるから。何だか怪しいぞ。」

　春雪が後から追掛けるやうに戯談らしいことをいふので、彼女はふつと振顧つて、自分もいくらか微笑みながら二足三足戻つて來て、

「あんたはん、まだ私の心を疑ふとゐやすの。寄せてもらういうたら、ほんまによせてもらひます。」

「そんならいゝ、きつとだよ。」

「よう分りましたやろ。ほんなら私これからかへりまつせ。」

お園はさういつて此度はすた／＼道を急いで公園の群衆の中を脇目もふらずに祇園社の裏から石段下の廣場にでゝ末吉町の屋形に戻つてきた。

三

　お園は傘をつぼめながら格子口を入つてゆくと、店の間の上り口にはもう黒漆の三枚齒がちやんとそろへてあつて、紋附を着た男衆の小父さんが用ありさうに立ちうごいたり、稚髷に結つて顏だけ眞白にお化粧をした禿が嬉しさうに部屋入りの刻限になるのを待ちかねてゐた。小父さんはおそのが歸つて來たのを見て、

「あ、おかへり。えらい遲おしたなあ。お清どん葛城さんおかへりやしてえ。」

と奥へ聲をかけた。

　お園はそのまゝ急いで二階座敷の自分達の部屋に上つてゆかうとして階段を上りかけると丁度奥から姉さんが顏を出して、

「えらい遲いえなあ。あんた今まで何處へいてたんえ。お清どんも、さつきにおかあはんのとこからもどつてきて、あんた先歸らはりましたいふもんやさかい、どないしたんやろおもうてた。」

「えらい遲うなりました。今朝ゆきしなに忘れてましたから私ちよつと山の辨天さまにお參詣してました。」

「さうどすか。ほんならすぐお風呂にいて髮結ひさんへゆかんと遲なる。もう二時過ぎたる。ほかの妓みなお化粧出來ましたえ。」

「さうどつしやろ。これからすぐいてきます。」

　お園はさういひながら二階の部屋に上つてゆくと、今日此處のうちから太夫ばかり三人そろつて點茶の出番になつてゐ

るので、表座敷の紅殼格子の方によせて置いた朱緣の大鏡臺の前には白粉や香油の蒸息に立て籠つた中に墨染と勝山とが艶めかしい不斷着の友禪の長襦袢一つになつて頭ばかりのやうに見える大きな伊達兵庫の頭髮を鏡に映しながら、化粧方の小母さんに手傳つてもらつて頻りに顏をこしらへてゐるところである。

墨染は自分の頭髮の後から大鏡に映る葛城の姿を窮屈さうに覗きながら、

「お、おかへり。あんたはんえらい遲おしたなあ。髮結さんきつう待つてはりましたえ。はやういといでやす。」

「へ、おほきに。すぐいてきます。多勢いてはりましたか。」

「そんなことおへんやろ。」

「あ、さうどすか」葛城はさういつて自分の鏡臺の處から小さな金盥の中に手拭やら石鹼やらお湯の道具を入れて階段をおりてきながら、

「お淸どん、ほんなら私これからお風呂へいてすぐお種さんのとこへゆくさかい、あんたあれ持つてい といて おくれやす。」

「へえ、畏りました。」

さういつて臺所の方から出てきたお淸に店先まで送られながら葛城はそこからすこし先の松の湯の暖簾をくゞつた。風呂にはもう今朝一度入つたので、それに他妓とちがつてお化粧などに手間のかゝらぬ彼女は熱い日向を步いてきた體の汗をざつと洗ひ流すと、いそいでそこから新橋のさきの髮結のところへ廻つていつた。

踊りが始つてから目のまはるほど忙しさにこの頃では三四人の梳手をつかつてゐてもまだ手の足らぬほど、いつもは多勢の藝妓や舞妓がもう朝の内からつめかけてゐるのであるが、大抵みな午すぎまでに歸つてしまつて、あとは水の退いたやうにひつそりとした姿鏡の前にはそれも遲れてきた二三人が坐つてゐるばかりである。

「お、おいでやす。あんたはんえらい遲おすな。」お種さんは今しも出來上つた一人の舞妓のおしどりの髷に毛筋棒をあてて鏡に映る姿と見比べながら熱心に鬢の恰好をつけてゐた顏をちよつと葛城の方に振向けた。

「えらいおそなりまして、ほんまにお氣の毒さんどす。」

「いゝえ。」お種さんはいそがしさうに手を働かせながら姿鏡の面から、隣りの鏡の前にきて坐つた葛城の姿にどこか寂しさの目立つのを橫眼で見ながら、

「あ、ほんにあんたはん弟はんが具合わるいいうて、きつう心配しとゐやすさうにおすが、この頃どうどす。少しはよろしい方どすか。」

「へえ、おほきに。まだやつぱり同じことやので、こまつてます。」

「さうどつか。そらいきまへんなあ。」

そのうちお種さんはやつと頭髮から手を放したので、今まで鏡の面のみを見てゐた藝妓はやつと葛城の方を向いて兩方で、

「今日は」

「今日は」

と輕い會釋をかはして、かへつていつた。

やがて葛城の後に來て立つた梳手は銀杏返しの根元に鋏を入れて、かちんと元結を切つて手早く髷をほぐし、素直な多い毛を疊の上までばら〳〵と這ひ亂して、ふけを取つたあとを小さい濡れ布巾で力を入れて癖をなほしながら、

「ほんまに葛城さんの毛はえゝ毛やは。こんなんやつたら、ほかの毛を入れんかて兵庫に結へまつしやろえ。」

「おう、おう。そないに賞めとくれやしたら私どない云うたらよろしいやろ。」

「今日はあんたはんが點茶におでやすのやちうて。も、えらい人氣どつせ。私も葛城さんが太夫さんに粧しといやすとこ一遍見とおす。」

「どうぞ見にきとくれやす。」

「ほんまにいきとおす。皆そない云うてはりまつせ。あんたはんやつたら、昔の太夫さんのとほりにそら美しいやろちうて。」

そんなことをいつてゐるうちに癖直しもすんで幾度も綺麗に梳かれて長い黑髮は漆のやうな光澤を生じて脊に垂れた。丁度そこへ、

「ごめんやす。」といつて、屋形からお淸どんが髮飾に用ひる大櫛だの花釵だの笄などを入れた小匣を抱へて入つてきた。

しばらく手を休めてゐた結手のお種はその綺麗に梳かれた髮に毛筋棒を入れて一本の毛も亂さず前髮は前髮、鬢は鬢と巧みに分けとり、思ひきつて耳の下まで大きく鬢を張つて、一番後に赤熊を入れて髷を結ぶと、見る〳〵うちに京風の伊達兵庫の頭髮は恰好よく出來上つた。それに花櫛やら八本の大簪やらを挿して、最後に長崎といたづらとを飾りつけると鏡に映る細面の色白の顏が、ちやうど人形芝居の雛絹のやうに可愛らしかつた。

そこへ屋形から俥が迎へにきたので葛城はそれに乘つてかへつていつた。

格子先で俥を降りて重い頭を大事さうに家の內に入つてゆくと姉さんは、

「おう、おう。えらい早う、ようでけました。」と、起つてきて頭のぐるりをとみかうみして「さあ彼方へおあがり。私手傳うてお化粧してあげます。」

「へえ、どうぞ。」といひながら葛城は階段を二階の部屋に上つていくと、もう墨染も勝山もすつかり顏のおつくりが濟ん

でこれから衣裳を着けやうとするところで金絲銀絲で刺繡をした裲襠や厚ぼつたい前帶などが足の踏み場もないまでにとりひろげてある。

　葛城は姉さんに手傳つてもらつて念に念を入れて厚く白粉をつけて、それから下地の好いうへに更に眉黛で眉を刷くと黒瞳がちの二重瞼から眉のあたりが一層引立つて見えてきた。そして子供のやうに小さく引結んだ脣にそつと口紅をさしてもらふと彼女は鏡に映る顏を眺めて自分ながら見ちがへるほど美しくなつた。

　着物は緋縮緬の下着に上が二枚黒縮緬の三枚襲ねに、源氏車に青柳を繡ひとつた高尚な黒繻子の前帶を胸一杯に大きく結んで、白羽二重に金糸の繡をした襦袢の襟裏を紅く返して、それに緋と銀とで有職風の簾垂れ模樣を脊に刺繡した水色繻子の裲襠を被ると、白襟の片方さへ紅裏を返してゐなかつたら太夫といふよりは歌舞伎芝居のお姫樣といひたいやうな上品な姿に出來あがつた。

「まあ、まあ、綺麗なわ。葛城さんには高尚のんがよう〳〵似合ひますえなあ。」

「太夫さんやなうてほんまに八重垣姫のやうどすなあ。」

　階下から女衆や学姆までが上つてきて多勢で葛城の周圍を取卷いて口々にその美しい姿をほめた。

「なあ、へ。この見立て丁度あんたによう似合うたえなあ。」

　姉さんも少し後にさがつて遠目に眺めながら、滿足したやうにいつてくれる。

「さうどすなあ。」葛城も嬉しさうな顏をして鏡に映る姿を飽かず眺めてゐた。

　姉さんを初め皆から「弟さんがもしものことがあつたら、葛城さんはほんまに狂氣にならけるやろ。」といつて心配してゐてくれるほど、この頃はもう明けても暮れても弟の病氣ゆゑに心を腐らしてゐる葛城も、さうして美しく粧した姿を皆に賞められて見れば、流石に自分でも氣がまぎれて、自然と心もいくらか春めいて來るやうであつた。

「お母はんに葛城さんがこないしてるとこ一遍見せてあげたらえゝのやけど、とても來られへんやろなあ。なあお清どん。」姉さんはそこに突立つてゐるお清の方を向いていつた。

「さうどすなあ、私ちよつとさういうてきまへうか。なあ葛城さんお母はんきられますやろ。」

「お清どんせいていて、梅雄さんがえらう惡うなかつたら、あんた代つておつてお母はんにちよつと見においでやすいふとくれやす。」姉さんはさういつたけれど、葛城は、

「姉さん、そやけど梅雄が見たがります といけまへんさかい、もうそんなこといはんとおいとくれやす。」と、いつてことわつた。

「さうどつか、ほんならお清どん行かんとおきやす。」

　姉さんはそれから三人の立姿を見たうへにも眺めて着物の裾さばきや裲襠の脊の恰好を何遍となく直してやつと氣がすむと、

「さあ、もう皆よろしい。やがて時どすやろ。」

と合圖をするやうにいつた。

　さすがに長閑な春の日もやう〳〵西山の頂に傾きかけると、郭の夜は暮れをも待たず妓樓々々の軒先に吊した紅提燈の火影より瞬きそめて、一日の行樂に遊び疲れた花見歸りやこれから夜櫻を見にゆく連中や都踊にゆく人で、祇園町の大通りから花見小路にかけて晝の賑はひにも倍して人足に景氣づいてくるのである。

　やがて五時になると一同部屋入りをするので、春本からは三人の太夫姿が揃つて小路も狹しとばかりに搖ぎ出た。靜かな横丁から四條の通りへかゝると華麗かな裲襠姿に眼を奪はれた群衆は、

「そら太夫はんや。」

と、さつと道をひらいてぞめき囃した。中には酒に醉ひしれた若い花見連れなどが人込みから、賣色の身にも顏から火の出るやうな大口を利いてゆくのもあつた。葛城はさうした多勢からわが名を呼ばれるのが大地に穴があれば入りたいほど悲しかつた。依賴になるほどの親類とてはないけれど、自分がかういふところへ來てゐることを隱してゐる遠い親類は澤山あつた。お園さんは近頃どこか洛東で仲居奉公をしてゐるといふだけは薄々知つてゐても、今祇園で名の賣れてゐる葛城太夫がそれだとは知つてゐなかつた。お母はんの異腹の伯父さんは時々商賣仲間のお交際で祇園で遊ばはるといふことをも聞いてゐるので、それがために、これまでまだ幸にお茶屋で顏を合はすやうなことはないけれど、はつと氣がさして思はず赤面するやうなことがないでもない。

　彼女は騷々しい人聲や周圍を取卷いてゐる眼まぐるしい男女の顏にぼうつと上氣したやうな心地になつて、踏み馴れぬ三枚齒の運びも覺束なく、やう〳〵の思ひで歌舞練場の樂屋口までたどりついた。

　銘々に割りあてられた部屋に入つて葛城はほつとしながらそこに備へつけてある姿鏡のそばに寄つてまた顏をなほしたり、着つけの襟恰好を繕つたりしてゐるところへ、

「へえ葛城さんお見舞どつせ。」といつて女紅場の男衆が、大皿に盛つたいづ宇の箱壽司をとゞけてきた。

「あ、さうどつか、おうきに。」

といつて葛城は、一心に鏡に面して頭をなほしてゐた顏をちよつと後に振顧つた。彼女はその通し物に添へてある紙片を見て、ちよつと考へるやうな顏をしたが、わざと名前は變へてあるけれど、すぐ思ひ當つた。

獻茶の式には今年初めて出るので、どうかと氣遣つてゐたけれども稽古の時から數多い藝妓達の中にもすぐれて好い筋やといつて先生から賞められてゐたお手前ほどあつて、さういふ姿に着更つて衆目を一身に集める晴がましい席に出て見ると、不思議とひとりでに氣分も平常の自分と違つたやうな心地になつて、五番とも手際よく御殿の式を濟ますと、葛城は舞臺の方から最後の踊の三味線や太鼓の響きが一つになつて、澱むやうに聞えてくるのをきゝながら夜寒の中を俥で屋形へ急いだ。

屋形へかへつて來るともう五六軒のお茶屋から電話が掛つてゐた。中には二三軒あまり行きつけぬお茶屋の名があつたが、木屋町のお客で入つてゐるところからも下河原のお客でいつてゐる茶屋からも知らしてきてゐた。

「松池はんから、先刻から、も何度もかゝつてきますのどつせ。あんたはん何處へいかはります。そないいうて斷るところは、も斷はらんなりまへんさかい。」お清は葛城が自分の部屋に上つてゆくのを後から二階について來てさういつた。

「さうどつか。」と、葛城はちよつと考へるやうにしたが、すぐ「ちよつと待つてとくれやす。」といつたまゝ、お清に手傳はれながら靜つと重い裲襠と前帶だけをとつて、鏡臺の前に坐つて花櫛や笄を一つひとつ抜きとつた。そして濃く化粧つた顔の白粉を油で拭きとらうとすると、着物の始末をしてゐたお清は慌てたやうに、

「あの葛城さん、どうぞその顔を拭かんとおいとくれやす。松池はんから茶席のまゝですぐ來たくれやすいはりましたよつて。」

お清がさういつたので葛城はふつと別なことを思ひ出して、そのまゝ顔をなほさうとすると手をとめて考へた。

かうなるのやつたら先刻茶席へ出てゆく前に一と口誰れかにさういひ置いてゆくのであつたものを。お化粧が遅れたので心がせいたゝめについ忘れてしまつた。あゝして木屋町から下河原からも箱入りをしてもろて、まだその上に部屋見舞まで通してくれてゐるくらゐやから、きつと兩方で今時分は踊のはねる時刻を待ちわびてゐやはるにちがひない。茶席では脇眼も振ることが出來なんだから、來てゐやはつたか、來てゐやはらなんだかよう分らなんだけど、下河原のお客さんは繪を描くいうてはつたから見にきてゐやはつたに相違ない。茶席のまゝというたかて藝妓とちがひ太夫がこのまゝの扮装でめつた何處へもゆくことはできぬけれど下河原へゆくんやつたらせめて顔だけはなほさずにおかう。……そやけど木屋町のお客さんかて松池から何遍も電話でせいてくるいふし、どないしたものやろ。あのお客さんもいつもの淨瑠璃の縫之助さんや舞妓の花蝶に友菊それから下屋町のお女將はんなど一緒に見にきてやはつたにちがひない。大方今時分は

木屋町で多勢の一座が華やかに笑ひさゞめきながら、私の來るのを今かいまかと待つてゐやはるやろ。……

葛城は、ほんまの心をいへば氣の置けない、自分を丁度友達のやうにしてくれる旅の繪かきの處へゆきたいのであるが、いくらか深切だといつてもその方はつい昨今の淺い馴染であるのにひき換へて大阪のお客さんにはまだ店出しをしたそも〳〵の時分からもう三年ごし贔屓にしてもろうて、つい二た月三月ばかり前までは、かれこれ一年餘りといふもの、自分が繊張い女の身一つで母や弟を養つてゐる健氣な氣だてや境遇を愛で哀れんで月々その方の面倒さへ見てくれてゐたのであつた。

「藝妓はんにかて、あんなえゝお客はんは滅多にあらへんえ。大事にせんとあかへん。」

席貸しのお女將はもう松池のおかはんも同じやうにさういつて、何ぞのをりには恩にもきせたり、こちらの爲を思うて意見もしてくれたりするのである。それはもうなんぼうにも身にしみてよう知つてゐるけれど、それくらゐだからこちらがその人獨りを頼りに思へばおもふほど向の勝手氣隨も漸次と募つて、ほかへお花にいつてゐて、どうしてもその晩外すことが出來なかつたり、今日はかならず行くからといふお約束の日や時間にちよつとでも遅れやうものなら、ぶいと機嫌を惡くして、いくらおそくからでも最終の電車で大阪へ歸つてしまふやうなことがある。そんな時にはもしこれきりになつたら月末のことをどうしようと直ぐお母はんや弟のことを思うて氣が沈むのであるが、それでも、

「お客といふものは、ほんまに我儘のものや。こつちやではこれほどに勤めてをるのに。」

と、さう思ふと生來の勝氣から自分でわびて出るのも口惜しいし、あんまりわけの解らぬ怒りやうも厭になつて、そのまゝ棄てゝおくと向でも二た月も三月も何の沙汰もなく默つてほかしておいて、ふとまた向から折れて知らしたりするのである。此次もそんなやうなことから怒つてしまつて、この間まで長く逢はなかつたのをお茶屋と席貸しとでどう仲に入つて取りなしたものか先月の節季に迫つて知らしてくれた時松池のお女將はんがその時から、

「あんた今度しくじつたら、もうおわびの仕様があらへんえ。ほして點茶の時には來てやるというてゐやはつたから、間違ひなうあんたも來とくれやすや。」

さういうてかたく約束してゐたのであつた。それを今自分が顔を出さぬとなると、折角陽氣に花の咲いてゐるお座敷がどんなに白けてしまふであらう。大阪のお客さんのあの氣むづかしい顔やお女將はん達が仲に入つて困らはる顔が眼に見えるやうである。

葛城は鏡に面して見るともなく眞白に化粧つたわが顔を覗

きながらそんなことを思ひ惑うてゐると階下から、
「お清どん松池はんからまた電話どつせ。」と呼ぶ聲がする。
「あゝさうどすか。」お清は返事をして「なあ、へ葛城さん此度はどない云うて返事しまへう。」
葛城はまだ心を決しかねたやうに、
「そうえなあ。ほんなら、こない云ふとくれやす。えらい濟まんことゞつけど葛城さん、すぐお家へ寄せて貰はんならんいうてましたけど點茶からかへつてきますと、お母はんのところから今夜病人がきつう惡い云うてきましたよつて、すぐその方にいきましたさかい。今晩はお斷りいたします。また近いうちお目にかゝつてお詫びいたします。そない云ふとくれやす。」
さういつておいて彼女は重い頭飾りをとり去つて、起ち上つて別の着物に更めた。
お清はすぐまた上つて來て、
「葛城さん、私松池はんかと思ひましたら、ちがひます。木屋町からどす。松池のお母はんもあこへいてはります。ほてあんたはんがいはゝりましたとほりにさういひましたらな、あとで大阪のお客さんが自分で電話口に出てきやはつて、弟がきつう惡い云ふのは、そら嘘やろ。ほかに好きやんでもあつてそこへいたんやろ。こないにいはゝるのどつせ。何やしらきつうきつうはこやはこやいうはりましたえ。」

それが大阪のお客のいつもの癖であつた。いつかも木屋町にいつて三晩もつゞけて泊つてゐた時、お母はんのところに急に用事が出來て屋形の女衆に呼び出して貰つてお母はんが自分で電話に出ると、その時もやつぱりお客さんが自分で電話口に出て、
「急な用事といふのは、そら嘘やら。母子して一緒になつて色男をかぼうてゐるのやろ。」
さういうて大きな聲でお母はんに怒鳴りつけたことがあつた。なんぼはんくらのお母はんかて、その時だけはよく／＼腹も立つやら悲しいやらで、屋形の姉さんに、
「こんなんやつたら私がもし家で死んでゐてもあの娘は知らずにゐますやろ。」
さういうて、つらがつたのであつた。
「まあ、まあ、そないに云はんとおきやす。勤めといふものは昔からつらいにきまつたもんやさかい。あのお客さんかて解るところは解つたお方やさかい、先で何といははつても、此方は默つて辛抱さへしてをればえゝ。末ではまた仕合せな身にして貰ふいふこともあるのやさかい。」
生れは德島とか和歌山とかで、幼い時からこの祇園の遊廓に賣られて來て今から二十年ばかり前まで薄雲太夫といつて、長い間全盛で鳴らした覺えのある姉さんはさういつて慰めたのである。

「あゝ、さうどつか。」と葛城はいつたが、そんな具合やつたら、これから行くとまた厭味をいはれたり、明日になつても明後日になつてもかへしてくれないかも知れぬ。さう思つて、
「怒らはつたら怒らはつたで、かまへん。」
彼女は獨語のやうにいつた。

四

「お君どん笠原さんがおかへりやしたえ。」
と臺處の方で呼ぶ聲がするのをきゝながら春雪は階子段の下の薄暗い廊下をつたうて自分の部屋にきめた奥二階の方に上つていつた。
と、仲居のお君はすぐ後から十能に火を盛つてやつてきて、
「おかへりやす。まあ寒うおしたやろ。」
「隨分寒いよ。晝間はあんなに暖くつても夜になるとまだなかなか寒い。」
「京都はまた格別寒うおす。」
「いや東京だつて寒い。いつも今頃は雪が降るんだもの。」
「まあ、さうどすか。」
「降るもふるも君、いつだつたか櫻花が眞盛りに咲いてゐるのに雪が降つてそれが氷柱になつたことがあつたよ。そら綺麗だつたよ。」
「まあ、まあ、さうどすか、東京ちうたらえらい寒いとこどすなあ。」
お君は火鉢に火つぐと十能と飲み殻の茶碗とを下げていつた。そして新しい茶を煎れて持つてきた。
「おゝ好い茶だ。」春雪は熱い茶を一口飲んで、「何ともいへない色をしてゐる。これが本當の山吹色だ。こちらの茶はほんとにいゝ。」
「さうどすか。東京にはえゝお茶おへんか。」
「そら好いのといつたら、ないこともないだらうが、ちよいちよい飲むのにこんなのはないなあ。」
「都踊どうどした。葛城さん獻茶に出やはりましたか。」
「えゝ、出ましたよ。」
「さぞ綺麗におしたやろ。あのお方やつたら太夫さんにお粧しやしたかて、ほんまによう似合ひますやろ。今晩きやはりますか。」お君は微笑みながらいつた。
「さあ、そんなことにはなつてゐるんだが、どうするか。曳手あまたですからな。」
「一遍電話をかけて見まへうか。」
「さうですなあ、かけて見て下さい。」
「畏りました。」お君はさういつて、丸髷の頭を淑やかにさげて襖の外に出ていつた。
春雪は脇息に凭れながら暫らく茶をすゝつてゐたが、やが

て煙草が燼きてしまふと、立ち上つて今まで着てゐた羽織と下と對の茶微塵の結城お召の着物をぬいで、八端の褞袍に着更へた。

彼が今度この下河原に繪行脚の旅裝を解いてから、やがて二た月近くにもなるので、氣をつけて萎れぬ先からさきから挿しかへてくれる床の間には、もう幾度かその季節々々の眺めが移り變つて、今は爛熳たる櫻花の小蔭に緋縅の大鎧を着けた容齋派の武者繪の軸を懸け、清水燒の花瓶には椿に黃梅が亂挿にしてある。黃褐色の砂壁も木理の見えぬ天井も黑く煤けて隨分古く建てたものらしいが、その代りに目に見えぬところに何處か手が入れてあつて、よく拭きこんだ床柱と隅の方の押入れのところに立てゝある抱一風の八橋を描いた二枚折の銀屛風だけが灯影の中に輝いてゐる。

八疊の座敷の眞中に敷きひろげた緋毛氈の上には晝間描きさした繪絹がまだそのまゝになつてゐて、繪の貝箱のそばに取り散らした白い皿には朱や綠や白い胡粉が鮮やかに流れ出たまゝ乾きついてゐる。今取りかゝつてゐるのはこゝに落着いてから先月の初にまた一週間ばかり月ケ瀨附近の溪山の眺めを探つたついでに、關の古驛から鈴鹿峠にかけて昔の東海道の舊跡を歩いて寫生帳に收めた。その記憶を辿りながら、大阪のさる富豪の依囑に應じて描いてゐるのである。三枚の中一枚はもう出來上つて、砂壁の表にまだ枠のまゝ立てかけてあるのがそれである。それは月ケ瀨からまだずつと奧の景色を描いたもので、紺碧を湛へた溪水が巖角に激して白雪を噴いてゐる上を一人の樵夫が危橋を渡つてゐる處で、一叢の杉木立に淸香浮動してゐる風韻が遺憾なく出てゐる。

春雪は火鉢の傍によつて腕ぐみをしながらぢつと坐つてゐると、晝間でさへすぐ上の高臺寺の山から、どうかすると氣まぐれな鶯が前栽の樹立に飛び迷うてきて鳴くほかは、外をさゞめかしてゆく花見連れの賑やかな笑ひ聲ひとつ聞えぬ程の靜かさなので、夜の更けるにつれて四邊はひとしほ閑寂としてゐる。

どこか近くの席貸では今日この頃陽氣な春の宵を、わざと祇園町の騷がしさをいとうて浮世離れたこの山の中の奧座敷にしんみりと二人對向ひで忍び逢ふ夜の戀を樂んでゐるものがあると見えて、ぬすむやうな爪びきの音が艷かしく聞えてゐる。春雪はそれをきくともなく靜つと耳を傾けてゐると、何處かで聞いたことのあるやうな三味線のあひの手である。さう思ひながら尙ほも耳を澄ましてゐると、幾度も繰返してゐるので、それはずつと前に東京の新橋でちよつと知つてゐた藝者が自慢でよく彈いてゐた小唄の「心でとめて」であるのを想ひ浮べた。

心でとめてかへす夜は、可愛いお方のためにもなろと、泣いて別れてまた御見もじ、猪牙の蒲團も夜露に濡れて後は物憂きひとり寢するも、こゝが苦界のまんなかかいな。

それともはつきり分ると、夜が靜かなので唄の文色が手にとるやうに聞えてくる。春雪は思はずそれにひき入れられて、ついそゝられ氣味になりながら、今見てきた太夫の艷麗な姿を思ひ浮べて、それを繪絹の面にうつす工夫を凝してゐた。

太夫といへば今までは島原が日本に唯一の古めかしい面影の殘つてゐるところとなつてゐるが、この間見たその道中姿と今宵の獻茶の席で見た祇園の太夫姿とを比べると、島原の方はさすがにまだ古式が多く保存されてゐるだけ裲襠や前帶などの好みが大時代は大時代だが、あまり濃艷にすぎてあくどい。それに反して祇園の方はずつと世話に砕けて淡彩で上品に出來てゐる。それだけ祇園の方は今樣になつてゐる。併しいづれにしても最早ふたゝび春信や歌麿によつて描かれ、西鶴や近松によつて語られたる遠い美と傳奇の時代を後戾りさする術もなかつた。彼は一旦破壞された夢幻の美をどうかしても一度び思ひ活かさうとするやうに眼を瞑つて恍惚と心に過去の姿を追ひ求めてゐた。と、また先刻御殿の茶席で見た葛城の姿が、錦繪の古めかしいまぼろしの中に髣髴としてその鮮麗な色を現はしてきた。ぬけるほど白く化粧つた襟頸に黑絹のいたづらが絡つてゐるのもあどけなく、細面の顏が一層細く見えるほど大きく張つた兩鬢の婀娜めきたるに、玳瑁の大櫛八本の笄銀色燦爛たる花簪を透いたところもなく翳して、京風の伊達兵庫の金元結にとりつけた紅い丈長色紙までが艷めやかしく眼をひいた。白羽二重のつゝましやかな詰め襟の片方だけ緋縮緬の裏を返へして、胸一杯に結んだ黑繻子の下に兩の手を隱し、觀客が息を殺して一齊に視線を集めてゐる次の間の杉戶の陰から舞ぶりの摺足でしづ／＼現はれて釜をのせた卓の前の床几に進んで腰をおろした。

春雪は、葛城の現實の生活の傷ましさは憐れんでゐるが、この場合彼はたゞ彼女の妖麗なる姿態を愛でゝゐるばかりなのである。古い江戶の錦繪によつて得られる快感を假りに彼女の姿態と色彩の鑑賞によつて代り求めようとしてゐるのである。

彼はいろ／＼に視點をかへて姿態の變化を想像しながら、それを頭の中で絹繪の面に描いて見た。初め杉戶の陰から立ち現はれてきた正面の姿よりも、また纎やかな手先で袱紗をさばく古風の形よりも、やがて點茶を終つて靜に一禮してあの銀絲の簾垂れに緋の絲でその緣を繡ひとつた脊一面の大模樣を觀客の方に向けてゆるやかに引込んでゆく裲襠の後姿を斜に描いて見るのもまた面白いと思つた。

そんなにして繪になるほどの美しい光景を、いろ／＼想ひ浮べてゐると後からあとから面白い考へが浮んできた。梅幸の十六夜が廓を脫けて出てくるところも滴るばかりの色氣は

あるが、深紫の綿帽子に面を包み下げ帶にした福助の小春が黑縮緬の着附けに緋の長襦袢の艶めやかしい姿態で花道から舞臺にかかつて格子の外から紙屋の内の樣子をそうつとうかがひながら、そのまゝ用水桶の小蔭に身を忍ばすところの風情の方が遙に好ましい。江戸の清元と浪花の淨瑠璃。春雪はそんなことまで次から次へと思ひ樂んで藝術的空想に耽つてゐた。

と、すうつと後の襖をあけて、

「ごめんやす。」といひながらお君が入つてきた。

「まことにお待どほさんどした。今さき電話をかけて見ましたら、屋形でまだ點茶からかへつて來やはりまへんことゞしたから、もすこし後になつてまたかけて見ます。大若さんでそない云うてはいりました。も、ちよつとしたら此方からまたきいて見まほ。」

「あゝ、さうですか。まだ都踊からかへるにはちよつと間があるから。」

お君は立つていつて今春雪がぬぎすてゝおいた着物や長襦袢を一枚々々丁寧に疊んで、違ひ棚の亂れ箱に入れてその上から鬱金木綿の風呂敷を被せかけた。

「こゝもう片附けて、それともまだお描きやすか。」

「いや、もう片附けてもらひませう。」さういつて春雪もともに立つて筆を洗つて繪絹や毛氈を收めた。

「それからねえお君さん、何か出來るものでいゝから、酒を持つてきて下さい。隣家で好い音がしたゐるのをきいてゐると何だか急に寂しくなつてきて堪らない。」

「ほんまにいな。何家どすやろ。」

「なら繁かな、それとも藤の舍か。」

「藤の舍さんどつしやろ。」お君はぢつと耳を澄まして三味の音じめをきゝながら「あの方この頃よう〳〵來てはりまつせ。」

「羨ましい仲だな。」

「そやから、あんたはんも劣けんやうにおしやすな。」

「どうつかまつりまして。いつも捌かれてばかりゐる人間なんですから。」

「きつい云ひやう。今に葛城さんがきやはりましたら、そない云ひまつせ。」

「どうぞ。」

「ほんならぢつき持つて參じます。ほてまた一遍きいて見まへう。もう歸らはる時分どつしやろ。」

お君はさういつて、すら〳〵と立つていつた。

いつまでも聞えてゐた隣家の三味の音がやがて絶え〴〵になつたと思つてゐると、思ひがけもなくすぐ耳の傍で高臺寺の鐘がごうんと一つ高く響いて、しめきつた障子に微かな顫動を與へた。そしてその鐘の餘韻が長い間そこら中に立ち迷うて暫らく消えわづらひながら泣くやうに細くほそく搖れてゆくと、また一つごうんと撞き出す。やがて十一時を數へをはると、三味の音色もそれとともにふつりととぎれて、四邊の夜は一層靜まつた。

「おほきにお待どうさん。」といつてお君が烏賊の糸づくりに鱧の燒いたのを添へて酒を持つてきた。

「それから今また電話をかけましたんどつせ。ほしたら大若さんでおひやすには點茶からはおかへるにはもうさつきにお歸りやしたけれど、本人さんの實家にきつい病人やたら出來たいうて、そつちやへいかはりましたさうにおす。ほて、來とくれやすのどすか來とくれやへんのどつかて聞きましたら、何というていかはらしまへんさかい、内でもえらう困つてます。そない云ふとゐやすのどすせ。えらい鈍なことでございますなあ。」お君は氣のぬけたやうな顔をしながらさういつて銚子を取り上げた。

「なんともいひ置かないといふのが可怪しいな。」春雪は一口脣につけながら眉根に心持ち不安の色を浮べた。

實家に病人のあるといふのはよくきこえてゐる。それとも急に惡くなつたのであらうか。晝間立ち別れる時には堅さうな口を利いてゐたが、大阪のお客とは遠から點茶の晩の約束がしてあるといつて斷りさうにしたのを、强ひてこちらへ靡きよせるやうにしたのであつた。かねての話の樣子では先客は随分長い間ひいきになつてゐるらしい。それをばまだ昨今日の淺い馴染の自分が、平常ならばとにかく彼等にとつては一年中での最も晴れやかな一日であるべきその今宵の花をば横から出て奪はうとするのは執心がすぎて野暮である。

「寄せてもらひますいうたら、寄せてもらひます。」自分であれほど堅く約束してゐたくらゐだから來られるものなら來るだらう。それでももし來なかつたらその時心の決めやうもある。さう思ひきめてしまふと、彼は手にしながら飲みさした盃を一息に乾した。

「どなしまほ。も一遍せいて見まへうか。」お君はつづけて銚子をさし出した。

「まあしばらく打棄つておいたらいゝでせう。來ないんなら實家へゆくときにさういひおいて出るでせう。」

すると遠くの廊下の方で幽かに話し聲とゝもに人の歩く足音が近づいて、

「お君さん」と、一聲高くうちの亭娯が階子段の下から呼んだ。

「はあい。」と、お君はそちらに返辭をして「あ、來やはりました。」

と、いひながら耳を澄ましゐると階段にさら〳〵と衣摺れの音がして、やがて下からついてきた亭娯があける襖の間から、浮世繪の中からぬけ出たやうな葛城のすらりとした姿が

表はれて微笑みながらしづ〱入つてきた。人目を忍ぶために茶席の華美な裝ひは一切更めて、いつものやうに年に合はしては地味すぎる黒縮緬の羽織にやつぱり晝間着てゐたとほりの黒地にも少し細かい白の立縞になつてゐるお召の襲ねを着てゐるので、纖細い立姿がひとしほあでやかに細つて見える。頭髮の飾もみなぬき取つて、伊達兵庫の太い金元結だけが黒いところにきら〱光つてゐる。顏も柳の葉なりに刷いた眉黛だけを殘して頸から上を綺麗に油で拭きとつてゐる。

「姉さん、おほきに。今晩は。」と、青く光る口紅の小さい唇を綻ばせながらお君の敷いた火鉢の向の蒲團にきて坐つた。

「病人がまた急に惡いとかいふのはどうしたえ。」

「そんなことおへんやろ。」訝りもせずにいふ。

「そんなことおへんやろて、先刻お君さんが大若に電話を掛けたら屋形でお母はんのところに病人が出來ていかはりましたといつてゐたというぢやないか。ねえお君さん。」

「へえ、そない云うたはりました。」口の先でいひながら、お君はうつとりと葛城の髷を眺めてゐた。

「さうどすか。そら何か屋形の人が思ひちがへしたんどつしやろ。」葛城はさあらぬ體でいつた。

「あんたの内はよう思ひちがへをする屋形どすなあ。」

春雪は戯談らしう疊みかけてさういつたが、葛城はぼうつとしてそれには答へず、

「姉さん、私今恐うおしたえ、幌掛けてましたけどお月さんが明うあかうおつしやろ、ほんであこに木娘がすうつと立つてるのがよう〱見えました。私俥の上で慄然としました。」

葛城はお君の方を見ながら舞妓のいうやうな子供らしいことをいつて、細いのべの煙管をとり出した。

「あゝ、さうどつしやろ。ほんまにあこのとこ恐おつせ。どなたはんかて、そない云うて氣味わるがらはります。」

「晝間見たんぢやそんなでもないがなあ。夜、月の明りにあれは女が袖を掻合せて立つてゐると思つて見るからさう見えるんだよ。」

「何かそない申しませうか。」お君は立ちさうにして訊く。

「さあ。あんたは。」

「私まだお夕飯たべしまへんのどつせ。」

「都踊では食べないの。」

「あんなん何やわからしまへん。」

「よく食べる人だなあ。どうぞお好きな物を御遠慮なく。」

「ほんなら姉さん、えらい濟みまへんけどなあ」といつて葛城の誂へるものをよく聞きとつてお君は、

「畏りました。」

といつてまた襖の外に出ていつた。

五

お君がいつてしふと春雪は嬉しさうに先刻茶席で遠目に見た葛城の顏や頭髮をまた近くでつく〲と眺めながら、

「よう來とくれやした。大阪のお客さんも今日は來てゐるのやろ。」

「さうどつしやろ。」葛城は、春雪が下手な京都言葉で戯弄ふやうにいふのを、またかと笑ひもせず、他人事のやうにいつた。

お客に、ほかのお客のことを訊かれるのは彼等にしては誰れでも厭がるのであるが、わけてそんな浮氣稼業をこそしてをれ、ついぞこれまで男に戀れたといふことのない彼女はそんなうだ〱したことをいひ出されるのを何より好まなかつた。

「私、今日どこへもお花をお斷りしやうか知らん思うてたんどすせ。」葛城は、よくその氣質を知つてゐない者にはやゝ驕慢に見えるやうなぬうつとした顏をしていつた。

「なんでどす。」春雪は、その澄ました顏をどうかして一遍笑はせねば氣が濟まぬやうな心持ちがするので、またしても京言葉で追ひかけた。

「なんでいふこともおへんけど、今日あんたはんに途中でお逢ひしまへなんだら、私お母はんのとこへいこ思うてましたけど、約束ちがへるとまた惡いから寄せてもらひました。」

「大層恩にきせるぢやないか。」

「そんなことおへんけど。」葛城は早口にさういつたが、何ということなく、またしても吾れ知らず氣が沈むやうになつてきて、それつきり口を噤んでしまつた。

春雪はあゝまたいつもの癖だと思ひながら、知らぬ顏をしてその顏を見守つてゐた。

「私いつでも汚うしてゐますやろ。」といつてゐるくらゐ京女には珍らしい色氣や厭味の微塵もない女であるが、青いほど白い顏を今日は眼の邊から頰にかけて肉白粉でほんのりと紅く染めて、小さく見えるやうに彩取つた口紅が舞妓のやうに青く光つてゐる。肌膚の細かい地に白粉や眉黛が心持ちのいいほどよくのつてゐるので傍で見てゐてもそんな厚化粧をしてゐながら、すこしも厭らしい氣はしない。香油に潤んで漆のやうに雲のやうに艶かな鬢のあたりが水際たつて匂やかである。

「どうしてそんなに沈んでゐるの。」

春雪は脇息の肱を置きかへながら訊ねた。

「私そんな沈んでゐしまへん。」

葛城は紅の脣を小さく綻ばして細面に重さうな頭髮を徐にあげて黑い二重瞼の瞳をぱちと瞬いた。

口では事もなげにさういつたが、さうなくてさへこの頃漸次心の疲れてゆくのを覺える彼女は弟が重い病の床に就いてからは一入氣が沈みがちになつてきた。それをお座敷にいつ

て客の前で努めて顔に出すまいとすればするほど心が滅入つてどうかすると口を利くのさへ億儀なことがあつた。騒々しい三味線の音や浮ついた高笑ひの聲が頭に響いて顳顬が痛むやうなことが多かつた。それを知らぬ客や仲居には葛城は氣取つてゐるとか愛嬌が乏しいとかいつて厭味をいつたり蔭口をいふものもあつた。此方から別にいふ心はないけれど、つい訊かれるまゝに弟が病氣をしてゐることや實家の困つてゐることを話すと、どうせそんな卑しい稼業をしてゐる者だと頭からきめてかゝつて、大抵の客は嘲けるやうに笑つて、それをば賣色の女が客の憫みを買ふための例の手管のやうに噓にしてしまふのである。春雪が多くの客と異り、昨今の淺い馴染でありながらまだ廓勤めをせぬ堅氣の時分からの知合でゝもあるやうに交際つてくれるのをよく知つてゐた。春雪はどうかして女の心を引立てるやうな言葉をかけてやりたいと思ひながら、自分もともについ引き入れられるやうに思ひ沈んだ。口を結んだまゝうつとりと美しい女の果敢なさを考へさせられてゐた。

口數の少い葛城は默つてゐるやうでも彼女の胸にはいろいろな想ひが往來してゐた。先刻屋形を出ようとするところへ丁度外から歸つてきた姉さんは、「ほゝ、あんた今日はほんまに好う出來ましたえ。」といつて賞めてくれよ。姉さんは今宵わざ〳〵御殿の觀客席に入つて自分のお手前を見てゐてくれたのであつた。

「ほしてあんたこれから何家へおいきやすの。」といふて聞かれたから、

「わたしこれから下河原へ寄せてもらひます。」

といふと、姉さんは微笑しながら、

「あした下河原のお客さんよつぽど好きなんやな。大阪のお客さん先月から約束してゐたのやから、今日はどないかして木屋町の方にいとあげやしたらえゝやろに。」

さういつたのを、自分で此方へ來てしまうたのであつた。今まで一度も心から男に戀した經驗のない葛城は大阪のお客さんを好きも嫌ひもしなかつた。初はこちらから縋つたのでも賴んだのでもなかつたが、忘れもせぬ一昨年の秋店せ出しをしてから一と月ばかりもたつた頃松池からの知らせで家からは自分と勝山と、ほかから二人ばかり、大阪のお客さんで多勢一座した時そのお客に初めて會つた。中一日置いてすぐ二度目を知らしてくれはつたさうやけれど、ゆくことが出來なかつた。その時は大阪のお客は四日も京都に逗留して、こちらのあくのを待つてゐたけれど到頭待ちあぐねて歸つてしまつたといふことを後になつて聞かされた。それから後も機わるく大阪から來て知らしさへすれば必ず出來るといふやうにはゆかなかつた。それで松池のお女將はんと木屋町のおかあはんとが仲に入つて、此度からはどこへお花にいつてゐてもそこを貰うて此方へ來とくれやすならお客さんにさういうてなにがしか少なからぬ當座の御褒美を頂いてあげる。その代りお客さんの方でも前以つていつ幾日にはきつと來やはるといふ日をお茶屋まで知らしておくといふことにして双方の約束が成立つたのであつた。けれども永い月日にはそれがそのとほりにならぬ場合もあつた。――だん〳〵馴染みの重なるにつれて樂しい行末のことまで寢物語りに說ききかされて、遠からぬうちには必ず仕合せな身にしてやる。しばらく辛抱して待つてゐよ。さうなれば弟はかねての望みにまかせ、それほど學問が好きなれば不自由のない學資を與へて東京の學校に遣つてやる。お母はんとおまへとにはどこか閑靜なところに小綺麗な家を持たして氣樂に遊んで暮らせるだけのことはしてやる。さういふ嬉しいづくめの話は今までにもう幾度か聞かされてゐるのである。大阪へも月に一度は必ずお茶屋の仲居がついて、天王寺の弘法樣にお參詣かた〴〵此方から出かけていつて、此の前が芝居であつたから、此度は文樂座といふやうに閑暢な一日を遊び暮らして、晩には何處か人目に立たぬところで御飯にしてその夜遲く京都にかへつて來るのであつた。大阪では旦那に人目の關の遠慮があつた。多勢の番頭や丁稚を使つてゐるうへにまだ兩親もあれば妻子もあつた。そして尙ほそのうへに新町には藝妓あがりのお妾があつてそれにお茶屋を出さしてあつた。かねての話しの樣子ではそれがなか〳〵容易ならぬ女であるらしかつた。人目の多いところへはうつかり一緒に行くことが出來なかつた。芝居や淨瑠璃はいつも前から日を約束しておいて棧敷と土間とで別々に觀た。「あゝ、あこにきてゐやはる」と兩方で氣が附くと遠くから眼顏でそうつと人知れぬ合圖の挨拶を交はすのである。

もと〳〵道樂や浮氣でこんな稼業をしてゐるわけでないのやから、先きで親切にいうてくれはるとほりにしてもらへば多くの人に名を呼ばれて、いつまでもつらい恥辱を曝さずにすむけれど、さうなればこのさきまだうら若い一生を暗い日蔭者で過す覺悟をせねばならぬ。今の憂身をそれにくらべて好ましいといふのではないけれど歴とした正妻のあるうへに既に一人の妾があるところへ、たとひ飽くまで祕密をまもつて人には知られぬやうにかけ離れた京都の地に住まうともそんな境遇に置く自身の身も淺間しいし、人の怨みの罪も恐ろしい。つらい勤めをしてゐれば寧そひと思ひに淵河へでも身を投げて死んで仕舞ふかと思ふほど情けない、悲しい、口惜しいこともたび〳〵あるけれど自分が死んだ後でお母はんや弟の悲しみを思へばそんなことも出來ない。こんなに苦勞するくらゐやつたらやつぱり大阪のお客さんのいふとほりにしてもらはうかとまた思ひなほすこともあるが、ほんならどう

ぞさうしておくれやすと此方から頭を下げて頼んで出るほどの氣もすゝまない。その間には向の嫉妬や疑ひもあつたり、それにつれてまた此方の思ひ過しもあつたりして兩方で水臭くなつてしまふやうなことも度々あつた。月々の手當てもこの頃では初めの約束のとほりにしてはくれなかつた。向ふからさうせねば、こちらからいひ出すこともしなかつた。

　實家でお母はんと親子對向ひでそんな先々の話が出る折にも、

「ほんまに落籍してくれはる氣があるんやつたらもう遠にさうして貰うてゐる。」葛城はさういつて、今となつてはあんまり當てにもしてゐなかつた。

「あのお客さんも今までせんど女に手を燒いとゐやすから、いろ〳〵に此方の氣をひいて見てゐやはるのやろ。」

　いつであつたか春雪から委しい今の身の入譯を深切に訊ねられたときにもさういつてありのまゝを打明けたのであつた。その折お客さんの身の上ばなしも打明けて聞かされた。一度は奧樣も貰はゝつたさうやけれど、恩のある繪のお師匠さんの愛娘であつたその奧樣は幼い時から、藝事などの好きな兩親に甘やかされて育てられたので、何かにつけて我儘でそれまでいろ〳〵な善からぬ噂があつたが芝居者とやらとの關係はもう世間の口に戶をたてることの出來ぬほどの表沙汰になつてしまつた。今までは、幼少の時からわが子同樣にお師匠さんの手許に引取られて、日夕座右についてゐて墨を磨る術から敎へ育てられた恩義に縛られて、どんなことがあつても靜つと眼を瞑つて無念の涙を呑んで堪へてゐたのであつたが、此度といふこんどはさすがに奧樣の親達の方でもそのまゝにして置かなかつたし、常から最屓になつてゐる繪の愛護者の誰れ彼れまた友人のたれかれよりも斷然たる處置に出ることを忠告した。自分が二十七奧樣が二十三の時から、五年の間同棲に幸ひ子供もなかつたので、その時から春雪は家を疊んで妻を實家に歸し、綺麗な獨り者になつてしまつたのである。

　彼には淺草の方で人形師をしてゐる叔父が一人あるきりで幼い時から親も兄弟もなかつた。父親は自分が五つの時に亡くなつたが母親はどこかの藝者であつたといふことだが、それは自分でもよくは知らなかつた。叔父のところに養はれて人形を造る手傳をしてゐたのを、子供ながらに、だれも敎へぬ繪を上手に描くので、叔父の家へ時々話しに來るそのお師匠さんの目にとまつて、下谷の家へ弟子に所望されて貰はれていつたのであつた。生みの父母の愛に飢ゑてゐた彼は、氣の荒い叔父のおかみさんにいつも口汚く言ひのゝしられてゐたが師匠の家に引取られてからは、奧樣をはじめ皆から實の子のやうに可愛がられた。とり分け師匠にはだれより目にかけて愛せられてゐた。師匠は好い人であつた。あゝいふ人にど

うしてあゝいふ娘が出來たかと思はれるほどお師匠さんは溫厚の長者であつた。春雪はかうして遠い旅の空にさすらうてゐても、娘のことなどがあつてから急に兩鬢におく霜の目立つてきた恩師の慈悲深い溫容を片時も忘れることが出來ず、ともすれば旅寢の憂き枕に不貞の妻の身を怨むよりも恩師の寂しい心を思うて暗淚に濕ることも度々あつた。――

　その時

「さうか、それは賴りないなあ。そんなら私が及ばぬながら、どうかしてあげよう。妻君があるうへにまだそんな妾などがあつてはたとへ落籍してもろうて自由な身になつてもあんたも寢覺めがわるい。」

　さういつて深切に慰められたので、

「どうぞおねがひいたします。」といつて彼女はうなづいたのであつた。屋形の姉さんには堅く口を噤んでそんなことは何にもいはなかつたけれど葛城の心はその時分から移ろひそめてゐた。

　これまでとても夜毎に變る多くの男の中には深切にかき口說いて、太夫の心に媚びやうとて浮華な遊びをする客もあつた。半としばかりも通ひつめて身がつまり勘當同樣に田舍の親類におあづけになつた若い男もつた。商用とやらで月に一度は必ず京にくる東京の客は大阪の客と張り合ひをかけて二十日も揚げづめにゐつゞけしたことまであつたが、それ等はいつのまにかおのづと便りなく風が吹いて過ぎるやうに遠ざかつてしまつた。

「こないにいつもいそがしい體やのに、また不思議や、葛城さんは良緣がえらい遲い。」

　屋形の姉さんは、さういつて始終話しにゆくお母はんに向ひ彼女の身について語つてゐるのである。

　このお方かて今は深切にいうてくれてはつてもお客の心くらひ當てならぬものはない、いつどういふ風の吹きまはしでついとほかの方へそれてゆくか分らない。それのみならず常に處定めず諸方を步いて繪を描いてゐやはるといふのやから口では必ず變らぬと堅い約束をしてゐても、末のことを思へば賴りない。さうかといふて疑へばまた限りもない。まだ一と月あまりの交際ではあるが正直らしい口のきゝやうといひ、思ひつめたらしい氣性といひ顏を見るたびに口癖のやうに、

「私は哀れな女が好きや。」

といふて、京には多勢女もゐるに自分をば二人とない者のやうに愛惜しがつてくれはる心に滿更虛僞もなさゝうに見える。

　さう思ひかへすごとに、おのづからまた自分の心を打解けて、優しい言葉をかけられるたびにまだ眞實の戀を知らぬ身にもさすがに懷かしさ賴母しさの思ひはつのるのであつた。

　葛城は、自分がさつきから思ひありげにうつとりと考へ沈

んでゐる風情に、こちらの氣心をはかりかねて、口をきくさへ遠慮がちにしてゐるらしい男の心をよう知つてゐた。それで先刻屋形を出るとき姉さんに笑はれたことを、男に聞かして二人で樂まうかと思つてよつぽど口まで出かゝつてゐたが、空々しい世辭にならはぬ彼女はそんなことを蓮葉らしう口にするのも、氣はづかしくてやつぱり默つてゐた。けれども男の傍に坐つてゐる彼女は向が思つてゐるほどに心は沈んでもゐなかつた。

「大阪のお客さん、ほんとに來てゐるんだらう。かうして來てもらへばきて貰うで、私はそつちが氣になつて仕方がない。」春雪はそれがいかにも氣になるらしく訊ねた。

「來てゐやはつたかて、大事おへんたら。」葛城は少し苛々したやうにいつた。

「さうだらう。來てゐるんだらう。」春雪は、今、靜かな夜遅く二人きりかうして樂しく對向ひながら、美しい頭髮かたちを獨りで領してゐてもそのまぼろしの姿は明日はまた仇人の花と眺められるのであるかとおもへば戀ゆゑ心弱くなつた彼は胸が潰れるばかり果敢なく、頼りなかつた。

すると葛城は寂しく沈んでゐた顏をふつとあげて、黒瞳がちの大きな眼で春雪の顏を見まもりつゝ微笑みながら、

「あんたはん、だれにもこなこともういはんとおきやす。」いひよどむやうに前置きしながら「うちの姉さん、私にお金を貸すと、またそれだけでもちよつと私の體が長う繫がりますやろ。そやから私今屋形を出かけるとき姉さん、「あんた下河原のお客さんよつぽど好きな人やなあ。大阪のお客さんもうこの間から、約束してゐた人やから、今夜はどないか都合して木屋町へいとあげやしたら、えゝやろに。あんたまた月末になつてどないするのえ。こまる場合にはまた內でもどないかしてあげんならんけど。」さういうて笑うてました。」

春雪は、それが何ともいへない嬉しかつた。そしてその一言にわけもない不安の雲を拂はれながら、

「へえ、姉さんそんなことをいうてゐるの。ぢや姉さんもうわたしがどんなにあんたを思つてゐるかといふことを知つてゐるんだな。」彼は微笑しながらいつた。「そして私達の相談してゐることを知つて、邪魔をするといふやうなことはないだらうか。」春雪は嬉しければうれしいほどまた不安も倍してきた。

「そなこと何も知らはらしまへん。」

「だつて金を少しでも餘計に貸さうとするの。」

「格別さういふこともおへんけど、まあ道理がさういふもんどすしやろ。」

この二た月三月大阪の方が途絶えてゐるのは姉さんにも知れてゐたがそれがなくては差詰め困る筈の葛城がどうして苦しい意地を立て徹してゐるかは姉さんさへもまだよく知らな

かつた。まして大阪のお客や松池のお女將はんや、木屋町のおかあはんなどに分りやうがなかつた。

「さうか、よろしい。どんなにしても私がこれから立てとほすから、あんたも心が變らぬやうにたのむ。」春雪は、深く思ひ込んだやうにいつた。

そこへ、

「えらいお靜におすなあ。」と、お君が膝をついて靜つと襖をあけながら、廣蓋に載せたものを運びこんで、一つひとつ塗り物の餉臺の上に並べた。

「さあ、あんたの好きな物が來たから澤山お上んなさい。」

さういつて春雪が見やる膳の上には源五郎鮒の子なます、あなごの天麩羅、それに鮑の奈良漬にいつものとほり鱧の吸物が附いてゐた。膳をこしらへておいてお君が銚子の熱いのをとりに立つてゆくと、

「あんたはんもお上りやすな。」葛城はすこし甘えるやうにいつて一番さきに鮑のなら漬に箸をつけた。

「私、これがなによりいつち好きやのつせ。これやつたらなんぼ食べたかて飽かしまへん。」

「さうかなあ。こゝの家でも時々それを出すけれど、私はあんまり好かない。めづらしいのはこの鰭だけだ。これなら毎日一度はいゝ。」さういひながら春雪も箸をうごかしてゐた。

「あんたはん繪もう描けましたか。」

「うむ、よく見てきた。好かつたよ。あれで隨分頭が重いだらうなあ。何だか簪がぬけて落ちやしないかと思はれる。」

「そんなことおへんけど頭が痛うおす。」

「あの頸のところに黑い房のやうなものが垂れてゐるのは、あれは何といふもの。」

「いたづら。」

「それから頰のところと兩方の鬢に小い珊瑚樹のやうなものが下がつてゐるのは。」

「ながさき。」

「私はあのいたづらが可愛らしいなあ。」

「あんたはん早う繪描いとくれやすな。」葛城はまた甘えるやうにいつた。

「うむ描くよ。明日描かう。」

寝る時はゞかりに立つて、細めにあけた戸の隙間から仰いだ空がいつの間にか暈月夜になつてゐたと思つたら、快よく一と寝入りして目覺めた曉方から昨夜はあれほど寒かつた陽氣が俄にまた暖くなつて、しつとりと汗した蒲團を知らぬ間に一枚はね除けてゐた。

軒を流れる春雨の音が柔かに枕にひゞいた。

二人は十時ごろになつてやつと目を覺ました。昨日一日晴つた春雨はまたもや本降りになつて濕々と前栽の木々を濡ら

して、絹絲のやうに降りそゝいでゐる。庭のあるじは我ぞといはぬばかりに滿開した櫻花は昔の小町をでも思ひ起さしめるやうに雨の中にも眞白に咲き誇つてゐる。小川になぞらへて敷いた木隂のさゞれ石は艶かな濡れ色をみせて、春雨に溶けて落ちた薄紅の花片が、美しい染模樣のやうに三點五點そこに散つてゐる。植込みの奥の眞青な笹の葉隂に降る雨にとまどひした名の知れぬ小鳥が青い羽色のぬれるもいとはず枝から枝に飛んでゐる。

二年近い廓づとめをしてゐても少しも遊里の風に馴染まぬ葛城は、寢床を離れると行儀よく、眞青な地に薄く櫻の花びらを刺繡した半襟のかゝつた長繻袢のうへに直ぐ昨夕の着物をきてそのうへに幅廣の伊達卷だけを細腰がくびれるほど強く卷きつけた。

「よう春雨が降りますなあ。」

しつとりと足に冷つく緣側に立ちながら二人は軒端を流れる飛沫のふりかゝるのを忘れて春雨に濡れてゆく庭の面を眺めてゐた。

「お早うござります。」お君は二人の起きたらしい物音をきいて上つてきた。

「あのお風呂が出來てますよつて、ちよつとお入りやしたらどうどす。」

「それは結構。」

二人は楊枝をつかひながら湯殿におりていつた。

葛城はまだ襟頸のまはりに殘つてゐた昨夜の厚化粧を風呂ですつかり洗ひ流してしまつて、肌膚の細い素顔をほんのり櫻色に染めて濡れ手拭を持ちながら上つてきて緣の欄干にかけた。

あつらへておいた田舍亭の粋な料理で朝とも晝ともつかぬ御飯をあつさりと濟ますと、ほうつとしたやうに薄ら眠い、淡い疲れをおぼえてきた。

「あんたはんこないしてる間に繪描いとくれやすな、私あとになつたら頭髮を解きまつせ。」

「あゝさうか、そんなら一つ描かうかな。」

春雪はさういつて寫生帳を取つて來て正面から或は横から或は斜に葛城の似顔を色々に描いて見た。

お茶を煎れかへて上つてきたお君はそれを見て、

「ほ、粋なわ。」といひながら春雪の黒八の襟のかゝつた縕袍の肩先に顔を覗けて火鉢の向に窮屈さうに口を結んで坐つてゐる葛城の顔と見比べながら、

「よう〳〵似てまつせ。」

「あんたはん私にもちよつと見せとくれやすな。」葛城は甘えるやうにいつて春雪の手から寫生帳を取つて、わが繪姿を見てゐた。

春雪は、なほ葛城にきゝながら自分の想像を加へて頭の飾

りや裲襠の繡ひ模樣を鉛筆でざつと形を附けると、それを水彩畫の顏料でさつと濡らした。

「さあ、かうして置けばまたいつでも本當に描ける。」

「あんたはん、これだけどすか。」葛城は繪の具を塗つた寫生帳をまた取り上げて眺めながら、物足らぬやうにいつた。

「そしておいて、また絹に大きく描くんだよ。」

「今描けまへんか。」

「今は描けない。そのうち描いてあげる。」

「はやう描いとくれやすな。……ほんなら何かほかのものを今描いとくれやすな。」

葛城は甘えて强請つた。

「描いてもいゝ。……が、お君さんその代りに濟まないが御褒美に一つ飲まして下さいな。」

「へえ、畏りました。」

「ぢや何かあんたの羽織の裏にでも描いてあげようか。」

「羽織の裏て、あれ友禪どつせ。」

「ぢや羽二重にでも描かう。」

さういつて春雪はお君に出入の呉服屋に電話をかけさして早速白羽二重を持つて來さすことにした。

「ほんなら私、その間にちよつと頭髮をなほします。姉さん、これ重うおつせ。姉さんほしていろ〳〵我儘いうてえらい濟んまへんがちよつと道具かしとくれやすな。」

「へえ、へえ。ぢつき持つて參じます。」

さういつてお君の立つてゆかうとするのを待たして、

「それからねえお君さん……どうだらう、今日はまた一つ春雨に閉ぢこもつてしんみりと春吉さんの好い聲でもきかしてもらはうか。」

春雪はさういつて葛城の方を見た。

「えい、それよろしい。」葛城はうなづいた。

お君は畏つて下りていつた。そしてすぐまた鏡立てと櫛箱を持つて上つてきて、

「葛城さん、あの内から電話どす。」

「さうどつか。」と葛城はお君と一緒に下りていつた。

電話口に出ると屋形のお清の聲で、昨夜はあれから葛城がこちらへ來たとまた度々松池からも木屋町からも電話がかゝつてお清や仲居頭のお文までが言ひ譯の仕樣に困つて後には到頭姉さんまでが電話口に出てそこをえゝやうにいひ繕らうて置いたから、もし貰へたら今からでも貰うて戻つて一遍大阪のお客さんのところへも顔を出してもらへまへんやろかといふ口上である。

葛城は屋形の人達や松池のお女將はん達の當惑は察したけれど昨夜から機嫌をわるくしてゐる客のところへ直ぐゆくのはどうしても氣が進まなかつたし、また此方のお客がこれから歸へす筈もないと思つたら、何處までも病人が惡くつてと

ても歸つて來られないことにして、よくお清にいひ含めて電話を切つた。

葛城がさあらぬ體で靜に座敷に戻つて來ると、春雪は火鉢の傍に肱をたてゝ横に寢そべりながら春を流してゆく雨の音の中にうつとりと蕩けたやうになつてゐたが、

「何の用」と不安さうに訊ねた。

「何の用ちうこともおへんけど、ちよつと。」

「弟が惡いの。」

「大阪？」春雪は其方が氣にかゝつたが、それを先に訊ねるのも端ないと思つて自分で自分を抑へたのである。

「ちがひます。もう大阪へ歸らはりましたやろ。」葛城はまた根掘葉掘り問ひ糺されるので煩はしさにさういつた。

やがてお君の持つてきてくれた鏡の前に坐つて太い金元結を解いて大きな伊達兵庫の髷を解いた。降る雨に襖も障子も閉切つた部屋の内がしつとりと生暖く潤んで、春らしい心地の中に葛城の濃い頭髮から立ち迷ふ柔かい香油の薫が媚びるやうに漾うてゐた。入れ毛を取つてしまつてやがて好ましい銀杏が彼女自身の手によつて巧みに結ばれた。

「あんた上手だなあ。」さつきから眼を離さず見てゐた春雪は横になつたまゝいつた。

「私、いつも自分で髮結ひますせ。」

「それは感心だ。」

「頭髮かて、みな自前どすもの。」

「へえ、そんなら全抱へでゐて頭髮も自分でもつの。」

「自前でないのはお花にゆく着物だけどす。屋形にゐる時はいつも自分の着物を着てゐます。」

「全抱でそれはひどいねえ。」

「私、こして奉公してをつて自分で所帶を持つてると同じことゞつせ。そやからたんとお金がかゝります。」

そこへお君が早速呉服屋からとゞけた白羽二重を持つて上つてきた。

「これでよろしおすか。ほて春吉さんぢつき來やはります。……ほ、よう出來ましたあんたはん上手どすなあ。」お君は葛城の頭髮を眺めた。

「今いつてゐる處なんだ。商賣柄とも覺えない、いつも頭髮は自分で結ふんださうです。どうです。これなら落籍して宿の妻にしても所帶持ちはいゝでせう。」

「よかつた。」それを好機にお君は笑つて急しさうに立つていつた。

それと入れちがひに淨瑠璃の春吉が、大きな箱を持つた内の苧姆と一緒に入つてきた。

「今日は、よう降りますなあ。」

春雪の好みによつて春吉はいつもの通り「新の口」のはなと「三千歳」のさはりを二つばかりやると、一服して此度は

葛城のお好みで「白石噺」を長く語つた。葛城は好きな中にも揚屋の段は今のわが身につまされて、いつもいつも悲しく聽くのであつた。年はまだ葛城よりも二つ若い二十であるが、春吉は聲が好いうへに藝に熱心で、それにすこしも色氣のないのが面白くつて春雪はまだ葛城を知らぬ自分から折々こゝへ呼んで旅の憂さはらしに自分でも三味線をたよりに、わたしのとゝさまかゝ樣は京の六條珠數屋町などゝ唸つてゐた。

「……これこの廓へ身を賣つたを、思ひ返せば十二の年、そなたは五つ子顏さへ見知らず、とゝ樣の御最期や、母樣の死目にも、逢はぬといふ、悲しい不孝な、果敢ないことがあらうかいの。かうしたことゝは露しらず、この妹は健なか知らぬ、とゝ樣やかゝ樣のお煩ひでもあらふなら、よもや知らしてたもふもの。たよりのないを杖柱。首尾よう年を勤めたら、國へ歸つてお二人に樂させまして、どうしてと、色や浮氣を嗜んで、勤大事といひなづけの殿御のことも、そなたのことも、戀し懷かし思ふもの、たのしみ暮した刻もなう。名乘り逢ふたは嬉しいが、悲しい話し聞く姉が、心を推してたもいのふ。と。

……」

春吉が悲哀をこめた音調につれて濕やかに語りつゞける宮城野しのぶの姉妹が涙の物語にぢつと聽き入つてゐる葛城の黑瞳がちの二重瞼は大きく潤んで長い睫毛にはいつしか露が光つてゐた。

その夜も葛城は小休みもない春雨に降り籠められて泊つた。

六

それから十日ばかりも過ぎて、京の春も漸う闌け、東山の青葉の奧からひゞいて來る鐘の音とゝもに薄ら寂しい夕暮れの風にさそはれて庭の櫻のほろ〳〵と散りゆくやうな晩であつた。

その日も葛城は午から春雪の宿によせてもらうて久し振りにのんびりとした氣持ちになりながら、昨夜花見小路の近あさで多勢一座の陽氣なお座敷で飲めもせぬ酒を拳に負けて惡じひせられたせゐで今日もまだ頭がふらつくやうな心地がするので、いつもの按摩を呼んでもらうて横になりながら療治してゐると、

「葛城さんお内からお使ひどす。」といつてお君が上つてきた。

葛城は玄關まで降りていつて會ふと女衆のお清がわざ〳〵迎へにきてゐて、

「あの今松池さんから電話どして、ちよつとでもいゝさかい、今日はぜひともあんたはんに顏を出しとくれやすいうて

來やはりましたんどつせ。ほて内の姉さんが、あんたはんにそない云ふとくれやすいはゝりました。今日はぜひちよつとでもそちらを貰うて來るやうにいうたはりました。」

　葛城は「さうどつかおほきに。」といつたまゝそこに立つてちよつと考へた。彼女の眞實の心はもう春雪の方に傾いてゐたけれども、この二三ケ月妙に水つぽくなつてゐるものゝ、向は長い間世話になつたお客でもあるし、それに出てゐる以上はお茶屋に對する義理もあるし、この間の點茶の晩からあのまゝになつてゐる詫びも一應はいつておかねば方々へ申譯がないと思つたので、

「ほんならちよつと待つてとくれやす。」といつてそこにお清を待たしておいて春雪の部屋に上つてきた。

　春雪は今に夕飯の仕度が出來てくるのを樂しみに待ちながら縁側に蒲團を持ち出して靜かな黄昏の風にさそはれて散りゆく庭の櫻を眺めてゐた。

　葛城は春雪が快よく聽いてくれるかどうか、といふ不安やら、これから往くとしたら、向のお客やお茶屋で此の間のことを何といはれるであらうといふやうな色々の思ひに急かれて、ぼうつと上氣したやうになつてほんのり面を染めながら、

「あんたはんちよつと。」と妙に口ごもりながらいつて障子の小蔭に春雪をつれていつて、

「私、あんたはんにお願ひがあるのどつせ。」

「何を。」

　と、春雪はさそはれるまゝに立つてゆきながら、もしや貰ひではあるまいかともう不安に驅られてさう訊ねた。

「えらい濟んまへんけど、これからちよつと内へ往してもらへまへんやろか。」

　葛城が顔を赤くしてさういふと、春雪は對手の心の底まで見徹さうとするやうにじろ〳〵女の顔を見まもりながら、

「大阪のお客さんのところ？」と不安さうに訊ねた。さういはれて葛城もさすがにお客での貰ひでないとまで全く嘘をいふ心はないので、

「いえ違ひます。神戸のお客さんどす。」と綺麗にいつた。もし大阪のお客だと本當のことをいつたら、貰へないかも知れぬといふ懸念があつた。

「神戸のお客……深いお馴染。」

「そんなんと違ひます。たゞちよつと。……すぐ歸つてきます。」葛城はその後をいひ濁した。

「たゞちよつと。それからどうした。」

　春雪は妙に薄笑ひしながら葛城の顔をまたぢつと見てゐたが、ぼうつと薄紅に染めなした女の顔に一生懸命なところが顯はれてゐるのを見てとると、それほどそちらへゆきたがつてゐると思へば一層歸す心はしなかつたが、さうかといつて、あんまり惡留めをして勤めの邪魔をするのは、女の本心が果して何處まで自分に傾いてゐるか分らぬまでも、折角こちらに靡かうとしてゐるものを、それが爲に却つてあらぬ方へ外らせるやうなものである。さう思ひきめると彼は、

「すぐ歸るといつたつて、君達は藝者と違ひ、さうはゆかないだらう。」

「いえ、すぐ歸つてきます。これから汽車で神戸へおかへりやすのやから一時間か二時間したら私すぐかへつてきます。唯ちよつと顔さへ出しておけば後はもうどうなつたかて構しまへんお客さんどすから。」

「さうか、ぢきかへつて來るなら、ちよつと行つておいで。」

　春雪は快くいつた。

「ぢつき歸つてきます。八時か九時にはかへります。遲なつても十時か十一時には必ずかへります。あんたはん、……お腹空きましたか。……ちよとくらゐお腹すいても私戻つてくるまで御飯食べんと待つてとくれやす。私と一緒に食べますから。あんたはんそれまで按摩してもろてとくれやす。」

「十一時。それは遲いよ。お腹が空いて待つてゐられやしない。」春雪は、いかしともなげにいふ。

「ほんなら八時にかへります。あんたはん獨りで食べたらきまへんえ。食べんと待つてとくれやす。」

「そんなら、いつておいで。」春雪はさういひつゝ片時も傍を離したくない可愛い娘を外に出しでもするやうに、葛城の上氣した顔を見入りながら靜つと指のさきで額にかゝつた小さい塵を拂つてやつた。

「ほんならいかしてもらひます。」

　葛城は階子段を降りながらも同じことを何度も繰返してかへつて戻つた。

　そして一旦屋形へ歸つていつていつもの通り早速俥で木屋町まで驅付けた。

「ほ、來やはりました。」といふ仲居の聲に迎へられて玄關から屠所にひかれる小羊の思ひで歩きわづらひながら細い渡り廊下を傳うて一番奧の川添ひの離れ座敷の襖の小蔭まで進みよつた。内では松池のお女將はんの聲もしてゐる。彼女は思ひ切つて靜かに微笑みながら入つてゆくと大阪の旦那は肥滿した大きな體をどつかりと趺座をかいて脂切つた赤黒い額をてら〳〵光らせながら淨瑠璃の縫之助とお女將はんとを對手に酒を飲んでゐる。

「今日は。おかあはんおほきに。」葛城は鷹揚にいひながら好いところにいつて座についた。

　葛城が、いよ〳〵來るといふ返事があつてから、もう、今日は何もいはぬといふことにしてあつたと思はれて、お客もお女將はんもこの間のことなどはおくびにも出さず、彼女が來るのを待つてこれから多勢で宇治へゆかうといふ相談が纏

つてゐた。
「あんたそのまゝでもよろしいやろ。」お女將はんは葛城の方を向いてきいた。
「おかあはんさうどすけど宇治にゆくのどしたら。」と半分いひさして葛城は考へた。
此方へ來る以上は今あちらで約束したやうにさう易々と一時間や二時間で貰うて歸れる筈はないと自分でもそれを知つてゐながら實は吾れをも欺き向をも欺いてやつて來たのである。尤もこれまでは大阪から出て來る日は朝からでも花を付けておいて自分は急がしい體の都合で遲くからやつて來て一時間か二時間くらゐで直ぐその夜歸つてしまふことが多かつたのである。が、かう宇治ゆきの彈んでゐる場合にそれをいひ出したとて到底聽いてくれる道理はない。生中そんなことをいへばいふだけ惡く邪推されるばかりである。さう思つて返辭の仕樣に途惑うてゐると、
「あんた着替へるんやつたら、早う電話掛けて取寄さんことには遲なるえ。」お女將はんは催促した。
「おかあはん、私もうこのまゝでいきます。」
葛城の支度がそれでいゝことになると同勢四人そこから俥をつらねて七條の停車場に急がした。
奈良ゆきの汽車に乘つてからも葛城は後髪をひかれるやうな心地で、それとなく夕暮の風に吹かれながら窓から顏を斜にして遠く東山の方に眼をやるともう薄黒く黃昏れてゆく青葉の奧から清水の高い舞臺に神々しい燈影が瞬きそめて、黒い人家の甍が段々上りに高く重り合つてゐる山裾の方は澱んだやうな暮靄に閉されてゐる。その中に今頃あの人は自分の歸つてくるのを待ちわびてゐやはるやろ。
愛宕の頂に長く殘つてゐた夕榮えも鳥羽野のあたりでとつぷりと暮れて老阪峠につゞく西山城の山々は夢のやうに淡蒼く夜の色に沒してゐる。一望の綠の野はほの白い靄の闇に包れてしまつた。その中を列車ばかりが薄ぼけた燭燈を輝かしながら、馳せていつた。
汽車を降りてから一行はまた俥に搖られて宇治橋を渡り寒い川風に吹かれながら興聖寺の下から温泉まで辿りついた。
その夜二人きりになつてから、それまでは口を噤んでお女將はんなどの手前を遠慮して何もいはなかつた旦那はこの間の厭味をいつたりいろ〳〵に手を變へて葛城の氣を引いて見たりした。
「ほんとにあるんなら、さつぱりとあるというてくれたらえゝやないか。私がその人に會うてよう話をして見て一生夫婦になつてもえゝ人やつたら私が仲に入つて一緒になれるやうに盡力してあげる。」
そんなことまでいつて優しく訊いてくれたけれど、葛城は唯温順しく笑つて、

「ほんまにそんな人あらしまへんたら。」といつてゐた。
「さうか、ほんならえゝけど。お前も、私が唯口でばかりいうてをつたのでは安心出來んやろから八月か九月までには五百圓だけでも渡しとくさかい。今年中には必ず落籍すやうにしてあげる。」
「どうぞおねがひいたします。」葛城は今までのゆきがゝり上厭だともいひ切れないのでさういつて好い加減な挨拶をしてゐた。しかしさういふことはこれまでにもう度々聞かされてゐるのであつた。
翌日になつたら歸ることゝ思つてゐたが、昨夜が遲かつたので一同が眼を覺ましたのは彼れ此れ一時に近かつた。それからまた船を仕立てさせて酒や肴を積込んで渦卷き流れる紺碧の急流を米かしの瀨までも溯つたりして、そこを引揚げたのは向河岸の花屋敷に若葉がくれの明るい灯影が瞬きそめる頃であつた。その夜はまた木屋町で縫之助の三味線を聽いたりして夜を更かしたが、旦那はいつになつても歸る樣子は見えなかつた。この間のことがあつたので意地になつてゐるのであつた。こちらもまけない氣になつて歸りたさうな顏は少しも見えないやうにして、
「あんたはんがえゝとおいひやすまで、いつまでゝもが此處にゐます。」
「よういうた。ほんとにゐるか。」
飲み出すといくらでも飲める旦那は昨日から醉ひつゞけの顏できつと葛城の方を見ながらいつた。
「えゝ、ゐますとも。何日でもあなたの傍においとくれやす。えらいお邪魔どすやろけど。……そのうち奧さんや新町の顏が見たうなりますやろ。」仕舞を低聲で早口にいつた。
「何やい。なんいうた。もう一遍いうて見い。」
旦那は好い機嫌になりながら問うた。
「あゝ聞かれいでよかつた。」葛城は笑つてゐた。
「なんやい。」
けれども彼女はさうしてゐる間も病人のこと、あのまゝになつてゐる下河原のことが始終氣にかゝつてゐたが、それは少しも顏には見せなかつた。病人の方は出先きが分つてゐるからもし急に變つたことでもあれば屋形から知らしてくるからその方は却つて安心してゐるけれども、下河原のことは濟まないと思つてゐた。

七

四月は末になつてもまだ咲き殘つてゐた智恩院の櫻花さへ二三日つゞいた春雨にすつかり散りつくしてしまふと、やがて蒸し薫るやうな青葉にもう暑過ぎるやうな惱ましい日が照つてきた。
梅雄は物憂いゆく春の日をいつまでたつても思ふやうに捗

捗しくない病の床に寢飽きて時々疳癪を起しては母親を困らすやうなことがあつた。母のおつねはそんな時そばについてゐて獨りで泣かされた。そして母は娘を子は姉の見舞うてくれるのを待ちこがれて夜々を明かした。

「お母はん、姉さんはどないしたんやろなあ、今日でもう四日になるのに姉さんはちよつとも來とくれやへんなあ。」この頃になつてまあめつきり衰弱の加はつてきた梅雄は焦れつたさうにさういつて姉の姿を戀しがつた。

「今お清どんの話ではまだ大阪のお客さんやちうからこない長うなつてゐるのやろ。今日はもうかへるやろから、歸つたらちよつとでも來とくれるやうに頼んどいたさかい。急かんと待つとゐやす。」

母はさういつて病人の氣を靜める様にいつたが、先刻お清がこんな物をこしらへしましたからお母はんお上りやしとくれやすといつて屋形から五もくを持つて來てくれたときこの間點茶の時行かなんだので、それでえらいごて〳〵いうてこんなに長う引張つとゐやすのどす。といつてゐたことを思つてゐた。今まで長い間世話になつてゐたことを思へば、それを怨むことも出來なかつた。梅雄も大阪のお客のことは知つてゐた。姉や母の話にも大阪では船場の大きな寶石商で市の公職をも勸めてゐると聞いてゐる。京都からめつたに外へ足を踏み出したことのない母も一度大阪へ見物にいつたついでにかねて聞いてゐる旦那の家の前を通つて餘處ながら大きな店がまへを見て來て驚いてゐた。

けれども梅雄にはそれが不滿であつた。父には早く死なれ、今の姉よりもまだ美しいといはれた、上の姉も死んだあとでは一家を脊負つて立つべき男子は自分である。自から招かぬ禍からかくまで淺猿しく零落した境遇を挽回するのは自分一人の雙肩にかゝつてゐるのである。さうしてそれを救ふ方法といへば自分の苦學の他にはない。自分は學問を以つてどうぞして、一家の悲運を救ひ姉の恥辱を雪がねばならぬ。それが目前の急務である。その若い美しい姉は彼にとつては恰も戀人のやうなものであつた。その戀人の姉は僅かばかりの金の爲に體の自由を縛られて朝夕多くの人の汚れたる欲望の犠牲になつてゐるのである。大阪のお客といふのは惡い人ではないさうだが、いつか姉と一緒に藝妓や舞妓を多勢連れて四條の通りを歩いてゐるのを見たことがあつた。洋服を着ていかつい髯を生やした肥つた男であつた。梅雄は初めてそれを知つた時あれがいつも聞いてゐるわが姉の旦那かと思ふとその赤黑く肥つてゐるのが丁ど岩見武勇傳の講談で讀んだ狒であつて、纖弱い色の白い優しい姉がその狒に人身御供に上げられた生贄のやうな感じがして自分は少しも早く岩見重太郎のやうなものになつて姉の恥辱や老いたる母の悲みを救はねばならぬと思つたのである。

かうしてたつた一人の弟が重い病の床についてゐても姉はたまに深切なお客に樂花をつけてもらふか或は自分で花をつけねば急しい體を夜をこめて自分の傍にゆつくり來てゐてくれることも出來ないのだ。たゞ人の好いばかりの母親には何をいつたつて分らぬので梅雄は病の重うなるにつれて一層興奮してくる心持に襲はれながら凝乎と睨むやうに天井を見詰めてゐた。

そんなことを思ひながら四五日顔を見せぬ姉の姿を頻りに戀してゐると表格子のあく音がして誰れかゞ訪ねて來た氣配がした。

「お母はん誰れか來てゐるえ。」

敏く耳についたまゝもしや空耳ではないかと暫く默つてゐた梅雄はそこに坐つてゐる母親にいつた。

母親がすぐ立つてゆくとそれと一緒に入つて來たのは梅雄の好きな春雪であつた。東京にいつて苦學をしたいとあけくれ口癖のやうにいつてゐる梅雄には東京の人と聞くさへ懷かしかつた。その東京の人で繪をかく人がこの頃姉をひいきにしてくれてこゝへも二三度見舞ひにきてくれて、來る度に東京には學校の數多いことを京や大阪と違うて學生がみな活潑なことや本屋の多いことやいろんな梅雄の胸をそゝるやうな話をして聞かして今に精出して早く病氣が癒つたら東京に連れてかへつて學校にやつてやるといつて元氣をつけてくれてゐるのである。

「どうぞこれをおひきやしとくれやす。」と母親は蒲團を春雪にすゝめながら、

「丁度いゝとこどした。今屋形から女衆が來て歸つたばかりのとこどすさかい、もう誰れも來いしまへん。」といつてまた立つていつて入口の方に氣を附けてきた。

「お客さんにこして來てもらひますのを屋形できつう嫌らはりますので、私の方ではほんまにお氣の毒に思ひますのどすけど、どうぞわるうとらんとおいとくれやす。」

「いえ、そんなことは構ひません。屋形でもいろ〳〵疑ふんでせうよ。」

「えゝそんない思うてはりますのどす。あの娘も滅多なお客さんに吾が家のことなど話さしまへんけど、いつかも一遍そんなことでしくじつたことがおすので、それから屋形でもきつう氣を付けはりますのどす。」正直な母親は凡てのものにおづおづしたやうにしていふ。

「屋形では葛城さんが自分の家へ馴染の客でも連れこんできて蔭日向でもするやうに思つてゐるんですか。」春雪は煙草に火をつけながら笑つていつた。

「まあ、そんなこともないやろけど、そんなことがあつては葛城さんのためにようないよつて云うて姉さんがそない云はりますどす。」

「だけど姉さんといふのは大變可愛がつてくれてゐるといふぢやありませんか。」

「そらよう氣を付けて可愛がつてくれはります。またあの娘が平生勤めねばならんとこはよう勤めてゐますさかい、屋形でもそれはよう知つてくれてはります。」

「どうかね、今日は。」春雪は梅雄の方を見ながら微笑んだ。

「えゝ難有うぞんじます。」梅雄は衰弱した體を努めるやうにして强ひて顔に笑を出さうとした。

　春雪は傍に置いてゐた小さい包みの中から鑵詰をとり出しながら、

「これは先刻東京からとどいたんだが榮太樓の梅干飴といつて病人が食べても障らないものです。も一つの方は甘納豆です。」さういつて鑵をあけて、

「一つ摘んで御覧。格別甘くもなけれど。」

「まあさうどすか、毎度結構なものを戴きまして。」母親は茶を入れて出しながら禮をいつた。

　春雪はこの間葛城がちよつといつて來るといつて歸つたまゝその夜は十一時が十二時になつても一時になつても遂に姿を見せなかつたのでその夜はいろんな不愉快な思ひに苛まされながら惱ましい一夜を殆ど寢ないで明して、翌日になつたら何とか挨拶をするであらうと思つてゐたが晩まで待つても何の音沙汰もないのでそれからそれへと取留めもない嫉妬や疑惑に包まれながら三四日は描きさしの繪絹を仕舞つたまゝに放棄してゆく春の日を心を空に惱みつづけてゐたが、それもまちあぐねて弟を見舞ひかた〴〵それとなし葛城の動靜を訊きに母親のところへ訪ねて來たのである。

「どうです。やつぱり毎日姉さんは見舞ひに來ますか。」

「丁ど今二人でその事をいうてゐましたとこどす。この間から四五日お客さんにつれられて宇治とか大津とかへいたいうて、あんたはんちよつとも屋形へも歸つてきいしまへんさうどす。屋形へさへ戻つてくればちよつとでも顔を見せんことはないのどすけど。この兒がもう今日で五日も顔を見いへんもんどすからえらうあの娘を懷かしがりまして、『姉さんはどないしたんやろ』いうてなあ、今もそのことを親子として愚痴をいうてましたとこどす。」

　母親は鼻聲になりながらいつて、梅雄が暖かさに踏み脱いだ蒲團の裾をなほした。

「さうですか、實はこの間私のところへ來てゐて、屋形から迎へに來て、ちよつと行つて來るからといつたきり何の挨拶もないのですが。」といつて春雪はそのことを話した。

「まあ、さうでしたか、ほんまにえらい濟まんことゞす。あのお客さんいつもすぐおかへりやすのに、此度はえらい長、お母はんお客さんも葛城さんも兩方で意地になつてゐるのやいうて、昨日ちよつと屋形へゆきましたら屋形の姉さんもそい云うてはりました。」

「あのお客さんといふのは、どんなお客さんです。」

「やつぱり大阪のお客さんどす。あの娘がもう長いこと世話になつてゐるお客さんどすさかい、無理をいうてまた失敗つたらようない思うて、大方あの娘も心では何ぼ歸りたうても、そんなことを口に出さんと忍耐してゐますのどすやろ。」

　母親はそんなことを春雪の耳に入れて善いか惡いかの考もなさゝうである。

「あゝ、大阪のお客さんですか、私のところでは神戸のお客さんだとかいつてゐた。」

　春雪はさういひながら、心の中では葛城が自分を神戸のお客といつてだましていつたことにまたいろ〳〵な凝ひを挾んで不安の思ひに心が迷うてゐた。

「この間都踊の點茶のときあの娘が行かなんだのでそれでえらいごて〳〵いうてゐやはるのやいうて今先女衆がきてそない云うてゐました。」

「あゝさうですか、あの時は私のところへ來てくれたのです。」

「そやさうにおす。それも女衆がさういうてゐました。」

「それにしてもこんな病人があるのだから、さういつたら歸してくれないこともないでせうがねえ。」

　春雪はさういひながらそつと梅雄の方を見ると、默つて二人の話を聽いてゐる病兒の興奮した眼には、しとゞに露がとまつて、仰向きに寢てゐる病み疲れた頰には、ほろり〳〵と涙のしづくが流れ落ちてゐる。

　春雪はそれを靜と見まもりながら自分もともにやる瀬ない感慨に迫られて、込上げてくる無念の涙をせきかねてゐた。

「そんなに思つてゐるほどなら、いつそ自由な身にしてくれたらよさゝうなものですがなあ。」

「此方ではそない思ひますのどすけれど、それももう長いことまへんのどす。去年どしたか、も一人大阪のお客さんで落籍してちやんとしてやるいうて深切にいうておくれやしたお方がおしたのどすけど、今のお客さんの方が先やさかい、その方に默つてみんなことをしてもろては濟まんからいうてあの娘が相談しましたらもうちよつと待つてをれ、私の方で落籍してやるからいはゝつたきりそのまゝになつてゐますのどす。そのお客さんもさつぱりした好え人どすけどまだ親達があつたり、奧様も妾もあるのどすから、此方もあんまり氣が進まんのどす。」母親は梅雄の脚の方を揉みながら涙まじりにそれからそれへと問はず語りをした。

「その人が、どうもしてくれなければ、そんなに忙がしい妓だから、ほかにさうしてくれる人がまだいくらもありさうなものですがなあ。」春雪は半ば獨語のやうにいつた。

「屋形の姉さんもそない云うてくれはりますのどす。葛城さんはえらい仕合が遲い、いうて。それで姉さんのいはゝりますのには、この先まだ年期が四年にのびてるさかい、その年期があくのがあの娘の二十六の八月になりますよつてそれにまだ休んだり病院に入つたりしてひけ日を入れると丁ど二十六の年の十二月まで〻借金が濟むことになりますさかい。ほしたらあと自前二三年勤めると千や千五百のお錢は樂に殘せるから、そして一人妓を抱へて自分も働けば三十までには大分殘せる。大抵三十までは體はめつた落ちるもんやない。ほしたら内でも默つてたゞ見ては居らんさかい、まあお母はんもあんまり心配せんと氣長う辛抱してゐやはつたらえゝ。それでもそのうちまた借金でも濟してやらういふお客さんがあつたら内でもよう訊き糺してこれならあの人が一生身を任してもえゝといふ堅い人やつたら、私の方でもまた考へてゐることもあるよつて、お母はんがたの都合の惡いやうにはせんさかい。そない云うて深切にいうてくれてはりますのどす。あの娘が平常壯健で何事もない時分にはまたよう體を働かしてゐますさかい、多勢抱へてゐる妓の中で姉さんもあの娘にいつち目をかけてくれてはりますのどす。」

母親の先の長い話をしながら指折り數へて娘の年期のあく日を待つてゐた。

春雪は默つてそれを聞きながら、賴りにならぬことをたよりにしてゐる老母の無智なる正直を哀れむやうな眼で見てゐた。そして危かしさうに顔を顰めるやうにして、

「そんな、あなた、あの纖弱い體でこの先長くそんなことをしてゐてどうなるものですか。」

さういふ春雪の心には、葛城にも早晩弟と同じやうな悲しみの日の襲ひ來るのをまざ〳〵と見てゐるのであつた。

「この兒もそれを毎日いひ暮してゐますのどす。姉さんがいつまでもあんなことをしてゐてはどもならんいうて。それを苦にしたのが原因でこないに病が餘計重うなつたのどす。あの娘もあの娘どすけど、どうぞしてまあこの兒が早うようなつてくれまへんことには、私自分でも病になりさうどす。」

「まあ、まあ。そんなに氣を落さん方がいゝです。それにしても姉さんが早くかへつてくればいゝがなあ。」

春雪は梅雄の方を向いていつた。が、病人には疲れていつの間にかすや〳〵と假睡んでゐるのか返辭がない。

「姉一人弟一人やもんどすさかい、そら仲ようして互に大事にし合うてくれますので、それで私もえらい悅んでゐましたのどす。五年前連れ合ひが死なはりましてからは、もうこの二人を賴りに先を樂しみにしてゐましたのにどうしてこない惡い病に罹つたことやろいうてゐますのや。」

母親はいぢらしさに堪へぬやうな聲でいふ。

「それは尤もです。病人がそんなに慕うてゐるものを、いく勤めとはいひながらも少しどうかならないものですかなあ。」

「なんぼ何でもあのお客さんも弟の惡いことはよう知つてはるのどすよつて、もう歸してくれはりますやろ。あんたはんにえらい濟まんことゞした。まあさういふ具合どすさかい、どうぞ惡う思はんとおいとくれやしとくれやす。あの娘が來ましたら私からもよう云ふときますさかい。」

「いえ、なに。私の方は。」

さういつて春雪は、まだ誰れも來ぬ間にといつて、そこそこにそこを出た。

八

その春はいつまでも陽氣が不順であつたせゐか病人にひどく障つて、梅雄の病は俄に變調を呈してゐた。

大阪のお客はそれからまだ三四日も花をあけてくれなかつた。もし急變でもあればすぐに知らすといふことになつてゐたので、まさかまだ今日や明日にそんなことはないだらうと安心して、木屋町の居つゞけにも飽きて此度はまた多勢で大阪へ引返して芝居を見にいつたり文樂座をきゝにいつたりしてゐる間に病勢はどつと重つてきた。屋形からは早速葛城の入つてゐる松池に女衆のお淸を馳けつけさして、そこから心當りと思ふ大阪の出先きへ方々電話を掛けて見たが何處にいつてゐるか、何度かけて見ても一向行つてゐる先がわからなかつた。

屋形の方でもひどく心配して、姉さんまでも來てくれて徹宵病人の傍についてともに母親に力添へしくれたが、その効もなくその夜の早曉に、息を引取る際までも「姉さんはまだか、姉さんはまだか。」と、そればかりをいひつゞけにいつて母の手を持ちそへたまゝ眠るやうに眼を瞑つた。

意氣なこと

十月の中ごろであつた。亘理は、その日は一日家にゐたので、妻の初榮を子供と一緒に親類まはりに出してやつた後は女中を對手に障子張りをしてゐた。

そこへ誰か玄關に音なふ聲がしたので、彼は糊の着いた手をして自分で出て行つてみると、擦り硝子の嵌つた格子戸の外で女の聲で、

「ご免下さい」といふ者がある。

「はア」

といひながら、亘理は書間も用心のために差し置く釘を拔いて、がらりと格子戸を開けると、そこには思ひがけなくお澄が立つてゐた。

「誰れかと思つたら君か。……どうして來たんだ」

そんな時、亘理の癖で、突返したやうな無愛想な顏をしてさういつた。

女はそれでも笑顏で會釋しながら、

「ついそこのお父さんの家まで來たもんですから、一寸お寄りしました。」

「東京へは何時來たんだ。」

「一昨日」

亘理は、むつつりした顏をしながら、

「今日はこのとほり障子張りをしてゐるんだが、爲方なさゝうに、まア上り給へ。」

と、いふと、女は體裁だけ一寸遠慮したやうに、

「お差支へないんですか。……でもお邪魔でせう。……奥さんは。」

「今日は親類に行つて、子供も皆な居ないよ。女中がゐるきりだ」

「さう、ぢや一寸御邪魔をしていきませう」

さういひながら彼女は亘理の後について座敷の方に通つた。

「好いお住居ね。」

「なに狹くつて爲方がないんだ。先にはすぐそこに居つたんだ。今、君が入つて來る時に左側に大きな二階の家があつたらう。あそこに居つたんだ。」

亘理は糊の膠ばつた手で、そつちを指しながら、

「話しながら、序にやつてしまふから。」

「どうぞお構ひなく。」

彼女はさういひながら袂から敷島をとり出して火を點けた。

「お父さんの家つて、何處だ。」

「ぢきこの近所ですの。……關口水道町です。」

「あゝ、關口水道町か。ぢや、すぐだ。」

「あそこの公園の一寸脇の處です。……あたしまだ二三日は居りますから、お暇でしたら、どうぞ遊びにゐらしつて下さい。」

彼女は煙草を二三本吹かしながらしばらくそんな話をしてゐたが、

「お邪魔をして、どうも濟みませんでした。……奥さんのお留守の間に上つて。おいとましませう。」

さういつて女は歸りさうにしたけれど亘理はせつせと障子を張りながら、强ひて留めようとはしなかつた。

「さうか。今日はこんなことをしてゐるので。」

「――ぢや御免下さい。もうどうぞお構ひなく。」

女は亘理が玄關まで立つて來ようとするのを、しなやかな手附で制するやうな恰好をしながら歸つていつた。

今から一月ほど前であつたから、まだ暑い時分であつた。亘理は、會社の用事やら、いつも面倒な財産問題などが起るたびに自分が、その相談相手のやうになつてゐる福島縣の鄕里の方の親戚の事で、そつちの方へ行つてゐた時であつた。ある日福島で用事を濟まして、そこかまだ四つ五つステーションを隔てた處にある親戚の家に歸らうとして停車場に入つて來ると、そこでばつたり出逢つた女があつた。自分の方でも何だか顏に見覺えのある女のやうな氣がすると思つてゐると、向ふでもさうであつたと思はれて、笑顏を向けてぢつと此方を見てゐたが、

「あなた亘理さんでせう」といつた。

「えゝ、亘理だ。君はお澄ちやんぢやないか。」

「えゝ、お澄です」

亘理は女の風俗をじろじろ見守りながら、

「どうしてこんな處に來たんだ。」

「去年から此方に來てゐるんです。……まア。隨分しばらくですわ。」

「あゝさうか。隨分しばらくだ。聲を掛けられなかつたら、氣がつかなかつたかも知れない。……わたし……やつぱり」

「でも、あなたは、あんまりお變りにならないわ。」

「君も年を取つたねえ。」

お澄はさういつて、洋服を着て突立つてゐる亘理の顏を又しげしげと眺めた。

さう云はれて亘理は四十男に似げなく、一寸面羞さうな瞬きをしながら、

「いや僕も變つたよ。よく君は僕を覺えてゐたねえ」

「それは覺えてゐますわ」

亘理が出て、まだ二三年にしかならない時分であつた。ある新聞の經濟記者をして兜町の係りであつた時、父の遺産として遺された金が四五千圓あつたのを資本にして、始めて株相場に手を出してみたところ、それがうまく當つて、一年立たぬうちにとん〳〵拍子で四五萬圓儲けた。お澄はその頃新橋で知つた女の中の一人であつた。その頃彼女はまだやつと一本になつたばかりの子供で、初は亘理の馴染の藝者の座敷に一座して知つてゐる時分には、本當の名のお澄で、澄ちやん澄ちやんと云つてゐた。

その後二三年も立つてから二三度二人で待合に逢つたことがあつた。それつきりであつた。

その頃十八で何となく赤襟くさかつたお澄は、あれからだから、もう、そつちこつち三十に間近い筈だが、小柄の爲に先から二つ三つは若く見える方であつた。常磐津がうまくつて、其時分から座敷の面白い妓であつた。

「今日はこれから何處へ行くのか」

「え丶、今日はこれから飯坂へゆくんですの。……ステーションへは一寸人を送りに來たんですけれど。」

亘理は、福島の方の用事も都合よく濟んだし……その日はそれから四つ五つ先きの驛の親類に歸つて寢るのも何だか詰らないやうな氣がして、

「さうか、飯坂へ行くんなら、僕も久し振りに溫泉に浸つてもい丶。これから一緒に往かう。」

亘理が急に彈んだやうにいふと、彼女は笑つて、

「可けないのよ、今日はお客と一緒なんですから」

すると亘理も微笑んで、

「お客と一緒だつて構はないぢやないか、なにも僕が君と一緒に泊らうといふんぢやないもの」

「さうぢやないのよ。そんなことは構はないんですけれど、今日は多勢で自動車で行くんですから……しばらく振りでわたしもゆつくりお目に掛かつて東京の話が聞かしていたゞきたいと思ひますから、一遍日を變へてお遊びにいらしつて下さい、……あなた東京へは何時お歸り？」

「僕はまだ三四日は此方にゐる。此處にはゐないが、此處からも少し先の親類に泊つてゐるんだ。これからそこへ歸る處なんだ。」

「ぢや、東京へお歸りになる前に是非一遍いらしつて下さい。若松町の……ごぞんじでせう……あそこで春吉といつて聞いて下すつたらすぐ分りますから。」

「あ丶、さうか、ぢやそのうちにゆく。」

亘理はそこで春吉と別れた。

それから汽車で一時間ばかり、まだ東北に寄つた處にある親類の家に歸つた。そこには從兄弟も居り從弟に嫁してゐる妹なども居つた。二三日して、その親類から又親類になつてゐる生糸問屋の三野村に出會つた時、

「どうだ福島へ往かうぢやないか。」

と、水を向けると、遊び好きの三野村は、亘理のその一言で、すぐ、これは普通の用事でいふのではないと呑込んで、亘理の顏を見て笑ひながら、

「何か福島に面白いことでもあるのか。」

「うむ、あるんだ。」

と、いつて春吉のことを話すと、

「そいつは面白い。……春吉なら僕も知つてゐる、行つてもい丶が……」といつたが、一寸思案するやうな顏をして、

「春吉でない、誰れか他のだつてい丶だらう。」といふ。

「どうして？ 君、春吉をどうかしてゐるのか」

「いやそんなことはない」

「そんならい丶ぢやないか。僕は別に若松町に往きたいこともないが、そのお澄に、一遍會つてみたいと思つたから。……君がどうかしてゐたつて構はないよ。僕はお澄をどうしようといふんぢやないから。」

「なにそんなに斷らなくてもい丶、君ならどうかしたつて構やしないさ。だけど、あの妓は若松町ぢや指折りの姐さん株なんだ。東京ぢやどうだか知らんが福島では不見轉ぢやないんだよ。」

「そりやさうだらう。新橋にゐる時分だつて不見轉ぢやなかつたんだもの。」

亘理はその頃から話の面白い、さつぱりした、好い男で、新橋でも女にはよく好かれた方であつた。

それで三野村は實を言つた。

「實は僕ぢやないんだが、丸三の大將がコレなんだ。」

と拇指を見せて、

「君がどうかしようといふなら、僕も一緒ぢや甚だ具合が惡いんだ……春吉の方でも僕の手前が可けないだらう。」

「あ丶丸三が旦那か。好いドル函を捉へてゐるなあ。」

丸三といふのは、三野村には又親問屋ともいふべき屈指の生糸屋であつた。

しかし三野村は、一旦はずみの附いた福島ゆきを、もう中止する氣になれなかつた。

「ぢや、かうしよう。これからすぐ往くことにしよう。そして向ふでは別々に清泉樓へいつて、君は春吉を招んで、僕と偶然廊下で出會つたことにしよう。さうすりや構はない。」、

それから二人は俄に思ひ立つて四五の停車場を乘越して福島まで來た。凡てが都合よくいつて、その晩はたうとう皆で

自動車で飯坂へいつた。

亘理は何にも分らない奴でも女中がゐなかつたら、もつとお澄を置いて障子を張りながら話したかも知れなかつたが、自宅まで立寄つたりするのでは後難を恐れて愛想もせずに歸してしまつた。無論お澄の方でも、これから亘理にどうといふ、そんな初心な考のあつた譯でもなかつた。たゞ昔し馴染といふだけで、色氣なしに遊びに來てみたのであつた。

次の日であつた。亘理は夕方から歸つて來て、晩飯を濟ましたところで、妻の初榮は一番末の兒に乳を含ませながら火鉢の傍に坐つてゐたが、

「昨日女の人が訪ねて來たんですか」

亘理は一寸不意を喰つたやうな氣持がした。

お澄が昨日ふらりと立寄つたことは彼女には、それが何でもなかつた。と同じやうに亘理にとつても何でもないことであつた。それゆゑ、用事の多い、いつも頭の急しい亘理は、今日になつてはもうお澄の來たことなどは、てんで忘れてしまつてゐたのであつた。もし彼女に訪ねて來られたことに多少の意味を加へて妻に訊かれたりするやうな氣づかひがあるとすれば、彼は昨日女中に口留めをして置くのであつたが、別にそんなことをする必要を感じなかつたので、それつきりにして置いた。

亘理は空腹の後に快い滿腹を覺えながら妻楊枝で齒をつゝいてゐたが、いつも一本に定めてゐる晩酌の微醺に肉附の好い顏を照らして、

「うゝ、來たよ。……それがどうした……おかね、貴樣しやべつたな。」

そんな時の亘理の常の調子で、一寸高飛車にいつた。

初榮はしほ〳〵とした愛嬌のある眼元に少しく笑ひを浮べながら、

「別にどうもしないんですけれど……藝者でせう。」

「うむ、藝者だ。……おかね、お前によく藝者と素人との見分けがつくなあ。」

亘理は少しもひるまない調子で、板の間で何かしてゐる女中のおかねに當つた。おかねは、先達つても往つてゐた亘理の鄕里の方から連れて來た女中で、十六の時からもう足掛け四五年もゐるのであつた。眼に一丁字の敎育もない者であつた。たゞ身體が頑健で、何でも亘理のいふことを從順に聽いてよく働くので、彼も眼にかけて、いろんな面倒を見てやつてゐた。

旦那にそんなに云はれると、おかねは赤ら顏を一層赤くしながら、濟まないことでもしたやうに默つて動いてゐた。

「おかねにだつて、藝者かさうでない女位は分るね。」初榮は肩を持つやうにいつた。

「……何處の藝者です？」彼女は又亘理の方を見て訊ねた。

「田舍の藝者だよ。」亘理は一喝するやうにいつた。

初榮は容易に信じない風で、

「田舍の藝者？　田舍の藝者がどうしてこんな處へ來てゐるのですか？」

「馬鹿！　……田舍の藝者だつて來るさ。」

若い時から散々道樂をしたうへに、世間通である亘理は、堅氣一方の自分の妻の、物の解らぬのを罵るやうにいつた。そして、昨日藝者が訪ねて寄つた筋道など話して聞かす必要もないと思つた。

初榮の考では、もつと入組んでゐた。これは、きつと亘理が新橋か何處かの女を他に圍うてゐるのにちがひないと思つた。けれども、今それ以上執固く訊きほじらうとすると、何でも頭ごなしにする夫のことだから、なか〳〵本當のことをいふ氣づかひはないと思つて、そこではそのまゝ口を噤んでしまつた。

その翌々日かであつた。亘理は、晩飯の後の初榮との茶の室の話など、もうすつかり忘れてしまつてゐる時分に野田の爺さんが、亘理は、自分では、別に呼びにもやらないのに、何か用でもありさうにやつてきて、火鉢の傍に坐つた。

野田といふその爺さんは、亘理の家の番頭のやうにして、始終老人夫婦で亘理の家に立入りして、急しいことのあつた時など手傳つてゐる人間であつた。伜は一人あつたが、もう十年近くも外國の方に出稼ぎに行つてゐた。亘理は何彼につけて年寄の面倒も見てやつてゐた。

にや〳〵笑つてゐた野田の爺さんは、そこでバットを吸ひ付けながら、

「亘理さん、あんた近頃大層意氣なことがあるさうぢやありませんか？」

出し拔けにそんなことを言つた。

亘理はその、目から鼻へ拔けるやうな顏を少しく吃驚したやうに見張つて、

「何だ出しぬけに、……味なことをいふぢやないか。」

爺さんはわざとせゝら笑ふやうな調子になつて、

「白ばくれなさるな。……亘理さん、私に見込まれたら、さつぱりと實を明かした方がいゝんですよ。」

亘理はさういつて、本當に解らない顏になつた。

「それは一體何の事なんだ。意氣な話だの、白ばくれなさんなだの、俺にはちつとも譯が分らない、」

爺さんは、すると、

「ちえッ！」と、馬鹿にしたやうな聲を發して、「白狀しなさいよ。何處に置いてゐるんです。……貴下もう子供が二人も出來て、四十も二三年前に通り越した年配ぢやありませんか。やつぱり雀百までとやらで、油斷も隙もならない、」

亘理はそんなに言はれても、まだその譯がはつきり分らなかつた、今度は呆けたやうな顔になつて、

「いくら云つても、俺にはお前のいふことが譯が分らない。何處に置いてゐるなんて、俺が何處かへ女でも隱してゐると思つてゐるのかい。」

「當り前ぢやありませんか」

亘理は可笑しくなつてきた。

「どうしてそんなことが分つた。……」

爺さんは此處ぞといふやうに突込んで、

「それ〳〵。語るに落ちずして、問ふに落ちるといふのが、そこのことだ。（どうしてそんなことが分つた）もう七十に手の屆く年になつても貴下とは、これで三十年に近い知合なんですから、大抵此方で見當を附けたことは外れやしない。」

亘理は笑ひもならず、怒りもならずといふやうな表情をして、

「いや、そんな、言葉尻を捉へたつて爲方がない。どうしてそんなことが分つたといつたのは、お前の方で何も彼も知つてゐるやうなことをいふから、俺の方から訊いてみたのだ。俺が何處に女を隱してゐるといふんだ。」

「ちえつ！　まだそんなことをいつて、……一昨日細君の留守に此處へ訪ねて來たでせう。」

爺さんは急處を抑へるやうにいつた。

そこで亘理は實際の有りのまゝを云つた。それでも野田の爺さんは、たゞせゝら笑ふやうにいつて、いくら辯解しても本當にしなかつた。

「亘理さんのことは、私は若い時分から知つてゐるんですから、あなたが細君をうまく欺すやうに、私を騙すことは出來ませんよ。」

「いや騙しやしないよ。今いつたよりほかにいひやうがないんだ。」亘理は笑つてゐた。

「そりや口は調法なもんですからな。」

野田老人は老眼鏡の奥から凝と亘理の腹の底を透かして見るやうな厭な眼付をして、これも笑つてゐた。亘理が事もなげに笑つてゐるほど、事實を隱してゐるものゝやうに野田の方では思つてゐるのであつた。亘理はそれを心に察しながら、此の野田の年寄りも、なるほど、以前まだ銀座裏にゐて三四人の職人を置いて理髪屋の親方で盛にやつてゐた時分に比べて近頃大分耄けて來たなと思つた。

そしてあんまりうるさく疑つてゐるので亘理は少しく勃然としたやうな顔をそちに向けて、

「うむ、圍うてゐるがどうした。……女一人位俺の働きで圍うてゐたつて、内の子供や嚊に不自由な目をさす譯ぢやないし、構はないぢやないか。それが何うした。」

亘理がいくらか棄て鉢の調子でさういふと、野田の老人は

今までにや〳〵してゐた顔を、これも少しく緊張させたやうにひろませて、

「いや貴方の働きで女を圍うて居ることを私が喧しくいふには當らないことですが、貴方も私と始めて知合になつた時分の貴方と萬事が異つてゐるんですからね。三人の孃ちやんがある今の貴方でそんなことをしたんぢや、第一奥さんが心配するぢやありませんか。」

野田の老人は眞劍になつていつた。たうとう亘理が外に女を置いてゐることを本當にしてしまつた。

「そりや解つてゐるよ。」

「分つてゐるなら、止さないと可けませんよ」

「……だつて止すも止さないもないぢやないか。」

「またそんなことを言つてゐる。貴方は一體私達のいふことを馬鹿にするから可けないんだ。」

「いや馬鹿にしやしないさ。馬鹿にはしないけれど、お前達が事實無いことを疑心暗鬼で本當にしてしまうから、俺は却つて可笑しくなつてゐるんだ。」

野田は又苦笑しながら、今度は細君の方に顔を向けて、

「奥さん、此の方は昔からとても手におへないんですからね。」

「まあ、可いよ、今日はそのくらゐにしておいてくれ。君達に心配をさせやしないよ。……俺もいくらやくざな人間でも去年で四十を越して、さきの遠い子供が三人もある身だから。」

それで殆ど事は落着してゐたところへ、それから三四日してお澄が復た亘理の家を訪ねて來た。その時亘理は留守であつたが、妻の初榮は、取次ぎに出た女中から、

「奥さん、此の間の藝者が來ました。」といふので、どんな女か、見たいと思つて、主人は今不在であるが、とにかく座敷に通すやうに女中に命じた。彼女は、此の間自分が訪ねて來たゝめに、亘理の家でそんな悶着があつたことを少しも知つてゐる筈もないので、いはるゝまゝに一寸上つて初榮と話して去つた。その時彼女は、

「これから福島の方に歸ります、どうぞ旦那樣によろしく。」

と、いつた、一寸した菓子折を置いていつた。

その晩に亘理が外から歸つてくると、初榮は大分相形を變へて、此間の女が又訪ねてきたことを話した。

亘理は腹の中で、お澄も仕方のない奴だな、そんなに訪ねて來たりなどしなければいゝのにと思つたが、生半そんなことを口に出していつたりすると却つて初榮の疑念を深くするばかりだと思つたので、膠もなく、たゞ

「さうか」といつた。

それでも初榮は それだけではどうしても氣が濟まなかつた。自分で本人の藝者を見てからは一層嫉妬心が募つてくる

のをどうすることも出來なかつた。

亘理は又亘理で、妻のいふことを本氣になつて取上げるのも馬鹿々々しく思つてゐた。

それから又一と月ほどして十一月の末であつた。ある日お澄がひよつくり訪ねて來た。亘理は心の中で、まだ困ると思つたが、それをお澄に明らさまにいふわけにもいかなかつた。家内が詰らぬ嫉餅をやいて困るから、自分の家へ來ることにしないでくれとは、どうしても男の口から云へなかつた。

そして初榮の居る處で、ことさらに明るい世間話をして、三四十分も居つて歸つた。

「お父さんが今度たうとう可けなくなつたものですから、又一寸出て來ました。」

そんな話をして、福島の干柿を手土産に持つて來た。

初榮も始終傍に居つてお澄の話の樣子を見て、大分今までの疑が融けて來た。するとその晩にお澄は俥屋に手紙を持たせて近い處の鰻屋に來てゐるからそれに乘つて一寸來て貰ひたい、少しおねがひがしたいことがあるからと云つて來た。物好きで、まめな亘理は、夜は暇にしてゐるのでその俥に乘つて出掛けて行つてみた。するとそこにはお澄の他にも一人彼女の客と思はれる男が居つて酒を飲んでゐた。お澄はその男を亘理に紹介して、

「この方が亘理さんと仰有るんです。」といつた。

その口振りによつて、亘理は、自分のことがもうお澄の口から屡々その男との間に噂に上ぼつてゐることを察した。

そしておねがひしたい用事といふのはかうであつた。――

その男は想像したとほりお澄の旦那でやつぱり福島の方の請負師であつた。その男が今度彼女を落籍すことになつたので、手附金として五百圓だけその晩お澄に渡すことになつたが、男は誰れか確りした人に仲に立つて、二人の話をよく聽いておいてもらひたいといふところから、お澄の發議で、それならば亘理さんといつて新橋時分から懇意にしてゐる人で、そんなことを頼むのに丁度好い人が、すぐこの近い處に居るからといつて、亘理に來て貰つたのであつた。

「どうも初めてお目にかゝりまして、とんだ御迷惑なことをおねがひいたしまして相濟みません。」

といつて、彼は亘理に酒盃を差した。

お澄は傍から、

「そして此のお金をお前にたゞ持たして置いたんでは確かでないから誰れかに預つてもらつて置けといふんですから、亘理さん貴方濟みませんが、どうぞ暫らくの間これを預かつておいて下さいな。」

といつて、札束を亘理の前に出した。

亘理は酒盃を飲みほして、

「いや、そんな大金を預かつて置くのは心配だ。」

大分好い酒の廻つたその男は「旦那突然こんな御無理なことをお願ひいたしまして申譯がありませんが、どうぞおねがひします。」といつて、重ねて、亘理に酒盃を差向けた。

「えゝ、そりやあんた方二人の間の話は私もよく聽いておくですが、しかし、この金は君が持つてゐたらいゝぢやないか、僕が預かつておいたつて心配だ。もし減らしでもすると後で困る。」

お澄の方に向つていつた。

「えへ……どうぞお使ひなすつて下さいまし。これに持たしておくより安心でせう。」

「濟みませんが暫く預つておいて下さいまし。」お澄もいつた。

「いや金を預るのは眞平だ。その代り此の席の話は後になつて、もし私の出る必要が生じた場合は何時でも立ち合ふです。」

亘理は剛愎な調子でいつた。

その晩のことがあつてから妻の初榮の胸には又新しい疑雲を醸した、そして又野田の老人の處にいつて訴へた。亘理は有體のまゝを野田に說明して聞かした。すると初めは初榮と同じやうに半信半疑であつた老人も、世間の事を知つた年寄りであるだけにほゞ亘理のいふことに信を措いて來た。

「それぢや亘理さんかうおしなさい。奥さんは、私がいくら辯解したつて、もうそれに違ひないと思ひ込んでゐるんですから、此上辯解するのは無效です。それよりも、貴方があの女を圍うて置いたことを、奥さんの思つてゐるとほり事實にしてしまうんです。」

「うん、さうしてどうする？」

「本當あつたことにして置いて、その上で奥さんの納得するやうに女と綺麗に手を切つたことにして見せたらどうです。」

「うむ、それでもいゝ。」

それから野田の老人は初榮に向つて、亘理があの女を圍うて置いたのも事實であつたが、此度いよ〳〵手を切ることにしたから、さらりと安心するやうに說き勸めた上で、亘理は初榮にも知らして三百圓の手切れ金を遣つて向ふから證文を受取ることにした。

そして亘理は早速その晩小石川の高臺を下りた處に在る江戸川つぷちのお澄の親元に訪ねていつた。父親は一週間ほど前に亡くなつたので、そこにはお澄の兄が住んでゐた。亘理が格子戸の處から聲をかけると、すぐお澄が出て來て膝をついて、

「おや、入らつしやい。さあ、どうぞまあお上んなすつて下さい。こんなむさくるしい處ですけれど。」

亘理は少しく遠慮したやうに、すぐ上らうともせず、
「えゝ、有難う。……あんたお父さんが亡くなつて、まだ間がないんで、取込んでゐるでせうから、此處で失禮する……」
それでも何か少し用ありさうな顔をしていつた。
「まア、そんな事を仰有らずに……なにお父さん亡くなつても、もう片付いたんですから。どうぞ一寸お上んなすつて下さい。」
「さうですか、ぢや一寸御邪魔をして往きませう。」といつて座敷にとほつた。
やがて亘理は煙草を一吹してから、
「お澄さん、今夜は僕實に詫らんことで君に一寸おねがひに出たんだがねえ……」といひさして、亘理は苦笑を洩した。
「あたしにおねがひつて、どんなことです。貴方のおねがひなら、何でも承りませう。」
「いや、實に馬鹿げたことなんだが。」
と、いつて一と月ほど前彼女が始めて亘理の家を訪ねて來た時分から内輪の事情を掻い摘んで話して聞かせた。
「おやおや、そんなことはあたし少しも知らなかつたもんですから、貴方には飛んだお迷惑でした。」
「いや迷惑といふほどのこともないんだけれど……世間を知らない女にも困つたものだ。俺なんぞは若い時から道樂をしてゐた者だから、そんなこと位なんとも思つてやしない。以前から知つてゐる人に珍らしく會つて話をするのは樂しみなくらゐに思つてゐるんだけれど、女の野暮な奴と來たら、全く手が附けられない。」
亘理はさういつて爲方なく笑つて又敷島を吹かした。
「さうぢやありませんわ。奥さんはそんな方でないと可けないんですよ。殊に亘理さんのやうな方は。」
「戯談ぢやない。」
「ぢやもうこれからは幾ら上りたくつても御遠慮することにしますわ。」
亘理はこれで少しく取附き端を得たやうに、
「甚だ相濟まないが、お澄さん今後僕の家に君が訪ねて來るのだけ一寸遠慮してもらひたんだ。……それで、まるで子供騙し見たいなことだが、君から手切れ證文を取ることにしてもらひたんだ。手切れ金は金參百圓也といふことにしてね。」
「へえ、あたしが貴方から參百圓お金を受取つて、あなたと手を切ることにするんですか、それこそ只ぢや濟まされませんわ。」
「いや全く馬鹿げた話なんだ。飛んだ女房を持つてこんな時に困るよ。その代り君に何でも奢るから、君ひとつ手切れ證文を書いてくれ給へ。」
「そりや何でも書きますけれど、あたしにはよく書けない

わ。貴方文言をいゝやうに書いて下さい。そしたらあたし自分の名前だけ書きますから。」
それで亘理はお澄から半紙をもらつて、有り合せの鉛筆で貴殿から參百圓の金を確かに受取つた。今後貴殿との交際はこれを限り一切斷つことにした。依つて一札件の如しといふ文句を簡單に書いて、お澄はそれへ自分の名前を署して捺印をした。
「さあ、それで參百圓の代りに何かお奢りなさいよ。」
「うん、何でも奢るよ。」
といつてゐたが、お澄は、
「さあ、何を奢つていたゞかうかなあ。」
と思案をして、
「でももう夕飯は濟んだし。……何も欲しくない。」
「とにかくそれぢや神樂坂の方まで出てみよう。」
「えゝ、それがいゝでせう。」
と、二人はそれから、ぶらぶら歩いて、人の出盛る山吹町の通りから神樂坂の方まで散歩した。十一月の末で、しつとりした秋の夜は、白い霧がそこらの街や人を朧ろに立罩めてゐた。八百屋が店にはもういつの間にか林檎や蜜柑の色が美しく紅に輝いてゐたり黄色く熟してゐた。
亘理とお澄は山吹町の通りから阪を上りつめて、矢來町の交番の處から折れ曲り、牛込の郵便局の通りへと出て來た。通寺町から肴町の方は靜かな秋の夜をそゞろ歩きに樂しむ人でぞろぞろ賑うてゐた。亘理は、二人で一緒に歩いてゐるところを人に見られるのが氣がゝりであつた。
「お澄さん何を奢らう。」
「あたし、もうお腹がくちいんですの。」
「本當か。」
「えゝ、お夕飯を濟ましたところへ、貴方がおいでになつたの。」
「さうか。ぢやこゝへでも入らう……又君とかうして歩いてゐる處を、誰かに見られると困る。早く入らう。」
と、いつて亘理は、颯々と先きに立つて田原屋のレストランに入つていつた。
そしてテーブルを中央に差向ひになつて、
「さア何か一つ位は食べられるだらう。……何がいゝ？」
といつてゐるところへ、向うのテーブルから、
「やあ！」といつて聲を掛けた者があつた。
亘理は自分のことかと思つて、何の氣なしにそちらを向くと、そこには、もう大分上機嫌になつた、知合ひの書畫屋が二人で腰を掛けてゐた。そしてもう歸るところと思はれて、帽子を手にして傍を通りながら、
「お樂しみ！」といつて去つた。
「いやあ！」と、亘理がいつて苦笑してゐる間に二人の書畫

屋はもう出ていつてしまつた。

亘理は、これは可けないと思つて、匆々にしてそこを外に出て毘沙門前から向ふの横丁に切れて戻り道を急いだ。

そして家に戻つて件の一札を初榮の前に出して見せた。

「これでいゝだらう」

「えゝ」

といつて、初榮は眼をしほ〱させて微笑んだゞけであつた。

それでも可いと思つてゐると、二三日して初榮は又妙なことを云ひ出した。それは此間田原屋へ行つた歸途、亘理は氣が着かなかつたが、やつぱり近い處にある初榮の姉が亘理とお澄と歩いてゐるところを見て、それを初榮に告げたのであつた。

亘理は、もう、とても助からないと歎いた。

（大正十四年七月十八日作）

女一人男二人

福島から歸京つて來ると、ものゝ十日ばかりも立たぬうちに、お澄はすぐ又、此度は下谷から看板かりで出た。十三の時に新橋に下地つこに遣られて、それから二十八の今日まで土地こそ何度河岸を代へたか知れぬが、この流れ河の水を飲み馴れては、藝者稼業くらゐ氣樂な商賣はないやうにおもはれた。

そして、今度出てから二三日して呼んでくれた、土木の請負師の客が今のところでは先づ大事な旦那であつた。請負師といつても、その旦那は、今の時節のことだから、さう下卑た人間ではなかつた。藏前の學校出で、千葉の方の人で、そちらに本宅があつたが、東京には深川に事務所があつて、その旦那の都合で、いつも中洲のある待合を根城に遠出で呼ばれてゐるのであつた。

そつちこつちする内に、その旦那ともう一年近く續いて、そろ〱又花の咲く四月になつた。その日もお澄は旦那と逢ふ約束の日で、朝から支度をして、早く髪結ひにいつて、めづらしく丸髷に結つた。そして毎時の時刻の夕方の六時頃に中洲に出掛けていつた。

旦那は少し先きに來たといふところであつたが、彼はお澄の大丸髷に結つた、商賣氣離れた容姿を見ると、心から滿足したやうに、

「やあ、丸髷だな。さうしてゐると、藝者たあ見えない。どうしても奥さんだ。」

お澄はそこに坐りながら、

「まあ嬉しいわ。そんなに見えて。」

「見えるともみえるとも。」

「さう……あたし早くそんな身分になりたいわ。」

旦那は少し眞面目な顔をして、

「いつだつて、ならうと思へばなれるぢやないか。……お前の心掛け一つだ。」

「さう」お澄は空虚のやうな聲を洩した。

「何だ、氣のなさゝうな返事をするぢやないか。」

「どうして。」

「どうしてもないもんだ。……ちよつとあつち向いて見せ

ろ。……うむ、藤紫ぢや一寸まだ手柄が年增過ぎる。お前なんぞは赤か樺色でもい〻んだ。」
「あたし、その赤が大嫌ひなの。」
「ぢや桃色だ。」
「なんだか重味がなくつて。……ねえ、ちよいと貴郎。」
といつて、お澄は氣を變へたやうに、火鉢の緣に葉卷を挿んでゐた旦那の指を二本靜つと握りながら、
「あたし、今日はお願ひがあるのよ。」
「何だ？ おねがひとは。」
「あたし今晩は長く居られないの。」
「どうして？」旦那は凝乎とお澄の顏を見た。
「お父つあんが此の間伊勢參宮をして今晩八時の汽車で歸ることになつてゐるんです。」
「さうか、伊勢へ參つたの、そいつは、うまくやつてゐるな。」
「伊勢から京大阪の方へ廻つて、桃山へお詣りをして、今日歸ることになつてゐるんです。それで、あたし、これから東京驛まで一寸迎へにいつて來ようとおもつてゐるんですの。」
「同行者はあるの？」
「え〻、四五人同勢があるの。……、ねえ、行つてもい〻でせう。」
「…………」
「何とかいつて下さいよ。」
「本當なら行つてもい〻さ。」旦那は冷淡にいつた。
「あらッ！ あなた噓と思つてゐるの。勿體ないわ、お伊勢參宮したのを噓だなんて疑つたりして。」
「だつて、今まで一度もお前からそんな話を聞かなかつたぢやないか。」
「さう いはなかつたでせうか。……あたしいつたやうに思つたわ。」
「いやあしないよ。俺ははじめて聞く。……どうも少しお可笑いなあ。」
「なあぜ。」
「なあぜつて、お前のお父つあんが京大阪見物に行くのに、俺に話さない筈がないもの。」
「……え〻、あたし餘程おねがひしようかと思つたの。でもあんまり、いろんなことをおねがひしてゐるから、又そんなことで御迷惑を掛けてはいけないと思つて。」
「それで俺にいはなかつたのか。……そうれ、見ろ、何にもそのことを、いはなかつたらう。どうだ。」
旦那は少しく眞顏になつて問ひ詰めた。
「ですから、そのことはいはなかつたわ。」
「だから、やつぱり伊勢參宮のことをいはなかつたぢやないか。」

「あたし、いつたわよう。」お澄はさういつて、ぴちやりと旦那の手頸のところを一つ、痛くないほど打つた。
「この畜生め！」旦那も負けずに、しつぺ返しのやうにお澄の柔かい頰ッぺたを一つ平掌で叩いた。
「あら、あなた、非道いわよう。……おう痛い。」といひ〳〵、お澄はハンケチを持ちそへて頰を抑へてゐた。
旦那は、くす〳〵笑つて暫くお澄の顏を見守つてゐたが、
「それが本當なら、ステーションまで迎へに行つて來るのはい〻さ。そして直ぐ又こ〻へ引返したらい〻ぢやないか。」
「…………」
「えッおい。それまで俺は此處で待つてゐるから、一寸行つて來たらい〻だらう。……でもまだ八時には早いだらう。」といつて、旦那は腕時計を一寸見る。
「え〻……」お澄は何だか澁々いつてゐたが「ですけど、その同勢で東京驛からすぐ牛込の料理屋へ塵埃おとしに行くことになつてゐるんですの。」
「何だ、ちり落し？」
「その四五人の仲間で每月々掛けをして伊香保だとか熱海だとかへ行つたりしてゐるんです。それで今度の伊勢參宮は別の口で、もう長い間計畫してゐたことが、やつと今度實行出來たんです。その方はお父つあんがもとから世話をしてたもんですから、何から何まで當番になつてゐるんです。……ですから、あたし行つて少し手傳つてやらなけや。」
「なるほど。」旦那はやつと少し疑ひが解けたやうである。
「ねえ、だからやらして頂戴。あたし、いつても可いでせう。」
「…………」
「その代り三四日過ぎたら、お約束の方を繰合はして、ゆつくり何處かへ連れてつてもらふわよ。あたし本當は何處かへ行きたいわ。もうそろ〳〵櫻が好いつていふから。」
「俺は今日これから何處かへ行くつもりだつたんだ。三四日過ぎたら、お前の方は都合がい〻かも知れないが、俺の方が忙しくなる。そんな頭髮をして來たから、お前の方でもそのつもりでやつて來たのかと思つてゐた。……伊勢まゐりの塵埃おとしなんて、何にも歸つたその日に限つたことではないぢやないか。牛込の料理屋は何處だ。後で、好い加減の時分に俺がお父つあんに電話を掛けて話すから、お前もそのつもりで居つてくれ。何も終までお前がゐなくつてもい〻んだらう。」
「ねえ、おい。牛込の料理屋は何處だい。」
「なに、料理屋つて、そんな大した處でもないの。」
「大きからうが少からうが、そんなことは、どうでもい〻。そこは何處だつてば。」
「あなたといふ人察しのない人ねえ。こんなにあたしが事を

分けて頼んでゐるのに、一人つかない親が遠方に行つて無事に歸つて來たといふのに、そのお祝ひの場へ行かして下さらないの。」
「だからさ、行つてもいゝといつてゐるぢやないか。行くのはいゝが、暫く行つて居つて又此處へ戻つて來たらいゝ。俺はお前と一緒に箱根か熱海へ今晩行くつもりだつたんだ。ねえ、さうしろよ。」
「箱根……熱海……行きたいにや、いきたいわねえ。」
「だから、さあ、さうせいよ。」
「だつて、今晩の間には、どうせ合はないわよ。」
「合はなけや、今晩は此處へ泊つて、明日行かう。」
旦那はもう、それに定めたやうにいふ。
「貴下も氣が早いのねえ。」
「そんなことはない。行くのは明日でもいゝといつてゐる。熱海にするか、箱根にするか。」
「まあ、一寸待つて頂戴。それより、もうぼつ〳〵東京驛にお父つあんが歸り着く時分ですわ。ねえ、その相談は後の事にして、あたし一寸東京驛まで行つて來ますわ。」お澄は、心はもうステーションの方にいつてゐるやうにいふ。
「うむ、もう七時半だ。あと三十分きやない。」旦那は又腕時計を見て、「ぢや俺も一所に東京驛まで送つてつてやらう。」
「なに、いゝんですよ。あたし一人で行つて來ますわ。お父つあんなんかに、貴方お會ひにならない方がいゝんですよ。」
「お前の親父に會やしない。お前が牛込の方に行つてゐる間おれ一人こゝに待つてゐるのも怠屈だから、ほかに芝の方に一寸用事のあることもあるから、俺も一所に行かう。自動車を呼ばう。」
それから女中を呼んで自動車を命じた。
「あなた 此處に待つてゐればいゝのにねえ。」
「待つてゐたつて、お前は、すぐにや歸つて來ないだらう。」
「ぢや、あたしが歸つて來なかつたら、あなたどうします?」
「お前今晩は歸つて來ないつもりで行くのかい。」
「いゝえさ、もしあたしが歸つて來なかつたら、貴方どうしますつて、訊くんですよ。」
「なんだ。……お前の方より、俺の方から訊きたいんだ。」
「なにを?」
「人を馬鹿にするない!」
「馬鹿になんかしないわ。」
「だつてお前、先刻何といつた。今晩はこれで歸らしてくれといつたぢやないか。」
「えゝ、さういひました。」
「さういつたらう。だからお前は、今晩はもう鐵砲玉をきめる氣なんだらう。」

「そんなことありませんわ。」
「ぢや、又、こゝへ戻つて來るか。」
「……あなた、あたしが今晩、どつか他へ行くと思つてゐるんですの。」
「……………うむ、きつとさうかも知れない。」
「あら、まだ疑つてゐるわよ。そんなに疑つちや、あたし厭よ。」
お澄は甘つたれたやうにいつた。小柄な女ではあるが、多い好い毛の前髪をつんと高く出して、鬢を大きく張つた髷の形がいかにもよく出來てゐる。その爲に背も少し高く思はれる。目の醒めるやうな藤紫の手柄が、まるで魅惑的に旦那の眼を喫つた。艶々と黑光りのしてゐる鬢の恰好から、淡い青草色の地に、ところどころ地味に淡紅色で櫻の花を散らした刺繡をした半襟におつ被さつた髱のあたりを、とろりとなつて見てゐると、そこから媚びるやうな、甘い、なつかしい匂ひがたつて來て、旦那は、ちく〳〵胸が痛いやうな氣持ちがした。
「ねえ、ちよいと。……何を、そんなに默つて見てゐるのよ。」彼女はさういつたが、自分でも氣が付いたやうに、帶の間から懐中鏡を抜きとつて、小さいつげの櫛で鬢のあたりを直したり、紙おしろいで鼻や額を拭いたりしてゐた。
「しどく自動車が遲いのねえ」
旦那は、やつと我れに返つたやうに、
「それより、お前今、自動車をいつた時、あなた此處に待つてゐればいゝのにねえ。といつたらう。」
「えゝ、いひましたわ。」お澄は前髪を映す鏡の面に視線を向けながらいつた。
「では、俺れが此處に待つてゐたら、お前牛込の方へ廻つて行つても、必ず又戻つて來るか。」
「えゝ……それは、貴方さへ何處へも行かずに、此處におとなしく待つてゐたら……。」
「ぢや約束をして置かう。何時に歸つて來る?」
「だつて、それは今から定めて置かれないわ」
「そんなことはないだらう。お前さへその氣なら。」
「あたしが幾らその氣でゐたつて、その時になつて、さうもならないことがあるもの。」
「お前、商賣で達出をするんぢやないぜ。」
「おほゝゝゝお父つあんのお座敷で玉を付けてもらふか。」
「ねえ、おい。何時頃に歸つて來る。」
「さうねえ。……あんまり長くは、あなた一人で辛抱出來ないでせう。」
「八時に汽車が着くんだから、かうつと、それから二時間くらゐは、まあ爲方がないと見て、十時過ぎに此處に戻つてくれば、誰れか招んで遊んでゐる。」

「十時に！……まあ驚いた。」

「どうだ。二時間あれば十分だらう。東京驛からどうせ自動車だらうから途中に手間はとれない。」

「そんなことをいはないで、旦那はもつと旦那らしく鷹揚にあゝ行つて來いといふものよ。」

「うゝ、いゝ。ぢや行つて來い。」

旦那はさつぱりといつたが、その言葉の底には憤りが密んでゐた。

するとお澄は眞正面に旦那の顔を見て、しまいには、くすくす笑ひ出した。

「ちよいと、あなたお怒りになつたの。」

旦那は怒りも出來ず、笑ひもしなかつた。そして默つてゐた。

「何ですよう、急にそんな眞面目腐つた顔をしてさ。あたし氣になるわ。」

「…………」

「何とかいつて頂戴よ、ねえ、あなた。」

「だから、行つて來いといつてるぢやないか。」

「うそよ！　御自分の心にないこと……あたし厭。もう行かないわ。」お澄はまた廿つたれたやうに頭振りをふつてみせた。そしてツンとした。

旦那はついに、勃然とした顔の中に笑ひを浮べて、

「行つて來たらいゝぢやないか、いつておいで。」

「厭、あたしもう何といはれても行きませんわ。その代りに折角汽車から電報まで打つて寄越してゐるお父つあんに濟まない思ひをしなけやならないけれど、あたしもう構はない。」

「いや、そんなことをしては可けない。お父つあんに氣の毒だ。」

「なに、お父つあんだけなら構はないんですよ。同伴の人達にお父つあんが極まりの悪いことになるんですの。」

「拗ねやしないわ。」

「拗ねてゐるよ、この奴め！」

旦那はさういひさま、又指尖でお澄の頰つぺたを、ぴちやりと張つた。

「あら又、隨分ひどいわねえ。」

といつてゐたかとおもふと、お澄の方でも負けて居らず、いきなり、繻袢の袖の絡まる白い腕を伸ばして、小突くやうに旦那の胸倉を捉んだ。旦那は不意を喰つて後に倒れさうになるのを、お澄は一層のし掛るやうにして腰を伸ばしながら左手で衿先を捉み、右手を上げて、

「かうしてやる。」と打つてかゝつた。

旦那は片手を杖にして、危く背後に倒れようとする身を支え、遊んでゐる方の右手で、お澄の打つてかゝる手を防ぎながら、笑ひ〳〵、

「おい、止せ〳〵もうご免だ〳〵。」

「ご免だつて、許すものですか。」

お澄は勝ち誇つたやうに、殆ど全身を伸ばさんばかりにして、旦那の上にのし重ならうとした。

そこへ、とん〳〵と階段を踏む足音がして、

「どうも遲くなりまして濟みません。お車がまゐりました。」

と、女中が知らせて來た。

お澄は、はつと氣がついて、やつと、捉んでゐた手元を寬めた。つい、巫山戯けてゐる間に、迂濶り汽車の時間に遲れるところであつた。

旦那も一所にやつと起き上らうとしてゐるところへ、女中が靜に襖を閉けて顔を出した。

「あらまあ、どうなすつたんです。……あの、お車がまゐりました。」

「どうも濟みません。」といふ間も、お澄は手早く又懐中鏡をとり出して、鬢のほつれを、大事さうに撫であげてゐた。

女中は意味ありさうに、げら〳〵笑ひながら、

「おほゝゝ隨分おうらやましうございますねえ。どうなすつたんです。」

旦那は、だらしなくはだかつた襟を掻き合せながら、

「ひどいめに合はせやがあつた。俺れを押倒しておいて打つてかゝるんだ。」

「おやまあ、そんなことをなすつちやいけませんねえ、あんまりお仲が好過ぎるからなんでせう。」

「お君さん本當にしてやいけませんよ。打たれたのがあたしですよ。」

「どちらがお打たれになつても、あたしども、一向構ひませんから、散々打つたり、打たれたりなさいまし。」

女中のお君は面白さうにいつてゐたが、お澄はいそいで顔を直すと、

「さあ、そんなら、あたし行つてもよござんすね。ぐづぐづしてゐると、汽車が着いて客は去つてしまふ。」と、起ち上つた。

「いつてもいゝが、きつと歸つて來るんだらう？」

「あら又そんな無理なことを。どうぞ後生ですから、今晩だけはやらして下さいよ。」

お澄は美しい眉根に皺を寄せるやうにして强請つた。

「さうか、ぢや、いつてもいゝ。俺れもやつぱり虎の門の邊まで行くから一所に乘らう。」

それから彼等は自動車に同乘して東京驛に向つた。

今年は三月になつてから何度も大雪が降つたりして、いつまでも寒いさむいといつてゐたが、さすがに曆は爭はれないもので、四月の聲を聞くと、俄に陽氣が和らいで、もう、都大路

は何處を見ても長閑な春の氣分がたゞよつてゐた。自動車は日本橋の白木屋前を眞直ぐに呉服橋にかゝつて、永樂町の大街路を直角に左に折れて丸の内に入つた。晝間でさへ廣濶な停車場前の廣場は、夜はさすがに人足が少いので、そのため間の抜けたほど廣過ぎて見える。自動車は障碍物が少いので、恐ろしいほど早く駛つた。間もなく降車口の前に來て留つた。

「さあ、降りるんだ。」と、旦那はお澄を捉して下車さした。

「どうも難有う。そんなら、……よくつてねえ。」彼女は、どうぞ勘忍してといふやうに、媚びるやうに輕く小頸を下げて石段を上つて駒下駄の音を鳴らしながら小いそぎに大廊下の中に入つていつた。

旦那は自動車のガラス窓を透かして、お澄が囲い大廊下の殆ど中心點あたりへ行つた頃を見とめておいて、

「おい君。」と、ハンドルを廻はしかけてゐた運轉手に聲を掛け、

「俺も此處で降りるから、もういゝよ。」といひながら、早速自動車から飛び降りて、まるで鷹が小鳥を狙つたやうに、お澄の背姿を人群に見失ふまいとして足許の方は有頂天になつて、人の後に見えつ隠れつ後を追ふた。

大廊下は、つい今急行を一つ發車させたばかりのところで改札口の所は割合に人が透いてゐたが、これから、いよ〳〵旅行季節にならうといふ一年中の書入れ時のことゝて、ほんの暫らく透いてゐたと思つた大廊下の中には、忽ち潮の押寄せるやうな旅客の群れがどこからもとなく又刻々に滿ちて來るのであつた。

旦那はそれを幸ひに、お澄から、やつと人を一人だけ離れたくらゐの近距離に身を忍ばせながら、脇目も振らずに彼女の脊姿を穴の明くほど、一心になつて注視してゐた。

そんなことゝは夢にも知るよしもないお澄は、かねて打合せても置いたし、又今日汽車の途中から電報でお知らせてもおいたので、わざと降車口の人ごみを避けて、目に着き易いやうに乘車口の改札所の方へ來て、降りて來るのを待つたのである。

やがて、ものの十分か十二分くらゐも待つてゐると、こちらにも大分降りて來る者もあると見えて、丁度八時二十分の特急が入つて來た頃合に、どろ〳〵と、あの地下道に、凄じい足音を轟かせて降りて來た客が、後からあとからと改札口に出て來た。

旦那は、お澄の父親は、いつか一二度、ほんの一寸見たことがあるので、顏と年頃とは、うろおぼえがあつた。此方から、じつと見てゐると、多勢の中には、なるほど六十前後の年配で、さも伊勢から京阪見物でもして來たといふやうな東京の人間らしいものが降りて來たり、反對に京阪人らしい、ちやうど同年配の五六人の連中が繋がつて改札口を出て來たりした。

が、お澄は、旦那から、つい眼の先に、向うをむいて突立つてゐるのだが、ついぞ聲を掛けようとせぬところを見るとまだ降りて來ぬものらしい。

そのうち一人、まだ三十四か五くらゐと思はれる。見るかな京阪生粋の人間らしい、飽くまで垢汁ぬけのした、皮膚の色の滑らかな、そして薄い紫紺色の春トンビを着た優男が改札口に近づいて來るに從つて、何か眼に物を言はせるやうに笑顔を向けて此方にやつて來た。旦那は、だれか迎への人と互に顏を見合はして歡びを交はしてゐるのであらうと思つたが、勿論お澄は向うを向いてゐるので、彼女がどんな顏をしてゐるかは分らなかつた。やがてその男は乘車劵を改札係に渡して、二歩か三歩こちらに進んで來ると、お澄の方からも、そつちへ歩み寄つていつて、兩方で、「やあ」といつたやうな、ほんの出會ひ頭の短語を交換した。

こちらはお澄のすぐ背後に接近して控へてゐた旦那は、電光石火の疾さで悉く凡てのいきさつを了解んでしまつた。と、同時に隙さず彼はお澄の横手につか〳〵と近づいていつて、可なり高い聲で、

「おいッ！」と呼び掛けた。

本當に吃驚したお澄は、

「あらッ貴方こゝに來てらしつたの。」とばかり、苦笑さへもすることが出來なかつた。

お澄はたつたそれつきり、紫紺の春トンビの男とは、重ねて、いゝ、うんともすんとも口を利くことも出來なかつた。

旦那は左あらぬ態につづけて訊いた。

「お父つあん此の汽車で降りてきたかい？」

お澄は爲方なしに、

「どうしたんでせう、こゝには降りて來ないんです。」

誠しやかに云つた。

「ぢや、あつちの降車口の方から降りたんだよ。」

「きつとさうかも知れない。……こちらに降りることになつてゐたんですがねえ。」

彼女は途方に暮れたやうな表情をして見せたが、その二重の底意では、紫紺色のトンビのことより考へてゐなかつた。彼女は夢中で父親を探す目附をしながら、紫紺色の春トンビの行くえを見廻はした。

全く呆氣にとられたのは此方の紫紺色の春トンビの男であつた。大阪の心齋橋筋の、さる大きな小間物問屋の養子で、家では家附の妻にとかく意張られがちの身は、いとせめて去年の秋の時分から東京の下谷に江戸つ兒藝者で想思の馴染みが出來て、一と月に一度の商用で上京の逢ふ瀬の首尾を壽命の洗濯にしてゐるのであつた。

二三日前にも手紙でもさういひ、今朝大阪を立つ時にも電

報で知らせて置いたので、女は約束ちがへず迎へに來てゐたのは嬉しかつたが、その嬉しいとおもつたのも、ほんの束の間といはうか、何といはうか、口らしい口を利き交はす間もなく、ぬつと横から四十男が現はれて來た。その口の利きやうといひ、あの樣子では、いはずと知れた旦那か情客。あんな男が附いてゐるとはつい今の先まで想像もしなかつた。彼はまるで木から落ちた猿の思ひでそこを遠退きながら、大廊下の人群みに隱れて、此方の二人の動靜を眺めてゐた。

旦那は、飽くまでもお澄が紫紺色の春トンビの人間と眼顔で物をいひ交はしたことには氣の付かぬ風で、

「もうあつちから降りていつたらお父つあんの方は、もういいから、これから一所に何處かへ行かう。」と命令的に威壓していつた。

お澄はもう氣が氣でなく、

「いけないわよう。あたし、これからすぐ牛込の方に行かなけりやならないわ。」

「もう止せよ　俺と一所にこれから森ケ崎か池上に行かう。」

「でも……」

「でもぢやない、そんなことをいつてゐないでさあ行かう。」

「あたし、困つちまふわ……」お澄は、澁々さういひながら、爲方なしに旦那に拉し去られた。大廊下の人込みの中に心を殘しながらも。

彼女は、それからたうとう旦那と一所に池上に連れていかれたが、どういつて歸してくれと賴んでも、遂に三晩といふもの解放せられなかつた。

一方大阪の小間物問屋の養子は、暴けッ腹で、商用といつても、もとより大したことでもないので、その方だけを濟ますと、東京に一泊したきりすぐ又その翌日汽車で大阪へ歸つてしまつた。

旦那は、三日の間といふもの、池上の溫泉旅館にお澄にまるで足留めをしておいて、やつと四日めに放して歸したが、それつきり彼女を捻ぢ向いても見なかつた。

大阪からも、その後何度お澄が手紙をやつても、みんな梨の礫であつた。

（昭和二年四月四日作、婦人公論掲載）

めぐりあひ

ある一月の十日過ぎであつた。わたしは、雨晴れのあとの、冬にはめづらしい暖かな日の午後、散步かたがた用事をかねて丸の內から銀座の方へ出て行く途中、省線電車に乘つてゐた。車室の中の溫かさと、その前晩少し遲くまで書き物をしてゐたのとで、すこしく頭が好い心地にぼんやりなつてゐるところへ、水道橋であつたか、飯田町であつたか、たしかに覺えぬ停車場から乘り込んだ婦人があつた。彼女は、わたしと反對の側に腰を掛けた。その時は、氣がつかなかつたが、わたしが薄眠い眼を開けて、何氣なく向うを見ると、何だか、じろ〱と、その女は此方を見てゐた。變な女だなと、わたしは思つてこちらの視線を脇へそらしてしまつた、と。彼女も他へ視線を轉じたが、暫くすると、彼女は復た、わたしの知らぬ間に一寸こちらを見てゐる。はて、向うではわたしを知つてゐる女であらうか、自分にはどうも、あんな婦人を知つてゐる覺えがないが……と思ひながら、こちらからも、時々盜むやうに見ながら、頭の中の記憶を探つてみた。

普通の束髮に結つて、年のころ三十三四にもならうか、少しも美い女ではないが、何處といつて格別見にくいところもない。中肉の顏である。

そんなことを思つて、わたしはちつと考へてゐると、向うでは、氣になるほど又しては一寸々々こちらを見てゐるのであつた。

すると、わたしは、ゆくりなくも、まるで夢のやうな古いふるい記憶が胸に浮んで來た。

……あ、あの女であつたらうか……と思つた。

と、思つて、今度は、それとなく注意して、もう一遍見直した。あの女にしては、肉が肥え過ぎてゐるやうだ。顏もあの女にしては、ずつと見好くなつてゐる。が、さう思つてみると、どうしても彼の女に違ひないやうだ。口元のちよつと優しみのあるところ、それから眼の、大きくはないが、やゝ長目に切れて、ある才發さの表はれてゐるところ、それよりも顏の全體の調子が、どうしてもあの女である。

が、それにしても、あの頃に比べて、全く見ちがえてしまつた。向うから斯うじろ〱と何度も盜むやうに見られなかつた。

つたならば、こちらは無論氣が付かなかつたであらう。見たところあの頃に比べて肉附が、ずつと好くなつてゐるし、それにつれて顔もあの時分とは比べられぬほど見よくなつてゐる。

先刻から、いやに私の方ばかりに氣をとられて、こちらを向いて默つてゐるので、一人かと思つてゐたら、よく氣をつけてゐると、その隣に並んで腰を掛けてゐる四十四五ばかりのトンビを着た男がどうも、その連れらしい。男は四つばかりに見える洋服を着た男の兒をクションの上に立たして、窓の方に向けながら、自分も一所にそつちを見て、何か話をしてゐるらしいので、一寸の間、その男が彼女の同伴者であるか否かゞ分らなかつたが、女はわたしの方をじろ〳〵見てゐる間には、又一寸そつちを向いて何か口をきいた。

「あゝ、さうか。」と私は思つて、男の身體に隱れてゐるので、その子供の顔を見るよしもないが、きつと二人の仲に產まれた子であらう。しかし、あの女によく子供が出來たものだ。尤も母親に似てゐるか、どうだかは分らないが、或は產まれたのかも知れぬ。

で見ると、彼女が、あの頃に比べて肉附きもよくなり、はじめて知つた時分から、かれ是れ七八年にもなるのにもかゝはらず、却つて今の方が若くなつて見えるのも、彼女もやつと三十を過ぎて落着くところに落着き、幸福になつてゐることは明かである。着てゐる物は、ラクダまがひの、黑いザグザグしたコートを上に着てゐるので、下の着物までは分らぬが、裾の方から少しのぞいてゐる縞柄を見ると、好い物でもなさゝうだが、一寸そこらに出るので着てゐるのであらう。

やがて彼女は、連れの男と、それから子供と何か二たこと三言いひ交はしながら、自分一人だけ立つて、入口の方に出て行き、そこに暫らく突立つてゐたが、電車が神田驛に來たところで自分だけそのまゝ降りていつて、プラットフォームを歩きながら、又窓の外から子供を愛やすやうなことをいつて、行つてしまつた。

電車が動き出してから、男は、子供を、今度は、こちらに向けて下に立たした。その顔を見ると、男兒にしては優しい顔容で、思ひなしばかしでもなく、たしかに母親に酷く肖てゐた。

「彼女も、あの自分の腹から子供を儲けたのだ。」と私は思つた。

「それにしても、あの時分に比べて、思つたより好い女になつてゐる。……男でも女でも時世時節で、失意の時分には隨分窶れて見えたものが、後に幸福になると、五つ六つも若くなつたり、綺麗になつたりするものだ。彼女もさうなのだ。」と、私は又思つてみた。

「あれくらゐの女に見直すんだつたら、あの時、私によつて

彼女を幸福にしてやればよかつた。」と、私は、勝手なことをも考へてみた。

ところが、その反對に、私は彼女を一層不幸なものにしてしまつたのであつた。

彼女は、私に依つて幸福にならうと欲して、いはゞ、遠くから私に救ひの手を差延べたのであつた。それを私は、幸福を與へるかの如く、救ひの手を差出して、あるところまで持ち上げて置きながら、ぷつりと糸を斷ち切つてしまつたのだ。

尤もその頃は、私自身でも甚い不幸のどん底に沈んでゐたのであつたから、決して人を幸福にしてやるほどの心の餘裕はなかつたのであつた。しかしながら、その時もし、彼女を幸福にしてやることが同時に、私自身をも幸福にすることであつたならば、二人の爲めに二重の意味の幸福になるのであつたが、それが、私の側で一致することが出來なかつたのだから爲方もない。

そのことについては、當時一度、短篇小說に書いたこともあつたが、それに書いてゐるほかにも話すことがあるので、掻摘んで語ると、かうである。

その時わたしは、私の「黑髮」その他に書いてゐる自分の京都の女のことで、私は、京都に居て、失望と怨恨とのどん底に沈んでゐた。その時分私には、どの女を見ても、私の思つてゐた女ほどに好い女は何處にもなつた。とゝもに又、私の方を振顧つてみてくれる女は一人もなかつた。そこへ彼女が東京から突然手紙を越したのであつた。無論こちらは知らない女であつたが、彼女の筆蹟は流るゝやうに美しいので、ほかの女に脇目も振ることを欲しなかつた場合であつたにもかかはらず、可なり興味を惹いた。

……こゝで一寸云つて置くが、それは私の「黑髮」その他、あの系統の小說を見れば分るとほりに、私の思つてゐた京都の女とのことは、結局私が不幸に終つたのであるが、それにも係らず、私はその女のことをいつまでも思つてゐた。わたしはその女を自分の物にすることが出來なかつたのみならず、勿論見ることさへも叶はなかつたから、彼女の隱れ住んでゐる家のまはりを始終うろついてゐた。そして、異性を思ふ心に渴してくると、みじめな私は、祇園町の奧まつた巷路の裏に、まるで迷宮のやうに、深く入り込んでゐる、紅殻格子のはまつた家の中に入つていつて、そこで忙しい假寢の床に安價な歡樂を買つて、戻つてくるのであつた。どんな賣笑婦に出會つても、私は、心の內に、自身の思つてゐる女のイメージを想像して、それを彼女だと思つて、いとせめて果敢ない滿足を得るのであつた。その私の心を、わたしは自分で憐んでゐた。

それくらゐであつたから、勿論わたしは、東京の方から、不意に手紙をよこした未見の女に容易に心を動かさなかつたが、異性に渇してゐる場合だつたので、その女に簡單な葉書の返事を出してみた。すると、十日ばかりの間、それつきり何ともいつて來なかつた。どうせ、知らぬ處へ手紙を越すやうな浮氣な女のことだから、そんなもの丶することを氣に留めてゐると、又もや性懲りもなく、飛んだ目に逢つてしまふと、思ひ棄て丶ゐると、半月ばかり經つてから、今度は房州の方の繪葉書を送つて、少し病氣でこちらの方に來てゐましたがもう東京に歸つて來ましたといふのであつた。

わたしは、打つちやつて置かうと思つたが、つい所在なさに、京都の彩色を施した繪葉書に何か書いてやつた。

そんなことを二三度互に交換してゐるうちに少しづ丶興味が乘つて來て、京都に遊びに來ませんかといつてやると、ぜひ行きたいのですといつて來たりしてゐた。でも、いざとなると、なか／＼出て來られなさうな樣子であつた。私は段段立入つて、手紙でいろんなことを訊ねてみた。

その返事によると、彼女は大抵神田邊に住んでゐるらしかつたが、一時柳橋から藝者に出てゐた。それは、長いことではなかつたらしいが、藝者になつたりする女にしては、めづらしい筆蹟が美ごとである。そしてなか／＼ハイカラである。新しい文學などにも趣味があるらしいし、筆に才氣の溢れてゐることはいふまでもない。

あなたは、柳橋で藝者をしてゐたといふが、失禮ながら、ざらにある藝者にしては、あまりに筆蹟などが巧みすぎる。一寸、どんな前生であるか分らない。いづれ束髪の似合ふ當世風の藝者であらうといつてやると、

「わたし當世風は大嫌ひなのよ。頭髪なども束髪に結つたことは、始どありはしない。いつも日本髪よ。」てなことをいつて來る。

「ぢや、きつと樣子が好いんでせう」と、いつてやると、「樣子は至つて好くないの。馬鹿に背が高くつて、わたし、それが氣になつて爲樣がないんです。」

「ほ丶丶背が高い。……背の高い女は惡くないな。」と、私はいろんな想像を描いて樂んでゐた。「あなたが見たくなつた。寫眞を一枚送つて下さい。」といつてやつた。「わたし、寫眞は大きらひなんです。わたし寫眞うつりが惡くつて、いつも悲觀してゐるんです。寫眞だけは、ごめんなさい。」

「うつりが本物より惡いんなら、それだけ割増しをして、本物を想像して上げるから、送つたつて、い丶ぢやありませんか。」

「でも、寫眞は、ほんとに厭なんですもの。」

「さうですか。ぢや無理に送つて下さいとは申しませんから、その代りに手紙の交換もこれつきりにしませう。」

「あら、ひどいことを仰有る。……そんなら送りますわよ。何でも、あなたの仰有ることをき丶ますから、手紙の交換を止すなんて、そんなひどいことを、どうぞいはないでくださいな。隨分厭な寫眞よ。わたしどれも、氣に入らなくつて、みんな破いてしまつて今これきやないんです。」

さういつて送つて來た寫眞は、なるほど、そんなに好い女のやうでもなかつたが、いろんなことを差引したり、又綜合したりして考へてみるとまんざら棄てたものでもなさ丶うであつた。

「とにかく一度京都に來ませんか。」

それから暫く又手紙が中絶してゐた。何でも二月の末のころ始めて手紙をよこしたのであつたが、そんなことをしてゐる間に二た月ばかり過ぎて、美しく賑かであつた舊都の春はどこかしらに懷しい名ごりをとどめて去つてしまつた。櫻が散つてしまふと、鴨川ぞひの柳が日に／＼綠の色を增して來た。遠く比叡や愛宕の山々の薄紫に霞んで見えるがすが／＼しい初夏の空を、燕が、さも／＼四條の大橋を往く京の女の髷を戲弄ぶやうに掠めて飛んだ。緞繻色の繪日傘をさした女が通る。私はそれ等の、色めかしい京の女を見るごとに、どの女にも恨みがあるやうな氣がした。わたしは、どうあつても京の女から深い思ひを轉ずることが出來なかつた。

東京の女は、都おどりのある間に、今にも京都に來るやうにいつてゐたが、それつきり暫らく音沙汰が絕えてしまつた。さうなると妙なもので、今度はまたその女のことが、まるで引張られるやうに氣になるのであつた。都おどりがすんでしまふと、今度は、鴨涯の向岸に、鴨川おどりの眞紅な提灯の色が、さながら戀に焦れた者の惱みを喞るやうに、夜な夜な點つてゐた。

「あなたはもう京都に來ないんですか。」

後には、やつぱりこちらから堪え切れずになつて催促してやつた。

するとその返事に、わたしにも、いろ／＼深い事情があつて今度いよ／＼神戶で藝者に出ることになつた。神戶にいつたら、早速京都にいつてお訪ねしますといふのであつた。

わたしはその手紙を見て、ひどく絕望を感じた。やつぱり女といふものは、どの女も同じものなのだと思つた。京都の女のいふことが、一向眞實でなかつたが、今又この女も、ついこの間まで、明日にも京都に來るやうなことをいつて置きながら、俄にそのいふことが變つて、神戶から藝者に出る。一旦藝者に出てしまつたら、まるで、今まで手水鉢の中に居つた金魚が廣い池に出たやうなもので、どんな安もの丶藝者だつて、金を積まなければ、どうすることも出來ない。わづかに二た月の間でもこの女に興味を持つたのが、やつぱり自分の愚かであつた。一體自分は何處まで女のことにかけては

愚かなのだらう。いや女のことばかりではない。大根の性根が愚かだから、こんなことになつてしまふのだ。

よし、それでは、かういつてやらう。

「あなたが藝者になるなら、たとひ神戸に來たつて、わたしは會ひはせぬ。無論これかぎり手紙の交換も謝絶する。」

するとその返事に、私が今度、神戸から藝者になる決心をしたのも他ではありません。たゞあなたに逢ひたいばかりに神戸に行くのです。たゞ藝者になるなら、なにも東京を離れて遠くへ行く必要はありません。それと、も一つは、京都でもいゝわけですが、わたしのやうな女は京都で藝者には適しません。大阪でもいけません。神戸なら、わたしのやうな者に適當してゐるだらうと思つて、一昨日その仲介をする人のところへいつて相談をしたのです。そしたら明日からでもいいといふことになつてゐるのです。なぜに私が又藝者になるとお思ひでせうが、わたしは長い間病氣をしたゝめに、少し持つてゐた金も使ひ果してしまひ、後には着物にまで手をつけて、今では、おはづかしいながら、まるで見るかげもない、ほんとの裸蟲です。日々のおこづかひにさへ不自由を喞つてゐます。幾らわたしだつて、何で好んで藝者などになりませう。しかし、戀する男に初めて會ふのに、どう考へてもこんな不斷着のまゝでは、恥しくつて、とてもお會ひすることは出來ません。それは、つまらぬことのやうにお思ひになるかも知れませんが、あなたも小説をお書きになるお方ですから、女といふ者の心の中はよくお察し下さること、ぞんじます。

このまゝの身装では、わたし、假ひ、死ぬほど戀しいと思ふ人にも逢ひたくありません。それも、あなたとの戀を樂しいものにしたいからなのです。

そんな譯ゆゑ、神戸から藝者に出る決心をしたからとて、あなたに對するわたしの心に少しも變りはありません。すこし女らしい着物を着てそのうへであなたにお目にかゝりたいのです。

私は、その手紙を見て、これは、なるほど、さういふ女にしてみれば一應尤もなことだと思つた。

戀する男に初めて會ふのに、襤褸を下げて會ふことの悲しさは十分に解つてゐる。自分が惚れた女に會ひに來る時にもさうであつた。その女の爲めに、すつてんてんの裸になるまで、着てゐたものをみんな脱いでしまつてゐながら、やつぱり東京三界からこの京都まで出掛けてくる時には、いつも工面澁面の無理をして、出來るだけ身装を崩さぬやうに心がけてゐたことを考へてみると、彼女の心中の切なさは察することができる。

しかしながら、それだけ聞けば、もう澤山である。それほど眞實に思ひ入つてゐるものならば、たとひ襤褸を下げて來

たつて錦を着けてゐるも同然である。そんな女を藝者にして廣い池水の中へ放つのは惜しい。どうかして取り留めたいといふ一念から、私は、もう、手紙では手ぬるいとあつて、早速電報を打つて、

「ゲイシヤニナルコトハンタイゲイシヤニナルナラコウサイダンゼツフミニクワシ」

と書いた。

すると、その日の中に女からも返電が來た。

「オコトバニシタガイオモイトマル」

そのあとで私はすぐくわしい手紙を書いた。あなたが藝者になつてまで僕に會ひたいといふ氣持ちはよく分つた。もうそれで君の心中は十分であるから、たとひ襤褸を下げてゐても構はない。そんなことで私の君に對する心に變りはないからぜひ一遍京都に遊びに來たまへ。そして、甚だ失禮なことを申出るやうであるが、もし京都に來る旅費に不自由でもするやうなら、少し許りの金を送つてあげてもいゝ。といつてやつた。

女からは、その手紙を見てすぐ返事をよこした。

あなたの仰有るまゝに、藝者になることは、もう斷念いたしました。わたしは、あなたの仰有ることなら、何でも聽きます。わたしはもう、あなたの物です。わたしの身體は、あなたに捧げました。それでは、お言葉に甘へて旅費だけ送つて下さいまし。ほんとにお恥しい次第ですけれど、おねがひ申します。そのお金をいたゞき次第すぐにも立つてそちらにまゐります。といふのである。

私は、自分は、どこまで女に甘いんだらうと思ひながらも必死の勢ひで熱心になり、京都の女で、すつかり裸になつてゐたものが、近頃又少しづゝそんな物を取り戻してゐたのであつたが、早速そいつを、又小風呂敷に包んでそつと抱へて出で、三條東山を一寸上つたところに行きつけの質屋にいつて、三十圓の金をこしらへて戻り、その足ですぐさま、四條繩手の郵便局から電報爲替にして送金したものだ。

すると、その晩女から、金を受取つた。明後日立つといふ返電が來た。

しかし私は思つた。この女は、もう何もかも私はあなたのものです。わたしは、あなたの仰有ることなら、どんなことでも聽きますといつて來てゐる。實物に會つたうへで、私の氣に入るやうな女からそんなことをいつて來てゐるのだとすると、私は今のこの不幸な、みじめな境地から忽ちにして天上界の幸福な人間に生れ變る次第なのだが、會つて見たら果してどんな女であるか分らない。三十圓の金は一時の興に使ひ果したとしても、それよりも女が案外な、女であつた時の失望は又どんなものであるかも知れぬ。まだ見ぬさきから、向うのいふやうに迂濶と乘り氣にはなれない。南無大明神少

しは好い女であつてほしいものだ。

さうして私は、女が京都に來着する日と時とを手繰り寄せる思ひで待ちにまつてゐた。

翌々日の朝九時過ぎになつて、私が毎朝行きつけてゐる近いところの錢湯にいつて戻つてくると果して彼女は來てゐた。が、凡て豫想は惡い方に想像して置けば大抵間違ひのないもので、これは又あまりに無慘にも助からない、惡い方の想像通りであつた。

わたしは、一と眼彼女を見るや、あまりにも、戀を司るの神樣に見放されてしまつた私自身の不幸を喞たずには居られなかつた。……考へて見るがいゝ。さうなくてさへ、京都の女の爲に殆ど私の一生の幸福を棒に振つてしまひ、東京に引揚げて歸るにもかへられぬ、まつたく引込みの附かない窮境に陷つてゐる憫れな私ではないか。いかに私が女に渇し、戀に飢ゑてゐればとて、こんな女を當てがふとは、あまりとや皮肉の沙汰である。私は、ふたゝびその女の方を見る心にもなれなかつたのであるが、まさか、さうもならなかつた。

その時のことは私の短篇小説に委しく書いてあるからこゝでは繰返さぬことにするが、とにかくその夜は私の泊つてゐる宿に泊めた。私は他の座敷に泊めようと思つたが、生憎客が滿員の場合でもあつたし、宿の主人は大抵察してゐるので、くわしい此方の心の中を知らぬから加茂川を見晴しながら、漫々として瀲み流れてゐる疎水の水を前にした四疊半の座敷に夜の物などを持ち運んで、寢床を設けた。

わたしは、その女の顔を見てゐるのさへ感じが惡かつたが、「ちと窮屈どすやろがどうぞこゝで辛抱しとくれやす。」といつて、そこへ寢床を設けたので、自分の身體の奥の方に潜んでゐた妙な本能が忽ち強い脈を搏つて來たやうに思はれた。私はおもはず口の粘ばるやうな唾を呑み込んだ。

そして狹い室の中で、二人差向ひになつて、話すともなくいろんな話から、つい彼女の身の上ばなしを聞かされた。

深い藍を湛へた疏水の向うの堤の上をしつきりなしに京阪電車が疾走してゐる音が絶えず耳を襲撃して、うるさかつたが、その又土手の向うは加茂川の流れで、遠く向岸には先斗町の妓樓や茶屋などが軒を並べて、長い五月の日が、その家並の上に遠く霞んで見えてゐる愛宕山の肩の邊に沈んでしまふと、それ等の家々の二階には灯がともつて影繪のやうな女の姿が映るのが、何ともいへず古めかしい情趣を唆るのであつた。

しかし彼女の身の上ばなしは、私の同情を促すよりも、むしろ反感を起すやうなものであつた。

その話によると、彼女は柳橋から藝者に出たその日に附いた客に落籍されて、根岸の方に置かれた。……私は、彼女の容姿とその話とを、見比べて腹の中でお可笑しくなつた。といふのは、柳橋といふことによつて想像するやうな、とても、そんな粋な樣子の女ではなかつたからである。そして根岸あたりに圍はれるのにも、あんまりふさはしくない女であると思つたが、それが現實の姿なのだらう……

その旦那といふのは工學士で、茨城縣の多額納稅者の息子で、土木の請負師で、なか〳〵派手な生活をしてゐた。彼女はそのお蔭で四五年不自由のない月日を遊んで過ごしてゐたが、旦那の方でもいくらか飽きたのかも知れぬが、彼女もあまりに氣樂で、單調な日を送ることに倦きてしまつた。彼女は、骨牌を弄ぶのが、御飯を食べるよりも好きであつだ。……私は、そんなことをするのが、何といふことなしに妙に大嫌ひで、女が連夜を徹してそんな遊戯に耽つてゐることを想像するだけでも、あんまり感じがよくなかつた。……そのうち彼女はあまりに無事な生活に倦怠したところから、旦那の知人であるところの、藏前の工業學校出のある技師と出來てしまつた。その男には妻子があつた。先の旦那には妻子はなかつたけれど、勿論正妻に直る資格はなかつた。旦那にその不埒が知れた時、一騷ぎ持ち上つたが、向うは身分のある人間でもあり、結局そのまゝ濟んだが、彼女の方で逆に、向うの足許を見て、人を仲に立てゝ少からぬ手切れ金と、根岸の家とを貰つて綺麗になつた。彼女はさつぱりした自由な身體になり、それだけの財産を自分の所有にして、これから何をして遊ばうかと思つた。好い玉を二人も抱へて藝者屋をしてみようかと思つてみたり、或は、小ぢんまりした美味い物ばかり食べさす料理屋をはじめてみようかと、いろんなことを考へてゐるうちに、その新しい情人との關係はだん〳〵深くなつていつた。その男は先の旦那ほど生活が豐かでなかつたところから、そして今は彼女自身に自由にすることの出來る財産が一萬圓ばかりあるところから、いつとはなしに、その金に手を着けた。そして一年も立たぬうちに五千圓ばかりの現金は大方使ひ果してしまつた。後には、旦那にもらつた根岸の家まで賣ろやうになつた。

「それは、とても好い家でした。ほんとうに私の氣に入つてゐた。もうあんな家は二度と手に入らない。」

彼女は語りおはつて、撫然としてゐた。

「あんたも隨分馬鹿だなあ。……そんな榮燿榮華の果ての女が、この尾羽打枯らした私から、たつた三十圓の金を惠まれて京都に來るなんて。」

私は全く他人ごとながら、心から腹が立つやうな氣がした。

「今なら大分價のする家でせう。」

「さうですわ。もう五六年も前ですから。さうですねえ、今だつたら、一萬圓でも私買ふわ。」

「はゝゝゝ、買うたつて、その一萬圓は口でいふほど容易く出來はしない。廣い家。」

「うゝ、そんなに廣くもなかつたけれど、かうつと、さうです、七間ばかりありました。廣いより何より、それは粹な家だつたの。」

「君は、そんな家に四五年も遊んで暮してゐた罰が當つたんだよ。女が貞操を賣るから、そんな住居でも、又金でも何でもころ〳〵と轉がり込んで來るんだ。男子が自分の力でそれだけのことをするには、並大抵の苦勞ではない。苦勞しても出來ればいゝが、出來ることは、まあ覺束ない。」私は、彼女の放埓と愚かしさとが悄くなつて、汚く罵るやうにいつた。

「でも、わたし、もう諦めてゐるの。夢だつたとおもつて。」

「諦めなくたつて、爲方がないぢやないか。」

「でも、いゝわ。わたし、好きな男にそれを使つて無くしたんだから。」

彼女は、手紙の中にこそいろんなことを、互にいつてゐたが、初對面の男のところへ來て、そんな甘つたるい言葉づかひで行儀の惡い話を愼みもなくするのであつた。

「何だい、のろけを聞かしに來たのか。」

「だつて、あなたがお訊きになるからお話しゝたんです。」

「しかし、その、後の男は少し働きがなさ過ぎるぢやないか。みんな君の物を食つてしまつたのかい。」

「ところが非常な才子なの。」彼女は力をこめていつた。

「才子が又、どうして女から貢いでもらつたんだ。そんな男はいくら樣子が好くたつて、才人たつて、今時の女は、そんな男は嫌ふものだがなあ。」

「さうでもありませんわ。」

「しかし君の話の樣子では、先の旦那の方がよさゝうぢやないか。後には妻君を持つたか知らんが第一初めのうちは向うも獨身ぢやなかつたか。それに、後の男には妻子があるんだもの。」

「ところが、さうぢやないの。……奧さんの無い人と、奧さんのある人とは、こちらに對する氣持ちが、ずつとちがふわ。また、こちらの氣持ちもそれに伴れてちがつて來る。……奧さんがあつて、隱れて女を持つ場合は、それは、とても、いふにいへないわ。お互に苦勞もあるし、一層情が深くなるわ。人はよく、妻子のある人と深くなるもんぢやないといふけれど、わたしさうぢやないわ、戀をするなら妻子のある人の方が好いと思ひます。」

彼女は眞劍になつていつた。

私はなるほどゝ肯いた。

「うゝ、君の戀愛の經驗は可なり深いところまで昂進してゐる。男だつたら……女にしてもだ。餘程危險性を帶びてゐる。それは男子が……と興味の緊張するものはないといふのと同じ戀愛心理だ。」

「えゝ、さうなのよ。奧さんが蔭にゐて燒いてゐるのが、男

の人に會ふとよく分るの。向うで燒いてゐれば、ゐるほど私の方でも一層好くなるんですもの、爲方のないものねえ。」

「うゝ、面白いおもしろい。」

そんな情話に私達は、つい、つり込まれて、鴨川べりの座敷の夜を更かしてしまつた。立つて障子を開いてみると、初夏の夜はいつしか靜まつて、宵のうちは頻りに笑ひさゞめいてゐた、さしもの先斗町の妓樓の灯も一つゞつ影が、まばらになつてゐた。ちやうど近松の文句にある、向うの二階は何屋ともおぼつか情け最中とて、まだ寢ぬ火影聲高くといふ風情がかうであらうと思はれた。

「さあ、もう私達も寢ようか。」と、私は、何だか、身體中が、……………するやうな肉……………えながらいつた。

四疊半一ぱいに二つの寢床が、加茂川の淺瀨の音を枕にして敷きのべられた。

「……いゝわよ。あなたのお好きのとほりになさい。」

……………………………。けれども私は彼女とそれを……………氣にはなれなかつた。そんな女が好いにつけ、又惡いにつけ、やつぱし私の愛慾は、いくら賴りなくなつても何でも京都の女の上にさまよふていつた。顏を見ることもならず、況んや身體を所有することは勿論達かぬ望みであつたにもかゝはらず、わたしは、たゞ、その女を思つてゐるだけに果敢ない滿足をしてゐなければならなかつた。でも、それでもまだいとせめてもの慰めがあつた。東京から遠く訪ねて來たその女に見代える氣にはどうしてもなれなかつた。

それで、その翌日は一日、祇園町から東山、圓山公園などを、ぶら〳〵歩いてみたりして日を暮らし、體よく因果を含めて、もう一晩泊めて、その翌朝早い汽車で東京に歸らした。彼女は歸つて行く時、まだ私の寢てゐる間に早起きして、朝飯もとらず、宿の者にも隱れるやうにして、こそ〳〵と出ていつた。その後姿を、私を寢てゐて見ながら一寸哀れであつた。が、後を追ふ心にはどうしてもなれなかつた。

歸り着いてから、彼女は一二度遣る瀨ない怨みと悲しみのこもつた手紙を越したが、それに對する私から手紙はたゞ一とゝほりの挨拶にすぎなかつた。

それつきり彼女を見なかつた。

すると、それから五年過ぎた。……私も彼女とのことがあつてからあと倘丁度一年京都にゐて、その翌年の初夏の頃久しぶりに東京に歸つて來て、それから三四年もして東中野に一家を構え、他の女も出來てゐた時分であつた。震災の直後家に近いところの東中野の停車場の附近を歩いてゐると、蝙蝠傘に暑い秋の日を避けながら向うから歩いて來る女が、ふとこちらに眼を留めた。わたしも、すぐそれと分つた。互に行き過ぎようとしながら、向うから口を出した。

「××さんでせう。」
「え〻、さうです。」二人とも立ち止つた。
「随分おめづらしい。」
「あれからどうしてゐました。でも地震には無事でお互に結構でした。」
「どうして〳〵無事どころぢやないんです。」
「でも、かうして生きてゐられゝば、まあ幸ぢやないですか。」
「それはさうですけれど、みんなまる燒け。」
「やつぱり神田にゐたのですか。」
「え〻、ですから、着のみ着のまゝ。やつと生命だけ助かつたくらゐのものです。」
　それから私は自分の番地を敎へておいてすぐ分れた。
　一週間ほどして、九月の十二日に私は、先の住處から、五六町離れたところに移轉した。それは地震の二三日前からの豫定であつたので、地震の爲めに延びてゐたのであつた。そして、その翌日形付けをしてゐるところへ、玄關に誰か來た者があるといふので、自身に出ていつてみると、彼女であつた。私はちよつと、ぎつくりした。別に弱い尻もない譯だが、彼の女のやゝ厚皮しいやうなところに厭な氣がした。私は、そこに坐つて、一寸改まつた言葉になり、顔だけ笑顔になつて、
「やあ、おいでなさい。先日は失禮しました。その後どうしてゐます。」
　彼女は玄關の土間に入りもせす、何か氣の退けてゐるやうに入口の外に突立つたまゝ、地震で全裸體になつて困つてゐる。やつと、ある知邊の許に弟と二人で身を寄せて厄介になつてゐるところであるが、弟が、この場合古本でも賣つたら、小使ひの足しくらゐにはなるだらうといつて、それを今やつてゐる。それでもし、あなたの方に讀み古しの不用の書物でもお有りになるなら一冊でも二冊でも頂きたいといふことであつた。
「それはお安い御用ですけれど、何分昨日やつと引越して來たばかりのところで、まだ何が何處にあるやら、散亂つてゐますから、そのうち探して纒めておきませう。あとでおたよりしませう。」そして、今何處に住んでゐるんですか。と、低聲にいつたが、まあお入んなさいとも、お上んなさいとも、いはなかつた。私の家の者に、何も氣を兼ねる必要もなかつたが、昔關係のあつた女に、さうして訪ねて來られるのがあんまり好い氣持ちはしなかつた。
　彼女は今牛込の柳町の何番地某氏の家にゐるといつて、敎へていつたがそれつきり再び訪ねて來なかつた。
　そして今日偶然電車の中でめぐり會つたのであつた。……
　彼女の上に幸福あれ。

（昭和二年一月十五日作、改造掲載）

早春の溫泉場

　殆ど毎年のことであるが、そこの溫泉場でも却つて春の彼岸時分になつてよく泡雪が降つたり、時分柄とも思へないやうな雨が潮吹いたりして冷たい日が二三日續いた後、朗らかに晴れ渡つた一日、天地の間の物は眼に觸れるものが悉く春の蘇生を悅んでゐるかのやうに思はれた。菜の花はもう二月の半ばから、しほらしい黃金色の花を、そこらの雛段畑に開いてゐたが、長い間、背後の方の高い山から颪して來る寒風に吹かれてゐたり、冷たい雨た濡れそぼちてゐたが、今日は、それがまるで生き返つたやうに美しい日を浴びてゐる。春雨に濕つた黑い大地の上、畑土の上から暖い太陽に蒸された土いきれが、微かに白く上騰つてゐる。畑の畦だの、蓮華草を植ゑた田甫の草原には油繪の顏料を滴らしたやうな鮮かな綠の色が溶けて流れてゐる。それらの物から、嫩草の匂とも雨に潤るんだ大地の蒸される香ともつかぬ早春らしい匂ひが一緒になつて、軟かな暖光の中に融けて漂つてゐる。
　戶外に出て田圃の草原に立つて、西北の方に連なつてゐる高い山を仰ぐと、そちらの方では昨夜は、かなり雪が降つたと思はれて、恰ど、白粉を施したやうに眞白になつてゐる。しかし春雨の後の海の表は、あくまでも長閑で、白く霞を罩めた海の彼方には、大島があるかなきに模糊として見えてゐる。それから、ずつと眼近の初島の青螺も麗らかに春光を浴びてゐる。靜と眼を落着けて見ると、あちこちの野草の上や人家の屋根にはちろ〳〵と陽炎がもえてゐる。
　家島の借りて住んでゐる別莊の邊は、つい三四年前まではまだ田圃であつたのだが、近年そこら中が開けて來たにつれて、それまで農作物など作つて町へ賣つてゐた百姓、などだんだん住む場處がなくなつたり、耕作する土地を地主に取り上げられたりするのであつた。
　家島は、妻や子供等と一緒に別莊の前の蓮華畑に出て、長閑な春光に浴しながら傍の畑で働いてゐる百姓の老人と陽氣のくるつた話や、畑作物のはなしなどをしてゐた。その爺さんは、東京の金持が所有してゐるそこらの田畑を年貢金を納めて野菜類を小作してゐるのであつた。そして家では片手間に八百屋物をひさいだりしてゐた。

「左樣でございますよ。もう、ぢき此處も整理して分譲地になるさうですから、野菜は作られなくなります。」

「今に別莊がぎつしり詰つて賑かにはなるだらうが、菜の花などは見られなくなつてしまふ。」

「へゝゝ本當に左樣でございますよ。」

「東京でも郊外に、だん／＼家が建てこむし、ここでも居まはりが、せゝこましくなつて來るし。困つたものだなあ。」

家島は口の中で喞つやうにいつてゐた。家島は、紫紅色の蓮華草がそこに咲く時分になると、午餐時によくそこへお握りだの　海苔卷きなどをこしらへて持つて出て、日傘をさしかけたり、手拭を頭にのせて、子供等と、そこで晝めしを食べたりしてゐた。今年の春も、今にまたそれが出來さうであるが、來年はもうそんなことが出來なくなつてしまひさうであつた。

「あゝ好い天氣だなあ。何處かへ少し歩いてみようか。この間中、あんまり又寒さがあと返りしたので、一週間ばかり何處へもゆかない。」

「えゝ、ほんとにどつかへ行つてみたいやうな日ですねえ。」

「あんまり遠くへも行けないし、……用があるから。」家島は何か知ら、書かねばならぬ仕事に追掛けられてゐるやうな氣持ちが常にしてゐた。それに、先々のことを考へると、あともう一週間もしたら、關西の郷里の方へ展墓にも行つて來なければならなかつた。それまでに形づけておきたいことが、あれもこれもと嵩んでゐた。

「へゝゝ今日はそこらをお歩きなさるには好い天氣でございますよ。」百姓の爺やは白菜の畑から聲をかけた。

「春と秋のお彼岸にはよく、あれ、あそこに見えてゐます山へおまゐりいたします。もつと暖くなつたら、あそこへお上りになつてご覽になると、ようございます。」といつて、爺さんは北の方に見える高い山の頂を指した。

「あそこにお寺がございまして、お地藏樣がございます。みんなお彼岸にはまゐります。」

「あんな雪の中に人が住んでゐるですかねえ。」家島の妻は高い雪の山を眺めた。

「この間お天氣の日に、みんな足袋はだしでお辨當を持つて、こゝを上がつていつたのを見ました。あそこへお詣りしたんですねえ。」そこへ、向うの方で子供の對手をしてゐた女中のけさが近寄つて來ながら雪の山を指した。

「さうか。私達も、今に、もつと暖くなつたら、いつてみようねえ。今日は少しそこらを歩いてみようか。」

彼等はそれから、久しぶりにお天氣になつたので、溜つてゐる洗濯物をしなければならぬ女中のけさを一人殘しておいて、夫婦で二人の子供をつれて町から海岸の方に下りていつた。暖い海岸には、溫泉旅館の浴槽から流れ落ちて來る下水の

落口から濛々としたたち湯氣が昇つてゐた。海岸に臨んで架け直した腰掛け臺には湯疲れのした婆さんの浴客が細帶姿で腰を掛けて蜜柑を食べてゐた。海の方を見ると、春の光が白銀を展べたやうに照り返へして、白い靄が蒸し物をするやうに上騰してゐた。その向うの方に大きく横つてゐる大島の三原山の肩のところには、それでも、さすがに雪が殘つてゐるのが冴かに見えてゐる。

彼等は、今年になつて初めての暖かさに誘はれて、海岸を何處までも先きへ／＼と歩いていつた。

午後は少しく曇つて來たけれど、風もなく、暖かであつた。それもその筈で、もう三月の廿八日である。あたりまへなら、もう櫻花が咲くのであるが、今年はわけて寒さが後返りして、彼岸前から又、二月が、もう一遍まはつて來たやうであつた。しかし、もう、いよ／＼春だ。

門のところに立つて四顧ずると、今朝、あんなに眞白に雪を被つてゐた高い山には、ほとんど雪が融けてしまつて、青磁色に晴れた空には潤んだやうな春の光が漲つてゐた。そしてあんなに今朝は濡れてゐた大地の土から白い水蒸氣が騰ちのぼつてゐたと思つたら、暖い春光を浴びて、土は見てゐる間に心地よく乾いていつた。

「もつと何處かへいつてみたいなあ。」家島は、何しから、まだ遊び足りないやうな、そゞろに、どこかに行つてみたいやうな心地に浮かされてゐた。

そこへ、坂道の下の方から、ふつと知つた顏が見えて來た。中年の婦人が二人、子供が三四人ぶら／＼上つて來るのであつた。派手な藤紫色の駱駝の襟卷をしてゐる中年の婦人から先づ眼に留つた。

「おや！」

「おや／＼！」

と兩方から互に聲を掛けながら近寄つていつた。

「雨で困つちたでせう。」

「ほんとに困つまひました。」

「こゝで雨に降られちや叶はない。」

「えゝ／＼。でも、もう昨日は、たうどう我慢し切れなくなつて、町を散歩しました。」

「あの雨天に。」

「えゝ、でも落ちるのが止んでから……子供達がもう家の中にゐることを承知しないんです。それに引張られて、おつきあひに。」

「今日はその代りに好いお天氣だ。先刻あなたのところへ電話を掛けさしたんですよ。何處かへ御案内しようと思つて、ホテルにでも。」

「あゝさうですつてねえ。……今ホテルに行つて來たところ

ですの。」
「さうですか。それは殘念であつた。」家島は、先刻女中にいつも借りる隣家の家主の電話を借りて、彼女の泊つてゐる旅館に電話をかけさしたのであつた。
　加津子といふその婦人とは、家島はもう、かれ是れ十四五年も以前からの知合であつた。彼女はある實業家の妻君であつた。文學にも嗜みがあつて、自分でも脚本なども書いてゐた。それが上演されたことも度々あつた。
「ぢや、どうです。これから梅園へでも行つてみませんか。」
「今、そこへ行かうと思つてゐるんですの。でもちよつと途中で、あなたのお宅へも一遍お寄りしようと思つて。」
　坂の下から自動車が一臺上つて來て、そこに止つた。運轉手が下りて待つてゐる。
「自動車で？」
「道が分らないものですもの。」
「ご尤も。しかし梅林に行くには自動車はいらない。」
「さうですか。こゝから近いんですの？」
「そんなに遠くもありませんよ。あそこの山の端を一寸廻はればすぐです。」
「おや、そんなに近いんですか。」
「六七町もありますかな。私の家でも、あんまり暖い好い日だから、これから子供を伴れて家中で出掛けようかといつていたところです。」
　そこへ二人の子供が洋裝をして女中に手を引かれながら出て來た。
「おや〳〵、もうこんなに大きくなつて。わたしまだ、もつとお小さいのかと思つてゐました。……どれ、おばちやんの方にゐらつしやい。」
　と、いつて、加津子は手を差伸べて招いた。大きい方は、人懷しさうに、そつちへ寄つていつたが、小さい方は女中の傍から離れようとしなかつた。
「おや〳〵、よくおばちやんのところへゐらしつた。まあ、こんなに大きくなつて。おいくつ？」
　子供は片手の指をみんな開いてみせた。
「あゝ、五つ。よくお分りになつてねえ。……そちらの方は？　ちよつと、おばちやんのところにゐらつしやい。」
　さういつて手招きしたけれど、小さい方は、恐い、見馴れぬ物でも見るやうに顏を硬くして、默つて凝つと、彼女の方を見てゐるばかりであつた。
「まだ、三つです。やつと滿二つを一ケ月過ぎたばかりです」
　そこへ加津子の連れの婦人や子供達が近寄つて來た。加津子は家島に、その婦人を紹介した。彼女は加津子の友達で、その夫は、やつぱり丸ビルの大きな會社に勤めて課長くらゐ

のところにゐた。
「お書きになつた物では度々お眼にかゝつて居りますが、お初めて。」
　彼女は、一寸お轉婆らしい調子で挨拶した。
「いや、どうも恐れ入りました。」
「自分では、もつと寒い時分に來たいと思ひましてもねえ、子供が學校があるもんですから。」
「なるほど、皆さん大抵さうのやうですねえ。」
「今、丁度春のお休みですから。どのお座敷にも、同じやうなお客で一杯。」加津子がいつた。
「こゝから梅園に近いんですつて。こんな小さいのだつて歩いて行くんですつて。」
「自動車はもう餘計なこつてすよ。尤もあなた方はブルヂョワでゐらつしやいますから、あちらを、ずつと遠廻はりしてお乘りにならうと思へば、お乘りになつても、それは御隨意ですが。」家島が戲談のやうにいふと、連れの婦人は笑つた。
「道が不案內なもんですから。……さう、こゝからでも行けるの。ぢや自動車は止して、こゝから御一緒に歩きませう。」
　家島は一旦家の中に入つて洋服に更めて又出て來た。家は半洋式に出來てゐるので、入口のドアに鍵をかけて、書間一寸くらゐ家中で遊歩に出掛けることが出來た。家島の妻も一緒に出掛けた。
　加津子は、二三年前に夫に死別れた妹の子供を一人自分の處に引取つて世話をしてゐた。それはもう小學校を卒業するくらゐの女の子であつた。連れの婦人は、今度から中學校に行く男の子を頭に三人の男の子ばかり連れてゐた。家島の大きい方の女の子は、女中の手から離れて、加津子の姪に手を引かれながら歩いた。
　梅はもう、とつくに散つてしまつてゐたが、ところ〴〵に木瓜が咲いてゐたり、名を知らぬ白い花が咲いてゐたりした。青い芝生の上には蒲公英の花が、そこら中に咲きこぼれてゐた。子供達は跳ね廻はつて嬉んだ。そして蒲公英の花を摘んだ。梅の樹の下をくゞつて、溪流に沿ふた細徑をずつと奧の方まで入つてゆくと、そこには又廣い芝生が開けてゐて、そこから、向うの方の山の中腹に誰れかの幽棲らしい草葺きの二階屋根が見えた。山と山とが兩方から挾つて來て梅林の盡きたところに雛段なりに山畑がつゞいてゐた。眞青な麥の芽が三四寸ばかり伸びてゐた。左の方の山には青い竹林が杉の森にまじつてつゞいてゐたりした。
　一としきり芝生の上を遊歩してからロハ臺の上に腰を掛けてみんな蜜柑を食べたり、家島が携へて來た菓子を食べたりした。
「まだ暫く御逗留ですか。」歸途、門の前で家島は別れを告げ

ながら訊いた。
「もう直き歸ります。……でも、まだ二三日は居ります。」加津子はいつた。
「まあ、一日でも長く遊んでゐらつしやい。」
「遊びたいのは一日でも二日でもねえ、長い方がいゝんですけれど……」加津子は、同伴の婦人の方を顧みて一緒に笑ひながらいふ。
「どうも難有う。御案内していたゞいて。私の方へもお子さんをお連れになつてお遊びにゐらつしやい。……はい左樣なら。」加津子は家島の子供の方を向いてお愛相をいつた。
　翌日は少し風が立つてゐたが、家島は午前の散歩かた〴〵子供に女中を附けて町へ出たついでに加津子の旅館を訪ねてみた。旅館は避寒の客は夙に引揚げていつてしまつて、閑散であつたが、それでも交通の便を利用して、學校の春期休暇中は子供連れのお客で又ひとしきり賑つてゐた。
「おや、ようこそ。昨日は御苦勞さまでした。おや〳〵お孃ちやんもおつれになつて。よくゐらしつたね。さあ、こつちへお入んなさい。」加津子は、家島の子供達に中年の婦人らしい愛相をいつた。
「おばちやんのところは、こんなに狹くつて、暗くつていけない處で困ります。」彼女は戲談のやうについて滾した。
「もつと好い座敷がありさうなものですがねえ。」家島は座蒲團の上に坐りながらいつた。
「さあ私にはよく分らないけれど、きつとあるんでせうと思ふんです。けど、こんなところに入れられてしまつた。今一寸立てこんでゐまして、好いお座敷がどこも塞がつてゐますので、暫時こちらで御辛棒ねがひますといつて、それつきりよ。」
「ぢや、さうかも知れない。」
「でも、關口さんの奧さんの方は好いところなのです。海が見えて。私のところは、海も何にも見えない。餘處の物干が見えるつきり。だから始終あちらのお座敷に行つて遊んでゐますわ。」
「それでいゝぢやありませんか。」
　そんなことをいひながら、加津子は罐の中からお菓子を取り出して半紙に包んで子供吳にれたりした。
「こゝは陰氣でいけないから、あちらのお座敷にお邪魔にいきませうよ。」
　彼女は先に立つて同伴の婦人の方へ案内した。廊下を二つばかり折れ曲つた、海の方を向いた二階であつた。
「昨日はどうも。失禮いたしました。お孃ちやんも御一緒。よくゐらつしつたわねえ。……さあ、こちらへお入り下さい。」
　同伴の婦人はちよつと氣取つたやうな、甘い口のきゝやう

をする女性であつた。
「えゝ、もう、却つて廊下の方がいゝんです。こゝへ。」といつて、家島はそこにあつた藤椅子を引寄せてそれに腰を掛けた。
「あゝ、それぢやこれを。」と、同伴の婦人が取つて出した座蒲團を加津子が受取つて、藤椅子の上に載せた。家島は、
「どうもありがたう。」と、それに腰をおろした。
「この方も女流文士なんですよ。」加津子は輕い戲談のやうに、同伴の婦人について說明した。
　すると彼女は笑つて、
「女流文士はないでせう。文學愛好者が本當だわ。」
「ぢや愛好者。なか〳〵文學者なんですよ。女子大學の文科をお出になつたの。」
「あゝ、さうですか。」家島はいつてゐた。
「大抵拜見してゐますわ。」關口といふ同伴の婦人は、嬌笑しながら家島の方に向つていつた。
「どうも困りますねえ。」家島は年にも似ず心持ち赤面するやうにいつた。
「でも此の頃大變おとなしいのね。」
「はゝゝ、おとなしくもなりませうよ。あんなのが居ますからね。」家島は向うの廊下の曲り角のところで女中や他の子供達と遊んでゐる子供の方を眼で指した。
「お子さんがおありになつたつて、いゝぢやありませんか。今からそんなことをいふのは早いぢやありませんか。もつと京都時代のやうに艶麗なところを拜見したいわ。」
「おや〳〵。京都時代のことまで知つてゐるんですか。」家島は、大分面白くなつて來たやうな調子でいつた。
「えゝ、あなたの事なら、大抵何でも知つてゐるわ。」同伴の婦人は、妙に落着き拂つていふのであつた。
「そいつは困つたなあ。」家島は少し仰山に照れたやうな顏をしてみせた。
「だつて、あなた御自分で書くんですもの。」
「それはさうだ。……しかし、あなたの旦那樣が私の京都時代のやうなことをやつたら、あんまり好い氣はしないでせう。はゝゝ。」
「少しやればいゝと思つてゐるわ。男子は、そのくらゐな意氣がないといけないわ。」
「おや〳〵。隨分開けてゐるのねえ。」今度は傍にゐた加津子は口をはさんだ。
「もう、やつてゐるんぢやないですか。」
「さあ、どんなものですか。やつてゐたら、こちらでも負けずにやるからいゝわ。……その方が結局自由よ。」
「おや、若い燕。まあ好かつた。」加津子が笑つた。
「えゝ、若い燕か、古い燕か知らないけれど。」

「なか〳〵面白い……」家島も笑ひながら對手になつてゐた。
「本當をいふとねえ。」彼は、加津子の方を見ながら、眞面目とも戲談とも付かぬ微笑を含んでいつた。
「私は、ずつと前にあんたに結婚を申出でようと思つてゐたことがあつたんです。」
「おや〳〵。」加津子は一寸、眩しさうな眼をした。
「さうら！」同伴の婦人は、わざと意味ありさうな眼をして見せた。
「へえ、そんなことがあつて?!」加津子は、輕く照れたやうな顏をしながらいつた。
「あつたなあ。」家島は落着いた調子でいつた。
「さうら……何が出るかわからない。今日は奢らすよ。」關口の妻君は、もの〳〵しさうにいつた。
「わたし、そんなこと、ちつとも知らなかつた。」
「そりや、あなたは知らないでせう。たゞ、私が自分で心の中でさう思つてゐたゞけだから。」
「おや、そりや殘念なことをした。何時々分のことでせう。」
「さうですなあ。あんたが今の阪田さんと結婚する前だな。」
「おや、隨分古いこつてすねえ。」
「それは、さうさ。阪田さんと結婚してから、そんなことを思つたら大變でせう。」
「やあ〳〵！」關口夫人は面白さうに手を打つた。
「まあ、そんなもんですねえ。」
「まあ、そんなもんですねもないでせう。」
加津子の夫の阪田は、一年ばかり前に會社の用命で歐米の視察に出張してゐて不在中であつた。
「それまでに私はあなたに二三度會つたことがあつたやうに思ふ。一度は私の下宿に訪ねて下すつたことがあつた。あの時分だな。」
「えゝ、あんたの處へいつたことは知つてゐる。」
「その時分あんたに餘程申出ようかと思つてゐると、ある時ふと、あんたが阪田さんとエンゲージしてゐるといふことを聞いて、これは恥を掻かないで、まあよかつたと思つたことがあつた。」
「あゝ、あの時分ですか。それは惜しいことをした。約束してゐたつて構はなかつたのに。さうと、打明けて仰有つて下されば、わたしも考へてみるのだつたのに。」加津子は戲談のやうな輕い口をきゝながらも、廊下の手摺に凭れかゝつて、一寸眞面目な表情になつてゐた。
　阪田氏と加津子との仲には子供がなかつた。家島は二人の子供のある今の方が、自分にとつて幸福であるか、どうだか分らなかつた。もしも、加津子と、あの時、兩方の氣持ちが合つて、かりに同棲することが出來たのであつたにしても、二人の毎日々々は、今の生活よりももつと氣の乘つたもので

あつたかも知れなかつたが、そのかはり二人の子供は或はなかつたかも知れぬ。さうしてゐると、やつぱり今の方が幸福なのかも知れぬ。
　しかし、どつちにしても、人間の一生涯は、若い時にいろいろ空想に描いてゐたやうに、さう愉快なものではなかつたやうだ。それは、勿論、主なる原因は、家島自身の氣質によつてさう考へられるのであるが、ジョン・スチュアート・ミルの自叙傳の初には、こんなことを言つてゐる。自分の父のジェームス・ミルは、人間の一生涯は、少年時代に空想したほど、結局さう樂しい愉快なものではなかつたが、しかし、それを、まだ少年であつた自分に向つては明らかに語らなかつた。と、かういつてゐたが、家島は、ともすると、このミルの言葉を思ひ出すのである。けれども、それかといつて、人生を面白くないものに思ひ定めてしまふわけにもいかなかつた。で、今後の殘生をば出來るだけ面白く樂しく生きていかうとして努力するよりほかはなかつた。
　すると、關口夫人がまた興味のある話題に話を持つていかうとするやうに、
「あなた、この頃、京都の方は、どうなすつて?」
「京都?　京都は好いなあ。」
「やつぱり。」意味ありさうにいふ。
「そりや、さうですとも、あんなに思つてゐたんですもの。」
加津子がいつた。
「おや、京都といふから、たゞ京都のことかと思つたら、あなた方は、そんなことをいつてゐたのですか。これは、どこまでも、祟られるですなあ。」
「でも、あんなに思つてゐらしつたんだもの。」關口夫人は、しんみりした口調でいふ。
「同情して下さるんですか。」
「それは同情するわ。」
「ほんとうにあなたは、いつも女には不運ねえ。わたしは、まだ〳〵その前の時分のことから知つてゐるんですから。」加津子も口をそろへていふ。
「だから私は、あなた方の同性を心から憎むよ。」
「でも、そんな者ばかりはない筈なんだがなあ。……あなたは全く御運が惡いですよ。」
　關口夫人は殘念さうに同情する。
「ほんとうに運が惡いんだなあ。だから、もう僕は、異性としての女性については全然考へなくなつた。……あの二人が今では、私の唯一の女性の樂みです。」家島は、廊下に遊んでゐる二人の女兒を又目で指した。

（昭和三年二月十八日作、新潮揭載）

銀河を仰いで

私はこの間一晩泊りで興津にいつてきた。

興津といへば、天下の政客が西園寺詣をするので、古來世に知られた東海の名區といふ以外に、近頃殊に評判の地となつてゐるが、一箇の閑人である私にはそん用ではない、此の一夏小さい子供達をあそこの海岸に避暑にやらうと思つて、土地の樣子を見かた〴〵貸別莊を探しにいつたのだ。

私自身は本來海岸よりも山の方が好きで、自分だけならばやつぱり山の方へ往くところであるが、子供達や女供には海岸の方が陽氣で好からうと思つたのである。私自身の生活はもうそれだけでも家族といふもの、爲に自己を犧牲にしなければならぬことゝなつた。それでも私は、それを、そんなに堪へ難い苦痛とも思はなくなつた。それを考へても親の愛情といふものは强い力を持つてゐるものであることを意識せずにはゐられない。

そして興津にいつたついでに清水市外の不二見にある鐵舟寺と、高山樗牛の墳墓の地である龍華寺にも詣うでゝきた。龍華寺は今初めてではなかつた。今から二十一年前の夏、初めて興津に遊んで龍華寺に詣うでたことがあつた。清見潟、清見寺、三保の松原などの風光は、固より夙に聞いてゐたが私の青年時代崇拜措かなかつた樗牛の名文によつて、清見潟の風光の美が新しい感情によつて稱へられ、そして、遂に、その埋骨の地が駿河灣の一角に殘ることゝなつたので、私の彼の地に對する氣持ちが更に別のものとなつたのであつた。それで、たしか、あの大理石の面に「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」といふ文字を刻した墓石が龍華寺畔に修築せられた翌年かに詣うでゝみたのであつた。

そこの高みからは三保の入江を隔てて富士の秀麗なる姿がまともに眺められた。樗牛は殊にその風景が氣に入つたのであつた。

此の間も、鐵舟寺畔に父君とゝもに住んでゐる、ある文學好きの青年のO氏を足のついでに訪ねて、そこの座敷に坐してゐると、淡藍色に染まつた清楚な夏の富士は白雲の間から直ちに眉端に迫つて來た。寺の山には柑橘や茶の樹畑が開けてゐるのも見るから暖い駿河國が偲ばれるのであつたが、庭

のまはりに梅の木が多かつたり、到るところに芙蓉が伸びてゐたりするのも私の心を惹いた。私と東京から同行した若い實業家のS氏は、龍華寺畔に殆ど落成せんとしてゐるO氏の別莊を見て、頻りに自分もその邊に家を建てたいことを洩してゐた。三保の入江の彼方には清水港外に碇泊してゐる巨船が幾つとなく靜かな波の上に橫はつてゐるのも何となく壯大な眺めを增した。

しかし今度私の興津にいつたのは、初めからそこが目的地ではなかつたのだ。每時汽車で東海道を旅するごとに、窓外の景色を眺めて、興津の一つ手前にある駿河灣の由井といふ處が私には何となく氣に入つてゐた。青い海波に迫つて薩埵峠の嶮岨な山が聳えてゐるのが、ちよつと南畫めいた趣を成してゐた。高い嶺から山腹にかけて杉檜などが蓊鬱として繁茂してゐるも見る眼に快感を與へた。

もし私の經濟上の事情が許すならば、あんな處に居つて冬を過したら好いであらうと、そこを通るたびに窓から海と山とを眺めて空想してゐた。もう四月頃にそこを通つてみると漁夫の子達が眞赤に潮燒けのした素裸體で大きな盥の舟に乘つて磯で遊んでゐるのを見た。砂濱には美しい朱色の櫻海老を干してゐるのが見えた。

私が近頃、そんな海岸で冬を過したいといふ氣になつたのは、從來身體のあんまり强壯でない割りに冬期滅多に風邪を引かぬ方であつたが、近年どういふわけか度々風邪に罹り安くなつて、殊に今冬などは、去年の十一月の中旬に、はじめて今年の冬の風邪を引いたのを最初として、それから殆ど每月のやうに一と月の中七日か十日か風邪で臥床せぬことはなかつた。以前のやうに、自分獨りさへどうかかうか活きてゐれば可かつた時分とちがひ、妻子を扶養しなければならぬ責任のある身體となつて、殊に徒食してゐることの出來ない境涯の身であつて、一と月の中十日も寢て暮らすことは、直ちに一家族の生活問題に影響することであつた。その爲にもう去年の冬の初にも大磯か何處かへ避寒したいつもりでゐたのであつたが、それには人手の不足があつたり、妻が重患の後の二度目の出產を眼の前にひかへてゐたりするところから遂にそれを實現することが出來なかつた。そして案の定冬中始終風邪に冒されづめであつた。

そんな次第で今年の冬こそは萬障を排しても冬季を何處かの暖い海岸で過さねば殆ど一家族の生存問題にも係はることになるのであつた。

冬季を暖い海岸で過すことは私自身にとつて最も必要なことであつたが、今から、來る冬の準備に避寒場をつくつて置くために、ついでに此の夏、その瀨踏みとして一家族で避暑に出掛けてみるのも好いだらうと思ひついたのであつた。

東京から短時間で往復することが出來て、最も便利なこと

をいへば湘南地方であつたが、あの邊は何かゞ發達してゐるだけ、東京に住んでゐるのと多く違はないので、一寸氣を變へる爲に轉地するには私には何となく氣が進まなかつた。どうしても函嶺から向うへ越していつてみたかつた。それのみならず駿河といふ國は何となく私は好きであつた。そんなわけで先づ由井に志していつたのであつた。同行のS氏の妻君の弟が由井に住んでゐるので初めS氏に紹介を乞ふと、それなら自分も今のところ一寸身體があいてゐるし、此の間から少しく病氣をしてゐたので、その邊の海岸まで汽車に乘つて往くのも保養になつていいだらうといふので同行することになつた。しかし由井は、東から行くとこれから薩埵峠にとりかゝらうとする昔の東海道の一驛が、まだ大分古風の建築のまゝ殘つてゐるやうな一と筋町であつたが、避暑客を迎へて家を貸すとか貸間をするかいふやうな設備のある所はなかつた。それで結局興津にいつてみることになつた。

久し振りでその興津にいつてみたり、此の一と夏を其地で過すことにしたりしたことから、前にもいつたやうに、今から二十一年前に一度そこに行つた頃のことを自然に聯想して、自分の生活の推移といふやうなことを振顧つて考へたり、それに從つて又、これから先の生活が何う落着いて往くかといふやうなことを考へさせられるのであつた。

生活の資源とする確實な財産といふものを所有してゐない自分どもの生活がいかに不安定なものであるかは、私自身の過去の生活を思ひ浮べても分るとほり、これから後、窮極死に到るまでの生活がやつぱり今までのやうなものであるとすると、やつと一二年此の方生れ出でたばかりの小さい子供達の生ひ立つて行く前途に慘めな世界が擴がつてゐるやうに思はれてならなかつた。

尤も自分の過去の生活が隨分不安定な、流轉の生活であつたにしても他の何者の爲にも自己の欲望を犧牲に供しなければならぬことは何時の場合にもなかつた。不安定は不安定なりに毎時自分のことさへ考へてゐればよかつたのである。それゆゑ私が以前の生活に於てある女に金を貢いだりしたのも或は、身に聊かの係累のない氣樂さから、そんな處に手を出したのかも知れなかつた。——それは自分で承知してしたことでもあつたのだ。

そんな次第で、常に殊に物質上の不足を感じながらも私は、今日となつては、自分自身のことばかりに全力を盡して生きて來た果てゞあるところから、これから先の私の生活が小さい子供の犧牲になつて生きるべく餘儀なくされるのであつても、自分に對して多く遺憾を感ずることもなかつた。それは理窟の上で、さうあつても爲方がないといふ締めからでなく、いはゞ自分一個の欲望ばかり思ひ詰めて生きて居るといふことに倦んだ結果とも考へられるのであつた。

つい、いふことが理屈めいて來たが、今から二十餘年前には私は小石川の高臺に住んでゐた。それは丁度日露戰爭の開始された時分であつた。その戰爭と私の思想や生活とは直接に何等の交渉を有つてゐなかつたが、私が自分自身で營む生活はその頃から始まつてゐたのである。それから此の方ずつと二十幾年の間荒い實生活の波に揉まれて喘ぎ〳〵生きて來たことを考へると、——それが一半は、自分には誰れをも扶養しなければならぬ責任を有つてゐないといふ氣樂さから人間に對する戀愛その他の興味に刺戟せられて、生活の冒險を敢えてして、厭はなかつた點もないではなかつたが、それが自分の故意に出でた業であつたにしても、又自分の如何ともすべからざる性格の力に驅られて必然的にさういふ生活の進路を選んで歩いて來たのであつたにしても、その生活は、荒い波浪に掀飜されてゐたといつて可いか、又は、嘗て一度も平坦な處に出會はない、峻嶮な坂路ばかりを絶えず攀ぢ登つてゐるものゝやうに、肺臟がい辛つぽくなるほど悲しい呼吸を續けて來た心地がせられるのである。固よりそれを第三者の側に立つて見たならば、それくらゐのことは何でもないことなのであらうが、その痛苦を何の程度に深刻に感ずるかどうかは各人の個性によつて甚しく相違することであつた。

とにかく私の生活は外見醜態で、そして自分自身では何週間といふ手術を施さなければならぬやうな血みどろの瘡痍を滿身に浴びた時が想像せられるのであつた。乍併私はその故に世間を怨むとか人世を呪ふとか、又は自己を悔むとかする氣には未だ嘗てなれなかつた。けれども私がこれまで生きて來た經驗からいつても、窮極人生は無慘な舞臺であるといふことを、痛感せずにはゐられないのである。

その小日向臺町に住んでゐた頃、半歳ばかりの間國から母が來てゐた。母はその年春の終ころに、その時横濱からアメリカに渡つて往く私のすぐ上の兄と一緒に出京したのであつた。母は東京に來て暫らくの間でも私と一緒に生活することにどんな樂しい期待をもつてゐたか知れなかつたのである。そして、その時やつとまだ八つを頭の男の子供を三人、妻に預けて遠くアメリカ三界まで出稼ぎに渡つて往く兄の心事は、潤澤な旅費を持つて漫遊などに出掛けて行くやうな氣樂なものでは決してなかつたのであるが、それでも、早くから他家へ養子にいつて隨分苦勞したらしい兄が實母と二人きりで、東京まで樂しい春の旅を續けて來たことは十分想像せられるのであつた。

彼等は私の些かな家に落着いてから、寢起きの間にも私と三人の間に、いろ〳〵な古いことと新しいことの情話を持出して、長い春の日の立つのも知らなかつた。兄は、船の都合で

たうどうそこに二十日餘も逗留してゐた。その兄はそれからアメリカの西海岸に渡つて三四年働いてゐたが、ある秋の初の脊急性な腦出血の爲に敢えなく不歸の客となつてしまつた。

その兄が向うへ渡つて往く前に、私の家に逗留して居る間、前途にいろんな空想を描いてゐたことが、假しその幾分をも實現することが出來なかつたにしても、幾年かの後無事に歸つて來ることが出來たならば、その時母と同伴して樂しい春の旅をして來たことが永久に樂しい記憶となつて殘つたであらう。又私の家に居つて水入らずの情話に春の宵を更かしたことが、いつまでも樂しい思ひ出となるのであつたらう。けれども此の人世には、豫期したことが常に裏切られがちである。悲しい人間の運命は、一度は明るく樂しかつたことをも、全局の上から振顧ると、それを不幸な憂欝な色に塗り消してしまはうとする。そんな理由からも私はその頃の記憶を明るい感じを以つて思ひ浮べることは出來ないのであるが、それでも、その時々の刹那の心持ちを樂しく思つて生きてゐなかつたこともなかつた。

その頃の母はまだ六十を二つか三つ越したばかりのところで至極健康であつた。その時からまだ十年も前、私が東京へ志して出て來る時分の樂しい空想の一つは、少年の頃愛讀した日本外史の著者賴山陽が老母を伴つて吉野の花を觀たといふ、ある繪物語を讀んで、自分も將來、文事に志を達することを得たならば、必ず山陽に倣つて、老母を伴つて諸國の名勝を見て歩きたいものだと思つてゐたのであつた。今、その母を東京に迎へて一緒に住んでゐるが、私の少年の空想は容易に實現することが出來なかつた。

それから二十一年の歳月が慌しく過ぎた。……私は、つい二た月ばかり前、今年の五月の初、滿二年見なかつた老母を鄕里に歸省した。そして二年前見た時よりもひどく老耄してゐるのを見て、少なからず驚いた。八十四といへば隨分人間としては長命した方で、老衰するのは無理からぬことであるが、私はそこに、人間の死に近づいた場合の、ある物凄さと恐怖とを見ることが出來たやうに思へて、悽愴の感を抱いた。それは、今からもう三十年も前に私の、上から二番目の兄が二十九歳の壯齡でインフルエンザから肺炎を起して死んだ時の、人間の一命を奪ふ病勢の猛烈な有樣を面りに見て驚いたのとは又別な意味に於て死といふものゝ如何に暗澹たるものであるかを見たのであつた。

母はアメリカに往く兄を見送りがてら東京に來てゐた時分から、ずつと十年ばかりの間は極めて息災であつた。そしてその兄の憐れなる死に出會つても、見たところは、それが老後の身體に障る程の打擊をも與へなかつたやうであつた。尤もそれは、精神的打擊を強く感ずるに堪へないくらゐに、もう生命の力が衰へてゐたからであつたかも知れなかつたが。とにかく母は七十四までは、身體に少しの異狀もなかつた。七十四の春の初になつて突然中風を發して、その時一時は、これが序になるかと思つたが、よく〳〵壽命があつたと思はれて、健康は又追々回復して、それから半身不自由な身體になつたが、尙ほ十年後の今日まで生き延びてゐるのである。その間にも、もう今度こそはいけないだらうといふやうな騷ぎをして、はるばる東京から驅付けていつたことも一度や二度ではなかつたが、身體の組織が餘程强壯に出てゐると思はれて、その度に病褥に打勝つことが出來た。子としては親の長命してゐるのを見ることは、最も大なる悅びの一つであつた。父には三十餘年前死別れたが、その代りにせめて母の長命してゐることは遺傳的に、父の早死によつて短命を豫言せられてゐるものが、その爲に自分の命數を乘除せられてゐるやうな氣がするのであつた。私は一昨年の春歸省した時に、心ばかりの酒宴を開いて母には孫に當る多勢の甥達を招いて長壽を祝したのであつた。その時はまだ、暖い春の日に炬燵にあたりながら不自由な手を運ばして何かしら自分の身に着けるものをつゞくつたりしてゐた。そして今年いつて見て、始めて、めつきり老衰してゐるのを見て驚いた。

その間には例の關東の大地震があつたり、又私自身につゞけさまに二人も子供が產まれたり、その母親が重患に罹つたりして境遇の變化があつたゝめに、度々鄕里の甥から、近頃は祖母の樣子が大分先と異つて來たからぜひ一度早く見に來てもらひたいといふ催促があつたにもかゝはらず、その內にそのうちにと、心ならずも一日のばしに日を送りながら容易に尻が上らなかつた。

甥は、そんな手紙のたびに、祖母が呆けてしまつて、風呂湯の中に鯉が泳いでゐる、やれ皆な早く來てくれといつて騷いだり、若い者の肉眼でも見ることの出來ない向うの山の上に人が步いてゐるのが見えたり、御飯を食べたのを忘れたりするといつて、手紙で私達を笑はしてゐた。

十年前に中風を患つてからは、少し調子の變つた時にはそんなことはめづらしくなかつたので、私は、又いつものだらうくらゐに考へてゐた。それが五月に往つてみると、老耄は想像してゐたよりもずつと深刻になつてゐた。

誰れも親が死ぬのを悲まぬものはないが、八十四年も生き延びた人の壽命は、私はこの上尙ほ慾ばつて長かれと、强いて祈らうとも思はぬ。それよりも、私は、宛も老木の枯死してゆく如く老衰した人間の靈魂が、今にも地上から何處かへ離脫せんとして暗い冥途を求めつゝ昏迷してゐる狀態をまざまざと眼の前に目擊してゐるかのやうな恐ろしさに打たれたのであつた。

彼女は半分以上精神が呆やけて、意識が錯覺してゐるがた

めにある場合には、その行動といふことが子供のやうに正直であつた。何か話をしてゐることが後からあとから筋道をまちがへたことに變つていつた。自分が獨りで續けて言ふことには違つたところはなかつたが、今まで他の者と交へてゐた話題からひよいと他の方へ脱線してしまつた。

「お婆さん、そのことぢやないんですがな。」傍に附いて居つた私の姉が寂しさうに笑ひながら、正していつた。

しかし、そんなことは何のことか老婆には解らなかつた。

その姉は私達同胞の中の一番上で もう六十五の好いお婆さんであつた。近年悴の職務の都合で神戸の方に住んでゐた。老母が四月の末に又一寸様子が變つた時に、もう度々の事なので、方々の親類に知らすことは遠慮したが、產みの子の姉と私にだけは生きてゐる間にもう一遍會ひたいといふ本人の希望で至急見に來るやうに通知を發したのであつた。丁度私が東京から向うに着いた處へ姉も神戸から來てゐた。その姉は十年ばかり前に夫に死別れて、今は世を悴夫婦に讓つてゐた。

いつたその晩から姉は老母の室に二人で枕を並べて夜を看護つてゐた。此の間中は胃が少し惡かつただけで、格別病氣といふほどの病氣でもなかつたが、生命の力はもう大半枯死してゐるのであつた。五月の月に入つてからも足が水のやうに冷えるといつて始終炬燵に這入つてゐるにも係はらず、眞夜半に熱くつて堪らないといつて、どうかするとぞく／＼寢床から這ひ出して、椽側の硝子障子を開けて素肌になつて夜風に吹かれてゐたりすることがめづらしくなかつた。

傍に寢てゐる姉がふつと眼を覺まして、

「お婆さん何所ですか。」

と、訊ねると、老婆はきよとんとして、

「お前何處へいとつたのか。」と、あべこべに訊ねた。

「さうぢやありませんがな。お婆さん便處に用事があるかときいて居るんです。」

「いゝや、わたしや、そんな處に何にも用はありません。」

と、知らんことのやうにいふのであつた。

姉は爲方なしに泣き笑ひをしてゐた。

「わたしも長生きはしたいと思ふけれど、こんなに長く生きようとは思はん。」そこへ隣の座敷から眼を覺まして起きて出て來た私に向つていつた。

「そこは寒いから、お婆さん此方へ入んなさい。」といつて姉と二人で寢床の中に連れ込んでおくと、彼女は又もやむくりと起き上がつて、

「不思議なこともあるもんぢや。」と、さもさも不思議さうな聲を出した。

「この熱いのに、あなた方は皆な寒いとは若い者のやうでもない。」

そんなことといひながら、又寢床から立ち上がつて、枕頭に置いてある竹の杖を取つて、何處かへ探りさぐり往かうとするやうに、もぞ／＼歩き出した。

姉自身もいゝ年寄りであるので、この三四晩の介抱に大分睡眠不足を感じてゐた。

「お婆さん便處に用がないのなら、靜つと此方へ來て寢てゐなさい。」

私は少し大きな聲を出した。

「いや、わたしや自分で好きなやうにするから……お前がた入らんことぢや、夜々半寒いのに早う寢るがいゝ。」剛情な調子でいひながら、がたぴし硝子戸を開けて何處か外にでも出て往きさうである。

姉は又泣き笑ひの顏を拭ひながら、

「今、熱いあついといふとるかと思ふと、此度寒いといふたり。……もうこんなになつたら、熱いのも寒いのも分りやせんのぢやなあ。」といつて笑つた。

私も大きな欠伸を一つして、

「毎晩これぢや全く傍の者がまゐつてしまふ……お婆さん便處の用事でもないのに、時々何か探ねるやうに夜でも晝間でも何處かへ往かうとするやうに、歩き出すのは、何か入るものがあつて探してゐるの？」私は訊ねた。

「……死ぬるのはもうそれほどにも思はんが、何かかう途に迷ふやうな氣がして、どうもならん。」

杖に縋つてそこに立つたまゝ獨り言のやうにいつた。

私はそれを聞いて、何ともいへない闇黑な氣持ちがした。それは親の死を悲むといふ種類のものでなく人間皆な最期に臨んで誰れもこんな暗がりの中に這入つてゆかなければならぬ運命のものだと思ふと、老婆のそこに突立つてゐる姿にある魔氣を感じた。さう思ふと老婆が可哀さうであつた。が、それは、いかに千億萬のお經を讀んでも、又いかなる名僧智識の有難い說教を以つてしても、どうすることも出來ないことであつた。

豫期してゐた以上に生き延びた母はもう夙うから死の到ることを覺悟して、炬燵に凭りかゝりながら、覺束ない假名文字で辭世の歌のやうなものを幾つとなく反古紙に書きしるしたりしてゐた。そのうちにはちよつと面白いものなどもあつた。しかし此の頃ではもうそんなことさへ物臭くてする氣がないまで腦の機能が衰へてゐた。

いくらかまだ性根の確かな時分には、死といふことゝ道理で判斷することも出來るので、吾々が信仰の功德によつて救はれることの出來るのもその時までゝあつた。肉體を組織してゐる總べての機關や要素が衰へて腦の働きが退步して來ると、死そのものは極めて自然の推移であつて健康體の者が想

像するほど恐ろしいことではないかも知れぬが、そこに宿つてゐる靈魂が無明の暗に迷ふやうな氣持ちに襲はれるのもまた極めて自然のことのやうに思はれた。

　私は、自分の力で出來ることなら何處へでも老母の手を引いてやらうと思つたが、そればかりはどうすることも出來ないことであつた。そしてたゞ微かに嘆息を洩しながら、彼女の杖を力に、老い衰へてそこに突立つてゐる姿を見てゐるほかなかつた。

　そこへ次の方の室に寢てゐた兄がまた起きて來た。

「お前方が來てからまた大分樣子がよくなつた方ぢや。此の間うち惡かつた時にはこんなことぢやなかつた。」

「こんな具合ぢや一人きり此室へ寢さして置くのは、心配で爲樣がない。神戸の自分の家へ歸つても、夜半にふつと此處のお婆さんのことを思ひ出したら、氣になつてとても眠られんと思ふ。何時起き出してそこへ緣端から轉げ落ちるかも知れんもの。」

　苦勞性の姉はいふのであつた。

「いや、自家でも氣は着けてゐるんぢや。此の間中ずつと惡かつた時には誰れかが此處に寢て居つたんぢやけえど、少し好うなると、お婆さん自分の方から、俺一人で寢る方が氣樂でえゝから、お前方あつちへ行つて寢てくれといふんぢや。」

「お婆さん自分でそんなことをいふたて、自分で自分のことが少しも分りやせんのぢやもの。」

　此の間中の老婆はどうかすると自分の寢室から幾間を隔てた上り口まで、他の者の寢てゐる間に這ひ出して來て庭に下りてがた／＼入口を開けて外に出て往かうとした。その物音に眼を覺ました他の者が、

「お婆さん何處へ往かれるのですか。」と訊くと、彼女は

「自家ぢやどうもよう寢られんから、河原へいて寢る。」

　河原といふのは、家はづれの小川の土手に墓地があるのでそれを意味してゐるのであつた。

「河原へいたつて寢る處などありやあしません。」

　抱き留めようとすると、老婆はぷり／＼怒りながら、

「留めずにわたしの好きなやうにさしておいてくれ。」といつて、容易なことではきかなかつた。

　中風から脚が惡かつたが、近頃はそれがずつと甚くなつて、突立つた場處から一足踊り出すのも手間がかゝつた。

　彼女は、私達がそんなことを話してゐる間も、それが自分とは何の關係もないことのやうに、耳にも入つて居らぬ樣子で、きよとんと突立つたまゝ、動くことも出來なかつたが、

「どれ、ついでに小用を一つしようか。」といつて、やつとのことでそつちへ動き出した。

　神戸の姉は、老婆が夜々半一人で這ひ出すのを頼りに氣づかつて私と二人きりの時など、

「一體此處の家では、いつもあゝしてお婆さんを一人で寢さして置くのぢやらうか。ようそれで安心して寢られるもんぢやと思ふ。……わたくしも何時までも此處に居つてみてあげればえゝが、さういつまで居ることも出來んし。お婆さんがあんな、一尺歩くにも一時間もかゝるやうな足附きで、ひとりで寢たり起きたりするのを見て居ると、可哀さうで私は歸るにも歸られん。おだいさんなど時々起きて見るんぢやらうか。」

　といつて、心配してゐた。彼女は必ずしもよくある姑根性からばかりでもなかつたらうが、弟嫁やその息子達の若い者夫婦などが、八十四にもなつて、いさゝか死期をとりちがえてゐるやうな老母を、眞心から傷はつてゐるであらうかといふやうな疑念を抱いてゐた。もう六十を通り越した、實弟である此家の主人が母を粗略にするとは少しも思はなかつたが、いつも孫達にかまけてゐる弟嫁のしてゐることには少からず不安があつた。主人は居村から一里ばかり離れた處にある或る會社の事を專ら擔當してやつてゐるので社務の繁忙な時などには七日も十日も戻つて來ないことがめづらしくなかつた。そして二人ある孫の六つになる大きい方を弟嫁であるその祖母が抱いて寢てゐた。そこの相續人であるすぐの孫なども、老祖母に對してあんまり優しい口をきかぬといふやうなことを、それが事實であるかどうだかは別として、彼女ははたから何時となく聞いてゐた。

「こんな汚い蒲團でなく、もつと綺麗なのがいくらもあるでせう。それを出して着せてもらうたらよろしいぢやありませんかお婆さん。」

　姉は、炬燵にかけてある、むさくるしい、手織り縞のやうな古夜具を撫でゝみて、老母の耳元に聲をかけた。

「もう二十年も三十年も、……それよりもつと昔の物ぢやないか。……こんなものは私がまだ嫁にゆかぬ前に此家で織つたことがあつた。」

　六十五歲の姉は情熱のあまり、そんなことを誇張していつた。

「うゝ、この蒲團は少し暑苦しいなあ。……私が夏の間に一つ三越あたりで出來てゐる、輕いのを買つて送つてもいゝ。」

　私は東京へ歸つたらそれを必ず實行しようと思つたが、それくらゐのことは、其處の家でしようと思へば何でもないことであることを思ふと、わづかの、夏蒲團を買ふ金を、自分が惜む、おしまぬといふことよりも、其處の家で、老祖母に對してそれくらゐの注意を拂つたらいゝのだがといふ氣になつた。けれども、萬事に質素なそこの家では、誰れでも皆な手織り縞のやうな古風な夜具を夏も冬も用ゐてゐるのであつた。

　――少しく餘談に入るが、私は、姉が今誇張していつたや

うな、大きな縞柄の手織木綿の大夜具や蒲團が、姉や私の産まれたその家に昔からあつたことを記憶してゐる。一と冬中通して用ゐられたそれ等の夜具類が、土用最中になると、解きほぐされて洗濯をして竿に懸けて、裏庭一ぱいに乾されてあつた。その頃まだ存命でゐた私達の祖母が、そんなことには、自分がまだ主になつて采配を振つてゐるのであつた。そして一旦水灌ぎをした蒲團の皮を今度はすつかり解いてしまつて、それに、一寸でも觸ると痛いほどの強いつよい糊をしてそれを、がは〳〵するほど土用の炎天に乾かしたのを、大きな砧で女中共が、よいしよ〳〵と掛聲で、とん〳〵打ち柔げてゐた。夏の農繁時には何處の家でも用が多いので、そんな洗濯物がとかく豫定よりも遲れがちであつた。祖母や母などは、それに氣が急かれるやうな調子で、

「早うせんと、もうぢきてんぽおどしが來る。」

と、いひ〳〵砧を持つ手を速めた。私の十歳ばかりの頃は、父の代から酒造家であつたので杜氏などに着せる夜具の洗濯物などが多かつた。

「てんぽおどして何のこと?」私はよく訊ねた。私にはその言語の意味が遂に分らなかつたが、おほかた地方の俗語の訛であらうと思ふ。まだ暑いと思つて、うつかり油斷をしてゐると、ぢきに秋風が立ちそめてやがて寒くなると、夏の間に洗濯するものは、ちやんとして置かないと着る物に事を缺くといふほどの意味であつたらしい。

「……土用半ばに秋風ぞ吹くといふから、今に直き涼しくなる。」といつて、母は砧を持つ手をとめて、その時分もう、めつきりと高くなつてゐた碧い空を打ち眺めた。

そのわたりだけ割合に土地の開けた青田に涼しい初秋の風が渡つて來るのは、それから間のないことであつた。「昨日まで早苗とりしがいつの間に稻葉そよぎて秋風ぞ吹く」といふ素樸な古歌の意味そのまゝの感じが草深き賤の伏屋に忍ばれるのもその頃であつた。

それから三十年も四十年も過ぎた此の頃では産業狀態が變遷して來たので、私の故郷でももう砧を打つ音が聽かれなくなつた。三抱もあるやうな大きな木の株で造つた砧が二つもあつて、幾代の昔からの人が衣を打つて、つる〳〵滑るやうになつてゐたが、近頃偶に歸鄕しても、もうそんな物は見られなくなつてしまつた。おほかた割つて風呂を燃く薪木にでもせられたことと思ふ。さういふ世相の變遷を凝乎と考へてみても三十年四十年の昔に比べて今の世が強ち住み好い世とも思はれない。

姉はこの先尙ほ五六日も逗留して老母の介抱をしてゐたら自分も、まだその附近に住んで居る忰や娘達の處へも二三ケ處立寄つて、それから神戸に歸らなければならないが、自分

が去つた後のことを考へると、足萎えの老母の事に後髪を引かれて歸るにも歸へられないやうな氣のすることを私に向つて喞ちてゐた。

そんなにいはれると、私も何だか、老母の側から、又遠くの方へ歸つて往くのが氣の濟まぬやうな心持ちにならされるのであつた。「しかし、こゝの家でも相當に氣は附けてゐるやうだから大抵大丈夫だらうと思ふ。……それでも眞實の實の子に介抱してもらふのが、何よりも一番に慰みになるのだから、あんたはもう自分の家の事は構はない身體だし、始終來つきりにしてゐるといふことも出來ないだらうけれどあんたが二た月に一度とか、出來るなら、毎月一度づつ來て、一週間も側に居るのが、一番いゝことだと思ふ。もう年を取つて、兩方とも世を讓つてゐる人なんだから六十四になる婆さんと八十四になる大婆さんと二人で生きゐて話してゐられたら、それくらゐ仕合せなことはないぢやないか。……私も男であつても、出來ることなら、少し長く側に居つて上げてもいゝが、まつたく困るよ、五十にもなつて小さい子供が二人も潰えかけて出て來て、私などはこれから大いに働かなければならないのだから、年寄りの事も思はんこともないが、もう先きの見えてゐる者のことよりも、まだ〳〵先きの遠い者の方のことを考へて遣らねばならん。……何といつても此處の家やあんたの家はいゝさ。主人に萬一の事があつても、後がどうもならぬといふやうな心配はないんだから。そこになると私などは自分が死んだら、後の者は急ち餓ゑ死をしなければならん。」

私は、老母の五月炬燵に、自分も足の尖だけ踏み入れて、肱を枕に身を横へながら、太息を吐くやうに、さういつて笑つた。

姉は考へるやうに默つてゐたが、

「そんなものでもない。お前そんなに早う死ぬものかな。」

「いやさうぢやないよ。何時死ぬかも知れん。たとへ明日の日に死なうとも、死んだ後が困らぬやうになつてゐなければ少しも安心して居られやしない。」

私は絕えず、思つてゐるまゝを捉み出すやうにいふのであつた。實際そんなことを思つてゐると、今にも自分は死んでしまふやうな氣持ちに脅かされてならなかつた。まだ今、乳を飮んでゐる最中の赤ン坊や、そんな後が早かつた爲に無理に乳を離れるべく餘儀なくされた、上の子供や、さういふ、口さへまだ利けぬ二人の乳呑み兒を遺して自分は、何時隋ち掛つて來るかも知れない運命の星の下に生存らへてゐるだと思ふと、まるで底の知れぬ深淵の斷崖に臨んで立つてゐるやうな不安を感ずるのであつた。勿論、そんな危惧の觀念に脅かされ勝ちなのも、自分の死後に殘される小さい者共の慘めさを悲む氣持ちが主なる理由であるにはあつたが、又ひとつは、

次第に老境に入つて來た自分を生存の悦びに繋ぐその兒等の生育を樂む幸福の感じを意識するの餘り、どうかして、その幸福が毀たれはせぬかといふ取越し苦勞の不安も大いに手傳つてゐるのであつた。

「私が死んだら、二人の子供を一人づつ此處の家と、篤(姉の相續者)の處へ賴んで引取つてもらふよりほかはない。……さうしてくれるだらうな?」

私は、今にもそんな事が起りはせぬかといふやうな半ば眞面目な表情をして、半分戯談のやうに言つた。

「そりやお互だから、もしそんな事があつたら、それは又その時のことで、どうでもならあな。」

姉は穩かな氣持ちでさういつた。

それでも、もしそんな場合が事實起つたならば、死ぬる自分よりも、自分の手を離された兒等の不幸が透徹して何處までも思はれるのであつた。それを考へると、實際、子供達は生れて却つて不幸であつたのだ。が、又さうばつかりも形付けて考へ決められない所に、やつぱりこの人の世はいゝ加減な、不徹底なところで、放念して置いていゝのだとも思はれた。

十日ばかりそんなにして、古い、産まれた家で、死に瀕してゐる老人の傍にゐる間に、私はうだつたやうになつてしまつて、何もしないでたゞ靜としてゐても生欠伸ばかり出るやうな氣持ちになつて來た。

初め東京驛から夜の汽車に乘つて立つた時や、その夜が明けて、尚ほ曉靄の底に眠つてゐる美濃近江の野路に殘る春を眺めたりした時には自由な旅行氣分を享樂してゐたが、その十日の間に清新な氣持ちはすつかり凋れて興が褪めたやうになつてしまつた。氣持ちばかりでなく身體までが何となく疲勞を覺えて來た。東京を立つ前にいろ〳〵空想してゐた豫定の旅行氣分も崩れてしまつて、もう此の上何處へも行つてみようといふ興味も消えてしまつた。

そして尚ほ五六日逗留して行くといふ姉より一と足先きに私は京都まで引揚げて來たが、京都では久し振りに自由な氣持ちで、前にも大抵一度は見たことのある洛の内外の古い寺院の庭などに行つてみて、靜かな泉石の鑑賞に浸つて見たいと思つて樂んでをつたが、そんな處へさへもう一歩も足を踏み出す元氣がなくなつてしまつた。これは鄕里にいつてゐる間に氣持ちが倦んでしまつて神經衰弱に罹つてゐるのだらうと思つて見たりした。

そんなことの一面には、東京に居る二人の小さい者が、五月の好い季節になつて、わづか十日も見ぬ間にもどんなに元氣になつて、よく遊んでゐるであらうか。それを早く歸つていつて見たいといふ心地に唆られるのでもあつた。

そして京都ではたつた二泊したきりで何處へもいつて見ず、翌々日の特急列車に乘つて歸京を急いだ。

留守は、よく働いてくれる年とつた女中や子守などがゐて人手には不足はないし、時候もよくなつたので、殊に、この一月からやつと歩き出した大きい方の子供が、さぞ元氣になつてゐるであらうと、それを一刻も早く見たいと思つて、門の外で俥を降りるなり玄關に入つて、そこへ迎へに出て來た妻に、

「どうだ? 子供は皆な何事もなかつたか。」

と、何より先きにそれを訊くと、

「百合ちやんが、一週間ほど前、今月の初にひどく又寒かつた時から、少し風を引いて、まだ癒らないんです。」といふ。

私はそれで土間に突立つたりなり、

「なに百合公が風を引いた。熱はあるのか。」

「えゝ、八日の日だつたかに三十八度と一寸あつたのです。それから、それでも段々良くなつて、もういゝと思つてゐたところ、又昨日あたりから少し熱があるんです。」

私はそれを聞いて、靴を脱ぎ棄てる間ももどかしさうに座敷に上つて、急いで奧の八疊に入つていつてみた。子供はもう、うと〳〵眠つてゐるところであつたが母親が傍に寄添うて、

「百合ちやん、これゆりちやん。お父ちやんおかへり。」と、そうつと呼び覺ました。

眠つてゐるその顏を電燈の明りに見ると、五月の好い季節に、十日見ぬ間にも、きつと先より肥つてゐるであらうと思つてゐた想像は全く裏切られて、前よりは見ちがへるほど憔悴した顏の色が蒼く血の氣が失せてゐた。さういはれて、ふつと眠を覺まし、私の立つてゐるのを見て、ちよつと笑顏を見せたが、そのまゝすぐ傷々しさうに咳をしながら又うとうとと眠りに入つた。

私はそれで、ひどく失望を感じた。久し振りに老母を見舞ふた鄕里でも、何が原因といふ譯もなく氣分が疲れてしまひ、京都でも樂しい旅行氣分が失せてしまつて、何に心を向けて樂しく生きてゐるといふ目標もない、たゞ早く東京の家に歸つて、二人の小さい子供を交る〳〵抱いて、高く差上げたり、搖ぶつてみたりするのが、まあせめての樂みくらゐに思つて戻つてみるとそのとほりである。私はそこで又洋服も脫がずに、暗い顏になつて小言を始めた。

「いつでも私の留守となると此の通りだ。……さぞ、一寸見なかつた間にも、今の好い時候だから、寒い時分とちがつて、元氣になつてぴよん〳〵飛び廻はつてゐるだらうと思つて、樂んで歸つて來たのに、何だ、俺の留守の間に風邪を引かしてゐる。此の子は、去年のあの時乳に離れたために病院に入れたが、それは病氣の爲めに入れたのではない。生まれ

て今日まで、三十八度などといふ熱のある風邪を引いたことは今度が始めてだ。……私が居ないと、すぐ此のとほりだ。旅に疲れて、やれ〳〵家に戻つて一と安心しようと思つて戻つて來ると、これぢや安心も休息もあつたものぢやない。すぐ又心配しなければならん。……俺も一體全體何時になつたら少しは安心が出來るんだらう。……僞りや病氣といふものは、どんなに氣をつけてゐたつて、出る時には出て來るが、これの風邪なんぞは、確かにお前の不行屆きからひどくしたにちがひない。それは、平常お前のしてゐることで、私の見當は外れないんだ。」

　私はさういひながら、そこにどつかり尻を落して兩脚を投げ出した。

　家内はそれを聽いて默つてゐた。自分にも奥さんと一緒に大分責任を感じてゐるらしい樣子をしてゐる年上の女中も同じやうに默り込んで板の間の方に下がつてゐた。

　私はやゝ暫くして口を利いた。

「そして今、熱は何度あるんだ。」

「今日は昨日よりもずつと好いんです。一度此の間三十八度あつたきりで、それからもう癒つたかと思つてゐたら、昨日の晩夜中泣き通しで、百合ちやんばかりぢやない、お蔭で誰も寢なかつた位です。それで今日早く又醫者に連れていつて診てもらつたら、なに大したことはない、少し氣管を惡くしてゐるから注意したがいゝといつてゐました。今日は七度二分です。……今日は昨日の晩ほど泣きませんなあ、おばさん。」

　家内はさういつて女中の方に話しかけた。

　それで女中は又茶の室の明るい方に顏を出して來て、

「えゝ、今日はずつとおとなです。昨日の晩は泣きどほしでしたもの。」

　私はそれでも甚く不興な顏をして、

「なに今日だつて、ちつとも良かないぢやないか。あの顏色を見なさい、眞靑ぢやないか。そしてたつた十日ばかりの間にひどく顏が瘦せてゐる。その七度二分くらゐの熱が、私自身にも覺えがある、咽喉や氣管に絡んだ熱といふものは、餘程注意しないと、なか〳〵とれるものぢやないんだ。」

「赤ちやんも引いてゐるんです。」

「二人ともやつてゐるのか。」

「今月の初め頃又陽氣が一時馬鹿に寒かつたんですもの。……その時あゝ少し風邪を引いたなと思つてゐると、八日になつて眼がひどく赤くなつて、少し變だから手をあてゝみると大分熱があらしいから、すぐ細田さんにいつて診てもらつたんです。きつと發疹だらうと思つて、さうぢやないでせうかといつて訊くと、細田さんもまだ出來ものは出てゐないが、きつとさうかも知れんから氣を付けて決して外に出さないやうにして置くがいゝ。發診のやうだつたら、往つて診てやる

といつてくれたんですけれど、やつぱり風邪だつた。赤ちやんも、きつと百合ちやんのが染つたんでせう。少し咳をしてゐましたけれどこの方はもう何でもないといつて、藥もくれないんです。」

「うむ、寒いことは馬鹿に寒かつた。もう五月になるといふのに、今年はどうしてかう寒いんだらうと、溢しながら私達も田舍でお婆さんの炬燵に脚を入れてゐた。それで少しも、熱くつて氣持ちが惡いなどゝいふことはなかつた。これぢや東京もきつと寒いにちがひない。子供に風邪を引かさなけりやいゝがと思つてゐたら、果してそのとほりだつた。……醫者は何といふか知らんが、どうも顏色がまるで血の氣を失つてしまつてゐる。明日早速連れていつて診てもらはう。」

　私は、自分の家に戻ればもどるで、そこもまた何だか牢獄のやうな氣がして、これでは何處へいつても生きてゐる間は安らかに精神の休息する場所はないやうに思はれた。

　近處の醫者はもう大分良くなつたといつて、熱も七度二分くらゐなものであつたが、朝早くから寢るまで一日まめに動いて少しの間も靜つとしてゐない子供なので、その程度の輕微な熱が何時まで立つても除れなかつた。傷々しいやうな小さい咽喉でしてゐる咳がだん〳〵氣管支の奥のもつと深いところへ入つて行くやうで、それを見てゐると自分の咽喉や胸が痛くなるやうな氣がした。私は毎日何度といふことなく、子供が咳をするたびに面を顰めて、

「私が居ないと定まつて此のとほりだ。きつと、寒いからといつて餘計に着せてやるといふやうな細かい注意をしなかつたにちがひない。いくら暦が五月になつたつて、寒けりや二月も五月もあつたものぢやない。少し長引いたつて、今に癒るはなほるだらうが、どうも私がゐないとなると留守の間に何かしら事が出來てゐる。これぢやとても安心して俺は死ぬことが出來ん。」

　私は又してもそこへ考へを以つてゆくのであつた。

　普通ならば放棄つておいてもゝう癒るのであつたが、私自身の氣が濟まぬところから、それから一週間ばかり樣子を見たうへで又牛込の方の小兒科に十日ばかり預けてみた。その結果食餌も今までよりは大分進むやうになつて健康はおいおい回復して來たが、近年冬中毎月風邪ばかり引いてゐる自分のことを考へると、とてもこの分では、それ等の小さい者の將來はおろか、現在さへも幸福にしてやることは出來ないやうな氣がするのであつた。それがやがて來る恐ろしい冬の支度に何處か、荒い浮世の風の當らない暖い海邊を求めて、そこに寒暑ばかりでなく、うるさい世間からも遁れてゐたいやうな氣持ちがするのであつた。

　しかしながら、いくら身體ばかり遠くへ持つていつても、生活の資源が東京に繫がれてゐる以上は、絕對的に世間から

の交渉を打切つてしまふことの出來ないのが、生きてゐる限り、どうすることもならない苦惱であつた。そんなことを思つてみるにつけて、厭はしい現實から遁れようとするには、せめて過去に對する懷しい思ひ出でを現在の上にまで引伸ばして來て、そこに、自分の聯想作用によつてイリユウシイブの世界を造り出して、その氣分の中に閉ぢ籠つてゞもゐるよりほか爲方がなかつた。

兎に角私は何といふことなしに今から二十年も三十年も前の東京が懷しかつた。その頃は德富蘆花氏の「自然と人生」によつて、自然を愛する心を思つたり、國木田獨歩の「武藏野」を讀んで武藏野の自然を懷しんだり、又は紅葉や一葉の小說によつて古い東京の街やそこに住む人間に興味を湧かしたりしたのは、二十餘年後の今日となつてはもう遠い夢の如く果敢なく消えてしまつた。その時分には、年齡とゝもに私自身の心がまだ若かつたから、凡ての人生の希望を將來に期待してゐたから、これから尙ほ先きになると、人間は年に從つて自分にもどんなに樂しい幸福が待つてゐるかも知れぬ、いや必ず幸福が待ち受けてゐてくれるに相違ないといふやうな希望に滿ちた心でゐたから、それ等の幸福が滿たされない前であつても生存といふことが樂しみであつたのであらう。併しながらそれから二十年三十年の歳月が過ぎてしまつた今となつてみて、人生に對する興味といふものは、若い頃期待してゐたほど樂しいものではなかつたといふことが分つてみると、その頃懷しんだ自然や人間が都會のやうなものまでが自分を裏切つたやうにも思はれるのであつた。

それは、一寸した東京の市街やそれを圍繞してゐる市に近接してゐる古い武藏野の森林や田野の變化を思つてみても、そんなことが考へられるのである。獨歩の詩眼に映じた武藏野は實に懷しい自然であつた。そして私自身もその散文詩に書いてあるとほりの心持ちで武藏野の自然を懷しむことが出來たのであつた。然るに今日となつては、その武藏野の處女地がだん〳〵都會の人間によつて開發されて交通が便利になつて來たゝめに、それ等の自然が珍らしくなくなつたゝめであらうか、武藏野が必ずしも以前のやうな懷しい自然ではなくなつたやうな氣がする。それは一つは武藏野が客觀的に變化したゝめと、今ひとつの理由は、自分の主觀的な氣持ちの變化も手傳つてゐるのであらうと思ふ。二十年も三十年も昔の、何か知ら希望に充ちた懷しい氣持ちで自然を眺めたり、都會生活を樂んだりすることが出來なくなつたのは、それが自分の年齡のせゐであるとすれば、どんなに悲しんでも爲方のないことである。

年齡の必然性は、凡てのものに若い時分のやうな空想めい

た希望を樂むことを許さなくなつたとゝもに一面から考へると、たゞ自然を自然としてそれ等の風物をありのまゝに樂しむことで滿足するやうになつたのは、五十にして天命を知るといふかも知れぬ。

今の私にもいろ〳〵希望はある。けれども、それは二三十年も前のそれとはひどく異つてゐることが知れる。私は、自然や凡ての人事に對して空想に充ちた感懷を寄せたことは、私の生活にとりて何よりも最も大きな失敗であつたことを悟つた。私は最早そんな超現實的な空想に惑はされてはゐられない。たゞ自然と人事とをかけ値なしの現實のまゝ樂むことが出來ればそれで滿足である。

私が此の文章の書き始めのところでいつたやうに、二十餘年前と今日とでは、今現に來てゐる駿河灣の風光に對する氣持ちだけでも、甚く變つてゐることを感ずる。私の心も尙ほ二十餘年前のやうに、たゞ徒らに焦燥する氣持だけでやゝ鎭靜して來たのは、或は健全なる意味で靜まつたのではなくして、それだけ、若い氣持ちが、その二十年三十年の歳月の勞苦に腐蝕されて、消磨されたゝめであるかも知れぬが、それならばそれでも私はそれを悲まうとは、決して思はぬ。此の間も、こちらから三保灣のすぐ對岸に見えてゐる久能山の東麓鐵舟寺と龍華寺とに詣つてみたら、寺の境内はそこら中に芙蓉の木の多いのが眼についた。私は何となく芙蓉が好きである。いつの年でも、懷しい初秋の風は先づ芙蓉の葉から渡りそめるやうな氣がする。この地に來たのは七月の末であつたが、その頃は座敷から見渡すと、丁度水平線につゞいて見えてゐる三保の松原や久能の山つゞき、その手前に水に雜つて見えてゐる江尻、清水の港内に碇泊してゐる外國通ひの巨船など白い水蒸氣に糢糊として霞んで見えてゐたが、昨日今日暦の上で立秋を過ぎると同時に實際海の上にも空の色にも冴やかに秋の立つのが眼に見えて來た。夕陽の沈む頃清見潟の波打つ際に立ちいでて海から吹いて來る涼しい風に吹かれながら東の方を見ると、そちらに遠くの海の方まで裾を曳いた愛宕山が晩靄の中に淡蒼く浮き立つて見える。その左の方には箱根の山塊が靜かに雲を被いでゐるのも見える。今年の夏はとかく雨氣が多かつたゝめに土用中富士はあんまりよく見えなかつたが、それでも此の間からは時々密雲の切れ目から折々その雄姿の片鱗を露はして來た。

右手に三保の入江は水の色が日に〳〵冴へて、その向うに久能の山つゞきが、もう此の頃では山の木立の布置から麓に拓開かれてゐる柑橘や茶畑のやうなものまで明るい日に輝いてゐるのが見えてゐる。

以前の樣に、今に懷しい新秋が來たら、そこには何か知ら樂しい幸福が自分を待ち受けてくれてゐるといふやうな空想

はもう痕跡もなく打破されてしまつたが、それでも季節々々の移り變りには、たゞそれだけでも懷しい氣分の悦びのあるのは爭はれない。やがて八月のをはりになつたら東京の西郊の家に歸つて狹い庭先に靑葉を茂らしてゐる芙蓉や葉鷄頭などに水を灌ぎながら、新竹の清風に搖れる音を聽かうか、それとも此のまゝ來る一と冬をつゞけて此處で過さうかなど、迷つてゐる。小さい子供達はさすがに海邊の空氣が健康に効目があると思はれて、こゝへ來てから大分手足など肥つて來たやうである。私達はそれ等の者に晝中惱まされた揚句、やつとこさ彼等が蚊帳の中に靜まつたあとで涼しい緣先に端居して、荒い濤の音を聽きながら冷たい水に浸しておいた西瓜を割らして、暗い夜の大空を仰ぐと遠く南北に渡した天の河は宵々ごとに冴えて來るやうであつた。

（大正十四年八月十三日作、中央公論掲載）

燐を嘸んで死んだ人

一

市原榮と松村霜子とは、その前、市原が一ケ月ばかり東京に來てゐた時に、霜子の勤めてゐた、或る事務所で二三度一寸口をきゝ合つたことがあるくらゐのことであつた。それから二た月ばかりして今度市原が出京した時には、たゞ手紙一つの前ぶれしたゞけで、殆ど出し拔けに、代々木の霜子の家を訪れて來た。そして、

「今度は他に宿を取らないで、一週間か十日ばかり、甚だご迷惑でせうが、貴宅へ御厄介になりたいと思ふんですが、泊めて戴くわけにはまゐらないでせうか。」

と、單刀直入に切り出した。

ちよつと考へると、それは、いかにも不躾で唐突な相談のやうであるが、二人の間には、もう、それが必ずしも突然でも失禮でもなかつたのである。四十五歲の今日まで放縱に身を持ちくずして來た市原は勿論のことであるが、今寡婦である霜子もそんな問題には極めて不檢束な女であつたのだ。

市原の女好きのする、立派な容貌風采は、初めて見た時から何となく霜子の心を惹いてゐたのであつた。そんなことは又、市原にはすぐ感づかれた。

「十四五の小女のほかには誰れも居りません。一度お遊びにゐらして下さい。」

霜子がそんなことをいつてゐたのを、市原は心に留めて聞いてゐた。

今年三十六になる彼女は、今までに二度夫を持ちかへた。先の夫は二つか三つ自分より年少であつたが、五六年同棲してゐる間に三度も子供を產んだけれど、みんな半歲か一年して死んでしまつた。その夫は土木の設計圖などを引く技手であつたが、霜子の間の關係が、そんな不幸つゞきから、妙に面白くない、倦んだものになつてしまつた。それで、どちらからいひ出すといふことなく、そんな、幸福に惠まれないやうな、忌はしい夫婦關係を解いてしまふ氣になつた。勿論綺麗に別々になつてしまふまでには、なか〳〵口でいふやうな簡單に決行出來ないまでにお互の感情が入組んでゐたが、そ

れでも終には何時となく別れてしまつた。

二度目の夫とは、それでも十年一緒になつてゐたが、その方は先とちがつて、彼女よりは十二三も年が上であつた。さうかといつて、まだ子供の出來ぬほどの年でもなかつたが、不思議に子供が出來なかつた。子供といふものを持つて母らしい優しい慈愛を小さい者に注ぐことの出來ないのが、彼女には何よりも、生存上不滿であつたが、いつもそんな不幸を感じながらも、物足りぬ歳月が過ぎてゐた。すると去年の十二月ももう暮に押迫つてからであつた。彼女の夫は丹毒が原因で、わづかの間の患ひで急に死んでしまつた。

夫は山から材木を賣買するやうなことを商賣にしてゐたが、死んだ後には財産といふほどのものも遺らなかつた。十年も同棲した夫に死なれて、身體一つだけ遺された時には、彼女はもういつの間にか三十五になつてゐる自分を見出した。しかし元氣のいゝ彼女はそれを悔みもしなかつた。又いくら悔んでも爲方のないことであつた。考へ樣によつては三十五といふ年は、まだそんなに氣を落すほどの年でもなかつた。子供がなかつたゞけに、彼女は、これから先まだ〳〵どんな樂しい幸福が、待つてゐてくれるかも知れぬといふやうな、ぼんやりとした期待を持つてゐた。

そんな譯で、あんまり幸福でもなかつた家庭生活から解放された彼女は、婦人として、母性愛に浸る以外に、意義ある生活を求めようとして、何かもつと社會的に意味のある職業に働いてみる氣になつた。それは、何かしら世間に名を賣りたいといふ、彼女の虛榮心が主なる動機であつたが、長い間家庭生活に不幸であつた彼女としては、さういふ考になるのも無理のないことでもあつたのだ。

手取り早くいへば、霜子はやつぱり男がなくつては詰らなかつたのである。それで、市原が、彼女の方では、まだそんなに用意もないところへ、いきなりそんな要求を提出したのに、打突かると、さすがに彼女は諾否の返答をする前に對手の顏を見守つて、少時考へずにはゐられなかつたのであるが、結局市原の請ふまゝに霜子は、彼を自分の家に泊めることにした。

相當の年配である市原に、妻子のある筈であるくらゐのことは、霜子にも考へられないことはなかつたが、その晩市原は霜子に對つて、告白的な調子で自分の家庭生活の不幸を訴へて、熱心に霜子の愛を求めたのであつた。霜子はその實、對手の男に妻子のあるとか無いとかいふやうなことは、格別意に介しないことであつたかも知れぬが、とにかく市原の熱情的な態度は霜子の心を十分に動かすだけの力を持つてゐた。

市原の不幸な家庭の事情といふのは、ある特種な理由があつた。それについて語る前に彼の過去に溯つて少し說明をしなければならぬ。

二

月日の經つのは早いもので、市原榮が爲方なく今の女房に落着いてから最初に生まれた女の子が、いつの間にか、もう今年で十五になつた。その次に生まれたのも女で十二になつた。三人めが男の子で、これはまだ、やつと五つであつた。榮がその妻と夫婦になつたのも、世間の不檢束の男女の多くの例に見るとほり、彼等は結婚して後長女をもうけたのではなく、長女がその母親の胎内に宿つて後正式の夫婦になつたのであつた。彼が、その妻と、そんな關係になつたそも〳〵の動機といふのも、たゞ一寸した浮ついたはずみからであつた。

それより少し前、ステーションのある田舍の小い町に市原が一時の腰掛けのやうに體一つを持つて來たのは、彼が親や兄弟から勘當同樣の取扱ひを受けるまでに、散々だらしのない放蕩の限りを盡した揚句であつた。市原といへば、その村でも聞えた舊家であつて、父祖代々醫者を業としてゐた。父親の市原節三といふは殊にその地方の德望家でもあり、教育事業などには進步的な意見を抱いてゐた特志家であつた。そして節三が、そんなことに熱心であつたりするのも、無論その邊での智識階級に屬する一人であつた理由からでもあつたが、それよりも主なる原因は、榮をはじめ多勢の愛兒達の教育に希望や樂みを持つてゐたからであつた。父親の節三が非常に風采の優れた人物であつたのを、そつくり繼承いで榮は小學校にいつてゐる時分から美少年の名を恣まにしてゐた。それは、彼が小學校を卒業して縣廳のある、地方の市に出て往く頃から彼自身にも十分意識してゐたことであつた。その市では、初から醫學專門學校に入るつもりで、その市へ出て來ると早速その學校に入る準備の爲に、中學程度の私立の豫備校に入學した。その頃その市にあつた醫學專門學校といへば、學生に遊蕩兒の多いので評判であつたが、官立のその學校から、豫備校として特別に認可されてゐる關係にあつた、その私立の豫備校の學生の或る者の間にも、父兄をして顰蹙せしむる文弱で放蕩な弊風が漲つてゐた。榮は恰も腺病質の少年が結核菌の巢窟の中へでも入つていつたやうに、忽ちにそこの惡い校風に感染してしまつた。そして通例ならば二三年も豫備校に居て速成に中學程度の普通教育を修めて入學試驗に通過し得られるところを、小學校の時分から相應に出來る頭を持つてゐながら、彼は四年も五年もかゝつてやつと三度めか四度めの試驗によつて醫學校に入ることが出來たのであつた。そんな譯で豫備校の學生としては、二三年も薹の伸びた榮は、ブルヂョア階級に屬する學生らしい氣取りや——その癖市原の家は、田舍でもあんまり物質的に豐かな方ではなかつたが——机の

まはりの調具や、小使錢のつかひ振りだけは、もう疾に醫學校の學生になつてゐた。

そして、市を距る僅か十里許の縣下の在から出て來た彼はその頃まだ日本全國に高等專門學校の極めて少數であつた時分のことゝて、遠く九州四國又は山陰道や近畿地方からの學生を多數に收容してゐた學校の中で出來た、何處の言葉ともつかい妙な學生訛りを使つて、半年か一年のうちに、もうすつかり地方の都會の風に染んでしまつた。

彼は自分の容貌風采に自信のあるところから容易に女に關係することが出來た。そして、遊蕩に耽つてゐる間に學校の方は、普通ならば四年で濟むところを、五六年かゝつても卒業出來なかつた。そのうち、二三年も後れて同じ學校に在學してゐた弟に追ひ越されなければならなかつた。彼の氣分はそんなことから倍々荒廢していつた。

そして學校を三年級までいつて止めてしまふと、その前から二年ばかり一緒に居つて、自分を旦那とも情夫とも附かず食はしてくれてゐた藝者が、後には愛想を盡かして臺灣の方に出稼ぎにいつてしまつた。彼もその後を追つて向うに渡つていつた。しかし、見かけ倒しの、風采ばかり立派で働く甲斐性のない彼は臺灣でも好いことはなかつた。それから朝鮮だの滿洲だのと方々の植民地を渡り歩いた揚句又内地に舞ひ戻つて來た。その頃丁度醫學校を卒業した弟が自分達の郷里に近いステーションのある町で開業してゐたので、彼はその弟の處に轉げ込んで來たのであつた。勿論醫者の方の心得はあるので、彼は弟の家で藥局の手傳をしたり、偶には代診にいつたりしてゐた。

今の妻は、その代診などに行つてゐる間に、あの患家の女と通じたのが、それであつた。その患家は、その附近で古くから物持ちの家ではあつたが、××部落の中にあつた。早くから散々放蕩の限りを盡して、いろんな種類の女と關係して來て、品行の不檢束な市原には、そんなことには潔癖や羞恥の感もなくなつてゐたのであるが、その女が懷姙したことが分つた時にはさすがの市原も一時は吃驚した。けれども濡れぬ前こそ露をも厭への譬で、彼が晴れてその女を妻にするといふことになると先では大分の財産を附けてくれるといふ事になつて、到頭市原は彼女を正式の妻にした。血統や家柄を誇りの一つにしてゐた彼の實家で、そんなことに同意する譯はなかつたが、その頃はもう嚴しい父親も亡くなつてゐたし、父親はもう生前から榮のことは口にすることさへ好まなかつたのであつた。

さういふ次第で弟の家にも遂に居られなくなつたが、相當な財産を自由にすることが出來ることになつたので、彼は妻を連れて又縣廳のある市の方に移り住んだ。そして金のある間は殆ど爲すこともなくて過してゐたが、それとて、もとから大したものでもなかつたので、四五年の間に最初にもらつたゞけのものは皆な無くしてしまつた。それから後も幾度となく、何とか斯とか理由を附けては妻の實家から引出した金は少い額ではなかつた。その爲に弟が相續してゐる實家も親から讓られた物を殆ど無くしてしまつたくらゐであつた。さうして、もう纒つた金の出やうがなくなつた時分から市原は、その妻の結婚したことを今更後悔する氣になつた。勿論最初から、さういふ生活に入つたことを彼自身とても決して好ましいことゝは思つてゐなかつたが、意思の弱い彼は、物質的の償ひによつて強ひて自からを許つてゐたのであつた。それとゝもに、流石に血を分けた子供等に對する恩愛の絆は斷つに堪へなかつた。市原は時々、自分の愚かなる痴情の報いだとは知りつつも、自分は何の因果で此の女に生ました子供を愛しなければならぬのだらうかと、男泣きに身を悔むことがあつた。本當をいへば、彼が、妻のお稻を少しでも愛する氣持ちのした時は、彼女がまだ姙娠しない以前の、ほんの少時の間だけであつた。その頃はたゞ盲目的な情慾の狂ふまゝに任かせて、身を制することをしなかつた。同棲してから後も彼は、常に彼女に對して謀反を抱いてゐた。前に行つてゐた臺灣や滿洲のことなどを思ひ出して、身一つであつちの方へ脫走しようかと思つたことも度々であつたが、強い意思を以つて艱苦に耐えることの出來ない彼は、いくら忍び難い妻の傍であつても、その日がその日どうかかうかして過される間は、一日でも安易を食つてゐる方が氣樂であつた。そこへ、はじめ二人の女の子供には、さまでの愛着を感じなかつたが、三人めに生まれた男の兒に對しては何故か強い愛着を感じた。市原もその子供が生まれてからは、お稻と同棲以來絶えず動搖してゐた彼の氣分にも、一時いくらか落着きが出來た。それは、爲方のない諦めからではあつたが、新しく生まれた子供に對して感ずる愛情は、妻に對して抱いてゐる平素の嫌厭と汚辱との感じを多少消すだけの力があつた。

市原は、自分では不檢束の結果そんな女と夫婦の關係を結んだが、親の人情としては、子供の將來は、自分のやうなやくざな生涯を送らせたくないと思つた。そして、さういふ異つた種族との間に生まれた子供をも、せめて敎育の光明と功德とに依つて古い因習的な汚辱の境涯から脫せしめたいと思ふのであつた。彼は自分の過去の失敗を悔いれば悔いるほど、さういふ不幸な運命に生れた子供に對する不憫さがいとど加はるのであつた。

彼がもし、もつと崇高な理想的な考と、強い奮鬪的な意思とを持つてゐる人間であつたならば、そんな古い因習的な區別の觀念を排擊する爲に身を以て社會的艱難に當つたのであつたらうが、彼には、元來そんな勇氣と超俗的な理想とがなかつた。弱い意思と不檢束な品行とから、そんな境涯に陷つ

てゐながら、それを恥辱とする氣持は何處までも彼の頭に纏綿としてゐた。

さうしてゐるところへ最近になつて彼は松村霜子と知つたのであつた。

三

それで先刻市原は、霜子に向つて、

「あなたに少し聽いて戴きたい御相談があるんです。」

といつてゐたが、その晩になつて、彼は、

「あなた、私と結婚をしてくれませんか。」と口を切つた。

霜子は、市原が今日出し拔けにやつて來て、女一人と知つてゐる處へ泊めてくれといふのさへ隨分思ひ切つたことをいふと思つてゐたのであるが、今又そんなことをいひ出したので、彼女は一寸顏を眞面目にして、對手の顏色を見返した。

その時市原の、男らしい黑い大きな二重瞼の眼は、年こそ四十五と聞いてゐるが、若い戀に燃えてゐるやうな熱情的な光を放つてゐた。美少年といはれてゐた頃から市原の眼は犢の眼のやうな愛情に富んでゐた。市原はその眼の魅力によつて、若い時から多くの女に關係して來たのであつた。四十五にもなつた今でも、その眼の色には戀愛を唆る不思議の力があつた

霜子は凝乎と對手を疑ふやうな眼の色を少しく和げながら、

「それで貴方奥さんや子供さん達をどうなさるおつもりなんです。」

「子供や妻のことを思ふから、あなたに結婚をして戴きたいのです。」

霜子は思はず笑つて、

「だつてそれはお可笑しいぢやありませんか。」

「いや、それは、たゞさういつただけでは、さうお思ひになるのも御尤ですが、それにはいろ〳〵事情があるのです」

といつて市原はひとゝほり自分の家内の事情を打明けたうへで、

「さういふ次第ですから、今の妻に、とても將來子供を敎育して行くことは望めないのです。あなたは、何度も子供を無くせられて、子供が好きで子供が欲しい、貰ひ子でもいゝからしたいと、いつかもいつておゐでになつた。私はあの話を伺つた時から、この話は、もう私の腹の中にはあつたのです。私は自分の意思の薄弱から、さういふ因果な子供を三人も拵らへましたが、實はそれ等の不幸なる前途を考へると、自分の過去の過失を悔いて、いつそひと思ひに死んでしまひたくなることがあるのです。けれども私が死んでしまつたら、その後は、一層不幸であることを考へると、死ぬに死なれません。それで、誰れか、子供の母親になり變つて敎育してくれる人があつたら、子供のことを賴みたいと思つてゐました。そこへ恰どあなたを知つたのです。兩親に變つて子供を可愛がつてくれる人があるなら、私はもう安心して死んでもいゝのです。」

市原はさういひながら、子供のやうな若さを持つた大きな眼に涙を浮べた。

霜子も、つひにそれに引入れられて、自分も眼をしばだたきながら、

「それは貴方が、お子達のことを心配なさるのは、それは御尤ですが、ですけれども、そのお母さんだつて、自分の子ですもの。別に子達に愛情がお有んなさらないとか、粗末にするとかいふやうなことはない筈でせうと思ひます。」

「いえ、それは、まんざら子供を可愛がらないこともないですが、そんな女で敎育も碌にありませんし、家庭が家庭ですから、これから段々子供が大きくなつて行くにつれて、もつと好い家庭敎育を施したいと思ふのです。それには、あなたのやうなお方にお願ひして敎育していたゞきたいのです。」

「それは、私も子供の世話をするのは好きですから貴方のお子さん達のお世話をしてあげてもようございますが、それならそれで、その爲に、今の奥さんがおありになるのに、私に結婚してくれと仰有るのは、どういふお考でゐらつしやるんです。」

「その妻を離婚することは別に困難な問題ぢやないんです。」

市原は事なげにいつた。

霜子はやゝ不安な顏をして、

「それは可けませんわ。その方が假ひどんな人であつても、貴方の奥さんとなつて、子供の三人もおあんなさろ方を離別して、私がその後へ直らうとするやうな、そんな罪なことは出來ません。たゞお子さん方の面倒を見て上げますといふだけなら、それは、貴方の御心中もよく解りますし、ほんとに妙な運命のお子さん方がお可哀さうですから。」

市原はそれでも尙ほ、今の妻を離別することの少しも困難でないことを飽くまでも繰返して、霜子と正式の結婚をしたい希望を述べた。

「私が今の妻を離別して、あなたと結婚をするといへば、私の弟などは、どんなに悅ぶか知れません。さうなれば死んだ父にも少しは詫びが叶ふわけです。私はそれで始めて弟などにも合はす顏があるのです。」

彼は、霜子と結婚をするならば、いかなる犧牲を拂つても辭しないと思つた。しかし、それは若い時から思慮の不檢束な市原が漫然とさう思ふだけのことであつて、十五年も一緒に居つて三人も子供のある妻を離別することは、市原自身では、それが出來ても妻の方で承諾する筈がなかつた。しかし今の場合の市原は、妻のお稻が承諾するしないに係はらず霜

子と夫婦關係を結ぶことより他に考へられなかつた。霜子の方でも、それから先のことを、今さう深く考へようとする譯でもなかつた。夫に死に別れて、寂しくつて、何となく詰らなくつて居る彼女は市原から戀を要求せられて、久しぶりに若々しい悦びが胸の動悸を喚るやうな氣がした。

その夜から二人は、もう十年も同棲して來た夫婦でもあつたかのやうに、すつかり親しい仲になつてしまつた。

市原はそれから早速、郷里の弟や、京都の帝大の醫科を卒業した次の弟などに、久し振りの書面を送つて、今度東京で、敎育のある、ある婦人と結婚することになつた。ついてはお稻とは離婚するつもりであるから、これまで隨分心配を掛けたが、どうか安心してもらひたいといつて、霜子の身柄のことなどを、いろ〳〵書いてやつた。弟達からは早速、それを非常に悦んでゐるといふ返事を寄越した。

二人はそれから廿日ばかりして市原の郷里に向つて立つていつた。

四

妻のお稻は市原が東京から見知らぬ女を伴つて歸つて來たので、訝かしさうな顏をしてゐたが、市原は、それは、かねて豫期してゐたことなので、何氣ない顏をして、

「この方に今度、東京から、御一緒に來ていたゞいた。」といつて、お稻に霜子を紹介した。

「子供の敎育のことをお願ひするつもりで。お前もこれからは手が省けることになる。」

そして、霜子の方を見て

「これが、家内です。どうぞ宜しく。」と、改まつて挨拶をした。

それから霜子は、お稻の手前を家庭保姆といふやうな名目で市原の家に同居することになつた。東京から二百里も西の方に距つたその市に始めて來た彼女には、一向町の様子なども分らなかつたが、荒土のまま踏み固められた土間のまはりから、箱になつた上り框の蝕ばんで腐れかゝつてゐる具合などが、此の市が、いかにまだ昔の面影のまゝに取り殘されてゐるかといふやうな感じを與へた。昔の武家屋敷でもあつたらしい築地塀で取り圍んだ庭なども地面に餘裕のあるだけ、田舍の都會であることを思はせた。廊下の壁なども眼につかぬ處はやつぱり荒壁にしてあつたりした。黑く垢染んだ疊が、ところ〴〵根太でも腐つてゐると思はれて、踏むと、足が底へ落ちさうになつた。

しかし、かねて市原の話の様子では、家の中など、牛の廐かなんぞのやうに足の踏み込む處もないほどに穢くしてゐるのであらうと想像してゐたのと違つて、家こそ古ぼけてゐるが、間數も五つか六つあつて、そんなに汚れてはゐなかつた。お稻は、たしか、三十七とか八とか市原から聞いてゐたから、彼女自身よりは一つ二つ年長であつた。そして類型的に、異つた種族の女のことを想像してゐたやうな點は何處といつて格別認められなかつた。たゞ普通の女であつた。たゞさうかと故意に思つてみると、色の白い、肌理も細かいわりに、何だか顏などが汚れつぽいやうに思はれた。素生の好い多い毛を流行おくれの束髮にしてゐた。

上の女の子はもう女學校に行つてゐた。頰のあたりから一體に顏の肉附きの好い具合など父親によく肖てゐた。その次の子はまだ小學校であつたが、どれも皆な人並の生れ附きで、二日や三日居つたのでは、市原が煩悶してゐるほど、そんなに悲觀しなければならぬほど家庭的に敎養の足らぬ女の子達とも思はれなかつた。むしろ、何れかといふと溫順しい子供等のやうであつた。

市原は、彼女等にも霜子のことをいつて聞かせて、

「このお方は、東京のお人だ。これからお前がたに、何でも爲になることを敎へて下さるんだから、よく云ふことを聞くんですよ。」

といふと、何にも知らぬ娘二人は、行儀よく霜子にお辭儀をしながら、彼女のことをどんなにえらいおばさんかと思つてゐる風であつた。そこで、霜子は來てから二晩か三晩はその娘達と同じ室に寢起きしてゐた。ある晩のことであつた。

大きい方の娘が夜半にふつと眼を覺ますと、薄暗い電燈の明りに霜子の……………てゐるのが眼についた。彼女はそれを見ると、何ともいへない、意外な可恐い、厭なものを眼にしたやうな驚きを感じた。そして、凝乎と息を殺して、そうつと蒲團の襟に顏を埋めてゐた。小さい胸の動悸が突き上げるやうに耳に響いて來た。

「お母さんは知らずにゐるのだらうか？」と思つてみたりした。さうして、深い譯も知らずに今まで、敎育のある、えらいおばさんだと信じてゐた松村といふ女の人が、今までと反對に、少しも尊敬することの出來ない、厭な女のやうに思へて來た。それとともに、お父さんは隨分非道いことをする人だと思つた。彼女は今までも父と母とが顏色を變へて劇しい言ひ爭ひをしてゐる處を度々見てゐた。彼女はそんな時に何ともいへない、心が暗くなつて來るのであつた。そして、父や母の傍に居るのが堪へられなくなると、汽車に乘つて、一時間ばかりの處に在る母親の實家にいつた。そこには、祖父は、自分がまだやつと物心の付いた時分に亡くなつたが、祖母はまだ健康で生きてゐた。その祖母のところへいつて、子供ながらに自分の思つてゐることを訴へた。祖母はその度に、

「困つたものぢや。」と太息を吐くやうにいつて、毎時暗い顏をするのが習慣であつた。彼女は、何處へいつても自分の世

界は暗欝な世界のやうに思はれた。

さうしてゐるところへ、突如に母親の寢床の方から境の襖を開ける音がしたのが夜具の中まで聞えて來たやうであつたと思つてゐると、たしかに母親の歩く足音が近づいて來て、

「この不埒者奴等、動くと承知せぬぞ。」と頭の上から母親が我鳴りかゝつた。

「こら、この態は何だ。」つゞいて荒々しい聲が響いた。

娘のお芳は、まるで息の根を留められたやうな心地で氣も遠くなつて夜着の中に凝乎と震へてゐた。母親の聲の勢ひでは…………………………………………。

その時霜子は…………………………、

「まあ一寸。…………」と手を擧げて制した。

「なにがまあ一寸だ……………」と、お稻は後をいはうとしたが、極度の昂奮に咽喉が引きつつたやうになつて聲が出なかつた。そして、

「この畜生野郎め。」

といひさま、剝がれた蒲團をなほ頭から引被がうとして寢床の上に俯向けに突伏してゐる榮の黒い頭から無理に夜着を引つたくつて、しどけない細帶姿のお稻は、力にまかせて二つ三つの榮の頭を足蹴にした。榮は蹴られながら、それに反抗しようともとせず、蒲團の中に顏を埋めたまゝ身動きもしなかつた。さすがに彼は自分の行爲の善くないことを知つてゐた。そして此の場合、彼女の腹の癒えるほどお稻をして思ふ存分に打つなり蹴るなりさして置くより他に彼女を宥める方法はないと思つてゐた。

霜子は極度の羞恥の感と不意な肉感的な衝激の爲に昂奮して、一時血の氣を失つたやうに眞青な顏をしてゐたが、今度は又その反對に眞赤に兩頰を火照しながら、異樣に眼の色を光らして、たゞ恟々してゐるばかりであつた。少時の間はお稻の凄じい劍幕に何といつて宥める言葉も出なかつた。彼女も榮と同じやうに此場合お稻に打つなり踏むなりせられても爲方がないと思つた。彼女は淫賣婦のやうに羞恥に無感覺ではなかつたが、今までに幾度も夫を持ち替へた三十過ぎた女にあるやうな圖々しさがあつた。それでもこの切迫した場合にあつて、二人の娘がこの物音に目を覺して起き出しはせぬかといふことが氣になつた。そしてお稻が、榮を散々踏んだり蹴つたりしたところで、極度に昂奮し切つた彼女の方が却つて息も切れさうに疲れてゐるのを見て、霜子は自身が事の原因であることを考へるよりもその場の凄慘な光景に愕えてゐた。彼女も、以前別れた夫や近頃死別れた夫との間に屢々そんな醜い衝突をしてゐたことがあつたことをも思ひ浮べた。

「くはしいことは後でいひます。もう、どうぞそれくらゐにして。……芳子さんやお縫ちやんが眼を覺ますと可けませんから。」

霜子は、やつとお稻の少しくひるむ隙を見て、それだけ言葉を挿んだ。

お稻はまるで倒れるやうにそこにべつたり尻を落して坐りながら、肩で苦しさうな息をしてゐたが、

「何を生意氣ぬかすな。貴樣默つてゐろ。」と、凄い白眼をつり上げて霜子に一喝を喰はした。そして又もや拳固を振上げて榮の頭の邊を二つ三つ毆つたが、もうその腕には力が盡きてゐた。と思ふと彼女は急に堪へられなくなつたやうに、ひつと絞るやうな聲を揚げてて手の背で眼をこすりながら泣き出した。

それを見ると霜子は氣の毒になつて來た。

「ね、わたし達の惡かつたことは、後で、分るやうにくわしいお話をしますから、どうぞあちらに行つて下さいまし。私も行きます。子供達が聞くと可けませんから。市原さん貴方もさあ。」

と、先刻から死んだものゝやうに横臥したまゝ突伏してゐた市原の背に手を掛けて搖り動かした。

市原はまるで、何事があつた自分は少しも知らなかつたやうな、白々しい、とぼけた顏をして寢床から半身起上つた。それでも逆上せたやうに、平素から血色の好い顏が一層赤くなつて、眼は充血してゐた。

「ね、あちらへ居らしつたらいゝでせう。」霜子は靜かに促した。

「どうも濟みません。」彼は照れ隱しのやうに、妙に氣取つた口調で霜子の方に向つて、はじめて口をきいた。そして、ついと立ち上つてお稻の寢處の方にいつてしまつた。

お稻は、榮があちらへ去つてからまだそこに突伏して悔しさうに泣いてゐた。霜子は、それに向つて言葉を掛けていゝかわるいか分らなかつた。何かいふと、又我鳴られはせぬかと思つた。それで手持不沙汰に少時そこにぢつと坐つてゐたが、十一月半ばの夜は深々と更けるにつれて四邊が靜まつて、冷い夜氣が肌を襲ふて來た。彼女は立つて着物をつけて又そこに坐つたが、やがて恐い物にでも觸るやうに、

「ね、奥さん、こゝにかうしておいでになると風邪を召すといけませんから、あなたもあちらへゐらしつて、もうお寢みなさい。ね、わたし達の惡いことは、又明日になつて、あなたの納得のゆくやうにお詫びしますから。」と、覗込むやうにして瞞し宥めた。

お稻はそれでも返事もしなかつた。霜子は夜寒に身を震はしながら、といつて寢ることも出來なかつた。無論寢床に入つたとて、そのまゝ眠られる筈もなかつた。

そして少時間を置いて、二度も三度もお稻の耳元でそれを繰返してゐたが、しまひには、

「あちらに行きたければ自分であちらにいつたらいゝでせう。」と、突伏したまゝ嚙み付きさうにいつた。

霜子はいよ〳〵、どうしていゝか當惑してしまつた。さうかといつて、このまゝ打棄つとくわけにはゆかなかつた。がそれでも、いくら自分の方が善くないにしても、なにもあんな場合に端たなく踏込んで來なくつても、よさゝうなものだ。と思つても見たりした。無論霜子がそんなことを思ふのは、彼女の自分勝手であつた。先刻のやうな場合に出會はしたら、誰れだつて堪へられないで同じやうな行爲に出るにちがひない。けれどもお稻が何時までもヒステリカルな剛情を張つてゐるのを持て剩すと自分の勝手は棚に上げて彼女を憎む氣にもなつた。そして、あんまり面當てをいふなら、お稻をこのまゝ打棄つておいて市原の方にいつて……かとも思つたが、そんな逆らつた事をすると、お稻の神經を一層尖がらして、終には刃物でも振り廻はすやうなことでもすると大變だと思つた。

やがて、何と思つたかお稻はふら〳〵と立ち上がつて、境の襖からもとの自分の寢室の方に歸つていつた。霜子はそれから又着物を脫いで寢床に入つたが、神經が冴えてそれつきり翌朝までまんじりとも眠らなかつた。それは市原もお稻もみんな同じであつた。

霜子は又寢床に横はりながら、氣にして二人の娘の方を注意してゐたが、彼女は、何もかも大人達のしてゐたことを知つてゐて、蒲團の中に潜んでゐるらしかつた。

五

翌朝皆な銘々に起き出でたが、誰れも互に顏を會はしたくなかつた。家の中は寒く白け切つてゐた。いつもは、毎朝子供が學校へ行くので、誰かしら早く起きて火を燬したり御飯を炊いたりするのであつたが、此頃では芳子とお縫とがもう大きくなつたので、大分母親の手助けになつてゐた。それが今朝は彼女達も子供心にひどく心配さうな顏をして何處か隅の方に引込んでゐたが、母親のお稻は、夜の明けるのを待ちかねてゐたやうに、むつくり起きると、台處の方のことをしようともせず一番下の男の子を連れて何處かへ出て行く身支度を始めてゐた。そして、娘達を傍に呼び寄せて、

「芳ちやんも縫ちやんも今日は學校を休んでお祖母さんの處に行かないか。お母さん武雄を伴れてお祖母さんの處へいつて來るよ。」

お稻がさういふと二人の子供は默つてうなづいてゐた。

それを此方から氣の付かぬ振りで見てゐた霜子は默つて知らぬ顏をしてゐることも出來なかつた。そして、市原の處に來て、低聲で

「わたしこれから何處か他へいきませう。」と、相談するやうにいつた。しかし、此處を出て他へ行くにしても、少しは金を持つてゐなければ、早速どうすることも出來なかつたが、彼女には少しの金もなかつた。東京に居るのであつたら、又何とか工夫の出來ないこともなかつたが、そんな遠方に來てはどうすることも出來なかつた。無論それは市原の責任であつた。市原にもそんな金はなかつた。お稻が今から出ていつたら、二人は今日は何にも食べずにゐなければならないのであつた。

けれども市原は、まだそんなことまで霜子に向つて底を割つて打ち明けることが何となく出來なかつた。お稻には小使錢までもらつてゐても霜子にはそんな風が見せたくなかつた。彼は霜子の懷中を勘定するやうな眼色をして、

「他へ行くといつても……」と、彼は思案をするやうに顏をちよいと脇に振つて下を向いてゐた。以前金の相當自由であつた頃泊つた貸席や宿屋なども方々にあつたが、此の數年來そんな處とも、すつかり緣が切れてしまつてゐた。市のステーションに近い處に妹の嫁してゐる小さい唐物屋があつた。爲方がなければ、そこへいつて事情を打明けて霜子を一時あづけようかとも思つたが、そこにも不義理が積つてゐるのであつた。彼は又ついと顏を上げて霜子の顏色を見直した。そして、

「あなた少しは金を持つてゐますか。」と、訊いてみようかと思つて、餘程咽喉まで出かゝつたが、やつぱり、それはいへなかつた。すると反對に霜子の方から、

「私、やつぱり此方に居ない方がいゝんですよ。……」といつて、やゝ極りの惡さうに、「少しお金をどうかして頂かれないでせうか。わたし東京を出る時、もつとどうかして來ればよかつたのですが、たんとの用意もして來なかつたものですから。」と、口ごもるやうにいひ足して、彼女のそんなに白くもない顏をさつと赤くした。

彼等は東京から此方へ來る途中も汽車賃や辨當代などを、互にどちらが仕拂ふともなく兩方持ちのやうにしてやつて來たのであつた。二人とも懷中には、たつたそれくらゐしかの金がなかつたのであるが、互にそんな風は見せなかつた。

それで市原は、霜子が、私は此方にゐない方がいいんですよといつたのを、霜子のいつた意味よりももつと深い意味に解した。

「他へお出でにならなくつてもいゝんです。此處に居たつて差支へないのです。あなたがもしこれきり東京へお歸りにでもなるなら、私は何處までも貴女と一緒に行きます。私には貴女が無ければ生きてゐられないのです。」彼は抑へるやうな力の籠つた言葉ではあつたが、詠嘆的な口調でいつた。その眼には熱情的な潤みをもつてゐた。

霜子も何だかそれに引着けられるやうな氣持ちになつて、

ぼんやりそこに坐つてゐたが、あちらではお稻が子供達を伴れてもう出て行くらしく、上り口で下駄を出してゐる音が聞えて來た。それに耳を奪られながら、俄に腰を浮かして、

「あら、もう行くんでせう。あの人を追ひ出すやうで、私こゝに靜としてはゐられません。……貴方どうなさる？」

霜子はすぐにも玄關に出ていつて、お稻を引留めようと思つたが、自分がそんなことをするのも、何だか腹にないことをするやうな氣がした。又留めたつて聽きはしないと思つた。

市原は平氣な顔をして

「いつてもいゝです。」と、いつたまゝ落着いてゐた。

「ですけれどこんなことで學校を休むのはつまらないことです。」霜子は自分達の行爲を反省することを忘れて、學校に行くことは大事なことであると習慣的に考へてゐた。

「偶に休むくらゐのことは爲方ありません。」

市原は又平氣でいつた。そこで心の中では、それよりもお稻が出ていつたら、後で小使錢をどうしようかと思案してゐた。

いつも不愉快なことがあると、母親の處に行くのはお稻の習慣であつた。けれども決して長くはいつてゐなかつた。今までも不檢束な彼が他の女と關係して、二人の間で鬪爭の始まつたことは度々あつたが、それでも今度のやうな、お稻を無視したことは、まだなかつた。お稻がもし此の事の爲に市原に愛相を盡かして自分から離縁をいひ出すやうなことにでもなれば、彼はそれこそ自分の望むつぼだと思つた。しかし彼女にはそんなことをする氣づかひはなかつた。今の市原にはそれが絶望的なことであつた。

霜子は一人で當惑してゐたがたうとう靜としてゐられなくなつて、立つて玄關にお稻を追掛けた。

「奥さん、何處かへおいでになるのは一寸お待ちになつて下さい。」

そういつたが、お稻は向うを向いたまゝ返事をしなかつた。

「あなたに今外に出ていたゞいては私困ります。」

するとお稻は霜子の方に背を向けたまゝ、

「あなたが困るのは私の知つたことぢやない。さあ芳子、縫ちやんも早うせんか。」と、二人の娘を急がして、武雄を手負ひにして、がたぴし外に出ていつた。

霜子はぼんやり突立つたまゝ少時それを見送つてゐたが、どうして可いか分らなかつた。それで爲方なく市原の傍に戻つて來て、

「何だかあの人を追ひ出しでもしたやうで、貴方はどうだか知りませんが、私は本當に濟まないと思ひます。あのまゝにして置いてもいいんですか。」彼女は不安な顔をしていつた。

「いゝんですよ。放抛つておいて。自分の母親の處にいつたのですから、心配ありません。」と、そんなことには頓着してゐないやうにいつたまゝ、彼はしばらく考へてゐたが、

「あなた、私と何處か遠くへいつてくれませんか。」と出し拔けにいつた。

「遠くつて何方です。」

「臺灣か大連の方へ行く氣はありませんか。」

「そんな遠くへ？」霜子はちよつと眞面目な眼をして榮の顔を見た。

「臺灣だつて、大連だつて、譯なく行けます。」

「そりやさうでせうけれど……行つたつて、どうするといふ當がなけりや無闇に行くことも出來ませんでせう。貴方にそのお考がありますか。それさへどうか出來る當てがあれば私行きます。」

「それは、往けば何とかなるでせう。」榮にたゞさういつたが、そんな處にいつたつて、どうなるといふ確乎した當ては無論有る筈もなかつた。それよりも、そんな遠くへどうして往くか、旅費からして出來るあてはなかつたのだ。

榮はたゞ何うでもいゝ、今の行き詰まつた自分の醜い現實を脫け出しさへすればいゝのであつた。今までお稻と十五年も十六年も同棲して來た自分の愚かしさが不思議で堪らなかつた。お稻は、何處に長處が一つある女でもなかつたが、市原さへ事を起さなければ、たゞ普通の女であつた。それのみならず、それだけの長い年月の間彼は何一つ自分で稼ぎ出したこともなかつたのである。いふまでもなく市原の考では、田舍では相當歷々の家柄である自分が××部落の娘と戸籍上正式の夫婦になつたといふことは、自分の方では非常な犧牲を拂つた次第である。それが爲に一生を棒に振つてしまつた譯であつた。もとより子供の愛に引かされたといふこともあつたが、今となつて考へてみれば、自分は、此の十五六年の間あんまり自分の生活享樂を犧牲にし過ぎてゐた。——さう思ふのは甚だしい彼の勝手であつたが、今の市原にはお稻を妻と思ふことはどうしても我慢の出來ないことであつた。いつかは彼女と綺麗に絶縁する日があるやうに、一緒になつた當時から思はれてゐたのであつたが、十五年もそんなことがなくつて來たのは畢竟するにそんな機會がなかつたまでゝある。他に行つて生活の出來る當てが何かあるならば市原は或はもう疾くにお稻を置き去りにして逐電してゐたかも知れなかつた。意久地のないくらゐで、大根の性質は至極善良な市原であつたが、背に腹は替へられぬ場合に切迫して來ると、その都度お稻を離別したさうなことをいひ出して、彼女を通して實家から何がしかの生活費を取り出してゐた。それは市原にとつては少しも言ひがゝりでも何でもなかつた。離れられるものならば何時でも綺麗に絶縁したかつた。ただ子供の

ことを考へるとその勇氣がなかつた。

霜子は、確實な生活の保證もないのに、漫然とそんな遠くへ往かなくつても、東京へ一緒にいつたらどうかといふのであつた。

「お稲さんが承知さへすれば、武やさんと芳子さんやくらゐ伴れてつて世話をするのは手易いことですもの。」

市原は一寸眼を動かして霜子の顔を見たが、お稲がそれを快よく承諾する筈がないと思へた。東京まで行くのは何でもないことであつたが、內地に居つたのでは、お稲と絶緣することはとても望めないことであつた。彼は何とかして、すつかり、不愉快な現實の世界から離脱してしまひたかつた。さうするには死ぬより他に爲方がなかつた。

「僕は死ぬことを何とも思つてゐません。死ぬ方が、かうして生きてゐるよりも、どんなに安樂だか知れないと思ひます。」市原は眞面目な顔をして平氣でいふのであつた。

「まさかそんなことが……」霜子はにやりと苦笑したまゝ本當にはしなかつた。

六

お稲はその朝茶も飲まずに、三人の子供を連れて、汽車で一時間ばかりの距離にある田舎の停車場近くの實家に母親を訪ねて來たが、來る途中も胸の中は煮え返るやうであつた。それに昨夜から極度の昂奮と睡眠不足とで顔は血の氣を失つてゐた。母親の傷ましい樣子を見ると子供心にもひどくそれに同情する氣になると思はれて、何か知ら絡はりつくやうな言葉を掛けるのであつたが、彼女はそれに一々返答を與へるのもうるさかつた。そしてあんまり執固く何か話しかけると、却つて突慳貪に叱りつけた。そし腹の中ではそれが可哀相で堪らなかつた。あんな男と關係したゝめに、こんなに三人の子供をまでこしらへたと思ふと、今更いくら悔んでも返らぬことではあるが罪もない子供が可哀さうでならなかつた。彼女は、深い事は分らないにしても、昔から種族の相違してゐるといふことの爲に理由のない卑下を受けてゐることが不可解でもあり、憤懣に堪へなかつた。それは、市原と婚姻してゐるだけに、同じ種族の者同志と結婚してゐる者より一層強く氣に懸つてゐることもあつた。それでも不斷何事もない時には、自然そんな事も忘れてゐるのであつたが、どうかした場合にはそれが忽ち自分達の幸福を脅かすのであつた。どうかして子供達の生涯から、そんな侮辱を綺麗に拭ひ去ることは出來ないものかと思ふことは度々であつたが、生まれぬ前から呪はれてゐる運命はどうすることも出來なかつた。

母親は、お稲からその話を聽いて、無論ひどく腹を立てたがさうかといつて何と爲樣もなかつた。そんな男と離緣してしまつて、お稲は此方へ引取るといへば、それこそ市原の思ふ

つぼであつたが、今更それをいひ出すのはもう遲かつた。それに彼等の一家は、××部落の中でも舊くから物持ちの家であつたゞけにいづれも温和な者ばかりであつた。市原が引張り込んだ女を暴力に訴へて追ひ出すといふやうなことは考へもせぬことであつた。そればかりでなくお稲自身も霜子を、自分達よりは遙かに優れた敎養のある夫人だと信じてゐるのであつた。

「あの人、そんな無法なことを仕出來して、又金でも出せといふつもりであらうかい。」母親は見え透いたやうにいつた。

「金の顔を少しでも見せたら、一層好い氣になつて道樂が募りよるわい。」お稲は母親に同意した。しかし彼等の腹の底には、もし幾許かの金でもその女にやつて、東京へでも何處へでも歸つてもらふ術はないものかといふ氣もしてゐた。勿論今は彼等にも少しの金の出來やうもなかつた。其家の相續人であるお稲の弟の物がまだ少しはあつたが、もう此上そんなことは、たとひ弟に向つても言ひ出せることではなかつた。

「なに、ちつとも弱い氣で居らいでもえゝことぢや。お前はどこまでも榮の女房ぢやないか。そんなことがあるなら出て來たりするよりも、家の中で大きな面ではびつこてゐてやろい。可哀さうな、性根のある芳やお縫がえらひ浮かぬ顔をして居る。子供に辛い目を見せるのが可哀さうぢや。」さういひながら、年老いた母親は水鼻をすゝるのであつた。若い時から聽かぬ氣の噂で評判をとつたほどあつて、死んだ親爺と二人でよく身上を持つたものであつたが、彼女ももう六十八であつた。

お稲も、母親のいふことを、なるほどさうだと思ひ直した。こんな時に、家を空けて外に出てたゐりすると、榮のことであるから、結局それをいゝことにして、家であの女と勝手なことをしてゐたにちがひない。それを思へば、どんなに胸が痞えるほど腹が立つても、凝乎と我慢の蟲を殺して辛抱してゐよう。さう思つて彼女は夕方又三人の子供を連れて自分の家に戻つて來た。

家に歸つて來てみると、榮は霜子と二人で、お稲の居ないのを好いことのやうに、收まつてゐた。彼女は、眼を瞑つてそれを見ぬ振りをしたゐた。

そんなことが五六日間もつゞいた。お稲は、もう二人がどんなことをしても構はうとしなかつた。

それからお稲が又三人の子供を連れて實家にいつて二三日泊つてゐたことがあつた。彼女もいくら堪へて居ようとしても終には家の中に一緒に居ることに居堪らなくなつたのであつた。自分はさう思つてゐても二人の娘等はもう何も彼も知つてゐて、そこに居ることを、ひどく嫌つた。

一方市原はもう此の間から、自分は死ぬより他に往くべき道はないと思つてゐた。霜子にそのことを話すと、彼女にも

後には市原が本氣でそれをいつてゐることが解つた。
「貴方がそんな覺悟でおいでになるなら、私も一緒に死ます。」彼女は眞面目にいふのであつた。それが何處まで本當であるかは、彼女自身でも一寸考へてみようとしなかつた。
「貴女も一緒に死んでくれますか。」市原はそれを本當に信じてゐるのであつた。
「えゝ死にますとも。」霜子は一旦いひ出した以上は、今のは噓であつたともいへなかつた。
「貴女は死なくつてもいゝです。貴女は死なゝいで、私になり代つて三人の子供を敎育して下さい。私は貴女に一緒に死んでもらふよりも、生きてゐて子供の將來を見て下さる方が、私には、どんなに安心して死なれるか知れなません。私は一人で死にます。」
さういつて、市原は、もう疾くに覺悟してゐたと思はれて、いつの間にか手帳に書いて置いた書置きのやうなものを取出して霜子に渡した。
霜子はそれを披いて見てゐたが、ばら〳〵と双頰に流れ落ちる涙を拭はうともせず、
「わたくし死にます。」と眞劍になつていつた。その時彼女の涙に僞りはなかつた。
「さうですか。死んでくれますか。」榮もそれを本當にした。
それから霜子は、その勢ひで市中に出ていつて猫入らずを買つて來た。彼等はそれを、恰度いたづらでもするかのやうな氣持ちで、少しは恐る〳〵嚥み下したのであつた。そして恐ろしい死の來るのを待つてゐたが、少時經つて、そこで苦悶を始めたが、死にはしなかつた。たゞ苦んで嘔吐しただけであつた。
その夜霜子の氣のつかぬ間に市原は多量にそれを嚥み下した。今度は前と比べられぬ劇烈な苦悶が襲つて來た。
二度目には霜子は敢て服まうとしなかつた。

（大正十四年十二月十六日作、中央公論掲載）

中禪寺湖物語

私のトランクの中に二本の白扇が赤い帶封のまゝ入つてゐる。そのトランクは數年來いつも主人の私と行動を共にしてゐる。今兩嶺にも私と一緒にきてゐる。京都や大阪の方に旅行するときにも私と一緒に汽車に乘り、旅宿についても私と一つ部屋に夜を明すのである。東京にゐても、近年長らく自分で一家を構へたことのない私は、そのトランクと一緒に遠い旅から戻つてきても、やつぱり旅宿についてゐると同じやうにそのトランクと一つ部屋に寢起してゐるのである。そしてその中に詰込んである僅ばかりの季節の衣類や書物や身のまはりの小道具などを取出すと、あとはそのまゝ押入れの中に仕舞ひ込んでおくので、その次旅する時に明けて見ると旅先にゐて受取つた手紙や繪葉書や、諸方の旅籠屋の書附とか茶代がへしの扇子や手拭のやうなものが出てくることがある。すると、私は珍らしさうにそれを手にとつてみて、不覺遠く過ぎ去つた日の懷しい旅の思出でに耽らせられるのである。
併し、今いふその二本の白扇は必ずしも懷しい思出での種ではない。この度旅に出るとき例によつて押入れの中からトランクを引出して、そのまゝにしてゐた中の物などを形付けてゐると、底の方から四五本の扇子が出て來たのである。去年の夏もやつぱり箱根にきてゐて、そこの旅館でくれた扇だの京都の旅館でくれた扇などは何かしら書いてあるので、すぐそれと分つたが二本の白扇のみはやゝ暫く、何處でもらつたものか考へ浮ばなかつたのであるが、いろ〳〵捻りまはしてゐる内に漸う〳〵思ひ出せた。それは何も描いてないはづ、旅館からもらつた品ではない。三四年前日光にいつて一と夏過したことがあつた。その時土地の僧侶が私を訪ねて見えて、ある宿屋の番頭が私に何か書いてくれといつて、一本扇子を托したのを、僧侶も自分でも一本持添へて二本私にあづけていつたのであつた。私は旅に出ると時々かういふ難儀に打突かることがあるので恥を搔き迷惑を感ずるのである。
そのとき
「私には何も書けません。お恥かしい惡筆ですから。」といつて、そのまゝ預るだけあづかつておいたのがその扇であつた。

かう話してくると、何かその二本の白扇に因縁でもあるやうに思はれるが、扇には何の關係もないことなのである。その時扇を持つて話しにきた僧侶はBさんといつて、私の宿つてゐる中禪寺湖の畔の旅館から丁度對岸に見えてゐる歌ヶ濱の觀音堂に勤めてゐる人であつた。そこの觀音堂の御本尊といふのは立木の觀音といつて、今を去ること千有余年の昔二荒山の開基上人が自から刀を執つて一本の立木の巨木を削り成してそれに一丈六尺の觀世音の尊像を刻まれたといふ古い縁起のある木像の尊體であつて、國寶に指定されたほどの佛像なのである。近古以來日光山寛永寺の管轄に屬して年々交代で下の東照宮山内の寺から勤番することになつてゐるのである。Bさんは私が湖畔に一と夏を通した年にそこに出張してゐたのであつた。

それまでに私は、一度ちよつと日光の町まで來たことがあるきりで、有名な東照宮の建築も參觀したこともなければ、華厳の瀧も男體山も中禪寺湖も其等の風光に接したことがなかつたので、殊の外夏を厭ふ私はかねて一と夏を日光の山の中に送りたいと望んでゐた。幸にしてその希望が實現されて私はその年七月の初からもう、海拔四千尺の中禪寺の湖畔にゐることになつたのであつた。

日光にゆくまへに、私はその地のことについて委しいT氏を訪ねて、滯在するについていろ〳〵心得になることを訊いたり、山内の僧侶や湖畔の旅館など二三の、T氏の懇意なところへあてゝ紹介狀を貰つたりした。

一度日光にいつたことのある人は知つてゐるであらう。上野を出發した汽車が青田茫々たる關東の平野を過ぎ、宇都宮で東北本線と分岐し、そこから左折して日光ゆきの支線を次第登りに駛つてゆくとき、今まで平地の上で強い太陽の光に直射されてゐたのとうつて變つて、いつの間にか沿道の林藪の間から翠嵐が湧いて冷凉の氣が肌に滲みてくる。車窓の眺めは次第に深い山地の趣を呈して、鋸の齒を連ねたやうな奇怪な形をした峰が脈々として遠く走つてゐるのが見えたりする。思ひもかけない山谷の傾斜面に廣い高原地があつて、目の覺めるやうな青い稻田が向の方まで開けてゐる。野も山も林も凡ての物象が悉く盛な夏の勢威を示して、たゞ洗つたやうな鮮緑の一色に彩られてゐるのである。爽かな風が其等の眞青な草木の上を渡つて車窓に吹いてきた。厚い竹藪にはまだ皮を被いた筍が長く伸びてゐりたした。其處こゝの林の中から朗かな老鶯の鳴く聲が聞えた。

注意深い旅人の眼は、そのあたりから車窓に落ちかゝつて來る男體山群の眺望を見失はぬであらう。遠眼には、たゞ青い氈毯をもつて包んだやうな圓かな峰が頭の上に落ち懸つてきさうな高い雲際に仰ぎ見られる。汽車の窓は其等の青い峰を左に眺め、右に眺めして勾配をなした高原を登つてゆく。

實際日光の町から、よく晴れた日に男體山の青い淸らかな姿を高い天空に仰いだくらゐ美しく懷かしい氣持ちはない。日光は金碧燦爛たる東照宮の建築があるので、美しいのではない。秀麗なる男體山とその中腹に湛へた中禪寺湖の幽邃明媚なる水と、山中到る處の溪谷に懸つてゐる大小無數の飛瀑と、世にも不思議な自然の美を鍾めてゐるのでその名夙に天下に冠絶するのである。併しながらその、あらゆる自然の美を集めて成してゐる美しい自然の懷裡にもまた人類が棲息してゐる以上は、そこにも人間の五慾煩惱から、いろ〳〵な醜悪な事實が湧いて生ずるのもまた止むを得ぬことなのである。私は今、自分の偶然に目擊したその事實の一つについて眼を瞑りたい。假ひその事實を語るにしても、私はその事實について可否を斷決することは避けるつもりである。

中禪寺湖の旅館に落着いてから二三日過ぎてゞあつた。旅館の番頭は私の部屋に顏を出した序でに

「先ほど歌ヶ濱のお坊さんが、ちよつとお寄りになつて、先生にちとあちらへお遊びにおいで下さるやうにといふやうなことづけでございました。」といつた。

「T氏からもらつた紹介狀には山内にゐる坊さんの一人にあてたものもあつたが、歌ヶ濱のお坊さんは私は知らなかつた。それで番頭のことづけを聞いて、私はそのお坊さんは氣さくな人だと思ひながら、

「さうか、難有う。また見えたら私の部屋へもどうぞお通り下さるやうにいつてくれたまへ。」といつて置いた。

私の部屋の外の三階の廊下に立つと、すぐ眼の下に渺漫と湛へた紺碧の水を隔てゝ縮緬のやうな漣波の立つてゐる向岸の綠の樹立の中に丹塗りの觀音堂が立つてゐるのが湖水の風光に一層艶美の度を加へるやうに見えた。あんな美しい湖畔の祠堂に遠く下界の塵寰を離れて夏を送るといふのは僧侶の身なればこそ得られる幸福であると思つて、私はそこに住む法體の人をどんなに羨ましくおもつたか知れない。

すると、その翌日番頭はまた私の部屋に顏を出して、先生お差支へありませんかBさんがお出になりましたといつて、案内した。番頭の後から入つてきたBさんは年の頃三十四五とも見える、鼻の隆い、眉の濃い、神經質な大きな眼の、直な口をきくお坊さんであつた。純白のメレンスの單衣に白縮緬の扱帶を締めて、その上に柔かな黑絽の道服を着てゐた。

「よくゐらつしやいました。Tさん先の頃日光によくゐらつしやいましたが、この一二年あまりお見えにならんやうです。どうぞ御ゆつくり御滯在なすつて、傑作をお書きになるやうに希望いたします」

Bさんは早口に物をいひながら馴々しい雜談をした。

そのうち正午になつたので、私は女中を呼んで晝飯の用意を命じた。私は女中を待たしながらBさんに向つて、

「失禮ですが、あなたは肉類はお食りになりませんですか。」と訊ねた。
「いやもうどうぞお構ひ下さらんで。すぐ御免蒙りますから。」Bさんは頻に辭退した。
「まあ、そんなに仰有らんで。別に差支へがなければどうぞ御ゆつくりお話しなすつて下さい。お近づきに御一緒に御飯でも食べませう。いかゞです。こんなことをお訊ねするのも變ですが、肉食はいけませんですか。」
「いや、もうお構ひなく。肉食は何でもするには致しますが、」
　そしてBさんは魚類よりも肉類殊に洋食が好きだといふので、私は女中にさういつて、二三種しか調はぬ中からビフテキを食膳に添へて持つてくるやうに命じた。Bさんは私と同じやうにビールをコップに一杯あけるともう獨りで飲んだやうに咽喉から眼のふちが眞赤になつた。そして切なさうな息をしながらナイフをがちやつかせて硬いビフテキを口の中で持てあましてゐた。その口には金の義齒が幾つも光つてゐるのが見えた。
　レーキサイド・ホテルから貰つたのだといつて、Eさんのところには胴の張つた舊式な小いボートが一つあつた。Bさんと私とはそのボートに乘つてよく湖水を乘り廻はした。
　日光寛永寺では上野の寛永寺と同じ寺格で、凡ての佛事は修してゐながら檀家といふのを持たねばまた一切の葬式をも取扱はなかつた。Bさんは觀音堂に出張してゐても、打ち見たところ朝夕の勤行をする風もなく、佛書を繙くでもなく、心靈上の問題について談ずるでもなく、觀音堂の寺務所にゐるよりは方々遊び歩いて大抵は内にゐない方が多かつた。わけてもBさんが始終のやうに來て話込んでゐるのは角屋といつて、私のゐる旅館のすぐ隣に土産物の日光細工だの繪葉書だの、その他八百屋物や罐詰類などの食料品を店に並べ、方方の西洋人の別莊などにも、日々の食料品を收めてゐる家であつた。Bさんは一日のうち少くとも半日はそこの家をわが家のやうにして坐り込んでゐた。
　T氏は、その旅館のほかに角屋の老主人にも宛てゝ紹介狀を書いてくれたので、知らぬ土地にいつて一と夏もゐやうと思ふ私は、着いた日の晩にすぐ角屋へいつてT氏から老主人への手紙を出した。其時老主人は留守であつたが、店頭には氣のきつさうな男顏の年取つた主婦さんがゐて、氣味の惡いほど鄭寧な言葉で挨拶を述べた。それが老主人の内儀らしく、火鉢の傍には脂肪肥りのした四十あまりの男が趺坐をかいてゐた。それが私の手からT氏の手紙を受取つて、
「Tさんから親父にあてゝ下すつたんだ。私はお目にかゝつたことはございませんが親父はTさんが此方においでになつた時分度々お邪魔に上つてよく存じてをります。歸りましたら、よく左樣申します。どうぞ私の方へも度々お遊びにゐらしつて下さい。」
　彼は何となく不自由な口のきゝやうをしながら飾り氣のない口調でさういつた。
「お父つあん何處へいつたんだらう。」といつて老婦の方を向いた。
「さあ、また歌ヶ濱だツぺい。」と老婦は尻上りにいつた。
「よく出るねえ。ちつとも家にゐやしない。つい先刻ゐたと思つてゐたのに、また出ていつた。」
　彼はつぶやくやうにいつた。
　私は七月から九月の末まで三月ばかりそこにゐる間に、角屋といふ家の内情の隨分六ヶ敷しい、そして不幸な一家族であることを聞くともなしに知つたのであつた。家族は老主人夫婦のほかに息子が長男と次男と二夫婦。長男の方は十七と十二の娘があつたが、次男に子供がなかつた。それにまだ當年丁度九十歳になるといふ老主人の老母が存命でゐて、爐を切つた狹い勝手の間から土間を一つ隔てた穴のやうな二疊ばかりの部屋に年中寢たまゝでゐて、どうかするとその穴の中から罨けたやうな聲で何か分らぬことを喚いてゐるのが聞えた。私は屢々その聲に吃驚させられた。そしてその聲が穴の中から洩れてくると、老主人は皆まで聞かぬうちに頭からきめつけて無理往生にその聲を半分で引込めさしてしまうのであつた。
　世にも稀れな九十歳の長壽を保つてゐる老母に對してはそんなに突慳貪な物のいひやうをする老主人は他の者に對しては自分の妻や伜達に對してすら滅多に荒い口をきかなかつた。そして急卒やの彼は妻や伜や伜の嫁達に對して、恰も他人と口をきいてゐる時のやうな敬語を用ゐて、
「へいッ、へいッ」と矢鱈に頭を下げて對手構はず受け返答ばかりするのが癖であつた。
　その角屋は二三年前までは日光の町で神橋に近よつた目拔きの場處で、五間々口の大店を張つて、西洋食料品を一式商つてゐた。銀座の龜屋や明治屋あたりからも信用してどんどん品物の先送りをしてくれるほどで、日光ではまづ五本の指に數へられるほどのよい商人であつた。それが、運の惡い時には惡いことが一時に湧いてくるもので、廂合ひの隣家の雜貨屋が火元で全燒に遭つた。けれどもその時分は角屋が丁度日の出の勢ひで派手に商賣をしてゐた時分のことだから堅く買込んでゐた信用は火災に罹つたくらゐでは容易に搖ぎさうにも見えなかつた。今まで隨分品物を貸し込んでゐた東京の問屋などでも、此處でそのまゝ手を引込めて、取引を斷つてしまつたのでは折角取れるものもとれぬことになつてしまうので、いろ〳〵氣勢を添へて、これまでのとほりに商品の融通もしてくれるし、家を新築するについて金の心配なども

してくれた。角屋では前の家は日光の草分けといはれる頃から住み古してゐた家なのでどうしても改築しなければ、もうこの上永くは住はれないといつてゐた矢先でもあつたし、今の老主人の世になつて、もと〳〵日光では名產の一つになつてゐる湯婆の製造をやつて乾物屋を營んでゐた先代にはつひに覺えぬ家業の繁昌を來してゐた景氣の好いところに任せて、金に糸目を見せぬ思ひ切つた立派な普請をして、それの出來上つた時分には狹い日光中の評判になつたくらゐであつた。

「角屋は燒肥つた。」

といふものもあつたが、それでも中には世間の噂のとほりに思はないものもあつて、角屋の內幕を知つたものは、

「あの家の腕にしては少し荷が勝ちすぎてゐる。」などと皮肉な口をきく人間もあつた。

併し事實はその皮肉な噂のとほりで、一つはその頃丁度水の出花のやうに盛りかけてゐた店の景氣に自分達で欺かれたところもあつたし、又一つには狹い土地の者が眼を聳てるやうな派手な商賣振りを見せてゐる割りにその實內輪の樂でないところから、今此處で弱いところを見せては、これまでの家中の者の苦心がすつかり無效になつてしまうので、いはゞ商賣の看板のつもりで隨分瘦我慢をして無理な新築をしたのであつた　それに丁度その頃から總領の息子が脊髓神經の病に罹つて、打ち見は脂肪肥りに肥つて健康さうに見えながら、中風症のやうな起居や手先の自由に叶はぬいひ效のない難病に惱まれてゐるのであつた。尤も角屋では其總領が病氣にならぬ以前から商賣の方は一切弟息子の方が采配を揮つてゐた。それも一つは總領の方がどこか大店の旦那らしい鷹揚な悠然としたところがあるのに反して弟の方は母親の氣性を享けついで世間からもあまり好くはいはれないくらゐで、何かにつけて頭がよく働いて商賣の道に明かつた。そんなわけで母親はいふに及ばず、父親までがまだるつこい兄の方は、そつち除けにして置いて家の事は萬事弟でなければ夜も日も明けないのであつた。

まだ三十にはすこし間のあるその弟が金の自由になるところから、若い人間にはめづらしくないいろんな道樂をはじめて、家の新築に使ふ木材なども、あんな材木の澤山ある處でゐながら日光の材木では氣に入らない、東京の材木屋で調へたのでなければならぬといふやうな贅澤ないひ放題をいつて、東京へは商用やら、その間に、そんな物の買ひ出しやら始終のやうに往復してゐたが、その間にお定りの藝者遊びを初めて、後にはその藝者を落籍した上に、東京の澁谷邊に同じ取引先の問屋から材木を運ばして、意氣な妾宅を建て、そこに女を住まはせたりした。

そんな大きな穴をあけておいて、いつまでも帳尻りが割れずにゐる道理がなかつた。延滯の上にも延滯してゐた東京の問屋への勘定がどうにも法がつかなくなつてくると同時に送品の手もぴつたりと止めてしまつた。燒け肥つたといはれた角屋の五間々口の店頭は普請してから二年も經たないうちに見るみる寂れていつた。さうなつてくるともう角屋では手を束ねて何事も債權者と破產整理者のするまゝに任したきりで默つてゐるより仕方がなかつた。日光の町では目拔きの場處である處へもつてきて、家が又馬鹿げた金のかゝつた家なのでその跡へ入つて商賣をしようといふには、生半の細い資本では店を維持してゆくことが困難なので、初は整理人の間でも家の始末に當惑したくらゐであつたが、さうかといつて、それだけの場處でそんな大きな間口の家を空家にして閉切つて置いては町が急に寂しく見えてそこらの商店の商賣にも關係するといふので何人かそこに入るにしても店だけはどうしても明けて置かねばならぬし、それに東京の債權者の手に引渡すことになると落目に附込んで法外もない安い値に踏み倒すので、角屋でも整理人にばかり任せては居られず、老主人が自分で、日光切つての資產家といはれてゐる杉村といふ家へいつて、頭を疊に擦り付けて拜むやうにして賴んで到頭此方の思惑どほりの價に買取つてもらつて、家だけは他土地の者の手に渡らないで濟んだが、莫大な角屋の負債は家を賣つた金だけではとても皆濟といふわけにはゆかなかつたのを、方々へ泣を入れてどうにか一時形をつけると、その以前から春から紅葉時分までにかけて出店のやうにやつてゐた中宮祠の支店の方へ、家內中で世間から隱れるやうにして逼促して來たのであつた。

Bさんは上州の生れで、十歲の時寬永寺の末寺の淨念寺の先住に貰はれてきて腕白盛りの時分から淨念寺へは昔からお出入りになつてゐる角屋へ自分の家同樣にして來てゐたのであつた。そして先住が少からぬ借財を殘して亡くなつてしまひ、Bさんがそのあとへ座るやうになつた時にはなか〳〵樂ではなかつたが、幼い時から親のやうにして育てられ、東京の學校までも遣つて修業さしてもらつた恩義があるので、Bさんはまだ若年に似ず夜の眼も安く寢ぬやうにして、紊亂してゐた寺の內證を始末したのであつた。その時心からBさんの相談相手になつてくれて、苦しいところをどうか斯うか切り拔けさしてくれたのは角屋であつた。そんな入組んだ因緣があるので、角屋が火災に罹つた時にはBさんも自分の力に出來るだけの助力をした。そして全燒けに燒け出されてその曉から家中の者が居り場にまごついた時にBさんは神橋をすぐ向に越した山內にある淨念院の隱居所を早速避難に貸したのであつた。飯炊きの寺男と二人きりのBさんは大きな二棟つゞきの庫裡に棲んで、寂しい不自由な憎侶の生活をしてゐたところであつたので、角屋の一家族がそこに移り住むやう

になると、平生用のない處なので、空いてゐる座敷は角屋の者の勝手に使ふに任せ、まるで同居のやうな有樣で、自然Bさんの衣類の綻びから汚れもの〻洗ひす〻ぎ、朝夕の一切の世話を角屋の者の手でするやうになつた。そのうち角屋が新築の家へ歸り住んでからも淨念院と角屋との出入は以前に變らなかつた。そして角屋が遂々破產して一家內中宮祠の方の出店につぼむやうになつてからも病身の總領夫婦だけは十ばかりの妹娘の方をつれて寒い間は淨念院の隱居處を借りて住んでゐるのであつた。

「私はつひ貴下のお出でになる二三日前にこちへ上つてきたばかりのところです。」

總領の伜は店頭の火鉢の傍に趺坐をかきながら、話しにいつたときにいつてゐた。彼は靜かな物の言ひ振りで肥滿したその體軀の病狀を語つて、

「これで生殖などもやつぱり不能ないんです。」といふやうなことも話したりしてゐた。

湖水の岸をめぐつて方々の樹立の間に點在してゐる外國大使館や領事の別莊だの、その他西洋人の住居へ食料品を持込むのは小僧もゐるし弟息子やその妻君が角籠の緒を肩に掛けて湖畔の散步道を步いてゆくのによく出會した。

弟の妻君といふのはおでこで、色の黑い、おまけに鼻が上を向いた見るからお道化た、隨分な不器量な女であつたが、其の顏のとほりに心持ちも極く奧底のない、氣のさくい、剽輕な、色氣のない人間であつた。毎日話しに來てゐるBさんと始終輕口をいひ合つたり、駄洒落をいつたり、どうかすると仕舞には互に手出しをしたりして戲弄けてゐた。

そんなであつたから私ともすぐ心易くなつた。

「お霜さんは面白い人ですねえ。」

と、老婦にいふと、いつも怖い顏をしてゐるそこの姑も顏色を崩しながら、

「彼女は人の好い者でございますよ。」といつてゐた。

そのお霜さんは鹿沼在の可なり大きな田地持の家から嫁いで來てゐるのであつた。後になつて總領の妻君の話したところでは、お霜さんは強ち不器量なせゐばかりでもあるまいが、緣の運の惡い女で角屋へ嫁いだのが三度目であるといふことであつた——私が今話してゐる物語の中には其等の嫁達から問はず語りに話して聞かされた話も隨分ある。

お霜さんの話によると、彼女の實家からも引くにひかれぬ義理から角屋へは少からぬ金を融通してゐるのであつた。いつも夫運に薄くつて人並はづれて器量のまづいお霜さんは、三度目に嫁入つた家が俄に破產したからといつて、もとより薄情なことは出來なかつた。

七月の暑い盛り旅館の一番立て込んでゐるある夜のことであつた。騷々しい泊客の物音のする三階の廊下づたひに、ひよつこりお霜さんが私の部屋に顏を出して、

「御勉強ですか。私の妹が來ましたから、ちよつとお邪魔につれてきました。」

といふ後からばた〳〵廊下に足音がして中形を着て、美しく化粧した二十あまりの束髮の女と十四五の近頃鏡をかけた色の白い愛くるしい小娘とが私の前に顯はれた。お霜さんは、

「さあ、これが東京の小說家よ。よく御覽なさい。」と、もう浮戲けたことをいひながら、「これが私の實家にゐる弟の家內です。こちらは私の實の妹です。弟の家內といつてもやつぱり私達と從姉妹になるのです。」さういつて、私に二人を紹介した。

「つひ今鹿沼から上つて來たんですけれど、家が狹いから、お客の時は、いつでも此の旅館へ案內するんです。下の座敷にきてから、あなたが此處においでになるといふ話しを此の人達にして聞かしたら、あらさう。どんなんだらう、見たいわねえといふから連れてきて見せて上げたの。小說家といふものはこんな人よ。」

「ほゝゝ、あんなことをいつて。」

それをきいて、二人はまだ處女らしく笑つてゐた。弟の妻君の實家は今市で銀行などを營んでゐる土地での素封家であつた。東京の跡見女學校を卒業して戾つてきてから、自分では東京に緣付きたかつたのをお霜さんの弟のところへ嫁にいつたのである。同期生の森律子などのゐる彼女は、一人子供のできた今でさへどうかすると華美な東京の生活を想つたりして、學校時代の懷しい思ひ出にふけるやうなこともあつた。

「え、こちらは東京ぢやないんです。宇都宮の女學校へいつてゐるんです。どうせ田舍へお嫁にゆくんだから東京でなくつてもいゝわねえ。」

お霜さんは妹の顏を見ていつた。

「さうよ。宇都宮で澤山だわ。生半東京なんかへ行かない方がいゝのよ。」弟の嫁さんは諦めたやうにいつてゐた。

「でも好いわねえ、あなた方は澤山お金があつて。信ちやんなんかもこれからどんな好いところへでもお嫁にゆけるし、あなたは子供ができるし、姉さんなんか、子供はないし、お金はないし、一生このとほりよ。もう貧乏にも馴れてしまつたから此の頃ぢや何ともなくなつてよ。私、家でゆけといへばどこへでも構はず用足しにゆくのよ。」

お霜さんは自分の薄運を戲談にまぎらして諦めたやうにいひながら、さも妹達を愛撫するやうに熟凝と二人の顏や頭髮の形を見くらべてゐた

「いつも束髮にしてゐるの？」

「えゝ、大抵かうしてゐます。」

妹達は行儀よく竝んで坐りながら、何をいはれていつも微笑してゐた。お霜さんの心では妹達に私を見せてやりたかつ

たのでもあるが、さうして私に自分の實家の妹達をも見てもらひたかつたのである。それが彼女にはせめてもの誇りであつた。實際彼女と妹達とは何からいつてもお姫さまと下女くらゐに違つてゐた。

「束髪がいゝわ。こんな髷ぢや頭が重くつて。自家ぢやお母さんが、商人の家ぢや束髪はいけないつて、結はせないの。」

角屋では他の者の目や耳が多いので、彼等は水入らずの親しい話しもおち／＼してゐられないとおもはれて、私の部屋に坐り込んだまゝ、鹿沼や今市の實家方の話などを、それからそれへとつゞけてゐた。

「あッ、私また長くお饒舌りしてゐた。」お霜さんは俄に氣がついたやうにいつて「お霜は客を案内していつてまだかへつて來ないかつて、お母さんがいつてゐるよ。」と浮戯けた口調で姑の眞似をしながら「すこしぐらゐは構やはしないわ、實家からあなた方が久し振りに來てくれたんですものねえ。……私隨分久しく鹿沼へゆかないわねえ。」自分で辯解するやうにさういつて、仕舞にはお霜さんは、さも／＼實家戀しさうな顔になつて。

「隨分しばらくだわ。」近眼鏡をかけた小娘がいふ。

「すこし暇になつたら、ゐらつしやいよ。」大きい義妹が慰め顔にいふ。

「えゝ、ゆきたいんだけれど、貧乏暇なしで、家でやつてくれないし、着てゆくものだつて、もう何にもありやしないんだもの。私もうどこへもゆきたかないわ。」

妹達はいつも、それに静かな微笑をもつて應へながら、

「お咲さん、私長く見なかつた間に見ちがへるやうに大きくなつて。今年いくつ？」大きい義妹は角屋で今見てきた總領の孫娘のことを思ひ出していつた。

「十七。この人に二つ上。」お霜さんは自分の妹に比べていふ。

「お母さんに似て好い縹緻ねえ。」

「なか／＼別嬪でせう。」

「もうお婿さんを貰はなけりややならないわねえ。」

「えゝ、ですけど、お咲ちやん家にゐたくないといつてゐるの。家があんなに貧乏してしまつたから商人は失敗するから厭だつて。お咲ちやん勤人のところへ嫁きたいんですつて。勤人はねえ、いけないわ。」

「ぢや信ちやんと反對ねえ。信ちやんは勤は厭だつて。實業家が好いんでせう。」弟の嫁は微笑しながら信ちんの方を見た。

信ちやんはまた近眼鏡の奥で笑つてゐた。

「お邪魔をしました。さあ、もう階下へいきませう。」

といつて、彼等は漸く起つて廊下に出た。そこから二階三階の旅館の高樓から中禪寺湖の夜の水の上に映る無數の火影が晝のやうに耀いてゐた。

「まあ。舟であの上に出て見たらさぞ好いでせうねえ。」若い妻君はさういつて立つて水の上を眺めた。

「この方始終ボートに乘つてゐるんですよ。私も咲ちやんも此の間乘せて戴いたの。」お霜さんがいふ。

「さうですか、好いでせうねえ舟に乘つたら。」

「ぢや、どうですか、ボートに乘りませんか。夜だから餘りとほくにゆかないやうにして。」私は、ふと興に乘つていつた。

「あつ、ぢや乘しておもらひなさいな、あなた方。」

「さうですか、ぢや乘して戴きませうか、ちよつと。ねえ信ちやん。でも御迷惑でせう。」

「何にも迷惑なことがあるもんですか。」

「さういつて、私達はぞろ／＼廊下を下に降りていつた。二階の座敷には鹿沼から連れてきた番頭と子守とが赤ン坊の守りをしてゐた。そこへ咲ちやんといふ娘もきてゐた。

「咲ちやんも一緒に乘せておもらひなさい。今皆でボートに乘せて戴くの。」

お霜さんはさういつて、自分は歸つていつた。それから私は三人の若い女達をボートに乘せて火影の映る湖面をやゝしばらく涼しい夜風に吹かれてゐた。

「ボートにまで乘せて戴いて、いつまでも話の種になりますわ。」

私の物語は思はぬ方に委しくなつてゐた。そのお霜さんをボートに乘せてあげた時、彼女は水の上でいろんな話をして聞かせた中に、「今咲ちやんのお母さんが上つて來ますから、御覽なさい。私と違つてそれはなか／＼別嬪ですよ、咲ちやんがよく似てゐます。」

といふやうなことをいつてゐた。その角屋の總領の妻君は妹の娘が七月はまだ學校があるので下の淨念院の隱居處に母子で休暇になるのを待つてゐるのであつた。中宮祠にも小學校はあつたが、何故か山上の學校よりも鉢石の方がいゝといつて下の學校に入つてゐるのであつた。

七月の末になつて、その妻君が娘をつれて上つてきた時分には私も角屋の人達と大分懇意になつてゐた。茶の間の爐傍によつて病身の息子やお霜さんなどゝ話してゐるところへ店の方に人聲がしたので、お霜さんは、

「あらッ、母ちやんがきた――、」

といつて、そのまゝ起ち上つて店の方に出ていつた。總領の妻君のことをお霜さんでも、Bさんでも、弟息子でも、また時とすると御亭主の總領も娘のお咲さんと同じやうに母ちやんと呼びなしてゐた。それはよくある呼び方でめづらしいことでもない。

間もなく爐傍へその母ちやんは入つてきた。なるほど血色の好い、しつかりとした體軀のなか／＼好い

女である。濃い毛をどちらかといへば若づくりの、やゝ髷の大きい銀杏がへしに結つて、今時には買はうとてない、地性の好い昔物の結城紬の紺飛白の單衣を着て、口元がすこしく大きくつて厭だが鼻筋のとほつた、眼に凜と張りのある黒瞳がちの派手な顔をして、十七と十二の二人の娘の母親にしてはまだ色氣がありすぎるくらゐであるがとにかく押しもおされもせぬ内儀ぶりである。「只今」、と、やゝ疳にかゝるやうなはつきりした聲でいひながら、夫の脇に坐つた。

「あゝ。」と夫は、いつものとほり趺坐をかいたまゝ返辭をした。

「暫らくお眼にかゝりませんでした。相變らずに御機嫌よろしうございますか。」

妻君は、わざと改つた言葉を用ゐて、親しさうに浮戯けたいひ方をして仕舞に、眞面目な口調で、

「どうです。身體の具合は。」と訊ねた。

夫は、妻君のその氣輕い調子に笑ひながら、

「身體はやつぱり同じことさ。」

と、笑ふ口を一寸つぐんだが、

「この方××さんといつて、隣にきてゐらつしやる方だ。これが私の家内です。」

すると妻君は、一層笑顔になつて、表情に富んだその黒い眼元で私の顔を見ながら、

「お名前はもう兼々承つて居りました。おはじめてお目にかかります。どうぞ以後お心安くねがひます。」

「お前、この方がおいでになつてゐることを知つてゐたの。」

「えゝ、この間お霜が下山りたときにも××さんといふ小説をお書きになる方が濱屋へきておいでになるといつてゐたし。それからBさんが來たときにもお噂をきいてゐました。」

「あゝ、さうか。」

私はそれから間もなくそこを出て戻つたのであつたが、この間そのBさんが、二三日中宮祠から東照宮の方へ下山つてゐて歸山つた時に、

「どうです、山下は暑いでせう。」といつて訊いたとき、

「大變暑い。夜なんか暑くつてとても寢られやしない。それにお母ちやんの頭髪の臭氣がむうつとして鼻について一層寢られない。」

子供のやうに心に奧底のないBさんは例の性急な言葉でいつた。

その時私の無用なる病的の直覺はBさんのいつた唯それだけの事から、妙な亂倫的な感覺を私の胸に萌さしめたのであつた。

そしてその前にお霜さんが、お咲ちやんのお母さんはなかなか好い女ですといつたことゝを思ひ合はして私のその入らぬ病的な感覺を稍々濃厚な想像にしたのであつた。そして旅

館の、自分の部屋に歸つてきてからも、妻君のその眼の色、頭髪の形、全體の態度などが、いつまでも胸苦しいやうな名狀し難い影像になつて消えなかつた。

七月の末から八月の中旬にかけては男體山のお山開きなどもあつて、中宮祠は一年中での書入時になつてゐるのである。角屋の店でも老たお内儀さんは一日店火鉢の傍に坐りッきりで、もう外見も色氣もなく、一錢の商ひも多かれといふやうに强欲さうな嗄れ聲で往來の參詣人を遠くから呼込んでゐた。

「何かお土産はいかゞでございます。繪葉書に名產の日光羊羹などはいかゞでございます。」

「私達には、何と思つても、どうしてもまだあれだけにはいへませんよ。」

と、總領の妻君などはさういつてゐたが、それでも嫁達も一日劾々しく店に立ち働いてゐた。

私は晴れた日でさへあれば、ボートに乘らぬ日とてはなかつた。水の上から角屋の洗ひ場にボートを漕ぎ寄せると、妻君は裾を端折つた劾々しい風で洗ひ物を裏の空地で竿に懸けたりしてゐた。

「毎日ボートに乘つて、氣樂ですねえ。」妻君は石垣の上にきて立つて話しかけた。

「どうです乘りませんか。」

「難有う。でも今忙かしいんですよ。」さういつて立つてゐたが、「今朝はもう早くから洗濯をうんとしました。ちよつと骨休みに乘せてもらひませうか。待つて下さい花ちやんを連れてきますから。」と四邊に氣を配るやうにして、妹娘を呼んできて、

「花ちやん、ちよつとボートに乘せてもらはう。花ちやんと一緒ならお姑さんが知つても何にもいやしないから、三十分くらゐですよ。あんまり遠くへ行かないで下さい。」といひつつ妻君はボートに入つてきて娘を抱へるやうにして腰をかけた。

私は岸に近い、淺いところをオールを弄るやうに輕く動しながら、暑い朝日の一面に漲つた穩かな湖面を對岸につゞく涼しい樹蔭のある汀の方へ漕いでいつた。小い洒れ石が淺い水の底に淸く透きとほつて見えてゐる。欝蒼とした綠の葉を洩れてくる日光が淡靑い斑になつて、靜かな水と一緒にゆらゆらと搖れてゐる。私はそこで暫らくオールの手を休めた。妻君はそのボートの中で角屋の破產の顚末などを愚痴まじりに話して聞かせたのであつた。

「とにかく殘念な事でしたねえ……こんなことを訊く必要もないことですが、財產はいくらぐらゐあつたんです。」

「さうですねえ、別に財產といつては餘計にもなかつたんですが、新らしく建てた家ぐるみまあ三萬圓ぐらゐはあつたらうと、世間の人もいつてゐました。財產よりとにかく商賣を

それは一時隨分派手にやつてゐましたから。私達も昔の夢と思つて今ぢやもう諦めてゐます。なに、後になつていくら惜しいと思つたつて無くなつたものは仕樣がありませんもの：：つまり米ちやん——といつて内に弟が一人ゐませう、あの弟が店をそんなに繁昌にもすれば、失敗したのも米ちやんがさうしたのですからこの子の親父はもうあのとほり何事にも可否を云はない人間ですから。私達はもう何も云はないで、親任せ、弟まかせにしてあるんです。」

妻君はそんなことを殆ど一人で話してゐたが、私にはその飽くまで効々しさうな氣禀の表はれてゐる容貌から想像しても、氣の好い病身の夫に連れ添うてゐるその婦人の苦しい立場をも察しないではなかつた。

私の物語はまたしても周圍をめぐつてゐた。それから九月の初まで半月ばかりの間、私は參拜の客の雜沓を避けて中宮祠からまた三里の山奥にある湯元の温泉にいつてゐた。そこには八月の末になると、拭ふたやうな深碧の空が高く澄んで、白根嶽の裾には、もう處どころに早い樹は紅葉しかけてゐるのが、ちらほら眼についた。私は、その夏くらゐ美しい自然の懐に抱かれたやうにして日を消したことはなかつた。そして九月の初にまた中宮祠の湖畔まで出てもどると、八月の末また二三日つゞけて降つた暴風雨のために、ついこの間まで萬山の翠綠に蔽はれてゐた男體山の山膚は痛ましいほど黄褐色に變つて手にとるやうに間近く聳へてゐた。旅館の客も水の退いたあとのやうに寂しく減つて、隣の角屋では、學校が初つたので、別嬪の妻君は末の娘をつれてもう先月の中に山下つてゐた。「お歸りにはあなたに、ぜひどうぞお立寄り下さるやうにと、宜敷しくいつてくれと申してゐました。」店頭の老いた内儀は若い妻君からの傳言をつたへた。

それでもまだ十日ばかりは焦げつくやうに夏の名殘の熱い日が湖水の上にも照つてゐたが、そのうち九月の豪雨が續いてやつてくると、そのあとは山も水も俄に寂しい秋の色を呈して、硝子戸を閉めきつた旅館の廊下に立つと、對岸の足尾峠の高い峰續きから吹き颪してくる寒い風が、灰色に搔き曇つた湖面に荒れて狂うてゐた。

東京の殘暑が恐ろしくつて、私は九月の末に漸くそこから降りてきた。深い霧の中を、私は荷物を脊負はした人夫と一緒に歩いてくると途中の劍ケ峰や深澤の溪にはそこらの木々がもうぽつ〳〵紅葉しかけてゐた。

その晩は神橋に近い町の旅館に一泊して、翌日そこ〳〵に東照宮を拜觀すると私は早速、三月も留守にした、東京に歸つたのであつた。

その夜旅館の夕飯を濟ますとすぐ、私は山内の淨念院を訪ふた。Bさんも法用でその前日下山してゐたのである。

「やあ先生お歸りですか。」Bさんは、いつもの率直な口の利きやうをして、廣い庫裡の爐傍に坐つて自分で茶を煎れた。

「いかゞでした。中禪寺は？　よく長く御辛抱：：明年はまたお早くゐらつしやいまし。」

「いや、いろ〳〵お深切にあづかりました。お蔭で今年の夏は最も愉快に過しました。」

「先生はお壽司がお好きで、東京の壽司が食べられないのを大變に懐しがつてゐらつしやいました。どうです、日光にも東京に劣けないのがありますが、一つ御案内致しませう。」

客愛想のいゝ交際好きのBさんは、さういつて私を西町のある料理屋へ案内してくれたりした。

「中禪寺には何にも食べるものはありません。」

Bさんは通を利かして、サビのよく利いた鮪などを持つてこさせた。

やがてそこの家を出て大谷川の畔をもどつてくると、折から中秋の明月は丁度鳴蟲山の頂に冴え渡つて、川上に犇々と重りあつてゐる黒い山の姿を夢のやうに淡く照らしてゐた。三ケ月の月日は瞬く間に過ぎて世はすつかり秋になつてしまつた。月光を浴びた大谷の急灘は高い瀨音を立てながら、夜霧の底に微白く砕けてゐる。山も水も空も月も潤んだやうに冷い露を含んでゐるのである。私はBさんと竝んで歩きながら、またしては月を仰いで、今日下つてきた山の折重つた方を振顧つて見た。と、向から威勢のいゝ俥が二臺川霧の立罩めた中を驀然に駛せ過ぎていつた。

「おッ！」私は道を交はしながら聲を出した。

「日光藝者？」Bさんがいつた。

「ちよつと隱居處の角屋の母ちやんのところに寄つて見ませう。」

といつてBさんは私を淨念院の庭の隅にある離室の方に案内した。

「やあッ先生、お歸りですか。今晩御ゆつくりなさい、これから家で面白いことがあるんです。」妻君は陽氣な聲をかけた。お霜さんは今日ちよつと下山りてきたいといつて、角屋の娘さん達は、山上の窮屈な老人達のゐないところでほかに一人二人町の妻君達を集めてきて、何だか女ばかりで一杯飲んで騷がうとするところらしかつた。私はその時ふと湯元にいつてゐる間にきいた角屋の嫁達の噂を思ひ出した。

山の嫁さんは、いつも若づくりで藝者かなんぞのやうな風をして、どこへ二人でゆく時にも弟の嫁はまるで女中がお供をしてゐるのとちがはない。」

總領の妻君は、茨城の方のある町の宿屋か料理屋から來てゐるのであつた。三味線も日光の藝者くらゐは彈けた。

私は疲れてゐるので、早く旅館に歸つて寢た。

その翌年もゆきたいと思ひながら遂にゆかなかつた。一年置いて次の年の七月の末、Bさんが遠慮は入らぬ不自由さへ

お厭ひなければ自宅へきてくれといふので、私は淨念院へ厄介になることにした。滿二年の月日は外見には私の身の上にもBさんの身の上にもあんまり變りはなかつた。そして例の庫裡の爐傍に進んで挨拶を交はしてゐるところへ、一昨年見て忘れなかつた角屋の妻君が奥からふいと出て來た。

「おや、お久しぶり。あなたもやつぱり此方に。」私は心の底に一昨年からの妙な忌はしい直覺を感じながら云つた。

「先生もお變りありませんで御結構です。」

さういつて挨拶するのを見ると、妻君は二年見ぬ間に一層肉付きがよくなつて、生活力の漲るやうな艶のいゝ血色をしてゐる。派手な鳴海絞りの浴衣に黒繻子と何かの腹合せ帶をしてゐる腰のまはりが飽くまで肉的に肥大してゐる。

「先生お夕飯はまだで？」Bさんがいふ。

「えゝ、まだで。」

「ぢや、これから御一緒にやりませう。」

私はBさんに持つてきた少許の使物だの、此方で食べるつもりで用意してきた佃煮のやうなものなどを荷物から取出してきた。

やがて角屋の妻君は私達の膳部を調へて運んできた。私の好な野菜の味噌汁などが丁度晩餐に用意してあつた。妻君は鍋から椀に盛つてそれを私達の膳に載せた。Bさんがその椀を取あげながら口に持つてゆくと、ぽた／＼と例の白メレンスの單衣の膝に汁を溢した。すると妻君は急いでBさんの膝に自分の口をもつてゐつて汁の溢れたところを強く吸ひ取つたのである。

私は妻君のする樣を眺めながら、例の妙な直覺が雲のやうに群々と胸に湧いてくるのを覺えた。けれどもそれは畢意私の胸の奥のおくの幻影の如きものに過ぎないのであつた。

それから二三日すると毎年夏淨念院の庫裡を借りて來る東京の富豪が家族をつれてやつてきたので私達は隱居處の方へと移つた。晝間はBさんも東京の學校にいつてゐる雛僧のC君も參佛堂へいつて留守なので、あとは私と妻君の飯焚きの婆さんと三人きりであつた。妻君は何かしら始終針仕事などをしてゐた。

「角屋では皆樣お變りありませんか。」私は此方の間から聲をかけた。

妻君はそれには生返辭をしながら、

「私もいよ／＼角屋とは離縁をしました。」

と思ひ切つたやうにいふ。私はまた例の直覺を胸に浮べながら、

「へえッ！」呆れたやうにいつたが、「どういふ理由か知りませんが、しかしそれぢやお咲ちやんがつらがるでせう。」

「……子供はあつても駄目ですよ。皆男親に付きますから。」

といつゐたが、「でも花ちやんのことだけは私いつも氣にかゝ

つて仕樣がありません。」

初は元氣さうにいつてゐたが、仕舞は鼻をつまらせて涙聲になつた。

私は妻君と顔を見て話してゐないので、話に心安さを覺えながら、それからいろ／＼なことをいふ妻君の言葉に應答してゐた。忘れてゐたが中宮祠は一昨年私が山を下つて十日ばかりして全燒になつたのであつた。角屋もその時には類燒して全燒に燒け出された。

「この前の火事ですつかり有つた物を失くしてゐたのに、それを漸つとどうかゝうかなるやうに濟ぎつけたとおもつてゐると、またあの火事で、も此度こそすつかり着のみきのまゝになつてしまつた。」

妻君はまたそれからそれへと、中宮祠の火事の晩のこと、角屋の内證のことなどを問はず語りにしてきかせた。

「その度毎に此處のBさんにも、いくら助力をしてもらつてゐるか分りません。此處の旦那はそりや日光に數あるお坊さんの中でも働き者なんですから。」さういつて、妻君は一昨年の夏のときと同じやうにBさんのことを讃めてゐた。

ある晩のこと、よく風呂を借りにゆく近處の家にいつものとほり風呂を借りにゆくと、そこの老いた内儀と息子の妻君とがゐて、茶を入れてくれたりしながら、老いた内儀は、

「どうです。これはやつぱり居りますか。」

といつて、小指を出して見せた。私は、はつと思つたが、「これつて、誰れのことです？」私は怪訝さうにとぼけた顔をした。

すると二人の内儀は互に顔を見合せて、微笑しながら、

「だから男といふものは、細いことは氣がつかぬものだねえ。」といつてゐる。

それで私も、そのことなら知つてゐるといふ氣で、

「あゝ、居ります。をります、角屋のおかみさんでせう。」

といつて私も微笑すると、

「あれが、あそこの旦那の小指ですよと」、老いた内儀は低聲になりながら「へえ、やつぱり居りますか。もうあの女が旦那のところへ這入り込んでですから、彼奴の顔を見るも胸糞が惡いから、私のところでは近頃ぢや誰れも旦那のところへ出入りしないんです。もうそれまでは私どもの悴と同歳で、こッから下位の時分から大仲好しで、先住が死なれてBさんが身上を持つやうになつてからも内の者もゆくし、旦那もくるし一軒の家のやうに親しくして、そら漬物がないからくれの、いや着物を買ふから見てくれの、自分でもまた何でも珍しい物があると、あのとほりちつとも物借みをしない方で、すぐ持つてきてくれるし、いかな日とても淨念院の旦那が私の内へ一日に二度か三度顔を見せない日とては、烏の鳴かぬ日はあつても、旦那の來ぬ日はないくらゐだつたのですが、角屋の

おッ嗅が這入り込んで から旦那の 方で何か云はれると思つて來ないし、内の者も私も忰もゆかないやうにしてゐるんです。」

日光の町では御用邸から東照宮をはじめ、あらゆる工事の仕事師の總親方をしてゐる、そこの老いた内儀は野州辯の荒つぽい口調で、さういつた。

「あゝさですか。どうも私は變だと思つてゐました。」私はなるたけ控へ目な口をきいてゐた。

「先生御一緒にいらしつて、何か變だとお氣のついたことでもありますか。」

之は東京者で、日光にきて藝者をしてゐて、そこの息子の妻君になつた、若い内儀は笑ひながらさういつた。

「はゝ、別に氣のついたといふこともありませんが、とにかく大變仲がよさゝうですな。」

「はゝ、先生巧いことをいつて：：大變仲が好いつて。」若い内儀は、ちよつとあちらへ立つていつて、また長火鉢のところへ戻つてきた老いた内儀に向つてさういつた。老いた内儀は語をつゞけながら、

「初のうちは私達でも旦那にいつたのです。それと手證のないことを露骨にいふのも好くないから、奥様をお持ちなさいといつて勸めたのです。こちらの山内のお坊さん達でも近頃は皆奥様をお持ちになります。僧侶だつて奥様をお持ちにならんと却つて不可ませんよ。第一男獨りでは御不自由ですし、お若いのに獨身でおいでになると、どうしても間違ひが生じ易くつていけません。宇都宮に一人好いのがあつたのです。出もいゝし二十五とかで、學校の教師をしてゐる婦人を私共でお世話しようといつて、旦那にそれとなくあの女と手を切つておしまひなるやうに忰などもいつたのですけれど、何といつてもそんな馬鹿なことがあるものかといつて聽かないんです。誰れが、あなた眞實と思ふものですか、日光中の者が皆公然とさういつてゐます。よくないことだ。これは今のうちに手を切らねば仕舞にはどんなことになるかさ知れぬといつて、私共でも唯深切からいつてゐるのに、餘り云ふものだから、後には旦那が、あのとほり短氣ですから腹を立つてしまつて、それつきり此方でも往來しないんです。えゝ、もう角屋のおッ嗅と旦那のことは古いことです。五年ぐらゐにもなりませう。あなたは御存じないでせうが角屋が火事にあつたことがあつて、その頃からです。」

家業柄に似ず上品な表情をした老いた内儀は熱心に話しつづけた。

「あゝ、もう五年も前からそんな噂があるのですか。ぢや一昨年私が中禪寺に長く來てゐた頃は、もうさうだつたのですね。」

「えゝゝゝ。それよりずつと古くからですよ。旦那がお氣の

毒なんですよ。あのとほり正直な子供のやうな方ですから、角屋のことになると、もう何事でも保證に立つたりして、角屋の者に好いやうにされてゐるんです。」

「あゝ、さうですか。」

私はいつてゐたが、隱居處へ移つてからも時々上山から米ちやんといつてゐた角屋の弟の方が下山りてきて私の部屋から一と間隔てたBさんの部屋で妻君と三人で夜遲くまでごとごと談じ合つてゐることなど想ひ合はした。

翌日妻君一人きりになると、

「先生昨夜はお休みになれなかつたでせう。私、米ちやんと仕舞に大論判をはぢめたのです。だつて旦那はあんな無頓着な人ですから、角屋で、旦那に無斷で、旦那の名を騙つて此處の寺の建物を抵當に書き入れて他から金を借入れたりしたことが後になつて分つたのです。角屋の奴そりやあ隨分ひどいことをしてゐるんです。」

「へえ、それは大變ですねえ。」と私はいつたが、Bさんにしても角屋にそんな筋道の違つたことを勝手にされても、それを何とも爭へない弱い處が何かあるのではあるまいかと内々思つてゐた。私はそのことを考へながら、

「どうもそんなこともあるらしいですねえ。あれぢや仕舞にはBさんの身が立たなくなりやしまいかと思ひますよ。」

「さうでせう。そんなことがあるでせう。」と、老いた内儀はちよいと變つた眼色をして私の顏を見た。

「角屋のしてゐることが恐ろしいですねえ。」

「あの女のことも初はどうやら局もたせのやうなものらしいのです。先生も御懇意ですから、旦那に何とか言つてお上げになつたらいゝでせう。」

「否！：：私は懇意にして戴いてゐても、昨今の交際ですし自分がとてもそんな柄でもありませんから、唯あゝして部屋を借りて置いて戴いてゐればそれで好いので、あの内儀さんにも食べる物の世話になつてゐればその以外私に關係のないことなら、どこまでも一切知らぬ顏でをります。」

私は尻込みするやうに、さういつたのであつた。事實それが私の處生觀であつたのだ、Bさんと角屋の妻君とが私のゐる隣室で何をしてゐやうとも私には更に關係はない。それでも夏一と月ばかりの間私は其人達と一つ屋根の下に起臥し、一つ鍋のものを食べて、やがて東京に歸つた。今年の正月にその後の不沙汰をわびてBさんに新年狀を出したけれど何故かいつもは向から早く年始に接したのに遂に何の沙汰もなかつた。何か私自身に氣のつかぬ、氣に入らぬことがあつて、立腹でもしたのかなと、その當座思つたまゝつひBさんのことも忘れてゐると、久しく會はなかつたT氏にこの程ある會合であふと、T氏はそのよく知れる日光の近狀について語つた。Bさんは角屋の妻君のことが公然の誹議に上つて、去年の暮から山内にゐられなくなつたのであつた。多分僧籍から除名せられたことであらうといつてゐた。

（大正六年九月六日作、早稻田文學掲載）

柴野と雪岡

一

七月七日の夜は、糠のやうな五月雨がしと〳〵と降つて居た。

雪岡は今日も朝から、色々な用事で書肆だの、知人だのを訪ねて一日暮した。夜は書き物をしようかと、心に元氣をつけて見たが、何だか物足りなくつて寂しくつて興がない、何處か話しに行く處は無いか。と、方々先輩知人の事を考へて見たが、さて別段珍らしい興の湧きさうな處も無い。その中では矢張り柴野さんの處が面白さうだ。彼家へは五月の廿六日行つたきり行かぬ。加之昨之到來の手紙に就いて一寸誤解を解いて置かねばならぬ。あすこへ行かうと、雪岡は遽かに決心した。乍併市街の電車で行くのは何といふ理由はなく、唯、折角興を催ふす爲に行く今晩を、途中で無趣味にして了ふやうな氣がして厭だ。無駄だけれど目白の停車場まで人力車で行つて、それから郊外電車で行かう。あの電車は廣くつて大きくつて、心地が好い。と、雪岡は「少し遲くなる。」と思つたが、新らしく齒を入れた足駄を穿いて、傘を翳して七時半から出掛けた。

目白の停車場では寂しかつた。プラツトホームの亞鉛板の屋根に雨滴の音が繁かつた。

長い百人乘りの車室には乘客が二三人しか乘つて居ない。向ふの入口の處では、雨除けに夏外套を被つた五十ばかりの人が、氣樂さうに低聲で謠曲を唸つてゐる。初めは誰れが遣つてゐるんだらうと思つてゐたが、靜と氣を付けて聞いてゐると、その人間の處から聲がして來る。雪岡と二間ばかり離れた入口の、直ぐ脇では、池袋から乘つた子供を十文字に脊負つた三十恰好の細君が紅葉全集何卷かを包みから取出して見てゐた。些と好い細君だな。と思つて彼れは幾許かの興味を以つてその方を見てゐたが、細君は巣鴨で降りてしまつた。

日暮里の停車場から柴野さんの處へはさまで遠くない。

今晩は在宅だらうと思つて玄關に立つと、女中のおしげさんがランプを持つて出て來て、

「上野で、會があつていらつしやいました。……今晩も十一時頃になるでせう。」と絕望的なことを言ふ。

「新ちやんは？」と聞くと、

「新ちやんも、今其處へ旦那さまの下駄を持つていらつしやいました。」

と、言つたきり、上れとも、少し待てとも言はなかつたが、雪岡は、

「ぢや、折角遠方を來たのだから、また何時かのやうに待つてゐませうか、新ちやんの歸るまでゞも。」

「えゝ、何卒お上んなさい。」

彼は上つて客間に通つた。其處へおしげさんが座蒲團を型の通り二つ並べたが、暑くつて蚊が居て、靜としてゐられない。

「おしげさん大變な蚊だね。此方の先生の書齋の方が好いよ。」と、言つて、襖を明けながら、

「あゝ、此處が好い、椅子があるから。」と、雪岡は椅子に腰を掛けた。

さうして書卓に眼を遣ると新らしい、水色表紙のアーサー・シモンズの Cities of Italy が置いてある。彼れは直ぐそれを手に取つて披いて見ながら、これは、去年初めて、何處か知人の處で見て、その時フト眼に留つた Bologna の處が、ひどく氣に入つてゐたのだ。その書き出しに This sad and learned city ——此の悲しき、學問のある市——それからして氣に入つてゐた。それから、シモンズは、伊太利の南の都會 Naples から此市へ來て俄かに North を感じた。と言つてゐる。さうして寂しき旅舍の寢床に横はりながら靜かに、窓外の疎雨の過ぐる音を聞いた。と書いてゐる。其處は雪岡の始めて此の書を見た時から忘れられぬ處であつた。過日も此處でシモンズの話が出た時は、雪岡わ、そのボロニアの處を話した。今、その書が、柴野さんの處にあるので、先生、買つたなと、思つて見た。

それを机の上に置いて、此度は、右手の書架の方に眼を遣ると、板で以つて、極めて無雜作に拵へた、その大きな棚には、亂雜に、嵩張つた原稿だの、雜誌だのと一所に、赤い立派な表紙の、鷹揚な體裁のギボンの「羅馬史全集」。クローマーの「埃及經營策」ウオルタア、ペータアの「文藝復興期論」。「快樂家メリアス」。サンターヤナの「ライフ、オブ、リーゾン」。アーサ、シモンスの「ウイリアム、ブレーク」。「七藝術研究」「演劇、音樂」などが眼に着く。

けれども何だか蒸々して靜としてゐられない。雪岡は、書齋と客間とを行つたり來たりしながら、

「おしげさん。蚊がゐて仕樣がないねえ……僕は、もう歸らうか知らん。」

とまたしても、言ふ。

「ぢや、今、蚊いぶしを買つて來ますから少しお待ちなさ

い。……一寸、留守を頼みますよ。」
　と、言つて、おしげさんは出て行つた。
　雪岡は、どうしやうか。歸らうか。でも隨分遠方を來たんだから。と思ひあぐんで、此度は緣側を彼方此方歩いてゐた。
　すると、暫時して、玄關に音がして歸つて來た。
「おしげさん、私、もう歸るよ。」
　さう言ひながら、返事が無いと思つてゐたら、新ちやんが歸つて來たのであつた。
「おや、新ちやん。お歸んなさい。また來て、待つてゐますよ。……叔父さんは會ですつてねえ。何處の會です?」
　其處へおしげさんは、向ふの方の裏木戸を明けて、庭園さきの暗に顏を出しながら、
「おや、坊ッちやん、最早お歸んなすつたの！　まあ早いこと。……私も今、蚊いぶしを買ひに行つて來ました。」
　雪岡は二人に戲弄ふやうに、
「何うです。また此の間のやうに、一同で、隱れん坊をしませうか。」
「いや！……雪岡さん、あんなことを新聞に書くもんですから、私達ひどく叱られたわねえ坊ちやん。」
「何と言つて?」
「何と言つてつて。……お客樣と、そんな隱れん坊なんかするものがあるものか。……馬鹿がつて。」と、おしげさんは、そんな怨みを言ひながらも馴々しくはしやいでゐる。
「隱れん坊には、もう懲々しましたよ。……あとで、非道く叔父に叱られて了つて」。と。溫順な新ちやんは、雪岡の腰を掛けた椅子の傍に、坐つて優しく笑ひながら言つた。
「さうですか。それはお氣の毒でした。もう書きません。」
「本當に懲々して了つた。その他、方々に行つて笑はれましたよ。」
「方々つて何處で?」
「此の間「中央公論社」に使者に行つたら、瀧田さんが、隱れん坊をしましたつてねえ。と言うて。……それから千葉さんの處へ行つたら、彼家でも笑つてゐました。……あの千葉さんが、義太夫の稽古に行かれる途中で風に吹かれると、先へ行つてから聲が出なくなる。といふ處を。……新聞に書かれたねえッて！」
「アハ……さうでしたか。私もその內、千葉さんの處へ遊びに行つて見ませう。」
「本當に懲々しましたよ。」と、新ちやんは笑つてゐる。
「會は上野の何處であるのです?　何の會?」
「舞だからつて、上野の鶯亭であるんです。……早稻田の大杉さんだの、白松さんだの、關さんだの。それから大學の紀平さん、得納さん、大島さんなどです。」

「あゝさうですか。鶯亭て、何處?」
「すぐ彼處の新坂の上の左手です。……鐵道の踏切の上の。」
「あゝ分りました〱。ぢや僕其處へ行つて見てやらう。歸途に白松君など、同伴があつて好いから。」
　暫時して雪岡は、その鶯亭に行つた。

二

　夜の五月雨は、上野の森に烟つて、新坂の暗を照した蒼白い瓦斯燈の火光が、黑い青葉に芝居の背景を見るやうに映つて居る。
　雪岡は、好い夜の景だな。と思つて人足絕えた、九時頃の上野の森の中に、靜つと立つて暫く見惚れてゐた。
　あるとも思はれる風に誘はれて、時々パラ〱と、急に降つて來たのでは無いかと思はれるやうに、櫻の梢から雨滴が落ちかゝつた。
　鶯亭の玄關に立つて、取次を賴むと、柴野さんは出て來た。
「雪岡君。御上んなさい。……一同君の知つた人達ですよ。……白松君も來てゐます。此室です。……君も少し早く來ると好かつたんですが……今丁度、飯を食つた處でした。」と、例の通り、優しく言つて、廊下を先に立つた。
「雪岡春江君です。」と、柴野さんは、室に入りながら紹介をした。雪岡は、其處に坐つて、挨拶をしながら、見ると洋服を着た人達が碁を打つてゐる。白松君も關君もゐる。
　柴野さんは襖を取外した二間續きの、向ふの誰れも居らぬ方に、そのまゝ立つて行つた、雪岡の方を見ながら
「雪岡君、此方へ來給へ。」と、言つてゐる。
　雪岡は、多勢ゐる處を通りかねて、一寸と惑うたが、庭に向いた踏み石の方に廻つて、其處にあつた庭下駄を突掛けて下から行つた。
　見ると、高い見晴の、暗い夜の景に、何處のか、大きな棟の輪郭をしたイルミネーションが、まづ眼に付く。その他數へ切れぬほどの燈火が、闇に浮いてゐる。直ぐ崖下では、大きな停車場らしくカーン〱と鐵を叩く音がして、汽罐車の吐く白い蒸氣が、庭園を取卷いた生垣の、直ぐ向ふにフハフハといふ大きな音と同時に、湧き上つた。
　座敷の火光に、雨に濡れた地上が光つてゐる。其處へ白だの、薄靑だのゝ支那椅子が彼方にも此方にも立つてゐる。雪岡は、
「好い景色ですねえ。」
と、言ひながら、踏石に上つて、柴野さんに向つて、座敷口に腰を掛けた。
「昨日は、お手紙を何うも。……昨日、上らうか思つたのですが、今晩遲くから、今お宅の方に上つて、此方と聞きました。

「えゝ、此處直ぐ分つたでせう」
「直ぐ分りました。」
　それから、柴野さんと雪岡とは、暫時手紙の一件に就いて、和解的な談柄を話してゐた。その事に就いては柴野さんの方が餘計辯じた。
　すると、柴野さんは更に話頭を轉じて、
「あゝ、シモンスの Cities of Italy を買ひましたよ。」と言ふ。
「えゝ、今お宅で、お買ひになつたな。と思つて一寸見ました。……ようございませう。」
「シモンスは旨いですねえ。……君が言つた、あのボロニアの處をも一寸見ましたがな。……僕は、あのカンパニアの處が大變好いと思つて、見てゐました。」と、柴野さんは、意味深さうに言ふ。
「あゝ、さうですか。……先生！ 私は、ノベリストでも立派になれば、それは好いとは思ひますが、併し私は、何だか小説家といふのは、厭です。同じ筆を執るならそれよりも彼様アーサー、シモンスの遣つてゐるやうな仕事の方が爲たいんです。さうしたら、自分でも滿足だらうと思ひます。」
と、雪岡は腹から出るやうに言つた。
「然む！……君には、シモンスに大分共通した點がある。……あるなあ、あるがね。併し、君、僕は、誰れに向つても好い處は賞めるから、その代りお世辭も言はないからねえ。……君、も少し讀書をしなければ可けないよ。そりや讀書は全部ぢやないがね、併し書も必要だからねえ。」と柴野さん、何時も、雪岡に向つて屢く言ふことを、優しく忠告的に言つた。
「えゝ、私も、それや承知してゐるには、してゐるんですが何か書かなければ食へないし。食ふには評論では駄目だし。相變らず、人生不如意な事ばかりです。」
と、雪岡もまた、柴野さんに、さう言はれゝば、何時も屢く、返事する通りのことを、同じやうに言つた。
「アーサー、シモンスのやうな見方も、あれで面白いんです。事物を實質の方から見ないで、斯う細い斷片的な印象を精しく見て、其處に truth があるといふ見方も成立つんですねえ。」柴野さんは本領の哲學的な言ひ方をした。
　雪岡は、「えゝ〳〵」と、默つて、その靜かな口調を心地好く聞きながら、かういふ五月雨の音をも立てず降る夜を、鶯亭の高い見晴で、宛然沖の漁火を見るやうに、人界の燈火の明滅するのを見ながら、柴野さんと、アーサー、シモンスの話しなどをするのを、一寸面白いと思つた。
　女中は、新しく來た雪岡に柴野さんとに、番茶を運んだ。暫く經つてたら、またガラスの酒盃に櫻湯を持つて來た。羊羹の皿と燕菓子の皿とが、眼の先に二ッ並んで居た。

　今晩は Bradley の何とかを讀んだのださうで、其の後夕飯があつて、一同少しづゝまだ、顔に酒のあとが殘つてゐる。分けても酒の飲けぬ柴野さんは、苦しさうな呼吸をしてる。何となく、もう皆な少し疲れたといふやうである。
「好い處でせう。此處は。」
「えゝ、好い處です。」
「今晩、雪岡君泊つて行き給へ。」
「えゝ、ありがたう！」と言つて、雪岡は考へてゐた。
　もう散會といふ處になつて、帳場で、會計に永く手間を取つた。皆なは立ちながら話してゐた。
「闇君、君は何時故郷に行きます？」
と、誰かゞ言つてゐる。
「多分、來月になるだらうと思つてゐますが。」
と、返事してゐるらしい。
　向ふの方から、柴野さんが、
「あゝ、得納君、君の James の Universe を僕序に借りて行くよ。」と言ふ。
　得納さんが、
「あゝ」と言ふ。
　やがて勘定が濟んで、一同ぞろ〳〵と、玄關に出た。深夜の森は、いよ〳〵雨に烟つて、時々バラ〳〵と音がして雨が落ちる。柴野さんが、
「降つて居るのかねえ？」と言ふ。
「降つてやしない。風で雨滴が落ちるのだらう。」と、誰れかが言つた。
　柴野さんと雪岡とは、一同に分れて新坂を下りて、何か話しながら根岸道を、柴野さんの宅に戻つた。

三

　二人は　一としきり話して、又寢ながら話した。
　寢床が變ると、すぐ神經が亢奮して容易に寢付かれない雪岡も、此家では、度々泊るのと、柴野さんの、優しい口調の併かも品の好い話を聞きながら、それを添乳のやうな心地で、彼れは横になると、間もなく微睡としかけた。
　柴野さんは、頻りに話してゐる。それに、雪岡は、
「えゝ、〳〵〳〵」と、唯、返事してゐる。
　柴野さんは、種々の話題の中に斯ういふことを言つた。
「僕は何うも奈良原紅風のやうな說には贊成出來ないんだねえ。それは趣味の論としては、面白いにや面白いけれど、例へば吉原にしても昔時のやうでなければ不可いとか、今のやうに、病氣の檢査などがあつて遊廓といふものゝ趣味がないとか、芝居などでも、出方が、昔時のやうに毛ずねを出したりなどしてゐるから面白いので、今のやうに、あんな裁付け袴などを穿いてゐては、芝居といふものを見る興味が大半減

じられる。とか言ふのは、それや、德川時代は、社會の種々な理由からさうであつたので何も毛ずねを出すとか娼妓といふものゝ檢査をせぬとかいふのが趣味があるのではない。それはその時代〳〵の狀態が止むを得ずさうであつたので檢査をしないよりか、矢張りする方が好い。そんなら今、檢査を止してみたら何うかといふに、矢張り德川時代とは違つてゐる。今日は、今日でまたそれ〴〵その時代に伴うた趣味が出來て來つゝあると思ふ……今だつて、既に出來てゐる點もあると思ふ。」

「えゝ。えゝ」

「その他何うもあの人の說は、偏狹だと思ふ。さうして同じ趣味のことを言つても何うも、大勢の人が苦しんでゐるのを自分だけ、別な高い處にゐて馬鹿にして冷笑してゐるやうな處があつてその大勢の人が苦しんでゐる內部の事情等は分らないで、そんなことには同情も何も無く、唯、それを笑つてゐるといふやうな處がある。……シエレイも書いてゐるし、その他多勢書いてゐるが、昔時希臘（ギリシヤ）にプロメシユウスといふものがあつてそれが、人間に始めて火食の術を敎へた。すると、神が何故敎へた？ と言つて怒つた。プロメシユウスは、それに答へて、敎へたのが何故惡い？ 人間を幸福にするのは可いぢやないか。と言つた。靜と苦しんでゐるのを見てゐないで、苦痛なら救つてやるのは可いぢやないか。と、言つた。といふ話があるが、僕は、その苦しんでゐるのを、冷笑して見てゐないで降りて行つて解いて遣るのが、何うもNobleだと思ふねえ。奈良原紅風のは何うも唯冷笑してばかりゐるといふ處がある。」

「雪岡は、次第に睡くなつて、「えゝ、えゝ」といふのも、心の努力を要するやうになつて來た。その內柴野さんの聲も止んだ。

四

翌朝、雪岡は、フト心好い眼を覺して見ると、もう柴野さん、新ちやん、おしげさんなどの聲がして、緣側を歩く音などが枕頭に響く。

雪岡は、も少し寢たい。と思つたが、威勢よく起きて、緣側に出た。雨は上つて、白い五月雨晴れの空に日が眩しく照つてゐる。

緣側では、白い瀨戸ひきの金盥に、ガラスの酒盃（コツプ）と一所に水を溢れるほど入れて、その傍にシヤボンと、手拭と、齒磨粉と、竹楊枝とが置いてある。

雪岡は、庭下駄を見て、それから顏を洗ふ道具を一切持つて向の方の井傍に下りて行つた。

座敷に戾ると、もう膳が出てゐる。

雪岡は、何か言ひながら、書齋と、客間との境に立つと、

そこの書棚と壁との邊で、猫の泣く聲がする。昨夕も、時々猫の聲に眼を覺させられたが、「また兒を產んだのかな。」と、思つて、

「また猫が兒を產みましたか、何處にゐるんだらう？」と言ふと、

柴野さんと、新ちやんとが、

「えゝ」と言つて居る。

「新ちやん、一寸、出して見せて下さい。」

新ちやんは、

「此處ですよ」と言つて、書棚の前に立つた。

見ると、一番下の棚の、本の重つた奧の處に、焦茶色の斑が二つと、白い處の多い三毛が一つと一つ處に團子のやうに固つて居る。

「やあ、ゐる〳〵。あすこにゐる。」と、言つて雪岡は笑つた。新ちやんも笑つた。

座敷で柴野さんも、

「えゝ。」と言つて溫順しく笑つてゐる。

「こら、出ろ、出ろ。」と言ひながら雪岡は、本を小口から取除けて掛つた。二つは、モク〳〵してゐるのに、一匹、斑點の丸々肥つた奴が、小さい癖に、可愛い口を明けて、

「フウ！……フウ！」と言つて、棚の奧に立ち上つたやうにして、手で引搔く眞似をする、

「ホウ！ 此奴は强い！……こら！ そんなに怒るなよ。」と雪岡は面白がつてゐる。

「それは、きついですよ。ウフ……」と、新ちやんも笑つてゐる。

柴野さんが、「一匹、元氣なのがゐるでせう？」と、座敷から言つた。

「新ちやん、摘み出して御覽なさい！」

新ちやんは上手に摘んで出した。三匹は、ぞろ〳〵座敷を歩いた。その一匹の奴は、歩きながらもまだ「フウ〳〵」言つて、毛を逆立つて、脊を圓くしてゐる。

「皆な雄ですか。」

「いや。……その白いのが一匹雌です。」と言つて、新ちやんは、それを一寸摘み上げた。

「好い猫ですね。あゝ、私も飼ひたい！」と、雪岡は仰山に子供のやうなことを言つた。

それから朝飯になつた。

五

朝飯が濟んでから、柴野さんは、

「君、失敬ですが、……僕、今日、十時から卒業式があるものですから、それで行かなくちやならないんですが。」と、輕く氣の毒さうに言つた。柴野さんは、專攻は哲學であるが、

或る、高等實業學校の教授で、英語を受持つてゐるのである。雪岡は、それと聞いて、

「あゝ、さうですか、それは失禮しました。私はちつとも構やしません。」

雪岡が構はない如く、柴野さんも、さう氣の毒と思はなかつたのである。

柴野さんは、直ちに立つて、フロックコートに着更へ始めた。時としては、神經的に沈み込むが、平常は、擧動に落着の無い雪岡も、また續いて立つた。さうして、柴野さんが、新ちやんだの、おしげさんだのに手傳はれて、洋服を着てゐる傍に行つて、

「あゝ、さう〳〵！　先生に、一つ哲學上の問題に就いてお尋ねすることがあつたんです。……先生、……例へばですねえ、此處に一人の人物があつて、それがある性格と、閱歷とを備へてゐて、更にまた違つた場合に、違つた言動をする。その際、その違つた新しい言動も、假令斷片的のものであつても、矢張しその人物の性格が有つてゐる言動に違ひないんでせう……つまり言ひ換へれば、昨夕のお話しのアーサー・シモンズが極く斷片的な印象を捉へて、其處に眞理があるとすと同じ道理なんですが、その言動は事實でせう。……」と、早口に訊いた。柴野さんは、

「えゝ、……さうです。事實です。……」

柴野さんは、考へ出した。斯ういふ話になると、默つて何時までゞも考へるのが柴野さんの特質だ。さうして、その沈默の時間に何か張り詰めていみがあるやうだ。

二人は一所に門を出た。さうして歩きながらまた斯う聞いた。

「先生！　それからまた斯ういふ事實もあるでせう。……例へばアーサー・シモンズが、伊太利の、ある市で、假りに、或る寺院を見たとする。處が、そのカセドラルは、古いローマンチックな建築であつて、其の邊には綠の樹木が鬱蒼として茂つてゐて、それに今、白い雨が降りかゝつてゐるとする。さうすると、遠くからは、その古い寺院が銀鼠の色に見える、然るにそのカセドラルは、傍で見ると薄ひ、黑い色の建築材料であつたとする。其の場合に、遠くから見た銀鼠の色は、噓か。といふに、噓ではないでせう。……事實でせう？……」

「えゝ、それや事實です。銀鼠の色は事實なんです。寺院はその時實際銀鼠の色をしてゐたのです。人間の性格だつて、その通りで、例へば、平常、品性の高い人物として、眼に映つてゐる。然るに、それに矛盾した行爲をしたとする。その時は、從來の經驗によつては、品性の高い人として見てゐたのが、一朝俄かに品性の高くない人間であつたと分る。成るほゞ高いらしい處もある。が同時また低い處のあるのも事實

だといふことになる。けれども、また、それに、類似した場合に品性の高い人が、俄かに卑しい行爲をしたやうに思はれる。で、あの人は、案外、從來と違つて、品性の低い人だと思つてゐる。すると、それが、後になつて、此方の誤解であつたといふことが分る。其樣な場合には、印象が、自己をあざむいてゐる。」

「えゝ。えゝ。」

二人は、通行の少い根岸の裏道を、坂本二丁目の停留場を目的として歩きながら並んで話してゐる。

柴野さんは　更に話を續けた。

「ですから、凡て、此方の主觀で、物は決するでせう。……例へば畫家が山を描く場合に三十里も遠方に在る山が、一朝空氣や光線の關係に依つて三里ぐらゐしか離れてゐないやうに見える。その時は、山は、三里しか隔つてゐないのです。畫家はその通りに描いて好いんだ。けれども、本當の山は矢張り三十里の處に在つて少しも動かない。朝、起きて見ると、昨日の晩に見た山が今朝は直ぐ眼の前に近寄つて來たやうに思はれる。その時は、事實、山が直ぐ眼の前に在るのだ。實際山が近くに來たのだ。が從來の種々な經驗や、その他地理上の知識によつて、山は動くものでないといふことを知つてゐる。で否、これは山が近くに來たのでなくつて、空氣や光線の具合で近くに來たのだと思はれるのだと思ふ。……ですから印象は眞理として好い理由なのです、道德だつて、印象的に行つて好い理由なんです。……好い場合もあるんです。色彩的な行狀を遣つても別に惡いとは言へないんだ。けれども、永い間の經驗に敎へられて、吾々は、その時々の慾望を發作的に滿足さしてもそれが直ぐ後になつて、全體の自己に障害を與へる結果を來す。それ故、發作的に、唯その折々の欲望を滿足さすことが果して善いか、惡いか。といことになつて來るんです。でなければ、印象的な色彩のある行爲をしても差支へないんですねえ。……」

「えゝ、えゝ、えゝ。」と、雪岡は、それに答へながら、一方では腹の中で、自分の道德的行爲に就いて敏感に考へてゐた。さうして、自分の從來行つてゐる多少の色彩的な行狀——色彩的だと言うたからとて、此處では必ずしも美しいといふのではない。——その行狀が、今何う言ふ結果を來たしてゐるかに聯想せざるを得なかつた。それと其また彼れは、斯ういふことも考へた。

自分は、今ある小說を作つてゐる。さうして、その作にモデルになつてゐる、あの性格に就いて、その性格の全部——或は全生涯——またその腹の中にまでも分つてゐない。それ故自分に分つてゐる部分だけを取つて描いてゐる。然らば此方に見えたゞけの性格は、其の人物の眞の屬性でないか。何

うか。自分の空想を事實と誤認してゐるのではなからうか。と省みた。が、大丈夫、それは矢張り事實なのであるとつ分た。その場合モデルたる人物の言ひ且つ行つた事は、正しく時間と空間との範疇に入るべき事實として存在して居たのである。それを取つて材とするは、空想でも虚僞でもない。純乎たる事實であると思つた。

さう思ひながら、雪岡は、

「先生！　斯うして先生と歩きながら、シモンスだの印象だの事實だの。といふ話をするのは愉快ですねえ。今朝は、お宅を出てから此處まで來る間が面白かつたですよ。」と、宛然愉快さうに言つた。

柴野さんは、

「えゝ、毎時失敬します。またお出でなさい！」と笑つてゐる。

その中坂本の停留場に來た。空は段々と白く照つて、強い五月雨上りの光線が、人間や人家や泥濘道を蒸すやうに射して來た。

上野のステーションの前で、柴野さんは淺草行きに、雪岡は、江戸川行きに、乘り換へるつもりで、電車を降りて分れた。

雪岡は、後、一人此度の電車の窓枠に、凝乎と頭を凭ながら無心になつて見るともなく、向側の女中連の乘客を見てゐた。さうしてその一人の、廿四五の細君の縹緻の餘り好くない、そして白粉が頸の周圍に斑點になつてゐて、見にくいと思つた。

すると、廣小路を、ジョキ〳〵〳〵〳〵と、刻むやうな音を立てゝ定齊屋が多勢人の往來する間を縫うて通つて行くのに眼が留つた。雪岡はそれを厭ふべき夏の訪づれだ。と思つて、「あゝまた彼奴が來た！」と、腹の中で歎息した。

（明治四十三年作、文章世界）

小猫

私は、まだ子供を持つたことがありませんから子供を亡くした時の心持も經驗しませんけれど、もし子供があつて、死なれでもしたら、あゝもあらうかと思ふやうな悲しい心持になつたことが一度ございます。

私は神經質的に非常に情深い性質だと言ふことは何うしても爭はれません。それは自分を賞めていふのでも貶していふのでもない、ありのまゝがさうなのです。

私は一度可愛いゝ小猫がフトゐなくなつたので、それから急に氣病みがしたやうになつて、七日ばかりといふもの、猫のことを思ひ續けて泣いてばかりゐたことがございました。さうしてその時私は自分には子供がないけれど成程子供に死なれた親の心持は斯ういふものであらうかと思つたのでした。

私の友人が猫を飼つてゐました。それが四匹か五匹子を生んだのでした。友人も猫煩惱の男でしたから、親と一所にそれを可愛がつて育てゝゐました。障子を破らうが、疊を引掻かうが、そんなことは一向構はないで何時も家の中を五六匹の猫がぞろ〳〵歩いてゐました。

私はその中で一番毛並の好い、尾の餘り長くない、まだ眼の見えぬ時分からムク〳〵と肥つた雄兒を貰ふことに約束して、なるたけ乳は長く呑したがよからうと言つて、大きくなるまで矢張り親の傍に置いときました。

けれども四匹も五匹もの小猫が段々大きくなるにつけ、餘りに惡戯が烈しくなるものですから流石の友人も、

「早く連れて行つてくれ遣りきれない」

と言つて、其の家の書生が猫を扱ひつけてゐるものですから、元氣で引掻いて仕方のない其の雄兒を懷中に入れて私と一緒に其家からは可成の道程のある私の家まで連れて來てくれました。

そりや活潑な好い猫でした。あばれること〳〵、黑い處の多い、丁度頸輪を入れたやうに、頸部の邊りに圓く眞白い斑があつてそれから尾と後足が白くつて、丸く肥つてゐるから丁度熊のやうでした——私は熊が好きです。私は三十幾歳にもなつて、時々獨りで怠屈な折などに屢く動物園を見にゆく

ことがありますが、そんな時には何時も熊の前に一番長く立つてゐます。何だか熊とは私遊んでみたいやうな氣がします――私は猫とも遊ぶのです。全く猫を飼つてゐると、私は猫が何人よりも一等好きな友人なのです。

　で、その小猫を妻が「小僧〳〵」と呼んだのが元で、私も「小僧々々」と呼びますし、さういふと間もなく小僧自身にも分るやうになつて來ました。

　よくはしやぐのはしやがないのつて、それはよく暴れました。私達が立つて歩いてゐると、裾に纏れて飛び付いて來る。それを「叱つ！」といふと、サッと飛び退いて、急遽向の方の柱に行つて掻き上る。私がそれを面白がつて追掛けると、直ぐまた逃げ出して、今度は床に私の親父の肖像畫を置いてある、それに行つてその額縁に飛び付く、それから其の壁に凭せ掛けた隙間にソッと隠れる。隠れた奴を片方から追ひ出す、遁げる、遁げるを追ふと、今度は庭の松の樹に行つて掻き上る、それを下から追ふと、上へ〳〵と逃げてゆく。その時此方で忘れたやうに知らん顔をしてゐると、また高い處から段々下りて來て、私の立つてゐる鼻の先の枝を傳うて傍へ挑みに遣つて來ます。あまり枝の先の方へ來ると、落ちさうになるので、小猫は自身の體を持扱ひかねてゐます、その困つてゐるのを見るのが好きでした。

　最初の内は、妻が氣を付けて糞をする處を拵へて敎へてやりましたが、それでも夜蒲團の上に小便をするには困りました。さうすると妻は「よく言つて聞かせねばならぬ」と言つて、その小便の濡れてゐる處へ連れてきて

「こら！　お前此樣な行儀の惡いことをしてはいけないぢやないか。此處へ小便をするんぢやないよ」

　と言ひながら、小便に鼻を押付けて置いて、拳固で猫の頭をコッ〳〵と叩きました、餘り非道く叩くやうですから、

「そんなに非道くするな」と私は言ひました。

　さういふやうな調子で、一寸も猫の姿が見えなくなると私は何を置いても大騷ぎして探し廻るのでした。

　そんな時には、妻も「直ぐ先刻其處にゐたやうであつたが、何うしたらう」と言つて、起つて私と一所に探します、散々尋ねあぐんだ結果、知らずに閉めて置いた押入れの行李の中の襤褸を入れた上に溫々と丸くなつて、さも好い氣持に寢入り込んでゐる處を發見することがある、さうすると妻が、

「あつ！　貴下此處にゐましたよ」と他を探してゐる私を呼んで置いて「これ！　何うした？　お前がゐないので心配したぢやないか。ウン？　溫々と寢入つて、良く寢られたか」

と言ひながら、抱へて連れて來ます。さうして疊の上に置くと、小い身體を長く不格好に伸して大きな欠伸をします、でも其樣な時はその不樣なのが厭でした。

　そんなに可愛がつてゐる猫の爲に、一遍私も妻も壽命を縮めるやうな思ひをしたことがございました、猫が井戸に陷つたのです。その時くらゐ心配したことはありません。

　私達その頃は小石川のある高臺に住んでゐましたが、恐ろしいやうな深い井戸で、お勝手をするのにもそれが第一の難澁でした。

　處がその小猫が――親猫ならば幾許動物でも譯が分つてゐますから、そんなことはしますまいが――時々其の井筒の上に這ひ上つて歩いてゐるのです、それを見ると、妻はハラ〳〵して先方を吃驚させぬやうに、そつと、「小僧々々」と呼びます。さうすると、何でもなく降りてまゐります。

　さうしてゐると、何日か私達晝飯を食べてゐると、突然に何とも言へない汚い聲を出して猫の泣くのが耳に入りました。

　妻は早くもそれを聞付けて、御飯を口にしながら、

「アッ！　猫が井戸に陷つたんだ」と、ヒステリカルに言つて、ガタリと茶椀と箸とを食卓の上に置いて「私一度は此樣なことがあるに違ひないと思つてゐた……」と言ひ〳〵板の間から飛び出して井戸の方に驅けました。私も續いて出ました。

　底の方を透して見ると、案の定、猫が陷つてゐる、併し不思議に水の中には落ちてゐません。御承知の通り大抵の井戸は上の方に桶側を一つ入れて、その下は赤土で固めて、それからまだずうつと底の方の水のある邊に行つて桶側を入れてある。それ故水と殆んど一所になつた桶側の縁の處と、その外側の赤土の處とに狹い段が一と周り出來てゐます。でも丁度其處の處へ上手く落ちてゐたのです。可哀さうに、其處へ這ひつくばつて、呼吸が切れさうな聲で泣いてゐるのです。水際まで二丈はたつぷりあるのですから何うすることも出來ません。

　私達は井筒に取付いて、遠くの底を窺き込んだなり思案に暮れました。

　猫は火の付いたやうな聲を揚げて泣き頻つてゐる。

「貴下、何うしたら好いでせう」

「…………」私は何とも返事が出來ません。

「井戸屋を呼んで來なければなりますまいか」

「井戸屋を呼んで來たつて仕方があるまい。何うしたらよからう。本當に困つたなア。」

「貴下、このまゝにしてゐたら、死んで了ひますよ」

「ウム！　早く何うかしなけりやならん。困つたなア。何うしよう。」

　二人は泣くやうな聲を出して氣を揉みました。

「あれ御竈なさい。貴下、あんなにして泣いてゐる。……確乎してお出で、今直ぐ上げてあげるから……お前がこんな處を歩くから惡いんぢやないか！」妻は悲しい聲を出して猫に

理解るやうに叫びました。
「井戸屋に行つたら好い分別があるだらうけれど、そんなにしなくつても何うかならないかなア。」
と、言ひながら、試に釣瓶を動かして猫の方に寄せて見たが泣いてゐるばかりで、一向、その方は氣を付けようともしません、それから、ぢや待て待て斯うして見やうと言つて、今度は長い物干し竿を二本繼いでその尖に容易に猫が取り着くことが出來るやうにと思つて、座布團を結付けて、猫の傍に遣つて見ました。けれどもそれにも何うもしないで矢張り知らん顔で泣き續けて居ます。
「困つたなア！　何うしよう」
「何うしたら可いでせう」
唯、空しく凝乎と見てゐると、猫の生命は刻一刻に迫つて來るやうで、私達も靜としてゐられません。貴下方は、其樣な時に何うしたら無難に猫を救ひ上げることが出來ると思はれます？
「アツ！　好い分別がある！」と、私は覺えず膝を叩きました。私は急遽座敷に驅け戻つて、押入れを開け、古雜誌を入れてある行李を取出して、そのまゝ倒さまに座敷に引きあけ、其處にある細引を取つて行李を十文字に吊りました。
「おい！　斯うしたら何うだらう？」と言ひ〳〵、私はそれを提げて井邊に來ました。
それから、其れをスル〳〵と、細引を手繰つて井の底に下ろして、靜と猫の方に寄せました。― 井戸は圓い、行李は長方形ですから、私は行李の幅の短かい方を井側に當てました。でないと、猫と行李との間に間隔が多く出來ますから―
よく猫は犬に比べて馬鹿な物だと言ひますけれど猫―寧ろ動物の本能性と申すものも、さう馬鹿なものぢやありませんねえ。さうして行李を側に近寄せますと、今までどんなことをして見せても素知らん顔で泣き叫んでゐました小猫が行李を井側にピタリと着けるや否やパタと泣き靜まつて、直に行李の中に這入つて、さも恐れ慴えたもの〻やうに小い四つの足を心持ち踏張つて、眞中に恰度平蜘蛛のやうにペツタリ匐伏しました。
それを上から覗いて見てゐる、私達は急に氣が輕くなつたやうで、
「あッ！　這入る〳〵！」
「巧く這入つた。いくら畜生でも、之れならば這入つても大丈夫だといふ見分けが付くから感心だ」
さう言ひながら引き上げました。
「お〻上つた〳〵。よく上つた」
行李を井端に置くと、妻は直ぐさま抱き上げて、
「これッ、もう之れに懲りてこんな處を歩くんぢやないよ。恐かつたらう。お前の爲めに生命が縮まつたぢやないか。……お〻何だか少し喪失してゐるやうだ。」
それから牛乳でも買つてきて飮ましてやらうと言つて、妻が買つてきて遣りましたら、よく飮みました。暫くケロリとして溫和しくなつてゐましたが、晩からまた能くはしやぎました。
そんなに此方のすることがよく分つて、行李の中に這入つたりしたものですから、その後も一層可愛がつて、私の好い玩弄物にしてゐました。妻は屢々「貴下は何もしないで一日猫と遊んでゐる」と言ひましたが私の方からばかりぢやない。猫の方からも私を對手に戲ひに掛るのです。
「そらッ！」と追ふやうな聲を掛けると、球を投げるやうに飛んで逃げるが、直ぐ靜と此方の樣子を伺ひ〳〵近寄つてくる。それが丁度廻り縁の處で、障子の小蔭に身を隱してゐて直ぐ鼻の尖まで遣つて來た時分に、トッと出て、また「それッ！」と聲を掛けると、猫は正に二尺ばかり身體を扭ぢつて空に躍り上つて驚きながら、バタ〳〵と便所の傍の戸袋の方に退軍する。三分間ばかりしてゐると、また脅やかして貰ひに靜と遣つて來る。散々其樣なことをして戲ざけて後、遂々捕まへて此度は掌で戲ふと、まだ足の裏の柔い四つの足でパツパツと蹴るやうにしながら、小い口で指に噛み付きます。その手足に彈力があつて、蹴られてゐると何とも言へない好い氣持です。私は其奴を懷中に入れたり、冷い鼻先を自分の鼻に押付けたりして遣るのです。
其樣にして可愛がるものですから、よく知つてゐて、私が外へ出る時など、もう玄關の處からニヤア〳〵泣いて、門の外まで後を追つて來ます。それをいろ〳〵にして追ひ返へしたり、また妻が出て來て、抱へて入ることなどもありました。白い處は雪のやうに純白に、黒い處は漆のやうに光つて段々毛の艶もよくなりました。
夜は毎晩私が抱いて寢てやります。夜着の袖の處に入れて床に入つて暫らくの間は添乳に猫を對手に、譯もない下らぬことを言つて、手を握つたり、口に指を入れたり戲弄つてゐますが、その内猫も人間も段々眠くなつてくると、私は靜と背を撫でながらつい寢入つて了ひます。それから一ト寢入りぐつすり熟睡して此度目を覺すと、猫は屹度袖から出て來て、私の褥の上に寢てゐます。それが何だか寢返りをする時に壓潰しさうで氣になるものですから、私も半寢入りながらに、靜つと足で裾の方へ押し遣るやうにすると、軟い毛が暖としてゐて、丸く團子のやうになつて前後も知らず寢入つてゐるのが、生きた物ではないやうに、順直に足に押されながら裾の方へ事もなくずつと行くのです。
それから私が、も一と寢入りして今度心地好く目を覺ますと、最早夜が夙に明けてゐて、小猫は定つて私の夜着の天鵞

の襟の上に來て、直ぐ鼻の眞上の處にまた丸くなつてゐる。此方が眼を覺したのに氣が付くと、ニャアと言ひながら、上から軟かな手で私の顏を撫でるのです。猫の嫌ひな人はこんな事をされては到底耐忍してゐられません。が私は嫌ひでないから、好い心地がするのです。私より早く起きてゐる妻の言ふのでは、猫はいつも私を起さうと思つて襟の上で暫らく泣いてゐるが、それでも私が目を覺さないと自分も其處にそのまゝまた丸くなつて寢入るのださうです。

　私の出てゆく時分にも後を追ひましたが、外から歸つて來た時にも私の足音を聞きつけてどんな奥の方や物蔭で遊んでゐても、屹度駈出して玄關に來てニャアと言ひます。それが丁度「貴下がゐないので私遊ぶのに困つてゐた」と言ひたさうなのです。妻は言つてゐました。「大抵貴下の足音は知つてゐるやうですが、それでも何うかして、知らない人が來たのだと、玄關でフウー！と言つて背を高くしてゐますよ」

　そんなにしてゐる猫が、――その歳の十二月の確かに十日でした。ヒユー〳〵木枯の吹きすさむ雨氣を帶びた厭な日でした。がその時も私は外に用事があつて、午後に家を出ました。猫は例の通り後を追うて門の外に駈けて來ました。處がその時分の私の住居の直ぐ崖下が大きな池のあつた後の窪地の原つぱになつてゐて、水草などが蓬々と繁茂つてゐました。其處を渉つて往來に出るのです。が私が向の道に上つて後を振り向きますと、小猫は崖の草つ原の中にゐて、遠く私の方を見ながら頻りに戀しがつて泣いてゐました。けれども門の外からその邊までは每時も駈け出るのですから獨りで家に戻るであらうと思つて、私は氣にもせず行きましたが、その時、妻も家で何かしてゐたのでせう。

　それから夕暮方に私は戻つて來ましたが、つひ猫のことを忘れてゐました。すると全く暮れ果てゝも何時もその時分には見える猫の姿が見えません。

「おい、猫はどうしたでせう。」

「さうですね、何うしたでせう。」

　それから、また押し入れにでも這入つて寢込んでゐるのであらうと思つて、いろ〳〵探して見ましたが見付かりません。加之時刻が何うしても家に居さへすれば、出て來なければならぬ時刻なのです。

　私は急に何とも言へない可哀さうな、淋しい氣持がして來て、それでも今にニヤア！　と言つて何處からか出て來はしないかと思はれて、何度も空耳を立てました。さうして何卒出て來て呉れるやうに祈りました。で、その夜寢るまで、

「何うしたらうなあ？　あの時、外に出た切り家に歸らなかつたかも知れぬ。さうして他を歩き廻つてゐる内に、道に迷ふて、遂々迷ひ猫になつたのかも知れぬ。此の邊には屢く猫捕りが來るといふから、猫捕りに捕られたのかも知れぬ。それとも知らぬ處をウロ〳〵してゐる内に、可愛い猫だと言つて猫の好きな者が連れて行つたのかも分らない、それならば好い。」

　妻と二人で此樣なことを言つて、私が晝過ぎ出て行つた時分のことから、その時妻は家にゐて何うしてゐた、あの時はあゝであつた、斯うであつたと繰返して猫の見えなくなつた時分のことを空しく想ひ出して見ました。

　さうして、よもやに引かされて歸るのを待ち心地に十二時過るまで起きてゐましたが遂に戻つて來ませんでした。寢てからも例の通り夜着の袖に入れるものがございませんから、私は寂しくなつて遣る瀨がありません。

「可哀さうに、皮剝ぎに捕つて剝れたかも知れぬ。あんなにピン〳〵跳ね廻つてゐたものが、剝れて仕舞へば、最早幾許經つたつて歸りつこはない」

　かう思ふと、晝間吾々が氣を許して、一寸油斷をしたのが惡かつたのだ。可哀さうなことをした。

　こんなことが、止め度もなく思はれて、私は、

「猫がゐない！　猫がゐない。」と、夜着の中に頭を隱して泣きました。

　妻は、「居なくなつたものは仕方がない。それが畜生の本性だから」と言つて、サラ〳〵と諦めてゐました。が餘りに私が不氣になつて猫を悲みますので、寢ながら、「それでも夜が明けたらヒヨツコリ戻つて來るかも知れない」と氣安めを言ひました。私は晩に暮れてからゐなくなつたのならば兎に角、晝間から見えなくなつたものが、夜が明けたからつて、何うして歸つて來るといはれやう？　と思ひましたが、それでも、また慾目で、朝になつたら出てくるかも知れぬと空頼みをしました。

　けれども、翌朝になつても遂に歸りませんでした。永久にあの時、私の後を追つて泣いてゐたきり姿は見えませんでした。

　私はその後十日ばかり、寂しくつて、可哀さうで、何も面白くなくつて、夜寢ては夜着を被つて泣きました。妻は何とも思つてゐないばかりか、私が泣くのを冷かしましたから、私は掌で以てなぐつてやりました。

　それから後、神樂坂を通ることがあつて、寒い時分のことですから、昆沙門の前に、夜店で、猫の皮を洒した襟卷を澤山賣つてゐるのを見まして、私は、「あゝ、家の猫も此樣なにされたのだらう」と、立ち止まつて、よく見ると、その中に何だか其の猫に酷く似た毛色のがあるやうな氣がしました。

（明治四十五年六月作、文章世界掲載）

子供

二月か三月の頃であつた。

「何だか變です。」

といつて、平素健康な母親が食慾の進まなかつたり、とかく身體の狀態がいつもと違つてゐることを口に洩した時に、父親は、はつと思つた。そして、欲しないことを眞先に言葉にいひ表はしてみるといふ場合は、往々誰にでもあることだが。

「子供が出來たんぢやないか？」といつてみた。

「さうかも知れない。」

何事にも仰山なことの嫌ひな彼女はわざと落着いた調子で、さういつてゐた。

二人の仲に子供が出來でもしたら、とんだ取り返しのつかぬ厄介をこれから先き一生背負はなければならぬといふ考は、双方とも別に腹の中に抱いてゐた。そのお互の心の中のことは、まるでエツキス光線で透して見たよりも明瞭にお互によく分つてゐるのである。

彼等の關係は、普通の夫婦が、婚姻を結んだそも〳〵から既に豫想してゐるやうに子供を設けるといふことを、すこしも目的としてはゐなかつた。さうかといつて彼等の間には全然戀愛の關係もないことはないのであつたが、とにかくトルストイのいふ意見に從つて、生殖を目的としない戀愛は、虛僞の戀愛であつて、かゝる行爲は神聖なるべき戀愛を穢すものであるといふ標準からいへば、彼等の關係は一も二もなく性欲の滿足のみを目的として結ばれたものゝやうであるが、また必ずしもさうばかりとも思はれないところもあつた。

男の方では、彼女と、果して何時までさうした關係を繼續して行くといふ、はつきり見極めの付いた考を持つてゐなかつた。むしろ、そんな事を一歩深く自分の心に立ち入つて振顧つてみることを欲しなかつた。そんなことを考へようとせずその日〳〵を糊塗して過してゐるのであつた。しかし、さすがに女の方では、それについて深く考へないではゐられなかつた。何かにつけてそのことをいひ出し、

「早くわたしの獨立出來るやうにして下さい。どうせわたしは、貴方の處に何時までもゐないんですから、」

さういふ彼女の心には、種々な點から、彼と、これから先の生涯を共にすることを、双方にとつての不利益であると考へてゐたからである。粗野といつてもよいほど質樸で、少しの氣取りもない彼女は、一寸した調子に乘つてすぐ思ひ揚がつたりするやうなところは性質になかつたので、これまでの經歷や境遇にひどく懸隔のある自分と彼女とが夫婦の生活をすることは、これまでの知つた人達の間に、普通に夫婦の緣を結んだ者よりも一と際眼に着くだけ、そして、その爲にこれから先き長く兎角人の口端に掛けられるだけでも、そのことを思ふと、厭でいやで堪らなかつた。

「ねえ、早くさうして下さい。わたし此處の家のやうな處に居さへしなければ、兎の毛ほども人に彼是云はれることはないんですから。」

彼女は、彼とさうなるまでに自分が前に長く住んでゐた土地の方から、何かにつけて風のたよりに耳に入つて來る自分に關する、あらぬ噂をひどく氣にして獨りで憤慨してゐた。

「だれだつてよく私を知つてくれてゐる者は、私の事をさう惡くいふ者はなかつたんですから、こんなことにさへならなければ私は大手を振つて彼處に行かれるんです。」彼女は止度のないほど愚癡まじりに昂奮してゐた。

それを聽かされるたびに彼は當惑したやうな顏をしながら、輕く受け流して笑つてゐた。

「はゝゝゝ。それは愚癡だよ。どうせ人はいろ〳〵のことを蔭でいふに定まつてゐる。そんなことを一々取り上げて氣にしてゐた日には一日も生きてゐられるものぢやない。……併しお前が獨立してどうか斯うかやつてゆけるだけの事は私もどうかしなければならぬと考へてゐる。それは初からその積りであつたのだから。」

「たゞ考へてゐたり、積りだけでは、もう今までに何度も聽いてゐるんです。男は幾つになつても構はないが、女はいつまでも暢氣にしてはゐられないんです。私にとつては笑ひ事どころぢやない一生の大事ですから。」

彼女が向きになつてさういふほど彼は一層それを笑ひにまぎらしてゐた。

「獨立するだけのことなら、何時だつてしてやるさ。けれども、それをしたら、その時お前が此の家を出て往く時だよ。」

「そんなことは、いはなくつたつて分つてゐる。」

彼女は反撥的にさういつてゐたが、そんなら自分の望むとほりにさしてもらつて、いよ〳〵彼と離れてしまふ時のことを事實として、明瞭に面りに思ひ描いてみると、それは、口にいうてこそ容易しいが、果してその場合になつたら、苦いか甘いか、少しの涙なしには出來ないことのやうにも考へられた。假ひ終が喧嘩でさうなるのであつても、そこには涙といふものが必ず伴ふものであるといふくらゐのことは彼女も心

得てゐた。いづれ最後は涙で離れてゆかなければならぬことを思ふと、その時の厭さに彼とそんな關係になるまでには隨分深く思案をしたのであつたが、やつぱりやむに止まれぬ何とかといつた、人間の弱さから、たうとうそんなことになつてしまつた。それを思ふと、彼女は時々自分ながら自分の意思の弱さに愛想の盡きることもあつた。

又彼の方では彼のはうで、彼女のいふとほりに獨立してやつてゆけるやうな基礎だけをこしらへてやることは早速にも出來ないことではなかつたが、しかし、さうするのが彼女と離れる爲の第一步の實行に取掛るのだと思ふと、何となく、そんなことをするのが氣が進まなかつた。そして、彼女が、時々ヒステリイのやうになつてやい〳〵いひ出すたびに、それを靜めるやうな口調で、

「そんなことは何時だつてしようと思へば出來る。何にもさう焦る必要はないぢやないか。」と、料簡の潤いやうなことをいつて、その場を逃れてゐた。が、實のところは彼の方でも彼女の考へてゐると同じことを考へてゐた。自分達が何時までもかうしてゐるといふことは、將來の爲に双方にとつて最善の方法であると思はれない、既にそれがさうと分つてゐる以上は速に現境を打ち切つて更によりよき最善の方途に就くのが智慮のある者の爲すところである。彼はそれをも知り過ぎるほどよく辨へてゐた。が、もう十何年といふ男の獨りぐらしをしてゐた者がたとひ十月でも一年でも、不足ながら女手のある生活を仕始めると、一つはそれが惰性になつて・又もとの不自由な男一人の生活に立ち返へるといふのが・非常に億劫であつた。彼は時々そのことを考へて、自分もいよいよ年を取つたのかと思ふことがあつた。まだ一人でゐる間は、たとひ傍眼には、それが何う映らうとも、兎に角裸一貫といふ非常な强味があつて、いはゞ天下に恐いものは何物も無いのである。人間は何事によらず、習慣に馴染んで、たとへば、それが惡と知りつゝも尙ほその惰性を打ち斷つことの出來ないくらゐ慘めな醜態はないのである。一人でゐるとさういふ束縛から自由であつた。生活の樣式をどうにでも變へることが出來た。

彼は、彼女を初めからひどく好きな女とも思つてはゐなかつた。たゞ何處か一寸蟲の好いたくらゐの浮いた氣持ちから手を出したまでのものであつた。尤もさうなるには無論彼は多少の選擇もあつたし、まさかの場合には、これで一生我慢しても仕方がないといふ諦めもないことはなかつた。が、これまで長い間に彼が見て來た女にはそれよりももつと氣に入つた女があつたが、それは思ふやうに自分の物にならなかつた。――尤もそれが思ふとほりになつたとしても、それが幸福であつたかどうかは分らなかつたが、――それに又、斯ういふ女が欲しいといふ理想からいへば、その理想は隨分妥協的で實際的なものであつたにしても彼女はその理想にも適つてはゐなかつた。たゞ、傍にゐられては、とても堪らないといふやうな厭味を起させないものが、我慢の出來る處といへばいはれるやうなものであつた。許六が旦花譜に、菊や櫻はおろか椿ほどの色女も認められなかつた。

そのうち三月めを算へて、素人にもいよ〳〵それに疑ひないことがどうしても否定する譯にいかなくなつて二人はいろいろに考へたが、格別效驗のある手段の取りやうもなかつた。

「こんなことにならうも知れないから、私が遠からさういつてゐたぢやありませんか。それを、そのとほりに早くしてくれないからだ。どうしてくれるんです。」

彼女は身體の異狀も手傳つて、ヒステリーの狀態になつて、さういつて彼に突掛つてきた。

「そんな、前のことを今になつていひ出したつて、どうすることも出來ない。さうなつたら、それについて適當な處置を採るよりほかはない。」

「適當な處置といふのは、どういふ適當な處置です？」

彼女は昂奮狀態で問ひ詰めるのであつた。

「…………」

「さあ、どういふ適當な處置なんです？」

「……なに今子供が一人ぐらゐ出來たつて、その爲にひどく困りもしないが、自分にはとても健康な子供なんぞは出來はしないから……」

彼はその點に於いて特に子供といふことについて常に鬼胎を抱いてゐた。自分の血液の中にはいろんな不淨の女から感染した遺傳性の穢れた病毒が生存してゐることを思ふと、その中から產まれて來る胎兒に對して、普通世間並みの考を以て一も二もなく樂觀して目出度がつてゐることは到底出來なかつた。

それのみならず彼は不斷から、主義として、サンガー夫人の說には同感を抱いてゐるのであつた。社會道德の上から考へても病弱な兒を生存せしめて置くといふことは不可なことであると思つてゐた。健全なる兒が產まれるといふ自信もなくして、その兒の產まれいづるのを待つてゐる氣には、どうしてもなれなかつた。そして、たゞ兩親のセンチメンタルな考から病弱の兒を抱いて醫者の手を煩はしたり、又は卜者や神佛に縋るといふやうな迷信的な行爲は醜いことであると思つてゐた。

「俺は子供なんぞ、ほんたうに要らないんだ。」

彼は獨り語のやうにいつた。

「わたしだつて、子供なんか、もう懲々だ。……さあ、どうするんです？……適當な處置といふのは。そのことをいつて

下さい。」

「どうもしないさ。お前が産まうと思へば産むがいゝ、産んだ以上は、わたしはそれを殺しも棄てもしない。」

「厭なこつた。」彼女は又吐き出すやうにいふのであつた。

「わたしは産まないんですから。」

「ぢや産まないさ。」

「えゝ産まない。」彼女は棄て鉢な調子のことばかりいつてゐた。

　そして毒にも藥にもならないやうな賣藥を買つて來て服用したりしてゐたが、大した效驗もなさうであつた。どうかするなら人の眼に立たない今のうちに早く何とかしなければならぬと、双方互に、はつきり口に出さないでも、心の中では同じやうに思つてゐた。姙娠中止といふことが法學上認められる場合について彼は考へてゐた。しかし、健康なる母體には何處にも、素人目にはさういふ血路が見出されさうにもなかつた。

　彼は今まで、女は、なるべく子供を産まないやうな女を欲してゐた、それは彼が親子の愛といふことよりも兩性の愛といふことに重きを置いてゐるからで、兩性の愛の遺憾なき滿足は、最も吾々の生存に幸福を與へるものであると思つてゐた。彼は長い間、その兩性の愛を滿足すべき對手を求めて遂に得られなかつた。然るに今、少しも愛を感じない譯でもないけれども、眞實どれほどの愛を感じてゐるか分らない彼女に兒が産まれた場合、その兒が一生涯の、心の自由を妨げる楔となつたが爲に、却つて一層、そのあるかなきかの愛さへも索然としたものになり或は愛の反對に嫌惡の情となつて現はれはしないかといふやうに豫想せられた。シュニッツレルの作の中に、二人は、愛を樂んでゐたが、それは、トルストイの說くやうに、生殖を目的としたものではなかつたので、豫期しない子供が生れると、その子の出來たが爲にお互の愛情が冷めてしまつて、關係を絕つたといふやうなことがある。丁ど彼の場合がそれであつた。愛は冷めはてゝゐるが子供がある爲に仕方なく夫婦の形式でゐるといふことぐらゐ不合理で不自然なことはない。彼はそのことも考へてみないではゐられなかつた

「苦しくつて仕様がない。そこの村松さんに一度來て診てもらつて、取つてもらはう。」

　彼女は、決心したやうにさういつた。彼女が自分から進んでさうするなら、彼にも固より異存はなかつた。

「うゝ、それは診てもらつてもいゝが、しかし、そんなことは、今まで掛りつけでない。全く知らぬ醫者の方がいゝ。それに專門醫でないと、自分の體が何より大事だから。」

「村松さんの方が却つていゝんですよ。そんな大した病院だとか、知らぬ醫者だと、此方の氣持ちが改まつて可けない。

それにあの人、婦人科の方が專門なんです。」

「ぢや、さうしてもいゝ。」

　そんな不決斷なことを、あれかこれかといつてゐる間に日は遠慮なくずん〳〵過ぎていつた。

「とにかく村松さんに診てもらつて相談してみたらいゝだらう。」

　村松さんは早速來てくれた。

「今度はどうしました。」

「いえ、私ではないので。」

　醫者は、それから茶の間の方で彼女から一とほりこれまでの容體を聽きとつた上で、診察をして、穩かな笑顏をしながら、肯いて、

「さうです、それにちがひありません。何處もほかに惡いところはないやうです。」

　さういつてゐるところへ、彼も襖を開けて座敷の方から顏を出した。村松さんは、そちらを見て、

「御心配はありません。お目度出いのですから。」

　彼は、

「あゝ左樣ですか。」といつたが、お目出度いのだといはれてそれに對して應ふることを知らなかつた。

「ちつともお目度くないんです。」と笑ふやうにいつた。

「先生、これを取つて戴けませんでせうか。子供は要らないんです。」彼女は率直にいつてしまつた。

　それを聞いて呆氣にとられた村松さんは、その瞬間一寸險しい目付をして、お目度いといつた笑顏を、どう形付けていいか始末に困つた風で、そのまゝ默つてしまつた。

「どうも、子供は厄介だから要らないと申すんですが、……」

　彼は微笑にまぎらしていつた。

　すると村松さんも、又少しく顏を和げて、

「どうして、そんなことを？」

「どうしても、もう子供は要らないんです。厄介ですから。」

　彼女は一本氣に又さういつて繰返した。

「あの、姙娠中止といふことは、母體がその爲めに危險な場合は手術を施しても別段差支へはないのでございませうか。」

　彼は分つたことを、さういつて相談するやうに訊ねた。

「えゝ、それは、そんな場合もないことはないのです……しかし、今、別段何處もお惡いところはないんですから、そんなことを爲さらないでもいゝぢやありませんか。」

　しかし、彼等は二人ともそれに對して默つてゐた。そして暫く餘談をした後、村松さんは、

「貴女のお腹の脹るのは、通じのない所爲です。通じの藥を後程差上げますから、それをお上りになりましたら多分お氣持ちがさつぱり致します。」

「あゝ、左樣ですか。」

「その方は、まあもつとよくお考へになつた方が可いでせう。そりや、どうしても貴女のお身體が可けないとなれば手術も出來ないこともありませんが、それをするにも、なるたけ月の重なつてからの方が苦痛が少なうございますから。」

「あゝ、左樣ですか、どうも有難うございました。」

彼等は、村松醫師の來診によつて、何となく重荷を下ろしたやうな、ほつとした氣持ちになつてゐた。

それから又暫く月日の經過を見てゐるうちに、やがて夏になつた、彼が一ケ月餘も往つてゐた避暑地から歸つて來ると彼女は、彼の不在中に、丁度その頃隣家に來る產婆に診てもらつたことなど話して、

「子供は大變丈夫な兒なんですつて。」といつてゐた。

「うゝ、さうか。それはいゝさ。」

「あれから、又一度村松さんに來て診てもらつたけれど、村松さんも、もう私には分らないから、これからは產婆にお掛んなさいといつてゐました。」

「あゝ、さうか。」

夏は例年のとほり土用が明けてからの方が暑さが酷しかつた。

「村松さんに賴んで、いつそ此の兒を取つてしまはうか知らん、もう大分になるから、今だつたら、そんなに苦まないで濟むだらうと思ふ。」と彼女は苦しまぎれに唸るやうにいつて、暑い燒き付くやうな座敷の中の、たるたけ風通しの好い處を追つていつて轉々横になつてゐた。

「そんなことがお前、今更出來るものぢやない。」

「だつて苦しくて堪らない。」

「苦しいくらゐは辛抱しなけばならない、病氣とちがつて性が知れてゐるんだから。」

「あゝ、又動いて爲樣がない。……この兒はどうせ死ぬでせう。」

「どうして死ぬ？」

「何だかそんな氣がする。」

「死ねば死んでも仕方もないが。」

彼は嘗て、あるほかの女に、自分の子供に疑ひを容れないと思ふ赤兒が產まれて、一ケ月ばかりで死んだことのある記憶を思ひ起してゐた。その女の自身の體證から思ひ合せて、どうしてもそれは彼の子供に相違なかつた。しかし、それは飽くまで祕密にして置かなければならぬ境遇に彼女があつたので、產まれて一と月ぐらゐ經過して、その子供をはじめて見た時には、ひどい胎毒の爲に無慚な病狀を呈して、二度と見るに堪へなかつた。その女の旦那といふのには、本妻に六人の子供があつたが、ひとりもさういふ病氣の發したのはなかつた。そしてその子は、彼が、その女を、出產後はじめて訪ねた、その時、彼が歸つた後二三時間して死んだ。恐ろしい病氣の爲めに見る影もなく相好が崩れてゐたが、それでも鼻筋の高く通つた、眼尻の長く切れてゐる工合など、彼は氣のせいか、何處か自分に似た面ざしがあるやうに思はれた。それは男の子であつた。もうぢきに死ぬ前とて、泣く聲なども人間の子の聲とは思はれないで、たゞ鵜か何ぞの泣く聲のやうであつた。

今、それを思うてみても、彼は、自分の子に生れるものに健全なる人間は育たないものと斷定するやうな心持ちでゐた。しかし、まだ、先に、村松醫師の診斷を受けた當時であつたら、とにかく。もう今となつては、何となく此の世に居るものゝやうな氣がして、多少憐憫の感情が彼の心の中に萌してゐた。どんな生物が出て來るか、それを見るのを待つやうな好奇心も手傳つてゐた。

平素の健康體を自信して、姙婦が、前に出張つた大きな腹をしながら、平生のとほりに、とん／＼立ち働いてゐるのを見ると危險で仕樣がなかつた。產婆は一と月に一度來て診てくれたが、後れて十一月の初か、大抵十月の中旬を過ぎてからであらうといつてゐた。二度めに來て診た時には、最初に診た時至極健全であると思つたがひどく下にさがつてゐる。こんな工合ではもしか流產になるかも知れない。もつと帶を以つて、きつく締め上げるやうにして置かなければ可けないといつたというやうなことを姙婦は、二度めの避暑先から歸つた彼に話した。

双方の關係がいつまでも不確定なやうな事情のところへ生まれて來ようとする胎兒は、決して、樂しい期待の下に細心な注意を拂はれなかつた。

「氣を附けなけりや可けないよ。腹の中の子供よりも、そんなことをしてお前の身體が、もし流產でもしたら健康を害するぢやないか。」

「わたしも、それは一寸氣が附いてゐたんです。此の間、あの重い漬物石を一度持つたことがあるんです。その時眼が眩みさうであつた。あゝこれは惡いことをしたと後になつて思つたけれど、まさかそんなことを產婆さんにいはれもしないから默つてゐた。」

「そんなことをするから可けない。」

「こんな兒、出來たつて仕樣がない。」彼女は又しても愚癡を溢すやうにいつて胎兒を呪つてゐた。

「何が仕樣がないんだ。」

彼は、彼女が何かに當り付けてゐるやうな不貞た物の言ひ振りの語裏の意味を、よく飲込んでゐながら咎めるやうにさういつてゐた。そして、假ひどんな物が出來るにしても今居る三間の家では、まさかの時どうすることも出來ないので、彼は散步に出たついでに近處に手頃な貸家を探して歩いたりしてゐた。丁度理想的な家が見附つて、借りる約束をなし、

四五日後にそこへ移轉しようと思つてゐるところへ九月一日の大地震が襲うて來た。

「それ、また搖れて來た。」といつては、彼女は大きな腹を抱へて家から驅け出した。彼は、そんなことのある度に、これでは、いよ〳〵胎兒は絕望だと思つてゐた。地震よりも尙ひどく脅かされたのは、鮮人の爆彈の襲來の噂であつた。彼は、そんな馬鹿げたことは滅多に有りさうに思へなかつたが、固より、少しも事情の分らない混雜の際とてそれを否定することも出來なかつた。

その頃、もう夏の中から家の座板の下に飼主のない犬が這込んで子を生んでゐたのが、だん〳〵大きくなつて親の乳をたづねてクン〳〵泣いてゐるのが徹宵耳についてゐた。初はただ、何の聲とも分らずウム〳〵唸つてゐたのが、後にはどうかすると、小さい聲でワン〳〵などゝいつて犬の兒らしい泣きかたをするので、その聲が疊の下から聞えてくると、國の方から預つて、家に來て居る二十になる若い娘など一緒になつて、

「あら、またワン〳〵いつてゐる。生意氣な奴。」などゝいつて笑つてゐた。

地震の時はどうしたらうかと思つたが、畜類にはさまで感じなかつたともおもはれて、何のこともなく涼しい秋風は、むさい座板の下にも通じて狗の兒は日に〳〵肥立つていつた。

「ほんたうに、うるさくつて仕方がない。夜、あの氣味の惡い聲に眼を覺されて、ちつとも眠られない。明日は誰れか來た者に賴んで取り出して棄てゝしまつてもらはう。」

もう、一二ケ月に迫つた大きな腹を抱へた彼女は何かにつけ神經を焦立たせてそんなことをいつてゐた。

「馬鹿、そんなことをするものぢやない。座の下に野良犬が這込んで來て子を生んだのは迷惑だが、既にあゝして生んで、乳を哺ましてゐるものを、自分で巢立ちをせぬ前に抛り出すのは無慈悲である。」

「ほんとに仕方のない野良犬だ。もう違うから、あの母親が大きな腹を垂れ下げて、何處かそこらへ這込みさうであつたから、氣を付けてゐたのに、たうとう自家の緣の下へ這込んで來た。」

彼女は愚癡ぽい口癖をいつてゐた。

狗の兒は次第に大きくなつて、後には緣の下の根太のところまで這ひ出して來て、光線を恐れるやうな、あどけない眼をして、ワン〳〵と泣いてゐた。二つか三つかと思つてゐたら、緣の下の彼方の方にも轉々してゐたり此方の方にも這ひ出してゐたりして、たしかに五つはゐるらしかつた。そして、碌な食べ物も母親は食べてもゐさうにないのに、天地の恩惠はあるものと思はれて、緣の下に這ひ出して來た奴を取り出

してみると、どれもむく〳〵と圓く肥つてゐた。そして五つが五つとも男であつた。

彼は、そんな犬や猫のやうなものでも、飼養するまでは格別愛を感じないが、一旦飼つて傍に置くとそれが可愛くつて堪らなかつた。

「今度移るところへ、夜の用心にもなつていゝから、この中一番いゝのを一匹伴れてゆかう。」

彼がさういふと、彼女は、顏を顰めて、

「大嫌ひ！　そんな物穢くつて仕樣がない。」と吐き出すやうにいつてゐた。

そして、彼女は、娘に手傳はして、三つだけ庭に這ひ出して來た兒犬を小さい箱に入れて、何にも知らず、すう〳〵睡つてゐるのを、少しく離れた處の山の中に置いて來た。彼は自から、そんなことに手を下すに忍びなかつた。

郊外は地震の被害も少くつて、九月の中旬になると、もう、そこいらは大分世間が落着いて來た。その頃彼の家では地震前から借りて置いた家へ引越していつた。が、手が足りないのと忙しいのとで、遂にあとに殘つた狗のことは、すつかり忘れてしまつた。

「あの犬の兒は、まだ二つだけ緣の下に殘つてゐたんだが、どうしたらうかなあ。……しかし五つ子をして、それが皆な雄とは珍しいなあ。自家の兒はあんまり犬が雄ばかり產んだから、女の兒が產まれるかも知れないよ。」

彼はそんな罪のないことをいつてゐた。

「女の兒なんぞ仕方がない。わたしは、どうせ此の兒は自分の子にしないんだから。」彼女は、何かいふにも、突慳貪であつた。

二度も女の兒は欲しくないのが彼女には本當のところであつたかも知れぬが、彼は、どんな化け物が出て來るかも知れぬといふ恐れはあつたにしても、もし完全な形を具へた人間の子が生まれるとすればなるべく女の兒であることを望んでゐた。もう五十に近づいて初めて子を持つ彼は、その子に老後を掛らうとする望みはなかつた。それよりも色彩的で優しい女兒によつて老後の氣分を慰めることを望んだ。

世間竝みの考で期待されなかつた、その兒は、產まれ出る間際になつて、やつと欝金木綿の綿入れが二つしかこしらへられてなかつたところへ呱々の聲とゝもに出て來た。それは親達が、いろ〳〵取越し苦勞をしたよりも案外形の整つた女の兒であつた。父親の幼い時の面影を生きうつしの、眉尻のあたりをぢつと見入つてゐると、自然の愛情は泉の如く湧き起つて來た。

（大正十三年十一月作、我觀揭載）

兒病む

——子供に書き遺す一節——

私の母、お前達のお祖母さんになる人が、生前よく、子を持つて知る親の恩といふことをいつてゐた。それは、古い淨瑠璃の中にある文句で、お祖母さんは、それを自分の經驗と引き合はして、しみ〴〵とさう感じたのであつたらうと思ふ。

私は、自分が子供の時から、それを幾度となく聞かされてゐたが、その時分には、たゞさういふものかと思つたゞけであつたが、自分がはじめてお前達二人の親になつて、なるほどお祖母さんのいはれたとほりだと、犇々と思ひあたる。

子を育てる親の勞苦は、いづれの親も同じであらうと思ふが、私達もお前たちの爲には隨分骨を折つてゐる。……もし仕合にして、お前達が二十ほどにもなり、私も無事に生存へてゐたならば、その時、お前たちを育てるために、私達が、どんなに苦勞をしたかといふことを、十分に話して、恩に着せてやらうと思ふが、その頃には、私は、もうとうの昔、地の下に入つてしまつてゐるかも知れない。そしたら、お前達を大きくするために、どれほど私達が、苦勞したかといふことを話して聞かすことが出來ないから、それで、こゝに、お前達——百合子が疫痢を患つた時分のことを書き誌して遺して置くのだ。

苦勞した、苦勞したといつて、恩に着せるやうにいふのは、決して、その爲にお前達から、何か、その代りに恩返へしをしてもらひたいといふのではない。身體髮膚これを父母に享く敢て毀傷せざるは孝の始なりと、古語にあるとほり、お前達が、此の後も永く健康でありさへすれば、それで十分私達に酬いることになるのだ。

そも〳〵此の世に生まれて來て、親となり子となる因緣こそ、不思議な契りはない。なにゆゑに私はお前達を愛するのか、どう考へても理由はない。たゞ目的なしに愛するのだ。愛といふものに目的のないことは、藝術を鑑賞するに目的のないのと同じことだ。私は、お前達が今に大きくなつて私に樂をさせてくれるのを待つてゐるとか、老後を扶養してもらふのを目的としてゐるとかいふ考は少しもない。

今、百合子はわづかに五つ、道子は三つである。私とは、まるで、親と子といふよりも祖父と孫とほどの年齡の相違である。そんなことをあてにして居られるものではない。それにも係はらず、たゞ〳〵私は、お前達の大きくなるのを一日千秋の思ひで樂んでゐる。いや、大きくなるのを樂んでゐるばかりではない。現在お前達の存在そのことを樂しんでゐる。しかし、その樂みは、前にもいふとほり、如何なる目的を有する樂みではない。お前達の成長そのことが私には限りない樂みなのである。

そして、私のこの樂みは、現在私自身の生存の目的の全部を成してゐるといつてもいゝのだ。卽ちお前達を愛することには、少しの目的はないが、お前達を愛することは、私が今かうして生きてゐる唯一の目的なのだ。無目的の愛そのことが目的なのだ。

私は、飾るところなく、お前達二人を愛することに依つて幸福を感じてゐる。この幸福の感じたるや、あまりに幸福であるがゆゑに、或は傷けられはせぬか、毀たれはせぬかといふ不安、危惧の念を常に伴つてゐる。この幸福の感じが果して何時まで圓滿に續くものかといふ恐れが附隨してゐる。いひかへれば、お前達の一人か、或は二人ともに、いつかは失はれはせぬかといふ憂慎である。それは、お前達の存在によつて意識する私自身の幸福の感じを、絕えず脅かしてゐるところのものである。

「これほど、何かにつけて、氣をつけてゐるのだから、ほかのことは大抵恐いことはないつもりだが。たゞ疫痢だけは恐い。」

私は、お前達を愛撫しながら、時々、さういふ歎聲を洩してゐた。

百合子は五つ。いよ〳〵疫痢の危險區域の年齡になつた。とり分けて今年の夏など、私は常にその病氣に對して、防禦心を緊張さしてゐた。勿論、生の果物などは常から決して與へなかつた。新聞には六月頃から、市の內外に、疫痢で死亡する子供の多いことを報じて、幼い子供を持つ世の親達を警戒してゐた。

近い處に住んでゐる知人のエヌ氏が、やつぱり五歲になる女兒を、そのために殆ど一晝夜も立たぬ間に失つたといふことを聞いて私の心は異常に怖えてゐた。かゝりつけの醫師細田氏からも時々注意せられてゐた。そして注意すべきことは何から何まで十分に注意してゐるつもりであつた。

長い間持ち越してゐた書き物が、その日の午前十時頃に、やつと、ひと仕切り出來上つたので、それを、雜誌社から來て待つてゐた使者に渡して、私ははじめて重荷をおろしたやうな心地がした。

それはもう二月頃から絕えず頭に引かゝつてゐた原稿で、

それが七月の今日まで延び〱になつてゐたのであつた。その方の仕事を形付けてしまはねば、ほかの事には手も足も出せないやうな、囚はれを心に感じてゐた。それで七月の中旬に仕事を形付けるために箱根に五六日行つてゐたのであるが、そこでも半分しか纒らず、廿一日には、もう、ぎり〱の締切りが迫つたので仕殘した原稿を持つて歸つた。すると、土用に入つたばかりの炎暑は、ジリ〱蒸すやうに照りつけて、氣象臺の報告によると、七月中で九十五度といふ暑熱は三四十年來にないことだといふほどであつた。私は、原稿のある處で、ふつと妙案に行き詰つてしまつたのと、九十五度の炎熱のために二三日の間机に凭つたまゝ懊惱してゐた。それが今日、どうなりかうなり形を付けたのであるからその悦びや知るべしである。

そして、その仕事さへ一と區切り形付けば、早速子供達を連れて、今年の夏は鹽原へ行くつもりにしてゐた。向うの室も六月の末から約束してあるし、はじめは七月の十日頃に行くつもりであつたのが、たうとう自分の仕事のために今日まで延びたのであつた。

「さあ〱、仕事も濟んだ、明日といつても支度が調はないし、それに明日は芥川の葬式にも行きたい。明後日の廿八日に行くことにしよう。……これ、子供を二人とも連れていつて、いつもの橋の向ふの理髪屋で、髪々を剃つて來させ。お前とふみと二人でつれてゆけ。」

私は勇みたつやうにして妻に命じた。

妻は、一番若い女中のふみに向つて、

「一人で連れてゆけるだらう。」

といつてゐたが、ふみも、

「わたし一人でゆけます。」

といつて、ふみは、三つになる道子の方を背負ひ、上の百合子の方を歩かして、三四丁先きの床屋へ行つた。そして間もなく頭を綺麗にして戻つて來て、奥の六疊に、仕事のをはつた後の疲勞で、また、ぐつたりとなつて横に寢そべつたまゝ、頭の朦朧としてゐた私のところへ、庭の方から廻はつて綺麗になつた頭を見せに來た。

「おゝ、えらい早かつたな。おゝ道つちやんもか。……どうだ、ふみ、二人とも泣かなかつたか。」

「えゝ、終の方は、お姉ちやんの方は、すこし泣きさうにいつてゐましたけれど。」

「さうか、よし〱。」

私は、さうして子供の顏さへ見れば、つかれた頭や胸も、すこしは蘇生を覺えたのだつた。ことに此の頃、大きい方の子の頭髪が黒くなつたのが眼についてきた。はじめ赤ン坊の時分はとにかく、誕生過ぎるくらゐになつても、毛が前頭部の方だけ、ひどくうすかつたりするので、私は戯れに、熊谷

の頭のやうだと笑つてゐた。髮の色も赤かつた。それが此の頃ではふさ〱と伸びて、光澤も生じた。剃つたあとが青かつた。

「さあ、今日はこれから、ふみとお姉ちやんとお父ちやんとで、三越まで買ひ物にいつて來ようかな。」

などと、私は彈んだやうにいつてゐたが、そのうちに時間が立つのと、やつぱり、ヂリ〱照り付けて暑くなつて來たのとで、躊躇してゐた。そして、百合子は元氣に飛びまはつてゐながらも、何となく顏の色が少しく惡かつた。それのみならず、小さい、メレンスの子供蒲團をふみに取出さして、寢るのだといつて、その上に腹這ひになつてゐたりした。しかし子供蒲團の上に寢そべることは、お人形さんを寢かすのだといつて、ひとりで人形と一所に横になることも、めづらしくないので格別心にも掛けなかつたが、子供のことでは、何かにつけて、事を惡い方へ、大事に判斷しがちな私は、

「ふみ、お姉ちやんは、今日蒲團の上によく腹這ひになつてゐるぢやないか。」

「えゝ、眠いねむいといつてゐます。」

「そして、今日は、何だかよく、むづかるね。」

「えゝ、何だか泣いてばかりゐるんだよ。」茨城縣の山の中から五月の初に出て來た彼女は、まるで落語家が山出しの女中の眞似するとほりの言葉であつた。

「どうもさうのやうだ。これでは、うつかり外に連れて行かれない。」私は大事をとつた。

午後からは兎に角自分だけは市中の方に用事があるのと、明後日鹽原へ行くには少々買ひ物もあるので、午飯を濟まして出で行くつもりで、子供等と食卓を共にして飯にした。すると、近來傍眼には食慾の好くなつてゐた百合子が、めづらしく、まだ初の一膳をやつと食べるか、食べぬに、茶碗と箸をそこに置いて、ぐづ〱いひながらそのまゝ後に寢轉んでしまつた。

私は餉臺に對坐して、それを見ながら、

「おやッ」といつた。

百合子に附いてゐたふみも、同時に、

「どうしたんでせう。」と怪んだ。

「こいつは、大變なことになるかも知れぬぞ。」

と、私は、いきなり自分の茶碗と箸とを、がちやりと下に置いて、そつちへ廻つていつて、百合子の様子を見た。顏色が急に、今までよりも尚ほ蒼くなつて、唇の色が淡紫に變つてゐる。

「おい、すぐ、お前とふみと二人で下の細田さんのところへ連れていつて診てもらへ。」

私は、かねて、まさかの時の醫者の注意や、新聞の家庭衞生欄の記事を讀んで心得てゐる知識から、それが大事の前兆

ではあるまいかと危んだ。すると、愚かな妻は、つまらぬ騷ぎをするやうに笑つてゐて、容易に起たうとしない。
「馬鹿！　横着者めが。さつさと醫者につれてゆかないか。」
それで妻は、自分で百合子を負つてふみと一所に醫者にいつた。
けれども私は安心がならず、後から自分もいつてみた。醫者は、熱もないから下劑を出して置く。食物は粥と鰹節とをやつてくれといつた。
歸りがけに、熱もないから、夕方湯に入れても差支へないかと訊くと、差支へないといふので、先づ大したこともないと思つて、私は安心した。
子供は、先刻、一時さつと蒼くなつた顏の色もいくらか回復して、素人眼にも格別平常と變りはなかつた。それで私は安心して外に出ていつた。出がけに、醫者が構はぬといふから二人を風呂に連れて行くやうに、いひ置いて出ていつた。今の家を新築してから別棟で小さく建てる豫定であつた浴室が、今すこしのところで使用出來なかつた。
鹽原へ連れて行くには、一とほり入用の品は調つてゐたが、道子の穿く靴がなかつた。まだやつと歩き出した時分の赤い羅紗の靴の古くなつたのしかなかつたので、百合子が先から穿いてゐた赤皮の靴がもう小さくなつたので、それを道子にゆづり、百合子に新しいのを一つ買つてもらひたいと、妻が玄關に來て出て誂へた。
「よし〳〵買つた來てやるぞ。」と、いひのこして私は出ていつた。
丸ビルの雜誌社に二ケ處ばかり寄つて用事を果たし、それから銀座の方へ廻つて、松屋で少々買ひものをして、百合子の赤皮の靴と一緒に、包みに包んだ三四箇の買ひものをぶら下げて夕方五時頃に私は歸宅した。
そして玄關から上るのが、もどかしく、いつもするとほりに、すぐ庭から緣側の方へ廻つて、「おい、お姉ちやんはどうした？」と、何より先きに訊ねた。妻が出て來て、そして庭から眼で百合子の姿をさがした。
「元氣です。變りはありません。」
「通じはあつたか。」
「ありました。澤山ありました。」
「さうか。それはよかつた。」
さういつてゐるところへ二人の子供がいつものやうにぞろぞろ出て來た。
「お父ちやん、おみやは。」といつて、傍に寄つて來た。
さういふ百合子の顏は先つきの蒼い顏色など少しも見えなかつた。今風呂から歸つたばかりのところであつた。とにかく私は安心した。
用事の都合で鹽原ゆきは、いよ〳〵二十九日に定めた。

翌日も朝は粥と鰹節とで御飯をたべた。が午少し前になつて、妻は、
「百合ちやんは、今朝も亦昨日のやうなものが澤山下つた。」
といつた。
私は、それを聞いて、又頸をかしげた。
「又下つた。……昨日の下劑が利いたにしては少しく時間があり過ぎるな。とにかく、もう一度醫者にいつて訊いてみよう。……ふみお前いつて、又、今朝下りましたが、どんなものでせうといつて訊いて來てくれ。」さういつて、女中を出してやつたが、又、ふみを遣つたのでは安心出來ず、又あとから自分で出掛けた。そして、細田氏に相談すると、たゞ話を聞いたゞけではよく分りませんから、連れて來た方がいゝでせうといふので、私は、ふみを返して、妻に連れて來るやうに命じた。
これから體溫器を挿んでみると、細田氏は、
「うゝ、ある〳〵。三十七度三分ある。これぢや、あんまり動かさない方がいゝです。そうつと寢かして、なるたけ安靜にしておかないといけません。一度浣腸をしませう。そして午後に行つて腸を洗ひませう。」
それからその場で浣腸だけしてくれた。それを妻が負つて歸ると、間もなく又少し通じがあつたが、それだけでは滿足出來なかつた。
私はその日の午後三時までに、芥川氏告別式に參列したいと思つてゐたので、その前に細田醫師の來てくれるのを待つてゐると、一時頃になつて來てくれた。百合子の腸洗滌はもう度々家でも經驗があるので、私達は女中を手傳はして早速その用意にとりかゝつた。
細田醫師が浣腸器のゴム管をとつて、肛門に挿入すると、私は、分量のもり目のあるガラス瓶のところを持つてゐた。妻と、ふみの姉のまつとは百合子の手を握つたり、胸を抑さへて、いろ〳〵に賺かしてゐた。ヒステリイ質の臆病な百合子は、魂切るやうな聲を出して泣きつゞけた。が、そんなことには構はず醫者は幾回となく洗滌藥と微溫湯とを注いだ。私は、それを高く持ち上げたり、又低く下げたりした。不淨物の溶解したのが、瀨切つて迸り出た。私はそれをバケツに投下した。
そして洗腸が濟むと、子供は好い心地になつたものやうに、すや〳〵眠に陷つた。
細田氏は、私が、今日これから芥川氏の告別式に出掛けることを知つてゐるので、
「近松さん、安心してお出掛けなさい。浣腸もすんだから、これで大丈夫ですよ。」といつてくれた。
私は醫者を送り出して置くとすぐ俥に乘つて郊外の停車場まで駈付けた。手先を消毒したレゾールの臭ひがもの〳〵し

く鼻を打つた。何かしら疫病らしい豫感に襲はれた。
そして東中野の停車場で、これも芥川氏の告別式に往くところのエヌ氏に出會つた。エヌ氏は丁度二ケ月ばかり前に疫痢で愛兒の一人を失つたので、私は電車の中で、レゾールの臭氣のする自分の手先をエヌ氏の鼻の前に一寸持つていつて、
「このとほり今洗腸を手傳つて來たばかりのところです。」といつて、子供の病狀をはなした。
「熱が下つても決して安心出來ませんよ。私のうちの子供なんか、翌日になつて熱が下つたから、あゝ、これならもう大丈夫だといつてゐて、又急に惡くなつたんですから。」
「あゝさうですか。」と、いつてゐたが、私は、自分の欲目に内の子供はまさか疫病ではあるまいと思つてゐた。
告別式には一寸時間が遲くなつたと思つたので、エヌ氏をさそつて、萬世橋から自動車で谷中の齋場についた。丁度いい處にいつた。
一時間ばかりで式が濟むと、歸りは鶯谷驛から池袋の方を廻はつて、少しも早く自宅に歸つてみたいと思つてゐたのであつたが、いつも、よく、こんな會合のくづれで一所になる中村氏と德田氏とに誘はれて、一寸のつもりで、森川町の德田氏のところへ自動車で立寄つた。そこで暫く休息して西瓜を御馳走になつたりして、私はいゝ加減な時分に歸宅したかつたのだが、德田氏が何處かへ夕飯を食べにいかうぢやないかといふのに誘はれ、そこから又上野の三はしまで出掛けて、鳥鍋で三人で夕飯の馳走になつた。綺麗な浴室で風呂に入つたりして、すつかり好い心地になつてしまつた。時に子供のことも氣になつたが、浣腸もしてあるし、大した熱があるといふ譯でもないのだから安心してゐた。
それから又自動車で、中村氏とは牛込の矢來町で乘り別れて、自分ひとり新宿から又電車に乘つて、やがて自宅へ歸り着いたのは、もう夜の八時半を過ぎてゐたが、玄關で、いきなり、
「おい、子供はどうだ?」と訊くと、
そこへ立ち出てた妻が、
「大變好いです。」といふ。
私は、さうかといつて、先づ安心しながら、急いで洋服を脫いで、直ちに井戸端にいつて、冷水で身體の汗を拭いて、素つ裸體で蚊張の中に入つて來た。
すると、二人の子供はまだ眼を覺ましてゐて、女中のまつと何か話してゐるところであつた。
「熱は?」と妻にきくと、
「熱は六度八分です。」
「ほう、上等だな。……どれ脈は?」といひつゝ私は、そつ

と百合子の脈を握つてみると、至つて穩かである。
「よし〳〵、上々吉。これなら、明後日は、いよ〳〵鹽原に行ける。」私は子供のやうにいつて悅んだ。私はそれから安心して、奥の六疊に設けた自分の寢床にいつて、就眠した。
ぐつすり眠つて、ふと子供の泣く聲で眼が覺めた。廊下を一つ隔てた八疊に母親と二人の子供が一つ蚊帳に寢てゐるのであるが、その泣き聲は、眠りながら聞へたのであつても、どうも小さい方ではないらしかつたので、私は、枕の上で耳を澄ますと、母親が何かしてゐるらしい。私は、いきなり、がばと跳ね起きて出ていつた。
「どうしたんだ?」廊下を急ぎながら聲を掛けた。
「お姉ちやんが吐いたんです。」
妻はさういひながら、百合子を敷蒲團の隅に置いて白い敷布を捲つてゐるところである。
「どんな物を吐いた?」私は、あの病氣だと、珈琲のやうな色をしたものを吐くと聞いてゐた。
「水のやうなものばかりです。」
「どれ。」といつて、蚊帳の中に入つていつて、吐物に濡れた敷布を見ると、なるほど肉眼には水のやうにたゞ濕つてゐるばかりである。
私は、しかし、それでは少しも安心出來なかつた。かねて恐怖してゐた、最も恐るべき運命が今いよ〳〵愛兒の上に襲ひかゝつて來たもののやうに思はれた。
「いよ〳〵大變なことになつてしまつた。」私は歎息するやうにいひながら、そこから又中廊下を隔てゝ茶の室の六疊に姉妹で寢てゐる、まつとふみを起した。
「おい、まつ、お前夜半に氣の毒だがなあ、ふみと二人で細田さんに行つて來てくれ。只今百合子が吐いたから、夜分に實に恐れ入りますが一寸御苦勞ねがひたいといつて。行つて來てくれ。」
さういつて、欄間の壁に掛つた時計を見ると、二時である。
「惡い時刻だなあ。……百合子を奪られてしまふかもしれぬ。」私は泣き聲になつて、いひながら、何度となく子供の額に手をあてゝ見たり、手首を握つて脈をみたりした。そして一刻千秋の思ひで、細田氏の來てくれるのを待つてゐた。
やがて女中が歸つて來て、たゞ今行きますといふ返事をもたらした。間もなく細田氏は夜中をも厭はず來てくれた。
細田氏は半分はづした蚊帳の傍にたゝずんで、私から、昨夜來の容態をひとゝほり聽取した上で、
「どんなものを吐きました。」といつて、傍に捲つて置いた白い敷布を又擴げさして、水樣のものを吐いて濕つてゐるところをじつと見た。
「これだけですね。……熱はさうないやうだ。」と、檢溫器を挿んでみたが、

「熱はやつぱり三十七度三分だ。脈が少し早い。……とにかく注射をしておきませう。」といつて、アドレナリン、アンナカ、カンフルの強心消毒劑を注射した。

さうしてゐる間に子供はまた枕に就いて、すや〳〵眠りはじめた。

「これで、又、きつと、よく眠るでせう。なるだけ、靜と寢かすがいゝです。」といつて、細田醫師は歸つていつた。

「どうも夜半に御苦勞さまでした。」と、私と妻は玄關まで送り出した。

その夜が明けて翌日は、存外子供は平穩であつた。

細田氏は午前中にも又來診してくれた。格別異狀はなかつた。脈も體溫も夜半と變りはなかつた。たゞ子供は眠りがちであつた。

「眠るのは構ひません。」細田氏は、「また午後に來て診ます。」といつて歸つた。

とにかく、見たところ病勢はさう劇烈といふ方ではないし、吐いたといつても、水樣のものを一度吐いたきりであつたから、私は安心してゐた。あの病氣ならば、もつと急速に襲來する筈である。それに注射もしてあるのだから、陽氣あたりの一時的の緩漫な胃腸カタルくらゐのものであらう。それに半歳以上も氣にかゝつてゐた自分の仕事の一つが一昨日不滿足ながらも、雜誌に一度掲載分だけ形付いたので、次は今度こそ期日に追掛けられないやうに出來すとしても、まだ餘日があるし、それに、今朝ほど校正刷りを持つて來たところを見ると、ある一ケ處のほかは、さう出來の惡いものでもない。この先は十分に構想を練つておいて早く纏めたいものだ。……

もう長い間工事にかゝつてゐた風呂場がやつと昨日までに出來上つたので、水道仕掛けのタンクだけまだ濟んでゐないが、水はバケツで汲み込んでもいゝから、今晩から久しぶりに自家の風呂に入りたいものだといつて、その方の支度を女中にいひつけておいた。私は何となく、久しぶりに心に一寸餘裕が出來たやうな氣持になつて、醫者が歸つたあとは、サル股と、半襦袢一つの裸體になつて、手拭でうしろ鉢卷といふ元氣で、物置きの道具箱から小さい鋸を持ち出して來て、庭の一隅に、ひどく繁茂して來た業平竹の一二本を挽き切つて、一々枝を拂ひ、節を平にし、湯殿に手拭掛けをこしらへたり、去年の暮にやつと住めるやうに出來上つてから、そこら中出たらめの處に釘などを打たぬやうにしてゐたので、どうしてもこゝには一つ折れ釘がほしいといふ處に釘を打つたりしてゐた。さうしながらも、時々子供の傍に戻つて來て、すや〳〵眠つてゐる顏をそうつと覗き込んでみたり、手に觸つてみたりしてゐた。どうも蠅が馬鹿に多くつていけないので、ふみを寢てゐる枕頭に附けておいた。

それから又、やゝ暫く私は風呂場のまはりに立ち働いて今度病室に來て見ると、子供は眠を覺ましてゐて、何か知らぐづぐづいつて、氣だるさうに、身體をあつち此方に轉がしてゐる。

「どうしたんだ？」と、ふみに訊くと、

「ぽん〳〵が痛いといつてゐるの。」

私はそれを聞いて又更らに胸を衝かれたやうな心地がした。

「なに、ぽん〳〵痛いといふ？」

「先刻からぽん〳〵が痛いといつてゐるの。」

見ると、先刻まで平常とあんまり變らなかつた顏が又蒼白になつて、口のまはりが血氣を失ひ、唇は淡紫色に變つてゐる。私は、一昨日から今まで、さうではあるまいかと、疑ひつゝも、まさかと思つてゐた病症がどうやら眞性の疫痢に相違ないといふ確信が生じて來た。とにかく打つちやつておいては可けない。

「ふみ、直ぐ細田さんにいつてくれ。……どうもぽん〳〵が痛むといつて、急に顏の色が惡くなつたつて。」

私は臺處にゐる妻や女中に聲をかけた。

「おい〳〵、又お姉ちやんが惡いやうだ。ちえッ、そんな洗濯物などどうでもいゝ。子供が一人死んでみろ。洗濯も飯炊きもあつたものぢやない。」と、追ひ立てるやうにいつた。

ふみを醫者に遣つてをいても、私はそのまゝ靜としてはゐられなかつた　暑い日の照るところを、私は後から追掛けると、ふみはもう戻つてくるところであつた。

「細田さんは何といつた。」

「すぐ後からまゐりますといひました。」

細田氏はすぐ來てくれた。子供は、いかにも苦しさうに絕えず寢返りを打つて、ぐづ〳〵泣いてゐる。

細田氏はじつと脈を取つてゐたが、暗い顏をして、「脈が隨分早い。」といつて、それから又聽診器を心臟部にあてたり、腹部に手をやつたりして暫く注意深く診察してゐた。

「どうでせう。貴下に診ていたゞいてゐれば澤山な譯ですが、誰れか他の人に診てもらひませうか。」

「さうですなあ……。」細田氏は、しばらく考込んだ揚句、「私の知つた醫者といへば瀨川にでも診てもらふんだが……貴下の牛込の醫者はどうです。」

私は、心の中で細田氏がさういつてくれるのを待つてゐた。牛込の手島氏は、一昨々年の九月、百合子が生後やうやう十一ケ月になつた時母親が重患に罹つて、不意に母乳に離れた時手島氏の病室に入院させて、食餌に馴らしてもらつて以來度々診てもらつてゐた關係があり、つい一と月ばかり前に久しぶりに一寸自分で寄つた時にも、暫く見ぬ間に二人とも大分大きくなつたでせう。ぜひ一度連れて來て見せてもら

ひたいといつてゐたのであつた。私は、その後の自分の丹精を自慢ながらに、ぜひ連れていつて見てもらひたいと思つてゐた。いつも手島氏で目方にかけて見ると、表に掲げある幼兒の平均重量よりは二人とも五六百目から三百目くらゐは少なかつた。どうせ父親が十一貫目をあまり出ないのであるから、さう肥つた子供でありやうもないが、しかし、出來るだけ痩せた子供にさせたくなかつた。すると一昨日、今度の病氣で、はじめて細田氏に連れていつた時量つてみると、滿四歳に三ケ月足りない子供にしては、滿四歳の三貫四百目に丁度四百目足りないだけであつた。この子供の體歷にしてはめづらしく、平均重量に達したといつて悅んでゐた日が病の發端であつた。

「百合子もやつと此の頃丈夫になつた。」

と、先達つて中妻といひ合つてゐた。それで、今度は、「もう、あんなことをいふものぢやありませんなあ。」と後悔してゐるところであつた。

で、私は卽座に細田氏に同意した。

「手島さんなら、すぐ來てくれます。」

「それを一つ呼んでみるか。」細田氏は考へ深さうにいつた。

子供は、やつぱり苦しさうに頻繁に寢轉びを打ちつゞけてゐた。私と細田氏とは話を中途にしては、そちらを向いて脈を握つてみた。私にはどうもよく脈が分らなかつた。

「よく分りませんなあ。」

細田氏は、それには答へようともせず、ぢつと頭を澄まして脈を抑へてゐた。

「うゝ、やつぱり百五十くらゐある。……あれから吐かないですか？」

「えゝ、吐くのは昨夜きりです。」

「とにかく一本注射しておきませう。」

といつて、又アドレナリン、アンナカ、カンフルを一本注射した。暫く暴れてゐた子供に、暴れ疲れたゝめか、少しすやすやとなりかけた。

「こゝでは、話聲が耳についていけないから。」と細田氏はいつて、私達は隣室に座蒲團を移して、そこで相談をした。

「どうでせう？……ぽん〳〵が痛いといふのですから、まだ腸の中に惡い物が澤山あるにちがひないですが、もう一ぺん腸を洗ふことは可けないでせうか。」

「さあ、それを考へてゐるんだが。洗ひたいのはぜひ洗ひたいが、その爲にひどく泣いて、此の上にまた心臟を疲らすのが危險だから、どうしたものかと思つて……」

「なるほど……」

「心臟を冒かされると、それつきりだから……手島さん來てくれるだらうか？」

「手島さんは、さういひさへすれば來てくれるです。つい先

日も久しく見ないから、ぜひ一度見たいといつてゐたくらゐです。そして急の時には、電話を掛けさへすればいゝ。わざわざ迎へに來たりする時間を爭ふやうな時には、そんなことをして居られないといつてゐましたから、お宅の電話を拜借して電話を掛けませう。」

それから女中に命じて細田氏の宅に急がした。

「奧さんにさういつて、牛込の手島さんへ電話をかけてもらへ。東中野の私の家といへば分るから。」

細田氏は始終落着いた態度で考へ深さうにしてゐたが、獨言のやうにいつた。

「手島さんが都合よくこの一時間か二時間以内に來てくれゝばいゝが、それより遲くなると、このまゝにして手島さんの來るのを待つてゐられない。一つ思切つて別の注射をやつてみるかな。」

「それはどういふ注射ですか。」

「やつぱり同じ注射ですが、又少しく違ふ。そいつをやると大變に效果があるんだが、針が今までのよりかずつと太くなつて、時間が長くかゝるから、ひどく泣いて暴れやしないかと思つて、それも考へなけりやならないし……」

「はあ。……きつと泣くですなあ。……泣くのは構ひませんが、その爲めに、心臟を疲らしてはなりませんなあ。」

「實に痛し痒しだ。腸も洗ひたいし太い注射もしたいんだが……」

細田氏も考へに餘つてゐるやうにいふのであつた。

そこへ、待つてゐた女中が歸つて來た。

「手島さん居つたか。」

「手島さんは、葉山へおいでになつて、お留守です。明日の朝でなければお歸りになりません。」平素から、女中としての用事は滯りなく果すかはりに、何につけても膠も艶もない口の利きようをする一番年長の女中のまつは庭の方の緣側からさういつたきりで、すぐ又庭から裏の勝手口の方に廻はつていつたきりであつた。

私と細田氏とは、互に失望したやうな顏をして、顏と顏を見合はしただけであつた。

細田氏は、女中の向うにいつたのに、何か追ひかけて、訊かうとしたが駄目であつた。

「明日になつて來たんぢや駄目だ。今一時といふところが大事のところだから。」さうして思案に餘つた風であつたが、

「思ひ切つて太い注射をしよう……」

といつたが、また「隨分痛いからなあ。」と、ひとりで言ひ返して、

心は、とつおいつしてゐた。

私は此の際何ともいひやうがなかつた。たゞ醫師に一任し

てゐるほかはなかつた。
「やりませう。……それぢや私一寸自家へ歸つて藥をこしらへて來るから。……三十分か四十分その爲に時間がとれるけれど、そのくらゐは遲れてもさう急に心臟を冒すやうなこともあるまい。……それと腦に來るといけないんだが、大抵大丈夫だらう。……それから氷で心臟のところをも冷やすやうにしておてい下さい。」
「えゝ、さうしませう。……腦を冒すといふと、どんな兆候を見せますか。」
私は怖えながら訊いた。
「吐くのです。」
「あゝさうですか。」
細田氏は注射藥を用意する爲めに歸つていつた。
その間に私は妻や女中を指圖して氷枕のほかに額を冷やす道具を藥品店に取りに走らしたり、小さい氷袋で、小さい心臟部を冷やす方法をとつたりしてゐた。
四十分ばかりして細田氏は藥品を注射する機械を自分で携へて俥でやつて來た。
「どうです？　様子は。變りはありませんか。」
「眠つてばかり居ります。」
「そうつと寢かしておいて下さい。……新しく調劑して來たのでまだ一寸熱いから少し冷まさなけや。」といつて、細田氏は團扇を取つて、目もりをした大きなガラス瓶を、はた／＼煽いでゐた。
そして、それが適度に冷却したところで、
「さあ、どうかな。」と病兒の方を覗いてみながら、「痛いからさぞ暴れるだらうが、やりませう。その代りに、こいつをうまくやらしたら必ず效く、葡萄糖は、とても具合の如いものですから。」
といつて、纖明な、小さいガラス管樣の瓶を取出して、その細い口のところを、こつ／＼と毀して、透明な高價藥らしい液體を、件の目もりをしたフラスコの瓶の中にたら／＼と滴らした。
「さあ、皆さんに手傳つていただかねばならぬ。誰れか看護婦の代りに、こゝを抑へてもらふ人が一人ほしい。」
「ぢや、まつお前それをやんなさい。どんなことですか。」
「それぢやあんた、こゝを強く抑へてゐて下さい。強く。」
と、細田氏は自分の持つてゐたあるガラスの管の口を、まつの指先にゆづつた。
「近松さんとお母さんは百合ちやんの身體をかゝえるやうにして、何とかかといつて賺かしてゐて下さい。きつと身體を動かすだらうから。」
「おい、ふみお前も來て、この手を持つておれ。……姉や、お前は道子の守りをしてゐるんだよ。こちらに來なくつてい

いから。」私は怒鳴つた。
細田氏は脫脂綿にアルコールを浸して、恐ろしく太い針を消毒してゐた。
「見てゐるのが厭で……」妻は、病兒の胴のところを靜つと抑へながらいつた。
子供はもう度々の經驗で、今に又きつと痛いことをされるといふことを知つてゐるので、うと／＼としてゐた眼が覺めると、つんと鼻を突いて來るアルコールの臭とともに泣き出した。
細田氏は、子供の左脚の太股のところをアルコールを含んだ脫脂綿で淸潔に拭いた。
「さあ、いゝですか、よくそこを抑へてゐて下さい。」と、低い、力のこもつた聲でいふと同時に、妻揚枝ほどもある太さの部分まで、ぐさりと注射針を子供の肉に刺し入れた。
病兒は、
「ひやあ！」と、魂切るやうな悲鳴を揚げて苦んだ。
「かうすると、きい／＼が、ぢき癒るんだからねえ。すぐ濟むよ。」母親は爲方なしに氣安めをいつてゐたが、痛さは大人にも察しられた。
細田氏は左手に注射針を持ちながら、右手で一生懸命にゴムの壓搾球を握つてゐた。
脈を握つてゐるのと、顏色を觀測してゐるのが、私の役目であつた。注射の效果は顯著であるにしても、その前に苦痛と身體の動搖との結果、心臟を冒したり腦につけるやうなことがあるのが、氣づかはれた。私は、今にもそれが實際に生じて來るやうな恐怖に襲はれてゐた。見てゐるうちに、思ひなしにか顏色が惡くなつて脣の色が淡紫色になつて來るやうに思はれた。それは決して思ひ做しばかりでもなかつた。やがて五分間もつゞいてゐる間に病兒は顏の色が蒼黃色くなつて、苦痛の脂汗が面に滲み出してきた。脣が乾いて一生懸命の努力をしてゐることが見えた。
「さ、もちつとの辛抱だ。」細田氏はかけ聲をして頻りに壓搾球は握つてゐた。
「どうでせうねえ、顏色が大分惡くなつたやうですが……」
細田氏は、一寸こちらを振向いて、
「なに大丈夫だ。……どのくらゐ入つたか。」と、目もりをしたフラスコを覗いてみて、
「もうぢき百だ。……も少しの辛抱だから、やりかけたついでに、せめて百は入れたい。百入ると大抵十分だ。」
「おねえちやん、もうすぐ濟むんだよ。」母親は慰めた。
「あゝ、もう、すんだ／＼。」私はそれにつゞけていつた。
ものゝ十分間近くも續けて、やうやく注射針は拔き去られた。手早くそのあとへ萬猪膏が貼附せられた。局部は、多量の藥品のために不自然に膨んでゐた。それが次第／＼に全身

に吸收せられて行くのである。

「さあ濟んだ〳〵。」細田氏も、ほつとしたやうにいつた。

「さあ、濟んだ。これできい〳〵が癒るんだよ。」兩親の口から幾度となく同じ慰安の言葉がふりそゝがれた。

細田氏はそれから又脈をとつてみたり、心臟に聽診器をあてゝみたりして、

「なに大丈夫だ。」とうなづいた。

「今のために格別の故障はなかつたやうですか。」

「ありません。……この注射が效けば大したものだ。」

「さうですかねえ。」

子供は、ひどく苦んだ後で、又眼を瞑つて眠りかけた。細田氏と私は隣室にいつて話した。

「今の藥で大抵大丈夫と思ふが、今晩中持てばいゝです。」細田氏は自信のあるやうにひとりごちた。

「そんな效果の著いものですかえ。」私には、まだよく分らないので訊ねた。

「それは好いものです。……それも時期を失しては、いくら藥が好くつたつて駄目だが、今注射をすれば最も好い時だ。……これで今晩中、明日の午頃までに持ち堪へるか、いけなくなるか、どちらかです。それを過ぎれば先づ生命は取留める。……明日の朝まで、どうかなあ。」細田氏は幾度も頸を傾けながらも自信もあるやうにいふのである。

子供はそのまゝ眠つてしまつた。

「どうも、あんまり眠り過ぎるやうですが、このまゝになるものではありませんか。」眠りは眠つて又私達には氣になつた。

醫者は、

「このまゝ眠つて、それつきりになるやうなことはあるものぢやありません。……又夜分に見に來ます。」といつて、歸つていつた。

それを玄關に送り出しておいて、私は病兒の枕頭に戻つて來た。そして妻に向つて話しかけた。

「このまゝ眠つてしまうやうなことがあると、實に飽氣ないものだなあ。」私は感傷的な氣持になつて來た。

「疫痢になるとは思ひませんでしたなあ。」

「うむ、家のやうに始終注意を怠らないでゐて、どうしてこんなことになつたものかなあ。」

私は、ぐつたりとなつて、そこに寢轉びながら、病原となるやうな思ひあたることを、あれかこれかといろ〳〵考へ出してみた。

「食べたもので中るやうなものは一つもないねえ。まつたく時候あたりだ。先達つて二十二日三日と急に暑くつて、それが又どかつと二十度も氣溫が下がつた時に冷えたんだ。それにちがひない。」

「この間新宿の三越に買ひ物にいつた時に、あんまり暑いので、我折つて、そこのステーシンから、どうしても歩かなかつた。あれなぞきつと障つてゐます。」

「それだ。その時分から胃腸の活動が鈍つてゐたんだ。……惡くなりかけてからぢや可けないが、もつと早く、私が十六日に箱根に仕事を持つていつた時分に鹽原に連れていつて居れば、こんなことには、きつとならなかつたんだなあ。つまり酷暑に對する抵抗力が負けたんだ。」私は、そんな返へらぬことをいつて悔んだが、爲方のないことであつた。

私は昨夜々半の二時に眼を覺まして、それから四時頃から又二時間ばかり寢るには寢たが、今朝一寸の間少し安心してゐたきりで、それから引續いて心配のために、ひどく自分の身體が疲勞を覺えて來た。午餐もいつの間にか過ぎてしまつて空腹になつてゐたが、それでゐて何にも口に入れてみる氣持ちにならなかつた。わづかに砂糖湯をこしらへて、それを口から流し込んだ。

私は又しても病兒の脈搏を測つてみた。相變らず十秒に廿二三打つてゐる細い頸動脈のところが恐ろしいやうに急速に躍つてゐる。

「あれほど疫痢が恐い〳〵と、私は年中口癖のやうにいつてゐて、たうどうやられてしまつた。……どうも、どちらか一人はやられると思つてゐた。惡くすると二人ともやられるんだが、何だか此のまゝ二人が無事に育つものとは思へなかつた。他の病氣なら、肺炎にしたつて、發疹にしたつて、私くらゐ注意深く氣を附けてゐるんだから、決してやられはせぬと思つてゐたが、疫痢だけは爲樣がないと思つてゐたんだ。自家の子は全く時候の酷しさに負けたんだから、早く涼しい溫泉場にやつておれば、こんなことにならなかつたんだ。」私はいふことが、又しても同じところに戻つて來た。

病兒は時々半ば夢中になつて寢返りを打つては切なさうに湯を求めた。そして怠儀さうに長い吸口から渇々飲みほすと又そのまゝごろりと寢返つた。

そんな狀態がずつとつゞいた。夕方になつて、自分がまゐつてしまふやうなことがあつてはならぬと思つて、自分で阪下の細田醫師を訪づれ、鎭靜劑の水藥を調製してもらつた。それと同時に病兒が渇を訴える時、湯茶の代りに飲ますべき水藥をもらつて歸つた。

夕飯時が過ぎて夜になつた。子供は時々眼を覺ましては泣き聲を立てゝ飲みものを欲したが、それを與へると、すぐ又眠つた。醫者が午後の注射の效果を自信をもつていつたので、こちらも大抵大丈夫だらうと思つてゐたが、それは考へて見ると何の自信もないことであつた。深夜にどんなことになるかも知れなかつた。常から、眠りながら齒ぎしりをする癖のある子であつたが、殊に今夜はそれがひどくなつて夢中

に、遠くの座敷まで聞えるほどの音を立てた。
　ともかくも私達はめい〳〵の寢床に入つた。母親が一人病兒の傍に寢た。三つになるのは女中のまつが抱いて寢た。私は一と眠りすると、自然に目が覺めた。そしてがばと跳ね起きて蚊帳から出ていつた。そして病兒の蚊帳の中に入つていつて脈をとつてみた。脈はやゝ落着いてゐるやうである。十秒に十七八から二十を算するところをみると少し減じてゐる。熱もさう高くはなささうだ。
　母親は湯のやうになつた氷枕を取換へてゐた。私はそこに横になつてゐると、感傷的の氣持ちが綿々として起つて來た。
「こんなに心配して苦勞をするなら、自分の方で死にたい。芥川ぢやないがその方が、氣が樂だ。」
といつた。
　その氣持ちは決してセンチメンタルではなかつた。子供を殘して自殺する氣には、私はどうしてもなれないが、もし今子供が必ず死ぬものとして、その死に他人が代ることが出來るものならば私は子供を生かして自分で死にたいと思つた。
「私ももう今まで生きてゐれば澤山だ。自分が死んだあとで、まさか子供が路頭に迷ふやうなこともないだらう。さうすれや、こんな心配をするより此方が代つて死んだが方がいい。」
私は妻に向つて喞ちた。
　病兒は時に苦しさうに渴を訴へて、半夢中に吸ひ飲みから、それを吸つては、ぐつたりと眠つた。そんなに心配してゐたにもかゝはらず、太い注射針の藥品の効顯があつものか、その夜は變事もなくて曉方になつた。他に異狀もなさゝうであつたが、脈は又少し早かつた。十秒に二十二三くらゐ打つてゐた。素人には分りにくいこともあつた。それで女中のまつに命じて、細田氏に走らした。
「脈が少い又早い。一寸おいでをねがひたいつて。」
　細田氏は早速來てくれた。そしてひとゝほり診察した上で、
「又一つ小さいのをやつて置きませう。」といつて、普通の注射をした。
　十時に細田氏が又來診してくれた時に、相談の結果、腸洗滌をすることにして、それを決行した。大分腸内に殘つてゐる不淨物が出た。そのためか病兒は又一しきり眠に落ちた。その日は午後の二時頃に牛込の手島氏が來診してくれることになつてゐた。
　手島氏は約束の時間のとほりに來てくれた。細田主治醫と私とから交る〳〵今までの經過を聽取したうへで一とゝほり診察したあとで、
「なに、もうこれなら、さう心配はありません。」といつたが、「しかし、油斷は出來ません。」おごそかにいつた。そして二十七日の朝粥に鰹節で食餌を取つたり今日でまる二日あまり絶食でゐることを聽取したあとで細田氏と相談の上で鰹ぶしのスープをコーヒーのしやじに二杯ほど與へてみることをいひおいて歸つた。

　尙は手島氏との相談の結果、細田氏はその夕方頓服下劑を投藥してくれた。その夜の中には通じがなかつた。昨朝來診した時にそのことを話すと、浣腸をして歸つたが、そのあとで果して大量の便を排泄した。私は、老眼鏡をかけて、まるで鼻先に便が附着しさうなところまで顏をのぞけて、何枚も重ねた新聞紙の上にひろがつたその便を檢査した。それには恐るべき黴菌が無限に含んでゐるやうで氣味が惡かつたが、私はそれを少しも意に介しなかつた。それから病勢は昂進しないで、少しづつだん〳〵回復期に向つたやうであつたが、便通はその後二度ばかり下劑をかけただけで、あとは自然に、毎日三四回づつ絶食から少量の流動物を攝取してゐる病體に相應の便通があつた。發病後一週間くらゐになつて、はじめて病菌を含んだものが出て來た。素人にはたゞ不良なものが出るとのみ思つたが、醫者は、それが、まぎれもない疫痢菌であるといつた。私は今更のやうに悚然とした。そして、その病に罹つた小兒は大抵急速に生命を奪はれてしまふのが、私の注意の早かつたのと細田氏の手當てが屆いたのとで、やつと一命を取留めたことを思つた。
　それから引續いて、心配と取込みとの中に、今日でやがてもう二週間になるが、まだ野菜スープと葛湯ぐらゐの流動物でゐる。毎日一晝夜に四五回は便通がある。あんまり頻繁といふほどでもないが、その度に私は、いかなる眞夜中でも、がばとはね起きていつて、用便紙を持つて病兒の排泄するのを正面から凝視してゐて用を達したあとを拭ふてやるのは定つて私の役目である。他の者には決してそれをさせない。私が拭いてやつて、そして老眼鏡をかけてその糞便の良否を見ておいて醫者の來るまでしまつて置く。
　私は老眼鏡をかけて病兒の糞便を厭はず毎日々々檢視してゐる自身を省みて悲哀を感ずることがあるが、此の連日九十度の炎暑の中で惡疫と戰つてゐるのは、ひたすらに子供を愛する他に何ものもない今の私の心持ちの自然の表現である。
「私は生まれて始めてこんなことをする。百合子の便なればこそ、こんなことをも決して厭はないのだ。」と、時々それをいふ。そんなことをして子供を大きくするところに、私の生存の信條もかゝつて存するのだといふのほかはない。

（昭和二年八月九日作、中央公論揭載）

遺言

お父さんは、お前達が、學校に行くやうになつて、自分で日記が書けるやうになる時分まで、お前達の日記を書いて置いてやらうと思つてゐたが、ついに、そのことを怠つてしまつた。でも、お前達が、もつと大きくなつて、本當の性根が附くまで、お父さんが生きてゐたら、お前達の記憶にない時分――丁度今時分のことを話して聽かせようと思つてゐるのだが、どうも今の有樣だと、私はもう此の先あんまり長く生きてゐられさうもない。

まさか、まだ、こゝ一年や二年で此の世を辭さなければならぬやうなこともあるまいとは思つてゐるけれど、それは、いづれも生きた者の慾目であつて、人は皆な明日は無いものと覺悟をきめて、死後のことを考へておかねばならぬと思つてゐる。私は以前、獨り身であつた時分には死ぬといふことをそんなに恐れはしなかつた。勿論少しくらゐの風邪や病氣など、大して意に介さなかつたが、子は三界の桎梏といつてお前達といふものが出來てから、急に又生命が惜しくなつて死といふことがひどく恐ろしくなつて來た。ちよつとした風邪を引いたくらゐでもゝう、いろんな忌はしいことを豫想して、今度はいよ〳〵、これつきりになつてしまふのではあるまいかと思ふことが、めづらしくない。今、自分が死んではお前達が可愛さうだと思ふと、私はどうしても死ぬ氣になれぬ。これは、お前達が女學校を卒業するやうになつても、まだまだ本當の深い意味は解らぬことだが、日本一の作者に昔近松門左衛門といふ人があつた。その人の傑作に「女殺油地獄」といふ恐ろしい戲曲があるが、その中に、二人の小い子供の親であるお吉さんといふ餘處のおばさんが、强盜に金を無心せられて、ついに殺されるところがある。お吉さんといふおばさんは、まだ二十七であつた。二人の幼い子供が可哀さうなので、殺されたくない「……わたしが今死んでは、二人の子が流浪する。生命だけは助けて下され。」といつて、手を合はして拜むが、それでも殺されてしまふ。私は、このお吉さんといふおばさんの心が悲しい。

お父さんは、ちよつと何處か惡くつても、すぐ、死ぬんぢやあるまいかと思ふ。死んだらお前達を見ることが出來ぬ。

お父さんは、此の世から消えて無くなるのだ。

今のお前達には、まだ死ぬといふことが、どんなことだか解つてゐないのだ。それでも、百合子の方は、明けてやつと六歳だし、それに神經質の、氣の弱い方だから、もし私が死んで、その死骸の顏でも見たら、氣味が惡くつて、恐くつてきつと傍へは寄り得ないだらうと思ふが、道子の方はまだ四つだから、死んだも生きたも、そんなことは一切解らないで死んだ者をみても、たゞ寢入つてゐるくらゐに思つてゐるだらう。そんな時分に親に死別れる例は、世間に決してめづらしいことではないが、どうかしてお前達には、そんな不幸な目を見さしたくないと思ふが、それも運命ならば致方もない。

此の間も熱海で寢てゐて、いろんな惡いことを、あれかこれかと思ひ過してみた。醫者は、少し氣管を惡くして、咽喉カタルにかゝつてゐる普通の風邪だといつてゐるのであつたが私には、ヒポコンデリイで、どうしても、それだけでなく、もつと複雜な、惡性な、何かしらん運命的な病に冒されてゐるやうに思はれてならなかつた。このヒポコンデリイは、私が二十歳前後の頃までは頻りに私を惱ましたものであつたがその後、いつとはなしに、さういふ神經的な狀態から脫却してしまつて、私は、前いつたとほりに、少しくらゐの病氣など恐れなくなつた。ところが、お前達が出來てから、又三十年前のヒポコンデリイが、又蘇つて起つて來たのだ。

しかし、今度のは、單にヒポコンデリイとして、氣樂に考へてはゐられない。何時それが本當のことになるかも知れないのだから。

近年、毎年の例として、冬の初になると、とかく健康が優れないのだが、ことに去年の十月の末眩暈がして起き上られなかつた時から、どうも本當の健康が回復しないやうな氣がしてならぬ。今のお前達には、お父さんがきい〳〵が惡いのだといふことは、自分達が、又先生に、ぽん〳〵が痛くつてチク〳〵をされるのと同じことだといつて聞かすより、解らせやうはない。それほど今のお前達はまだ性根がないのだから、今、こんなことを話して聞かせたところで、賴りのないことだが、その十月の二十二日の夜半だつた、ふと氣持ちが惡いので眼が覺めてみると、何か胸苦くつて、眼を瞑つてゐながら、くら〳〵眩暈がしてゐるのがわかつた。もしガスのメートルのところでも閉め忘れてガスでも漏れてゐるのではなかつたと思つて、元氣を出して、そうつと起き出で、女中を呼び起して訊いてみたが、そんなことはないといふ。勿論ガスの臭ひもせぬので、やつぱり自分の身體のせいだと思つて、又そのまゝ寢床に入つて橫になり、それからすぐ又ぐつすり寢入つたが、翌朝七時頃今度眼の覺めた時には、とても苦くつて頭も持ち上げられない。そこら中

のものが、ぐら〳〵廻つてゐるやうで胸は吐氣がする。頭は痛む。私は寢床の中から精一ぱいの力を出して女中を呼んで、すぐ下の掛醫細田さんに驅けさした。いひ忘れたが、その時お前達は熱海にいつてゐて、お母さんはゐないし、こちらにはしいちやん（女中を子供達はさう呼んでゐた）一人だけしか居なかつたのだ。間もなく、細田さんは、しいちやんと一所に急いで來てくれて、廊下をどし〳〵踏み鳴して、私の寢てゐる奥の六疊に入つて來た。そして、仰向きに寢てゐる私の顏を、一と目見るなり、

「うむ、顏が眞靑だ。腦貧血だ。」

　といつて、注意して診察をして下すつた。

「ちよつとも頭を動かすことが出來ません。眼が廻はつて。」

私は微かにいふことが出來た。

「動かしちやいけません。さうつと、これなりにして置いて下さい。」

　そして又脉を握つてみながら、

「少し血壓も高いやうです。……一本やつて置くかな。」細田氏は獨語をいひながら、針を取り出して、

「これは少し痛いですよ。」

「えゝ、痛いくらゐのことは構ひませんからどうぞやつて下さい。」

　それから可なり疼痛を覺える注射を一本した。

「注意しないといけません。安靜にしてゐて下さい。何か書いてゐますか。」

「えゝ、それが切迫してゐるので、困つてゐるんです。」私は仰向けに細田氏の顏を見ながら力のない笑ひを浮べた。

「いくら急しくつても、決して仕事をしてはいけませんよ。」

「いや、かう胸苦しくつて眩暈がしてゐては、しようたつて出來ません。」

　細田氏は笑つて、

「仕事ばかりぢやない、何か頭の中で考へてゐてもいけませんよ。寢ながらいろんな計畫を立てゝゐるのもいけませんよ何にも考へようとしないで。」

「えゝ。」

　と、私は素直に返事をしてゐた。が、退引ならぬ執筆の仕事は、本當なら既に期日を過ぎてしまつてゐて、雜誌社の方でこの上どんなに無理をしてもらつてもあと、もう三日の餘裕もなからうと思はれた。尙ほそのほかに、まだ困ることが二つあつた。一つは生命保險の半期分の拂込み期限が二ケ月の猶豫期間をもう經過して、あと、もう五日の二十七日一ぱいで期限が切れてしまふのであつた。この保險のことについては、いつかも書いて遺しておいたことだが、保險の金だけは、どんなにしても、お前達に遺して置いてやらねばならぬと思つてゐるのだが、實のところ、その保險料の掛金にも半期

半期に追はれてゐる始末だ。そして保險金のことについてはまだ後でいふが、そんな具合で保險の拂込みは迫つてゐる。もし期日までに拂はなかつたらいふまでもない。保險契約を破棄したことになるので、私が腦貧血の爲に萬一それから五日過ぎて死んだなら、その口の保險金は受取れない。勿論、今まで二年間ばかり拂ひ込んだ金も損失になる。それで私は、じつと寢てゐながら思つた。どうぞ死ぬなら、猶豫期間の盡きない廿七日まで、この五日以內に死にたいものだと。

　でも、その日一日安靜に寢てゐたので、翌日から、ずつと快くなつた。幸ひ熱はなかつたので、割合に簡單に癒つたが醫者は決して何にもしては可けないと來るたびに嚴命した。しかし、前いつたやうに、差迫つての一つの仕事だけは、どうにかして完結しなければならない。その方を片づければ、從つて保險の掛金も出來るのだ。それから、も一つは、十月の廿五日一ぱいに是非とも返却しなければならぬ、利子の入る借金がある。それは、一割の延期料を拂へば、もう六ケ月延期して出來ないこともないが、延期すればするほど高い利子が嵩むので、ぜひ今度の切り替へで皆濟にしてしまひたいと思つたが、それも自分が寢てゐる始末では又出來ないことになる。まあ、こんなことは、お前達にいひ遺したつて、二十歳にも三十にもならぬと分らぬことだが、とにかく急ぎの仕事を一つどうあつても仕終うせねばならぬのに、お醫者さんは絶對に仕事をしてはならぬといふ。それで、その雜誌社の方へは止むを得ず、醫者から診斷書を書いてもらつて、翌日原稿を取りに來た使に原稿でない醫師の診斷書を封入して持たして歸した。さうして置いて二三日尙ほ靜養しゐながら、毎日午後一回來診してくれる細田氏に內證にして、仕掛けた仕事を、たゞ形ばかりに片づけてしまつた。そして自分で原稿を屆け、ついでに稿料を受取つて保險の猶豫期間の盡きる廿七日の午后、やつと五千圓の口の半期分百參拾五圓を拂つてほつとした。さあ、これでもう今死んでも構はないと思つた。

　その時、もしこれきりになるやうなことがあつたら、お前達にも、お母さんにも會はないで死んでしまふのだと思ふと、お父さんは堪らなくたよりなく悲しくなつて、その時も、これはぜひとも遺言を書いて置かねばならぬと思つたのだが、さて、病氣が良くなると、咽喉元過ぐれば熱さを忘るの譬へで、まだ〳〵そんなことの手廻はしをしないでも大丈夫だと思つて、それよりも眼の前の急しさに追はれて、つい〳〵忘れてしまつてゐる。

「子供も家內も留守で、ゐませんので……」と、私が心ぼそさうにいふと、

「すつかり病氣の良くなるまで、子供達は傍に置かない方が却つて靜養になりますから、やつぱり熱海に置いといた方がいゝでせう。」

と、お醫者さんはいつてゐた。しかし、さうして何うかこうか差迫つた用事を片づけてしまふと、もうすぐにもお前達を見に行きたくなつたので、家を出る時から、もしかしたら丸の內の用事を果してすぐ熱海に行くかも知れぬといひ置いて出て來たのであつた。昨日デンポウで明日迎へに行くと知らして置いたので、今日は誰れか來るであらうと待つてゐるであらうと思つたので、もし行かなければ、又行けないと知らしてやらなければならぬと思つた。親類の書生が來てくれることになつてゐたので、二日ばかり待つてゐたが、たうどう來なかつたので、いつそ自分でいつて來る氣になつた。この前十五日に一寸行つて、十七日に歸つて來てから丁度十日ばかりになるが、その間に病氣したので、何だか感傷的な氣分が募つて、もしかしたら、あれつきり會へなかつたものに會ふやうな氣がした。

そして六時過ぎに向うに着いて行つてみると、ガラス戸の窓も玄關の扉も閉鎖してゐて、外から聲を掛けて呼んでも返事がないので、近處の家主にいつて訊いてみると、家主では吃驚したやうな顔をして、主人夫婦玄關に出て來て、

「あなたが大變にお惡いといふので、奥さん、ひどく心配してゐらつしやいましたが、今日午後一時の汽車でお歸りになりました。：：：そして御病氣はいかゞですか。もうお加減はおよろしいんですか。」

上品な人柄の家主の主人はさういつた。

私はちよつと人騒がせをし過ぎたやうな極り惡さを思つたが、

「ありがたうございます。何だか、こうしてその大病人が自分でやつて來たところでは、まるで嘘のやうですが、一時一寸心配いたしましたので、腦貧血で頭が上らなかつたものですから。」私はそこに腰を掛けながら息を吐いた。そしてポケットから、葡萄酒を調劑してあるらしい、淡紅色の水藥を取り出して、

「ごめん下さい。」といひながら、瓶の口から一回分の筋を透してみて嚥んだ。

「迎へに來ると知らして置いたのですがぢや歸りましたか。」

「どなたかお迎へにゐらつしやるかも知れぬと仰有つて、待つてゐらしつたやうでしたが、十一時の汽車までお待ちになつたやうですけれど、おいでにならなかつたので、あんまり遲くなると、あちらにお歸りになるからと仰有つて一時の汽車でおかへりになりました。あなたが御自身でおいでになるとはお思ひにならなかつたのでございませう。」

「いや、毎度飛んだご厄介になります。」

「どういたしまして。」

私はそれから、皆な歸つた後に、泊つていつてもいゝと思つたが、夜具などもすつかり持つて歸つたらしい、家主の奥

さんの話なので、それでは、久しぶりに一つ宿屋へ泊つてみてもいゝと思つたが、私と行きちがひに、もう今時分は東京の家に皆な歸つて、手紙の樣子ではひどく惡かつた筈の私が自分で熱海に出掛けていつてゐないので、安心もするし、氣のぬけたやうな氣持ちがしてゐるところであらうと思ふと、今夜のうちに、そこへ又引返して行きたくなつた。病後の身體に三時間を汽車の飛脚のごとく往復するのは過激である。殊に、大事とりの細田主治醫が聞いたら驚くであらうと思つたが病は氣からといふ言葉もあるとほり一つは氣のものであるから、と元氣を出して、家主の內で早速電話を掛けて自動車を呼んでもらひ、ものゝ三十分もゐないで、それから又すぐ熱海驛に引返し、六時五十五分の汽車に乘つて、家へ歸り着いたのは十二時に近かつた。

つい餘計なことをいつてゐた。で、その時の病氣はそれきり何事もなく癒つたやうであつた。十一月は時候も好く格別のこともなかつたが、十二月の初、ある宴會に出席して、その晩酒も盃に二三杯しか飲まなかにたのだが、用心しながら食べても、つい意地汚く度を過したせいか、それよりも、やつぱり不斷の健康を損ねてゐるせいであつたらうと思ふ。私は親しい友人と二人きりで少し早目に引揚げて出て戻つた。二人共酒はいけぬので、段々狼藉になりさうな氣配の見えて來た酣醉の席には堪へ得ない方であつた。そして自動車に同乘して私は四谷驛で友人に別れ省線電車に乘つた。九時半頃の省電は滿員であつたうへに、スチームに蒸された車內の空氣がむつとして、私は車室に入るや否や、忽ち嘔吐を催した。はて、酒も過してゐないのに變な身體の樣子だと思ひながら捉へるものにぶら下つて、つとめて身體を靜つとして居らうとしてゐたが、ひとりでに油汗が額に滲んで來て、いよ〳〵堪らなくなつたので、人込みを分けて、靜に入口の方に出て來て人と人とに支へられながら突立つてゐたが、どうにも堪へられなくなつて、代々木驛で一時下車して、そこのプラットフォームで外氣に吹かれてゐた。まだ十二月の初めのことで夜でもそんなに風は冷くなく、殊にその晩は靜かな夜で白い夜霧が一面に立ち罩めてゐた。何かの蔭になつて正體の見えない蒼白い月の色がそこらの物を間接な光で照してゐるのが心地を靜めてくれる筈であるが、胸の吐き氣はなか〳〵に治まらない。しかし、もう此處まで歸りついてゐるのだから、又あんまりぐづ〳〵してゐると遂に東中野までも歸られなくなつて來るので、私は元氣を出して、ふたゝび省電に乘つてみたが、やつぱりいけない。私は一生懸命に堪えながら凝乎と腰掛に凭れて、

「どうしてかう身體が弱つてゐるのかなあ」と心細いことを考へ〳〵嘔氣のするのを我慢してゐた。

そして東中野驛に下車すると、直に俥に乘つて自分の家まで戻り、門をあけて玄關に入るやいなや、いつもするとほりの洋服にブラッシュもあてず、靴の塵埃もはたかず、オバアから上着を玄關の室から、座敷から廊下へと續けて脫ぎ棄てて、自分の寢所に入つて行き、

「おい、何だか私は先刻電車に乘つた時から嘔きさうな氣がするんだ。吐かう、早く金盥を持つて來てくれ。」と、お母さんにいひ付けて、そこに設けてあつた寢床に俯伏して出るだけのものを殘り無く戾してしまつた。

「どうしたんでせうねえ。」お母さんは、あまりに私の戾した汚物の量の澤山なのに魂消てしまつて、心配さうに顏を曇らせながら、波を打つ私の背を擦つてゐた。

「いやもう大丈夫だ。なに、あんまりいろんな物を入れ過ぎたから、平常まづい物ばかり食べてゐる者が、偶に御馳走を食べると、このとほりだ。はゝゝ。」

私は、苦し淚に聲を濕らしながら、そんな戲談をいつて、泣きさうな笑ひを發した。吐いてしまふと、胸が樂になつた。

「やつぱりこの間からの病氣が、すつかり良くならないんですねえ。」

「なに、そんなことはなからうと思ふ。吐いてしまへば何の事もない。今日は此の間の時のやうに眩暈などはせぬ。あれとこれとは別だらうと思ふ。」

といつたが、私自身にも、全身的の健康がひどく損じてゐるのは爭はれないと思つた。それでその翌日は朝食こそ進まなかつたが、午後からは平常と異つたことはなかつた。靜かな暖かな冬の日が照つてゐたので、そこらを一とまはりして來ると氣持ちも大分さつぱりしたので、もう此の間から書き惱んでゐた新年の雜誌に載する物の仕事をつゞけた。身體がそんな具合であつたので、それも力の入つた物を書くことは出來なかつた。やつとあと二日ばかりでそれを片づけてしまつたところで、その朝寢てゐて、早曉ひどく腰から下の方が寒いのを夢うつゝに感じながら、身體を海老のやうにして寢てゐたことが、すつかり眼が覺めてから分つたが、急に寒氣が襲來して氣溫が低下したゝめであつた。そして濕つぽい空から冷い雨が降つて來た。たうどうその爲に昨夜風邪をひいたのであつた。ひどく鼻粘膜を冒されたと思はれて、鼻が潰れてしまふやうに、くしやみがのべつに出て來るのをこらへこらへ、やつと晩方までに書きをはつて、筆を擱くと同時に寢床を敷かして橫になつた。お母さんもその日は何だか一日身體が怠くつて、いくらか體溫が高いやうなことをいつて橫になつてゐたので、二人倒れてては大變だと思つて、又細田さんに來てもらつた。お母さんは大したこともなかつたが、やつぱりお父さんの方は、咽喉がひどく赤くなつてゐるといつて藥を塗つてくれて、

「暖くして靜つと寢てゐないといけません。」といつて、歸つていつた。

「年暮に風邪を引いて寢たんぢや、お正月は來やあしない。早く癒さないと困る。」といつて、それから三日ばかり暖くして寢てゐた。そして吸入をかけたり含嗽をしたり、藥を服んだりしてゐると、ひどいくしやみもぴつたり止つてしまつたし、七度三四分の熱も七度以下にさがつてしまつたので、又二三日つゞけて市中の方へ用事で出步いた。お前達をつれて牛込の方へ買ひ物かた〴〵散步にいつて、百合子が八月に疫痢を病んだ時來てもらつた牛込のお醫者さんにまだお禮に行つてゐなかつたので、年末に又熱海に行かぬ前に一度、健康になつた百合子を連れてお禮に行かねばならぬと思つてゐたので、ついでにそこへも寄つて來た。歸りはお前達にせがまれて新宿の三越支店に寄つて食堂でホットケーキを食べたりした。

そしてその翌日又みんなで熱海に來た。私の風邪もまだ何だか咽喉の奧の方に絡んでゐるやうであつたし、どうせ借りて置く別莊なので、早く行つた方がいいといふので、近いうちに來るつもりではあつたが、何かかゝ遲れてゐたのを、俄かの思ひ立ちで十五日に來ることにした。

「なに、熱海に行けば、これくらゐの風邪はぢきに癒つてしまふ。」といつて、私ははづんでやつて來た。すると、その翌日、どうも身體があんまり怠くつて、節々が痛むのが變だと思つて、檢溫器を挿んでみると、果して七度三分くらゐある。

この七度三分くらゐの熱が、まことに始末が惡い。といつて、それより尙ほ高くつては一層困るが、朝のうちは定つて六度三四分なので、これなら大丈夫だと思つてゐると、夕方七時八時頃になつて必ず七度二三分に上り、何ともいへない不快な氣持である。まさか肺病になつたわけでもあるまいが、その翌日も七度四分、その又翌々日は七度八分といふやうに上つて行くので、私は、寢てゐて、又例のヒポコンドリイを起こしてしまつた。どうも先日のやうに今度はくしやみもせぬところを見ると、もしかしたら、チプスになつたのではあるまいかと思ふと、どうしてもそれに疑ひを容れないやうに思へて來て、とても安心して靜つと寢てはゐられない。それで又熱海の掛り附けの先生を迎へにやつて來てもらつた。十六日から三日つづけて來てもらつた。通じはある方だが、一度下劑をもらつて、十分に通じもあつた。それでも翌日七度八分を越したので、もういよ〳〵チプスに違ひないと思つて、お父さんは、枕頭にお母さんを呼んで、遺言しをた。

去年の十月したきり、今年はまだ豫防注射をしてゐないので、私達はそのことが氣にかかつてゐた。

「もし、そんな病氣にでも罹つたら、散々だ。金はないし、第一此の土地では隔離室などの完備した醫院はなさゝうだし

こんな處の避病院などへ放り込まれるよりは、一足飛びに火葬場へ連れてゆかれる方がましなくらゐなものであらう。それに私の此の衰弱した身體では、とても耐らない、罹つたら死ぬに定まつてゐる。死んだ後のことが氣にかゝつてならぬが、しかし、それも壽命なら爲方もない。……もつと私が生きてゐたら、子供のことについても、いろ〳〵都合のいゝやうにして置いてやらうと思つてゐるんだが、今となつては、それも、及ばぬことだ。」

　それから、私の死んだ後、差當り東京の知友の中でいろいろ相談したり、依賴したりすべき人の名を五六人指定した。

「××君は差づめ、近い處ではあるし、お前の知つてゐるとほり深切な、好い人だから、あの人と、それから××も近處のことだし。よく物の分つた人間だから、何かの判斷に加はつて世話を燒いてもらひなさい。……私が死んで、お前達遺族を引取つて養つてもらひたいといふわけでないのだから、みんな厭とはいふまい。金でも無心するのならさうはゆかぬが。……女の子であつても女學校でも濟んでしまつてゐるといふなら、又何とでもなるが、今のところでは、私が死んだら、收入の道はないのだから、居食と思はなければならぬ。どうかして元金に手を着けずにその利子で三人くらゐの生活は立つやうに、基本金――親金をこしらへて置きたいと思つたが、それも間に合はなかつた。銀行にも預金はないし、早速明日の日から困らなければならぬ。その代り死んだら保險金が一萬五千圓は受取れる。……どうか同じ死ぬなら、あんまり長く患はないで、そして金がかゝらないで死にたいものだ。といつて、自殺も出來ないし。それから改造社や春陽堂からまだ少しくらゐ全集本の印稅の金が入つて來るかも知れぬ。そんなことは、今いつた二人ではいけない、さういふことの方は、何といつても、やつぱり××君が顏が利く、それから××君だ。この二人とそれから、××社の社長と此の三人で相談していゝやうにしてもらふんだが、それ等の人にお前から直に話が出來にくれば、前の二人から話してもらへばいゝ。しかし。いくらお前でも私が死んでゐないとなると、さういふ人が來るたびに隱れてばかりも居られない。活きるといふことは一生懸命なことなんだから、そんな含羞んで人に顏を合はさないといふわけにもならぬ。今もいふとほり、どうぞ養つて下さいといつて縋るんでないから、それだけの五六人の人に差當つてのこと、それから出版書肆との協議を依賴するのだ。しかし出版書肆といつて、さう大したことを私の書いた物で望めないから、もし、どうかなつたら、してもらふといふくらゐのことだ。それよりも、やつぱり確實に當てになるのは一萬五千圓の保險金だ。死んで受取るとして、幾日くらゐ經つて拂つてくれるものか知らんが、あそこの保險會社には重役に一寸知つた人があるから、これが出て來るで

あらう。長い先々のことは、やつぱり鄕里の者とも相談してその厄介にならねばならぬが、東京のいろんな事情に暗いんだから、遠い親類よりも近い他人の譬で、差當つてのことは田舍の人間では埒があかぬ。」

　私が仰向きに寢ながら、それからそれへと、いろんなことを言ひ出したものだから、お母さんは涙を浮べて、じつと聽いてゐた。

　それから一と息吐いて、私は又檢溫器を脇に挿入れてみたが、やつぱり七度八分ある。

「どうしても今日の體溫の上り具合は、變だ。昨日あれほど通じもあるし、それに先日、こちらへ來る前に東京で寢てゐた時のやうに鼻カタルといふのでもなく、格別咳が出るのでもないのは、今朝は六度四五分であつたものが、どん〳〵上る一方だ。もう一度四分から上つてゐる。新聞の衞生欄などに書いてゐるのを見ると、チブスといふものは初め五六日は風邪と同じやうな低い熱がつゞくものださうだから、今度のは、どうもさうぢやないかと思ふよ。」

「でもチブスだつたら、食べる物なんかとても食べる氣になりませんよ。」

「うむ、お前は一度それをやつたんだつたな。」

「パラチブスといふんでした。一番輕いといふんでした。それでも、ひどい頭痛がして、とても耐らない。頭痛はしないんでせう。」

「あゝ、頭は別に痛くもない。それに食べる物は味がある。」

「やつぱり風邪でせう。」

「風邪だといゝんだが、しかし變な熱だ。」

　そんなことをいつてゐるところへ、かれこれ五時近くになつて、いつものとほりお醫者さんが來診した。物言ひ擧止の靜かな、高塚醫師は、いつものとほり一とゝほり診察しながら、私がいろ〳〵なことをいひ出すのを、おとなしい調子で輕い返事で聞いてゐたが、柔和な顏を私の方に向けて、

「昨日はあのとほり、好い通じもあつたでせう。やつぱりお風邪です。そんな症候は少しもございませんから、御安心なさいまし。」

　さういつて、咽喉の奥に藥を塗つてくれた。懷中電燈で咽喉の奥を照しながら、

「あゝ、こゝが大分腫れてゐます。」といひつゝ藥を塗つた。私が、あんぐり口を大きく開けてゐるので、

「あなたはお上手です。」

　高塚さんは靜に笑つた。

　私はいがらつぽい藥の味に顏を顰めながら、

「やはり、この咽喉のせいですかなあ。」

「さうです。チブスぢやございません。」高塚さんは始終靜に笑つてゐた。

「どうも有難うございました。」
「しかしまた、この模様だと晩には、まだ少しくらゐ上るかも知れません。明日も別にお使ひを下さいませんでも、私の方からまゐりますから。」高塚さんは鄭重にいつて、歸つて去つた。
けれどもその翌日も翌々日も毎日一番高く上る時刻の夕方の七時八時になつても七度を越さなかつた。チブスではなかつた。それから用心しい〳〵寝る前に湯にも入つた。暖い、風のない日には、お前達を連れてそこらを散歩もした。しかしあんまり風邪が長い爲に、すつかり臆病になつてしまつて、大抵朝から晩まで安火を抱へて閉ぢこもつてゐた。初は物の味のあつた胃にも、却つて段々食欲が減退して來た。何を食べてみる氣にもなれなかつた。
「こんなことでは爲方がない。熱海に來てゐて、毎日安火を抱へて閉ぢこもつてゐるやうでは、私もいよ〳〵老込んでしまつた。」私は長大息するのであつたが、夕方になると、どうかする、とやつぱり身體に熱氣を覺えた。そして檢溫器を挿んでみると、やつぱり七度を二三分越してゐた。
「やつぱりあるよ。」
私は氣を腐らしてしまつた。
「どうしたんでせうねえ。」お母さんは傍で何か針仕事をしながらいつた。
「肺病でないし。……厭になつてしまふ。もう一つ仕事をしなければ、お正月は來ないんだ。かう、どうも十二月の初から一と月も寢てゐるやうでは、私も、いよ〳〵駄目だ。」と悲觀した。
「東京で眞鍋さんにでも診てもらつたらどうです。」
お母さんは、三四年前、眞鍋さんの内科に入院して、重患から救はれたのであつた。
「さうしてもいゝ。しかし、差當つて一つ仕事をしなければならないのが、それが出來なくつては、どうすることも出來ぬ。……この間も、今にも死ぬやうな氣がして、お前に言ひ遺して置かうとしたのだが、あれからお醫者さんが來たので、それつきりになつてしまつた。いづれ、そのうちに、委しく書いておかうと思つてゐるが、しかし、そのうちといつてゐる間に、そのうちがどうなるか分らない。その保險金と、印税――印税は全く水もので見當がつかぬが、――とで、その利子ぐらゐで、どうかこうか活計が立てられゝば、まあ、いいんだが、そこがむづかしいものだ。それからお前の知つてゐる、あの借金は何を置いても先きに拂つてしまひなさい。これから此處の土地で借金をして蜜柑畑を買つてある。あれくらゐは、全集の印税が豫想どほりに入れば拂へるであらうと思ふが、あれは決して賣つてはならぬ。いつかは賣る方が悧巧な時が來るかも知れぬが、それは、まだ〳〵先のことだ。

しかしその所置はお前には出來ないから、そんなことは鄕里の兄にでも相談するのだが、あたりまへだつたら、十一も年上の兄の方が先きに死ぬ道理だが、今のところ、こんな身體の具合では、どうしても私の方が先きだ。鄕里の方では、田地を賣るとか買ふとか、兄もなか〳〵やる方だが此處の樣子は分ぬから、不都合だが、まあ、その時にはどうにかならう。兄も近ごろ大分失敗してゐるので氣の毒に思つてゐるが、どつち道、私と同じやうに幼い者よりは先きに死んでゆくんだ。私の二人の子供が路頭に迷はぬやうなことは所置をとつてくれるだらう。けれども何度もいふとほり兄は私より十一年も年長だ。兄が私より長命するものとは限らない。そのことを考へて、私は鄕里の甥達にも遺言の依賴狀を書いておくつもりだ。兄の相續人の啓一郎はお前も知つてゐる。それから今年の春此處に來た速雄、あれは金持へ養子に行つたのだが、度々いふとほり、養つてもらふのでない、たゞ、いろんな相談對手になつてもらふのだ。それから、これもお前が知つてゐる筈だ、それ三四年前の春一寸來た、私の姉の子だ。あそこの家は大して物を持つて居らぬが、堅い家で、大分の山持ちだ。もつとも山持ちでも金持ちでも、それは他人の物だ。そのご厄介にならうといふのではないが、私の甥達だから、いづれも二人の子供とは從兄妹同志に當る。いとこといつても、その甥達からいへば、まるで二人の女の子とは、親と子とのやうなものだ。恰ど甥共の子と同じくらゐのものだ。まことに心細い次第だ。それで、今先もいふとほり遠方に居る者は何のたそくにもならぬが、不幸はどんな形で襲ひかゝつて來るかわからない。私が死んだ後で、又お前が早く死ぬやうなことがないともいへない。尤も子供が死なゝいとも限らぬが子供は無事で居るものとしての話だ。で、兩親とも亡くなつて、子供がまだ小さい場合のことを考へて置かねばならぬ。
先達つてから、寢ながら、いろ〳〵考へて見たが鄕里には親類緣者が多いといつても、理詰めが來ぬ先から遠方の田舍に子供を連れて引込むといふことも爲かねる。――今、私の頭の中は、二人の子供の將來を出來るだけ幸福にしてやりたいといふことよりほかに考へはないのだ。廣い世間には、自分の子供や家族のことよりも、もつと一般の社會の幸不幸について心配してゐる人がある。そんな人の心掛けは誠に立派なものだが、世の中の人が、みんな銘々のことを幸福にすることを努めたら、そんな心配は少くなるだらうと思ふ。しかし、どんなにそれを心掛けても意地の惡い不運は執固く附き纏ふかも知れぬが。……まあ、そんな餘計のことはさておき私には彼奴等二人の一生を幸福にしてやることが今のところ精一杯だ、それも思ふとほりにならぬ有樣だ。
それで、女の子を二人田舍で大きくして、田舍で嫁がして幸福に遺憾なきかといふに、さうばかりともいへない。何れ

都會の榮耀榮華をさせたいわけではないが、私達兩親が亡くなつて孤兒にでもなれば爲方もないが、まづ、それまでは生まれた土地で成人させたい。さう思ふと、どうも遠方の親類ではあんまり賴りにならない。ところが、又、いくら親しい友人や同じ仕事の仲間であつても、金錢のことになると、必ず遠慮をするから、私が死んだ後で出版書肆への交渉ごとなどは、さういふ人達に賴むとしても、保險金その他なにがしかの金が纒つたとした上で、その金の使用法については、今いつた甥達三人連帶の監督にしてもらひなさい。兄といつても、何度もいふとほり明けて六十四になる。私より頑健ではあるが、近頃の失敗で大分年を取つたのが眼に見えて來た。私のそれ等、の甥は大抵どれも、幼い時分に、一昨年死んだ祖母の世話になつたものだ。私の仲の兄は二人とも四つか五つの子を遺して若死をしたが不幸中の仕合せには、私の母が達者で、しつかりしてゐたのでそのお婆さんの七光りのお蔭でみんな大きくなり、今ではもう、私の子供くらゐの子供の幾人もの親となつてゐる。私の子供だけが、お婆さんの息が掛らないことになる。それを思ふと、甥共も、自分達の幼少であつた時分のことを考へて、私の子供の不幸に同情してくれるだらう。そのくらゐの同情を甥達から求めるのは不當でない。私の甥の一人は生まれてやう〳〵四つになつたばかりで父親に死なれ、又もう一と組の甥達三人は六つと十と十二とで父親に死なれた私も何だか自分の子供がそれと同じ不幸な身の上になりはせぬかといふやうな氣がしてならぬ。親はなくとも子は育つといふ世の諺にもあるとほりで、それ等の甥達は、お前も知つてゐるとほり、みんなどれももう一人前の父親になつてゐるのだが、同じことをいふやうだけれど、それ等が父親に死なれた時分には、今から三十も年二十年も前のことで、私の母である祖母といふものゝ眼が光つてゐた。が、今はその祖母といふものがない。その祖母のないといふことが、私に、どれだけ力を落さすか知れない。しかし、その祖母は、あのとほり一昨年の春死んだのだが、たとひ生きてゐたところで、正氣が大分違つてゐるのだから、何の賴りにもならないのだ。私の死んだ兄達は、四つや六つの幼子を遺して死んだのは不幸この上もないことだつたが、しかし、私が今死ぬよりはまだ仕合せだ。私は、思うて效なきことではあるが、私の母――これ等の祖母であつた人の、幼くつて父親に死なれた不幸な孫を慈み憐んだ有樣をよく記憶してゐるがあんな人があつたら、私は、たとひ明日の日に死んでも、後のことをそんなに心配しない。安心して息を引取ることが出來る。

身上持ちがよかつたとか、そんな家計のことについては、何の働きをした人でもなかつたが、父親の死んだ孫を可愛がつたことが、殊に私の今の場合では強く思ひ起されるのだ。」

そんなことをいつてゐると、いつしか私は自分の言葉に聞きとれてしまつて、仰向きに寢てゐる眼から、熱い涙がはらはらと頰に傳はつた。母の愛、祖母が幼い不幸な孫を慈み憐んだ愛の、いかに清純な、感傷的なものであつたかといふことを思ふと、さういふ慈悲憐憫の心持ちを、どうか人類全般の上に遍滿せしめたい。否な單に人類のみに止らず、凡ての生物に及ぼしたい。それが、慈悲を說き、博愛を說かれた古の聖尊達の心である。……しかし、いくらその祖母のことを追憶したつて、爲方のないことである。又いづれも遠くの方にゐる甥達に後見を賴まねばならぬやうなことになつては、大變だ。が、その一番不幸な場合を考へて置かねばならぬのだ。そんなことを、やきもき思つてゐると、私は胸が迫つて息が詰まるやうな心地がして來た。輕微な熱に浮かされて、恰も、白晝夢を見てゐるやうな頭の加減で、自分の亡き後のことが、まぼろしのやうに浮んで來るのであつた。

「おい。」と、私は又お母さんに呼びかけた。

「今死んでも、微々ながら、どうかかうか、三人口食ふだけのことは、何とか方角が附くやうに思へるが、先刻もいつた財産のことだ。それは、たとひ遠くに居るのであつても、ぜひ共甥達に相談してやらないといけないよ。いゝか。東京の同じ職業仲間の友人達も深切にいろ〳〵心配はしてくれるであらうが、何といつても他人のことだから、金錢上のことになると、入つて來る方法について一應出版書肆との交渉などはしてくれても、その金の保管とか、使ひ途については遠慮して指圖がましいことは差控へるちがひない。それから後の長い前途のことが一番私には心配なのだ。三井とか三菱とかいふ處に信託といふものがあつて、財産の保管を引受けてゐるが、それに信託するにしても、相當こちらに知識がなければならぬ。から、どうしても、その事は、甥等に相談するのだ。しかし、前にもいつたとほりに、一人の甥ではいけないよ。三人だ。三人の甥の協議に依つてどうともするのだ。三人でそれはかうしたがよからうといふ事になつたところで、それを實行するのだ。度々いふとほり、基本財産といふものが確定してゐれば、私も大いに安心出來るのだが、今のところそれが自分にも、どのくらゐのものになるか、まるで見當がつかない。無論大したものでもないが、その利子でお前達三人が食つて行かれるだけのものにしたい。それも、いろ〳〵程度のあることだが、今の私の家の暮らし向きから考へてみれば、それもほゞ見當がつく。

ところで、まあ、細々ながら、假りに食つてゆけるだけのことは、働き人がなくなつても、どうかなるとして、その次に私の心配でならぬのは、二人の奴らのことだて。私が生きてゐてさへ、そのことは、もう今からいろ〳〵迷つてゐる。死んだら更尙ら方角が附くまいと思ふ。尤もあいつ等の教育のことになると、これは又、金錢上のことでないから、東京在住

の、私の懇意であつた人に、相當智慧を授かつてもよい。相談仕掛けられる人達の方でも、さう、うるさいとか迷惑だとか思ふまいとおもふ。

　どうせ私とお前との間に出來た子供だから、あんまり頭の好い子供でもあるまいが、でも、今のところ、まるきり白痴でもなさゝうだな。」

　お母さんは笑つていつた。

「どうですか……六つになつても、まだ數が數へられないところをみると……」

「六つになつたつて、やつと、明けてさうなるので、まだ滿四年と少々だ。數くらゐは追々數へられるやうになるだらうが、あんまり學校が出來ないでは困る。大變な女の學者などになれなどゝうぬぼれてはゐないけれど、これからの女は、女であつても、男同樣に、何かしら身に相應な技能を敎へ込んで置きたいのだが、さて何を仕込んでいゝか、今から定めても置かれない。私が長く生きてゐると、能不能、賢い愚かに依つて、臨機應變の考もあるのだが、それは、お前にはとても思案に能はぬことだ。……何事も天命だと諦めてしまへば、それまでだが、まあ、さういふ賢い人は、さう思つてゐるも勝手だが、私には、やつぱり死んだ後の事が氣になつて爲樣がない。それも、二十くらゐにもなつて、どうなりかうなり、自分で獨立の思案の能ふほどになつてゐれば、それから先を無暗に氣苦勞したつて爲方がないが、今、死んでは實に困る。

　よく新聞に書いてゐるが、女學校の入學では親達も當人もそれが大變な苦勞ださうだから、私は、附屬の小學校のある女學校へ入れたい考でゐる。それは市中でないとない。私のよくいつてゐる、あの學校がよいと思つてゐるのだが、あそこは、なか〳〵金もかゝるし、假りに入られたとしても、あんまり高尙で、まあ、いはゞ世間並でなさ過ぎるといふことを聞いてゐる、出來の好い子供なら、そこらの、どんな學校へ放り込んでもいゝのだが、小學校からして市中のでないと、設備萬端整つてゐないといふことだ。それにしても、どうかして私が達者でゐるなら、市中に住みたいものだなあ。つくづく市中に住みたい。今のところ、それが私の第一の計劃なんだが、思ふとほり出來るかどうか。そしたら子供の學校に行く方針も立つ。しかし、こゝ一二年の中に死ぬやうなことがあると、それも水の泡だ。やつぱり今までの處にゐて、近處の學校に入れるのだ。さうするより他爲方がない。それから先きの事だが、大きい方は、よく泣くが、あのとほり高い聲だ。音も惡くない。歌を唄はすと好さゝうだ。唄歌ひを職業にすると、いろんなうるさいことがあつて、それで苦勞をするやうでも困るし、西洋の唱歌といふやつは、私が死んでからなら、知らないが、どうも、私達の樂みにはなりかねる。

お前だつてさうだらう。犬の夜泣きのやうな聲でやられても耐らないすると長唄だが　こいつも樂みくらゐには好いが、かりに天分があつても長唄の藝人でも考へものだしねえ。××さんは繪師にするといつてゐたが、私も繪は好きだから、もし自分がやる氣なら繪を習はすのは好い。私が生きてゐれば別にいつて置く必要もないが、死んだ時のことだ。よく心得て置きなさい。もし繪を好むやうだつたら繪を習はすのだ。だが、てんで學問などを好まない者なら爲方もないが、さうでなかつたら、英語でも何でもいゝから、外國語だけは必ず勉强さしてくれ。私の本當の底意は、やつぱり文學を勉强さしたいのだ。男は尙更のこと、女でも小說を書くやうな女にあんまり品行の好い者はない。小說の種とりに、わざ〳〵自分免許で、女道樂や男ぐるひをしてゐる。それをいふと、私なども御多分に洩れない方だ。私はそれが何より子供に惡い影響を及ぼしはしないかと心配してゐる。どうかそんなことがないやうにと心から祈つてゐるのだ。それで、文學を勉强させるといつても必ず小說を書くといふのではないのだ。女小說家ではない、女文學者なのだ。私が長く生きてゐたら、漢學を勉强させたいと思つてゐるのだが、漢學ばかりぢやない、日本の古い文學、西洋の物、文學書類を讀まして、女の文學者にしたいのだ。それが人間としての修養になるのだ。繪をやるもいゝ、歌を唄ふのもいゝ、音樂を稽古するのもいいが、その前に文學者であつてほしい。幾度もいつた筈だが文學者といふのは、小說家とは少しく違つてゐる。小說家にならなくつてもいゝから文學者には、ぜひ、なつてくれ、今日の雜誌や新聞に出てゐる戀愛小說を讀むなとはいはない、讀んでもいゝが、その前に古い文學書類を讀むのだ。私が生きてゐたら、年齡相當に、その時々に適當な書物をあてがつてやるのだが、今から、一々細かい指圖もできない。しかしまさか、今日明日の中に死ぬとも思はぬから、此の身體が起き上られるやうになつたら、さうなつた場合に、私になり代つて、私の心持を最もよく理解してくれさうな人を撰定してよく賴んで置くから、その人から時々助言をしてもらひなさい。度々いふとほり、養つてくれといふのでないから、賴まれた人も厭とはいはないだらう。

　それから最も肝腎なことを、つい、言ひ忘れるところであつた。かりに私が運好くあともう二十年近く――ざつと七十歲まで生き伸びたところでお前達の緣が定まるのを見られるか、どうかは覺束ない。それは私がたとひ七十まで生きてゐても諦めてゐる。尤も、一と口にもいへない。私が七十まで生きるとすれば、もう十七年ある。さうすると今六歲のものが二十三になり四つの者が二十一になるから、良緣がないともいへないが、もしあつても惡緣でないとも測られない。そんなことまで今から取越し苦勞をしてゐては、まつたく遣り切

れないが、しかし、私は今にも自分が死ぬやうに思へてならぬから、これから二十年も先のことまで、何も斯も一度に考へて置かなければならない。

それで、破れ鍋にとぢ蓋のたとへで、身分相當の緣を求めるにして、お前達女の子が二人ばかりなのがだ、別に財産が有るわけでもないのだから、養子などに來てくれる者もないし、又、それは望みもしない。相當な處に嫁に貰つてもらふのだ。この間も、ある懇意な人が、

「もう、あなたの方のお孃さんなんか、何處か心當りの出來の好い男の子をおもらひになつて、今から中學校にでもやらしてお置きになつたがいゝでせう。丁度今から中學校へ行くくらゐのがいゝ加減です。」と、いつてくれた。

このとほり、いろ／＼取越し苦勞をする私であるが、さすがに、そのことまでは考へてゐなかつた。なるほど、さういはれてみると、六歳の子には、今年あたりから中學校に行くくらゐの男の子が丁度いゝのだ。出來のいゝ男の子を一人もらつて、それを仕立てるのは、許嫁のことはさておいて、樂みでもあるが、私は自身に明日にも死ぬやうな氣がするので、こんな遺言をして置くところだ。私が恙なく存命するものなら、後日嫁合はすことは預りにしても、將來私の手助けにもなつていゝことゝ思ふが、何分資産が無い。そんなことをしては却つて、お前達遺族の生活を複雜にし、禍の種を蒔くことにもならぬともかぎらぬ。私が確實に今後十七年生きるものと定つてゐれば、そんなことをしても惡くもないが、到底覺束ない。

私の知つた人の中には、學んだ學校敎育その他の事情から一旦、相思の間で嫁して數年の後離別して、若い身空で生涯を尼院に委ね神に奉仕して過す決心をした人もある。又亡くなつたお父さんの、生前の行ひから婦人の結婚生活を呪つて今たしか三十を過ぎてもまだ嫁がない娘さんもある。それはもつと深い事情を聞いたら、私の知らぬ理由がまだ他にあるかも知らないが、前の僧院に入つた娘さんなどは、とにかく自分の獨立の思想なり、意志でさうと決心したのだから、一生を僧院で暮すことを勸めはせぬが、それだけの決心をするだけの敎養があれば、それでよいのだ。私が前に、何よりも文學者になつてくれといつたのは、そのことを思つたからだ。文學と一と口にいつたつて、だらしない戀愛小說を讀むことでは、決してないのだ。宗教のおはなしを聽くのもいゝ。高僧の傳記などを讀むのも最も好いことだ。高僧にかぎらない一體に古今東西の偉人匹夫を問はず、いやしくも出色の働きをした人達の傳記はよく讀みなさい。

お前達がもし良緣を選ぶとしても、そのことまで今から私が細かく遺言しておく譯にもいかぬから、自分で獨り立ちの出來る、しつかりした思慮を鍛へるために文學者になんなさ

いといつたことだ。こゝのところをよく味つてもらひたい。

私の古い知つてゐる人に。一人きりの娘さんがあつた。なかなかの美人で才發でもあつたが、その才發はいさゝか方向が狂つてゐたのではないかと思ふのは、その娘は、もう小學校に行く時分から、不良少年などに騷がれてゐた。娘自身も兩親も多少それを、彼女が目に立つ美少女である反映として得意がつてゐた、やがて女學校に行く年頃になつて、傍の騷ぎは一層盛になつた。後には、あんまりそれがうるさいので、得意になつてばかりに居られず、警察に願つて、附添ひに刑事を一人賴み、それに學校の送り迎へをさせたものだ。すると、その刑事がどうしたといふのか、その娘をぜひとも自分の女房にもらひたいと强請して、動かなかつた。娘はそんなことから、たうどう妙なところに嫁いてしまつたといふ話を聞いてゐる。お前達はそんな美人にもなれさうにないから、不良少年などに附き絡はれることもなからうが、その娘の親達からいへば、あたら、一人娘を臺なしにしてしまつたのだ。

一々起りうる場合を想像して遺言することもできぬから、お前達が一本立ちで、何事に依らず處決するだけの思慮分別の基となる頭——智慧を養はねばならぬ。それには宗教と文學とに興味を持つてもらひたい。

生計上のことが何よりも差當つての心配だが、これもほゞ初にいつたとほりにするよりほかに爲方がない。本當に私は死にさうだ。これだけ書くのも、骨が折れた。

（一月十二日）

私は生きて來た

一

それはまだ明治二十……年の、九月の中旬頃でもあつたらうか、蒸しものでもしてゐるやうに朝霧の頻りに騰ち昇つてゐる海の上は、靜かな朝日の光を浴びて茜色に凪いでゐた。二百十日前後からかけて半月以上も降りつゞいてゐた秋雨がやうやく一昨日頃から晴れ上がつて、さしもの低氣壓が何處かの遠くの洋上に去つてしまふと、いよ〳〵本當の秋らしい空の色になつて、日の光も爽かに澄んで來た。

泉州堺の大濱の沖から纜を解いた、大阪灣の小蒸汽船は、見渡す限り朝日の光を漲らしてゐる平らかな水の上を滑るやうに動いて、大阪沖を徐々に兵庫の方に向つて進行してゐた。

その時分は、そんな大都市と大都市と連絡する交通機關もまだ極めて不完全時な代であつたので、十日ばかり前、連日の豪雨のために大阪と神戸との間の諸川が汎濫して鐵道が不通になると、それと前後して淀川筋の各支流が非常な洪水で大阪川口の天保山沖では汽船が二艘も三艘も顚覆するといふ騷ぎで、わづかに目と鼻との近距離である大阪と神戸の間でさへ水陸の交通が一週間ほどの間斷絶してしまつた。それでやう〳〵雨が晴れるのを待つて鐵道局――その頃の日本の鐵道事務はまだ一局の仕事であつた。――は大阪商船會社や日本郵船會社と交渉して、陸路を絶たれた旅客を水路によつて運搬することにしたのであつた。それゆゑ大阪から神戸へ往かうとする者は、難波のステーションから、わざ〳〵汽車に乘つて泉州の堺港まで遠廻はりをして、それから汽船に乘らなければならなかつた。

つい二三日前までさながら魔神の怒つた如く濁浪を揚げて渦巻いてゐた海も、今日はそんなことは、けろりと忘れてしまつたやうに美しい顏をして、涼しい初秋の風が海の面から吹いて來た。いづれの旅客も疊の上にゐるやうな船路を喜んで甲板の上に出で明媚な茅渟の浦の風景を眺めてゐた。匂ふやうな藍色に染められた雨後の淡路の島山には眞白い朝霧が長く横さまに棚曳いてゐる。六甲山から摩耶山は手に取るごとく鮮かに浮きいでゝ、その麓につゞく神戸兵庫の瓦甍白堊は靜かな波に影を涵して、恰も龍宮の繪を展べたやうに見えてゐる。

多勢の旅客の中に交つて、甲板の鐵欄に凭れながら先刻より其等の景色に眺め入つてゐる一人の青年があつた。年の頃二十か二十一。久留米がすりの單衣に黑いメリンスの扱帶を締めて、赤皮の半靴を穿き身體は瘠せ形。顏の色も白いといふより青白くて優れぬ方であるが、神經質な大きな眼や眉のあたりに、何處か意固地で疳癪持らしいところが表はれてゐる。そのために一寸見たところ賑やかなやうな容貌でありながら、やゝもすれば陰氣に見えるのであつた。甲板に群がつてゐる旅客の中には大分學生らしい青年も見受けるが、彼は同伴者もないと思はれて何人とも口をきかうともしない。ただ一人孤獨の無聊をまぎらさうとするやうに、甲板の上に立つて、あちら此方を歩いて海の上を覗いて見たり、遠くの島や山を眺めたり、知らぬ旅人の話してゐるのに耳を傾けてゐたりしてゐた。彼の顏にはいつも、何か氣の晴れぬといふやうな憂ひの雲がかゝつてゐるやうであつた。それは、おほかた、是から先きの前途の不安を、誰れを對手に相談する者もなく、たゞ彼れ一人の胸に思案して迷つてゐたからでもあつたらう。

實際彼は、東京を志して中國の方の郷里を出立ちしたのはもう彼是れ十日ばかりも前であつたが、それだけの日數を今日まで無駄に途中で費さねばならなかつた。出立ちの最初の晩降雨の中を京都まで來ると、ステーションの揭示には木曾揖斐三川汎濫の爲め岐阜大垣間鐵道に故障を生じ當分前途開通の見込立たずと書き出されてあるのを見た。その晩はともかくも京都に一泊し、翌日は近江の草津から關西鐵道により伊勢路を經て名古屋に出られるであらうといふ豫想で草津まで乘つて行くことにした。前路を遮られてステーションに溢れてゐる旅行者の中には東京に行く者、歸る者などあつて、彼れと同じ道筋を經て東京まで到着しようとした者も多かつた。そして草津の驛まで來ると、そこでも又揭示が出てゐて關西線の桑名から先は不通になつてゐた。止むを得ずその晩は又草津のステーション前の旅宿に一夜を明かすこととなつた。田舍の小驛に東西の旅客が雜沓したので彼は、京阪見物をして東京へ歸る途中にある魚河岸の老人夫婦だの大阪の土修町の生薬屋の老主人などゝいふ老人連れの中にまぎれ込んで、四五組の旅客が八疊六疊の二室に雜魚寢をするといふ騷ぎであつた。

翌日になつて、一夜の起臥を共にした其時の行旅の老人達は銘々各自の志す方に向つて袂を別つた。その中に交つてたつた一人の青年であつた彼は、昨夜から旅客の間に話題になつてゐた、神戸から横濱まで水路を往くことを考へて、一應

神戸まで引返へす決心をして、又汽車に乘つて後戻りをして來た。しかし、僅かにそれだけの短距離の汽車に乘るにも、發車の時間などは非常の際とて、全く不定期になつてゐるので、彼が草津驛からやうやう大阪まで歸つて來る間にもう幾日の淫霖に降り罩められてゐる四邊の野は早くも暗に蔽はれて夜が迫まつてゐた。大阪に近くなつて、ふと、あるステーションで聞いたことは、神戸と大阪との間もその日の晝過から不通になつたといふことであつた。彼は前後に進退を絕たれてしまつた。そして、大阪の梅田驛に着くと、止むを得ずそこで下車して、何處か又宿を求めようとすると、大阪の市中でも到る處に橋が流れたり浸水家屋があつたりして、平常は喧騷を極めてゐるステーションの構門は電燈も消え、眞暗で、人影さへ稀れである。偶に人が通ると見ると、長い鳶口を杖について、尻を端折つた物々しい身ごしらへをしてゐる。彼は車夫は居らぬかと思つて構外の廣場を少しく歩いて行くと、もう其處らは膝を沒するまで水が浸いてゐて無暗に前へ進めない。彼は一時途方に暮れて今夜はステーションの待合に夜を明かさねばならぬかと覺悟を定めてゐるところへ、一人の老車夫が眞黑暗の中を、雨にたゝき消されさうな提燈の光を覺束なく照しながら向うの水の中を車を挽いてやつて來た。彼は救け船に出會つたやうな氣で、それを呼び留め、小荷物と一緒にその車に乘つて暗い浸水の中を渉つて、そこから近くの、ある小い宿屋を探ねて一泊を頼んだ。宿屋ではもう此の濕けに客を斷はつてゐるのであつたが、老車夫が顏を知つてゐたのと、その青年の別條なささうな學生姿を見てとつて、

「合宿でよろしければ。」といつて承知してくれた。

「合宿でも構ひません。」といつて、彼はやうやく蘇生の思ひをした。

　そしてその晩も又、廣島縣の人間だといふ三十餘りの男と天井の低い、陰氣な二階の隅の方で一夜を明かした。

　翌日になつても神戸まで開通の見込みは絕えてしまつた。彼は進退に谷まつたが、その時ふつと思ひ浮べたのは、一昨年の春暫く大阪に來てゐる時分に下宿してゐたことのある土佐堀の方のある下宿屋であつた。

「あゝ、さうだ。暫く彼處にいつて泊り、交通の開けるのを待たう。」と、そこに氣が着くと、彼は獨りで喜びながら早速俥を命じてそこまで往くと、幸ひに先きでもまだ顏をよく覺えてゐて快く泊めてくれた。そして、たうどう其處に一週間ばかりも逗留してゐるうちに鐵道の開通はまだなか〳〵容易ではなかつたが、やうやく水路の交通が開けたのであつた。

　彼がさうして、一旦鄕里を出立ちした以上、出來るだけ東京に早く行き着きたいと思つて、水路を往かうと決心するまでには、ひとりでいろ〳〵迷つた。高が神戸から横濱までの

船路くらゐ何でもないやうであるが、一人の同伴者もなく、神經質で苦勞性の彼にとつては、それが實に容易ならぬことであつた。加之彼がこれから先き東京に往くにしても、その前途は恰も此度の行路の困難なるがごとく困難であつて、今回の天災によつて前路を杜絕されたことは、何かしら彼の生涯の前路の嶮難を前兆してゐるかのやうに思はれるのであつた。

　彼は船舷に凭れて明媚な茅渟の海の風光を愛でながらも、一度び明日の遠い海路のことに思ひ及ぼすと、何ともいひやうのない不安と恐怖とに襲はれた。遠江灘はひどく浪が荒れると聞いてゐる。紀州の潮岬から熊野の浦は屢々汽船が進路を誤つて沈沒する難處であつて、先年トルコの軍艦オスマンパシヤ號であつたかゞ破船した處である。彼は刻々に明日に近づく前途の嶮難を豫想して殆ど死地に向つて踏入る時のやうな危惧を抱いてゐるのであつた。そんな不安や恐怖を抱きながら何故彼は萬難を排しても東京へ往かうとするのであるか。

　それは一と口にいへば、東京が、たゞ何といひやうもなく好ましい處で、自分の向上心を滿足せしむる地の如く思はれたからであつた。彼は、彼くらゐの年齡の多くの青年と同じやうに、海のやうな茫漠とした希望や空想を胸に抱いてゐたそれなら東京にいつて是れから何をして身を立てようかと問はれゝば、それに對して答へるところも亦た極めて茫漠としてゐる。

　彼は、今からまだ四五年前やうやく小學校を卒はつて、これから中學校へ向つて進まうとする時に、彼の父は、彼が好んで繪畫を巧に描くのを見て畫家になれと勸めた。彼の兄はその頃田舍の醫者が物質的に裕福なのを見て醫者にならんことを勸めた　けたどもその時彼は何方にも肯じなかつた。それでは一體何になるつもりかと反問せられて答ふる所を知らなかつた。けれども彼にはその時から、自分だけには、茫漠としてゐながらも形を具へた目的のやうなものが有るやうな氣がしてゐたのであつた。それは醫者とか畫家とか又は軍人とかいつたやうな一定した職業の人間にならうとするよりも先づ人間になりたいといふ希望が旺盛であつた。人間は、專門の職業を身に習得して生涯無艱に口を糢して通る前に、何か人間としての目的がなければならぬ。人間の存在はそもそも何であるか。自分はたゞ生活の爲に學問を修めたくはない。況んや低卑な技術に沒頭して生涯を終はるといふことは堪え難い失望である。自分はたゞ人間としての價値を意義あらしめたい。――それは、それからずつと後年になつてトルストイの思想に接する時になつて思ひ合はしたことであつたし、又彼の思つてゐたことには大分誤謬のあることも後になつて段々明かになつたが、無論その頃の彼はトルストイのこ

となど知る筈もなかつた。そして、それは多くの、哲學や文學に志して進む青年が何人も同じやうに抱く懷疑や希望であつたかも知れぬ。彼も亦何人からそれを啓示せられるともなく開發せられるともなく、彼れ自身のその時分の智識や感情の發達がひとり手にその方に傾いて來た、殆ど生まれながらの性質であつたのだ。

さういふ性情の青年に得て有り勝ちな、これといひ解くことの出來ない、取留めのない不安や迷想や懊惱に彼はいつも苦められてゐるのであつた。そして、さういふ生まれながらの傾向の爲にある一定の專門の職業の修得に向つて迷はず進んで行くことの出來ない性格によつて何時も自から惱んでゐた。

二

小蒸汽船は二時間ばかりにして兵庫の棧橋に到着した。彼は群客とゝもにそこから上陸して、明日横濱ゆきの汽船に乘船する旅客を取扱つてゐる附近の汽船宿について一切のことを委任した。しかし、いよ〱自分の原籍姓名年齢等を書き出して賃銀を拂ひ乘船劵と交換する間際になると、又してもそれが死地へ覺悟して入つてゆくかのやうな恐怖と不安の念に襲はれた。彼は餘程獨りで躊躇してゐると、彼の通された表の通りに臨んだ船宿の二階座敷のすぐ隣室にも二人の學生がゐて、彼等が快活に談笑してゐるのを見受けた。一人は單衣に扱帶を締めてゐる普通の學生姿であつたが、一人はその制服から一見東京の商船學校の生徒であつて、顏の色も海風に曝されて赭く照り、動作言語が活々としてさながら明日の海上旅行を樂み待つものゝ如く見えた。開放した襖の向うに彼は制服のまゝ仰向けに寢そべり、天井の方を見ながら、

「あゝ」と、ひとつ大きな欠伸をして、「この船に乘れてよかつた。船の方が汽車で往くより、遙に氣樂だ。大連丸といふやつは、きつと支那のを分捕つた船だ。」

彼がさういふと、連れの學生は、

「どのくらゐの船だ。」と訊いてゐる。

「なに三千噸くらゐのものだらう。」

此方の座敷でそれを聞いてゐた彼は、彼等のいかにも快活さうに會話してゐるのを見て、自分の意久地のないことを心に耻ぢた。たとひ明日の海上にどんな事が起らうとも、彼等も平氣で乘つてゆかうとしてゐるのだ。それに後れるやうなことでは自分の前途は駄目なものと思はねばならぬ。さう思案して、彼は、一方の自分が厭だといふものを、も一つの自分に背後から押されるやうな氣で、たうどう賃銀を拂つて乘船切符を買ふことにした。

尤もそれは、彼にとつては初めての上京ではなかつた。一昨年のやつぱり恰も今時分彼は父母にも告げずして單身東京

に出て來た。そしてわづかに一二ケ月三田の學校にいつてゐる間に父の訃に接して急いで歸郷したまゝ殆ど二年間東京に往かなかつたのである。その間には又父の死後やうやく一年ばかりして壯年の兄が死んだりしたゝめに、何となく一家の内が不幸に呪はれてゐるやうな陰鬱な氣持ちに鎖ざされてゐた。彼もその爲めに一時東京に往くことを斷念しなければならなかつたが、これから前途に何かしら希望のある生涯を思ふと、彼は徒らにそんな陰鬱な空氣の中に窒息してゐることは到底堪へられなかつた。どうかして明るい、洋々たる希望の滿される世界へ出て行きたかつた。それにつけても、彼が萬難を排して東京に往きたい切なる希望を、誰れよりも最もよく了解してゐるのは彼の母親であつた。その頃もう五十六七であつた彼女は、所謂昔しの女で、田舍者で、學問などもなかつたし、無論家事の經濟についてももう世を讓つた人間であつたが、本能的の親の愛は、不思議に若い悴の心持を驚くべき明察を以つて了解したのである。それは母と子とが常住座臥の間に心に思つてゐることを何も彼も凡て打明けてゐたからでもあつたらうが、彼は心の中で、かくまでも親の愛情といふものは、年齢や智識を異にしてゐる若い悴の心に同感出來るものかと、むしろ奇異の感を抱いて居つたのである。それはたとへば、彼の父や兄が醫者になるとか畫家になるとかいふ一定の職業の習得以外のことをば考へ得なかつたにも係はらず、彼の母は、彼が常住腹藏なく語つてゐることを朧ろげながらも了解んで、ほかの者にはまるで夢のやうな空想にも同感することが出來たのであつた。

それで、二年前家に無斷で上京した時と今度の上京とは、父兄の死によつて彼の境遇や氣分に大變な相違があつた。殊に假ひ既う家事向きには一切世を讓つた身であるにしてもまだやう〱五十を三つ四つ越したばかりの夫に死なれた上に、一年を出でずして又次男に先立たれた母親の不幸は最も甚だしかつた。次男はやつと二十九になつたばかりの一月の初に四歳になる男の兒を一人遺して死んだ。彼女は重なる不幸の中に、その遺兒を守り育てゝやらねばならぬといふ傷ましい不憫を感じてゐた。死んだ者を哀悼する情は遺兒に對する悲しい慈みを幾層倍の哀感的なものにした。一度不幸に出會つた者は又同じことが二度ありはせぬかといふ憂懼に襲はれるのは止むを得ぬ俗情であつた。彼は、さういふ不安や憂懼に沈んでゐる母親を、暗鬱な家に殘して別れてゆくが堪へ難い苦痛であつたが、母親は幾日も〱思案した末に、思ひ切りよく、

「そんならまあ、お前往きなさい。往きたいと思ふところへいつた方がよからう。」と、いつた。

さういふ、彼等の感傷的な心持は、世上の何人の身にも有りがちのことで、特にその爲に彼等が不幸であつたとはいへ

ないことであつたが、とにかく彼は明日に迫まる船路の不安から又しても郷里に殘つてゐる母親のことが追被さるやうに胸に迫まつて、その日は一日センチメンタルな氣持ちに鎖されてゐた。

それでも又、隣室にゐた學生に彼の方から口をきゝかけて午後から誘はれて一緒に湊川の楠神社の方へ見物に出掛けたりした。商船學校の生徒は若狹の人間であつた。彼は自分よりは二つ三つ年長らしい、その血色の好い學生の快濶な態度や言語を心に讃美して、自分もあの通り元氣でなければならぬと思つたりした。

そして又かういふことを強ひて思つてみたりした。その頃東京のある著名の小說家の書いた小說に一人の意思の強い少年の話があつた。それは、彼などよりもずつと不如意な境遇に置かれた少年であつたが、もつと意思の強い、そして遙に偉大なる人間であつた。その少年は甲斐と武藏と信濃との國境に峙つ甲武信岳の麓の桑畑の中に生ひ育つた農夫の子であつた。どちらを向いて見ても天を衝くばかりの山に圍まれ、屛風を立て連らねたやうに聳り立つた山の中に、彼の祖父も父も生まれては死んで去つた。少年の彼は子供心にも夙に、この狹い天地に一生を果てたくないと思つて、常に高い山の彼方の廣い國の方の空を仰望してゐたが、恰も通せん坊をしてゐるやうに犇々と重疊してゐる其等の山は十四や十五の子供の脚では、とても踏破して越して往くことが出來さうになかつた。少年は每日々々野良に桑摘みに出て、四方を取卷いた高い山を眺めて、ふはり／＼と自由に峰を越してゆく白雲のゆくへを追ひ、山の彼方の世界を空想しては考へてゐた。

たうどう彼は強い決心をして、父母にも告げず、尻切袢纏のまゝ、あれを越せば江戸の方に往かれると聞いてゐた高い峠を攀ぢ登つていつた。それは雁坂越えであつた。少年は、喘ぎ喘ぎやつと數千尺の峠の絕頂に達し、空を渡る涼しい風に顏を吹かれながら立つて向うの方を見放すと、そちらには、生れて嘗て見たことのない潤い／＼關東の平野が遠くに開けてゐるのが見えた。彼はそこで一と息入れると又勇躍して江戸の方に向つて驅け降つていつた。それから水を呑み／＼江戸に出て來て日本橋の大店に住込み天秤棒を擔いで、鼻で息をするほど働いた。それはまだ徳川幕府の時代であつたが、それから世は變轉して明治になり、たうどう、彼は一代の豪商になつた。

彼はその少年のことを強く胸に思つてみた。自分の今往く路はそれに比べると、平夷なものであつたが、しかし自身の氣持の上では、やつぱり幾重の山川が前路を沮んでゐるかの如く思はれた。さま〴〵の憂惧に曇つた母の顏が、旅に疲れた彼の頭の中にぽつと浮んで見えたりした。けれども彼はしまひにそんな妄想を聲を發して叱咤した。

そして、恰も低氣壓のやうに憂惧の雲に蔽はれてゐた氣分も隣室の學生と伴うて楠公社へ散步に出ていつたりしたゝめに、段々胸が開けて來て、自分も寧ろ明日の海の上を樂み待つやうな氣がして來た。

三

翌朝早く眼を覺ますと、今日も空は靑く晴れて、明るい日が美しく輝いてゐた。隣室の學生と連らなつて波止場に往き棧橋から小い傳馬船に乘つて海の上に出た。どろりと油を流したやうな深碧の水には太陽の光線が底の方まで透きとほるやうに射し込んでゐる。涼しい風がその水の面から吹いて來た。廣い港内にはそつちにも此方にも山のやうな巨船が橫はつてゐた。商船學校の學生は、彼等の乘つた傳馬船が、その巨船の一つの間近を通つて往く時、ふと小舟に乘つて親船の船腹にペンキ塗りの作業をやつてゐる若い男を認めて、

「やあ。」と遠くから名を呼んで聲をかけた。

おゝと向うでも此方を振向いて何かそれに應へてゐた。そして、二言三こと言葉を交はすうちに、舟は通り過ぎてしまつた。彼等は、

「ぢや、失敬、失敬。」と互に笑顏で別れを告げた。その後で此方の學生が同伴の學生に話してゐるところによると、ペンキを塗つてゐた學生はもう學校の方を卒はつて、今練習船に乘つて、之から又遠く外國の方へ出掛けようとしてゐるのであつた。

彼は、自分と略ぼ年齡を同じうする其等の靑年が、まるで海の上を搖籃にでも乘つてゐるかのやうにしてゐるのを見て密かに心に恥ぢた。

やがて傳馬船はずつと向うの方の港の出口に碇泊してゐる可なり巨大な船の方に向つて近づいていつた。だん／＼傍に寄つて往くと、方々から自分達と同じやうに傳馬艦に乘つてそつちへ漕ぎ寄せてゆくのが見える。その船は、同行の學生の話してゐるのを聞いてゐると、もう隨分の老朽船で郵船會社では北海道の方から肥料の鯡の乾魚を積んで來る貨物船に使つてゐるのであつた。黑い船體も塗料の色が褪めてひどく汚れてゐるのが見える。船梯には乘船者が群がつてゐた。それを上つていつて、更に又梯を下りて船室の方へ入つていつてみると、そこは旅客の爲に貨物船の船倉を空にして、それへ一杯に莫蓙を敷いたもの である。水面よりも大分下になつてゐるらしく、高い窓からさし入る海の光で中は相當に明るいが、嚴めしい船壁などの有樣がまるで牢獄にでも入つてゐるやうな氣がして悽愴の感がある。同伴の學生は、

「やあ、こいつは南京蟲でも居さうだな。」と獨語をいひながら暫くそこに突立つて、そこらを見廻はしてゐる。

疊數にしたら百疊くらゐも敷けさうな廣いところに、もう

先刻から乘込んだ客の中には、好いと思ふ處へ毛布などを敷いて場を取り、寢轉んで本を讀んでゐる若者があつたり、趺坐になつて話したりしてゐる者がある。その多くは學生である。彼もやがて、そこらの空いてゐる處へ手荷物を置いて自分の場處を取つた。そして一應席を定めると、又同伴して來た學生と一緒に甲板の上に出て見た。

學生達は大抵穴藏のやうな下層の船室に籠つてゐるよりも甲板に出て、遠くの海面を渡つて來る涼しい風に吹かれてゐた。船は左舷に紀州の陸地を眺め、右舷に淡路の島山を見ながら靜かな波の上を滑るやうに進行を續けていつた。そして段々淡路の陸地を遠ざかるとゝもに、左方には遠く四國の山山を眺めつゝ前方には眼も達かぬ煙波が雲の果てまで開けて來た。船が丁度紀州の南端潮崎の沖あたりを航行する頃から太陽は次第に西方の波の上に沒しかけて、海の上にもやうやく暮色がかゝつて來た。風もなく波も穩かであるが、大きな波濤のうねりとゝもに船は前後に大きく搖れてゐた。夕飯時になると甲板に出てゐた旅客はいづれも皆な船室に降りていつたが、彼はそこらにまだ居殘つた二三の者と同じやうに甲板から動かうとしなかつた。そして靜つと欄干に身を凭せ掛けて無言のまゝ、刻々暗くなつてゆく海の上を見るともなく見入つてゐた。大分船暈を覺えて胸が苦しく、もし少しでも身體を動かせばすぐ嘔吐をしさうな氣持がするので、そうつと堪へてゐた。傍にゐる旅客はそんな風もなく何かしら海の方を見て話してゐるのが餘處ごとのやうに聞えてゐた。五十ばかりの商人風の男は、甲板の一二等船室から夕飯を濟ましてそこへ出て來ると、

「靜かな波だなあ、こんな靜かな航海はめづらしい。」と、頻りにひとり語をいつてゐたが、さういつて見入つてゐる薄暗い海の上には、直徑一尺から二尺もあるやうな、二間ばかりの長さの丸太が幾百本となく波の上に漂うてゐるのを認めて、

「おほ、大變な材木だ。みんな熊野から流れて來たんだな。惜しいものだな。」と、さも〳〵惜しいものゝやうにいつてゐる。

彼はそれを默つて聞くともなく聞きながら、大きな丸太の波に乘つて浮みつ沈みつしてゐる海の上を見詰めてゐた。そのうちすつかり波の面は暗くなつてしまひ、機關の轟く音が大きく鈍く聞えてゐるばかりで、廣い夜の海の上はたゞ暗黑のほか何物をも眼に入らない。甲板に殘つてゐた人々もいつしか一人づゝ去つてしまつた。それでも彼は尙ほ一人そこに居殘つて、認か夜の風に面を冷ましてゐた。さうしてゐるうちに一時今にも嘔吐しさうであつた胸の惡氣もだん〳〵段々薄らいで來て、頭も輕くなつた。

それで、そうつと欄干を捉まへて身體を動かしてみると、大丈夫なやうな氣がするので、漸くそこを立ち上り、靜に甲

板を歩いて船室に下りていつた。船室にいつて見ると、薄暗い石油ラムプのところ〴〵につり下つてゐる處に旅客はもういづれも、そこに算を亂して寢轉んでゐた。彼も自分の手荷物を置いた處に戾つて來て、小さいヅックの鞄に凭れながら脚を伸ばして橫はつた。

それでも疲れのためにぐつすり一と寢入りして、此度ふつと眼を覺ましてみると、もう海の上の夜はおほかた明けかけたらしく、有明のラムプはまだ夢のやうに高い處にともつてゐるが、廣い船室の中にはもうそつち此方に枕から起き上がつてゐる者がふえて來た。彼もゝうこの上まだ眠られさうでなかつたので、そのついでに起き上がつて甲板の方にある洗面所に出ていつた。甲板にはぼつ〳〵人が出てゐたが、海の色は空も水もどんより鉛色に曇つて、朝明けの寒いやうな風が吹いてゐる。彼は不自由な水で顏を洗つたり、絕えず水で洗ひ流してゐる便所に入つて用を足したりした。船は今丁度遠江灘の中央を航行してゐる時で渺茫たる水と空とのほかには何物も眼を遮ぎるものはない。それでも波濤は昨晚の熊野の沖よりもまだ穩かで船の搖れるのも少い。彼はそのまゝ甲板を彼方こちらして、唯、時を過してゐた。さうするうちに後から起きた者が次第に甲板に顯はれてきた。黎明の色もだんだん明るくなつて、遠くの東の方の海にぽつと明るい光が流れたと思つたら、太陽が深い雲の中にまだ十分夢の覺め切れぬやうに淡い大輪を揭げてさし昇つて來た。

甲板に群れてゐる者は一樣にそちらを向いて日の出たことを口々に唱へた。

その時分から彼は熱心に東北の方の空を見つめてゐたが、やがて突然に、

「富士が見える〳〵。」と叫んだ。

それを聞くと、傍にゐた者はいづれも又そちらの方を遠く肉眼で探した。

「あゝ、なるほど見える〳〵。」

さういつて指す東北の方の中天に、たゞ微かにかすかに富士の輪廓ばかりが雲の色よりもまだ淡く望まれた。船が次第に遠江の御前崎から駿河灣の沖を進んで行く頃は富士の姿が一際鮮かに見えて來た。それから伊豆の石廊崎の突端を廻はり、相模灘にさしかゝつて來る頃は日もだん〳〵高くさし昇つて頭の眞上から照り付ける日光が燒けるやうに暑い。相模灘は、豫想した遠江灘よりも風浪が高く、遠く外洋から吹いて來る南風に煽られて靑い波が眞白に碎けて渦卷いてゐた。船は大分搖れて進行も手間どつた。旅客はいづれも烈しい太陽の光線に疲れたやうになつて、少しも早く橫濱に到着するのを待ちあぐんでゐた。やうやく三浦半島の突鼻を廻はつて、左舷に向つて東京灣に入つていつたが、もう其處だといふ時分になつて、時間が長かつた。

そして横濱に入港したのはまだ大分日のある時分であつたが、彼はそこからすぐ汽車で東京に入つた。東京は一昨年の十一月の末に立つて歸國して以來であつた。その頃はまだ電車も自働車もなかつた。彼は新橋に着くと小荷物もあるので俥で、駿河臺下の方にゐる鄕里の知人の家に先づ訪ねていつた。

四

さうして身體だけは東京に着いたが、何時までも鐵道の故障の爲に後から送つた筈の夜具や衣類の入つた行李が着かぬので、ちよつと一晩か二晩のつもりで泊めてもらつた知人の家から早速下宿へ落着くことが出來なかつた。そして半月ばかりも、遠慮しながらそこの家に厄介になつてゐたが、やつと通運會社から荷物を屆けて來たのを待ちかねて、駿河臺の見晴しの好い處にある下宿屋に移つた。そこからは神田の三崎町から猿樂町一帶の低い街つゞきが一眸に見えた。その先きには九段の高臺も見えてゐた。

さうして彼はそこに落着くと、これから行く學校について考へた。何處の學校へ入らうかと思つて、さま〲に迷つた。しかし、それは、彼に何の目的も思慮もないからではなかつた。むしろその反對にあまり空想や希望が多過ぎた。一體彼は早くからその空想や希望が多過ぎるために、目前に横はる現在の事を一つ〱形付けてゆくことの忍耐が出來ないで、競爭試驗には最も優等の成績を以つて入學した中學校も十八歲の時に無殘々々中途で止めてしまつた。三年後の今となつては、それもいくらか後悔せられるのであつた。無用な空想や餘計な希望を持つてゐない、着實な彼の級友は丁度今年中學校を卒はつて尙ほその先きへ進む時であつた。彼は遠江灘を航行する船の上で大學の正帽を冠つた學生や緣の廣い麥藁帽に小豆色の鉢卷をした高等學校の學生姿が最も眼に着いたのであつた。

彼が東京に來て、何處の學校へ行かうかと迷つたのは、恰も婦人子供が三越や白木屋のやうなところへいつて、いろんな物に眼まぎれがして、どれもこれも欲しいと思ふのと、やゝ似たものであつた。夏の雲の湧くやうな希望や空想を成就するには、何處から手を出したら、それが達成されるかと思つた。

一昨年初めて東京の土地を踏んだ時には、今よりもまだ方向が確定してゐた。とても中學校からやり直す辛抱の出來ないと自覺してゐる彼は、自分の行く道は私立學校よりほかにないと思つた。そればかりでなく彼は東京に出る前から夙に明治文明の先達である福澤諭吉先生を青年の心に何となく崇拜してゐた。その頃は政治家になりたいとか、論文家になりたいとか思つてゐた。それゆゑ一度早稻田の專門學校を見にいつたにも係らず遂に三田の學校に入つた。然るに二年後の今度は大分考が違つてゐた。實はその二年の間に彼は軟文學に對する眼が開けて來た。樋口一葉といふ若い閨秀作家の天才らしい作品に魅せられたのも鄕里に歸つてゐるその間のことであつた。文學界といふ、若い文學者達の群れによつて成つてゐる雜誌に引き着けられたのもその時であつた。一たびさういふ軟い文學の味を知り覺えた後は、將來自分はその方で身を立てようとは思はなかつたにしても、それを全く放棄してしまふ事は出來さうもなかつた。

そして、十四五歲の頃から日本外史を讀むことを敎へられて、それを愛讀することを覺えたり、可なり早くから八犬傳を愛讀したり、矢野文雄の經國美譚に心醉してゐたりするにも係はらず、たゞ名ばかり聞いてゐた尾崎紅葉の小說などを讀まうとする心が何故か生じなかつた。然るに一度、文藝俱樂部に發表された樋口一葉の「濁り江」といふ作を讀んでから彼は今まで遂に心に經驗しなかつた、ある深い人生といふものに出會つたやうな氣がしたのであつた。そして、今まで彼が、誰れに敎へられるともなく、何となしに戲作として卑んでゐた小說であつても、一葉の如き深い人生を書表はすことが出來るものならば、小說も亦た有意義である。いつそ小說を書くことを研究しやうかといふ心が近頃になつて萌してゐたのであつた。彼はそれよりずつと前から、文章は經國の大事なりといふことを何からか知つてゐた。それから又治國平天下の文學といふことをも知つてゐた。自分は將來文章を以つて身を立てるには、どうしても經國といふことを以つて念としなければならぬと思つてゐた。さういふ空想や希望を抱いて彼自身心密に誇つてゐた。彼が海上旅行を意に介しない商船學校の學生を見て、海を氣づかふ自分を心に恥ぢたり、着實に一歩々々學校の課程を踏んでゆく大學生や高等學校の學生の颯爽たる容姿を甲板の上に眺めて心を動かしながら、自分は何處までも先づ人間になるべき學問を修養し、將來それを文章の上に發揮するのだぞと思つて、動もすれば失望に沈み勝ちな自己を引立てたり、或時は一人て意氣軒昂となつたりしてゐた。今の世の日本外史や八犬傳の著者にならうとするには、どういふ學校へいつたらいゝかと思つたが、何處にも滿足を與へさうな學校がなかつた。それで、今度東京に行つたら樋口一葉を訪ねて小說を書くことを習はうと思つてゐたのが彼の上京した目的の一つであつた。

すると、彼が上京した九月の頃から、その若い閨秀作家は病の床に就いてゐるといふ消息を新聞で見てゐたが、秋になつて彼女は遂々病が癒えずして死んでしまつた。今に癒つたといふことが新聞に出たら一度是非とも訪ねていつてみよう會つてくれるであらうかと思つてゐたのに、そんなことになつて、彼はひとり心の中でひどく失望してゐた。

それで兎も角も、今度は早稻田にいつて、文學部に進む豫科への入學試驗を受けてみた。無論試驗などもたゞ型ばかりのことばかりであつたが、數日後に入學許可といふ學校からの通知は受取つたが、何となしに早稻田の文學部に入るといふことが氣が進まないので、そのまゝ早稻田には往かず、神田の方の英語を專門に敎へる塾に通學して傍ら二松學舍へ通つて、漢學の講義を聽いてゐた。しかし、その爲にどれだけ彼の學問や思想が進步したとも思はれなかつた。霧の中にゐて、ただ遠い處にある物をあてもなく追ふてゐるやうな空想と、とそれの容易に實現されさうもない物足りない寂寞と不安に惱みながら、殆ど無益な日を消してゐるに過ぎなかつた。

そのうちにも日は流れるやうに過ぎて、秋は段々深くなつた。下宿のある處は駿河臺の、ずつと奧の方になつた處で、彼のゐる部屋の外には、まるで雜木林のやうな樹木が繁茂してゐた。栗や樫の葉が机を置いた肱掛け窓を蔽うてゐた。空氣がだん〱乾燥して來るにつれて、そこから富士が見えた。朝の寢覺めには、純白な皺襞までが浮彫りのやうに朝日を浴びて薄紅に輝いてゐた。夕方太陽が九段の丘陵の彼方に沒する頃になると、さながら象牙の塔のやうに、淡蒼い晩靄の中にくつきり秀でゝ見えた。低地の街の方から樹立を透して、絕えず鈍い轟をき送つてゐる中に、ひとり富士ばかりは永劫の沈默を守つてゐるかの如く思はれた。彼は屢々心を澄ましてその秀麗な姿に見入つてゐた。蒼く黃昏れてゆく空を、薄墨で描いたやうに雁が啼き連れて渡つた。

白い夜霧の街を立ち罩めた晩方など、彼はよく高臺を下りていつて神田の繁華な街筋を散步してゐた。しつとりとした秋の夜の水菓子屋の店頭にはもう紅の林檎や蜜柑のオレンヂが日ごとに色を增して、清涼な燈火の下につやゝかに輝いてゐた。その街筋には殊に雜誌屋や古本屋が多かつた。彼は其等の書肆を軒から軒に步いて見た。何處の書棚にも讀んで見なければならぬと思ふ書籍が山のやうに積んであつた。

彼はさうして東京にゐることに智識の光があり、それから齎らす文明の凡ての幸福や向上心が達成されるやうに思つたが、それとゝもにまだどうしても、食物やその他の習慣がしつくり東京の生活に馴染まないために、日に日に蕭寥として寂れてゆく四圍の風物を見るにつけ、ともすれば心弱くも思鄕の念に惱まされてゐた。夕陽が沈んで富士の見える幾山河の彼方に故鄕があるのだと思ふと、何の慰めもない下宿屋にゐて不自由な生活をしてゐるよりも、いつそ、やつぱり鄕里に引込んでゐて將來の空想を斷念した方がよいかと思ふこともあつた。が、それはどうしても出來ないことである。

やがて正月が來た。彼は東京で初めてする正月に若い興味を持つて、その頃すぐその高臺の崖下の素人下宿にゐて明治法律學校にいつてゐた。同鄕の、彼より二三年上であつた小學校の友達と一緒に宮城のお濠端を廻はつて二重橋の方を拜觀にいつた。お堀の高い土手には老松が翠蓋を翳してゐて、それに風のない麗かな旭の光が輝き、深い水の上に雁や鴨が長閑さうに群れ泳いでゐるのが、さながら泰平の瑞祥のやうに思はれた。金ピカの禮裝をした文武の役人が宮中の年賀から退出して來るのを二重橋の外に立つて、ぼんやりと眺めてゐた。

一月も大分過ぎてから、今までゐた下宿が何となく親みの乏しい家であつたので麴町の英國大使館の裏の方にある下宿を探して變つていつた。先の家は主人夫婦も使つてゐる女中も凡て越後の者であつた。國から送つてくる爲替が、どうかして月を越して二三日遲れるやうなことがあつても、おかみは、彼が朝學校へ往かうとして玄關の下駄箱の前に立つてゐる處でも遠慮なく催促をした。そこには方々の學校へ出掛けてゆく宿泊人が多勢居つても、そんなことに容赦はなかつた。彼はその家を去つた後いつまでもそのおかみの、ぞつとするやうな劍のある眼付を忘れることが出來なかつた。

彼がその下宿を變るといひ出した時分に、崖下の猿樂町の素人下宿にゐた明治法律學校の男も、今居る家は可けないことがあるから、何處かへ變りたいといつてゐた。彼は、その男に、今度探して來た處へ一緒に行くことを勸めたが「まあ、君先きへ行つて見たまへ。よかつたら僕も後からゆく。」といつてゐた。その男は彼より年も二つ三つ上で、老成な處があつた。そして、二三日立つてからそこを見に來て、一緒に晩飯を食つてから、そこへ變つて來るといひ出した。それから四五日にして月の變り目に引越して來た。そして六疊の座敷に二人は同居してゐた。その男は、彼が每日雜誌やその他いろんな書物を雜讀して、貴重な時間を空費してゐるに反して、判檢事の試驗を受けようといふ一定の目的があるので、學校へ行く時のほかは、一日机に凭つて法律講義錄のやうな物と首つぴきで勉强してゐた。無論その方面の學問に對する理解力も彼よりはずつと進んでゐた。けれどもその男は、どこか私立の速成の法律學校の學生などに屢々見るやうな田舍臭い、形式ばつた所があつた。彼は時々、その男の、一定の目的に向つて迷はず精進してゐるのに比べて自分を振り返り、試驗とか卒業とかいふ關門を通過することによつて社會的に資格づけられるやうな方針を選んで勉强してゐるのでないことを思ふと、前途が實に茫漠としてゐるやうで不安な懊惱を感じた。

するうち故鄕のある町で古く辯護士をしてゐる叔父の方から、不足勝ちな學費を仰いでゐたその男は、時々「此家にゐてはとてもやつてゆけない。何處か、もつと安い處を探がしてゆかなけりやならん。」と、法律書を息をも吐かずに默讀してゐる頭を上げて溜息を洩してゐた。彼にしてもあまり豐かな學資を仕送られてゐる譯ではなかつたが、それでも、餘計な

金を使ひさへしなければ、そのくらゐな下宿にゐることには事を缺かなかつた。止宿人といつても高々十人くらゐを容れられる部屋があるくらゐなもので、多くは麴町あたりの諸官省へ出勤してゐる下級の官吏などであつた。

そして、彼の伴れの男は、やつと二た月ばかりもそこにゐると、何處かもつと金の掛らぬ處を探して又もとの神田の方へ轉居していつた。あとに殘つた彼は、ひどく稚らしい寂しさを感じた。感傷的な思鄕の念に襲はれがちであつた。その男などが目的の爲に鐵の如き意思を以つて一心不亂に勉强してゐるに反して、彼の意思は屢々鈍つた。たゞ、人間になる學問がしたい、そして會心の文章家になりたいといふことばかりには焦燥を感じてゐても、それに到着する手段については、いつも怠つてゐた。神田の英語の塾と今度の處からは以前よりも近くなつた二松學舍とへはそれでも每日通つてゐたが、一日の大半はたゞ取留めもない空想に耽つてゐることが多かつた。

五

その頃九段の中坂に、やつぱり鄕里の中學校で彼より二三年も上級であつた男が、上京して來て神田の法學院に通つてゐた。それも家の事情でそれから上の學校へ進むことが出來ず、鄕里で二三年小學校の敎師をして東京へ往く學資を貯蓄しながら講義錄などを取寄せて讀んでゐたのであつた。中學校では級が大分違ふので彼の方ではその男の顏を知つてゐるだけであつた。今度東京へ出て來てから、その從弟が三田の學校にいつてゐるところから、始めて會つて口を利いた。そして彼はある日中坂の下宿にその男を訪ねていつた。その男は、旅館を兼ねた下宿屋の入口のすぐ脇の三疊の間に居つて、飾りつ氣もない、古道具屋から買つて來た机の上に法學院の講義錄の引き千切つたのを無雜作に小撚でとぢて、朱筆で頻りにそれに檢點を打つてゐるところは、先に彼と一處にゐた明治の法學生と同じことであつた。その男は辯護士の試驗を受ける目的であつた。そして明治の人間の妙に法學生氣取りの臭味があつた、頸に白ハンケチなどを卷いてゐたのに比べて此方は極めて氣取りのない普通の人間であつた。

「貴下は中學校の成績が好かつたのですから、高等學校へ入られゝばよかつたでせう。」

彼は上級の人間に對する敬意を持つて云ふと、

「金がないんで、それが出來なかつた。敎頭も僕を認めてくれて、僕の親父にぜひ大學へ遣つてもらひたいと勸めたさうだ。親父は中學校より先は貴樣自分でやれといふんだ。……養子に行けば大學まで遣つてくれる處があつたけれど、そいつは親父も僕も厭だつたから。」その男はぽつり〳〵話した。

それから半月ばかり經つて、丁度また月の變り目に、彼は

その男に勸めて自分の下宿に同宿さした。一つ座敷を二人で使つてゐれば部屋代の方はお互に負擔が輕減された。

その男も先の明治の男と同じやうに暫くの時間をも惜むやうに講義錄の粗雜な假りとぢと一日首つ引きをしてゐた。そして彼が何と定まつた學科を一貫して勉强するでもなく、「國民の友」とか「日本人」とかいつたやうな政治社會の雜誌や「太陽」とか「文藝俱樂部」のやうな物ばかり讀んでゐるのを見て、

「君は一體何をやるつもりなんだ！」と、いくらか輕んずるやうにいつて訊いた。

「うむ、……僕は、いろんなことがやりたいんだ。こんな雜誌に書いた物を載せたいんだ。」

彼が自信のなささうにさういふと、法學院の男は、にやりと、生まれ付の大きな眼をむいて冷笑する微笑を浮べて、

「君に出來るか？」といつた。

彼はそれが必ず出來うると自から信ずることはできなかつたけれど、さうありたいと思ふ心は止まなかつた。そして一日明けても暮れても法律の講義錄ばかり讀んでゐる人間が明治も法學院も同じやうに雜誌などに餘り興味を持つてゐないのが彼には物足りなかつた。無論それは彼も知つてゐることであつたが、どうしても新聞と雜誌は一生涯自分から關係を絕つことの出來ないもののやうな氣がしてゐた。それは生活の爲といふのでなく、何となくそこに淸新な智識があり、潑剌とした世間が開展してゐるやうに思はれてゐた。そして明瞭なる自意識を以つて自分は實に新聞や雜誌が好きなのだと思つてゐた。

「そりや、遣れゝばそれも好いさ。」法學院の男はいつてゐたが、その男の理窟づくめの頭の中には少しの空想を容れる餘地もなかつた。

さうして彼は時々自分の理想に適ふ學校についてあれ是れと思ひうかべてみるのであつたが、やつぱり何處にもなかつた。三田には福澤先生がゐるので、やつぱり心を惹かれてゐたが、そこの學生や卒業生について觀る所によると、何となく理想の低い世俗的の人間が多いやうに思はれるので再び入る氣になれなかつた。それにあまり文學趣味の乏しいのも慊らなかつた。さうかといつて早稻田の文科は又あまりに純文學に狹められてゐて、彼の期待する人間としての敎養に意を拂つてゐないやうな感じがして、どうしても早稻田の人間となることに氣が進まなかつた。そして彼が中學校にゐる頃から愛讀してゐた「國民の友」や「國民新聞」の發行所である民友社が假りに學校を設けるとしたら、一も二もなくそれへ入るであらうと空想したりしたが、それには又キリスト敎臭味が多いのが彼には何となく好まれなかつた。所詮やつぱり英語は英語で修學し、漢學は漢學で學んで、その上は自分で自分の好きなやうな人間になつて行くより他はないと思つてゐ

た。

その頃よく雪が降つた。ある大雪の翌朝、乞食の洗濯といふ、一點の雲翳もなく眞靑に晴れ渡つた大空には美しい日光が漲つて、慵いやうな單調な軒滴の落ちる音が一日聞えてゐた。明るい日のさしかゝる眞白な障子の內で彼は火鉢を擁して讀書をしてゐると、軒端に來て遊んでゐる雀の影が繪のやうに障子に映つた。そんな時には何ともいへない、幼時が懷しく思ひ出されるやうな、故鄕のさま〴〵が偲ばれるやうな心地にもなるのであつたが、東京で初めて見る雪景色も美しく、又さういふ日には何となく安らかな落着きを覺えて、將來の空想がそれからそれへと無限に湧き上がつた。彼はお濠端の雲解け道を歩いて學校に出ていつた、宮城の土手に並んだ老松の枝はまるで繪のやうな美しい雪が積もつてゐた。

彼はその時分既う異性の智識は幾らかあつたが、いくら空想であつても前途の望みを實現したいといふ決心はなか〳〵强かつたので、異性に心を亂すといふことを堅く愼んでゐた。それは一つは初心者の臆病からでもあつたらうが、人間の修養がしたいとか、一代の名文家になりたいとかいふ空想に始終溺れてゐるために其方に氣が散らなかつたのでもあつた。

それに比べると法學院は何處までも現實的の人間であつた。その男は壹錢五厘の風呂にも儉約して四日おきくらゐにいつてゐる癖に、そして東京へ來てからまだやう〳〵二三ケ月にしかならぬのにもう四谷の先きのある安價な歡樂場へいつて二三度馴染の女が出來てゐた。

彼もその男も、いくら前途の大なる希望の爲に目前の小さい欲望を努めて節抑してゐても折々無聊に困むことのあるのは何方にしても止むを得ぬことであつた。何となく退屈で堪らないやうな氣がしてくると讀書をする氣にもなれず、何を深く考へることも出來なかつた。それにその男は落語とか義太夫とかを聽くことの興味もなかつた。落語などの巧妙な洒れの味などは、てんで解らなかつた。それに比べると彼は、もう東京へ來たそも〳〵から寄席といふものゝ興味に强く惹き着けられてゐた。それは彼が東京といふ都會情調を愛するやうになつた一つの原因でもあつた。彼は時に法學院を寄席に誘ふことがあつたが、應じなかつた。

ある晩食後、二人はいつものやうに机に凭つてゐたが、同じやうにとても抑へ切れないやうな無聊に惱まされてゐた。その男は老成せた手付で、まだ中學校にゐる頃から鉈豆煙管で刻み煙草を吸つてゐたが、その時講義錄から自暴のやうに眼を放して

「あゝあ。」と一つ大きな欠伸を發して、とても堪らないやうに、朱筆を投げて鉈豆煙管を取り上げて二三服たてつゞけに刻み煙草を吹かした。

「君は何處へも遊びにいかないのか。」彼の方を見て笑ひながら訊いた。

「うむ、いかない。」彼は面白くない顏をしていつた。

「そりや感心だなあ。僕はもう行つた。」その男は淡白にいふのであつた。

「別に感心するほどでもないが、僕は何だか行く氣がしないんだ。そして、あんな處は汚いだらう。」

「そりや汚いさ。しかしそんなことはもう思つてゐられやしない。」

その頃の潔癖な彼は、單にそんな場處が汚く思はれたばかりではない。たゞ賣買關係による異性との交渉には何等の興味を持たなかつた。そんな處に戀愛關係などの起るのが寧ろ不可思議でならなかつた。

「誰れでも勝手に買へるやうな女は僕は厭だなあ。」彼はいろいろ自分の心持を話してさういつた。

「それは君のやうにいへばさうだが、そんな戀愛などでなくつても、たゞ好いよ。」

その男は、いつもの彼と丁度正反對な、喰られるやうな調子になつて、强い本能的な衝動に驅られてゐるやうな顏をしてゐたが、

「いつてみようか？」といひ出した。

「いやだ。」

「どうしても？」

「うむ。」彼はそんな興味のないことに切り詰めた學資を浪費するのも厭であつた。

法學院は沈吟するやうに、

「僕一人でいくのも怠儀だ。」といつて、暫く思ひ止まるやうな樣子であつたが、又强い本能の刺戟に盛返へされて、

「いかう。」と勸めた。

そんな押問答の末二人はたうとう夜もう十時頃から外に出た。

「汚いのは君、そのつもりで居つてくれたまへ。」

「それは分つてゐる。」彼は自分の方から何の要求も持つてゐなかつた。

もう三月の中ごろのことで、空には黑い雲が速風に吹かれて走るやうに低く飛んでゐた。空氣がめつきり生暖くなつて來た。

五番町から見附の方に出て四谷の大通りを何處までも宿の方へ歩いていつた。そして兩側に店屋の灯がもう殆ど絕えさうになつた處まで來ると、また其處に明るい一區劃があることを發見した。大きな屋體の廣い間口に格子のはまつた家が兩側に並んでゐて、表通に沿ふた小意氣な板屛の中に入つてゆくと白く紋か何かを染めぬいた淺黃暖簾が掛つてゐた。そこから三尺帶を尻の上に締めた若い男が二三人何か戲談をいひながら出て來た。法學院は「君はこゝを知らないんだらう。」

まあ一寸歩いて見よう。」といつて、一軒々々暖簾を分けて庭の中に立ち入つて見た。そこには格子の中に、こつてり厚化粧をした安つぽい顏の女が赤や青の毒々しい色の着物を着て五人も六人も坐はつてゐた。

　見てゆく内には一寸引締つた好い顏をした女などがあつた。家によつては着物の好みなども、そんなに下卑てゐない處があつた。「法學院は何處へ伴れてゆくのだらう。同じことならこんな家へ上がつて、あんな女を買はしてくれるといい。」と彼は心の中で思つた。

　やがて法學院は今まで見て歩いた中でも一番灯の薄暗い、見すぼらしい小家の入口を入つていつた。するとそこの暖簾の陰に立つてゐた男はもう顏馴染と思はれて、「いらつしやい」。と笑顏で迎へた。

　それからすぐ取付の大階段を二階の方に上がつてゆくと、思つたよりも中は廣さうで廊下が方々に通じてゐるやうである。すると何處からか、五十恰好のいやな婆さんが薄暗い廊下に立ち表はれて來て、

「おや、ゐらつしやい。」と、無遠慮な調子でいつた。

　法學院はいつもの、むつつりに似ず、それと何か調子を合せて輕口をいひながら、その婆さんの後から廊下脇の座敷に通つた。

「暫くだつたのねえ。」といひながら婆は茶を入れて出したりした。

「暫くさ。さう度々來られないぢやないか。」どんな戲談にでもすぐむきになる癖の法學院は眞顏になつて笑ひながらいつてゐる。

「そりやさうだけれど。……そして？」と、婆は餉臺に手を載せて立ちかけながら訊いた。「どういふところ？　階下で見て來たの。……あなたの事ぢやないよ。そんな浮氣な話でなく、こちらさ。」と彼の方を一寸見ていふ。

　法學院はそれで何か注文を附けてゐたが、婆は、

「ところが此の頃濕けでねえ。」といつて、又じろつと彼の樣子を見てゐる。それから、

「まあ精々ねえ。」とか何とかいひながら立つて行かうとして、「お肴は？　彌助にしやうねえ。」

　といつて、そのまゝ廊下の方へ出ていつた。

　彼は一昨年はじめて東京に來た時にも、三田の學校にゐる同鄕の道樂者に誘はれて吉原を見にいつて、格子先で友達が女と煙管を取り遣りしながら狎々しく浮戲けたことをいつてゐるのを散々傍に待たされて聽かされたが、その時友達はやう〳〵芝口から、雷門まで乘る鐵道馬車の賃銀さへも持つてゐなかつたので、彼が二人乘りの俥代まで支辨したが、その時

「餘計は入らない、君貳圓だけでも持つてゐないか、一寸上

がつてみやう。」と、幾度となく訊くのを、彼は丁度それだけの金は所持してゐたけれど、それはぜひとも明日學校へ月謝に拂はなければならぬ金なので、腹の水落ちの處に銀貨入れが溶けてしまひはせぬかと思ふほど熱くなるまで確乎りと藏つて置きながら、

「持つてゐない。」と、何度訊ねられても、さういつて、たうどう、その頃三田の學校中で評判の放蕩者を、空しく素見かしだけで戻つて來させたことがあつた。それつきりそんな歡樂境へは今晩まで足を踏み入れたことがなかつた。

　それで彼は、さういふ處の人間が、まるで遊びに來た客に自分の同輩か何ぞのやうに狎々しい粗雜な言葉を使つて話しかけるのがひどく情味を傷けるやうに思はれて厭で堪らなかつた。

　さうして暫く二人きりになつてゐるところへ、ばたり〳〵廊下を歩く音がして、

「ゐらつしやい。」と、氣のない聲を掛けながら入つて來た妓は、これが法學院の馴染と思はれて、彼女はその傍にいつて坐つた。年も女の方が三つ四つ上のやうで少しも別嬪でなかつたが、小づくりの締つた女であつた。

　そこへ婆がつけだしと酒を運んで來た。法學院は碌に風呂にもいかないやうにしてゐるのに酒が又大好きであつた。渴したものゝやうに、いきなり酒盃を取つて、不斷講義錄と首つ引きをしてゐる時とまるで別人のやうに、氣輕な調子で、「はい。」といつて女の方に酌の催促をした。

　彼等は三人で何か詰らない戲談をいひながら酒盃の交換をしてゐた。彼は自分にも酒盃をあてがはれて、少しづゝ嘗めながらつまらなさうに默つて見てゐた。

「どうしたんだらう彌助は、遲いねえ。」といつてゐるところへ、印袢纏を着た若い男が、

「へえ、お誂へ。」と掛け聲をして大きな鉢を持ち込んだ。

「あなたお酒がいけないやうだ。これを召上れ。」といつて、婆が皿に取り分けてくれた。

　さうして一と仕切り酒がまはつてゐるところへ廊下から入つて來た妓は、年は先のよりいくつか若いやうに見えたが、とても我慢の出來ない、骨の太い大きな女であつた。

　その夜彼はなんだか廐の中にでも寢てゐるやうに、まんじりともせず、夜の明けるのを待つてゐた。法學院も好い加減な時分に起きて顏を洗つて出て來た。

　昨夜の風が未明から雨になつたやうであつたが、ひどくは降つてゐないので二人はそこから出て來ると軒の下をつたひつたひ辻俥のある處まで歩いた。

　下宿に戻つてくると、女中やおかみが、笑ひながら、「まあ、何處へゐらしつたのかと思つて隨分遲くまで待つてゐましたよ。お樂み！」と、口々にいつた。

法學院は頭を抱へるやうにして階段を驅け上がつて自分の部屋に飛び込んだ。

六

それから陽氣が急に變つて、いやに生暖い南風が紅の砂塵を吹揚げるやうな日が幾日も續いてゐるうちにもう早い彼岸櫻がちらほら咲きはじめた。麴町のその邊は殊に櫻のある處が多かつた。靖國神社の境内にもあるし、紀尾井坂から辨慶橋の方にいつてもよいし、すぐ近くには英國公使館の前の廣い芝生にも櫻の立木が多かつた。彼はいつかのやうな歡樂境に行くことを欲しない代りに靜かな春の夕べを樂しみながらそれ等の場所へよく散歩に出掛けていつた。殊に英國公使館の前の柔かい芝生を歩くのが彼には何よりの慰樂であつた。取留めもない樂しい空想に耽りながら、それを確と手に捉むことの出來ない、もどかしさの淡い憂愁がひた〳〵と身のまはりを包んでゐるやうで、下宿の狹い一室に閉ぢ籠つてゐるのが堪へられなくなると夕方になつてそこの芝生に出ていつた。柔かい匂ひのする櫻の若葉の下を歩いてゐると、向うの方でも誰れか明笛を吹いてゐる者があると思はれて爽かな夕風に伴れて朗々たる音色が何ともいへない懷しい悲しみを胸に喚つた。その笛の音色に含んでゐるやうな人生が何處かにあるやうな氣持ちになりながら冷くつて心地の好い青草の上に腰を下して恍惚となつてゐることが屢々であつた。

わけても樹木の多いその邊は清々しい青葉に埋まつてゐた。その頃は女子教育などもまださほど振はず女學生の姿も稀れであつたが、五番町のすぐ近い靜修女學校といふ看板を掲げた學校があつて、あまり振つてゐる學校とも思はれなかつたが、土曜日の晩など帶をきちんとお太鼓に結んだ二十前後の若い娘が小鳥のやうに校庭に群れて靜かに讃美歌のやうなものを歌つてゐるのが彼の興味を惹いてゐた。彼は時々その前を通り合はして若い女學生の姿を見て樂んでゐたが戀愛などに心を勞することは恐るべき魔道に陷入つてゆくことのやうに思つて、それ以上何にも考へようとはしなかつた。

その家は下宿といつてもあまりその商賣の手を擴げようとせず主人は時々兜町などへ通つて、氣樂にしてゐる家であつたが、すぐ近處の懇意な家の娘が毎日のやうにおかみの處へ「小母さん〳〵」といつて遊びに來てゐた。年は十七八であつた。大分平面の顏で、眉の濃い、ちよつとした縹緻であつたがいつも白粉を眞白につけて、束髮に結ひ、出來るだけめかしてゐた。主人は長唄の稽古にいつたり、おかみも三味線が彈けるので、時々下の茶の間などで、「皆さんの御勉强のお邪魔にならぬやうに。」といひながら好い音をさせてゐた。お咲ちやんといふその娘も少しは出來るのでおかみに稽古をしてもらふのだといつてぽつん〳〵やつてゐることがあつた。その娘

はいつも「小母さん今日は。」と氣取つた調子で聲を掛けながら入つて來た。そして入口などで誰れでも止宿してゐる男達に顏を見られるのを羞かしさうにして、急いでおかみの茶の間に逃げ込むのであつたが、その身體つきにも極まり惡さうな樣子にももう若い男を見たいやうなところが見えてゐた。

彼も、その羞含んだやうな娘らしい美しさに輕い興味を持つてゐた。そして毎日二階の自分の室にゐて下の茶の間にその娘が來るのを待つやうな心になつてゐた。さうかといつて主人の茶の間に入つていつて坐り込んで話をするやうな度胸は、たとひそんな娘がゐなくつても彼はまだ持つてゐなかつた。止宿人の中には狎々しく茶の間に入り込んで話してゐる者もあつたが彼も法學院もそんなことは遠慮してゐた。それで彼は極めて眼に立たぬやうに、たゞ心の中でお咲ちやんの朗かな氣取つた調子の聲を遠くにゐて聽いて悅んでゐるだけであつた。どうかした機に廊下でぽつたり行きあつたり、入口で偶然顏を見たりするのを待つてゐるよりほかはなかつた。

ある時彼は法學院と一緒に出てゆかうとして玄關の處に下りていくと、丁度そこへお咲ちやんが、いつものとほり水際の立つおめかしをして入つて來るところへぽつたり出會つた。彼はそこで妙な當惑したやうな顏をした。彼女の方でも羞含んだやうな顏をして、いそいで茶の間に入つた。

法學院はその光景を意味ありさうに笑ひながら見てゐたがやがて外に出ていつて歩きながら、

「君はお咲ちやんに惚れてゐるなあ。」といつて、からかつた。

「そんなことはないよ。」と彼はいつてゐたが、

「いや、惚れてゐるよ。そんなことはすぐ分るもんだ。」といつて、法學院はそれに定めてしまつた。

ある靜かな雨の降る日の夕方下宿のおかみは、

「××さん今晩下へお遊びにゐらつしやい、お咲ちやんが來て三味線を彈きますから、」といつてゐた。

彼はたゞ、

「え。」と、よく聞きとれなかつたやうにとぼけた振りをしてゐた。

果してその晩夕飯も濟んでから、下にはお咲ちやんが來た樣子で、いつも派手な調子の笑ひ聲が聞えてゐた。やがて間もなくぽつん〳〵と好い音がしはじめた。彼は机に凭り掛りながら階下の樣子にぢつと耳を澄ましてゐると、おかみが何か女中にいひ付けるやうであつたが、女中は二階に上がつて來て彼の部屋の入口に膝をついて障子に手をかけると、階下からおかみの聲がして、

「あゝ一寸。」と女中を呼び返へした。

階下では一寸の間三味の音が止んで、主人がおかみに何か一言二言いつてゐるやうであつた。三味の音は又暫くしてゐ

たが間もなくそれも止めてしまつた。

　そんなことが、もう十日も前に見た夢のやうに淡く彼の胸を通り過ぎていつた。前途に何か大きなことをしなければならぬといふ空想が常に彼を小心翼々たらしめてゐたとゝもに彼は異性に對してまだひどく臆病であつた。

　ゆく春の懊しいやうな日がつゞくと、彼はいつもその頃になつて惱む食欲の不進と睡眠不足とに苦められてゐた。讀まなければならぬ書籍の多い事や知らなければならぬ知識が何處までいつて際限のないといふやうな考へが壓倒するやうな脅威を以つて彼を倍々憂鬱に陷らしめた。彼の學問がまだ甚だ幼稚な程度のものであり、世間に關する知識もまた極めて蒙昧であつたにもかゝはらず、彼は何だかさういふ苦しい境地から退いて自由に解放されたいやうな氣分になつてゐた。しかしそれは何處まで遁れていつても影の形に伴ふ如く彼の傍を去らないものであつた。それでも彼は今のまゝに其處にじつとしてゐることに堪えられなくなつたので、も少しすると暑中休暇が始まるのであつたが、そんな規則正しい學校にいつてゐる譯でもないので、五月の末に東京を立つて鄕里の方に歸つていつた。そして夏は鄕里の方から近い處の海岸にいつて海水浴をしたりして過してゐた。

七

　九月の末、ずつと涼しくなつてから上京しようと思つてゐると、又去年と同じやうに幾日も秋雨が降り續いて去年と同じやうに鐵道が不通になつた。その時は山陽線にも不通の箇所が生じた。それが開通するのを何日までも待つてゐられないので、その時鄕里から神戸の方に用事で出て來る小學校の敎員三人と同行して、岡山まで十里ばかり西の方へ逆行してそこから汽船で瀨戸內海を夜船に乘り、翌日神戸に上陸し、敎員達と一日神戸の街を見て歩いたりして去年の今時分そこから横濱まで水路を往つたことなどを思ひ起してゐた。そして二晩神戸に泊り、その翌晩彼は同行の敎員達に別れを告げ一人で神戸から汽車に乘つた。その小學校の敎員といふのは彼がまだ十三四の頃小學校にゐる時分いづれも長い間訓陶せられた人達であつた。學校で敎へられる外に敎師の自宅にいつて夜學を敎はつてゐたこともあつた。小學校を卒業する前、彼が中學校に入學する試驗の準備をしてゐた時分にはその敎師の一人を彼の家に泊めて算術だの日本外史だの十八史略などを毎晩敎へてもらつたりして緣故が深かつた。

　彼の母はもう、彼がどうしても東京へ出て行かずには居られないものと諦めてゐるのであつたが、それでもやつぱり暫く傍に戻つてゐる者が又遠くへ去つてしまふのが新しい哀傷の種であつた。それで、せめても其等の敎師達と途中までゝも同行することが何となく心丈夫のやうに思はれたのであ

つた。

　彼は堅い三等室の腰掛けに寢苦しい一夜を眠つたり目を覺ましたりして、翌日沼津あたりまで來ると、そのことはもう前から知つてはゐたが、箱根山中の鐵道の破壞の箇所が案外甚くつて、小山（駿河驛）と山北驛との間を三里くらゐ歩かねばならぬといふことが段々そこへ近づいて來るに伴れて分つた。昨夜は鄕愁に沈んだりして碌々安眠出來なかつたうへに三里も山道を歩かねばならぬことを思ふと、落膽りしてしまつた。そして、どうしてかう、自分には東京へ來るといふと必ず前途に障碍が起るのだらうと思つて、迷信的な危惧の念に雜られた。そのうち汽車は御殿場を過ぎるとそれから先は急勾配の道を間もなく小山驛まで駛せ下つて來た。いくら難澁でも歩かぬといふわけにはゆかない。深い箱根の山の中のことで車はもとより山駕籠などもなかつた。小山驛に着くと、まるで戰場のやうな雜沓である。汽車が不通になつて客の荷物の運搬に不注意の儲け仕事にあり附いた土地の嬶や若い男が荷物を引つ背負つて山道を案内しながら次驛の山北との間を往復してゐるのである。彼は汽車の中で口を利き合つた二三人の旅客とゝもに一人の嬶に小荷物を背負はし、尻端折りになつて、小雨のそぼふる中を威勢よく出掛けた。そこはもう神奈川縣の領域でところ〴〵に這伏つたやうな草屋があつた。行々煤けた民家の軒の表札をのぞいて見ると足柄上郡に屬してゐた。彼は、子供の時歷史で讀んだ足柄山の嶮とはこの邊であつたらうかといふやうなことを考へながら歩いた。旅客は絡驛としてつゞいた。道は羊腸として三度び高い峻阪を上つたり下つたりして三時間ばかりを費して山北驛に達したびしよ〳〵雨の降る中をやつと驛前の旅宿に辿りついて、そこで滾々流れてゐる清水で脚の泥を洗ひ流し座敷に通つて遲い晝支度などしながらそこから東京行きの汽車の發車するのを待つてゐた。

　雨の降る中を東京に着いたのはもう日の暮れ方であつたが、その頃法學院は麴町の方の下宿には一人で居り切れなくなつて、神田の駿河臺寄りのけちな下宿に變はつてゐた。彼は暗い雨の中を、長時間氣鬱な俥の幌の中に搖られて、ともかくもそこへやつて來た。

　彼は折角さうして海をこえ山を越えして出て來た東京が、わびしい雨の降りつゞいてゐるせゐであるか、或は法學院の居る下宿が薄暗くつて汚い家であるがためか、ひどく荒寥とした感じを與へた。そして、五月の終から四五ヶ月大きな風呂敷に包んだまゝ法學院が預つておいてくれた蒲團など取り出して、疲れた身體を黴臭い寢床の中に横へた。

　翌日、その下宿ではとても彼には辛抱出來さうになかつたので又麴町の先の下宿にいつてみると、幸にもとの座敷が空いてゐたので、又そこへ居るにしたが、春の時分から可けなく

なつてゐた腸の具合が今度の不快な旅行のために又一層いけなくなつて來た。彼は學校へは捗々しく行かないで、醫者に通つたりして空しく一ケ月ばかり日を消してゐた。そして昂奮狀態で嘗て思ひ描いてゐた夢のやうな空想は脆くも打ち消されたやうな意苦地のない氣持になつてゐた。自分は何よりも先に健康狀態からいつても、とても東京にゐて今後學校に行き、それから世の中へ出て働いて行けさうな人間でないやうな氣がして來た。どちらにしてもすつかり今の身體を癒してしまはなければ駄目だといふ氣になつて、その頃內幸町の方に新に出來た消化器專門の病院へいつて診察してもらつた。

院長はやつと數年前長い間の獨逸の留學から歸つた若い綺麗なドクトルであつたが、最新の診察法によつて診察したうへで、ドクトルは何も包むところなくいふと云ふやうな率直な口のきゝやうで、

「胃も大分擴張してゐる。それからこの肩の處が音が少しいけない。その方が大事だ。これから入院してはどうだ。入院して腸胃を良くしながら、肺の方の試驗をしてみる必要がある」といつた。

彼は突然に非常な運命的な宣告を與へられたやうな氣がして、はつとした顏になつたが、入院するといふことについては、今急にひどく惡いといふやうな狀態でないだけに卽座に決しかねた。

「十分御療治をして頂きたいとは私も思ひますけれど、入院は私の一人の考にはゆけませんから、よく國元とも相談しまして。」といふと、

「そんなことは事後承諾でいゝぢやないか。」

ドクトルは、黑い上品なモーニングの襟頸から細い金鎖の紐を長く懸けて、二重瞼の黑い大きな眼で、小柄な紳士であつた。さういつて、對手は入院などの自由の叶ふ人間のやうにいふ。

「でも二三日はいろ〳〵都合もありますから。」といふと、

「さうか。ぢやさうする。」

彼は下宿に戻つて來る道すがら考へた。もし肺にでも故障があるやうであつたら何も斯も諦めねばならぬが、自分にはどうもそんなことを今まで思つたことがなかつた。それでも素人には自分で氣の附かぬこを上手な醫者は知つてゐるのかも知れぬ。醫者があんなことをいつたことから、ふつと思ひ起してみると、去年まだ東京に出て來ない前に四五月頃でもあつたか、同鄕の子供の時からの友達が日清戰爭の時補充兵に徵せられて滿洲の方に往き、後赤痢病に罹つてそれが一應回復すると、後送せられて到頭除隊になり、自家へ戻つて靜養してゐたが、いつまでも風邪が癒らないといつてよく咳をしてゐた。その後あんまり長くさつぱりせぬので縣廳のある市

に出ていつて縣立病院の診察を受けた。病院では肋膜炎だといつた。そして翌日入院することになつた。その時同行して市へ出ていつた彼とその友達とは、その晩懇意な家へ泊つて一つ夜具の中に寢た。友達は彼より二つ三つ年長であつた。そして朝床の中で眼を覺ましてもよく咳をしてかつと手布に赤い痰を吐いて、それを寢ながら彼の方に見せて、

「こんな赤い痰が出る。」

といつてゐた。しかし、病院では前日たゞ肋膜が惡いといつたので、誰れもそんなに氣使はなかつた。彼は市で用事を濟まして間もなく一人で鄕里の自宅へ歸つて來た。それから四五日過ぎて、やつぱり彼等の幼友達で市の醫學校へ行つてゐる人間が歸つて來て先日病院で肋膜炎といつたのは、あれはたゞ氣休めに本人にだけさういつたのであつて、もう高度の肺結核に進んでゐるのであつた。病院では、とても今後一ケ月の生命もむづかしいといふ診斷であるといふ話をした。果して醫者の豫言のとほり病人は丁度一ケ月くらゐして死んだ。それで、ひどく神經を惱んだのは彼であつた。その時それを聞いてもう自分には必ず肺結核が傳染してゐるものゝやうな氣がして一時居ても起つてもゐられないやうな恐怖に襲はれてゐた。

たゞそれのみならず、去年の一月兄が死んだはインフエルエンザが原因で急性肺炎に變症したのであつた。その時彼は實に自分の身を傷ぶるまでにその兄の死を悲んだ。その結果自分もインフルエンザの氣味で、氣管を惡くし、冬から五月頃まで長い間輕微な發熱に惱まされてゐたのであつた。肺結核の友達と一つ寢床に寢たのが丁度その輕微な熱の進退のある頃であつた。尤も彼はその後五月になつて、醫者の同意を得て、風光明媚な瀨戶內海の海上旅行に出掛けて十日ばかり小豆島を巡ぐつて來たゝめに殆ど奇蹟かと思ふほど　すつかり不快な熱のさし引もなくなり、冬の間からとかく進まなかつた食欲も海の上にゐる間からどん〳〵食べられるやうになつた。その九月に勇氣を出して東京に出て來たのであつた。

それ以來病氣のことなど暫く忘れてゐたのであつたが、春時分から又とかく不健康に惱まされてゐた。

彼はもうすつかり、醫者に運命的な宣告を與へられたやうな弱い失望を胸に抱きながら地上を踏みしめるにも脚に力の入らないやうな氣がして、病院の門を出ると、そこから俥に乘つて下宿に戻つた。その頃は日比谷公園がまだ茫々たる草原であつた。季節はもう十月の中旬で、冷々肌に觸はる風に吹かれながら俥の上でさま〴〵な空想に沈んでゐた。

どちらにしても自分は東京に居ることを斷念しなければならぬ。さうなれば東京は諦めてもよい。そして田舍に歸つて氣儘に讀書をしよう。幾度か途中の難關を踏み越して東京に來たのであつた。それを思へば殘念であるが、田舍ではとて

も見てもらふことの出來ない名醫の治療を受けて身體を良くし、そして歸國すれば折角思ひ立つて去年以來東京に來てゐたことが全く無意味にもならぬ。さう決心して下宿に歸るとすぐ田舍の方へあてゝ委しい手紙を書き、入院の費用を仕送つてもらふやうに請求した。

八

病院は三等に別れてゐて、彼は無論三等に入つたのであつたが、三等は入れ込みであつた。彼の入つた病室は十疊で、そこには既う一人老人の患者が寢てゐた。その病院は極めて新式の療法を施す病院であるにも係らず病室は悉く瀟洒とした日本座敷で、殊にまだ出來てから二三年にしかならぬので、何處でも病院といへば汚いに似ず清潔でひどく感じが好かつた。それに座敷がそんな風であつから病院へ入つてゐるといふよりも好い宿屋にでも泊つてゐるやうな落着いた氣持がした。寢具なども上等の綿の入つた、全部を洗濯したての包布でつゝんで、それを度々取り換へてくれた。それに厚地の白毛布を添へてあつた。食物には殊に細かい注意が行き屆いてゐた。

彼は思つた。病院とだけ聞けばすぐ陰氣な感じのするのに、格別吊り臺で擔ぎ込まれるやうな病人でもなく。こんな處に生命を預けて、何も彼も今までの希望や空想を放棄してしまつて、たゞ呆然として日を消してゐたら、こんなに安樂な處はあるまいとさへ思つた。どの患者を見てもさう氣持ちの惡くなるやうな病人もゐなかつた。それはまだ好い家庭などを持つた經驗のない、下宿屋生活ばかりして來た彼にとつてはさう思はれたのも當然であつたかも知れない。

醫者からは何よりも食事の際によく嚙み消化すことを注意せられて、胃の洗滌をしたり、胃部に電氣を掛けることを每朝の日課にしてゐた。服藥も食前と食後との他に尙ほ錠劑の物を一種與へられてゐた。それは何でもなかつたが、院長は每日午後の回診に來て見ていつたが、二三日立つてから、傍の醫員に何かいつてゐた。そして、彼の方を向いて、

「明日一つ肺の方の試驗をして見るから。藥を注射してみて、それで熱が出て反應があつたら肺が良くないのだ。……どうだ夜盜汗をかくやうなことはないか。」

院長はまだ三十四五の人で、そんな物のいひ方であつたが、それでゐながら何となく親みがあつた。

「えゝ今はあんまりありませんが、去年の春時分にはよく盜汗をかきました。」彼は、去年風邪の時分のことを思ひ出してさう云つた。

「とにかく明日から一つ始めて見よう。」と又醫員を振返つてさういつて、「一週間に一度くらゐ、少くとも五六度やつてみて、それで反應がなかつたら、何ともないのだ。もし可けなかつたら、此處で十分胃腸を癒しておいて、それから又他の病院へいつて今度はそつちの方を治療しなければならぬ。」

院長は彼にさういひ渡して、次に同室の老人を診察した。

老人は黃色く憔悴した顏色をしてゐたが、年もゝう七十近く看護婦からそつと聞かされたところによると、胃癌でとても見込みはないのだといつてゐた。それでも茨城縣の田舍の大盡と思はれて、もう世を讓つてしまひ、隱居の金にも困らぬところから、どうしても生きたいと思つて、散々方々の醫者にもかゝり、手も盡した揚句こゝの病院にもう三四十日も來てゐるのであつた。

老人は仰臥したまゝ瘠せて筋張つた胃腑のまはりを手で擦りながら院長に向ひ、

「此の怪物はどうも爲樣がありませんな。」

と、尻上りの水戶辯で突如としていつたので、院長をはじめそれに隨つてゐる醫員や看護婦まで、どつと噴出してしまつた。老人も仕方なく濁つた皺だらけの顏ににやりと笑ひを浮べた。本人にはそれが致命症であることを明かしてなかつた。院長は診察を濟ますと、診斷表などを見比べて何かいひ置いて出て行つた。

老人はなか〱氣むづかし屋であつたが、孫のやうな彼に向つて退屈まぎれによく話をしかけた。そして小言のやうなことをいつたりした。それが東國の果ての人間にも似ず義太夫が何より好きだといつて、氣の向いた時には寢床の上に起き上がつて三勝半七のさはりのところなどを嗄枯れた聲で色氣を付けて語る眞似をしたりするのが滑稽であつた。

彼が銀座から買つて來た新型の懷中時計を手にとつて頻りに好い〱と觸つてみたり、自分の持つてゐる茶碗のやうな大きな銀時計を出して自慢に見せたりした。彼もゝう將來の空想や希望を斷念した氣持になつて、そんな時計などを入院科の餘分の金で買つて來たりして玩弄を弄ぶやうな無欲な氣になつてゐた。

翌日の午前醫員は看護婦を伴れて病室に入つて來て、彼の背の肩甲骨の脇の處に注射をした。「なるたけ今日は靜にして寢てゐるやうにしてゐて。」と、それだけ注意をして出ていつた。

彼はもう半分死んで往く者のやうな觀念の眼を閉ぢて、凝乎と注射の後の鈍痛を局部に感じながら仰向けに寢床の中に橫はつてゐた。もし發熱するやうなことになつたら、自分の運命は決定されるのであると思つて、今に熱が出るかでるかと、待つ心になつてゐた。すると午後になり、やがて最も體溫の高まる五時六時になつても格別發熱を覺えなかつた。看護婦はそれまでも每日六度づゝ驗溫器をあてゝみて體溫表に誌してゆくのであつたが、平日にくらべてわづかに一分か二分くらゐの相違に過ぎなかつた。

そんなことが三四十日の間に六回ほど行はれた。一回ごとに薬の分量は度を增してゐた。一週間に一度。今日はその日だといふ時には彼はその度ごとに運命の覺悟をして待つてゐた。しかし不思議なこと――であつたか、なかつたか――には六回とも殆ど熱といふ熱は出なかつた。最終の注射にたゞ五六分の體溫が上つたきりで先づ何事もなかつた。

院長はその翌日診察に來た時にじつと診斷日誌を眺めてゐたが、

「ふむ、なか〳〵成績が良いぢやないか。」

といつてゐた。

そんなわけで、一と月ばかりの豫定であつた彼の入院日數が意外に延びた。胃の方は食欲もあるし、さほどでもなかつたが、腸の具合が何時まで經つても本當にならなかつた。便通が常に不規則であつた。患者は大抵みんな幾らかづゝ體重が增したといつて喜んでゐるのに彼は何時も同じやうに輕かつた。彼は時々それを院長に訴へた。院長の親みのある笑ひを含みながら、

「今にふえる。」といつてゐた。

彼も長い間の經費のことを考へて、鄕里の方に氣の毒だと思ふことが、如何なる前途の功名も榮達も斷念して、もう東京はこれきりにするのだと思ふと、何だか死んでゆく者のやうな諦めた氣持になつて、その埋め合せに十分に醫者の手當てを受けて田舍に歸りたいと思ふのであつた。

そして鄕里に歸つてから後のことなどを、彼これといろいろ空想をしてゐた。醫者は、たとひ發熱はしなくても身體は健康とはいへぬから、此の冬は退院したら何處か鎌倉か大磯あたりへ往つて暖かくなるまで養生するがよいといつてゐるが、もう此の上そんなことをして遠く離れた處にゐて金を使つてゐは鄕里でも心配するであらうし、學生といつても自分などは大した金滿家の伜でもないのだから、これから十二月一杯もゐて退院したら一旦鄕里に歸り、そして鄕里からずつと近い處に須磨明石といふやうな處もあるのだから、あの邊で此の冬を過さう。それは身體が良くなつたら田舍の日當りの好い山や空地を開拓してそこへ果樹などを栽培しようそんなことを考へて彼は銀座へ散步にいつた時に果樹栽培の書籍などを買つて來て見たりしてゐた。

內幸町の病院から銀座へはすぐであつた。その頃は土橋から虎の門の方までずつと芝と麴町との間に深い外濠があつて青い水を湛へ、古い石垣の上には芝生の土手があり、それに水の上に枝を翳した老松が並んでゐた。病院の板塀の外は閑散な道路を境にしてすぐその芝生の土手がつゞいてゐた。彼はいつもその道路の方に出て、ぶら〳〵步きながらまだ古い石垣の殘つてゐる見附から濠を渡つて土橋の方に出ていつた今までは神田や麴町の高臺の方にばかりゐて、銀座の賑かな夜店などは殆ど見たこともなかつた。さうして格別何處がひどく惡いといふこともなく、身體の方は病院に任かせて、每日當てがはれる三種の藥を服用しながら、まるで宿屋に泊まつてゐるやうな氣で銀座を步いてゐた。夜の街にはしつとりと白い靄が立罩めて灯の色などが水の中を透して見るやうに潤んでゐた。それを思ふと、秋の初神田の薄汚い安下宿にゐる法學院の處へ到着した晚の感じとは又打つて變つて東京はさすがに去り難い好い處のやうにも思はれた。

その頃胃癌の老人は息子が迎へに來て一先づ退院していつた、後一週間ばかり廣い病室に一人でゐた。がある日散步から歸つて來るとそこに三十餘りの一人の新しい入院患者が來て寢床の上に橫はつてゐた。傍には妻君らしい貧弱な女が附添ふてゐる。彼が戾つてくると、患者は一寸起き上がつて挨拶をした。その顏はひどく憔悴してゐる蒼白く、眼の色にももう死相が表はれてゐるやうに思はれた。彼は直覺的にそれが肺病患者のやうな氣がしたので少時そこに坐つてゐたが、すぐ廊下に出て醫員の所に急いで行き、二等室がもし空いてゐるなら病室を取換へてもらひたいと賴んだ。長い間入院で醫員や看護婦とはもう懇意になつてゐた。

「先生、今日私の所に入院して來た人は、あれは何病氣ですか。」といつて彼は訊ねた。

「さあ、僕はまだ見ないんだが、どんな病氣か知らん。」さういつてゐるところへ丁度彼の方を受持つてゐる看護婦が廊下を通りかゝつたので、醫員はそれに、

「どんな病氣だね？　今此の人に訊かれてゐるんだけれど僕は見ないから知らないんだ。」

すると看護婦は肥つた黑い顏に、眞白な齒を見せて意味ありさうににや〳〵してゐたが、醫員に向つて、彼にはよく解らぬことをいつて何か話してゐた。醫員は、

「さうか。…二等室が一つ空いてゐるだらう。」といつた。

そして看護婦が一つ空いてゐるといふと、

「ぢや、そこへ變へて上げたらいゝ。」と看護婦に命じて、彼の方に向ひ、「ぢや今變へて上げますから。…少し氣を附けるといゝんだがなあ。」と終をひとり言のやうにいつた。

彼はもう再び自分の病室に後戾りする氣にもなれなくつて、そのまゝ廊下に待つてゐて、書籍や手廻はりの品を看護婦に今度移る方の室に持運んでもらつた。その室は六疊に床の間と違ひ棚が附いてゐて三疊の次の間もあつた。その晚から寢具や食べる物なども今までより又ずつと好くなつた。從つて入院料も今までの半分高くなつた。彼は最も上等の旅館にでも泊つてゐるやうで、まだ學生の身分で勿體ないやうな氣がするのであつたが、それつきり東京を斷念するのだと思ふと、少しはそのくらゐのことをしたつていゝだらうといふ氣にもなつてゐた。

南陽を受けた六疊の病室の障子の外にはずつと廊下があつて、欄干に凭れて二階から前を見下すと、植込みの向うの板塀の外にはすぐお濠の土手のいざり松が眺められた。

、それから四日も立たぬうちに彼の恐れた入院患者は深夜に秘密に裏の不淨門から運び出された。果して肺結核であつたことが後の看護婦の口から洩らされた。彼は幾ら高い入院料を拂つても轉室した方がよかつたと思つた。

腸の方は倘ほ十分に整頓しなかつたけれど、追々年暮にも迫つたので、院長にも相談して、彼は十月の中旬から七十日ばかり入院してゐた病院を退院することにした。そしてその晩はすぐ近くの芝口の方の旅館に引揚げて一泊し、東京に永久の別れを告げてその翌日朝早く新橋から立つて歸國の途に就いた。

九

彼はもうすつかり自分から重態の病人のやうな氣持になつて、褞袍にくるまつた身體を列車に凭れながら、時々沈んだ眼を上げて冬枯れた窓外の野山を眺めてゐた。

汽車が箱根山にさしかゝると、三四ヶ月前九月の末に雨の中に難澁して三里の峠を踰えて來たことが、今となつてはまるで徒勞であつたことを思つた。トンネルと鐵橋との連續してゐる山北から小山あたりの嶮岨な峰の容を窓から覗いて、あの邊を歩いたのだらうと思つてみたりした。

途中で名古屋に一泊して翌日の夕方郷里のステーションに着いた。郷里の山や野は何時見ても平凡であつた。何の奇趣もない低い山が冬枯れの姿で寂しく田圃の向うの方につゞいてゐた。子供の時から見馴れた其等の野山を眼の前にするとともに、汽車に乘つて歸つて來る道すがらも、今後の事について今までいろ〳〵考へてゐた空想がぱつと虹のやうに消えてしまつた。彼は何だかつまらない氣持になつてステーションから三十町あまりの川沿ひの田舍道を寒い風に吹かれながら俥に搖られて點燈頃に村の中の我が家に入つた。

母も兄も、

「そして身體の具合はどうぢや？」といつて、心配さうに訊ねてくれたが、何よりもさうして恙なく彼が東京を引揚げて歸つて來たことを喜んだ。母親はいつも彼が歸つて來ると一つ處に寢ることになつてゐる座敷に入つて來ながら、

「おう〳〵もう戻つて來たがえゝ〳〵。身體が惡うては何にも出來ん。」と、安心したやうにいつてゐた。

間もなく正月になつた。子供の時から餘り雜煮などの食べられなかつた彼は、病院で喧しく食物のことを注意せられたので、そんな物には一切箸を着けぬやうにして、出來るだけ病院でして來たとほりの食物を攝取するやうにしてゐたが、不便な田舍ではそれが自由にならなかつた。

入院の日數が自分にも意外に長びいたうへに、後には上等の病室に轉じたりしたゝめに隨分金を使つたのであるが、それは、遠くにゐて手紙では委しい事情が分らなかつたりするので、近村から出ていつて、大阪のある會社の東京の支店をあづかつてゐる人間に話して、一時彼の一存で融通してもらつてゐた。そんな多額の金の支出については家の方の思惑も氣になつてゐたが、表面では爲方のないことゝ思つてゐるらしく兎も角借りたゞけの金は兄が出してくれたので、彼は、田舍では十四日の松飾りもとれてから、年末の間に合はなかつたその金を持つて隣村の借りた人間の處へ拂ひにいつた。その人は丁度彼と前後して歸鄕してゐた。

そして一ヶ月ばかり彼は家に靜としてゐたが、醫者の勸告もあつたので何處か暖い海岸に行つて冬を過したいと思つてゐた。するとその金を貸してくれた人間が大阪にゐる時分に時々海水浴にいつてよく知つてゐる民家が須磨の手前の鹽屋といふ處にあつて實費で置いてくれるといつて紹介してくれたので、そこへ行くことにして、彼は又夜具と少許の手廻りを持つてその鹽屋まで出掛けていつた。そこまでは汽車で三時間くゐのものであつた。それはなるほど鹽屋のステーションから遠くない海岸の須磨の街道に沿ふた處にある小い家であつたが、海水浴の貸間に建てた粗雜な家で、彼を通した二階の六疊の間には床もない、汚い疊の敷き合はせが一寸ばかりも空いてゐるやうな處もあつた。海に面した方からは淡路島がすぐ前に見えたが、家の外の街道には絕えず荷馬車などがぼこ〳〵塵埃を揚げて通つてゐた。飯だけは炊いてくれるといふことであつたが、東京でその頃最も設備の行き屆いた上等の病院に長く入つてゐた贅澤な便宜が習慣になつてゐるので、往つたその晩からとても長く辛抱は出來さうになかつた。風呂なども、漁師などの入りに行く汚い、小い洗湯が村はづれにあつた。彼は薄汚い座敷に碌々落着いて安眠することが出來なかつた。そして翌日はそこから二つめの驛になつてゐる明石の町を見にいつてぶら〳〵海岸を歩いて見たりして、そこにある立派な旅館を兼ねた料理屋に上つて晝食をした。そこからは淡路島が一層手に取るやうに見えた。こんな處に居られたらばと思つたが、それはもう此の上到底望まれないことであつた。その晩仕方なくもう一晩戻つて來てそこに泊つたが、翌日は又向うに見えてゐる淡路島に渡つて見たくなつて、兵庫から船が出るといふので、又鹽屋から二つ三つのステーションを乘り越して兵庫に往き、そこから淡路の洲本に渡つていつた。

短い冬の日脚は摩耶山の方にもう春きかけてゐたが、海の上は靜かであつた。船がだん〳〵淡路の方に近づいて來るにつれて、次第に暗く黃昏れてゆく麓の村には夕煙が遠く棚曳いて、懷しい人家の燈が點々として瞬きはじめた。途中一二

ケ處に寄航して、やがて洲本に着いた時分にはもうすつかり夜であつた。暗い港の棧橋には印の入つた提燈を振り翳して宿屋や問屋などが犇めくやうに多勢騷いでゐた。彼は、めづらしいそんな古風な港の夜景に詩的な興味を唆られながら、そこに提燈に灯を入れて梶棒を並べてゐる人力車の一つに乘つて、旅館へ案內さした。その旅館はこんな處には案外に思はれるほどの立派な旅館であつたが、それは考へてみると不思議でもなかつた。大阪や神戶あたりの人間が始終遊びに來る處であつた。彼は垢拔けのした女中に案內せられて表二階の方の絨氈を敷いた廣間に通されたが、何處か遠くの方の座敷では宴會でもあると思はれて、絃歌の聲が大きな建物に快い反響を起して鳴りひゞいてゐた。多勢が合唱で、

「和歌の浦には名所がござる：：：」

といふ義太夫節を高らかに語つてゐるのであつた。

彼は凝乎とそれに耳を澄ましながら、今まで何處で、どんな巧みなその一節を聽いたよりも不思議に詩的な感興を唆られてゐた。ふつと思ひ浮べてみると、もうそのあたりは丁度紀州の和歌浦の對岸になつてゐるのであつた。肌に觸る夜の空氣も一月頃の嚴冬とは思はれぬ暖かさであつた。

京阪風の垢拔けのした女中が鯛のおつくりだの鱠の吸ひ物などの裁つた食膳を運んで來た。彼は箸をとりながら、遠くにローマンチックな思ひを馳せてゐた。朗かな三絃の調子が涙するやうな快い感情を彼の胸に搖つた。

「姐さん、こゝであの節を聽くのは何ともいへず好いなあ。こゝから和歌の浦は近いだらう。」

「へえ、すぐこの向うでござります。よう晴れた日には和歌の浦の磯馴れ松が霞の中に見えてます。」

その晩彼は詩の中の人間のやうな好い印象を抱きながら枕に就いた。夢の中に遠くの方でどゝうといふ浪の響が聞えた。

翌日そこからまだもつと〳〵南の方へ往つてみたいやうな氣持に促されて、旅館から人力車に乘つて海沿ひの道を由良の港の方まで往つてみた。南へ南へと何かしら空想が導いてゐるやうに思はれた。

淡路から歸つて來ると、その晩又もう一夜鹽屋に泊つて、その翌日彼は、三四日前に持つて來たばかりの荷物を纏めてそこを引揚げて歸つて來た。

鹽屋の貸間をした家の女房は、

「あんたはんは一寸落着かんお方やなあ。」といつて、彼が荷造りをしてゐるのを立つて見てゐたが、彼は默つてゐた。

家に歸つてからは、前年感冒の後瀨戶內海の海上旅行をした時の結果の好かつたことを思つて、今にも少し暖かくなつたら又そつちの方へ出掛けていつてみようなどゝ思ひながら暫く家に靜としてゐた。けれども何時までも腸の具合が整はなかつたり、一寸した咳が出たりすると彼は自分から、もう餘程高度に病勢が進んでゐるやうな氣がして、このことを考へ出すと、とても靜に落着いてはゐられなかつた。東京の病院を退院する時處方箋に書いてもらつたとほり藥品を求めて自分で藥を調合して絕えず服用してゐた。退院證の病名には胃酸過多症と神經衰弱症としてあつたが、別に炭酸グヤコールとかいつた强肺藥を處方箋に指定してあるのが、ひどく彼の神經を惱ました。隣家に幼友達で市の醫學校にいつて卒業に近づいてゐる人間からいろんなことを話して聞かされるので彼は一層自分で病を重くしてゐた。そして聽診機を胸や背にあてゝ見て、

「お前は何ともないよ。」

といふのが何だか氣休めに好い加減なことをいつてゐるやうに思はれて爲方がなかつた。

「そんな好い加減なことをいはずに、もつと本當のことを云つてくれ。」彼がさういふと、

「何にも好い加減なことをいつては居らん。」

まだ小學校にいつてゐる時分から近村で秀才の名を馳せてゐた、老成なその友達は、さういつて勃然としてゐた。しかし彼の方ではそれでも容易に安心出來なかつた。病菌の無有を確めるには喀啖を檢査するのが最も確かだとその友達にいはれて、それを檢査してくれと賴んだが、友達は笑つてそれに應じなかつた。生半檢査などすると惡い結果が明かにされるので、それを拒むのだらうと思つて、彼は小さい硝子壜に少量の喀啖を入れて、東京の病院で馴染になつてゐた醫員の一人にそれを送つて檢査を依賴した。その返事には、少しもそんな憂ひはないといふことが書いてあつたが、それでもまだ彼は何だか安心がならなかつた。

十

平凡な野山のほか何物もない彼の村の中を汽車が橫斷してゐた。山陽線は連續した鐵道の幹線であつた。汽車は日に幾回となく東の方の稍高い山と山の峽を出て來て轟々の響とゝもに鐵橋を渡り通り、過ぎた村の空に一抹の煤烟を殘して置いて西の方に見えてゐる山裾の村に隱れて行くのであつた。西から來るのは反對に東の方の山の峽に姿を消していつた。道はたゞ一と筋であつた。汽車はそんな詰らぬ片田舍を通過しても、行く果ては神戶や大阪京都のやうな繁華な都會を經て遠くの東京まで續いてゐた。幾重の山や河を隔てゝゐても自由に往つたり來たりしてゐる汽車を思へば其等の繁華な都會は近いやうでもあり、又遠くも思はれた。彼は一日家に居ることに倦み疲れると日に幾度となく田圃の方に出て歩きながら東に向つて馳せ去る汽車の後を見送つてゐた。そんな草深い田舍にゐては繁華な都會のさまを聯想せしめるのは、わ

づかに汽車を見てそれを偲ぶくらゐのものであつた。

それに、いろんな一家の事情がやつぱり彼を不愉快にせしめた原因であつたのみでなく、何時とはなしに都會生活の便宜や贅澤な習慣を多少でも味はひ覺えた彼には、とても是から先貧しい田舍の生活など辛抱出來さうでなかつた。都會的な何の色彩も娛樂もない田舍に永い一生を老い朽るといふことは、功名榮達は兎に角として、彼には唯その一事丈が死そのものゝやうに絕望的なことであつた。けれども東京は、病院に入院する決心をした時からもう斷念すると聲明してゐたので、それでなくてさへ何時も病に襲はれてゐるやうな氣持でゐて、此上又東京へ出て往くといふことは言ひ出されないことであつた。わづかに東京から取寄せて讀む雜誌や新聞によつて醫し難い憧憬の渴を慰めてゐた。文學志望の青年の投書によつて出來てゐる雜誌を暗記するほどの熱心を以て讀んだりして、每號誌上に華々しい文名を馳せてゐる投書家の才藻を羨望しながら自分の才能の乏しいことをいつも悲觀してゐた。彼は幾度か何か書いて見やうとしてもそれが少しも意の如くならないで獨りで絕望の聲を發して懊惱してゐた。

彼が一體何を目的として東京に往つたり戻つたりしてゐるかといふことに就いては深い洞察も理解も持つてゐなかつた代りに、彼の志望等に對しても何の干涉も助言もしなかつた。たゞ飽くまでも手堅い理財家であつて、通俗な意味の現實的な人間である兄が彼の進退について交涉のある點といへば學費を要求せられることの迷惑だけであつた。兄の意中は彼の將來がどうといふやうなことよりも差當り彼が東京へ往かうとさへしなければ金を出さないで濟むのが何よりも滿足なのであつた。尤も兄にしては、そんな得體の知れぬ目的の爲に月々幾らかづゝの學費を仕出すること甚く詰らぬことのやうに思れたのも强ち無理でもなかつた。そして少し氣に向かぬことがあると彼が直きに驕慢な素振りを見せたり不滿な顏をしたりするのが兄などには不快であつた。又彼の方の考になつてみると、金はなるたけ出したくない、しかし自分が家に居つて何にもせず、ぶら〳〵してゐられのが何となく眼障りであるのが見え透いてゐた。一度一寸法師の門付けに彼が錢箱の中の錢を拾錢くれて遣つたとか、五錢やつたとかいふやうな些細のことが原因で兄と氣まづい言ひ諍ひをしてから、彼は心中、自分はどうしても生涯この家に住むべき人間でないといふ決意を堅うした。勿論何時かは生まれた家を外に出なければならぬのが彼の運命ではあつたが、それよりも早く何とかして自分で生活する道を考へなければならぬと決心したのがその時であつた。新聞と雜誌とが何よりも好きであつた彼は、自分の將來生活してゆく道もそれよりほかに無いと思はれた。けれどもそれはやつぱり覺束ないことであつた。その頃文學青年の投書によつて成つてゐる雜誌に寄稿してゐた

若い文學士が神戶のある新聞に主筆として來てゐることを其等の雜誌の上で知つてゐたので、彼はその文學士を訪ねていつて、自分の熱心なる希望を訴へて其新聞社にでももし入れてもらへれば仕合せだと思つた。

そのことを兄に話して神戶に往きたいといふと、兄はそれには二つ返辭で同意した。

「お前が自分で金を取つて何かやつてみようといふんなら、そりや何處へいつて、何をしようと內では何もいはん。」

その頃から可なり皮肉であつた彼は、その一言で兄の心が一層よく分つたやうで餘り面白くは思はなかつたが、兎に角家にはどうしても居る氣はしなかつたので、神戶へ出て來て新聞社で宿處を訊いて其文學士を諏訪山寄りのある旅館に訪ねていつた。學士は紹介狀も持たなかつた彼にすぐ會つてくれた。座敷に通ると、廣い二間つゞきの二階座敷からはすぐ向うに神戶の海が一眸に見晴らされた。彼は、若くて新聞の主筆になつて、こんな眺望の好い座敷に陣取つてゐるその學士の才能と幸福とが羨望に堪えられなかつた。

もうそろ〳〵初夏の頃で、若い學士は圓く肥つた身體にセルの單衣を着て坐つて話したが、寡默の方で向うからはあまり口を利かなかつた。それでも格別脅し付けるやうな六ケしいこともいはず

「何か今までに書いた物がありますか。」と氣安に訊いてくれた。

その時彼は、心の中で、せめて何か一つでも、絕えず講讀してゐる東京の投書雜誌に撰拔されて揭載されてゞもゐるならば、大變心丈夫であるのだがと、ひどく忸怩とした。そして顏を赤くしながら、

「いや、まだ何にも書いたことがありません。」といつた。

「何か一つ書いた物を見せて下さい。さうでないと、私の方でも貴下に對してどうといふ見當が付きませんから。何でもいゝです。」

彼はそれを至極當然のことゝ思つたが、どんな物が書けるといふ自信がなかつた。彼はその若い學士の文章を腹から讚美して居つた譯でもなく、自分は意の如く何物も書けないながらに、自分相應の批評的見地から學士の文章があまりに漢文臭く、潑溂とした清新味のないのが物足りなかつた。たゞその人によつて新聞社にでも入れてもらへれば好都合だと思つたのであつた。

彼は用談はそれで濟んでもまだ、何だかそこに坐つてゐて、東京の雜誌に文章を揭載してゐる學士から何かしらいろ〳〵な話を聞いてみたいやうな氣持に囚はれてゐた。けれども學士はそれつきり後は默つて何にもいはうともせず、所在なささうに長い煙管を指先で弄びながら、ぐる〳〵廻はさうとしては疊に取り落してゐた。

彼はそれからすぐ歸鄕して何か詰らない物を二三日苦心して書いて送つたが、學士からは何の返事もなかつた。自分でもとてもそんな物では駄目だと知つてゐた。それでもう一度學士を訪問してみたくつて、すつかり夏になつてから又神戸まで出掛けて往つた。神戸まで往くにも兄から汽車賃を貰つていかなければならなかつた。兄は澁々幾らかの小使を出してくれながら、

「神戸へいたて、おへる(駄目なこと)もんか。」吐き出すやうにいつてゐた。

神戸では先の旅館を訪ねていつたが、眞實かどうだか學士は不在であつた。夕方にはお歸りになりますといふので、そこらを一と廻りして二三時後に又行つてみたが、やつぱり留守であつた。彼は、もし學士が都合よく居ても、つまらない物を書いて越したので、却つて會つてみようといふ強い自信もないのであつた。暑い日に照り付けられて、彼の顔面はひどく神經が焦立つてゐた。旅館の廣い玄關には番頭や若い綺麗な女中などが三四人も脚を投げ出したりして閾に腰を掛けて話してゐたが、二度目に不在と聞いて彼が悄然出て戻らうとして、板塀の外まで來ると、いけずらしい若い美しい女中と思はれて、彼に聞えるやうな大きな聲で、

「厭な坊さん!」と、變に節を付けていつた。彼はひどく侮辱されたやうな氣がして、一人で顔を赤くした。

その晩神戸のステーションで又西へ引返へさうか、いつそこのまゝ東京へ往つてしまはうかと大分思案した揚句、どうかかうか東京までの汽車賃だけはあつたので、到頭東京往きの汽車に乘つてしまつた。夜が明けてから、驛ごとに停車するステーションで擦れ合ふ汽車の窓から見える多くの學生は、あれは皆な樂しい暑中休暇になつて、歸鄕を急ぐのであらうと思ふと、彼は自分の、いつも確實を缺いた進路を悔むやうな氣もするのであつた。

その頃法學院は又先の麹町の方の下宿に戻つて、それも鄕里の中學校で知つてゐた人間と部屋を並べてゐた。その人間はもう早稻田の政治科を去年卒業して京橋のある雜誌社に勤めてゐた。彼が其等の處へ突然顔を見せたので、

「また來たのか。」と呆れた顔をしてゐたが、最初に彼が居着いた家なので、そのまゝそこに轉がつてゐた。

神戸まで往くといつて、又東京へいつてしまつたことが分ると、氣嫌好く家に居なかつた後のことなので、母親は又ひどく心を痛めて、彼が子供の時から公私の敎育に與つてゐた例の小學校の先生に賴んで、その先生から彼を一應呼び返すやうな手紙を出してもらつた。それには出來るだけ本人の希望を遂げさするやうに取計ふから、ぜひ一度歸つて來い、老母がひどく心配してゐるといふやうな意味のことが可なり嚴重な口調で書いてあつた。

彼は東京に來て十日ばかりしてその手紙を受取ると、早速又素直に歸つていつた。そして今度は凡てその先生が話を纏めてくれて、今後三年間くらゐで修業出來る學校を何處か迷はずやることに定めた。

「何處の學校にするか、學校も今こゝでちやんと定めて置かうぢやないか。」と、敎師はてきぱきと話を片端から定めてかかつた。

何處の學校にするかといふことになると、彼はまだ心に迷つてゐた。それは必ずしも彼の志がふらついて居たのではなかつた。むしろ餘りに理想が高過ぎて學校の選擇が困難であつたのである。つまり依然として何の學校も氣に入らなかつたのであつた。自分の生涯の大事を輕々しく定められないやうな氣が、やつぱりしてゐた。しかしもう退引ならぬ此場になつて何時までもそんなことをいつては居られなかつた。丁度これならば一點の異存もないといふやうな氣に入つた妻が何時までも發見せられないのを、好い加減な處で折合を付けて生涯泣寢入りに諦めなければならぬと同じほどの辛さであつたのだ。彼は暫く凝乎と思案してゐた。

「あんたも、もうこれから先五年も六年も學校に行くにしては遲過ぎる。」敎師は彼の確答の督促をするやうにいふのであつた。

「えゝ、早稻田か慶應よりほかにないのですが……慶應にしようかと思つてゐるのです。……」

「慶應より早稻田の方がいゝぢやないか。」

「えゝ、それでもいゝのです。ぢや早稻田にしませう。」

「さう。それぢや學校は早稻田に定める。そして何科をやる?」

「それにも迷つてゐるんですが、文學科にするか、政治科にするか、どちらにしようと思つて。」

「政治科の方にしたらどうだ。あんたは政治が好きなんぢやないか。」

「それは好きですけれど、文科の方をやつてゐると、まさかの時に中學校の先生でもするのに都合が好くはないかと思ふんです。」

さういふと敎師は、自分のやつて來た道に思ひ比べて、その方を安全だと思つたのか、

「あ、さうか、それなら文科の方にするさ。」

と、遂にそこで、それに定めてしまつた。彼には、さういふことに物事を定めてしまつたことが、殆ど堪えられないやうな、現實との妥協でもあり屈從でもあるやうな感じがした。それから一ケ月にどれくらゐの學資を仕出してもらふといふやうなことまでも、母や兄などの居並ぶ其場で先生の裁きで定めてしまつた。

そして九月の初に彼は又何度めかの新規卷きなほしで上京

した。

十一

早稲田の新學期が始つてから、今までの麹町の方からは道が遠過ぎるので、早稲田の南町にまだ、郊外のやうな野趣の多分に殘つてゐる處にある下宿を見付けてそこへ引移つていつた。その邊には武藏野の一部のやうな深い雜木林があつたり、清楚な竹藪などが水の涸れた大きな古池の土手を取卷いてゐたりした。そして日を追ふて秋氣が清くだん〳〵讀書の好季節になつて來るにつれてさすがに氣迷つてゐた彼の心も落着いて、好學の氣分が湧いて起つた。

その頃健康も相當に回復してゐたからでもあつたらうが、不思議に、病氣の恐怖に襲はれるやうなこともなくなつた。生命に對して大膽になつて來た。死とか自殺とか厭世とかいふやうな問題を考へてみることも度々あつたが、それは段々學問の進歩に伴れて半ば書籍の上で考へてみることであつた。三年の歲月は過ぎてしまへば、思つたよりも意外に早く立つてしまつた。その頃から歲月の流れることの早さを思ふやうになつた。しかし三年の學校生活は、その學校を好む好まなかつたにもかゝはらず、その間に彼の智識の進歩したことは爭はれなかつた。教師にも好い教師が居つた。文學といふものが今までたゞ漫然と小說だけを讀んで思つてゐたことよりもゝつと明瞭なる意味を以つて考へられるやうになつた。けれども彼はまだ小說の作家にならうとする自信もなかつたし、それをさほど高尙な有意義の仕事とは思はなかつた。やつぱり彼の志は少年時代に空想した硬派の文學にあつた。殊にその頃學校の教師の一人であつたある若い文學士は天才的の論文家であつたが、その人の淸新な物の見方や壯麗な文章には彼は、まだその學校に入らない前から夙に憧憬してゐたのであつた。彼は殆どその人の文章に魅せられて自分の將來に對する美しい空想を描いてゐた。

十二

學校を卒業すると同時に學費の給與も絕え、自活の道を始めなければならなかつたが、幸ひに卒業すると間もなく恩師の心配でその頃最も盛大を極めてゐたある雜誌社へ就職することになつた。そして半歲ばかり熱心に仕事に携はつてゐたが、我儘でもあり自貧心も強い彼には面白くないことが度々あつたので、年が改まつてから間もなく折角就職したそこを止めてしまつた。しかし、彼はそれを悔ひはしなかつた。自分の如き者の書いた文章が錢に換へられることを考へて不思議のやうでもあり、それが多年の理想に一致したことでないのが最も遺憾であつた。

その後或は一年とか半歲とか方々の雜誌社や新聞社に就職したこともあつたが、何處でも長くは勤まらなかつた。少年の頃から抱いてゐた空想は何時になつて實現される期があるとも思はれなかつた。淸く描いてゐた理想は實世間に打突かる度ごとに無慘にも粉つぱ微塵に打碎かれた。美しい青年の夢は、丁度夕方の虹の如く果敢なく消えていつた。

志望の成就を熱心に思ひ詰めてゐるあまり、戀愛などのことを考へてゐる心の餘裕もなく、又そんなことを快しとしなかつた彼は追々成熟する年とゝもに異性を欲求するやうな氣持になつてゐた。そして宿昔少年の夢が悉く破れてしまつた後、荒寥として現實生活をまぎらすものはやつぱり戀愛であつた。

それから殆ど二十餘年、人間の一生涯で最も働き盛りの間彼は意の如き藝術の成らざる嘆きと、それに伴ふ生活の艱難と、女性に對する絕望や憤恨とで具さに疲勞と困憊とを極めてゐた。人の一生涯はもつと面白いもの、順調に幸福が得られるものと思つてゐた期待は根柢から覆され破碎せられたやうな慘めな狀態になつてしまつた。それは例へば西瓜のやうな物を石の角にでも打突けて微塵に碎かれたとか、大根の葉房のところを捉んで水々した白根を力一杯地上に敲き付けたといふやうな、打ちのめされたる慘憺たる感じであつた。あまりに、空想してゐた期待と違ひ過ぎ現實の不如意と苦澁とに愛相が盡いて、これではいつそ生存を中絕してしまつた方が好いと思ふことが屢々あつた。殊に戀愛の絕望と憤恨とは彼にとつては確かに死よりも強い苦惱であつたに違ひなかつた。

彼は其等の失望や疲勞から、生きねばならぬ努力を投げ出してしまつて、何處か、何人とも顏を見ないやうな遠い處の山の中にでも入つて往つてそのまゝ出來ることなら、行えも知らずに消えて無くなつてしまひたいやうな氣持になつてゐたこともあつた。しかしながら生存の劣敗者として死ぬことの意久地なさを思ふと、どうしても死ぬ氣にはなれなかつたとゝもに、女に對する執着と怨恨とは彼を生きることに絕望せしめるよりも一層生に執着せしめたのであつた。

人間は何處から、何故に生まれて來て、そして何を爲すべきであるかといふやうな、彼が少年の頃自發的に抱いてゐたやうな架空な懷疑は學校生活を卒はる頃からもう問題ではなくなつてゐた。トルストイのさういふ思想に始めて觸れた時にもそれは無雜に見過して通ることが出來た。藤村操の厭世自殺に共鳴するにはもう四五年の遲速があつた。彼が早稲田の學校をあまりに好まなかつたにも係らず、その學校の創立者の一人である。ある博士も又ある哲學の教授の說く現實の中に理想を發見するといふ、飽くまで現實に卽した教說は遺憾なく彼の若い架空的な懷疑を一掃するに力があつた。その哲學の教授はいつた。

「君、人間が何處から何故に生まれて、何處へ往くかといふやうな愚かな問題は、何千年考へてゐたつて分らないよ。」

西鶴の描いた人間の苦惱が凡て金と女との現實的のものであつた如く彼の失望も落膽も憤恨も悉く現實の渦中に在つて起つた苦みであつた。そして少年の頃抱いてゐた社會とか國家とかいつたやうな問題については諦めてしまつて、それよりも自己の個人的問題が遙に痛切なものとなつた。

勿論彼は、藝術のみを以つて意義のある仕事とは決して思つてゐなかつたのみならず、もつと他に力の入れ効のある人間の仕事があるやうな氣が何時もしてゐるのであつたが、生活の方便にもなるところから段々その仕事に離れられなくなつてしまつた。そんなことも彼にとつては、現實の爲めに理想を裏切られたやうな遺憾があつた。それでも後には藝術の完成が彼にとつては最も永遠の滿足であり最後の安心であるやうな氣もするのであつた。それに比べると戀愛は遙に一時的の喜悅であつたにちがひないが、ある女に熱中してゐる時には、良き藝術を成さうといふやうな淡い喜びなどとは到底比較にならぬ凄じい深刻な魔力を以つて彼は深い泥濘の中に引擦られていつたのである。

そこで前後二十餘年の間に幾度となくにたやうな失敗と苦みを重ねて繰返して來た彼の戀は、何年か後になつて振顧つて見ると、どうしてあんな女の爲に貴重な人間の精力と時間とを浪費したかと馬鹿々々しいやうに思ふのであるが、それは恰ど第三者が、「よくあんな女に。」といふのと同じことであつた。

そして今の彼は、最後に深い痛手を受けた女の憤恨から漸く回復して來たところである。彼は恐らく今後はもう戀をしないであらうと思ふ。少年の時空想した志望が成し遂げられなかつたと同じやうに戀愛の滿足も遂に得られなかつたのである。

十三

それでもどうかすると、極めて稀れに昔關係のあつた女のことを思ひ出してみることもないではないが、彼の經驗によれば時といふものが最もよく胸の瘡痍を醫してくれた。或は時のほかにはそれを癒しうるものはないものはないともいへる。さういふ經緯については、彼の今日までその時々發表した記錄によつてほゞ明かである。其等の苦々しい日の事を再び此處で思ひ起して見ることは實に忍び難い厭はしさである。出來ることなら、それを皆な忘れてしまひたい。燒き棄てゝしまひたい。それは彼に取つて何の誇るところもない、たゞ人間の醜い弱點の表現に過ぎないものである記錄も悉かり。

けれども又かういふことも思つてみる。彼の心持では、どんなに好い女であつても、それが向うの方から此方を向いて來る女であつたならば、きつと難有いものには思はれなかつたであらうが、多くの女は大抵彼に背いて去つてしまつた。その背く理由は彼の方でこしらへたのであつたかも知れぬが、さうして彼の方に背を向けて去つた女に對する憤りと如何なる方法によつてかその憤りを晴らさねば濟まされない一念の爲にのみ生きてゐる興味を刺戟されたやうにも思ふ。それは恰も敵討ちを志願とする者が慘澹とした生活を續けながら最後の目的を果たす爲には凡ての他の欲求を犧牲にして悔ひないのと似てゐた。

それは凝滯なく物とよく推移るといふ賢慮を缺いた、愚かなことであつたには違ひないが、それをどうともすることの出來ないところに、餘程の賢人でない限り、人間の避け難い惱みがあつたやうにも思ふ。

彼は、どちらかといへば女を家庭とか生殖とかを目的とした實用的なものに見ることを餘り好まないで、常に自分の審美的要求を遺憾なく滿足せしめるやうな者を求めながら、遂にそれが得られないで、いゝ加減なところで折合をつけなければならないのが恰ど少年の頃の空想が實現し得られなかつたり、思ふやうな藝術の成らなかつたりする物足りさなと同じやうな不滿足であつた。

彼は前後二十年の間それほど女の事について幾度となく死よりも強い苦惱を經驗して來たけれども、同じ文學者の中に屢々あるやうに女との關係の行き惱みや醜い事實の破綻をありのまゝに見ないで、いつになつてもその醜に氣づかず、子供のやうな心持で、それを歡喜するとか又は一種の迷信的な自信を以つて平氣で決行するとかいふやうなことは嘗て考へられなかつた。自分では極度に人間のそんな醜い弱點を忌み嫌ひ、まざ〳〵とさういふ醜穢な心の狀態に面接して、時とすると、あまりの胸苦しさから獨りで「あゝッ!」と歎聲を發して唸るやうな羞恥と嫌惡を感じたのであつた。そしてそんな醜い事實に面接することがなくして濟んだなら、どんなに好かつたらうかと思ふのであつた。

× × × × × × ×

現實生活の繁瑣と困難とを認か見て來た彼は、今まで自分の通つて來た道を振顧つて、自分は決して賢い人間ではなかつたといふことが明瞭に眼に映ずるのであるが、それとゝもに時々「自分は兎に角生きて來たのだ。……よく生きた。」と、寧ろ不思議に思ふことさへある。些細な現實の艱難に打突つて死んでしまふやうな人間でなかつたことを考へると、案外に自分の強さを意識する。それについては自分を少しの容赦もなくくちや〳〵に揉んでくれた廣い世間に向つて感謝の一念がないでもない。恰も物凄い萬里の蒼波を望みながら、夏日の炎天に快よく海水に戲れてゐるやうな氣持もする。それは

又恰ど彼が東京のやうな活動の劇しい大都會の中に住むに堪へられないで、少し離れた市外の田園にその喧騷を避けながら、繁華を遠くから眺めてゐるやうな氣持とも通じてゐる。

立秋が過ぎて十日ばかりも立つと、高い青空の色にも初秋を思はしめるやうな白い雲が浮いて來た。借家の座敷に寢ころんで、じつと軒端の外に空の方を遠く眺めてゐると、三坪ばかりの庭に立つてゐる數竿の嫩竹にさや／＼と風の搖れて通る音が涼しい。夜は寢床の下から雨戸の外、垣根のまはりに地蟲の啼く聲が降る如く湧いて起るのを聞いてゐるのも、何となく寢心地がいゝ。さうして靜かにしづかに彼の日が立つてゆくのである。（をはり）

（大正十二年八月十六日作、中央公論掲載）

頽廢時代を顧みて

一

その夏一と月餘り、上總の方の海岸にいつたり、そこから一旦引揚げて歸ると又湘南の方の海水浴場などへいつて過してゐた葛野は、九月に入つて佗しい秋雨模樣の濕つぽい天氣が續いて來ると、水の退くやうにして歸つて往く浴客の群れに誘はれるやうな心持になつて東京に戻つて來た。彼はまだ夏の前から輕いインフルエンザのやうな氣味で、風邪が癒つたあとも鼻や腦を惡くしたり、それに大分健康をも害してゐたのであつた。無論健康を害したのはインフルエンザが原因でもあつたが、丁度其頃の葛野は、ある、戀愛に似たやうな事件の醜い破滅からひどく心身を傷けてゐたのである。それは果して戀愛と名づけてよいものか、又は若い肉體の盲目的な本能の衝動といふべきものに過ぎなかつたか、何れか知れぬが、それが誤られた戀の形をとつたものであつたには相違なかつた。しかしその頃の彼は、ひたすら自分の成業について熱心してゐた時分であつたから、戀愛に心を奪はれることを以て甚だ潔しとしなかつた。人間には戀愛などよりもまだ他に爲さねばならぬ大事が幾らもあると心得てゐた。加之その戀の關係が最も不健全なもの――既に戀愛がいかなる場合でも、あまり健全なものではないが――であつたがために、その頃尚ほ道徳的理想が純情で、情操の汚されてゐなかつた彼には自分の誤りゐる行爲からひどく道徳的汚辱を感じてゐた。さういふ不健全なる感情の瘡痍が與つて彼の健康を害したことも少くはなかつたのである。

それとも三四十日間も分れて精神を休養するやうにして海水に浸つてゐる間に大分健康も回復して來たので、葛野は新秋と共に更に新なる希望を復活したやうな氣分になつて東京に歸つて來たのである。

學校を出てから丁度一年になつたが、まだ確乎とした生活の道も立たず、それに卒業後半歳ばかりある處へ出勤してゐた月給生活も二月頃から止めてゐるので、何か文筆の仕事で生活してゆくよりほかに爲方がなかつた。葛野はしかし、自分のことを省みて、まだ何といつて一つも完成してゐない自

分の如き者が何か書いて、それが多少でも金錢に換へられることを思ふと不思議でもあり、又それが一向難有くないことのやうでもあつた。自分の書くやうな下らない物が、たとひ少額たりとも金錢に換へ得られるといふやうな文學といふものは如何に無價値のものであるかとさへ思はれるのであつたが、その頃の所謂文壇に名を成してゐる人達は誰れでも皆なそれをやつてゐるのであつた。しかし葛野には、其等の知名の人にとつては、それが別段不合理のことゝも思はれなかつた。自分は尙ほ一介の書生に過ぎないのである。それが金錢を目的として何か書くといふことは、自分が多年貴んでゐた文學といふものを汚辱することになると考へられた。彼はそれよりも出來るだけ、貴い古今東西の文學書を讀みたいと思つた。けれども何か書いて金錢を得なければ生活が出來なかつた。さういふ、心ならずも目前の生活に追はれて、貴い、理想的の讀書や思索に專念することの不可能な狀態は、その後年を經るにつれて、何處まで往つても、丁度並行線が無窮に亘りて一致する時がない如く、彼の理想は殆ど終生現實と離れて行かうとするのであつた。

今まで美しく夢みてゐたことが何もかもその實際に當つてみると案外に卑俗なものであつたりするところから葛野の頭の中は荒寥とした失望の感情に塡まつてゐた。彼の少年時代から空想して來た人間になるといふやうな茫漠とした希望は何時になつても實現されさうに思へなくなつた。

そんな狀境に置かれながらも、書く物によつて幾らかづつ錢の取れる道が段々開けて來た。そして、やゝ錢の自由が得られるやうになるに伴ひ、又、現實の人間の世界が、今まで考へてゐたやうな單純なものではないといふことが解かるに從ひ、彼は、初は爲方なしに、後には大して苦痛なしに卑俗な世間の中に入つていつた。しかしながら、それは彼にとつて生涯の遺憾であつた。それがために彼は、これから後一生、強いことも理想的のことも、清いことも、それを口にする權利がなくなつたやうな感慨に迫まつたのである。人間の弱さを、遠く他人の上にでなく、自己の胸臆方寸の間に明歷と見せつけられたのである。彼は傍に人の居ない時、自分獨りでゐる時に却つて頸を俛れて卑屈な耻辱の念に責められることがあつた。しかも、それが、女性に關係したことになると倍々さうであつた。が、そんな心でゐるにもかゝはらず、一度女性のことで心を亂されてからは、一度一とたび驅け出した馬は、どうしても手綱の力では制馭することが出來ないと同じやうに、彼は少しの意思の耐力もないものゝやうに醜い情慾の深淵に引込まれて陷つていつた。

そしてこれは、ずつと後年になつて葛野が散々苦んださういふ不態な惑亂の狀態から漸く足場を踏み直さうとする時分であつた。彼の知人の中に、彼が平素、自分などとは、全く

品性人格を異にした人間として敬意を抱いてゐた年長者に、異性のことに關係して思ひ掛けもない醜狀を暴露した者が二三に止まらず出來てきたのには彼は甚く驚かされたのであつた。彼等はその時皆な、既に年齡からいへば人間として最も思慮の熟すべき四十を越してゐた。そして、いづれも數人の子の父親であつた。その中には法律の上で結婚をすることを承認することの出來ない肉親の間柄で、兩性の關係を結んだ者もあつた。又多くの青年子弟から師表と仰がれて、其等の高等教育に從事してゐる者にして、妻子を棄てゝ一婦人と同棲したものもあつた。またその述作と說教とによつて一代の青年男女の渇仰の的となり、謹嚴溫厚の模範的紳士と謳はれた人にして有夫の婦と通じ、最後は情死をして身を果した者さへ出來た。

さういふ、社會の信仰を裏切つたやうな意表の出來ごとのある度に世間は悉く驚かされたが、葛野は又彼れ自身の立場から、特殊の判斷を以つて格別に驚かされたのであつた。

世上それ等を道德的に非難した者も相應にあつたが、むしろ非難した者は笑はれて、反對に、人間の眞情の僞なき發露として讃美し、又は、もしさうでない者までも、それを止み難き人間の弱點として寬恕しようとする傾きがあつた。

葛野はそれについて、ある矛盾を感じた。文學とか藝術の人間であるがゆゑに、さういふ常規を逸した行爲をも賞讃されたり辯護されたり默認されたりするといふは如何なものであらうか。通例因襲的に常規となつてゐることが、その實過誤であつて、常規を踏みはづし、肉親と性交上の關係を結び妻子を棄て他の婦人と同棲し、又は有夫の婦人と通じて情死したのは何れも文學藝術に携はつてゐる人間であつて、文學者藝術家などゝいふ者は、普通の世間人よりも思想が遙に進歩してゐるので、其等の人間は、やがて一般人の常規となるべき行爲を衆に先じて實行したものであるか。

しかし、まさかさうとも思はれない。彼等はやつぱり常規を逸した行爲をしてゐるのである。そして、それが文學者であつたり藝術家であるがために世人から、賞讃されたり、辯護されたり、默許されたり、若し然らざるまでも、「あれは文學者の爲したことだ。小說家のしたことだ。」と特殊の取扱を受けて、大目に看過される點を考へて、葛野はいつも深い疑惑に囚へられるのであつた。

文學者藝術家等は一般世間人よりも優越せる人間であるがためにその、如何なる行狀をも、普通の道德的の批判、制裁から容されるのであらうか、まさかさうでもあるまい。さうすれば「どうせ文學者藝術家などゝいふ者の行爲は普通の道德的批評を以つて律することは出來ない」といふのであるか。たとひさうだと明かにいはないまでも、幾分かさういふところがある。假りに其等の行爲が、文學者藝術家よりも、もつ

と衆人の眼に着き易い、社會的公人の立場に在る人間によつて行はれたとしたら、世間はそれを何といつて許するであらうか。內務大臣の私生活にそんなことがあつたら、どうであらう。その他の高官にそんな行爲があつたら、どうであらう。彼等はその場合恐らく公的生涯に終を告げなければならぬ。文學者や藝術家であるがために、そんな行爲があつても道德上の批評から不問に附せられてゐるといふは、恰も未成年者の犯罪の場合の如く、彼等は道德の裁きを受ける資格の無い者として特殊の取扱ひを受けるのではあるまいか。もしさういふことになると、文學者藝術家などゝいふ者は普通の人間に比べて道德的に缺陷のあるものと認めなければならない。彼等は、人の常倫又は道德的批判に堪え得ない、不完全なる人格であらうか。世人が、彼等に如何なる破倫の行爲、不檢束の行ひあらうとも、それを敢て非難攻擊もせず、又彼等を社會的生活から葬り去らうとしないのは、取りも直さずそれだけ文學者、藝術家等を道德的人格として、一般世間人以下に劣等なる人間として暗默に認めてゐることになる。

葛野は平常から、あの人達に限つて必ずさういふ道德的破綻を露はさない人間であらうと信じてゐた者等が、彼の從來の確信を裏切つて、さういふ破綻を露はしたのを見て、新に人間といふものに對して絶望せざるを得なかつた。最後に僅に繫いでゐた人間といふものに對する理想がそれとゝもに遺憾なく崩壞してしまつたのである。

彼は、自分が、何時の間にか、彼が少年時代から青年時代の初期にかけて抱いてゐたやうな、現實生活の風塵に穢されない清い理想的の人間にならうとする空想を粉微塵に破壞されたことから甚く自己の道德的生活に絶望するとゝもに、世に公人として立つべく面目を踏みつぶした者のやうな卑屈な氣持に支配されてゐたのであつた。そして自分などはもうどうすることも出來ない、いはゞ穢されたる人間である。然るに同じ文學藝術に携はる人間の中には、自分の嘗て空想したやうな異性に關する道德について立派な行ひをしてゐると信じてゐた人間があつた。葛野は其等の人間と自分とを、心の中で區別を附けて考へてゐた。然るに事實は彼自身などよりも其等の、異性道德の堅固なる行者と見た人間の方が却つて甚しい異性道德の攪亂者であつたではないか。

葛野は、さういふ意表の出來事を一度ならず二度も三度も歴明と見せられた。しかしながら彼は、そのために、決して自分の長い間の穢されたる道德的生活を是認しようとは思はなかつた。――今まで道德的生活といつて來たのは、主として異性道德についていふのである。――とにかくその頃の彼は何事を爲さうとしても、又何人の前

に出ても、いつも含羞が先きに立つて手も足も出なかつたと同じやうに戀といふことに對しても又ひどく臆病であつた。しかし何かしら、今までのやうに唯々書籍ばかりによつて人間生活の凡ての要求を滿足せしめようとする遣り方では到底充實した滿足は得られさうもないといふことが解つて來た。そして、その隙間には女が欲しいといふ正直な本能が殆ど無意識に働いてゐるのであつた。彼は時々、自分の要求を充たしてくれる女を空想してゐた。それが、どんな女であるか極めて夢のやうなものであつたが、時々それが種々な形となつて彼の眼の前を往來した。まことに取留めもない、きれ〲な淡い色彩であつた。

二

その頃葛野は、牛込の盛り場に近い高臺にある下宿屋に隨分長く住んでゐたが、九月の中旬を過ぎる頃になると初秋の頃をしみ〲と身に感ぜしめるやうな清風が高く晴れ澄んだ空を吹いた。そこら邊には、まだ處々に取り殘されてゐる、江戸時代の大きな屋敷でもあつたかと思はれるやうな、樫や欅の老樹が欝蒼と茂つた處があつた葛野は、ふらりと家を出て、まだ、ちか〲と殘暑の照り輝く日を避けて、其の木立に添うた日蔭の道を散歩しながらよく本を讀んでゐた。それは外國の著名な文豪の書いた物か、それでなければ其等に關する解説や評論などであつた。彼は自分の乏しい智識と未熟な見解とを意識してゐるので、專ら其等外國の名著傑作に親むことによつて、人間としての自分を修養することが出來るものと思つてゐた。又自分がこれから段々文筆の仕事に從事するには職業としてもさうせねばならねばならぬと思つた。そして、それは自分の平常の理想を放棄しないで出來ることであつた、何故ならば古今の名著に親むことによつて人間としての自己の完成が成就せられるものと思つてゐたから。

そのうち次第に秋も深くなり、健康も追々回復して來るにつれて、山の手の盛り場である夜の街の賑かさは、何等の繫累のない、自由に解放されたやうに心の浮ついてゐる彼の身體の中のものを唆るのであつた。彼は自分の若さを意識してゐた。境遇の自由を意識してゐた。さうして單なる書籍や、道德的生活に對する渴仰だけでは到底滿足することの出來ぬ、もつと直接な、人間らしい――それは、たとひ耻づべき卑俗な欲望であるにしても――生活興味の方に惹き付けられて行かうとするやうな氣持に段々なつていつた。ぞろ〲歩いてゐる神樂坂の夜の街の人込みにまぎれて、肩と肩と擦れちがひに行く女に眼を惹かれたり、毎晩のやうに寄席で聞く卑俗な流行唄に遊蕩氣分を唆られてゐたのもその頃であつた。女の中でも殊に藝者といふ種類の女に對して、その方の修養がなくては侮られて容易に近づき難い、權威のある生活

をしてゐるものゝやうな、ある憧れに似たやうな興味を持つてゐた。錢の自由にならぬところから其等の種類の女には一層近づき難いやうな氣がしてゐた。そして次第に都會の生活に馴染むにつれて、花柳界の女の好尙風俗に最も鮮明に表はされてゐる都會的の洗練を經た婦人美といふやうなものが、どうかすると優れた藝術的興味と同じものであるかのやうな氣さへして來た。

その時分同じ下宿屋にゐて、互に自分達の部屋を往つたり來たりして、いろんな世間的雜話を交はしてゐた男は、葛野よりも四年前に學校を出て、ある新聞社の經濟記者などを務めてゐた。その男は鄕里の實家が金持ちでもあるらしかつたが、もう可なり世間擦れがして、毎日手俥で東京中を飛び廻はつてゐた。——その頃自働車などなかつた。——その頃葛野が自分の筆によつて大分錢を取つてゐるのを見て、その男は自分が毎日手俥で外を飛んで步いて得られる月給などよりも却つて割がいゝのを羨むやうな口吻で、

「いゝものだねえ、文筆の仕事は。」などゝいつてゐたが、近處の神樂坂で遊ぶ話などをして、土地の大抵の好い女はみんな知つてゐるやうなことを自慢にしてゐた。葛野は、自分には、わづかに筆によつて得られる外に金もないし、現實世界の人間として特殊の修養と練磨を積んでゐる、優れたる女性と譯もなく談笑することの出來るその男の大膽と自由とに感心してゐた。

「君、今度一緒にいつてみよう。僕が好い女を君に紹介するよ。」といつてゐた。

そして、ある晩彼が葛野の部屋に聲をかけて入つて來ながら、

「君、今日は忙しいの。……忙しくなければ、いつてみようぢやないか。」といつて、誘ひに來た。

無論葛野は從順にそれに同意した。

「君、うんと好い着物を着てゆかなけれや駄目だぞ。」彼はそこに坐つて、葛野に指圖するやうにいふのである。

「格別好い着物もない。これつきりだ。」葛野はきまり惡さうに押入れの行李から何かしら糸織のやうな着物を取り出した。

彼はそれを凝つと見て笑ひながら、

「うむ、隨分君、田舍臭い物を持つてゐるぢやないか。」

「だつて。これよりほかにないんだ。」

「まあ、それでいゝさ。君、あんな處に往くには着物や持物に注意しないとすぐ馬鹿にせられるからね。」

「それはさうだらう。」葛野も幾らか反抗的な氣持で、うるさいと思ひながら、そんなことを受け返答しい〳〵着物を更めて、その男と伴れ立つて、すぐ近くの神樂坂の方に出ていつた。

彼は葛野の先に立つて、ぞろ〳〵人通りのしてゐる表の通りから橫丁に切れ狹い裏通りになつた、小意氣な家の軒を並べたところを、ずん〳〵步いていつた。葛野もこれまで、その邊の粹な構へをした狹斜の氣分を崇拜するやうな、懷しい氣持ちで、偶に、恐々ながらそこ等を素通りして見ることがあつたが、そんな家へ入つていつて、彼れ自身にとつて未知の世界に住む人間としての特殊の修養と練磨を經てゐる婦人と口を利き交はすといふことは容易に遂せられない欲望だと思つて、諦めてゐたのであつた。

その男が、やがて、葛野を外に待たしておいて、自分だけでとある瀟洒とした軒燈の出てゐる門を入つていつた。門から玄關の入口までは何ほどもなかつたが、軒燈の微明りで花崗石の敷石に濡れた打水が澤々と輝いてゐるのも艶めかしく入口の兩側に盛り鹽をしてゐるのも淸らかである。

彼は入口の處に突立つて、玄關に表はれ來た、銀杏返しの女中らしい年增の女と何か二た口三口話してゐたがやがて合點したやうにうなづきながら出て來た。

「今内にゐないさうだ。そこの寄席にいつてゐるさうだからいつてみよう。」と、そんなことを獨りごとのやうにいひながら、彼は又先きに立つて賑かな神樂坂の通りを橫丁の坂の途中にある寄席の方に來かゝつて、葛野には、曲り角の處に立たしておいて、彼は寄席の入口から下足番に賴んで中に來てゐる筈の女を呼び出さした。葛野は、少し離れた小間物屋の曲り角のところに姿を半分隱しながら見てゐると、女はすぐ寄席の入口まで出て來て、その男と立ち話しをしてゐたが、此方で葛野が、どんな女かと思つて、そこらの灯影に遠目に透して見てゐると、向うでも黑つぽい羽織を引掛けて黑繻子の半衿の上に眞白に化粧した顏を時々こちらに向けて、目ざとく見てゐる樣子である。銀杏返しに結つた、なか〳〵好い女である。葛野は、心の中で、あの女を吉崎——その男——が自分に取り持たうといふのであらうか、それとも、あれは吉崎が自分の馴染みの女であらうか、と思つて待つてゐると、彼等は互に何かいひ交はしながらそのまゝ別れて吉崎ひとりで此方に引返して來た。そして步きながら、

「歸らない。もつと聞いてゐるといふんだ。……君も見たらう。そりや素晴しい。別嬪なんだ。あれを君に取り持たうと思つたんだ。」

葛野は、平常容易に近づき難いものと思つて諦めてゐるそんな、しかも美人の女を取り持つてくれようとした吉崎の好意を難有く感じながら、

「さうか、僕に紹介してくれるつもりであつたのか。僕は又君の馴染みの女かと思つてゐた。」

「そんな譯ぢやないさ……まあ君振られたんだよ。あそこに立つて君の方を見てゐたらう。あの人でせうといふから、

うむ、さうだといつたんだ。隨分僕が口說いてやつたんだけれど今日は身體が惡いとか何とかいつて歸らない。爲方がない、まだ他にも幾らもゐるよ。」

吉崎はそんなことを半分ひとり語のやうに呟きながら、今度は先の横丁とはちがつた、狹い裏通りを歩いて、又とある粹な入口に入つた。

其家で彼は早速自分の馴染らしい妓を招んだ。そして、

「だれか別嬪を一人招んでくれ。」と女中に命じた。

吉崎の馴染と思はれる妓は、とても讃美することの出來ない、見るから安つぽい場末の藝者らしい女であつたが、二人は大分好い仲と思はれて、來て、そこに坐わり早々互に狎れなれしい大口などを利き合つてゐた。そしてそんな場席にはぴつたり板に附かぬやうな吉崎の感じの荒い物の言ひ振りなどが、これまでそんな處にあまり來たことのない葛野にも氣がさすほど不愉快であつた。

吉崎は寄鍋などを取つて馴染の妓と頻りに酒盃を交して好い氣持ちになつてゐた。そして時々葛野を若輩視したやうな口吻で、

「君、こんな處でそんなに堅くなつちや却つて持てないんだよ。」などゝいつてゐた。

「あなたのやうにさう堅くなくつても困るわ。」妓は煙管に火を吸付けながら云つた。

「なぜ？　俺は堅いぢやないか。」吉崎はわざと眞面目な顏をして、氣障な眼鏡をきらつかせながら妓の顏をじろりと見た。妓は笑を含みながら、何か意味ありさうな眼元で、

「なぜか知らないが、あんまり堅くはないよ。」と、卑しい言葉でいつた。

葛野は二人の痴話を體よく見せつけられてゐるやうな氣がして一層堪らなくなつた。

さうしてゐるところへ又妓が一人入つて來た。葛野はこれが自分の爲に招ばれた妓であらうと思つたので、それとなくよく見てゐた。彼女は先から來てゐる妓に比べて年も大分若いらしく、身體も大柄で色の白い肉附の豐かな女であるが、大きな顏がどこやら間伸びがしてゐる。彼女は先から來てゐる女を姐さんと呼んで、何か、今度のお約束にゆくとか行かぬとかいつたやうな、彼等以外の者にはよく解らぬ話を二た口三口話してゐた。そして暫く酒盃を取り交はしたりしてゐるところへ、女中が入つて來て、何か知ら合圖のやうなことをいつた。すると、吉崎は早速呑み込み顏で、

「もういゝの、君。」と、まるで書生のやうな調子で云つた。

「えゝ、どうぞ。あちらにして置きましたから。」と、女中はおとなしくいつた。それで吉崎は葛野の方を見て指圖するやうに、

「君、もう支度が出來たさうだから、彼方にいきたまへ。」と

いつて、後から來た妓の方にも

「さあ君、あちらへ。どうぞ御遠慮なく。」彼は粹な洒落れでもいふやうな調子でいふのであつた。

葛野はその意味はよく解つてゐたが、いくら羞耻を感じない場處であるとはいひながら、あまりに露骨な吉崎の言葉に又更に不快を感じて、たゞ、うはの返事のみしながらそこに坐つてゐた。すると吉崎は又粗雜な調子で、

「何だい君。ちつとも耻かしいことはないぢやないかまあ暫く彼方へ往つてゐたまへ。僕等は又二人で、此處で好い話があるんだ。‥ねえ君、」と、彼は若い妓の方を見て笑つた。

「どうぞこの人を彼方に連れていつてくれたまへ。××××××××××。」

吉崎はさも、何も斯も心得た、遊びなれた人間のやうな調子で厭味なことをいつてゐた。

葛野はその妓と、幾間か隔てた向うの方の座敷に入つていつたが、間もなく氣もない顏をして表はれて來た。妓と差向ひで寄鍋をつゝきながら、もう顏を眞赤にして上機嫌になつてゐた吉崎は、そこへふいと立ち表はれた葛野は例の厭味な眼鏡の眼を上げて不思議さうに仰のいて見て、

「どうしたんだ？　君。」

「うむどうもしない。」

「馬鹿に早いぢやないか。もつと彼方にいつてゐたまへ。え、どうしたんだ。」吉崎は彼の癖で執固く訊いた。葛野は興味のない顏をして、

「どうもしないけれど、××××××。」

「はあ、×××××。‥‥×××××××。」と仕舞にはそこにゐる妓と顏を見合はして「あはゝ」と笑つた。

葛野は何となく肉體に不快を感ずるやうな氣持ちで其處に坐はつてゐたが、あとから、何事もない顏をしてそこへ出て來た妓を見ると、もう女を見るのも厭だといふ氣持がして來た。彼は我慢して暫くそこにゐたが、やがて言ひにくさうな顏をして、

「僕はもう歸らう。」といつた。

吉崎はそれで又解らぬ顏をして、

「何で？‥‥何故歸る。」といつて葛野の顏をぢつと見た。

「うむ、何といふ譯もないが、もう歸つてもよからうと思つて。」

吉崎は笑ひながら、「君は、まだ遊ぶことをよく知らないんだ。こんな處に來てはもつとゆつくりするもんだよ。まだいいぢやないか。さあ一つやりたまへ。」と酒盃をあけて葛野に差した。

葛野はそんな處に來たのは殆ど初てゞもあつたが、卑しい欲望を充たしたあとの何ともいへない不愉快な肉體的感覺をどうすることも出來なかつた。そして又しても彼が歸るとい

ひ出すので吉崎は不思議に思つて執固くその理由を訊かうとするのであつたが、それは葛野にも、口に形容して説明することの出來ない氣持であつた。勿論吉崎にも理解することが出來なかつた。

「どうしてそんなことをいふんだ。今日は此の間から約束して置いて折角一緒に君と遊びに來たんぢやないか。もつとゆつくり遊んでゆきたまへ。何かほかに食べる物を取らうか。」

「そうしたらいゝわ。何かほかにさういつて。」吉崎の馴染の女も口を添へながら、葛野の方を見て、

「別に御用がなかつたら、いゝでせう。」と氣心を測りかねたやうに云ふ。

「えゝ、」と葛野は爲方なしにいつてゐた。

そんなことを執固く問答してゐる間にいつの間にか若い方の女は何處か帳場の方にでも下りていつたらしく一寸姿を見せなかつたので、吉崎は又露骨なことをいひ出して葛野に、彼が歸りたがる譯を訊かうとした。

「ぢや大に持てたんだ。そんならもつと居るさ。」と、頻りに引留めたが、葛野はどうしても歸ると云ひ張つて、仕舞にはさも〳〵困つたやうな顔をするので、吉崎もそのうへは留めかねて、

「ぢや歸ろさ。歸りたまへ。」と諦めたやうにいふ。

葛野もさうなると、何だか吉崎には濟まぬやうな氣がして、

「ほんとに失敬だが、僕は何だか今日は少し氣持ちが惡いんだから。」

吉崎は、

「なにそんなことはいゝさ。」といつてゐたが、葛野が立たうとすると、「君一寸。」

といつて、彼を座敷の外の廊下の隅まで誘ひ出して、低聲で、

「ぢや君、今のを僕がこゝで一寸預つておかう。」

といつた。葛野は、

「うむ、それは。」といつて、懐中から拾圓札を二枚取り出して吉崎に渡した。

後になつても吉崎はそれつきり葛野に書附も見せず、あの時の錢がどのくらゐ掛つたといふやうな話もしなかつたが、いくらそんな錢を使ひなれぬ葛野にもほゞ見當はついてゐたので、

「彼奴め、口の先では、さも人に御馳走をするやうなことをいつて居て、ひどい奴だ、」と憤慨してゐた。その後、やつぱり神樂坂にしげ〳〵足を踏み入れてゐる者から聞くところによると、吉崎はその土地でもあんな吝ン坊はないといつて、藝者からも待合からも鼻摘みである、少し氣の利いた藝者は對手にもしないといふことが知れた。そして、そのことをいつて聞かせた男は、その女は素敵な別嬪なんだ、といつてゐたが、後になつて、彼は本人から聞いたといつて、あの時吉

崎さんだから行かなかつたといつてゐたと話した。

「そのうち一度僕と一緒にいかう。」と彼はいつてゐた。

三

葛野はその頃から、江口といふその男とも親しくなつてゐた。江口は葛野よりは五六年も早い、同じ學校の先輩で年も三つ四つ上であつたが、文學者としても妙に出來そこなひの方で、安つぽい藝人のやうな風をした、女たらしの遊蕩兒であつた。そしてひどく世間ずれがして、葛野などの嘗て知らない社會のことによく通じてゐたので、葛野は、一と仕切り初のうちは、一種の才人である江口の話に何でも心醉してゐた。それも段々後になつては、彼の見聞も大したものでないことが分つたが、その頃から、急に學生々活から解放されたやうな氣分になつてゐるとゝもに、都會趣味の目覺めて來た葛野は、江口から聞かされる下町の料理屋のはなし、食べ物のこと、芝居者の噂、藝者やお茶屋の女中といつたやうな苦勞人の女のことが何を聞いても彼の興味をそゝるのであつた。中にも意氣な銀杏返しの頭髪とか、黑繻子の衿とかいつたやうな、見方によつてはつまらない瑣末な形體上の視感が強い魅惑の力を以つて彼の女性に對する興味を唆つた。そして都會趣味の堂奥に入つてゆくことが、どうかすると殆ど生存の價値の大半であるかのやうにさへ彼には思ひなされることさへあつた。いつも下駄の好いのを穿いてゐるとか、着物に襟垢の附かないのを着てゐるのが何よりも都會人の氣にすることであるといふやうなことを覺えて、そんなことまでに入らぬ苦勞をするやうになつたのもその頃からであつた。

おい〳〵秋も濃かになつて、街の人通りもどこやらしつとりした落着きが見え、澄んだ秋冷を快よく肌に覺える頃になると、美しい夜を色彩る家々の灯影の中にも呉服屋の店先に飾られた派手な色地だの唐物屋の飾窗の中が殊に眼をひいた。水菓子屋の店頭には日毎々々に蜜柑の黃色や林檎の紅が色を增した。

葛野は、繁華な都會の中に住んでゐる者の賑かな變化と興味とを殆ど肉體的に感じてゐた。そしてその頃から屢々江口に引つ張られて、そこらの料理屋へ物を食べにいつたり、歌舞伎座や明治座へ芝居を見にいつたり、方々で催うされる遊藝のお浚へを見にいつたりしてゐる。そして到る處で眼に着く女を品評して、あれは好いとか惡いとかいふやうな雜談に耽けるのが最も興味のあることで、葛野はさういふことに生存の幸福を意識してゐた。美しい女は何處にいつても見ることが出來た。女といふ、美しい頭髪容形を整へた異性の人間が到る處に見られることが、どれだけこの都會を華美なものにしてゐるかわからない。葛野はいづれも目まぎれのするやうな氣持ちがして、街を行く目につく女を振り返つて見た。美

しい女は數知れぬほどある。そんな無數の美しい女の中からどんな女か自分に滿足を與へる女と都合よく出合はないものだらうかと空想してゐた。そして何時かは必ずさういふ女に出合へさうな氣がしてゐた。けれども、それは容易に事實となつて現はれさうでゐて、何時まで待つても、なか〳〵見附からなかつた。

江口は二三度葛野を誘つて、じめ〳〵した露地の中の遊びに行つたあとで、

「もう今度は君が一人で一遍いつて見たまへ。もうゆけるだらう。待合へ行くことなど何でもないことさ。」

と、けし掛けるやうなことをいつてゐたが、臆病な葛野はまだそんな元氣がなかつた。そして一體金をどのくらゐ取られるものやら分らない不安もあつた。それで、いつも金などあんまり持つてゐたことのなさゝうな江口が、まだ十分諸譯の分らぬ葛野には、綺麗な顏をして平然と通してゐるのが非常な手腕家の如く考へられた。其實江口は彼の使用されてゐるその區内のある有力者の顏を巧に利用してゐたのであつた。勿論そんなことは葛野などに知られる筈もなかつたが、江口のそんな不信用はいつまでも尻つぽを露はさずにはゐなかつた。けれどもその有力者の男衆のやうな、幇間のやうなことを勸めてゐる江口は大將のお伴をして旅行などに出掛けた時に旅の憂さはらしにとて大將の枕席に侍する女を周旋したりする場合に搔いところに手のとゞくやうな技倆をもつてゐた。そんなことから、毎時も金錢上の不信用などを暴露しながらも全く大將から見棄てられてしまふといふこともなかつた。金のない江口は、さうして大將の顏で通れる處はそこら中の料理屋待合から曖昧な席貸しのやうな處まで色食の欲望を滿足さすべく漁り歩いてゐるのであつた。

その頃江口や葛野は四五人の同好の友達と演藝の研究の名の下に屢々ある處に會合してゐた。そして一とゝほり研究に關する談話が果てると最後はいつも女遊びの話に落ちてゆくのであつた。いつも露骨な猥らな雜談に、はつ〳〵云つて笑ひ興じてゐた。そんな放縱な感興が彼等に伸々とした生活の快樂を覺えしめた。本當は演藝の研究といふのは名であつて、さうした三十前後の遊び盛りの連中が寄り集つては無益な雜談に夜を耽かすのが面白かつたのである。

いつも集まる場處は定つてゐた。そこは藝者などの入らない處であつたが、料理屋や待合のやうに氣が張らず座敷も宴會に使ふやうな廣間もあれば、三疊四疊半の意氣な小座敷など、間數も相應にあつた。以前寺のあつた屋敷跡の高い崖の上から低地の街が一目に見晴された。

年中のらりくらりして遊んでゐることの好きな江口は何かの會合を名として始終そこに入り浸つてゐた。碌な文筆の仕事もしてゐる譯でもなかつたが、何か書く物でもあると、そ

この小座敷にいつて遊んでゐた。そこへは藝者といふやうな表向きの者でなく、祕密に客を取る種類の女が偶に出入りしてゐた。それでも亭主が案外頑固な爺兒であつたので、おかみの一存で亭主には隱して長い懇意の筋でなければそんな周旋はしなかつた。

葛野は江口と一緒によくそこへも遊びにいつてゐたが、彼にとつては未知の世界である、さういふことのあることは少しも知らなかつた。けれども江口は、そこのおかみとはもう長い間の知合で、おかみの周旋でいろんな女とそこで祕密に會つてゐたのである。

一度葛野は江口と連らなつてその家へいつた時、いつもおかみや女中達のゐる、帳場の奧の圍爐裏端に入つて茶を飮んでゐると、そこに女中のほかに藝者のやうな風俗をした銀杏返しの三十がらみの女が坐つてゐた。葛野にはそれがどんな種類の女か詳に分らなかつたが、その後で、彼等は小座敷の方に上つていつた。おかみは座敷の案内に立つてついて來たが、江口はそこに入ると、「おかみさん、ありや好い女ぢやないか。」と、色慾に渴した江口はもう一寸どうかしてみたいやうな氣持をしていつてゐた。江口はまだ獨者であつた。

すると、そんな處のおかみとも思へない、大女で不恰好な樣子をしたおかみは、見るから氣持ちの惡い、にや〳〵した笑ひ樣をして、

「江口さん、またそんなことをいつて、あんた見る女ごとどうかしたいんだから」

と、變な田舍訛りの言葉で友達にいふやうにいつた。そこの爺兒は伊勢產れの者で、おかみは若い時松阪か何處かで女郎をしてゐた女だといふ話しであつた。江口もさういはれて、爲方なくにやりとしたが、又すぐわざと眞面目な顏をして、

「そんなことはないよ。そんなことはないよ。」と重ねて辯解するやうにいつて、

「好い女ぢやないか、あれどうかならないのか。」彼はもうぜひ共何とかしてもらひたいやうにいつた。

おかみは餘りはき〳〵せぬ調子で、

「さあ話の樣子によつては、どうかならないこともないか知りまへんけど、江口さん浮氣者だから、何をいふか一寸も當てにならないんですもの。」

彼女は何かしら一寸怨むやうにいつた。――大分後になつて、そのおかみとも、江口はちよつと譯のあつたやうなことを、葛野は聞いたことがあつた。

そんなにいはれて、江口は一寸照れた笑ひ樣をしながら、

「戲談をいつちや可けない。おかみさんは僕をひどく惡人のやうに思つてゐるんだ。僕は決してそんな惡人ぢやないよ。」

するとおかみは、一層甘つたるい笑ひを發して、

「あんた本當に惡人ですがな。私は先の時分のことを思つて

江口さんは生なお方と思つて居つたら、二三年遠のいてゐる間にすつかり人が變つてしまつた。」と何處までも戯弄ふやうにいふ。

江口は洒々した顔を又わざと生眞面目な表情をして笑を含みながら、

「いゝよ。」と切り口上につんと澄まして、

「おかみさんが僕をそんなに惡人と思つてゐるんなら惡人にしておくさ。實に非道い人だ。」と、すねた風をしてみせた。

づるい癖に正直な處のあるおかみは、一寸本當になつた顔をして、

「江口さん、たうとう怒つてしまつた。」といつて、はあ〳〵笑つてゐる。

「何にも僕は怒りやせんさ。おかみがさん僕を惡人にするんだもの。あんまり非道いよ。」と又眞顔になつて見せた。

江口は彼自身には財産などもなかつたが、母方の實家の伯父は大會社の重役で、可なり派手な生活をしてゐた。そちらにはまだ江口の祖母に當る人も高齢で存命してゐた。さういふ關係から江口も何處か、本來良家のお坊ちやんが文弱に流れて放蕩に身持ち崩したたやうな處があつた。金はなくつても何時も金持ちの若旦那のやうな風がしてゐたかつた。

おかみは可笑さうにいよ〳〵笑つて、

「江口さん、先によくクリスマスの時にお母さんと御一緒に自家へおいでになつてゐた時分は、そりや人柄なお坊ちやんのやうだつた、それがいつの間にかそんなになつてしまつた。

江口は「はゝゝ、」と笑つて「今だつて人柄なお坊ちやんですよ。」

江口の家では自分も彼のお母さんも番町教會に屬する信者と稱してゐた。日曜毎には切り髪姿で上品な風俗をしたお母さんは、聖書を包んだ小い縮緬の小包を脇に抱へて定まつて教會にいつてゐた。たとへば朝飯などもお味お汁けに糠味噌漬の香々といふよりも、二食にして朝はたゞ木村屋のビスケットに牛乳に珈琲といつたやうな風な生活であつた。二人とも格別好い物も着てゐなかつたが、いつも身綺麗に、汚れぬ物を着てゐた。それで庭などの廣い、五六間もある新築の貸家に住んでゐたが、葛野は段々近しくなるにつれて、家賃はもう半歳も拂つてゐないことを知つた。江口は暫く默つてゐた後で、今度は本當に落着いた口調になつて、

「ねえおかみさん、そんな話はまあどうでもいゝさ。それよりあの女は一體どんな身上の人間なんだ。」しんみりとなつて訊いた。

するとおかみもそれに釣り込まれたやうになつて、

「あの人ほんとに、今も話を聞いてゐると氣の毒な人なんですよ。わたし先から一寸知つてゐたんです。やつぱり以前は

何でも東京からさう遠くない處の相當な家のお孃さんだつたんでせうが、一家の不幸つゞきで藝者になつて、つい此の間まで北海道にいつてゐたんですけれど、今度事情があつて戻つて來たんです。」

「ふむ。」と江口は、感心したやうに聽いてゐる。

「それで此度は東京で商賣を始めようといふの。」

「さあ、今もその話をしてゐたところです。東京で藝者をするといつたつて、なか〳〵骨の折れることだし、あの人も、わたしも此の年になつてあんな商賣は厭だといつてゐるんです。」

「いゝなあ、さういふ女は。」江口は正直に、もうすつかり氣のあるやうな顔になつてゐる。

おかみは又づるさうな、甘つたるい顔でにや〳〵笑ひながら、

「わたし、以前の、おとなしい江口さんだつたら、お世話をするんですけれど、今のあんたのやうな人を、うつかり世話などすると、今まで散々辛い思ひをして來たあの人に又辛い思ひをさせるのが可哀さうだから、そんな罪の深いことは出來ない。」

おかみは眞劍な調子でいつた。すると江口は又わざと勃然としたやうな色を表はして、

「おかみさん、一體僕の何處がそんなに可けないんだ、何處がいけないといつてくれたまへ。僕は大に改心するから。」

するとおかみは、泳ぐやうな形で片手を上げて江口の顔を指す眞似をしながら、堪らないといふやうにも一つの手で腹を抱へて笑ひ入り、

「あんな顔をして憤つて。お可笑しい江口さん。」といつたきり、物もいへないほど一としきり笑ひ入つてゐた。

江口も爲方なく仕舞には笑つてしまつた。葛野はそれから暫くして一人で出て歸つた。それから十日ばかりも過ぎてからであつた。ある晩又そこへ彼は遊びにいつて、いつもの帳場の奥の茶の間の爐傍で話してゐると、座敷の方から戻つて來た一人の女中が、

「おやゐらつしやい。」といつて、そこに坐はつたが、一寸低聲になつて、

「葛野さん、あちらの中二階にいつて襖の間から、そうつと窺いてご覽なさい。」と耳打ちした。

「何だ？　どうしたの。」葛野が不思議な顔をすると、

「何でもいいから一寸早くいつてご覽なさい。……江口さんが來てゐる。」

「あゝ、江口が來てゐるのか。」といひながら、葛野は立つて、遠い廊下づたひに中二階の方にいつて、襖の外からそうと中の様子に耳を澄ますと、江口だけではなささうで、何かすすり泣きをするやうな忍び音が洩れて、衣摺れの音もする。そ

れで葛野は盗むやうに、そうつと、襖の建て付けの、わづかの隙間に眼を押着けてみると、床を背にして紫檀の餉卓の前に坐つた江口の膝の上に紫紺縮緬の紋の付いた羽織を着た女が面を俯伏してすゝり泣いてゐる處であつた。葛野は腹の中で、これは悪いところを窺いて見たと思つて、氣が咎めたけれど、又、なに江口のすることだから構やしないといふ氣になつて、江口はどんな顔をしてゐるかと、息を殺して尚ほもじつと見てゐると、彼はいつも吸ふリリイの吸ひ口を口の横の方に啣へて鼻から煙を吐きながら、思案に暮れたやうに默り込んだまゝ堅く腕組みをしてゐる。女はその横手から此方に、艶めかしい長襦袢の裾の方を向けて、紅い袂裏を溢しながら、聞えるか聞えないくらゐの泣き聲を呑み殺すやうに、びつたり江口の膝に縋り伏してゐる。赤い裾裏の處から白足袋が見えてその奥に白い脛の一部が露はれてゐる。

　葛野はその瞬間、まるで息が止まつたかと思ふほど全身の血が沸くやうに、ある興味に唆られるのを覺えた。そしてがつがつ齒の根の慄へるやうな氣がしながら、又密うつとそこを立ち退いで、足音を忍びながら廊下を戻つて來た。

　葛野が爐端に歸つて來るのを、興味の眼を以つて待受けるやうな顔をしてゐた女中は、笑を含みながら

「どうしてゐました。」と低聲でいつた。

葛野はちよつと羞含んだやうな面持ちになつて、

「うむ。」と笑つてゐたが、「あれは此の間此處に來て坐わつてゐた女？」

「さうですよ。隨分でせう。」

　すると、そこにゐたも一人の、まだ人擦れのしない若い方の女中は、それも何だか妙な處を見たといふやうに照れた笑ひ樣をしながら、

「わたし、あんな處を見たのは初めてゞす。男と女とかいふものはお可笑なことをするものですねえ。」と感心したやうにいつてゐる。

　そこへ又おかみが何處からか出て來て坐つてゐたが、何もかも心得たやうに、

「江口さんには、どんな女でも一寸の間はすぐ慕れるんだ。」と、笑ひもせずにいつた。

「だつて、あの人も隨分早いんですねえ。」

　年取つた女中がいつた。

「一體男に慕れつぽい質なんだ。あの女それで始終苦勞してゐるんだ。」おかみは又笑ひもせずにいつた。

「どうしたんでせう。たつた此の間からぢやないんですか。」

若い女中は正直さうにいつた。

　葛野は感慨ぶかい顔をして傍に默つてそんな話を聽いてゐたが、男女の間の事が、そんな風にとん／＼進んでゆくのが新しい興味を刺戟するやうに思へた。

四

　その頃から葛野は、其家のおかみや女中達と自然に顔馴染になつて江口には關係なしに時々一人で茶の間に遊びにいつてゐた。葛野の下宿からそこへは遠くなかつた。まだそんな女の中に入つていつたことのなかつた葛野には、どこか異性に對して江口などにはもう見られなくなつてしまつた、生なところがその容姿や物のいひ振りに表はれてゐた。初はそこのおかみが電話口に出て葛野を呼び出したのが元であつた。葛野はそれでも何だか、會か何かで明白した用事のないのにそんな處に何でもなくたゞ遊に押掛けるのは厚皮しいことのやうに思はれてゐた。

「そんな遠慮は入りませんです。お遊びにゐらつしやい、」おかみは電話口で、言葉尻に妙な甘つたるい伊勢訛りの殘つた語音で、そんなことを云つてゐた。

　おかみは一體、そんな女にはよくある、妙な癖で、男と女との仲を取持つたりするのが一つの道樂であつた。さうかといつて、表面だつた結婚の仲立ちをするなどゝいふやうな堅氣なことは出來なかつたが、色の世話を燒くことに興味を持つてゐた。江口はその手でおかみに幾たびも世話を燒かしてゐた。その癖彼女は自分の世話をした男や女が二人だけで段々仲がよくなつて自然出雲の神なるおかみを、ちよつとでも袖にしたりする風が見え出すと、すぐ何かにつけて水を差したり、邪魔をしたりせずにはゐられない性分であつた。そんな時には一種の嫉妬の變性とも思はれる執念深い怨みとなつて、それが發揮されるのであつた。

　おかみは電話口から、

「ねえお遊びにゐらつしやい。今日は自家でも暇で皆な遊んでゐますから。」

　葛野は、電話だと、顔を見ずに物がいへるので、少しく大膽になり、

「えゝ遊びにいきますよ。おかみさんその代り、江口君にだけでなく、僕にもあんな女を世話して貰ひたいもんだなあ。」

　すると、おかみは、一層甘つたるい優しい聲になつて、

「えゝ、あんたには、あんな年を取つた人でなく　もつとおとなしい、若い綺麗な女をそのうちに心掛けておきますからまあお遊びにゐらつしやい。いろんな面白い話がありますよ。今皆なで面白い話をしてゐるところです。」

　机に凭つて何か讀んでゐた葛野は、そんな呼び出しをかけられると、もう樂しい氣持ちで一杯になつて早速出掛けてゆくのであつた。

　その年も暮れようとして十二月も追々末になり、街には落着いた冬の氣持が濃かになつて軒を並べた店家はいづれも歳暮の賣り出しの品を山ほど積んで景氣を競ふた。道を行く人

の心も氣せはしさうであるが、いつの年でも歳末の繁華は東京の街でなければ見られない景物である。

まだ下宿屋暮しの葛野は、年中盆も正月もなかつたが、それでも繁華な街の景氣の中に住んでゐるのは惡い氣持ちではなかつた。

その頃になると、これも今では年中行事の一となつた、クリスマスのお祭が方々の教會に屬する信者の仲間で執行はれた。そんなことも歳末氣分を濃厚にする一つであつた。

ある午後葛野は、いつもの席貸しからの電話が掛つたといふので電話口に出ると、お新といふそこの年取つた女中の聲が聞えて、格別用事もなささうであつたが、

「どうしてゐらつしやるの。おいそがしいの。」といふ

「いゝや、別に急しいこともない。」

「お遊びにゐらつしやいな。」

「えゝ有難う。」

そんなことを二た口三口いつてゐたが、葛野にはさういふ場合にそんな女と調子を合はして頓智問答のやうな、用のないことを面白さうに話すことは出來なかつた。そして、いふことに好い考も浮ばなくつて默つてゐると、向うは

「あゝさう、」と獨り言のやうにいつて、「あなたにお訊ねしたいことがあるの。」と意味のあることのやうにいふ。

「何？」

「あの、クリスマスといふことをみんないふでせう。あのクリスマスといふのは何のことです。」

葛野は、妙なことを訊くと思つたが、そんなことくらゐ知らぬ、舊い東京の女の無智と無邪氣とに淡い興を感じながら彼は電話口では、と笑つて

「あんたは面白いことを訊くねえ。クリスマスといふのは、さうだなあ、解り易くいへば、あの、耶蘇教といふことをいふだらう。あの耶蘇教の、つまりお祖師さまの御縁日のやうなものなんだ。……どうして君出しぬけにそんなことを訊くんだ。」

「あゝ、さうですか、それでよく解りました。どうも難有うございました。クリスマス、クリスマスつて、前からよく聞いてはゐましたけれど、私何の事か、その譯を知らなかつたのです。……お暇でしたらお遊びにゐらつしやいな。」

お新は、輕く口を滑り出る江戸つ兒らしい語音でさういふのであつた。

お新といふその女は二十六七の小柄な女であつた。何處か病氣でもしてゐたらしい樣子で、少い髮毛をやつと銀杏返しなどに結つて、顏の血色も蒼白く優れなかつたが、物の言ひ振りなどはきび〳〵してゐて、見たところ客の取廻はしなどによく頭の利く女であつた。葛野は、二月ばかり前ずつと最初に見た時に、病みあがりのやうな蒼い顏をして手束ねの頭髮を亂したまゝ、その時七八人同勢の會があつて、その席へ出て來た時に、青つぽい唐棧か何かの袷衣に半襟のかゝつた、見るから所帶くづしのやうな引掛け帶の恰好をしてゐたのが眼に留つてゐた。格別好い女でも何でもなかつたが、眉のはつきりした、口元の小さく引締つて物をいふ時白い齒並みの綺麗に揃つてゐるのが何となく賢さうな顏に見せた。

葛野はそのお新が、それまでにも一二度電話で話したことはあつたが、今日は何だか、いつにない、ちよつと彈んだやうな調子で親しさうな口を利くので、遊びに來いといへば、女の語り對手に事を缺いてゐる彼はすぐ浮いたやうな興味をそゝられて、出掛けてゆく氣になるのであつた。

「今そちらはほんとに暇なの。邪魔でなかつたら往いつてもいゝ。」

「ちつとも邪魔なことはありませんから、すぐゐらつしやい。わたし一寸あなたにお聞かせすることがあるんですから。」

そんなことをいはれると、葛野は、とても書籍などによつては得られない生々した興味を感じて、すぐさま出掛けていつた。ゆくとおかみもお新もほかの女中なども皆な居つたがその頃は葛野も大分そんな處へ行くことに熟れて來て、臆せずずつと座敷へ通るだけの勝手をおぼえた。

お新は、すぐその後から一と〻ほり座蒲團を持つて來たり茶や火を運んで來たりして襖と飾臺の中ほどの處に坐わりながら、先程はどうもと、又改まつて一寸挨拶をした。

葛野は笑ひながら、

「クリスマスつて、妙なことを出し拔けに訊くのはどうしたの。」

するとお新も笑ひながら、

「いえ、どうもしないんですけれど、先からクリスマスといふことはよく聞いてはゐましたけれど、何の事か分らなかつたのです。此の家でも明日その會があつて百人ほど集まる申込みがあるんです。毎年今頃になると、いつも二組や三組は申込みがあるつて、おかみさんいつてゐました。それでクリスマスといふのはどんなことをするのかと思つて、昨夜江口さんが一寸來た時に、「江口さんクリスマスつて、何のこつです。」と訊いたら、どうしたのですか、つうんと怒つたやうな顏をして、「今そんな話をしてゐる暇はありません。」と、さういふんです。」

お新は呆れたやうに言葉に力を入れていひながら、

「わたし、そんなことを訊いたくらゐで何も、そんなに怒られる譯はないと思ふんです。どうしたんでせう。あの人は一體こう妙な厭やあなところのある人ですねえ。――こんなことをいつて、あなたのお友達のことを惡く申しては濟みませんけれど、――こゝのおかみさんもさういつてゐました。葛野さんは江口さんと大變親しくしておいでになるやうだけれ

と、江口さんとは餘りお交際にならん方がいゝんだと、さういつてゐました。」

彼女はさら〳〵とした言葉でそんなことをいつた。葛野は默つてひとゝほり聽いてしまひ、笑ひながら、

「うむ、しかしクリスマスのことを一寸訊いたくらゐで江口がそんなにぶん〳〵する道理はない。その時何かほかの事でも考へてゐたのでせう。そんなことは何でもないぢやないか。……それより此の間の女はあれからどうしたんだ。」

「わたし、委しい事譯は知りませんがあの人も大方あれつきりなんでせう。」お新も笑ひを含みながら、

「あの女の人も、まあいはゞ淺敢果なんどす。江口さんは、どんな女にでも、初めは、お前を俺の女房にするとか、一生世話をするとか、程のいゝことをいふんださうです。それを又本當にするのが間違つてゐるんです。……だつて、まだ、やつと十日になるかならないんですもの、はゝゝ。」と、又笑つた。

五

葛野は知らなかつたが、お新が二た月ばかり前はじめてそこへ、一週間ばかりといふことで手傳ひに來てからすぐであつた。江口は新顏の彼女を見るとすぐ浮氣の蟲が起つて、おかみに彼女の身の上を訊ねなどしてゐた。その頃、一時二三年も途の絶えてゐた江口の足が又其家へだん〳〵向きはじめてゐた時で、彼は、

「おかみさん、僕もまだ獨りでゐるんだ。だれか、おとなしい女を一人世話をしてもらひたい。」といつてゐた。

「あなたはまだお一人なんですか。もうそろ〳〵奧樣をおもらひになつてもいゝ時分ですねえ。」

「もうそろ〳〵ぢやないよ。大分遲れてゐるんだ。」

「ほんとですねえ。あなたに奧樣がお出來にならんとお母さんがご安心なさらんでせうから。」

江口は大にわが意を得たやうにうなづいて、

「さうなんだよ。僕は一人の方が氣樂でいゝんだが、母がもう年を取つて、內の事に骨が折れるのを見てゐると、傍で見てゐて氣の毒で堪らないよ。」

江口が眞面目な顏をして、さういふと、おかみも、しんみりとした調子になつて、

「ほんとにさうですねえ。でもあなたが、そんなに思つておいでになる心をお母さんがご存じならお喜びでせう。」

おかみは、江口のお母さんとも、何かの會などで偶に此家に來た時口をきゝ合つてよく知つてゐる間であつた。

江口は放蕩者にしては、なか〳〵母親思ひであつた。

「まあ、それはそれとして、おかみさん誰れか一人おとなしい好い子はないかね。」

「えゝ、今すぐといつては好い心當りもありませんが、ひとつ氣をつけておきませう。」

そんなことをいつてゐたことがあつた。

「おかみさん、何だか又年增の女中が一人來たぢやないか。」

「えゝ、あれは女中といふこともないんですが、急しい間一寸手傳つてもらつてゐるんです。」

お新は其家からつい近い處に母親や、弟なども住んでゐて皆なそこのおかみや亭主とは、ずつと前からの知合ひであつた。彼女は四五年も下町の方に嫁してゐたが、夫が道樂者であつたので散々苦勞をしぬいた揚句たうとう去年の秋口に絕緣して老いた母親一人の處へ出戻つて來た。そしていろ〳〵な精神上の打擊からその歲中ずつと身體が優れないでぶらぶらしてゐた。片親や兄はあつても、昔はさうでもなかつたが今はいづれもさう樂でない處ばかりなので、彼女は何時までも其等の厄介になつてばかりは居られなかつた。それで、今年の春頃から、先に嫁いでゐた處で覺えた小商ひを始めてみたりしたが、それも女手ひとつには思ふやうにもゆかず、少しばかり持つてゐた小錢も又その爲にすつかり無くしてしまつたりして、まるで氣落ちのしたやうになつて母親の傍で每日鬱いでばかりゐた。それを先から懇意の間であつた貸席の亭主夫婦が氣の毒がつて、

「お新さんまあ、そんなに何も悒々(くよ〳〵)しないでも、又そのうち好い日の照ることもありますよ。」と、慰めて、

「さう每日家の中にばかりゐて、何處へも外へ出づにゐると、却つて身體の爲めに好くない。氣晴しと思つて、私の處に來て、すこし手傳つてください。」

といはれるので、それもさうかと其家へ來てゐるのであつた。

おかみは江口に、自分の知つてゐるだけのお新の身の上話しをして聞かせて、

「あの人もあまり良くない處へ嫁いだために散々隨分苦勞をしたでせう。」

江口は眞劍な顏をして、

「ふむ、それは氣の毒だなあ。そんな堅氣な人がいゝなあ。どうだ、堅いだらう？」

「えゝ、あの親や兄姉とも、わたしのとこ、古くから懇意にしてよく知つてゐるんです。暮しもあまり樂ぢやないけれど商人で堅いんです。それで滅多なことをする譯にはいきませんが、でも一旦嫁いて出て來たんですから、堅い人になら話し樣によつては。その氣にならないこともないでせう。」

江口は頻りに本氣になつて、

「そこを一つおかみさん、何とかうまく話してみてくれたまへ。」

「えゝ、まあ機(をり)を見て本人の考を訊いてみませう。」

そんなことを、おかみと江口とで初の内いつてゐたこともあつたが、その間にだん〲、江口が、二三年見なかつたうちにひどく女擦れがしてゐることが分つて來たので、流石のおかみも、これでは幾ら出戻りでも困つてゐても、堅い交際の家の娘を、迂濶にそんな世話など出來ないと思つてゐた。

一度江口の噂が出た時おかみは、

「江口さん、堅氣な女を一人世話をして欲しいといつてゐたから、わたしお新さんを世話をしようかと思つてゐたんだが、あの人暫く見ぬ間にひどく人が惡くなつてゐる。あんな人にうつかり女の世話など出來ない。」と云つてゐたことがあつた。

そんな話をおかみから聞かされた後であつた。一度お新は江口の一人で來てゐる座敷へ用事でいつたついでに、江口からいろんなことを話しかけられて、つひ一寸話込んでゐると帳場の方から頻りにりん〲呼鈴で呼ぶ音がするので、そのまま急いで立つてゆくと、どうしたのか、おかみは顏を眞赤にして相形を變へて憤つてゐて、お新がそこへ戻つて來たのを見ると、いきなり、

「お新さんに、江口さんのことを此の間あのくらゐよくいつて置いたのに、江口さんといふ人は道樂者で可けない人なんですから、あの人とあんまりつまらない話をしてはいけないんですよ。あんたにあれほど云つて置いたぢやないか。」おかみは、まるで雷の落ちかゝるやうな調子で頭から、そんな氣まづいことを露骨にいつた。

お新は、呆氣に取られて卽座には何といつてよいか、それに對して返答することも出來なかつた。おかみから此の間、なるほどそんなことを聞かされたことは知つてゐるが、そんなことを自分の方から別に賴んだ譯でもないし、此方では格別氣に留めて聞いてゐなかつたくらゐであるから、そんなことを何とも思つてゐないし、今だつて、向うからいろんなことを話しかけるので、此方でもそれに調子を合はせ、いゝ加減なことを二た言三こと口を利いてゐたゞけであつた。

それをおかみは何と感ぐつたのか、ひどく昂奮した顏をして眞赤になつて怒るのが彼女には一寸不思議な氣持ちがしたのであつた。

「何でもないですよ。江口さんがいろんな話を仕掛けるもんですから、一寸その相手になつてゐたゞけなんです。」

お新は呆れた顏をしてさういふと、おかみはそれでも容易に釋けない顏をして、

「それが可けないんだ。江口さんといふ人何をいふか知れない。」と、まだぶん〲してゐる。お新は何だか腹の中で可笑くもあつたが、それきり默つてしまつた。

江口は先刻お新が用を達して出て戻らうとすると、妙に笑顏をつくつて、

「お新さんまあお話しなさい。」と呼び留めた。お新は、

「えゝッ。」と中腰になつたまゝ膝をついてゐると、

「今日は暇なんだらう。まあお話しなさい。僕、あんたに少し訊ねたいことがある。」と優しい言葉を掛ける。お新はお世辭に媚笑しながら、そのまゝ又お尻を落して、

「訊ねたいことつて、何です？」

「あんたのことは此の間こゝのおかみさんから一寸聞いた。あんた長い間下町の方にいつてゐたんですつてねえ。」

「えゝ、此方の方は歸り新參で何にも分りません。」

「下町に住み馴れた者にはこんな牛込なんか野暮臭くつていけないでせう。」

「そんなこともありませんが、彼方は住みいいには住みようござんす。」

「大變意氣な商賣だつたんですつてねえ。」

江口はどこまでも調子の好いことをいつて話しかけた。しかしお新は自分の嫁してゐた先のことまで、もうおかみが饒舌つてしまつたのかと思ふと何とも厭な氣がして、江口にまで餘計なことを知つてゐられるのが堪らない恥辱であつた。そして、いとゞ血の氣のない顏をぱつと紅くしながら、強ゐて苦笑を色に表はすやうにして、

「なんですか……」といつてゐた。

そこへ消魂ましい呼鈴の鳴る音がしたので急いで帳場の方へ出て戻つたのであつた。

江口は、それから後もちよい〲來るたびに、お新が座敷に出て來た時を捉まへては、毎時程の好いことをいつては水を向けてゐた。けれどもお新は、あの時おかみから、乙なことを云はれたことは忘れてゐないのと、それに彼女もなか〲さる者なので、いつも江口から何か面白いことを話し掛けて來るたびに、それに負けず竹篦返しをいつて戲弄つてゐた。

さうなると江口の方では却つて眞劍になつて、男の面を拭つたやうになつてお新に當つて來るのであつた。彼女は江口の心持ちは解つてゐた。すると丁度そんな場合のところへ北海道の方の旅稼ぎから歸つて來たといふ例の女が帳場に顏を現はしたので、浮氣者の江口はもうお新の方へは戲談さへもいはなくなつてしまつた。彼女は、おかみから、痛くもない腹を探られるやうな變な邪推を向けられたことがあるうへに、迂濶り江口の口車に乘るやうな氣は少しもなかつたが、たとひ戲談にもせよ、一と仕切りはお新さん々と云つておいて、ふつと氣が變ると後はもうお前なんぞには用はないといつたやうな外方を向いた樣子をするのが彼女には癪に障つて堪らなかつた。尤もその爲におかみの變な疑は晴れたやうなものゝ、何とかして江口を戲弄つてやりたかつた。

葛野といふ人はまだ人擦れのしない人のやうである。あの人にでも江口のことを引剝いて話してやらうと思つた。

六

それでお新は、葛野にこんなこともいつた。江口がいつも葛野などを誘つて此家で會をするといふのは、それは表面の附けたりで、その實江口は、自分では一錢も席料を拂はないで、連中の歸つた後もひとり居殘つて十二時過ぎてから翌日まで座敷を使つてゐる。

「あなた方皆さんはご存じないでせうが、江口さんの遊んでゆく席料まで何のことはない會で拂つてやつてゐるやうなものです。つまらないぢやありませんか。内のおかみさんもさういつてゐますよ。江口さんといふ人は非道い人です。」

お新はそんなことをいひながら、自分のいつてゐることに油の乘つて來たやうな表情をして、

「ほんとに非道い人です。江口さんに貴方からさういつてやるといゝんです。あんな厚皮の人はつけ〳〵剝き出しをいつてやらなければ駄目です。……さういつて下さい、君は非道い人間だつて。……此家のお新から聞いたつて、さういつて下さい。お新がいつたつて。もし怒つたら、私からうんとさういつてやりますから構はないです。」

葛野が、何がそんなに非道いのか、未だ十分腑に落ちぬやうな面持ちをして默つてゐるのを見て、お新は慷慨するやうな調子でさういふのであつた。

しかし、葛野がお新に興味を持つことを自分で氣が付いたのはその頃からであつた。彼は、お新にそんなに注意されても江口をまだ、お新のいふほど、そんなに爲方のない奴とは自分では思つてゐなかつた。それよりも初めの一寸の口觸りが、いかにも調子が好いのに、江口をまだ〳〵信賴してゐた。

葛野はその翌日、小日向臺の奧まつた閑靜な處に在る江口の家へわざ〳〵出掛けていつて、置炬燵に凭りかゝりながら、昨日お新から聞かされたとほりに、

「お新がさういつてゐた。江口さんといふ人は非道い人だつて。……お新がさういつてくれといつてゐた。」

と笑ひ含みながら云ふと、そんなことくらゐに辟易する人間でない江口は、

「ふゝん。」と何か意味ありさうに、にやりとしながら、一つうなづいて、

「それには譯があるんだ。……そんなことをいふ譯があるんだ。」と調子の高いことをいつた。

葛野はたゞ

「さうか。」と思つてゐたが、江口に向つて恰も先輩に腹心を打ち明かすやうに、

「僕はあのお新がどうかしたんだ。」

といふと、江口は、

「そりやあいゝ、君彼女をしたまへ。實は僕がどうかしたいと思つてゐたんだが、一寸事情があつて、それがいけないことになつたんだ。もう僕のいふことは信用しないことは分り切つてゐるが、若ならば持つていき様によつて或は承知するかも知れん。」

葛野はそれから江口とだん〳〵話してゐる間に大分實行的な考へまで氣持ちが進んで來た。江口は、

「地色といふものも一寸面白いものだ。ずぶの苦勞人はどうしても商賣氣を離れることが出來ないけれど、素人はそこになると、しんみりとした味がある。」と、さも女色の妙味を樂むかのやうな調子でいつた。

たゞ單に金錢によつて肉欲を賣買することだけでは、どうしても滿足することの出來なかつた葛野は、差當り素人の中で普通の婦人よりも比較的近づき易いところからお新によつて實行的の興味を刺戟されてゐた。彼は幾度か躊躇つたあと丁度クリスマスの會合があつて、家中忙しくしてゐる時であつた。彼はほかの座敷にいつて遊んでゐたが、人眼の無い薄暗い廊下の處でお新の往くのを×××××××、×××××××××××××××××××××××と、彼女は、葛野が此の間中から頻りに不安を抱きながら考へてゐたとは案外に、直ちに彼の暗示を解するやうな表情をした。葛野はその時彼の未だ嘗て經驗したことのない、胸に何か靈能のある泉でも新しく湧き出たやうな悅びを感じた。そして、廣間の方では座敷や廊下でクリスマスの悅びで湧くやうな歡聲の起つてゐるのを、餘所のことのやうな氣持ちで聞きながら、自分は誰れにも知られない祕密な、無限の悅びを胸一ぱいに湛へながら、もうそれだけの暗示を得たら、大半成功したやうな、浮き立つ思ひで、何だか其處にいつまでも靜つとしてゐられなくなつて外に出て來た。そして、心の中で「あれだけ意を交通することが出來たら、もう後は急ぐには及ばぬ。」と思ひながら人通の少い暗い裏通りを歩いて來ると、彼はひとりでに笑ひたくて堪らなくなつてたうどう誰れも見てゐない處で笑つてしまつた。裏町から次第に、明るい大通りの方に出て來ると、街は歲暮の賣り出しで、ぞろ〳〵と大變な人が出てゐる。彼はその間を縫つて、ひよん〳〵足が地に着かぬやうな心地になつて道を急いだ。そんなに道を急いで何處へこれから往かうとするのか、何處へ急いでいかねばならぬ處もない。たゞ悅びに滿ちて心がそは〳〵してゐるのであつた。暮れの街を歩いてゐる多勢の中で自分だけが一人幸福者であるかのやうな氣がしてゐた。彼は、肩と肩と擦れちがふ雜沓の人込みに揉まれながら、ちやうど宙に持ち上げられてゐるやうな氣持ちで、賑かな物賣りの景氣や多勢の男や女の顏を見て通りながら、いつも心は、先刻の、祕密に交感された樂しい暗示について思ひつめてゐた。街の景氣も賑かな人の往來も每時のとほりである筈だがその晚は、何も斯もが、すつか

り今までの物とは違つたものゝやうに眼に映つた。冬の夜とは思はれない、しつとりとした、靜かな空氣は薄い絖を一枚透して見るやうで、軒を並べた家の形や、灯の色や、美しい色した水菓子や呉服屋の飾窓の中の物などがいづれも白い靄の中に水氣で糢糊した繪の如く思はれた。彼の眼に映る凡ての物が悉く美しい物ばかりになつた。

　彼は何かしら獨りでに浮かれ出すやうな氣持ちになつて、それから宿に戻つて來たが、時に先刻のことを樂しく噛みしめるやうに懷想しては誰れも見ぬ處で微笑んでゐた。やがて、いつものとほりに押入れから自分で夜具を取り出して寢床の中に横はつたが、妙に擽られるやうな心地がしてゐるとともに片はら無闇に敢果ない不安に襲はれてゐた。そしていつしか眠つてしまつた。

　さうなると少しも早く、不安な暗示をもつと、はつきり確めねば落着いてゐられないやうな氣がするのであつたが、急いで事が露顯するやうなことがあつてはならぬと思つて、堪へ難い中の一日を、何かほかの事にまぎらして忘れて居らうとして、彼はその翌日自分の部屋に閉ぢこもつてゐられなくなつて、ぼいと外に飛び出した。そして、當もなく友達の處を訪問したり、少し離れた處の街を散歩したりして、一日落着いてゐなかつたがその間も少しも他の事は考へずに、樂しい暗示と敢果ない不安とを織り交ぜて考へ續けてゐた。

　その翌日早速お新のところへ出掛けて、彼は何食はぬ顏をして座敷にとほり、一寸した食べ物などを取つて彼女と話してゐた。

「お新さん此の間のことよく解つたの？」葛野は照れ隱しに却つて洒々した調子でいつてみた。

　するとお新はもう飮込んでゐるやうに、一つ顏を下げて、そのまゝ下を向きながら、

「あなたが、これから先わたしを親切にしてやらうと仰有るのは難有うございますが、此處の家へ今までのやうに始終おいでになるのは可けませんから、こゝの家でなく、何處か他で月に一度か二度お眼にかゝるやうにして戴きたいと思ふんです。」

　さういふお新の考へはもう葛野よりも遙かに實際的に頭が働いてゐるのであつた。葛野は、彼の不安を抱きながら豫想してゐたよりも、案外容易くお新が應諾したので、それを喜ぶよりも却つて稍々不滿足にさへ思つた、さうして、心の中で、

「これぢや此の女は今までもこんな經驗があるかも知れない。……此の間江口が妙なことをいつてゐたが、或は江口のいつたのが全く嘘ではなかつたかも知れぬ。」と思つてみたりして、又別の不安と疑惑に囚へられた。

　けれども葛野はもう生れて初めて經驗する甘い戀の囁きに、心は無中になつてゐるので、それはそれとして、お新に對する強い本能的の欲望を抑へることが出來なかつた。彼は、お新の言葉に對して稍々不滿の色を浮べながら、

「そんな、月に一度や二度逢ふなんていふやうなことぢや僕は厭だ。」

　彼は、熱心に思ひつめてゐる者が、そんな微温的なことでは到底滿足されるものではないと思つた。そして、お新がそんなことをいふところに、何處やら、職業的な氣持ちが混入してゐるのではないかといふ不滿や嫌厭が伴つて起つた。

　その場合無論彼女の心持ちでは、自分をひどく卑下して考へてゐるところから、葛野に對して相對的に戀愛關係などゝいつたやうな交渉が成立つものではないと思つたのであつた。そして、葛野の、恐ろしい劍幕で熱心な顏色を見ると、彼女はそれに感謝するやうな、つり込まれるやうな心持ちになつて、

「そりや、貴方が、こんな私の樣な者でもそんなに思つて下さるのは難有うございますけれど、こんな事がもし何時か貴方のお友達の方などに知れたら、わたしは構はないにしても、あなたのお名に傷が付くことになるでせう。」

　葛野はそれを皆まで聽いてしまはないうちに強く頭振をふつた。

「そんなことは何でもありやしない。私が好きですることを少しも世間や友達などには關係のないことだ。」

「さうですか。……それならようござんすけれど。」

　その間にもお新は、他の方にも用事があるので起つたり居たりしてゐた。

「兎に角此處では落着いて話もしてゐられないから、その内何とか都合して一度何處かへ出て話さう。」

「えゝ、そのうち何時か好い機を見まして。」

とお新はいつてゐたが、「葛野は、何だか彼女の微温るい態度に滿足してゐられなかつた。」

「そんな、何時か好い機を待つなんていつてゐたら、何時まで立つたつて、好い機なんかありはしない。」

　お新はそれから十日ばかりしたら、自分の先に營んでゐた商買の事で、そのまゝになつてゐることを、ぜひ共片付けねばならぬ用事があるので、もう遠から一度そちらへ往つて來なければならぬといつてゐることは其家のおかみも承知してゐるので、なるたけ早く都合をして、そちらへ往く日をこしらへるから、それまで待つてくれといふのであつた。

　葛野は氣に入らぬらしい顏をして、

「もう十日？」と呆れたやうにいつたが、爲方なくその時はそれまで待つてゐることにした。

　それから葛野は毎日他のことを考へず、たゞ十日ばかりの日が少しも早く經つのを指を折つて待つてゐたが、とてもそ

れまで待つてゐることは出來なかつた。……

七

　そこの席貸の主人は一面因業な老爺であつたが、その話によれば若い時から散々道樂もすれば苦勞した甲斐性者であつた。今の商賣に仕上げるまでは古道具や屑買ひまでして歩いてゐたこともあつて、そんなになつてからも屑買ひをしてゐた時分の心を忘れないために紙屑買の古い鑑札を大事にして保存してゐるくらゐであつたが、清元の三味線を彈くのが老後の何よりの樂みであつた。

　葛野はその頃古い江戸趣味に憧れてゐた時分であつたから、その老爺が清元の三味線を彈いて樂んでゐるのにひどく感心してそれが羨しくつて堪らなかつた。

「おかみさん、こゝの老爺さんは僕に三味線を敎へてくれないだらうか。」とよくいつてゐた。

　その後そんなことは何度も口癖にいひながら、そんならいざ稽古しようともいはないので、

「葛野さん、貴方ほんとうに稽古する氣があるのか無いのか。ほんとうに稽古をする氣があるのなら、内のお爺さんが敎へて上げてもいゝといつてゐましたよ。」

「うむ、ほんとうに稽古したいんだ。」

　さういつて彼は、清元の稽古をかこつけに今までよりも一層足繁くそこへ遊びにいつてゐた。老爺は一寸附きの惡い因業者のやうな顏をしてゐたが、清元の三味は彼が老後の唯一の樂みで、葛野が、老爺のその趣味に共鳴してゐることがひどく滿足であつた。

「こつちいおいでなされ。」といつて、葛野を、ずつと奥まつた、たつた三疊の間の中二階に連れていつた。

「こゝが私の隱居所です。」といつて、爺兒はいつも其處で一人で三味線を彈いてゐた。そこからは牛込の低い街つづきを越して向うには小石川の方の高臺から目白の丘雜司ケ谷に連らなる林が一眼に見晴らされた。

「どうです好い景色でせう。」

と、爺兒は北窓の硝子越しに西の方を眺めながら、

「あんた本間にやる氣なら私敎へますが、續けてやんなはるか。」といふから、

「えゝ、ほんとうですとも。敎へて下さい。」といふと、爺兒はさうかといつて、「傀儡師」といふ稽古本を取出して、

「ほんならこれがよからう。これは私が好きなものです。」

といつて、三味線を取り直して彈きながら、なか〳〵好い聲で唄ひ出した。

「寶萊の島は目出度い島でなあ……」

　初め二三度爺兒さんが獨吟すると、今度は自分も一緒にそれにつれて聲を合はせた。

「まあ今日はこれだけにして置きませう。あんたは三味線が習ひたいいうてなはるさうですが、三味をやるにも一とほりは歌の方を稽古せんとよう習へん。」

　そして二日めから、

「あんた今度一つひとりで歌うて見なはれ。」といふので葛野は極まりわるさうに覺束ない調子で、

「寶萊の島は目出度い島でなあ……」と一くさりを唄つた。爺さんが、

「えゝ〳〵その調子で。」といふのに勢を得て、彼は、

「……傀儡師阿波の鳴戸を小唄とは晋子が吟の風流や……」

と唄ひつゞけた。

　さうして五度六度稽古を重ねてゐるうちにやがて正月になつた。一月は會など多いので爺さんも忙しく稽古も中止してゐたが、葛野は相變らず遊びにだけいつてゐた。その頃からよく雪が降つた。席貸しの座敷から見晴す雪景は格別に好かつた。葛野はその頃書く物から入る金で小使ひにはさう不自由をせぬので、樂しい正月氣分に浸りながら、美しい詩の國にでも住んでゐるやうな夢を見てゐる心地で長閑な日を暮してゐた。

　やがて松が取れて、改まつた年始の客の姿も道に絶え正月氣分が次第に怠れて來るにつれて、却つて、そち此方の裏通りの宵を歩いてゐると到る處の中から歌がるたに遊び興ずる聲が洩れ聞えた。

　それは紅葉山人の名作である「金色夜叉」がその頃の小說好きの若い男女の心を唆つてゐた時代からまだ餘りに遠ざからぬ時代であつた。いつも小說や戲作の中の人物を頭に描いて彼等と共鳴したやうな心持で生きてゐた葛野は、夜の街を往きながら、さういふ歌留多の朗吟の聲を遠くに聞かされても、それが何だか戀を唆る聲のやうに思ひなされた。しかし彼は初めから歌留多を戲れる趣味を少しも持つてゐなかつたし、そんなことには至つて不器用であつた。そしてもう四五年東京に來てゐてもずつと下宿屋生活をして東京に家庭のある人間と交際のない、荒寥とした生活をつゞけてゐるので、「金色夜叉」の開卷第一に書かれてあるやうな温い家庭に出入する機會などのありやうもなかつた。

　歳晩のあの華かな、明るい街の景氣に引比べて、一月中ばを過ぎる頃からの、冬の最中の街の寂しさは、さながら道を歩いてゐても大地とゝもに自分の身體までが凍て付いて消えてゆくかと思ふやうであつた。かの二葉亭の「浮草」の終に書いてあるやうに、温い家の中で明るい燈火の下に靜に夜を過してゐることの出來る者の境涯が羨ましかつた。

　此の間から引つゞけに降り積もつた雪が、日當りの惡い片蔭だけ、雪掻きしたまゝ小山の堆く凍えついて、いとゞ嚴しい寒氣の夜の風がその爲に一層冷くなつて戟々しく頰を斬つ

た。道を通る人影も途切れがちで、そんな寒い晩に戸外を歩いてゐるのは餘程効性のない者であつた。彼は何か知ら温い心持ちに飢ゑて、わつと暗い處で、聲を出して泣き出したいやうな遣る瀬のない心地になつてゐた。

それでも時々お新の顏を見てゐれば、いくらか寂寞が醫せらるゝのであつた。しかし、たゞ、ほかの者のゐる傍で顏だけ見てゐるのは物足りなかつた。

葛野は、お新を、廣い世界の眼になつて考へても少しも好い女とも思はなかつたが、何故か、彼には、不足のない幸福な境遇に生ひ育つてゐる女性に對して戀愛を感ずることがなかつた。それは、おほかたイソップの物語にある狐のやうに、自分の手の屆かぬところにある葡萄はまだ青くつて不味いものと思つて諦めてゐると同じ道理であつたかも知れぬが、どちらにしてもそのお新とさへ思ふまゝに逢ふことの出來ないところから彼女に對する情欲は、それが爲に一層募るばかりであつた。

やがて一月も末になつて二月に入ると、まだ寒い日はあつても、どうかすると雪解けの暖い日のつゞくことがあつた。筧を流れる軒滴の音は單調な中にも物憂いやうな安らかな睡を誘ふた。瑠璃色に晴れ渡つた空には麗かな日の光が漲つて陰氣な冬に閉ぢこもつてゐた心は、何處か早咲きの梅でも探ねて出歩きたいやうな氣分を唆られた。その時分から席貸の老爺は、

「葛野さん又少し始めませうか、あんたもう忘れたらう。」

といつて、傀儡師を唄ひだした。葛野は老爺の三味線に伴はれて唄ふ清元の滑かな調子にさそはれてお新に對する甘い感情がます／＼燃え盛つて行くのであつた。

お新の方では又、葛野に江口といふ惡い友達のついてゐるのが何につけてこれから先きの二人の交情の妨げになるやうなことがあるので、彼がどこまでも今までどほりに江口と親しくしてゐる間は、迂濶り自分の心を葛野にゆるされないと思つてゐた。それで大事を取つて葛野のいふことに容易く乘つて來ようとしなかつた。

「あなた、江口さんを信用してゐるやうですけれど、あの人はいけない人ですよ。わたしの事について江口さんに何か打ち明けて相談なんかしては駄目ですよ。」

お新はさういつて、葛野の背後に江口が附いて居りはしないかといふ疑ひが、彼の熱情の眞僞をどう没んでよいかといふ不安を抱かしめたのであつた。

「その事なら大丈夫だよ。」と、口では明かにいつてゐたが、又葛野の方では、お新のやうな境涯にゐる女を、正直に、此方の思つてゐるまゝに解いていゝかどうかといふことも一つの不安であつた。が、それにもかゝはらず彼の彼女に對する感情はます／＼募つてゆくばかりであつた。しかしそれは果

して純粋なる戀愛であつたか、それとも彼の青春の頂上に達してゐる本能の情欲が彼を盲目的にさせさするやうに強ゐたのであつたか、それは分らなかつた。

兎に角葛野のお新に對する心持は、最初はいくらか遊戯半分であつたものが、彼女との逢ひ曳が自由に滿足されぬところから、漸眞劍になつていかねばならぬやうな結果になつて來たのであつた。

彼がお新を全く自分の物にするが爲にはいつまでも其處に置いておくのは勝手がわるかつた。到頭それで彼女にそこの家から暇をとらして、葛野は長い間の下宿生活から脫して、初めてお新と一緒に小石川の奥に些かな一戸を構へた。彼女が自分と同棲するにはいろ／＼な點から、條件のふさはしくない葛野と一緒に住むといふことは、その爲に知つた人に目立つことになつたが、それをも推してさういふことになつたのは葛野の熱情に動かされたのが主なる原因であつた。葛野も一時の熱情に驅られてその決心をしたものゝ、愈々それを斷行しやうとする間際に臨んで彼の心は頻りに迷つた。それは主として打算的功利的な見地から熟慮を要するやうな事柄であつた。そして賢い人間ならば、今自分の斷行しやうとするやうなことは、決してしないであらうと思つて幾度か躊躇した。けれども、その時はもう、お新が葛野の熱情を深く信じて、葛野と共に新しい生活に入らうとして、今まで行つてゐた處から、ほかの事に託けて無理に暇を取つて出て來た後であつた。そのためにお新はおかみ達の感情を害することさへ辭しなかつたのである。

葛野はお新と肩を並べて人どほりの少い何處かの屋敷の塀に沿ふた薄暗い道を選んで歩きながら、千々に心が迷つてゐた。それはもう二月も末の頃で夜の風はまだ寒かつたが、何處かで聞える夜仕事の物の音にもう冬の最中とは違つた軟かい響きがあつた。

葛野は今度お新と新しい生活に入るために國元の方から調達して、丁度その日に手に入つた、參百圓ばかりの金を懷中にして、ひとり心の中で、

「いつそ此の金をすつかり今、あの女に與へてやつて、それで違約の罪を謝し、お新との關係を此の處で絕つてしまはうか。：：さうすれば、さうした方が賢いのだ。」と考へながら歩いてゐた。

それとも知らぬお新は、葛野から、今日丁度金が手に入つた。もう金が出來たから、これから早速家を持つ所帶道具を買ひ調へようといつて、昨日から自分の家へ歸つて來てゐるところを、かうして呼び出されて歩いてゐる場合なので、葛野の足に遲れぬやうに、いそ／＼しながら、

「わたし、今日はじめてお母さんに話した。」

「今度のことを。」

「えゝ。」
「そしたら何といつた。」
「…………。」
「小言をいつたか、それとも喜んだか。」
「たゞ、さうかえといつたきりでしたが、大變喜んでゐました。」

お新の言葉は少なかつたが、彼女が喜んでゐるとほりにその母親も喜んでゐるらしいことはそれと知られた。

葛野はそれを、犇と胸にひゞいて聽きながら、たとひ今懷中に持つてゐる參百圓の金を、そつくりお新に與へるといつても、彼女はひどく失望するであらうと思はれた。

× × × × × ×

葛野はそれを機頭に、それから段々いろんな女の胸に安心の場所を漁り求めた。

（大正十二年十月十六日作、中央公論掲載）

農村行

一

金胎寺の入相の鐘が鷲峰山下の村々に響くと、一日急がしさうに鳴きしきつてゐた茅蜩の聲も、ぱたりと止んで、甘酸つぱいやうな稻田の香を含んだ涼風が、眞靑な野面をそよがしはじめた。それとゝもに村々の中空には淡蒼い夕炊の煙が靜かに棚曳いて、鷲峰山を包む暮靄の中に融けていつた。塒へいそぐ烏が四五羽、山麓の杉の森の方へ鳴きつれて飛んでいつた。今日も亦た終日極熱と鬪ひながら農作物と親んでゐた村人は、やがて野川の水で鍬の土を落し、手の泥を洗つて各々勞役から離れようとしてゐた。

こゝは南山城でも最も山の深い鷲峰山の南麓に開けた中和束の村であつた。鷲峰山といふは、山城國綴喜郡と相樂郡とを南北に境して立つてゐる峻嶮であつて、昔、役の小角が此の山に入つて練行したといはれ、後に眞言宗の寺となつた。その山の懷に、昔は殆ど外界との交通を絕つた山村が開けてゐた。元弘の初後醍醐天皇がこゝに行幸あつて、ついで笠置山に遷られた。笠置とは木津川の溪谷を挾んで南北に對峙してゐる。山中の村であるが、昔は禁裏御領地になつてゐた。近ごろでは段々交通も發達してきたが、それでも木津川べりの村まで出るには近い處でも一里か二里の峠を越さなければならなかつた。

今、一日の勞作から救はれて家路にいそぐ村の誰れかれを茶畑の土手に凭れて、ぢつと羨むやうな眼で見てゐるのは直次といふ十三四歲の少年であつた。彼は、その年頃の少年に似げない、ひどく沈鬱な顏に淚ぐんでゐた。今日、暑い最中を隣村まで父の使ひで步いていつた歸途の疲れた脚をそこで休めてゐるのであつた。さうして、父の用事が都合よく果されなかつたことを思ふと、堪らなく情けなくなつて來て、多田の家の人達の無情と冷淡な言葉とが、疲勞した腦裡に強く想ひ起されるのであつた。

「どこの家かて、世帶といふもんがあるんやよつて、も、千度のことやさかい、さうさうは、可けまへんて、お父さんにいふとけ。口の喧しい母方の祖母の聲が、先ほどまで鳴いて

ゐた茅蜩の聲のやうに耳について忘れられない。

「お母はんが、ゐんようになつたんやから、尙ほさらのこつちやないか。」

伯父の呟いた事も心に殘つてゐる。

母方へ行つて、時分時に一碗の飯はさておき、一杯の茶も與へられずに、侮辱と憎惡の眼で追はれた自分の慘めさを思ふと、直次は、母の家出を悲まずには居られなかつた。が、それよりも尙ほ、彼は、自家へ戻つて、父の悲痛な顏を見るのが、一層堪へられなかつた。また、祖母の淚まじりの繰言を聞くのも辛かつた。悄れた弟や妹の樣子を見るのも哀れであつた。と、いつて、彼にはそれをどうすることも出來なかつた。空しく土手に凭れて、家に戻る辛さと、次第に迫る暮色の寂しさを犇々と身に感じつゝ、あとから後から湧いて出る熱い淚を手の甲で拂ひながら、自分達を置き去りにして、二三月ばかり前に默つて家出をした母のことを思ひ浮べてゐた。世間の人から美しいといはれた、あの母の面影が懷しくもあり、又怨めしくもあつた。

さうしてゐる間にも、直次の胃の腑はもう先刻から、ひどく空腹を訴えてゐた。彼は今日の午餐には、下の段の隣家で貰つた麥香煎で、家の者皆と一緒に、やつと腹をこしらへて使ひに出て來たのであつた。あてにしてゐた無心は聽いてもらへず、このまゝ素手で歸つていつたところ、どうすることも出來ないのは分つてゐた。自分の歸るのを待つてゐる父や祖母や弟妹達が、ひもじい思ひをして失望するのも眼に見えてゐた。

そのうちにも、空腹は堪へられなく迫つて來た。今は、稻田の中から立ち騰つてくる甘酸つぱい泥の匂や青い草蒸熱れさへもが神經的に鼻を衝いて來た。先刻母方の家を出て戻る時納屋の横の茶園に西瓜がいくつも轉がつてゐたのを見て來たことを思ひ出した。が、それすら怨みの種であつた。それを考へるとゝもに彼はまた、そこらまはりに梨や葡萄を栽培してゐる畑を思ひ出さうとしてゐた。西瓜の作つてある處をも鋭い知覺で聯想してゐた。疲勞し切つた神經には、そんな甘美な果實のことを思つたゞけでもゝう口の中に甘い水の滴る心地がした。彼は不善な行爲でもするやうな眼で凝乎とそこらを見まはした。

すると、今、自分の凭りかゝつてゐる茶畑の土手に、何の蔓か、柔かい纖細い蔓の尖が這ひ出してゐるのが、ふと眼に入つた。それを見ると直次は、殆ど本能的に、腰の上くらゐある土手の上に這ひ上つた。そして、その蔓が何處から伸びて來てゐるかといふことを探す前に、彼は、わざと顏を外方に向けて遠くの方を見てゐる振りをしながら、眼だけは斜にそれ等の蔓の這ひ擴がつてゐる畑の畦の間を探してゐた。そこには青い蔓の葉の蔭に淡黄色をした、甘さうな眞桑瓜があ

つちも此方にもころがつてゐるのが、眼を射すやうに見えた。彼は畦の上に凝乎と突立つたまゝ、夕暮の野路を往き來してゐる人影の方を注意した。まだ野の面はいくらか明るかつた。一人二人稻葉の畦を分けてゆく人の眼が遠くから自分の方を見てゐるやうな氣がしてならなかつた。しかし、少時躊躇つてゐた揚句、堪へ難い空腹は、大膽に彼をして、眞桑瓜の畦の中に足を踏み込ました。

何ともいへない、爽かな香氣のする青黄色の眞桑瓜を手にして立つた時には、さすがに、全身から力が拔けたやうな氣味の惡い恐れを感じた。自分でも吃驚した。しかし、飢餓は何よりも力があつた。彼は忽ちその瓜を口に持つていつた。そして又もとの茶畑の畔の下に隱れながら、むしや〳〵と早口に嚙つてゐた

直次は、小學校の準敎員であつた父から平素修身道德について說諭せられてゐるだけ、今自分の犯した行爲が非常な罪惡のやうに思はれた。羞恥と後悔とに責められながらも、甘露のやうな汁の滴るその味は、一時凡てのことを忘れしめた空いた胃の腑が殆ど滿たされたところで彼は又その次の獲物が欲しいと思つた。そして畑の中に突立ち上つてみると、もう先きよりは暮色が遙に濃くなつて人影も沒してゐるのと、實に大膽になつてゐるのとで、彼はもう四邊に憚る色なく再び茶園を跨いで、今度は、中でも甘さうなやつを撰りながら、二つも千切りとつて出て來た。さうして畔の上に趺坐をかいてゐると、最初の時あんなに怖れたのが、自分でも詰らぬことをしたやうに擽つたかつた。彼は、村の者が、平常、そんなことをしても、それを自家の家へ持つて歸るのは善くないが、その場で食つてしまふんであつたならば、何でもないといふやうな、一種の習慣律によつて是認してゐるのを知つてゐた。併し自分はもう、先きの一つで、おほかた腹は一杯になつてゐた。後の二つを取る前までは、自分もまだ少しく食べたいやうな氣がしてゐたが、さうして大きなやつを二つ手に持つてみると、何だか急に腹がくちくなつて來た。今、家では父や祖母や妹や弟が空腹じいお腹を抱へて、自分が歸つて來るのを、今か今かと待つてゐるにちがひない。直次はさう思ふと、この二つの眞桑瓜をそうつと持つて歸らうとした。

「なに、もう日が暮れてしまうた。誰れも見てゐる筈はありません。」と、思つてゐると、背後から、

「おい。」

と、低い聲ではあるが、突如に呼んだものがあつたので、彼は、まるで血の氣を失つたやうに吃驚した。さうして、はつとそつちを振返ると、畔の上には、彥三郎が肥料桶の空になつたのを擔いで突立つてゐた。

彥三郎といふは直次の父の處へ始終話しに來る村の青年

で、二十二か三になる。學校では父に敎へられてゐたのであつた。彼は若い農夫らしい檜笠を片手に提げて此方をぢつと見てゐた。直次には、彦三郎の眼が三つもあるのかと思ふほど凝視められてゐるのが辛かつた。そして、ふと氣がつくと、彦三郎の背後には、も一人女が立つて、やつぱり自分の方を見守つてゐるのであつた。直次は、思ひがけもなく、そんなに多くの眼で見付けられて、身體が竦んでしまつた。そしてひとりで頭を俛首れてしまつた。兩方の手に摑んでゐた黃金色の眞桑瓜はいつの間にか畑の土の上に滑り落ちてしまつた。

「早うこつちやへ下りて來いな。」

彦三郎は少時してから又言葉を掛けた。

直次は、その聲に彈かれたやうに、いきなり茶畑の土手から、も一つ下の段の田圃の畔に立つてゐる彦三郎の足許に飛び下りて來た。が彦三郎の發したその言葉には、何處か優しい音がこもつてゐたので、それが直次をやゝ安心せしめた。

「さあ、往の。」

彦三郎は、あと餘計なことをいはうとせずに直次を促して先きに立たした。直次は悄々しながら、素直に先きに立つて畦徑を家の方に歩いた。

「今日は何處へいたんや？」彦三郎は、又少時してから、今茶畑の中で見たことは一言もいはないで、さういつて訊いた。

直次は、一と口、

「多田の家へ。」と、答へた。彦三郎は、

「あゝさうか。」と、いつたきり、あと何もいはなかつた。彼には、それだけ聞いたゞけで、直次が多田の家へいつた意味は解つてゐるのであつた。そして、直次の家路との岐れ道の處へ來た時に、

「自家へちよつと寄つていかんか。」と、いつて、直次を誘うた。直次は、彦三郎のいふまゝに蹤いていつた。彼は、彦三郎の家に行けば、何か好いことがあるやうな氣がしてゐた。

たゞ直次の氣にかゝるのは、彦三郎の後に連れ立つてゐる美佐野といふ女であつた。彼女が、先刻の、自分のしたことを何と思つてゐるであらうかと思つた。が、彼は二三年前に餘處の村へ嫁に來た者で夫の喜代治が今年の五月に重い病氣に罹つて戸板に載せられて奈良の病院につれて行かれたことから、その後聞いてゐるいろ／＼なことを子供心に思ひ浮べてゐると、自分の爲たことに對する羞恥の念が、その爲めにいくらか救はれるやうな、擽つたい氣がした。村の若い者のする噂によると、彦三郎は、その美佐野の家へ農事の手間にいつてゐるのであつた。

やがて、その美佐野の家に戻つて來たところで、彦三郎は担いでゐた肥料桶を溜めの處にしまつてから、美佐野には、

「ちよつと……」といつて、彦三郎は、「さあ。」と直次を促して先に立つた。そして多田の家へいつた様子などを直次に訊

ねながら歩いた。

「お母はんの行た先まだ分りまへんか。」と、話は、家出した直次の母親のことに及んだ。

「いえ、まだ。」と直次は答へたが、母のことをいひ出されたり思つたりするが彼をして何ともいへない憂鬱な氣持ちにならしめるのであつた。

彦三郎は自家へ戻ると戸締りをした土間の戸を開けて内へ入り、手探りに風呂敷包みを取つて、それに米櫃からお椀で米を掻き込んだ。直次の眼の前には、薄暗闇の中に眞白い米の山がみる／＼築き上げられた。そしてかなり大きな山が盛られたところで、彦三郎は一粒の米もこぼさぬやうに、風呂敷の四つの隅を巧みに摘んで、その一端を以て結はへながら、

「これ、ほんの少しやけど、持つといで。そしてお父さんによろしういふてな。私も美佐野さんのとこの仕事が片付き次第に又お邪魔にいきますいふといて。」

直次は米の包みを抱へて元氣よく我家に急いで戻つた。

二

直次の父は和田直道といつて、村の小學校の準敎員であつた。祖父の時代から、この山中の村では相應に山林田畑などの不動産を所有してゐて、困らぬ暮してゐたものであつたが、人の好い直道の代になつて、すつかり身上を減してしまつた。それも決して短い間のことではなかつた。直道が親代の百姓の仕事を嫌つて、小學校の準敎員などといふ位倒れのことをして、ぶら／＼してゐる間に、足りないたりないで先祖からの山林を人手に渡したりして、いつとなしに段々に無くしたのであつた。もとより少許の月給で小學校の敎員などしてゐたのでは、一ケ月の交際費にも足りなかつた。それに、さういふ農村では、都會とちがつて、社會が狹く、交際の範圍が少いだけに、村吏だとか、敎員だとかいふ定つた連中の間で却つて飮んだり食つたりするやうな餘計な失費が多かつた。直道の一家の生活がそんな事情から追々逼迫して來たのは、恰も結核患者が、いつとはなしに、衰弱していくやうなものであつた。

それにも一つ直道の一家をしてそんな窮境に陷らしめた有力な原因は、直道の妻の奈美子と美貌の虛榮心とからであつた。奈美子は前にいつたやうに隣村の多田といふ同じ農家から嫁して來たのであつたが、彼女は初め和田の家へ嫁して來る時から、もう、そんな山の中の寂しい村で、泥臭い百姓をして可惜一生を朽ち果てる心はなかつた。昔から禁裏御領といつて、村の古老が誇りにしてゐた、別天地のやうな土地でも、汽車の停まる處まで出て行くには、行く氣にさへなれば、何でもないことであつた。一人奈美子に限らず、もう彼女くら

ゐの年ごろの男も女も、そして一度汽車に乘りさへすれば、わづかに二時間足らずで行くことの出來る大阪や京都の生活が、誰れにもかれにも憧れの的であつた。

奈美子は、たとひ看護婦になつても又女中奉公をしてもいいから、ぜひ自分は大阪へ出て行きたいといつて、容易に聽かなかつたのを、いろ／＼に說得せられて直道の處へ嫁して來たのであつた。そして野良仕事をさせぬといふ約束で貰ひ受けたのであつた。百姓をせぬのは本人の奈美子ばかりではない、夫の直道も百姓をせぬといふ條件であつた。それでも家計が段々窮迫して來る一方には、又次きつぎと子供が産まれたりしては、そんな我儘なことをいつては居られなかつた。奈美子は鄙に稀れな美貌を持ちながら、やつぱり、そこらの農家の娘と同じやうに、野良に出て苦しい勞役に從はなければならなかつた。彼女には、それが、忍び難い不滿であつた。

そして、今から三四年前夫の直道が、神經痛で小學校の敎職を退く時分には、父祖の代から、どうかゝうかして持ち耐えてゐた五六反ばかりの田地をも全部借金の抵當として人手に取られてしまはねばならなかつた。それにも委しくいへば可なり深い筋道があるのであつた。一體この中和束の村民の經濟狀態は、何時の頃からか、甚だしく貧富の度に懸隔があつた。村の一番の金持谷澤萬兵衛といふは、自身は、木津川の畔の木津の町から養子に來た者であつた。谷澤の家は昔から金持ではあつたが、萬兵衛が養子に來てからは隨分質の善くない手段で身代もその一代にぐつと伸ばした。山の中の和束の村だけでなく、他村の方に、むしろ多くの田地を所有して、四五十町歩を所有してゐた。勿論その他にも多くの山林などを所有してゐた。

ひとり谷澤の一家がさうであるに引換へて、それにつゞく資產家といつては、やつと田地の十町歩かそこ／＼を所有してゐる者が一二人あるきりで、あとは殆ど凡てが細々とした自作農であるか、小作農であつたが、その自作農もいつとなく貧血病者の如く細つて、やがて小作農に落ちてゆくのであつた。

和田直道の家計もその好い標本の一つであつた。勿論、さうなつてゆくには、直道の知惠と體とに働きのないのが最大の原因であつたことは否めない。彼が最後に手を放した、その五六反の田地といふのは、村內でも最も優良なる田地であつたところから、他人の所有地を併呑することに、始終腹黑い奸計をめぐらしてゐた萬兵衛は、どうかして直道の田地も手に入れようとしてゐた。そして直道が金に窮してゐるところを見て、たゞ心安立てに、「和田さん、金が入用やつたら、遠慮なうお使ひなはれ。」といふやうな調子で、參百圓ばかりの金を直道に貸したのが、今から三四年ばかり前のことであつた。人の好い直道は、萬兵衛にそんな深い奸計があるとも知らず、同じ村內で、古くから懇意の間柄だから、たゞ懇意づくで貸してくれたものとばかり思つてゐた。そして萬兵衛の方でも一片の證書も書附も要求しなかつた。しかし萬兵衛の方では、直道に金を貸してゐることを決して忘れはしなかつた。三四年過ぎてから、始めて直道にその金を催促をした。直道は、不意打ちを喰つた形であつたが、固より借りた覺えのある金であるから今更それを知らぬとも云へなかつた。萬兵衛は、直道を、どうすることも出來ない窮處に追詰めるのがかねての計略であつた。そして、彼が疊み掛けて直道を苦境に陷れようとした奧底には、なほ一つ別な目的があつた。それは、かねて直道の妻の美奈子に道ならぬ懸想をしてゐるところから、正面から直道に向つて貸金の催促をしながら、裏道から、人を使つてそつと美奈子を口說きにかゝつた。さすがに直道の妻は、憤つてそれを跳ねつけた。さうなると萬兵衛の力では一方向きになつて嚴しく貸金の催促をしはじめた。金利に金利を加算すると、參百圓の元金はわづか三四年の間に貳千幾圓といふ多額になつてゐた。萬兵衛はその金の代償として例の田地を要求した。

萬兵衛が、さういふ惡辣を用ゐるには、毎時其手先になつて働く奴があつた。それは彥三郎の親爺の彥兵衛であつた。――彥兵衛と伜の彥三郎については後にいふ。――それで萬兵衛は、直道の妻の美奈子を口說くにも手先の彥兵衛を使つたのである。どうしても美奈子が聽かなかつたので、彥兵衛は今度は萬兵衛の意を含んで、直道の所有の田地の全部借金の抵當に渡すならば、それを、極めて低廉な小作料にして又直道に貸さうといふ話を持ち出した。

何時の頃からの習慣であるか、その附近の村では、昔から小作料が非常に高かつた。小作人の收穫米の殆ど八九分までは地主に納めなければならなかつた。それを、萬兵衛は、直道が田地を悉く引渡すならば、小作料を收穫の五分くらゐのところまで引下げようといつた。直道の方では、借りた金は何とかして決濟しなければならぬ場合に立ち至つたので、相當の地價に積つて、その田地の所有權をいよ／＼萬兵衛に讓渡し、更めてそれを小作として借り受けることに決定したのであつた。

ところで、病身の直道は固より野良に出て働く事は出來なかつた。妻の美奈子が、祖母のお澤や、今年やつと十三になる長男の直次を對手に覺束ない手業で働くほかはなかつた。

すると、ある日のこと、飽くまでも美奈子に想ひを懸けてゐる萬兵衛は、美奈子が野良に出て働いてゐる隙を狙つて彼女に暴行を加へた。けれども、それを表沙汰にしようとすれば、小作の田地を返却しなければならぬ。彥兵衛が兩方の仲に入つて、いくらかの金で濟ますことに計らつた。美奈子が

夫や子供を棄てゝ大阪に出奔したのも、それが直接の動機であつた。

しかし、和田の家では、美奈子はたしかに大阪へ行つたらうといふことだけは、大抵推量が着いてゐたが、大阪について、どうしてゐるかといふことは分らなかつた。けれども、はつきりしたことは分らないながらも、それを想像することは、直道にとつては、いふまでもなく、祖母のお澤にも伜の直次にしても、何ともいふことの出來ない暗い不愉快な氣持ちにならされるのであつた。三十そこ〳〵の若い女の身空で、大阪の中央へ出ていつて、どんなことをしてゐるか、どうせ、人に話せるやうな明るいことをしてゐる氣づかひはなかつた。

三

あれから二三日の間、彦三郎は、和田の一家のことが氣にかゝつてゐたが美佐野の處の農事が忙しかつたので、まだ訪ねることも出來なかつた。彦三郎は、中和束の村では模範青年の筆頭であつた。身體が强壯の上に、學校は小學校を卒へたばかりであつたが、百姓の暇には、いつも讀書を好んで、いろんな雜誌や新聞によつて、絶えず新智識を磨いてゐた。大阪や東京の方のことをも、そんなものを通して大體に通じてゐた。彼は純眞な青年であつて、正義の觀念に厚く、農民生活の改善に對しては、熱心なる理想家であつた。それゆゑ同輩の青年は、何れも彦三郎に對しては常に一歩を讓つてゐたし、又因循な年寄りとか村での物持ちの方からは、往々彼を危險人物視して、社會主義者だと大仰にいふものもあつた。とにかく通常の村の者からは、大分偏人扱ひにせられてゐた。

現に彦三郎がさうであるのに係はらず、父の彦兵衛は、いつも谷澤萬兵衛の手先になつて、善からぬことを働いてゐるのであつた。彦三郎はその父の次男で、その上にも一人、長男の宗次郎といふのがあつたが、それはたゞ普通の百姓で、毎日野良を稼ぐことより能のない人間であつた。

彼は、その父の爲ることが、何によらず氣に食はなかつたところから、自分から進んで別居してゐた。それが又風變りで、無論まだ女房もなかつた。そして、大工も左官も頼まず自分で掘立て小舍のやうな物を建てゝ、そこへ一人きり入つて、朝は早くから自分で飯を炊いて野に出ていつた。一人で五六反歩の小作農を働きつゝ、その暇には忙しい農家へ手間仕事に雇はれていつた。そして夜は暇があると、東京や大阪の新聞や雜誌を讀んでゐた。

彼にも戀があつた。それは、前にもいつた美佐野であつた。五月から、彼女の夫の喜代治が病床についてゐるので、彼は、そこへ度々手傳ひに賴まれていつてゐたが、二人の間にはいつしか、普通の知つた間柄以上の細かい感情が入りくんでゐた。

翌日も彦三郎は、美佐野の家へ手傳ひにいつてゐた。その日は山田の草取りであつた。彦三郎が肥料桶を擔いで先に立つと、美佐野は辨當と茶を入れた藥鑵とを提げて後についていつた。

美佐野も、百姓をすることを好まぬ方であつた。彼女はそれを、田の畦に腰を下ろして休む時など、しみ〴〵と彦三郎に滾ぼした。彼女も和田の美奈子と同じやうであつた。大阪か東京かへ出ていつて、看護婦か産婆になりたいと思つてゐた。彼女は、子供の出來ない今のうちに、何とか極りをつけて、離緣して東京の方へでも行きたい心であつた。彦三郎との間には、まだ、夫の喜代治に對して申譯の立たぬやうな關係はなかつたが、彼女の心はもう、そんな山の中の田の草取りで一生を終るつもりはなかつた。村の娘達が、どれもこれも同じやうに、初は必ず大阪や京都のやうな大都會の生活に憧れてゐながら、自分では氣の進まぬ農家に嫁にいつて、初のうち一年二年は、野良仕事をさせないでおくが、段々その境遇に化せられて、夫をはじめ、その父母達が苦しい勞役をしてゐるのを、自分だけ樂にして見てゐることも出來なくなる。そのうちに兩親は次第に老いて行き、自分達が、一家の世帶を繰り廻はしたり、子供も次ぎから次へと出來るやうになると、いつとなしに若い時分の夢のやうな理想は跡もなく壞れてしまふのが常であつた。美佐野は、どちらを向いて見ても自分の稚な友達の誰れも彼れもが、一人の例外もなく、さうであるのが、何となしに寂しくつて堪らなかつた。それで自分達は一生を、つまらなく山の中で老ひ朽ちてしまふのかと思ふと、何をするのも厭であつた。

小柄な彼女が泥の深い山田へ這入ると、殆ど膝を沒した。稻を跨いで兩手で泥の中に挿入れ、彦三郎と二人並んで、土を掻きながら草を除つていつた。煎り付けるやうな烈しい太陽は、遠慮もなく彼等の眞上から背中を直射する。泥黑い汗は額から絶え間もなく流れて、檜笠の紐を濡らした。劍先のやうな稻の葉は、少しく油斷をしてゐると、容赦なく顔や手足をちくちく刺した。それでも手は休む間もなく、絶えず泥の中を探つて雜草を拔き取らなければならなかつた。それよりも尙ほ彼等の困るのは、田の深みへ陷込むことであつた。場處によると、田の中の水が糞えて土を膿ますために、ところどころに底の知れない深みが出來るのである。尤も、そんなところへは、底を入れるといつて丸太を沈めて置く。それに足を支へて仕事をするのであるが、もし足を踏みはづすやうなことがあると、腰を沒しても尙ほ止まることを知らないくらゐ深い處がある。そんな場處には棒杭を立てゝ、しるしをして置くのであるが、どうかすると、地質の不良な山田の

中には、知らぬ間に、そんな危險な深みの出來てゐることがある。
　美佐野は、さういふ深い處へ、つい脚を踏み込ますと、慌て丶彥三郞の手に捉まつて足を拔きとつた。泥にまびれた手との接觸は、苦しい仕事に倦み疲れた若い男と女とに、妙に蘇らすやうな不思議な感覺を與へるのであつた。彥三郞は身體中の若い血が躍り狂ふやうな、堪へがたい快い惱みを感じた。さうすると、彼は定まつて、そんな劣情を頭から拂ひ除けるやうに、小作者の苦境に考へを馳せたり、もつと高大な意義のある生活のことを思つて大きな十本の指を宛も萬鍬のやうにして自暴に泥の中を掻き廻はすのであつた。

四

　それから一日二日過ぎた晩彥三郞は、和田の家を訪ねた。老婆のお澤は、孫達と背戶の方で涼んでゐるらしく、そつちの方で聲がしてゐたが主人の直道は獨りきりで緣側の蚊やりの傍で默然としてゐた。火鉢の木つ端からは、悒せき白煙がぶすぶすと立騰つて、いとゞ黑染んだ家の中に立ち迷ふてゐた。
　直道は、思ひがげない彥三郞の顏を見ると、今まで考へ沈んでゐたことからふつと夢を破られたやうに顏を揚げて、窶れた頰に微かな笑ひを浮べた。
「さあ、どうぞ、こつちやへ。……此の間は有難う。おかげで暫く生命を繋ぐことが出來ました。いつも、あんたの世帶を煩はして、ほんとに濟まんこつちや。」
「なんの〳〵。お易いこつとす。私に効生がありましたら、もつと何とかしたいと思うてゐますのやけど、どもなりまへん。」
　彥三郞は、舊師の苦境を察するにつけ、心からあゝもしたい、かうもしたいと焦慮するのであつたが、なか〳〵自分の思ふとほりにならなかつた。
　直道はそれでも、いつにない機嫌の好い顏をしながら、
「安心してくれたまへ。家内の居處も分つたよつてな。」といふ。
　彥三郞は、凝乎と直道を見ながら、
「あゝ左樣か。そら宜しうござりましたなあ。ほて、やつぱり大阪に居てられますのですか。」
「さうらしい。けど、大阪の何處に居るのか、それは分らんのや。明日の十二時まで天王寺の停車場まで直次に來いといふて、手紙が來てゐるんや。貞操觀念のない彼の女にも子供だけは可愛いと見える。……あれを」
　と、さういつて、直道は、座敷の隅を指した。そちらには子供の帽子が三つと、下駄が三足揃へて置いてある。
「あれを送つて來た。しかし、居る處を明かさいで、天王寺

の停車場まで來てくれといふのをみると、碌なことをしようと見えて……」直道はさういつて、言葉の終の方になると俄に悲痛な顏になつて、自然に聲を呑んでしまつた。
　彥三郞も大抵見當を附けてゐるだけ、何とも慰めていひやうがなかつた。
「そんなこと、先生……」
「いや、俺はさう思ふとる。田舍者が、何の藝なしで、殊に女の身で、地道な働きをして居つて行て、五十日や二た月やそこいらで、かういふ物を買ふて送つたりすることが出來る氣づかひない。それに彼女は、そんな風に出來て居る女なんや。」
「そやつたら、私も直次君と明日一緒に大阪へいて、奥さんをお連れ申して來ませうか。」彥三郞は熱心を面に表はしていつた。
　しかし直道は冷淡な顏をして、
「いや、ご心配は難有いが、放つといてもらひませう。私はもう、彼女に對して何事もいひたうない。いふだけの力が私にないんぢや。それに考へてみると、今までに隨分苦勞をかけても居るんやから、彼女も、これから先き少しは氣儘な暮しをするものよからう。」
　直道はもう、凡ての自我を殺してしまつてゐるやうな悲しい諦めをいつた。彥三郞は、それに對して、答へる言葉が出なかつた。しかし、直道のさうした覺悟の奥底に何か知ら容易ならぬ、ある恐ろしいものが潛んでゐるやうな氣がして、彥三郞は不安を感じた。
　少時の間二人とも無言のまゝ、蚊やりの煙にむせてゐた。うるさい蚊は、わん〳〵唸りながら、田圃の方から時々溜息を吐くやうに吹いて來る夜風につれて群をなして、彼等の顏に打突つて來た。
「どえらい蚊や。」直道は、澁團扇を手にとつて、ばた〳〵そこらを煽いだ。それにつれて白い煙がぶす〳〵と家の中を立ち迷ふとともに、火鉢の木つ端が眞赤な焰を上げて、二人の顏を赤く照らした。その火影に映つる直道の顏は、兩頰が蒼白く削けて、充血した眼は憤りと悲みに淚ぐんでゐた。
　さうして二人が話してゐるところへ、誰れか背戶の方に提灯の明が見えて、祖母のお澤と大きな聲で應答してゐるのが聞えた。彼等はふとその聲に氣をとられて、聞くともなしに耳を傾けてゐた。
　その聲は、この頃中から、一家を擧げて大阪の息子の處へ引移らうといふ噂のある幸右衛門の女房のお近らしかつた。
「そらまあ、ご丁寧によう來ておくれなはつた。そんな話も聞かんこともなかつたけど、何時のことやらと思ふてましたくらゐのこつちや。さうか・ほんなら、いよ〳〵行きなはるか、そら、けど、えらい精のないこつちやなあ。」

祖母のお澤はさういつて挨拶をしてゐた。

「ほんまにいな、精がなうてな。わし等も、さう大そう行きたうはないのやけどもな、これも、お姥はん、爲様がないのやは。」

「けど、何やで、お近やん。人間も同じ一生やつたら、都會で暮した方が、なんぼい〻や知れんで。甘いもん食べて、身綺麗に持つてな。面白いもん見て暮らすことが出來る。こんな田舍に居ては面白いもん見るどころか、稼ぎぬいて、眞のおしまひには餓死でもせんのが、まあ結構なくらゐのもんや。」

「ほんまにな。そやけどお姥はん、よし等は大阪へいたかて食べるもん、そんな譯には、いかしまへんのやで。そらまあ、食べるもんだけは、どうやら清吉が心配してくれよるやろけど。」

「それや、お近やん。食べることの心配がなけりや、それほど結構なことはないやないか。」

「そら、そやけどお姥はん、そこにはまた他人さんには、いはれん苦勞がおすわいな。何をいふにも清吉の嫁が主人筋からもろたるのでな。何かにつけても遠慮やは。それにわし等二人ならまだ宜しいけど、頑是ない子供二人も連れて行くのやもの、今からその氣兼が思ひやられますわいな。」

「そらまあ、さうでもあろけど、お近やん、嫁は嫁や。親はどこまでも親やもの。そんな氣づかひはせえでもえ〻こつちや。それに遠慮氣兼といふけど、わし等のやうな活計をしてたら、何處にゐてたかてやつぱりそのくらゐの困苦はせんならん。食べる心配なしに身過ぎ世過ぎが出來たなら、人間もこれほど上行きはないがな。」

「けど、自家の良人は我儘者やよつてに。それに先方は、七荷片荷で來た嫁やもの、こ〻の權衡が味好う取れてくれりやえ〻がと、わし一人今から心配してやまんのや、お姥はん。」

「なんの、そないなこと、お近やん、心配せえでもい〻わいな。たとひ七荷片荷で來た嫁やかて、貰うもんや、貰はれて來たもんとやないか。」

「いえ〳〵、お姥はん。それが却々今日はな、そないな譯にはいかしまへんのやは。そやけん自家の良人もいは〻るのや。あんな、せ〻こましい處で、嫁に氣がねして暮すのは厭やいふて、聽かはれんけど、來いこいと向うから、千度勸めてくれて居る時に行ておかんと、後で活計向きが惡うなつたからいふて、何ぼ吾が子の處へでも推して行かれへんものな。」

「そやそや。けどお近やん、あんたは仕合をしなはつたな。」

「お姥はん、何の仕合なことがおすもんかいな。これが親の方で資本を下ろして持たした商賣やつたら、そら大威張りでも行けるけど、何といふにも白雲頭で奉公に出したなりの奴の處へ行くのやもの、子でありながら、親振るにはあんまり幅の利かん話や。それで自家の良人がいは〻るのどす。清吉があんまり氣の利いた扮裝をして來よると、我が子のやうに

思へん。こんなくらゐなら、自家に置いといた方がよかつた。けど、そんな勝手に話はないはな、お姥はん。」

「ふん、さうやとも。そんな我儘な話が何處にあるものか。けど、またお父つあんのさう思は〻るのも無理もない。あの清吉つあんは、小さい時から賢い子やつたさけん。それでもな、今まで親の手許において〻見なはれ、さうは出世出來しまへんで。それこそ失禮やが、やつぱり尻切れ絆纒に、繼剝ぎのした股引穿いて、今日も小作人の寄合ぢやの、印判ぢやのと、お父つあんの代理つとめはらんならん。」

「そら、さうやはな。そやさけん、わても清吉が來ると、よう、言ひまんのや。お前も親に甲斐性がなかつたもんやさかい、小さい時から他人の御飯を食べさせたけど、今となつて見れば、それが却つて仕合やつたかも知れん。今日自家に居よつたら茶粥をす〻つて朝から晩まで泥田の中を這ひ廻はるか、棡の下で肩骨の折れる目見んならん。」

「ほんまに、さうやとも。」

「それも相當にお蔭のあることならな、お姥はん、どんな辛抱してもえ〻けど、働いても、働いても、食べかねるやうなことでは、どもなりまへんがな。」

「ほんまにさうや、何時になつたら樂が出來るこつちや〻ら。こないに働いてばかりゐても、ちよつともお蔭もないこつては、もう百姓も明かへんはな。」

「そこへ行くと彼奴らは、氣樂な身分や。お客を相手に暑い寒いの贅澤いふて暮らすのやさけん。」

「ふむ々々、人間も段々やはな。」

「お姥はん、それにつけても主人は大切やと、清吉によう云ふてまんのや。お前も白雲頭の丁稚から、こ〻まで仕上げてもろたんやさけん、親を忘れても主人のことを忘れるな。たとひ寢る時にも主人の方へは足を向けて寢んやうにせい、云ひますのどす。そしたら、あの子のいひよることがお可笑しいのや。親にいはれんかて、わしはよう知つとる。主人々々いふけど、わしは遊んでゐて食へる身體やない。なんぼ、資本を下ろして暖簾を分けてもろたかて、借つた物は返さんならん。そこへゆくと、親は難有いもんや、血を分けてもろても、それを返へすことは入らんのやもの。また女房やかて、なんぼ主人の姪でも、わしの嫁にもろた以上は、わしの女房や。お前達の末始終の世話から、死に水までもとらすための婢やないか、何も遠慮することない。それに不服な婢やつたら、叩き出してくれる……。そなこといふと、お前の口が裂けよるぞ。いひますのや。は〻〻〻。」

といつて、お近は嬉しさうに大聲に笑つた。

祖母のお澤も、それにつれて、笑ふのが聞えた。

こちらでは直道と彦三郎は笑ひたくつても笑へなかつた。

お近の話の、伜の清吉は、子供の時に、直道が敎へた子であつた。直道は、お近の話を聞いてゐると、いろんな感慨が迫つて來た。墨や手垢で眞黒けに汚れた机の向うにいろんな子供の顏が並んでゐる中に、くり〳〵眼玉の清吉の顏もあつた。彼は、學業はあんまり出來る方ではなかつたが、聽かぬ氣の腕白であつた。その小さい野郞の淸吉が大阪へ丁稚にいつて、段々仕上げて、今では兩親から弟や妹まで引取らうといふのは、まるで噓のやうな話であつた。それに引換へて自分の生活の不甲斐なさを思ふと、傍にゐる彦三郎に對しても實に面目がなかつた。意苦地のない自分の一家族の前途の運命を思ふと、直道は戰慄するやうな恐怖に襲はれずには居られなかつた。嘲笑と屈侮辱とが何處からともなく顏を顯はして容赦なく犇々と病苦に惱む身體を鞭つ如く感じた。

彼は、彦三郎が傍にゐることをも忘れたやうに、呆然として兩眼を閉ぢ、顏を俛首れたまゝ深く考へ沈んでゐた。白く細つてゆく蚊遣りの煙は、ゆら〳〵と立ち迷うて、直道の胸のあたりを徊ひ騰り、頸のまはりに絡んでゐた。いろ〳〵なことを考へるほど汚辱と無念とが突き上げるやうに逆み上げて來た。

「ほんならまあ、先生にもよろしい申しておくんなはれや。奧にはお客さんがある樣子やよつてに、こゝで失禮しますさけん。」

お近は戻つてゆくらしく、さういふのが又聞えて來た。

直道は、それで又、やつと我れに返つたやうに、

「彦さん、君、あの幸右衞門さんのとこの淸吉君を知つとるやうな。」

「えゝ、よう知つてます。」

「うむ、それはそやつたな。村の者やさかい。」

「子供の時分には私と同じ級どした。彼奴なか〳〵狡猾な奴どした。他人に罪をなすり付けることが上手でな。」

「うむ、なか〳〵聽かん奴やつたなあ。今日の世の中は、あんな奴でないとあかん。」

「さうどすけど先生、僕は、あんな淸吉みたいな成功は、一寸も羨ましいと思うてません。」

「うむ。」と、直道は大きく肯づいた。「そら、君はちがふ。君は淸吉などゝは比べられん。君は偉大なる理想家やもの。」

彦三郎は、面と向つて直道から賞讃せられたが、それを、直道のおべんちやらとは思はなかつた。たしかに、自分の考へてゐることは淸吉などゝは、からりと變つた世界を見てゐるのだと信じてゐた。

直道は、默つてゐる彦三郎を見て、

「そやけど、幸右衞門のとこで皆な大阪へ引移つて行くと、またこの村の土着の者が四人減るんやな。」

すると彦三郎は呑込むやうに肯づいた。

「左樣でござりますな。一戸此の村から家が減つて、四人の家族は村から消えてしまひます。」

「ふえるといふことは好けど、減るといふことは惡い氣持ちやな。」

「好うはありまへん、が、爲方おへん。これも時勢どすよつて。」

「そら、さうか知らんが、しかし、皆なが、何んで都會といふものを、そんなに好くのやろ。」

「何も都會が、そんなに好えといふこともおへんですやろが、詰まりは生活の爲めにさうなつて行くのでつしやろ。誰れも生まれた土地から離れたいと思ふ者はござりまへんよつて。」

彦三郎と直道とは、それから小作をする者の窮境について、いろんな愚痴ばなしを始めてゐた。彦三郎は、自分達小作者の生活の改良進歩を夙に企圖してゐるのであつたが、畢竟それは彼の如き靑年が抱いてゐる一場の夢のやうなものであつて、一反も自分の土地を持たない彦三郎が、そんなことを考へてゐるとしたら、その志は殊勝なことに相違ないが、到底自分の力を揣らざるものであつた。彼も此の頃では、そんな企てが、自分の力に及ばぬことであるに氣がついてゐた。しかし、血氣な彼には尙ほ何か仕出さねば止まない精神が橫溢してゐた。

そこへ、背戶で今までお近と話してゐた老母のお澤が、孫の千代松を背負つて土間から上つて來た。痴呆性の琴子は汚れた浴衣を着て、ぽくりとあいた口から涎を垂しながら、その後から蹤いて來た。お澤は千代松を父の直道の膝へ下ろしてから、眼蓋の爛れた眼をしばたゝきながら、今背戶でお近と長話をしたことを話した。

直道は口は利かなかつたが、たゞ肯づいてゐた。

「息子はんが出世してなはるんやさかい、あそこの家もお目出度いのやけど、やつぱり自分の村を離れて餘處へ行くのは好うないか、明日は暗いうちに立つんやて。」

「どうしてやろ。」直道は不思議さうに訊いた。

「何やて、明るうなつてからやと、懷しい山や田圃が見えて、後髮を引かるゝ心地がするのが厭やよつて、そんなもんが眼に入らんうちに出たいと幸右衞門さん、いはゝるのやさうな。」

「さうでもござりまつしやろ。」彦三郎には、故鄕を懷しむ心がよく呑込めた。

直道は千代松を膝の上に抱上げて、その頭を撫でながら、故鄕を懷しむ人達の幸福を羨んでゐた。

そこへ闇の外から米袋を背負つた直次が戻つて來た。祖母のお澤は急いで、上り口のところへ出迎へた。

「おゝ、骨が折れたことやろ。」

さういひつゝ彼女は直次の手から米袋を取つてやつたり、肩の埃を拂つてやつたりした。

「五升でもえゝといふてやつたけど、持てたよつてに、一斗買ふて來ました。」

「さうか、そらまあよかつた。けど、重かつたやろ。こんなに、いろ〳〵なもの持つては。ほて、こつちやの物は、これ何や。」

「お味噌と鰯や。」

「おうお。まあよう氣がついたな。こんなに持つて、さぞ辛度かつたやろ。さあ、早うお上り。」

「なあに。」と、直次は頭の汗を拭きながら、お澤が形付けようとする米袋をとつて、米櫃の方に持つていつた。

二人の子供は、味噌と鹽鰯の包みをいぢつてゐた。お澤はその行儀の惡いのを叱つた。

それでも、祖母や孫達の聲や調子に、いつにない浮々したところがあるのが、彦三郎には見てとれた。が、一人父親の直道には、それが堪らない苦痛らしく、焦々する神經を顔面に表はしながら、

「爲替で少しばかり送つて來よつたので……」と、直道は彦三郎の顔を見て意味ありさうに云つた。老いた母や頑是のない子供等を餓死さすには忍びなかつたが、直道は自身だけはそれを以て口腹を充たす氣にはなれなかつた。彼の呼吸は急しなく迫つて、傍でそれを見てゐるのも苦痛であつた。

彦三郎は何といつて可いか分らなかつた。爲方なしに蚊やりの煙をぼんやり眺めてゐた。

五

直次は、その翌日早く起きて、祖母や弟妹に家の外まで見送られながら、大阪の母から手紙でいつてよこした約束の時間に間に合ふやうに、村を出立した。彼は大阪へは、まだ殆ど物心の附かぬ七八つ時分に一度父母に連れられていつたことがあるきりであつた。それゆゑ大阪へ行くのは今度が初めてといつてもいゝのであつた。彼は縁の廣い麥藁帽子を被り、洗ひ晒した絣の白地に黒木綿のへこ帶を締めて、素足に竹の皮の草履を穿いて、健氣な歩調で、すた〳〵と笠置の停車場の方に歩いていつた。そこまで出るには一里餘の里程であつたが、朝のうちの野の面は、稲田も山も皆な露に濡れて、涼しい風が心地よく吹いて來た。

今日も晝は相變らず暑くなると思はれて、頭を上げて振顧ると、鷲峰山の頂は、深く白い霧に鎖されて、大空一帶にも汗のやうな靄で立罩めてゐる。東の方を取り卷いた峰つゞきから、二三間上のところに太陽が上つてゐるのだが、それも深い白霧の奥から、日輪の輪廓だけが、銀のやうに鈍い光で

輝いてゐるだけである。

連日の炎天に、田はよく生育して甘酸つぱいやうな稲葉の香が何ともいへない懷しく鼻に通ふて來た。それにつけても直次は子供心にも殘念で堪らぬのは、向田の青田であつた。元は自分の家の田地であつたものを、谷澤萬兵衛の爲には借金の抵當として奪はれ、今度はそれを小作にして借りて作つてゐたのが、年貢米の滯納といふことを楯にして、青田のまま地主から取上げられてしまつた。それには、何でも母親のことが關係してゐるらしかつたが、直次には、それが、どうもよく解らなかつた。父も祖母もそれについては何にも語らなかつた。たゞ、直次が自分にも殘念であつたのは、母や祖母とゝもに自分も、苗代の時分からその田に入つて働いてゐたが、その丹精の効もなく、折角稲が青々と威勢よく伸びて來たのに、もう和田の家の者はその田に足を入れることはならぬといふのであつた。彼は今、露けき野に渡つて來る爽かな朝風に吹かれてゐると、却つて、何とも名狀しがたい涙ぐましい復讐の念が胸の底から逆み上げて來るのを感じた。

それとゝもに、今日十二時に天王寺の停車場で會ふ筈の母親のことが、いろ〳〵に思はれて、直次の足は露芝の野道を驅けるやうに進んでいつた。やがて笠置の驛に出ようとする山阪にさしかゝると、今日の炎天を豫報するやうな蟬の聲が宛ながら銀鈴を振るやうに木立から高く鳴り渡つた。

笠置の停車場は、木津川を隔てゝ向岸にあつた。直次は、擂り鉢の底のやうな山の中の村から、木津の溪まで出て來ると、もう廣い都會に出て來たやうな氣持ちになつた。彼は、こちらの岸の村から、木津川に架つた長い木橋の上を物めづらしさうに向うに渡つた。停車場は歴史で有名な笠置山の削り立つてゐるその山麓にあつた。そこから大阪湊町ゆきの汽車に乘つた。加茂、木津から奈良を經て大阪までの時間は二時間ばかりの距離であつた。途中で一度汽車を乘換へて、天王寺の停車場に着いた時には母と會ふ約束の時間には、まだ一時間と半ばかりの間があつた。彼は思つたよりも大阪に來るのが雜作もなかつたことを考へた。朝まで、あんな深い山の中の青い稲田の中に居つたものが、天王寺の停車場に來てみると、ついに今まで聞いたことのない、賑かな、雜沓の音がして、そこら中の建物はみんな大きな西洋館ばかりであつた。停車場には絶えず人が群がつてゐて、そこからつゞく市街の方へは織る如く電車や自動車が走つてゐる。綺麗な着物を着た男や女が氣の利いた調子で、あつちへ行つたり、こつちへ往つたりしてゐる。直次は、十二時までにはまだ時間があるので、少しく市中の方にいつてみたいとも思つたが、もしそんなことをしてゐて、大事の母に會ふことを取りはづしてはならぬと思つて、正直に停車場の三等待合室の、堅い腰掛けの上に腰をかけて、凝乎と時の來るのを待つてゐた。

　やがて時は次第に立つて、十二時近くなつた。直次は停車場の大時計を絶えず見ては、待合室の方に入つて來る多勢の人を數へてゐた。
　すると、十二時少し前のところに大時計の針が來た時分になつて、母の美奈子は、直次の眼には、まるで見ちがへるやうな容子をして入つて來て、そこらを眼で探すやうな樣子をして停車場の待合の中を、あちこちと探す風であつた。直次には、母親の着飾つてゐる着物が何であるかは、少しも分らなかつたが、彼には今まで見たこともない、蟬の羽のやうな薄い物を着て、輕さうな下駄などを穿いてゐた。
　直次は「お母さん」と呼んで傍に寄つて行かうとしたが、母の樣子がひどく變つて綺麗になつてゐるので、何となく躊躇つてゐると、母の方から直次の姿を見付けて、向うからこつちへ近づいて來た。
　彼女は、聲を殺すやうにして、
「あんたよう來たな。」といつて、人目を包むやうに双眼にそうつと涙を潤ませた。
　直次の方では默つて、たゞ涙ぐんでゐた。彼は、何かいひたいことが山ほどあるやうな氣がしてゐたが、會つてみると、直には物もいへなかつた。
　母親はそれから直次を連れて電車に載せた。直次は何處へ行くのか自分には少しも分らなかつたが、たゞ母親についていつた。電車に乘つてゐる間はさう長くはなかつた。やがてとある、人通りの少くなつた、裏町を歩いて、小綺麗な格子戸の入つた家に伴れていつた。
　家は、中和束の、自分の家と同じくらゐの、薄暗い、舊い家であつたが、自分の家とは、とても見比べられないほど、ぴか／＼するやうに、何處からどこまで綺麗に拭き込んであつた。家の中はさまで廣くもなかつたが襖の障子を取りはづしてそのあとへ、見るから涼しさうな簾戸を入れたり、水淺黄の麻の納簾をかけてあつたりした。悒せき田舍の家を見馴れた直次には、まるで眼が覺めるやうであつた。その中に住んでゐる母親も、それと同じやうに自家に居つた時よりは見ちがへるほど綺麗になつてゐるやうに思はれた。直次は、それが審かしくつて、何となしに吾が母親の顏を凝乎と見る氣になつた。自家にゐた時よりは餘計に白粉を塗つてゐるのが、いつも蓬々と亂してゐた頭髮を艶々した丸髷に結つてゐるのが、直次をして、直覺的に心を曇らしめた。自家に居つた時に見た母親よりは五つも六つも年が若くなつて見えた。若くなつた母親を見るのは、子供にも嬉しかつたが、何といふ譯なしに、直次には、心の底から悦ぶことが出來ないもののやうに感じられた。
　母親は、臺處で働いてゐた、婆やといふ年寄りの女を外に使ひに出して、饅まむしを命じて來させた。そして、その老

婢の留守の間に、何やかや、自分の居なくなつた自家のことを訊いた　お父さんの身體のことも訊いたが、お母さんには、琴子と千代松のことが餘程氣になると思へて、琴子はどんな着物を着てゐるとか千代松はひどく泣きはせぬかとか、お婆さんがいつも貧つてゐるとかいふやうなことを、自分の方から言ひ出して根ほり葉掘りして訊ねた。そして、ひとりで涙を流して、それを單衣の袖口で拭いてゐた。直次もそれにつれて手の甲で涙を押し拭うてゐた。それから母親は涙の暇に立つていつて、押入の中から白紙に包んだものを取出して來た。
「これ、お金五拾圓ありますんやで、落さんやうにな、大事に氣い附けて持つてお往んなはれや。」
　といつて、紙包を披いて、直次には、今まで見たこともない綺麗な拾圓札を五枚とり出して、彼の眼の前で數へてみせて、それを又もとのやうに白紙に包んで、どうして直次に持たしたら可いだらうと一寸思案してゐたが、やがて、いゝことを思ひついたといふやうに、ひとりで肯いて、又起ち上つたが、押入れから今度は白い晒し木綿の布片を手拭ほどの長さに切つて持つて來て、それに紙包みを、捲き込んで、直次のへこ帶を解かして、自分で、彼の腹に、それを確かりと胴卷きにしてやつた。
「こして置いたらよろしやろ。自家へ還んでお父さんに渡すまで、人の見とる前で滅多に取出すんやおまへんで。……ええ、よろしいか。」と、念を押すやうにいつた。
　直次は、復た悲しいやうな、嬉しいやうな氣が、ひどく逆み上げて來た。長く觸らなかつた、母親の手の、優しい觸覺を感ずると、何ともいへない、柔かい、優しい、快感を覺えるとゝもに、さながら身體が痲痺したやうに心地よくなつて却つて悲しいかなしい涙が、留め度なく湧き出でた。眼が霞んで物が見えなかつた。そして又前を合せて、母親は元のとほりに、ちやんと帶を結んでくれた。
　そこへ婆やといふ老婢が、外の使ひから戻つて來た。しばらくしてゐると、おあつらへの饅まむしを持つて來た。直次は母に進められてそれを食べた。その美味なことは、彼は生れて初めてこんな甘味い物を食べたやうな氣がした。母親は直次がそれを食べてゐる間も、始終わが子の顏から眼を離さぬやうにして、凝乎と慈悲の籠る眼で、箸の上げ下ろしにも瞬きもせず諦視めてゐた。直次には、母親のその心持ちが、恰ど暖かい春の光に蒸されてゐるやうな惠み深い愛を感じた。
　直次は、餓つ／＼饅まむしを食べてしまつた。そして、母親が、これから先きまだ何か好いことでもいつてくれるかと待ち心でゐたが、何處へ連れていつてやらうともいはなかつた。
　老婢もそこへ來て坐つてゐたが、母親と、直次のことや、その他の子供達のことなどを話し合つてゐた。

「こんな坊ぼんを殘しておきなはつて。御寮人さんも、氣が剛つうございますなあ。」

婆やは、身につまされたやうに、感傷的な鼻聲を出していつた。

「坊ぼん、お母はんの處へ泊つておいきやす。……なあ御寮人はん。」

と、母親に、せめて一夜でも此處へ泊めて歸すやうに勸めたが、母親は泊めようとしなかつた。

「おばはん、近いとこだすもの。……あんたも、もう、向うで日の暮れんやうに、そろ〳〵お往にいな。」さういつて、母親は直次を促した。

彼は默つてたゞ背いてゐた。けれども腹の中では考へてゐた。先刻からあれほど優しくしてくれる母親が、婆やさへ泊つてゆけといふのに、なぜ、自分の子を泊めようとしないのであらう。中和束の自分の家に居つた時には優しいお母さんであるのに、何故泊めようとしないのであらう。入口の標札にもお母さんの名前が出てゐるくらゐだから、お母さんの家であるにちがひない……直次は何か知ら、直覺的にある冷たいものを感じた。そして淡い寂しさに襲はれた。

母親は促すやうに、

「ほんならもうお往きいな。……なんぼ日が長うても、子供一人やさかい。向うで日の暮れんやうにな。」

直次は、子供心にも後髪を引かれるやうな氣持でそれから出て戻つた。天王寺の停車場までは婆やが送つて來てくれた。

六

それでも、又もとの天王寺驛から汽車に乘り、停車場ごとに段々汽車が中和束の方に近づいて行つてゐるのだと思ふと、大阪で見た、美しく化粧をした母の顏は次第に眼の先から薄れて、自家で自分の歸るのを待つてゐてくれる父の顏や祖母の顏、弟妹の顏がはつきりと思ひ浮んで來た。

やがて二時間ばかりの後には、直次はもう笠置のステーションに歸り着いて、そこから今朝渡つていつたとほり木津川に架した高くて長い木橋を渡つて、一里半ばかりの山道を中和束の村中まで歸つて來た。長い夏の日はまだ彌山の頂から五六間も高い處にあつた。彼はそこまで戻つて來ると、はじめて稍々身體に疲を覺えた。そして村の中を流れる小女川の岸に立つてゐる子持岩の上に上がつて、疲れた兩膝を投出して、汗を入れてゐた。小女川は村の北方に聳えてゐる鷲峰山から流れ落ちて來る溪流であつた。一塊の巨岩の下には清流が碧く澱んで渦を卷きながら流れてゐる。彼は遠く大阪まで行つて來たといふこと、しかもその用事が都合よくいつて、今懷中には多額の金を持つてゐるといふことなどが、輕い疲

れを覺えさすと共に、ほうつとしたやうな安心を抱しめたのであつた。投げ出した兩脚には素足の草履ばきに白い塵埃が一面こびりついてゐた。彼はそれを拂はうともせずに、じつと岩の上に腰を休めてゐた。下の清い淵の面からは涼しい川風が冷々と吹き起つて、熱した顏を心地よく撫でた。

村はそこから、東南の方へ緩い斜をなして一目に見渡された。青竹色をした野面からは、甘酸つぱい稻の香、泥の臭いのが媚びるやうに習々と鼻に通ふて來た。清く澄んだ水底には小石が手にとるやうに透き徹つて見えてゐる。鮠や鮒などが群れをなして泳いでゐる。直次は常に見馴れたことではあるが、何となく、がつかりした頭を休めるために、それ等の魚類が、臆病に、そして敏捷に水の中に動いてゐる狀を無心にじいつと見つめてゐた。

淵の片方は砂地の淺瀬になつてゐて、そこには、つい先刻まで、村の子供等が水を浴びに來てゐたらしく、濕つた小さい足跡が一面に殘つてゐた。直次はその足跡を懷しく眺めた。それと共に、今自分はたつた一人で大阪まで使ひにいつて來たのだといふ、何となしに優越した感じが胸の中に湧いて起つた。今日大阪で見て來た廣い世界と多くの人間とを思ふと、懷しいにはなつかしいが、小女川の清い流れがあんまり小つぽけで、つまらなくも思はれるのであつた。彼は、清清しい夏の野川の風に吹かれながら、いろ〳〵なことを思つてゐると、何といふ理由もなしに、自分はもつと偉い人間になりたいといふ氣が生じて來るのであつた。この清い川、此の青い野、あの砂地に足跡を印してゐる村の子供達、澄んだ水の底を無心に泳いでゐる魚、凡て自分にとつて懷しい思ひを抱かせぬものはないのだが、それにも係はらず、生涯それ等のものを伴侶としてこの草深い山の中に大きくなつて、そして死んでしまふのが、生き効ひのないことのやうに考へられた。今、家に病んでゐる父のことを考へても、祖母のことを考へても、自分が又そのとほりになつて行かなければならぬのが詰らなかつた。

——彼は、懷中に五拾圓といふ大金を汗で溶けるほど、確りと所持してゐるのが、非常に氣を大きくならしめたのであつたかも知れぬ。彼大きな麥藁帽子を扇子がはりにして、寛げた肌をばた〳〵煽ぎながら、頭を上げて暑い夏の野に終日働く農夫の姿を、あちこちと眼で拾ふて見た。いづれ紺の筒袖を來て、背丈けの伸びた稻葉の中を這ひまはつてゐると見えて、それが時々伸びをして半身を現はしてゐる。

「なぜ、あんなことをしてゐるのだらう。あの人達は本當に馬鹿なことをしてゐる。そんなにして稻を作つても、今に見なさろ、清水谷の家へ取上げられてしまふのではないか。そんな草除りなんか早う止めなさろ。もう定まつてるのやないか。少しでも年貢を納めなんだら、否應なしに小作を取り上

げてしまふやないか、あの谷澤の强慾張りめが。――

彼は、暑い西日に背中を照り附けられながら、營々として働いてゐる野の人に、子供心にも恰も諭すやうな、そして嘲るやうな、又憫むやうな氣持ちで、心の中でいひ放つた。

彼が清水谷の家といつた、谷澤萬兵衛の住居は村の中程にあつて、靑い稻葉の野面の向うに一段小高くなつた所の丘の上に大きな一廓をなしてゐた。今しも西に傾きかけた太陽が土藏の白壁に眩ゆく照り映えて、蓊鬱として楠の大木が屋敷の上を半分ばかり蔽うてゐる。長く取り廻はして土塀の上には、松の枝が蜿蜒として長蛇の如く這つてゐるのが見える。

彼の子供心には、その城廓の如くに見えてゐる谷澤の屋敷が不思議な恐怖であり、又怨恨の目標でもあつた。そして直次がそんな考を抱くのは、それが、此の中和束一村を擧げての群衆心理でもあつたからではあるが、しかも、又彼の家が此の谷澤の爲に直接に種々なる屈辱を蒙り不正に苦められてゐるからであるのは、いふまでもなかつた。……彼は涙の潤む眼を剝いて、暫時の間じつと谷澤の家の方を睨んでゐたが、いろ〳〵にこんがらかつた頭の中から、强い復讐の觀念が昂奮狀態となつて、むら〳〵と持ち上がつて來た。

おのれ谷澤萬兵衛覺えて居れ、貴樣が何だ、あの家が何だ。大阪にいけば、あんな家くらゐ何ぼでもある。大阪に行きさへすれば、これ此のとほり何ぼでも金を儲けることが出來る――彼は今日大阪の母の處で貰つて來た金を兩手で腹を抱へるやうにして、この金さへあれば家でも土藏でも建てられる。あんな塀でも門でも拵らへられる。楠だつて松だつて羨ましくはないぞ。

彼はそんなことを口の中でいひながら、そつと懷中の胴卷を取り出して、その中から、勿體なさうに紙に包み込んだ紙幣を披いて見た。まだそんなに傷んでゐない硬い拾圓札が五枚あつた。彼は指の先に唾をつけては、それを幾度となく數へてみた。彼は掌に幅つたいだけの紙幣を手にしてゐると、子供心に、自然に氣が大きくなつてゆくやうであつた。

そのうち、ふつと、

「自家に往ぬまで、出してもし人に見られてはいけまへんで。」と、母親が何度も注意したことを思ひ出して、彼は、頭を上げて一寸四邊を見廻した。幸に誰れも見てゐるものはなかつたので、急いで又もとの胴卷の中に入れて、しつかと腹に卷き附けた。それから今度は着物の内側に縫ひ付けてある隱しから小さい銀貨入れを取出した。その中にも母から貰つて來た銀貨が貳圓餘り入つてゐた。彼は嬉しさうに、その銀貨が確かに幾らあるか數へ直してみた上で、それ等の五拾錢だの拾錢だのの貨幣を一つづゝ裏返へしてみたり、鑄造の年號を讀んでみたり、互に打ちつけて鳴らしてみたりして、獨りで滿足してゐた。

そして胴卷の中の拾圓紙幣といひ、是等の銀貨といひ、みんな、あの繁華な大阪から持つて來たのだと思ふと、何だか同じ金でも餘計に値打ちがあるもの〻やうに思はれた。

……何でもい〻から大阪に行きたい。大阪に行きさへすれば、こんなに金を儲けることが出來る。こんな土地に居て谷澤萬兵衛に年貢米を搾り取られなくなつても濟むのだ。こんな山の中の狹い土地に居るからこそ萬兵衛に遠慮したり、恐れたりしてゐなければならんのだ。大阪に行けば、そんな入らん心配は少しもない筈だ。これから自家へ歸つたら、お父さんにさういつて、皆なで大阪に行くことにしよう。大阪へいつてあのお母さんの家に近いところに住んで居らう。そしたら大變に都合がい〻。……と、そんなことを思ひまはしてゐると、又、今日見て來たそのお母さんの家のことが、どうも不思議でならない。お母さんの自分の家に違ひないことには、たしかに和田美奈子といふ名前が出てゐた。……いや和田でなくつて、お母さんの方のお祖母さんの家の苗字である多田とあつたかも知れん。が、とにかく美奈子といふ名前はちがはなかつた。お母さんの家に訪ねていつて、一晩くらゐ泊つたつて、自家でお父さんが心配する筈もないのだ。お母さんは何故泊めてくれなかつたらう。……

それは向うでも考へた疑念であつたが、それが又考へ直された。あんな綺麗に拭き淸められた家に、五つか六つかくらゐ若くなつたやうに見えるほど美しく化粧をしてゐる母親を見たのは、直次には嬉しくないことはなかつたが何となく、それが腹の底からさう思つてい〻のか、惡いのか不安であつた以前のやうに自家にゐて、汚く窶してゐた母親を見てゐるのも、決して好い心地はしなかつたが、それでも、その方が、やつぱり心の底から母親らしい氣持で居られた。

……誰れも、そんなことを云つて聞かす者はないが、今日、あんなに優しくいつてくれたり、甘い物を澤山に御馳走してくれたり、尙ほその上にこんなに多くの金を與れたりしたところを見ると、眞實のお母さんに相違ないと思ふけれど、自分の家でありながら、泊めてくれようともせず何處やらに冷淡なところが見えたところから考へると、あのお母さんは、自分には、ひよつとしたら繼母であるのかも知れぬ。……あゝさうだ、きつとさうに違ひない。此の間、多田のお祖母さんの餘處々々しい物の言ひ振りといひ、あれは繼母で、眞實のお母さんではなかつたのだらう。それならば、お父さんやお祖母さんを勸めて大阪に出ていつたところで、あんまり面白くもない。と、さう思ふと、直次の胸は又暗く鬱いで來るのであつた。

夕陽はやがて彌山の頂に近づいて來た。南東に向つて開展した野面の稻葉の末が次第に薄黑くなつて見える。涼しい晩の方が又一層起つて來た。直次は岩を下りて、白い塵埃の野

道を家路に急いだ。

七

その晩彼は、父親に向つて大阪に移轉することをいひ出した。

「うむ……お前は將來、何を目的として、そんなことをいふ?」直道の語氣は鋭かつた。

直道は、今は、我が子にまでも裏切られたかのやうな感を起しながら、無念と屈辱とに燃える胸中の鬱憤を、凝乎と仰制して、直次の顔をきつと見詰めた。その顔には何處にも父親らしい常の慈愛といふものが見出されなかつた。が、母が大阪に出ていつて以來父のかうした顔を見るのはもう熟れてゐる直次は、それを格別氣には留めなかつた。けれども、鋭い語調でさういつて反問せられたので、彼はどう答へて可いか、一寸の間まごついた。それは、自分の目的をいよりも父の心持を測りかねたからであつた。

「僕……別に……」直次は爲方なく言葉を濁した。

「否や、お前はお母さんの處へ行きたいと思ふとるのか。」

父の言葉は頭から仰へ附けるやうに響いた。

「いゝえ、……さうやあらへんのだすけど。」直次は明瞭に答へた。「ほて……僕もつと學校へいて勉强したいのです。」

父の顔色は、それを聞くと、稍々直つた。

「うん、そら宜しいこつちやが。……一體何を勉强したいのや?」優しく訊ねた。

「どんな事ちうこともおへんけど、……僕は皇土學を習ひたいのんだす。」

直道はちつと頭を傾げた。

「なんや、皇土學て、何のこつちや。」

「皇土のこつとす。」

直道は破顔しながら、

「はゝあん、分つた。お前のいふのは土壤學のこつたらう。……土(つち)のことを研究する。それは皇土ではない、土壤といふんや。」父親は一人で合點してゐた。

「いや、お父さんのいはゝるのんとちがひます。皇土ちうたら、……天皇の土地と書きます。」

直道は再び不可解な顔をした。

「うゝ、そら、天皇の土地は皇土と書いてもえゝやろが、そんな學問があるか。」

「あるのかないのか知りまへんけど、此處いらは、みんな皇土でございますやろ。普天の下卒土の濱皆な皇土にあらざるはなしと、學校でも敎へますやろ。」

「うゝ、それは敎へる。」

「ほて、この和束の村は禁裏御領どしたのだすやろ。」

「うゝ、そら、さうやつた。……けど、お前今日はどうした

ちうこつちや、えらいことをいふやないか。誰れか、そなことを敎へてくれたものがあるんか。」直道は不思議さうに、復た我が子の顔を見直した。

「田代の彦三郎さんから聞きました。……日本の國は皆な皇土やさかい、君の處の田地かて谷澤萬兵衛に戻さんかて宜しいのやいふてはつた。」

直道はそれを聞くと、又苦痛に堪へられないかのやうに面をさつと曇らしながら、

「ふむ、……彦さんが、お前にそんなことをいふて聞かしよつたか。彦さんえらいことを知つとるからなあ。」

「まだ〳〵彦さんから聞きました。」

「どんなことを聞いた。」

「この村の者が毎日々々骨を折つて働いても一生樂をすることが出來んのは、その皇土といふことを知らんからや、俺はその皇土といふことを皆なに知らしてやるつもりやいふてはつた。ほて、僕にも、君も手傳つてくれいふてはつた。」

「ほゝう、彦さんはえらいことを考へよつたな。……ほんなら、皆なにその皇土といふことをいふて聞かしたら、皆なが樂になれるちうのか。」

「えゝ、皆ながそれを知つたら、樂になれるいうてはりました。」

直道は、もうそのうへ餘計に訊ねようともしなかつた。そして、機嫌よく肯づきながら、

「何でもえゝから、學問するのは惡いこつちやないが、お前はそれを何處で習はふといふのか。」

「大阪で習ひたいのです。」

「大阪か?……お母さんの傍にいて習ひたいといふのか:……」直道は又鋭い顔をしていつた。

直次は少時その顔色を見て考へてゐたが、

「いゝえ……お父さん、僕本當のとこいふたら大阪よりも僕東京へいつて習ひたいのだす。」

さういふと父親は、又急に悅ばしさうな顔をして、

「おゝ、よういうた。そら、好えこつちや」と、大きくうなづいてみせた。

父はまた語をつゞけた。

「そやけど、お前の知つてるとほり自家には金が一文もない。東京のやうな處にいつて勉强するには學資がなうては出來んことぢや。」

直道は嘆息するやうにいつた。

「いや、僕は學資は入りません。」直次は健げにいつた。

直道は凝乎と伜の顔を見守つてゐたが、その眼からは、ひとりでに熱い涙の玉がほろ〳〵と流れ落ちた。稍暫く口をきかなかつた。

「一文も金がなうて、そな遠いところへいてお前どうする考

があるか。」

　直次も一寸言葉に窮したが、

「東京へいて苦學をします。さうでなかつたら、奉公します。」

「…………」

「僕は自家から金をもらはないでもよろしいけど、僕が自家に居らなんだら、お父さんやお祖母さんが困りますやろ。」

　直道は何か心に決してゐるものゝ如く、ついと顏を上げた。

「いや、お前が家にゐんかて、俺らはちよつとも困りはせん。お前がゐんやうになつたら、俺等は四國遍路をして來る。」

「四國遍路？　あのお遍路さんにどすか。」

「うゝ、さうぢや。弘法大師の開かれた靈場めぐりをするんぢや。」

「お巡禮さんにどすな。」

「さうや。」

「そしたらお祖母さんや千代松や琴子はどないしますのや。」

「うん…そしたらおばあさんと千代松は多田の家へあづけておいて、お父さんは琴子だけ連れて行かうと思ふとる。」

　直次は心の中で、それは、とても出來ないことだと思つた。

「琴子だけ連れて、…そやけどお父さんその脚で、よう歩けますか。」

　父は去り氣なくいふのであつた。

「なに、これでも…歩いて歩けんことはない。」直道は神經痛で、針で刺すやうに時々痛んで來る脚を擦りさすり、寂しい笑ひを顏に浮べた。

「そやつたら、僕も一緒に遍路にいきませうか。」直次は、とても、脚なへの父一人に、白痴の琴子を連れて行ける筈がないとおもつた。

「いや〳〵。そんなことせえでもえゝ。お前にはそんなことをさせては居られん。お前はその志すところの皇士學といふのをしつかり勉强してくれ、ほて、それをお前のいふとほり皆なに敎へてやれ。」

「へい、…ほてお父さんは何時ごろ又こゝへ戻つておいでやすのどす。」

　直次には子供ごゝろにも不審であつたが、父のいふのが本當とも思はれた。

「うむ、長うなるな。…そやなあ、まづ早うて二年か、おそければ三年も四年も、もつと遲そなるかも知れん。…まあ、お前はそんなこと氣に掛けえでもえゝよつて、お前の志すところの學問を勉强したらえゝ。」

　直道はさういつてゐたが、又ぢつと何か知ら鬱ぎ込むやうにしてゐたが、やがてふつと氣持ちを改めたやうに、

「お前に、今日大阪から持つて歸つた金を參拾圓だけ遣るか

ら、後のことを心配せずに東京へ行け。」といつた。

　直次は、それを聽いて嬉しいと思つたが、父が意外にも即座に自分のいふことを聽いてくれたのが何だか本當の心でないやうな氣がした。

「僕はその金は入りません。家に置いときます。」

「路金がなうては東京まで行くことは出來ん。えゝから參拾圓だけ持つてゆけ。」

　父はさういつて、晝間大阪から直次が胴卷に入れて持つて戻つた五拾圓の中から三枚だけ取り出してその場で早速直次に渡した。子供は、何だか、あんまり父親の思ひ切りがいゝのが奧齒に物のはさまつたやうな氣がせぬではなかつたが、それだけの金を、自分の自由に使用することを許されてみると、胸は躍つた。

「思ひ立つたが吉日ぢや、明日早速出立ちせい。何も後のことを心配することはない。なんぼ貧乏したり病みわづらふてゐたかて、先祖代々の生れ故鄕に居る者は又何とかして餬食に有りつくよつて。」父は寂しい顏をしながら、言葉だけは元氣さうにいつた。

八

　その翌日の朝、まだ露の乾かぬ時分に、直道は直次を伴れて、遽かの思ひ立ちで、村の共同墓地にまゐつた。墓地は村はづれの、山際の斜面になつたところに累々として重なつてゐた。夏の朝とはいひながら、まだしとゞ露に濡れたそこら中は八重葎に鎖されて、櫟林の繁茂した木蔭の亂塔婆からは靑苔に蒸された、陰氣な濕つぽい土の臭ひが鼻に通うて來た。

　もうやがてお盆が來るといふのに、何處の家でも野良仕事に急しいので、まだ墓地一つ除掃をする暇もないと思はれて雜草は茂り放題に茂り、去年のお盆に立て替へたまゝの竹の花筒は枯れた樒とゝもに倒れたり朽ちたりしてゐる。

　直道は直次に指圖をして、自分も痛む脚を引擦りつゝ、伸びるだけのびた薄や蕨を刈取つてひとゝほり墓地の掃除をした。

「皆な百姓仕事に忙しいので、墓掃除をしてる間もないと思はれる。先祖の墓地だけは、何時までも粗末にしてはならん。これだけは何處へいつてもお前もよう心得へておけ。遠方にいたら、もうなか〳〵お墓まゐりも出來んよつて。」いうて聞かすのぢや

　それから家に戻つて來ると、心ばかりの、門出の祝ひのつもりで午餐には赤飯をたき、干物の飛び魚を膳の向うにそへた。一合の酒を買つて來て親子の間に酒盃の眞似をした。直道には心中ひそかに決するところがあるので、隱さうとすればするほど、弱い男涙がにじみ出してくるのをどうすること

も出來なかつた。

　とやかうするうちに一日も立つてしまつて、太陽が大分西に傾きかけた時分になると、直次は裸足になつて家のまはりの野菜畑に肥を注いだ。

「もう、そんなことを止めておけ。」

　父の直道は緣側から聲をかけた。

「えゝ……そやけど、僕が居らんやうになつたら。誰れも肥をやることが出來まへんよつて。」

　直次は自分で折角丹精してこゝまで大きくしたものを枯すのが、それ等の生物に對して可哀さうで堪らなかつた。彼は流し尻の水や小便の溜りから長い柄杓で、惡臭の立つ下水を汲んで茄子や、胡瓜や、玉蜀黍の根元にかけていつた。それ等の野菜は直次が近所から苗をもらつて來て植ゑたのであつた。暑い夏日の朝夕一日も怠らず水をやつた丹精の効が顯はれて、もう茄子には、光澤のある紫紺色の實がいくつもなつてゐた。胡瓜も他の家のから見ると、弱々しくつて、瘦せてゐたが、それでも長い蔓は篠竹の中に絡んで高く生ひ伸びてゐた。黄色い花の柄のところには小指ほどの實が覺束なげに實つてゐた。中でも玉蜀黍は一番威勢よく成長した。直次の背丈よりもずつと高く伸びて、廣い葉が婆娑々々と夕風にそよいでゐる。毎年お盆の時分には、その實を取つて佛壇に供へるのが習はしであつた。赤褐色の毛を長く生やして、粒の揃つた玉蜀黍の實が美しく、青い外皮からはみ出してゐるのが子供心には樂みであつた。何だかその玉蜀黍の實を見ると、直次には西洋の人間を見るやうな氣がした。とにかくそんな草々の野菜物が育ち、それを採つて食膳に上ぼすところに、何となく懷しいお盆の頃の田家の景物が整つてゐるのであつた。そんな思ひ出が、今晩これから立つて遠くへ行かうとする直次には後髮を惹くやうな名殘り惜しさであつた。

　白痴の琴子と千代松とは、大阪の母から送つて來た新しい帽子を冠り下駄をはいて軒下の雨垂れの、白く乾いた砂を弄つて遊んでゐた。そこには貧しいながらも常のとほりの生活の圖があつた。

　祖母のお澤は杖とも柱とも類む總領の孫を、まだやつと十三やそこらの子供で、そんな遠方へ一人旅に出してやるまでには、隨分涙に濕る思ひをしたのであるが、今の自分達の、食ふや食はずの困苦な境涯を考へてみると、そんな引き分けのないことをいつては居られなかつた。東京へなり何處へなりいつて、丁稚奉公をしてゞもその日〳〵の饑へを無事に凌ぐことの出來る方が、まだしも可愛い孫にとつて幸福であると思つた。

　それでもいよ〳〵出で立つといふことになると、お澤は、鎭守樣の鄕社の守札を頂いて來て、それを單衣の襟に縫込んでやつたり、脚氣の呪にといつて軒の下の雨垂れの砂を紙に包んで持たしたりした。

　父の直道は、わづかの知邊が東京の日本橋に居て商賣をしてゐる者のあるところへあてゝ伜のことを賴むといふ手紙を持たした。夜汽車が涼しくつていゝであらうといつて、夜の汽車に乘らすことにした。

　直次は下水の水をひとゝほり野菜に注いでしまふと、足を洗つて、いよ〳〵出立ちの支度をした。支度といつても、ほんの小風呂敷一つを持つだけで、例の大阪の母から貰つた金の中參拾圓は父からもらつてゐるので、それを路銀にしかと肌に結附けた。そして近處隣りへも隱れるやうにして日の暮れ前にそつと笠置驛に向つて家を出ていつた。それを見送る父親も祖母のお澤にも斷腸の思ひであつた。子供であつても直次には一層重い責任を感じて家の方が何處までいつても振り返られた。昨日の朝早く大阪へ行くために笠置驛に出ていつた時と異ひ、今日は何だか脚がひどく重いやうな氣がして爲樣がない。こんなことなら、いつそ東京へ行かしてくれといはなかつたらよかつたと思つたりしたが、まさか後へ引返へしてしまふことも出來なかつた。そして緩々歩いてゐる間に、たうとう豫定の汽車に乘りおくれてしまつた。二時間ばかりその次の汽車を待つた。が名古屋行きのその汽車がステーションのフオームに入つて來て、停車した時にも、一旦挫けた心には、それにも乘る勇氣がなかつた。

九

　さうしてステーションにまご〳〵してゐる間に日はとつぷりと暮れてしまつた。直次はどういふものか、此のまゝ汽車に乘つて東京へ行つてしまふ氣がしなかつた。あれほど自分で發意して父の承諾を得ながら何故にかう氣が進まなくなつたのであらうと自分で怪みながら、どうしても家のことが氣になつて爲方がなかつた。で、汽車に乘るのは必ずしも今日に限つたことではないので、彼は一遍後がへりして見ることにした。それから又山際の夜道をとぼ〳〵と村の方に戻つて來た。自分の家の邊まで歸つて來た時には夜もゝう九時前後であつたが、折柄丁度暗夜であつたので、門先の玉蜀黍の小蔭に潛んで、胸を躍らせながら家の中の樣子をそうつと窺いてみると、家内は平常と別に變つたこともない。まだ皆な寢ないで起きてゐるらしい。黑光りのする大黑柱の傍には口の長い小燈が黑い油煙を立てゝ、あたりに鈍い光をさしてゐる。白い蚊いぶしの火鉢もいつものやうに緣側に置いてあつて、白い煙が軒の端に立ち澱んでゐる。父は每時のとほりにその傍に默然として坐込んでゐるのが見える。千代松と琴子も、直次が居なくなつても別に物足りなさゝうな樣子もなく、祖母と一緒に座敷の方で遊んでゐる。彼は自家のことを心にかけて後戻りをして來たのが、吾れながら氣はづかしいやう

にも思はれた。

といつて、これから又笠置のステーションまでとつて返へすのも大儀で、彼はそのまゝ到頭徹宵家のまはりを蚊に食はれながらうろついて夜を明かした。やがて東が白みかゝつて來たので、いつまでもかうしては居られぬので不眠と疲勞とに鉛のやうに重い脚を引摺りながら、何處をどう歩いてゐるといふ當てもなく、自然と足は、笹川といふ小流れの土手の方に向つた。そこには直次が丹精して作つてゐた六反の田があつた。先祖の代から自分の家の所有であつたのが、父の借金の代償に谷澤萬兵衛に取られたのを、小作を作らしてもらつてゐたのであつた。それを又年貢米を納めぬといふのを口術にして青田のまゝ取り上げられてしまつたのであつた。つい此の間まで直次はその田へ入つてゐたのだが、もう今はその中へ足を踏入れることも出來ないことになつてしまつたのである。彼は朝出の者に見留められて怪まれてはならぬと思つて川の縁の柳の蔭に腰を下ろした。そして露のかゝつてゐない夏草の上に疲れた體を横へて、そのまゝ吾れを忘れて少時うと／＼と微睡んだ。が、夢は現との間を彷徨して、心は絶えず何ものかに追ひまはされてゐた。彼は彦三郎がそこへきつとやつて來るやうな氣がしてゐた。彦三郎は毎日朝早くそこらの田を見まはりに來るのであつた。直次は又、彦三郎に見附けられはせぬかと、始終不安に驅られながら、早く他へ立ち去らねばならぬ思とひつゝも身體は綿のやうに疲れ脚は錘を附けたやうに重いので、恰ど夢に馬か牛に追驅けられて遁ることもならずに踠いてゐる時のやうな氣持ちに惱まされてゐた。今まで薄暗い朝霧の中に鎖されてゐた鷲峰山の頂に微かな銅色の太陽が映りそめると、東明の色は刻々に一面に廣がつていつた。そこへ、

「おい！　こら直次さん。」と、頭の上で出しぬけに呼びかけたものがあつたので、彼ははじめて性根を入れられたものゝやうに、はつと眼を見開いて頭を持ち上げた。

……　……

親の側を離れて自活をしてゐる彦三郎は、どうかして、たまには寢過ぎることもあるが、大抵朝は暗いうちに起きた。殊に夏期は朝早く起ると氣持ちが好いので、近處の鷄の鳴くのを聞くのを合圖にむくりと夜具を蹴つて起き出でた。

そして、昨夜仕掛けて置いた釜の下を焚き付けたり、味噌汁を煮たりして、朝飯の支度をしておくと、そのまゝ鍬を擔いで朝明けの野を見て廻はつた一面の青田には、稻といふ稻の葉尖に露の玉を綴つて、きら／＼と輝いてゐる。爽々した涼しい朝風が遠くから吹いて來た。彼は、昨夜一夜のうちに畦を破つた土龍の穴の始末をしたり、田の水加減をしたりして、快濶な氣持ちになつて家に戻り、それから朝飯を食べる

のであつた。

今朝もいつものとほりに野に出て先づ向田の方を笹川の縁を歩いて行くと、田毎に湛へた美しい水は、十分に發育した太い稻の株を浸しつゝ、靜かなせゝらぎの音を立てゝ次の田の落ち口の方へ流れおちてゆくのがさながら農夫の朝明けの悦びを唄うてゐるかのやうに耳に傳はつてくる。彼には今心を惱ます何物もなかつた。たゞ、今夜は正蓮寺村の青年團の集會のあることを思つてゐた。その集會で相談することは、今年は盆踊りをするか、しないかといふことであつた。青年團の中にはそれについて意見が二派に分れてゐた。尤も此の邊ては盆は一と月遲れになつてゐるので、その相談も延び延びになつてゐたが、もうお盆も迫まつて來たので、今夜は最後の決定をしなければならなかつた。青年團の多くは踊りをすることを贊成してゐた。彦三郎も贊成してゐた。が、同じ有力な幹事の中に一人の反對を唱へる者があつて、三四人の青年もそれに贊成してゐた。しかし今夜の集會では、どうしてもいづれか決定しなければならなかつたので、彼はその時いふべき自分の意見について今から心構へをしておかなければならぬと思つてゐた。

が、青田の畦から畦を、夜露に濡れそぼちた夏草を踏みしだき、大豆の葉を跨ぎながら野を見てまはつて行くうちに、そんなことはいつしか忘れてしまつた。そして一巡自分の小作してゐる田を見まはつて、笹川の土手へ出て來ると、そこの草原の上に直次の寢そべつてゐる姿を發見したのであつた。

「君、そんなとこに何してるのや？」

と、問ひかけた。尤も彦三郎は、大してそれを怪みはしなかつた。といふのは、直次が人眼を忍びながら、もう違うから、朝に夕に時々此處らあたりを彷徨いてゐるのを彼はよく知つてゐたのである。直次がつい此の頃まで、人手を借りながら丹精して小作してゐた六反田を谷澤の爲に取り上げられて、それに未練を殘してゐることを彦三郎はよく知つてゐた。

直次は、自分は今別に惡いことをしてゐる譯でもないが、先刻から夢うつゝに氣づかつてゐたとほり彦三郎に見附けられては、何もかも自分の心の奧底を見拔かれたやうに思はれるので、ひどく極まりが惡かつた。で、彼はたゞもぢ／＼して默つてゐると、

「直次さん、君の心持ちは僕にもよう分つてる。」と、太息を吐くやうにいつたがつゞけて

「君は此の間大阪にいて來たちうことやつたが、お母さん會へたかな？」

「えゝ會ひました。」

「ほて、都合よういたか。」

「えゝ。」

そんなことをいつてゐたが、彦三郎は、ふと、直次が何時になく頭髪を綺麗に刈つてゐるのを認めた。それはしかし大阪の母の心づけであらう思つた。が、それはそれでよいとして、こんな朝早いのに、いつもと違つて洋傘を持つて紺の風呂敷包を背負つてゐるのが不思議であつた。

「君は今朝自家からこゝへ出て來たのか。」

「えゝ：：いゝえ。」直次は爲方なく曖昧な返辭をした。

「どちらだ？：：又何處かへ行くのか大阪へ行くのか。」

「いや、僕は東京へ行くんです。」

「なんや、東京へ行く？：：本當か？」

「本當です。」

「お可笑しいなあ。：：そりや東京へ行くことも不思議はないといふたら不思議でもあるまいが、：：君、お父さんに默つて行くんやろ。」

「いゝえ、お父さんの許しを得て行くのどす。」

「はて！　不思議やなあ。」

彦三郎は、どうも腑に落ちかねて、頭をかたむけて、しばらく凝乎と考へてみた。が、直次が明確にさうだといつたところをみると、彦三郎は稍々その意を得たやうに思へぬでもなかつた。けれども、まだ何かしら、もつと複雑な理由が底に潜んでゐるやうに思はれるのであつた。

「けど、お祖母さんは？」

「後になつて僕の爲になることなら行てもえゝやろいはれました。」

「ふうん。」彦三郎は思案するやうに又息を洩らした。そして、ひとり語のやうに、

「一體どうせられるおつもりやろなあ。」とつぶやいた。

「それで何うやね、君い東京へ行くについてお父さんは家の事を何ともおいひやらなんだのか。」

「えゝ、別に家の事て何もおいひやしはしまへんけど、僕が、僕が留守になつたら、お父さんや他の者はどないおしやすつもりどすいふて訊いたら、お父さんは琴子を連れて遍路に出るいふてはりました。」

「なんや、遍路に?!」彦三郎は呆れたやうにいつた。「ほて、お祖母さんや千代松さんはどないするつもりやろ。」

直次は父から聞いたとほりに話した。

「ふむ、二人は多田の家へあづけといて、先生は琴子さんだけを連れて：：」

彦三郎は又ひとり語のやうにつぶやいたが、直道が神經痛に惱む脚を引擦つて白痴の琴子を連れて人の門の戸に立つて袖乞ひをしようとまで思ひ立つた奧底には何か異常な決心があるのが讀まれるやうな氣がした。彼は、その舊師の困窮を見てゐながら、自分の力一つにはどうすることも出來ないことをおもふと、居ても起つてもゐられないやうなもどかしさを感ずるばかりであつた。

「それにしても、あの脚なえの先生が、白痴の女の子を一人連れて急に四國遍路を思ひ立つといふのは合點がゆかない。杖柱と頼む直次を俄に東京に出してやるといふのも不思議である。毎時もそんな時には誰れよりも先きに自分に相談をしてくれる先生が、そんな大事を決行しようといふのに自分に前以つて一言相談をしない筈はないのである。どうも、直次のいふことが眞實とは思はれない。唯脚が不自由なばかりではない。身體全體がひどく衰弱してゐることが先生自身にも分らぬ筈もない。：：：彦三郎は恐ろしいものを想像に描いた。

「ほて、君は何時東京へ行くんか。」

「昨日どす。」

「昨日て：：？　昨日行くんやつたら、こゝに居ん筈やないか。」

「昨日自家を出たのです。」

「あゝさうか。ほて昨夜は何處に居たんや。」

直次は昨日の夕方笠置の停車場で汽車に乗り遲れたことから、又こゝまで舞ひ戻つて來て野宿をして一夜を明かしたことを彦三郎からひとつ〳〵根どひせられるまゝに話して聞かせた。

「そら家のことが心配になるのも無理のないこつちやが、お父さんお祖母さんも御承知で君を出してやられるのだし、たとひ君が居らんかて、後には村の人も居るし、僕も居る。村の者は皆谷澤のやうな人間ばかりでもないんぢやから。」

「えゝ、そらさうどすけど：：」と直次は氣のない返事をしてゐたが、「僕はもうこれきりお父さんにもお祖母さんにも會へんやうな氣がします。」

「そなことあるもんか。これから東京にいて出世しようといふくらゐの元氣のある者がそんな意苦地のないことではどもならへんやないか。」彦三郎は強ゐて直次に勇氣をつけるやうにいつたが、まだやつと十三やそこらの子供にしては直次も他の同じ年の子供に比べると三つか四つくらゐはませてゐるほど責任を知つてゐる少年であることを彦三郎は思ふと哀れであつた。それも和田の一家の不幸な境遇が自然にさうならしめたのであつた。

それに直次は、こんなことをいふと、古臭い迷信のやうであるが、實は此の間不思議な夢を見たのであつた。それは、父や祖母や千代松と琴子などが四つの青い火の玉になつて何處かへ飛んでゆくところを夢に見た。夢の中にもそれが、無上に悲しくなつて、胸が壓し潰されるやうな氣がして、苦しさのあまりに眼を覺まし、不思議に思つて、蚊帳の中に寢てゐる兩脇の父と祖母とをそうつと見ると、二人とも何事もな

く、前後を知らずに寝息を立てゝゐた。千代松も琴子も兩脚を投げ出して寝てゐた。彼はほつと安心して自分も寝入つたがこれから自分は、いよ〳〵遠くへ出て行くのだと、思ふと、忘れてゐたことが又不思議に氣になつた。彼はそのことは父にも母にも誰れにもいはなかつたことだけれど、彦三郎にそれを話した。

すると彦三郎は笑つて、

「阿呆らしい何やいな。君は年寄りのいふやうなことをいふてる。ほんなら君、金を拾ふた夢を見たからいふて、本當に金を拾ふかいな。そんな、夢を心配してたら、人間に生きて居られせんやないか。」彼は道理づくめに直次の心配を打ち消すやうにいつたが、その實自身にも、何か知ら、和田の一家の行末のことが、どうして氣に掛つてならなかつた。

それはまあそれとして、直次を此のまゝすぐに東京へ立たすことは出來ないと思つたので、それには、これも、日頃直道の一家のことを心配してゐる新田の家へ連れていつて相談するのが好いと思つた。そこで朝飯でも食べさせようと思つた。

「なあ直次さん、これから惣左衞門さんのとこにいて一遍相談してみよう、あそこやつたら禮三さんも好え人やし、皆な氣の揃ふてる家やし、何の遠慮も入らんよつて、あこの家で御飯の御馳走になつて、それから僕が笠置まで送つて、あげるさかい。」

彼はさういつて、躊躇する直次を促して其處を離れた。川の土橋を渡つて、露に濡れた田圃道を少し行くと、小廣い村道に出て、それから四五町も下の方へおりてゆくと新田の惣左衞門の家があつた。その時分もう日は大分東の山の端を離れて、西の彌山の中腹まで茜色に染めてゐた。

十

新田の惣左衞門のところでは、大して樂な百姓でもなかつたが、さうかといつて他人の小作ばかりしてゐる譯でもなかつた。あれでも瘦田と山畑とを、合せてそつちこつちに一町歩くらゐは、先祖代々手離さずに持つてゐた。人の物を作らない代りに格別人の手をも借らず家内中總出で年中野良に苦役をしてゐるのであつた。惣左衞門は六十を五つも六つも越した老人であつたが、村ではもう古老の一人であつた。若い者などを頭ごなしにする、聽かぬ氣の老人で、氣ばかりは何時までも元氣であつたが、持病の喘息があつて、それが年とともに募つて來たので、近頃は大分負けぬ氣も挫けてゐた。

惣左衞門の家では、ちやうど今一同朝飯を濟ましてこれから野へ出る者は支度して出て行かうとしてゐるところであつた。彦三郎は、自分よりは年はもう十七八も年長であつたが、息子の禮三とは、村のいろ〳〵な問題についても毎時意見を

同じくしてゐるので直次を伴つて行くと、その禮三に今直次と出會つたことから、和田の一家の近ごろの一伍一什のことを掻い摘んで話して聞かした。

父親の惣左衞門は近頃は喘息が一層ひどいので半病人のやうにして、もう長く野良へも出なかつたが、丁度一升桝の舊いのでこしらへた煙草盆を側に引寄せて朝涼の緣端に出て趺坐をかいて煙草を吸つてゐるところであつた。病人ではあり、もう老人でもあるし、それに昔氣質の負けぬ氣で、何にでも若い者のいつたり爲たりすることを默つて居られない性分なので、そんなことが一層病氣に障るところから、家の者はなるたけこの爺には、世間の事や、自家のことでも耳に入れないで濟むことなら聞かさないことにしてゐるのであつた。

ところが、そんな朝つぱらから何事かありさうに二人がやつて來たので惣左衞門にも隱してゐることが出來なかつた。惣左衞門は、和田の先生の家で、谷澤萬兵衞から小作の田地を取り上げられたことを、今はじめて耳にしたのであつた。

「何やいな。そなことがあるのを、お前達はなんで此の俺にいふて聞かさなんだ。」彼は、さうなくてさへ筋張つて顏を一層むつかしく顰めて禮三と彦三郎とに向つて先づ腹を立てた。

「そなことがあるちうことを俺は今まで一寸も知らなんだ。彦三さんお前もよう知つたるやろが、そなことがあると、この俺の責任が立たんことになる。いつぞや小作組合に此の村でも入るか入らんかいふ相談のあつた時、反對したのは俺であつた。俺はその時、此の村にはそな喧嘩の下ごしらへのやうなことはせえでもえゝといふて反對をしたのぢや。それに何や、和田の小作の谷澤が取上げたのを、村の者が皆なで默つて見てるちうことがあるもんか。」彼は一人で意切つた。

一昨年頃のことであつた。方々の村々で小作人の組合が出來るから、此の村でも加入しないかといふ勸誘のあつた時、惣左衞門は、和束の村は、往昔から東京の禁裏の御料地であつた、由緒のある神聖の土地であるから、そんな、地主と小作人とが互に爭ひ合ふやうな人聞きの惡いことを眞似をしてはならぬといつて、てんから受付けなかつたのであつた。その代りにもし地主の方で無法なことをいひ出した時には、この惣左衞門が承知をせんと公言を吐いて加入をしなかつたのであつた。

「そやから、お前達ばかりに任して置いたらどもならんといふのや。……何や、お遍路に出て行くちうたところで、……本間いうたら乞食やないか。昔から此の村に乞食の出よつたためしのないこつちや。今でこそでなうても往昔からの和東の村は禁裏御領で、直々に京の禁裏樣へさいて年貢を納め

よつたものや。俺等も若い時には總代に加はゝて京まで年貢米を獻納しにいたこともあつた。和束の村の文字の由來を考へてもそれが分る。和は和合や束は束ねるちうて、村中が共共に助け合ふ和すやうにといふて、昔時から村の名が始まつたのや。それに何ぢやい。今、村から乞食になつて出ようといふ者があるのに、お前達は知つて知らん顏して濟まさうちうのか。」

老人は、他の者には碌に口も利かせず一人で意切つた。伜の禮三は、それでも父親を宥めるやうに顏を柔げて、

「お祖父さんまあ、お前、そないに此處で腹を立てゝゐたかて爲方おへん。彦三さんかて、それを一心に心配したればこそ、こして直次さんを連れて來たんやないか。」

さういはれて惣左衞門は、少時氣嫌　惡い顏をしてじつと默り込んでゐたが、やがて發作的に病軀を動かして緣先ににじり出た。それを見た禮三は、

「お祖父さん、どないするのや。」と心配顏に訊ねた。

「どな、するもあらへんがな。これから谷澤まで往て來る。」

「谷澤まで往てくるちうたて、おぢいさんその身體で往きよつたら、又病氣が重もなりますせ。」

「何にいふてる。」惣左衞門は禮三を尻目にかけながら、

「これ、嫂、」と、門先の井戸端で子供を背中に結ひ付けて洗濯をしてゐた禮三の妻のお節に聲をかけた。お節は振顧つた舅のむつかしさうな顏をしてゐるのをちらりと見ながら、默つて前垂れで濡れた手を拭いてゐた。

「草履や。」

「あ、草履どすか。」といつて、お節は入口の壁の際にいくつも立てかけてある草履の中から　新しさうなのを選んで緣先に持つて來て揃へた。

「お舅さんどつちへどす？」

「俺はな、これから一寸谷澤までいて來るよつて。」といふうちに草履の上に下りて立つた。

「そんなら着物など着換へていておくんはれな。」嫁のお節はさういつて、とかくする間に、一氣に逸つた舅の心持ちを落着けさせようとも思つたが、惣左衞門は、古ぼけた給衣の寢卷を着けた自分の身裝を省みて、「なんのこのなりで結構や。」といつて、出て行かうとして二た足三足歩くと、すぐ軒下の雨垂れに洗ひ出された小石に躓いて危く轉びさうになつた。

「おう危な。」と禮三とお節と彦三郎とは三人一度に驅け寄つて老爺を抱き留めた。

「お祖父さん、そんなことしたら、又身體に良うないよつて、まあ、心を靜めてからでも、その話は出來ますがな。」

と、禮三は、父親の氣嫌に逆らはぬやうに宥めたが、惣左衞門の癇癪はそのために一層昂まるばかりであつた。

「お構ひなさるまい。」と大聲に怒鳴り付けて、伜夫婦が、左

右から袖を執つた手をやけに振ひ拂つて急いで行きかけた。一同は呆ッ氣にとられて見てゐた。

するると井戸の流し尻の石菖の繁つた小蔭で先刻から草刈り鎌を研いでゐた。禮三の娘の久枝は、やつと鎌を研いでしまつたところで、祖父が血相を變へて何處かへ出掛けやうとしてゐるのを見て、傍に驅け寄り、

「おぢいさん、どこへ行きなはるのや。」と呼び留めた。

誰れよりも可愛い孫娘の久枝に呼び掛けられたので惣左衞門は流石に一寸顏を和げながら、

「おゝ、久枝か。わしはこれから一寸谷澤までいてくる。」

すると久枝は何と思つたか、

「お祖父さん谷澤やつたらわて行て來ます。」と眞面目な顏をしていつた。

「阿呆らしい。お前で足せるくらゐな用事やつたら、なにも俺が病を推して行きはせん。そこ放してくれ。」

惣左衞門は孫娘のいふことなど、てんで取上げようとはしなかつたが、それと同じく久枝はどうしても捉つた祖父の袖を放さなかつた。……作者は、次のやうなことを註していふのは、甚だ下手な方法であるが、今頃の批評家は、少しく變つたことを書くと、すぐ自分達の淺薄な常識から、あまり芝居じみてゐるとか、作爲したことだとか、一概にいつてしまふ惡い癖があるから、一寸こゝで底を割つて置く。久枝といふ娘は、後に、一家の經濟を救ふために、自から進んで東京の洲崎に女郎に身を賣つた女である。……

「お祖父さんが、いかはつて事の濟む用やつたら、わてにかて用事のとほらんちうことおますまい。わてに行かしておくれやす。」

「お前、そなこといふて、わしが谷澤へ行く用事が、何やちうことを知つてるか。」

「知つてます。……和田の先生のとこの小作の話どすやろ。」

「うん、さうや。お前にその話が出來るか。」

久枝は少しく考へてゐたが、

「よろしうおま。必ず足して來ます。」

「ほんなら、お前いて來るか。けど、お前こそその身裝ではいかんよつて、着物でも着更へていけ。」

と、いつたが、久枝は一寸自分の樣子を振顧つてみたけれど、

「このなりで構ひまへん。」と、いつて、そのまゝ急いで出ていつた。彼女はその朝も、いつものとほり朝飯前に畦草を刈つて一と仕事して戻つて、これから又野良へ出ようとしてゐたところであつた。高く裾を端折つた下には、赤い色の入つたメンネルの腰卷も、紺の脚絆も水から上がつたやうに、すつかり草の露に濡れて、そこら中に青い草の千切れたのがくつ付いてゐた。彼女は歩き〳〵襷だけをはづした。

縁先きでそれを見てゐた父親や母親をはじめ彦三郎等もただ呆ッ氣に取られて、それを引留める間もなかつた。

彼女の手には研いだまゝの利鎌が握られてゐた。けれどもそれは何を意味することでもなかつた。彼女自身はもゝとよりそんな考はなかつた。又他の者も、それが何かを意味する爲にそんなものを持つたまゝ出ていつたものだと思はなかつたから、格別それを注意して呼び留めもしなかつた。

十一

久枝の家から谷澤の屋敷までは、ものゝ五六町くらゐもなかつた。久枝は野良扮裝のまゝ、谷澤の、嚴めしい武家づくりの門を入つていくと、もう作男だの婢衆など門で二三人何かしてゐたが、氣性ものゝ久枝は、そこにゐた作男の一人に向つて、

「ごめんやす。えらい朝早うから、こんな身裝で上りまして濟まんことでござりますが、旦那さんはもうおつ起おしやしてござりますでつしやろか。」

と、若い娘ながら、氣を附けて鄭寧な言葉でさういふと、作男は、きよとんとした顔をして、久枝の樣子を、頭の先きから尻切れ草履を穿いた足の尖まで見てゐたが、無論それが何處の者かといふことを知らぬこともなかつたが、といつて不斷から熟く知つてゐるといふほどでもなかつた。作男は、やがて、

「旦那はもう起きてはります。」

「さうだつか。ほんなら、えらい憚りだすけど、ちよつと下の惣左衞門のとこの娘の久枝が、旦那さんにお目にかゝりたいいふて門の中まで來てゐますいふておくれやす。」

作男はそれを聞いて、あちらにゐた婢衆にそれを傳へると婢衆は、そのまゝ默つて家の内に入つていつた。

すると間もなく谷澤の主人の萬兵衞が中立關の式臺の處に立ち表はれた。彼は年の頃もう六十に近い、野卑に肥滿した老爺であつた。そこへ出てみると、惣左衞門の處の孫娘の久枝が朝つぱら、野良からすぐ上がつて來たといふ姿で來てゐるので、吃驚したが、女を見ると眼のない狒々爺兒の萬兵衞は久枝の若い娘姿を一目見るとすぐ眼尻に皺を寄せて、相恰を崩した。

久枝はもう十九か廿であつた。番茶も出花といふ譬のとほり毎日野良仕事をしてゐる娘にしては、美目形も優れた方で白い手拭を姐さんかつぎにした上に檜笠で深く顔を隱し、赤い紐など附けた、手甲や脚絆扮裝で、きりゝと裾を端折つて赤の交つた腰卷を膝のうへまで現はしてゐる鄙めた風俗は、若い男や色好きな爺兒の眼を惹くのであつた。

「おう、これは久枝さん。朝から、とうむない御精が出ますなあ。あんたが自家に來とおくんなはるのは、前代未聞ちうてもよいこつちや。何ぞ急な御用事どすかいな。」

久枝は又鄭寧な言葉になつて、

「朝早うからどうぞ御免やしとくれやす。私少しあんたさんにお願ひいたしたいことがござりまして、上りましたんどす。他のことでもござりまへん。あの、和田の先生とこの小作の田を、返してあげておくれやすことにはいきまへんどつしやろか。あこのお家ではえらい困つて居られますので。」

彼女は、若い娘の一徳で、何の遠慮もなく率直にいつた。

萬兵衞は、もし祖父の惣左衞門が自分で六ケしい顔をして來るとか、又は他の者がその話を持込んで來たのであつたならば、多分容易に諾とはいはなかつたであらうが、年效ひもなく、かねてから久枝の娘姿には眼をつけてゐたところなので彼は心の中では、これは好い鳥が飛込んで來たといふやうな好い氣持ちで彼女のいふことを聞いてゐたが、

「えゝ、……あこの家のことでは、本間に私の方かて困つてゐますのや。年貢米かて、もう三年も持つて來よらんのやさかい、私の方かて、さう〳〵好い顔もして居られしまへんがな。」

「まあ、左樣か。三年も持つて來やはりませんのどすか。」久枝もちよつと呆れた顔をした。

「それも無理はおまへんは。先生は病氣やし、働く者といふたかて、やつと十三になる子供が一人で、一體どないなります。……そやよつて、私の處では、三年の間年貢米は貰はいでもよろしいから、これから先き、和田さんとこへ田地を預けて置いたら、大事な六反の田が荒れ地になつてしまひよる。」

「おほきにさうどすなあ。さうどすけど、直次さんが熱心におしやすよつて、今年もあそこの稻はよう出來て居りますで。」

「なんぼ、よう出來てゐたかて、あきまへん。年貢米を一合も持つて來よらんのでは爲方がおへんがな。」

久枝はそれから、伜の直次が今朝、朝つぱらから彦三郎に伴はれて來たことの一伍一什のことを、ざつと物語つて、せめて今年の收穫までは今までのとほりにしてもらひたいと訴えた。

もとより利慾にかけては少しの容赦もない萬兵衞であるけれど、その話は、久枝が最初切り出した時から、腹の中では承諾を與へるつもりでゐるのであつた。たゞ彼には、とんでもない條件があつた。それは、和田の話を聽いてやる代りにその交換條件として久枝の肉體を歡樂したいことであつた。

「ほんならよろしい、……他ならぬ久枝さんがそのやうにいふてのお頼みやさかい、今年の秋だけはそのまゝにして置きまよう。その代り私の方でも、あんたに頼みがおす。私のいふことを、あんた聽いておくれやすか。」萬兵衞は、しまひの方を何か意味ありさうにいつて、打解けた風をした。

「さうどすか。さうして貰へましたら、和田さんで、どないお悦びやすか知れまへん。」といつて、久枝は何度も頭を下げた。

「そやけど、久枝さん、あんたの方でも私のいふことを聽いてくれんことには、和田の田地のことも承知出來まへんで。」

久枝は一寸萬兵衛の顏を見直した。

「それは何のことでござりまよう？」

「何のことかて、今こゝではいへんがな。……そのうち好い機に又話します。あんた、きつと私の頼みを聽いておくれやすろな。」

「そりや、和田さんとこのことを聽いていたゞきましたんやよつてわたしに出來ることなら、何なりとも聽きます。」

「ほんまに私のいふことを聽いておくれやすか。」

久枝は、何をいふのやらと思つたが、

「何でも聽きます。」話は戲談のやうになつてしまつた。

久枝は間もなく戻つて來た。

和田の小作の田地の一件も、それで一と先づ落着して、直次はそれから彦三郎に伴はれて自分の家に引返して來た。それから三四日して彼は今度は安心して、東京に向つて旅立つた。

十二

その翌々日の晩であつた。上の山際の正蓮寺では、青年團の集會があつて、踊盆をするかせぬかといふことについて、夜を更して議論を戰はしてゐた。いつまで銘々の意見を吐いても結局相談は纏まらなかつたが、付の青年は、そんなことして多勢で夜を更かすといふことに、既に興味を持つてゐたのであつた。

と、夜の一時をもう過ぎてゐる時分であつたらうか、村の方にあたつて、

「火事だア　火事だア」と、恐怖に充ちた聲が續けさまに、靜かな夜の暗の底から聞えて來た。

村の青年は、殆ど全部正蓮寺の集會場に集つてゐた。そして皆な自分の意見を固執して、大聲で議論をしてゐたので、そんなことのあるのを誰れも氣が附かなかつた。そこへお住寺が奥の方から聲を掛けて、「火事やいふてるがな。」と知らせた。

「なに火事や！」そこにゐた青年共は一度にがばと坐を起ち上つた。そして緣側に出て見ると、村の方よりは大分高みになつてゐる寺の庭から火事は一眼に見渡された。今丁度火の手は上つてゐる最中で、暗い夜の空は眞赤に照らされて、地上にある物は、遠くの青田の稻の葉までも數へられるやうに明るい。

それと見ると、二十人ばかりの青年は算を亂して互に先を

爭うて他人の履き物でも何でも構はず足に引掛けて飛んでいつた。

彦三郎は、緣側から一と目火事の見當を附けた時から、もう何かしら、はつと胸を打つたものがあつた。皆な「何處や、何處や。」と口々に、眞赤に照らし出されてゐる村の人家の立つてゐるところを物色したが、誰れの見るところも和田直道の家か、さうでなくともその附近に相違ないと思つた。とにかく彦三郎は他の者等の眞先きにたつて一散に寺から駈け下りて來た。だん／＼火元に近づくに連れて、直道の家であることがはつきりと認められた。

建物は、古い母家の平家と納屋と二間に三間の、小さい草葺きの土藏が立ち腐れてゐた、その三棟であつたが、この頃の炎天つゞきに乾きゝつてゐたところへ、折柄火の手の廻つた刻限が丁度人の寢入り端であつたので、近隣の者がそれと氣のついた時分には、もう手の附けやうのないまでに全部火炎に包まれてゐた。

彦三郎等は、いきなり火の見櫓の下の喞筒庫に驅けつけて行くと、その時はもう二臺のポンプは火事場にいつて活動してゐたが、何にしても氣の附いたのが遲かつたので、どうしやうもなかつた。

幸に類燒もなく、そこだけで鎭火するにはしたが、燃えてゐる最中には火事に心を奪られて誰れも氣の附く者はなかつたが、段々騷ぎが靜まつて來るに從つて、それにしても和田の家族の者達の遁げ場が何處にあるか分らないのが不思議になつて來た。そこら中の隣家といつても、家は散々にあるので、大抵隣家へ避難するとすれば、行つてゐる先きは知れてゐるのだが、何處にも來てゐないので、倍々不思議は深くなつた。そして一同の胸には只ならぬ不安が共通に湧いて來た。就中事情に通じてゐる彦三郎は、この間から聞いてゐた四國遍路といふことをも思ひ合せて、これは最も忌むべき兇事が焰の下に伏在してゐるのではあるまいかと思つた。恐怖と悽慘と不氣味と同情と、いろんな氣持ちの混合した心理狀態になつて、村の者は、急いでその謎を解くべく、何よりも先きに火燄を消滅することに一生懸命努めた。ポンプは更に勢ひを增して水を奔注した。さうするうちに夏の夜は早くも東の方から白み渡つて來た。が、ぶすり／＼と餘燼から立ち騰るい辛つぼい煙の臭にまじつて、何ともいへない、鯨でも燒いてゐるやうな、厭な臭氣が人々の鼻を突いて來た。薄ら冷いやうな朝明けの風が、思ひなしにか、無常の風のやうに慄然と襟頸に觸れた。眞黑になつて燒け殘つたうつ梁だの瓦の碎片などを唐鍬で掘り返してゆくと、半燒に焦げ爛れた無慘な四つの屍が枕を並べて發見された。そこは座敷のあつたところで、兩脇に直道の死體とお澤の死體とがあつて、中に二つの小さい死骸があつた。その狀態から考へても覺悟の自

殺と思はれた。尙ほ、すつかり夜が明けてしまつてから、それが自殺に疑ひないと確證せられたことは、すぐ傍に竹藪があつて、その藪はずつと遠くまで續いてゐたが、二三町行つた處の竹藪の蔭に清水の湧く處があつて、その附近に在る三四軒の家でそれを飲料水に用ゐるのであつた。そこへ朝の水を汲みにいつた近所の女房が、清水の湧いてゐる、すぐ頭の上の竹に小さい風呂敷包みを結び附けてあるのを發見した。不思議に思つてその包みを解いてみると、中に、村人に宛てた直道の書き置きがあつた。それで老母のお澤まで同意の覺悟の自殺であつたといふことが判明した。是に於て村人の同情は沛然として雨の如く降り注がれた。村は鼎の湧いたごとく煮えくり返つた。

彥三郎などは大きな聲を揚げて泣いた。彼や禮三等には、それで、此の間からの事がすつかり讀めた。四國遍路など、とても不可能のことであると思つてゐたが、それはたゞ、直次を騙して遠くへ出して遣る爲の言ひ前であつたのだ。

「先生も直次さんだけは殺したうなかつたのや。」

村の者は口を揃へて、直道の心の內を推量して、とり〴〵の噂をした。老いて、慘たらしい死にやうをした祖母のお澤に對しては、又同じやうに年老いた者達が袖を濡らした。

とり分けて若い血を沸かして、舊師の慘死を悲み且つ憤つたのは、いふまでもなく彥三郎であつた。火事場の慘憺たる光景は、彥三郎をはじめ、そこに居つた若い者達をして發作的に狂亂の狀態に導いたのである。

「こら、皆な來てくれ、先生の仇討をせい。」

大鉈を手にした彥三郎は、ポンプの前に仁王立ちになつて號令するやうに叫んだ。他の者も、わあッと鬨の聲を揚げてそれに應じた。二臺のポンプに群集した二三十人の同勢は、「わッしよ〳〵。」と、ポンプを引いて谷澤の屋敷を目懸けて押寄せた。彥三郎は大鉈を揮つて眞先きに立つて進んだ。激昂の極に達した群集は、鯨波を揚げて谷澤の門の中に頽崩れ込んだ。

その時、萬兵衞の方では、もう火事場の慘事が夜の明けぬうちから幾度となく注進せられ、不穩な形勢が次第に募つて來たことを逸早く知らして來る者もあつて、家內中の者は恟々としてゐたが、萬兵衞は今度のことに限らず、かねて自分は村中の者から憎まれてゐることを知つてゐるので、まさかの時の用意をして置くことを忘れなかつた。家の中には、疊を一枚捲くるとすぐ入れるやうな窖を設備してあつたり、壁と壁との間に誰れにも氣づかぬやうな裝置をした室があつたりした。

激昂した群集がポンプを引いて押寄せて來たといふ知らせがあると、萬兵衞は忽ち風を喰つて、廣い邸門の何處かに身を隱してしまつた。彥三郎は大鉈を揮つて土足のまゝ座敷に

驅上り、間每々々を探して廻はつたが、主人の萬兵衞の影も形も見えぬばかりでなく、多勢使つて居る奉公人なども、皆な何處かへ逃げ出して影を潛めてしまつた。

彥三郎を頭に、座敷へ躍り込んだ二三人の若者は手持不沙汰の態であつたが、それでは腹の蟲が納まらぬので手々に携へてゐた得物を以つて、そこら中の襖だの、戶障子だの、柱などを手あたり放題打ち壞したりした。散々に暴れ狂つてゐるところへ、萬兵衞の總領息子で幾太郎といふ廿五六になる若者が、今まで何處に居つたか、ひよつくり庭の方から現はれて來た。彼は、そんなに家の中を土足で滅茶々々に叩き壞されても、敢へて制止しようともせず、親父の萬兵衞は村の者に憎まれてゐるかも知れぬが、自分は父のやうなことをしてゐないから、憎まれたり怨まれたりする道理はないといつたやうな、自信のある態度で、そこに現はれて緣の方に近づいて來た。

それを見た彥三郎は矢庭に彼の方に驅け寄つて、大鉈を揮り上げて掛つていつた。あはやその手が下に打ちおろされると、幾太郎の頭は眞二つになるところであつた。すると、その時早くも二人の間につと割つていつて身を投げ倒してそれを遮ぎる者があつた。それは例の惣左衞門の久枝であつた。

先程火事場で不穩な氣配が見えた時、彥三郎等の激昂があんまり凄しいので、惣左衞門爺を呼んで來て、その連中を鎭めようとして迎へをやると、惣左爺は久枝と一緖に向うから出て來るところであつたが、その時彥三郎等はもう谷澤へ押掛けて來てゐた。男まさりの久枝は、その後を追驅けてそこへ來てみると、丁度、仁王の如く荒れ狂うてゐる彥三郎が今しも大鉈を揮り翳して打ち下ろさうとしてゐるところであつたので、彼女はまるで飛鳥の如く二人の間に飛び込んで來たのであつた。彥三郎は大鉈を揮り翳したまゝ、久枝が身を投げ出して倒れ込んで來たのを見ると、揮り上げることは揮り上げた鉈であるが、そいつを勢込んでそのまゝ久枝の頭の上に打ち下ろすことも出來なかつた。

それを機會に、多勢の者が飛びかゝつていつて、彥三郎の手から大鉈をもぎ取つた。それで、やつと危いところを血を見ずして濟んだ。

そこへ、喘息の息を切らしながら、一と足遲れて驅け付けた惣左衞門老爺は顏中を筋にして、

「彥三ん、逸まつたことをして後悔するなえ。」と、怒鳴つた。

彥三郎は、仇討を仕損じたものゝやうに切齒扼腕の體で、棒立ちに突立つたまゝ、もう何にもいはなかつた。

「彥三ん、此處の主人に對していふことがあれば、又日を變へていふてえゝ時があるよつて、お前のやうな手荒いことをしよつたら、勝てるものでも此方がしまゐには、やつぱり負けんならん。そんな悔しいことはない。さあ、もう此處を引

揚げてくれんと、どもならん。……」惣左爺は多勢の者の方を振顧つて
「皆なもう去ぬんや〳〵。」と合圖をするやうに頭を振つてみせた。
大將の彦三郎が鎭まると他の者もそれにつれて溫順しくなつた。彦三郎はそれでも凱旋將軍の如くポンプと一緒に多勢に取卷かれて又谷澤の屋敷を引揚げて出て戻つて來た。

十三

萬兵衞の惡辣なることには誰れも齒切みをして居ない者はなかつたが、それにしても彦三郎が谷澤の家に暴れ込んで亂暴を働いたことは、刑事問題になることであつた。惣左老爺父子をはじめ、村の者はそれを心配した。惡辣な萬兵衞のことであるから、刑事問題にする日になれば彦三郎は警察へ拉れて行かれねばならなかつた。伜左老爺は伜の禮三等に意を含めて、改めて谷澤へ詫びを入れさした。
すると萬兵衞に代つてその妻君が應對した。一體萬兵衞は前にもいつたやうに木津から養子に來た者であつたが、妻君はそこの家附きであるのみならず、大變に譯の分つた好い婦人であつたので、詫びにいつた者等が、辭を低うして、
「ほんまに何といふてお詫び申してよろしいやら、若い者共が前後の考へもなしに致しましたことどすよつて、どうぞ勘辨していたゞきたうござりとます。」
といふと、妻君は、
「いえ〳〵、その御心配は入らんことどす。若い方達の赫ッとおなりやしたことも無理もござりまへんどす。それでも、まあほんまに好え具合どした。どなたさんにもお負傷がなうて濟んで。」
「さよでござりました。もし若旦那さんに、萬一の事でもござりましたら、彦三もこのまゝに村に置いとかれまへんのどすけど。……まだ先きのある若い者のことどすさかい。どうぞ繩附きにはさせたうござりませんよつて、實は一同村方でもそれを心配して居りまするので。」
「わたくしの方かて、表向きにしられましては、家の恥さらしやさかい、どなたさんにも負傷のなかつたのを幸ひに、この事は內證にして置きたいのでござりますさかい。」
「あゝ、左樣か。それを聽いたら、皆なも安心いたしますやろ。こちらさんで、そのとほり量見を廣うに持つておくれやすと、私達もえらい氣安う思ひますさかい、へえ〳〵。」といつて、禮三等は幾度も頭を下げて喜んだ。
谷澤の妻君の量見一つでその騷ぎの後始末は無事に收まつたが、それでも彦三郎が亂暴を働いたことについて、溫順しい村民に畏怖の念を起さしめた。勿論彼等が、谷澤萬兵衞の強慾なことや、惡辣なことを憎む感情は倍々募るばかりであ

つたが、一體が往昔から從順で卑屈な村民ばかりであるので、有力者の橫暴を、多少ぶつ〳〵いふ者があつても、それは皆な蔭で口をきいてゐるだけで、公然立つてその有力者に敵對行爲に、出る者などは一人もなかつたのだ。然るに彦三郎は、その手段が假ひ淺慮な直接行動であつたにしても、又その遣り方が一時の發作的行爲であつたにしても、村中の者が眼を聳てゝ遠慮してゐる谷澤の家へ暴れ込んだといふことは痛快であるにはちがひないが、そんな亂暴沙汰は、この溫和な村開闢以來の事であつた。村民は和田一家の慘事には涙を絞つたが、彦三郎の直接行動にも膽を潰したのであつた。
一方惣左老爺は彦三郎に說諭して、餘炎の冷めるまでは暫時の間顏を出さずに家の中に引込んでゐるやうにさせた。谷澤の方の氣持ちを和げるには、さういふやうにして彦三郎に遠慮をさせるのが最も得策であると考へたからである。
本人の彦三郎は併し、決して、あれくらゐのことに怯んではゐなかつた。半歲や一年暗い處へ入ることを恐れはしないから、萬兵衞に大鉈を喰はしてやらないのが殘念で堪らなかつた。勿論惣左老爺の一徹な正義觀には彦三郎も平素から尊敬を拂つてゐるので、この場合一も二もなく惣左老爺のいふなりになつてゐる氣であつたが、平常はただ蔭でばかり强さうなことや正義的なことを口にしてゐながら、一朝今度のやうなことに出會はすと、だれも彼れも後退りをして、勇躍して自分と行動を共にする者がないばかりか、一と騷ぎの濟んだ後は、皆な後悔して恐れ入つてゐるのが、言ひ甲斐なく、癪に障つて堪らなかつた。惣左老爺に向つて、むきになつていつた。
「わてえ一寸も惡いことをしたと思ふてゐへんよつて、そな小さうなつて、家の中に隱れてゐんかて宜しいやないか。」
すると惣左老爺は、澁面に一層六ケしい皺を寄せて、それを押被せた。
「いや、お前の心持ちは、俺かてよう分つてゐる。そやけどな、谷澤では何時でも警察へ訴へる氣でゐるんやさかい、この處で、お前が人の眼に掛るところへ出よつたら、警察の方かて、見て見ん振りも出來やへんがな。心は何であらうとも、お前が恐れ入つた體にして、長うとはいはんさかい、十日か半月何處へも顏を出さんと置いときや。そのうちに噂も遠退くさかい。……彦三さんかて、たとへ半月でも一ケ月でも警察へ連れてゆかれてしまひよつたら、これから先き若い體に傷が附きよるがな。俺のいふことを聽いて、こゝのところは、厭でもおうでも俺のいふとほりになつてなはれ。」
さういふのを聞くと、彦三郎も、萬兵衞に負傷でもさして監獄に入るなら埋め合せもつくが、傷を一つ付けることもしないで、自分の方だけ警察へ引張られるのも業腹であつた。當分惣左老爺のいふとほりに溫順しくして小さくなつてゐる

より他はないと思つた。それから一週間ばかりの間彼は爲方なく家の中にすつ込んでゐた。

　ところで、こゝに笑つて可いか、悲んでいゝか一つの矛盾は、倅の彦三郎が何處までも弱者に味方をしてゐるのと全く正反對に彼の父親の彦兵衛はまるで谷澤萬兵衛には惡いことをする手先きであつた。火事の騒ぎがあると、彦兵衛も不斷村民から憎みを買つてゐることを自分でもよく承知してゐるので、自分の方へもその飛沫が來るのを恐れて、此奴も逸早く、何處かへ身を隱してしまつた。そんな次第で、彦三郎とは全く敵同志のやうなものであつたから、彼が家の中に一人で閉ぢ籠つてゐて不自由をしてゐても、捻ぢ向いて見もしなかつた。勿論さうなると村の者は、嫌疑を恐れて公然と寄り附きもしなかつた。ところが又彦三郎には女で同情してゐる者があつた。それは例の美佐野であつた。美佐野は彦三郎に手傳つてもらつて百姓をしてはゐるが、志は村に居ることを好まなかつた。長く病氣に惱んでゐる夫の方さへ何とか形が附けば、大阪へでも神戸へでも出て行きたいのであつた。それくらゐであるから、他の男や女に比べて、何處か理想的のところがあつて、世間の俗論を排して自分の理想に邁往するだけの意地もあり、見識もあつた。彼女は、彦三郎が、和田の一家の慘狀に對する同情から義憤を發して、谷澤の屋敷にポンプを引いて暴れ込んだことに、感涙を流して共鳴したのであつた。さうして、彦三郎がその爲に今度は世間を憚つて家の中に引籠つてゐなければならぬ羽目になつたことについて、彼女は又義憤を感じたのであつた。彼女は人眼を避けつつ三度々々の食事をこしらへて彦三郎のところへ持ち運んだ。彼はそれによつて僅かに飢渇を凌ぐことを得てゐたが、さうしてゐる間に彼はもう、この村から出て行かうといふ腹を定めた。

「毎度濟まんこつとすなあ。そやけど、もう長いことお世話掛けしまへん。美佐野さん、私はもう此の村に居んことに、いよ〳〵決心しましたよつて。」

　美佐野はうなづいた。

「ほんとにその方がよろしいわ。わたしかて神戸には親類もありますし、舊い友達で病院に務めてゐる人がおすよつて、わたしも神戸にいて看護婦になりたい思ふてゐますのどすけど、夫のある身ではそないなこともでけしまへんし。」

　彼女は溢すやうにいつた。

　彦三郎は感慨に堪へぬやうな顔をして、

「私も和田の先生のことが久しい間氣に懸つて爲樣がありまへなんだけど、先生のお家が今度あんなことになりよりましたから、もう此の村にゐんけりやならんちうこともおへんさかい、大阪へ行かう思ふてます。」

「ほんまに。身上のない者が、この村にぐづ〳〵してよると、

皆な和田さんのやうになつてしまひますやろ。ほて、何どすやろか、直次さんは本間に東京に行かはつたんどつしやろか。」

「そりや行くにやいきましたやろ。」

「こちらの事を聞かはつたら、さぞまあ吃驚りしやはりますやろなあ。」

「私はあれからずつと外に出まへんよつて、どねえなつたか一向樣子も知りまへんけど、おほかた手紙で呼び返へすことにでもなりますやろ。」

「まあ〳〵可哀さうに、死なはつた人も人どすけど、後にたつた一人殘されはつた直次さんが可哀さうどすわ。」

「けど、先生も覺悟せられたのや、自分はあんなことをして死んでも直次さんだけは此の村に置きたうなかつたのどす。直次さんも今度は一遍戻つて來ますやろけど、いよ〳〵もう此の村には居はしまへんやろ。」

　こんな會話が彼等の間に時々繰返へされてゐた。そのうち村では、一と月遲れのお盆が來たので、村の者は一年に二度の節季のことに忙しかつた。彦三郎はそんなこんなの間に到頭村を出走した。その時錢は少しも持つてゐなかつたので、正蓮寺の和尚が大阪へ行くだけの當座の路銀を惠んでくれた。

十四

　彦三郎が村を出て大阪へ出て行くのは、まるで小川から大海へ泳ぎ出すやうなもので、大都會の中に隱れてゐると、彼の存在などは誰にも氣の附かぬ筈であるが、やつぱりさうでもなかつた。生まれた村に潜んで居ればこそ、谷澤萬兵衛をはじめその一味の者も、親は泣き寄りの譬へで、古くから代代居馴れた土地の者同志にそんな非道いことも仕向けぬが、大阪へ出て行つてしまへば、もう、そんな遠慮は少しもなかつた。萬兵衛は村の警察から手を廻はして大阪の警察へ彦三郎のことを通告した。すると大阪の警察では主義者でも入つて來たかの如く思ひ込んで、早速彦三郎の居處を突留めて拘留に處した。（完了）

　作者の斷わり――彦三郎は その後未決監を放免せられた。又、地主谷澤萬兵衛は、年効ひもなく、禮三の娘久枝を、ある夕方田圃の小蔭に誘ひ出して、和田に小作地を返してやつた、その交換條件として、かねての口約束を、今、こゝで果たせよと、挑むところを、かねて、萬兵衛の隙を附け狙うて、村の若者、仙太郎が、日本刀を拔いて背後より、袈裟斬りに切り附けた。萬兵衛は、そのまゝぱたりと倒れた。その深手に間もなく絶息した。

（大正十五年十月十八日書了新潮掲載）

仇なさけ

「……尤もそれには近頃また少し理由があるのです。矢張り女のことです」

さう言つて勝山は次のやうなことを話しました。

思ふことは十分の一も出てはゐませんが、貴君も讀んでくれたさうです。あの「疑惑」といふ小說にある通りのこともあり、私は東京には飽きが來るし何をせねばならぬといふ希望もなくなつて、私の主觀の眼には恰ど東京が沙漠か何ぞのやうに見えて來たものですから、暫らく變つた土地に旅行でもして見ようかといふ氣になつて、それが一昨年の秋の初めから京阪へ遊びに出かけました。言はゞ、まあ氣に入りさうな女を探しに行つたやうなものです。……妻があるとか、戀人があるとか、兎に角女を所有してゐる人達には、女を所有したいといふ希望以外にまだ他の希望が種々あるものですが、さて前に女があつてそれを無くしたとか、まだそれを所有しないとかいふ人々に取つては、どうかして女を所有しようといふのが男子の唯一の希望ぢやないかと思ふのです。斯ういふと、所謂豪傑肌の人達は哄然として一笑に附するかも知れませんが、それは併し皮の硬い觀察に過ぎないのです。

それで、遊女の誠と鬼瓦の笑つたのとはないものと、昔から相場が定まつてゐるけれど、私は、大阪で馴染んだ女にもやそんな僞りはないものと思ひ込んでゐました。

去年の十月の廿二日の日でした。私は九月の初めから滯留してゐた有馬の溫泉を引揚げて大阪に出てまゐりました。溫泉の町から三里ばかりは六甲山背面の山道を車に乘つて、阪鶴鐵道の生瀨といふ驛に降りて來ます。それから汽車で一時間足らずで直に大阪驛に着くのです。私はその車の上、汽車の中で、もう二十日餘りも逢はぬその遊女の顏を如何に思ひ焦れたでせう。

九月の末に四日ばかりその遊女は有馬に遊びに來てゐました。三晩泊つて、翌朝は早く一番の汽車で大阪へ歸るといふ夜、

「あなたと斯樣なことはもう一生ないわねえ」と申しました。私は變なことを言ふと思ひながら、

「今に一緒になつたら、始終斯ういふことはあるぢやないか」

と、私が許しさうにいひましたら、遊女は唯默つて微笑してゐました。或はその時分から他に心が動いてゐたのかも知れません。

有馬から鐵道に出るには途中の景色はないが、生瀨よりは三田驛の方が順路になつてゐます。遊女はもう宵の中に着物や千代田袋のやうなものを自分の枕頭に取揃へて、

「翌日の朝までつかないやうに斯うして置くんだ」

と、いつて疊んだ帶の上に緋縮緬のしごきを載せました。

私は、女と相談して店とお茶屋の女將とに松茸だの栗などを買つて來て女の枕頭に置いてやりました。

疲れてぐつすり一と寐入りすると、私は目敏くも昨夜宵の中から賴んで置いた車夫が、別莊の生垣の外から、端の間に寐てゐる女中に聲を掛けて起してゐるのを夢のやうに聞きました。

あッと思ひながら、

「おい！　おい！」

と、前後も知らずに熟睡したゐる遊女を搖り起しました。何といふ短い一と寐入りでしたらう。……さうすると遊女は、目を覺し〳〵俯伏に起き直つて、

「私は親に會へなくなつても、これがなければ」と、云つて、枕頭の女煙管を手を差伸して取り寄せ、二三服瞬く間に吸ひつゞけてゐました。

女中は、睡い顏をして靜かに襖を明けて、吾々を起しに來ました。

まだ九月の末でも、もう山の上の曉の風は冷く肌に浸みます。

「おゝ、寒い〳〵」慄へながら戾つて來た。

「寒いだらう。だから言はないこつちやない。老婆さんが云ふやうにあの褞袍を被つて停車場まで行くんだよ。此處で斯樣なだもの、三里の山道を車の上で朝風に吹き曝されて溜るものか。肌に着ける襦袢も、も一つ重ねてお出で。私のがあるから」

私は押入れの荷物の中から、此間西洋洗濯から屆けたばかりの、眞白い肌襦袢を取出しました。

「これ硬い。着ない」

女は、一寸手に取つたその襦袢を傍に投げた。

「馬鹿だねえ。少しくらゐ硬いたつて、着てゐれば直ぐ柔らかになる」

「大丈夫よ。あの褞袍を借りて行くから。……あなた汚れたものがあれば何でもお出しなさい。私持つて歸つて洗濯にやつて置くから」

そんなことを云ひ交はしながら遊女は支度を急いだ。手も

怠く一心に板のやうな太い帶を締めてゐる。私は夜具をはねた敷蒲團の上に坐つて、千代田袋を取つて開きながら、
「何にも忘れた物はないね？……これはあるの？」
其處にあつた自分の鼻紙を取つた。
「あゝ、鼻紙も少許入れて置いて頂戴」
「でもお前よく來てくれたねえ」
「……知らんわ！」
遊女は甘えるやうに云ひながら、漸と帶を締め了つた腰の周圍を、身體を捻ぢ曲げるやうにして見てゐた。
「さあ！　もうこれで可い」
と、窮屈さうに膝を突いて、大島紬の女持ちの煙草入れを帶の間に挾んで、その上を一つぽんと叩きながら
「あなた、その栗を忘れないやうに」
老婆と若い女中の見送るのを玄關で斷つて、遊女は自身、貸し褞袍を抱へ、老實さうな車屋の提燈の曉の暗に覺束ない足許を照らさせつゝ、危つかしい石段を踏んで、私達は、車の通ふ温泉町の入口まで降りて行つた。
「車屋頼むよ」
車夫はそれに返答をしながら、轅棒を擡げた。車輪はもう二つ三つ回轉つた。私は尚も後に蹤いて歩いた。
女は商賣人と見えぬやうに注意して、束髮に結ひ變へて來たその多い頭髮を、黎明の冷い風に吹かれながら、車の上から、
「あなたも、もう歸つてお休みなさい。寒いから」
まだほの暗い闇の中に眞白い頰を斜に向けていつた。
「あゝ、私も來月は早く大阪に歸るから、さうしたら、都合で一緒に東京に行かう」それを口早に繰返した。
車はもう橋の上に轟いた。
「左樣なら！」
女が最後の車の上で體を捻ぢ曲げるやうにして呼びかけたのが、薄暗の中に認められた。影は瞬く間に暗に消えて了つた。車は緩い勾配を一直線に下つて行つた。
私は、忽ち病に襲はれたやうに寂寞を感じた。悲しみに充ちて別莊の自分の部屋に戻つて來た。
八疊の室の眞中には藻拔の殼の寢床が二つ並んでゐるばかりだ。私は泣きたいやうな氣になりながら、詰まらなく、冷へ切つた寢床にまたもぐり込んだ。さうして頭からすつぽり蒲團を被りながら、海老のやうに身體を縮めて、
「あゝ、此處にせめて七八百圓の金がないかなあ。それだけあれば、後どうかして千圓にする。あの遊女が傍にゐなければ、もう生きる歡びはない！」
そんなことを取留めもなく空想してゐると、
「たうとう歸んなはつたなあ」

と、いひながら老婆は入つて來て、一つの寢床を情け容赦もなく、ばた〳〵形付け初めた。
「旦那はん、これからどつと寂しおまつせ。……まあ三日やなあ。三日くらゐは何となく寂しいもんや」
「そんなことを辨へてゐるくらゐならば、そんなに立ち早々、夜具をばた〳〵形付なくとも、此方が起るまで、せめてその儘にして置いてくれても可さゝうなものだ。氣の利かない田舍婆奴！」
と、私は今にも逆上げて來て泣きたいばかりに賴りないのと、焦れ〳〵するのを凝乎と堪へながら、默つて老婆のするのを一瞥してゐた。
八疊の間が、俄かにすうつと間の拔けたやうに廣くなつた。
「可愛や江口は……もう一里も行つてゐるだらう」
と、思ひながらまた自暴に蒲團を被つた。私はその時、謠曲の「斑女」の中の
「明けなんとして別れを催し、せめて閨もる月だにも、しばし枕に殘らずして、又獨寢になりぬるぞや」
と、いふ處を思ひ出して、夜具の中で身を千切られるやうであつた。……それが痴呆ですか。それを痴呆といふ人は、天性愚鈍な人です。
それからまた一と寢入りして、九時になつて起きたけれど唯つまらない氣が先に立つて、魂が何處かへ脱けて行つたやうで體に精がありません。昨日一昨日に引比べて、其日の寂しさといふものは無い。私は不味い御飯をお茶の力で咽喉に流し込むと、また寢床を拵らへて、その中へもぐり込みました。さうして夜は飮めもせぬのに酒を命じて、がぶ〳〵自暴酒を呷りました。さうすると、いやが上に感情が興奮して、熱い淚がほろ〳〵と兩方の頰に流れた。遂に神經が疲勞して私は其爲に遣る瀨ない夜を昏睡して明したのです。
一日二日さういふ狀態でゐましたが、三日めにはそんな事をしてゐては倍々身體が惡くなるばかりだと思ひましたから、一つ勇氣を起して運動の爲めに六甲山の頂上に登つて見ました。
「斑女」の中に斯ういふ文句があります。
「……夕暮の雲の旗手に物を思ひ、うはの空にあくがれ出て、身をいたづらになす事を、神や佛も憐みて……」
うはの空にあくがれいでゝ身をいたづらになす、といふのは私の場合がそれです。私はこの花子のやうに、戀ひ憧れてそれが爲に狂氣になるのも決して厭ひはしません。戀愛の至情の爲に狂氣になる「斑女」の中の花子や、それが爲に鱗の生えた蛇になる道成寺の清姫や、それが爲に生命にも功名にも換へ難い愛妻デスデモナを壓殺するオセロや、それが爲に公金の封を切つて繩目の耻を曝らす忠兵衛などは、人類の中の

天才です、藝術の化身です。
　私は、さういふ藝術の化身でなく、凡人でした。さうして東京から、非常に責任を負つて長編の小説を書かねばならぬ仕事を持つて來てゐましたから、さう遊女の事ばかり思ひ續けてゐて、身を徒らに持ち做してはその責任が果せないと思ひましたから、それで一つ六甲山に登つて、朗らかな秋晴の遠望を恣にし、衣を千仭の丘に吹拂はして、心機を一轉せしめやうと思つたのです。
　西北には遠く播但の山々が、脈々として起伏してゐるのが好く澄んだ十月初旬の空氣の中に薄紫色をして一望の間に見渡される。その山と山との間に開けた平地には、今しも匂ふばかりな稻が鮮明に黃熟してゐるのが遠く眺められました。
　頂上の茶店で一と休みして、また少許登ると、穩かなちぬの海は直ぐ眼の下に展つてゐる。暖かな秋の日の水蒸氣に海の面が煙つて恰も大きな古銅の鏡のやうに銀灰色に鈍く光つてゐる。私は頂上の突鼻の處に佇んで、懷しい大阪の方を眺めました。御影、住吉、さては葦屋の浦から西の宮と、海濱の町々が靜に斷續してゐるのが見えるけれど、大阪と思ふあたりは唯濁つた煤煙に隱れて、微かに高い煙突が數へられるばかりです。
「難波新地は彼方の方だらう。今時分江口はどうしてゐるだらう」
と、遊女の事を思ひつゞけてゐました。其處から住吉道といつて、まだ鐵道の出來ない時分神戸大阪の浴客が山籠で往還した山道があつて、私の立つてゐる直ぐ脚の下には、山腹を蜿ねつて一本の山道が白く隱見してゐるのです。私は此處まで來たついでに、そこを降りて行つて、阪神電車に飛び乘つて大阪に往つて來よう、江口に逢つて來ようかと、思ひましたけれど、責任のある仕事を控へてゐては、そんな無謀なことは出來ません。いや、その仕事さへ捗取れば後で何樣なに心伸び〳〵と江口と遊ぶことが出來るかも知れぬ。その大きな仕事をさへ片付ければ、江口を身受けすることも出來るのだ。お前は、その爲に今仕事を樂しんでゐるのぢやないか。と、私は自分で自分の身を抓り、自分から心を勵ましました。清い風は蕭々と山の上の尾花を吹き靡いて、私は高く天に登つてゐるやうな心地になりました。さうして私は矢張り女を思つてゐました。
　少し他の事になりますが、女と藝術と、いふことに就いて、斯ういふことがあります。――それは、私のまだ幼い時のことでした。田舍には屢くさういふ人間がありますが、故鄕の私の家へ、まだ父の生きてゐる頃、面白い世間師が度ゝ來てゐました。それは四國邊の者で、碁も初段くらゐは出來る。茶の湯生花もやる。淨瑠璃は特に上手で、父もそれが好きでしたから、來ると幾日でも逗留して甘い物を食べて、酒を飲

んで、一日田舍の旦那衆の遊び相手をしてゐました。子供の時分のことだから確かに記憶せぬが、一年に一度か二度は必ず來て、永く方々の家を泊り歩いて行つたやうです。すると或る年のこと、その男が若い女を女房にして連れて來ました。私はその時、子供心に大變に綺麗な姐さんだと思つて、その女が自家の座敷に坐つてゐるのを見ると、何だか吾が家までが今から説明すれば粹になつたやうに感じたのです。それは女淨瑠璃であつたか、それとも高松か丸龜あたりの藝者であつたか知れません。兎に角その男の淨瑠璃の三味線を彈きました。
　處が、私は、小供の耳に、その時かういふことを聞きました。
「此の間、何處其處へ行つて碁を遣つたが、彼男えらく弱わくなつてゐる。何度やつても負けた。あの女が氣に掛つて仕方がないので。あれが傍にぴたりと着いてゐないと負ける。……痴呆者が!!!」
　斯う、父と同じぐらゐの年配の人が申した。好きな女が傍に着いてゐれば、碁が強くなる。ゐなければ負けてばかしゐる。
　その後、その男は美しい女を連れて來た時を最後に、ぴたりと來なくなつて了ひました。父も死に、父の友達も死にましたから、丁度同じ年格好であつたその人間も最早この世にはゐますまい。けれども、その後私が段々成人して軈てその男の、その時分の年配に近くなつた今日、種々な人間の世の甘い辛いの味を嘗めた結果――好きな女が傍に着いてゐれば碁が強くなる。――この事ばかりは三十年の後の今日になつて、倍々私に深い興趣を催さしめるのです。
　また私は、故の名人圓朝の話を、たつた一度聽いたことがあります。それは、若い、江戸の踊りの師匠と若い浮世繪師とが互に兩方の藝に惚れ合つて思ひを焦してゐたのが、遂にその思ひが叶つて夫婦になり、一層藝が進んだといふのでした。
　戀愛は美しい感激です。――私は斯ういふことを思ひ耽りながら、遠く力及ばない大阪の空にあこがれてゐました。さうしてせん方なく、また山を降りました。
　それから二十日餘り過ぎて、漸く大阪に歸ることが出來たのです。緩い阪鶴鐵道の汽車を停車場ごとで、私は舌打ちをする思ひで池田、伊丹と、やがて大阪驛に着くと、江口への土産にと、山の町から買つて來た栗の籠を下げて改札口に出ると電車に乘るのも待遠く、直ぐ有り合ふ車に飛び乘つて、戀しい懷しい難波新地の一廓へと走らせました。
　十月末の大阪の夜の街は、もう袷衣着の肌にはうそ寒い秋風が浸みて、茶屋の灯懷しい情緒を唆るのでした。東京で知つた待合の女中が「遊ぶのは十月が一等好いわねえ」と、い

ひました――もどかしい人車はやがて燈の色明麗な南陽の街に入つて、中筋の、例のお茶屋の入口に、がたりと威勢よく轅棒を下しました。

「暮れ」までになつてゐる座敷を小早く貰つて、江口は早速來ました。

「隨分長かつたわねえ。どうしてゐて？」顏中笑ひに崩しながら、私の二つの袂を執りました。

そんな時に階下の長火鉢の向から主婦に何かいつて戯弄れながら、心も空に急いで段階を驅け上つて來る江口の笑ふ顏が今も眼に見えるやうです。夢によく、氣ばかり急いで足の思ふやうに早く運ばないといつた時のやうな形です、多い兩頰の鬢がふは〳〵と躍つて、拔衣紋に着た羽織が後に滑り落ちさうでした。

「今晩これから夜中遊びませう！」

「あゝ」

それから私達は長い秋の夜を、更けるのも忘れて無窮の樂欲に醉ひ疲れました。翌日は正午まで遊んでゐました。二人とも鮨が大好で、特に江口は

「私、種々な魚のよりか、たゞの海苔卷が好き」と云つて、屢く難波の壽し虎から取り寄せました。新澤庵の出る頃、香々の入つた海苔卷の味は、東京でも味はゝれない風味です。私達は、夜更けてから、新しく茶を煎れさして二人前も食べましたつけ。謠曲の江口の遊君も斯くやと思ふばかりに、私の江口も賤しくない物の食べ方を致しました。私は其點も好きでした。

「あなた方は二人とも東京の方だすよつて」と、いつて、後には氣を利かして、仲居がおしたぢを手鹽皿に入れて添へて來ました。

お午には天どんを食べて見ました。江口は

「私、おいしい天どんを食べて見たいわ」

と、いつてゐました。お茶屋の主人が東京の人間の嗜好を心得てゐて、何處かのが好いといつて、電話で註文してくれました。

「あんまり汁をぐちや〳〵多くしないで」

と、云つてゐるのが聞えました。程なくそれが來て、二人で食べました。

「やつぱり餘りおいしくないわねえ。……貴方これを上げませう」

江口はあなごを一片箸に挾んで私の舌上に載せました。それは甘くなかつたからちやない。毎時でも江口は早く腹に充滿て、私にくれました。私はそれが甘かつたのです。

店から正午迎へが來たので、正午後までもう三本附けて、何時までも置いときたい江口を返しました。私は少し睡て行くからとて、

「左樣なら！」

と、いつて、江口は襖の外からもう一度此方を見て、思ひを殘す言葉をいひ置いて去りました。

それが最後でした。江口に逢つたのは。

東京には一寸行つて來る。と、その時話して別れたのです。過日も申した通り、江口を身受けする金策をするには、どうしても東京でなくては都合が惡い。加之、大阪では居馴れぬ者には宿屋住ひが誠に勝手が惡いので、私は或は、そのまゝもう故郷の東京に尻を据ゑて、東京から時々難波新地へ通はうかとも思ひました。東京から難波新地へ百五十里の道程を急行列車で通ふ……それも遊女に惚れた者の天晴心意氣ぢやありませんか。

「でも今度大阪に戻つたら何處か島の內か、難波界隈に、清淨とした家の間を借りて、仕出屋から辨當を取らう」

「さうなさい。私遊びに行くわ。……虎どんに、貸す家を探さして置く」

そんなやうな事を言つてゐたので、東京から手紙を出した序に、一度その事をも訊ねてやると、それに對へてよこした返辭に、

ぜんぶんごめんくだされ度候。おい〳〵さむさにむかひ候。あなた樣には、なんのおかはりもこれなく候や。ちよつとおたづね申上候、わたくしも、べうきにてやすんでをりましたなれども、このせつはおひ〳〵よくあひなり、つとめをり候ゆえ、御安心下され度候。さてとや家の事おんたづねにあひなり、虎どんにたのみて、二かいのよろしいところをさがさしておきますゆゑ、左樣ごしようち下され度候。あなた樣には、いつ頃大阪へお歸りにあひなり候や。一日もはやくおかへり下さるやうお待ち申居り候。

十一月十六日　江口より

旦那さま

かういふ手紙です。で歸阪が都合あつて少し遲くなる。といふ手紙を添へて、私は二十二日の日に東京から、江口を呼びつけてゐたお茶屋の主婦にあてゝ、二人に、食べる物を鐵道院の便で送つてやりました。すると、折返へしに、廿五日の朝主婦から返辭があつて、江口は、私の送つた品物と手紙とが向へ着いた二十三日の日に、赤飯を配つて引き祝ひをして、私で、始終入つてゐたそのお茶屋へは顏をも見せず、前の晩にもう梅田の停車場から何處かへ行つてしまつた。と、知らせて來ました。それは過日も話した通りです。

私の失望と憤怒と怨恨とは今更ら申すも愚かです。加之、

それに類した私の多恨の經驗は、これまでも既に度々話したことがありますから、今復たそれを繰返へしますまい。唯、有馬の温泉に逗留してゐる時、遊女の立つた後の寂しかつた心持ちを味はつて下されば、永久に私を棄てゝ何處ともなく姿を隱したと初めて知つたその時の私の心持ちをもまた味はつて下さるでせう。

大阪のお茶屋の主婦から、その絶望的な悲報の屆いた廿五日の朝、私は、懇意な樂天家の友人と快濶な氣分で何か雜談を交へてゐました。その手紙を見ると私は急にそは〳〵して心落着かず、その友人の去るのを待つて、私は俄に支度を調へて足利へと立ちました。足利には江口の實姉がゐて、私はもうこれと江口のことで、數回書信の往復をしてゐたのです。その夜、足利の姉夫婦は私を歡待してくれました。そして始めて會つた姉に委しく妹の内情を聞くと、私に、何日大阪へ歸るかと訊ねてよこした手紙と同じ十六日の日附で、姉の處へは、今度都合あつて、廿二三日頃大阪を立ち退いて遠方に行く。行く前一度東京に行つて姉さまに逢ひたいが、思ふに任せぬ。勝山さまには、もし足利に訪ねて見たら、只、永い間厚いお世話になりました。何時までも忘れませぬ。と、お禮を申して下さい。遠方に行くといふことは默つておいて下さい。と、書いてゐました。

「どこへ行つたんだらう。……この春、新橋まで迎へに來てくれといふ電報を打つて置いて、來た時に迎へに行つて會つた時「何しに東京へ來た」と訊いたら『お客が外國に連れて行くといふから、その相談から袂別に逢ひに來た』と云つたから、私、「飛んでもない。そんな外國へなど行つてはいけない。もし外國なんかへ行くやうなことがあると、それこそもう姉妹の離別だ」と云つて、私、やかましくいつて止めたのです。自分でも始終氣がふら〳〵してゐて、心が一つも定まらないんです。外國へ行くなんかいつてゐるかと思ふと、今度は、私、何處か山の中のお寺に行つて尼さんにならうかしら。私のやうな者は嫁にはいけないし——さういつてゐるかと思ふと、東京に戻つて世帶を持たうかと云つて見たり、自分でも何うして可いか分らないんです」

姉のさういつて、眞心から妹の身の上を氣遣つてゐる色が私にも明歴と見えました。

「今ぢや三人の姉妹で足利の姉さんが一番氣樂なの。小供がないけれど。」

江口は、さういつてゐた。正月を近く控へてゐて、粉類から味噌や醬油や、鹽鮭だの、種々な荒物類が、小家ながら奥庭までぎつしり入つてゐて、土地柄とて絹絲なども取引してゐる。小金に不自由のなさゝうな、明るい電燈の下で、姉は長火鉢の向側に坐つて、亭主の吸つて立つた長煙管を取上げながら、四邊に氣を置き〳〵話した。

「私も裸體で此處の家へ嫁たのですし、私や彼女の親父といつたら、親類といふ親類中を泣かして、もう今ぢや誰一人相手にする者は無いといふやうな人間なものですから、あの子もやつぱり親父の爲に一生廢人にせられて了ひました。——母親はまだあの子の腹にゐた時分に、矢張り父親がいけない爲めに離縁になつて、生み落すと引取つて同じ村中へでしたが、里子に遣つてゐました。時々連れて來て見せてはゐましたが、……五つ六つの時分にやつぱり近い處に養女に貰はれて、其處ぢや仕合せだつたのですが、實家へ歸つて來てから、どれ何處にゐる。といつても、隱れて會はなかつたりして……やつぱり一旦里子にやつたりすると、何うも其處に妙な隔てが出來ていけないものです」

「えゝ。そんなことも種々彼女から聞きました。……私、さういふんです。お前は、話すことに嘘がないから、まさか車夫や屑屋の娘でもなさゝうだし、親類が皆な相應に遣つてゐるんなら、お前のやうな泥水に身を沈めてゐる者が一人でもあれば、親類中の顏汚しだから、一同して錢を出し合はしても、お前を清淨な身體にしさうなものだ……」

「えゝ。それです。……けれど、もう何處の親類でも散々父親の爲に泣かされた結果、彼様なことまでするやうになつたものですから」

姉と私との間に、江口の身の上話は取り留めもなく夜更けるまで續きました。そこへ義兄が外から歸つて來て話しは途切れた。

「もう十二時過ぎた。……また明日の話しにして、もう寢るとしませう」

亭主は店の小僧どもに戸締りを注意した。

亭主と少し離れて、並べて敷かれた寢床の中に、私は朝から遣る瀬なく思ひ疲れた身體を休めた。綿の柔かい夜具は、恰も江口の姉の歡待振りのやうに、親しく溫かであつた。私の脱ぎ棄てた羽織と着物とを疊んで、それから蒲團の肩先や裾のまはりをとん〳〵抑へ付けて、自分も亭主の彼方に設けた寢床に行つた。

頼りない江口の行く先きを、姉と私とは翌日も彼處此處と種々に想像し合ひました。田舍者の、所帶にかけて汚くこそして居れ、妹とは漸く三つ違ひの廿六の姉は、小さい口元から、小高い鼻の形、その多い黑い頭髮の生え際まで、餘りに酷く江口の面影に似通うてゐるので、大阪の土地で一と年餘り馴染んだ遊女の仇し情けを緣に訪ねて來たこの姉、江口と遠く離れてしまへば、自分とは何時の世にか逢ふことのあるべき。と、思へば、私は其處を容易く立ち去りかねて、思ひ病らひつゝ、折角來た序に、直ぐ近くにあつた古い足利學校と文庫とを、そこ〳〵に一覽して、黄色く散つて行く庭の銀杏を拂ふ風に袂を吹かれながら、寂しく葉の落ち盡した其處ら

の樹々や、江口の生れ故郷までは、此處からはまだ三里も山奥だといふ、その方角に越えて行く痩せた雜木山などを、何時までも眺め入つた。果しもないことに時を移しつゝ、進まぬ氣分をせめて車に搖られて、昨夜たゞ暗中に降りた停車場に來ると、間もなく十二時の東京行きが着きました。

折返へして復た、その後江口の行くへに就いて聞いた委しい事あらば知らせ……と云つてやつた手紙に對して、大阪の主婦から、かう書いてよこしました。

たび／＼お手紙ありがたう。あなた樣の御心の內、わたくしは、よく／＼御さつし申上候。さて江口さんゆくへいろ／＼たづね申したところ、やはり、あなた樣のおほせのとほり、本年の四月ごろから、自前で、かねためるためにはたらいてましたのです。また人のうはさでは、このたびの人は、さういふ人ではないさうな。虎どんにきけば、なに事もたよりがないゆえ、なにぶんわかりかねるとの事。いろ／＼ともだちにきけば、なんでも下の關の方へいつたさうです。またあなたからの手紙は、一つもないさうです。本だけは店にありましたゆゑ、內にとりかへしました。本人のことはさらにわからぬ。かんじんの虎どんがしらぬと申します。わたくしも、よほど、とひあはせましたが、これしきやわかりませぬ。いづれおやの內へは手紙がゆくでせう。とりあへず、この事おしらせまで。

たまより

十一月廿八日

おんトのさままゐる

下の關の方に行つたらしい、といふので足利の姉の外國に行くと話したことや、大阪にゐる頃、時々耳にした客の、影のやうな心當りから想像して、私は、朝鮮か臺灣に渡つたのではあるまいかと思ひました。

足利の姉からは、それから幾度となく、妹の處から手紙は來ぬか。居處が分つたら直ぐ知らせてくれ、もし自分の方へ先きに分つたら、すぐ其方へも知らするから。あなた樣にお心の內は、私よく察してゐる。私も日々心の內で大日樣や、お天とさまを拜んでゐまする。もし朝鮮や臺灣へでも行つてゐると知れたら、私、どんなにしても妹の處に行きます。と、いふやうな面と向つて會つたよりも一層打明けた切ない手紙を寄越してゐました。眞實、姉も兩親はありはあつても、無いも同然なり、自分には子はないし、父ゆゑに不仕合せな妹のことを「あの子／＼」といつて、いとしがつてゐました。その私も大阪にさへ行けば何日でも逢へると思つてゐた、大阪にもう居なくなつてしまつたと思へば、一層逢つて見

たくもあり、起誓の如く取交してゐた此方の手紙も取戻したし、姉の許へ、行先きの少しも早く知れるのを待つてゐましたけれど、姉から聞いたことなど後から種々に思ひ合はして見ると、虚僞をいつてゐたことも段々思ひ當る。流石賣り物安物だ。姉へも江口への恨みを書き、自分はもう彼樣な女は諦めた。內親の姉妹だから諦められなからうけれど、妹は無い者と諦めなさい。と口說いてやりました。すると、この正月の三日に姉からまた手紙が來ました。

取りいそぎ申上候。さて一月一日まゐり候あなた樣の御手紙ありがたく拜見仕り候。あなた樣には妹ゆゑにいろいろ御心配に相成り候御儀、私、よく／＼御察し申上候。ついては、妹種のところより今晩の八時頃書面まゐり、ゐどころ相知れ申候。べつにくはしき事申し居らず、たゞ兄上や私に手紙のとりやりして下さいと申候。私からはすぐさま、あなたさまのこと、それからお種の身のうへのことなど、こまかに書いてやり申候。それのみならず勝山さまは、足利へ來て一晩とまり、その後も私の處と手紙のやりとりをしてゐられることなど申しつかわし候。妹が勝山さまへ手紙を上げねば、私が勝山さまへ大變に申わけがありませぬゆゑ、ぜひ／＼あなたさまへお手紙を差上げるやう申しつかわし候。あなた樣より、すぐ妹へ、私が、ひどく立腹してゐると御申遣はし下され度ぜひ／＼御願ひ申上候。あなたさまも私のやうな者と手紙のやりとりするとは、私も妹の處と、とりやりする心いたし候。ぜひ／＼この後とも御親切になし下され度存じ候。私の書い手紙など、あなた樣には、さぞよみにくきことゝぞんじ申候へども、おさつしねがひ上げ候。

まさより

一月二日夜

勝山さまへ

（妹種の處は、臺灣、臺北、樺臺街榮泉堂內）

いよ／＼推量に違はず臺灣であつたと知つたから、私も早速手紙を書きました。

お前は「勝山との」といふ名を、よもやまだ忘れはしまいねえ。京梅で稻荷さまを祭る時、おまへと揃ひの提燈を上げた時にも記した名で、大阪にゆけば、ちやんと殘つてゐるだらう。併しさういふ思ひ出はお前には何でもなからう。商賣をしてゐる女が旦那が出來て、足を洗つて素人になつたところへ、出てゐた時分の馴染の客が手紙をやるのは、隨分未練がましく、いづれ長火鉢の傍でお前達のお笑ひ草になるのだらうと知つてはゐるが、お前の姉さんから懇々との賴みゆゑ此の手紙を書く。そして

ついでに私の怨みをもいはう。

去年の十一月の二十二日だつた。大阪へも一と月から歸らぬので、おまへの事が心にかゝり、京梅とおまへとにあて魚河岸で二本、鮭を買つて鐵道便で送つた。さうしたら、すぐに京梅のおかみから手紙が來た、ちやうどその二十二日の日に、とつぜんお前の引き祝ひといつて、京梅へも赤飯を持つて來たさうだ。京梅では、私が東京から金を送つて身受をさしたに違ないと思つて、いろいろ噂さをしてゐる處へ、私から鮭と一緒に送つた手紙を見て、これでは、とのさまではないといふことがはじめて分つたさうだ。

おれは、お前がもう大阪をば何處ともなく立ち退いたとは露しらず、心づくしに鮭などを送つて、おまへから返事のあるのをまつてゐると、京梅から、さういふしらせだ。十一月の二十五日にその手紙を受けとると、わたしは直ぐに淺草の停車場から足利へ行つて、お前の姉さんに會つて一と晩泊つて、いろ〳〵話をした。姉さんにきけば、去年の四月ごろからおまへは、自まへでかせいでゐたのだつたさうな。わたしなどゝちがつて、しつかりした旦那がついてゐて、身受けをしてもらつたのは何よりも結構なことであつた。しかし、わたしがそれをしらなかつたのは、どこまでも、こちらがのろまさ。のろまではあつたが、おれは、お前に何度となく、いゝ旦那があつて、わたしよりも先きへ金づくで身受けをするといふ者があれば、情けないが力が及ばぬから、此方はきれいに手を引く。私が、かうしてぐづ〳〵してゐる間に身受けをするといふ客があるだらう。お前ほどよく賣れる女で、一人や二人そんな客のない筈はない。といつてきいても、お前は、何時もない〳〵としらばかり切つた。そりや自前で儲けて稼いでゐるのだから、假ひ情夫でないまでも客は大切だ。さういふことを打明けてしまへば客がおちる。わたしのやうな懐中の覺束ない客をも、おきやくと思つて、こちらのいふことを一々柳に風で扱つてゐたと分つて見れば興が冷める。それとは知らずこちらの眞實は何も斯もお前の嘘八百で玩弄にされた。上州の高崎を振り出しに、品川、吉原から大阪の難波新地と、その半玉より小さい豆のやうな股にかけ、浮きつ沈みつ渡り歩いて、散々つぱら男をだました凄い腕には今更感心するばかりだよ。

しかし、いくら男をだますが商賣の女郎にでも、約束をした男を棄てるにや、唯の葉書一枚でもこれ〳〵の事情があつて、かねての約束は遂げられない。と、綺麗に斷わつて行つたつて、まんざら罰も當るまい。お前も泥水稼業で十年の間苦勞をした人間にしちや、ちつと汚穢が拔けなさ過ぎるよ。「一緒にならう。なりませう」とは私ばかりが口にした約束ぢやない。夜毎日毎に變つた男と枕を交はす女郎の身にしては、お客といふ客毎に夫婦約束をしてゐては、體が千あつたつて、萬あつたつて足りなからう、今更おれは、振つた女に野暮はいはない。しかし、大阪を立ち退けや立ち退くと、逢ひ初めから一年の間、お前にやつた手紙の數は、積つて束にするほどあるはずだ。私の處へ來る時に一緒に持つて行きますと預つておいた書物と一緒に送つて返すくらゐの深切はあつたつて、大した損ぢやあるまい。

足利の姉の處によこした手紙には、十一月の十六日に、五六日のうちに他へ行くと書いてゐる。それに何だ。私のところへよこした手紙には、やつぱり十一月の十六日に書いた手紙に、「あなたはいつ大阪へお歸り下さるか」といつてゐる。お前は棄てる男を、棄てる日までもだまさねば腹が治まらないのか。京梅のおかみが手紙をよこさねば、お前はやつぱり大阪にゐるものと思つて、おれは、べん〳〵と東京から、またぞろ大阪にお前を憧れて歸つて行つたにちがひない。

そんな薄情な賣女に未練はないが、「長くつきあひませう。長くつきあつて御覧んなさい。私は義理堅いから」と、自分で云つた事はよもや忘れはすまい。京梅のおかみの手紙を見て、江口にみれんはないが、あの手紙と書物だけは、取り返したいから、といつてやつて、虎どんに尋ねてもらつたら、本だけは店に置いてゐたさうだ。たとひ商賣にもせよ、一年の間引き付けておいて、棄てゝ行く間際に手紙一つ書くのも億儀だつたのかい。

忘れもせぬ九月の十六日に有馬から出て來て、京梅から返事をすると、遠出をしたとか他處ゆきをしたとかいつて、中遲くから入つて、お客につれられて神戸に行つてゐたと云つた……その臺灣の方へ行つてゐた客が、こんどの男だらうとは、東京にゐても大抵見當はついた。お前くらゐ了見の定つてゐる女なら、臺灣の土人の中にゐたつて、あごは涸かない。おいらは東京にゐさへすれば、帝國劇場も見られる。かぶき座も見られる。人を騙す狐の住む臺灣なんぞへ行く氣にやなれない。大阪にだつて、もう行きやしない。憎まれ口はもうよすが、しかしお前も苦勞をした女ならば、男が返せと頼む私の手紙は一切返してもらひたい。棄てるほど嫌ひな男から遣つた文を、お前が持つてゐたつて何の役にも立つまい。あんな厭な男でも、手紙一枚で斷わりもせず、棄てゝしまつたとおもへば、あんまり寢覺めのいゝこともあるまい。手紙だけはどうあつても返してもらひたい。

姉さんは、なんと書いて手紙を出したか知らぬが、棄

てられた上は、私はお前にみれんはない。併し姉さん達は堅氣だから、お前のことは本當に心配して、私の處へもどうぞ妹の行くさきを探してくれと、何度手紙をよこしたか知れない。私はもう、お前で泥水稼業の女には懲々だ。いづれそちらへは好きな人につれられて行つてゐるのだから、騙された上棄てられた男の私から手紙をやるのは、いくぢのないことだけれど、姉さんの賴みだから、もう少し書く。

お前はかね〴〵姉さん達の深切のないことをこぼしてゐたが、それはおまへが小さい時から他人の處でまゝ子根性に育てられて、その上にさういふ泥水稼業を長くして來たから、心がひねくれてゐるので、姉さんが今度、お前が去年の十一月の末に手紙をよこしたきり音信なく行くさきのわからなくなつてからといふものは、それはそれは心配で、私の處へも何度手紙をよこして、妹の行くさきを大阪のお茶屋へ聞き合はしてくれ。もし朝鮮へでも行つてゐるなら、自分はどんなことをしても、妹をつれに行くとまでいつてよこしてゐるのだ。お前の姉さんが、お前のことを「あの子、あの子」と、いつて、どんなに可哀さうに思つてゐるか、それは一と通りや二通りぢやない。

お前は、吉原が燒けた時にも、姉さんに羽織のお古を一枚貰つたきりだといつてゐたが、それは、その通りであつたかも知れぬが、一體姉さんの御亭主は、分らない量見のまづい人間といふことは、わたしも直ぐに分つてゐる。お前の事につき、姉さんが私と手紙のとりやりをしてさへ、御亭主は妬氣をするのださうなから、よつぽどわけの分らぬけちな人間らしい。お前がみす〳〵泥水に身を沈めてゐても、鐚一文出してやらうといふ氣はなかつたらしい。それだから、姉さんが一人で心の中で、やきもき思つてゐても駄目なのだ。だから假ひ錢は姉さんの手から出すことが出來ないといつても、それは無いのだから仕方がない。一と口に出さぬから姉さんも深切がないとはいへぬ。

こんど臺灣につれて行つた人は、先から私には隱してゐた骨董屋で、身受けをしてくれたんで、私が有馬から出て來て、夜遲くまで待つた時、多勢でお客につれられて神戸に行つてゐたといふ人だらうが、その人間などはとてもお前の姉さんがお前のことを明け暮れ心配するほど、思つてはゐないだらうと思ふ。

棄てられた俺がかういふと、おれがみれんがましくいふやうだけれど、おれはお錢をこしらへて渡さぬ間に、騙されてゐたことが分つて、まあよかつた。たゞ、姉さんは、あのとほり自分には子供もないし、それは〳〵お

前のことを心配してゐるのだ。錢を出さぬからといつて不深切だとも、思つてゐてくれないともいへない。金のある人の五百圓千圓道樂に使ひ棄てるよりも、姉さんが內證にくれる五圓のお金の方がありがたいと思はねばならぬよ。

私はもう棄てられ、深切を仇で返へされた人間だからこれつきり今度手紙などは出さぬ。たゞくれ〴〵も姉さんの心の內を察して、この通り長々と書いた。たんと好きな人に可愛がつておもらひ。臺灣三界までつれられて行つた男だから。

一月七日　勝山より

お種どの

すると半月ばかり經つて、女からひじきの行列のやうな手紙が來ました。

前文略御免下され度候。さて此度、私の當地にまゐり候には、いろ〳〵とわけのあること故、何卒御ゆるし下され度候。あなたさまの厚き御世話に相成り候こと、幾年の後までも、かならず〳〵忘れはいたさず候。私もあなたとお別れ申候てより、いまだに御許さまのことは忘れかね、何かの時には思ひ出し居り候。あなたさまからの御文まことに嬉しく拜見いたし候。必ず色戀にてまゐりしとはちがひまする。長くゐるつもりではありません。半年か一年ぐらゐで歸るつもりであります。私は、あなたと、どこまでも一緒になるつもりでありますよ。私もあなたの處をさがしたいために、大阪の店へ、虎どんに手紙をやりました。私からあなたさまにあてた手紙が虎どんの手に渡してあります。寫眞も木も渡してあります。

東京はさぞお寒いことゝ思ひます。まだ臺北は暑いくらゐです。あなたも遊びかた〴〵お出で下されば、私は、そんな嬉しいことはありませぬ。主人の目をぬすみ、二人で、どこへなりとも遊びにまゐります。今では心淋しく暮して居ります。臺北には長く居りません。本月の二十三日に福州へまゐります。家がきまりましたら、すぐ手紙を出します。お手紙下さる時には、足利の姉の名にてお出し下されたく、またお出で下さるせつには、足利の兄だといつて下さい。船は神戸からでも門司からでものれます。三日か四日かで着きます。申上げたきことは山々あれども、主人が寢た間に書いたのですから、よみにくきところは、お察し下され度候。

私も東京へかへりたく相成申候。あなたのかほや、姉上のかほが見たく相成り申候。あなたは福州へは來られませんか。一月でも二月でもよろしい。私が毎日遊びにまゐりま

す。寒さはげしきゆゑ、ずゐ分からだ御大切に遊ばされたく候。まづは取りいそぎおしき筆とめ候。

たねより

一月十六日、

こひしき勝山さま

こんな手紙をよこしたものですから、忘れかけてゐた大阪での事を、またいろ〳〵想ひ起して、それでも福州へ行つてから、手紙をよこすかと思つてゐましたが、それッきり音信がありません。一年の間、彼女の爲に大阪にゐて熱病に罹つてゐたやうなものです。

死んでいつた人々

これまで私の肉親の者の死んだのも多くあるが、父や兄の死に就いてはその當座は身を傷ぶるほど哀悼に沈んだ場合もあつたけれど、去る者は日々に疎しの譬に洩れず、三年經ち五年經ちしてゐるうちにそれ等の悲みは自から癒え、哀傷の情はいつしか涸れてしまつた。西鶴も「世の中の年月の經つ事夢まぼろし、はや過ぎゆかれし親仁五十年忌になりぬ。我ながらへて是まで弔ふ事うれし。古人の申し傳へしは、五十忌になれば朝は精進して暮は魚類になして謠、酒もり、その後はとはぬ事と申せし」といつてゐる。その二十三年忌を父や兄の爲に郷里の實家でとうたのはもう三四年も前のことである。年忌の追弔がさうして、だん〳〵隔つてゆくにつれて私の記憶の中に、嘗て世に在りし者の面影が夢のやうに永劫に向つて消えてゆくやうな心地がする。

　肉親の者の死と追憶とが今ではそんなに些の感情と涙の潤ひとを有たなくなつてゐるのに、不思議にも、私の胸に永久に忘れがたい追憶となつて強い印象を留めてゐる他人の死が二三の暗い影となつて遺つてゐる。私は今其等の死者の生前の印象を記してみようと思ふ。

　私と別れた妻との間に、常に矢來の婆さんと呼び馴れてゐた一人の老婆があつた。私がその老婆を知つてゐる期間は僅に五六年に過ぎなかつた。尤も噂だけはそれより前からよく訊かされてゐた。妻のところには子供を負つたりしてよく話しに來てゐた妻の姉が、妻と二人で婆さんの下らない噂をしてゐるのが私の耳に屢々入つてゐたのである。

　その頃矢來の外れにゐて支那人の下宿などをしてゐた婆さんは、それまでに何十年間連れ添うてゐた老夫との別ればなしでごたついてゐた。若い時には髮結ひをしてきた婆さんはなか〳〵の浮氣者であつたが、亭主を持つてゐながら小石川の方のある古い公卿華族の屋敷へ出入りしてゐるうちにそこの主人と關係して長い間つゞいてゐたことなどもあつた。

　いづれも生先きの知れた双方で、これから後の扶養料のことなどで別ればなしが六ケ敷く縺れてきた時、婆さんの持つてゐるお釜だの盥などのやうな、むさくるしい世帶道具などを隱匿するために私の處の土間にそんな物を暫く置かしてく

れと云つて持ち込んできたりした。
「そんな汚い物を持つて來たりしては困る。」と云つて私が舌打ちをすると、妻は、
「可いんですよ。あなたは知らん顏をしてゐれば。」といつてひとりで飲込んでゐるやうなことをいつてゐた。
その時分は私の家といつても、それは妻がその母親と借りて住つてゐるようなところへ私が入り込んで同居してゐるやうな事情になつてゐた場合であつたから、私の方でもあんまり强いことは云へなかつた。妻の姉の亭主が、その婆さんにはたつた一人の甥に當るほか婆さんには實の妹が一人あるきりで子供はなかつた。それゆゑ婆さんの側に立つて口を利くのは毎時姉の亭主であつた。婆さんの持つてゐる物をその甥の家へ置いとくことの不安心から私のところへ隱匿したのであつた。
「私の關係したことぢやないが、その向うの爺さんの甥といふ奴が、もし嗅ぎ付けてこゝまでやつて來やしないか。」
私の家であつて、私の家でないやうな多少の遠慮のあるところから私も强ゐて拒みかねて、そんなことを云つて私は自分の心持ちを自分でいひ前してゐた。
「そんな馬鹿なことがあるもんですか、向うの甥が此處をどうして知る道理がないぢやありませんか。置いとくつたつてほんの三日か五日のことですよ。面白いんですよ。」
「なにが面白いんだ? 好い年をして別れるの別れないのと云つて。」
私は淺間しさうな顏をした。すると妻も連れて顏を曇らしながら、
「やつぱり食ふに困るからですよ。年を取つて養つてくれ手がないとあゝなる。厭ですねえ、私なんかあんなになつたら自分で死んでしまふ。」
さういつて、また顏を顰めるやうにした。
爺さんの方でも、田端の造廠に出てゐる甥は何一つ身に着く物を持つてゐないその叔父を自分の方に引取ることを初は容易に承諾しなかつた。それでも以前一と頃世話になつたりしたことのある義理から仕舞にどうあつても自分で引取るよりほか仕方がないことに定つてから爺さんの扶養料の代りに紙屑一つでも餘計に爺さんと一緒に持運ぶことを考へてゐた。そのために双方の甥同志で度々僅かのことから口論をはじめるやうなことがあつた。
そんな下らない世間ばなしよりほかにもつと高尙な事にはすこしも興味を持てないやうな妻の姉は毎時そんな話題で妹を對手に長火鉢の傍に何時までも坐り込んでゐた。
「少しは氣も違つてゐるらしいんだよ。こな間の晩も婆さんが寢てゐるところを(おとき〳〵)ッて呼ぶから、婆さんは眼を覺ましてゐながら靜つと寢入つて知らん振りをしてゐる

と、傍に寄つてきて婆さんの手を握つて撫でまはしてみながら(お時瘦せたなあ。)ッて、さういふんだつて、あはゝゝ。」
「まあ、氣味の惡い! へえ、そんなことをいふの。」
「ほんとに氣味が惡いねえ。(お米さん、私そんなことをされると、もう慾も得もない、ある物はみんな遣つても早く田端の方へ歸してしまひたい)ッて、婆さん昨日も來て早く話しを附けてもらひたいつて賴んでいつたよ。」
それから間もなく話はついたと思はれて十日ばかりも置いてゐた世帶道具は妻の姉などが蔭で小倉、面と向つては小倉さんと呼んでゐる六十餘の老人が來てまた持つて歸つた。小倉老人は婆さんの家へ同居をさしてゐるうちに十年ほど前から婆さんと出來てしまつた仲で、小倉より十年ばかり年長の婆さんはその頃でも男がなくてはゐられなかつた。
「今だつてそんなことがありますどころか、姉はよく知つてゐる。」
妻は姉の大口を受次いで話してゐたことなどもあつた。
昔は下谷あたりの御家人の家に生れた小倉老人にも何時の頃からか家内も子供もなかつた。中年の頃は橫濱にも久しく住んで會社の受付のやうなことをしてゐたりして御家流の古めかしい筆蹟は美しかつた。氣質なども意氣地のないくらゐで優しかつた。婆さんにはそれでも八十近い年をして毎日酒ばかり飲みたがつてまるで子供のやうな痴呆に返つてゐる老爺さんよりは何斯につけて役に立つた。婆さんがまだ髮結をしてゐた時分から夜になると小倉老人の役の一つは婆さんの肩や腰を揉むことであつた。喘息でその商賣が出來なくなつてからも、手を遊ばして置くのは勿體ないと云つて、浮氣はしても、若い時から働くことは人に劣けなかつた婆さんは狀袋貼りをしてゐたが、强つく張りの婆さんは、それでも少許りの纒つた金を高利で廻してゐたので小倉老人は婆さんの代理でその日步を集めに步いてゐたりした。根が溫順しい老人はそれが思ふやうに取立てられないで空しく歸つて來るやうなことがあると、婆さんは頭ごなしにこき下して、直にも家から放り出すやうな恐しい劒幕で怒鳴りつけてゐた。
私が、それまではたゞ噂ばかりに訊いてゐたその婆さんに初めて會つたのも少許りの金を借りる話しが纒つた時であつた。それは先の爺さんとの離別ばなしのあつた時分から三四年も經つてからのことであつた。
「それこそ芝居でするお千代半兵衞の婆さんそつくりの、見るから毒々しい婆さんなの。氣嫌かひの何のつて、自分の勝手の好い時には猫のやうな厭味な聲をしてゐる癖に、氣の向かない時には姉のとこなんかへ來てもかう乙うな厭味をいふ。あなたのことは前からよく訊いて知つてもゐますが、昨日姉からもまた話してあるさうですから行つて御覽なさい。」
初め金の話しを姉の方から話してもらつた時に、××さん

ならお米さんの方で二人が承知ならどうにかしませうといふ返事であつた。そして××さんに一度お目にかゝつてもいゝから、來られるなら自分で來てもらひたいといつてゐた。

　私はそれで、かねて話しにだけ訊き及んでゐる氣嫌かひの婆さんである上に金を借りるといふ弱味もあるので、實際會つてみてどんな風の婆さんだらうかと少からず杞憂を抱きながら委しく妻に敎へられたまゝ婆さんの居處を訪ねていつた。その頃婆さんは支那人を置いてゐた矢來の家から引越して赤城下の奥まつたところに小倉老人と二人で三間きりない部屋を二間まで人に貸し、自分達は流し元の水口から出入りをして住んでゐた。玄關の二疊には時々支那人が女を伴れて泊りに來てゐた。

　私が漸く露路の奥に曲り込んだ其家を探しあてて訪ふと、

「××さんですか。さあ、どうぞ。その木戸が明きますから庭からすぐお入んなすつて下さいまし。」

もう七十に屆いてゐるといふ老婆とは思へぬくらゐ若々しい嬌めいた聲が建仁寺垣を越して聞えた。

「そこの木戸があきませう。」

「えゝ明きます。御免下さい。」

と、返答へつゝ、私は無花果の葉の繁つてゐる狹い庭先きに立つた。

「こんな汚い處へよくいらつしやいました。さあお上んなすつ下さいまし。と、申したところでお坐りになる處もないやうな狹い家で、あなた方はいつも廣い處にお住居になつておいでですからこんな家においでになると鼻が支へるやうでせう。」

　婆さんは狀袋を貼つてゐた手をそこにある雜巾で拭ひながら顏を上げて私を見た。

　私は婆さんの取つて出す蒲團の上に坐りながら、

「汚いところですが、小ぢんまりした好い家ですねえ。」

　といつてそこらを見廻はした。綺麗好きと見えて座敷の隅に置いた古い長火鉢などが光るやうに拭き込んであつた。

「暮しに追はれてゐてや××さん家ん中の掃除など落々してゐられやしません。あなたのお噂はお米さんからもお升さんからもよく承はつて居ります。結構な御身分ですつてねえ。」

　婆さんは、疳性のせゐか物をいひながら心持ち顏を搖りゆすり喘息の咽喉で太息を吐くやうにしていつて、また私の顏容をじろ〳〵眺めてゐた。併しその聲は想像してゐた程厭味のない優しい聲で、長い大きな顏は蒼白く皺立つてゐるが、妻から訊いてゐたやうにまさか斑女の面のやうに恐ろしげでもなかつた。意氣な浮名を流して來た老人ほどあつて、すらりとした背格向に、身裝を崩さない氣質と見えて昔物の紬の茶慶辨に黑繻子の襟の掛つた袷を着てゐた。

「よくそんな好いお身分でこんな汚い婆やの陋屋に來て下さいました。」

　婆さんは、極りの惡くなるやうな甘いお世辭たら〳〵を云ひながら流し元に立つて手を洗つて來て長火鉢の傍に坐つて震える手先で茶を煎れた。

「折角婆のところに來て下すつたのに何にも上げますものがありません。」

　そんなことをいひながら始末の好さゝうに茶簞笥の中に藏つてある罐の中から氷砂糖と鹽せべいを出して皿に盛つた。

「もう始終おいしい物ばかり上りつけてお出でなさるんですから斯んなものはお口に會はないでせうけれど、お宜しかつたらどうぞ一つ召上つて下さいまし。」

「結構です。頂きます。」私は茶を飮んでから、鹽煎餅を一つ摘んだ。

「お升さんもあなたのやうな立派な御亭主を持つて仕合せ者です。私なんかのやうに斯んなに年を取つてしまつては、もう××さん駄目です。」

　婆さんはまだなか〳〵浮世の事が諦められないやうな顏をしてまたじろ〳〵私の顏を見守つた。

　私は何といつて可いか、それに對して合槌を打つに窮して好い加減なことを返事してゐた。そして私はふと、三四年前の爺さんと分ればなしの持ち上つてゐた時分婆さんが妻と私との二人を頼りに婆さんの家へ同居さしたい希望でゐることを訊かされてゐたことを思ひ起した。

「婆さんはお前を自分の養女にしたいんだよ。」そんなことを姉が彼女に向つて云つてゐたことなどもあつた。

　その頃私の意氣地ない生活振りを見てゐた姉達はいつそ婆さんの云ふやうに彼女が婆さんの處に同居して素人下宿でも營んで見たらどうかといふやうな口吻を洩らしてゐた。

　私は、自分の生活狀態が姉達の眼にさう映るのも無理もないことであると察してゐたが、私の立ち場を無視したやうな云ひ分には、假ひそれが私に直接の話しではないにしても爲すがまゝに默つてゐるなれなかつた。

「婆さんが養女に欲しいたつて、僅かばかしの小金を當てにそんな厄介者の面倒を見なければならぬやうなことになるとお前の方から飛んだ剩錢を拂はなければならんぞ。」

　私はさういつて一口鋌を打込んだ。彼女等はよると觸ると婆さんの缺點を好いお茶をうけにして置きながら半面にはそんなことを思つてゐた。その癖彼女は姉の何事にでも思慮の淺果敢なことを云つてゐた。

　私がそんなことを云つてからは、姉も婆さんの家に同居のことについては口にしなくなつた。

　私はそれを思ひ起してゐた。

「今度はまた飛んだお願ひをしまして。」と用談をいふと、

「えゝ昨日お米さんが來てその事をよく話していきました。あなたのやうなお困りにならない方でもお金のことはねえ、またいろ〱御用が多いでせうから——なに私も今のやうに斯うならない以前だつたらあなた方のやうな方にも少し纒めて使つて戴けたんですけれど、私も種々な事に使はされてしまつてもうそんなにたんとは無くなりました。」

婆さんは太息を吐きつきそんな調子の好いことを愚痴まじりにそれからそれへと話した。

私は妻から婆さんの氣質を度々訊かされてゐたので、あんまり氣嫌の變らない内にと思つてその日はそのくらゐにして戻つた。

「今日一と處戻つて來る筈になつてゐますから、晩に小倉に取りにやつてその足でお屆けしますと、お升さんにさう云つて置いて下さいまし。」

その時を初めに、それから私は二度に五十圓ばかりの金を婆さんから借りた。そして毎月一割づゝの馬鹿げた高利を二年ほどの間つゞけて拂つてゐた。

私と妻との別離問題が絡れて來てから婆さんは私に取つて唯一の慰藉者であつた。彼女は腹の中から私に同情を寄せてゐたのではなかつたかも知れないが、少くとも私にはその婆さんの口の先ばかりの甘い同情さへも求めて僅に心を慰めてゐたのであつた。

私がひとりである家の二階に引移つてからは一入無聊に堪へかねて昔の長火鉢の傍懷かしく、またしては婆さんのところにいつて話してゐた。私がさうして入つてゆくものだから別れてから後の私の事の兎角氣にかゝる妻の方でも時々婆さんのところへ顏を出して私の樣子を訊いていつた。不思議にかけ違つて出會はなかつたが、

「昨日だつたか、一昨日だつたか、お升さんが一寸寄りました。」

といふやうな處へ私は屢くいつた。婆さんは何時いつても根よく狀袋を貼つてゐたが、私の顏を見ながら種々なことを噛みわけた話をした。

「お升さんも氣の剛い女です。私のやうに斯んなに年を取つてゐても此な間も田端から爺さんが久し振りにやつて來たから鮪の刺身を取つて酒を飮まして御飯を食べさして歸る時には下帶を新しいのに取換へてやつて二圓小使ひを持たして歸しました。幾ら別れたつてそれが人情ですよ。さう云ふとお升さんが云ふには、(伯母さんの場合と私達の場合とは違ふ。××のは此方でさうして貰ひたいくらゐのもんだ。××にはまだ先きがある、これからですもの。私のやうな者が優しいことをいつてゐたら却つてあの人の爲にならない)つて、お升さんそんなことを云つてゐましたよ。ですからあなたも確乎しないと不可ません。」

そんなことを云つて訊かしながら、私の强請るまゝによく私の好きなクサヤの乾魚でお茶漬の御馳走をしてくれた。私は其乾物が大の好物であつたが、江戸育の婆さんもそれが好きで小倉老人に方々探さしてよく取つて置いた。婆さんは、

「近頃はクサヤに餘り好いのが無くなりました。火に焙るとかう白く粉を吹くやうなのでないとおいしくありません。」

さういつて、骨やトゲを鄭寧に拶りとつて皿に入れてくれた。私はそこで食べるお茶漬が他で食べるどんな美味にも優して身に附くやうであつた。

晩秋から初冬にかけては、年中陽氣の好くない、風塵の多い東京もその一と月ばかりの間はどんな屈托のある人の心をも和ぐやうな穩かな、そして暖かな好晴が續く。婆さんの家の建仁寺垣を取り廻はした三坪に足らぬ庭も秋寂びて紅白の山茶花が靜かな秋の日を浴びて深碧に澄んだ秋空に浮き立つて見えてゐた。

やがてその年も暮れ、翌年になつても私はいつも憂欝に閉ざゝれて無興味な日を消してゐた。そして寂しさに堪へかねてくると婆さんの處に行つて話してきた。そんなにしてゐる間にも日は流れるやうに過ぎて冬は直に春になり、春も瞬く間に立つて暑い夏が來た。私はその年も早くから何處かの山の上に行かうと思つてゐるうちにその夏も大方過ぎて了ひ、漸く八月の末に近くなつてから鹽原に出掛けた。鹽原は東京から四五十里も東北の山の中に入つてゆくのであるが、熟々東京の自然と東京の人事とに倦み疲れた私は成るべくならばもう此まゝ世の中から消えてしまひたいやうな心持ちに充滿されつゝ上野から遠く東北の山の中に向つて去つていつたのであつた。鹽原では滑かな溫泉に浴し、淸凉な空氣の中に美しいローマンチックな山水を眺めて七旬の月日をそこに消した。翠綠の木々はいつしか紅葉した。と、思つてゐるうちに早や蕭殺たる秋風が吹いて錦繡の色は降りつゞく秋霖に日々に褪めていた。深い山の中には冬が來るのも早かつた。十一月の初になると山谷に鳴動するやうな木枯しが連日吹きつゞけてゐた。私はその十一月の初旬に歸りたくもない東京へ兎も角も戻つてきた。東京に歸へると何處よりも早速訪ねてみたいのは赤城下の婆さんの家で、夏まで二階を借りてゐた家に先づ荷物などを置いてすぐその足で婆さんの家を訪ねて行くとその家には知らぬ人間が住んでゐた。

「お婆さんですか、あの方なら何でも赤城元町の方とか、築土八幡の方とかにおいでになるといふことでした。」

といつて、それより委しいことは分らない。私は木から落ちたやうに喪失しながら築土八幡と云へば妻の姉の家のことである。そこへは妻との經偉があつてから足を向けたくなかつたが、せめて婆さんに會へば、その後の妻のどうしてゐるといふ樣子も聞かれるのでまた私は厭で溜らないのを忍耐し

て築土の家へいつて見た。すると婆さんは、一時そこの甥の家に同居してゐたが、今は自分の妹の家にいつて、そこにゐるといふことであつたから、私はその赤城元町の家をまた探ねていつた。そこは赤城神社の山の崖下になつてゐる細い巷路の長屋の一つで、我儘者の婆さんは、小倉老人が取立てた貸金を以つて一八を買つて大分の資本をなくしたので、到頭その小倉とも別になつてしまつて家を疊んで甥の處に寄掛つて來たのであるが、そこにも長くはゐられなくなつて妹の家に來てゐるのであつた。その妹も此の秋口にそれまでに十八年とか一緒にゐた榎町のお釋迦樣の受付をしてゐる男と遂々兩方慾つ張りの喧嘩別れをしてそこに越して來てゐたのである。

私がその家を探しあてゝゆくと、婆さんは詰らなさゝうな顏をして妹の處の長火鉢の傍に坐つてゐた。それは誇張した比譬を用ゐていへば、不過な英雄の末路とでもいふべき欝勃たる不平を抑へかねてゐるやうな表情をして入つていつた私をじろりと見た。

「お出でなさいまし。」

「私は今日鹽原から歸つて來たのよ。今おばさんの處に訪ねていつたら、ほかの人間がゐるぢやないか、築土の方にいつてゐると訊いたからあつちへ行つて此處にゐることが分つた。」

「さうですか。隨分鹽原は長いんですねえ、何時でしたつけねえ、これから行くんだとお寄んなすつたのは、あれはまだ暑い時分でしたらう。」

「さうさ、八月の二十日過ぎだつた。あれから今日まで七十日餘ゐた。」

「私も小倉の奴にすつかり金を使ひ込まれたもんだから到頭あの家も持てなくなつて斯うして餘處の家へ居候をしてゐるやうな仕末です。」

婆さんは噛んで吐き出す樣な愚痴を溢してゐた。先の時分とは違つてひどく元氣が崩折れてゐた。

「私はまた、あなたがあんまり長いことお見えにならんからお國へでもお歸りになつたかと思つてゐました。……お升さんも此の頃はどうやら遠方にいつたらしい。」

私が鹽原から久し振りに戻つて來るとすぐ婆さんのところを探してきたのもそのことを訊きたいばかりであつた。

「何に遠方にいつた？　どつちへいつたらう。」

さういつて私はまた根掘り葉掘り婆さんの口から彼女のその後の動靜を訊き出さうとしたが、婆さんも委しいことは知つてゐなかつた。

「先月の初だつたか、先々月の末だつたか、又一度私の處に來ましたよ。その時煙草を持つて來てくれました。「おばさん此度は少し遠方へゆくから暫くお目にかゝれません。來年か

明後年の今時分にはまたお眼にかゝるかも知れません。」そんなことをいつてゐましたよ。だから何でも遠くに行つたに違ひない。」お升さんもあなたのことを心配してゐましたよ。あなたが鹽原へいつておいでになることも知つてゐるらしかつた。あなたもお升さんのことは諦めて働きなさい。あなたは働ける腕を持つてゐて働かないんだから。私なんざ、幾ら働かうたつて働く仕事がないから斯うして靜としてゐるよりほか仕樣がありません。小倉の奴にひどい目に合はされました。」

婆さんは、何か一と口いふと、仕舞はきつと小倉に金を使ひ込まれた愚痴に話が戻つて來た。

「小倉さんそして今何處にゐるの。どうしてゐる？」

「さあ何處にゐるか、彼奴のことだから、野倒れ死でもするといゝんだ。」婆さんは吐き出すやうにいふ。

「さう姉さんのやうにいつたつて、何も小倉さんだつて金を棄てる氣で無くしたわけでもないんだもの。はゝゝゝ。」

障子際の明るい處で洗濯物の綿入れを綃けてゐた妹は針に糸を通しながらさういつて笑つた。

「さうですさ。小倉さんだつて氣の毒ぢやないか」私もさういつて調子を合はせた。婆とんも一緒に一八を買つたに相違ないと私は思つてゐた。

私が婆さんの處に始終出入りするやうになつた時分は戸山の方のある陸軍の役所へ小使で勤めて仕事の樂な割に給料も貰へてゐたのが、そつちの方が老朽用に堪へぬ理由で御免になつてからは大塚の火藥庫へ日給貳拾五錢で通うてゐた。どこか昔の御家人らしい整つた相好の殘つてゐるのが半分齒がなくなつてゐるために物を云ふと聲が洩れて年よりはずつと耄けて見えてゐた。

「婆さんも年を取つてから好い事のありやうはない、若い時に働くには人一倍働いたかも知れないが、散々男道樂をしたうへに好い加減年を取つてからだつて亭主があるのにまた小倉さんを家に同居さしたりなどして、自分の好きなことをしてゐるんだもの。」

妻はそんなことを云つてゐた。

「小倉さんがまた婆さんのいふことを何でもはいはいといつて聞くから、あんなに朝から一日火藥庫にいつて眞黑になつて働いてきて、肩が痛いから叩けの、それ寺町へ買ひ物にゆけのつて、こき使つてゐる。婆さんは小倉がゐなかつたら一日だつてやつてゆけやしない。そんなのに婆さん何か氣に入らぬことでもあると小倉を糞味噌にいつて家に置けないから、さあ今から出てゆけの何のと云つて長煙管で打つたりなどする。さうすると小倉さん泣くんだつて、また正直な氣の好い人ほどあつて意氣地といふことが少しもない。男も年を取つたらあゝもなるものでせうか。」

口達者な彼女は一人でさういつて、婆さんと小倉との間を噂してゐたこともあつた。私はそれを思ひ出してゐた。

それに婆さんのところには、私が獨りになる時所帶道具やらその他の荷物の大半は預けてあつた。そんなことは隨分放置しの私もその荷物のことも氣になつた。

「それで私の荷物はどうしたの？」

「あなたの荷物は小倉がどうかしたでせう。」

「どうかしたつて、何處へ持つていつてるの。」

彼奴がどつかへ持つていつてゐるでせう。

婆さんのいふ口が少し濁つてゐるので私は二言三言問ひ返した。荷物の中には柔かい物の 着物の 解いたのなどもあつた。

「書籍などはそつくり私も知つてゐる處へ預けてありますよ。それにあなたのお父さんかの顏を描いた額と、あれも早くあなたに取つていつて貰はないと、私が先のやうに自分で家を持つてゐれば何時までお預りして置いたつて構ひませんが、こんなに自分のゐる處さへなくなつたのですから、早く取つてお出でなすつて下さい。又大事な物が無くなつたりするといけないから。」

そんなことをいつてゐたが、婆さんは私の荷物を面倒がりもせず、小倉に方々持ち運ばして預つてゐる内には、大分中の物を無くしてゐるらしいのが私には見えてゐた。それで私が何も斯も放棄つて置くのを結局いゝことにしてゐるのであつた。私はそんな荷物のことなどには構つてゐられないくらゐ行くえを暗ました別れた妻の在家を探してゐるのであつた。それはどうかすると到底力及ばないことゝ諦めてしまふこともあつたが、また發作的に昂奮して來て、假ひ天に隱れ地に潜まうとも草を分け雲を拓いても探し出さずには置くものかといふ無明の決意を强うしてゐた。

その年もまた詰らなく暮れて春になつたが、私の心には正月も春もなかつた。そして妹のところに同居してゐる婆さんのところへも偶に思ひ出したやうにいつてゐた。春も花の季節が過ぎて青葉が日日に濃くなつてゆく時分婆さんはいつの間にかまた小倉老人と二人で私のゐる處とは遠くない久世山の崖下のとある家の玄關の二疊を借りてそこに同居してゐた私は婆さんの妹にそれをきいて訪ねてゆくと、そこの家でも年とつた婆さんがゐて、その婆さんをはじめ嫁も家内中で狀袋を貼つてゐたが、婆さんも玄關に臺を据ゑて狀袋を貼つてゐた。私の顏を見ると、

「おやゐらつしやい。……かうして餘處のお家の玄關を借りてゐてもやつぱり自分の住居ときめたところでないとどうしても居心がよくありませんから。これでまあ、私も足を伸ばして寢られます。」

喘息の息を切らしながら婆さんは苦しさうにそんなことを

いつてゐたが、手先は一刻の間も休ませるのが惜しいといふやうに箆の尖に糊を着けては紙の上にそれを伸ばして機械の動いてゐるやうに、見てゐるうちに巧に狀袋を何十枚となく作つていつた。

「私のやうな老人がこんなにして働いてゐるんですもの、あなたなぞが今の働き最中の身をして何時までもそんなにぶらぶらして怠けてゐないで、お升さんのことなどはもう忘れておしまひなさい。……そちらのお婆さん、此の人の事です。此な間もお話ししましたでせう。」と婆さんは襖の此方から座敷の方へ聲をかけた。

「えゝ〳〵よく知つてゐます。お婆さんからもう度々お噂を伺つて存じてゐます。何でもよくお出來なさるんださうだつて。ほんとにそちらのお婆さんの仰有るとほりですから、もう大體にしてその御婦人のことはお諦めになつた方が好ござんすよ。そんなお金の掛つたお體を勿體ないぢやございませんか。」

襖の向うの婆さんは、矢來の婆さんよりはまだ二つも年上の丁度七十であるといふのに、聲なども確乎してゐて、元は立派な旗本のお嬢さんであつたといふが、小づくりな整つた姿や上品な顏にもそれが見えてゐて、今でも毎晩酒を飲まずにはゐられないといふ壯健な老婆であつた。

「私が今までに何度もそれをいふんですけれど、お訊きにならないですから仕様がありません。」

「でもそのお升さんといふ方も幸福ねえ。こんな方にそんなに思つてもらつて。」襖の向うで、丸髷に結つた三十ばかりの肥つた、品などもそんなに惡くない嫁が低聲にいつてゐる。

その內また一度ゆくと、婆さんは私の顏を見るなり、

「お升さんが來ましたよ。」と飛び付くやうな聲を掛けた。

「たうとうやつて來た。何だか知らん大層立派な身裝をして來ました。」

婆さんは私を煽てようとしてゐるのではないが、自分で驚いたやうにさういつた。

それから先のことは私がほかの場合で委しく發表してゐるから此處ではそれをいふのが目的ではない。私の死よりも强い激情の苦しみはその後のある期間が最も痛烈であつた。

その年の秋の時分から、さしも激昂の甚しかつた私の感情も稍々平穩に復して、私は自分の散亂した氣分を靜め、動搖する心を落着けようとして、久し振りにめづらしく借家をして男所帶を持つことにした。その時婆さんの處に預けて置いた荷物を引取つたが、目ぼしい衣類などはもつとお釜のやうなものまで全部小倉老人の手で質草にしてしまつてゐた。婆さんは何とか斯とかいつて其等の荷物も綺麗に渡さうとしなかつたのを、私が一喝を喰はして、ある物は皆持つて來たが質のことは喧しく云はなかつた。

秋もだん〳〵闌けて冬に近づき、八百屋の店頭に林檎の色が次第に紅になり、蜜柑の靑いのが一日一日と黃色くなつてゆく頃のことであつた。婆さんは北海道にも一人の義理の弟とか妹とかがゐて其は東京にゐる身寄の者のどれも薄情なのと違つて深切だから始終來いこいと云つて來てゐる。いよいよ困つたら私は北海道にゆけば養つてくれる者があると、何斯につけて云つてゐた。或日ふと私が訪ねてゆくと、いつも晝間は働きにいつて留守の筈の小倉老人が婆さんのゐる立閪にゐて、

「婆さんは遠方にゆきました。」

と笑ひながら云ふ。

「北海道に？」

「え〻」やつぱし老人は笑つてゐる。

「北海道とは驚いたねえ、よく併しその元氣が出たものだねえ。へえ！ 婆さん一人で。」

私が一人で飮込んだやうにいつてゐると、やがて小倉は暫くしてから、

「婆さん、四五日前に、ひどく血を吐いて、たうどう、それつきりになりました。」

といふ。

「おや、死んだのですか。」

私はおどろいていつた。

「え〻、たうどう。ほんとうに、あつけなく死にました。」

小倉老人は、寂しく笑つた。

（文章世界掲載）

うつろひ

二年ばかり馴染でゐた女は、私との堅い〳〵約束を破つて手紙一本置いても行かず、他の男と何處かへ姿を隱してしまつた。大阪で行きつけてゐた茶屋の主婦から、その女が身を落籍いたといつて知らして來た時には、私はその手紙を手にしたまゝ胸を顫はして憤怒の情に驅られた。そしてその手紙を見ると直ぐ××町にゐるその女の姉の處に行つて見ねば靜と堪へてゐられなかつた。

勿論、女が大阪から關東に戻つて來てゐると思つたのではなかつた。ついその一週間ばかり前に、姉の夫といふのが訪ねて來て、妹のことを賴んで行つたくらゐだから、女が其處に來てゐるとは思はなかつたが、姉の處にゆけばもつと委しい事が分るだらうと思つたのだ。私は戀のためには、丁どばね仕掛の玩具かなんぞのやうにそのまゝ急いで淺草の停車場から××町に姉をたづねて行たのであつた。

それには、一つは、私は姉がどんな女か、その姉が見たかつたのである。自分の女の姉、それに對して私はどんなに優しい親しみを感ずるであらう。丁度一年前の今時分であつたから、東武藏の廣濶な平野は麥を蒔いたばかりの肥えた畑が遠くつゞいて、その果てには秩父の連山から甲州の山々が淡く好く晴れた冬の空を劃つてゐた。私は汽車の窓に身を凭せて、熱いあつい戀を裏切られた悲みやら憤りに耽り沈みながら汽車の進みの遲いのをもどかしがりつゝも、其等の高朗な田舍の景色に見入つてそしてこれから行つて會ふ姉のことを種々に想像して樂しんでゐた。

向に着いたのはもう夜であつた。停車場を出ると私は其處に客待ちをしてゐた車に乘つて、寒い夜風にとんびの襟を立てゝ道を急がした。東京から此處まで來るとひどく氣候の變化を感じた。暗い夜の街の空に輝く電燈の光、深い山の地方に接近した機業地の鄙びた街の感じが、自分の戀した女の產れた土地であつたり、その姉の住んでゐる處であるがためにひたすら懷しいものに思はれた。

姉の家はそこの街の場末の方にあつた。小いながらも繁昌してゐるらしい荒物屋の前に車を停めて老いた車夫が毛布を取除けたので私は車から降りてその店に入つていつた。

店頭に三四人の男が腰を掛けてゐたが、見知らぬ人間が入つて行つたので、客を相手に火鉢に寄つて不思議さうに此方を見た女は、一と目見るより、いはずと知れたそれが私の女の姉であつた。多い髪の銀杏返しの根の崩れて振り亂したやうになつてゐるのが、最初から戀に餓ゑた私の眼に浸みつくやうに映つた。眉毛の濃い目の大きい引締つた顔容は大阪で逢つてゐた妹よりも一際目立つてゐた。

「私は千草と申すものですが、石川さんのおうちは此方ですか。」

　と靜に物をいつた。すると、姉は私の言葉がまだをはらぬ内に、

「えゝ、さうです。さあ、どうぞお上んなさい。」

私を引揚げるやうに勇んだ語調でいつた。

土間には種々な品物が足を踏み込む處もないまでに置いてあるので、私はまご〳〵してゐると、姉は臺處の方の上り框の處から土間にごちや〳〵脱ぎすてゝある履物を片寄せながら、

「さあ此方からお上んなさい。」

疾から知つてゐる間のやうに親しくいつた。

「いろ〳〵妹がお世話になりまして、どうぞこの後もお頼み申します。」

姉は奥底のないさつぱりした口を利きながら、長火鉢を挾んで私と差向ひに坐つた。

「えゝ、實はその、彼女のことについて急に上つたのですが今日大阪の私の懇意なお茶屋の主婦から手紙を越して、彼女が急に配り物をして落籍いて何處へか行つてしまつたんださうです。あなたの處へ何にも言つて來ませんですか。」

私は、大阪から主婦の言つてよこした手紙の話をした。

「さうですか、私の處へは、そんな落籍くといふやうなことは何にもいつて來ませんけれど、こうと一週間ばかり前に、此度遠方の方に行くから一度東京に歸つて父上や姉上に會ひたいけれど、急なことで行かれぬから、どうぞ私は遠く〳〵行つてどうすることも出來ぬから、年を取つたお父さんのことを頼むつて、そんな手紙をよこしてゐました。

さういひつゝ姉は長火鉢の傍の茶簞笥の抽斗から、まづい假名がきの三四通の手紙を取出して日附を見別けながら、

「これです。」

と、いつて見せた手紙には、もし千草さんがそちらへ訪ねて行つたら、よく待遇して下さい。そして私が遠方へ行くことは默つておいて下さい。と書き添へてゐる。その日附は、私の處へは、女が、貴郞は何時ごろ大阪にお歸りになりますか、お歸りになるのを待つてゐます。虎どんに頼んで小綺麗な貸間を探さしてゐます。と、書いて越した手紙と正しく同じ日附であつた。

「あなた此の難波新地の近くに何處か小さい家をお持ちなさい。そしたら私遊びにゆくわ。」

「あゝ、今度東京から歸るまでに虎どんに探さして置いといてくれ。」

そんな話まで私達は語り合つてゐたのであつた。私はその手紙を見て、姉の前で怒るにも怒られずに狐に欺されてゐたのがやつと正氣に反つたやうに、唯呆れてゐるより他はなかつた。

そこへ姉の夫が外から歸つて來た。

「ゐらつしやいまし。大變お早く。」

この間義兄は東京の私の宿を訪ねて來て、姉からの傳言で妹の身の上を懇ろに頼んで、是非一遍遊びかた〳〵來て下さいといつて歸つたのであつた。

「さうですか。何處へ行きやがつたんだらう。……彼奴らのすることは吾々には分らない。先日もあの通りあなたにお願ひしたやうなわけですから、私どもの方では全く知りませんことで、彼女が一人あゝですけれど、此女などは堅氣なもんですから、妹がどんなことをしてゐますか、一向知らないやうな次第で。」

亭主は辯解するやうにいつた。

「えゝ、そりやそうでせうとも、しかし何處へ行つたんだらう。」

私は獨言のやうに、悲しい顔をして頼りない胸の思ひを太息に洩らした。

「あの子、吉原にゐた時分にも好い客がついたんですけれど、出受してやるからといつて種々なことを聞くから面倒臭いといつて、越後産れだとかいつてやつたら、それでそのお客は諦めたとかいつてゐました。……あれで彼の子はそんなに人が惡かないんですよ。我が田へ水を引くんぢやないけど。」

姉は微笑しながらいつた。

私は腹藏のない口の利きやうで、姉を好い性質の女だと思つた。そして私を欺して行つた妹も決して惡い女だとは思へなかつた。

「あなた、よく似てゐるですねえ。妹に。」

さういつて、私はしみ〴〵と姉の顔を瞻つた。

「えゝ、此女等の姉妹は皆よく似てゐますよ。」

「似てやしないよ。みんな一人々々だよ。」

姉はこの邊りの女の使ふ粗雜な言葉で微笑ひ〳〵いつた。

彼等にはまだも一人上の姉があつて、それは此の街からまだ三里も山奥にある零落した家を繼いで婿養子をしてゐるのであつた。

まだ大阪にゐる時分、秋に有馬の温泉に行つてゐて、そこへ女を呼んで三四日遊ばしたことがあつた。私はその時も、決して唯歡樂に耽けりたいといふ要求からばかりではなかつ

た。その女の纖弱の容姿とあどけない子供みたやうな性質がわけもなく可憐になつて、日毎夜毎劇しい勤めをする身體に休息を與へてやりたいといふ戀から起つた憐憫の情があつた。

「あら、また栗をたゝき落してゐるわ。私達も行つて拾つて來やう！　あれを見ると何だか自分の家の栗を落してゐるやうに思はれて、氣になつて仕樣がない。」

女はさういつて、遠い下野の國の山の奥に在つた自分の家のかゝりなどを、過ぎ去つた昔を懷かしむやうに話した。

「あゝいふやうな山の裾をずつと屋敷の内に取入れて、そりや廣かつたわ、かう中二階の座敷があつて、廊下を傳つてそこに行くのが私子供の時分に恐かつた。三つも土藏があつてよ。その裏の山に澤山栗があつて、よく落しに行つた。」

「お前方々流れ渡つてそんな商賣をしてゐるから、栗を拾つたりするのは久し振りだらう。」

「久し振りにも何にも子供の時分からないこつたわ。」

「その家には今上の姉さんがゐるの。」

「その家はお祖父さんが死ぬるとすぐ勘當されてゐたお父さんが、畏い者がゐなくなつたから餘處から戻つて來て、壞して賣つてしまつたの、つい二三年後まであつたわ。姉さんは今長屋を立て直してその中にゐるさうですよ。」

私は、斯樣な話をしたことを思ひ浮べた。

その夜、私は初めから他へ宿を取るつもりであつたが、姉夫婦は、こんな狹苦しい處でさぞ御迷惑でせうけれどぜひ家へ泊つてくれといふので、私は勸められるまゝに其家に泊ることにした。そして店が忙しいので亭主の起つたり居たりする間姉と私とは傍に氣を兼ねながら、大阪で行く先を隱してしまつた妹の普通の女の正道を踏み迷うた身の上をそれからそれへと語り合つた。

「あの子も父親のためにあんなことになつてしまひました。私達家がそんなやうなわけで段々いけなくなつてから、離散になつたものですから、妹がそんなことになつてゐるのをちつとも知らなかつたんですよ。お祖父さんが死ぬ時に、息を引取る時になつて、實は自家の三番目の孫娘が、これこれのわけで伜のために情けない處に身を沈めてゐるから、どうぞ孫娘の行末のことを頼む。と言つて自宅や姉の亭主に打明かしたので、それで漸つと知つたくらゐなのです。……お祖父さんはその時分村役場に出てゐたものですから、向の役場からそのことを言つて來た時には、自分は村長をしてゐて現在の孫娘はそんな處に身を賣るといふやうな次第で、年を取つてまあ何といふ恥辱をかくことかと、そのまゝ死んでしまひたいくらゐに思つたさうですよ。……私達の父親がいけないのは、もう世間でも誰れ知らぬ者もなかつたのですから役場の人達も

お祖父さんを大變氣の毒がつたさうですよ。」

こんな話は夜更けるまでも盡きなかつた。

私は、大阪の女は、故意にか止むを得ずしてか、巧に私を欺して何處かへ行つてしまつたけれど、妹によく似た姉のしんみりとした自分達の身の上ばなしに、何ともいへない親しみを感じて、いくらか悲憤と失望とを慰められたやうな心持になつた。

亭主が店の方を仕舞つて長火鉢の向に坐ると、姉は入れ替に立つて行つた。東京では十一月の末とはいひながら、好い天氣の日などには小春日のほか〳〵と暖いのに引換へて、三十里北へ寄つた、高山に近い地方の此處等の夜は、肌にしみる寒さが身を引締めるやうである。亭主は長火鉢に炭をついで、新らしく茶を入れなどしてまた話をつゞけた。

「本當にお氣の毒さまです。あんなやくざ者誰も眞面目に相手になつてくれるものはありやしません。あなたにそれほどまで御心配して戴いてゐるのに何といふ罰當りでせう。」

「いや、けれど先方の人も大事ですからその方が私より彼女には好かつたのでせう。」

私は强ひて快濶に笑つて見せた。

「兎に角まあ、も少し御辛抱なすつて待つてゐて下さいまし。屹度何とかいつて越すにやよこしますから。これまでも何とか斯とかいつて來る度にそれに就いて返事をやると、もうそれきりに何ともいつてよこさない、といふやうな仕方で、少しもいふことが當にならないものですからもう何といつて來たつて打遣つて置いてあるんです。さうかと思ふと半歳も立つて不意にまた手紙をよこしたりなんかする。いや此處も今に何とかいつてよこすに違ひありません。」

そこへ姉は湯から上つて、懷爐灰に火を點じて懷中に入れた。ひどく小柄な妹よりは幾許か大きく見えるが、花車に瘦せた、見るから冷え性の女である。

「どうだらう？　もう汚れてゐるけれど。」

夫に向つて何かいつてゐた。

「田舍の汚ない風呂なんか、却つて失禮だ。」

「あゝ、風呂ですか。そんなわけはありませんが、もうどうぞお構ひなく。」

長火鉢を置いた次の間と奥の間の襖を取りはづした座敷に一同枕を並べて寢た。姉は床の前に横つた私の蒲團のぐるりを鄭寧にたゝき付けて置いて、それから脫ぎ棄てた着物を疊んで枕頭に重ねた。

そして翌日姉の許を辭して私は東京に歸つた。女の行く先はそれから一と月あまりも知れずに經つたが、歲が明けて今年の正月になつて姉から、妹は今臺灣に行つてゐると知らしてよこした。自分は直ぐ返辭を出して、あなた樣の事を細かに書いてやつたら、あなたさまからも、姉のことを、遠方に

行つてしまつたといつて、ひどく立腹してゐるやうに書いてやつて下さいと頼んでよこした。私は姉の頼みに任せて序に自分の怨恨をくど／＼と認めて臺灣に手紙を送つた。

私は、その臺灣に連れて行つた男と、連れられて行つた女のことが深く胸に喰ひ入るやうに考へられた。固よりその男には何の怨のあるわけはない。色里によくあるならひの、一つ女を競り合つた仲ではなかつた。女はさういふ境涯の女によくある腕の凄いといふ質の女でもなかつたが、大事なことは堅く押し包んで輕々しく口に出さぬ女であつた。私がその女に引掛つて、一年の間東京に歸ることも出來ず大阪に滯在してゐる間に、疾に女はその男と堅い約束をしてゐたのであつた。それを思へば、いくら賣女とはいひながら、自分ののろまを悔いると共に女の不實な仕打ちには何處までも怨がある。

私は、一生の運命を任せて唐土の天竺の果てまでも厭はず、連れて行く男と一處に、女が大阪から汽車に乘り、門司から臺灣直航の汽船に乘つて、日本の土地を離れ、八重の潮路を遙々恐ろしい土番の棲むといふ臺灣三界まで渡つて行つた、その男に信頼する女の心根を思へば思ふほど、私を袖にして向ふに從いた女には怨みがあつた。

寢ても覺めても、むざ／＼と一年の永い年月仇し女に囚へられてゐた大阪のことが怨しかつた。さうしてその女を怨みながらも、どうすることも出來ない腹立たしさは、私をして彼女の生き寫しの姉のことを思はしめた。女がその男と一處にゐる場合の種々な光景が強い力を以つて私の頭に妄想が浮び出す時に私は、堪へられない悩ましさから、

「あの姉をどうかしたい！」

と心の中で叫んだ。

その初めて會つた夜、長火鉢を挾んで向ひ合つてゐる時、女郎でも厭はぬ女房にするとまで思ひつめた妹に裏切られて、餓鬼の如く戀に餓ゑた私の眼は、姉の額に向つて吸ひ着くやうに自然に見入つてゐた。妹の肌膚の細い蒼いほど白い顏と違つてその顏は少し色が淺黑くつて、田舍町の商人の女房で汚くはしてゐるが持つて生れた上品な小締りとした風姿は、さうして置くに惜い縹緻であつた。小い濃い眉、尋常な小高い鼻、愛嬌のある締つた唇、そんなものが空虚になつた私の胸に丁度眞空を充す空氣のやうに流れ入つた。

「あの姉を……！」

私は、寢られぬ夜半々々遠くに行つてゐる妹と、自分とのありし關係を想ひ浮べたり、知らぬ男との、私とその女との間にあつたことに類似した關係、或はそれよりも、もつともつと濃厚な關係を妄想に描くたびに、かう獨語を繰返へして僅に遣る瀬のない懊惱を慰めてゐた。

「あなたさまに逢ふたのは、私には妹に逢うたやうな心地いたしそろ。」

といふやうな手紙を姉は越すことがあつた。

姉が、愛する妹が遠くで情けながつたり、慈しんだり、悲んだりする心は、私が戀する女を失つた怨恨や焦心や愛執と同じ心であつた。

「どうぞ／＼あなたさまのお力にて、遠くに連れられゆきし妹が呼び戻すやうお骨をりねがひあげそろ」

といふやうなことをも書いてよこした。

私の、妹に書いて遣る怨みの文句は、姉に對しては愚痴となり訴へとなつた。

すると暫く經つてよこした姉の手紙には次のやうな思ひ設けぬことを書いてゐた。

「……あなたさまのやうな御深切なるお方を棄て、また親姉を棄てゝ遠くへ行くやうな妹は、妹にても妹にては候はず、何卒あの樣な薄情なる妹のことはそれまでの緣とお諦め下され、この後はたゞ私と手紙の交換をなし下されたくそろ。妹の姉ゆゑ、あなたさまには、私をやつぱり惡い女と思召され候やも知らねど、私は決して／＼そのやうな女にてはこれなく候。私の夫と申すのは、まことに道理のわからぬ方にて、私が妹のことゆゑあなたさまと手紙の遣り取りするをばやかましく申して實に困り申そろ。そればかりでなく私は、夫の爲にはまるで此の世ながら牢屋に入れられてゐるも同じやうなまゝならぬ憂目を見て面白くない月日を立て居りそろ。私が妹でありしならばあなたさまのやうなる御深切なるお方と、たとひ半日でも一日でも一處に暮して見たくぞんじ候。浮世はままならぬものにて候。

私の方からあなたさまに手紙を上げたことが分れば、やかましくて困り候間、あなたさまの御手紙には私の方から手紙を差上げたやうなことは書かないで、なにとぞ／＼此の後もお手紙下されたく候。たとひ手紙差上げずとも私の心に變りはこれなく候。毎日心の中であなたさまと一處になるやうに大日樣に祈りをりそろ。

只今幸ひに夫の留守の間を忍び、恥かしきこと、取りいそぎ認め申上げ候。お笑ひなされまじく候。」

この手紙を讀み下す間に、私の胸は俄に鼓動を覺えて來て怪しげな名狀し難い幸福な感じが忽ち體中に漲つて來るやうな氣がした。そしてそれとともに私には非常に不愉快な氣持になつた。

亭主といふのは、一體私が姉と手紙の交換をするのを何と心得てゐるのであらう。そも／＼去年の秋、自分で私の處を訪ねて來た時に何といつた。

私共がどうか斯うかしてゐる以上は、彼女の祖父が遺言に頼んで死んだとほり、疾に清淨な身體にしてやらねばならぬのでございますが、何分にも彼女の父親のためには、親類中

の者が痛い目にあはされてゐるので、この上何處に相談に持つて行つても、彼女の父親の尻拭ひはしてやらうといふ者がない。彼女一人が惡い鬮を引いたので。それを思へば可哀さうでございます。金といふものはさう右から左へ直ぐ出來るものではございませんから、假令一年先きになりましても二年先きになりましても構ひません、どうぞ彼女の一生を救つてやつて下さいまし。私もこの上は金ではどうすることも出來ませんから、その他の事でならばどんなお力をも添へます。

さういつて悉々頼んで行つたぢやないか。それに何ぞや、既うあゝして他の男と一處に遠國まで行つてゐると知れては、自分の傍に戻つて來る見込はないものとはいひながら、現在の姉が自分の兒を手放したやうに切なく懷しがつて、何とか盡力して呼戻してくれと頼んでくるので、及ばぬまでも手紙で細々と書いてやつたり、此方に對して後脚で砂をかけるやうなことをして他の男の傍に行つてゐるとは知りながら泣言をいつて頼んで來るまゝに、菓子や煙草など送つてやつたりしてゐるのに姉の夫でゐながら、それに就いて誠に難有いとお禮をもいはないで、そんな邪惡なわからぬ量見でゐるといふのは怪しからぬ。

今からそんな詰らない暗い考が入り込んでゐるやうぢや、女は、どうかして今の主人と別れて戻るといつて來てゐるけれど、そんな分らず屋の人間と苟且にも此の後親しい交際をしたくない。さう思ふと急に水臭い厭な氣が潮して、何も斯も興索めてしまつた。

そして不健全に姉のことを思ひつめてゐる間は、不思議にも其女に亭主があるといふことは考へられなかつた。勤をしてゐる妹が今の先他の客に逢つて來たのであつても、それが自分の傍に來て一人ばかりでゐると、他の男のことは少しも邪魔にもならず、思ひ浮べもしなかつたやうに、私の妄想に描かれた姉には夫のあるといふことがついぞ思ひ起されなかつた。それであるのに今こんな氣持ちの惡いことを明した手紙を讀むとともに、姉の夫の容貌が二重の不愉快さを以つて私の眼の前に浮んで見えた。

「姉さんの御亭主隨分厭な男よ。姉さん、義兄さんは隨分色の黒い男ねえ。私姉さんにさういつたの分らない男よ。」

女が大阪にゐる時分、そんなことを話したのを私は思ひ起した。その通りに印度人のやうな表情をした人間であつた。それが八年も姉と連れ添うてゐることが私をして失望せしめた。

そんな不快な心持ちがしてゐるとゝもに、私は何か甘い物を噛みしめるやうに再び姉の覺束ない文字で綴つた手紙を熟讀して見た。戀に餓ゑ、生活の感興の荒廢した私の心は、丁度三十日も四十日も雨の降らぬ炎天つゞきに殆ど枯死しさう

になつた青田に颯と夕立が降り濺いで來た時のやうな潤ひを覺えて、秘密な喜悦が柔かに身内を包んだ。

たとひどんな不健全な想ひを抱いてゐやうとも、私の方から書いて遣る手紙には少しも後暗いやうな文句はなかつた。私は唯愼しい言辭で、あまりに情けを知らぬ妹の仕打ちを、その姉に對つて怨じ、遣る瀨のない失戀の情を姉に訴へて、それを姉の言葉で、遠くの妹に通じてもらはうと思つたばかりであつた。けれど私の手紙の面に溢れた切ない情は遂に姉の心を說く結果に陷つたのであつた。

それとゝもに亭主が、姉と私との書信の交換を忌むやうな口吻を洩らすのは、最初から少しも邪念のなかつた單純な私達の心に却つて妙な考へを萌え出さしむる原因になつた。唯私獨りの心の奧に罪深く祕めてゐた眠られぬ夜半々々に襲ひ來る魔夢とのみ思つてゐて、ついぞまだ白晝になつて自分の胸にさへ思ひ浮べなかつたことが、さうして外部から煙のやうな疑ひとなつて自分の現在を取卷いてゐるのかと氣付いて見ると、何となくそんな疑ひを浴せられてゐるのが樂しいような心持ちになつた。か弱さうな正直らしい、素性の好さゝうなあの姉と私との間が亭主の爲めに忌まれてゐるといふ意識はます／＼私の姉に對する祕密の心を深からしめた。そして邪惡な暗い自分勝手の量見を先にして、妹のことなどには冷淡な、男らしくない愚劣な人間に對する嫌惡の感じは、更に更に私の心を姉に接近せしめた。その手紙に對する姉への此度の私の返辭は これまで度々戀をしたことのある私にも、初めて見る婉曲を極めた文字の裏に複雜な心を包んだものであつた――姉の手紙によると、亭主は郵便配達が投げ込んで行つた私の手紙を、姉に隱して開封して見た上に、どうかするとそのまゝ宛名の本人には見せずに仕舞つてしまふことさへあるのださうだから――

「あなたさまのやうなお方とたとひ半日でも一日でも一處に暮して見たくそろ。」

この手紙を私は靜かに更けて行く夜の床の中で幾度も／＼取出して、恰も精神の糧のやうに讀返へした。

私は、春にはまた一と月あまり奈良京都大阪といふやうに關西の古い街々から、瀨戸內海の明媚な海の上の旅行をして來た。その間にも到る處々から、あの色の少し淺黑い痩せ形の品の好い正直らしい、妹よりもまだはつきりした大きな二重瞼の眼の姉の顏を想像に描いて、手紙や繪葉書を送ることを忘れなかつた。そしてその手紙には、毎時のとほり妹に對する惱ましい戀慕の情をかき口說いた。

五月の末に長い旅行から歸京つたといふ通知をすると、姉は近い内に自分で東京に行かねばならぬ用事があるから、その時逢つて委しいお話をしまする。しかしそれほどまでに思つて遣つて下さるのは、姉としては嬉しいけれどもあんな薄

情な女は諦めて下さいまし。そのことについて是非あなたさまに私からお話し〻たいことがありまする。といつてよこした。

私はその日の來るのを待ちかねてゐた。たゞ單に妹にように似た姉の顏が染々と見たかつたのだ。すると翌日來るといふ日に五月雨らしい雨が降つた。私は、その爲にもし出て來ぬやうなことがありはせぬかと思つて、どんなに鬱陶しい空を見上げて五月雨を怨んだか知れぬ。そして遂に堪へかねて、たとひ明日雨であつても出ておいでなさい。待つてゐますといふ簡單な葉書を出した。

翌日は雨が綺麗に晴れて麗々と眩しいやうな日が五月末の青い明い空に輝いた。そして十時少し過には早や宿の玄關の處で訪ひつゝ「千草さんは……」といふ聲が私の部屋に聞えた。

急に途中から暑くなつたといつて、セルのコートを疊んだのを手にして、新しいフランネルの單衣の匂を柔かに漾はせながら、濃い水色の手絡をかけた丸髷姿の姉は微笑しながら入つて來た。

私は、わけもなく自然に何物かに喫られるさうな氣持になつて、明く開放してゐた障子を閉めなどした。

「私、昨日また葉書を出したのですが、あなたの留守に行きやしないかしら。」

私は、眞實に義姉と思つて打解けた口をきいた、眞實の義姉と思ひたかつたのだ。

「昨日何時ごろ？」

姉は些と當惑したやうな表情をして、大きな二重瞼で笑ひながら訊ねた。

「昨日の午後だつたから、それぢや今日あなたが出た後へ行つてゐる。あなたはそれを見ないで出て來たのでせう。こんな早くおいでになると知つたら、出さなければよかつたに。昨日あの通り雨が降つたから、女が偶に外に出るんだから、來られないと思つて雨でもぜひいらしつて下さいと書いてやつたの。」

「ぢや私、歸つてもし内で訊いたら、あなたの處に來ないといひませう。」

「けど、もう葉書が留守に行つてゐるから、そんなことをいふと、逢つたことを隱し立てするやうで却つてよくないでせう。」

「私、また、あなたの處から、私が來るといふと屹度とかいつて手紙が來るだらうと思つてから、それが來る間のないやうに、明日行くといふ時になつて、あなたの處に手紙を出したのです。」

こんなことをいつてゐるのが、もう既に私達は姉の夫に對して秘密にせねばならぬことをしてゐるのであつた。疑はれねば、また忌まれねば、私達の手紙の交換も偶の訪れも唯妹のことを語り合ふ以外に何等の意味を持つてゐるのではなかつた。乍併愚劣なる亭主の心は、明らさまにして差支へないことをも吾等をして餘儀なく祕密を守らしめるやうにした。祕密！　そしてこの柔かな祕密といふことは私の心をして倍倍姉の方に近寄らしめた。

「どうしても歸つて來ませんかねえ。」

私は姉と靜と笑顏を見合せながら、何か呑み込むやうな口元をしながらいつた。私は柔かな物に包まれてゐるやうな氣持になつてゐた。

「私もうあの子のことは打遣つておくんです。」

「あれが歸つて來さへすればいゝんですがなあ。」妹が歸つて來れば、私は自由に此の姉とも顏を見合せることが出來るのだがなあと考へながらさういつた。……「どうしてそんなことを、あなたの内ではいふでせうねえ。」

「そりや分らないことばかり言つてゐるんです。……私も、あの家とは始終出たり入つたりしてゐるんです。」

姉は内輪の愚痴を溢したりなどした。

「そりやあいけません。彼女は子供はないけど今ぢや××町の姉さんが一番氣樂なのといつてゐたけれど、そんなんですかあ。そりやいけない。」

私は、妹の處にやる手紙の上書を姉に書いてもらつたりした。何時も姉の名で、私は手紙を出してゐた。

「私はもう、あの子の處に手紙をやらないことにしてゐるんです。いくら遣つたつて返辭をよこさないんですもの。」

「そんなことをいはないで、書いてやつて下さい。」

「私、字が書けないんですもの。……一處に手紙なんか書いてやると、内でまた何とか斯とかいふといけないから……。」

筆を手に取り上げながら、姉は笑つて書くことを澁つた。

「遠い處にゐる妹にやる手紙が、何であなたの内へ分るものですか。書いて下さいよ。」

「これで可いんですか。」姉は宛名と自分の名とを書いて筆を擱いた。

「どうも難有う。……あれも今の主人の處で一生の尻がすわれば、それでいゝが、もしさうでないとすれば、少しも早く歸つて來た方が好いのですがなあ。もう今年で二十四でせう。」

「いえ、もう二十七になるんですよ。」

「おや、二十七になるんですか。私二十四だと思つてゐた。」

「私と二つきや違はないのですから、二十七です。私、今年二十九ですから。」

「へえ、さうですか。ぢや、また一つ私に噓をいつてゐたのがばれた。でも二十四でも若いくらゐだがなあ。」

「さうですよ。去年ちよつと東京まで逢ひに戻つて來た時、一處に上野の宿屋に泊つたら、給侍に出た女中が「十七ですか」といつたくらゐですもの。」

「全くだ。十七といつたつて、知らぬ者は眞實にする。やつぱり化け者なんだなあ。」

食べるものを催促にやつてゐるのが遲くなつてゐる間に、

「私、淺草驛から先き此方に來ましたの。あなたの處に來て深川に行くのがまた遲くなるといけないと思つて。」

もう少しと、私がねだるやうにいふのを待たないで、姉は深川の方に出て行つた。

「四五日ゐるならもう一遍來て下さいな。ぜひ。」私は電車の處まで送つて出た。

「えゝ。」と、いつて姉は矢張り嫣笑しながら立つてゐる間に電車は來た。

五月の午頃の電車は長閑さうに客がすいてゐた。電車の窓から姉は

「左樣なら。」と、も一遍いつて。電車は疾く走つて行つた。姉の大きな帶の結び目が見えてゐた。

そして私は自家に引返へしながら、あなたさまに逢つて委しいくはしい話をしますといつて手紙をよこして置いて、さて逢つて見れば、これぞと取留めた話しもしないで歸つて行つた姉が物足りなかつた。けれどもそれとともにまた何かいひたさうな口をして強ひていはないでしまつた姉の態度が理由もなく嬉れしかつた。何をいふつもりでゐたのだらう？

五六日過ぎて、私は姉から意外な手紙を受取つた。

先日私が女の身をも顧みず、內へ無斷にてあなたさまのお處へおたづねしたことが、あなたさまの御手紙にて相知れ、が爲に私はひどく叱られ、とう〳〵××の家を離緣になり、只今にては私は××の姉の處に歸つてゐます。これからは私の身體は自由な身體になりましたから、何をするのも氣儘でございます。姉の處へも長くは居られませんから、近い內に東京にまゐり、知つたお方をたづねて二三年何處かへ奉公をいたす考へでございます、どうぞ此の後ともこれまでの通り度々お手紙を下さいまし。もし此度のことについてお手紙を下さるなら、只今此處にゐる間にすぐ下さいまし。近い內にあなたさまにお目にかゝり、委しい〳〵お話をいたします。

かういふ手紙を見て私は吃驚した。そして急いで返辭を認めた。

それは何と申してよいやら、まことに怪しからぬことです。あなたも決して短氣のことをしてはいけません。八年も九年も連れ添うた仲を、私ゆゑとは申しながら、それぱかりのことで離緣などは以つての外です。奉公に出るなどゝいふのもよくないことです。今まで人を使つてゐた者が明日から人に使はれるといふのは何といふ情ないことでせう。姉さんの家はあなたの產まれた家ぢやありませんか。そこに話の解ろまでいつまでゝもゐたらいゝぢやありませんか。

さういつて口說いてやつた。

愚かな亭主は東京まで出て來て、私の留守の間に名刺を置いて行つた。後から端書で妻から貴殿に差上げた手紙を急に送つて返して戴きたい。それによてつは私の方にも考があると、馬鹿げたことをいつてよこした。私は、またそれに對へて立腹した口調で、いはれのない疑ひを解くやうに慰めてやつた。

それつきり亭主からも姉からも二十日ばかり何ともいつてよこさなかつた。暫く立つて姉からよこした手紙には、無事に元へ歸りましたから、何卒御安心下さいまし、この後も御手紙を戴くのは難有うございますが、此度のこともあなたさまのお手紙がもとであんなことになつたのですから、私から手紙を出したやうなことはお書きにならぬやうにねがひます。

といつてゐた。

何だ。厭な夫の處から離緣になつて、さも〳〵のう〳〵した心持になつたやうにいつて來て置きながら、私も無事に元へ歸つたから御安心下さいまし、とは何の事だ。半月ばかりも離れてゐて、夫の家へかへれば矢張り惡くはなからう。私への手紙にあんなことをいつて、その時ばかりは自分の名の上に實家の姓を書き改めて手紙をよこしてゐたぢやないか。

さう思ふと、私は餘程自分の方に引着けてゐた物が、も少しといふ處で、ぶつりと糸が斷ち切れて向へ放れて行つたやうで、あの時は流石にこれは大變だといくらか恐怖してあんな手紙を書いて窘めたものゝ、また惜しいやうにも考へられた。身體こそ自分の傍にゐないが、姉の心は殆ど全く私の物であつたものを、さうなると此方に所有權を握つてゐたのを向に奪はれたやうに殘念さも加はつた。

その心を抑へ〳〵たまに思ひ出したやうに、妹の安否を訊くにかこつけて手紙は出してゐた。

すると先日、毎度手紙をよこしていたゞいて、とかく內輪がごたついて困るから今度は外へ變名で手紙をよこすやうにと、仲人の名を指定して來た。この方は決して祕密を洩らすやうなお方ではありませんから、安心して書いてよこして下さいと書きそへてゐた。

それから私のつもる思ひは、堪りかねてゐた雨の降るやうに濃厚に書き送られたのであつた。それで××驛まで用事があつて出て行くのを幸に、ぜひ出先で逢つて委しい〳〵話をしたいからその時間を違へず來て下さいといふ最近の手紙である。

私は其處の驛まで姉に逢ひに行くのだ。

こんな過去を追憶してゐる間に汽車はもうその驛から二つ

手前の驛に近い線路の上を疾走してゐるのである。私の胸は靜かな不安と幸福な期待とに心地よく動悸の躍るのを感じてゐる。

（大正四年二月十五日文章世界掲載）

昭和三年十月廿五日印刷
昭和三年十月廿八日發行

新選近松秋江集
定價金壹圓

著者　近松秋江

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　竹内喜太郎
東京市牛込區榎町七番地

發兌　東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)
一一二一番
一一二二番
一一二三番
一一二四番

（青木製本）

日清印刷株式會社印刷

新選名作集

新選 谷崎潤一郎集	新選 菊池寛集	新選 前田河廣一郎集	新選 永井荷風集
神童◯[illegible]◯惡魔◯續惡魔◯あくび◯ The affair of Two Watches ◯前科者◯異端者の悲しみ◯人面疽◯二人の稚兒◯玄奘三藏◯ハッサン・カンの妖術◯柳湯の事件◯富美子の足◯ちひさな王國◯獨探◯呪はれた戯曲◯或る少年の怯れ◯母を戀ふる記◯兄弟◯恐怖	小説 藤十郎の戀◯船醫の立場◯笑ひ◯亂世◯俊寛◯仇討三態◯恩を返す話◯三浦右衛門の最後◯頸縊り上人◯西南奇聞◯ある抗議書◯神の如く弱し◯死床の願ひ◯島原心中◯晩年◯ただちおな姫◯羽衣 戯曲 敵討以上◯手の屋根◯岩見重太郎◯奇蹟◯苫屋◯玄宗の心持◯世評◯貞操◯戀愛病患者◯兄の場合◯舞臺に立つ妻◯ある兄弟◯時の氏神◯順番◯溫泉場小景◯日曜小説 火事	三等船客◯脱船以後◯赤い馬車◯聴音地獄◯裏切る者◯ストライキ中◯麺麭◯脅威◯十三段の階段◯佐吉の父親◯手◯慈善◯海の女◯盗人◯瓦斯タンク◯エレナの話◯ドウリスの話◯メイの話◯[illegible]◯「ダンプロ」◯太陽の黒點◯故郷◯餓鬼◯海の輕業◯スキャップ◯ムッソリーニ	歡樂◯夢の女◯深川の唄◯あの人達◯新歸朝者日記◯花瓶◯監獄署の裏◯小品集 春のおとづれ―花より雨に―夏の町―狐―傳通院―下谷の家―樂器―日本の庭◯戀衣花笠森◯ふらんす物語 舟と車―ローン河のほとり―秋のちまた―蛇つかひ―晩餐―祭の夜がたり―霧のあなた―おもかげ―再會―ひとり旅―雲―巴里のわかれ―綠の落葉其他◯珊瑚集（佛蘭西近世抒情詩選）ボオドレエル外十二篇◯江戸藝術論 浮世繪の鑑賞外九篇◯大窪だより
四六判並製 八ポイント二段組 六〇六頁 定價壹圓 送料二十錢	四六判並製 八ポイント二段組 五九二頁 定價壹圓 送料二十錢	四六判並製 八ポイント二段組 五一六頁 定價壹圓 送料十八錢	四六判並製 八ポイント二段組 五三六頁 定價壹圓 送料十八錢

新選 藤森成吉集	新選 葉山嘉樹集	新選 北原白秋集（詩歌篇）	新選 武者小路實篤集
短篇小説 雲雀◯古匣二篇◯娘◯研究室で◯山◯子供◯床甚◯風◯故郷を去るまで◯東京へ◯雀の來る家◯鍋を放つ◯路上◯地主◯こほろぎ◯北丸◯拍手しない男◯鍋の感謝 戯曲 犧牲◯磔茂左衛門◯何が彼女をさうさせたか？◯親友◯夫婦 長篇小説 舊先生◯妹の結婚	長篇小説 海に生くる人々 短篇小説◯淫賣婦◯誰が殺したか◯別學◯被害者◯出しやうのない手紙◯セメント樽の中の手紙◯むごたらしい出來事◯遺書◯支那人◯勞働者◯馬鹿を見たけりやこいつらを見ろ◯牢獄の半日◯正札付の婦人◯刺された男◯眼◯人夫◯そりや何だらう◯住むべき處を求めて◯山拔け◯散歩◯冷たい◯赤い◯荷札◯淺春の惱み◯度の◯◯田舍者が都會を見る◯追跡◯◯咲く唄◯喰ふ◯男◯無風帶◯乳色の霧◯プロレタリヤの乳◯マドロスと鼠◯生爪を剝ぐ◯死屍を食ふ男◯船の犬「カインン」◯火夫の顏と水夫の足◯燈臺	「邪宗門」抄。「思ひ出」抄。「雪と花火」抄。「畑の祭」抄。「眞珠」抄。「白金の獨樂」抄。「[illegible]」抄。「水墨集」抄。「秋の鄙歌」抄。「日本の笛」抄。「あしの葉」抄。「とんぼの眼玉」抄。「風の霜報」抄。「祭の笛」抄。「まざあ・ぐうす」抄。「花咲爺さん」抄。「子供の村」抄。「象の子」抄。「二重虹」抄。「からたちの花」抄。短歌抄一。短歌抄二。口語歌抄。長歌抄。詩文抄。俳句抄。詩論抄。	▼（長篇）◯或る男◯▼（短篇）◯小さき世界◯芳子◯一休に聞いた話◯Cの話◯友の話◯へんな原稿◯ユダの辯解◯ヨハネ・ユダの辯解を聞いて▼（戯曲）桃源にて◯日本武尊◯二十八歳の耶蘇◯佛陀と孫悟空◯ある青年の夢◯父と娘
四六判並製 八ポイント二段組 六七八頁 定價壹圓 送料二十錢	四六判並製 八ポイント二段組 五三一頁 定價壹圓 送料十八錢	四六判並製 八ポイント二段組 六〇一頁 定價壹圓 送料二十錢	四六判並製 八ポイント二段組 六五二頁 定價壹圓 送料二十錢

新選名作集

新選 小山内薫集	新選 久保田万太郎集	新選 宇野浩二集	新選 北原白秋集（散文篇）
色の褪めた女◯手◯病友◯十三年◯乞食◯不思議◯不男◯足拍子◯堀田の話◯粘土◯梅龍の話◯下紙風呂◯逆戻り◯英一蝶◯江島生島◯第一課◯青持の世界◯背教者	▲小説 露芝◯おみち◯おみち後日◯みぞれ◯ふるさとびと◯とらんぷ◯浮ぶ瀬◯きのふのこと◯ふゆぞら◯Nの手紙◯つれづれな◯燈火◯新綠◯わかれ◯たびがらす◯春◯葉の花◯握手◯火事の記憶◯雨◯彼についてのおもひで ▲戯曲 心ごころ◯霧深く◯ひとりむし◯四月盡◯短夜◯通り雨◯月夜◯冬◯畫面◯水のおもて◯秋の夜◯ありそうみ◯不幸◯夜霧 ▲感想小品集 日暮里にて◯「露芝」のあとに◯田原町のこと◯夏のおもひで◯[illegible]	子を貸し屋◯人心◯空しい春◯轍の中◯あの頃の事◯熊と虎◯十軒路地◯心づくし◯ちやんぽん廻り◯俘虜◯千萬老人◯因緣事◯一と踊◯八木彌次郎の死◯お園の話◯見殺した夢◯美女◯如露◯夢見る部屋◯人癲程◯長提灯◯青春の果◯浮世の窓◯昔がたり◯長い戀仲◯ある春の話◯[illegible]屋騒動◯晴れたり君よ	生ひたちの記◯桐の花とカステラ―雲の思ひ―感覺の小徑◯植物園小品―春の若芽―小品觀覽―春―四月―桐の花草園―春のゆく日―五月の朝日―五月末―六月の花―女四篇◯雨瀟小品 村の秋―小肥後の三角―河の一族―◯パパヤ物語―油蟲―五月―正覺坊―四婦と黑人―心 [illegible]
四六判並製 八ポイント二段組 六一四頁 定價壹圓 送料二十錢	四六判並製 八ポイント二段組 七〇八頁 定價壹圓 送料二十錢	四六判並製 八ポイント二段組 六二八頁 定價壹圓 送料二十錢	四六判並製 八ポイント二段組 五七三頁 定價壹圓 送料二十錢

新選 里見弴集	新選 近松秋江集	新選 佐藤春夫集	新選 夏目漱石集
友の舞◯河岸のかへり◯勝負◯箱根行◯題のない小説◯女役者◯妻を貰ふ經驗◯失はれた原稿◯三人の弟子◯恐ろしき結婚◯ひそひそ話◯或る年の夏◯不良少年◯幸福◯不幸の偶然◯[illegible]	疑惑◯無明◯伊年の冷風◯小石川の家◯女◯從妹◯山櫻◯若き人の影◯村◯初しぐれ◯[illegible]	近刊	近刊
四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓 送料二十錢	四六判並製 八ポイント二段組 六九三頁 定價壹圓 送料二十錢	四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓 送料二十錢	四六判並製 八ポイント二段組 定價壹圓 送料二十錢

新選名作集

新選 吉田紘二郎集

▲小説　芭蕉。蠶。人間を悲しむ。檸。老來。寒日。砂丘日記。支那燈籠。救はれぬ人間。草の上。靄の中。カフスとカラー。凡人の一生。故郷の町。生れ來る者。或る男と女。愛執の日。花梨の下。二老人と彼。或る時。少年。小犬。雪の野邊。ダビデと子達。霧の中。麥日和。▲感想　靜かな南が。奧の旅。日の暮るる頃。詩の心。心の影。睡蓮。夢。旅人の如く。雨の音は悲し。渡り鳥。夜空。感謝。五月の天城。一人苦しむ者。夢の墓場。幻影を追ふ心。母。朧振の友へ。暮から春。秋。啄木鳥。光は過去の。春の美。大偶の先生へ。桃。雲。子供の生活。孤島の春に。雨あがりの日。墓。修善寺行。超人論。雁來紅。寒い日であつた。キリストについて。靈日。玄海の島。三月の嘆き。庭の隅の小さな花。秋の言葉。

四六判並製　八ポイント二段組　六〇二頁　定價壹圓　送料二十錢

新選 森鷗外集

そめちがへ。魔醉。獨身。青年。藤棚。興津彌五衞門の遺書。佐橋甚五郎。護持院ケ原の仇討。大鹽平八郎。安井夫人。津下四郎左衞門。栗山大膳。魚玄機。最後の一句。寒山拾得。澁江抽齋。靜。（飜譯）病院横町の殺人犯。冬の王。父の讎。鑑定人。復讐。アンドレアス・タアマイエルが遺書。辻馬車。秋夕夢。戀愛三昧。耶蘇誕祭の買入。個房夢。債鬼。

四六判並製　八ポイント二段組　七五二頁　定價壹圓　送料二十錢

新選 横光利一集

▲小説　ナポレオンと田蟲。花婿の感想。街へ出るトンネル。朦朧とした風。マルクスの審判。皮膚。負けた良人。無禮な街。眼に見えた虱。青い石を拾つてから。春は馬車に乘つて。花園の思想。蠅はどこにでもゐる。計算した女。火の點いた煙草。表現派の役者。園。青い大尉。月夜。七階の運動。兄妹。行進曲。慄へる薔薇。南北。敵。村の活動。クライマックス。馬に乘る馬。芋と指環。靜かなる羅列。悲しめる顏。御身。蠅。赤い色。草の中。頭ならびに腹。笑はれた子。梯子。父。名月。碑文。幸福の散布。落された恩人。街の底。妻。搖ぎ屋の心理。▲戲曲　恐ろしき花。閉らぬカーテン。霧の中。帆の見える部屋。幸福を計る機械。愛の挨拶。食はされたもの。男と女と男。日輪。笑つた皇后。

四六判並製　八ポイント二段組　六九三頁　定價壹圓　送料二十錢

新選 長田幹彦集

ゆく春。尼僧。アイヌの子。小夜ちどり。自殺者の手記。旅鳥。夕潮。霧兒。桑名心中。嵐の曲。（以上長篇十篇）

四六判並製　八ポイント二段組　七四一頁　定價壹圓　送料二十錢

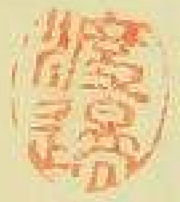
新選 前田河廣一郎集（續篇）

▲短篇小説　氷倉。去勢。復讐。汽船。下駄。マリア。引越。傍觀者。棧橋3番。へんな客人。ロシア夫人の舞踏。コルセツト。南京蟲。破壞の前夜。惡戲。鼻。熊さんの死。罰金。玩具のピストル。最後の變裝。灰色。黒い海。一寸法師。皮。上陸禁止。犬。寒河江商會。宣傳ビラ。死を咏ふ群。俺達五人。光り動くもの。卑怯。雨の日。路傍の人々。▲中篇小説　快樂師の群。拳銃を買つた男。地獄。最後に笑ふ者。▲戲曲　獸窩。登場人物。陸のつきる處。富豪と眞珠。鬪ポスター。群集。捧へられた男。ラスプーチンの死。下は笑ふ。澤市は見た。クレオパトラ。▲長篇小説　大暴風雨時代

四六判並製　近刊　八ポイント二段組　定價壹圓　送料二十錢

大佛次郎著

赤穗浪士（上卷）
赤穗浪士（中卷）
赤穗浪士（下卷）

朝日に匂ふ山櫻花と稱へられた日本武士道の精華！　これぞ元祿の快擧、人も知る赤穗浪士の仇討である。松の廊下の刄傷から、御家改易、大石以下の隱忍苦衷遂に主家の仇を報ずる浪士四十七人の經緯は、今、大衆作家の重鎭、大佛次郎氏の健筆に依つて、大繪卷の如く繰り擴げられた。――その變轉極りなき事件の展開と流麗なる文章とは、讀者をして一氣に讀了せしめねばやまない。

四六判上製　六一四頁　定價各壹圓五十錢　送料各二十二錢　十一月上旬　中卷出來　十二月上旬　下卷出來